

プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌 ～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～

著者	ピウスツキ プロニスワフ, 高倉 浩樹, 井上 紘一
雑誌名	東北アジア研究センター叢書
号	63
発行年	2018-01-10
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123171

ISBN978-4-908203-14-5

ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌

東北アジア研究センター叢書 第63号

東北アジア研究センター叢書 第63号

ブロニスワフ・ピウスツキの
サハリン民族誌

～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヅフ、ウイルタ～

高倉 浩樹 監修
井上 紘一 訳編・解説

CNEAS

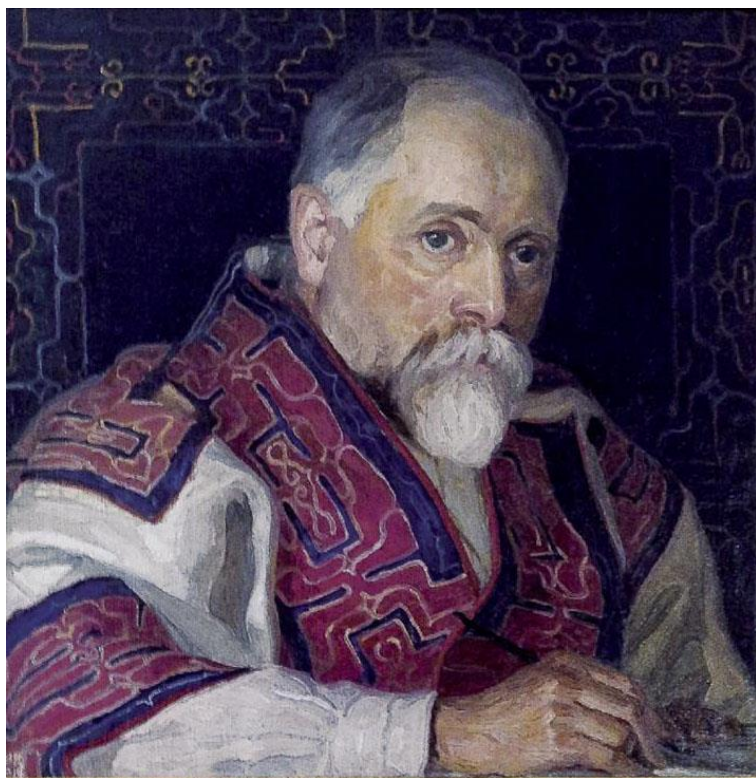
東北大学東北アジア研究センター

東北アジア研究センター叢書 63号

ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌

↳二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルト↳

高倉 浩樹 監修
井上 絃一 訳編・解説



ブロニスワフ・ピウスツキの油彩肖像画
(1912 年、アドマス・ヴァルナス作、ユゼフ・ピウスツキ博物館蔵)

本書を

二〇一八年に没後百年を迎えるプロニスワフ・ピウスツキの靈に捧げる

訳者・監修者

目次

序

(井上紘一) … ix

復命報告

- (報告1) 一九〇二〜一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報 … 9
(報告2) B・O・ピルスツキーに関する情報 … 20
(報告3) 樺太島へ出張したB・O・ピルスツキーの「委員会」書記宛書簡 … 22
(報告4) 中央・東アジア研究「ロシア委員会」議長V・V・ラドロフ氏宛書簡 … 29
(報告5) 一九〇三〜一九〇五年に樺太島のアイヌとオロツコの許へ出張したB・O・ピルスツキーの報告 … 35

論文

- 樺太ギリヤークの困窮と欲求 (一八九八年四月二十日摺筆、同年公刊) … 75
アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿 (一九〇五年三月摺筆、二〇〇〇年公刊) … 125
樺太アイヌの経済生活の概況 (一九〇五年三月摺筆、一九〇七年公刊) … 169
樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報 (一九〇五年五月以前摺筆、一九〇七年公刊) … 205

- 樺太に於ける先住民（原著は一九〇九年公刊、鳥居龍藏譯の邦語稿は一九一一年上梓）… 259
- 樺太アイヌのシャーマニズム（原著は一九〇九年公刊、和田完訳の邦語稿は一九六一年上梓）… 283
- 樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産（一九一〇年公刊）… 313
- アイヌ（一九一一年公刊）… 355
- ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病（一九一三年公刊）… 367
- 樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より（一九一三年十一月末摺筆、一九八九年公刊）… 391
- 樺太アイヌの熊祭りにて（一九一五年公刊、初稿は一九〇七年二月以前に摺筆）… 483

参考文献・記事

- アイヌ（M・M・ドブロトヴォルスキー著）… 647
- 小田寒での熊送り（石田収蔵著）… 671
- 樺太島におけるチュフサンマとその家族（井上紘一著）… 681
- 毛深い人たちの間で（W・シエロシエフスキ著）… 737
- 日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（井上紘一編著）… 813
- プロニスワフ・ピウスツキ年譜（井上紘一作成）… 865

跋

（高倉浩樹）… 893

Bronisław Piłsudski's Sakhalin Ethnography
The Enchiw, Nivkh and Uilta around the beginning of the 20th Century

(Translated, edited and annotated by Kōichi Inoue; supervised by Hiroki Takakura;
published by Center for North-East Asian Studies, Tōhoku University, on January 10, 2018)

This volume is dedicated to a centennial of the death of
Bronisław Piłsudski
who passed away in Paris in 1918.

Table of Contents

Preface (by Kōichi Inoue)

The Mission Reports

Report 1: A preliminary report of the trip to the Ainu of Sakhalin Island in 1902-1903

Report 2: Minutes on B. O. Piłsudski (basing on the letters addressed to the Committee's secretary)

Report 3: A letter of B. O. Piłsudski dispatched to Sakhalin Island (addressed to the Committee's secretary)

Report 4: A letter addressed to Friedrich W. Radloff, Chairperson of the Russian Committee for Exploration of Central and Eastern Asia

Report 5: B. O. Piłsudski's report on his mission to the Ainu and Oroks of the Sakhalin Island in 1903-1905

B. Piłsudski's Articles

The Wants and Needs of the Sakhalin Gilyak (written on March 20, 1898)

A Draft of Rules for Organizing the Life and Administration of and/or by the Ainu, with Brief Explanations on Specific Points (written in March 1905)

A Brief Sketch of the Economic Life of the Ainu on Sakhalin Island (written in March 1905)

Specific Information on Individual Ainu Settlements on the island of Sakhalin (written prior to May 1905)

The Aborigines of Sakhalin Island (the German version published in 1909, and the Japanese translation made by Ryūzō Torii and published in 1911)

Shamanism amongst the Sakhalin Ainu (the German version published in 1909, whilst the Japanese translation made by Kan Wada and published in 1961, 1999)

Pregnancy, Delivery, Miscarriages, Twins, Freaks, Sterility and Fertility amongst the Local Inhabitants of Sakhalin Island (published in 1910)

The Ainu (published in 1911)

Leprosy amongst the Gilyak and the Ainu (published in 1913)

From the Travel to Oroks of the island of Sakhalin in 1904 (published in 1989, but written at the end of November 1913)

At the Bear Festival of the Ainu on Sakhalin Island (published in 1915, with the first version having been written prior to February 1907)

Reference articles and items

The Ainu (by Mikhail M. Dobrotvorsky)

Bear Festival in Odasamu/Otasan (by Shūzō Ishida)

Chuhsamma and Her Family on Sakhalin Island (by Kōichi Inoue)

Amongst Hairy People (by Waclaw Sieroszewski)

Japanese Newspaper Items Relating to B. Piłsudski (by K. Inoue)

Bronisław Piłsudski's Chronological Records (by K. Inoue)

Postscript (by Hiroki Takakura)

序

井上 紘一

壮年期に二度までも大きな戦争に巻き込まれて、己の生きざまに大幅の変更を強いられた人の不幸はさまざまであろう。リトワニア生まれの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918）は、三十七才で日露戦争、四十七才で第一次世界大戦に際会して、前者により己の家族との離別を余儀なくされ、後者は彼の仕事の完成を阻止した。とはいえ彼の悲劇は、十九才の冬に露帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座して逮捕されたことに淵源する。さもなくば、彼が極東の一角に足を踏み入れるようなことは万が一にも出来せず、したがって、人類学者ピウスツキもその「サハリン民族誌」も、遺憾ならなかったであろう。彼の北東アジア研究は、その悲劇的な生きざまの所産と見做すのが至当である。

人類学者としてのピウスツキは、一八八七年八月に国事犯として流謫された北サハリンにおいて呱呱の声を上げた。彼が刑に服したルイコフスカヤ監獄（現キーロフスコエ）はティミ川上流部に立地し、流域一帯にはニヴフ（旧称ギリヤーク）の村落が点在していたが、彼らとの親密な交流こそ彼の人類学への道の濫觴にほかならない。当初は、植民地体制への服属を余儀なくされて苦悩するニヴフらの境遇——それはロシア帝国に併呑された祖国や、帝国官権に国事犯と告知された己自身の境遇とも容易に重ね合わせることできただろう——に対する共感・同情・憐憫の情から、彼らの苦悩を軽減することに生甲斐を見出していたが、一八九一年一月にリエフ・シュテルンベルグと出会って以降は、協力してニヴフ語とその文化のフィールドワークに従事、人類学の実践に踏み出した。ニヴフたちもピウスツキには全幅の信頼を寄せて、ある氏族は剩え自らの一員として彼を処遇したから、ニヴフの若者らは「アカン（akan）」（兄）という敬称で呼びかけるまでになった。第一論文「樺太ギリヤークの困窮と欲求」は、そのようなニヴフとの交流を活写している。

監獄当局は一八九六年七月八月、ピウスツキをコルサコフスク管区（のちの日本領「南樺太」）へ派遣して、測候所設営に従事させた。この折に出来したエンチウ（樺太アイヌ）との初邂逅を契機として、彼の興味の対象はアイヌ研究へと転轍される。「樺太アイヌの熊祭祀にて」の冒頭で言及されたタムキン、ウサイロ兄弟との出会いはそのときの出来事である。

一八九七年二月に懲役十年の刑期を満了したピウスツキは、少なからぬ曲折を経ながらも「監獄の島」を去ることが叶い、ウラヂヴォストク（浦塩）のアムール地方研究会附設博物館の標本管理人に就任する（一八九九年三月～一九〇一年五月）。

一九〇二年七月には、サンクト・ペテルブルグの帝室科学アカデミーからエンチウとウイルタ（旧称オロツコ）の民族資料収集を委託され、十二年を過ごした苦役の島に舞い戻る。彼は恐らく、島の再訪には大いなる躊躇を覚えたであろうが、アイヌ研究の魅力には勝てなかったものと推察される。事実、同年末にはサハリン出張の継続を科学アカデミーに要請している。同アカデミーは一九〇三年以降3年分の調査費として、総額2450ルーブリを「中央・東アジア研究国際協会ロシア委員会」の予算から捻出することを約して彼の希望に応えた（彼が浦塩を發つ一九〇二年七月八日以前に、科学アカデミーは一九〇二年度調査費として「10000ルーブリの出張費」を提供していた『本書870頁』）。ピウスツキのサハリン調査は、必ずしも潤沢とは言えぬまでも、このように多額な公費によって支えられていたわけである。

ピウスツキの再度のサハリン滞在はほぼ3年（一九〇二年七月十一日～一九〇五年六月十一日）に及び、日露戦争中も日本軍による占領の直前まで島に留まった。この間の経緯は冒頭に掲げた「復命報告15」を見られたい。その後の十三年間に彼がなし遂げたものは多岐にわたるが、本書では樺太島にかかわる人類学的労作十一篇を、「プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌」と銘打って一括掲載する。ほとんどは著者の生前に公刊されていたが、「アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿」、「樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より」の二篇は、V・M・ラティシエフ氏が発掘・上梓された遺

稿である。但し、本来ならば本「民族誌」に収めらるべき三労作（主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（1912）⁽¹⁾、「アイヌの所有標識」（1912）⁽²⁾、アイヌ子弟のために開設した「識字学校」の年次実施報告（一九〇二—一九〇五年執筆）⁽³⁾）は収録していない。それにしても悔やまれるのは、ピウスツキ自身が同様なタイトルの下で自前の民族誌を執筆してくれなかったことである。残された資料によれば、彼にその計画があったのは明らかだけに、第一次世界大戦が同計画を頓挫させたのはまことに遺憾である。この『サハリン民族誌』では不十分ながらも、彼の見果てぬ夢の再構成を試みる。

本書に収められた邦語訳に対する訳者の注記は以下の通り。

- (1) 各論文の冒頭にささやかな「解題」を掲げる。
- (2) 本文で用いられる暦法は、特に断らぬ限り一九一八年までロシアで使用された旧ロシア（ユリウス）暦である。十九世紀中は12日、二十世紀では13日を加算すれば、対応するグレゴリウス暦の日付が得られる。
- (3) ピウスツキによるアイヌ語表記が頗る精確であることに鑑み、キリル文字で表記されたアイヌ語テキストの片仮名転写では、アイヌ語表記の現行慣用を採用した。したがって、見慣れぬ片仮名細字は子音や半母音（*i*）を意味する。
- (4) 原文に見出される斜体字は鉤括弧「」、下線は傍線で示し、訳者の注記は角括弧「」に収めて本文中に挿入した。但し、訳注が本文の脚注に記載される場合もある。

(5) 「参考論文・記事」には、第八論文「アイヌ」に対するM・M・ドブロトヴォルスキーの著述「アイヌ」、第十一論文に対しては石田収蔵の小記事「小田寒での熊送り」を収録、またピウスツキと日本のかかわりを提示する三労作——拙著「樺太島におけるチュフサンマとその家族」⁽⁴⁾、W・シエロシエフスキ著「毛深い人たちの間で」⁽⁵⁾、「日本の新聞

が報じたピウスツキ関係記事（1903～1939）」⁽⁶⁾——、そしてピウスツキの波乱万丈な生涯を概観する拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」⁽⁷⁾も転載する。

本稿では煩雑を避けるため情報源記載を極力省略したが、出典の過半は右記の「年譜」である。

謝辞

翻訳の各段階では多くの方々から貴重なコメントを頂戴した。とりわけ畏友・河野本道氏、山田祥子氏、そして村崎恭子氏と氏の主宰する「樺太アイヌ語の会」の皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。故河野氏には終始暖かな目線で叱咤激励して頂いた。山田氏からはウイльта語、村崎氏からはエンチウ語に関して、御専門の学識と蘊蓄を傾けた懇切な御教示を賜った。なお、参考論文として収めた拙稿「樺太島におけるチュフサンマとその家族」の執筆に際しては、なかなしくロンドンのヴィトルト・コヴァルスキ、ワルシャワの井上久仁子、ウラヂヴオストクのアレクサンドル・トロポフとヴァヂム・トゥライエフ、ユジノ・サハリンスクのミハイル・プロコフィエフ、さいたま市の澤田和彦、札幌の尾形芳秀、富良野の大川あゆ子の各氏より貴重な資料や関連情報の提供を賜った。ここにお名前を明記して感謝申し上げます次第である。

最後に、本書を叢書の一冊に選定して頂いた東北大学東北アジア研究センターに対し、衷心からの深謝を申し陳べたい。もしこの御英断がなければ、本書が陽の目を見ることはなかったであろう。

二〇一七年五月十七日、札幌

- (1) Bronisław Piłsudski, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Gtascow: Imperial Academy of Sciences (1912). 【複製版】 In: K. Reising (ed.), *Early European Writings on the Ainu Language*, vol. 10, Suvacon (1996); also in: A. F. Majewicz (ed.), *Ainu Language and Folklore Materials* (The Collected Works of Bronisław Piłsudski [ブリト・SWBP 文語訳] 2), pp. 1-272, Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998). 【露訳】
Bronisław Пилсудский, “Материалы для изучения айнского языка и фольклора,” *Известия Императорского Академии Наук* 1912, № 7: 26-205 (2004). 【邦訳】北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語研究会訳「B・P・ウ・ス・シ・キー」『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料』『創造の世界』45号、59号、61号、67号、70号、72号、74号、75号、77号、78号、80号、82号、84号、東京：小学館（1983～1992）。部分的邦訳は和田文治郎「樺太アイヌに傳はる昔話」、『北方日本』15/2、100～107頁（1943）「知里眞志保」樺太アイヌの説話（一）『樺太廳博物館彙報』3/1（1944）に分散収録。平凡社刊『知里眞志保著作集』1巻、251-372頁（1973）に再録）。なおエンチウ語の泰斗村崎恭子氏は原著の完訳を計画しておられる。
- (2) Bronisław Piłsudski, “Les signes de propriété des Aïno,” *Revue d’Ethnographie et de Sociologie* 3: 100-118, Paris (1912); also in: A. F. Majewicz (ed.), *The Aborigines of Sakhalin* (SWBP 1), pp. 562-590 (1998). 【露訳】Bronisław Пилсудский, “Знаки собственности айнов,” *Вестник Сахалинского музея* 1: 198-222 (1995); также в: Bronisław Пилсудский, *Айны Южного Сахалина (1902-1905 гг.)*, стр. 207-239, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2007).
- (3) 【一九〇一年度】B. Пилсудский, “Ведомость о школах в Корсаковском округе за 1902 г.,” *B. Piłsudski in the Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok* (Piłsudskiana de Sapporo [Pds]) no. 2: 131-136, Sapporo (2002). 【一九〇三～四年度】Его же, “Краткий предварительный отчет об айнской школе в Корсаковском округе в 1903/4 г.,” Pds no. 2: 121-124 (2002); его же, “Отчеты об айнских школах на Южном Сахалине,” *Краеведческий бюллетень* III: 56-60, Южно-Сахалинск (1991). B・P・ブ・エ・ウ・チ氏による英訳：B. Piłsudski, “Short preliminary report on the Ainu school in the Korsakovsk region in 1903-1904,” SWBP 1: 681-684 (1998). 【一九〇四～五年度】Его же, “Краткий предварительный отчет об айнской школе грамоты в Корсаковском округе за 1904-1905 г.,” Pds no. 2: 124-128 (2002); его же, “Отчеты об айнских школах на Южном Сахалине,” *Краеведческий бюллетень* III: 61-68 (1991). B・エ・ウ・チ氏による英訳：B. Piłsudski, “Short report on the Ainu elementary school in the Korsakovsk region for the years 1904-1905,” SWBP 1: 684-690 (1998). 「識字学校」に關しては以下の草稿を見られたい。K. Inoue, “Bronisław Piłsudski’s Endeavours on Ainu Education and Self-government,” in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1: 348-358, Saitama (2010).

- (4) 未刊行英文拙稿 Kōichi Inoue, “The Pitsudskis’ Offshoot in Japan (Part I): Chuhsamma and Her Family on Sakhalin Island” の原著者による邦訳。
 【露訳】Копити Иноуэ, “Чухсамма и её семья на Сахалине: Ветвь Питсудских в Японии (Часть 1-я)”, *Этнографические записки Сахалинского областного краеведческого музея* № 1: 13-57, Южно-Сахалинск (2017)。【ポーランド語訳】“Japońska Odnoga Rodu Pitsudskich (Szczęść Pierwsza): Chuhsamma oraz jej Rodzina na Wyspie Sachalin”, *Wrocławskie Studia Wschodnie* 20, Wrocław: Wydawnictwo Uniwersytetu Wrocławskiego (2018)。
- (5) W・シエロシエフスキ「毛深い人たちの間で」(井上絃一編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事』77～108 ペー、札幌：北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター、2013)。その改訂稿を本書に収録。
- (6) 「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903～1939)」『関西外国語大学研究論集』91号 267～280 ペー、92号 185～201 ペー、2010)。増補改訂稿を本書に収録。
- (7) 井上絃一「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事』63～76 ペー (2013)。改訂稿を本書に収録。

復命報告
(1~5)

解題

プロニスワフ・ピウスツキの樺太島出張（一九〇二～一九〇五年）では少なくとも5通以上の復命報告が、サンクト・ペテルブルグの中央・東アジア研究国際協議会「ロシア委員会」へ提出されたことが判明している。本稿では、日付を欠く報告の場合は執筆時期を推定した上で、5篇の「復命報告」が摺筆の日付順に収録してある⁽¹⁾。5「報告」の間には重複する記載が多々認められるが、互いに補完しあう場合も少なくない。なかんずく「復命報告5」は全期間を包摂する最終報告である。これらの「復命報告」を通して、私たちはピウスツキのサハリン民族誌が、どのようにして成立したかを知ることができる。

「復命報告1」は、まさに摺筆の日付を欠く報告の一例だが、第一号報告であることは、そのタイトルからも十分に窺えよう⁽²⁾。本文では、東海岸のルレ（魯禮）における初調査（一九〇二年十一月二十四日～十二月十日）の記載が、突如として中断されたような形で終わっているとはいえず、冒頭部では、サハリン調査継続を提案する一九〇三年五月十日付「ロシア委員会」議長書簡を六月に落掌した事実にも言及するから、摺筆の日付はそれ以降ということになる。ピウスツキはその後の三ヶ月間、シエロシエフスキの北海道アイヌ調査（一九〇三年六～九月）に参加していて、報告を仕上げる余裕は全くなかったであろう。もしかすると、彼が「復命報告1」を摺筆できたのは一九〇三年十月末のことではなかったろうか。ピウスツキはそのときコルサコフスク（大泊）に滞在して、収集標本の第2便を義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号へ引き渡しているからである⁽³⁾。またもしそのように想定するならば、報告末尾に追記された「後続稿の概要」に、例えば「予期せ

ぬ日本への旅」「北海道島のアイヌに関する若干の概評」「三ヶ月後の帰還」のような項目が見出されるのも十分に了解可能である。

「復命報告2」は、厳密に言えば「復命報告」ではない。「委員会」のシュテルンベルグ書記宛に送付された複数のピウスツキ書簡⁽⁴⁾の内容が、一九〇四年一月三十一日——この日を擱筆の日付と見做してよからう——の委員会例会で報告され、その要旨が『委員会通報』の「議事録抜粋」欄に収録されたものだからである。とはいえ、ここには少なくとも二通の手紙——一九〇三年六月以前に執筆されたはずの「タライカ湾のアイヌとオロッコ」の調査計画を報じる手紙⁽⁵⁾と、同年九月二十四日以降に擱筆された北海道アイヌ調査報告⁽⁶⁾——を想定することが可能である。なお、末尾に付記された3物件は、一九〇四年一月三十一日以前にペテルブルグへ到着したはずであるから、ピウスツキが一九〇三年十月末に義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号で送出した梱包貨物の一部と見て間違いないだろう⁽⁷⁾。

「復命報告3」の擱筆日は「一九〇四年十一月十日」と末尾に明記されている。だがこの日付は「復命報告5」によると、ピウスツキが7ヶ月半かけて敢行した「順延された北への旅」(一九〇四年三月三十一日〜十一月十三日)の帰途に、東海岸北部の四村(斑伸、婦禮、赤浦、元泊)に十一月五日から六日間滞在した際の最終日に当たっていた⁽⁸⁾。にもかかわらず、報告稿は八月十日〜九月一日のルイコフスコエ(現キーロフスコエ)における滞在記録(「復命報告5」本稿59頁)を彷彿させる記述で締めくくられている。「報告3」の冒頭でも「私は今、ティモフスク管区におりまして、冬道が仕上がるまで当地に留まることを考えています」とあるように、ピウスツキはルイコフスコエ滞在中に報告稿の執筆を開始し、記述の対象は一九〇三年十月〜一九〇四年九月の一年間であった⁽⁹⁾。したがって、調査の進捗状況と報告書の記載内容の間には二ヶ月半の時差が生じている。

「復命報告4」は、ピウスツキが一九〇五年六月十一日に樺太島を脱出して、大陸の対岸の町ニコライエフスク（尼港）に十日、その後マリインスクで数日滞在したのち、七月一日前後に到着したハバロフスクにおいて、「下書稿」が七月十四日付で執筆された⁽¹⁰⁾。同稿は恐らくその直後に浄書されて、ハバロフスク滞在中に投函されたものと推察される。本「報告」では、同年三月二十三日のチフメネフスク哨所出立以降ハバロフスクに至るまで、三ヶ月弱の旅が駆け足で叙述されているが⁽¹¹⁾、ピウスツキをして、この時点で敢えて「委員会」のラドロフ議長宛に書状をしたためさせたのは、①シュテルンベルグ書記が約束を違えて、欧州部ロシアまでの無料鉄道乗車券の送付を断ったことへの不満⁽¹²⁾、②身軽な旅を期して、私物の書籍や文書類を博物館気付で発送したことの報告という、末尾に記された切実なメッセージを急遽同議長に伝えることの必要性ではなかったろうか。彼がこの時点までは、シベリア横断鉄道を経由するサンクト・ペテルブルグへの帰還を、自明視していたのは明らかである。

「復命報告5」は、そのタイトルが謳う時間枠「一九〇三―一九〇五年」にもかかわらず、実際は一九〇二年七月の樺太島到着から起筆して、出張の全期間を包摂するのみならず、末尾ではウラヂヴォストク（浦塩）帰着後の一九〇五年十一月に実施されたゴリド（現ナナイ）調査にまでも言及している。紙幅的には「復命報告」の6割を占めているから、これを「本報告」と称することも許されよう⁽¹³⁾。なお、攔筆の日付は欠如するものの、ピウスツキが日本へ向けて出国する一九〇五年十二月五日（グレゴリウス暦同月十八日）以前の、十一月末頃に浦塩で攔筆・投函されたとするのが順当であろう。ところで一九〇四年八月頃にルイコフスコエ村で執筆されたと想定される「復命報告3」の末尾に「今は一九〇二年以降の旅行記の終章……にも取り組むつもり」とあるものの、実際の終章は彼の予想に反して一年後に攔筆されているから、ピウスツキは道中の節々で「旅行記」を書き溜めていったものと推察される。

「復命報告5」の翻訳に際しては、年度ごとに節を改めて「見出し」を加筆するとともに、訳者の判断で適宜改行も行った。

「復命報告」と「解題」では基本的に旧ロシア（ユリウス）暦が採用されている。

二〇一五年九月一日、札幌

(1) 注
「復命報告」：Бронислав Пилсудский, "Предварительный отчет о поездке к айнам о. Сахалина в 1902-1903 гг. В. Пилсудского," *Вестник Сахалинского музея* № 3: 398-403. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей (1996). 原手稿はロシア科学アカデ

ミーのサンクト・ペテルブルグ支部図書館に収蔵されている (СПбФ АРАН ф. 148, оп. 1, д. 24, л. 79-90)。ピウスツキ手稿を発見されたサハリン州郷土誌博物館のヴラヂスラフ・М・ラティシエフ館長は一九九六年、同手稿の翻刻テキスト、および「ピウスツキの予報」と題する解説文を『博物館通報』3号 (394~397頁) に掲載、そしてテキストの末尾には「一九〇二〜一九〇五年のサハリン出張の年譜」(403~406頁) も付載しておられるが、邦訳稿では「解説」と「年譜」を割愛した。【英訳】二〇〇四年に上梓された『ピウスツキ著作集』3巻にアルフレッド・F・マイエヴィチ教授による英訳稿 (В. Pilsudski, "A preliminary report on his expedition to the Ainu of Sakhalin in 1902-1903," in: Alfred F. Majewicz (ed), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski* [以下は SWBP と略記] vol. 3: 213-220, Berlin - New York: Mouton de Gruyter, 2004) が収録されている。

「復命報告」："Съдѣнія о В. О. Пилсудскомъ (на основаніи писемъ къ секретарю Комитета)," *Извѣстія Русскаго Комитета для изученія Средней и Восточной Азии въ историческомъ, археологическомъ, лингвистическомъ и этнографическомъ отношеніяхъ* [以下は ИРКИСА と略記] № 3: 18-19, С.-Петербургъ (юнь 1904 г.). 【英訳】"Information on В. О. Pilsudski (on the basis of letters addressed to the Secretary of the Committee)," in: Alfred F. Majewicz (ed), *The Aborigines of Sakhalin* (SWBP vol. 1), p. 185, Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998).

「復命報告」："Письмо командированнаго на о. Сахалинъ В. О. Пилсудскаго (на имя секретаря Комитета)," ИРКИСА № 5: 24-30 (май 1905 г.). 【英訳】"В. О. Pilsudski's letter while on an expedition to Sakhalin (addressed to the Secretary of the Committee)," SWBP vol. 1: 186-191 (1998).

「復命報告4」: B. O. Пигудский, "Письмо В. В. Радлову, господину председателю Русского Комитета для изучения Средней и Восточной Азии," *Известия Института наследия Бронислава Пигудского* № 5: 61-63, Южно-Сахалинск (2001). 『ピウスツキ著作集』には収録されていない。一九九一年に報告・公刊された「下書稿」をめぐる挿話と書誌に関しては「復命報告4」の「訳者記」、なかなずくその「注1」を見られたい。

「復命報告5」: "Отчетъ Б. О. Пигудскаго по командировкѣ к айнамъ и орокамъ о. Сахалина въ 1903-1905 гг.," ИРКИСВА № 7: 20-52 (декабрь 1907 г.). 【英訳】 "B. O. Pigsudski's report on his expedition to the Ainu and Oroks of the island of Sakhalin in the years 1903-1905," *SWBR vol. 1*, pp. 192-221 (1998). 【邦訳】 荻原眞子訳 「B・ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6号: 219~240 (2000)。

(3)(2)

ロシア語原文のタイトル冒頭に見出される「Предварительный отчет」は英語の「Preliminary report」に当たる。

「復命報告5」(本稿46頁)。ラティシエフ館長はその「解説」に「本文は別人の筆跡だが、『後続稿の』概要」の方はピウスツキの直筆」と断じ、後者は「最終段階」で加筆されたと解しておられる(B. M. Латышев, "Предварительный отчет Бронислава Пигудского," *Вестник Сахалинского музея* № 3: 397, 1996)。彼はまた「復命報告1」を「復命報告2」の末尾に記された「(1) 膨大な報告の冒頭部」と同定し、「一九〇三年十月後半」に義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号に寄託された収集標本の梱包箱へ同梱されたと考えてもおられる。館長のお考えには基本的に賛成であるが、同報告の終わり方が尋常でない点は留意さるべきであろう。ひよっとすると、ピウスツキは荷物を引き渡す間際に急遽思い立って、未完の手稿へ加筆したのではなからうか。

(5)(4)

ロシア語原文のタイトルでは「手紙」の複数形 (письма) が使用されているから、例会では二通以上の書簡が報告されたはずである。ピウスツキは一九〇三年六月、「北のアイヌとオロツコを訪ねる旅」に着手すべくコルサコフスクへ赴いたとき、当地でシエロシエフスキからの招請状に接するや直ちに予定を変更して、北海道へ向けて旅立った(「復命報告5」本稿45頁)。この順延された「北への旅」は一九〇四年三月三十一日〜十一月十三日、日露戦争の最中に敢行されている。

(6)

ピウスツキはこの日に、シエロシエフスキと共に実施した北海道アイヌ調査から帰国している(「復命報告5」本稿46頁)。シエロシエフスキは同調査についてかなり詳細な記録を残したが(例えば、拙訳「毛深い人たちの間で」本書737~812頁)、ピウスツキ自身は本「報告」と「復命報告5」(本稿45~46頁)で僅かに触れるだけに留まっていた。ところでペテルブルグの「委員会」へ提出された未発見の2「報告」の方は、恐らくロシア科学アカデミーのサンクト・ペテルブルグ支部文書館の収蔵庫で発見者を待ちつつ、今なお眠りつづけている公算が大である。とはいえ、このピウスツキ手稿も抜粋記事と大差ない頗る簡潔なものである可能性は遺憾ながら排除できない。

ロシア義勇艦隊社の便船は片道におよそ二ヶ月をかけて樺太島〜オデッサ間を往來していた。オデッサからサンクト・ペテルブルグまでの鉄道輸送も含めて、全行程には少なくとも二ヶ月半を要したと考えられる。但し、梱包貨物の本体だった箱詰め収集標本に対する言

及が、ここには欠如することが些か腑に落ちない。

(8) 「復命報告5」 本稿 60頁63頁。ピウスツキは翌十一日に白浦、十二日は小田寒に一泊したあと、十三日に妻子の待つ相濱に帰着しているから、その二日前に、恐らくは元泊で「復命報告3」を擱筆したものと推測される。さらに言えば、ルイコフスコエで脱稿済みだった報告稿の末尾に、この際は擱筆日を加筆しただけであつたかも知れない。と言うのも、彼は早くも三日後の十一月十六日には大泊へ急行しているからである。その目的の一つが、擱筆された報告書の可及的速やかなる投函だったことは、十分に想定されうるからである。

(9) 記述の主たる対象は、日露戦争の開戦直後に出来した混乱やパニックと「北への旅」の進捗状況である。いずれに關しても、「復命報告5」ではより詳細に記述されているから、本「報告」の記載は予報的性格を帯びている。とはいえ、両報告は併せ読まれるべきである。なかならずピウスツキは、開戦の二年前から終戦の三ヶ月前まで樺太島に滞在して、日露戦下の島の情況をつぶさに見届け、己の觀察記録を残した数少ない目撃者の一人である。また両報告を通読するなら、この戦争が彼の生活を公私両面でいかに翻弄したかを垣間見ることもできる。

(10) 「復命報告5」 本稿 69頁71頁。「下書稿」については、本「報告」末尾に付載した「訳者記」とその「注1」を見られたい。

(11) 「復命報告5」には、この三ヶ月も含めた詳報が見出される。それによると、日露戦争が酣の一九〇四年十一月に「復命報告3」を擱筆して以降、ピウスツキは樺太島退去に伴うさまざまな残務整理や幾つかの報告書の執筆に忙殺され、しかも島を南北に縦断する旅に明け暮れてもいたから、「復命報告」の続編を執筆する余裕は、ハバロフスク到着までなかったと判断される。

(12) 果たしてラドロフ議長へのアピールが奏功したためかどうか定かではないが、件の無料乗車券は一九〇六年三月三日、サンクト・ペテルブルグまでの「一等車2席分」が、ピウスツキ不在のウラヂヴォストクに送付された。「ピウスツキ夫妻」用だったと思われる。しかしながら、彼はすでに東廻りの海路による欧州帰還を選択していて、当時は東京に滞在していた。この場をお借りして謝意を表する次第である。

(13) 荻原眞子氏が「復命報告5」を「B・ピウスツキのサハリン紀行」と題して邦訳されたのは、妥当な御判断であつたと思われる。同作品は先行研究として参照させていただいたことを明記するとともに、この場をお借りして謝意を表する次第である。

【復命報告1】

一九〇二〜一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報

V・M・ラティシエフ 編注

私が中央・東アジア研究「国際協議会」「ロシア委員会」から、アイヌの民族学・フオークロア関係資料収集の提案を受け取ったのは一九〇三年六月のことでしたが、一九〇二年の秋にはすでにその目的でサハリン南部におりましたから、今回の報告には、本年五月十日付の同委員会議長⁽¹⁾書簡を受領するまでの経緯も含めることを必須と考えます。

「ロシア」帝室科学アカデミーから南サハリンの両部族——アイヌ「現エンチウ」とオロツコ「現ウイльта」——の間で民族学資料を収集するべく派遣された私は、一九〇二年七月八日、樺太島南部管区の主要拠点であるコルサコフスク哨所「天泊、現コルサコフ」に到着しました⁽²⁾。購入済物品の搬出が予定されていた義勇艦隊社の汽船「ヤロスラヴリ」号の出航——十月初め——までに、私が滞在できたのは東海岸の若干のアイヌ村落と、西海岸の三ヶ村だけでした。私はこの三ヶ月間に、この興味深い「毛深い人たち」の部族にすっかり魅了されてしまい、何としてもサハリンに留まって冬を越し、アイヌの生活とそのフオークロアの研究に邁進することを決意しました。科学アカデミーの民族学博物館「現ビョートル大帝名称人類学・民族学博物館「クニスト・カメラ」」は、電報で私の決意を全面的に承認する旨報じ、私に物質的支援を約束されました。そのお蔭をもちまして、私は何らかの有給の仕事を探す必要から解放されて、所期の目標に専念することが可能となりました。

十一月半ば、すでに冬道でしたが、行政中心地から54露里の——サハリン南部の文化的生活が結集するコルサコフスク哨所に至近の——アイヌ村落タコエ「多古恵／大谷」へ向けて出立しました。アイヌのタコエ村は、「幕舎（ユルタ）」と称されるアイヌ式家屋6戸と、やはりアイヌが所有するロシア式百姓屋1戸からなります。住民構成は成人の男子13名と女子14名、そして子供は男13名と女10名です。私は「一八九六年の」夏に一度だけ、旅の途上で数時間タコエに滞在する機会がありました、すでにその時に当地ではアイヌの民族的諸特徴が、純粹な姿ではほとんど保持されていないことに気が付きました。一八九九年に自由移民団がこの地に入植したとき、彼らはすでにロシア人と密接な接触を始めていたからです。移民団は周知のように、営農組織化の不首尾と、当初支援の欠如のせいで定着するには至りませんでした⁽³⁾。

この村にはすでに馬が3頭おり、持主らはこれに騎乗するだけでなく、薪なども運ばせていましたが、その一人は耕作にも従事し、馬鈴薯を植え付け、小麦の播種も行っています。

ロシア人の村々が近在し、さらに近接して幾つかの倉庫を備えた官営製粉所「水車小屋」もありましたから、近間にはいつも20人ほどの入植囚が暮らしていて、少なからぬ圧迫や失望、そしてまた余計な心配⁽⁴⁾ことをアイヌの人々に与えています。犬どもが走り回って、近くを徘徊する仔牛たちを噛み殺し、豚たちもアイヌの家屋近くまで出沒して、同じ運命に見舞われます。これが素で口論や争いが頻発して、調停裁判にまで至ることも珍しくありません。多発するコソ泥や、——常時警戒を怠らず、（ささやかながらも）必須の財産を蔵する住居や女たちを守るべく——誰かを見張りに残す必要や、莓・野草・根茎類を採集する無防備な女たちを脅かす危険は、流刑植民地集落の「住民たち」を隣人に持つことの不愉快な結果にほかなりません。そしてタコエ村も、ロシア人集落ガルキノ・ヴラスコエ⁽⁴⁾「落舎」の周辺にあるその他の村々も、またドウブリ村⁽⁵⁾から1露里のシコヤマ「サカヤマ、榮濱」村、オホーツコエ村から1露里のアイ「相濱」村⁽⁶⁾、官営「ナイブチ」村に隣

接するナイブチ「内淵」村⁽⁷⁾や、その他の「東海岸」村々においても、アイヌたちは、その余地があるにもかかわらず不愉快な集落からより離れた土地へ移住し、それらの村から己を隔離させるようなことは、やはり考えていません。

かつてアイヌの村々で賑わったオホーツク海岸の島々や入江や河川には、往年の住居の痕跡すらもはや見当たりません。現在はサハリン東海岸一帯に20のアイヌ村落がありますが、M・M・ドブロトヴォルスキー⁽⁸⁾がその『アイヌ・ロシア語辞典』の付録に掲載したリストによりますと、今から僅か三十年前の一八七〇年代当初には、同じ空間に45村落が存在していました^一。

それらの間には、不意に見舞われた深刻な災難のせいでアイヌらが放棄してしまった村も幾つかあります。例えば、ある村では天然痘がほとんどの住民を一週間足らずで墓場へと送ってしまいました。別の村「モトマナイ（眞苦）」では4人の若者がアザラシ狩りの最中に溺死しました。これは僅か半年前の出来事です。アイヌらが自ら半壊させた数棟の幕舎が、そこを襲った怖い天罰を偲ばせるかのように、今なお悲しい姿を曝しています。そこで暮らしていたものの他村へ移住した数家族の遠い親族でさえも、この不幸な集落の名は口にのぼせることも憚ります。人々がかつて暮らしていた土地では、アイヌに必要な食料を提供してきた親しい生業（なりわい）をめぐる環境が一変したような所も、恐らく幾つかはあったでしょうが、漁師たちが今なお自由闊達に暮らせる村々は依然として健在です。

だが、より静かで安全でもあるような、より便利な別の場所を改めて捜すことを、アイヌらは望んでいません。第一に、平和な住民にとっての恐ろしい災厄——浮浪者や強盗——から己を安全と見做せるような一隅など、サハリンには存在しな

一 M. M. Логоросский, *Аино-русский словарь* [アイヌ・ロシア語辞典] Липовское [付録], стр. 42-44. ドブロトヴォルスキーが列挙した村のうち、アイヌの古老らとの検証で、アザラシ狩りや漁撈の際に暫時立ち寄る地点に過ぎないと判明した村名は、これに算入されていない。

いからです。それどころか、なるほど他人の財産の愛好者の標的となる確率は小さいかも知れませんが、住居が遠くなればなるほど、強盗に襲われる機会はそれだけ大きくなります。第二には、目隠しのままでも自由自在に歩き回れるほど、あらゆる灌木や些細な窪地までも知悉するような馴れ親しんだ土地との決別は、誰にとつてもさほど容易ではありません。加えて、アイヌたちは己の親族の物故者をめぐる記憶を尊重し、息子は父親が死んだ土地に住まねばなりません。けれども、ロシア人集落の周辺で暮らすアイヌたちは、自分より上位にある農耕民文化の果実に頗る慣れ親しんでしまったから、——極度に不仕合せでも、またその大半が強度に不身持ちでもある——刑事犯流刑囚の代表者たちとは間違いないで合しています。

ロシア的分子との漸次的融合では、タコエ村と、12 露里隔たる隣村のシヤンツィ〔落合⁽⁹⁾〕がその旗手を任じています。タコエとシヤンツィのアイヌは、島のどこよりも流暢にロシア語を話します。

これらの情報は主として、アイヌら自身が行政府へ何らかの陳情を行うとき、あるいは裁判所に向けた訴状作成や、日本人漁業者の代理人との何らかの買付けや交渉のために、島の首府へ赴く際に協力を依頼する通訳たちから入手したものです。

彼ら通訳の間で第一人者と目されているのはアストク・アイヌ (Astoku-Ainu)、あるいは皆がそう呼ぶようにアスタホフ (Astaxov) です。〔コルサコフスク〕管区⁽¹⁰⁾では彼の名前が入植囚と当局者の双方に知れ渡っていて、もしアイヌらに質問する必要が生じたならば、必ずオスタホフ (Ostaxov)⁽¹¹⁾に白羽の矢が立ちます。彼は二十九才。いつもロシアの衣装を身に着けていますので、もし黙っていれば、彼がアイヌだとは誰も思いません。幼時からロシア人の間で育ちましたから、同業の競合者でもある彼の隣人一人を別にすれば、すべてのアイヌは彼を最も腕の立つ通訳と認めています。私は是非とも蓄

音機の蠟管に、このロシア語の達人の談話を収めたいと願っていました。サハリンのいずれかの村の雑多な住民構成をそのまま反映するかのようには、彼の発話は雑多な言語のチャンポンです。ロシア語の真正語彙が小ロシア「ウクライナ」語やポーランド語と入り混じり、ラトヴィア語やタタール語やグルジア「現ジョージア」語を範とする珍妙な語彙が登場し、囚人専用の特殊隠語もふんだんに散りばめられますが、しかもそのすべては勿論のこと、頗る独特な構成法に即して表出されるからです。

私の手元には、すでに収録されたアイヌの昔話や歌謡がありましたから、タコエではオスタホフの力を借りてそれらを翻訳することも期待していました。「しかし、一その期待は見事に裏切られました。オスタホフはすべての要請——即ち想念と、それにかかわるすべての論証も併せた全体——を即座に伝えることに慣れていましたから、己の新しい役割はどうしても理解できず、また収録されたテキストを聴きながら、個別に訊ねられたアイヌ語の意味を、対応するロシア語の一語だけで応えることも叶いませんでした。私の質問に対して、彼は己の苦しい立場を示すかのように片手を振り回すのが常で、まずは「お前自身も聴いての通り」と述べたあとで、直ちに昔話か歌謡のほとんどすべての内容を「簡潔に」伝える、一連の言辞を弄するのです。私は、自分がオスタホフや、協力を求めたその他の通訳たちに、彼らには不可能なことを要求していると悟るや、翻訳はすべて後回しにして、当座は言語の学習に努める傍らで、民族学とフオークロアの生の資料の収集に専念することを決断しました。私はタコエで二週間ほど過ごしたあと直ちに旅立ちましたが、それには次のような理由もありました。当地には古老が一人だけいましたが、頗る愚鈍な男でしたからまともな会話は成り立たず、また若者らは軒並みに、なかならずロシア人を相手に乱れたアイヌ語を操るばかり——ロシア人に迎合し、ロシア語の流儀に合わせて語構成さえも変更する始末です。個々の単語の発音もさることながら語構成においても、対話者「ロシア人

の行う歪曲を自らの発話でも使用するというアイヌのこの能力は、M・M・ドブロトヴォルスキーが夙に指摘しています。私の僅かなアイヌ語知識に照らしても、あれこれの語句は、アイヌ語を僅かに解する一部の先住ロシア人入植囚との会話でアイヌが使い慣れてきた、あの乱れた言語で表出されたことには、一度ならず気付く機会がありました。私個人としては、これらの悪習を身に着ける気は更々ありませんから、言語と習俗がもつと純粋な姿で保持されている別の場所を選ばねばなりませんでした。

私はガルキノ・ウラスコエ村、次いでドウブキ村を通過したあと、やはり駅通道を経てオホーツク海岸に至りましたが、その後は、十頭ほどの逞しい犬に繋がれた狭くて低い櫓に乗り換えて、ロシア人集落ドウブキの南方8露里に立地するアイヌのルレ村「コレイ、魯禮」へ向けて出立しました。この村を訪ねるのは今度が初めてでしたが、もしアイヌ流に言うならば「ルレの人々」の多くは私の旧知でした。私たちは九月、オタサン村「小田寒」⁽¹²⁾とセラロコ村「白浦」⁽¹³⁾での熊祭りでお会っていたからです。私はそのとき友誼を深めることに意欲的だった若いアイヌの家長——私は彼の家に止宿しました——に対して、ルレの訪問を約束した次第です。彼は、地元のアイヌの間で一切の権力を有したことの無い郷長「酋長総代」の息子でした。これらの郷長は以前に日本人によって任命され、「オホテナ (Oxepan)」「ドブロトヴォルスキー」辞典には Oxtena (237 ページ) と記されているから、キリル文字の «П» と «Н» の混同に由来する誤植と思われる。日本語では乙名⁽¹⁴⁾ (日本語) と称されましたが、この称号は父子相伝が通例であるものの、同職は愚鈍と公認されたときだけ権力を喪失しました。件の「アイヌ」の父親の痴呆度が果たして、郷長の権力が別の誰かに引き渡されるのに十分であったか否か、今では容易に判断しかねますが、この件については誰も説明できませんでした。樺太島南部が日本からロシアへ引き渡されたとき⁽¹⁴⁾、10〜15村落からなるさほど大きくない地区を統べていた郷長「モニタハヌアイヌ、改名内藤宗太 (千徳 1929:53)」は、私の友人の祖父でしたが、それ以降は郷長が任命

されることがなく、日本人支配下で存続した強制労働体制が廃されるときにも、その権力も消失しました。その際、「オホテナ」もその職を解かれましたが、昨今では名称すら忘却されて、アイヌ語の「ソンノ・ニシバ」(Sonpo^{ニシバ}-nispa [Sono-nispa の誤植であろう])、即ち「真の長老」に代えられています。ルレ最後の「オホテナ」の孫は、「日本に在住する」近親者が己の死の直前に呼び寄せてくれて、その家族の許に一年以上暮らす形で日本に滞在したので、日本の影響を蒙って髪を刈り、髭を剃り、日露相半ばする装束で身を固めるばかりか、己の名さえも「コントウストウエ」(K[ot]husue)〔千徳太郎治によるとカントシトエ (千徳 1929: 54) から日本風に改め、「コントロ (Kontoro)」「Kantaro」とも記される。日本名は内藤勘太郎、一九二二年まで魯禮部落惣代を務めた (前掲書 54 頁)〕を名乗るようになりました。彼は己の父親を至近距離から、他の誰よりもよく見ていましたが、素面の父からは若干の語句を辛うじて聞き出せただけに、父親は酔払うや歯に衣着せぬ癪癢持ちに変身して、手当たり次第で愚にも付かぬ喧嘩を仕掛けていました。コントロは父のせいで精神を病んでいましたから、オホーツク海岸のアイヌの間で事実上の実権を獲得したのは、今一人の活力旺盛で聡明な、最も裕福なアイヌのボグンカ (Bogunka)〔日本では東海岸相濱酋長のパフンケ (アイヌ) 木村愛吉、ピウスツキの配偶者チユフサンマの叔父)〕です。コントロはどうやら、己の家族に権威と威勢を取り戻すのが生涯の課題だったようですが、そのような折には少なからぬ役割を演ずるはずの、その風采はぱつとせず、上背もアイヌの平均より低め、しかも気紛れで傷つきやすい性格 (ラシウ・タ・コン rasii-taxkon (……)) (15) でしたから、彼の秘められた大志は中々成就せぬだろうと専らの噂でした。長期滞在という私の意図を知るや、彼らは私との良好な関係

二 島の南部が最終的にロシアの統治下に入った一八七五年、主として南部とアニワ湾岸に在住するアイヌの一部が日本へ移住した。彼らは、サハリンに残留した親族と交流を維持し、差し迫る死に直面すると、もし可能であれば近親者と顔を合わせて訣別する慣習を遵守していた。

が己にも有益かも知れぬと判断して、多くのアイヌが近付きになろうと努めました。その根拠はコントロがすでに実証済みでして、彼は誰よりも多くの品物——煙草、火薬、各種の布地など——を後払いで、私からせびり取っていたからです。これらの品々は、私のアイヌ民族学コレクションにとって必須の標本を入手する際の交換財として秋に持参したのですが、今や然るべき発注を条件に引き渡すことにしたわけです。

私の到来は皆に大歓迎されました。家長らは常時、私の滞在を完璧に快適なものとなすべく気配りを怠りません。昔話を熟知する十二才の少女2名は、交代で私に語り聞かせるように命ぜられ、彼女らの語り口からは30篇余りの昔話を採録しました。私が子供の遊びに水を向けるや、村に所在する4軒の家のすべてから子供たちが参集してくれて、家長らの解説の下に遊びの実演が繰り広げられたのです。昼食と夕食の問題は家長らにあまたな奔走を強い、ヨーロッパ人の旦那のために生まれて初めて料理をこしらえる経験不足の若い女主人には、恒常的な不安の——そしてその後には掛け値なしの悲しみの——源ともなりました。それはつまり、私がルレに赴くに当たり、補給は至近のロシア人村から随時可能と見込んで、食料・生肉・バター・茶、砂糖・パンは僅か五日分しか持参しなかったからです。しかしながら五日後に櫓で送り出したアイヌは、ドウブキ村から先へは行けませんでした。吹雪が起り、島の内陸部のガルキノ・ヴラスコエ村——ここでは肉とパンを入手する手筈でした——に通じる道路を埋め尽くしたのです。そのアイヌはドウブキ村で僅かなパンと馬鈴薯を買い付けて帰村しました。吹雪は、なかなか早く初冬における島の常連客ですから、私はここで初めて、吹雪の全魅力を満喫せねばなりませんでした。私が止宿した家には天窓も、またアイヌの幕舎に付きものの炉もありませんからロシア式とは見做されたものの、窓と天井を備えるのみ。盛土は施されず、暖房も、百姓家の中央に設置された小柄な鉄製ペチカだけでして、サハリンではこれを「暖炉（カミーン）」と称しますが、その煙突は天井の僅か上方に鎮座していました。

「後続稿」概要…

私の冬期根拠地。

私の先生たち。

アイヌらの許への訪問と彼らの諸欲求の把握…漁撈、狩猟、犬飼育、北海道からの移民。

詩人たち。

最初のアイヌ学校と、そこでの授業。識字に対するアイヌらの反応。

併せて、若干の性格特徴と習俗。

春、鯨の回遊、アイヌの共同事業。

アイヌの舟によるトゥナイチ (Tunajči) ⁽¹⁶⁾ への旅。

アイヌの漁業者。

語り手たち。

タライカへの旅の準備。

予期せぬ日本への旅。

北海道島のアイヌに関する若干の概評。

三ヶ月後の帰還。

発注品の回収、前払い金への対処。

原手稿は、ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ支部古文書館が所蔵する。

(CI6Φ APAH ф. 148, on. 1, d. 24, j. 79-90)

編者注

- (1) ラドロフ、ヴァシリイ・ヴァシリイェヴィチ (1837～1918) はロシアの東洋学者・トルコ学者、民族学者・考古学者、ペテルブルグの科学アカデミー正会員。科学アカデミー・アジア博物館長 (1885～1890)、科学アカデミー・人類学民族学博物館長 (1894～1918)。中央・東アジア研究「ロシア委員会」の発起人の一人で、その常任議長。

- (2) 「一九〇三〜一九〇五年に樺太島のアイヌとオロッコノの許へ出張したB・O・ピルスツキーの報告」では、汽船「ゼーヤ」号による彼のウラチウオストク出港の日付が一九〇二年七月八日で、コルサコフスク哨所到着は七月十一日と記載されている。
- (3) 一八六九年九月、総勢百十一名からなるトボリスツク県とイルクーツク県からの移民が樺太島に到着した。彼らはタコエ川の河谷に3集落を植は成功しなかった。政府の支援を欠き、困難を極める未知の諸条件に直面した農民たちは、長く持ちこたえることができず、大陸への「再」移住を求める嘆願書を行政府へ提出する。彼らは一八七五年、チビサン「池邊讚 旧長浜」村（現オジヨルスキー）への移住が許可されたが、一八八四年には南ウスリー地方へ去った。
- (4) ガルキノ・ヴラスコエは現在のドリンスク市。同市の所在地にはかつて、アイヌ・コタンのシヤンチャ（Siŋča）が立地していた。ここには一八八四年にロシア人村が創設されて、シヤンツイと命名されたが、のちには、監獄本部長官を務めたM・N・ガルキン=ヴラスキー（1879〜1896）に敬意を表して、ガルキノ・ヴラスコエと改称された。
- (5) ドウプキ村は現在のドリンスク地区スタロ・ドウプスコエ村。一八八六年、アイヌ村ナイブチ「内淵」の隣村として創建された。アイ村はアイ川の河口にあったが、一九六七年七月に居住地点登記簿から抹消された。旧アイ村の所在地に今は鉄道駅ソヴィエツコエがある。
- (7) ナイブチ村はナイバ川の河口に立地するアイヌ村。一八六七年、この村に隣接してロシア軍のナイブチ哨所が建設され、のちには駅通宿となる。一九四七年にはドリンスク地区ウスチ・ドリンカと改名されたが、一九六二年十二月、居住地点登記簿から抹消された。
- (8) ドプロトヴォルスキー、ミハイル・ミハイロヴィチ（1836〜1874）は軍医で、『アイヌ・ロシア語辞典』（一八七五年カザン刊）の著者。一八六五年、「サンクトペテルブルグの」内科・外科学院修了。一八六七年には樺太島へ派遣されて、東シベリア第四常備軍大隊に5年以上軍医として勤務した。短期間のうちにアイヌ語を、のちには日本語も習得する。M・M・ドプロトヴォルスキーの辞典は5733語を収録するが、100語は男女の固有名、511語は地名である。
- (9) シヤンツイ村は、ガルキノ・ヴラスコエ村から2キロのナイバ川左岸に立地するアイヌ村。ガルキノ・ヴラスコエ村にも、かつてはアイヌ集落があった。
- (10) コルサコフスク管区のこと。一八八四年、樺太島は統治行政上、アレクサンドロフスク、ティモフスク、コルサコフスクの3管区に分割された。
- (11) 本文ではこれ以降、専ら「オスタホフ」と記載されている。
- (12) オトサン村は、現在のドリンスク地区フィルソヴォ村。
- (13) セラココ村は、現在のドリンスク地区ヴズモリエ村。

- (14) 樺太島は一八七五年のペテルブルグ条約によって、ロシア帝国が全島を領有し、クリル諸島のウルツプ島からシムシュ島までの一群は日本に帰属することになった。
- (15) 手稿原文のまま。B・ピルスツキーは恐らく、アイヌ語からの訳語の挿入を意図していたのであろうが、何らかの理由で実行されなかった。〔下プロトヴォルスキー辞典(321^頁)によると、*axkon* は「短い」の意〕
- (16) トウナイチ〔富内、アイヌ名トンナイチャ (Tomajka)〕は、現在のコルサコフ地区オホーツコエ村。

【復命報告2】

B・O・ピルスツキーに関する情報

〔ロシア委員会〕書記宛書簡にもとづく

B・O・ピルスツキーは委員会の提案を一九〇三年六月に受領した。これと同時に、ロシア地理協会と科学アカデミーからアイヌ研究のためにイエソ「蝦夷」島へ派遣された民族学者V・L・セロシエフスキー〔Wacław Sieroszewski〕はピルスツキー氏へ、その樺太アイヌの言語と習俗の知識で、目前に迫る彼のイエソ島調査を支援すべく、函館への来航を申し入れた。この際は風雲急を告げる東方情勢が、セロシエフスキーに託された使命の可及的速やかなる完遂を余儀なくするだけに、ピルスツキー氏の協力は緊急を要し、また事情に通じた専門家の支援はなканずく必至でもあった。

この提案が、アイヌの在住する全領域にわたる最も完璧な研究を旨とする委員会の方針と合致する事実鑑み、ピルスツキー氏は最初の便船で、かつてイエソ「島」に在住した経験のある一人のアイヌを帯同し函館へ向けて出港、そこでセロシエフスキー「氏」と会い、同氏の踏査行にすべて付き添って、アイヌたちとの交際では氏を助けるとともに、また自らも彼らの習俗や言語を調査した。

しかしながら、猜疑心の極めて強い日本人の対応は、当初に想定した時期よりもはるかに早い段階の十月^{マニ}に作業の終了を余儀なくさせた。ピルスツキー氏は南サハリンに戻ると、当初はアイヌのタコエ村に滞在した。彼はここで、言語や習俗の知見でさらに研鑽を積むべく、近在するアイヌの村々を定期的に訪問するとともに、収録したテキストの最終的編集、民族学資料の整理、アイヌ語の口語と詩語の辞書作成に従事する予定である。

「一九〇四年」五月には、タライカ「現テルベニエ」湾のアイヌとオロツコ「現ウイルタ」を調査するため、同地へ赴く計画である。彼の意見によれば、軍事行動が開始された場合、その地は彼にとつてより安全であろうという。

ピルスツキー氏からはこれまでに、（１）膨大な報告の冒頭部——これは結語部が届き次第、抄録稿が『委員会通報 (Investi)』に掲載されるであろう——、（２）逐語訳の付されたテキストを収める帳面三冊、（３）アイヌ語テキストを収録した蠟管を収める木箱一個が、委員会に到着している。

【復命報告3】

樺太島へ出張したB・O・ピルスツキーの「委員会」書記宛書簡

サハリンと大陸との夏場の交通が終わる時が近付きましたので、私自身と私の仕事の経過をあなたにお伝えするため、ささやかな文をお届けしたいと思います。私は今、ティモフスク管区におりまして、冬道が仕上がるまで当地に留まることを考えています。その後は、南下してアイヌたちの許へ戻ることが可能であるか、それとも全く別の方角を目指すべきか、決断を迫られるでしょう。まずはあなた宛に送付した最後の手紙以降の、私の仕事と旅の話から始めますが、そうすれば、私のティモフスク管区滞在と、至近の未来をめぐる私の不決断の理由を、ある程度まではお分かり頂けるでしょう。

一九〇三年十二月、一九〇四年の一月、二月、三月は、一九〇二／三年の冬と同じ場所、即ち、オホーツク海岸のアイヌ五ヶ村で過ごしました。私自身も冬の前半だけは生産的に過ごせたと考えますが、軍事行動の開始（日露開戦は二月十日、露暦一月二十九日）が宣せられて以降は、私の仕事に全く裨益しない時節が到来しました。一九〇三年十二月にはタコエ村一つの熊祭りを見る機会があり、その後も狐の祭祀を私が実施しましたが、東海岸では今や頗る稀にしか挙行されないという意味で、それは興味深いものでした。私が実施したと申しましたが、そのわけは、私が春に購入した2匹の狐の飼育を私の家主のアイヌに委ねたものの、祭りの費用は私たちが共同で賄ったからです。

一九〇四年二月と三月の大半は、突如伝えられた軍事事件の知らせの直後に出来した、あの広範な空騒ぎや、時にはパニックとも称すべき大混乱のせいで文字通り空費されました。サハリンが今にも戦場になると信じて疑わぬ人たちも少なくありませんでした。ほとんど毎日のように、日本軍があちらやこちらに上陸したとか、船影が見えたなどといった突飛

な噂が飛び交いました。徒刑囚も、またありうる強盗も人々は均しく恐れしました。私は旅人の通過地で暮らしていましたが、義勇軍団に馳せ参じる住民や、休暇で帰郷する人々や、荷物を運搬するアイヌや、西海岸の津々浦々から——はたまた東海岸からも——コルサコフスク哨所へと急ぐ日本人や、さらには、日本人らを武装解除するべく、またありとあらゆる任務を帯びて奔走する各種当局者らの姿も目にする事となりました。私自身は、身近に危険が迫っているとは思いませんでしたが、全般的騷擾は私を自ずと動揺させて平静な執務を妨げました。私は、臨時に組織された野戦病院の監視官となるよう慫慂されましたが、経営の知識も、80名もの勤務員を統率する能力も兼備すべき責任ある地位は、己の手に負えぬと感じましたから辞退し、万やむなき場合は赤十字部隊に参加する腹を決めました。だが当面は、——サハリンの東海岸伝いに北上して、ギリヤークやオロツコらと隣接して暮らす興味深いアイヌたちを調査するという——いまだ春先に決めた計画を遂行する必要があると。ところで、知人のアイヌたちを介してある程度までは発注してあったオロツコ・コレクシヨンに関しても、何らかの手を打たねばなりません。出立に先立って、己の私物をすべて一箇所に集めることも必要でした。それらはコルサコフスク哨所の知人らが預かってくれていましたが、今や彼らは奥地の寒村への疎開を間近に控えて、それらの保管を断ったからです。もはや南には戻らぬような場合も顧慮して必要な組合せを想定しながら、何を携行すべきかを判断することも必要でした。旅支度、多くのアイヌとの清算、私が設置したアイヌ学校の残務整理は、それだけでなくとも混乱した生活に空騒ぎを加えました。にもかかわらず、この全期間を通して、多くの興味深い観察によつて己の資料を補充し、大量の昔話・歌謡・伝承を翻訳することもできました。この期間にはまたカード方式のアイヌ語小辞書を作成し、それを検証するとともに、しかも私にとつては目新しい、若干数の文法規則を究明することにも成功しました。シャマンの巫儀にも数回列席し、アイヌにおけるこの種の信仰に対する説明も受けました。出発前の数

週間は、他の村々からお別れに来てくれたアイヌたちの応対と対話にも、時間が割かれました。戦争「直前?」、そして開戦後には、大半が日本人の手中にあつて販路も日本に頼つていた漁場がすべて閉鎖されて、彼らには辛い時節が到来しました——それらは物質面でもアイヌの状態に深刻な影響を及ぼすことになりました。ここではさらに、アイヌが日本人への協力を企んでいるという馬鹿げた噂が、彼らに己の命運を危惧させることも強いましたが、これらの噂は、アイヌらの想定によると、略奪を実行する際に欲望を抱いた入植囚らの誰かによつて言い触らされたのだそうです。祖国の敵に何を遠慮することがあるのか……です。長老たちの決議にもとづいて、実務の才ある郷長の一人が当局の許へ派遣され、入植囚らの側からありうる敵対行動に鑑み、全部族を庇護下に置くように嘆願させ、またたとえ日本人が島に現れたとしても、自分たちの心情は彼らに協力するところからほど遠いことも言明させたのです。

三月三十一日、犬橇で北上を開始しましたが、翌日にはすでに、解氷を始めた夥しい数の小川も含めて、泥濘と化した頗る困難で危険な冬道を行くのは断念せざるをえず、小舟に乗り換えて、海岸伝いの舟行に切り替えねばなりませんでした。天気は晴朗、流水が岸辺付近を漂うときは波も決まって穏やかでしたから、この機に乗じて、停泊なしに乗り切る必要もありました。したがって、ポロナイ川の河口までは慌ただしく急行し、途中で遭遇する各村落には、小休止と人口調査のため立ち寄るだけに留めました。そのお蔭で、私にとつて興味深い人物の何人かとは、出会う機会を逸してしまいました。そこで高名なシャマンの老人とは僅か半時間ほど話せただけ、歌謡と昔話を熟知する老女からは何も聴取できませんでした。帰りがけには必ず、私にとつて興味深い所には心ゆくまで時間を割いて滞在するから……と自らを宥めた次第です。

四月一杯と五月は、アイヌの二大村であるタライカ「東多来加、現ウスチエ」とナイエロ「内路、現ガステロ」で過ごしました。当

地のアイヌは、はるかにより興味深いことが判明しました。彼らが幾許かはギリヤーク文化やオロッコ文化の影響下にあるとはいえ、日本人やロシア人からの影響ははるかに微弱です。旧習がより厳しく保持されています。アザラシ猟が終了したものの漁撈は開始されていませんから、頗る適正な時機でした。加えて、あらゆる旅が中断されていて、最果ての集落である当地では、私の冬の下宿で執務をひどく妨げたような頻繁な人の出入りはなく、また余所人の来訪もありません。

ここではすでに二年がかりで、アイヌらは私を待っていたので大歓迎してくれました。何かを稼ぎ出し、一層多くの好意を克ち取り、待ち構える金欠の季節を念頭に入れて幾許かの銭をせびろうとする魂胆から、私の対話者らの舌は滑らかになつてゆきました。私の觀察の限り、この地区では——そもそも頗る僅かしが在住せぬ——ロシア人の生活が概して彼らの関心をほとんど喚起していませんし、異族人の生活自体も、外部からの影響にはほとんど曝されていません。進行中の戦争という大問題も皆をさほど動揺させず、当地にまで到達するのは、管区中心部の大熱狂や騷擾が放散する光線のうちで、僅か数本の弱光に過ぎません。ここで入手した情報は数・量ともに頗る貴重です。アイヌ習俗のさまざまな側面に関する大量な記載のほかに、小辞書の全単語を地元方言と突き合わせて検証し、新テキストを数点採録し、幾つかの物を新規に発見し、数件の祭祀——山と森の主に対する犬の供饗、さまざまな神々へ向けた春のイナウ^三建立、死者供養、檻で飼われている熊の犬歯切り——に列席することもできました。私は遺憾ながら、当地でもまた南でも人類学的計測を実施することができませんでした。どんな理由をもつてしても、アイヌらを説き伏せることはできなかったからです。彼らの間ではただ死者のみが、柩や新しい履物ないし衣服の寸法を決めるべく採寸されるため、一切の計測に対して迷信的な恐怖を抱

三 削掛けを伴う数本の小棒からなるアイヌの信仰対象。この信仰の正確な意味をめぐる問題は、いまだ十分には究明されていない——原編者注。

くわけです。この土地に留まりつづけることが難しくなっていました。私の友人たちも、すべての異族人と同様に間もなく草臥れてしまつて、新鮮味が消え、関心が鈍り、会話ももはや弾まなくなりました。その上、全員が来たるべき繁忙期、樺太鱒と鮭の遡上へ向けて支度にとりかかったので、もはやいかなる対話もありません。そしてその時にはすでに、多くの若者らにも話しかけることはできませんでした。彼らは私と一緒に、アザラシ狩りや、舟仕事や、根茎類の採集や、鯨・キウリウオの捕獲などに専念していたからです。アイヌの間では、例えば昔話や歌謡を夏に語ってはならぬとされており、彼らはそれを冬場のために取っておくのです。

この土地では食料の入手が全く叶わぬこともあって、別の場所への移動を考える必要が生じました。ポロナイ河口のチフメネフスク哨所は、すべての必須食料を当地の僅かな住民にも供給するとはいへ、漁業用蒸気船の来航する夏場だけに限られます。今は備蓄が底を突いて、補充の見込みは皆無でした。可能な者は、近い将来のために蓄えています。当面は物価が上昇して、例えば碾割り麦のような、多くの食料は全く入手が不可能でした。あらゆる必須食品は、いずれかの人口の多いロシア人村で入手せねばなりません。至近のそのような地点は、ティモフスク管区のオノール村であることが判りました。私は食料もさることながら、異族人露営地を経巡る長期の放浪ののち、より便利な別の状況下で暫し休息するためにも、同村へ赴くことに決めました。私が島の行政府から請け負ったアイヌの人口調査をめぐる問題も、やはり解決する必要があります。西海岸の全域はいまだ未調査のままでありますが、満洲で出来した出来事と、西海岸海域における日本人密漁者のスクーナー船の出没が、この旅を危険なものにしてみました。

私は六月初旬、ギリヤークらとともにポロナイ川を溯る舟旅の支度に着手しました。同行者の間には私の古い知人たち、例えばカンカ (Kanka) やセドイ / チャキ (Sedoi / Chaki) の顔も見えました。この春を通しての格別な増水、次いでは雨脚を

さらに強めていった豪雨が、ポロナイ河口から2露里の、ギリヤークとオロツコが混住するソチガレ (Sotigare) 村に、丸々二週間も私を閉じ込めました。この遅延は、私にオロツコたちとより親しくなる機会を与えましたから、私にとつては頗る好都合でした。オロツコらは、私が彼らの前に現れたとき、また最初の接触を試みたときも私を避けて、極度の警戒心を堅持していました。実は彼らの間に、次のような意見が広まっていたのだそうです。即ち、余所人のチャンギ (Changi) 四——即ち私のことですが——は、オロツコ全員の登録という特別な使命を帯びて到来したのだ、そして彼らは洗礼を受けた者として、兵隊になつて戦争にも行くべきだとも述べている、と。恐怖と結び付いた半ば敵対的な感情——彼らはこの感情を以て私に接しました——を何度か体験したあとになつて、私はようやくそのことを知つたわけです。多くはロシア語もアイヌ語もギリヤーク語も解さぬかのように装つて、私の質問には答えませんでした。一団となつて心配そうにやつて来た憐れなオロツコらは、出会い頭に二度ほど、己に兵役をもたらすに相違ない男と面突き合わせるのを嫌つて、遠く脇の方へ向きを変えていきました。私がアイヌらを介して誘つたにもかかわらず、誰も話合いに姿を現さぬばかりか、南から私を案内し、すべての旅に付き添つて、あらゆる場面でとりわけ熱心に助けてくれた若いアイヌにさえ、旧知のオロツコらは、彼こそ私をこの土地に連れてきた疫病神だ、と食つてかかる始末でした。このアイヌは、その理由をしつこく問い質したあとで、私に対するオロツコらの恐怖の原因を説明してくれました。したがつて、私自身は二ヶ月間、彼らの気持ちを押さめて、私に向けられた彼らの思い込みの誤りを立証するべく、オロツコらとの交際は避けていました。私がソチガレの古い友人であるカンカの家に寄宿すると、彼の協力と庇護のもとで、彼のオロツコの友人のうちの数名とは徐々に仲良くなりました。カンカ宅に寄宿した二週間と、その後に行った十二日の旅——私たちには5人のオロツコも買物のた

四 長官。流刑囚と商人を除く、ありとあらゆるロシア人に適用される用語——著者注。

めに同行しました——の間には、彼らから多くのことを学び、オロツコ語1500語と数点の謎々、短い歌2篇と昔話1篇を採録することができました。私はまたシヤマンの巫儀に数回列席し、シヤマニズムの若干の側面を解明し、ポリヤコーフがサハリンから持ち帰り、今は「サンクト・ペテルブルグの」科学アカデミー民族学博物館「現ビョートル大帝名称人類学・民族学博物館「クンスト・カメラ」」に収蔵されている偶像と呪具の、ほとんどすべての写真についても説明を入手しています。

七月はティミ川流域のギリヤークの間で過ごして、収録済みテキストの翻訳と新テキストの採録や、例えば奴隸制、アイヌとの交易、アイヌの氏族、彼らの慣習の特徴など、アイヌにかかわる諸問題の比較研究に従事しました。話合いには不向きな時機でした。なぜならギリヤークはごく僅かで、大半は西海岸の海辺やティミ河口にまだ留まっていた——ティミ川には樺太鱒が皆無でした——、村に残った人たちは、川の河口部に設置された官営漁場へ向けて、さまざまな運送に従事していたからです。八月初めには南へ向けた復路の旅支度に着手しましたが、相次いで出来る状況は南への旅が極めて危険であり、恐らくはまた無益でもあることを立証してゆきました。サハリン南部は、北部の全域よりも日本軍に攻撃される公算が大了。かの地では十二月にでさえ、その可能性が予想されます。冬までにそこへ赴くことは思いとどまるよう強く諫められて、私は一人のアイヌの雇用文書を作成しましたから、冬まではティモフスク管区に腰を据えます。今は一九〇二年以降の旅行記の終章、アイヌの習俗をめぐる数章の仕上げ、アイヌ語文法の執筆、そしてもし「適当な」アイヌがいたら、テキストのさらなる翻訳にも取り組むつもりです。オロツコ・コレクシオンは一部が発注され、一部は購入済みです。ヌイ湾の「北の」オロツコは、より純粋な文化を保持することが判明しつつあります。

一九〇四年十一月十日

【復命報告 4】

中央・東アジア研究「ロシア委員会」議長

V・V・ラドロフ氏宛書簡

A・M・レシエトフ 編注

私のサハリン南部からの出立は、頗る時宜に適うものだったことが判明しました。私は「一九〇五年」三月二十三日、チフメネフスク哨所⁽¹⁾〔敷香、現ポロナISK〕を發ち、「同行した」アイヌたちとはここで別れを告げて、直接の關係を断たねばなりませんでした。東海岸の全域では、タライカ⁽²⁾に至るまで感冒（インフリュエンツァ）⁽³⁾が猛威を奮っていて、汚染された村々を旅する間には私自身も——確かにやや軽度ではありましたが——この不快な病に感染しました。病が私に数日の想定外滞在を強いた結果、潟を渡る冬道はすでに終わっていましたから、予定通りには島の北部に到着できませんでした。中部サハリンにおける南部村落の一つであるオノール⁽⁴⁾までは、トナカイ橇で最後の冬道を走破、そして樺太島からの脱出（六月十一日）までは、ただロシア人集落のオノール村、レイコフスコエ村⁽⁵⁾、アレクサンドロフスク「哨所」⁽⁶⁾だけに滞在しました。泥濘期が到来し、ギリヤーク「ニクブン」とも称した。現ニヴフの露營地を歴訪することすら叶いませんでした。ギリヤークらは五月十五日頃から来訪しましたが、彼らとて、概ねロシア人入植地の幾つかの拠点近くにごく僅か残留するだけで、この重苦しくて物騒な年には、さらに遠くへと逃散していきました。

南から届くのは芳しくない知らせばかりで危機への不安は日一日と募りました。より好ましい戦況だった春には期待で

きた食料輸送が途絶えて、物価は軒並みに日毎でなくて、時間毎に昂騰する始末です。対馬つまり、日本海海戦⁽⁷⁾後は住民に対して、もし希望するならば各自が己に可能であるか、あるいは己の欲するような移動手段を選んで——つまり徒歩か小舟で——島の北部へ退去するよう勧告されました。いかなる船舶であれ、寄港の望みは一切断たれてしまったのです。

私は七月十二日、サハリンのアレクサンドロフスク哨所とニコライエフスク「アムール河口の尼港」の間を運航する小型舟艇で、大陸に無事たどり着きました。ここにも若干名のアイヌが在住するとの情報を得ていたので、彼らと会うために、また概して言えば、現存するアイヌ——生存者は僅か5名でした——もさることながら、かつて奴隷として在住したアイヌらの子孫をめぐっても、その情報を地元の異族人から聴取するべく、まずはニコライエフスク、次いでマリインスクに滞在しました。一応のことは何とか聴取できましたが、日本人が大陸にも上陸するのではないかとの危惧⁽⁸⁾は私に長居を許さず、すべてを心ゆくまで活用する前に先を急がねばなりません。アムール流域で暮らすアイヌのうちで、私が会えたのは僅か2名でした。一人は、近年に自らの意志で大陸に移住して漁場で就業する若い青年で、ギリヤークらと意を通じあっていました。ニコライエフスクより下流の村の一つ——ヴァグス⁽⁹⁾岬——に彼が住みついてはや三年目になります。今一人はアイヌの老女ですが、黒貂を求めてサハリンへ赴いた「シヤンタン⁽¹⁰⁾」——即ちオリチャ^(Oircha)あるいはナニ^(Nani)「現ウリチ」——の一人に細君として連れてこられて以来、彼女はすでに30年もアムール流域で暮らしていました。

ハバロフスクに到着してすでに二週目になります。ここでは、極東に関する著作をかなり豊富に蔵する「ロシア帝室」地理協会ブリアムール支部図書館で仕事を開始しましたが、サハリン南部の植物に関してもまだ未完の同定作業を継続することも可能ですし、森林記載のためにサハリンを訪れた林務官I・D・シユレデルス⁽¹¹⁾の協力を得て、最新データにもとづ

くサハリンの民族地図を作成することも期しています。目下捜しているのは一人のアイヌ女でして、あるロシア人農民とともに、身内の人たちには無断で南ウスリー地方へ出奔したのです。何とかして彼女に会い、そのサハリン脱出やロシア人との結婚をめぐる状況について、日常的な側面からも興味深いデータを記録したいものです。さらには、目下ニコライエフスクに残されている私のささやかな個人資産（書籍・陰画写真乾板・文書類）を然るべく処置するという私事の清算も、この地での足止めを強いています。

私は、L・J・シュテルンベルグ「ロシア」委員会書記からの手紙にハバロフスクで接して、悲嘆に暮れています。約束されていたはずの「欧州部」ロシアまでの無料乗車券を私に送付することはできない、と通告してきたからです。東清鉄道の汽船によるサハリンからウラヂヴォストクまでの無料乗船の代わりに、私が直面させられたのは、恐るべき物価高騰の最中を、しかも――投棄することの叶わぬ物（衣服・肌着、若干の書籍、文書類・陰画写真乾板、収集コレクションの幾つか）は、そのすべてを帯同せねばなりませんでしたから――二倍の料金を叩いて、サハリン全島を縦断するという事態です。コルサコフスクからハバロフスクまでの全旅程で、200ルーブリ余りの出費を余儀なくされました。プリアムール総督を通して無料乗車券の許可を取りつけるという、頗る微かな望みはまだあります。当面は、科学アカデミー博物館「現ビョートル大帝名称人類学・民族学博物館「クンスト・カメラ」」へ向けて發送済みの収集品コレクションのほかに、私の書籍も文書類も、その一部は同博物館宛に送付することにしました。それらは別個の小包として、私の到着まで開梱不可と明記して發送するつもりです。そうすれば私も余計な荷物や、そのための支払いから解放されますから、私の旅は格段と楽になるでしょう。加えて、西へ向けての旅程が進捗する間、さまざまな理由で携帯品の半分が散逸してゆくのではないか、との懸念も覚えています。

この現況に関する短信を終えるに当たり、私の衷心よりの敬意と傾倒に対する保証を御查收下さるようお願い申し上げます。

一九〇五年七月十四日

ハバロフスク市

B・ピルスツキー

原手稿は、ロシア科学アカデミーのサンクト・ペテルブルグ支部文書館が所蔵する。

(*Синодальный архив. ф. 148, on. 1, d. 38, a. 64-67*)

編者注

(1) チフメネスキー・ポスト。現在はポロナイスク市。

(2) タライカはアイヌの村落名。一九四七年以降、ポロナイスク地区ウスチエ村。一九六五年に島の居住地点登記簿から抹消されて、それ以降は存在せず。

(3) 「インフリュエンツァ」は感冒の旧称。

(4) オノールはロシア人の村落名。

(5) ルイコフスクは、現在のティモフスク地区キーロフスコエ村。

(6) アレクサンドロフスキー〔哨所〕は、現在のアレクサンドロフスク・サハリンスキー市。

(7) 一九〇五年五月十四〜十五日（グレゴリウス暦同月二十七〜二十八日）に朝鮮海峡の対馬近くで出来した対馬海戦におけるロシア海軍の敗北は、ロシア社会に痛烈な印象を与えた。B・O・ピルスツキーはこの事件のサハリンでの反応を伝えている。

(8) ここでは、一九〇四〜五年の露日戦争期における、ロシアにとって不首尾に終わった諸軍事行動の経過や、ロシア領極東大陸部への日本軍上陸に対する危惧が語られている。

(9) ヴァグス (Vags) — ニヴフ語で「ウスリー白鮭」を意味する。岬。地名とその原義については Ch・M・タクサミの認証を受けた。彼の協力に対しては心から謝意を表したい。井上紘一の著述では、この地名が《Vassy》と誤読されている (《Dear Father!»: A Collection of B. Pisudski's letters, et alii. Edited, compiled, translated, annotated and written by Koichi Inoue. Pisudskiana de Sapporo. № 1. Sapporo, 1999. P.

101)。

- (10) シャンタンはオリチャ(ウリチ)の日本語名。【日本語では、この語が「山丹交易」を担った「山丹人」を意味し、ウリチとニヴフの双方を含む混成集団だったと考えられている——訳者注】。

- (11) イヴァン・ドナトヴィチ・シュレデルス (1876~?) は林学者。ヴィテブスク県チナブルグ郡ビルジに領地を有した貴族家系の出身で、カトリック教徒。一八九四年、サンクト・ペテルブルグの第七ギムナジヤを卒業後、サンクト・ペテルブルグ帝大物理・数学部に進学。しかしながら、同学部では一年ほど学んだだけで、自らが選択した三つの高等専門学校——鉱山学校、アレクサンドル一世記念鉄道技師学校、林学校——のいずれかへの転学を目指して、勉学を続けることを決断する。白羽の矢は結局、林学校に立って、一八九五年六月十七日から一九〇〇年四月二十八日まで同校で学んだ(サンクト・ペテルブルグ市の中央国家歴史文書館(TSGLA)所蔵文書: *ф. 14, on. 3, d. 31192; ф. 994, on. 4, d. 1608*)。林学校を卒業後、赴任先の極東へ赴く。一九〇二年、林務官助手としてハバロフスクに着任。サハリンに滞在中、ピルスツキーと知り合って親交を深める。ベラルーシとポーランドの隣接関係、カトリックの信仰、そして恐らくは、シュレデルスの弃えたポーランド語が、両者を近づけた可能性も排除できない。サハリンでは幾つかの旅を共にした。ピルスツキーはハバロフスク滞在時に、己の所持品を出会いの記念としてシュレデルスの許に残している。一九〇六年、シュレデルスはすでにブリアムール国家資産局の県書記の職にあった。彼のその後の運命は不詳。

シュレデルスの極東での活動に関して、情報提供を賜った V・M・ラティシェフに感謝する。

訳者記

訳者は一九九一年十月三十一日、サハリン州都ユジノ・サハリンスクで開催の第二回ピウスツキ国際シンポジウムにて、「送られなかった」^(?) 中央・東アジア研究ロシア委員会 [W・W・ラドロフ (本名は Friedrich Wilhelm Radloff)] 議長宛 B・ピウスツキ書簡⁽¹⁾ と題する報告を英語で行った。このときに依拠した資料は、クラクフのポーランド科学アカデミー図書館文書庫が所蔵する B・ピウスツキ関係資料中に見出された、4 葉(表裏合わせて 7 頁) かななる手稿である⁽²⁾。同手稿は頭書と署名に加えて、末尾に「14\ VII 一九〇五年 / ハバロフスク市」と日付や発信地まで明記するといえ、本文の随所には同一筆跡による加除や配置換えの指示が見出されて、それが「下書」であることは一目瞭然であった。

しかるに当時は「送出された清書稿」が知られておらず、果たしてピウスツキが浄書して投函したか否かを確認する術もなかったもので、イトルには「送られなかった」と疑問符を付した次第である。

訳者の打ち上げた観測気球に依えて「浄書稿」の探索に取り組んで下さったのは、サンクト・ペテルブルグの同僚アレクサンドル・レシエトフ氏である。中国民族学の重鎮である同氏はその頃、ソ連で弾圧された民族学者らの掘起こしを孜孜として進めておられた。

一九九九年の晩夏、第三回ピウスツキ国際シンポジウムが開催されたクラクフとザコパネで久しぶりにお会いしたレシエトフ氏は、サンクト・ペテルブルグのロシア科学アカデミー文書館で「浄書稿」を発見したと告げられた。「浄書稿」は二〇〇一年、『ピウスツキ遺産研究所通報』5号に、レシエトフ氏の解説付きで公刊された⁽³⁾。本邦訳稿の底本は、このレシエトフ版にほかならない。

二〇一五年五月十五日、札幌

訳者注

- (1) K. Inoue, "B. Piusudski's Undispatched [?] Letter to the Chairman [W. W. Radloff] of the Russian Committee for the Exploration of Central and East Asia, 『サハリンとB・ピウスツキ』B・ピウスツキ生誕125周年記念国際シンポジウム報告(ユニゾ・サハリンスク 1991.10.31-11.2)』87-100頁、札幌：ピウスツキをめぐる北方の旅実行委員会(1992) in: *Linguistic and Oriental Studies from Poznań 2: 67-72*, Poznań: Adam Mickiewicz University (1995) also in: K. Inoue (ed.), "Dear Father!" — *A Collection of B. Piusudski's Letters, et alii (Piusudskiana de Sapporo № 1): 95-114*, Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido Univ. (1999). 以上の拙稿は手稿の露文テキストのほかに「手稿コピー全7ページ」その英訳稿も収録している。【ロシア語版】K. Inoue, "Неогосланное (?) Письмо Б. Пигудского к Председателю Русского комитета для изучения Средней и Восточной Азии В.В. Радлову" *Б.О. Пигудский — исследователь народов Сахалина т. 1*, стр. 83-86; Южно-Сахалинск (1992).
- (2) Archiwum PAN i PAU w Krakowie, sygn. 4467:9-12. 北大スラブ・ユーラシア研究センター図書室は、この「B・ピウスツキ関係資料」のマイクロフィルム版とプリント製本版を所蔵しており、当該手稿はそこに見出される。
- (3) 書誌は、復命報告の「解題」を見られたい。

【復命報告 5】

一九〇三—一九〇五年に樺太島のアイヌとオロツコの許へ出張した

B・O・ピルスツキーの報告

一九〇二年

私は一九〇二年七月八日、サハリンへ向かう東清鉄道「中東鉄道」とも称される」会社の小蒸気船「ゼーヤ」号でウラヂヴォストクを出港しました。同島の南部では「ロシア帝室 科学アカデミー」の民族学博物館「現ビョートル大帝名称人類学・民族学博物館「クンスト・カメラ」」のために、そこに在住する土着民のアイヌ「現エンチウ」とオロツコ「現ウイльта」から「民族標本」コレクションを買い付ける計画でした。七月十一日、南サハリンの行政中心地であるコルサコフスク哨所「大泊、現コルサコフ」到着後、地元当局の支援を得て判明した諸条件に合わせて、当面の旅計画を練り上げました。

七月十三日、コルサコフスクから北東の内陸部——同哨所を去ること76露里——のシヤンツイ村「落合、旧ガルキノ・ウラスコエ、現ドリンスク」へ向けて、同名のロシア人集落の近くで3家族が営むささやかなアイヌ村落の初調査を実施するべく出立しました。そこで最初の民族標本の購入を果たすと、西海岸のマウカ「真岡、現ホルムスク」——全島を通して最大のアイヌ集落（戸数21幕舎）——へ向けて出港する直近の蒸気船に間に合うよう、大急ぎでコルサコフスク哨所に戻りました。

七月十五日、全く空っぽな日本の蒸気船の唯一の乗客となつて、「危機の巖」を擁するクリリオン「西野登呂岬をすでに周回し、西海岸の主要拠点であるマウカ——アイヌ語では「エンドウンコモ（Erdunkono）」と称します——を目指していま

したが、翌十六日にマウカで下船しました。

この地では漁業会社「セミヨノフ・デンビー商会」の代表や従業員たち——ロシア人と日本人の双方を含みます——から、私は思いがけぬ厚遇と完璧な支援態勢を忝くしました。私の課題はそこのお蔭で著しく軽減・加速されました。何よりもまず、3部屋からなる広々とした住宅が無償提供されたので、己の客人であるアイヌたちをそこで自由に応接し、購入物品を整理・仕分けし、のちにはそれらを箱に収めて梱包することもできました。その後のサハリンの旅を通して、マウカで忝くしたような厚遇に遭遇することは一度もありませんでした。

民族標本の入手は、交換財として持参した商品が好評を博したため迅速に進捗しました。住民はそれらの商品を、漁業者らが経営する——異族人との商取引では独占的地位を広範に享受していた——二つの売店が付ける値段よりもはるかに安く入手できたからです。

購入標本の記載の方ははるかに難渋しました。近在を捜し回ってもロシア語を多少とも話せるアイヌは一人もいなかったからです。個々の物品に対して説明が得られた場合も、質疑応答というより、むしろ身振り言語を介して辛うじて実現されたに過ぎません。私がアイヌ語で若干数の単語を記録しようと試みたときは、日露小事典を参照しながら日本語で訊ねなければなりませんでした。西海岸では子供も含めたすべてのアイヌがこの言語を自在に操ります。

当地で採録できたフォークロア資料は頗る僅かです。私はマウカ地区の17村落で人口調査を実施しましたが、マウカから南北双方へ徒歩の小旅行を繰り返しながら、その大半の村を歴訪しました。因みに、西海岸一帯の住民の著しい部分は、主として、若干のアイヌ歌謡を蠟管に収録した蓄音機の音声を聴くために私の宿舎を訪ねてきました。これらの歌「の歌詞」を私のために口述するよう懸命にお願いしたにもかかわらず、誰も引き受けてはくれませんでした。昔話や歌謡を紙に書

きつけることができるよう一語ずつ、ゆっくり語ることに同意した老人を、私の許へ連れてくる段取りがようやく整ったところで、私の出発すべき刻限が到来してしまいました。

マウカには、ウラヂヴオストクニコライエフスク間に就航する東清鉄道会社の汽船が、サハリン行政府の特別要請があるときにだけ寄港していましたが、この年にマウカでの滞在を必要とした人々は、これらの特注汽船便ですでに全員が立ち去っていました。私一人のためだけに今一度の汽船寄港が期待できるほど現実には甘くありません。残された道は二つだけでした。一つは、徒歩で西海岸を伝ってクスナイ「久春内、現イリンスキー」まで北上、そこから島を縦断する小径を経て東海岸のマヌエ「眞縫、現アルセンチエフカ」に至り、その後は同海岸を南下するものですが、危険すら伴う極めて難儀な道です。セラロコ「白漣」（しららおろ）、白漣、現ヴズモリエ「までの100露里は足で走破せねばなりません」が、以遠は駅通馬の利用も期待できませんでした。ところで、山々やタイガや沼沢地を貫く狭い山道を踏破するクスナイからマウカまでの路程では、少々の荷物の運搬でも難渋しますから、道すがら遭遇する幾つかの村での物品購入など論外でした。これらの土地には逃亡懲役囚の浮浪者が跋扈しますが、今年は例年よりも大きな徒党を組んで徘徊していますから、そのような計画はなおさら断念を余儀なくされました。したがって、私の物品を収めた木箱ともども最後の漁船の一隻に載せて函館へ赴き、ここからは別の便船でコルサコフスクに戻ってはどうか、という「セミノフ・デンビー商会」からの親切な申し出を、私は有難く拝受することにした次第です。

八月六日、すでに私に慣れ、受け入れてくれたアイヌたちとは後ろ髪を引かれるように別れて、マウカを発ちました。私が強く希望したにもかかわらず、西海岸を今一度訪ねて、東海岸と類似する民族学・フォークロア資料を同地でも収集する機会には恵まれません。このときマウカ・アイヌと初めて遭遇した折のささやかな記録は、のちに同地出身の

二人のアイヌと偶然に出会ったとき僅かに補充できただけです。ところで西海岸南部のアイヌたちは、ほかの地方よりも柔らかいという特徴の言語でも、また慣習でも、少なからぬ特色を堅持しています。彼らは大昔から日本人の強い影響を受けてきましたが、恵まれた気候と豊かな魚類資源は、より大きな物質的豊かさをもたらしています。因みに当地は、アイヌが小型スクーナー帆船の建造に長けている唯一の地区でありまして、モネロン〔海馬〕島におけるトド胤を共同で実施しています。近年では日本人との混交婚の流行に加えて、昆布漁に従事する労務者の朝鮮人や中国人もアイヌと親族関係を築き始めていますから、ここでは独特な人種混濁が出来しています。

当地でマウカ・アイヌの愛想良さ、優しさ、社交性——これらの性格特徴を、彼らはサハリンのその他の地域のアイヌよりも多く有するわけですが——に接した結果、私はこの興味深い部族をより深く研究したいと思うようになりました。そこで、サハリンにもつと長期間留まるという決意を科学アカデミー民族学博物館へ書面で伝えた次第です。折しもこの頃に創設された中央・東アジア研究「ロシア委員会」には一九〇三年と一九〇四年、そして一九〇五年度は半年分の研究資金を提供して頂きましたから、私は同委員会に対して、己の企画を実現する重大な責務を負っています。

函館では便船を待つために三週間滞在せねばなりませんでした。デンビー氏〔George Philips Dembigh——ロシアに帰化したスコットランド出身の漁業者〕の厚遇に甘えて、氏の子息らや親戚の森高氏と令夫人の案内で、町の名所旧跡や日本人の日常生活に親しく接しましたが、彼ら日本人が2年後には世界中の耳目を集めるようになるとは夢にも思いませんでした。残念ながら函館では一人のアイヌとも出会えずじまいでした。たとえ至近のアイヌ村落でも、訪ねるとなると資金と時間が必要だったでしょうが、私はそのいずれも欠いておりました。八月三十日、コルサコフスクに戻りましたが、九月十日に到着される樺太島武官知事リャプウノフ少将との会見を希望していましたので、九月十三日まで同地に留まりました。知事は警

務局が保管するアイヌ関係文書の閲覧許可書を下付され、知事とともに作成した様式にもとづく完璧なアイヌ人口調査の実施を要請されました。私の管区内巡回に備えて、駅通道路が通過する土地における官用馬の無償使用許可証も発行されたのです。リャプウノフ少将はまた、私が提案した——アイヌ子弟のために初めて試行されるささやかな識字学校の——設置計画にも満腔の共感を表明され、書籍・学用品・参考書の入手、そして教師らへの謝金の原資として150ルーブリという少なくない支援金も頂戴しました。

九月十三日、島の東海岸のアイヌ村落（オトサン村「小田寒、現フィルスツオ」とセラロコ村「白浦、現ウスモリエ」）へ急行しました。岡村では例年より時機を早めて3件の熊祭りが実施されることになっていたからです。アイヌたちは冬の到来を待たずに熊祭りの挙行を急ぎました。なぜなら、家長が熊の主人を務める幾つかの家族では、春のアザラシ狩りに海へ赴いた若者たちが猟の最中に溺死したからです。この折は格別に多くのアイヌが祭りに参集しましたので、私は、サハリン土着民の生活で最大の祝祭を参与観察する好機に恵まれたわけです。祝祭期間は民族標本の収集にも、また対話にとっても好ましい時機ではありません。参集した長老らは学校の問題ですら解決を望まず、お祭り気分が醒めるときまで先送りしたからです。にもかかわらず、私はこの間に東海岸のアイヌの広範な大衆と初めて知り合う機会に恵まれて、彼らの若干名には友情の証として、製作を依頼したアイヌの日用品を直近の冬か春までには受領できることを願いつつ、持参した商品を前払いとして引き渡した次第です。このときは数件の昔話テキストを初めて「蠟管」に収録しました。

十月八日、シャンツィ村で私のために製作された品物を引き取ると、コルサコフスクに戻りました。マウカから運ばれて監獄庁舎の倉庫に保管されていた箱のうち数個は野鼠に齧られ（鼠どもは革製品の一部を喰っていました）、幾つかの箱は破損していることが判明しました。すべての箱を解体して、そこに収められたものをすべて点検せねばなりませんでした。

東海岸から届けられた標本類は道中で水に浸かったため、乾燥と再梱包には少なからぬ日数を要しました。すべての箱を義勇艦隊社の汽船「ヤロスラヴリ」号へ引き渡したあと、私は然るべき越冬地——それはアイヌの村々からも、また私が選んだ教師たちを指導しながら設営する予定の識字学校にも遠からずの場所が好ましいわけですが——への引越しの準備に取りかかりました。教師の一人は私の教え子の若いギリヤークで、ウラヂヴオストク市の実科学校四年次課程を修了していました。今一人は、日本語の読書はよくできたもののロシア語は不得手のアイヌ（日本人とアイヌ女の息子）でしたが、私の周到な指導下で「ロシア語」学習に励んできました。私は十一月十四日から二十四日までタコエとシヤンツィの2村に滞在して、学校の設置に努めながら言語テキストを採録し、アイヌの言語や風俗の研究にも従事していました。

十一月二十四日、東海岸の——シヤンツィから15露里の——ルレ「魯禮、現ロレイ」村へ赴いて、家長らから温かく迎えられました。当地では興味深い民族学情報を少なからず記載し、20篇弱の昔話を採集し、数篇の英雄叙事詩的歌謡（*galky*——即ち「ハウキ」〔英雄詞曲〕）を初めて採録しました。十二月十日、猛烈な雪風と道の完璧な消失にもかかわらず、犬橇でロシア人村のシヤンツィに帰着しました。たった今あとにしたばかりの「アイヌのシヤンツィ村に所在する」知人宅では、ここ数日にわたって一切の食物が底を突き、私の食料はすべて食べ尽くしていたからです。

十二月十四日、シヤンツィ村から21露里のアイ村「相濱」に到着。ロシア風に造作された裕福なアイヌの家に寄宿して、そこを根城と定めました。考えられうる拠点構築の組合せで、これは最良の選択だったと思われます。1露里半先にはロシア人集落（オホーツコエ村）が所在し、そこでは常に焼いたパン、バター、玉子が、そして時には肉までも入手できたからです。しかしながら、この組合せには不便な面もありました。この部族では最大の有力者である私の家主の家には一冬を通して、さまざまな土地から到来する余所のアイヌたちが半日、一昼夜、またそれ以上にわたって滞在していました。

彼らはほとんど常に——通常はただ挨拶するか、蓄音機の音楽を聴くためですが、頗る頻繁に助言を求め、請願書の執筆や、当局に対するあれこれの取りなしを要請するために——私の部屋にも立ち寄っていました。客人は己の目的のために私を利用するや、さまざまな口実を設けて訪問を切り上げるのが常でした。というのも、すべての余所人が誰よりもまずは家長の客でしたから、彼への気兼ねと、また事実上の郷長である彼にふさわしい表敬からも、彼の意向を忖度する必要があつたからです。誰かが過度に私と親しくなることが、彼には好ましくないわけです。異国の旦那方との交渉はただ郷長一人だけがこれを行うべしというアイヌの古い見解は、日本人への隷属下でも保持されて今なお消失してはいませんから、私の家主も、すべての話合いはただ彼一人とだけ行えという指示に私が従わず、彼の立場を無視することに内心穏やかではなかつたのです。とはいえ、わが家主は己の部族の伝統に暗くて、日本人やロシア人らにより多くかかずらつていました……。家長の部屋で酒宴が催される日々はとりわけ耐えがたく、しかも郷長とその兄は余所人らに御馳走することを好むだけでなく、コルサクスク哨所で購入した「スピルト」「純アルコールに近い強酒」を携えて帰村途上の客たちは、必ず長めに引き止めてもいましたから、このような日は決して少なくなかつたわけです。私はそのような不快事に耐えかねて、しばしば近在の村々へ逃避することを余儀なくされました。その際はまた、アイヌの生活から多様な情景や場面をより多く見ることを心がけ、また——アイヌはただ自宅で、しかも何の遠慮も要らぬような仲間内でのみ自由闊達に話しますから——私の質問に対する自然で率直な回答を聞き出すことにも留意しました。何人かが私に告白したように、炉辺で燃え盛る暖かい火のはぜる音が聞こえる家族的な状況と、慣れ親しんだ座り方だけが、思索や記憶の軽快な働きにとつて重要な意味を有し、会話への意欲も掻き立てるのだそうです。したがって、あれやこれやのアイヌから誘いがあつたときは、彼の許に暫し留まり、情況が許す限りにおいて彼を活用し、私にとって興味深い情報を入手し、情況を熟視し、目新

しい標本を捜すか、あるいは私にとって既知の標本と比較するべく、喜んで応じることにしていました。旅とその準備には多くの時間を費やしましたが、それは人物や活用さるべき適切な場面の選択においてより大きな多様性をもたらしました。所与の諸条件下でアイヌの習俗とその内的世界を調査するには、まさにこのような方法こそ、あまたな移動を伴うとはいえ最適であることが判明しました。私は十二月十四日から三十一日にかけて、晩秋に入手したドブロトヴォルスキー『のアイヌ・ロシア語』辞典の研究と、その最初の検証に取り組みました。検証は所期の成果を上げなかったとはいえ、私が利用することの可能なより多くの語彙を獲得し、予期された出会いにおいて語り合うことが想定される、ロシア語を全く解さない子供や女や老人らのために、さまざまな成句や設問を「アイヌ語で」作成しました。

一九〇三年

一九〇三年一月二日、さらにセラロコまで赴き、同地と、その至近の2村——マヌエとオガコタン (Ogakotan) と記されるも誤植。オハコタン (箱田) ——において、若干の民族学・フオークロア資料を「蠟管に」記録しました。

一月は、アイヌ学校の見回りと、コルサコクスへの私用の旅で明け暮れました。

二月一日、アイ村に帰宅後、二月十五日までアイヌ語の実践的学習を継続しました。この間には、ロシア語を比較よく話す十六才の青年を紹介されて、それまでは成功しなかった昔話の逐語訳を初めて試みました。よしロシア化したとはいえ、ロシア語をたどたどしく操る通訳たちは、個々の単語でなくて纏まった語句全体の意味を伝えるのが通例で、昔話の全体の筋を、直ちに語ろうと努めることさえ珍しくありませんでした。私の通訳は二月十五日、親族に呼び戻されて去りました。多少とも長期間、金銭で自由にできるような人を見つけるのは概して不可能でした。漁撈の季節と猟期につい

ては言わずもがなですが、冬場ですら、橇による郵便物や私人の貨物や乗客の輸送、暖房用の薪の運搬など、仕事は山ほどありました。冬にはまた老人や熟年者らによる遠方の村々への旅も実施され、若者らはそれに同伴するか、あるいは家に留まりました。したがって、私はルレ村の氏族長家族の招待を喜んで受け入れると、その日二月十五日のうちに、昔話や「英雄詞曲」の翻訳を続行するという格別な目論見を抱いて、同村へ向けて出発しました。「英雄詞曲」の特殊言語「所謂「雅語」」を弁える人はごく僅かで、ほとんどの場合はこれらの歌謡を暗誦できる人たちでした。

三月一日、再びアイ村に戻り、四月二十三日までそこに留まりました。その間は、以前に発注してあつた品々を受け入れながら、より流暢な会話の練習を続けて、ロシア語が全く通じない場所への旅に備えました。

四月三十日、アイヌの丸木舟で出発。東海岸伝いに南下して、オブサキ村「負咲」、オチヨボカ村「落帆、現レスノエ、トゥナイチ村」富内、アイヌ名はトンナイチャ、現オホーツコエ、アイルボ村（Ailuno）と記されているが誤植である。愛郎、現スヴォボドナヤ）を目指しました。これら村落の住民はこのとき鯨漁のために、ほとんど全員がトゥナイチに集結していましたから、私はこの露営地に最も長く留まって、昔話や伝承や「オイナ（神謡）」のうちに最も興味深いテキストを幾つか採録しました。それらの伝承者はほとんど専らトゥナイチに住んでいたからです。当地ではまた、アイヌと——鯨のペ粕や塩漬け樺太鱈といった漁獲製品を買い付ける——日本人漁業者との間に成立しつつある「新しい」関係をじっくり観察することができました。

五月十六日、私は疲れ果て、空き腹を抱えて同じ道を取って返しました。現地では米と、生乾しの「イトウ」以外は何も入手できなかったからです、それでも旅の成果には極めて満足でした。当地の人々は隣人の入植者たちの影響をさほど受けていません。ここでの生活は己の関心の閉鎖性ゆえに、より正常に経過していました。先祖たちの遺訓や幾星霜を経た伝承が、より純粋な姿で保存されています。当地では、東海岸の半ばロシア化した村々では遭遇する機会のなかった、

それまで未知の多くの人たちとも出会いました。鯨の群来（ぐき）が始まると、皆が余りにも忙しくなつて、もはや私に対しては注意も時間も割けなくなりましたから、それ以上の滞在は断念することを強いられた次第です。

同じ繁忙期はナイバ川の近辺に所在する村々にも、またロシア人入植地区にも到来しました。私はナイブチ哨所の倉庫監視官宅に落ち着くと、6露里離れたサカヤマ村「榮濱、現スタロ・ドゥブスコエ」へほとんど毎日のように急行しました。同村の周辺では五ヶ村（サカヤマ、タコエ、シャンツィ、ナイブチ、アイ）のアイヌらが鯨を獲っていたからです。たまには、サカヤマ南方7露里に立地するルレ村までも足を伸ばしました。私は、アイヌの経済的生活基盤である主生業の現場に赴き、幾つかの漁撈組合について、その仕事ぶりをつぶさに観察しました。私には組合員らとその惣代の間の内部的相互関係や、「巡回吏」と称する下級漁業監視官による監督体制の実態が明らかとなりましたが、「巡回吏」らの収賄沙汰については日本人からも地元行政府からも、またアイヌ自身からもういやというほど聞かされました。漁撈の技術的側面や、粕の製法、そしてまた漁撈と結び付いた俗信や儀礼も調べ上げました。一九〇一年にアイヌたちへ貸与されたこれらの「共同体漁場」は物質的豊かさを増進し、雇用された労務者から自立した企業主へと彼らを変身させただけにとどまらず、その自意識も覚醒させ、総じて高度な文化水準に到達する希望までも惹起しています。

当地ではまた、北海道から帰郷した——サハリンでは所謂「イスカリ・アイヌ」「日本語では「対雁（ついしかり）アイヌ」と呼ばれることもある」と称する——アイヌたちの具現する異常事態の生きた実例とも遭遇しました。これは、一八七五年に島の南半が日本からロシアへ引き渡されたあとで、アニワ「垂涎」湾——一般には島の南部——から北海道島へ移住して、あちらでは石狩（Ishikari）川の河谷に入植させられた出国者たち、あるいは彼らの子供たちです。時間の経過とともに、これら亡命者の少なからぬ人々は故郷へ舞い戻つて、近親者の許に身を寄せていますが、私が実施した初めての人口調査によると、

法の保護の埒外に置かれているこれらの人々の総数が、一九〇四年には（子供たちも含めて）男102人、女は101人に達していました。漁業監視官らはしばしば、地元アイヌと同一条件下で何年も支障なく暮らし、親族の絆でも結ばれてきたこれらのアイヌを、「共同体漁場」での就労は禁止され摘発もされている外国籍労務者として処遇しました。この——それでなくとも人生であまたの苦難を強いられた「イスカリ・アイヌ」にすべての重荷を背負わせている——錯綜した問題に関しては、私がすべてのデータを提起したあとで、地元政府が同問題の結着を「上級機関」に上申した結果、戦時下ではありましたが、サハリン帰郷後5年以上が経過した「イスカリ・アイヌ」は、もし本人が希望するならばロシア国籍者と認めるべしとの、地方最高権力者「『プリアムール総督』」の裁可が下されました。

六月六日、コルサコフスク哨所へ向けて出立。当地では、テルペニエ「多来加」湾へ赴く漁業者の蒸気船に便乗して北のアイヌとオロツコを訪ねる旅の準備に着手し、そこからの帰還は八月末か、はたまた冬すらも想定していましたが、北海道でのアイヌ調査に参加するよう求めるシエロシエフスキ（V. L. Sieroshevski）の招請状に接したあとは、事前に取り交わした約束をすべて解除して、新しい旅の支度に取りかかりました。東海岸へ赴いて物資を注文し、日本語を弁えるアイヌの通訳を確保し——彼はその後、われわれにとつて頗る有益であることが判明しました——、六月二十日、北海道へ向けて旅立ちました。

われわれの旅が、ロシアに反発する日本人の熱狂的興奮と、弛みない戦争準備の時機に際会したとはいえ、この三ヶ月が私に与えた利益は膨大でした。北海道アイヌとのより親密な直接の交際は私に、これまでに触れられたことのない多くの問題を提起しました。温和な気候、よりやさしく抱擁する自然、全状況の斬新さ、より正常な社会状況、——粗野と低俗の横溢するサハリンの生活環境からはほど遠い——日本の生活様式の及ぼす概して魅惑的な影響、そして何よりもまた

W・シェロシエフスキのように老練な民族学者との共同調査は、そのすべてが私を頗る勇気づけ、生き返らせてもくれたから、新鮮なエネルギーを注入された私は、恐怖・犯罪・苦難の待ちうける陰鬱なサハリンに戻りました。

九月二十四日、コルサコフスク哨所に帰着し、二十九日には、注文してあつた物品を引き取るべくアイ村へ出発しました。十月十四日、すべての物品をコルサコフスク哨所まで運ぶと、十月末にはそれらを箱に梱包して、義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号へ引き渡しました。コルサコフスクには、最後の（日本の）汽船が出港する十一月二十九日まで留まりました。このときは主として、北海道島で採録したアイヌ語テキストの翻訳に従事しました。私にとって未知の多くの単語の意味は、現地でアイヌ語の発話が日本語でも説明されていきましたから、今度は旧知の教養ある日本人らの協力を仰いで、それをロシア語へ翻訳せねばなりませんでした。けれども、そのような単語の大半は——北海道で暮らして、アイヌたちと頻繁に接触する日本人だけが理解する方言で——アイヌたちによつて口述されたわけですから、意味を掌握するのは中々大変でした。コルサコフスク哨所では商人の使用人や、日本領事館で遭遇する日本の平民や北海道島の先住和人らが、私の質問攻めとなる破目に陥るのでした。

私はこの頃、アムール流域のマリンスク近傍から渡来した3名のオリチャ（マンギン「現ウリチ」）と出会いました。彼らは自らを「ナニ（*nanu*）」——アイヌは彼らを「シヤンタ（*shima*）」——と称しますが、あちらからロシア人商人らと共に毛皮を買い付けるべくサハリン南部にやって来たのです。彼らの面識を得ると、自由時間に行われた懇談を通して彼らの風習や、往時と昨今における彼らとアイヌの関係から何がしかを聞き出すことを試み、また2000語弱のオリチャ語と数点の謎々も採録しました。

十一月二十九日、東海岸のナイブチ哨所へ赴き、来たるべき冬に向けて、自らも教鞭を執る寄宿制アイヌ学校を当地に

開設することに努めました。知事代行として島を統治しておられたF・F・フォン・ブング氏からは完璧な共感を忝くし、先払いで再び200ルーブリを受領しました。課業は私の到着直後に開始されて頗る順調に経過しました。にもかかわらず進行中の戦争が、アイヌの間に読書を普及させるという私の最初の試みを挫折させて、残念ながら多少とも明らかな成果を生むことはありませんでした。

十二月七日、タコエ村へ赴き、八日と九日はそこに滞在して熊祭りに参加し、昨年の見聞を補填しました。十日には、近日中に予定される狐の殺害祭祀「所謂「狐送り」」の準備のため、日帰りでアイ村を訪ねました。いまだ春のことでしたが、私は一組の若狐を購入して、アイヌの間ではもはや頗る稀にしか挙行されなくなった「狐送り」の、全儀式次第を見届けるといふ格別な目論見で、その飼育方を私の前家主に託してありました。最後の祭りが実施されたのは十年前のことです。十八、十九、二十日には、客人らへの振舞い、踊り、2匹の狐の殺害、そして、それに後続した狐の頭骨の森への搬出といった、すべての祭祀に立ち会いました。二十一日、半ば忘却された祭りの全儀式的観察をやはり希望したすべての生徒らとともに、ナイブチに戻りました。

一九〇四年

一月七日、真冬に予定されている、さまざまな神々へ向けた「イナウ」の建立祭祀の準備作業に立ち会うべくオトサンへ赴き、一月九日には帰宅しました。

通常の日々は、学校で過ごす子供たちとの課業、検証済みの単語を素材としたカード式辞書の作成、テキストの翻訳とその清書、そして——ナイブチ哨所から毎日のように、あるいは通りすがりか、わざわざ来校して授業の様子を見学すべ

く立ち寄ってゆく数名の「アイヌ」男女との懇談の際に——たまたま入手できた新情報の収録で明け暮れました。二月五日、地元当局から呼ばれて、シヤンツイ村へ赴かねばなりませんでした。当局は日本への宣戦布告以降コルサコフスク管区内に開設される予定の、400床を擁する野戦病院の監視官就任を私に求めています、今回は三度目の要請でした。私は、約束された報酬よりも貴重である己の仕事を、可能な限り中断したくありませんでしたから、私に寄せられた信頼と名譽は謝絶した次第です。三月末までは同じ地区に留まって、シヤンツイ、ナイブチ、オトサンを歴訪後は、アイ村で過ごしました。学んでいた生徒らのほとんどは、親たちが自宅に引き取ってゆきました。危機の時は一緒にいて、一つ時に死にたいものだ、と私に告げた親もいました。実際に危機が到来すると、全員がすっかり動揺したかのようにも見えました。戦争に関する問題が皆を熱くさせて、それぞれは一日の半分を、戦況やサハリンの命運をめぐる予想に費やすのでした。まさに一週間後か、明日か、ひよつとすると今日にでも日本人の到来はありうることを、ほとんど全員が確信していました。上陸はすでに行われたと喧伝する風説もあまた飛び交いました。サハリン南部の諸漁場やコルサコフスク哨所自体には700名弱の日本人が残留していました。多くの人々は、彼らの側からの攻撃や蜂起を懼れていました。彼らを武装解除するための出動も繰り返されました。もはやより非公然ながら、住民全般をさらに混乱させる不安や不穏な噂を少なからず惹起したのは、懲役囚や、住民と懲役囚の両方で組織された義勇軍団をめぐる問題でした。同軍団は、最悪の犯罪者分子から掻き集められた部隊が主力でしたから、ほとんど信頼されていませんでした。さまざまな声が聞こえたものの、ほぼ全員が密かに、これら義勇軍団は間もなく武装した徒党と化すだろう、そして敵が到来した暁には、はたまたその前ですらも、非戦闘員やサハリンの領土を防衛すべく召集された側からは略奪、凌辱、殺戮が始まるだろう、と考えていました。東海岸に沿った人の動きは十倍になりました。食料が搬入され、また搬出されますし、さまざまな部隊が行き交い、

土地の偵察や査察の使命を帯びて往来していましたが、その後には、すべての日本人のコルサコフスクへの集結も開始されて、全員が一人残らず祖国へ送還されたはずです。このような混乱の中での生活は耐え難いもので、平静な仕事など一切考えられませんでした。アイヌたちは、同じ空騒ぎに引き込まれるか、馬鹿げてはいるものの常に恐怖を覚えさせるロシア系住民の会話によって、他方ではまた間違いなく実在した——日本による早急の勝利とサハリン全土の奪取をめぐる——「在留」日本人らの「刷り込み」言説や断言によっても恐慌をきたしていました。何らかの慣習や表現の意味、そしてその詳細をめぐって平静な対話を交わし、説明を求めることなどは論外でした。過去を振り返るか、現実から離脱するところまで、智恵が回りかねたからです。明日はどうなるだろうかとの問いに直面して、痛ましい問題や恐怖から逃れられた者は皆無でした。私は東海岸の北へ向けて出発を急ぎましたが、当面は誰かの協力を得て少しずつテキストの翻訳に従事する好機を模索しつづけました。たまたま遭遇した帰路途上の犬樫隊に託して物資の大半を送り出すと、——サハリンの森林記載のために派遣されたものの、戦争のせいでハバロフスクに呼び戻されることになった——友人の林務官「I・D・シレデルス」の到着をひたすら待ちました。

三月三十一日、私たちは日の出前に橇でアイ村を発ちました。すでに解氷の始まった幾つかの小川は、歩いて渡る必要がありました。オガコタン「オハコタン」、箱田村以遠は橇で海岸に沿って進むことは不可能でした。夜の冷えこみは取るに足らず、雪も残りませんでしたから、モグンコタン「馬群潭、現ブガチョヴォ」の山々を走破する旅では、水嵩を益々増してほとばしる溪流を幾度となく越すことになりました。ヴァリ「輪禮」輪荒（ワレー）の漁場で一泊し、多くの流水を接岸させた海風が風向きを変えるまでさらに一日待機したあと、四月二日には2艘のアイヌ舟に乗り組んで先を急ぎました。四月三日、アイヌのフヌップ村「匪仲」に立ち寄って、交代の漕ぎ手と舟が確保されるまで一日の休息を取りました。私は当地で堅穴

住居——とはいえ、アイヌらはすでに夏の幕舎に引っ越していましたが——と初めて遭遇しました。四日は、塩漬け樺太鮭用の半壊した納屋の空き家で一夜を過ごすこととなり、五日にはナイエロ〔内路、現ガステロ〕に到着。通常は頗る荒れ模様のオホーツク海も、この時節は僅かな距離ながら離岸していた大量の流氷群のお蔭で、完璧に平穏な舟旅でした。悩まされたのはただ、狭い小舟における身動きもままならぬ姿勢と高湿度の寒気です。毛外套と暖かな冬靴にもかかわらず骨身にこたえました。道中では、通過する土地の地理的名称をすべて記録しましたが、その幾つかについては頗る興味深い伝承も聴取しました。この旅では、海と関連する若干の俗信と、海では別の呼称で代替される一連の禁詞に関する情報も入手しました。

四月六日、ナイエロを出発した私は、いまだ強靱で分厚い積雪で覆われた平坦な海岸伝いに橈を走らせて、ポロナイ川の河口近くに立地するチフメネスク哨所〔敷香、現ポロナイスク〕に至り、当地では仮の住居を確保する心づもりでした。私が到着した時期は、アザラシ猟の最盛期に当たりました。当地ではアザラシが、岸边近くを大量の流氷が浮遊する春に捕獲されて、地元異族人の毛皮や獣脂に対する需要を満たすのみならず、以南の西海岸や内陸部のティミ川流域に在住する異族人にも同様に提供されていました。狩猟には、テルペニエ湾岸地区で暮らすアイヌも、ギリヤーク〔「ニクブン」〕とも称された。現ニヴコも、オロツコも従事していました。多くの猟師は、集落から遠く離れた湾の東北部、テルペニエ〔北知床〕岬方面まで出猟して二〜三週間、はたまた一ヶ月も狩りを続けていました。自宅に留まる人々は、穏やかな天候に恵まれるや舟を繰り出して、数昼夜も流氷の間を徘徊していました。風波が海へ出ることを許さぬときですら、全員には、脂肪肉の切り捌きや煮沸、毛皮の枠張りや乾燥、舟や銛の調整、鉄砲の手入れ、食料の備蓄、衣服の修繕など、仕事に不足はありませんでした。女たちも、これらの仕事に参加するか、男衆の代わりに薪を割って運搬し、また犬の給餌も担当し

ますし、日常的雑事や子供の世話をめぐる本来の仕事はむろん十分過ぎるほどありました。したがって、アイヌらは私に對して、急を要する仕事から解放されて然るべく協力できるようになるまでは、足繁く通つて来ないよう釘をさしました。

四月二十二日、チフメネスク哨所の南方18露里に所在するアイヌの大村ナイエロへ赴き、五月四日まで滞在しました。同村とその後の方ライカ村「東多来加、現ウスチエ」における私の滞在は、短期間に極めて貴重な資料を大量にもたらししました。当地のアイヌたちはその慣習と伝統を最も純粋な姿で保存しており、そのことを常日頃から強く誇つていますから、この点における己の優位性は、私に對しても一再ならず力説していました。彼らの言語はより荒削りながら、字母・音節の省略や脱落の少ない点など、多くの特異点があります。隣人のギリヤークやオロッコの影響を仄めかすような見解も聞かれました。当地はさほど活気ある場所ではなく、ロシア人もごく僅かです。生活様式の全貌は、異質で一面的な文化や、野蛮で過酷な習俗を携えた白人渡来者が、樺太島の自然児の精神世界へ大混乱を招来した頃を、むしろ彷彿させることが判明しました。われわれを南とも北からも断絶させた泥濘期は、たとえどんな人物にせよ一切の新規の到来を妨げていました。若者はほぼ全員がいまだ獵に出払つて不在でしたから、尊敬すべき老人たちとの對話は、誰に邪魔されることもなく続けられて、朝から遅い夕刻にまで及ぶことも珍しくありませんでした。以前にもしばしばあつたように、当地でも、十分に整備された對話環境や、そのような場面で重要な意味を有する對話者の気分といった、適切な頃合いを逃さぬことが肝心でした。夜を徹して活発な話が絶えぬような日もありませんでしたが、その反対に、数日をかけながらも決定的な觀察の機会には恵まれぬような事態も決して少なくありません。アイヌらと私の関係はすでに確立されていまして、彼らの間では私が久しく待望された賓客でした。率直な会話が不愉快な結果を招くような不信や恐怖は、まして私はすでにアイヌ語でかなり自在に自己表現が可能でしたから雲散霧消してゆきました。因みに当地では、山々の神に慈悲心を起こさせる

べく、ある家族の獵師らは何年も遭遇することのなかった熊との出会いをねだるべく、同神へ犬を供犠する祭祀に列席することもできました。

五月九日、早朝にポロナイ川の河口から小舟で出発。まずは海路を、次いでポロナイ川を遡上して、夜には最北のアイヌ村落であるタライカに着きました。近年に創設されたナイエロ村には、かつて大人口を擁したタライカ古村の出身者が主として入植したとはいえ、タライカ・アイヌを他のアイヌから区別すると皆が口を揃えて語るような独特の諸特徴を、ナイエロのアイヌはすでに幾許か喪っています。十九世紀前半に日本人が東西両海岸のアイヌたちに課した農奴制的軛に對して、完全な自立を保ったのはタライカ・アイヌだけでした。南からの逃亡者らが、日本人漁場における強制労働を嫌ってこちらへやって来たのだ、と当地では誇り高く語っていました。タライカ・アイヌらは己を最も勇猛果敢と見做し、当地で展開されたオロツコとの苛烈な戦については自ら進んで語り、万が一喧嘩するに値する重い動機が出来するならば、一戦を交えることも辞さぬ……とも付け加えます。ギリヤークとは昔から頻繁な交際を続けてきましたから、両者の間には親族関係さえありました。どんな問題であれ、もし私がここで詮索しようものならただでは済まぬぞ、とアイヌらに警告されました。事実、この村の有力者で、己の村での滞在で私を満足させることに全力を傾けてくれた友人の懸命な尽力にもかかわらず、全員と腹藏なく話ができたわけでは決してありません。のちになって判明したのですが、氏族長はねたみから、そして恐らくは保守主義からも私に腹を立てて、私の友情をむやみに信用せぬよう、アイヌらに警告していました。彼によると、その友情はアイヌらの考えを改め、ゆくゆくは彼らをかどわかつて異国、つまり私の祖国へ連れてゆくのが目的のだそうです。若干名の私に對する関係の緊張が原因で、私の「チチェローネ（道案内）」は、彼の敵たちが父祖の慣習の侵害と見做すようなことは一切差し控えるよう命じました。私は、これらの土地で随所に見出される「トンチ

「Tong」の住居址を試掘する予定でしたが、それは断念せざるを得ず、土器片の表面採集だけに留めました。これまでもセラロコ村の近辺では、数年前に完形の壺が発見された陥没孔周辺の多くの場所で発掘を試みたことがあります。同じセラロコでは、古い墓のほとんど表面に露出するアイヌの頭蓋骨2個を採収し、「サンクト・ペテルブルグの」科学アカデミーへ送付しました。私はいつもアイヌらの世話になっていて、彼らは片時も傍を離れませんでしたから、自分では墓標も頭蓋骨も入手できませんでした。アイヌたちから寄せられるようになった友情や信頼を大事にしていまして、彼らの信頼を根底から揺るがすようなことは何もできません。それにまた、心から同情を禁じ得ない人たちを悲しませることも、辛くてできませんでした。私がタコエ村を初めて訪問し、隣接する官営製粉所の監視人に付き添われてアイヌの墓地を訪ねたとき、灌木や切り株の蔭に身を潜めながら私を見張りつづけたアイヌの姿が忘れられません。私に促されて姿を現したアイヌは、墓地へ向かう姿を目撃した女たちから、われらを見張るよう命じられたと説明しました。彼らは全員が、墓を掘り返すというロシア人の性癖を承知していて、死者の遺骨に対するこの不敬行為にはひどく憤慨していました。数ヶ月後のことでしたが、ロシア人に殺されたギリヤークのすでに埋葬された遺骸を、地元判事が掘り起こそうとするや、彼の母親である老女は大声で、墓を侮辱することは許さぬと叫んで、今にも両手に抱えるナイフで自殺しかねぬ風情だったことを、同判事から聞かされました。科学アカデミーの民族学博物館へ送付した墓標は、私の依頼でN・V・キリロフ医師がマウカ村で入手したものです。

五月十四日、私の友人とともにオロツコたちを訪ねました。彼は私に協力して、己の友人であるオロツコのシャマンと引き合わせることを約束していたからです。シャマンは、広大無辺なタイリカ「多来加、現ネフスコエ」湖の向こう岸に所在するヴァリザ（Valiza）村に住んでいました。けれども、私に全幅の信頼を寄せるアイヌの推薦の辞や賞賛は余り役に立ちま

せんでした。私のあらゆる保証や説得にもかかわらず、私が立ち会う所での巫儀の執行にシヤマンは応じてくれませんでした。巫具さえ、小舟でやって来る私の姿を認めるや、すべてを入念に秘匿したことは明らかで、目立つ所には、むしろ誰にも読めない福音書が吊り下げてありました。家長は時刻を通して黙りこくっていましたが、私の道連れは彼の心を変えるには余りにも無力でした。どうやら私は、聖職者や官吏と同格の旦那と見られたようでした。

翌日、やはりタライカ湖岸に立地するオロツコのムイガチ (Mujachi) 村に赴きました。オロツコらは一人残らず森へ姿を消して、出迎えてくれたのは、オロツコ女を娶ったギリヤークただ一人だけでしたから、オロツコの生活に関する最初の情報はこの家族から聴取しました。時刻にはすでにタライカ村の宿に戻りました。「地元医」を自称するシヤマンで、数年前にアムール流域から移住してきたオリチャ (マングン) の老人も、巡回から戻ってきました。私は巫儀に招待されて、若干の説明も受けましたが、出立の前になつて、私は神々の庇護下に入るから、私の旅は幸せな終わりを迎える……ことを知らされました。

五月二十日、鯁漁が始まり、私は厄介者となりましたので、ポロナイ河口から数露里上手の左岸でギリヤークとオロツコが雑居する大村ソチガレ (Socigare [Socigare/Seoke] と称し、日本統治下の左知、現ユージヌイ) へ徒歩で向かいました。転がり込んだ先は、私の古い友人で、ティミ河谷から8年前に移住していたギリヤークのカンカ (Kanka) の家でした。彼の協力を得て、そしてまた彼の保証のお蔭で、オロツコ全員を襲っていた私への恐怖は消えてゆきました。オロツコは洗礼を受けた部族としてサハリン防衛の隊列に加わる義務があり、私は、武器を担う能力を具えた者をすべて調べ上げて、名簿を作成するためにやって来たのだとの噂を、誰かが恐らくは冗談半分で言い触らしたことが判明しました。私がチフメネスクに着いたその日からオロツコと出会う度ごとに認めた、私には不可解だったあの敬遠や、あらゆる対話に対する恐怖は、

まさにここに発していたのです。古い友人であるギリヤークのカンカは、初日勿々に己の親戚である一人のオロッコに紹介してくれて、アイヌの言によると「鴉のように臆病なオロッコたち」も、ほぼ全員が間もなく私を訪ねて、宗教的話題ですら臆することなく、あらゆることについて語るようになりました。同村で暮らす女シヤマンは私の許で幾度も巫儀を執行してくれて、若い女の成巫儀礼という極めて興味深い儀式にも、私は列席しました。

五月二十一日、私のタライカ村からの帰還までわざわざ日延べしてあつたアザラシ祭祀が、「ツチガレ村」実施されました。祭祀は、川岸に沿つての「イナウ」建立と、直前に終了したばかりの猟期中に仕留めたアザラシの頭骨——これに数種の植物と小「イナウ」を詰めたあと——の水中投下で構成されました。夕べには賑やかな舟漕ぎ競走が実施されて、川岸の随所にはすべての村民が銘々に陣取つて、この光景を見物していました。備蓄食料はすべての家で完璧に底を突いていましたから、御馳走のもてなしはありませんでした。但し、カンカにだけは私が持参した米がありましたから、全村を代表する供物として、米を水中に投ずることができて、残りの米はのちに自分の家族とともに平らげました。五月二十二日、同様なアザラシ祭祀や、熊へ向けた犬の再度の供犠、檻で育てた仔熊の犬歯切りが執行される予定だったナイエロ村へ、徒歩で赴きました。ナイエロには六月一日まで留まつて、これらすべての儀式に列席し、——当地では南の鯨に相当する、犬の主たる越冬用飼料の——キュウリウオの捕獲と備蓄加工の過程を観察し、若干の伝承と民族学情報も収録しました。

六月一日、ソチガレに戻り、ギリヤークとオロッコの間で暮らしながら、オロッコ語小辞書の執筆を開始し、オロッコの氏族構成の概略を把握し、オロッコ・コレクションに加えるべき標本のリストを作成しました。オロッコたちは新しい文化形態へ驚くほど容易に順応してきました。元来はトナカイ飼育民だった彼らが、トナカイを失うやギリヤークの生活

様式を採用したのです。トナカイ飼育民のツングース〔現エウエンキ〕が来島すると、彼らは再びトナカイを飼育し、ツングースの衣装を採用し、はたまたツングースの影響で洗礼さえも受けました。彼らは今や、己の旧来の生活用品を丸ごと打ち捨てて、全員が購入品づくめの生活を営み、衣服ではロシア式裁断を取り入れようとこれ努めています。オロツコはサハリン異族人の間で最も物分かりが悪いと、アイヌもギリヤークも見做しています。あるアイヌの説明によると、オロツコらが私を敬遠するわけは、面白そうなことは何も語れず、伝承も昔話も歌謡も自前のものは何一つなくて、幾許かは近年になってツングースから拝借したに過ぎぬと承知するから、私に引け目を覚えてのことだそうです。確かに、彼らの間では古俗に通曉した物知りとは一人も会えませんでした。ソチガレ村において数少ない知人たちから聴取できた情報は断片的で、いまだ頗る不十分なものでした。当地では年老いた人々が、アイヌのようにには權威を有さず、オロツコらはギリヤーク同様に自らの争議の裁定を、すでにかなり自発的に行政府やロシア人の有力者に委ねています。私は当地で、紛糾した離婚案件の判事となるよう要請されましたが、細君は自由を克ち取り、夫の方は——彼女に対してもはや何の愛着も覚えていないのに、まさにそのために彼女を無理やり引き止めていた——「持参財」の大部分を受領するという形で、円満な解決を見ることができました。

その頃ようやく機が熟して、ティモフスク管区へ赴き、そこに一夏滞在することを決断しました。鮭の遡上開始とともに、テルペニエ湾でも南と同様に騒々しくなりました。毎日のように、船影が見えたとか、どこかで漁り舟や上陸する日本人らを見かけたとの風説が飛び交いました。防御されていない土地への接近を敢行し、魚を獲って引き揚げてゆく懼れのある漁場荒らしへの危惧には、あまたの根拠がありました。日本では魚価がひどく高騰し、密漁者のスクーナー船がすでに西海岸には出没していました。テルペニエ湾は鮭鱒類の資源量でも、またその品質でも、サハリンの他地方を凌駕し

ています。カムチャツカへ向かうスクーナー船が、たまたま接岸するという事態もあり得ますが、カムチャツカへは、日本人らが宣戦布告後に語っていたように、すべての密漁船が魚を求めて押し寄せているからです。チフメネフスクとその地区に留まるのは、当地が食糧を欠くことから根拠がありませんでした。ナイエロ村とチフメネフスクの住民の「日本人残留者たちは南へ去ってゆきました。生活必需品やあらゆる商品は、毎年五月後半に日本から来航する漁業用蒸気船が運んできました。今はもはやすべてが尽きようとしており、蓄えが補充される見込みは皆無でした。鮭鱒類の漁期が到来して、すべての土着住民は、それを鮮魚として売却すべき相手が不在のため、「ユーコラ」(二枚におろして天日干しされた「乾製魚」)への加工作業に専念するよう指導されました。このように熱した繁忙期に誰かを活用することなど、夢想だにできませんでした。

六月十三日、別の小舟に乗り組んだオロツコたちを伴って、ギリヤークの小舟でポロナイ川を遡上する旅に出立しました。オロツコらは私の支援を得て、自由販売から除外された火薬・雷管・散弾や小麦粉・米など、要するに、チフメネフスクでは連日のように高騰し、はたまた「ヂカーリ(野蛮人)」——当地では気性の荒いロシア系住民が異族人をそのように総称します——には販売すら全くされぬような物品全般の買付けを期待していました。湾曲に富み、上流部では危険な逆茂木とも頻繁に遭遇する、荒れ模様のポロナイ川を遡るわれらの旅は、十三日から二十四日まで長引きました。棹に頼る旅のしんどさ、サハリンの夏の風物詩である蚊や蚋の襲来、停泊時には掛け小屋の設営や薪集めのみならず、——われらにはほかの食料がありませんでしたから——魚の捕獲にも従事することの必要が、この時間を有益に過ごすことを妨げました。にもかかわらず道中では莫大な苦心の末に、最初で唯一のオロツコ語テキスト(昔話1篇、歌謡2篇、若干数の謎々)を口述してもらうことに漕ぎつけました。二十四日、全員が徒歩でウウトノエ村(ポロナイ河畔)から三十露里を踏破して、

「ティミ河畔の」オノール村にたどり着きました。オノールでは、地元医師の歓待を受けて七月八日まで滞在し、英気を養いつつ旅の記録の欠損部を書き足しました。七月十三日、ギリヤークのウスコヴォ (Uskovo) 村へ赴き、その後は小舟でティミ川を下って、ハジリ・ヴォ (Hazi'-vo) 村とスラヴォ (Slavo) 村を訪ねました。両村には私の古い友人のギリヤークたちが最も多く集まっていたから、幾許かの時を彼らとともに過ごすことにしたわけです。

「スラヴォ村では」氏族で最年長のフイムカ (Finka) 長老の家族の、小ざっぱりした夏用の弋上家屋に泊めてもらいました。同長老とは幾久しく極めて親しい関係が成立していました。当地には八月九日まで滞在しましたが、一度だけはティミ川を下って、より下流のコムルヴォ (Komvo) 村、チリヴォ (Čirvo) 村、プロヴォ (Povo) 村、ウルンクル・ヴォ (Yrnkr'-vo) 村を歴訪する旅も試みました。この時期のティミ流域はどこも頗る僅かなギリヤークしか残っておらず、大半は西海岸で魚を獲っていましたが、日本人らが現れた際に起こりうる紛糾を慮って、「東海岸の」ヌイ (Nyi) 湾へ避難した者もいました。スラヴォ村の若者の何人かはほとんど在宅せず、官用貨物のアドウ・ティミ (Ady-Tym' [Ado-Tym' とも記される。現アド・ティモヴォ]) 村へ向けた小舟による搬送に携わっていました。したがって、過ぐる歳月来私の所持するギリヤーク語テキストの翻訳への支援は、遅々として捗りませんでした。旧友である女主人の老女は私に民俗医療を詳述し、また自分の記憶する古俗についても語ってくれました。アイヌをめぐる諸伝承と、ギリヤークらがアイヌに関して承知することは、すべてが私の格別な関心を惹起しました。何らかの巨大動物の骨が存在すると伝えられるアドウ・ティミ近傍の山々を視察することも希望していました。この伝説は、あるギリヤークから十年前に聞いていましたから、今はこの謎の骨を探索しようと思ったわけです。しかしながら骨の实在をめぐる証言は、今回出会ったギリヤークらの間では僅か2名からしか得られませんでした。したが、両名はティミ流域に暫時滞在しただけで海辺へ急行しましたから、彼らの支援を得ることは叶いませんでした。

この方面における私の計画はかくてことごとく挫折したわけですが、骨をめぐる事情聴取は、スラヴォ村とアドウ・ティミ村のほぼ中間地点のティミ河岸における貝殻化石堆積層の発見をもたらしました。これは私の承知する限り、サハリンの内陸部において化石の存在が確認された最初の事例です。これらの化石を数ブード採集して、一部をサハリン博物館長のR・A・ポガイエフスキー（原文では[Počajevskij]と記されるが、誤植である）医師へ届けましたが、残部はギリヤークのフィムカの納屋に――戦争終結の晩にはそこから取り出し、ペテルブルグとウラヂヴォストクの博物館へ引き渡すことを期して――預けてあります。鮭の遡上が始まり、勤労の時節が到来したので、スラヴォ村をあとにしました。

八月十日から九月一日まではリュコフスコエ村に滞在し、目下進行中の諸事件と将来に予想される諸事件を勘案しつつ、現況と今後の計画について相談し、また熟慮も重ねました。南における極めて騒々しい事態が、冬までのティモフスク管区待機を私に決断させましたので、一人のアイヌを呼び寄せて、このアイヌと、冬場にしばしば到来するオロツコらを雇うつもりでした。九月二日、そのためにオノール村まで赴き、ソチガレ村のギリヤークに預けてある物品類をこちらへ送り出し、またいずれかのアイヌも派遣するよう打電しました。品物は間もなく届きましたが、このような辛い日々に見知らぬ土地へ赴くことを望み、近親者らを見捨てる覚悟のある者は、南や北のどこにも見つかりませんでした。そこで私は計画を変更して、チフメネスクへ向けた南への復路の旅支度に取りかかりました。あちらではもはや、例えば小麦粉・米・バター・砂糖・茶・煙草・石鹼など、生活必需品は全く入手不可のようでしたから、これらすべては私自身のみならず、かわりを持つことになる人たちのためにも用意せねばなりませんでした。

九月二十五日、物資の買付けがてら、沈没した戦艦「ノヴィク」号の水兵の数部隊を案内してきた二人のアイヌに付き添われて、アイヌらの在住する領域へ向かう復路に出発しました。二十六、二十七、二十八日、猛烈な台風と集中豪雨に

遭遇して、ロシア人のアブラモフカ村（オノールから22露里）に足止めを余儀なくされますが、その際に展開された賑々しい懇談は、私の野帳の数頁を頗る興味深い記録で埋めることになりました。九月二十九日、一艘の漁り舟と、われらに合流した三人の農民が乗り組む小舟は、川の増水と勢いを強めた奔流にもかかわらずポロナイ川を下りだしました。至近のウウトノエ村に行き着かぬうちに、われらの舟は水面に突き出た倒木の切り株に激突しますが、楫の近くに立つアイヌの機転のお蔭で、大きく傾いた漁り舟は辛うじて平衡が保てました。われらの舟はいや増す浸水に耐えかねて、数分後には沈みだしました。幸いなことに、今一艘の舟は近くにいましたから、大事に至る前に、われらの舟を可能な限り岸辺の浅瀬へと誘導してくれました。われらの数分前には同じ場所で、電信技士の家族が乗り組む漁り舟が転覆し、細君と3名の幼児は溺死しましたが、夫と数名の労務者は岸まで泳いで助かりました。この怖い場面に圧倒されて、皆は川の水位が下がるまで待機し、その間はびしょ濡れの品々を乾かすことにしました。九月三十日から十月二日まで、ポロナイ川では最南端のグロヂェコヴォ村の農家で過ごして、書籍や野帳や肌着などを干しました。翌三日、われらは舟を先に進めましたが、その際に私は、たまたま通りかかったギリヤークの舟に乗り換えしました。海上でより勇敢な漕ぎ手であるアイヌらよりも、溪流での操船に熟達したギリヤークたちの方をより信頼したからです。

七日早朝、チフメネスク哨所に到着。オロツコもギリヤークも全員が狩猟のために四散し、出払っていて、近場にはその姿が見当たりません。したがって、私はナイエロ村の地元監視官宅の小ぶりの部屋に止宿して、アイヌの幕舎を歴訪し、訪ねてくるアイヌたちは自室で応接しました。すべての成人男子が猟に従事していました。そこでアイヌの最年長者に対し、幾つかの祈りを口述してくれるよう申し入れました。それまでは、この方面での私の努力が徒労に終わっていたからです。若者らはそれを知らず、年長者らは踏ん切りがつきませんでした。それができるのはただ、十分に高齢なため働か

ず、狩りにも赴かず、蟄居している者だけだと皆が断言しました。そのような高齢のアイヌはほとんどがすでに耄碌していましたが、ただナイエロでだけは私の目的にとつて幸いなことに、言われたことが的中しました。当地では、女たちの口述する恋歌2篇を密かに筆録しました。至るところで彼女らは、それは淫らな歌で歌い手の墮落した性格を証するものだ、というアイヌの通説に支配されて断りつづけ、そんな歌は全く知らないと言断するのです。彼女らはまた、私がどこかで、ほかの人たちの前で読み上げて、自分らの面目を失わせるのではないかという懼れも抱いていました。私が同一の問題や同じ些事を検証し、補充し、さまざまな変異を掌握するべく、多くの人たちに重ねて訊ねていたことは、皆が承知していました。こうした状況は多くの人たちに、より自由な会話を差し控えさせることもありましたが、私と親しくなつた人たちだけは多くのことを、はたまた氏族や家族の秘密さえも打ち明け、微妙な問題にも答えてくれました。例えば、厳しい守秘義務を課されたとはいえ、二つの異なる部族——アイヌと日本人、アイヌとロシア人、アイヌと朝鮮人ないし「マンザ」「蛮子」、即ち、中国出身の労働者——の子孫と見做された人々の全員を網羅するリストを作成しました。集計の結果、アイヌら自身は、全人口の10%以上で、第1、第2、第3世代のいずれかにおける異なる血の混入を想定していることが判明しました。

われらを救出した際は、感謝の「イナウ」が儀式を伴って立てられ、それには私も参列しました。この時に収集した最も興味深いデータは、すべての大人のみならず子供たちさえも当該期にはその頭を占拠していた、狩猟と動物界にかかわるものでした。

私はテルペニエ「北知床」岬へ赴いて、アイヌの伝承によると天から降って来たとされ、隕石だったことが判明するやも知れぬ岩を眺め、また最後の「トンチ」らが暮らし、そこから舟を出して海の彼方へ去り、遂に戻らなかつたとされる場

所も訪ねることを計画したものの、成就しませんでした。アイヌとオロツコが一人ずつ同行する手筈でしたが、明らかにこの年は例年よりも早めに猟を開始したためか、恐らくはまた、その頃頻繁に出没した浮浪者に怖気づいてか、両名とも姿を現わさなかったからです。日本人らがどこかに上陸する懼れに対する危機意識は次第に薄らいでゆきました。戦場からの情報がここまでは全く届きませんし、コルサコフスクの知人からは、ポルト・アルトゥル「旅順港」と満洲のために日本は極めて多くの戦力を必要とするから、サハリン占領にさらなる部隊を割くのは無理だろう、と安堵の息をつかせる手紙も受け取りました。武装した志願労務者を組織して自前の責任で島を占領すると息巻く漁業者らの願望は、「日本政府がこれを許容せぬことがすでに明らかとなっています。むしろ懸念されたのは、日本が大陸とのあらゆる交通を遮断して、兵糧攻めでサハリンに降伏を迫る方でした。私は、猟期の終了を受けて再びセラロコとオトサンで計画されている熊祭りへ向けて旅立つアイヌらに同行して、南下することを決めました。ナイエロ村における熊祭りは、当地での米不足に鑑みて翌年まで延期されました。

十一月一日、当地に残るすべての人々に見送られて、5名のアイヌとともに一艘の小舟で出発しました。二日と三日はコタンケシ (Kotankes「古丹岸、現ゴリヤンカ」) 村に泊まりましたが、当地では年老いた家長のシトリキ (Sitrikki) がアイヌの過去についてあまた語ってくれました。彼は、当地を最初に訪れたすべてのロシア人——サマーリン、デ・プレラドヴィチ [De-Pradovitch「誤植」]——の友人で、ロパーチンの道案内も務めたそうです。「トンチ」のものとされた陥没孔の多くは、アイヌらがかつて盛んに行った特別な鷲狩りのために掘った孔だったことを、私はここで初めて知りました。シトリキの兄弟であるシャマンは日が落ちるごとに巫儀を執行し、子供や女らは昔話を語ってくれました。四日には海が風いで、出立することができました。五日、われらはヤンケナイ (Yankenai) 川付近の海岸に野宿して、翌早朝からは、海岸に沿って数

マイルも連なる無数の暗礁の上で惰眠を貪るアザラシどもに對して、獵を開始しました。その際は、アイヌらが舟の上から、天辺が時おり波に洗われる岩に跳び移るときや、仕留めたアザラシを極めて不安定な丸木舟へ海から引き上げるときに、彼らが發揮する身ごなしの軽さに、私は思わず目を見張りました。ひびの入ったわれらの丸木舟が、至るところで頭を覗かせている岩々に、もし激突したならば木端微塵となるような修羅場を、私は彼らとともに掻い潜りつづけました。

われらは仕留めた7頭のアザラシをフヌツプ (Xunup) 村まで運びました。六、七、八日、海が時化つづけただけでなく、サハリンで最も著名なシャマンと知り合いたいという私のたつての願ひもあつて、四ヶ村——フヌツプ、フレチシ (Furetsi, 「婦禮」)、アカラ (Akara 赤浦)、モトマリ (Motomari 元泊、現ヴォストチャイ)——が犇めき合うこの地区に留まりました。寒や、体調不良、常時付きまとつた對話での氣詰りが災いして、この興味深い出会いからは、私が期待したほどの成果を上げることが叶いませんでした。モトマリ村では、森で熊を仕留めたときの祭祀の終幕と遭遇しました。十一日夕刻、セラロコ到着。私は十一日ぶりで、遂に毛外套と毛皮製長靴を脱ぐことができ、暖かいロシア式百姓家でぐっすり眠れました。十二日、私はオトサン村に泊まり、十三日にはアイ村に帰着しました。十六日、コルサコフスク哨所へ赴いて、熊祭りに特に参加するためオトサンとセラロコへ出発する十一月二十八日まで、同哨所に留まりました。十二月二十一日には再びコルサコフスクへ戻つて、さまざまな用向きで訪れるアイヌたちとともに、また私にとって有益な人たちはわざわざ当地へ呼び寄せてでも一緒に仕事をするつもりでした。

北から電報で伝えられた幾つかの樂觀的情報に影響された私は、今一年の残留に関して電報で問い合わせてきた「ロシア委員会」議長殿へ同意回答を返信しました。けれども、私のサハリン残留が現下の状況では無益と化しつつあることが、間もなく明らかとなりました。ポルト・アルトゥル「旅順港」陥落「一九〇五年一月一日、露曆一九〇四年十二月十九日」後は、日本が

サハリン占領に踏み切るとの想定が愈々現実味を帯びて、物騒な噂が増大し強まってきました。誰かが海上に接近中の蒸気船の煙を目撃せぬような日は、一日とてありませんでした。海岸線に配備された騎馬警備隊が駆け付けて、「船舶発見」との決定的通報をもたらすや、皆が旅支度と、島の奥地へ避難する準備に着手するといった事態もしばしば出来ました。子供らの泣き声や女たちの溜息も上がりました。夕刻以降はすべての窓をきっちりカーテンで閉ざして、不意に扉を叩く音や、庭で物音がすると、あわや敵の来襲と身構えるのでした。その頃にかかわりのあった人々は全員が、驚くほど神経を高ぶらせていました。最も冷静で穏和、自己抑制にも長けた人たちでさえ、改めて動悸の高まりや、隠されてはいるものの強烈な精神的動揺を覚えていたのです。しかもその際は、全般的危機が人々を團結させるのではなくて、相互間の反目や、デマや、陰謀や、悪だくみを益々強めていったのです。お互いに信頼しうるような人たちが十人もいたか否か、私には判りません。アイヌたちの状態は危機的となつてゆきました。アイヌらが日本人へ寄せる大いなる好意は皆が承知していましたが、敵の到来がむしろ好ましくて、少なくとも危険ではないような人々に対する憎悪は、益々浸透していききました。このような土壌には非常識なまでの猜疑心が生長し、ありそうもない伝説さえ作られました。西海岸の南部には日本人漁師の漁り舟がしきりに接岸しては、密かに米を搬入して魚を搬出し、中には——海岸一带に数多く点在して無防備のまま残された——豊かな日本人漁場から漁具を盗んでゆく者もありました。そこで、やつて来たのが漁師ではなくて、日本軍の先遣偵察隊であるとか、十分に多くの武器・弾薬がすでに搬入されて、山中のどこかに隠されているとか、アイヌらはこのすべてを承知するだけでなく、自らも間もなく武装蜂起を企てるだろう、といった風説が広まりました。さらには、アイヌたちが密かに日本へ渡り、彼らに会いに来た「日本の元帥」に対して忠誠の誓いを立てたとか、ポルト・アルトゥル陥落を酒宴と、——彼らには何の知識もない——「イルミネーション」で祝賀した、といった伝説もまかり通っ

ていました。数百露里の海岸線で囲まれた広大な領域でロシア国家を唯一代表する行政府の大物二人と、ロシア人のマウカ村で村長を務める流刑囚上がりの男が、日本人密漁者によって殺害されました。アイヌの敵である入植囚たちは、——それを目撃した者は誰もいませんでしたが——この制裁におけるアイヌらの参加を繰り返し喧伝していました。アイヌに対しては、日本人とかかわった者は死罪に処すべし、との警告が正式に告知されました。私も一度ならず、敵の到来はいつになるかをアイヌから訊き出してくれ、あるいはまた、十七日決行とされる上陸日は正しいか否か確かめてくれと、完璧な真顔で要請されました。それは、誰かが思い付いて広めただけの、謎の数字に過ぎませんでしたが、恐怖に駆られると、錚々たる人たちですら容易にそれを信じていました。アイヌがコルサコフスクに姿を現すたびに、多くの人はその目的を、スパイ行為を働き、当地に設営された脆弱な防御施設のことを密告するためと解していました。アイヌらに対する猜疑心が余りにも昂じた結果、管区長官は私に、コルサコフスクでのアイヌの応接を中止するよう申し入れてきました。物質的生活条件は日毎にでなくて、時間毎に悪化していきます。すべてが猛烈に高騰しつづけました。商人らは眠る暇もありませんでした。あれやこれやの食料品の販売が次第に終了し、ただ特別な縁故のみ、むろん数倍は高値ですが入手は可能でした。8分の1(ラント?)、約51²⁵のマホルカ煙草が8ルーブリで売られたときもありました。適時に蓄えなかった者は、砂糖・石鹼・筆記用紙が手に入りませんでした。米と小麦粉は国営商店において、公務員や軍人の需要に応える分だけがありました。住民は遠くない将来における飢えの脅威に直面していました。アイヌらはすでに身を以てそれに耐えていました。日本人漁師らが北海道島から密かにもたらす米がもしなかったならば、かの地での死亡率は膨大だったでしょう。もはや躊躇すべきことは何もなく、一刻も早く退去すべきであるのは、私にも明らかとなりました。

この冬は、もし戦争がなかったならばマウカへ赴いて、春までに一仕事を済ませるつもりでした。因みにかの地では、

W・シェロシエフスキが北海道島でのアイヌ調査後に残してくれた人類学的計測機材を用いて、身体計測を首尾よく済ませるつもりでした。マウカ地区の住民は、古い迷信をほとんど保持しておらず、全く新しいものに直面してもさほど恐怖は示さぬからです。東海岸では、なканずく将来の危険が横溢するこの騒がしい時期には、身体計測について考えることなど論外で、私の試みはすべて不首尾に終わりました。脚部や身長計測は死者に対してのみ実施されていますから、計測問題は直ちに、それだけでなくとも彼らの頭を悩ませている死を連想させたわけです。さらに一層口惜しく思いますのは、「西海岸の」クスナイ「(又春内(クシユンナイ)一地区とウソロ(鶉城(ウシヨロ)一地区を訪ねる機会に恵まれなかったことです。両地区はこの夏にも、ポロコタン(Porokotan)村(ギリヤーク語では「ピリヤ・ヴォ(Piljavo)」で暮らす——半ばアイヌで半ばギリヤークの——興味深い数家族を調査するため、訪問することを予定していたからです。未完の仕事を残して去るのは辛いことです。私の手中にすでにある資料さえ保持されるかどうか定かではない状態で、さらに滞在を続けることはできない、と己に言い聞かせた次第です。

日本軍が攻撃してきたときに果たして何が起こるか、誰もはっきりとは想像できませんでしたが、皆は怖れおののきつつ、その瞬間や、その後に完璧に想定されうる——懲役囚らや、彼らとその他の流刑囚系住民で編成された義勇軍団の側からの——略奪や暴力行為に思いをめぐらせていました。

一九〇五年

私は「コルサコフスク」出発まで、なるべく多くの翻訳をこなし、統計データの収集を終わらせるように努めました。西海岸北部のデータに関しては、これらの地区から村長や郷長を呼び寄せ、彼らの口から直接に情報を聴取して記録せねば

なりませんでした。一月二十七日、シヤンツイ、ナイブチ、アイ、オトサン各村を巡回して、若干のアイヌとは清算を済ませ、債務回収や注文の未遂行案件に関する委任状を付託してゆきました。二月十日、コルサコフスクに戻り、二十三日には、一部の人々からの別れの挨拶と、己は望みながらも立ち去ることの叶わぬ人たちの羨望に見送られて、この町と完全に訣別しました。二十三日から二十六日までにはヴラデーミロフカ〔豊原、現ユジノ・サハリンスク〕に立ち寄って、若干の郵便小包を送り、道中に必要な食料を辛うじて入手しました。二月二十七日と三月一日はシヤンツイ村に滞在し、呪医でもある頗る聡明な老女の友と連日語り明かしましたが、彼女はアイヌの内面生活に関する多くの問題でも喜んで説明してくれました。三月一日と五日、アイ村に留まって荷造りに精出しつつ――一部はそこに保管してもらわねばなりませんでした――予約した犬橇の到着を待ちました。六日、オトサン村に一泊、夕刻には友人のシヤマンが別離の巫儀を執り行ってくれました。七日夜にはモグンコタン（原文では「Mo'unkotan」と記されるが誤植である。馬群潭、現ブガチョウ）に到着。当地では二日間、膨大な量の郵便物と官用貨物の輸送に従事する犬橇隊を待機せねばなりませんでした。十日に旅立ち、十一日夕刻にナイエロ着、そして十二日にはチフメネスクに安着しました。

当地では、ニコライエフスクまでの「犬橇による海峡の」冬道走破は不可、との電報を受け取りました。今春はそれが早めに終了したのだそうです。急ぐ理由は全くなかったわけで、私もやはりこれ以上急ぐことはできませんでした。異族人の間では感冒（インフルエンツ）が猖獗を極めていました。ギリヤークとオロツコはそれを軽く乗り越えましたが、アイヌらは咳や痰で容赦なく痛めつけられていました。タライカ〔村〕では住民の4分の1が落命しました。至る所で病人とは出会いますし、瀕死の人たちもいました。しかもほとんどが半ば飢えていました。アイヌにとつては米が日本人同様の主食と化したにもかかわらず、その搬送が全く途絶えたからです。子供らは泣き叫び、女たちは病み、男の若者らは稼いだ金を、

ロシア人村が高値で販売する一切れのパンの購入に充てていましたが、あちらでもそれは益々少なくなっていくきました。老人らは自宅で悲しげに坐して、——ある老人が別れ際に「ロシア人は己の人々を守ることできない」といみじくも私に語った——まさに同じ思いをさらにしみじみと噛みしめていました。悲しみはそれぞれの家族にしみわたって、先回は聞こえた笑声もなくなり、私には快適で心地よかったこの一隅からは、喜びや賑わいも消えていました。これらの辛い日々には会話さえ聞かれなくなりました。私自身は旅を通して体のだるさを覚えていましたが、この地では「感冒に感染して完璧な脱力状態に陥りました。

「三月」二十三日、感冒からやや回復した私は——この頃に許可の下りた救荒用小麦粉と米の貸付けを求めてオノールへ赴く——ギリヤークらとともに、トナカイ櫓でティモフスク管区へ向かいました。オロツコらに発注し、一部はすでに完成している物品は、彼らの許に留めて保管してもらうことにしました。私はただ、警察官の署名入り目録を取りつけるだけに留めました。二十八日、オノール着、同地には四月十三日まで留まりました。その後は五月十二日までルイコフスコエ〔現キーロフスコエ〕で過ごしました。この間には、一九〇三年の秋に武官知事から委託されたアイヌ人口調査の報告書を作成し、彼らの経済状態に関する概況と、——時代遅れと見做された「異族人に関する諸規定」〔イエカテリーナ女帝の命によりスペランスキーが制定した一八二三年の「シベリア異族人統治法」〕に代わって導入されるはずの——アイヌの生活整備と統治に関する諸規定の私案も執筆しました。その際は、官吏らから正式に提示された同問題の關係資料や、ギリヤークとオロツコに関する統計情報にも目を通しました。五月十二日、デルビンスコエ村〔現ティモフスク〕へ赴き、サハリン植物相の専門家である地元の集落監視官 E・K・ベザイス〔原文では Bezans と記されるが、誤植である〕の協力を仰いで、私が異族人語の名称を採録してあった各種植物に対して「植物学的」同定を試みました。この頃はまだ島の奥地に留まっていた古い知人のギリヤークたちが、私を

訪ねて来ることもありまして。五月三十日、島からの退去希望者らを搬出するため蒸気船がニコライエフスクから来航し、その第一陣には私も選抜されたとの通知が届き、アレクサンドロフスク「現アレクサンドロフスク・サハリンスキー」へあたふたと駆け付けましたが、同船はすでに出港したあとで、次の便船までの待機を余儀なくされました。六月十一日、——その波乱万丈の運命が常時物議を醸し、同じ年の秋には大破の憂き目にも遭ったため——アムール川とニコライエフスク近辺の浅瀬だけに就航する小型舟艇「ウラヂヴォストク」号に搭乗して、私はサハリンを離れました。六月十二日、恙なく大陸にたどりつき、ニコライエフスクで下船しました。

私が三年間の仕事を総括するに当たり、自分のサハリン滞在の成果が、当初に期待したものからほど遠いことは認めねばなりません。前もって予見できず、戦争のせいで全く不都合な形で成立した諸状況は、仕事の生産性を最大限まで低下させる主たる障碍でした。資金不足や、自らが設定した課題の遂行を促進し、私の健康状態にもっと適合するような情況を創出できなかったことも、やはり私を強く束縛しつづけました。

まずサハリン行政府の多くの方々には、彼らの不断かつ親切的な御支援に対し、また若干名の方々、なかんずくE・N・ニコライエヴァ、A・A・フォン・フリーケン、M・A・ズヴァギンには友人関係に発する御協力に対し、ここに深謝申し上げねばなりません。もし私の収集資料の間にサハリン異族人らの習俗に関して重要なデータが見出されるとしたら、それは偏に、サハリン土着諸部族の各位、とりわけギリヤークとアイヌの人たちから私に寄せられた友情、同様にまた、若干の個々の方々が私に示された心からの好意の賜物にほかなりません。

私が持ち帰った資料は以下の通りです。

民族的記載——アイヌ関係1880頁、ギリヤーク関係320頁、オロツコ関係180頁、アムール流域関係400頁。

言語資料テキスト——アイヌ語870頁（その一部は未翻訳）、ギリヤーク語285頁、オロツコ語13頁、

収集語彙数——アイヌ語一万語以上、ギリヤーク語一万語弱、オロツコ語とマングン（オリチャ）語各二千語。

陰画写真乾板——300枚。

アイヌの歌謡や物語を蓄音機で収録した蠟管——約30本。

次頁「實際は末尾」に、サハリンを縦断する私の旅程図を付載しますが、その際の移動距離は以下の通りです。

旅行用四輪馬車、四輪荷馬車、橇での走破距離2475露里。乗馬による走破距離90露里。小舟による海上航行距離460露里。湖沼河川の舟行距離530露里。犬橇やトナカイ橇による冬道の走破距離750露里。徒歩での踏破距離350露里。以上には、マウカ行きと、そこから函館を経由してコルサコフスクへ戻る船の旅も、またサハリンと大陸の間を往復した船旅も含まれてはいません。

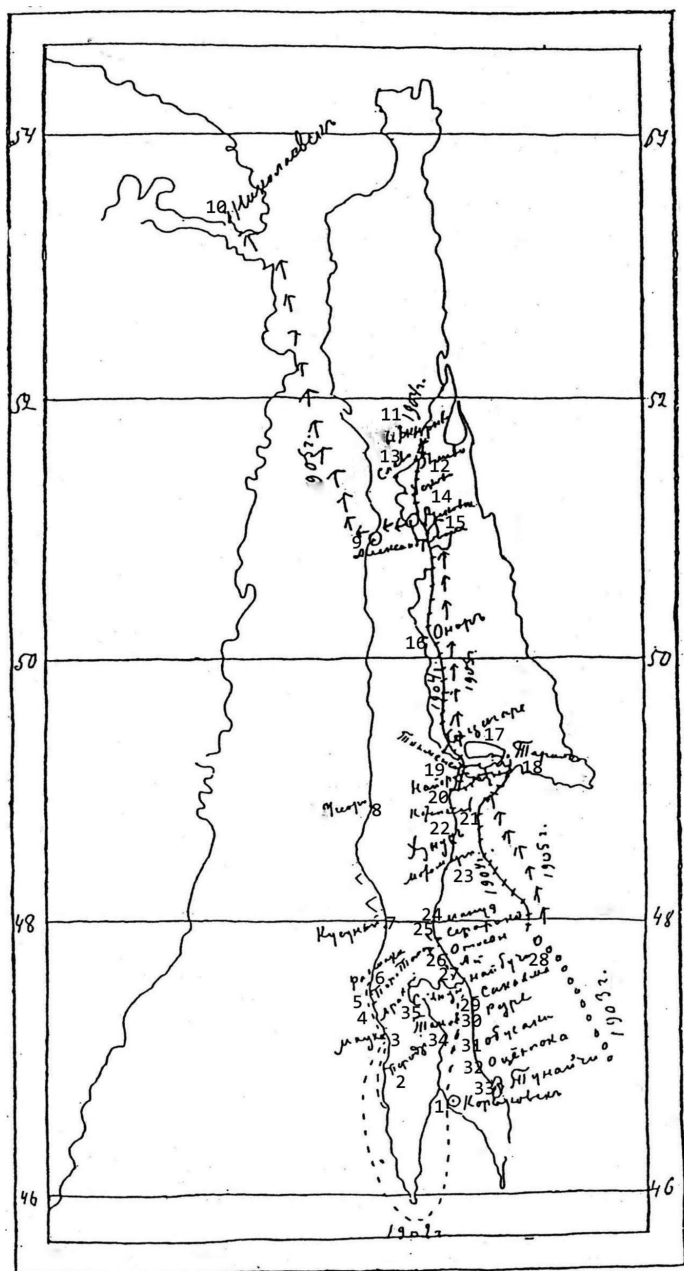
—————

アムール流域に滞在する好機に恵まれた私は、多彩な諸部族の在住するこの地域を、かつては地元土着民と活発な交流を展開していたアイヌをめぐる問題の究明に、たとえ僅かであれ活用したいと考えました。私はそのために、ニコライエフスクに十日ほど滞在し、街頭で遭遇するギリヤークに片っ端から声をかけては質問を浴びせました。残念ながら、出会

ったギリヤークのほとんどが、真摯な会話を試みるには余りにも斟酌していました。やはりニコライエフスクでも、敵艦は今日にも姿を現わすのではないかという緊迫した情勢でしたから、ギリヤークの諸村落まで足を伸ばす決心はつきかねました。私にできたのは唯一、己の意志で離島した樺太アイヌを市内に呼び寄せることくらいで、彼は、過度にロシア化したため故郷を捨て、ウラヂヴォストクで暫く過ごしたあとアムール流域に至り、当時はニコライエフスク近傍でギリヤークらとともに暮らしていました。とはいえ、たまたま知り合った新しい知人たちからは、奴隷だったアイヌたちや彼らの子孫に関する数篇の伝承を聴取しました。マリインスク村にも数日留まって、至近に所在するオリチャのウディン (Udin) 村を訪ねました。サハリンで作成したオリチャ語の小辞書を検証し、彼らとアイヌの往時の関係を伝える伝承を入手し、また——マリインスクの下流40露里に所在する——モンゴリ (Mongol) 村出身のオリチャに嫁いではや十年になるアイヌ女に会うことも計画していたからです。私は同女をマリインスクに招きましたが、彼女は遺憾ながら遅刻して、私の出立後に到着したそうです。ひょっこり出会った今一人のアイヌの老女は、サハリン西海岸から三十年前に連れて来られて、私の訪問時は奴隷ないし下女として暮らしていました。己の母語を耳にし、また私の語る自分の親族や知人らの消息も聞く、彼女はいたく感激し、信頼感を露わにして己の辛い人生を縷々物語り、身内の許へ戻るための支援を要請しました。地元の農民長官は、私の説明をすべて聞き終えるや、全面的支援を約束しましたが、残念ながら彼は間もなく、その地を離れてしまいました。マリインスクから至近距離に立地するデ・カストリ湾の砲兵陣地を日本軍が攻撃したあとで、マリインスクは危機的状況に陥ったため、もはや私は同地に長く留まることができませんでした。

「日露戦争の」講和条約が締結された秋には、ウラヂヴォストクのアムール地方研究会 (ОИАК) からオリチャの標本コレ

クシヨン収集を目的とする短期出張が提案されて、私はそれを引き受けました。情況が私に許容したのは、ゴリド (Gorid) 「ゴルディ」とも記され、現呼称は「ナーナイ」、中国語では「赫哲」の居住地区に辛うじて到達するまでの旅でしたから、ロシア人のトロイツコエ村周辺に点在するゴリドの5露営地を巡回して、500点の標本を購入しました。私は当局の発行した何通かの紹介状を携えて、ゴリドらの間では僅か十日ほど滞在しただけですから、格別な信頼を得るには至りませんでした。とはいえ、この短期調査も、すでに収集済みの資料に若干の有益な追加情報をもたらしました。



樺太島地図 (ピウスツキ作図) *1

地名対照表 ^{*2}

キリル文字	ローマ字	エンチウ語	日本語	現代ロシア語
1 Корсаковскъ	Korsakovsk	Porotomari	大泊	Korsakov
2 Перодзи	Perodzi	Perochi	廣地	Pravda
3 Маука	Mauka	Mauka	眞岡	Xolmsk
4 Аракои	Arakoi	Arakoi	荒貝	Vyselki
5 Поротомари	Porotomari	Porotomari	幌泊	Simakovo
6 Рамаха	Ramaxe	Pahmaka	樂磨	Mineral'noe
7 Кусунай	Kusunaj	Kusunai	久春内	Il'inskij
8 Уссоро	Ussoro	Ushoro	鵜城	Orlovo
9 Александровскъ	Aleksandrovsk		亞港	Aleksandrovsk
10 Николаевскъ	Nikolajevsk		尼港	Nikolajevsk
11 Ырныкырво	Yrnkyrvo			Irkir
12 Пливо	Plivo	Porokotan		Pilevo
13 Славо	Slavo			Slava
14 Усково	Uskovo			Uskovo
15 Рыковское	Rykovskoe		ルイコフ	Kirovskoe
16 Оноръ	Onor		オノール	Onor
17 Социгаре	Socigare	Sacihare	佐知	Južnyj
18 Тарайка	Tarajka	Taraika	東多来加	Promyslovoe
19 Тихменевскъ	Tixmenevsk	Sisika	敷香	Poronajsk
20 Найеро	Najero	Nayoro	内路	Gastello
21 Котанкесь	Kotankes'	Kotankesi	古丹岸	Gorjanka
22 Хунупъ	Xunup	Hunup	斑伸	
23 Мотомари	Motomari	Motomari	元泊	Vostočnyj
24 Мануэ	Manue	Manue	眞縫	Arsent'evka
25 Серароко	Seraroko	Siraraka	白浦	Vzmor'e
26 Отосанъ	Otosan	Otasan	小田寒	Firsovo
27 Ай	Aj	Ai	相濱	Sovetskoe
28 Найбучи	Najbuči	Naibuchi	内淵	Ust'-Dolinka
29 Сакаяма	Sakajama	Sakayama	榮濱	Staro-dubskoe
30 Руре	Rure	Rure	魯禮	Rorej
31 Обусаки	Obusaki	Obusaki	負咲	
32 Оцѣхлока	Oc'oxpoka	Ochohpoka	落帆	Lesnoe
33 Тунайчи	Tunajči	Tunaicha	富内	Oxotskoe
34 Такое	Takoe	Takoe	大谷	Sokol
35 Сиянцы	Sijancy	Siyancha	落合	Dolinsk

*1 本図は В・ピウスツキの復命報告(5): “Отчетъ Б.О. Пилсудскаго по командировкѣ къ айнамъ и орокамъ о. Сахалина въ 1903-1905 гг.,” *Извѣстия Русскаго комитета для изученія Средней и Восточной Азии*, № 7: 52, СПб. (1907); 及びその英訳版 [Majewicz 2004: 221] 所収。ピウスツキ自身が作製した同地図には、1902 年、1903 年、1904 年、1905 年における彼の路程も記入されている。地図へのアラビア数字挿入は兎内勇津流氏にお願いした。

*2 本図では各地名の所在地が、それぞれの地名に追記されたアラビア数字によって同定が可能である。その際は、А・F・マイエヴィチ氏が同地図に付与した一連番号 [Majewicz 2004: 219-220] が踏襲されている。

論文

樺太ギリヤークの困窮と欲求

解題

本訳稿の底本は一八九八年四月二十日に北サハリンのアレクサンドロフスク哨所（垂港、現アレクサンドロフスク・サハリンスキー）で擱筆、同年にロシア帝室地理協会プリアムール支部（ハバロフスク）の『紀要』に収録されている⁽¹⁾。この論文はピウスツキの人類学関係著述の嚆矢であるが、彼はこのとき三十二才だった。

ピウスツキは一八八七年八月に国事犯流刑囚として来島するが、最初の十年は北サハリン・ティモフスク管区ルイコフスコエ村（現キーロフスコエ）において苦役に服した。同村はティミ川上流部に立地し、流域一帯にはギリヤーク（現ニヴフ）の村が点在していた。近在するギリヤークたちとの交際は初年度から始まるが、本格研究に着手するのは、盟友リエフ・シテルンベルグと出会った一八九一年一月以降で、両名は協力してギリヤーク調査を進めた。

一八九七年二月、ニコライ二世戴冠の特赦令により3分の2に削減された刑期（十年）が満了する。五月にはウラヂヴォストク（浦塩）のアムール地方研究会から附設博物館のポストが提案されたが、離島許可がなかなか下りず、ピウスツキは九七年九月から翌年四月までアレクサンドロフスク哨所に滞在して、樺太島医務局主任L・V・ポドゥプスキー医師の下で文書掛を務めた⁽²⁾。本文に見える医療活動や種痘の実践は、その一端である。八ヶ月に及んだ同地滞在は、彼に学術論文の処女作を執筆する機会も与えたわけである。

ピウスツキの基本的立ち位置は、原住民と植民地体制の関係を、前者の視座に立つて調整し、その生存戦略を模索するという、現代的用語に直すならば「憂慮する人類学者」（the concerned anthropologist）のそれである。とりわけ一八九六、九七年にティミ川上・中流域のギリヤーク村落を襲った飢餓に際しては、馬鈴薯の栽培と鮭の塩蔵加工という「新生業」の

導入を試みた。本文は、そのような応用人類学的営為の顛末を詳述する民族誌である。われわれはこの記述を通して、いまだ十分には詳らかでない一八九〇年代のピウスツキの動静を窺うこともできる。

ピウスツキは一般にアイヌ研究者として知られるが、その前提として、このようなギリヤーク研究を踏まえていたことは特筆しておきたい。彼はシュテルンベルグとともにニヴフ研究の草分けなのである⁽³⁾。ピウスツキは日露戦争中の一九〇四年七月八月にもティミ上流域において、ギリヤーク村落の踏査に従事している⁽⁴⁾。

ところで、ピウスツキは一八九六年の「夏と秋はティモフスク管区を留守にしていた」(本文96頁)と記すが、同年七月八月には測候所設営のためコルサコフスク管区へ派遣されている⁽⁵⁾。このときのエンチウ(樺太アイヌ)との初邂逅は、彼のアイヌ研究の端緒となった。

本文中に見出される「見出し」や「小見出し」は、訳者による加筆である。

当該論文は、ピウスツキに関する第二回国際シンポジウムがユジノ・サハリンスクで開催された一九九一年、ソ連文化基金サハリン支部が上梓した「豆本」に再録された⁽⁶⁾。『ピウスツキ著作集』一卷はA・F・マイエヴィチ氏の見事な英訳稿を収録している⁽⁷⁾。なお、タイトルに見出される「困窮と欲求(ヌジュディ・イ・ポトレブノスチ)」は、十九世紀後半のロシア民族学界において頻用された「民衆の窮状」を象徴する常套句である。

二〇一四年一月三十日、札幌

注

- (1) Брониславъ Пилиускій, "Нужды и потребности сахалинскихъ гильковъ," *Записки приамурскаго отдѣла Императорскаго русскаго географическаго общества*, томъ IV, вып. IV: 1-38, Хабаровскъ (1898).

拙稿「プロロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書 868～869 頁。

- (3)(2) K. Inoue, "L. Stenberg and B. Pitsudski: Their Scientific and Personal Encounters," in: Kolch'i Inoue, "Dear Father!": A Collection of B. Pitsudski's

Letters, et alii [Pitsudskiana de Sapporo no.1], pp. 136-140, Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido Univ. (1999). ユニオンキが採録した二文

フ語「ギムストは」シネラルンベールの二著作

(Л. Я. Штернберт, "Образцы материалов по изучению гильяцкого языка и фольклора

собранных на о. Сахалинъ и в низовьяхъ Амура," *Известия Императорской академии наукъ*, томъ XIII, № 4: 387-434, СПб., 1900; его же,

Материалы по изучению гильяцкого языка и фольклора, томъ I [Образцы народной словесности. Часть 1-я. Эпосъ (поэмы и сказанья,

перевя половецко]), СПб., 1908) に収録されたものと、ポーランドと英国の雑誌に発表された二論文 ("Роеззга Гіакоў," *Lud XVII*, fasc. II-III:

95-123, Lwów, 1911; "The Gilyaks and Their Songs," *Folk-Lore* 24/4: 477-490, London, 1913) として没後八年目に W・ローヴァイチが上梓した

論文 ("Pisni liuzsne Gilačow," *Rosnik orientalistyčeszy*, tom XII: 159-175, Lwów, 1936) 以外は、近年に発掘された遺稿である。代表的作品

は *Materials for the Study of the Nivchi (Gilyak) Language and Folklore* (Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido Univ.; Stenszew: International

Institute of Ethnolinguistic and Oriental Studies, 1996) であるが、ユージン・サハリンスタのピウスツキ研究専門誌『ピウスツキ遺産研究所通

報』などでも公刊されている。これらは「マイエヴァイチ氏が目下編集中の『ピウスツキ著作集』五巻(ニヴフ研究篇)に収録される予定

である。

拙稿「プロロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書 877 頁。

本書 868 頁。

- (6)(5)(4) Б. Пилсудский, "Нужды и потребности сахалинских гильяков," в: Бронислав Пилсудский, *Аборигены Сахалина*, стр. 13-17, Южно-

Сахалинск: Сахалинское отделение Советского фонда культуры (1991).

- (7) B. Pitsudski, "Wants and needs of the Sakhalin Nivchu," translated by A. F. Marawicz, in: *The Aborigines of Sakhalin* (The Collected Works of

Bronisław Pitsudski, vol.1), pp. 105-136, Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998).

樺太ギリヤークの困窮と欲求

《發展したる部族よ 汝が彼より高きものは何ぞや

《人道主義の世紀よ 汝は何をもて彼を高めしや

《そは 我らが慢心せる時代にありて

《汝の重荷を負いつつ 汝により墮落・卑しめられたる

《野蛮人が 至る所にて死に絶えることにあらずや》

オムリヨフスキー

ティミ河畔で暮らすギリヤーク「現ニヴ」たちの、恐らく他の誰よりも至近距離にいて、彼らの実情に通じている私は、その諸困窮の叙述に着手する前に、何はさておき幾つかの一般命題について論ずることを必至と考える。ギリヤークは果たして、顧慮さるべき権利を有するや否や、またもし有するとして、その程度は如何……。

歴史が我らに教えるところによると、万国の植民は多少とも暴力的に推進されてきた。奪取される土地の古来の民の希望は、お目こぼし的に配慮されるか、はたまた皆目斟酌されることがなかった。

かつて異族人（イノロツィ）のみが暮らしていた樺太島は、一切の戦闘や彼らの側からの抵抗もないまま占領されただけに、サハリン原住民にはその分だけより手厚い配慮がなされて然るべきである。

彼らからは、島の植民に必須の要件を担保するべく土地が略取されてゆくが、それは原住民にとつて極めて辛いことである。彼らは、これらの必須措置をおとなく受け入れ、島の植民活動が年ごとに拡大・強化されるにつれて、住み慣れた己の故地を次第に手放してゆく。植民活動とそれが追求する課題が猛威を奮うときですら、ギリヤークは己にとつて頗

る有害であつても、国家利益を追求する目的をひたすら支え続けたことは認めねばならぬであらう。島の僻遠・懸隔の地やシベリア大陸との連絡で行政当局を助けるのは異族人、とりわけギリヤークらではないか。無意識ながらも自己犠牲の精神を発揮しつつ、樺太島の逃亡囚の被害から近隣諸地区を守り続けて、極めて頼もしい最精鋭の島の衛兵を務めたのは、異族人ではないか。とどのつまりは、島の各地へ派遣される学術遠征隊や踏査隊に、原始林における優秀な道案内として、また舟行する折は経験豊かな水先案内兼漕ぎ手としても協力して、政府に重要な奉仕を提供したのもやはり異族人である。そこで、ギリヤークたちは何らかの支援を必要とするか、我ら文明化した「人種」の側の関与や支援がなくなると十分に衣食足りて、今後とも幾久しく自立して存続できるような部族であるか否か、という命題が浮上する。

薄汚れて、通常は強度に擦り切れた古着を身に着けるギリヤークを見た者は、また春に彼らの憔悴しきった顔を眺めた者はすべからず、その外見からしてすでに、少なくとも当面はギリヤークの豊かさについて喋々しえないと断ずるであらう。もしギリヤークらの幕舎に滞在して、彼らの乏しい食料や質素・赤貧の状況を垣間見、また彼ら自身にその生活や物的資産について訊ねるならば、さらに一層暗い印象を受けることになる。多くの者にとつては、乞食の境遇に瀕する掛け値なしの貧困が、そのような観察の帰結となる。一八九六年三月、ロシア人村落に至近の7地点で実施した調査によると、私がその時に記録した男101名、女71名、男女合わせた子供81名のうちで、その家族員は全く度外視して、無宿者が40名であつた。成人男子1名当たりの平均値は大4匹、一艘の舟を有する成人男子は二人に一人、一張りの漁網は三人に一人、そしてギリヤークの男にとつて最重要資産である犬も網も舟も持たぬような成人男子は18名で、総数の実に17%にも達する。

主食である魚(鮭)が豊漁で、「ユーコラ(乾製魚)」にとつても好適な天候に恵まれる年は、ギリヤークらもいまだ生

の担保が可能であるが、魚の遡上が思わしくないか、秋季に過度の長雨に見舞われると、一切の備蓄食料を欠くため否応もなく飢餓に追い込まれる。ティモフスク・ギリヤークの間に飢餓が発生したことは、一八九六、九七の兩年連続で行政当局も認めることとなり、全困窮者に対する穀粉と米の給付という緊急措置を講ずることを余儀なくされた。ギリヤークの間での飢餓が偶発事象でないことは、異族人に関する公式情報によっても確認できる（「異族人」『（一八九七年版）サハリンスキー・カレンダーリ』108頁）。

ギリヤークの惨禍が実在するのみならず、このように歴然と周知されるようになった以上、当然ながら、その原因は何かとの問いが提起される。原因を知らずして、その防止策を正しく講ずることは叶わぬから、この事象の究明は必須である。あらゆる社会事象に対する理解と見識を自負するものの、その本質を全く知悉せず、そのための準備を些かも講じないような人々の圧倒的多数によると、ギリヤークらは怠惰であつて、己自身の咎で貧困化するのだと断言して憚らない。サハリンで人口に膾炙するこの所見は、その虚偽性にもかかわらず、上で言及したばかりの公式見解にも——不注意によるとも考えられるが——浸透している。例えば、一八九七年版『サハリンスキー・カレンダーリ』（108頁）には異族人をめぐって、以下のように簡潔な、途方もない結論が見出される。

「野蛮人らは」魚を専ら食料としているが、島の諸河川における豊かな魚類資源のお蔭で、一年分の食料を賄うに足る漁獲を得ることは常に可能であろう。但し、野蛮人に特有の怠惰や怠慢、そして生活自体が、もしもそれを妨げなければの話である。後者の諸原因が彼らを飢餓に導くことも稀ではない。

困窮の責任を貧しくて不幸な人々自身に負わせるほどたやすいことはないが、またこれほど理不尽なこともあるまい。そのような判断は、確かに若干の個別事例には適用できるかも知れぬが、諸事象の総体や、一つの身分の全体や、部族や

民族に向けられるような場合は批判に耐えられない。幸いにも、それを耳にすることはますます稀となつて、貧困や飢餓の説明は今や、当該階級ないしは部族の生活の経済・社会的諸条件に求めることが通例である。

もし「野蛮人に特有の怠惰」がギリヤークたちを極度の困窮に瀕する状態に置き、今や彼らを飢餓に導くとするなら、後者の状況は、異族人らが島の唯一の主人であつた頃には何ゆえ出来しなかつたのであらうか。

ギリヤークの古老たちが語るところによると、ロシア人住民が樺太島に入植する以前に起きた飢餓はただの一度だけで、それも彼らの父親が若かつた頃、即ち、今から七十〜八十年前のことだつたという。ギリヤークの怠惰を喋々できるのは、例えば、漁獲期の彼らの仕事ぶりを見たことのない者だけである。そのときは、男についてはもはや言わずもがな、女たちも朝から晩まで己の手頸関節が腫れ上がるほど熱中して魚の内臓抜きに邁進するわけである。この病は、頗る広く蔓延したため特別な名称が付けられている。

僅かに視力の残る老人がすべての仲間と同舟して漁撈に赴き、網を引く際は腰まで水に浸かつて、岸边に立つ少年の指示に従つてよちよち歩くという風景を見た者であれば、「ギリヤークに特有の怠惰」などとほざくことはよもやあるまい。怠惰に流れる習性とやらは、例えば、私がウスコヴォ村で目撃することになった一場面を、果たして説明することができらうか。完盲の老人が川に渡した台に跨つて、手鉤で魚を引っ掛けている。彼は馴れた手つきで、鉤に掛る魚を木槌で叩いて殺し、岸边に抛り投げる。こうした作業は、誰かが夕刻にやつて来て、彼を連れて家路につくまで続けられるが、彼がこれを行うのは、強制されたからでも、また家族の窮状を慮るからでもない。それどころか、すべての老人は大いに尊敬され、家族の中で重きをなしてもいる。しかしながら、老人は勤労に慣れて、無為徒食を輕蔑するわけである。

怠惰を大罪の一つと見做すギリヤークのような民族の許で、それは卓越的な性格特徴たりえない。とはいへ、ギリヤーク

クの生活では繁忙期が、冬季の長きに及ぶ余暇——完璧な余暇とはほど遠いが——の時期と交代することは指摘しておかねばならぬ。ギリヤークらは確かに冬場を迎えると、互いに客人として訪問し合つて、快適な無為の時を過ごすことをこよなく愛する。だが、この時期のギリヤークらにも、トナカイ猟、巢穴での熊狩り、黒貂の罌猟、薪の調達、幕舎の営繕、スキーや橇や食器の修理など、少なからぬ労働が残されている。とどのつまりがタライカ〔東多來加村、現ウスチエ、ナトロ〕^{いらぐさ}海岸の現ヌイヴォを指すようである、ニコライエフスク〔日本では「尾港」とも称したアムール河口の町〕へ赴く遠出であるが、そこでは葎麻や漁網が、ティミ川の峡谷には欠如するアザラシの獣脂や毛皮、その他の品物と交換されるのだ。

女たちに関しては「万年勤労者」という以外、改めて言うべきことは何もない。彼女らは全家族ならびに己自身のために衣服や肌着や履物を縫い、葎麻を刈り取り、外皮を剥いで糸や紐を紡ぎ、魚網を編み、子供や訓練期の未成年者の世話に加えて、万来する客人のためにも調理に精出す。ギリヤークの間には、勤労に際して多くの「原始」民族に認められるような、むら気や飽きつばさが全く見られない。後者の大半にあつては、自然の浪費が根つめた勤労を必要とせず、休息や遊樂にうつつを抜かすことも可能とする。ギリヤークはと言えば、己のかなり制限された欲求を満たすべく、そのためになからざる配慮と労働を、しかも確乎として定められた規律に従つて投下せねばならない。

だがギリヤークの労働は、幾世紀を通して成立した生活条件の均一性のお蔭で、ある種の恒常的生産水準を獲得している。数百年かけて創出された習慣や労働投下の諸手法は、今や同量の欲求充足にもはや適合せず、また不十分でもある。ロシア人村落に隣接して暮らす異族人の場合、近年は生活条件が根底から一変し、しかも、惰性で生きる野蛮人のそれへの適応を不可能とするような速度で激変してしまつた。

広大な空間の中で熊・トナカイ・狐・黒貂・栗鼠・兎が棲息していた森はすでない。かつてはさまざまな野鳥が夥し

く棲息する落葉松林だった川沿いの土地も、原野・牧地・草刈場に変身している。ギリヤークらがこよなく愛する漿果類をもたらしした樹木は、伐採・焼却された。ティモフスク・ギリヤークのかつての財産だった、蕁麻の繁茂する草地も耕地と化すか、あるいは家畜に踏みつぶされている。ドイツの著名な経済学者カール・カウツキーは次のように語る。

野蠻人らの膨大な領域は、ほとんど全く人跡未踏のように思われるが、実際は、非文化的な諸狩猟民族にあたる限りの稠密さで居住されているのである。

ところで、ティミ川の上・中流では、完璧に変身を遂げてはいるものの同じ領域に、100名を下らないロシア人入植囚の猟師が住みついて、川底の上昇やその他の原因で減少したとはいえ一定量の魚が、今では数千名超の消費者のために捕獲されている。

そればかりか、投網漁の最適地や交通の便により恵まれた場所はすべからず、より強力で人口も多い入植囚がギリヤークからまき上げつつある。

ルイコフスコエ「現キーロフスコエ村の傍らにある監獄用の古い漁場は、そこにあったギリヤーク村のすぐ脇に設営されたから、村はすばらしい投網漁場を失ってしまった。ルイコフスコエ村の製粉用水車小屋の近辺は古いギリヤーク村に帰属する投網漁場であったが、監獄がそこで魚の捕獲を始めた結果、村はその後放棄された。今一つ、はやはやの好例もある。ルイコフスコエ村から9露里の所にノシブ・ヴォというギリヤーク村がある。そのほど近くで、ルイコフスコエ駐屯部隊の小隊兵士らが開墾地を造営しているが、ギリヤークの投網漁場が開墾地に近接することを根拠に、この漁場の使用権を僭称するわけである。そこでギリヤークたちは、兵士らと交代で、魚の隔日捕獲を余儀なくされている。

ティモフスク・ギリヤークが魚の捕獲で直面する大難題はさらに厳しい状況を迎え、また他の食料の入手も不可能とな

つた結果、彼らには今や、以前よりも多くの魚が必要である事実も顧慮せねばならない。

ロシア人の到来以前には、そして近隣の森林が破壊される前は、ギリヤークの食卓に載る肉性食料が恐らくは魚とほぼ互角であつたろう。成人男子は一人当たり1年に4〜5頭の熊を狩っていた。トナカイは幕舎付近まで徘徊していたから、もつとしばしば仕留められた。毛皮獣も数がもつと多くて、ギリヤークらはそのすべての肉までも食用に供していた。

豊かな鳥類にも恵まれていたが、今ではギリヤークらがしばしばそうするような売却する相手も、「当時は」いなかった。それぞれの家長はあまたの犬を有し、「囚われの熊」の数も比較にならぬほど多かった。また各種の莓類も、なかんずくウワミズ桜や苔桃は、毎日食べ続けたとしてもほとんど冬が越せるほど大量に備蓄していた。行者大蒜にんにくも、花独活うどや姥百合の根も、もつと大量に乾燥保存した。そして毛皮獣がふんだんに捕獲できたお蔭で、今より多くの米や黍（唐人稷）や隠元豆——日本人やアムール・ギリヤークから、はたまた満洲人から直接に——購入して消費することもできた。

ロシア人の到来以前は、一夏を通して冬の到来まで放し飼いで、人の手を逃れた魚を川瀬で捕食するに任せていた犬も、今や飼育することがますます難しくなった。

ギリヤークの生活条件がどれほど芳しくない変化を蒙って、彼らに不利益をもたらすようになったかは明白のように思われる。

だが、文明人との接触で彼らが蒙った損失はこれがすべてではない。文明人は彼らからあまたの資源を奪い、同一の対象へ向けて再度の労働投下も強いたのである。レイコフスコエ村からアド・ティミ〔現アド・ティモヴォ〕村にかけて、己の先祖の家、よし五十歩譲って父親の家で暮らし続けられるようなギリヤークは一人もいない。かつては一戸の幕舎に2、3世代が同居することが習わしだった。

私が実施した聴書き調査から判明するように、大半の家長は今や3番目の家に住み、4軒目を新設したような事例も見られる中で、ロシア人の到来以降、今なお2番目の家で暮らす者はほんの一握りに過ぎない。どんなに粗末であっても幕舎を建設し、板製の櫓を製作することは、鋸を欠き、小ぶりの斧を有するのみのギリヤークにとって、全くたやすい仕事ではない。幕舎の設営地を替える度には、さらにまた納屋も新造し、魚乾燥用の棹や、犬を繋ぐための杭なども新たに立てねばならない。ギリヤークがいつも通る必要に迫られて「西海岸の」アルコヴオか「東海岸の」ナトロの岸辺へと出漁するべく己の住居を暫時留守にするだけで、戻ってみるとそこでは、一部ないし全面的に破壊された己の家政と遭遇すること強いられるであろう。例えば、櫓に張った板がすべて持ち去られ、屋根が剥ぎ取られ、残しておいた日用食器が盗まれ、はたまた幕舎自体までが、悪意の籠る入植囚の手で破壊し尽くされるわけである。数年前のことだが、春季のナトロへの定例移動から戻ったアド・ティミ村のギリヤークらは、灰燼に帰した己の大村落をそこに見出した。同村は、ギリヤークらと軒を接して暮らすことを快く思わぬ入植囚らによって焼き払われたのだ。被害を蒙った——正確を期するならば、零落した——ギリヤークたちは、損害に対する補償は一切受け取ることもなく川を下って、村の新設を余儀なくされたのである。

この期に及んでは、ティモフスク・ギリヤークがやつつけ仕事の粗製幕舎に住み、多くの者が彼らの連帯感の保持にほとんど努めぬとしても驚くにはあたらない。翌年には新地を求め、新宅を建設せずに済ませられるとの確信を、彼らは全く持てないからである。労働の果実が保全されぬ所には、勤勉を促進する素地もない。

これらギリヤークの惨禍を惹起するすべての状況には今一つ、彼らが否応もなく入植囚らと付き合い、各種取引を実行せねばならぬという状況も加えるべきである。純朴で疑うことを知らぬギリヤークは常に敗者であり続けたが、それで

も年を重ねるごとに、彼らの間にも経験と警戒心が蓄積されてゆき、好機を逃さず異族人を騙すことを恬として恥じぬばかりか、あらゆる詐術にも長けた——何事につけても異族人を上から目線で蔑視し嘲笑の的とすることに慣れていた——入植囚たちには、彼らも不信感を募らせていった。

しかし、ギリヤークが己の諸欲求を充足するための手段を入手することはますます困難となる一方で、これらの欲求は、より文化的な渡来民との接触のせいで増長してゆく。かつては全く無縁だった茶が日常の必須飲料となつて、急須、茶碗と受け皿やコップの登場を必至とした。皿や匙やフォークさえも購入される。砂糖への愛着も生まれた。若い男子で煙草の巻紙なしで済ませられる者は稀である。女たちは、己と子供のためにスカーフを採用することもあり、若者らは首巻きを購入する。蓐麻製の糸は市販の糸にとつて代わつた。多くの幕舎には石鹼が出現し、僅かとはいえ、例えば最も裕福な家々には灯油ランプも登場した。馬鈴薯やパンやコップ、パンさえも、懐が許す者に限つて、またそれが許す限りにおいて購入している。塩は、特定の昆布料理に添えるだけの老人に比して、若者の消費量は著しい。手製の弓矢は、購入された銃や、高価な火薬・弾丸・散弾に駆逐されつつある。

ティモフスク・ギリヤークの貧困化の原因をめぐる私の考察は、最重要のものと第二義的なものの双方にわたっている。回復のための諸手段は今や、考察された諸事象の分析からおのずと導かれる。ギリヤークたちは旧来通りに生き、勤勞することがもはや叶わなくなつたのだ。

新しい諸条件に適應すべきである。サハリンに入植する我らが文明的「人種」の課題は、野蛮人たちが文化の上級段階へ移行するのを支援することにある。ギリヤークらが以前より狭い土地にあつても生存手段を獲得するべく、段取りを追いつつ教示することに加えて、島の植民活動もやはり一面に墮するような事態は避け、異族人の利益を常に斟酌しつつ進

められねばならぬ。「原始的」諸民族が文明的「諸人種」の文化を借用する能力は、多くの実例によって立証されている。文明の所産はともに分ち合うという前提で前者に接する所にのみ、好ましい結果は達成されてきた。ただ暴力にだけは決して訴えてならず、行動では信念、博愛、温和、寛容を旨とすべきである。

以下で私の提案する諸方策を詳しく列挙する際、ギリヤークらを対象にこの方向で実践された試行の若干は、貧困化した異族人に対するまさにこの支援方針、並びにその実践手法を完璧に正当化する結果をもたらしたことを、私は立証するであろう。

(1) まず初めに、ギリヤークの経済状態の改善を目的とする諸方策は概ね、彼らが牧畜と農耕を、狩猟や漁撈よりも重要な生業となすよう支援することにある。だがそのためには、ギリヤークらへの土地の分与が不可欠である。ティミ川の広大な全峡谷のかつての主人だった家長たちは今や、たとえ己の幕舎が建てられている狭隘な一画ですら、自分のものであるとは確言しえない。すでに言及したように、大半の家長は目下、3番目の場所で暮らしている。転々と住処を変えて、次にはどこに住むようになるか不明の状態が今なお続いている。この不安で無権利の状態は、異族人の精神生活や、彼らの道徳観念や遵法精神を完璧に委縮させている。ギリヤークらがここ二十年間、二度も三度もまた四度までも住宅を新築しつづけたことは、損失や荒廃以外の何ものでもないが、一、二年後には再び森の中に——切り開いて農地化すべく——一片の土地を新たに求めることが判っていないがら、土地の開墾や耕作に労働を投下することなどは、まさに言語道断である。

ルイコフスコエ村からデルビンスコエ村〔現ティモフスク〕にかけて、ティミ河の川筋に立地するギリヤーク村落（ヒチニ・ヴォ、イシユク・ヴォ、ノシブ・ヴォ）には、農耕に適する土地が皆無である（もしあれば入植囚らが見逃すはずはなかったろう）。

一八九六年、ギリヤークらが馬鈴薯の植付けに、それも曲折を経て着手したとき、農耕の適地を川に達するまですべて略取していた一人の農民から、行政当局の介入を得て一片の草刈地を辛うじて入手することができた。ノシブ・ヴォ村が立地する対岸は湿地であつて、農耕には頗る不向きな場所だったからだ。

ロシア人のウスコヴォ村はギリヤーク村の至近距離に立地している。両村の住民の間にはのべつ幕なしに諍いが生じて、ギリヤークたちは2露里川下へ村を移した。鬱蒼たる密林の脇の、格別に豊かな投網漁場近くの素晴らしい場所が選ばれた。しかし入植囚らもまた耕地を拡張ながら、ギリヤークらが新設した幕舎のほとんど鼻先の森で早くも抜根作業を開始する。ギリヤークたちはロシア人らへ、幕舎から一定の距離までは、原野の使用を自粛するように申し入れる。スラヴォ村では、入植囚の牛が牧地を追われて、まさにギリヤークの居住地まで進出してくる。牛が幕舎の間を徘徊すると、犬どもが吠えかかり、時には噛みつくこともあるが、その後は口論や苦情の応酬となる。牛は夜間も牧地に留まるから、ほとんど間断なく続く数百匹の犬の恐るべき大合唱は、幕舎住人らの安眠を妨げるが、彼らは朝が訪れると、干すために杭に懸けてあつた網がズタズタに裂けているのを見出し、怒髪天を衝くことになる。私は一八九七年の秋、網を懸けた場所には予防措置として柵が設けてあつたにもかかわらず、そのような現場を2度までも目撃した。

土地の分与を実施する前には、ティモフスク・ギリヤークたちと話し合いを持ち、彼らには最も便利な幾つかの地点に集住するよう助言することが望ましい。そうすれば、行政当局も仕事が進めやすくなり、またギリヤークらにも身辺の安全をめぐってより大きな保証が約束されるからである。

分与地の多寡をめぐって、些かなりとも適正な数値を具申することは困難である。ともかく、どのような村であれ3〜4デュシヤチーナ〔3・3〜4・4ヘクタール〕も分与すれば十分であるとした往年の数値をもとに、少なくとも二十〜三十年先

を読んだ欲求を考慮に入れるべきであろう。こうして初めて、のちに起こりうる入植囚らとの新たな衝突——ギリヤークらには破滅的な勝ち目のない闘争——を回避することも可能となるからである。例えば、入植囚の占拠するいずれかの草地を「占拠者から」如何にして剥奪すべきか、などといった分与の進め方の具体策に、私は立ち入らない。そのような個別具体的な問題は、その気になりさえすればあらゆる障碍を除去できる地元当局の全面的裁量下にあるからだ。また改めて申すまでもないが、分与される土地は然るべき専門家が予め検分すべきである。ギリヤークへの土地分与に際し、サハリンにこれまで存在しなかった土地所有を管掌する現地機関の新設を、私は些かも望まない。ギリヤークたちが占有する土地は、全島の一部として排他的国家資産であり続けて、彼らには使用権のみが付与され、彼らがそこに留まって耕作を継続する限り己の自由裁量下に置かれるという義に適った原則を、彼らに言い含めることは難しくあるまい。彼らがそれを放棄する場合に限り、土地は国庫へ移管されて、彼らはその土地に対する一切の権利を喪失するわけである。

分与の単位には村、即ち、村落共同体の総体が選ばれることが何よりも望ましく、向後はギリヤークの創出した慣習や分別の流儀に従う自主管理に委ねられる。万が一にも権力ないし上級規範の介入が求められるとすれば、それは望ましい形態や方向が十二分に究明されたのち、共同体の内政に対する干渉が必至となったときに初めて行われる。

ギリヤークの定住化をめぐる問題との関連で、幕舎型から、より便利で堅牢かつ衛生的な我らの建造物への移行は一考に値する。暗くて煙が充満し、湿って寒い幕舎が、その住人の健康に有害であることは間違いない、ティモフスク・ギリヤークの多くもこれを自覚し、明るくて暖かいロシア式百姓家に強い憧れを寄せている。しかしながら、然るべき支援が得られなければ、これらの憧憬も幾久しく画餅に留まるであろう。

他方ではまた、各村落へ大工の棟梁2名を派遣することも考えられよう。棟梁らはギリヤークの一団とともに働く中で、

若干の未知の技を彼らに伝授し、技術指導も然るべく与えてくれるだろう。ギリヤークの間には今や、大工を含めた頗る腕の立つ器用な職人たちも見出される。各村落で彼らとともに一戸の家を建てるだけで、その後は、彼らだけでこの稼業を継続することもできよう。大工たちの労働は、数年間利用することも可能であるが、その際は大工らの労賃を共同分担すべきであろう。ギリヤークの間には割賦か現金払いで鋸や斧や鑿などを国庫から支給して、上質な大工道具の普及を促すことも重要であるが、たとえ現金払いであつても、これは最も安上がりな入手方法である。

(2) ギリヤークの豊かさの増進を目指す第二の方策としては、まず馬鈴薯、次いでその他の野菜類作付けの組織化、そして最後には穀草植物の播種用耕地の整備を取り上げたい。

ここで今一度、以下のことをお断りしておかねばならない。もし異族人らの生活には全く干渉しない場合ですら、そして彼らの方もまた、文化的部族を代表する若干名の人々との親しい交際を望まず、後者の生活の単なる傍観者に留まつたとしても、一変した生存条件の圧迫を蒙るわけだから、やはり己の生活様式や、労働投下の諸手法を激変させることを余儀なくされよう。だが、そのような自然適応は遅々として進まず、通常はこの瞬間にも、その始まりですらかなり鋭く眼をそばだたせる一連の恠しい場面が先行しているのだ。だが、己の文明をいたく誇つてきた我ら文化的人間は、人道や啓蒙の諸理念が横溢する十九世紀末にあつて、幾許かは我らの咎で出来した異族人の過酷な運命を、平然と見過ごすことができるだろうか。我らは果たしてギリヤークたちを、——強者が難局をようやく脱して救われぬ間は、頗る多くの弱者を無慈悲にも破滅に導くであろう——浮世の荒波の気紛れに委ねることが許されるのであろうか。

我らがキリスト教とその高邁な諸理念の代表者として然るべき高みに留まるには、諸人を挙つて、だが誰よりもまずは最も孤立無援の、したがってまた誰にもまして苦悩する人々の痛みの軽減を図らねばならぬ。もしそのような文化的使命

をわが身に引き受けるのであれば、個々の先進的な人たちではなく異族人の全大衆に対して、いまだ覚醒するには至らぬ人々の意識の発展を促しつつ、別な生活の必要をすでに自覚する人々に寄り添うことで、支援の手を差し延べることを余儀なくされるであろう。だからして私もまた、あれやこれやの方策の組織化、即ち、可能な限り広い範囲にわたって、その遂行について語るわけである。

なканずく将来の活動家たちに、このようにささやかな私の経験から得られた所感を伝えるのは、恐らく、必ずしも無益なことではないだろう。

およそ七年前のことであるが、私の友人である一人のギリヤークに、馬鈴薯の作付けを始めるよう説得を続けた。彼は同意してくれたが、私の野菜畑で1、2時間ほど鋤を振るうや、背中が痛みだしたと言って仕事を投げ出した。

数年後、私はこのギリヤークと彼の兄弟に馬鈴薯を2ブード230キログラム「33キログラム」ずつ渡したが、植えたのは彼ら自身でなくて、植付けのために招いた一人の入植囚だったこと、したがってまた收穫後も、その一部を得ただけに過ぎぬことを知った。

一八九六年の初めにティモフスク・ギリヤークの間に飢餓が蔓延したとき、私は土地確保の必要を彼らに納得させる好機として、それを活用する肚を決めた。私は時間の許す限り多くの人と対話を重ね、自らも彼らの飢餓の原因究明に努めて、そのとき突き止められた確信を彼らにも伝えた。そして私の許には、ティモフスク・ギリヤークの全員がそれぞれ数回ずつ訪ねてきた。

至近のルイコフスク・ギリヤークとは友好関係を確立してすでに久しく、かなりしばしば顔も合わせてきたから、彼らとの交流にはあえて言及しない。「ティモフスク村では」私の宣伝の結果、ルイコフスコエを間もなく訪れる武官知事に、春の馬鈴薯の作付けに対する支援を陳情することが合意された。然るべき命令も発せられた。だがギリヤークらに約束を履行

してもらうのは、同意を取り付けるときほど楽ではなかった。五月になって、耕地整備に着手すべき時機が到来するや、ある者は食物が払底して、すでに始まったキュウリウオ漁のためアルコヴォへ赴かねばならぬとの理由で、またある者はシベリアウグイやイトウ漁などの支度に大童であると言つて、落伍者が続出した。私はその実情は認めたものの、依然としてたやすく諦める気にもなれず、再び説伏に乗り出した。抜きんでて頑固を貫いたのは一人の老人である。彼は私の論拠に全く聞く耳を持たず、とどのつまりは、土を掘り返したことが一度もないから今更そのつもりはない、との主張を執拗に繰り返した。同村のその他の人々の決断は老人の同意次第だったから、彼を放っておくわけにはいかなかった。この老人はティモフスク村の長老兼最年長の家長として重きをなしていたので、つい先ほど馬鈴薯植付けに同意したばかりの若者たちも、今や「ミリク（Милік—老人の名である）の意向が判らぬ以上、俺もまた判らんよ」と異口同音に応える。

そこで私はこの頑固一徹の、櫓の中にふんぞり返る老人を笑わせようと試みた。私も土を掘り返した経験はなく、彼に輪をかけた弱虫ながら、ともに働くべく彼の許に赴くつもりだと述べて、我ら二人でならば一人前の仕事がこなせるはずだ、と挑発したわけだ。せめて一度でも掘ってみて、きつ過ぎるようなら止めればよい、などとも進言した。私はこのように騙し騙しながらも、遂にミリクの同意を、したがってまた全村の合意をも取り付けたわけである。これは、掛け値なしの赤子であるギリヤークが己に有益なことを、私との良好かつ友好的な付合いに免じて遂行してくれたという、まことに希有な事例である。とはいえ、私の友情や相互間の好意が、他のギリヤークたちの間で土地の耕作や、その後の魚の塩蔵に同意を取り付ける際にも、大きな役割を演じたことを、私は一度ならず目撃し、また実感もした。その一人は私に向かつて「お前が望むのなら仕方ない、そうしてやるよ」と直言した。彼らの振舞いは、己の利益をいまだ自覚せぬものの、これを求める自分の両親を嘆かせまいとの一念で、あるいはまた己の愛する養育者らを満足させるべく、熱心に学びつづ

ける子供さながらであった。

土地が選定され、鍬と鋤も給付されたとき、若干の者に植付けを実地指導するべく、そして他の者らの許では開墾の實情も検分するため、私は再び赴いた。その折の情景は今なお、私の脳裏に深く刻みつけられている。村には舟で乗り付けた。川辺の草地には、幾人かのギリヤークが全力で鍬を揮っている様子が見えてきた。一人の成人の若い衆はこぼれる汗に音をあげて、脱いだシャツを腰の周りに垂らしている。今一人も負けず劣らず熱心に鍬を振るう中、脇に腰を下ろした彼の若妻は、この初めて目にする珍作業に従事する夫の一举手一投足に目を凝らしている。半盲の老人は榆の木陰に憩いつつ、盲目の妻とキセルを遣り取りしてちびちびとくゆらせているが、彼「即ち、老人」の鍬は年の頃十く十二才の子供らを持ち去り、それで処女地の硬い土くれを砕くことにこれ努めている。私の登場をきっかけに全員が活気づき、農作業は果たして正しく進められているかと異口同音に問い、各自が己の一筆を示しながら、すでに何ブード分が開墾済みであるのかを知りたがった。私が目算で答えると、注文した種芋が少な過ぎて追加発注した旨、嬉しそうに告げだした。作業は案ずるより産むが易しとのこと。我が頑固一徹老ですら、3ブード「49⁺」に代えて5ブード「82⁺」も作付けようとしていた。私が家を空けられぬときは、十四く十五才ほどの「ロシア人の」少年である私の生徒らを馬鈴薯の作付け支援に派遣した。生徒らはわが家でしばしばギリヤークたちと会っていたから、彼らに慣れていたとはいえ、それでもやはり若干の偏見をもつて臨んでいた。いまだ解放されるには至らぬわけである。

生徒たちがギリヤークの許への遠足から戻って来たとき、家長らの親切と歓待にいたく感激し、また楽しい使命の完遂にも満足していた。ギリヤークらの方も、子供に特有の特徴をあまた共有する若い指導者たちに満足していた。作付けの過程を見守る中で、私は指導に加えて、さらに監視も念頭に置いていた。ルイコフスコエのギリヤークには馬鈴薯が増量

して貸付けられたにもかかわらず、彼らの食料は不足気味だったから、ひよっとして大半の種芋を食べてしまうことも懸念された。そのことで私の許可を求めた者すら、何名かいたからである。我らはこのとき、合計で58ブード〔950⁺〕の馬鈴薯を植え付けた。

加えて、ウスコヴォ村とスラヴォ村でも30ブード〔491⁺〕が作付けられた。夏と秋はティモフスク管区を留守にしていたから、馬鈴薯の着実な生長や、その後の收穫が与えたはずの印象については跡付けることができない。十月には若干名と会い、その他の人たちと出会ったのは初冬であるが、全員が頗る御満悦、投下した労働を悔やむ者は皆無で、作付けは今後とも続けると約束してくれた。

以下で物語ることを可能にしてくれた一つの事実から推して、己の手がもたらした果実を利用しだした当座にギリヤークたちが味わった、筆舌に尽くしがたい喜びは想像に難くない。

私がティモフスク管区を出る直前、二人の若いギリヤークに招かれ、彼らの植えた馬鈴薯の点検を頼まれる。作付けから二週間以上経つのは何ごともし起こらず、種芋が一向に発芽せぬことを心配していたのだ。二人に給付された芋が作付けに適さぬ馬鈴薯ではなかったかとの危惧で、私の心も穏やかではなかった。彼らは私の点検を経ずにそれを受領していたからだ。我らはそのような危惧を胸に秘めて、さほど広くはないものの掘り起こされた草地に到着する。しかしながら、地中から顔を覗かせたばかりの馬鈴薯の小さな暗緑色の若芽を私が見つけて、それを披露しだしたときの二人の喜びようは尋常でなかった。元氣と笑顔を取り戻した我らは、落葉松が疎らに生える森を抜けて村に戻ってゆく。小径の両側には、摩訶不思議な草が繁茂していた。我らは菜園経営、はたまた農業の大盛況までも夢想した。ところで私は、これだけ豊かな草がある以上、ここで山羊を飼うのは造作もないことだと述べて、二人の道連れの気を引いてみた。私に劣らず陶然と

なつた若いギリヤークは、その内向的で引つ込み思案な性格にもかかわらず「どうして山羊なのか、僕は牛の方がよいと思うよ」と、おずおずながらも十分に真剣な口調で応えた。そして私は、単なる雑談ではないものを彼の声から聴きとる。彼は高ぶる気持に促されたように、己の胸にしばしば去来する秘められた着想、その心を騒がせてやまぬ夢想を口にした。そこで私は彼を「ギリヤークの文明のパイオニア」と密かに命名したわけだが、のちに魚の塩蔵に際して今一度、そのことを追認させられた。かつての彼は私にとって、単に激しやすくて打ち解けず、些かの好感すら持てそうにない若者に過ぎなかったが、この瞬間に彼の性格を解く鍵を私は発見したのである。彼は今や私にとって、完璧に了解可能な存在となつた。

彼は一方で、己の部族が貶められ、痛めつけられるのを苦々しく思い、屈辱感を覚え、たとえ本人に向けられたものでなく別のギリヤークへ向けて発せられたときでも、ありとあらゆる嘲笑や侮蔑的言辞に対して敵意や憎悪すら露わにし、ロシア人らと接するときには必ずそれを聞き咎めた。他方でロシア人移住者の文化には完璧に傾倒して、それを受け容れ、彼らとの間に介在する深淵を乗り越えるべく情熱的に邁進する。彼はまた常に、客としての私の訪問をこの上ない喜びと見做すように思われたが、しかもその際は、他の人々の間では瞥見されることもある、打算的動機が皆無だった。私に贈物をねだるようなことは決してなく、却つて、自分が私の役に立てることをいつも無上の喜びとしていた。この頃には、さまざまな想念に憑りつかれていた彼の頭が鎮静化し、激昂して猪突する心も和らいでいるように見えた。このときの彼には、自分が私と対等であり、はたまた「テストに対して有責の」ホストですらあるという意識が、多くのメリットとともに彼を魅了したから、自分の惨めな存在がそれへの羨望や不満を招来・惹起してやまぬ文化的世界へ、どうやら彼を接近させたかのようなのである。これは、ティモフスク・ギリヤークを代表する先進分子の典型例である。彼を研究し尽くしたあとで、

私は他の人たちの間にも適切で、多少とも發達を遂げた諸欲求を見出していった。

多分余りにも長くなり過ぎた脱線には、今や終止符を打つべきであろう。この脱線は、もし私がギリヤークらに些かの好影響を及ぼしうる最善の手法を究明できる場合に限り、また、その知識を欠くならば彼らに対する有益な影響について語ることは叶わぬような、ギリヤークの精神世界のよりよき理解に資するならば、有益なものとなるう。

行政当局はギリヤークの農耕を組織化する際の主導権を自らに引き受けねばならぬとはいえ、その実務は、むしろそれへ自発的に関与することを望み、したがってまた誠意と愛をもつて推進することが期待できる人材に委ねるべきである。少なくとも当初の数年は物質的支援が必須である。種芋と農具は、よし貸付けであろうとも給付せねばならない。この方策に着手する時機は、一八九八年の年初が頗るふさわしいように思われた。これに先立つ数年は飢餓が猖獗^{シヨウケツ}を極め、日常茶飯事に向けられるエネルギーすら枯渇しており、生活における大改革の実施などは論外だった。加えて、早春のティミ川には魚影が皆無で、備蓄食料も払底してしまつたから、その頃にはすでに魚が獲れる海へと、ほとんど全員が駆り立てられる。それでも何人かが残るとしたら、それは唯一、さまざまな品を抵当にして食うや食わずの暮らしながらも、住居や舟や乏しい家財道具を見張るための残留である。これらの資産は携行することも叶わず、さりとて残留物は荒らされ、壊され、盗まれる宿命にあるため放置することもできぬからだ。一八九七年には行政府が馬鈴薯の種芋について一切の支援を行わず、私は体調を崩してアレクサンドロフスク哨所で過ごしていた。ただ一人ウスコヴォの若いギリヤークのみが、馬鈴薯を2ブード^{「32・8」}ほど植え付けただけである。ギリヤークらが語るところによると、彼らが春にアルコヴォかナトロへ出掛ける必要がないだけの魚は備蓄されているそうで、かの地へ暫時赴く一部の人たちはアザシ狼が目的のこと。したがって、万が一、秋に不漁に見舞われたとしても、魚の不足が馬鈴薯で埋め合わせられることをギリヤークら

に納得させるべく、一八九八年の春には馬鈴薯の作付け事業を、可能な限り大々的に企画することが重要であった。それはきつと、彼らの間に作付けを定着させることにもなる。

もし必須の土地の分与がこの春にも実現するようであれば、穀類——あるいはせめて豌豆やその他の野菜——の播種用地開墾の着手にも好都合であろう。もし希望者が見出されるならば家畜も、なканずく馬を自由意思で編成された作業組に、生まれた仔獣での償還を条件に貸し付けるべきであろう。

私は、もし何人かが一つの場所にしっかりと根を下ろすならば、彼らは必ずや家宅と数デシヤチーナ（デシヤチーナはほぼ一ヘクトールに当たる）の土地を持つようになり、我らの家畜に対する需要はおのずと現れるだろうと確信している。犬には一年中餌を与えつづけねばならぬのに、ほかの用益には全く役立たずだから、犬の飼育が割りの合わぬ稼業であることに同意する人たちは、もはや確実に存在している。犬糧による運搬業は現金収入とはいえ、全員を支えるには余りにも実入りが少ないし、交易のための犬糧の旅にも、貧しさのゆえに必需品の対価に見合う品物さえも揃えられぬから、今や誰も敢行しようとはしない。ロシア人定住域内の道路を介しての犬糧行は、予想せぬ不便も多すぎる。

（3）ギリヤークの間から貧困を駆逐するための今一つの重要な方策は、彼らの備蓄魚加工法の変更である、と私は考える。大昔から確立されている今日の日干し法は、十日以上の持続する晴天を必要とする（その際は日干し開始後の数日が概ね山場である）。雨勝ちの秋には魚が発酵して腐りだすことも稀ではなく、乾製魚は頗るしばしば、腐敗の始まりのあらゆる兆候を示して、必要に迫られて食べるにしても、安全性や栄養面が問題視されるほどの酸味を帯びるようになる。他方では、塩に対する慣れがギリヤークの間ではすでに成立していて、若者世代は、好物である鮮魚の頭部軟骨さえ塩を付けて食する。したがって、ギリヤークらに魚の塩蔵加工を伝授することは極めて有益であるように思われる。私はこれを

通して、ある種の安定稼業——つまり塩蔵魚の国庫納入——をギリヤークらに提供することも想定していた。一八九六年秋の鮭漁の最盛期には、私がティモフスク管区を留守にしており、塩蔵は、言うなれば不首尾に終わった。僅かな数の薄塩の干し鮭を自前でこしらえたのは、春の内に1ブード「16・4」¹ずつの塩を贈っておいだ二組だけで、しかも私が戻ってきたあとの十一月末に魚の塩蔵加工に同意したのは、前記の若いギリヤークが代表を務める一組だけだった。もはや魚も僅かとなっていたから、一刻も早く黒貂猟へ赴くべく、皆は大急ぎで魚を捕り終えた。内臓を抜き、塩を振り、漬け汁の中で洗浄したのは二組の家族であるが、それを監督し、臨席指導したのは一人の知識人だった。塩蔵魚加工の実務に精通する彼は、私の要請を受けて、その仕事を二つ返事で引き受けてくれたのである。

魚の出来ばえは良好だったが、出来高の僅少性——納入されたのは僅か2樽——や、塩漬け作業参加者の僅少性のため、引渡しは目立つことなく行われて、望ましい印象を与えなかった。一八九七年にはさらに力を入れて、自家消費用のみならず国庫納入分も合わせた塩蔵魚製造をめぐる宣伝をギリヤークらの間で再開した。彼らは同意してくれたものの、それはあたかも強いられたかのような渋々の同意で、ある者は明らかに、心ならずもといった風情だった。提案された事業に、地元当局はいぶかしげに接し、島の上級機関からは拒否回答が届いた。私は想定された塩蔵魚製造計画の素晴らしい成果を深く確信していたから、個人資金を投下してでもがむしやらに進める肚を決めて、必要な塩や唐辛子や樽の調達資金を貸し付けてくれそうな人たちを捜した。

だが、ギリヤークらを代弁する形で改めて繰り返された知事に対する直訴が功を奏し、遂に許可が下りると、私は直ちに塩蔵事業の組織化に着手した。幾つかの作業組が編成され、漁撈の現場へは樽と塩が運ばれ、次いでは内臓抜きや塩漬けの日取りも決められた。ルイコフスコエからデルビンスコエにかけて立地する村々における技術指導は、件の知識人が

引き受けてくれた。私もそこに同席したが、ウスコヴォやスラヴォへ赴くこともあった。すべての作業が終わるまでには——その間には無論幾度かの中断もあったが——、ほとんど二ヶ月を要した。不慣れた作業の最中にさまざまな困難と出喰わして意気阻喪し、今にも脱落しそうな人たちの尻を叩くことも少なくなかった。果たして所期の成果は上げられるか、まともな魚が得られるのか、といった危惧に耳を傾けることもあった。ギリヤークの漁場に時折立ち寄る入植囚らは、決まって侮蔑的言辞を弄し、そこでの作業を勝手気儘に批評して、ギリヤークらの心に疑念を植え付けるのだった。あるとき漬け汁を煮る際、女や老人らが指示をはるかに超える量の塩を釜に投じてしまい、漬け汁を空けたあとも釜底にこびり付いたあまたの塩は、ナイフでこそいでも取れなかった。彼らは、己の手には負えぬほど高価な代物を壊したことに動揺する余り、激しく罵りながら監督に喰ってかかった。監督からは新しい水を釜に注ぎ、火に掛けるよう命ぜられて、間もなく塩が溶け出し、釜が元通りの姿に戻ったとき、彼らはただひたすら困惑するほかなかった。

事業が完了したのち、ギリヤークらは、どのような回答が届くのか、魚は首尾よく受理されるかどうかを、固唾を呑んで待ちつづけた。魚は、それを検分した行政当局者の評定によれば、入植囚の納入物の間で稀に遭遇する優良魚より、少なくとも優れた品質であることが判明する。それは清潔で、一切の異臭を伴わず、適正な塩加減、即ち、より長期の保存に耐えると評価されたわけである。ギリヤークたちは公の場で褒賞され、その魚の大半が折り悪しくも不合格とされた入植囚らに、手本として披露された。善良なる野蛮人らが歓喜の余り、否、どれほど誇らしげに顔をほころばせたかは、語り草となっている。これら卑しむべき「獣」と見下される彼らが、文明化して高慢な民の群れと面を突き合わせて、前者を見下すのが通常である後者が、今や前者によって貶められたわけである。

彼らは自信を得て己の能力を認めることにもなったが、それはさらなる自己実現の最初の必須条件でもある。こうした

感情は、彼らが文化を受け入れる過程を緩和するはずだから、専ら支えつづけることが必要である。国庫はこの事業でも失わなかった。塩や唐辛子やオリーブの葉の貸付けに要した出費は、55ルーブリ69コペイカに過ぎなかった。

これらの金額は精算時に返済された。樽は魚を詰めた状態で、監獄の倉庫へ戻された。漁獲作戦に参加したのは36名の成年男子であり、彼らは正味重量353ブード32フント「5795・2^{*}」の塩蔵魚を納入して、塩の代金を控除した296ルーブリ76コペイカを稼ぎ出した。従来からの巨額負債の補填分として取り立てられたのは、ほんの涙金に過ぎなかった。本年はティモフスク・ギリヤークが大不猟に見舞われたので、それは頗る適切な措置だった。大半の猟師は罾すら仕掛けられなかった。直ちにドカ雪が降って、ギリヤークらが罾を設置する前に川が結氷したからだ。最初の試みの結果がこの上なく魅惑的だったことも重要である。予想外の大金を手にしたギリヤークらは、この収入項目をさらに高く評価することになる。

以下では、漁獲作戦に際して望まれる幾つかの方策について語ろう。樽は返却されるわけだから、監獄当局はそれを無償で貸与できる。その際に樽は、彼らが橇に載せて自力で村まで運搬できる冬場に引き渡した方がよい。夏にはそれが極めて難しいからだ。ギリヤークたちには若干数の樽を最終的に贈与することも可、と思われる。往時には、肉を詰めて毎年配達される新品の樽が入植囚らに払い下げられたではないか。今はそれらの樽が倉庫脇で、山なりに積み重なって腐朽している。やむを得ぬ場合は、ささやかな対価を徴収するのもよからう。塩については、想定される国庫納入分の漬け汁に必要な量もさることながら、ギリヤークの個人的欲求を充足させる分までも予め貸付けるべきである。償還の保証は、今度の試みで明らかのように完璧である。事業の推進をギリヤークら自身に一任することはいまだ時期尚早であつて、彼らの塩蔵工程には監視者を配するのがよからう。だが同作業は、彼らが若干の技量をすでに獲得しているだけに、今やは

るかに容易であろう。アド・ティミ村にも魚の塩蔵事業を広めるべきである。同村が今回外されたのは、唯一、夏場にそこまで塩や樽を運搬する手段が欠如したからに過ぎない。幾人かのギリヤークは魚の塩蔵に同意しながらも、鮭の遡上の最盛時に――彼らがあれもこれも「即ち、塩も樽も」受領することが可能だった唯一の場所である――デルビンスクへ出頭することを断念した。一年で最も貴重な夏場の6日以上も喪うことになるからだ。魚の塩蔵事業を企図するギリヤークたちは今後、例えば、もつと使い勝手の良い魚用納屋とか、内臓抜き作業の机や庇、塩の収納箱など、若干の設備改善を求めることもありえよう。

作業組の編成は今直ぐにでも可能で、困窮者らには優れた漁網をこしらえるべく大麻糸（マタウス）を貸し付けることも有益だろう。今では水位が上がると頗るしばしば、とりわけ下流の村々では魚が全く獲れない。しかしすべてのギリヤークが自家消費分の魚は塩漬けにする。私は当初、自家用魚の塩漬けの必要性に固執することを望んで、魚を自家消費用に加工する者だけが国庫へも納入できる、と言いつづけてきた。だがあとでは、そのような遠回しの強制すらも行使せぬことに決めた。食料の塩漬けが民にとって有益である、と断乎として主張するのはまことに難しい。

製品の栄養分もさることながら、個々の生体によって異なるその消化度も重要である。当面は塩が、それにまだ慣れていない異族人の身体にどのような影響を及ぼすかについて、判断すべきデータは皆無である。とはいえ、ある者は自家用の魚を喜んで塩漬けにし、もし樽が不足しなければ、さらに多くを塩で加工する。その際は、国庫納入用の魚でも同じ樽を使用せねばならぬから、最初に塩漬けを終えた魚は乾燥のため外に空け、樽をよく洗ってから、第二陣として国庫向けの魚をその中に漬ける。自家消費用の魚は薄塩に加工するとはいえ、その頃はまだ暖かだったから、かなり大量の塩がやはり必要だった。ギリヤークたちは、自家用に消費された量の塩があれば、二倍はたまた三倍までも加工が可能となる

晩秋になって、自家消費用の塩漬けがもはや叶わぬことを悔しがった。それが叶ったのは、残された空樽を偶々入手できた数名の果報者だけに過ぎない。

ティモフスク・ギリヤークの瓦解した安寧を高めるための諸方策をめぐって、さらなる列挙に着手しよう。

(4) 現代の社会体制下で、生存を担保する諸手段を自らが独力で確保して、融資を全く必要とせぬような生産集団や個人は、自己資本を湯水のように浪費する頗る裕福な人々を別にすれば皆無である。ギリヤークたちは、ほかの誰にも負けず——ほかの誰以上ではないとしても——それを必要としている。高利に設定された融資は破産をもたすが、融資の全くの欠落は、網にかかった貧者を最後の一滴まで絞り尽くす高利貸しを生み出すから破滅的である。私がギリヤークたちと付き合ってから十年この方、彼らから最も頻繁に耳にしたのは、恐らく、入植囚らが弄するペテンや欺瞞を訴える苦情だったろう。ギリヤークはこれらの入植囚から、銃や漁網や高価な満洲産反物や槍や毛皮を抵当にして現金を工面したからである。生活必需品に対する欲求は極めてしばしば、それを入手する機会よりも先に立ち現れ、たとえ札付きの高利貸しであつても、その触手に否応もなく捉えられてしまうのだ。例えば、あるギリヤークは、出猟を前にして火薬や散弾を買うべき御足がなく、アルコヴォへの移動に際して道中の糧食を欠き、黒貂を手にながらも、良い商人の到来を待つ間は一握りの煙草や一摘みの茶にも事欠き、あるいはまたナトロへ赴く友人へ履物用のアザラシ皮の代金を託さねばならぬ。そのような場合のギリヤークは、たとえ僅かな額であるうとも伝を求めて奔走し、金を無心して、はした金のために貴重な品物を引き渡すのである。安上がりの、さらに望むらくは無利子融資の整備が必至の情勢である。その必要を疑うような方には次のように申し上げたい。私と同様に立て続けに何年も、ギリヤークらが来訪するたびに、次の稼ぎまで何とか食いつなぐか、焦眉の急を充たすのに幾許かのルーブリが必須だという訴えに耳を傾けるとき、また不幸を見て手を差し

延べることも、一ルーブリが必要な所へ一コペイカを差し出すことも叶わぬのかという非難を浴びたあとに覚える、幾百という苦しい思いを、自らも味わってみられてはどうか……と。

私の提案する融資窓口の開設をめぐる詳細はさほど重要でなく、然るべき当局者が同窓口の存在を必要と認めたあとで、彼らと合議して決めても遅すぎることはない。

融資銀行創設の可能性について言及することはより有益であろう。管見によれば、それには三つの手法がある。

第一は、「サハリン」拓殖（現経済）基金が一定額の資金をこの目的のために拠出するという手法である。同基金にとつては取るに足らない千ルーブリか、はたまたより少額でもよいから一気に拠出されることは、同基金の課題がそのような機関の支援にあるだけに可能と思案される。

第二の手法は、管見によれば、すでに各地に現存する異族人用資本を集約し、ギリヤークらが国庫へ償還するすべての貸付金もこの目的のために転用して、そこへ繰り込むことにある。ティモフスク管区の——ほとんど専らティミ河畔に在住する——ギリヤークたちは、飢餓に襲われた一八九六、九七の両年に供与された穀粉と米の貸付け分として、合計で880ルーブリ85コペイカの負債を抱えていた。213ルーブリはすでに償還されたから、600ルーブリ強が債務として残るわけである。この総額の一部は、不具者や老衰者や貧困者、はたまた死亡者の分に相当するから回収の見込みが立たず、取り立て不可である。よし500ルーブリは漸次償還されうとしても、これらの金子はギリヤークら自身の困窮救済へ振り向けられる方がより公正であろう。「異族人統治法」二百十六条によるならば、知事は、狩猟や漁撈が不如意の年には償還を前提としない貸付けを貧困者に供与する権限を有するからだ。

そしてまた実際に、ギリヤークの第一陣が支援を請願した一八九六年には、26名の全員に106ルーブリ64コペイカに

相当する穀粉と米が無償で提供された。その後、第二陣の請願者には貸付けとして供与されたが、その理由は、当時の私が無償供与を許容する条項の存在を知らずに、彼らの委嘱を受けて起草した請願書に、貸付金額は彼らによって償還されると明記したからである。因みに言えば、当初の26名は決して最貧者であつたわけではない。したがって、その他の人たちにも、無償還貸付けの受益権を付与したとしても一向に差し支えない。ギリヤークらを施しの大盤振舞いに慣らすことは有害であるから、彼らにはいつも全員が国庫に対して債務を負っているのだから、国からの借金は事情の許す限り必ず返還の義務を果たすべきだ、と私は厳しく告げていた。しかしながら、ギリヤークたちは全員が国に対する債務者でありながら、この債務の返却で同等の権利を享受するのではなくて、ある者には借り受けた全額の返済が義務付けられるのに、ある者は全く返済を要しないことを知るや否や、前者の許には何をもつても説明しえぬ、己に対する不正義の意識が生じてしまい、債務返済をめぐる一切の気遣いは忽ち雲散霧消するであろう。そこで、全員を均し並みに債務者とは見做すが、最も貧しくて、労働に不適と判明した人々には義務を免除した上で、残余の総額を漸次的に取り立ててゆくのが最も公正であろう。それとともに、これらの金子が、私の提案した資本形成に振り向けられるよう本腰を入れて陳情すべきである。しかるに、第一、第二のいずれの手法でも、その設置が叶わぬような場合は、個人献金という手段で資金を募るべきであり、そのような慈善事業に参加を希望する人士は恐らく見出されるだろう。

(5) ギリヤークたちには、大昔よりそれぞれの個別氏族の私有財産である川筋に対し、黒貂猟に従事する自らの独占権を確信させることが必須である。ただ一人の所有者に認められた小川の利用権は、すべてのギリヤークによって厳格に遵守されており、それが侵害されるような事態は極めて稀である。ロシア人猟師は見境なく、思い付くが儘の場所に罾を仕掛けるが、もしギリヤークの小川に侵入するならば、後者は黙って場所を譲るのが常である。もし己の小川に罾が設置さ

れたことを知るや、ロシア人に殺されることを懼れて、そこにはもはや近付かぬようなことすらある。本事例では、ロシア人らがギリヤークたちよりも格段に早い時季に出獵することも、彼らの有利な点として挙げられる。ギリヤークらは降雪まで満を持して、より長毛の黒貂を捕えるからである。ロシア人獵師の間にはギリヤークの小川の強奪を、川筋の清掃に少なからぬ労働を投下したことで正当化する者もいる。然るのちに彼らは、ギリヤークが6、7疋捕獲していた所で、40疋までも捕まえるわけである。原則的な観点からすると、そのような見解は、恐らく一世紀どころか、もつと長期にわたって守り伝えられてきたギリヤークの権利を侵害しているから正しくない。だが、それは実践的見地からも弾劾さるべきである。毛皮獣の豊かさは、国の資源として極力保持される必要がある。したがって、絶滅に瀕するまで濫獲してはならず、そのような行為は貪欲とすら称さるべきである。ロシア人村の占める空間の拡大や、それと軌を一にする森林焼失面積の増大によって、その所有者にとっては死滅したも同然の小川は、一つや二つに止まらない。残された小川は次から次へと、入植囚の獵師らに取り上げられている。その一方では、さらに多くの小川が、ギリヤークの村々から遠く離れているという理由だけでいまだ占有されていないが、——狩獵に加えて農耕にも従事するという点で、原住民に対する優位性をすでに確保している——徒刑囚出身の獵師らによって占守されることは大いにありうるだろう。

狩獵に言及したついでに、ギリヤークにとつて最も危険な競合者で、はたまた敵とさえも称しうるツングース「現エウエンギ」について、数語を費やすことは必至である。ツングースたちはつい先頃、ロシア人よりもあとに来島したにもかかわらず、莫大な領域を占拠することに成功し、秋になるとトナカイに騎乗して同領域を徘徊し、数百の罾を設置して、ギリヤークらとは比較にならぬほど大量の毛皮を獲得している。後者はオロチョン「オロツコとも称した、現ウイルタ」と組んで、ツングースとの間で契約——むろん口頭のものである——を取り交わした。ツングースはティミ川の右側の諸支流では獸を捕

獲すべからず、という内容である。河口付近の左側の諸支流は、彼らの裁量に委ねた。だが、ナトロ村のギリヤークたちは、そしてまたオロチョンたちも、ツングースらはこの契約を履行せず、禁止された領域にも出没して、他人の畠にかかった黒貂を横取りし、オロチョンに帰属する飼育トナカイさえも殺害している、と私に訴えていた。一八九六年、私はこの訴えを管区長官に伝え、彼の同意を得て、ツングース、オロチョン、ギリヤークの村長たちへ、一件について審議すべく招集令が発せられたものの、彼らは出頭してこなかった。私は、彼らの間に生じたこれらの悶着を現地で調停し、ツングースらとの境界を厳密に線引きするのがよからう、そうすれば彼らも、権力の介入後は契約侵犯を自粛するのではないかと考えた次第である。ギリヤークらは私に対して、ツングースは浮浪者よりも恐ろしいと語った。浮浪者に関しては、どうやら一対一の出会いが危険のようであるが、ツングースとの遭遇では死を免れえぬからだそうだ。ギリヤークたちが忽然と消息不明になることがあり、皆はそれを有害なツングースらに帰せしめる。そして、もし後者の粗暴さや、——シユテルンベルグ氏の言によれば、「わしらは陛下の臣民で、洗礼も授けられておるのに、ギリヤークやオロチョンどもは犬を喰らう輩だ」と述べて、両者との親縁関係を否定しようとするときに見せる——憤怒や軽蔑の表情を顧慮するならば、それは極めてありうる話である。

今は「ウスリー河口の」ニコリスクを訪れた誰かが現地で直に買い付けて来る満洲産品を、もしも拓殖（現経済）基金が販売用に取り寄せてくれるならば、ギリヤークらへの大いなる支援となるであろう。彼らの圧倒的多数は、毎年秋に来島するアムール・ギリヤークたちからそれらを購入することを余儀なくされているからだ。確かにニコリスクでもかなりの高値であるとはいえ、当地の異族人らがアムール・ギリヤークから買うときは二倍か、それ以上に高騰している。例えば、24ルーブリの綿入れ長衣に、こちらの購買者は47ルーブリもの大枚を叩いており、一ペの青地反物（12アルシン）⁸・

5^{ペイカ}）には 30 コペイカの代わりに 1 ルーブリ 50 コペイカも、また 50 コペイカのフェルト帽子に 1 ルーブリも支払うわけがある。

これらすべての品物をウラヂヴオストクから取り寄せるか、さらに望むらくは中国から直接に仕入れるならば、その価格は遙かに低く抑えられよう。私から、基金の売店を介して異族人らの欲する満洲産品を取り寄せる話を聞かされたギリヤークは、この企画が実施される可能性を耳にただけで挙つて欣喜雀躍した。この措置はアムール・ギリヤークの搾取的目論見への有効な対抗策とならう。彼らの毎年の来島が樺太島の異族人にとっては極めて有害である、と多くの人が認めるからである。私としては、あまたのギリヤークに根掘り葉掘り問い質した結果、アムールの同胞との付き合いは、ただ一つの欠点を補つてすら、なお余りある数の利点も有するとの確信に立ち至つた。アムール・ギリヤークらは、島にその姿を現すだけですでに毛皮に対する需要を増大させ、その売値を高騰させる。だがそればかりか、彼らはあらゆる黒貂にわたつて、商人や役人など地元のたまさかの買い手より二倍もの高値を提示する。このような状況については、やはりアムール・ギリヤークへの売却を好む若干のロシア人猟師も証言している。しかも彼らは、たまさかの買い手が概ね最上級の毛皮のみを求めるのに対して、黒貂の品質をえり好みせず引き取るのだ。しかし、アムール地方の異族人商人らが毛皮をハバロフスクや中国の大商社へ直接に納入していることに注目するならば、これまたむべなるかなである。加えて、彼らはまた古くから、これら大商社とすでに安定した商取引を展開し、ロシア全般の、なかならずこの東方辺境の商人らを取り慣れてきた利幅よりも、恐らくは遙かに小さな利幅にも甘んじられるわけである。アムール・ギリヤークらは、サハリン・ギリヤークにとつてことほど左様に貴重であるほかに、ギリヤークの出猟直前——即ち、道中の糧食を手し、また抵当に入つた銃を請け出すためにも御足が必須であるにもかかわらず、手元不如意であるまきにそのとき——に、後

者に資金を貸し付けてもくれる。ティモフスク・ギリヤークたちは毎年秋になると、救済者であるアムール・ギリヤークらの到来を待ち侘びるが、多くの者は、彼らの支援なしでは猟に赴くことも覚束ないであろう。アムール・ギリヤークらはさらに、己が島内の旅とアムール地方への帰郷の双方で利用する犬橇の御者として雇った、地元の異族人たちにも若干の賃金を支払う。その道中では無主の小川でも、また持主のある小川でも彼らは猟に従事するが、後者では常に一定額の入会料を支弁する。たとえこれらすべてが、——ある人々によると、ロシア人村落から遠く隔たる場所以外では認められたと推定される債務奴隷の域に達したと称されるような——当地の異族人に対するアムール・ギリヤークの搾取の印象を薄めるには不十分だとしても、アムール・ギリヤークのサハリン来島を禁止することによって、この悪と戦うことはやはりできない。我らは自らの異族人たちを、後者の圧迫からは解き放ったとしても、さらに過酷で、より勘定高い別の商人らの抱擁の中へ投じることにはかならずぬからだ。自由住民の各々に移動の自由を許容する適法的自然権は、もしそこに犯罪の意図がなければ、その制限は何をもつてしても正当化することはできない。アムール・ギリヤークらが持ち込んでいたこれら商品の基金売店における販売が開始されるとともに、搾取の土壤も消失してゆく。今はこれらの商品が以前よりも著しく安値となった。サハリンに商店が登場するとともに、例えば煙草や錐や唐人稗といった商品の多くが、アムール・ギリヤークらの搬入品ではなくなり、ロシア人の周辺で暮らすギリヤークから購入される毛皮も、今や概ね現金で取引されている。

ギリヤークらにとって有益な今一つの方策——彼らに手工業を奨励すること——についても言及する必要がある。彼らの間には間違ひなく、各種の木彫や刻文などの才能が認められる。対称的に見事に配された文様が施される優美な日用品がすべからず、斧とナイフ——その一つだけはやや湾曲した形状である——という極めて単純な工具だけで製作される事実

は、ただ驚くほかない。あるとき職人の一人に紙切りナイフが示され、同じものをこしらえることが求められた。この注文を彼は見事にこなして、それから四、五年後にはナイフの形状でも、また彫りこまれた文様にも新機軸を打ち出して、名人芸の域に達した。彼は今や注文に応えて、均整のとれた卵形の頗る美しい木杵を製作している。このような工芸品は「欧州部」ロシアカシベリアで販路の開拓を試みるべきであろう。その獨創性や、野蛮人作品には異例の優雅な仕上げに然るべき注目が寄せられるからだ。ギリヤークの職人には、たとえ当面は未知であれ、そのような作業を軽減させるような若千の工具の入手にも便宜を図るべきであろう。手工業の製品には、例えば、プリアムール地方駐屯軍の需要に応えるスキーや、蓐麻製の麻屑や細引きを加えることも可能である。若干名のギリヤークには、せめて監獄内の工房であれ、簡単な桶作りの業を伝授することもまた望まれる。彼らの間に魚の塩蔵を根付かせることの重要性を顧慮するならば、それは彼らにとっても頗る有益であろう。ギリヤークとの取引でついぞ誠実であつたためしのないロシア人の桶屋には、ゆめゆめ頼らぬことが肝心である。

医療活動がギリヤークのより身近な存在となることは頗る重要である。彼らがそれが必要とする度合いは、徒刑囚あがりの渡来住民に些かも劣らぬであろう。彼らが我らの医療に信頼を寄せていると主張するのは当面無理だとしても、それに対する嫌悪や恐怖もやはり見られない、と言うことができる。若干の薬剤、なかんずく外用薬は、すでに多くの者が実際に経験済みで、評判も悪くないのだが、ギリヤークらは喜んで薬を受領するにもかかわらず、間もなく服用を止めるという事態も頻発する。これは、彼ら自身の薬剤の圧倒的多数がシヤマニズムか「丁・フレイザーの提唱する」「類感呪術」にかかわる事実によって説明される。したがって、我らの薬剤にも同様に対処して、例えば、咳止め用粉薬は入手こそが先決で、咳が止まるまでの間、彼らはそれを密かに身に付けるだけで十分と見做すわけだ。

最善の措置は、医師によるギリヤーク村落の定期巡回を十全に組織することである。当初の恐らくはかなり長期間にわたって、緊急事態が出来せぬ限り、准医師や通訳には異族人の間で医療行為をさせぬことが重要である。

通訳らは己の無知や経験不足から、芽生えたばかりの信頼を容易に壊しうるからである。多くの者が己の崇高な立場に立ち続けられず、何らかの強要や、露骨な蔑視や、横柄な態度によって、医療を必要とする異族人と、医療を遂行すべく任命された人たちの間に、深い溝を作りだすこともやはり危惧される。ギリヤークの間にはびこる主要な疾病が未詳で、彼らの身体持久力や強靱性、疾病体質や衛生・生活環境が不明である間、つまり、疾病が正しく診断されたときでさえ、薬剤処方に必須の基礎データが全く欠如する間は、生半可な専門家らに医療行為を託するのは危険である。管見によれば、上記の諸条件のすべてをよく研究し、可能な限りで医学的診断を重ねて、異族人の間に間違いなく存在するはずの伝染病の発生源を突き止めてくれそうな医師の、なるべく早急な派遣が切望されるわけである。

このところティミ河口に毎年渡来する日本人らが天然痘を持ち込む前に、ギリヤークらへの種痘実施も急ぐべきだろう。数十名はおろか数百名もの犠牲者をもたらすような不幸が出来したあとで、ようやく接種に着手したとすればまことに遺憾である。シュテルンベルグ氏は島内巡回の旅の途上で、種痘に対するギリヤークらの信頼に満ちた態度を確認したが、実際に接種する際は少なからぬ抵抗にも遭遇した、と一八九六年版の『サハリンスキー・カレンダー』に記している。ギリヤークに対する種痘が、アレクサンドロフスク管区ではすでに数年にわたって試みられてきたが、不成功に終わることが通例だった。接種を受けることに同意したのがロシア人の近くで見聞を広めた、概ね看守を勤める僅か二、三名の若者だけだったからだ。

一八九七年の夏、ロバス医師がギリヤークらの種痘実施に際して、私に協力を求めた。アレクサンドロフスク哨所に至近のアルコヴォとアグネヴォの両村では、ほとんどすべての村民を説き伏せて——例外だったのは最も耄碌した二、三の老婆や老人である——首尾よく種痘が実施できた。接種を受けたのは男女合わせて50名の大人と57名の子供たち。残念ながら不活性の痘苗だったことが判明し、被接種者の多く、なかんずくアルコヴォ村では種痘がつかなかった。この目的での巡回の旅は中断されることとなる。そのような不首尾にもかかわらず、異族人には依然として不愉快である同措置を再度試みることは、それに対する彼らの信頼を失墜させかねぬだろう。この事業における成功の素地は無論、上記両村のギリヤークらがすでに一度ならず寄せてきた、我らの医療に対する全幅の信頼であった。彼らの多くは、隣接する幾つかのロシア人村において、種痘の措置自体を目撃してもいた。必要だったのは、ほとんど全員の因循姑息と保守性の、そしてまた若干名の頑迷の克服である。この件では、彼らの言葉に対する私の知識が奏功したが、彼らとの友好関係はそれ以上に有益だった。アルコヴォの村人はほとんど専らティモフスク・ギリヤークだったが、後者の内の若干名はアグネヴォ村にも在住していた。私は誰に咎められることもなく、種痘の現場へ行くのを嫌がる子供たちの手を取って連行できたが、これは躊躇を禁じ得ぬ両親が自らではなしえぬことだった。一人の男の子が泣きだすと、両親と周りの老人たちは「大丈夫だ、彼は良いお人だから」と言つて、宥めてくれた。一部の子供たちは、私の古い旧知だった。年輩者には説得もさることながら、子供に対するような冗談で機嫌を取ることもこれ努めた。恐らく、私が持参した手土産も幾許かは役に立ったであろう。接種後に、子供は飴と胡桃を、大人は煙草をそれぞれ受領した。少なくとも一人の頑固なアルコヴォのギリヤークは、度々使者を遣つて招いたにもかかわらず、話しにさえ来ようとしなかった。私は彼の幕舎へ赴き、あらゆる論拠を挙げて半時間も口説き続けた。すべてが徒勞に終わつて、私が立ち去ろうとしたそのとき、彼はいきなり、もし

贈物が貰えるならば同意してもよいと言いだした。我らは商談を開始して、煙草半フロント「205^ギ」で手を打つことになった。いずれにせよ特筆に値するのは、一度情性がすでに克服されて、若干名の大人が種痘を受けるや、他の人たちは、若干の例外はあるものの自ら接種を申し出たことである。アグネヴォ村では、すべての作業が終わって、我らが退去しようとしたとき、一人の年老いたギリヤークがロバス医師に近付くと、無言で立ったまま大袈裟な溜息をつきだした。医師は遂に老人へ注意を向けて、何か御入用ではなかったか、と訊ねる。彼は急き込んで腕を指さしながら「わしに注射せよ、接種してくれ」と応えるのだった。同様な事態はアルコヴォでも出来し、一人の老女が、皆はすでに家路についたあとも、種痘を行っていた准医師のニコライエヴァ女史の脇に座り続けた。同女は非難をこめて、私が彼女には袖をまくり上げるよう命じなかった、つまり種痘をしでけなかった、と説明した次第である。

管見によれば、管区内に幾つかある医院内に、異族人専用のささやかな分室を設置することも重要であろう。多くの場合、病人に対するまともな支援は、医院の提供する適正な医療活動を通してのみ保障された。チエルディンツェフ医師は一八九七年の春、私が彼の許へ患者として連れて行ったギリヤーク女をめぐって、まさにそのような結論を私に告げた。だが同女は、入院の必要を重々承知しながらもそれに同意せず、チエルディンツェフ医師が、本人の面倒を見るために年老いた母親が付き添うことを認めたとき、彼女もようやく幾許かの歩み寄りを見せ始めた。泥濘期が到来し、病人を送り届けることができなくなって、半ば承認された提案も実行に移すことが不可能となった。

異族人専用の独立した病室であれば、看護師さえも彼らの仲間から選ぶことは可能だから、一般医院におけるように異族人らを怯えさせることもなからう。彼らにとっては、同室の入院患者である徒刑囚らの側から、そして恐らくは患者に對する配慮や思いやりのなさでは何らの遜色もない徒刑囚上がりの看護師らの側からさえも、身をもって体験することに

なる苛立ちや蔑視が、やはり耐えがたいわけである。異族人らの日常生活からひどくかけ離れた院内秩序も余りに辛いものである。ティモフスク管区では、ある医院に入院していた一人のアムール・ギリヤークが、ある准医師の家に移ったのちに殺されるという、痛ましい事件が起きた一八九七年初め以降、異族人らは病院全般に対して恐怖さえ感じている。独立した分室であれば、異族人の入院患者らもすべて容易に慣れることができて、患者と、彼を介護する看護師の双方にとっても、衛生観念と同習慣の温床として役立つことだろう。

諸民族の生活を指導する人々の意識にますます浸透しつつあるのは、以下のような見解である。即ち、高齢者・不具者・孤児・無宿者は必ずしも、しばしば彼らを自力では支え切れぬような個々の家族が面倒を見るべきとはいえず、彼らを全体として庇護すべきは社会ないし国家であるという見解だ。この原則が大々的にサハリンへ適用された事例としては徒刑囚住民が挙げられよう。彼らは正常な生活環境から強制的に追放された以上、自らの欲求への配慮を要求する特権も有するわけである。しかし、かつて隔離されていた当地の異族人らの生活に対する強制介入は、この視座からも島の残余の住民と彼らを同一視することになる。不具者や労働能力喪失者に対する庇護策はすでに開始されている。一八九六年に浮浪者らの襲撃で頭部に負傷したギリヤークのポルカ (Polka) は月々の手当を受給しており、ティモフスク管区で一八九七年の養老配給対象者に登録されたのは、肺結核を病む恍惚老人オフィン (Ofin) ——今はすでに死亡——と、脊柱の曲った不具者の若い女グヴチ (Gvut) である。このように不幸な境遇の者、自らも赤貧洗うが如しの親族に重荷と見做された者たちは、ティモフスク管区内に十名を下らないが、彼らは国庫からの恒久的支援に浴するのが至当であろう。その際は、不幸で病身の異族人らが以降も支援を受けるようなとき、自分の仲間から引き離され、一般の養老院へ移るよう要求さるべきではなからう。このような要求は拒絶も同然だからである。

ティモフスク・ギリヤークの状況改善に資する方策の一つとして、私は異族人事務を管掌する裁判部の設置に言及した。この関連では、如何なる機関の新設も一切不要であること、これがまさに私の深く確信するところである。ギリヤーク相互間の諍いや悶着で、ロシア官憲の耳にまで達したものは今のところ皆無である。したがって、新しい司法権力に対する欲求はいまだ生まれていない。ギリヤークらが最も尊敬措く能わざる人々の間から自ら選んだ数名の同胞を、正規の判事に任命することだけは有益であろう。彼らは今も、自らの間では滅多に起きない訴訟を審理するというより、むしろ敵対する両当事者の和解のために仲裁役を務めているからだ。

これら名誉調停官のロシア官憲による認証は、さらに大きな権威と有益な影響力を同官に付与するであろう。もし異族人間の係争案件を調停機関へ寄託し、同機関には、たとえ評決権を有するギリヤークの特別代表を何名か送りこむとしても、形式主義がはびこるばかりで、何の益もないだろう。このような法廷に両当事者間の完璧な平等はありえず、その一方、即ち、ロシア語に堪能な側だけが優先権を行使しつづけることになる。

そしてこの言語能力は今や、それを獲得した者の特権と化して、——例えば、ロシア語を解さぬ別の氏族のギリヤークらの依頼で通訳を務めるような場合に——この特権には報酬が伴うこともある。比較的流暢にロシア語を操る一人のギリヤークが、ロシア人から遠く離れて暮らす別のギリヤークに対する請求権を私に委託して言うことには、相手に引き渡された花嫁のために彼がかつて支払った婚資を、相手は返却すべき義務を負っているようで、彼がロシア当局への提訴に踏み切れば、ロシア語の話者を怖れる相手は己の無力を認めて、支払に応ずる筈だと打ち明けた。我らの法廷はギリヤークの間に、往々にして濫用をもたらす「文字が記された紙」に対して、さらに大きな恐怖も創出するであろう。ここでは一例として、ある典型的事例を紹介する。かつては看守を勤めたが、その後には遠方のナービリ河畔の村に定住して、そこで

妻を娶ったという一人のギリヤークが、二年前に私を訪ねてきた。彼は細君の父親を伴って現れ、細君がオホーツク海岸出身のギリヤークとともに出奔したと訴え、何らかの書付けを記すよう懇願した。彼には運命に逆らわず、明らかに相思相愛の恋人との同棲を細君に許すよう、私は助言した。彼が頑として同意せぬので、私は一片の紙切れに、他人の妻を奪うのはよろしくない、と戯れ半分に書いて渡した。我がギリヤークは、私からせしめた封筒にその書付けを収めて立ち去った。

件のギリヤークはその後、タイガではむろん誰も目を通すことのなかった同「文書」を盾に、格闘や裁判沙汰を経ることなく細君を取り戻したことを知った。己の戯れの手前、私はいささか気まずい思いをしたが、今年になってこのギリヤークの細君が再び別の男の許へ走り、夫もすでにそれと和解したと判って、私は胸を撫でおろした。わが国の裁判が不便である所以は、よし異族人のためにどれほどの修正や追加が施されようとも、法廷が幾つかの中核的拠点に開設され、遠方からその都度、時には数回も出頭せねばならぬ両当事者や証人らに、多大な負担を強いる点にもある。わが国の裁判審理それ自体も、専ら一方の当事者がもう一方の当事者を苛立たせ、ギリヤークの温和な性質を歪めることに終始するのである。私は、あれやこれやのギリヤークから蒙った侮辱について縷々告げられることもあったが、その際は、加害者には何も語らぬよう釘がさされた。争議の仲裁役のお鉢がようやく回って来ると、加害者の前では、被害者から何も聞いていないかの如く振る舞うよう求められた。ギリヤークらはあからさまな敵対関係を好まぬから、友好的で平和な関係を破壊するような事態は、すべて避けて遠ざける。正義を侵害する側を些かも刺激せず、傷つけぬような法廷指揮などは論外であるが、それはまた、指摘されたばかりのギリヤークの部族的特徴とも合致せぬわけだ。そしてこの好感のもてる特徴は、ギリヤークの性格や気質に合わせて確立されたものとは異なる方法で、己の痛みが補償される機会が登場するや、忽

ち瓦解するであろう。両当事者から均しく尊敬され、両者と緊密な関係にある第三者の仲裁を、王立裁判所〔常設の正規裁判所〕よりもはるか上位に設定すべきである。万が一その第三者が、己の称号にふさわしい高所に立っていないことが選出母体によつて決議されるならば、名誉職である調停官は罷免されることもありうるからだ。

加えて、王立裁判所はその形式主義ゆえに、ギリヤークらに好感を与えぬだろうとも思案される。彼らが同裁判所へ訴え出るようなことはまずないが、あつても極めて稀であつて、閑古鳥の鳴くような機関に留まるであろう。しかも、彼らの法概念は我らのものとは著しく異なるから、彼ら同士の争議に対して、我らが何らかの適切で満足のゆく解決を見出すのが困難な場合もあることを考慮すべきである。例えば一八九七年の夏、アルコヴォ村では樺太鱒の海から川への遡上が、なぜか余りにも早期に、突如として終わつてしまった。原因の追及が始まる。一部の人たちは、橋を渡つて魚を驚かせたとして、二人の女を糾弾する。ギリヤークの慣習によれば、赤ん坊を亡くした女は向こう一年、川を渡ることが禁止され、もしこの禁が破られると川には魚がいなくなることが判明した。あるいはまた、魚を川から駆逐する原因となつた鯨骨片を河口の底に埋めたとされる、一人のギリヤークを槍玉に挙げる人たちもいた。告発された男と話しあつた私は、彼が最年長のアルコヴォ村民であるにもかかわらず、誰も彼を自分の組合に誘わなかつたため、腹を立てていることを知つた（ギリヤークたちが男に声をかけなかつたのは、彼が己の舟をロシア人漁師らに売却して、その後は概ね彼らと組んで漁撈に従事していたからである）。そのような侮辱に対する男の怒りが炎上し、全員を罰する決意を固めたわけである。彼はそのことで実の息子をはじめ、何の咎もない子供たちまでも傷つけたのだ、と私が諭しだすと黙りこんで、数日後には、骨は掘り出したと私に明言した。にもかかわらず魚たちはむろん、いまだ姿を現さなかつた。

最後に、ギリヤークらの精神的諸欲求についても数言を費やすことが必須と、私は考える。

一八九四年のことだが、私が幾人かの若者に、もし5名以上の人数が集まるならば自分が教師を務めることを約束して、読書きの学習を提案したところ、現れた希望者は僅かに一名、十才の少年インディン (Indyn) だけであった。その他の者らは千までの数字の書き方や、己のほかに数人の名前について、その綴り方をさつさと身につけると、それで満足してしまった。私はインディンにもそれだけを教えた。その後は彼と出会うことが稀となつて、彼のことはすっかり失念していた。一八九六年の冬に私の許に再び通い出すまでに、彼はすでにすべての字母を覚えて、それらを組み合わせて音節を表現する能力までも身に付けていたと私は確信する。彼は知合いの入植囚や、アルコヴォのギリヤークの許へ魚を求めてやつて来るロシア人の子供たちとの交流を、学習継続の場として活用してきたのだ。一八九六／九七年の冬場はやや頻繁に私の前に姿を現したが、彼はその都度、必ず練習を重ねて——とりわけ一人の未成年の生徒は彼との共学を楽しんだ——、春にはすでに撰文集の軽い読物を、筋を辿りながら読むことができ、ゆつくりではあるが、すばらしく整った明晰な字体で記し、しかも書かれた文の意味は常に了解可能でもあった。すべての同村者は彼を「わしらの書記」と呼び、読書きの学習を希望する者もその数を増した。一八九七年の夏、私はアルコヴォにて6冊の初等読本を配布することになった。教師に任じたのは「読書きのできる」インディン少年であるが、彼には、読書きを学んだ生徒の頭数に比例する謝金の支払いを約束した。一人の生徒は仕事で数日も欠席を重ねるので課業が思わしくないとか、今一人は怠け者だ、などと愚痴をこぼしにやつて来る、小さいながらも真摯な教師の来訪は、可笑しくもあり、また可愛くもある。ティミ川に鮭が遡上する秋には課業が中止されて、すべての生徒がそれぞれの村へ帰省したが、冬場にも課業を継続したのは一人の若いギリヤークだけで、すでにすべての字母を覚えた頗る有能な今一人は、自学自習で読書きの勉強を続けた。ギリヤークらに読書

きを手解きする際、彼らが余りにもロシア語を知らない過ぎて、大量の語彙を新たに説明せねばならない——とはいえ多くの単語は、彼らにとつて不可解なままである——から、これ以上の段階に達することは無理であらう。初等読本の受領を希望した内の3名は、最もありふれた幾つかのロシア語常用句しか知らなかったので、配布は見合わせることにした。ともあれ、頭在化した知識欲は、例えば、本や紙やインクなどといった学用品を供与することで支える必要がある。ギリヤーク人子弟のために特化した学校の設置は、当面望ましくない（ギリヤークらを侮辱する恐れのあるロシア人たちの共学はありえぬから、私は「特化した」と述べたわけである）。ところで「望ましくない」わけは、ギリヤーク人子弟の特異で、極めて繊細な氣質が求めるような教育者がサハリンに登場するには、どうやら暫くの時の経過が必要のように思われるからだ。彼らの教育は余りにも高潔「な事業」であるから、我らにはそれを想像することすら難しい。罰は、たとえ最も軽微なものであれ論外である。両親らは子供たちの多くに、なканずく思春期の子らに対しては、彼らの強すぎる感受性や、高度に発達した自尊心を慮つて不幸な事態を懸念するあまり、一切の叱責を差し控える。他愛もない小言を喰らつただけで耐え切れずに首を吊つて果てるような事例も、決して珍しいことではない。ギリヤークらの能力は、管見によれば、すべての低級「人種」がさらなる発展の保証を具えているという、幾久しく承認されている真理によつて裏付けられる。なるほど私は彼らの間に格別な知識欲を認めないし、若干の人たちの見せる教育への憧れも、いわば読書き算盤に向けられた意欲も、功利的な分別によつて説明される。だが、彼らの間における上首尾な知識の普及は、度し難い偏見や迷信の数がロシア人農民におけるよりも少ない分だけ、より有望なのかも知れない。彼らは多くの問題で憶測はせず仮説も立てず、自らが權威と見做す人たちの言うことには謙虚に耳を傾ける。私は過日、日蝕はなぜ起こるのか、という質問を彼らから受けたとき、同現象のからくりを、彼らの視覚に直接訴える形で——ギリヤークの幕舎が舞台で、時は夜だった——実演して見せる

と、居合わせた者は一斉に、確かに頷ける話だと相槌を打って、「全くその通りに違いない、お前は昔話を全部読んでいるからな」と付け加えた。残念ながら、書かれたことのすべてが必ずしも事実、正義、不動の真理ではないという考えが、ギリヤークたちの頭にはいまだ浮かばぬわけである。

どのような民族であれ、その生活に新しい社会状況が、またそれに由来する新しい欲求が出来ると、そこにはまた異なる対処の方策、即ち、別の道德観念も新たに創られてゆく。ロシア人らの近くで暮らすギリヤークたちの許では、この別な段階へと向かう移行過程が当面は萌芽的で、不分明な状態にある。社会体制が総体として順調に保持されるには、所与の社会か国家へその構成単位として包摂されるすべての社会集団や部族を統合する、単一の道德律が必至である。「オーストリアの」社会学者「L. グンプロヴィチによると、そのような単一の道德律をすべての社会集団の間に行きわたらせることこそ、国家が意識的に——あるいは無意識ながらも——追求すべき国家目標であるという。人類の至福を求めて奮闘する最優良の人士や熱心家の叡知の中で育まれている「諸民族の兄弟的同盟」には、ギリヤークたちも引き入れることが頗る望ましい。そして、この高潔なる同盟がキリストの教えの諸原則の名の下に、その純粋な姿で樹立されるべきことには議論の余地がないとはいえ、ギリヤークらのキリスト教への移行は、いまだ時期尚早と提案される。もしも、この移行が今ないし近い将来に敢行されるとしたら、既成の信仰や確立された風俗習慣を傷つける、余りにも形式的な移行に終わらざるをえないだろう。

以前と同様な異教徒であり続けるキリスト教徒の惨めな実例は、当地サハリンのオロチョンの間ですら見出される。とはいえ、恐らくはギリヤークたちにも、改宗に伴う物質的不利益が、今後とも長きにわたってそれを思い止まらせるであろう。但し、「ロシアの掟」に靡こうとはせぬギリヤークらを、己の人格の垂範と薰陶でもって、また言語による説得によ

つても惹き付けるような、志操堅固で才能豊かな宣教師が現れるならば、話は別である。彼らは己の習俗をこの上なく重視するから、我らの「人種」に属する人間にとつて「ギリヤークの掟に従つて生きている」と言われることは、むしろ最大級の褒め言葉なのである。それは、「褒められた」人がギリヤークを忌み嫌わず、来る者は拒まずに受け入れ、ただで食事を提供し、ただで自宅に泊め、困窮者も行為か言葉で支援することを意味する。ギリヤークが受洗を希望する事例に、私自身もやはり二度遭遇することになったが、いずれの改宗希望者にも一切の協力を断り、一名は首尾よく思い止まらせた（今一名の方は行政当局が断つたようである）。好感のもてる美青年の前者は、すばらしい詩心の持主でもあったが、遺憾ながらすでに故人である。彼はシャマンの息子で、あまたの昔話や伝承を熟知し、いずれもギリヤークの民族楽器である「バイオリンとオルガン」の名手でもあった。だが、彼は頗る貧しかったので、夕刻に演奏して回る幕舎において日々の食事にもありついてた。ロマンチスト気質の彼は一目惚れを繰り返していたが、ある日、別のギリヤークの若妻を熱烈に恋してしまった、と私に打ち明けた。彼女を我がものとなすべく、彼女にもそうするように説き伏せた上で、彼は洗礼を受けることに決したとのこと。彼のかねてよりの告白から、彼の恋は抑止されても、間もなく忘却されうることを承知していた私は、——新しい美德を獲得せぬうちに、己の部族の美德を喪うような改宗者は、如何なる教会と雖も、誇りをもつて受け入れるはずはないと深く確信して——彼の輕挙を阻止したわけである。

サハリンには洗礼を受けたギリヤークが、私の承知する限り一人いる。彼は自分の仲間を捨ててはいないものの、入植囚らの風俗にひどく汚染されている。ロシア人と同棲する女も二名ほどいて、その一人は洗礼を受けていたが、両名とも不身持の悪名を轟かせていた。

ここで叙述したサハリン住民の文化的分子のギリヤークに対する関係図は、専らティミ河畔の村々で暮らす人たちに限定されたものであり、私が熟知するのも彼らだけである。とはいえ、ここで述べたことは、たとえすべてではないにしてもその多くは、管区や島のその他の部分に在住する人々に対しても、そして恐らくは、私にとってほとんど未知の——オロチョンやアイヌといった——その他の異族人に対しても当てはまるであらう、と私は考えている。

樺太島の植民活動において今後の方向を左右できる方々の、博愛精神に発する憐憫の情に再度訴える。憐れなる野蛮人らに緩慢な餓死を宣告するような方策は放棄すべきである、と。

もしも、私の提案が余りにも広範にわたり、遂行困難な諸方策であることで、私を咎める方がおられるとしたら、その方に対しては、『英国の』思想家で経済学者のジョン・スチュアート・ミルの以下の言説を献呈申し上げたい。

国民の状態を長い目で改善することを目的とするとき、微々たる手段は単に微々たる効果を生まぬばかりか、全く何の効果も生まないであらう。

プロニスラフ・ピルスツキ

一八九八年四月二十日
樺太島
アレクサンドロフスク哨所にて

アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿

解題

本文の元稿はピウスツキが「一九〇五年三月」——識語より引用——、北サハリン南部のオノール村⁽¹⁾にて擱筆した手稿〔草稿A〕⁽²⁾である。彼が同稿を執筆するようになる経緯は以下の通り。

十九世紀末のロシアでは一八二二年に制定された「シベリア異族人統治法」⁽³⁾がいまだ存続するも、数々の制度疲労を起こしていた。ロシア内務省は一八九八年、皇帝の意を体して同法の見直しに着手する。ハバロフスクのプリアムール総督は一九〇〇年、配下のすべての地方行政長官に対し、自前の異族人統治法草案を提出するよう通達した。M・N・リヤブノフ樺太島武官知事は、プリアムール総督の通達をそのまま部下の3管区長官に丸投げするも、各長官からは異口同音に、草案作成を託せる人材の不在回答が返ってきた。唯一の救いはティモフスク管区長官の回答に、シュテルンベルグとピウスツキの名が適格者として示唆されていたことである。他方でペテルブルグとハバロフスクからは矢のような督促が舞いこんで、リヤブノフ知事は頭を抱えこんでいた⁽⁴⁾。

一方、ピウスツキが帝室科学アカデミーから調査を委嘱されてサハリンを再訪するのは一九〇二年七月。その後、3週間に及んだ函館滞在（初来日）からコルサコフスク（大泊）に戻ったのは八月三十日（露曆、以下同様）である。ピウスツキの「出張復命報告」によると、九月十日から十三日までの間の某日、リヤブノフ知事は同地でピウスツキと初めて顔を合わせたようだ。その際、知事は樺太アイヌの人口調査を彼に要請したとだけ記されるが、彼には警察文書の閲覧や駅通馬の無償使用を認めるばかりか、彼がアイヌ子弟のために開く予定の識字学校にまで150ルーブリの支援金を約束するなど、大盤振舞いをしたとある⁽⁵⁾。一年後、知事は一九〇三年十月二十八日付でピウスツキに私信を送り、そこでおもむろ

に本心を吐露する。つまり、サハリン版異族人統治規程草案の起草を「懇願」したわけである。知事の私信は「コルサコフスク管区のアイヌに関する詳細情報」の提出も求めていた⁽⁶⁾。

因みに、このときの草案起草者としてピウスツキに白羽の矢が立てられたのは大正解だった。当時の世界中を見渡しても、ピウスツキ以上にサハリンの異族人事情に通じた人物はおらず、たとえ一年次の秋学期のみとはいえ、彼はサンクト・ペテルブルグ帝大法学部在籍して法律を学び、立法実務にも幾許かは通じていたからである⁽⁷⁾。幾つかの偶然が重なった結果、人道主義・民主主義・自治の原理に立脚する異族人近代化戦略が、ピウスツキによって練り上げられることとなった。

ところで、ピウスツキの統治規程草稿には別稿（「草稿B」）も存在する。それは「樺太島のアイヌの統治制度に関する規程草案」と題する手稿⁽⁸⁾で、末尾には「一九〇五年四月十二日」と摺筆の日付が明記されている。ピウスツキは「復命報告5」において、オノール村（三月二十八日～四月十三日）とルイコフスコエ村（四月十四日～五月十二日）に滞在中、知事から託されたアイヌの人口調査報告、彼らの経済状態の概況、アイヌ統治制度に関する規程草稿を執筆したと記すから⁽⁹⁾、別稿もオノール村で摺筆されたことは明らかである。敢えて言えば、「草稿B」の摺筆がルイコフスコエ村への移動を促したのではなからうか。

「草稿A」と「草稿B」はいずれも二十八条からなり、各条項は逐一符合する——但し、前者は条数をローマ数字、後者はアラビア数字で記載する——が、それぞれの占める紙幅に関しては「2対1」もの大差が認められる。この違いは各条に付された解説文の多寡に起因しており、例えば、前者にある北海道アイヌに課された徴兵令や、プーシキンの詩を引いて樺太アイヌの死生観を語る件などが、後者では欠落している⁽¹⁰⁾。以上は要するに、「草稿B」が知事へ提出される法

律草案として「草稿A」の原初稿を下敷きに、同じオノール村において二週間足らずで摺筆されたことを物語るであろう。法文としての体裁を整えるべく、それ自体としては頗る興味深い事実や民族誌的詳細などが削ぎ落とされたわけである。事実、「草稿B」は「コルサコフスク管区のアイヌに関する詳細情報」⁽¹¹⁾、「一九〇四／〇五年の識字学校実施報告」⁽¹²⁾と合わせて、ピウスツキが離島する六月十一日以前にリャプウノフ知事へ提出されている⁽¹³⁾。

「樺太アイヌ統治規程草稿」——「草稿A」と「草稿B」は一括してこのように総称することができる——は、樺太アイヌの存続を前提とする政治・社会・経済面での制度改革を法制的に担保し、また監獄体制の終焉と地方自治制度（ゼムストヴォ）の導入は必至との見通しで、より良き未来を展望する頗る具体的な提案で構成されていた。全体は（1）社会・政治面の整備（一〜十条）、（2）義務と社会保障（十一〜十四条）、（3）備蓄倉庫（十五条）、（4）狩猟・漁撈と分与地（十六〜十七条）、（5）アルコール対策（十八条）、（6）互助基金（十九〜二十一條）、（7）医療制度（二十二条）、（8）学校教育（二十三〜二十四条）、（9）司法分野での特別措置（二十五〜二十六条）、（10）異族人長官と知事の職責・統制（二十七〜二十八条）の十群に大別できるが、生活の全領域をほぼ網羅する内容である。総じて言えば「樺太アイヌ統治規程草稿」は、二十世紀初頭に執筆されたとは信じがたいほど斬新なアイデアに充ちており、その価値は今なお失われていない⁽¹⁴⁾。

リャプウノフ知事がピウスツキから受け取った「草稿B」に、果たして目を通したか否かは定かでない。同知事は一九〇五年七月十九日、進攻してきた日本軍に降伏して、東京へ送られたからである。日露戦争でロシアが敗北した結果、コルサコフスク管区は日本領「南樺太」となり、住民のエンチウ（樺太アイヌ）は日本帝国臣民になった。かくて、ピウスツキがエンチウのありうべき近代化を模索しつつ、全知を傾けて起草した「樺太アイヌ統治規程草稿」は画餅に帰してしまつた⁽¹⁵⁾。もし日露戦争がなかったならば、エンチウの運命は全く異なる道を辿つたであらう。

「草稿A」の翻訳は本稿がその嚆矢であるが、「草稿B」の方はポーランド語⁽¹⁶⁾と英語⁽¹⁷⁾の翻訳稿が上梓されている。但し『ピウスツキ著作集』3巻には「草稿A」と「草稿B」を対比する形で、後者に欠落する箇所を摘出・英訳した1章が収録されている⁽¹⁸⁾。

なお、副題の「個々の居住地点の簡潔な説明とともに」は、別稿として上梓された「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」が、本来は付属文書として「草稿」に添付されたことを示唆するものと推察される。

二〇一四年二月一日、札幌

注

(1) 日露戦争が終盤に入った一九〇五年三月五日、ピウスツキは妻子に別れを告げてアイ・コタンを発ち、島都アレクサンドロフスクへ向けて北上した。最初の滞在地はチフメネスク（敷香、現ポロナイスク）である。折しもインフルエンザが猖獗を極めて、彼自身も罹患したため想定外の長逗留（三月十二〜二十三日）を強いられた。その後、三月二十八日〜四月十三日まで、北サハリン南部に立地するロシア人村オノールに長期滞在している（拙稿「プロスワフ・ピウスツキ年譜」本書879頁）。本文の末尾は「サハリン／一九〇五年三月」と結ばれるだけで、攔筆地の記載はない。しかし、チフメネスクでは実地踏査にも従事しており、落ち着いて執筆できる状況ではなかったから、オノール入りを果たした三月二十八日から四日間で、本稿は一気呵成に攔筆されたものと推察される。

(2) Бронислав Пигульский, "Проект правил об устройстве быта и управлении айнов с краткими объяснениями отдельных пунктов," *Известия Института наследия Бронислава Пигульского*, № 4: 41-61, Южно-Сахалинск (2000); also in: Alfred, F. Majewicz and Tomasz Wicherkiewicz (eds.), *Bronisław Pitsudski and Futabaiei Shimei — An Excellent Charter in the History of Polish-Japanese Relations. Materials of the Third International Conference on Bronisław Pitsudski and His Scholarly Heritage (Kraków-Zakopane 29/8 - 7/9 1999)*, pp. 125-149, Poznań (2001). トムスク大学図書館文庫のG・N・ポターニン文庫が当該手稿を保管する事実は、エジノ・サハリンスクのV・M・ラティシェフ氏（当時サハリン州郷土誌博物館長）によって発見され、二〇〇〇年と二〇〇一年に公刊された。同氏による詳細な「解説論文」には、この手稿が、著名なモンゴル学者で探検家のG・N・ポターニンの所蔵となる前後の経緯も記されているが（*там же*, 33-34）。ピウスツキが同手稿をポターニンに送付したのは一九一二年頃で、それまでは手元に置いて推敲を重ねていたと私は推測している（K. Inoue, "Bronisław Pitsudski's Endeavours on Ainu Education and Self-government," K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław*

- Pitsudki*, vol. 1: 341-344, Saitama, 2010)。因みに、ラティシェフ氏は一九八〇年代の初頭、同じトムスクの極東・中央国家文書館——極東の国家文書類は第二次大戦以来トムスクに移管されていた——において、後述する「別稿」(注8参照)を発見、一九八六年に上梓していた。両稿の区別を期してトムスク大学蔵の手稿を「草稿A」、ウラヂヴォストクの極東・ロシア国家歴史文書館(РГИА ДВ)が所蔵する手稿は「草稿B」と略記する。なお、トムスクにあった極東国家文書は二十世紀末にウラヂヴォストクに戻っている。
- (3) イェカテリナ女帝の命でM・M・スペランスキーが制定した、シベリア原住民の統治に関する法律である。「シベリア」とは謳うものの中央アジアやコーカサスの原住民も包摂していた。同法で導入された「異族人(инородцы)」という名称は、その後の帝国で正規の行政・司法用語として定着、一つの社会身分として取り扱われた。異族人の範疇には、帝国内に在住するテュルク系、フィン系、北コーカサス系の諸民族も包摂されていた(Inoue, *op. cit.*, pp. 337-338)。なお「異族人」という訳語は、日本のロシア史学界で定訳とされている。
- (4) Inoue, *op. cit.*, p. 340. 当時の樺太島は、アレクサンドロフスク、ティモフスク、コルサコフスクの3管区に区分されていた。アイヌが在住したのは、のちの日本領「南樺太」にはば該当するコルサコフスク管区である。
- (5) 荻原眞子訳「B・ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6号 222頁(2000)。
- (6) Inoue, *op. cit.*, p. 339. 同頁にはこの私信の英語訳が引用されている。
- (7) Inoue, *op. cit.*, p. 341. 同頁の脚注15には、ピウスツキが在籍した一八八六年の秋学期に、サンクト・ペテルブルグ帝大法学部で開講された専門科目が列挙されている。
- (8) ラティシェフ氏が最初に発見された「草稿B」の書誌は以下の通り。B. M. Латышев, "Проект Б. О. Пилсудского об устройстве правления айнов о. Сахалина," в: М. С. Высоков (отв. ред.), *Материалы к изучению истории и этнографии сахалинской области*, стр. 127-147, Южно-Сахалинск (1986). 「草稿B」のタイトルと「草稿A」のそれとの違いは、原語で「быта и」という二語の削除——あるいは「草稿A」における事後の加筆であったかも知れない——のみである。
- (9) 「復命報告5」本書68頁、「年譜」本書879頁。荻原眞子訳「B・ピウスツキのサハリン紀行」238頁。
- (10) Inoue, *op. cit.*, pp. 342-343.
- (11) Бронислав Пилсудский, "Краткий очерк экономического быта айнов на о. Сахалинъ," "Нѣкоторые свѣдѣнія объ отдѣльных айнскихъ стойбищахъ на о. Сахалинѣ," *Записки Общества изучения Амурского края*, томъ X: 89-116; 117-157, Владивостокъ, 1907). 両論文は邦語訳が「樺太アイヌの経済生活の概況」「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」と題して本書に収録されている。
- (12) Б. Пилсудский, "Краткий отчет об айнской школе грамоты в Корсаковском округе за 1904-1905 гг.," in: K. Inoue (ed.), *B. Pitsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok (Pitsudskiana de Sapporo, № 2)*, pp. 124-128, Sapporo (2002). 報告末尾の識語は「一九〇五年四月二十八日、リュコフスコエ村にて」と記している。

- (13) 「草稿B」は他の3手稿とともに、樺太島武官知事官房文書として保存されている (PTNA DB, 号. 1133, on. 1, d. 2031, a. 123-144 06.)。
- (14) 「草稿」の現代的意味については拙稿 (Inoue, *op. cit.*, pp. 345-348) を、また「学校教育」と関連する識字教育の実践に関しては、同拙稿の一節「アイヌ子弟のための識字学校」 (Inoue, *op. cit.*, pp. 348-358) も参照されたい。
- (15) Inoue, *op. cit.*, p. 359. 但し、その後のロシアでも、A・M・ヴァルウイエフ北サハリン州知事やN・L・ゴンドッチ・プリアムール総督による同様な統治規程の策定過程では、「草稿」が一定の役割を果たしたようである (Inoue, *op. cit.*, pp. 360-361)。
- (16) B. Piłsudski, "Projekt zasad zarządzania Ajnami z wyspy Sachalin, z krótkimi komentarzami do poszczególnych punktów," *Lud* no. LXXIX: 95-107 (1991).
- (17) B. Piłsudski, "A draft of rules for the establishment of authority over the Sakhalin Ainu, with short explanations on particular points," translated by A. F. Majewicz, in: A. F. Majewicz (ed.), *The Aborigines of Sakhalin (The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 1)*, pp. 297-310, Berlin – New York: Mouton de Gruyter (1998).
- (18) "A draft of rules for the organization of life and the establishment of authority over the Sakhalin Ainu, with short explanations on particular points," translated by A. F. Majewicz, in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 3*: 231-249, Berlin – New York: Mouton de Gruyter (2004).

アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿

ゝ個々の居住地点の簡潔な説明とともにゝ

一条

各村落は公選村長（スタロスタ）を有し、各地区（郷）は公選郷長（スタルシナ）ならびに二名の助役（ボモシニク）を有すべし。

アイヌ村落は、より多くの人口を擁することが望ましく、また可能な限り、強制手段の行使は差し控えるだけでなく、むしろ各種奨励措置を駆使して、自然条件が海洋漁業・牧畜・菜園経営のいずれをも可能とする一村に、小規模な数ヶ村を集住させることが必至であろう。もし島の海岸に移住系漁民が入植する場合、彼らには、「異族人」（イノロツツイ、「解題」の注3参照）が未占有の区域を割り当てるとともに、同一地内に移住系入植者の定住を認めるか否かは、異族人自身の判断に委ねるのが有益である。郷（ヴォロスチ）のような上級単位に関する限り、アイヌの居住する領域には以下の四郷を設置するだけで十分と想定される。即ち、西海岸はノトサン〔野田柵〕野田、現チエーホフのやや北方を境界とする二郷、そして東海岸では南端からフヌツプ（Xunup〔斑伸〕）に至るまでの一郷と、後者以北の一郷を合わせた都合四郷である。最後の郷には、テルペニエ〔多来加〕湾地区のチフメネスク市〔敷香、現ポロナISK〕周辺に在住するオロツコ〔現ウイルタ〕とギリヤーク〔現ニヴフ〕もすべて編入されるであろう。その場合、各部族は「惣代」一名を選出し、一名が交互に郷長を務め、他の二名は助役として郷長を補佐することになろう。

二条

三条

異族人政庁（イノロチエスカヤ・ウブラーヴァ）は、会期を定めて一ヶ所に参集するすべての郷長と助役で構成さるべし。

異族人政庁は、特別に任命される異族人長官（イノロチエスキー・ナチャリニク）がこれを主宰すべし。

近い将来に予想される樺太島徒刑監獄の廃止に鑑み、近隣諸州におけると同様、当地でも地方自治会（ゼムストヴォ）の管轄から警務全般が分離されて、郡警察署長や地区警察署長のほかに一連の農民長官か、それに類する職掌も創出されるのが想定される。その際に専ら異族人らの在住する地区には特別な異族人長官の任用が頗る有益であろう。しかし膨大な空間を擁する樺太島では、たとえ異族人事情に通曉する官吏一名を任命したとしても、所期の成果は望めそうにない。異族人長官の職責遂行は、異族人人口の卓越する土地が点在するロシア人の小村に一任するのが得策である。その際、サハリン南部は2地区（セクトル）——西海岸と東海岸——への分割が可能である。

職掌の名称には、同職を管掌することが想定される人物がどのような人々とかかわるようになるかを予め知るべく、また「低級人種」の代表者らには嫌悪と侮蔑をもつて接し、信仰を異にする人々を頑として受け入れぬような者の就任を阻止すべく、「異族人」なる語を加えることが必至である。この職務に携わる者には相互理解にとって必須である、異族人とその言語の知識や学習が必要であろう。この相互理解こそ——それなしには「原始的」異族人のようにユニークな人々の生活を整備・改善する有効な指導などありえぬが如き——相互信頼を醸成するものにほかならない。彼らの部族はそれぞれにあまたの個別の特種性を有するから、この点も顧慮すべきではないか。「さもなくば、善意にもとづく企図とても有益な結果はもたらさぬだろう」。最も実践的な方策は、異族人事務を管掌する官職に、学術的見地から異族人らに格別な関心を寄せる人々を招致し、また学術協会などの人類学・民族学部門にも勧告を求めることであろう。

そのような活動家であれば、最高権力の統制に服するのみならず、諸學術機関の世評に対しても責任を負うからである。とはいえ、優れた学識で活力に溢れながらも、社会階梯の下層にいる人々、知力や地位に関しても非力で物言わぬ階級の住民との直接的交際には、全く不得手な人たちも確かに存在する。

全く別種の心理、我らとは異なる世界観、独特な習慣を具える「原始」文化の代表者らと首尾よくかわるには、一つの社会生活から別の社会生活への移行という、この格別な難題と取り組む思慮深い人たちもさることながら、何らかの不首尾に際して容易に起こりうる失望や苛立ちを「鎮める」ことを可能とする天賦の教育力、使命感、格別な愛もまた必須である。

教養人として己の事業に挺身する人たちが、一定の権力を保持しつつ、アイヌやその他の異族人らとの直接交流に着手するとき、原始的「諸人種」の滅亡をめぐる悩ましい問題は、恐らく新しい段階に突入し、間断なく伝えられる異族人の消滅認定に代わって、この現象との組織的闘争や、低位の発展段階に留まってきた我らが人類家族の弟たちの間に、高級文化を計画的に移植するための試みが登場するであろう。アイヌに関しては以下の点にも留意すべきである。即ち、北海道島の幾つかの場所では、地方当局の尽力のお蔭で、「これらの」つい先頃まで漁撈と狩猟に従事していた人々のほとんど唯一の生業が「今や」農耕と牧畜であり、少なくともそれらの地区では——彼ら自身が語るところによると——アイヌは滅亡しないばかりか、人口を増加させてもいるという。形だけではなく愛をもって事業に当たる人たちの数は、むしろ十分ではない。資金も必要であり、また政府の消費も必至ながら有効出費であり、単なる被災時や飢餓年の取るに足らぬ施しではない。行政的保護制度は概ね有害であって、住民の没個性や市民的無権利を、そしてまた自主性の欠如も招来する。以上に鑑みて、正常な状態の土地、国家にとって通例の一般住民を擁する土地にあっては、好意的保護

四 条

ですら均し並みに不要である。しかるに植民地では、氣候や自然条件を全く異にする土地からやつてきた渡来分子が入植し、新しい社会関係の下で独特な異族人（野蠻人）^{デカール}らと遭遇する新開地にあつては、国家権力の監視とその庇護なしに済ませることはありえない。新しい経済・社会生活への参入が強要される異族人ら自身にとつても、外からの支援は極めて有益である。そのような後見的庇護者の権力が無制限ではなく、その目的も完璧なる隷属ではなくて、単なる指導や、活力とやる気を最大限に奮起させて自主性を涵養する努力に留めることは、むしろ重要である。

ともあれ異族人長官の職権からは、配下の役職者を己の裁量で数日間拘留できるとされる、シベリアの農民長官——「欧州部」ロシアでは村長——に付与された自由裁量権は削除さるべきである。自由の剥奪や、あらゆる刑罰全般は、ただ通常の刑法審理に則った司法機関だけに委ねるべきである。

五 条

すべての村長や郷長は己の職責を無給で遂行すべし。彼らは所定の手続きを踏んで、三年任期で公選される。

村長や郷長の認証は異族人長官に一任さるべし。

郷長の不認証要件は、彼が何らかの重大な刑事犯罪で審理中か公訴された場合だけに限定される。識字能力は、アイヌの間でそれが完璧に欠如する実情に鑑みて、当面は村長や郷長のいづれに対しても不問とする。

六 条

郷長は（有給の）書記（ピシモヴォデーチェリ）を有するが、なるべく異族人の仲間内から採用すべし。

郷長が簡易な事務作業のために自前の書記を有することの要請は、識字能力の重要性を実践的に認識させるから、同

能力に対する欲求がアイヌの間では顕在化しており、ロシア人の書記が異族人事務を牛耳ることを許さぬであろう。彼ら『ロシア人書記』は、中途半端な知識人の間で顕著に認められる低度の知的発達と、肥大化した金銭欲のゆえに、異族人らの生活に関与する人物としては全く不適格である。

七条

郷長は公僕として己の職務を無給で遂行するとはいえ、郷が決定するならば報酬を受領することも可であり、その額と徴収方法は郷自身で定めるべし。後者はまた書記の俸給も決定すべし。

八条

すべての郷長は異族人長官に直属すべし。郷長や村長は各自が公印を有し、彼らはこれで公文書に捺印すべし。

九条

郷長や村長の公務は以下の通り。

- (1) 上級機関から通達されるすべての命令の周知・実行。
- (2) 伝染病、家畜の疫病、森林火災に関して通達される予防措置の遂行。
- (3) 出来した事件・事故情報の報告。
- (4) 人口増減の登記。
- (5) 公共事業や村内における保健・衛生措置の遂行・点検。
- (6) 租税の徴収。
- (7) 公共備蓄倉庫と備蓄公金の管理。

(8) 厚生と困窮に関する情報の報告。

(9) 菜園経営・牧畜・農業・漁業の発展を促す諸措置。

(10) 司法当局者・医療関係者・警察官・教師・軍人に対する便宜の供与。

十条

異族人政庁は、公共集会として以下の五案件を審議すべし。(1) 地方税の——もし必要であれば国税の——振分けと割当て、(2) 備蓄公金と共有資産の登録、(3) 部族の福利に関する諸措置、(4) 部族の利益や困窮に関して上級機関へ上伸する請願書の作成、(5) 争議の調停、一般刑法・民法の適用から除外されて、慣習法に則り審理される諸案件の審議。

十一条

すべてのアイヌは兵役が免除さるべし。

アイヌに対するこの特典の継続は、兵役が、彼らの多数の記憶に深く刻まれた恐ろしい地獄の沙汰であるという観点から重要である。この点については、数年にわたる子供らへの識字教育を通して、私は深く確信するようになった。

かつて頗る勇猛果敢な部族だったアイヌは、まず日本人と、のちには相互間でも流血戦を繰り返したが、五世代前には、絶滅を約束する内訌の結末に戦慄し、あらゆる争議は平和的交渉や償いによって決着させることを決断する。爾来、アイヌは完璧に穏和な部族となった。平和主義もさることながら、敗北主義までも発達させることに少なからず貢献したのは、渡来してきた日本人漁業者らが課した長きにわたる隷属の重い軛くびきである。近年まで隣人のギリヤークには保持されてきた血鬻けっしゅうの慣習が、アイヌの間では全く知られていない。

アイヌは他人の生命を奪うことを極め付きの大罪と見做し、その罪は、上述のように厳しい死刑宣告によってのみ購われるという。血腥い現代の戦争の恐ろしさをめぐる風説は、兵役の可能性に怯えるアイヌの恐怖をさらに一層募らせた。昨年（一九〇四年）は「日本人漁業者の」漁場における就労と、それに由来する、アイヌの家計にとっては巨額な稼ぎがなくなつた上に、あらゆる消費物資の価格が途方もなく高騰したから、冬の終わり頃には深刻な窮乏に見舞われた。しかるに、行政の支援を求める請願をめぐつては、全会一致の合意が得られなかつた。私は数名の友人から、窮乏にはじつと耐えるべきだと言ひ張る多くのアイヌの意見に対する、あからさまな是認の声を耳にした。行政はきつと、与えた支援の見返りに、戦時下で住民の間から募集される義勇軍の戦列に加わり、各自が受領した数ブードの食料品に己の命をもつて購うことを要求するに違ひない、というのである。

アイヌは北海道島の生活条件に対する樺太島の長所を、兵役がいまだ実施されていない当地に引き換え、北海道ではすでにアイヌの若者が日本人に伍して徴集されている事実に見出している。

兵営生活や家族との断絶は、何らの道徳的基盤も有さぬ小児のような氣質に極めて否定的な影響を及ぼす。あらゆる悪事には直ちに順応するも、日常の手慣れた生産活動の欠如は怠惰の、次いでは粗暴や無分別の習慣を身につけさせる。異族人らの兵役勤めは、悲惨とはいえ現下の世界情勢で必須の国家に対する義務を、己が遂行するという自覚によつてすら美化されることはなからう。彼はいまだ国との道徳的にかかわりを意識せず、兵役の必要性も認めない。相手が誰であれ、攻撃を加えることは赦しがたい罪であつて、己にとつて未知で自らの生命も財産も脅かさぬ、何らかの非現実的な敵から故郷を守ることすら、彼は不要かつ不可解と見做すわけである。彼は全く自由の身ではありえぬが、服従すべきあれこれの上官の間にも大した違いは認めない。たとえ束の間であれいづれかの制服を着用し、その粗暴と厚顔に皆

がおとなしく耐えるような人々の真似をしようとする傾向が、若いアイヌの最悪な輩の間では顕在化している。

アイヌら自身が「アイヌの脱獄囚」と称する、つまり徒刑囚の気質をそっくり身に付けたアイヌのうちの二人が、したたか酩酊して村中を徘徊しながら、「わしも義勇軍隊員になるぞ！万歳！」などと叫んでいた。しかし酩酊とともに戦闘願望は雲散してしまった。たった一人の西海岸の青年だけが、知合いの入植囚らに焚きつけられて義勇隊員になろうとした。しかるに「そのこと」を知った母親は私を訪ねてきて、彼女の息子の義勇軍脱退か、彼の死に際しての国家補償を求める請願書の執筆を求めた。彼女にとって幸せなことに、息子は病気のため除隊が認められて帰宅した。

十二条

賦役の義務はアイヌたちだけに、自前の公共的要請に対して課さるべし。

賦役の義務は住民の間で不均等に課され、大量の、しばしばまことに正当な非難を惹起することが必至だから、その調整は頗る難しいのが常である。したがって、例えば水路や道路に対する賦役の義務は、至る所で金納に振り替えられる傾向が顕著である。

これら賦役の遂行に際して物議が醸されるのは、街道沿いの村落というより、むしろ街道から外れた地点に立地する村落の場合であり、またさまざまな不測事態である。例えば、手の空いた閑散期に番が回ってきた果報者がいる反面で、一刻千金に値する最繁忙期に当たる者もあるからである。加えて、よりはしこくて狡猾な人々は自分の出番を逃れるか、己にとって最も都合な時期にずらすなど、常にうまく立ち回るが、その結果、より純朴で正直、より誠実な人たちはむろん割を食うことになる。

十三条

アイヌは、上級権力機関が定めた額の租税を納めるべし。

サハリンの異族人らは今なお「ヤサク」「異族人に課される人頭税、元来は毛皮で徴収された、ならびに公租全般についても、一切の支払いが免除されているとはいえ、島の天然資源は恐らく、全国庫負担の一部をその住民に担わせることを十分に可能とするであろう。格別に重いものはむろん論外であるが、直接税の支払いは教育的効果も有するであろう。異族人が、彼の部族へ安全と福利を提供する国家の歳入に、自らも応分に寄与するとの自覚は、たとえ微々たるものであれ——今はかなり希薄であると認めざるを得ない——異族人と国家の繋がり強化に多少とも肯定的に貢献するであろう。しかし異族人にはもちろん、国家的諸義務を負わせるだけに終始すべきではない。彼らには、例えば学校・医療支援・低利融資のような、若干の文化的福利を享受する機会も供与することが必至である。権利と義務が拡張されるならば、今はほとんど無に等しい公民意識が、異族人の間にも浸透してゆくことが期待されよう。

租税は、例えば収入が約束される漁撈のような、アイヌの生産事業から徴収するのが最も簡便であろう。税は、アイヌの家計に最大の収入をもたらす漁獲物売却の決済時に、しかも一括納付されるならば、それ以外の時に徴収される場合に比して、担税感や障碍は最小限に留められよう。私が学校開設のために基金の創設が望ましいと水を向けると、アイヌの多くは、その分を漁獲物の売却益から控除することに同意してくれた。

十四条

アイヌは、その他すべての異族人と同様に、家屋火災予防の互助活動に参加し、農業や牧畜が発展した暁には、家畜の疫病予防、不作に際しての播種保障の互助活動にも参加すべし。

あらゆる徴収は、不満の声を招かぬよう、格別な漸進性を堅持しつつ課してゆく必要がある。相互扶助は、我らが文

化の代表者にとつてもはや迂遠な理想であるとはいえ、これを抑えるのではなくて、むしろ発展させるべきであろう。被災者に支給される手当の主要な部分は当分の間、国が拠出する必要があるろう、つまり、今日も行われる規則が堅持されるべきである。重要であるのはただ、手当の支給が法的強制力を有することだけで、恣意的な裁量に委ねてはならない。アイヌの村落では、膨大な領域を焼き尽くす山火事の延焼として火災が頻発する。しかるに罹災者らは、行政に向けてその都度請願を行うにもかかわらず、手当は必ずしも受領できるとは限らない。そのことが異族人らを困惑させて、上級権力は支援金を割り当てたのに、地元の行政当局が受給者の手元にまで届けないのだという、独特な解釈が囁かれるわけである。

十五条

各郷は一棟以上の公共倉庫を設置し、小麦粉・米・魚などの必需品を備蓄すべし。

郷は現物徴収に代えて、現金による徴収を定め、基金を創設することも可であり、同基金は貸付金や、困窮者に対する永久貸付金として支出することも可なり。倉庫と基金の維持・管理は、郷長とその助役の職責に、また監督責任は異族人長官に、それぞれ委ねるべし。

貸付金の支給手続きや、徴収額の多寡は、直属の行政機関が住民の合意を得て決定する。この種の相互扶助は恐らく当分の間、萌芽状態に留まるであろうが、慈善活動としての外形が自主活動としての内実を獲得することこそ、喫緊の課題と見做さるべきである。異族人らに特有の能天気は漸次的に、先見の明に取って代わるべきであって、後者が担保されぬ限り、増えることが予測される住民との生存競争が激化した暁の困難な新局面においては、暮らしを立てることがますます難しくなるであろう。

十六条

アイヌの各村落は正確に定められた分与地を有し、すべての家族は行政機関の許可を得て未占有地へ移動し、当該住民の同意が得られるならば、後者の村落に定住する権利を有すべし。

アイヌは今日まで、自らの裁量で居住地を変更する事実上の権利を享有してきた。ある村が一連の疾病に襲われたのち、村民の一部か、あるいはまた全村民が、神々の逆鱗にいまだ触れていない他村へ移住することは珍しくなかった。だが数年後に、神罰を招いた罪科が忘却されるに十分な時が経過すると、アイヌは再び先祖伝来の地に戻ろうと努める。アイヌは概して、あの世から自らの子孫の生活を見守ってくれる先祖たちが葬られている場所を去ることを、罪と見做している。たつた今触れたばかりの移転ですら、父方か母方の親族が暮らす土地へ向けてなされるのが通例である。最終的に放棄されるのは、アイヌにとって最も怖い災難（海での遭難死）が出来た村だけに限られる。

当面は恐らく、アイヌに移転を迫るような差し迫った必要はないであろうが、島の沿岸部に漁業移民が入植して来る可能性を顧慮するならば、アイヌのために以下のような措置を講ずることは時宜に適うであろう。（1）アイヌらが最適地と見做す数地点を選んで、より大きな集落を形成し、またそこに彼らの分与地も割り当ててることを提案する。（2）しかるに、もし当該地に、少なくとも8〜10戸を擁するようなアイヌ村落が形成されていなければ、移住者の方が優先権を得るという前提で、アイヌらには、移住者がいまだ占有していない新開地への移住権が付与される。とはいえ、アイヌに推奨さるべき菜園経営や農業が着実に発展し、例えばルレ「魯禮」やアイ「相濱」のように、ロシア式百姓屋や豪勢な家宅までが建設されると、アイヌは往々にして移住者らに好意的ではなくなる嫌いがある。

アイヌがこれまで明確に分筆された分与地を有さぬことに由来する多くの不便や困難については、既述の通りである。

割当地の規模は、然るべき地勢的条件を多少とも具える土地の入植実績に照らして、これを決定するべきである。一家族——あるいは一人——当たりの分与地割当基準値は、削減されるどころか、アイヌの経済生活が進展する可能性に鑑みて、むしろ加算すらされることが望ましい。なにかんづく将来の必要に備えて、草刈地や牧地も分与するべきである。アイヌの好みを考慮し、またサハリンの気候や牧畜に適した諸条件も勘案するならば、菜園経営や、より多くの労働と知識を要する——そしてサハリンでの発展は余り期待できぬ——農業よりも、牧畜の方がより迅速に根付くであろう、と想定することができる。

十七条

河川や川筋の上流部に設置される罾による黒貂猟が事実上存続する限り、異族人全般と同様にアイヌも必ず支援せざるべからず、各家族が先祖から受け継いできた川筋に対する彼らの占有権も認めらるべし。

今日では、すべての優先権がロシア人猟師らの側にあるところが問題である。禁止された罾猟に対する監視は存在せず、樺太島の極めて希薄な人口や、広大な人跡未踏地を顧慮するならば、監視自体すらありえぬだろう。異族人が己の氏族的資産と見做す川筋における黒貂猟の権利証を求めたが、請願は却下された。したがって、川筋に対する異族人の権利を認めぬロシア人猟師らは、任意の川筋へ赴いて——夏のうちに山入りし、そこではさらに、罾を仕掛けるときに障碍となる倒木の除去作業にも携わるから——、山での初雪を待つて、おもむろに出猟する異族人たちは、常に彼らの後塵を拝することになる。

己の川筋に姿を見せた異族人が、そこで罾に従事する白人の猟師と不意に出喰わしたとき、彼の失望はいかばかりだろうか。奥深いタイガにおける彼らの睨み合いは、快適なものとは到底思われない。入植囚の猟師たちは大半が極めて

粗野で向う見ずの輩であつて、無分別な金掘り人夫らとも多くの共通点を有する。ロシア人猟師らは川筋を清掃し、あまたの罾を設置して、常に異族人の三倍もの黒貂を獲得する。黒貂の毛皮に対する需要昂騰を背景に、多くは春にも罾を仕掛けて、この高価な獣を出産期にも捕獲する。猟師によると、春に獲れるのは専ら牝獣だそうである。近年には入植囚猟師らがさらに「文書」の権威にも頼るようになった。彼らは行政当局に対し、もし公印さえ捺してあれば内容は不問の、銃と犬による狩猟の権利を謳つた許可証の発給を求め、その上で、この「文書」を目に一丁字ない異族人へ示して、かつては異族人が罾を仕掛けていたにもかかわらず、己を魅了する川筋に対する権利をこのように取得済みだと断言する。この際はむしろ、養母である自然をまつとうに評価し護持する能力が立証済みである、土着民の猟師こそ支持さるべきであろう。彼は常に将来を見据えて、自然とは略奪的に接することがない。天然資源の保全を己の子孫のためにも念じる異族人は、ただ一時的に島と係わるだけで「あととは野となれ山となれ」という諺の如くに振舞う粗暴な猛獣には後れをとらざるをえない。黒貂の罾猟に関する政令（ないし法律）は死語と化しているわけではない。同政令は行政当局をして、川筋に対する権利調整の問題を冷遇するように強いるから、昨今の白人らが持ち込んだ文化の下では狡猾さこそ、そして恐らくは厚顔も、生活に物質的豊かさをもたらす最良手段であるという意識の毒を、遵法に傾く異族人の頭に注入している。（もしサハリンのような人口希薄の土地においてすら、毛皮獣に対する仕掛式猟法と闘う必要があれば、もはや別の方策を講ずる方がよい。例えば、罾の設置を認可する証明書の発給時に特別税を徴収することは恐らく有効であろう。同税は年ごとに通増することも可、また猟師がどの時期——夏か秋か——に罾を設置するかによって、税額に差をつけてもよからう。しかるに、仕掛式猟法による黒貂猟の禁止令は、事実上執行されていないといえ、ブリアムール地方総督によって一八九四年以降十年の時限で法制化されている。ところが一八九二年二月三日に公布された「狩猟法」や、一八九九年六月十日に採択された「プ

リアムール地方官有林副次的利用規定」では、黒貂狼の制限に一言も触れていない。それどころか、一八九二年二月三日に公布された「狩猟法」の十九条は、毒物以外のあらゆる猟法による肉食獣駆除が許されると謳い、二十条ではすべての肉食獣が列挙されている。そこには黒貂が言及されていないものの、狐・川獺・栗鼠・白貂・小蝦夷鮃・貂など、同種の肉食系毛皮獣が掲げられているから、単なる書き洩らしと推定される余地があるわけだ。

十八条

異族人村落内では酒舗の開設が不可であり、また異族人の許では「スピルト」〔純アルコールに近い強酒、名称は *spiritus* に由来〕の購入も全面禁止とすべし。異族人のスピルトに対する執着を根絶するべく、彼らの間には、中央の禁酒協会か、異族人保護や絶滅防止を目的とする特設協会の傘下に禁酒協会を設置すべし。

サハリンでは遠からずヴォトカの自由販売が開始される公算が大である。その際は、酒精飲料を扱う商店が、異族人村落自体は言わずもがな、その近辺ですら開設されぬことが望ましい。異族人らがアルコール飲料に目がないことは、すでに久しく周知の事実である。

この傾向がアイヌではとりわけ顕著である。アイヌ自身が米でこしらえる「サキ（酒）」、日本酒、ロシアのヴォトカやスピルトは、祭事や神々への供饗に不可欠な御利益のある飲み物である。これを飲むときは必ず盛大な場がしつらえられ、この歓喜の液体は神々にも数滴が裾分けされる。

にもかかわらず、私がアイヌの間で認めた、衆人の了解する語義通りのアルコール中毒者はほんの数名に過ぎず、それもロシア人村の近辺で暮らす比較的裕福な人たちばかりである。彼らは長期の「節酒」を強いられて極度に落ち込み、塞ぎこんでいた。頗るあまたの異族人から聴取したところによると、もしヴォトカがなければ誘惑もないから、彼

らには飲酒の欲求もまたないが、近くにアルコール飲料があるときだけは、鬱勃たる渴望を抑えられなくなるのだそうである。

異族人のこの弱みにいつも付け入るのが、貪欲で、どんな手段も厭わぬ我利我利亡者の毛皮買付人や魚の仲買人らである。唯一の「神」(＝錢)のみを崇めるこれらの商人は、異族人らとの交際でしたたか飲ませたのち、彼らとの取引をおもむろに始める。よくあるのは、予め異族人の機嫌を取り、彼の惑溺するアルコール攻めで籠絡する手である。私が目撃した一人の漁業者は、漁期の初めに漁場に到着するや、大人のアイヌにコニャックを一瓶ずつ配って回った。この出費は恐らく、アイヌらがのちに他の商品を掛買いする際に回収されたであろう。それゆえ、ヴォトカに目のないアイヌの多くは、抜け目ないこの漁業者を最善の旦那と見做したが、ほかのアイヌらはこの人物の腹を数年後には読むことができて、敬遠にこれ努めていた。私がこの漁業者の近況を根掘り葉掘り訊ねたところ、彼は手持ち資金が底をついて、破産寸前の状態にあることを知った。ところで十分に堅実で、多年にわたってアイヌらの知己でもある漁業者は、そのようなことを敢えてしようとはせぬから、魅力的な贈り物の目的が那邊に存するかをめぐって、私の確信はさらに深まった。異族人らに対する搾取との闘争には、禁酒協会員たちの協力も仰ぐべきであろう。現時点でも実施されている巡回史や監視官らの監督に甘んじることは、現状を寸毫も変えぬことを意味するからだ。

少なくともアイヌの間では禁酒協会の創設が完璧に可能である。今でも全く飲まぬアイヌはおり、また暴飲を容認せぬ人々の前に出るとかしこまって、酔態や酒精飲料への執着を曝すことを恥じる人たちも少なくない。サハリンのある医師がロシア人入植囚のアル中患者を、暴飲への嫌悪を暗示する催眠療法によって治癒させたことを知り、自らも同療法によって、ヴォトカへの執着や、それに起因する損失とも縁を切りたいと願うアイヌの若者らとも遭遇してきた。禁

酒協会の会員は、貸付金の獲得で優先権を有するべきだし、断酒期間が永続する者には、同協会のパトロンが賞金やプレゼントで報いることも望まれる。没収されたスピルトや、酩酊者の乱行と路上徘徊に科された懲罰金に由来する歳入は、同協会の資金に充てても、また楽器・幻灯機・絵画など、娯楽用品の購入に支出してもよからう。もし学校で高級娯楽や禁酒の習慣を教育するならば、そこで学んだ人たちは禁酒協会の幹部を補充することにならう。

コルサコフスク「大泊、現コルサコフ」とヴラデーミロフカ「豊原、現ユジノ・サハリンスク」には協会の名の下に、アイヌ専用の旅籠屋を設営することが必至であろう。その目的は、主として冬場に用務や買物のため訪れるアイヌらが紛れ込んで、別の使途で持参した現金の大部分がそこで費消されてしまうような盛り場や誘惑者らの魔手から、彼らを遠ざけることにある。そのような避難所は、もしそこで彼らの請願書が無償で作成され、法律相談がなされ、通訳までも提供されるとしたら、多くのアイヌを惹き寄せることにもなろう。

協会員らには、せめて至近のシベリア諸都市であれ、見学旅行の機会が供与さるべきである。アイヌは元来、遠い未知の土地への旅に情熱を燃やしてきた。ロシア人の町を見てみたいという者は今も頗る多いが、啓蒙機関や、異族人の文化向上に共鳴する人々の庇護を欠いた旅は、果たして有益であろうか。日本人の小漁業者か漁場の使用人の差配で日本を訪ねた人たちは、その旅から遊郭風俗の知識や、どんちゃん騒ぎに対する格別な執着や、同村者から託された公金に対する軽拳を土産として持ち帰る。ロシア人の町もむろん負けず劣らずの誘惑と誘惑者を提供するだろう。ところで、シベリア大陸への旅は、極東に根を下ろしたコーカサス人種と異族人の文化的統合や、両者の精神的絆の強化という意味で頗る有益なものとなるう。

ここではアイヌの自家製アルコール飲料である「サキ」の醸造をめぐる問題に、どうしても触れておかねばならぬ

十九 条

と私は考える。当初は、「サキ」の製造が各家族の食料備蓄を強く逼迫させるから、米酒の醸造は何としても削減すべきであるように思われた。このことで苦しむのは主として婦女子、そして「サキ」を全く嗜まぬか、飲んでも少量に過ぎない人たちである。したがって、米はもはや弱齢者や育ち盛りの子供たちのために取っておき、札付きの大酒飲みには市販のヴォトカや日本酒を飲ませるべし、と提案された。アイヌの間では、至る所で賓客として盛大な宴席に列する老人らが専ら飲み、彼らには獅子の分け前が提供されるのに、若者らの方は微量で我慢させられることにも注目した。だがのちになって、ヴォトカで酩酊したアイヌたちが忽ち前後不覚に陥る様子を、私は幾度となく目撃する。アイヌがヴォトカや（日本の）酒で酩酊するためには、自醸の米酒よりはるかに少量で事足りることは言うまでもない。アイヌらが自ら語るところによると、これら市販飲料は効き目抜群で、意識を朦朧とさせて、人を「狂人」に変えるのだそうだ。飲んだ翌日は鬱状態に陥って、頭痛に襲われ、せめて迎え酒をしてでも飲み直したいという衝動に駆られるが、これは慢性アルコール中毒の第一期症状である。ヴォトカを伴う酒盛りでは頗るしばしば大喧嘩や掴みあいも出来し、若者が己の父親に手を上げるなど、自醸の「サキ」の場合には見られぬような醜態までが演じられる。頗る低率のアルコール分を含有するだけのこの弱酒は決して、ヴォトカや水で割ったスピルト、あるいは、なかならず劣悪種の日本酒ほどの悪影響を、アイヌの肉体に与えることがない。この飲料の製造を禁止すべき十分な根拠は、管見による限り見出せない。アルコール中毒症との闘いは、全く別の発想、別な方法で進めらるべきである。

法律や政令に違反した異族人たちに科される懲罰金は、特設の異族人基金（イノロチエスキー・カピタル）の原資に繰り込み、同じく異族人らに供与される貸付金や諸手当は、同基金から支出さるべし。

この措置は、異族人がいまだ余りにも未発達であり、人間活動のあれやこれやの領域に設定される、国家ないし公共の福利のための諸規制に、俄かには慣れえぬことに鑑みて正當なものである。

例えば、河口から2露里以内の水域における建網での鮭鱒類捕獲禁止がアイヌたちには理解できない。彼らが使用するのには、漁業者らが有するような大型定置網ではなく、網を一旦引き上げたら、それを直ちに建て直すようなこともない。一度に捕獲される魚は、すべてを網から外したあとも、塩加工を施す必要があるからである。小人数の作業は、この仕事を短時間で完了させることができない。したがって、網を上げたのちに再び下ろすまでの間、魚には自由に川へ進入するための時間が十分確保されている。河口部は完璧に開放されていて、海荒れの日々でも、そこでの網の設置は認められない。サハリンの海岸部、なかんずく東海岸では、海が凪ぐことは頗る稀である。海上操業の熟練度に関する限り、アイヌは日本人の足元に遠く及ばぬことも考慮すべきである。加えてアイヌら自身も、なるべく多くの魚が川に進入することを願っている。投網による漁獲が開始されるや否や、アイヌの網捌きは遙かに手際良くなる。だがここでも、漁業規定の解釈をめぐって齟齬が生ずる。漁業管理局の定めによると、投網の全長は川幅の2分の1を超えてはならぬという。若干の川の狭い川幅を勘案すると、同規定の許容する網は余りにも小さくなりすぎて、それで魚を捕獲することは考えられない。ところで、アイヌらはこの定めも理解できない。網は、投ずるときも、またそれを引き寄せるときも全長を抜けることはなく、常に「強度の」凹線をなして動くからである。たとえそれが川幅より長かったとしても、川を堰き止める懼れはなく、魚が遡上するのに十分な通路は確保されるであらう。それにまた、網を投じて曳くサイクルも間断なく続けられるのではないから、その合間には、魚の遡上を妨げるものが何もないわけである。魚が川の上流部に到達することは、アイヌ自身にとっても頗る重要であって、彼らも魚影を追って川を遡り、浅瀬で鉤を駆使し

て、辛うじて辿り着いた「樺太鱒や鮭」を大量に捕獲する。産卵する鮭鱒類が毎年川を遡上する現象を見守ってきたアイヌによると、魚がそこに登場したばかりの数日は、川の中の魚を不安にさせぬことが肝心とのことである。したがって、偵察隊よろしく最初に姿を現す前衛部隊の通過をしかと見届けぬうちは、川での操業は決して着手されない。この極めて用心深くて臆病な魚の少数精鋭部隊のあとを追って、魚群の本隊も遡上を始めるが、それはもはや——アイヌの言によると——何ものをもつてしても止めることは叶わぬとのこと。個々の魚影を認めるや否や闇雲に捕獲するようなロシア系住民の行為は、アイヌにしてみると極めて危険で、当該河川に遡上する魚の数を間違いなく減少させるものにはかならない。非文化的ながらも経験豊かな自然観察者らが確信するところによれば、ロシア系住民が川へ無分別に投棄する畜糞やありとあらゆる廃棄物による汚染も、否定的影響を少なからずもたらすという。漁業規定では、両者とも禁止されてはいないわけである。

アイヌにとって全く摩訶不思議で、理解を絶するのは、漁撈での労務者雇用を禁ずる漁業規定条項である。サハリンでは漁業監督官の名の下に公布された、プリアムール地方国有資産管理局の公式文書に明記されるように、住宅建設や薪の調達、家畜の世話や菜園での畑仕事、はたまた火災「消火」のためにアイヌが人を雇用することは、何人もこれを妨げられない。漁り舟の建造に際する大工や、漁網製造職人の雇用は、ロシア国民であるか、また外国籍者（日本人）であるかにかかわらずなく認められている。しかるに漁撈活動で人を雇用するのは厳禁で、違反者には、初回がロシア国籍者の場合は25ルーブリ、外国籍者では100ルーブリの過料が科され、再犯の場合は金額が昂騰する。そこに出来るのは、例えば、荒れる高波が今にも網の袋を切り裂き、漁獲をすべてぶちまけそうになって、網袋からは可及的速やかに鯀を取り出すべく、すべてのアイヌが全力を傾注する間、労務者らは全く不要不急の己が仕事を続けるか、雇用

主の希望と一年分の資産が喪われてゆくのを岸から漫然と眺めねばならぬ、という事態である。

漁撈生活を熟知する人々には至極当たり前の、ある組と別の組、ないしはアイヌ漁場に隣接する日本人漁場との相互扶助は、いまだ未決着の問題である。ところで漁撈活動では、当季の死命を制するような一、二日に極限的な労力の集中が求められる。そして魚も至る所で同時に姿を現わすわけではないから、一つの漁場から、かき入れ時の別の漁場へ労務者を貸し出し、漁り舟や若干の漁具も融通することには、目端がきく主人であれば、当然ながら意欲的に取り組むであろう。それは双方に利益のみをもたらすが、そこではまた、より多くの税収を見込める国も勝者となるだろう。

この不可思議千番な禁制を創出したのは、果たして、日本人の流入を規制する苦肉の政治判断であろうか、それとも実情に疎い人たちによる、いつもながらのお役所仕事のなせる業であろうか。

したがって、のちには以下のような異常事態が指摘されることになる。共同体経営の漁場に関する公式データによると、一九〇三年に国が徴収した輸出関税は2997ルーブリであるのに対し、同一漁場に科された過料は6580ルーブリにも達したのである。

日本から樺太に戻って来たアイヌたちが、個々の村落共同体の不可分の一員となつて、すでに何年も支障なく暮らしているにもかかわらず、外国籍者であるという理由で、己の親族の共同体漁場での就労が禁止されること自体が、アイヌらにとつてはすでに不可解で、格別に理不尽な事態のように思われるのである。

もし何らかの衛生規程が公布されたとしても、アイヌらがそれを正確かつ忠実に遵守するようになるまでには、必ずや少なからぬ時の経過が必要だろう。旧来からの習慣を新しいもので置き換えることは、後者の優越性が完璧に了解された場合ですら、さほど容易ではない。そしてこの了解も上の命令だからといって、全員が迅速かつ同時に共有する

ようにはなるまい。

ここでは己が深く確信するところを繰り返すが、アイヌの知的発展が高度な水準に達して、また彼らの間にも、複雑極まる我らの社会・国家的生活に対する理解がより深まるまで、当分の間は、我らの活動を規定する法規の侵犯に対する懲罰金はすべからく、いまだ現代文化とは無縁な国家構成員らの速やかなる我らへの接近「を担保するが如き施策」に支出さるべきである。

二十条

異族人基金の原資には、国庫による火薬・銃弾・麦粉・米・塩・銃器・麻綱（モタウス）などの販売益を充てるべし。これら必需物資の販売は幾つかの然るべき地点において国が管掌すべし。通常は利益に10%を上乗せて、上乗せの半分は異族人基金に充て、残りの半分は国庫歳入と、累積債務残高の支払いに向けるべし。飢餓の際には価格を抑えられ、「物資の」後払いや、極貧者に対する無償供与もあるべし。

「シベリア異族人統治法」二〇八―二一六条の遵守は、現地での不十分な穀物生産や、長期にわたる大陸との断絶が、私人による販売のみに依存する事態を招き、まさに緊急時に物価昂騰を惹起しうることを顧慮するならば、サハリンにとって重要である。

法律の定める基準（「統治法」二一〇条）に反して多年にわたり過分な利益を、異族人へ売却される麦粉・塩・火薬・銃弾に上乗せしてきた「樺太島経済基金」が、大型控除によつて異族人基金の設置に寄与することは、まっとうな判断であろう。「シベリア異族人統治法」の規定する利子率に代えて、異族人基金の漸次的充填を担保すべく、利子率を若干高め——つまり10%——に設定するよう、私は提案したい。商品価格は、若干地点の遠隔性や、より高額な運搬経費

にもかかわらず、すべての地点において統一されねばならない。この統一は、異族人の間にありうる疑念を払拭し、売り手の活動に対する統制を容易に強めることも可能とし、またそれでもなくとも追加的出費を強いられている遠隔地居住者の負担を軽減することにもなる。

二十一 条

異族人基金から支出されるのは貸付金、牧畜奨励金、菜園経営・農業・海洋漁業・手工業・教育の発展を促す支援金であるが、またこの方面での努力や熱意に対する各種褒賞金にも充てらるべし。現代の経済的生存競争では貸付金の意義が急速に増大し、些かの貸付金も決して必要とせぬような者は皆無である。それが人々の生活の中でどれほど重要な役を果たしているかは、貸付金を求める人々が稀ならず容認する莫大な利子率からも推して知るべし。

生業活動の必要で私人から受けた貸付がどれほど高いものにつくかは、既述の通りである。この特殊な異族人銀行が設定するまともな利子は、借金に頼ることを余儀なくされた人々の状況を著しく軽減するであろう。

秋季の黒貂猟の直前には、圧倒的多数の異族人らがさまざまな人たちから掛売りで、狩猟用具や煙草や食料を手に入る。これは、必要に迫られてなされるばかりでなく、毛皮買付人らとの間で成立している慣行の所産でもある。買付人の中にはこの際、品物の掛買いを彼らに押し付ける者もいる。これはその後、猟期の終わりに金銭ではなくて、毛皮で決済することによって説明される。たとえ債務の額が4ルーブリであろうとも、また3ルーブリないし2ルーブリであつたとしても、債務者は同じく一疋の毛皮を債権者に引き渡さねばならない。そのような形で債務決済では、商人の手に莫大な利得が残ることは言うまでもない。そのような取引で少なからぬ財をなした者は、決して一人や二人ではなかつた。

不測の必要が生じた場合、アイヌは私人から借金せねばならない。サハリンで貸付金に課される利子は、社会的融資が完璧に欠如する中で、まさに高利貸し同然の高率である。抵当のほかに、さらに月々5%、10%、はたまた20%もの利子も要求される。より少ない金額が借用されたのに、領収証に記されるのは利子付きの総額という形で、利子が支払われるのが通例である。

異族人基金の管理や金銭出納に関する規則は別途に定める。

資金や、貸付金の給付と徴収の管理には、必ずやアイヌの代表者たちを参加させるべきである。これは自主活動の発展や、我らが公共機関に参加する訓練のためにも必須である。しかもアイヌら自身は、同部族者のそれぞれについて、困窮の実情により精通しており、債務者の支払い能力をより正しく評価し、より妥当な返済期限を選択し、貸付金の徴収でもさまざまな方法を見出すことができるだろう。

もし貸付金の給付と徴収が政府機関だけによって行われるとすれば、話は別である。その十分にありうる瑕疵についてはもはや喋々せぬが、住民の対応は全く別物であろう。借用した金額の返済義務の効力は消失する。サハリンでは「国庫」や「国有資産」をめぐる、アイヌはもはや誰一人として、この国の利益に配慮する必要を認めぬだろうとか、広範な詐欺の企みが始まって、住民の良心的分子がそれを発見して抑制することは不可能だろう、といった「悲観的」見解が成立している。貸付金は決して国のものと考えてはならぬ。それは、アイヌたちが己のものとして見做すことの可能な資金でなければならぬ。彼らは、それを存続させるか否かは己自身次第である、との信念を堅持すべきであり、またこの有益な支援は、短期間に数名が享受すべきものではなくて、貸付けを必要とする者は誰でも、いつでも享受できるように、彼らは全力を尽くさなければならぬ。

二十二条

樺太島でアイヌの占有する一帯には2村医区を設置し、それぞれの村医区には異族人施療所と称される小医療施設を開設すべし。

異族人たちは今も医療支援を拒否せず、時にはそれに明瞭な信頼を寄せる場合もあるが、異族人に対する昨今の医療実践には、この支援をほとんど無に帰しかねぬほど深刻な難題が介在する。管区の医師らは法医学的用務で巡回する合間に、たまたま異族人の患者らも慌ただしく診療するに過ぎず、彼らの非衛生的生活条件下での医療の成否にもしばしば偏見を抱き、彼らの生活とは距離を置き、また部族の身体的特徴も承知しない。初めて顔を合わせても、互いによく理解しあえず、疾病の原因や性格を究明することも叶わず、処方された治療が行なわれたか否か、またどのような結果であったかも、しばしば追及しえぬことは言うまでもない。したがって異族人らに対する薬剤投与記録から、提供された医療支援の規模が判明しうることは頗る僅かである。

医師らは通常、100露里以上も離れた病院へ異族人患者を搬送することを要求する。懇切丁寧な介護が必要な患者は、縁なき衆生の間に取り残される病院への入院が命ぜられて、しかもそこでは汚らしい下級の存在として、侮蔑的な対応も忍ばねばならぬ。「とはいえ」入院が命ぜられるのは例外に過ぎず、身体壮健でロシア化した若い男性患者だけに白羽の矢が立てられるが、そのような者は精々5、6名に過ぎない。加えて、コルサコフスクの病院からは女たちが大陸へ連れ去られるという伝説も、アイヌの間に流布している。それはつまり、ある医院に入院していたアイヌ女が、のちにはウラヂヴォストクで元流刑囚の農民と同棲中と伝えられたが、同院に診断書を求めた親族に対しては、女は死亡したと告げられたという話である。この事実、管区病院での治療に対する恐怖を、アイヌらの脳裏にさらに一層鮮

烈に焼き付けるわけだ。

「原始的」諸部族が異郷での死をどれほど怖れるかも忘れてはならぬが、怖れるのは必ずしも彼らだけではない。我ら自身の感情を見事に捉えたプーシキンの詩を想起しよう。

たとえ感情なき軀むくろはいずこにて朽ち果つるとも

やはり懐かしき故郷の畔にて眠りにつきたし

私が、あれこれの病はただ病院でしか治せないとの管見を披瀝すると、アイヌらはしばしば「いいや、ここで、わたしの許で死なす方がよいぞ、そうすれば奴は、むしろ自身の手でいとしい墓地に葬ってやれるからな」と語ったものである。ロシア系住民の不信に満ちた態度にも注目すべきである。流刑囚の多くも、そこへ入るのは一刻も早く死ぬるためであつて、治るためではないと主張する。さらにはコルサコフスクの療養院の実態、即ち、その狭隘さや、苔むして役立たずの知識——そのことは医師たちも自認していた——も斟酌する必要がある。

したがって、私は以下のことを必須と立案する。(1) 異族人のための医師は、人類学に興味を抱き、遠隔辺境地勤務の特典でも、狩猟熱でも、また毛皮の入手でもなくて、学術的関心に動機づけられた人たちを任用し、(2) たとえ設備が十分ではなくとも、異族人村落内に小さな施療所を「有し」、もし可能であれば看護要員も異族人から採用する。

重要であるのは、治療がアイヌたち自身の眼の届く所で行われること、患者たちは温かい配慮を求め、我儘でさえあるのが通例だから、己の仲間から隔離されぬこと、また近親者たちが彼らを見舞つて、手作りの異族人食を持参できること、そして、せめて時々是对話し、健気な気力を支え、親族や知人らの近況も伝えて、患者を退屈させぬことである。

医師と住民の親しさは必ずや好影響をもたらすであろう。直接の「緊密な」関係が築けるならば、相互理解や心から

の信頼が得られるに違いない。

異族人たちが信頼するとしたら、それは、専門知識としての医学ではなくて、その知識を有する医者に対するものである。アイヌたちは、准医師からの受取りは拒否したにもかかわらず、私が准医師から受け取った薬ならば受け入れるということが何度もあった。医師から薬を受け取った場合ですら、彼らは常にそれを見せ、良い薬かどうか訊ねるのだった。そして彼らはただそうすることで、私の好意が揺るぎないことを信じたわけである。そのようにして与えた下痢、吹出物、でき物などの薬剤が幾度か功を奏してくれたおかげで、私は治療師であるとの風評が立つことにもなった。

アイヌが日本の薬の方に著しくより大きな憧れを抱くのは、何も日本文化に対する愛着のせいばかりではなくて、日本人の医者たちの方がロシア人医師全般、なかなしくサハリンに勤務する医師らよりも親しみやすく、より率直で庶民的でもあるからにほかならない。

机上の異族人医療支援ではなくて、医師の個人的資質の方が、その実践に膨大な意義を有することを証すべく、僅かとはいえ数例の事実を同じアイヌの話から披露しよう。アイヌらがロシア人と出会ったばかりの「二八」六〇年代のことであるが、誠心誠意アイヌに接した「ミハイル・M・ドブロトヴォルスキー」医師は、彼らの間で医療を——彼は軍医だったから、それは彼の義務ではなかったにもかかわらず——実践して、大きな成果を上げている。彼の行動を促したのは、良き医者であるために頗る重要な資質である同情に加えて、学術的関心であった。同医師はアイヌ自身と、その「伝統」医療と、彼らの間に広く蔓延する疾病に興味を覚えたのである。幾人かの古老は今なお彼のことを記憶し、その思いを、愛をこめて回想する。

ノイエロ「東海岸の内路、現ガステロ」に勤める一人の准医師にかかわる今一つの驚くべき事例は、異族人たちが医療要員の個人的特質を、どれほど鋭敏に把握するかを示すものである。彼は有級准医師としての学歴でも、また医療実践に關しても、サハリンで屈指の准医師の一人と見られていた。頗る取るに足らぬ怠惰な医師の下で勤務した少なからぬ歲月には、官吏らの間ですら医療活動を手広く展開していた。住民は、どんな医師よりも高く彼を評価した。彼は自ら志願して、コルサコフスク管区チフメネスク哨所地区の寒村に配属された。周辺に在住するロシア人は高々40〜50名だったから、当地の診療所は主に異族人を相手にしていた。しかるに同准医師は、嫌気のさした医療活動を離れて休息し、事業経営と毛皮の買付けに従事することを狙って、当地に赴任したのである。彼は他の流刑囚住民と同様に、異族人を「野蛮人（チカリー）」呼ばわりして、自らの横柄な態度で異族人らを忽ち離反させてしまう。彼の事業とアイヌの犬ども

もの間で悶着が出来して、准医師が数匹の犬を殺したことが発覚するや、苛立ちと反目がすでに表面化した。それは一九〇四／〇五年の冬場、インフルエンザの蔓延中に顕在化する。内路村のアイヌらは、すでに数名の死者が出ていたにもかかわらず、自らは准医師に援助を求めぬばかりか、流行病が猖獗を極める隣村へ向けて、准医師を犬櫓で運ぶことさえも拒否したのである。その時期（一九〇五年三月）に私が内路に到着すると、准医師は大悪人だから、その手からは何も受け取ることができぬ、とアイヌたちは断言した。彼らは、敵に助けを求めるくらいなら、死んだ方がましだとのこと。彼らの理解では当然の理由によるならば、自分らに敵意を抱き、ただ不愉快な事ばかりを繰り返すような者は、早晚彼らに毒を盛るに違ひなく、苦難を和らげてくれることなどありえぬわけである。

アイヌの間では、敵意に駆られた者が互いに毒殺しあつてきたという伝承が、いまだ新鮮味を失っていない。侮辱されて激昂したシャマンは、遠方の他人を殺すことすらできるとの信仰が、なにかずく人々が古よりこの恐るべき能力の

具有者であつた東海岸北部のこの地では、今もなおしぶとく保持されている。

シヤマニズムや、シヤマンと結び付いた迷信との闘いは、そしてまた偶発的であるものの、時には恐らく意図的に人をたぶらかそうとする啓示や、人々とあまたの善霊や悪霊との間の仲介役を果たすシヤマンらの話芸の支配から、これらの小児的知恵を解放することも、よく組織された医療支援の助けを借りることで初めて可能とならう。

繰り返すが、そのための主たる条件は、管見によれば、かほどまで極限的な条件下で働くことを望み、「原始的」諸部族の研究に格別な魅力を覚え、彼らの辛い定めに衷心からの同情を禁じえぬ人たちの派遣である。

私が北海道島を訪ねた折、あるアイヌの村「恐らく鶴川であらう」で、一人の女性が主宰する英国教会宣教団の診療所を見出し、同所の活気と、この事業に携わる人たちが及ぼす影響を観察する機会に恵まれた。

このように小規模な病院は、衛生的な習慣や、人間の健康に有益なものや有害なものに対する健全な理解の温床であるばかりか、付設された学校とも相俟つて、アイヌの間に道徳と宗教的教えの基礎を広める際の最良の協力者でもある。医師らへの支援として、助産婦の准医師を任用するのは有益だらう。彼女らは、異族人の間で最大の保守分子で、若い世代の家庭教育全般を手中に収める女たちに影響力を行使しうるのである。女性による医療支援が必須である所以は、女らが己の性的領域におけるあまたの疾病に際しては気後れして、男たちに相談しないことにも求められる。私は二度ほど、夫たちの了解を得て、助産婦をアイヌ女の許へ連れて行つたことがある。いずれも、子を授かることを望む夫らの熱望にもかかわらず流産した事例だった。加えて、流産は余病を併発した。助産婦が病人の診察に漕ぎつけるまでには、診察の必要を説き、同意を取り付けるべく説得を重ねて、その都度半日も費やさねばならなかった。同村の老女たちには、彼女らが我らに協力するよう、あるいは少なくとも反対だけはせぬように、根回しをすることも必要であ

った。

男性医師にとつては、女の触診がさらに難しいことは言うを俟たず、恐らくは不可能でもあろう。ある日、私が一人の娘の許へ医師を案内すると、娘はリウマチを患つて動けなかったが、膝から上の脚部を露出させることには頑として応じなかった。しかるに、風俗が極めて軟化しているマウカ「眞岡、現ホルムスク」では、性病患者があまた見出される身持ちの悪い若い女たちが、日本人であるかロシア人であるかには一切拘泥することなく、喜んで医師の治療を受けている。しかるに、その他の場所では、西海岸であれ、また東海岸の全域でも、この新風俗は極度に非難されていて、女たちが医療の恩恵に浴することは概して極めて稀である。

一新されたサハリンの諸条件下でも、無償医療体制の維持はむろん頗る重要な案件である。

国家構成員各自の健康は、個々の個人にとつて最大の幸福であるだけに留まらず、そのすべての隣人の、ひいては全社会有機体の生活の安寧にとつて必須の条件でもある。そして自らの全住民を疾病から防衛する責務は、支配層が自ら引き受けねばならない。多くの場合、なかんずく都市では、個人の利益を追求する富裕住民が私的医療実践の存続を可能としている。だが、異族人や、極貧者や、医療支援の効用に対する認識を欠く人々の間では、どんなに選り好みをしてない医師ですら生計を維持することは叶わぬだろう。北海道島における「広範な」無償公共医療体制の欠如は、アイヌらの健康へ間違いなく否定的な影響を及ぼしている。私は滞在先の幾つかの村で、罹病した人たちが、近くに住む医者にすらかかろうとはせぬ状況と遭遇する機会があった。彼らの説明によれば、そのための錢がないからだという。しかし、私の携帯薬囊からは「薬剤を」嬉々として受け取ってくれたのである。ある夜は何と叩き起こされて、疑似コレラを発病した老女に対する支援が乞われる始末だった。

とはいえ、政府が雇用する医療要員の定数設定だけに終始してはならぬ。サハリンには国家公務員の医師と、官営の病院や薬局が存在する。しかしながら上述のように、これらの恩恵に浴するアイヌはまことに微々たる数であるから、この方面での格別な相違が、北海道とサハリンの間では全く認められない。当地でも多くの場所、なぜ近くの准医師から薬を受け取らないのか、とアイヌたちに訊ねると、「わしらにはコペイカ（つまり銭）がないよ」という答が返ってくるのである。したがって、無償医療に関する情報が全く周知されていないか、通常は異族人らと唯一直に接する包帯師——「サハリンに設けられている」准医師助手の「ポスト」——や准医師が、医療支援において己への謝礼支弁を強いているか、のいずれかである。

二十三 条

各郷には一校以上の識字学校を設置すべし。その際は大工・指物師・鍛冶師などの手仕事、菜園経営や農業、なかならずく漁業に役立つ知識に関する実践教育の導入が望ましい。

学校の整備・維持の費用は国が支弁すべきである。校舎の維持、校内設備の購入、教師俸給の支弁に要する巨額出費を自己負担するには、異族人は余りにも貧し過ぎる。学校は、異族人がロシア人と速やかに一体化するための強力な手段となろう。但し、学校には純粋に世俗的な性格を付与し、可能な限り実践的な基盤に立つて事業を推進することだけは肝に銘ずる必要がある。課題は、子供たちを親しい環境から引き離さぬこと——大人のアイヌからは、そのことを危惧する声が上がることもある——、子供たちには却って、彼らの親たちの事業の継承を可能とするような知識のみを授けるばかりでなく、習得した知識のお蔭で親たちを凌駕するようにも努めることにある。

識字「教育」に関する限り、異族人の子供らには、ロシア人子弟とは別建ての特別教育が必至である。格差の著しい知

的素養、異族人子弟がロシア語を弁えぬこと、またこれに起因する別途の教授法が、それを要求するわけである。

手仕事の教育では、ロシア人移住民の子弟も交えた混成クラスの編成も可能であろうが、学校は、異族人らの目が届く所にあつて、それを己のものと称しうるように、必ずや彼らの居住地の内部に設置されねばならない。

二十四条

学校における教育は、男女両性の児童に対して均しく義務付けるべし。

学校では原則として、一定の年齢に達した子供らに義務教育を課することが望ましい。部族の文化水準はより均等かつ迅速に上昇するであろうし、識字者と修学経験が皆無である者との間に起こりうる反目も生じないだろう。だが当初に学齢期児童の全員を受け入れるのに十分な数の学校が確保されぬ場合、義務教育は若干の時を待つて導入することも可である。読書きの知識は圧倒的多数のアイヌにとつて大きなメリットであるから、もしその際に、教育を終えた者には兵役を免除すると明言されるならば、男子の教育に抗う者はなからうが、女子教育に対しては、頗る多くの人が異議を唱えるであろう。この偏見との闘いは長丁場となるから、飴や、恐らくはまた鞭（過料）の行使も厭うことなく、様々な工夫を凝らして進めるべきである。学校教育への女教師の任用は、少女らの学校招致に少なからず貢献するであろう。改めて言うまでもないが、異族人学校には進歩的で、平均よりも高い地平に立ち、さらに、このユニークな環境と風変わりな生活状況を好ましく思うような教師たちを、少なくともその当初には揃えるべきである。

北海道には、そのような進歩的人士や宣教師たち——著名な「ジョン・バチェラー」や「トロシン」[この人物については不詳]——がすでにおられるが、近年には日本人の小谷部「全一」氏が、アイヌらに対する同情から、読書きのみならず手仕事や農作業までも教えるべく、アイヌの村に細君同伴で住みついている。

学校、小病院、禁酒協会は、他の「諸人種」の狭間で精神的に後れを取った部族を引き上げて、その繁栄を目的とする経済的性格の各種方策に強固な基盤を提供するであろう。

二十五条

刑事・民事を問わずすべての訴訟案件は、法律に基づきつも異族人の慣習によつて審理し、異族人政庁の口頭裁定に委ねるべし。

異族人長官は毎年、アイヌたちが自ら審議した諸事件に関する情報を収集し、我らの観点から見て強者による弱者の抑圧と断ぜられるような裁定については、その破棄に向けて道徳的影響力を行使すべく努めるべし。

この抑圧は極めてしばしば、女に対して認められる。慣習の規定する女の地位は、男のそれに比して常により低めである。

重婚や強制婚は、往時の名残としていまだ見出されるが、新しい形態の一夫一婦婚に席を譲りつつある。だがこの問題では、男子の女子に対する顕著な人口卓越や、女に対する態度がモンゴル人よりも著しく公正である白人種の登場といった若干の社会現象が、サハリンではアイヌの女たちに有利な形で出来している。

異族人が自ら審理する案件は、諸慣習の漸次的変化を見守るべく、またロシア帝国の全市民にとつて共通の諸法典が、時宜を得て異族人にも適用さるべき時機を見定めるためにも、そのすべてを記録しておくことが望ましいであろう。当面、アイヌら自身の解決に委ねるべき案件としては、家族や遺産相続にかかわる事案が挙げられる。

二十六条

勾引ないし禁錮刑を言い渡された異族人は、他の拘留者とは別の部屋において、拘禁が異族人の被収監者に不幸な

結果をもたらさぬよう、特別に定められる諸条件の下で刑期を勤めるべし。

自由剥奪や監獄が、異族人には完璧に新しく、無条件で怖い概念である。これらの重みは、文明的「人種」を表する者よりも、この未知のものに対する正体不明で重苦しい予感の分だけ、彼にはよりこたえるわけだ。異族人は幼時より自由と広大な原野に慣れ親しみ、刑罰というものを——ましてや自由移動権の制限などは——全く知る由もないから、暗い監獄の四壁に閉じ込められるや、自由と広野を恋い焦がれだすだろう。異族人の生活様式は、血縁者たちか、幼時より親しんできた人々の間に、常に己を見出すという習慣を植え付ける。新しい条件や見知らぬ人らは、たとえ好ましいものですら、異族人の心を疲弊させるのが常で、わが家への思いを惹起させる。この抑圧された精神状態や、自由な天地を闊歩するという欲求の抑止や、なじみのない食べ物は、監獄にある異族人の肉体を急速に衰弱させよう。読書を弁えぬゆえ書物から新しい感動を汲み出すことも叶わず、「抑圧的な」拘束感や、ありとあらゆる重苦しい印象から片時も逃れる術は与えられない。

北海道島では、禁錮刑を勤めたアイヌについて何件か耳にしたが、それを語ってくれた人たちによると、囚人らは出獄直後に死ぬか、または発狂したそうである。サハリンでは禁錮刑に処されたアイヌの事例をすでに2件も承知している。アイヌのチウカランキ (Cikaranki) は、己の細君を凌辱殺害した入植囚を殺した廉で、監獄内における七日間の勾留という軽微な刑が宣告された。私がチウカランキと会ったのは、彼が刑期を勤めるべく召喚されて、コルサコフスクへ出発するときである。彼の精神状態は、あたかも苦難と確実な死が己を待ち構えているかのような風情だった。幸いにも行政府は、チウカランキの心理について叙述した私の請願書を容れて、彼の状態には極めて慎重に対処し、彼を隔離された独房に閉じ込めて、他の囚人らから遮断してくれた。とはいえ、このような措置は個々の人物の裁量次第でな

くて、法的強制力をもって行われることが望まれる。

西海岸のアイヌ6名は、護送中の浮浪者9名が逃亡を企てたため殺して、2年の禁錮刑が言い渡された。もし「管区法廷」の判決が、既決囚らの嘆願によつて上告された控訴院で確定されでもしたら、これらのアイヌはどうなるだろうか。もし彼らが刑を勤めるべくシベリアへ送られる場合ですら、かの地でも囚人の報復に遭わないだろうか。監獄の扉の中で無為に時を過ごし、監獄仲間と付き合う2年間には、たとえ最もましな場合ですら、即ち、この2年を無事に生き延びたとしても、彼らの精神面に、どれほどの消し難い痕跡が残されるだろうか。

二十七条

個々の異族人ではなくて、彼らの共同体ないし共同体代表者が締結する契約や商取引は、異族人長官がこれを裁可すべし。

異族人らの利益に法的保護を講ずることは、彼らの未発達や、己の要求事項を詳細に述べる能力の欠如に鑑みて必須であるが、しかも彼らは、取引の相手方の代表者にその記載を託すからなおさらである。私は漁業者らがアイヌの共同体と取り交わした契約の諸条項を見る機会があったが、後者にとつて有利な条項は、前者のそれに比して著しく僅少であつた。文書作成時には、文盲の異族人らに付けこむような背信行為が出来るが、その回避策として、共同体の商取引に対しては、ある種の保護制度の導入が必至であろう。

裁可された契約の決済時における監視も有益であろう。所与の商品に対して水増し価格が記入されるという出鱈目が少なからず罷り通っているが、異族人ら自身にも、商人的良心の育成が必要である。アイヌたちは数世紀にわたつて、当初はオリチャ「現ウリチ」(山丹人)や日本人漁業者から、次いではロシア人の過酷で搾取者的な対応を体験し、常に皆

済不能な債務を彼らに負いつつ、借財を重ねることに、執念を燃やしてきたが、返済には頗る不熱心で、多くの者は術策を弄して、最終的な現金決済を回避しようとこれ努める。流刑囚分子の習俗との遭遇は彼らに、良いことは何も教えず、ただペテンや背信を發達させただけである。これらすべての否定的影響とは、頗る長期にわたる弛みなき闘争を続けることになろう。

二十八条

知事は異族人統治の全般を統括すべし。異族人長官は知事に直屬し、異族人の福利を担保する究極的責務は知事に存する。島内巡回に際して、知事は異族人諸機関を監査し、もし異族人らが自らの困窮や要請をめぐって知事への直訴を望むならば、彼らの代表を引見すべし。

サハリン

一九〇五年三月

ベ・ピルスツキ

樺太アイヌの経済生活の概況

解題

以下の邦訳稿の底本はウラヂヴォストク市のアムール地方研究会⁽¹⁾文書庫が所蔵する手稿⁽²⁾であるが、直接に参照したのは、サハリン州郷土誌博物館のM・M・プロコフィエフ氏が手稿から起こされた電子版である。電子稿の提供を賜ったプロコフィエフ氏には、この場を借りて御礼申し上げたい。

一九〇二年九月、初来日を終えて函館から戻ったピウスツキは、コルサコフスク哨所（大泊、現コルサコフ）にてM・N・リャプウノフ・サハリン島武官知事からエンチウ（樺太アイヌ）の人口調査を依頼される。さらに翌三年十月二十八日付（露暦、以下同様）の私信では、「シベリア異族人統治法」(822)のサハリン版修正案の起草と、エンチウ調査報告の提出を、知事は重ねて懇願していた。3年に及んだ再度のサハリン滞在中（一九〇二年七月～一九〇五年六月）、ピウスツキはすべての課題を見事に遂行した。一九〇五年三月には、知事の私信で依頼されたエンチウ調査報告（即ち本手稿）、そして四月十二日には「樺太島のアイヌの統治制度に関する規程草案」⁽³⁾も攔筆したからである。なお、同「草案」は「個別居住地点の簡潔な解説」を伴うとタイトルで謳っているから、本書に収録する「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」が添付されたのであろう。したがって、ピウスツキは六月十一日の離島時までに同「草案」を、これら二件の付属文書——「個別アイヌ村落に関する若干の情報」と本手稿——を添付して、リャプウノフ知事へ提出したものと推察される。

ところで、両「付属文書」は一九〇六年七月二十三日、アムール地方研究会にも届けられた。滞日中のピウスツキは、帰国する友人 N・P・マトヴェイエフ（詩人としてニコライ・アムールスキーとも号した）に託して提出したもので、同研究会での上梓を期待していた⁽⁴⁾。かくて両手稿は一九〇七年にウラヂヴォストクで出版の運びとなる⁽⁵⁾。この公刊論文を底本として一九九八年には英語訳⁽⁶⁾、また二〇〇二年と二〇一二年には日本語訳⁽⁷⁾も公刊された。

プロコフィエフ氏は同手稿を、二〇〇四年にウラヂヴォストクの『ルベシユ』誌で公刊⁽⁸⁾、また二〇〇七年刊のピウスツキ論文集『南サハリンのアイヌたち』にも再録している⁽⁹⁾。

なお一九〇六年には、原著者ピウスツキが自ら改編したロシア語版縮約稿の上田將による邦語訳「樺太アイヌの状態」が、東京の月刊誌『世界』26、27号に掲載された⁽¹⁰⁾。この日本語論文は、ピウスツキによるアイヌ関係処女作である。

二〇一四年一月十五日、札幌

注

- (1) Общество изучения Амурского края——以下では ОИАК と略記する。帝都サント・ペテルブルグを本部とするロシア帝室地理協会のプリアムール支部（ハバロフスク）傘下で、一八八四年に創立されたウラヂヴォストクの研究機関。一八九〇年に開設されたその附設博物館に、ピウスツキは二年余り（一八九九年三月～一九〇一年五月）勤務した。
- (2) “Краткий очерк экономического быта айнов на о. Сахалин” (Архив ОИАК, ф. 3, оп. 1, д. 31, л. 1-70). 識語には「一九〇五年三月／サハリン」と明記されているから、北サハリンのオノール村にて擱筆されたと判断される。
- (3) “Проект правил об устройстве управления айнов о. Сахалина с краткими объяснениями к отдельным пунктам,” в: Материалы к изучению истории и культуры населения Сахалинской области, стр. 131-147, Южно-Сахалинск (1986). 現在はウラヂヴォストクの極東・ロシア国家歴史文書館に保管されている所謂「草稿 B」(РГИА ДВ, ф. 1133, оп. 1, д. 2031, л. 123-144 об.) である。

- (4) М. М. Прокофьев, "Несколько слов о статьях Б. О. Пилгудского, вошедших в книгу," в: Бронислав Пилгудский, *Дни Южного Сахалина (1902-1905 гг.)*, стр. 19, Южно-Сахалинск (2007).
- (5) *Записки Общества изучения Амурского края*, 10: 89-116, Владивосток (1907).
- (6) Bronisław Pilsudski, "An outline of the economic life of the Ainu on the island of Sakhalin," translated by A. F. Majewicz, in: *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 1, pp. 271-295, Berlin-New York: Mouton de Gruyter (1998).
- (7) 【出羽弘訳】B・O・ピウスツキー「サハリン島におけるアイヌたちの経済状態の概況」(2002): <http://www001.upr.so-net.ne.jp/dewaruss/Pilusky.htm> (二〇一四年一月十四日閲覧)。
 【免内勇津流訳】ブロニスワフ・ピウスツキ「サハリン島におけるアイヌの経済生活概説」『環オホーツクの環境と歴史』1号: 47〜62^頁、札幌: サツポロ堂書店 (2012)。それぞれの底本は、出羽弘が一九〇七年刊の浦塩版、免内訳は、その百年後に再刊されたユージノ・サハリンスク版である。
- (8) Бронислав Пилгудский, "Краткий очерк экономического быта айнов на о. Сахалине," *Рубеж* №5: 321-334 (2004).
- (9) Бронислав Пилгудский, *Дни Южного Сахалина (1902-1905 гг.)*, стр. 39-84, Южно-Сахалинск (2007).
- (10) 露国ビルストゥスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」(上／下)『世界』二十六號^頁57〜66^頁(明治三十九年六月十日刊)、二十七號^頁43〜49^頁(明治三十九年七月十日刊)、京華日報社 (1906)。

樺太アイヌの経済生活の概況

シベリアの「異族人」たちは、その全体が遊牧系と漂泊系に大別されるのが通例である。樺太島のアイヌは「異族人統治法」によると遊牧系異族人に算入されているが、同法第二条では「定住性を有するものの、一年の間に居住地を移動させて、村落で通年生活していないもの」と、これを規定している。しかし私は、アイヌを定住的漁撈民と称する方がより適正であると考ええる。

アイヌの生業生活ではすでに古い時代から、狩猟が漁撈に比して大いに遜色があり、アイヌは漁撈の都合でのみ、家族連れで村落をあとにして川筋を遡り、また海岸伝いに別の漁場までも移動する。この移動は、集落の全員が挙つて動くのではなく、その一部はあくまでも村に留まり、しかも鯨や鮭鱒という魚種の短い遡河産卵期に限定して実施されるのだ。

今日ではわずかに3集落——（東海岸の最北端に立地する）ナイエロ「内路」、タライカ「東多来加」、コタンケス「古丹岸（コタンケシ）——だけが、海岸から遠く離れて海風から防御された別の場所に、半地下式の越冬家屋を造営している。

それ以外の集落では、多くの世帯がすでにロシア式丸太小屋で越冬し、東海岸ではその数が全世帯の4分の1超の27戸に達する。西海岸では日本式住宅が導入されており、一九〇五年には102世帯中の10世帯、即ち、その9分の1が日本式住宅である。

指摘さるべきは、樺太島民のすべてがそうであるようにアイヌもまた、彼らが使用する極めて限定された量の木材資源を無償で調達するという事実である。彼らは少なからぬ量の薪を焚くとはいえ、海辺に漂着した流木や粗朶といった乾燥木材を常に取り扱っている。

鯨と樺太鯨が——そしてまた一部では鮭も——アイヌと彼らの犬どもの双方にとって主食となっている。なるほどアイヌはまたイトウ・コマイ・キュウリウオ・ウグイ・虹鯰・鱒・鰯といった魚種も捕獲するが、これらはアイヌの物質生活における保存食として通年貯蔵される鯨や樺太鯨ほどに重要な意義は有さない。

保存食の加工法では、異族人のすべてに共通する①天日干しと、二枚に卸した魚身の幕舎内での遠火乾燥、②直火での丸炙りという旧来の方法が保持されている。とはいえ、今では各家族が自家消費分として、ある者は日本の方式に則り、またある者はロシア式で数十尾の鮭か鯰を塩蔵加工する。「ユーコラ」と称する乾製魚や燻製魚は、九月半ばかり七ヶ月間——西海岸では四月まで、また東海岸では五月に至るまでも——糧食の基盤である。その他の時期には、鮮魚や軟体動物、東海岸ではアザラシ、西海岸ではトドといった海獣の肉、そしてまた海岸に漂着した鯨や鯨などの肉も食する。一人が一ヶ月に消費するユーコラはほぼ90尾であるから、5名からなる家族は3600尾の樺太鯨を「八ヶ月」越冬用に加工することが必要と考えられる。乾燥鯨は専ら犬の糧食であるが、樺太鯨の骨もそのために保存される。鯨の脂身を煮沸する際に得られる魚油は、東海岸北部に在住する者を除いて、すべてのアイヌが食用に供する。東海岸北部のアイヌは、上質のアザラシ油がふんだんに得られるから、苦い鯨油は毛嫌いするわけだ。アイヌの間では大量の米が消費されるが、植物性食料として広範に利用される各種根茎類や野草は夏場に採集し、越冬用に乾燥保存する。パンと穀粉製練菓子、そして馬鈴薯はアイヌにとって、なかんずくロシア人村の周辺で暮らす若者らにとっては、それなしで一日も過ごせぬほどの必需食品である。紅茶は一日に数回飲むが、砂糖抜きで我慢できるのは極貧者だけだ。アイヌの食料全般は、サハリンの他の異族人らと比べると、より潤沢で、より多様で、より文化的でもある。

アイヌはつい先頃まで、漁期になると日本人漁業者に雇用され、報酬として僅かな米と衣料品を受け取り、日常的に提

供される若干の雑魚は自家用越冬食の加工に回してきた。

いま私の手元に当時のアイヌの経済状態を描出するに足る正確なデータはないが、先住ロシア人と行政当局の双方の言い分を勘案するならば、それは今よりもはるかに低い水準にあった。

一八七五年以降、サハリン南部の沿岸一帯は暫くの間ほとんど利用されなかった。アイヌたちは日本人の引揚げを嘆いていた。彼らなしには、完璧に慣れ親しんできた米が得られぬからである。だが、北海道近海での漁業資源枯渇を受けて、日本人の食指は次第に樺太島へ向けて動きだした。使用していない漁区の「日本人への貸貸が横行し、当局は前のめりになって新漁区を貸与、しかも錯綜を極めるところまで推進したから注目を浴びて、行政府は漁区の交付を中止した。

漁場が閉鎖されて、日本人の関与はますます難しくなる。新漁区は、ロシア国籍の名義人に対してのみ交付されたからだ。一個の署名に対して三千ルーブリもの金子をせしめるような替え玉名義人の頻出といった、新現象が出来している。魚類学者のブラジニコフ漁業監督官のサハリン視察は、地元土着住民への漁区貸与をもたらした。

一九〇〇年に施行された漁業実施規則によって、それまで日本人漁業者に賃貸されていた漁場が、初めて異族人らの手に引き渡された。アイヌたちは、日本人漁夫と同じような頗る僅かな報酬に甘んじる労務者から、独立の事業主となる可能性を獲得する。彼らには漁撈具がなかったが、そこへ日本人漁業者らが支援に乗り出し、漁撈用具や漁具に加えて食料までも貸付けた。その結果、後で見るように、ある者は2〜3年の間に何がしかを入手することに成功するが、他方ではペリと塩蔵鱒のすべてを巻き上げるような「悪徳漁業者」からでも、賃貸で漁撈具を確保できたことで満足する者もいる。高い漁獲能力で知られる日本製定置網を操業に投入した結果、かつては自家消費用に投網と釣だけで魚を捕獲していたアイヌの間でも、労働生産性は著しく向上した。この方面ではさらなる発展が期待できる。

漁業規則によると、村落単位で漁場を獲得した土着住民らは賃貸料を支払う必要がなく、国外輸出向けに漁獲物を加工するような場合にだけ、1ブード「16・38^註」につき5コペイカの定率税が課される。

遺憾ながら、サハリンの漁業管理局は専ら国庫歳入増の追求と漁業実施規則の遵守監督にかまけて、アイヌの共同体漁業の生産性に関する詳細データは収集していない。彼らの間で売却されたペ粕と魚本体の税額、したがってまた、それらがのちに日本へ搬出される際に関税として支払われた税金は多くの場合、アイヌ自身による漁獲物の売却先である日本人の個人漁業者らが、賃借した漁区からの水揚げに対して支払った関税の総額としてしか記載されないのだ。

私が聴取することに成功したデータを以下に掲げるに当たり、これらデータはその大半が近似値に過ぎぬことを断っておきたい。つまりデータは若干の正確な数値を含むものの、——一九〇一—一九〇三年の——いずれかの年にかかわる数字であって、同一の漁場であっても年ごとに漁獲高は多少とも変動するから、やはり相対的な価値づけが必要であろう。

大型定置網を投入したあとも、アイヌは己の従前からの漁法を放棄してはいない。海上で樺太鱒を捕獲する者は、魚群が岸边に屯する間の、漁期の当初にこれを実施するのみである。魚群が川の遡上を始めるや小ぶりの投網で捕獲し、上流部の川瀬に達すると、半死半生ながら力を振り絞って逃げようとする魚を、鉤を用いて捕捉する。こうして捉えた魚は専ら自家消費用に干すなり炙るなりして加工する。

末尾に掲げる表から明らかなように、大型定置網は主として鯨漁に使用されている。

漁具本体、「和式漁り舟（クンガス）、定置網、魚脂煮沸釜、ロープ、蓆、モッコなどは、アイヌの共同体が3年がかりで、およそ五千ルーブリを叩いて購入する。閉鎖された日本人漁場のあちこちに残置されているためアイヌらの暫時的使用が可能な建物——魚の納屋や倉庫、はたまた住居など——への出費を、私はここに計上してないが、これらの建屋類を元の賃

借者からすでに買い上げたような場合もある。

日本人らがサハリンから国外へ搬出する漁獲製品には、1ブード「16・38^多」当たり5コペイカの関税が課されるが、彼らはむしろその分を、アイヌに対する支払額から差引くわけである。

したがって、国庫はアイヌの共同体漁業から毎年およそ3150ルーブリの歳入を見出している。

私がハバロフスクの国家資産管理局を訪ねた際、所謂共同体漁業に関する興味深い文書類を入手したが、そこにはロシア人集落の漁業に関する記載も見出される。一九〇一年度はペ粕9615ブード、鮭3276ブード、樺太鱈1万0644ブードが生産されて、1176ルーブリ75コペイカのブード税が徴収された。一九〇二年度には魚脂煮沸釜39台、就業者数345人のもとで、ペ粕1万7502ブード、鮭1440ブード、樺太鱈4901ブードが生産されて、徴収されたブード税は1192ルーブリ15コペイカだった。一九〇三年度分の出来高は、ペ粕4万5736ブード、鮭260ブード、樺太鱈1万3933ブード、鯨油750ブード、そして2997ルーブリ25コペイカのブード税収があり、また6580ルーブリの懲罰金も——明らかに日本国籍者「『対雁アイヌ』」の就労に対する過料「歳入」として——明記されている。

私は漁場に立ち会う監視要員の情報収集法を熟知するから、こうした数字の信憑性には疑義を挟まざるをえず、不完全な数値と断言して憚るところがない。

ペ粕と塩蔵魚の売値はどこでも一律ではない。100石のペ粕は、もしすべての漁撈具が自前のものである場合、現場では700〜750ルーブリで取引きされる。もし製品の買い手が漁り舟・魚網・煮沸釜・蓆・ロープを提供する場合は、100石当たり450ルーブリを超えることはなく、400ルーブリと値踏みされることさえある。一般には、漁撈具のうちのいずれか、例えば漁り舟一艘、魚網一張などを臨時に借用する場合、これらの製品価格の4分の1が逐一、別途

に買値から差引かれるが、頗る高率の減額と言わざるを得ない。100石の樺太鱒についても、同じ理由によって600〜500ルーブリ、はたまたそれ以下の代価が支払われる。私の手元にあるより正確な聴取記録によると、共同体漁業における男女就業者一人当たりの賃金は、不漁時で平均40〜50ルーブリほど、豊漁時には60〜70ルーブリと想定することができ。参考のために、漁撈に従事する日本人漁夫の平均賃金についても触れておくが、就業者の能力次第であるとはいえ、(鱒と樺太鱒の両漁期の就労に対して) 40〜58ルーブリの範囲に収まっている。したがって、かつて雇用労務者として就労していたアイヌらにも、これ以上の稼ぎはなかったわけだ。しかるに、特異な決済制度が多くの場合に、共同体漁業に参加する就業者各自の賃金部分を強度に目減りさせる。つまり、共同体漁業の製品は現金取引ではなくて、さまざまな商品とのバーターによって決済されるからだ。アイヌからペ粕や樺太鱒を買い取る多くの漁業者たちは、(日本人漁夫の需要に応えるべく) 正真正銘の商店も自営していて、当年度の決済で——また時には延払いの形で——必需物資もさることながら、全く不要不急のがらくたまでも商うわけだ。そのような商店では酒が常時ふんだんに在庫している。

勘定や値踏みの妥当性は専ら、これらの実務を担当する、通常は小規模漁業者や手代らの良心にかかっている。堅実な漁業者らは今や、アイヌとの取引に減多に手を染めない。アイヌらが共同体漁業に集結して立ち上げたささやかな組合、そしてそこで生産されるささやかな量の製品は、大規模漁業者らに取引を開始させる意欲も、十分な信頼も惹起しない。初年度は必ず——また多くの場合には次年度以降も——漁撈具は言わずもがな、順調な漁を担保する必須条件と見做された漁が終わるまでの米や酒までも、分割払いか単なる貸付けで供与せねばならぬからだ。

それだけに、漁業者に仕えた手代や番頭、手だれの漁師(シンド「船頭」であろう)らは、アイヌとの取引に執心する。彼らは元の主人から資金を借り受けて、すでに樹立した人間関係を駆使しつつ、アイヌ側のあらゆる弱みにつけ込んで、小

取引からでも己を満足させる利益を引き出そうとこれ努める。この際には以下の事実も顧慮する必要がある。即ち、漁撈具や食料の確保という漁撈にかかわる債務はすべからず、莫大な利子をつけて日本で清算されること、またサハリンで幾つかの漁場すら賃借している漁業者もその大半は、己の事業を自己資金ではなくて、銀行や個人資産家からの借金で賄うという事実である。これらすべては、漁撈に直接携わる人たちの利益を減少させる。アイヌと買付人の間には、すでに幾つかの悶着が生じている。決済の結果に不満を覚えたアイヌたちが、通常は多年度にわたって結ばれた契約を破棄して、好条件の提示で彼らの関心を暫時惹きつけた別の人物と、新たに契約するという事態が幾つも出来している。一九〇二年に数ヶ年にわたるとの条件で署名したサカヤマ「榮濱」村の組合総代が、一九〇三年に別の人物と交代するや、新総代は以前に署名された契約の責務をよしとせず、全組合員の合意の下に別の日本人との取引を始めた。こうした状況は、多少とも良心的な人たちに、アイヌの漁獲物の買付けをさらに思い止まらせるわけだ。

稼いだ金額の分配は通常、総代がこれを行うが、彼が組合の利益の私心なき擁護者であることはきわめて稀である。アイヌの慣習によると、総代は配分時に他の者たちより多く受け取ってはならず、また取り分に関する限り、成人漁夫の間に差があることは衆人が認めるにもかかわらず、均分が原則である。女は男よりもやや少なめで、未成年者の取り分はさらに小さい。ある村で一九〇二年に起きたことだが、漁期の終了後、収益の配分に一切与らなかった女たちは、同じこと、即ち決済に際して男らが専ら酒で受け取るようなことが繰り返されたならば、自分たちは樺太鱒の塩蔵作業にも、また日本人に対するそれらの売却にも一切参加せぬぞと脅した。総代は他の組合員よりも多く受け取るべきだという日本で学んだ近代文化の所見が、サハリンでもアイヌらの意識のなかに少しずつ浸透しつつある。だが当面は、私が北海道で観察したような報酬の多寡という概念が、ここでは然るべく確立されていない。

それゆえアイヌらの間では目下、駅逓貨物の輸送を担当する請負人と、その実務に従事する人たち「天櫓の馭者」の間で悶着が生じている。前者は己の勤労報酬として、旅の途上での料金受領や櫓の手配などに要した別途の出費も賄うべく、それぞれ馭者から「報酬の」若干部分を徴収すべきと考えている。無断での、しかも恣意的な額の控除が出来して、控除には同意する者も、しない者もいる。そこで相互間の不満と苦情が頻発するわけだ。

魚の買付人が行うアイヌの組合との決済という問題に再び立ち返る前に、以下のことを指摘しておきたい。自己資金を有さぬ買付人は、漁獲製品を売却したあとで初めて最終決済を実行することができる。したがって、組合総代は買付人と同道で函館へ赴き、そこで清算済みの残額を受け取るよう慫慂されることも稀ではない。見知らぬ町にたどり着いたアイヌは、漁場で知り合った漁夫か下級手代の庇護と指導のもとにおかれる。漁師であれまた手代であれ大抵は漁期が終わるや否や、稼いだ金を函館で蕩尽するまでドンチャン騒ぎに明け暮れる。漁業者のある代理人があけすけに語ったところによると、サハリンの漁場で就労する漁夫のうちで、遠方から招いた手だれの漁師は僅か一割に過ぎないという。

その大半は日本人労務者でも最底辺の輩、つまり賭博狂か酔いどれであるが、懐の許す限り呑んだくれたのちは、たとえ僅かな額でも提示されるや唯々諾々と、次の漁期へ向けて安値の契約を更新する。アイヌらが多少とも親しく付き合ったのは概してこうした労働者階級のやくざな連中である。彼らが自らの指図で、町の事情に暗くて不安をかこつアイヌらを少々活用することは大いにありうる。函館到着直後の数日は、のべつ幕なしの小宴会で明け暮れる。酒宴と色恋沙汰に目のないアイヌとしては、陽気な仲間たちに後れを取らぬようにこれ努める。日本人の女がアイヌに嫁いだ例は皆無だったから、たとえ上辺だけの金銭づくであれ、日本女性の好意が得られたアイヌは頗る御満悦であつて、己の恋の遍歴に関する思い出は日本での滞在を長らく記憶させる。函館で文明の洗礼を受けた結果、未練を残して離函するアイヌも少なく

ない。若いアイヌが函館から戻る途上で、見捨てたばかりの日本人遊女との別離をはかんで海へ身を投げた事例もあるが、彼はその遊女を本気で愛してしまつたのだ。通りかかった蒸気船が溺死寸前の男に気付き、彼を救い上げた。

帰郷の時に到来して、函館暮らしのつけを清算するや、組合が受領すべき代金は、もはや満額を受け取れぬことが判明する。公金を呑み潰した代理人は帰郷後、嘘八百を並べて正当化にこれ努め、理不尽にも漁獲物買付人まで非難することもある。期待を裏切られた勤労者らの間には隠然たる不満が漂うものの、当面は表面化しないのが通例である。アイヌの間では、民衆を威圧する個々の有力者らには盲従すべし、という慣行が幾世紀にもわたって成立しているからだ。この忍従する能力や、特定事例における目上の他者の意思の意識的容認が、アイヌの漁撈組合の存立を可能とするのに対し、テルベニエ「多来加（タライカ）」湾岸のオロツコ「現ウイルタ」やギリヤーク「現ニヴフ」はアイヌよりも我儘で、より後れてもいるから、己の漁撈活動でも結束する意欲はさらになく、日本人漁場に労務者として留まる方を寧ろよしとする。だがアイヌにあつても、集落で氏族を束ねる村長の權威は少しずつ揺らいでおり、組合組織者の特権の内部的不承認こそ、管見によれば、漁撈における低生産性の一因にほかならない。アイヌらは漁場においても専ら労務者として関与することに慣れてきたから、組織者としての才覚はいまだ未発達で、繁忙期に必要となるものは余暇を活用してすべてを予め用意することを知らず、概して言えば、時間と労力を経済合理的に按配する能力が欠落する。初網を建てる前や、漁期の真つ只中で豊漁に恵まれたときに催される酒盛りは、アイヌに親しく接する人々が共通して語るように、時宜に合った首尾よい作業をししばしば妨げる。自尊心に富み、己を他の組合員よりやや格上と見做す根拠を有する人たちは、往々にして大変な癩癪持ちでもあることを私は見てきた。そのような人々に向けて発せられた命令は、もしその場により若年か、あるいは人格評価に関してより小さな権利を有する者（極貧者）が居合わせるならば、彼らがそれを遂行することは決してないであろう。

任務は直ちに、その場における最若年者へ振られるか、とどのつまりは未成年者が遂行することも珍しくないからだ。私の目前で腹を立てたあるアイヌは、繁忙期の最中にもかかわらず一昼夜も仕事を放棄してしまった。漁期の終了以前に組合を脱けるような事態すら稀ではないとも聞いている。組合の構成員は毎年同じであるとは限らない。ある集落における不満分子が、翌年には別の組合に鞍替えする。厳しくて精力的な差配者はより多くの不満を惹起するが、威厳のある総代がいなければ不和はますます昂じてゆく。

幾つかの事例において漁撈活動の深刻な妨げとなるのは、一部は漁業規則にもとづき、一部はまた、集落に近い漁場はしばしば貸貸漁場に占拠されていて近場には適地がないから、割り当てられた漁場は末尾のリストからも明らかなように、集落から2露里ないしそれ以上も離れた所にあるという状況である。いつ何時、放浪者や通りすがりの入植団に襲撃されるかも知れぬという恒常的危険と背中合わせで暮らし、言わば常時戦争状態にあるアイヌは、己の住宅を空き家状態で放置することができず、したがって、それだけでなくとも小所帯の組合は、非生産的な警備要員に数名を充てることでますます細ってゆく。漁場の生産性低下には幾つかの俗信も関与する。私自身がその目撃者であるが、ある村で、いくら待っても接岸してくれぬ鯨の到来を祈願して神々へ「イナウ」——削り掛けを施した棒——を供犠したあと、アイヌたちは就寝したのに、隣接する漁場の日本人らは夜を徹して漁り舟を配し、監視を怠らなかつた。この地では、次のような迷信的慣習が行なわれていた。即ち、夕刻に上記の「イナウ」が立てられた折に老人の唱えた祈願が神々の許に安着するまでは、それを妨げるようなことは一切御法度であるとして、働くことはおろか、微かな物音を立てることすら許されなかつた。己の官与の仕事を増悪し、自前の家政に対してさえほとんど勤勉の片鱗も示そうとはせぬ「^二徒刑囚との三十年に及ぶ隣人と

しての付合いは、他愛もなく影響を受け入れる子供のようないヌの性格に、影を落とさずにはおかなかった。今どきの若者はロシア人入植囚に毒されて怠惰となり、きつい仕事には耐えられないと、年寄のアイヌたちはこぼすのである。

さて、アイヌを対象とする共同体漁場の設置には、内外の両面にわたっている難点があるとはいえ、彼らに漁場が貸与されるや、その物質的福利も急速かつ強力に向上したことは認めるべきだろう。この措置は彼らの間にロシア当局に対する衷心からの感謝を惹起している。

ある良心的な日本人が直言するところによると、アイヌに漁区が割り当てられたあと、彼らに対する漁業者たちの態度は一変し、漸くより公正で人間的なものになったという。これを機に、未来永劫返済不能な債務潰けとなった労務者の、万能の主人に対する奴隷さながらの隷属には終止符が打たれ、対等な両者間の取引が新たに創出された。

アイヌらも己の自覚をやや高めて、高度な文化へ移行しようとする意欲には拍車がかけられた。

米はすでに久しくアイヌの必須食料であるが、その消費量が過去数年は激増している。

かつて大半の家に米があつたのは、日本人らが漁場に滞在した漁期の間だけだったが、春までに米が払底するのは今や極貧者の間だけである。五人家族の家では米一俵で一月半暮らせる。米は日本人と同様、一昼夜に一度だけ大量に炊いたあと、通常は日に三度の食卓に供されるその他のあらゆる食物の添えものとなる。より裕福な家では、大量の米が弱いアルコール飲料「サキ」「酒」の製造に回されて、(秋と冬に集中する)祝祭時に各集落を巡回する賓客たちに振舞われる。

アイヌは一八九九年まで、専ら自前の原始的幕舎(ユルタ)か堅穴住居で暮らしていたが、昨今では東海岸だけでも、95人の家長中27人はアイヌ式幕舎のほかにロシア風住宅も所有し、冬場は後者で過ごす。これらはすべて鉄製の小型ペチカ

で暖房され、時には玄関入口の間も備えた中規模のロシア式百姓家であるが、二人だけは、若干の部屋にオランダ製スト
ーブも完備した美装・清潔・広大な住宅を所有する。

西海岸では温和な気候のお蔭で、また恐らくは日本人の強い影響もあって、日本式住宅が建てられてきた。一九〇五年
一月一日現在で、その数は102戸中11戸を数える。屋内の調度はより現代風で、テールやランプ、ガラス製・陶製食
器や琺瑯引き食器が備わり、室内はとびきり清潔に維持されていて、不潔が非難され、肌着を洗濯する者も少なくない。
西海岸のマウカ地区では女も含めた全員が日本式風呂で入浴する（東海岸では若者らがロシアの蒸風呂に通うが、女たちだけは相
変わらず海か川での水浴びを、はたまた全身の洗浄ですら罪と見做している）。賓客——日本人やロシア人——に嫌悪感を与えずに応
接できるか否かは、主人と女主人の沽券にかかわる重大事である。男らはヨーロッパ風装束を着用し始め、識字への欲求
も認められる。女たちの間では刺青（両唇の周りの着色）に対する執着が弱まっている。

マウカ地区のアイヌは、日本人の影響のみならず朝鮮人や「マンザ」（昆布漁に従事する労務者「漢字で「蚕子」と記される中国出身
の労務者」）など優れた農耕者の薫陶も受けて、自らも菜園を展開している。同地区の総戸数73のうち菜園を有するのは53
戸で、——キャベツ・蕪・大根やその他の野菜は別にして——20ブード〔327・6^{タナ}〕足らずの馬鈴薯を栽培する者もいる。
毎年の総作付け高はほぼ200ブード〔327・6^{タナ}〕と見積もられる。東海岸でもロシア人村の周辺に立地する集落（タコエ
〔大谷、シヤンツイ〔落合、サカヤマ〔榮濱、ルレ〔魯禮〕では、やはり馬鈴薯や穀物を作付けている。一九〇四年には6人の家長
が小麦18ブード〔294・84^{タナ}〕、燕麦4ブード〔65・5^{タナ}〕を播種し、15ブード〔245・7^{タナ}〕の馬鈴薯を作付けた。

近年はアイヌの間で牧畜が著しく発展した。彼らはすでに42頭の馬と12頭の牛を飼育している。多くの入植囚は、彼ら
が家畜を大同様に、つまり一昼夜に一度だけ給餌するのを見て、アイヌのことをあざ笑う。恐らくは干し草を必要だけ

確保する術を知らぬか、給餌法が正しくないせいで、彼らの家畜はなるほど概ね瘦せ細っている。しかし管見によれば、アイヌらが通常は瘦せ衰えた個体か、ときには欠陥のある個体すら安価の故に購入するという状況も、この際は無視できぬと思われる。家畜の売り手は異族人の無知に付け入りがちだから、友好的で完璧に公平無私の助言を得る術のない買い手は、たとえ手厚く介護したとて到底治る見込みのない傷物を、御値打ちですよと言ひ含められて擱まされることになる。

東海岸で牛馬飼育の草分けであるコタンケシ「古丹岸」村のシトリン (Sitirin) 老人にとつて自慢の種は、この土地に初めて登場したロシア人のサマーリンを筆頭に、ロパーチン、デ・プレラドヴィチなど、東海岸を通過したロシアの旦那方全員 of 友人であり、また道案内も務めたこと、しかもベールイ元管区長官の大櫓の永年勤続駆者でもあったという事実である。そのシトリン老人が、東海岸では異族人の搾取者として悪名高い入植囚スムバトから購入した牛で大へまをやらした。その牛は、病状記載から推して鼻疽がもとで直ちに息を引き取ったからである。シトリンはそれでも初志を忘れず、今では東海岸広しと雖も、通過客に自前の牛乳を振舞えるアイヌは自分だけだと自負している。

アイヌたちは、島の入植囚ならば享受できるような指導や融資などの支援とは全く無縁ながら、農業や牧畜に従事することへの歴然たる意欲が認められるにもかかわらず、今一つの本質的障碍——それぞれの村における分与地の欠如——に遭遇している。隣接するロシア人集落の入植囚らがアイヌ自身の露営地のすぐ傍まで耕地を拡張すると、アイヌの犬どもが作物を踏み荒らすことから悶着が生じるが、アイヌらは己の播種のために、自宅から遠く離れた所に僅かな土地を求めねばならず、さらに遠隔のロシア人村まで赴いて種を播くこともある。

入植囚らは、アイヌの住宅が点在する所に草刈場を開設して、アイヌが神々へ捧げるべく特設した、竿の上に結縛される丈の高い削掛け棒までも刈り取ってしまうから (ナイエロ「内路」村にて)、それに対してアイヌたちはむろん激怒する。そ

の一方で、後者は越冬用幕舎の営繕に必要な草を求めて、また己の馬どもの飼料を確保するためにも、数露里先まで出向かねばならない。シヤンツイ村、タコエ村、ドウブキ〔榮濱〕村、ナイブチ〔内淵〕村、モトマリ〔元泊〕村、フレチシ〔婦禮〕村のアイヌは、入植囚の耕地と牧地を、彼らの住居から離れた所へ移すよう行政府へ申し入れたが、個々の集落間の地割りが確定するまで暫く待つようにとの回答であった。土地の分与はアイヌの村々にとって、アイヌの犬と入植囚の家畜をめぐって絶えず繰り返される争議や苦情を防止するためにも必須である。全く柵囲いのない牧地に文字通り放置されて、アイヌの村々までは数露里という所にも姿を現す仔牛や仔馬に、犬たちが噛みつくという事態が頻発している（アイ〔相濱〕、サコヤマ〔サカヤマ〕、ナイブチ、フレチシ、モトマリ〔モトマリ〕、ナイエロ）。入植囚らは意趣返しに犬どもを銃殺するが、殺された犬の何頭か、つまり先導犬は頗る高く評価されているから、アイヌたちは莫大な損害を被るわけである。ところで、犬はアイヌにとつて最も不可欠の家畜であるばかりか、すべてのロシア系住民にとつても有難い動物である。なぜならば、豪雪地帯でありながら海岸線に沿う良道が欠如する当地では、冬場の犬橇輸送が将来にわたつても唯一の交通手段でありつづけると考えられるからだ。駅通貨物とロシア系住民が犬橇で運ばれる土地、つまりルレ村からクスナイ〔久春内〕地区に至る東海岸では、一台の犬橇で一冬に平均40ルーブリまでの稼ぎが期待できる。

この問題の調整は、異族人とロシア人の集落間に善隣関係を醸成し、相互の敵意を昂進させる諸因を除去するという観点からも、頗る重要な課題である。一人の異族人にとつて、犬がどれほどの経済的価値を有するかを理解するためには、家計の担い手である犬が殺されたときの彼の激昂振り、その家族全体の悲しみを見る必要がある。残念ながら、入植囚らは概して粗暴な性格で知的水準も高くないから、地元の異族人にとつては橇犬でも猟犬でもある愛犬が、農民にとつての牛馬に匹敵するとの料簡を弁えられそうな者はほとんどいない。ナイエロ村では一九〇四年の夏、14頭の橇犬が射殺さ

れ、狐に向けて村の周辺に散布された（ストリキニーネ入りの）撒餌によって5頭が毒死した。撒餌を置くのは村から遠く離れた場所だけにくれとのアイヌらの訴えに、入植囚の猟師らは耳を貸そうとしない。犬殺しの件でアイヌたちは地元の准医師を糾弾している。ロシア人集落では同人と今一人の徒刑囚「入植囚」だけが自前の家政を有するからである。粗暴な無法行為に常時曝されている現状では、異族人たちに、彼らには目新しい成文法にもとづく秩序の卓越性をいくら説いても無益であらう。

犬の飼育は、（1世帯当たり橐犬8頭の）西海岸よりも（同10頭の）東海岸の方が大規模であり、小舟による沿岸航行がほぼ周年の交通手段である西海岸の南部が最も未発達である。ここでは採薪地よりも奥地へ入山することがない。

西海岸の北部へ向かうほどに、橐犬の頭数はすでに著しく増加する。最大の頭数を擁するのはタライカ村と、その近辺に立地する諸集落である。同地のアイヌらは犬飼育に最も習熟し、犬種もギリヤーク犬の血筋を大幅に取りこんだ大型犬である。ギリヤークはサハリンで最も優れた犬の飼育者と見做されており、アイヌも挽獣としての犬の利用はギリヤークから学んだものである。アイヌ居住域の北東部では、犬を舟に繋いで、岸边か川伝いに曳かせることも珍しくない。

西海岸は海がより穏やかで、海水に閉ざされる期間もはるかに短いから、舟による交通が頗る活発である。この舟は、アムール流域に在住する異族人らの舟に倣って建造されるが、各世帯に一艘は常備されている。加えて、102家族が48艘の和式漁り舟やボートも所有する。東海岸では、25世帯に併せて63艘の舟（すべて旧来のアイヌ式丸木舟）が備わるが、日本式漁り舟を有するのは15家族だけである。

海獣猟はアイヌにとって、なかならず春季の重要な生業である。直ちに消費される肉のほかに、加熱して得られる獣油は必須食品として周年貯蔵される。トドの皮革、とりわけアザラシ革からは革帯・履物、衣服さえも製作される。マウカ

地区ではナイボロ「内唄」からノトサン「野田罫」に至るまでの全村落が協力して、特別に建造した大型漁り舟を年に2回、トド猟のためモネロン「海馬」島へ派遣する。毎回これに順繰りで乗り組むのは、各戸から一人ずつ選ばれた30〜35人の男たちである。獲物は地区のアイヌ全員の間で分配されるが、ほんの僅かな量だけは、納得できる申し入れがあつた場合に限って朝鮮人や日本人には販売される。第一回は二月末に出発して四月に帰還する。捕獲されたトドの総数は平均100頭。第二回は六月の出発で帰還は七月、およそ90頭の収穫がある。モネロン島には日本人密漁者らもスクーナー帆船を駆つて姿を現すことがある。アイヌたちは一九〇二年、彼らを零落させる密漁者からの保護を求めた。これらの密漁者は銃を携えて現われ、これで多くのトドを仕留めるばかりでなく、それ以上にトドと、モネロン島の巖上で抱卵する海鳥を嚇して追い散らすからである。アイヌらはこうして、出猟の獲物——海鳥の卵や、銃は使用せずに銛だけで仕留めるトド——をすべて失うわけである。

クスナイ「久春内」地区にはアザラシもトドも接岸せぬから、当地のアイヌは獣脂も皮革も余所から入手している。

ウソロ「鵜城（ウシヨロ）」地区ではアザラシのみが獲れるが、それも僅かな量に過ぎない。東海岸の中部でもアザラシが僅かに仕留められるが、その南部（トゥナイチ「富内」と北部（タライカ湾岸）ではアザラシが豊富である。そこには流水が海岸近くに長く留まるからだ。アイヌがアザラシの皮革を売却することは頗る稀である。もし誰かの許に余剰の皮革や獣脂が生ずると、余所で暮らす親族たちのために取っておくからだ。タライカ湾岸のオロツコだけは、アザラシを専ら販売用に捕獲している。

西海岸のアイヌにとつては、莫大な生業的価値を有するモネロン島の猟場に匹敵するのが「タライカ湾東端の」チュレニー「海豹」島だつた。「だがそれは、」ロシア当局がオットセイ猟のために同島とコマンドルスキー諸島を「露米」会社に賃貸し、同

社以外は何人であれ狩猟目的での来島を一切禁止してしまう前の話である。しかるにタライカ・アイヌの間では、富源としてのチュレニー島の記憶が今なお生きている。アイヌらは、その記憶を甦らせつつ島の起源伝説を語る際に、自分たちの夢は今なお、同島におけるオットセイとトドの狩猟権の回復だ、と忘れずに付け加える。

ポロナイ川の河口を賑わした白イルカ猟も、昨今ではその高難度のゆえに、はたまた危険性にも鑑みて、すでに放棄されている。

鯨はアイヌらに貴重な肉と、橇の滑走部に加工される骨をふんだんに提供する。だがアイヌは鯨を狩る術を知らぬから、ひたすら運に頼るか、あるいは鯨を殺したのちにアイヌの許まで届けてくれる（と彼らが解釈する）鯨を当てにするのだ。

浜辺に打ち上げられる鯨の数は、年平均で一〜二頭。アイヌの慣習によると、それらの帰属先は、発見地に至近の教集落の住民たちであるという。とはいえ、それらの集落がこのような神々からの恵みを独り占めすることは決してなく、幸運には恵まれなかったその他の人たちへも、肉・獣脂・骨は気前よく分配されている。

アイヌの毛皮獣猟はささやかな規模に留まっていた、彼らの生計に若干の稼ぎを添える副収入に過ぎない。増える一方のロシア人猟師が、アイヌの周知する優れた猟場から彼らを追い出し、また毎年繰り返される山火事は膨大な面積の森林を破壊したから、サハリンにおける毛皮獣の主役である黒貂の捕獲数は激減した。しかるに、黒貂の価格が急騰したため収入に大きな変化は生じなかった。黒貂を大口で買い付ける場合の平均価格は、一九〇二年が12〜13ルーブリ、一九〇三年は15〜16ルーブリだったが、一九〇四年だけは戦争のせいで下落したものの、冬の半ばには9〜10ルーブリに落ち着いた。十年前には、品質を全く問わぬサハリン南部で、黒貂の平均価格は2〜3ルーブリだった。この希少獣が最も潤沢に棲息するのは、まず東海岸の北部（猟師一人当たりの平均捕獲数8疋）、次いでマウカ地区（同7疋）、さらにクスナイ地区と

ウソロ地区（同6疋）と続き、最少だったのが東海岸南部（平均4疋）である。黒貂のほかには、栗鼠、川獺、狐、麝香鹿も僅かながら仕掛弓で捕獲されるが、この猟に従事するのは、トナカイ猟と同様に、数村で僅か1〜2名しか見出されぬ好事家の猟師たちである。猟師一人当たりの捕獲数は、栗鼠が3疋以上、川獺は1疋であるが、仕掛弓に狐は滅多にかからない。撒餌を用いての捕獲はアイヌの猟師らに白眼視されている。並みの狐の値段は一九〇三年が3〜4ルーブリで、川獺は幅1チエトヴェルチ〔約18センチ〕当たり1ルーブリで販売されていた。麝香鹿やトナカイの肉や骨が売却されることは極めて稀である。麝香は1〜3ルーブルの値がついて常に店頭にある。狩られる熊は今や余り多くない。この2年間に東海岸でアイヌが仕留めた熊は僅か5頭だった。異族人が猟で稼ぎ出す収入は、捕獲した黒貂の数に左右されるから、通常は運次第である。指摘さるべきは、かつて黒貂の買付人が手広く行っていたアイヌの搾取が、今はすっかり影を潜めたという事実である。アイヌはさまざまな商品に付された値段をすでに熟知しており、己が持ち込む品の売価を大過なく値踏みすることもでき、毛皮は物々交換でなくて、現金で買い取ってくれる者に売却するべく努めている。出猟前に、黒貂皮の引渡しを担保として品物を掛買いし、毛皮は別人へ売却すべく努めて、債権者とはすでに現金で決済するようなアイヌも、決して珍しくなくなった。

アイヌの所持する鉄砲は、東海岸で成人男子212人に68挺、西海岸では228人が51挺を有するように、まことに取るに足らない。これだけでも、狩猟がアイヌでは副次的意味を持つに過ぎないとの結論を下すことは可能だろう。鉄砲の型式はさまざまであるが、大半は、あつてなく壊れてしまう日本製ベルダン銃である。

一九〇三年、私はアイヌらに、倉庫に保管されていて幾つかの場所では住民に販売されている、カザーク式軽ベルダン銃の払下げを行政府に陳情するよう助言した。

アイヌらの陳情が裁可されたのは十中八九まで、異族人がサハリンでは徒刑囚らに対する最良の警備隊と見做されているからであつたろう。

全住民に対し、ベルダン銃1挺2ルーブリ49コペイカ、菓莢は100発分が3ルーブリ、転売嚴禁との条件で払下げの許可が通達された。その直後に出来した戦争（一九〇四年一月に勃發した日露戦争）は、このきわめて特惠的裁可を実行する機会をアイヌらから奪つてしまった。

平時、つまり開戦前までのアイヌは自らの手作り品を、漁場で就労する日本人らに、なかんずく残留越冬する番人や手代に売却することで、少なからぬ収入を得ていた。編んだ蓆、手提げ袋、織上げた帯、長衣、刺繍を施した前垂れ、袖当て、紐で締める小袋、ミトン、犬皮製の冬着、アザラシ革製の履物は各漁場で販路を見出し、米、大豆、馬鈴薯澱粉、日本製砂糖、菓子、各種反物、糸などと物々交換された。このときの稼ぎ頭は女たちだったが、その彼女らが今は暇を持て余して無為をかこっているのだ。

若い女たちや彼女らの親族の収入について語る以上、今一つの広く普及した稼業についても触れぬわけにはゆかない。つまり、女の体の売買である。これは、日本人に完璧に隷属し、漁場で強制労働に服していた頃から根付いている生業である。女は通常の場合、その親族によつて売られるが、彼女はまた自分からも——とりわけ主人持ちの場合は家長に内密で——男の誘惑にたやすく身を任せて、己の輕挙の悲しい結末を嘆くことも稀ではない。風紀のより自由な西海岸では性病が猖獗を極めているが、アイヌ女らが格別な執着を寄せるのは、皮膚病・性病・梅毒が広く蔓延する日本人の男たちである。だが、アイヌの売春制度は、日本人のそれと同様に、西洋女たちの間では通弊であるが如き、女を放埒・怠惰な人

一 戦時下の事態について語っている。

間に変え、底なしに墮落させることがない。とはいえ、相互の愛情ではなくて、金銭絡みで男の肉欲を充足させることに根ざした、余りにも自由な性関係の容認は、やはり女を屈辱的な地位に貶め、彼女が知的・道徳的に高度な段階にまで達するのを妨げる。

この事象との闘争は決して生易しくない。漁場には一定数の女が常住するように、また日本人労務者に漁場での越冬が許されるときは、家族ぐるみで残留するよう要求することは有益だろう。

この問題におけるロシア系住民の関与もまた否定的な影響をもたらしている。懲役と流刑が廃止されて、まともな住民で構成される移住者たちが自由な入植地を造成し、また家族持ちの住民が大勢を占めるようになれば、件の影響も恐らくは好転するであろう。

アイヌたちは、己が頑固に故郷と見做す樺太島に頗る執着して、自らの南方起源を少なくとも公然とは認めたがらない。

アイヌの生活に言及する若干の論文に目を通した限りでは、彼らの間に「二八七五年以降の？」国外移住は皆無である^二。

大陸には目下、三人のアイヌがいる。一人は、洗礼を受けて全くのロシア人と化した若い男、シャンツィ出身のヴァニカ「イヴァン・グリゴリエヴィチ、アイヌ名はカハコ」。彼はシベリアとその幾つかの町を見物に出かけたものの、すでに親族の許へ戻ることを希望している。あとはいずれも女性で、一人は、入植四上りの農民である同棲者とともに移住したが、やは

二 傍線は翻訳者による加筆。上田將の邦訳稿によると、傍線箇所は「一千八百七十五年以後には移住全く其跡を絶ちたり」（露国ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」（下）『世界』二十七號45頁下段、京華日報社、1960）と翻訳されていて、文脈から見てより整合性があるから、著者自身が「縮約稿」ではこのように修正したものと推察される——訳者注。

り帰郷を夢見ており、今一人は黒貂の買付けに来島したオリチャ（マングン「即ち現ウリチ」）に連れられて離島し、マリインスクの近傍で暮らしている。

国外移住の唯一の事例は一八七五年に出来した。この時はアニワ「垂厓」湾とサハリン東西両岸の南部から843名（の男女）が、日本人に唆^{そそのか}され、また監獄建設や来たるべき新秩序の噂にも怯えて日本へ出国した。だが、北海道島で創出された諸条件の下での生活は、著しくより厳しいことが判明したから、今や出国者らの帰還が始まって、主として西海岸の、近親者たちが在住するさまざまな集落に転入している。現在、これら「帰郷した放蕩息子」たちとその家族らの数は、男子102名と女子101名である。彼らは、三、四ヶ月で一年分の魚を蓄えることが可能な樺太島の天然資源の方が、毎日の重労働によつてのみ辛うじて食べてゆける北海道島のそれよりも、はるかに勝っていると悟ったわけだ。加えて、こちらのアイヌは、日本の同胞の間にすでに導入された徴兵制、鰻登りに上がる税金、正確に指定された僅かな土地への緊縛からは、いずれも自由である。一世紀にわたり日本人とその文化に慣れ親しみ、通婚を介して日本人と少なからぬ親族関係を結び、また今に至るも経済的には彼らに隸属し、漁場の操業が中断すると困窮し、懲役や流刑と隣接する暮らしに由来する辛い結果を耐え忍びつつ、窃盗を生業とする放浪者の襲撃の脅威に四六時中曝されるとはいえ、アイヌたちはやはり、主として生活におけるより大きな自由とより少ない規制の故に、北海道よりもサハリンで暮らす方を選ぶわけだ。彼らは依然として自由や、不可解な異文化由来の細かな生活規制の欠如を何よりも尊ぶような、原始文化の段階に留まっている。

行政府は、アイヌの経済状況を改善する方策を一切講じてこなかった。同府の裁量下にはそのための資金も皆無だった。サハリンは常に監獄管理局と農村住民の専用に委ねられて、異族人たちのことは完璧に閑却されてきた。行政府は、一八

九七年の飢餓に直面して越権行為に踏み切り、監獄管理局の余剰金から東海岸のアイヌたちへ救荒手当てを放出することを余儀なくされた。会計監査官は、行政府に監獄管理局資産を異族人らのために支出する権限はないと裁定して、還付を要求した。火事に見舞われたり、家計保持者が凍死した事例など、災難に遭遇した幾つかの家族にも見舞金が支給された。「コルサコフスク」管区長官は一八九八年、何らかの会計から資金を捻り出して、あるアイヌに漁場整備資金を貸し付けたが、当人の死亡で債務は焦げ付いてしまった。

アイヌの生活では、サハリンやアムール流域の異族人らに比して、不平等な人間関係が頗る顕著である。アイヌは古来より高貴なアイヌ——「ニシパ」（旦那）——と、平民のアイヌ——「ウタラケシ」（この語はしばしば「水夫」というロシア語に翻訳されるが、航行中の「ニシパ」は舵を取るか舟の中に鎮座するのに対し、平民に属する人たちは櫂を握って就労する）——に二分されていた。「ニシパ」はその出自もさることながら、資産でも頗る際立っていた。彼らの住宅は広壮清潔で、有用な物品や食物で満ち溢れ、剣、刀の鏢、絹の反物、鎧、首飾り、お守りなど、豪華な古式器物も豊かに蔵していた。財産を喪つて零落する「ニシパ」もいるが、代々継承される出自に由来する特権は今なお保持されている。

新しい「ニシパ」の登場という逆の事態も出来る。即ち、大儲けして、十分な量の高価な物品を入手し、万客に対して開かれた屋敷を経営できて、同族者の間では賢人として影響力を堅持する男らである。原始的部族では何よりもまず、物財の大量獲得のために頭が使われる。裕福な男は、多数の無給使用人を自宅に置くようこれ努めるのが通例である。使用人は、遠近の貧しい親族の間から集められる。彼らは「ニシパ」にとって従兄弟や甥っ子や孫に当たるから人間関係も幾分和らぐとはいえ、家内での彼らの地位はやはり被雇用者にきわめて近いのだ。

臨時使用人はしばしば若者たちで、資産家の親族は、己を頼って来た彼らを一時的に自宅に住まわせる。もしその家に若い娘がいるならば、若者は年長親族の意向を一層熱心に遂行するわけだ。

求婚した青年を、次いでは結婚した同青年を、直近の数年間には許嫁や妻の親族が極力こき使うべく努めるが、彼はこの間、岳父の利益のために唯々諾々と無償の勤労に服する。

アイヌに対する漁区の割当ては、操業のために組合員の人数が不足する場合、親族の外部からも就労者を調達するという意欲を生みだした。私は東海岸の2軒の家で、そこに薄給労務者として寄宿するロシア人入植囚たちを目撃したが、彼らはつましい食事と、2〜3ルーブリの月給を受領していた。西海岸で親族使用人の役をしばしば果たすのは、北海道から戻って来たアイヌたち（いわゆる「イスカル・アイヌ」「対雁アイヌ」）である。漁期中は、日本人「「対雁アイヌ」は日本国籍を有した」も有給の助っ人として参加するとも言われ、一九〇三年には「非法法」の日本人雇用の罰金として六千ルーブリ余りの莫大な額がアイヌらによって支払われた。

アイヌの間にはすでに4名の漁業者がおり、日本人やロシア人の漁業者らと同一条件で経営される漁場の賃借者として、完璧な資本主義的経営を実践している。彼らに自己資本はないが、漁場での操業に資金を提供する日本人と組んでいる。3名は東海岸のボグンカ「バフシケ(アイヌ、日本名は木村愛吉)とモニタハノ「魯禮の「モニタハヌアイヌ改名内藤宗太」(千徳太郎治 1929: 53)、そして西海岸のコシキ「多蘭泊の川村小助」幸助」であるが、これら3名は自己名義で漁場を賃借している。四人目のチシビ「条古舞の山本實兵衛」は、「セミヨノフ・デンビー商会」が政府から借用した漁場の一つを又借りしている三。

三 樺太アイヌ(エンチウ)の漁業経営に関しては、田村将人の近作「日露戦争前後における樺太アイヌと漁業の可能性」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-07年度調査報告—』91~104頁、北海道開拓記念館、(2008)を参照されたい——訳者注。

これら4名のアイヌの懐具合は、むろん同部族の平均的家族のそれをはるかに上回る。彼らは当面、部族の中にとつぷり埋没しているものの、そこから離脱して金融貴族という特殊な階層を追求する傾向はすでに見て取れる。しかし彼らが行う大盤振舞いにもかかわらず、これら新経済体制の成功者たちは、大方の権威と愛を克ち得てはいない。だがそれは当然であつて、従前からの氏族的野心には——新しい金銭関係の所産である——恐るべき利己主義も混在しているから、さほどの幸運にも恵まれず、食欲でもなく、現代的社會制度の厳しい氣風への適応能力にも遜色のある人たちを離反させるわけである。

「シベリア異族人統治法」のサハリン異族人に対するかわりは、全面適用からほど遠く、いまだ個別条項の部分的な運用に留まつている。

同法は「ミハイル・スペランスキーのもとで「一八三三年」制定されたものだが、その後も点検され補充されてきたとはいえ、サハリンの異族人にも適用されるとの文言はどこにも見出されない。

一八九四年に集落監視官の部署が島内に設置されて以降、監視官の管掌には異族人事務も包摂された。異族人の權利と義務に関する訓令が、一括文書として公刊されたことはない。ロシア人による島の統治が開始されてこの方、異族人らが多少ともまつとうな統治行政を体験することはなかった。

日本人が統治した一八七五年までは、アイヌの各村落「コタン」に父子相伝世襲職の村長「酋長」が、そして地区全体では氏族長^四が君臨していた。これら役職者は、日本人漁場における強制労働が免ぜられ、その職務は、就労のため住民

四 部族がいまだ完璧に自立していた頃、物心両面における卓越性にもとづいて同村者らを支配してきた人物に、日本人は「氏族長」「日本語では「乙名」「酋長惣代」」の称号を付与した。

を呼集し、彼らの就労状況を監視し、職場からの逃亡者を捕らまえ、人口調査を実施し、困窮・欠乏について報告し、総じて言えば、日本人当局者と住民大衆の仲介役を務めていた。強制労働が廃止されて、島の新たな統治者の下では誰でも統治者へ直訴することが可能となるや、村長の称号はただ、役職者に上席が設けられる宴席でのみ、その他大勢から彼を弁別するだけのものになり下がった。

現地当局者の命令はすべからず、島の各地に駐在して村落警察の役も果たす監獄監督官を介して伝えられる。監督官らはまさに、アイヌが直に接する行政権力にほかならない。それぞれの監督官は年に一度、——概ね頗る不正確な情報であることは私も個人的に熟知している——統計情報を収集するべく担当地区を一巡し、アイヌらはその際、第一次窓口として、自分たちとロシア人の間の悶着を洗いざらい彼に向けてぶちまける。アイヌにかかわりを有する監督官駐在所が、東海岸に8ヶ所、西海岸には2ヶ所ある。

共同体漁場が開設されるとともに、諸集落の民族的村長たちが概ね個々の組合総代となった。私自身が公式文書で郷長・氏族長の称号への言及を確認できたのは僅か2件で、マウカ地区のコシキとクスナイ地区のチウカランキがそれぞれに所持していた郷長の称号認証書である。前者は、コルサコフスク管区長官が一八九〇年に発行した文書で、アイヌらが自ら選出したコシキに郷長の称号を授与すると明記されていた。後者の任命はやや唐突に、しかもチウカランキ自身の意思に反して行われた。彼もまた、すべての他のアイヌと同様に、同地区には、ロシア当局は未認証であるものの、自前の氏族長がすでにいると考えていたからである。

その他の土地の氏族長や個々の村落の村長に関する限り、必要があれば——例えばスピルト「純アルコールに近い強酒」の購入許可を取り付けるときなど——、ときには称号を僭称して誰でも当局者の前でその代役を務めたが、称号の証明はおろか、本人確認すら要求されなかった。

これはアイヌたち自身の間に少なからぬ悶着や、秘められた敵対関係さえも生みだした。幾つかの村では二人の人物が、あれやこれやの役人とどちらがより近い関係にあるかをめぐって覇権争いを続けているが、アイヌらは役人との親密さを高く評価する余り、どちらのアイヌが最も尊敬に値するかを判断する際には、それが十分な根拠とされるからだ。

村や地区の個々の長には裁判権がなかった。殺人や窃盗といった大事件は、村長たちや——民の叡智を体現して尊敬措くあたわざる——一族の長老たちを結集した集会で裁かれた。名誉棄損にかかわる犯罪や、例えば、いずれかの家における慣習違反、相互的侮辱といった各種案件は、過失の軽重に応じた然るべき額の罰金で決着がつけられた。昨今での最も深刻な事案は離婚、他人の細君との密通、遺産相続をめぐる悶着である。被害者側は尊敬される人物を、智恵と雄弁がその主たる資質と目されるある種の仲裁判事を選定する。仲介者は被害者のために、なるべく高額の賠償金を加害者から引き出すべく努めつつ和解を追求する。加害者の方も自らが、あるいは己が選んだ人物を介して、要求された罰金の軽減にこれ努めるが、その額は常に慣習の定める範囲内で落着する。和解が成立しないときは、被害者が別の仲介者を選定する。仲介者は、賠償金を受領した原告から己の労働報酬を受け取るのが通例である。殺人に対する刑罰は、その目的が何であろうとも、被害者の遺骸が納められる墓穴における殺人者の生埋めである。殺人者が裁かれた最後の事例は、ロシア軍部隊による初のアニワ湾上陸にやや先立つ「一八五〇年代のことであった。一人のアイヌの男が嫉妬に狂って己の細君を殺

したが、彼の近親者も含めた全村民は、彼を捕まえると縛り上げて、情け容赦なく墓穴の底へ投じたあと、その場で盛大な葬儀を挙げて、被害者の遺骸をそこに葬った。

アイヌたちが自ら執行した最後の刑罰は、「二八六〇年代に出来た窃盜累犯にかかわるものである。タコエ村在住のアイヌ女はその際、指二本の関節が切断された。アイヌ同士の軽微な事案をめぐる上記のような裁決は、今日でもアイヌの間で継続されており、聡明な長老たちのいまだ確乎たる權威は、相互間の諍いの收拾を地元の行政当局に委ねること——ギリヤークとオロツコはこれへの傾斜を強めているが——をアイヌの間では提起させない。だが、幾世紀にわたり大切に伝承されてきた慣習に民族的独自性の顕現を認める老人世代が、たとえどれほど懸命にそれを保持しようと努めたとして、新しい生活条件は新しい見解や概念の登場を促して、旧習は守られずに退場してゆく。原始的部族の導きの星たるべき文化的国家の課題は、その生活に導入される当為・公正をめぐる新概念が、旧来よりも着実に高邁であることである。

一九〇五年三月

サハリン

漁場と漁獲高 [1904 年]

集 落 名	鯨と樺太鯨の漁場	漁 具 類	売却量の概数 (ブード)	
			鮭 鮭	樺太鯨
東 海 岸				
アイルボ [愛郎]	鯨漁場：トゥナイチ湖 樺太鯨漁場：村の南方 1.25 露里のボロネ シコ川	投網	4500	3600
トゥナイチ [富内] オチョ ^ホ ボカ [落帆]	鯨漁場：トゥナイチ湖 樺太鯨漁場：オチョ ^ホ ボカ川の河口から 2 露里北の地点	鯨は投網、樺太鯨は海用定置 網。いずれも日本人から借用 したもの。		
オブサキ [負咲]	鯨漁場：トゥナイチ湖 樺太鯨漁場：集落近くの海上			
ルレ [魯禮]	鯨漁場：集落近くの入江 樺太鯨漁場：a) チシノオトマリ入江、b) イ スヌナイ川	2 艘の漁り舟を所有 海用定置網 1 張と投網(複数)	1800	900
サカヤマ [榮濱]	鯨漁場：集落近くの入江 樺太鯨漁場：イヌヌ ^マ ナイ川	樺太鯨は投網 鯨は海用定置網 2漁撈組合あり。一つは漁撈具 を日本人から借用、今一つの 組合は漁り舟 2 艘と海用定置 網 2 張を所有	2800	900
ナイブチ [内淵]	鯨漁場：サカヤマ湾 樺太鯨漁場：ナイバ川			
シヤンツイ [落合]				
タコエ [大谷]	鯨漁場：サカヤマ湾 樺太鯨漁場：タコエ川			
アイ [相濱]	鯨漁場：サカヤマ湾 樺太鯨漁場：アイ川、村から 2 露里沖の 海上			
オトサン [小田寒]	鯨漁場：セラロキ 樺太鯨漁場：村から 2 露里沖の海上とオ トサン川	セラロコの一つの組合は海 用定置網 1 張を日本人から借 用	2500	2500

		投網は自前のものを所有		
セラロコ [白浦]	鯨漁場と樺太鯨漁場：村近くの入江	漁り舟（複数）と海用定置網 1 張を借用	800	
マスエ [真縫]	鯨漁場：セラロキ 樺太鯨漁場：マスエ川			
オガコタン [箱田]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：マスエ川	小投網（複数）	200	
フレチシ [婦禮]	鯨漁場：村近くの入江で投網を用いて捕獲 樺太鯨漁場：モグンコタン川	1903 年、漁撈組合が日本人 から借りた定置網 1 張を用い て、フヌップ入江で操業を試 みた。だが決済と、自家消費 用魚の加工がほとんどでき なかったことで不満が残る。	1350	1200
アカラ [赤浦]				
モトマリ [元泊]				
フヌップ [斑伸]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：カッブチ川			
コタンケン [古丹岸]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：ニトウィ川	手網と小投網で自家消費分 のみを捕獲	280	2700
ナイエロ [内路]	鯨漁場：チャクレコタン、1903 年は村付 近 樺太鯨漁場：1903 年は村から 2 露里南の	1903 年以降、海用定置網 2 張と漁り舟 4 艘を所有		
トマリケン [泊岸]	オゴカヘナイ、それ以前は ニトウィ川			
タライコ [多来加]	鯨漁場：1903 年以降、村の近辺 樺太鯨漁場：タライカ湖に流入する諸河 川、1903 年は村近くの海上	1903 年以降、海用定置網 1 張と漁り舟 2 艘を所有	270	800
		小計	13700	14300

西 海 岸				
ナイボロ [内幌]	鯨漁場：日本人漁場にて就労 樺太鯨漁場：シナイ川			
トゥルマイ [鳥舞]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：トカンボ入江	1903 年以降、小投網（複数）	800	
トプシ [遠節]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：同上、また川でも	同上	500	
オコ [阿幸]	鯨漁場：幾つかの日本人漁場および共同 体漁場 樺太鯨漁場：村の付近	小投網（複数）		
アッサナイ [麻内]	鯨漁場：村近くの入江 樺太鯨漁場：同上、また川でも	4 艘の漁り舟を所有するが、 海用定置網 1 張は借用	1500	
タラントマロ [多蘭泊]	鯨漁場と樺太鯨漁場：村近くの入江	海用定置網 1 張と漁り舟 4 艘を所有	2500	700
オゴトマリ [大穂泊]	鯨漁場：セミノフとデンビーの諸漁場 樺太鯨漁場：村近くの入江	小投網 1 張、自家消費分捕獲		
トマリケン [泊 _(R) 岸]	鯨漁場と樺太鯨漁場：セミノフの諸漁 場で就労			
ペロジ [廣地]	同上			
アキブシ [明牛]	同上			
トモマイ [苦舞]	同上			
マウカ [眞岡]	鯨漁場：マウカ住民とその他の集落住民 が設立した幾つかの漁撈組合 1) ビリトゥル・ナイボ (193 号漁場) 南 方 1 露里のキカラジ 2) アキブシ村北方半露里のオ ^キ ト・モナ イボ		4000 1000	
ノトサン [野田柵]	3) ノトサン 樺太鯨漁場：同上、ならびに同魚が棲息 するさまざまな入江や河川（自家消費 のみ）		6000	

アラコイ [荒貝]	鯨漁場と樺太鱒漁場：チカイ南方2露里 のキタウタシ・ナイボ	海用定置網1張と漁り舟(複 数)を借用	1500	
ボロトマリ [幌泊]	鯨漁場と樺太鱒漁場：マウカのアイヌら と共用のキカラウシ			
ラヘマカ [樂磨]	鯨漁場：チカイ以南のバセウシ	漁り舟1艘を所有、海用定置 網1張は借用	1000	
トマコロ [泊居]	鯨漁場：トマリノ 樺太鱒漁場：オチェコロ川	海用定置網1張と漁り舟4 艘を所有	5000	
トマリノ	鯨漁場と樺太鱒漁場：他村のアイヌたち と共用のキカラウシ			
チラウツナイ [知来]	鯨漁場：村の付近 樺太鱒漁場：ナイオロ川	海用定置網1張と漁り舟2 艘を所有	3000	
コモシラロ [小茂白]	鯨漁場：村の付近 樺太鱒漁場：エブネイ川	海用定置網1張と漁り舟1 艘を所有	1500	
オタス [小田洲]	鯨漁場：前出の村々 樺太鱒漁場：オタス川			
エントコ ^ホ ・ナイボ [円度]	鯨漁場：エントコ ^ホ ナイボ村とウェント ウエサン村の近辺 樺太鱒漁場：ナイコトロナイ川	海用定置網(複数)は借用、 漁り舟2艘を所有	6000	
オブサ ^ハ ・ナイボ				
ボロオ ^ホ トマリ				
ウェントウエサン				
フルオ・チシ	鯨漁場：村の付近 樺太鱒漁場：海上と川	自前の小投網		
小計			34300	700
総計			48000	15000

樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報

解題

以下の邦訳稿の底本はウラヂヴオストク市のアムール地方研究会文書庫所蔵の手稿⁽¹⁾であるが、直接に参照したのは、サハリン州郷土誌博物館のM・M・プロコフィエフ氏が手稿から起こされた電子稿である。同稿の提供を賜ったプロコフィエフ氏には、ここに厚く御礼申し上げる次第である。

この手稿は一九〇六年七月二十三日、滞日中のピウスツキが友人のN・P・マトヴェイエフに託して、ウラヂヴオストクのアムール地方研究会へ届けられたが、一年前の一九〇五年六月には「樺太島のアイヌ統治制度に関する規程草案」(草稿B)の「付属文書」として、リャブウノフ樺太島武官知事にも提出されていた⁽²⁾。

同手稿は一九〇七年にウラヂヴオストクで上梓されたが⁽³⁾、その経緯については本書所収の「樺太アイヌの経済生活の概況」に付した「解題」を参照されたい。二〇〇四年にはプロコフィエフ氏が、現行正書法にもとづく現代ロシア語稿を『ルベシユ』誌に発表、そして百年後の二〇〇七年にはユジノ・サハリンスクで再刊している⁽⁴⁾。

一九九八年にはマイエヴィチ教授による英訳稿⁽⁵⁾が上梓された。邦語訳としては①二〇〇二年にインターネットで公開された出羽訳⁽⁶⁾、②二〇一二年に公開された兎内訳⁽⁷⁾の両稿がある。それぞれの底本は、前者が一九〇七年刊の浦塩版、後者は二〇〇七年刊のユジノ・サハリンスク版である。

二〇一四年一月八日、札幌

注

- (1) “Нъкоторыя свѣдѣнія о бѣ отдельныхъ айныхъ стойбищахъ на о. Сахалинѣ” (Архив ОИАК. ф. 3. оп. 1. д. 31. л. 71-138). 原手稿は一九〇五年四月、遅くとも五月初旬までには、北サハリンのレイコフスコエ村で摺筆されたと考えられる(拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書 879 頁)。
本書に収められた「樺太アイヌの経済生活の概況」の「解題」(172 頁)を見られたい。
- (2) Б. Пилсудский, “Нъкоторыя свѣдѣнія о бѣ отдельныхъ айныхъ стойбищахъ на о. Сахалинѣ,” *Записки Общества изученія Амурскаго края*, томъ X: 117-157 (1907).
- (3) “Некоторыя сведения о бѣ отдельныхъ айныхъ стойбищахъ на о. Сахалине,” *Рубежъ* №5: 334-355, Владивосток (2004); в. Бронислав Пилсудский, *Айны Южного Сахалина (1902-1905 гг.)*, стр. 85-106, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2007).
- (5) “Selected information on individual Ainu settlements on the island of Sakhalin,” translated by A. F. Majewicz, in: *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 1, pp. 331-345, Mouton de Gruyter (1998).
- (6) 【出羽弘訳】B・O・ピウスツキー「サハリン島におけるアイヌの定住部落に関する若干の情報」(2002) <http://www.w001.u-pr.s-net.ne.jp/dewaruss/Pilsudzky.htm> (二〇一四年一月十四日閲覧)。
- (7) 【兎内勇津流訳】プロニスワフ・ピウスツキー「サハリン島の個々のアイヌ村についてのいくつかの資料」『環オホーツクの環境と歴史』2号 75〜98 頁、札幌：サツポロ堂書店 (2012)。

樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報

東海岸

(1) タライカ村〔東多來加、現ウスチエ〕

本村は最北端のアイヌ集落で、タライカ〔現ネフスコエ〕湖とオホーツク海を繋ぐタライカ川に発達した砂州の、まさに湖水の流出口に立地する。至近のロシア人居住地点は、25 露里南方に所在するチフメネスク哨所〔後の敷香、現ポロナイスク〕である。このアイヌ古村では部族の慣習と言語がより純粋な姿で保存されている。冬場には、海岸から著しく隔たる所に設営された堅穴住居で過ごす。

四周を見渡しても森は全く見えず、目に入るのは地表を蔽う這松の茂みばかり。数年前にはそれも広域にわたって焼失した。タライカ湖では小型建網を用いて川カマス、なかなずく大量の鮒が捕獲される。タライカ川の河口では春先以降、氷に穴を穿ってコマイやキュウリウオを釣り上げるが、タランコタン川ではもつと大量に捕獲される。タライカは若干名のアイヌがトナカイを所有する唯一のアイヌ集落であるが、自らは飼育に携わらず、知人のオロツコ〔現ウイルタ〕に利用を任せている。同村にはアイヌらのほかに、アムール流域のモンゴリ村から来島したオルチャ（マングシ〔現ウリチ〕）の一家がすでに十六年も在住し、彼は当地でオロツコの女と結婚した。この男は名声を博したシャマンで、自らもタライカの村医を自任していたが、一九〇五年の初冬に亡くなった。細君と四人の子供たちが、やはりアムール流域からやって来た彼の甥とともにタライカ村に留まっている。彼らは犬 15 頭、トナカイ 1 頭、鉄砲 1 挺と小型建網 3 張を所有している。

タライカ村在住のペルンカ (Perunka) という名のアイヌは、軍部隊の浮浪者一味捕縛に協力して負傷したため、その功績で一八九六年に賞牌が授与された。

同村は一九〇五年まで疫病とは無縁だったが、同年の二、三月には感冒 (インフルエンツア) が蔓延して、三月二十日までに村民 (総勢 68 人) のほとんど 4 分の 1 (男 7 名と女 9 名) が落命した。

(2) トマリケシ村「沿岸、現レルモントフカ」とナイエロ村「内路(ないろ)、現ガステロ」

両村はチフメネスク哨所の南方 18 露里、ナイエロ川河口の両岸に立地するが、実際は皆が「ナイエロ」と称する一つの集落である。川を 1 露里遡った所にロシア人村があつて、かつては 50 戸以上を擁したが、今では 2、3 戸の住宅が見出されるのみ。ナイエロはごく近年 (およそ十年前) に、タライカ村とカサプチ村から入植したアイヌらによって開拓された。

当地には、将来もつと大きな村落に成長するための頗る有利な条件が揃っている。「例えば」活気に満ちて勤勉な漁撈組合があり、馬もおり、牛も飼っている。北からもたらされる駅逓貨物を取り仕切る主だった馭者たちも、ここに在住する。

村民らの訴えた苦情は以下の通り。①自らも必要とする草刈場の利用でロシア人から圧迫されている。②ロシア人猟師が狐用の毒餌を村の至近箇所にも撒いて、春に繫留を解かれた犬どもがこれらの撒餌を食らって死んだ (一九〇四年には 10 頭の犬が毒殺された)。③ロシア人らは一九〇四年、これらの犬に対して発砲しだした (14 頭の樺犬が射殺された)。

④軍部隊が一九〇四年の夏に徴用した漁り舟一艘と櫓が、今なお返却されていない。⑤トマリケシ村の納屋に収納され、彼らの若干名に管理が託された日本人漁場の資産が破壊された。

とどのつまりは今年の三月、同村から2露里先のオガコ^ホナイに貸与された共同体漁場に、彼らが建てた立派な建物までも焼き払われた。

(4) コタンケシ村「古丹岸、現ゴリヤンカ」

この村はナイエロ村南方18露里のコタンケシ川の河口に立地する。かつては豊かだった古村も今や全く零落している。コタンケシ川では秋にたくさんのお鮭が獲れる。

コタンケシ村のシトリク (Shirik)「シトリキ」、「シトリン」という表記もあり」村長は、この地で唯一のロシア式百姓家である彼の住宅が郵便貨物輸送隊の常宿と化して、大きな損失と不便を被っていると訴え、これに対しては、行政府が然るべき手当てを支給するよう求めている。

以上の4集落のすべてに共通する特徴は、彼らが日本人への隷属を知らず、二二七〇年代に初めて日本人漁場で雇用労働者として就労しただいたという事実である。

彼らは陸獣のみならず、海獣に対しても勇敢な猟師を自任している。内訌時には比類なき勇猛果敢さで怖れられ、オロツコとも凄惨な戦いを繰り広げた。

これら四ヶ村はいずれもチフメネスク哨所に、経済的には依存している。同哨所には一軒の国営商店と若干の個人店舗、電報局や監獄倉庫に加えて、高々30戸ほどの入植囚住宅もあるからだ。

この地では、異族人らがまずどのような「文化の担い手」[ドイツ語 Kulturträger が援用されている]と付き合う宿命にあつたかが、どこよりも鮮明に見てとれる。チフメネスクではかつて悪名高いハノフが己の監督下で電信線敷設用林道を開削したとき、

工事で使役した徒刑囚らを残忍な方法で酷使したが、ベールイ前管区長官の指示により、異族人らを搾取した廉で更迭された。そこで得をしたのが、彼の幸運なライヴアルの「エリ（J）」である。チフメネスクで最初の政庁舎建設に携わった貧しい労働者に過ぎなかった「エリ」は、ヴラヂーミロフカ「豊原、現ユジノ・サハリンスク」とコルサコフスク「大泊、現コルサコ」で手広く商う裕福な商人、はたまたウラヂヴォストクの自宅所有者にまでも大変身を遂げたものの、カリフォルニアの砂金に負けず劣らず人の運命を狂わせる「あの一隅」にも己の代理人らを貼り付けて、甘い汁を吸うことは忘れないでいる。ここでは、唾棄すべき高利貸の典型である「ペー（P）」のこともしかと見据えておこう。「ペー」は同一の債務を幾度も取り立て、しかも大向こうを黙らせるべく「わしの帳簿にはすべて書き付けてあるぞ」と、己は目に一丁字ないにもかかわらず断言して憚らない。彼のために最後の書付けをものした元同棲者の女は七、八年前、己にもまた身内の者にもさほど吝嗇ではない、別の「有望新人」の許へ走ったにもかかわらず、それでも「ペー」はスピルト「純アルコールに近い強酒や、オロツコ語とアイヌ語の僅かな知識を駆使して己の業務を恙なくこなしている。当地では近年も異族人の「善き友人たち」が、彼らの依頼で取り寄せたウインチェスター銃（価格は35〜60ルーブリ）を、彼らには旧知のよしみで値引きすると称して、上質黒貂10疋（市場価格ではおよそ200ルーブリに相当）で譲渡している。

当地では徒刑囚も選り取り見取りが通例である。オホーツク海沿岸には概して怠業・窃盗・公金横領など、微罪に問われた徒刑囚が組織的に移送されるが、チフメネスクまで到達するのはもはや花形の懲役囚ばかり。というのも各宿場駅では、より近い駅の「監獄」監督官から早い者勝ちで、さほど墮落していない新参移送囚を引き抜いてゆき、道徳的に最低の古参囚らは先送りするからだ。そして、すでに資金を有する徒刑囚は日本人のスクーナー帆船で対価を払ってスピルトを入手するが、裸一貫の輩は、日本人が懼れをなして訴えぬことを見込んでスピルトの窃盗を企てるわけだ。

文化の担い手たちのささやかな集団は、内部的に必ずしも仲良しでなかったとはいえ外の世界に対しては結束し、互いに邪魔はせず、純朴な原住民らを恐怖で威圧しながら、彼らの無知につけこんで迅速な蓄財を企てる。チフメネスクでは一九〇二年末以降、「エス（C）某」なる人物が搾取事業に参入したが、余りにも派手にやり過ぎて、早くも一九〇三年には「コルサコフスク」管区長官のチフメネスク訪問後に、配属地からの退去が命ぜられた。だが彼は一九〇四年に義勇軍団へ入隊すると、ぼろい仕事で己を惹き付けてやまぬチフメネスクにほとんど常駐して、騒々しい世相をよいことに、己はあたかも万民の行動と言動を監視すべく遣わされたかのように振舞って、事業を有利に進めている。下劣な事業に下劣な手法は付きものである。私の承知する一件を紹介しよう。「エス某」は己の債務者に関して、大方の見えるところ虚偽の密告を行った。幸いにも密告は功を奏さなかったとはいえ、憐れな異族人らの間にはたいした恐怖を植え付けてしまった。この種の恐怖は、もしそこに尊敬や道徳的卓越性のかけらも認められぬような場合は、子供の記憶や大衆心理で周知のように、唯一の効果として憎悪のみを生み出す。しかしながら異族人の心やさしさは、この事例でも發揮されている。暫く経つてからのことだが、あるアイヌが偶々「エス某」と旅をともした際、互に敵意を抱きながら一緒に旅することは罪であるとの理由から、前者は後者に和解を申し入れたのである。

（5）フヌプ〔村〕〔斑仲〕

この村はフヌプ入江の岸边、同名川の河口に立地する。つい先頃までここにはれっきとした集落があったが、今では幕舎1戸が残るだけで、残余の人たちはマヌエ〔眞縫〕やアカラ村〔赤浦〕といった他村へ転出した。フヌプ村は、ロシア人村モグンコタン〔馬群潭、現ブガチョヴォ〕から12露里、セリュトウル村〔知取（しとる）〕、現マカロフの南方36露里に所在

する。

(6) モトマリ村 「元泊、現ヴォストチヌイ」

同名湾の畔で、前出のフヌッ村から2露里半ほど南に立地する。

(7) アカラ村 「赤浦」

赤浦で日本人が賃借する「47号漁場」に隣接する村。モトマリ村の南方2露里に所在する。

(8) フレチシ村 「婦禮、現ゴンチャロヴォ」

日本人が賃借する婦禮の「48号漁場」に隣接する村。モグンコタン村から2露里南方に立地する。

以上の4アイヌ集落はいずれも、電信局の職員も兼ねる監督官の暮らすモグンコタン村に経済的に依存している。生活必需品は監督官からも、また併せて10戸の住民からも、むろん著しい上乗せ分を伴う値段とはいえ常に入手が可能だ。周辺には川獺や麝香鹿がまた棲息する。初冬のカサプチ、モグンコタンの両川では氷下漁でイトウを捕獲する。モグンコタン村の住民が放し飼いの家畜が自分たちの村域を侵しているとの苦情があり、悶着が生じている。ところで同村の近辺には豊かな牧地がある。モグンコタンからアイヌらを追い出したロシア人入植囚たちは、フレチシ村やアカラ村の周辺にも草刈場を開設している。家畜を飼いたいの、アイヌたちは自分の家畜のために干し草を確保できぬわけだ。

これらの集落はチフメネスクーナイブチ間の冬道の間中に立地するため、主要な稼ぎは冬場の駅通貨物輸送から上げている。

(9) オガコタン村「オハコタン、箱田」

この村は同名入江の岸辺にあり、マヌエ川河口から北へ半露里、モグンコタン村の南方25露里に立地する。

(10) マヌエ村「眞縫、現アルセンチエフカ」

セラロコ「百漣」の北方7露里、マヌエ川河口に立地する。当地からはマヌエ川沿いに道が通り、山脈を越えたのはコスナイ川の溪谷伝いに下つて、西海岸のクスナイ「久春内、現イリンスキー」集落に至る。

(11) セラロコ村「シララカ、白漣、白漣(シララオロ)、現ウズモリエ」

同名湾の岸辺に立地、1露里先にはロシア人の「セラロコ」村がある。同村には各種皮膚疾患が恒常的に潜在し、そこから各地へと伝播してゆく。1露里先のロシア人村には電信局もあり、住民のほとんど全員(12戸)が、アイヌらを顧客とする実入りの良い小売業で暮らしを立てている。

(12) オトサン村「オタサン、小田寒、現フィルソヴオ」

前出「セラロコ」村の南方20露里、オトサン川の河口に立地。一八九八年、森林火災の延焼で全村が焼失。武官知事のオホーツク海岸通過時に支援を請願して口約は得たものの、今に至るまで何も受領していない。

(13) アイ「村」「相濱、現ソヴィエツコエ」

前出「オトサン」村の南方18露里、アイ川河口に立地。川を1露里半遡った所にはロシア人のオホーツコエ村がある。アイ村には、アイヌの漁業者ボグンカ「バフンケ(アイヌ、日本名木村愛吉)」が所有する、東海岸で最良のロシア式住宅がある。彼は「66号漁場」を賃借している。

(14) ナイブチ村 「内淵、現ウスチ・ドリシカ」

ナイバ川の河口から4露里の同河畔、宿場駅ナイブチから3分の1露里の地点に立地。馬を入手し始めるも、周辺の草刈場はさまざまな村の入植囚らがすでに占拠していて、干し草を刈るべき場所は皆無である。

(15) サカヤマ村 「榮濱(さかえはま)、現スタロ・ドウブスコエ」

同名湾の岸辺に立地、2露里先にはロシア人集落のドウブキ「現スタロ・ドウブスコエ」が所在する。村民の若干名は牧畜と農耕に着手するも分与地は欠如する。入植囚らの放し飼いする家畜が幕舎の近辺まで徘徊して、傷害沙汰や諍いが出来している。

同村には一九〇四年以降、朝鮮人の男2名と、彼らとともに西海岸からやって来た朝鮮人とアイヌの混成家族が在住する。これら朝鮮人の善導が得られるならば、農業の迅速なる定着が期待できる。

(16) ルレ村 「魯禮(ろれい)、現ロレイ」

前出「サカヤマ」村の7露里南方、ルレ湾の岸辺に立地。同村は一九〇年の火事で全焼した。ベールイ前管区長官は2年待つように助言し、尽力もしたそうだが、支援は一向に届かなかった。一九〇三年には山火事が再発して集落に迫り、再度焼け出されそうになる。村内には「65号漁場」を賃借する漁業者モニタハナ(Montaxna)「モニタハヌアイヌ、日本名内藤宗太」の良宅がある。若干名は馬鈴薯の作付けと穀物の播種に着手するも、集落周辺には適地がないから、その場所は村の近間ではない。

隣接する「ササゼ漁場」が余りにも村に肉薄するから、自村の近くの海では大型定置網の樺太鱒漁ができず、危険な夏場にもかかわらず鱒漁には(数十露里先まで)遠出せねばならない、と彼らは訴えている。

(17) シヤンツィ村「シヤンチャ、落合、現ドリンスク」

「ロシア人村」ガルキノ・ヴラスコエから2露里、ニコライエフスコエからは4分の1露里のナイバ川左岸に立地。目下、牧畜と農耕に移行中であるが、あたりには播種の可能な無主地など一片もないと嘆いている。当地には十分馴染んでいるし、ナイバ川で頻発する洪水でもここは浸水を免れてきたから、余所へ移るのは嫌だとのこと。ロシア人のガルキノ・ヴラスコエ村が所在する場所からは、すでに追い出されて久しいからだ。初冬には氷下漁でイトウやテンチ「コイ科の淡水魚」を捕獲する。

ヤマサク (Yamasaku) という名の若いアイヌは、洗礼を受けてニコライと名付けられた。やはり受洗した兄弟のイヴァン「グリゴリエヴィチ、アイヌ名カハニ」は大陸へ渡った。ロシア人(無宿の入植囚)を使用人として住まわせる家もある。

(18) タコエ村「大谷、現ゾーコル」

ボリシヨエ・タコエ「ヴラソフスコエ、日本統治下の大谷、現ゾーコル」から1露里先の官営粉挽場(水車小屋)に対面して立地。牧畜と農耕に移行中ながら、至る所でロシア人の耕地や草刈場から追い立てを食らっている。彼らの居住地周辺にも然るべき広さで、明確に線引きされた土地が分与されるよう求めている。タコエとシヤンツィは、アイヌ集落でも海辺ではなくて、島の内陸部に立地する例外的な2村落である。いまださほど昔でもない二十〜二十五年前にはこれらの村(9〜18)のいずれからも、秋になるとアイヌらがタコエ川の河畔に集結して鮭を捕獲していた。ここでの漁獲量が半端ではなかったから、タコエ川は「レセケ・ナイ (Reseké nai)」(育て親の川)と称された。今なお鮭が獲れるとはいえ僅かな量で、ただタコエ村民だけが捕獲するに過ぎない。アイヌたちはこの貴重な魚の消失を、以下の二つの原因に帰している。

その一は、タコエ川の河床における官営水車小屋の設置。その結果、常に川の上流部や源流の川瀬へ向けて遡上し、晩秋にはベレズニヤコヴォ「富岡」村付近で何千尾も捕獲されていた鮭は、水車小屋の堤防に出喰わすや引き返すことを余儀なくされた。魚たちは——客あしらいが頗る悪くなつて己の使命の遂行を阻止するような——この川への遡上を見限ったわけだ。ナイバ川自体も鮭の好むような資質を喪つて、今や流れが緩慢となり、水も濁つて、かつてのように冷たくもない。

その二は川の汚染。アイヌの間では汚物を川へ投ずることが最大の罪とされている。ニコライエフスコエ、クラスナヤ・レチカ、ドゥプキ、ガルキノ・ヴラスコエといったロシア人村の住民らは、ロシア人全般がそうするように、糞尿やあらゆる汚物を川へ投棄する。この事象を研究して、もし可能であれば、ナイバ川やタコエ川に旧来の富を返却することは、言うまでもなく頗る重要な課題である。

この地区のすべての集落（9〜18）はロシア人村に最も近接するから、渡来分子への同化の度合いも、他の場所に比べてより甚大である。この事實は、一見すると喜ぶべきことでもあるから、弱小民族の完全な消滅と、強大民族への融合を是認する人々は、恐らく大喝采されるだろう。しかしながら、ここで進行する過程の深奥を凝視するならば、われらはそこに余りにも多くの黒班を見出すのだ。したがって、これらの黒班は——深まる友情や、西方渡来文化によるアイヌ文化の併呑といった——喜ばしい情景に対して、その評価を改変することを余儀なくさせよう。なるほど、ここでは多くのアイヌが（通常はロシア人大工を雇つて）ロシア式百姓家を建て、馬を飼育し、ロシア風衣装やわれらの家具調度も採用するといえ、弛みない労働によって与えられ、また格別な努力も要するものは、俄かには根を下ろさない。馬鈴薯は50

名の家長中僅かに6名が作付ける当地に対し、マウカ地区では78名中の53名であるから、あちらの方が6倍も多い。当地では「ロシア語」読書きを学びだした大人が僅か一名に過ぎぬのに、マウカでは十指に余る大人が、より難しい日本語の読書きを修得している。「マウカ地区の」幕舎内には必ず入植囚が、またロシア人村には常にアイヌの姿も見出され、入植囚の内に大親友を有するような若者の間では大工仕事・指物・製靴・金属細工・桶作りなど、何らかの新しい手仕事を習得していない者は皆無である。それに引き換え、当地ではアイヌの大工や鍛冶師が老人らの死とともに姿を消している。若者らはもはや不承不承で年長世代から知識を受け継ぐ。2、3名の女だけが穀物を鎌で刈る術を心得ていて、畑仕事に雇われている。肌着の洗濯は日本人からその方法を学んでいるものの、ロシア式蒸風呂を設置したアイヌは一人もおらず、女らは身体の洗浄を罪とすら見做すのに対して、マウカ地区では全員が日本式の釜「五右衛門風呂」で入浴する。ミシンによる裁縫を教えようと試みたものの大失敗だった。一人の女がその技法を身に着けたが、私が立ち去るや否や、ミシンは売り飛ばされてしまったからだ。

環境の影響下での同化は概して、その否定的諸側面から始まる。流刑植民地では強固でありえぬ労働の規範が、この地区のアイヌの生活でも揺らぎだした。勢いを増すのは怠惰、そしてまた——スピルトの密売や、手当たり次第に借金を重ねて、その返済はぐずぐず引き延ばすような安直な方法で——一儲けを企む一部の人たちの欲望である。物故した親族の債務は必ず皆済するというかつての美風は、伝承の領域へ移りつつある。娘を何人も抱える者は、彼女らの若さから利益を引き出すことにこれ努め、多くの者は求婚者の若者を散々こき使ったあと、娘との仲を裂いて別の若者を物色する。他人の人としての品格に払われていた敬意が薄れつつある。女に手を上げることは大罪であるとするアイヌの戒律にもかかわらず、若干の夫らは酩酊すると細君を打擲する。息子たちが父親を殴るような事態も出来する。若者らの間にはすでに

——アイヌら自身が「アイヌの脱獄者」と称するような——好機を逸することなく他人の物を着服することを恬として恥じぬ輩も見出される。これはすべからず自らの家庭教育に加えて、東海岸の政庁舎や宿場駅のどこかで警備員や職員らと交わって身に着けた悪習の所産にほかならない。

指摘さるべきは、アイヌに対する搾取がここでは目に見えて弱まり、ほとんどなくなったこと、そして彼らもまた貨幣経済の仕組みを十分にわきまえ、したがって、己の労働もさることながら他人の労働をめぐっても、それぞれの所産をより正しく評価できるという状況である。

(19) オブサキ村「負咲」

ルレ村から南へ40露里、トゥナイチ川河口から北へ21露里のオブサキ川の河口に立地する。ルレからオブサキに至る走破の至難な切り立った岸は、同村と前出諸村との間に断絶をもたらしている。交通は冬の半ばに入江が凍結して、氷上を櫓で往来できる間だけ維持される。至近のロシア人居住地点はコルサコフスク哨所と考えるべきで、冬場には、まずトゥナイチ川に沿って大櫓を走らせ、その後は林道を走破する（所要日数は2〜3日）。

(20) オチ^{ヨホ}ポカ村「落帆、現レスノエ」

トゥナイチ湖の北方6露里、同名川の河口に立地。オチ^{ヨホ}ポカ川は鮭鱒資源が頗る豊富であり、その捕獲のためにトゥナイチからもアイヌたちが集結する。

当地では一九〇三年、立派なロシア式住宅一棟、全財産を収蔵する倉庫三棟、漁獲物や漁撈具を納めた板張りの大納屋一棟が全焼し、村は千「ルーブリカ」余りの損害を蒙った。オチ^{ヨホ}ポカ村は6年前も山火事の延焼で全村が完全に焼け

落ち、漸く立ち直ろうとした矢先に再び不幸に見舞われたわけである。一九〇三年の夏に提出された支援金を求める陳情書には、いまだ何の回答もない。

(21) トウナイチ村「トンナイチャ、富内、現オホーツコエ」

本村は湖と海の間に延びる砂州の、湖水の流出口近くに立地する。同村では鯿が大量に捕獲され、しかもその漁期は——鯿が湖に到来する秋と、そこから退去する春の——年に二度訪れる。ここでは湖上に設置された小型建網で、トウナイチ、オチ^{ヨホ}ポカ、オブサキ、アイルポの4ヶ村が漁に従事する。イトウもやはりふんだんに獲れる。当地はアザラシ資源も豊富である。

(22) アイルポ村「愛郎、現スボヴオドノエ」

前出「トウナイチ」村から25露里南方の海岸に立地。

最後の四ヶ村(19、22)では夏場の交通が二通り確保されている。即ち、コルサコフスク哨所まで伸びる小径と、トウナイチ、チピサニ「池邊譚」の両湖を経由してアニワ湾のチピサニ村「長濱、現オジョルスキー」に至る舟旅である。

これら4村落とも警察関係では第一管轄区集落監視官の管掌下にある。

近辺にロシア人集落のないことが幸いして、当地では至る所で美林が維持されている。行政中心地との交通が隔絶気味である結果、ここでは他のどの異族人集落と比べてもはるかに稀にしか種痘が実施されない。ところで一八九七年に起きた天然痘の流行は、まさにここが発生源だった。一九〇三年には、一八九七年の流行をはるかに上回るような大惨事が部族を襲うであろう、というシヤマンらの予言に怯えたアイヌたちは、種痘実施者が派遣されるよう陳情した。医療関係者

は一九〇三年も一九〇四年にも、彼らの許には誰一人姿を現さなかった。東海岸広しと雖もこれら四ヶ村にだけは、サハリンへ戻ってきた元出国者たち——日本国民「と見做されている「対雁アイヌ」——が在住している。

日本人漁場が稼働していた数年間、当地は専らこれらの漁場に経済面では依存していた。同漁場が毛皮さえも買取り、あらゆる生活必需品は自営店舗を通して提供していたからだ。ここには東海岸一帯に名を馳せた幾つかの日本人漁場があり、コルサコフスク哨所やその他のロシア人村からも、スピルトを求める「巡礼者」たちが夏も冬も馳せ参じていた。

西海岸

(1) ナイボロ村「内幌、現ゴルノザヴォツク」

より南方にあつたアトウイ「音羽か」村から死を免れた住民たちが別の土地へ転出した一九〇三年以降、ナイボロ村は西海岸における最南端のアイヌ集落である。同村はクリリオン「西能登呂」岬北方82露里のナイブの「164号漁場」の脇に立地する。ここには一人のアイヌ女——この漁場をかつて賃借していた日本人漁業者ヤガキヤ・ニシヤブロの細君——が子供たちとともに暮らしている。子供らの父親が島を後にして早八年になる。彼らは目下、1名の「マンザ」〔蜜子、即ち、大陸から渡来した中国人労務者〕を雇用して、馬1頭と大菜園を有する。15ブード「245・7³⁴」ほどの馬鈴薯も作付けている。

(2) トウルマイ村「鳥舞、現カザチカ」

前掲「ナイボロ」村の10露里北方に立地。同村に在住するのは、ピレヴォ（アイヌ語ではポロコタン）村から移ってきた半分以上アイヌの家族と、2名の朝鮮人——一人は三十六才の正教徒。パウリ・パーヴェル、今一人は「マンザ」であ

るが、両名ともアイヌ女の配偶者——である。3世帯に菜園がある。

(3) トブシ村「遠節、現ロヴェツコエ」

前掲「トウルマ」村から8露里の「168号漁場」の脇に立地。3世帯のいずれにもかなり大規模な菜園がある。

(4) オコ村「阿幸、現ヤスノモルスキー」

前掲「トブシ」村の10露里北方、「169号漁場」の脇に立地。5世帯中の4世帯がささやかな菜園を有する。

(5) アサナイ村「麻内、現ザヴェティ・イリイチ」

前掲「オコ」村から5露里北方に立地。ここにはロシア人の到来まで、秋鮭の塩蔵加工に従事した古い日本人漁場があつた。2世帯ともに菜園あり。

(6) タラントマリ村「多蘭泊、現カリーニノ」

前掲「アサナ」村の9露里北方に立地。4世帯のいずれも中規模の菜園を有する。

(7) オゴトマリ村「オホトマリ、大穂泊、現ズイリヤンスコエ」

前掲「タラントマリ」村の4露里北方、「170号漁場」の脇に立地。ここには約十二年前に一人のアイヌが住みついた。同村にはアイヌ女と「マンザ」の子供たちが暮らしているが、同「マンザ」はトブシ村に己の所帯と菜園を有していて、彼らを折に触れて訪ねる。

(8) トマリボケシ村「泊保岸」

前掲「オゴトマリ」村の2露里北方、「171号漁場」の脇に立地。村の起こりはさほど古くない。5世帯中4世帯に菜園あり。

(9) ペロジ村「廣地(ひろち)、現ブラウダ」

前掲「トマリボケシ」村の3露里北方、「172号漁場」の脇に立地。4世帯のいずれにも優良菜園がある。

(10) アキブシ「アツケウシ、明牛」

前掲「ペロジ」村の3露里北方、「174号漁場」の脇に立地。今は1家族のみが在住し、菜園を有する。

(11) トモマイ村「苦舞」

前掲「アキブシ」村から3露里半、「175号漁場」の脇に立地。全くの新設村で2戸よりなる。両世帯ともに菜園あり。当村には、漁業者K・セミノフの細君であるアイヌ女が、洗礼を受けた子供たちと暮らしている。

(12) マウカ村「眞岡、現ホルムスク」

アイヌはかつて当村を「エンドウコモ」「エンルンコマ(ナイ)」ないし「トウナイ」「(西)富内」と呼んでいたが、西海岸のみならず、樺太島全体でも最大のアイヌ村である。前掲「トモマ」村の9露里北方、漁業者セミノフとデンビーの主要漁場と屋敷地の両側に立地する。アイヌ村から4分の1露里北方にはロシア人入植囚の小村がある。

12名の家長が菜園を経営、その幾つかではスグリの灌木も育てている。

当地のアイヌの間には2名の漁業者がおり、一人は「167号漁場」を賃借するコシキ(Kos'ki)「多蘭泊の川村小助」、いま一人のチシ(Čiši)「衆子舞の山本實兵衛」はセミノフ・デンビー商会からクメクマイ「衆子舞」の「180号漁場」を借用する。

(13) アラコイ村「荒貝、現ヴィセルギ」

前掲「マウカ」村の北方1露里半に立地。隣接して「セミノフ商会」の賃借する「179号漁場」がある。5世帯

中の2世帯だけに菜園あり。

(14) ポロトマリ村「幌泊、現シマコヴオ」

前掲「アラコ」村の北方4露里半に立地。隣接して日本人漁業者の賃借する「183号漁場」があり、この日本人はアイヌ女と同棲していた。「シンド（船頭（漁夫の頭）」もまたアイヌ女を娶っており、未成年のアイヌたちが召使いとして菜園経営と調理を学んでいた。小川の対岸には若干戸からなるロシア人村がある（一九〇二年にはあった。アイヌらは一九〇二年、少なからぬ頭数の犬を射殺した一人のタタール人のことで、強い不満を訴えていた。ここでも土地の境界線引きは焦眉の急である。2世帯に菜園あり。

(15) ラハマカ村「藥磨（らくま）、現ミネマリノエ」

前掲「ポロトマリ」村から3露里半、「セミヨノフ商会」の賃借する「185号漁場」に隣接して立地。同村には数年前に牛飼いを始めた、西海岸では唯一のアイヌであるニタロ（Nitaro）が在住する。7世帯中6世帯が菜園を有する。

(16) トマリノ村「恐らく蘭泊のことであろう、現リュブリノ」

前掲「ラハマカ」村の北方2露里に立地し、隣接して「187号漁場」がある。3名の家長はすべて、住宅の近くに菜園を有する。

(17) ノトサン村「野田柵、野田、現チエーホフ」

前掲「トマリノ」村の33露里北方、ノトサン川の畔に立地。当村は創設されてまだ日が浅く、むしろ来るべき集落の萌芽というべきだろう。マウカ村一帯が「セミヨノフ商会」の賃借する諸漁場に占拠された結果、マウカの村民には頗る豊かな漁場が貸与された。同村はこの漁場に開設されたわけだ。ここにはアイヌの漁撈組合総代スニギネス

(Snigines) が在住する。サハリン南部では「ヤシユカ・スニギネス (Jaška Snigines)」として知られ、アイヌらの人望を集めてもいるから、人気と影響力では「当局に任命された」郷長のコシキをはるかに凌ぐ人物である。当村にはささやかながら一つの菜園もある。

以上の17ヶ村が所謂「マウカ地区」ないし「マウカ海岸」を構成する。当地区ではロシア人猟師が頗る僅かだから、異族人が氏族の財産と見做す川筋がそのような猟師によつて横領されたという苦情は皆無だった。

西海岸の南部は周知の通り、日本人の最も強烈な影響下にあった。既述の事柄に加えて、東西南海岸のそれぞれを際立たせる諸特徴を対比するとしたら、以下の通りである。

「マウカの」アイヌは誰一人としてロシア式百姓小屋を有さぬのに、11名の家長は日本式家屋を建設しており、食器や調度全般、また食べ物も半ば日本風である。若い男たちは——アイヌ自身の言によると、彼らの女たちが日本の男を「とてもとても愛している」から、日本人により近くなることを願つて——自らの民族的調髪を捨てて短髪に刈り、顎鬚と口髭も剃り落としているそうだ。女らが着用する日本式肌着は襟足を広く開けて、極彩色の縁飾りも施されている。ここでは女や子供に至るまで皆が日本語を話せるのに、東海岸では数名の男が片言を操るだけで、婦女子はロシア語を知らず、日本語はほとんど解さない。マウカでアイヌ語の単語を初めて記録しようと試みた際、私は露和辞典に助けを求めねばならなかった。優秀な「通訳たち」として100語以上のロシア語は知らなかった。この地区のアイヌはより控えめで丁寧な物腰、斟酌してもさほど騒がしくならぬが、それはロシア人と隣り合つて暮らす村々で特に顕著である。きちんとした身なりや屋内の整頓に関しても、東海岸とは雲泥の差がある。労働意欲はますます高まつており、菜園経営の普及については既述

の通りである。同地区には優れた熟練職人、漁撈や漁り舟操縦の達人が大勢いる。数名の優秀な鍛冶師や木彫師がいる半面、彼らは全員が自前で板を挽く（東海岸で私が見た木挽きは僅かに2名、いずれも若いアイヌだった）。大工は日本人大工に引けを取らぬという。私が「マウカ」に滞在していた一九〇二年、アイヌたちは自宅の大納屋で一艘の巨大な共用漁り舟を建造中だったが、それはむしろ小型スクーター帆船ともいうべき代物である。そのようなスクーター船は、彼らがすでに一艘共有していて、モネロン「海馬」島への航海で使用していた。当地ではアイヌの男たちだけで、ときには日本人さながらの深海漁業に挑むこともあって、小舟で沖へと漕ぎ出し、主として鱈を捕獲する。日本人との親しさを如実に物語るのは、彼らとの頻繁な通婚、そしてまた、この地では広範に認められる——漁夫・手代・漁業者とアイヌ女との——漁期限定の同棲である。なお、一九〇二年にマウカに滞在していた日本人医師ナンボや、一九〇三年に事情聴取した「N・V・キリロフ医師の証言によると、当地では性病や梅毒がかなり広く蔓延しているようだ。東海岸のアイヌの男らは、己の女たちの日本人に対する執着を牽制するべく、マウカにはびこる「日本人病」(シシヤム・イコニ (sisjam ikon)) をいつも引き合いに出すわけだ。

とはいえ、ここではアイヌだけが日本の影響下にあるわけではない。ロシアの漁業者と見做されるセミヨノフとデンビーはすでに二十年もこの地区の漁場を取り仕切ってきたが、ロシアの影響を創出してはいない。ところで、日本人漁業者らが当地で漁場を賃借しだすのは精々八十年前のことではなかったか。それ以前の日本人らは西海岸の全域がセミヨノフとデンビーの縄張りだと思い込んでいたのだ。サハリン漁業者らの前総代理人は私に、少なくともそのように告げた。セミヨノフ・デンビー商会のマウカ総支配人——ロシア人である——を別にする、同商会の従業員はすべて日本人である。試しにロシア船と用船契約を結んだところ、日本船よりも運賃は高め、契約条件もより厳しくて、その結果は芳しくな

った。メ粕と魚の搬出先はすべて日本で、昆布は中国である。両漁業者の差配で地区全体を商域とする唯一の店舗も、取り扱う商品はやはり概ね外国産である。

官吏や偶々訪れる私人らでさえ、マウカにいると日本がここから如何に近いか、そして——マウカとは有機的でなくて単に形式的に非公式な形で結びつくに過ぎぬ行政中心地の——コルサコフスク「天泊」が如何に遠いかを、身を以て痛感せねばならなかった。コルサコフスクからマウカに到来した人が再び出発地に戻ろうとする場合、まず漁撈用蒸気船で函館へ赴いたのち、別の蒸気船でコルサコフスクに帰着する方が、マウカからクスナイ「久春内」へ赴き、次いで、かつては通行至難だった山道を走破して「東海岸の」マヌエ「眞縫、限アルセンチエフカ」に至り、以遠は東海岸に沿って駅通道に達するよりも、むしろ安上がりであった。前者が後者よりも生命の危険が少なく、健康を損ねる心配もないことは改めて申すまでもない。当地での交易は概ね毛皮を介して行われ、現金取引は未発達である。

この地区のアイヌが公的融資の恩恵に浴したことはかつてなく、私が滞在した一九〇二年には、「ロシア当局が余所のアイヌは支援するのに、マウカのアイヌは常に閑却されてきたから、わしらを身内と見做していないことは明らかだ」と何人かが苦々しげに語っていた。

一八九四年のことだったらしいが、当地を襲った苛烈な伝染病が大量の犠牲者を墓場へと送った。アイヌらはそれ以降、清潔を一層心がけるようになり、マウカ漁場の准医師や医師らは種痘を毎年実施しているそうだ（「セミヨノフ商会」代理人のポリソフ談）。

他の同部族者らの見解によると、西海岸の漁業資源は東海岸よりもはるかに豊かであり、またタタール「間宮」海峡はオホーツク海に比してより気さくで、より穏やかだから、マウカ地区のアイヌはより裕福と見做されているそうだ。

(18) トマロロ村「泊居(とまりおる)、現トマリ」

この村は前掲「フトサン」村の40露里北方、クスナイ「久春内、現イリインスキ」の南方23露里に立地する。同村のあるアイヌの家には、中国の統治者が彼の先祖を「クスナイ地区」の氏族長に任じたことを証する公文書が伝えられている。

(19) チラウフナイ村「智来」

前掲「トマロロ」村から7露里半北方に立地。7露里ほど北にあったナヨロ「名寄(なより)」古村の出身者たちが数年前に開設した新村である。

3世帯中1世帯にはささやかな菜園があり、北海道島からサハリンへ帰還したアイヌが経営している。

(20) コモシラロ村「小茂白」

前掲「チラウフナイ」村の北方18露里半、ロシア人のクスナイ村からは3露里北方に立地。近くにはピーリチの賃借する「215号漁場」がある。クスナイ村から転出してきたアイヌたちの共同体漁場に、数年前に開設された新村である。村長が菜園を有する。

日本から帰郷した子なしのアイヌ、サセルシク(Sasurushiku)には若い和人少年の養子がいる。サハリンでは唯一の例であるが、北海道では私も、「アイヌ」養子となった和人の子供らとはよく出会った。かの地ではそのような養子縁組が——一方では子供に注がれるアイヌの愛情や、細君に頻発する不妊症のため、他方では赤貧洗うが如き和人農民の間にまま出来る、個々の家族がすべての子供は養い切れぬといった実情に鑑みて——行なわれることは珍しくない、と私には説明された。

(21) オタス村「小田洲、現バルスノエ」

前掲「コモシラロ」村の33露里北方に立地。

最後の四ヶ村（18～21）は「クスナイ地区」を構成するが、経済的にはクスナイ村と、この地に立地する漁業者ビーリチの諸漁場のいずれにも依存している。クスナイ村には数軒の店舗があつて、監督官も常駐する。

当地の海岸にはトドもアザラシも寄りつかず、海獣には恵まれていない。ほとんど専ら鯨油が消費されている。菜園はここでも造営されだしたものの、そのきつかけを与えたのは、隣人のロシア人ではなくて日本からサハリンへ帰還した元出国者たちだった。

天然痘が猛威を奮ったとき、この地区では大勢の人が落命したから、当地に現住するアイヌは今や、その大部分が上で言及したばかりの所謂「イスカリ・アイヌ (iskari-Ainu)」「対雁アイヌ」たちである。

ここで、アイヌ部族の一員ながら特異な存在で、多くの辛酸を舐めた人たちの特徴に些かの紙幅を割くのは、無益なことでもなからう。

彼らはアニワ湾岸において、二つの剛腕民族——ロシア人と日本人——が一八五三年から一八七五年までの長きにわたつて鏖迫り合いを繰り広げるのをしかと見届けながら、少なからぬ苦難に耐えたあとでも、必ずしも自ら進んで樺太島をあとにしたわけではない。進退窮まったアイヌらの状況がどのようなものだったかは、例えば「N・N・ブッセや」「F・M・ンデ・プレラドヴィチなど、当時の実態を目撃した当事者らの回想記を通してその一端を覗うことができる。

チエーホフのサハリンに関する著書「『サハリン島』(初版は一八九五年刊)」では、一八七六年の『ゴロス』誌16号所載の通信記事に拠って「アニワ湾のアイヌたちは飢えて、仕事か、さもなくば馬鈴薯の種芋をくれ、そしてその植え方も教えてくれと懇願した。仕事は断わられたが、馬鈴薯の種芋の方はあとで届けると約束された。だが約束は守られず、アイヌらは貧窮に追い立てられて、続々とマツマイ「北海道」へ移住して行った」(218頁)と記している。

およそ800人がコルサコフスク哨所から北海道島へ輸送される途上では、激しい嵐に襲われ、甲板にあったアイヌらの全財産が波にさらわれてしまう。犬・櫓・引き綱・食器・道具類など、一切合財を携行していたのだ。彼らは宗谷で全員が下船させられ、越冬を強いられる。樹皮で仮小屋を建てねばならなかった。春には再び、彼らを迎えに来た蒸気船で小樽まで運ばれ、小樽では官営の移住者用バラックで一ヶ月以上を過ごした。最後に、イスカリ「石狩」川の河谷へ案内されると、彼らには入植用の地所が割り当てられた。

豊饒の河谷への日本人入植の強化、高騰する物価、十分な量の魚を確保することの困難、糧食における獣脂の不在(北海道ではアザラシもトドも全く獲れなかった)、一八八六年にコレラ、次いで天然痘と、矢継ぎ早に襲いかかる疫病、故郷と、そこへ残してきた肉親への郷愁。これらすべてが、生き残ったサハリン出国者らを北海道島から追い立てて、父祖の地へ

— 原卓也訳の「サハリン島」(『チエーホフ全集』13巻、中央公論社、1961)では、該当箇所が以下のように表現されている。「彼らは「…」飢えに迫られて、北海道(マツマイ)へ移住しはじめたという話だ。ある記事(『声(ゴロス)』誌、一八七六年第一六号)でわたしが読んだことだが、何でも、アイヌ人代表の一行がコルサコフ監視所にやってきて、仕事をくれるなり、さもなくば、少なくともジャガイモを栽培するための種子を分けて、ジャガイモ栽培用に畑を耕作することを教えるなりしてくれないだろうか、と頼んだことがあるそうだ。仕事の口はことわられたらしいが、ジャガイモの種子を送る約束をもらった。ところが、この約束が一向に実現されなかったため、アイヌは貧しくなる一方なので、マツマイへ移住しつづけたという」(212頁)——訳者注。

立ち戻らせた。アイヌとの談話から判断する限り、数名の出国者が敢行した最初の帰還は一八八七年に出来、その後もほぼ毎年のように繰り返されたから、今や帰国者の人数は家族を含めて男102名、女は101名である。

サハリンから脱出するまでの混乱期に味わった艱難辛苦や、――異族人にとつては目新しく、それへの適応すら容易ではない――新環境への移住は、「イスカリ・アイヌ」の心理にも影響せざるをえなかった。日本では、彼らの間に精神を病んだ者が少なくなく、しかも男よりも女の方が多かった、と彼ら自身が語っている。隣人である日本人とは、必ずしも仲睦まじく暮らせたわけではない。両者間の諍いは日常茶飯事だった。その際、アイヌらは乱闘中に警官が登場したあとですら自制できなかった。十三年前のことだが、殴り合いの最中に一人の日本人が殺されるという事態が生じた。すると、リオデロ (Rockino) という名の独身の若者が一人で罪をかぶって、懲役4年の刑を宣告された。別の男は、細君と密通した日本人を殺害して禁錮6年を食らった。サハリンでも、一九〇二年のことと記憶するが、「イスカリ・アイヌ」の一人に同様な事態が出来た。それがどんな決着を見たのかは詳らかでない。

サハリンへの帰還後も、日本語に堪能なイスカリ・アイヌらは、さまざまな修羅場を掻い潜ったことで生存競争に必須のエネルギーも幾許か獲得していたから、日本人が、そして恐らくはあらゆる漁業者がアイヌを侮辱することを許さず、論争を挑んで、こちらでも殴り合いをおっぱじめることもあったという。

にもかかわらず日本人は、イスカリ・アイヌらが仕事では勤勉・迅速・機敏であることを見込んで、彼らを率先して雇用していた。だがあまたの辛苦を耐え忍んだ人たちにも一つだけ我慢できぬもの――注意や叱責――があったが、それはまさしく彼らの神経過敏や強度の癩癪持ちによって容易に説明される。ところで、一部の人々は彼らを「マツマイスキー」とも称するこれらのイスカリ・アイヌは、セミヨノフやデンビーの代理人や、西海岸の住民に自前で身分証を発行できる

巡回官吏らの手にかかると思ひ「贖罪の山羊」に祭り上げられて、幾世代も経た罪や、捏造された罪や、赤の他人の罪までも着せられることとなる。サハリンでは己の親族の許に身を寄せるか、その近辺に入居していったイスカリ・アイヌたちは、婚姻を通じて新しい親戚も獲得し、今や己の父祖の地でようやく静かに暮らせると思いきや、そうは問屋が卸さなかった。彼らの上に重くのしかかる誰かの呪いが、その運命に新たな一撃を加えた。巡回官吏は漁業規則の外国籍労働者に関する条項を彼らに適用し、(地元アイヌの) 夫とその妻、母と息子、オヂと甥などの共同操業の中止を要求して、「違反者からは」罰金を取り立てた。しかも、それは一人当たり100ルーブリと、アイヌの家計にとつて重すぎるのみならず、裕福な漁場さえも零落させかねぬほどのペラボウな額である。

そこで、アイヌ全般の状況は緩和される一方で、暫時安堵の胸を撫で下ろしたイスカリ・アイヌらの運命は再び暗転してゆく。もし彼がある共同体で一連の歳月にわたつてその成員であることが忌避されなければ、漁場における彼の地位は合法化されるという新措置が導入されだした。人生がしばしばそうであるように、他人の不幸を喰い物にしようとする輩が遺憾ながら登場する。とある日本人は、同じ村民らとともに支障なく働ける許可を奔走して取りつけると称して、イスカリ・アイヌの各自から5ルーブリずつ徴収して回っているというのだ。雷雨と雖も突如襲つて来るものではない。一九〇二年には最初の調書が、「西海岸の」ノトサン〔野田柵〕野田〔野田〕漁場で就労したイスカリ・アイヌ4名に対して作成された。罰金400ルーブリが設定されるも異族人の未熟と、彼らが漁業を規制する諸規則に習熟することの困難に鑑みて、初回は漁業管理局主任によつて徴収が免除された。にもかかわらず、翌年に改めて懲罰金を科された「ノトサン村漁撈組合の」ヤシユカ・スニギネス〔原文では Spenis と記されるも誤植である。〕総代は、己に科された罰金は納めたものの漁業監督官へではなく、彼

二 寡婦たちの間では地元のアイヌと再婚する者もいるため、彼女の息子らは継父とともに暮らすようになる。

と彼の組合に今後ともイスカリ・アイヌたちの自由な組合参加を保証した、ロシア人の小漁業者と日本人商人へ支払ったと説明した。

この問題の詳細を教えたのは地元の先住ロシア人出身の治安判事である。同判事は「マウカ海岸」を足繁く往来する中でイスカリ・アイヌの状況全般に精通するようになり、彼らには心底からの同情を寄せていた。そこで彼はその他の主要な論点でも、頗る貴重な示唆を行った。つまり、イスカリ・アイヌは果たしてロシア国籍者であるのか、それとも外国籍者なのかという論点である。なぜなら、長期にわたる国外滞在や、本人がロシア国籍の放棄を申し立てた文書の不在は、己をロシア国籍者と見做し、祖国帰還後は同国民としての諸権利を享有する機会を、彼から剥奪すべき事由としては不十分だからだ。同判事はその一方で、あれこれの国籍を証する文書を一切所持せぬ個々の個人の国籍帰属をめぐって、巡回官吏は、問題を最終決着させる機関たりえぬのではないかという論点も提起した。

警務部文書庫や日本領事館事務部へ赴いても、アニワ湾からのアイヌの出国状況を究明できるような情報は全く入手できなかった。イスカリ・アイヌが日本国籍を有する事実は、プリアムール地方国家資産管理局が一九〇三年に発行した小冊子『沿海州とサハリン島における漁業について』に目を通すに及んで、私にはようやく自明となる。同冊子の35頁には「一八七五年八月十（グレゴリウス暦では二十二）日に東京で調印された本（サハリン譲渡）条約の付帯条項によると、彼らに帰属する領域において漁撈と狩猟に従事する権利は、同地に残留して永住を希望する自然住民に対してのみ供与され、しかも彼らは自らの生業に対する一切の納税義務が終生免除されるが、その際はロシア国籍を取得せねばならず、さもなければ3年以内にロシアの領土から退去すべし」と記載されていたからである。

したがって、イスカリ・アイヌは日本へ向けて出国した時点で、ロシア国民ではなくなっただけに疑問の余地はない。

アイヌらに残された唯一の解決策は、彼らをロシア国民へ編入するよう請願することである。漁業を管掌する新任の農業監査官も同様に助言していた。同監査官はまた私見ながら、漁場で就労する人員の国籍決定に関しても、巡回官吏は十分な権限を有すると見做した。就労地が自村ではなくて他村で、はたまた反対側の海岸の親族の土地であるような樺太アイヌからの過料徴収を回避すべく、見知らぬ人物は、己の居住区を担当する巡回官吏が発行した身分証を提示するとの条件で、件の監査官は地元のすべてのアイヌに所属組合の変更を許容するよう、巡回官吏らへ通達した。なにしろそれまでは、数ヶ月前に予め提出された名簿に記載がなく、そのゆえに「マツマイスキー」と見做されうるようなアイヌは、すべてから共同漁場での就労が禁止されていたからだ。

一九〇四年一月、依頼案件を抱えて私の許へやってきたチリウフナイ〔知巫〕のシレクフランク（Shrekranke）村長は、以下のように訴えた。彼の共同体漁場では一九〇二年、同村者のほかに他村出身の若者8名（セラロコ村から5名、タライカ、ルレ、マヌエから各1名）も就労して、彼はこれら8名のために過料340ルーブリを納める羽目となった。日本人漁業者は買付けたペ粕の決済時に当該過料も徴収して、日本語で記した領収証を発行した（その写しは今、私の手元にある）。シレクフランクは誰かから、この過料が所定の納付先に届いていないと聞いて、これらの金子を日本人から回収すべく、告訴状の起草を依頼に来たわけである。シレクフランクの訪問から二日後に「日露開戦が布告されて、日本人被告人の今春の来島は望めなくなり、彼は訴状執筆の撤回を余儀なくされた。

「マツマイスキー・アイヌ」に話を戻す前に、以下の点は指摘しておくべきだろう。彼ら自身が遂にサハリン〔ロシア帝国〕への編入を決断したにもかかわらず、ロシア国籍の取得には日本当局者の「日本国籍離脱の」同意が必至と突き離されて、日本国籍を放棄したいというアイヌらの訴えに、日本の当局者は二度までも拒否回答で応じたというのだ。

日本領事の説明によると、日本には国籍離脱を定めた法文条項が欠如することだった。

「サハリンのヴァルウイエ」武官知事「代行」は一九〇三年の秋、同伴に関しては私見と断りつつも、アイヌたちは日本政府の同意がなくともロシアへの編入は可能であると明言した。

私が若干名のアイヌへ、彼らのロシア国籍取得がかなり有望視されていると伝えるや、私の周辺で暮らす数名が慌ただしく請願書を作成し、同村者らの同意決議も添付して提出した。プリアムール総督閣下の裁定が下されて、請願者は全員がロシア国民に算入されることとなった。

「マツマイスキー・アイヌ」らは宣戦の布告とともに請願書の提出を取り止めた。請願成就の可能性が全員に周知されたとはとても思えないが、例えば日本人への恐怖といった別の分別が働いた余地も、やはり多分にあつたであろう。

イスカリ・アイヌらが外国籍者として、日本人とともに国外へ追放されはせぬかと怯えながら、己の運命が決められる時を戦々恐々と待機していたことは、私も承知している。己が見捨てた束の間の祖国に対して、彼らは格別な愛国心も、また愛着も抱いてはいなかった。

にもかかわらず、不運に付き纏われつづけるイスカリ・アイヌにとっては、まことに好ましくない事態が再来する。三十〜五十年前と同様に、彼らには何の罪咎もないのに、またもや鎚と鉄床の間へ投ぜられることになったのだ。

つい先頃までは頗る平和裏に仲睦まじく交際していた2部族「ロシアと日本のこと」がサハリンで繰り広げる、兄弟殺しの殺戮が一日も早く終わるよう己の神々へ祈りながらも、イスカリ・アイヌたちはきつと「われらは一体どうなるだろうか」と自問自答せざるをえぬだろう。勝者となりそうな日本人からは——彼らを見捨て、日本在住のアイヌらも含めた日本国民の身に降りかかった辛い運命をともに分かちあわなかった廉で——何らかのしつぺ返しや罰を受けぬだろうか。またもし

ロシア人が勝てば、彼らはアイヌに対して何か手荒なことをしでかさぬだろうか、そしてまた——アイヌの日本人鼻屑は「マツマイスキー」のせいだ、彼らは危険な有害分子だ——と、かなり頻繁に聞かれる声がさらに荒げられぬだろうか。群衆と化した人々は常に、複雑な問題に安直な解決を求め、何らかの大事象でさえも、その原因をある種の外的対象や、容易に除去・駆逐されうる個々の生身の人の間に求めようとしがちである。

十九世紀初頭にはフヴォストフとダヴィドフの軍団による「アニワ湾岸の日本人居留地襲撃」、次いで「二八五〇年代の同じアニワ湾におけるロシア軍の最初の上陸作戦といった、「サハリンに対する襲撃」を目撃した人々の子孫らが「憂慮する」「次なる襲撃」——は、単なる杞憂に終わることを私は信じたい。

彼らがサハリンにあるべきか否かという問題は必ずや、社会的性格の事象の諸原因を同時代の社会生活と歴史的過去の根深いマグマの中で模索するような、より広い視座から考察されるであろう。

(22) エントコホナイボ村〔再度(えんど)〕

オタス〔小田洲〕村の北方57露里、ビーリチの賃借するニオイ〔荷負〕の「220号漁場」の4露里南方に立地する。エントコホナイボは、ウストウムナイ〔牛苜〕村から退去を強いられた人々へ割り当てられた漁場における、来るべき村落の萌芽である。ウストウムナイには漁業者のビーリチが漁場を開いて、屋敷地も見事に整備したからである。鯨漁期になると漁撈組合員の全員が当村に顔を揃えるが、冬場はアイヌのトカミシランケ (Tokamis'ranke) の家族だけが大きな日本式住宅で暮らしている。

(23) オブサハナイブ村「小草(おぐさ)か」

前掲「エントコホナイボ」村の2露里北方に立地。当村にもウストウムナイ「牛苜」村を脱出した一家族が、やはり最近になって移住してきた。

(24) ポロオホトマリ村「幌泊か」

前掲「オブサハナイブ」村から北方へ4露里、ニオイ「荷負」の漁場からは2露里先に立地。当村は一九〇一年、同様な脱村者らによって造成された。

(25) ウェントウエサム村

前掲「ポロオホトマリ」村の北方半露里、ビーリチの賃借するウストウムナイの「221号漁場」からは半露里南方に立地。

(26) フロオチシ村「幌千(ほろち)か、現ゴンチャロヴォ」とウス村「宇須か」

両村間の距離は半露里で、実質的には一村落を形成する。前掲「ウェントウエサム」村から6露里北方に立地。ビーリチの賃借する「222号漁場」に隣接する。

(27) 「名称未定、場所不定の村」

フロオチシ村のはるか北方で、ノヤシ「名好(なよし)」村の近傍にはさらに3名のアイヌが、家族とともに住所を定めずに暮らしている。3名中2名の細君は、ピリヴォ「前出では「ピレヴォ」」(ポロコタン)出身のギリヤーク女である。彼らはしばしば居住地を変えるが、一貫して海辺で生活している。

「ウソロ〔ウシヨロ、鵜城〕地区」には一つの菜園もなく、牛馬を飼う者も皆無である。主たる稼ぎは狩猟から得ている。多数の住民を擁した同地区の人口が、一八九三年の天然痘と感冒（インフリュエンツア）、一八九九年か一九〇〇年の百日咳の大流行のあとで激減した。一九〇四年には5名が水腫で死亡。この地区でも、また西海岸の全域でも丸木舟はもはや製作されず、日本式ないしギリヤーク式の舟を板で組み立てている。

海では鰈と鱈を一本釣りで捕獲する。「ウソロ地区」のアイヌは、日本人の下で農奴的隷属状態にはあったが、頗る短期間に過ぎない。当地区ではアイヌの典型的特徴が、他の場所よりもよく保存されている。私は遺憾ながら、アイヌ部族のこの部分の事情に最も暗いが、若干のデータによると、同地区に大きな影響を及ぼしていたのは、アムール流域から渡来するオリチャ（マングシ）の文化であると判断される。彼らと交易関係を維持してきたのは主としてウソロ・アイヌたちだったが、今ではウソロに造成された経済拠点であるビーリチの大漁場が、それに取って代わっている。

漁業管理局の漁場監督主任を務めたブラジニコフ氏がハバロフスクで私に語ったところでは、ウソロ・アイヌのトゥソホア（Tusoxe）が一九〇二年の夏にブリアムール総督の許に出頭して、ビーリチはアイヌたちがポロ^ホトマリ〔幌泊〕湾で鯨漁に従事することを許さないと訴えたそうである。アイヌらの陳情は功を奏した。ハバロフスクへは一九〇一／二年の冬場にも、今一人のアイヌ——サコヤマ〔サカヤマ（榮演）〕のサムブ^ロ（Gambrook）〔榮演土人サンブ^ロクアイヌ、伊場三六（千徳太郎治 1929: 58）〕——がブリアムール総督の許へ陳情に訪れていた。サムブ^ロは組合総代として、共同体漁場設置の許可を得たわけであるが、それはすでに地元当局でもわけなく入手可能な案件だった。

両事例が特徴的に物語るのは、上級権力の方が至近の下級権力よりも公正であり、請願者の欲求にもより配慮的であるという、あまたの歴史事象を踏まえても成立する見解である。例えばアイヌらも農奴的隷属下にあった頃は、漁場の現地

差配人の横暴に耐えてきたが、北海道から頭官らに乗せた船が来島する度に、殿方は陳情や請願を書き留めて帰り、その後一連の改善策が講ぜられるようになったと語っている。遂には氏族長たちを松前のダイミヨ「大名、即ち松前藩主」の宮殿へ定期的に参内させる制度が導入されて、彼らはその都度、自分たちの欠乏や困窮を報告せねばならなかった。この時期（十八世紀末から十九世紀前半）には、ヨーロッパ人が初めて極東に足を踏み入れだしており、「かかる事態を真剣に憂慮した松前公一族は、隷属を強いられたアイヌの運命に対する無関心な態度を改めて、アイヌの歓心を買おうべく、抑圧された彼らの状態の改善は、己の手で図りつづけることを必至と思案したわけだ。

多くの老人は、最初に到来したロシア人たちのことをやさしい言葉で回顧する。彼らは愛想と見事な弁舌とすばらしい約束でもって、白人種の到来はアイヌたちにとって幸い以外の何物も意味せぬことを吹き込むべくこれ努めていたからだ。アイヌの見方に従えば、これらのよき旦那方は、すべからくその勤務で大出世を遂げたに違いないそうだ。なぜなら、「憐れなるアイヌの大地」を密かに守る強力な守護霊たちの力は、ことほど左様に甚大であるからだ。

彼らは、その後を経過した数十年の歳月をただひたすら忌々しげに回想する。己は忘却された継つ子と化すともなお愛してやまぬ自らの大地を——自然それ自体も、またそのかつての持主らも容赦せぬ——不機嫌な幼児（懲役と流刑）の手に委ねた新しい権力の空しい行状の数々を、辛抱強く見守りつづけねばならなかったからだ。

表 1. 樺太アイヌに関する統計データ(1904年)

集 落 名	戸 数		成 人		子 供		家 畜	犬			舟		網	銃	菜園 を有する 世帯数	馬鈴薯の植 付高と穀物 の播種量 (ブード)		
	住居	ロシア式住宅	男	女	男	女		牝犬	雄犬	仔犬	丸木舟	アムール・ギリヤク式和船						
東 海 岸																		
アイルボ	2	—	5	5	3	5	—	4	20	6	1	—	—	2	—	3	—	
トゥナイチエ	6	2	16	11	4	4	—	12	74	21	7	—	—	2	—	4	—	
オチヨホボカ	2	—	4	4	2	7	—	8	35	24	1	—	—	1	—	3	—	
オブサキ	4	3	8	8	2	7	—	11	54	42	3	—	—	1	—	3	—	
ルレ	4	3	12	12	7	5	馬1	11	44	40	2	—	3	1	1	1	小変4、馬鈴薯2	
サカヤマ	7	3	13	18	9	10	馬3、牛3	14	51	28	3	—	—	4	1	4	2	小変5、燕麦2、馬鈴薯3
ナイプチ	4	2	11	6	6	5	馬1	9	42	14	3	—	—	2	—	—	—	小変2、燕麦2、馬鈴薯6
シヤンツィ	4	1	8	6	4	7	馬2	4	28	13	4	—	—	1	—	2	2	小変5、馬鈴薯4
タコエ	8	3	15	16	10	11	馬4	16	61	22	6	—	—	3	—	3	1	
アイ	3	2	8	7	4	2	馬4	7	38	9	2	—	2	2	2	2	—	—
オトサン	8	4	17	15	20	14	馬3	16	88	30	2	—	—	2	—	4	—	—
セラロコ	7	2	20	16	8	5	馬2	13	56	23	2	—	3	2	1	5	—	—
マヌエ	4	—	7	6	4	3	馬1	9	45	10	3	—	—	—	—	1	—	—
オガコタン	1	—	1	2	—	1	—	1	12	3	—	—	—	—	—	—	—	—
フレチシ	2	—	5	5	1	3	—	4	23	9	2	—	—	1	—	1	—	—
アカラ	1	—	3	2	1	2	—	5	14	3	1	—	—	1	—	1	—	—
モトマリ	1	—	3	4	2	1	—	6	15	3	1	—	—	1	—	2	—	—
フヌッ	1	—	4	3	3	2	馬1	3	14	10	2	—	—	1	1	1	—	—
コタンケシ	5	1	8	8	6	5	馬2、牝牛2、牡牛1	10	27	5	1	—	—	1	—	1	—	—
ナイエロ	3	—	11	6	4	7	馬4、牝牛2、仔牛	9	44	16	2	—	—	2	—	3	—	—
トマリケシ	7	1	11	10	9	9	馬1	14	82	23	4	—	5	3	2	5	—	—
タリカ	11	—	22	20	15	11	トナカイ4	26	118	56	11	—	2	4	1	16	—	—
東海岸22カ村小計	95	27	212	190	124	126	馬29、牛8、トナカイ4/所有者26名	212	985	410	63	—	15	39	9	65	6	馬鈴薯15、小変18、燕麦4

西 海 岸

		日本式住宅														馬鈴薯
ナイボロ	1	—	2	2	—	—	馬1	2	10	4	—	1	2	1	—	1
トゥルマイ	5	—	11	9	6	7	馬1	5	32	15	—	5	1	4	—	5
トブシ	3	—	6	8	8	5	—	5	28	14	4	1	1	3	—	2
オコ	5	—	12	13	6	7	—	8	42	18	—	5	—	5	—	1
アサナイ	2	—	5	4	2	2	—	2	14	7	—	3	5	2	—	1
トラントマリ	4	—	8	11	10	5	馬2	6	33	12	—	6	5	4	—	2
オホトマリ	1	—	2	3	2	5	—	1	8	3	—	1	—	1	—	—
トマリボ _[ケン]	5	—	8	11	10	7	—	6	36	16	—	4	1	4	—	1
ペロヂ	4	1	8	6	4	1	—	4	21	8	—	4	—	3	—	2
アキブシ	1	1	1	2	2	—	—	1	6	2	—	1	—	1	—	—

[illegible]

表2. 年齢別人口構成(1904年)

東 海 岸

集 落 名	1-5歳		6-10歳		11-20歳		21-30歳		31-40歳		41-50歳		51-60歳		61-70歳		70歳以上	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
アイルボ ^ロ	3	1	—	3	—	1	2	1	1	2	2	1	—	—	—	1	—	—
トゥナイチ	1	2	2	1	5	4	2	3	6	1	1	3	2	1	—	—	1	—
オチ ^ホ ボカ	1	3	1	2	1	2	1	1	1	1	—	1	1	—	—	1	—	—
オブサキ	—	2	1	2	2	5	3	2	2	2	—	1	2	1	—	—	—	—
ルレ	4	3	1	1	5	3	3	5	2	1	2	2	2	2	—	—	—	—
サカヤマ	3	2	3	7	7	8	2	2	—	5	3	1	3	2	—	1	—	—
ナイブチ	3	4	3	1	1	1	3	2	3	2	2	—	—	1	—	—	2	—
アイ	3	4	3	1	1	1	3	2	3	2	2	—	—	1	—	—	2	—
オトサン	8	10	5	3	10	3	1	5	7	4	3	3	1	1	—	—	1	—
セラロコ	4	5	5	—	4	4	7	7	4	2	3	—	—	2	1	1	2	—
マヌエ	2	—	1	2	1	2	1	1	3	2	1	1	1	—	1	1	—	—
オガコタン	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—
フレチ ^シ	—	1	—	1	1	1	1	1	1	2	1	—	1	1	—	1	1	—
アカラ	1	—	—	1	—	1	1	1	1	—	—	1	—	—	—	—	1	—
モトマリ	1	1	1	—	—	1	1	2	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—
フヌッ	1	—	1	1	2	1	1	2	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—
コタンケ ^シ	3	1	2	1	4	3	1	1	1	4	1	—	1	1	1	2	—	—
ナイエロ	—	3	2	3	4	1	6	3	1	—	—	—	1	3	—	—	1	—
トマリケ ^シ	4	4	1	3	4	3	4	3	3	3	3	2	1	—	—	1	—	—
タリカ	6	7	4	3	10	6	3	5	5	2	2	5	6	1	1	2	—	—
タコエ	6	7	2	2	5	5	3	5	4	2	2	2	2	3	1	—	—	1
シヤンツイ	—	5	2	2	5	—	3	3	1	2	1	—	—	—	—	2	—	—
東海岸小計	52	64	39	39	74	55	51	58	51	41	28	24	27	22	5	12	9	1

西 海 岸

集 落 名	1-5歳		6-10歳		11-20歳		21-30歳		31-40歳		41-50歳		51-60歳		61-70歳		70歳以上	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
ナイボロ	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	
トゥルマイ	5	1	1	3	6	4	2	4	—	2	3	1	—	1	—	—	—	—
トブシ	1	1	4	1	3	5	1	1	1	2	1	2	3	1	—	—	—	—
オコ	3	3	2	2	2	5	4	4	3	3	3	—	1	1	—	—	—	2
アサナイ	1	1	1	1	1	1	1	2	1	—	—	1	1	—	—	—	1	1
タラントマリ	6	—	2	2	4	5	—	5	4	3	—	—	1	—	1	1	—	—
オホトマリ	2	2	—	2	—	2	1	1	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—
トマリボケシ	3	3	4	—	5	5	1	4	1	3	1	3	2	—	—	—	1	—
ペロチ	2	—	1	—	1	3	5	1	—	1	1	1	2	2	—	—	—	—
アキブシ	1	—	—	—	1	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
トモマイ	2	—	2	—	3	3	—	—	1	2	—	—	—	—	1	—	—	—
マウカ	6	11	18	8	21	15	18	23	11	9	10	9	9	7	3	1	1	1
アラコイ	—	1	4	1	4	5	1	2	1	3	4	2	—	2	—	—	—	—
ボロトマリ	2	2	—	—	3	3	3	3	1	—	1	1	1	1	—	—	—	—
ラハマカ	6	4	3	4	7	6	6	4	7	5	1	4	3	—	—	—	1	1
トマリノ	4	2	1	1	3	1	1	2	1	1	2	2	—	1	—	—	—	—
ニタサン	—	—	—	—	—	—	1	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—
トマロロ	4	2	1	1	—	2	3	4	3	1	—	1	3	—	—	—	—	—
チラウナイ	3	1	2	1	1	3	1	2	3	2	2	1	2	—	—	—	—	—
コミシラロ	4	1	—	1	1	1	3	1	2	1	2	3	1	—	—	—	—	—
オタス	1	1	1	—	—	2	2	3	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—
オブサハイブ	—	—	2	1	1	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
ボロオホトマリ	1	2	3	1	5	—	1	1	1	2	2	2	—	—	—	—	—	—
ウェントウサム	—	4	2	—	1	—	2	2	1	2	—	1	1	1	—	—	—	—
フロオチシ	3	—	2	1	1	3	2	1	1	—	—	1	1	1	—	—	—	—
ナヤシ付近	—	—	1	—	1	2	—	—	—	1	1	—	1	1	1	—	—	—
エントロホナイブ	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
西海岸小計	57	43	58	31	75	78	62	70	46	47	35	36	34	21	6	3	4	5

表 3

アイヌの家族状況

村落名	既婚者		重婚者 (内数)	やもめ		独身者		幼児・孤児	
	男	女		男	女	男	女	男	女
東 海 岸									
アイルボ	2	5	—	1	—	—	—	—	—
トゥナイチ	4	5	—	4	—	2	—	—	—
オチ _ヨ ポカ	3	3	—	—	1	—	—	—	1
オブサキ	4	4	—	1	1	2	—	1	3
ルレ	6	9	—	2	1	2	1	—	—
サコヤマ	3	7	—	3	3	2	3	3	3
ナイプチ	5	5	—	3	1	1	—	1	—
シヤンツィ	4	4	—	—	2	1	—	4	—
タコエ	10	9	1	—	4	2	1	—	1
アイ	5	8	1	1	—	2	—	—	—
オトサン	8	8	1	2	4	1	2	2	—
セラロコ	5	5	1	—	4	5	5	—	—
マヌエ	5	6	—	6	3	3	1	1	1
オガコタン	1	2	—	—	—	—	—	—	—
フレチシ	4	3	1	—	1	1	1	—	—
モトマリ	2	4	—	—	—	1	—	—	—
アカラ	1	1	—	1	1	1	—	—	—
フヌ _ツ	2	2	—	—	1	1	—	—	—
コタンケシ	5	6	—	—	2	1	—	—	—
ナイエロ	7	4	1	—	2	2	—	—	—
トマリケシ	10	9	—	1	1	1	—	—	—
タリィカ	10	13	—	3	2	8	4	1	2
22ヶ村 小計	106	112 ^{*)}	6	28	34	39	18	13	11

注*)：1903 年、6 名の女は日本人の妻と見做され、2 名の女は西海岸に夫を有した。1904 年には 2 名の女が日本人の妻と見做され、3 名は、西海岸から移住してきた朝鮮人の妻であった。

表 4

東海岸のアイヌにおける出生率と死亡率
(1903 年度・1904 年度)

a) 月別の出生者数と死亡者数

月	出生者						死亡者					
	1903 年			1904 年			1903 年			1904 年		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1 月	1	—	1	2	—	2	—	—	—	1	1	2
2 月	—	1	1	1	—	1	—	2	2	—	1	1
3 月	3	2	5	2	2	4	1	1	2	—	1	1
4 月	3	2	5	2	1	3	2	2	4	1	—	1
5 月	—	2	2	1	1	2	4	—	4	—	—	—
6 月	1	1	2	1	1	2	1	1	2	—	—	—
7 月	—	—	—	—	1	1	—	1	1	1	—	1
8 月	—	2	2	1	—	1	—	—	—	—	—	—
9 月	—	1	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—
10 月	—	2	2	1	5	6	1	—	1	—	2	2
11 月	1	—	1	—	1	1	1	4	5	1	—	1
12 月	2	1	3	1	1	2	—	—	—	2	2	4
合計	11	14	25	12	13	25	11	11	22	6	7	13

b) 年齢別の死亡者数

	1903 年			1904 年		
	男	女	計	男	女	計
1 才未満	2	1	3	3	3	6
1—5 才	3	1	4	1	—	1
6—10 才	—	—	—	—	—	—
11—20 才	—	2	2	—	—	—
21—30 才	3	2	5	—	1	1
31—40 才	2	3	5	2	—	2
41—50 才	—	—	—	—	—	—
51—60 才	1	—	1	—	—	—
60 才以上	—	2	2	—	3	3
計	11	11	22	6	7	13

注1) 人口 1,000 人に対する死亡者数は 35 人 (1903 年) と 20 人 (1904 年) である。

注2) 産婦の出産年齢は 20 才未満が 2 件、30 才未満 14 件、40 才未満は 9 件だった。

人口 1,000 人に対する出生者数は 40 人 (1903 年) と 38 人 (1904 年) である。

既婚婦人 122 人に対する産婦は (1903、1904 の両年とも) 25 人、即ち 20% であった。25 件の正常分娩に対して、流産は 1903 年が 2 件、1904 年は 1 件であるから、流産の比率は 1903 年が 1 対 12.5、1904 年は 1 対 25.0 である。

15 才以上 51 才未満の婦人に対する産婦の比率は 1903 年が 147 対 25、1904 年は 155 対 25 であるから、出産能力を有する婦人 1,000 名に対する産婦数は 1903 年が 170 名、1904 年は 161 名となる。

参考のため、他国のデータを以下に掲げよう。

ロシアのヨーロッパ部 ——— 190 (但し、正確なデータではない)

フランス ——— 99

ドイツ ——— 152

英国 ——— 141

スウェーデン ——— 118

注3) 私の手元には西海岸に関する正確な情報がない。しかし、1902 年夏と 1904 年末に私がマウカ地区だけで実施した調査データを照合するならば、この 2 年半に 22 名の男児と 17 名の女児が出生、つまり年平均では人口 1,000 名に対し 28 名増であるが、他方では男子 30 名と女子 25 名が死亡、つまり年平均では人口 1,000 名に対し 40 名が減少したことが判明する。

表 5

日本国籍を有するアイヌ（所謂「イスカル・アイヌ」「対雁アイヌ」）に関する情報

（1875年に北海道島へ移住したが、サハリンに帰郷してきた人々）

村 落 名	1905 年 1 月 1 日現在			
	成人		15 歳以下の子供	
	男	女	男	女
西 海 岸				
コモシラロ	5	3	5	3
チラウ ^フ ナイ	3	3	4	3
トマロロ	1	1	—	—
トブシ	4	4	4	2
オコ	2	3	1	2
トラントマリ	3	2	—	3
トマリボケシ	3	2	1	—
ペロチ	3	3	1	—
トモマイ	2	1	1	2
マウカ	17	18	9	9
アラカイ	2	2	1	1
ポロトマリ	1	—	—	—
ラハマカ	6	3	2	6
トマリボ	1	2	1	—
小計	53	47	30	31
東 海 岸				
アイルボ	2	3	1	3
トゥナイチ	8	6	2	6
オブサキ	2	1	—	2
ルレ	1	—	—	—
ナイブチ	2	2	1	—
小計	15	12	4	11
総計	68	59	34	42
	男：102 人		女：101 人	

表 6

1897 年と 1904 年におけるアイヌ人口の比較表

村落名 [括弧内は日本統治下の名称]	1897 年の全ロシア 国勢調査のデータ			1904 年に実施した 私の調査データ		
	戸数	男	女	戸数	男	女
東 海 岸						
タコエ [多古恵／大谷]	5	25	18	8	25	27
シヤンツイ [薄台]	2	7	6	4	12	13
ドゥブキ／サコヤマ [榮演]	9	34	30	7	22	28
チヅカイ	3	8	11	(1897	年に	廃村)
ナイブチ [内間]	4	18	8	4	17	11
アイ [相演]	3	10	9	2	12	9
オトサン [小田奏]	8	32	37	8	37	29
モトウマナイ [廣吉]	2	6	5	(他村	へ	転出)
セラロコ [白湖]	4	18	16	7	28	21
マヌエ [廣崎]	4	21	20	4	11	9
オガコタン [菊田]	3	8	6	1	1	3
フレチシ [婦禮]	—	—	—	2	6	8
チャポロナイ	4	7	5	(他村	へ	転出)
アカラ [赤湖]	—	—	—	1	4	4
モトマリ [元泊]	2	9	10	1	5	5
ウルイ [宇間]	2	6	6	(他村	へ	転出)
フヌム [既伸]	3	12	11	1	7	5
コタンケシ [古丹岸]	3	12	10	5	14	13
ナイエロ [内路]	6	24	20	3	15	13
トマリケシ [泊岸]	2	11	12	7	20	19
タライカ [多来加]	7	25	16	11	37	31
ルレ [魯禮]	5	17	16	4	19	17
ノサン	2	10	10	(1897	年に	廃村)
トウナイチ [富内]	6	39	24	6	20	15
クヌン	1	2	2	(1897	年に	廃村)
オビサキ [貞崎]	4	16	11	4	10	15

オチ ^ホ ボカ [落帆]	4	14	13	2	6	11
アイルボ ^ポ [渡部]	2	8	7	2	8	10
28 カ村 小計	100	399	339	22 村	336	316
				95 戸		
西 海 岸						
アトゥア [音羽]	3	14	19	(廃村)	—	—
ナイボロ [内幌]	1	5	4	1	2	2
トゥルマイ [島舞]	3	6	7	5	17	16
トブシ [遠節]	1	7	6	3	14	13
オコ [阿幸]	4	17	17	5	18	20
アサナイ [麻内]	3	7	5	2	7	6
タランタマリ [多蘭泊]	2	7	9	4	18	16
オゴトマリ [大徳泊]	1	3	7	1	4	8
タマリボケシ [泊帆岸]	—	—	—	5	18	18
ピロチ [廣地]	3	10	10	4	12	7
アキプシ [明牛]	1	6	1	1	3	2
トママイ [苔舞]	—	—	—	2	9	6
マウカ [風岡]	26	125	100	21	97	84
ミラコイ [荒貝]	5	13	22	5	14	16
ボロトマリ [幌泊]	2	3	6	3	11	9
ラハマカ [樂磨]	4	15	12	7	34	28
トゥマレノシ	4	17	17	(他村)	へ	転出)
ノトサン [野田番]	—	—	—	1	3	1
トゥメリノ	1	2	4	3	9	11
トマリロオ [泊居]	4	14	15	5	14	11
ナイエロ [名寄]	1	5	1	(他村)	へ	転出)
チラウツナイ [智来]	—	—	—	4	14	10
コスナイ [久春内]	1	4	3	(他村)	へ	転出)
コモシサロ [小茂白]	—	—	—	3	13	8
オタス [小田湖]	2	10	9	3	6	7
ライチシカ [来知志]	2	5	10	(他村)	へ	転出)
ウエスウエサン	5	22	14	4	7	10
ボロオホトマリ [幌泊]	—	—	—	8	13	9
オブサヘナイボ	—	—	—	1	3	3

ウストモナイ ^{〔中苦〕}	6	20	14	(他村)	へ	転出)
ウスィ ^{〔宇須〕}	1	6	4	(他村)	へ	転出)
フラチシ ^{〔幌千〕}	5	21	24	3	10	7
北ウスロ、居所不定	—	—	—	2	5	4
エントボ ^{〔ホナ〕} イボ ^{〔円度〕}	—	—	—	1	2	1
25 カ村 小計	91	364	340	27 村	377	333
				102 戸		
51 カ村 合計	191	763	679	49 村	713	649
		1442 人		197 戸	1362 人	

注) アイヌの総人口は、この部族をめぐる 1897 年と 1904 年の集計を比較すると 80 人以上も激減している。—— この間には、所謂「イスカリ・アイヌ」[対雁アイヌ]と称される人たちの北海道からの帰島が続いていたことも顧慮すべきである。帰国者の間で聴取したデータによると、その数は 1897 年が男 10 名と女 15 名、以降は男／女が各 7 名／5 名 (1898 年)、6 名／5 名 (1899 年)、10 名／8 名 (1900 年)、5 名／8 名 (1901 年)、5 名／8 名 (1903 年) であり、総数は男 43 名と女 49 名、即ち 92 名に達する。したがって、もしこれらの帰国者らを度外視するならば、この部族の人口減は 8 年間に 172 名、年平均では 21.5 名となろう。アイヌの急速な滅亡を促進してきた諸条件が改善されず、彼らの生活が今後とも同じ方向で推移するとしたら、65 年後には樺太島からアイヌが一人残らず姿を消すという事態を迎えるであろう。

1897 年の全ロシア国勢調査のデータを取り纏めた中央統計委員会の出版物によれば、アイヌの総数は男 755 人／女 679 人とあり、しかも一人の男はティモフスク管区、今一人の女はアレクサンドロフスク管区で登録されていた (『サハリン』冊子第 2 版 37 頁、1903 年刊)。だがここでは、コルサコフスクの警察署が保管する国勢調査関係文書から私自身が収集したデータを採用したい。そのわけは、1) 転記の機会が後者では最小限に留まるから、誤記の機会もそれだけ少なく、2) 両情報源の間には、記載データに顕著な差が認められぬからである。

表 7

各種物品価格一覧

(1902～1903 年、サハリン島アイヌの売買する物品、但し店頭購入品は除く)

樺犬	5～15 ルーブリ	} 品質次第で変動
先導犬	25～80 ルーブリ	
飼育トナカイ（タライカ村にて）	20～50 ルーブリ	
犬樺	5 ルーブリ	
丸木舟（2 人漕ぎ）	25 ルーブリ	
丸木舟（4 人漕ぎ）	50 ルーブリ	
黒貂用罌（100 個）	2～3 ルーブリ	
革紐（アザラシないしトド革製）	20 コペイカ（1 尋当たり）	
犬用装具	1 ルーブリ	
アザラシ皮	1～1.50 ルーブリ（胡麻斑海豹 1 頭分）	
厚めのアザラシ皮革	1 ルーブリ（靴底分の 1 片）	
内臓囊入りのアザラシ油	1 ルーブリ	
犬皮	60 コペイカ～1 ルーブリ（1 頭分）	
黒犬皮製毛外套	10 ルーブリ	
アザラシ皮製婦人服	10 ルーブリ	
アザラシ革製履物	3 ルーブリ	
無地の草製蓑	2～3 ルーブリ	
草製の装飾蓑	1 ルーブリ（1 アルシン [=71 ㌘] 当り）	
織り上げた細めの腰帯	1 ルーブリ	
織り上げた広めの腰帯	3 ルーブリ	
蓑麻製長衣	5～12 ルーブリ（刺繍の多寡による）	
投網	1 ルーブリ（1 尋当たり）	
犬の飼料（樺太鱈の骨）	3～4 ルーブリ（1 束、約 3 プード [49.14 * ㌘]）	
乾製魚（ユーコラ）	3～4 ルーブリ（1 束、約 3 プード）	
新品の定置網	100 ルーブリ（海用中型 1 張）	

和式漁り舟（クングス）	50 ループリ（中型 1 艘）
海用中型定置網	40 ループリ（1 張）
ㇼ 粕梱包用蓆	10 コベイカ（1 枚）
魚脂沸用釜	10 ループリ
漁場で就労する漁夫の日当	25～30 コベイカ（賄い食付き） （繁忙期には加増される）
荷役夫の日当	50 コベイカ（賄い食付き）
日本製の塩	1～1.20 ループリ（1 俵）
鯿の干し白子	3 ループリ（1 俵）
干した数の子	4 ループリ（1 俵）
塩引きの樺太鯿	2 コベイカ（1 尾）
塩引き鮭	10～12 コベイカ（1 尾）
樺太鯿（未加工鮮魚）	1.50～2 コベイカ（1 尾）
鮭（未加工鮮魚）	6～8 コベイカ（1 尾）
塩蔵鯿	50～80 コベイカ（100 尾）
米（常に 2～3 等級の下等米）	7.50～8 ループリ（1 俵）
日本産煙草	20 コベイカ（1 箱）
日本製夏物長衣	1～1.50 ループリ
男物シャツ	1 ループリ
ズボン	1.50 ループリ
日本製厚手掛布団	4～5 ループリ
綿入り敷布団	2 ループリ
1 オンタリ [=小樽] の「サキ [酒]」	5～8 ループリか、それ以上
陶製壺入り「サキ [酒]」	1.50～2 ループリ（1 壺はわれらの瓶 6 本 に相当）
1 オンタリの醤油	3～4 ループリ

(チフメネスク[敷香] 近傍の) 日本人漁場で支払われた労賃

(ギリヤークラから聴取)

一月半にわたる鮭漁期の就労に対し、彼らが受領したのは以下の通り。

男	— 米 1 俵	女	— 米半俵
〃	— 粗製布地 3 サジエン[=6.40 尺]	〃	— 同 2 サージエン[=4.30 尺]
〃	— 日本産タバコ 6 箱	〃	— 同 5 箱
〃	— 色違いの木綿糸 3 束 (= 1/4 フント[=102 匁])	〃	— 縫い針 1 包
〃	— 小ぶりの白手拭 1 本 (ガチマキ [鉢巻])		
〃	— マッチ 1 箱		
〃	— 操業が終わる度に 5~10 尾の雑魚が支給され、異族人らはそれを自家消費用に乾燥する。		

(アイヌらから聴取)

男	— 米 1 俵	女	— 米半俵
〃	— 黒の粗製布地 ……………		3 サージエン
	日本製更紗地 ……………		3 サージエン
	木綿糸 ……………		3 束 (= 1/4 フント)
	縫い針 ……………		10 本
	日本製タバコ ……………		15 箱
	弾丸用鉛棒 ……………		2 本
	ガチマキ [鉢巻] (白手拭) ……		1 本
	襪 ……………		1 枚
	漁獲量に応じて網ごとに支給される魚 …		5~10 尾

貨物輸送料

ナイブチから (チフメ[ネスク]) までの駅通貨物運賃

1902～1903 年の冬場	27	ループリ
1904 年	30	ループリ
同一区間を私人が橈 1 台貸切りで走行するときの賃料		
1902～1903 年	30	ループリ
ナイブチからチフメネスクまでの舟のチャーター料		
.....	25～30	ループリ

表 8

1904 年における樺太アイヌの不具者・就労欠格者名簿

(不具者でなく、老齢のため不就労の老人はここに含まれない)

村落名	姓	性別	年齢	特記事項	注記
東 海 岸					
オチ ^ヨ ボカ	セトンコヤマ	女	62	歩行不能で、いざり歩く。言葉が話せず理解もできない。	
オブサキ	ツェボ ^タ リ	女	48	足が腐りだしてすでに 10 年。離れ小屋で暮らしている。	
アイ	ウケラ	男	15	大腿骨のカリエス。幼少時に氷塊中へ転落。松葉杖を用いて歩行する。	
セラロコ	ボウエン	女	16	体軀と顔面の全体に拡がる梅毒性化膿傷が異臭を放つ。	
マヌエ	オトウ・オ ^カ エ	男	29	4 年ほど歩行が出来ない。両脚の麻痺。	
アカラ	ラメビルシキ	男	71	50 年来の盲者。	
	ニガシコ・ト ^ブ ケマ	女	43	歩行不能ながら、仕事は座ってこなす。	
	ニグムノニマ	女	36	梅毒（イシユン・アラガ）の後遺症で身動きがとれない。	
タライカ	セム ^ル ・アイヌ	男	63	老人性痴呆。	
サカヤマ	ヤィウエンテ	男	14	大腿骨カリエスのため跛行。	
タコエ	クスリコヤ	女	19	片足が歩行不能。松葉杖をついて歩く。	
オトサン	チウオチョルケ	女	41	一時的精神錯乱。性的興奮の病的亢進。	
西 海 岸					
ボロ ^ト マリ	サコワンテマ	女	67	盲者。	
アラカイ	テンドウルブ	男	46	軽度の精神錯乱。	
	ヤビ	男	42	聾啞者ながら、頗る元気に就労中。	
マウカ	チルイ	男	19	幼少時以来の脊柱後湾。就労中。	

表 9

1904 年におけるロシア正教徒の樺太アイヌ一覧

1. カハコ (イヴァン・グリゴリエヴィチ)、28 才、シヤンツィ村 [落合] 出身。今は大陸のニコライエフスク近傍で暮らしている。
 2. ヤマスク (ニコライ)、25 才、シヤンツィ村出身。ヴラヂヴォストクへ赴いたが、舞い戻っている。
 3. ヤィウエンテ (ミハイル)、14 才、サカヤマ村 [榮濱] 出身。すでに 6 年間、代父の将校ブラソロフの許で暮らしている。カリエスを患って跛行。
 4. ビドウン (ミトロファン)、19 才、マウカ村出身。目下、サカヤマ村に在住。
 5. パウリ (パーヴェル)、36 才、トゥルマィ村 [島舞] の出身。
 6. イヴァン、11 才
 7. セミョン、9 才
 8. コンスタンチン、2 才
- } トママィ村 [宮舞] 在住のロシア人漁業者セミョノフとアイヌ妻の間に生まれた子供たち。

そのほかに、ロシア人の妻となっている 2 名のアイヌ女が、嫁ぎ先の亭主の許ですでに正教徒と見做されている。

ボイエフの妻イエヴドキヤ 26 才は、セラロコ村 [白浦] で暮らしている。

カレフスキーの妻ダリヤ 36 才は、ドゥブキ村 [榮濱] に在住する。

ベ・ピルスツキー

樺太島に於ける先住民

解題

プロニスワフ・ピウスツキは一九〇九年、「樺太島の先住民」と題する論文をロシア語⁽¹⁾とドイツ語⁽²⁾で発表した。原文は恐らくロシア語稿であり、彼自身がそれをドイツ語へ翻訳したものと推察される。両論文を突き合わせた結果、ほぼ同一の内容であることが確認された。

ピウスツキはここで、自らがサハリンで採集した先住民「トンチ」の伝承や「トンチ」にかかわる遺跡情報にもとづき、また国内外での先行研究の成果も援用して、「トンチ」はエンチウ（樺太アイヌ）、ニヴフ（ギリヤーク）、ウイльта（オロツコ）以前にサハリン島に先住した人々だったとの結論を導いている。蓋し「トンチ先住民説」の魁といえよう。ピウスツキはF・F・ブッセの「トンチ＝肅慎（しゅくしん／みしはせ）説」に与していた。

早くも一九一一年には鳥居龍藏が、ドイツ語版にもとづく邦訳を『人類學會雜誌』⁽³⁾、京華日報社の月刊誌『世界』⁽⁴⁾、豊原の月刊誌『北斗』⁽⁵⁾の三誌に同時並行で発表していた。本書には『人類學會雜誌』版を収録するが、『世界』版と『北斗』版も基本的に同一稿である。一九六八年には故和田完教授がやはりドイツ語版に拠る現代語訳を上梓している⁽⁶⁾。現代ロシア語に改編された再版は第二回ピウスツキ国際会議（ユジノ・サハリンスク）の記念刊行物として、ソ連文化基金サハリン支部が上梓した豆本（1991）に再録された⁽⁷⁾。英訳版にはイェール大学のH R A Fに収録の英文稿（1964）⁽⁸⁾と、『ピウスツキ著作集』一卷（1998）に収められたA・F・マイエヴィチ教授による英訳稿⁽⁹⁾がある。

二〇一四年十月三十一日、札幌にて

注

- (1) Брониславъ Пилсудский, "Аборигены о. Сахалина," *Живая старина*, кн. 70-71, вып. III: 3-16, СПб. (1909).
Bronisław Piłsudski, "Die Urvohner von Sachalin," *Globus* Bd 96, Hft 21: 325-330, Braunschweig (1909).
- (2) B. Piłsudski 述, 鳥居龍藏譯「樺太島に於ける先住民」(上)『人類學會雜誌』二十七卷貳號 83~89^{ページ} (中)同卷參號 163~167^{ページ} (下)同卷四號 226~232^{ページ}, 東京人類學會 (1911)。
- (3) Piłsudski 述, 鳥居龍藏譯「樺太島に於ける先住民」(上)『世界』八十四號 33~37^{ページ}, (下)八十五號 36~43^{ページ}, 東京、京華日報社 (1911)。
- (4) Piłsudski 述, 鳥居龍藏譯「樺太島に於ける先住民」(上)『北斗』二卷六月號 28~36^{ページ}, (中)同卷七月號 42~48^{ページ}, (下)同卷八月號 37~41^{ページ}, 豊原、北斗社 (1911)。
- (5) Piłsudski 述, 和田完訳「樺太の原住民」『北アジア民族學論集』5集 23~34^{ページ}, 東京・金沢、北アジア民族學研究会 (1968)。改訂稿「サハリンの原住民」が、和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』(179~208^{ページ}所収, 第一書房, 1999)に再録されている。
- (6) Бронислав Пилсудский, "Аборигены о. Сахалина," в: Б. Пилсудский, *Аборигены Сахалина*, стр. 75-108, Южно-Сахалинск: Сахалинское отделение Советского фонда культуры (1991).
- (7) B. Piłsudski, translated by A. Nobora, "The Aborigines of Sakhalin," *NRAF* 10: Piłsudski AB6 A1nu AB6: 1-16 (1964).
- (8) Bronisław Piłsudski, transl. by A. F. Majewicz, "The aborigines of Sakhalin (1909)," in: Alfred F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 236-70, Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998).
- (9)

樺太島に於ける先住民

B. Pilsudski 述

鳥居龍藏 譯

左の一篇は B. Pilsudski 氏が一昨年十二月發行 Globus 雜誌第九十六卷二十七號に登載せられたる Die Urhewohner von Sachalin なるが、こは學問上尤も注意すべきものなれば、余は茲に其全文を譯することゝはなしたり、氏は曾て本邦に來られしことありて、余は其際東京西ヶ原貝塚に案内せり。

(上)

稀薄な樺太島の住民は、オロッケン (Oroken) ギラーケン (Gilaiken) アイヌ (Ainu) の三種族から成つて居るが、孰も露國人や日本人が初めて此島に上陸した頃には、最う夙から住んで居つたのである。曾てこの島を巡回したロパチン (Lopachin) ポラコフ (Polakov) など云ふ最初の露國探險隊は、たゞ石器を製造する事を知つて居りながら、然も土器製造にも通じて居た一滅亡種族の明瞭なる痕跡を發見した。そしてアイヌの説に據ると、此の傳説的な種族はトンチ (Tontschi) と稱するのである。

さて土小舎 (Lehmhütten) の殘趾や、其附近で發見された、斧、箭、槍の頭のやうな打壞れた石器や、土器の破片や、粘土製の完全な器具や、貝殻や、各種の魚、哺乳動物の骨片等は、猶ほ充分なる學術的、考古學的研究及び鑑定を要するのである。

樺太島の先住民の起源は一の未解決の問題であるから、余は茲にアイヌ間に存して居る傳説と、余が親しく彼等の口から聞き取つた傳説とを引證したいと思ふ。

ギラーケンもオロッケンも此の島の富に引きつけられて茲へやつて來たのだが、彼等の話によると、彼等が來たのは、アイヌよりも尚ほ最も後の事で、アイヌは其當時該島に於ける唯一の住民であつたさうだ。溪谷の中や、山の斜面等に確かに人手で掘られたと見える溝が夥しく目に附くが、彼等は其れを其所に住んで居つた多毛のアイヌの工事であるとして居る。ギラーケンは又此の穴を *Kuhi rukku* 即ち「アイヌの穴」とか、*Kuhi mroľtať tulkus* 即ち「古代アイヌ小舎の溝」などと呼んで居た。して大抵のギラーケンは此堅穴を彼等の先祖の住家の殘跡だと考へて居るらしい。オロッケンも亦此堅穴を *Kuczi goropci nanda* 即ち「アイヌの古い家」と稱へて居る。しかし余がトンチなる知識に關しては只ニーシエン灣「北東海岸のヌイ灣」地方のギラーケンから聞いた許である、之は多分此の灣の南部にはギラーケンやアイヌが移住して居るから、接近して居る種族が彼の口碑を引き受けたのであらう。して此の附近の或ギラーケンが余に次のやうな傳説を話してくれた、即ちトンチは中央に山湖を抱いて居る山に住で居た、彼等は非常に婦人の缺乏に苦しんで居たので、海岸に住つて居るアイヌの女を盗み出した、スルト其が原因と成つて、兩種族の間に大戦争が始まり、遂にトンチ族は哀れや全滅して仕舞つたのであると。

各地で發見された土器の缺片に關して、ギラーケンは二種に云て居る、即ち多數の者は之はアイヌのだとして居る。又一方の者は、之はズット昔にギラーケンの祖先が未だ日本や滿洲の鐵器を知らなかつた頃、自から粘土で造つたのであらうと主張して居るが、此方が眞らしく思はれる、そして石斧や其他の石器は落雷の際に天から降つて來たんだと信じて居る。

千九百〇五年、余がアムール河岸のニコラエブスクに到着した時、大陸に住んで居るギラーケンが自分等の仲間では此石器を *Ljy-tuch* 即ち「雷光の斧」と呼んで居ると確言した。又アムール河流域の者共は掘り出される土器の缺片を支那の

器具の遺物だとして居る。一體土溝は此地方でも稀有では無いから、之に關しては彼等は何等報ず可きものを知らないか、さも無くば此 *tukus* を彼等祖先の小舎の殘趾としか思つては居らぬ、して彼等の祖先なるものは、其の時代には現今滿洲に残つて居るやうな、そんな大きな住家では無く、土小舎に甘んじて住んで居つたらしく思はれる。此堅穴に關して、余はニコラエヴスク附近に住つて居る或頭腦のあるギラーケンの口から一の特徴ある話を聞いたから、文句通りに翻譯して引證して見やう。

『大昔、此のアムールに露西亞人などゝ云ふ鬼が顯はれて、人民を殺して仕舞いました。彼等は大きな舟や、三本櫓の荷船でやつて來たので、淺瀬を渡る事が出来なかつた、ソコでギラーケンは水の淺い地方に逃げ出して行つて、其所に土小舎を造つて、冬からかけて暫く辛抱してやがて又再び大アムールの岸に舞ひ戻つて來た、そして皆彼の移住民を *kins* (鬼) と呼んで居つた』と。其れと同時に余はニコラエヴスクで偶然三人のギラーケンに落合つたので、又此トーチの事を尋ねて見たが、何んでも *Tu* (ギラーケンの樺太島に對する呼稱) には *Tozin* とやら云ふツングーセンやオロツケンに似た一族が住んで居ると云ふ事を耳にした事があると答へた。トーチンと云ふ語はオローケン語にも似通ふて居るらしいが、此の種族が何處からやつて來たかと云ふ事は未だ知れて居ない。そして余も生憎二度此地方を訪はなかつたから、此の風説を充分に説明する事も、又他のギラーケンから此の所謂トーチンなるものに關する其以上充分な報告を受取る事も出来なかつたのである。

一體アイヌには *z* といふ子音は全く缺けて居る、他の關係ある言葉に現はれて來る其子音にはいつも *c* を代用して居る、さればギラーケン語の *yzyn* はアイヌ語では *ocion* と發音され、露語の *zima* [じま] と發音される。して子音 *n* は言語に激しく交つて居る。

豊かに發見さるゝ堅穴や小舎の遺跡に關するアイヌの報告は餘り多様にも渡らず、矛盾も少ない方だ、彼等は石器や、土器の缺片を、嘗て此の島に住つて居たトンチのものだと爲て居る、實際又アイヌは自分等の古い穴や、土小舎とトンチの其れとを明かに區別をして居る。即ち後者(トンチ)の堅穴は前者(アイヌ)の堅穴よりは深いが狭い。タラヤ海「ロシア語版では「タライカ(多来加)湖」から程遠からぬ砂丘の上には數基米に渡つて堅穴があるが、アイヌは之をトンチの住家だとして居る、余は此堅穴の二三を測量して見しに、深さが一米四分一、乃至、一米二分一、方形の入口の深さが四米四分一、乃至、五米といふ成績を得た。然るにアイヌの穴になると、深さは約一米を上る事は無いが、截面はトンチの其れより著しく大きいのである。

トンチの堅穴とアイヌの小舎の殘趾との一つの相違は、後者には其後面に於て種々と大きさの違つた圓錐形の一個の穴が設けられて居ると云ふ點である。此の穴は所謂 *toi simpu* 即ち「土井」で、此所から土屋根の製造に要する土を取り出す。土人が同一の小舎に滞在する時期が長ければ、長い程其屋根は餘計に壞れる、かくなれば其修理の爲めに土は愈々多量に土井から掘り出される。従つて穴は益々深くなるといふ譯である。土井によると深さが二米、そして周圍は最も廣い所が十七米半にも及ぶ事がある、尤も此土井なるものは、祖先から由來したのと云ふてアイヌが見せて呉れた凡ての小舎にあると云ふのでは無い。之に依て考て見ると、冬籠りの小舎で、誰か家族の一人が死にても爲た場合には、早速そうして永久に其所を立ち退いたといふ事が説明される、若しこれが小舎が造られてから間もなく、例へば一年目位に起つたとすれば、廣大な堅穴にも一の土井の跡をも認められない譯となるのである、小舎建築の際、屋背の修理に要する、土は、小舎の下から掘り出されるから充分である。尤も大抵のトンチの堅穴の側にも之と同じやうな圓錐形の口が眼につくけれど、其の起源は全く別のものだ。數世紀前にはアイヌは此のトンチ小舎を利用して、一種特別な鷲獵に使つて居つた。

即ち此穴の中には一個の餌——其は大抵死犬の生肉であつた——を置き、さて上部の穴と側面の口とを除くの外は、穴の全部を全然藪で覆ふて仕舞ふ。其格恰は丁度天幕でも見るやうだ。而して、第一の口はおびき寄せられた驚の係蹄わづに入
る入口となり、第二の口は、人が隠れて居る傍の天幕との交通用に供せらるゝのである。此人の爲めには、出来上つて居
る小舎と一列に第二の堅穴が掘られてあつて、能く注意して粘土と草とで覆ふてある、一體、此の肉食鳥の尾羽は箭羽と
して非常に珍重されたものであるから、樺太では以前驚獵は随分熱心に行はれたさうだ、従つて此の驚獵、殊に獲物を待
伏する爲めに使用された土窪に關しては随分と種々な話が傳はつて居る。

アイヌはトンチの居る近所を嫌惡は爲なかつたが、彼等の古い堅穴には決して自分の土小舎を造らなかつた、一體アイ
ヌはトンチを異人種視して居たから、彼等の殘趾を尊敬する責任があるとは思つて居なかつたが、自分等同志の遺蹟に對
しては左様では無かつたのである。アイヌの家庭では家族の死屍を埋葬しないで、小舎の中に殘して置いて直ぐ其所を引
越して仕舞といふ風が随分あつた、而して死人を墓地に葬つた場合でさへも、死人のあつた家を見棄てゝ仕舞ふのである、
彼等はこんな小舎の近くに滞在する事を馬鹿に恐がつて居る。能くトンチの堅穴の周圍にアイヌの住家殘趾が見當るのは、
斯くの如き理由からである。

余はトンチに關した質問をすると、屢々好い加減な答をされた事もある、嫌々に話された事もある。「單純といふよりも
寧ろ詐かされたと思つた事もある。其所で余は色々工夫をこらして質問した末、漸くアイヌの老人等の口を開かせると、
彼等は話し出した。即ち、祖先からトンチの事を聞いた事があるが、もう全く忘れて仕舞つたとか、トンチは大變アイヌ
に似て居つたが、最早何所かへ失跡して、今は誰とて其行方を知る由も無いとか、トンチは石斧を使つて、土小舎に住ん
で居たが、アイヌを怖つて何處へか逃げて行つて仕舞つたとか、トンチは能く土小舎から出て來て、アイヌを眺めて居た

が、アイヌが、漸々近寄つて來て彼等の隱家を吟味して見ると、こはそも如何に、彼等の姿はかき消す様に成つて仕舞つたなど——といふのである。スルト倒々二三人のアイヌが簡單に、然も確固と、トンチなるものは全く無いもので、此の近所には只アイヌのみが住んで居たのであると言ふた。

千九百〇四年の四月、余がアイヌと起居を共にしてから二年目の事、もう大分アイヌとは心安く交際する様になつた時、之も親友の一人で、私が能く世話をしてやつたタラヤ「前出のように「タライカ」生れの青年が、トンチに關してアイヌが守つて居る秘密の真相を余に打ち明けて呉れた。即ち、樺太にはアイヌが來ない前から正しく人間が生息して居たのだが、萬一自分等は移住民であつて、先住民では無い事を露國人に感附かれるが最後、土地は盗み取られ、尚ほ此の尊い島をも追ひ出されるといふ憂目を見るやうに成りはしまいかと思つて、斯くは戰々怖々として事實を秘密にしたり、否定したりして居たのである。そんな譯だから、アイヌの老人輩は彼等の先驅者に關する一切の詳細を頑固に否認したり、又其同種族全般に向つて、アイヌは此の地の先住民では無くて、嘗て北海道（蝦夷）から樺太に移住したのであるといふ事を一切口止めしたり爲たのである。此詳細は、東海岸の凡ての土人——ギラーケンもオローケンも入れて——から相當の尊敬を拂はれて居るナエロ村の一老アイヌから之を確かにする事が出來た。彼は以前は故意に余を欺いたと白状した、然し後に成つて余がアイヌに對して好意を持つて居る事が解つたので、もう決して土人を悲境に陥らす様な事は毛頭無いと合點が行つたから、それで真相を話せた譯なのである。

余は何時頃からこんな禁制がアイヌ間に起つたかといふ事に關しては何等詳細なる報告を得なしたが、自分には其は明白に解つて居る。即ち、余は初めて露國人が此島に侵入した其時からであると言はう。カピテン、ネヴェルスキー (Kapitan Newelski) と其幕僚は、日本人は餘り古くから此島に住んで居たのでは無いから、樺太に對しては何等の權力をも有しな

いといふ事を極力證明しやうとした。即ちもう夙うから此島には「露國臣民」即ちオローケンが住んで居たからと云ふのである。所が此オローケンを露國人は間違つて *Tungusen* と稱し、露國のウドスク地方から移住したものだと思つて居る。

『樺太の領域を統治せんとする露國の動かす可からざる權利を確定し』又其實際引き起された住民吸收の時に表はれた、ある恰かも小兒の様な人種學的の傳説(一)の表示を爲すに至つた此の政治上の目的は、確かに土着住民の心を寒からしめたものである、而して彼等は之無きも既に見知らぬ異人種の出現の爲めに大に刺戟されて居つたのである。尚ほ最も奥に進み入つて居つた日本人でさへも之の爲めに腦マこませられた、まだ根據を堅めない中に此の地から彼等は今は、之までの心配して避けて居た地方、即ち樺太のズツト北の方を指して迅速に移住したので。一八五四年から一八七五年に至る間、樺太の南部が目露兩國主權の許にあたつた時代は、アイヌ間に不信の念を起さしめ、又狡猾な外交術を表はした時である、而して終に露人が此の島の主人公となり、日本人は折角花が咲きかゝつた開拓地を見捨てなければならぬ様になつたので、子供の様な土人の心には、自分等も亦やがて其の存在を脅かされて、此父祖の地を後にするやうな事に成りは爲まいかと觀念が堅く根ざすに至つた譯である。又日本人だとてもアイヌを、新政府の過度な政策を以つて、思ひの儘に苦しませるのを看過する事は出来ぬ、されば彼の八百人のアイヌが日本人と手を携へて此島を去つたのは、假令彼等が黄色な隣人の留意や親切を別段喜んだと云ふ譯では無いにしろ、何等不思議な現象でもないのである。

(一) ネヴェルスキー氏著 *Podwigi ruskich morskich oficerov*. (露國海軍士官の事業) 一八七七年。ペテルブルグ發行、三〇四及三〇五頁を見よ、此書はアイヌの熊祭及び其土小舎の記事を掲げて居るが、兩者共オローケンの物である事を書き添へてある。然し彼等は只ツンドラ地方に住し、特に馴鹿飼養を職業として居た。其中には又 *Uksa-orok-ai-nu* の報告をも引用して居るが、之は露國のツングレーゼンとアイヌより由來し、各所の村々に純粹なるアイヌと共に點々住んで居る、此報告は未だ何人も確言したものは無く、シユレンク氏 (*Schrenk*) の如きは眞向から誤謬であると書いて居る。余自身の研究と觀察とに依れば、是等凡てのものはネヴェルスキー氏にせよ、他の人々にせよ、皆其職務上樺太の海岸を巡回した際に發見されたのであると信するのである「ロシア語版で

は、この註解が割愛されている——編者注。

(中)

前に述べた彼のトンチに關する禁制の秘密を説明してくれたシスラトカ (Sisratoka) [日本名花守信吉、白瀬蘆の南極探検に参加した] と云ふアイヌの友は、又次の様な事を話してくれた。即ち數年前ナエロ村でアイヌが、此の地方に來りし一人の米國の旅行家 (二) に虚偽の報告をした、又トンチの事を尋ねたが、其際通譯の勞を取つた彼シスラトカは其に關して真相を傳へるのを老人連から禁じられたのであると。

(一) 此の米國人と云ふのは多分、米國の委託を受けて旅行したビー、ラウフェル氏 (Beroldj Laufer) の事であらう

兎に角余は首尾よくトンチ、並びに其變種に關する數個の傳説を書き取る事が出來たのであるが、何づれも等しく驚く可きもので、其の内容は次の如くである。

アイヌが樺太に到着した時、彼等は其所に土小舎に住ひ、土で器物を造る事を知つて居た一種族を發見した。そして此種族は自からトンチ (Tontchi) と稱して彼等の體格は大きいと云へぬが、さりとて小柄の方でも無く髪と眼は黒く、大體に於ては外容はアイヌと大差無かつた。女は入墨をして居らなかつた。彼等は獸皮か、滿洲布で造つた短かい衣服を着て、海豹の皮で縫ひ合せた靴を穿いて居つた。そうして犬も馴鹿も飼養する事なく漁獵には網で無しに釣竿^{おな}を使つて居つた、彼等は獸を殺さうとは爲なかつたので、黑貂獵の方法もアイヌとは異つて係蹄^{おな}で捕へる事にして居つた。彼等は又現今のギルヤーケンが使用して居るものに類似した小船に打ち乗つて滿洲に出掛け、其所から Para Pous と呼ぶ白布等や種々の貨物を携へて歸つて來た、アイヌはトンチから滿洲に行く航路を教はつたのである。けれども彼等には兎角盜賊の

性癖があつて、殊更アイヌの娘に垂涎して能く盗み出して來たものだ、アイヌの女が暴行を加へられたり、殺されたりした事も一二度では無かつた、だからアイヌも屢々トンチと戰つた。近所に住んで居るアイヌとトンチは時々問ひつ問はれつして居たが、其場所にも後者は常に小刀を準備し、前者も丁度膝の上に至る様に小刀を帶に押し挟んで、兩方とも注意おさ／＼怠りなかつたのである。そうして此の不斷の敵視と戰爭とは遂にトンチをして此地を見捨てしむるに至つた。即ち來た時と同じ様に、小舟に打ち乗つて永久に此島と袂を別つたのである、北部の住民は、トンチが落ちて行つた先は東の方で、沖に浮び出でた場所は『苦痛の岬 Kap des Leidens』〔北知床岬〕であると信じて居る。實際此の岬の附近にも彼等の住家の。¹²⁰趾が澤山發見されるのである。

トンチの失踪に關しては、南方アイヌは確固とは報告する事は出來ぬ、山へ行つたか、其とも何所か海岸へ上陸したか誰も確かに知らない、只一日忽然として消え失せたと云ふ許である。彼等の數は現今此島に於けるアイヌの數よりも多かつたらしい、假令へば口碑に依るとツナイツチャ (Tunajscha) には百二十人〔ロシア語版ではここに "Ivanъ, roubъ" 即ち、アイヌ語の數詞「百二十」が括弧入りで記されているから、後続の傍線を付した箇所「イワンホック (Iwanhoc) や」は削除されたい〕のトンチが居つて、「更にイワンホック (Iwanhoc) やアイルボ (Ajrupo) には猶ほ多く、約百六十人許も住んで居たと云ふ。掘り返へされた堅穴が澤山あるが爲めに、トンチは又 Strukurn vende kamui 即ち『地面荒しの種族 das die Erdoberfläche verderbende Volk』と呼ばれて居る。

或アイヌが余に確言して云ふには、大海豹を獵する爲めにトンチは今米國人と共に海豹島に居ると云ふ事を同じ目的で矢張り此の島にやつて來たアイヌが目撃したと。聞く所に依ると該島及び其附近に於ける獵權を享有して居る〔露米〕會社に、何時も獵には白人と共にアリユーテン (Aïüuten) をも使用して居ると云ふ事だから、アリユーテンの外容を見て、口

碑に存して居るトンチの描寫を思ひ起さしむるであらう。

余は二度までもトンチは此島の最初の住民では無かつたらしいと云ふ傳説を聞かされた。即ち彼等の前に此島には *raha koro ajnu* と稱する羽の生へて居る人間が居たと云ふのである。之に就てナエロ村の一人人は曰く、其頃は此島も暖かであつて、不思議な此の生物は家も造らなければ、衣服も着てゐなかつた、其に折々は雪も降つたのが、概して非常に温和であつた爲め、此の種族は雪などにはビクともせず、僅に木陰で雨露を凌いで居た。彼等は自分の羽で追ひかけて種々の野獸を獵して居たが一度見込まれると彼等は既に逃がれることは無かつたのである。かうして餘り多く海陸の獸を殺して仕舞つたので、神様も終に彼等を罪する事に決定し、羽を全く取り上げて仕舞つた。此時からして狩獵は非常に困難に成つて來たが、其の代り獸は大變安全になつて、御蔭で今日まで存在する事が出來たのであると。余の考では此の口碑はアイヌが嘗て熱帶地方に住んで居たと云ふ事を略、明確に證明して居るのだと思ふ。

此の羽の生へた人類に關しては猶ほ次の様な話もある『白鳥の一群が彼等の頭の上を、北國指して飛び去つたが、やがて又南の國へ歸つて來て、*Ko-ko-ko!* と優しく鳴いた。スルト一人が鳥を羨ましがつて、自分も一所に連れて行つてくれまいかと頼み込んだ。彼等も亦羽を持つて居るが、いつも或場所の上に座つて居なければ成らなかつたので、使はずに居た爲め羽は役に立たなくなつて仕舞つたのである。やがて白鳥は彼を背に乗せ遙に飛び去つた、其時からと云ふものは、白鳥が群をなして飛び過ぎ行く春と秋とは、いつも飛び行く人の重いコー、コー、コーと叫ぶ聲が聞える』と。

樺太アイヌはコロポク、ウン、ク (*Koropok-un-ku*) と言つて、いつも六人づゝ廣いルヴェキナ (*Ruwe kina*) 即ち蒨 (*Petasites japonica*) の一枚の葉の下に住んで居る種族の事を話をして居るが、アイヌは皆一様に此の小人は北海道には住んで居たが、樺太には居なかつたと主張して居る。

北海道アイヌからも余は二度トンチに就ての話を聞いた事がある。或時、室蘭から程遠からぬシラオイ村の土人に、樺太で澤山見た様な煙管の頭が此所にも在るかと聞いて見た。スルト『其はトンヂン、カムイ、コロベ、Tondzin kamui korope 即ちトンチの使った物であらうが、北海道には發見されない』と答へた。樺太でもアイヌが此の石の煙管の頭(Suma kisiri)を説明して、これはトンチが造つたもので、トンチから傳はつて、そうしてアイヌが使つて居る唯一の物であると云ふた。又或時ピラトリ開拓地の最年者で、數多の旅行家と懇意にして居る、ペンリと云ふものが、トンチに關して次のやうに話してくれた。『トンチは海の彼方、Sianta 〔山丹〕の國に住んで居る種族であつて、北海道には住んだ事はないが、アイヌは彼等の造つた種々の物を樺太から宗谷へ持つて來た事がある。一七十才で自分はアイヌと日本人とで組織された冒險隊に加はつて、樺太指して漁獵に出かけて、ルレ村の種族の年長者の一人と刀を交換した。即ち十圓もする日本刀一振を與へて、トンチの刀を受取つたのだが、後になつて他のアイヌに譲つて仕舞つた。要するに今や Tondzin の刀は北海道には殆んど無いのである』と。此の物語から余は此所に云ふ刀は滿洲から輸入されたもので、そうして其トンヂンと命名されて居る所以は、初めて滿洲の物品を此地へ携へて來たのはトンチであると云ふ事を説明して居るものであると確定する事が出來た。

(下)

次に記するものは、トンチの住家の遺趾ある、余の知れる樺太の各地方である。

A、樺太西海岸地方

(一) Siranushi 村の南部

(De Preradowicz [正つては De Preradowicz] 著『南部樺太に於ける人種志略 Ethnographische Skizze von Süd-Sachalin 十三頁』)

(二) シラヌシ村より約九基米離れたる地。

漁場主 Demby「正しくは Dembig」の報告

(三) 大漁場より上手の Tei 河畔。

此處から勞働者は余に二個の石斧を持つて來てくれた。

(四) 眞岡 (Mauka) の稍や北なる Poro Tomari 村の附近。

H. Simonow の報告。

(五) 眞岡より程遠からぬ Olo Tomari 海岸の境。

此處で石鑿が発見された。

(六) 漁業場よりも稍や上の眞岡の海岸。

大形の四角の土塚 (Grosse, viereckige Erdaufwürfe) が築いてあつた。漁場主デムビーの報告

(七) Kusunai

土の塚がある

(八) Dui 河谷、及び Aleksandrowsk の谷。

此の兩所を Polakow は其樺太研究に關する報告に記載して居る。

(九) Wichtu 及び Pomr の兩村間の淺き海岸。

L. Sternberg 氏著『一八九七年に於ける樺太年報 (Kalender von Sachalin für das Jahr.)』一七七頁にあり。

B、アニワ灣地方

(一) Susui 河口。

Polakow 氏著『樺太研究に關する報告 Berichte über Forschungen auf Sachalin』一九頁にあり。

(二) Tschipisani 村及び海の地方。

當地の木材鋸斷場主 Laks 氏は數多の石器 (Steinerne Geräte) を採集して、當時樺太を巡廻中なりし博物學者 P. J. Schmidt 氏に全部譲り渡した。

(三) Korsakowsk 附近。

此所にて石鏃が発見された。『樺太博物館目録』にある、『一八九七年樺太年報』一七六頁を見よ。

C、東海岸地方

- (一) (二) *Ajrupo* 及び *Tunajtschi*
アイヌの報告
- (三) (四) *Dubki* 及び *Seraroko* 村附近。
セラコロ邊の堅穴の側で完全な一個の土器が発見されて、樺太博物館に寄贈された。余も此地で數日掛つて發掘して見たが、數個の缺片の外何物も發見しなかつたが、其等は皆ベテルブルクの學士會院博物館に寄贈した。
- (五) 白鳥海 (*Schwansees*) より遠からぬ *Najbutschi* の下、三基米の地。
De Preradowicz 著書一〇頁。
- (六) *Mogunkotan* 村地方。
Lopatn.
- (七) *Siruturu* 村附近。
- (八) *Nituj* 河岸。
河口から上手數基米の地。
- (九) *Kotankes* 河岸。
河口から約七基米上手の方。
- (一〇) 同 *コタン* ケス村の南部。
海岸を去る約五基米の廣き一帯の地。
- (一一) *Tomarikes* 村附近。
アイヌ報告
- (一二) *Poronaj* の一支流黒川 (*Schwarzen Flusses*) アイヌ語地名 *Utnej*
其河岸に於て、數多の石器や土器が発見された。これは「前管区長官ペールイと」商人 *Lorionow* の報告せしもの。
- (一三) *Tarajka* 村と同名の海岸地方。
Lopatn. Polakow 報告、余が発見した缺片は *Najero* 村の一アイヌに挖けて置いた。
- (一四) 苦痛の岬 (*Kaps des Leidens*) アイヌ地名 *Siretoko*。
- (一五) 苦痛の岬の北部。

アイヌが *Karek* と稱する、オホツクの海岸。此の兩方はアイヌの報告に依る。

(一六) *Niischen* 灣岸 *Natro* 村。

(一七) *Tschajwo* 村地方。

(一六) 及び (一七) はギラーケンの指名に依る。

D、Tymi 河谷地方

(一) *Rykowsk* と *Palewo* 村との間の路。

(二) 此處で大形の石鐮の頭が鋤き上げられたが、村の農夫 *Schernukschn* の妻は天から落ちて来て、幸福を授けて下さるんだと云て大切に藏つて居る。同リーコヴスクから北の方。

同地五基米乃至六基米離れた所で、*Derhnskole* に向ふ道路工事に従事して居た労働者の一人が石鑿と石斧とを發見した、兩品とも發掘されたもので、發見者は之は小刀研ぎに格恰であると云て藏つて置いたが、間もなく失ふて仕舞つた。此品が發見された林中の牧場では年々種蒔があるので、掘り返す事は不可能であつたが、其の表面では數多の使つた事のある石切を發見した。

(三) *Slawo* 村の附近。

露國の開墾地からギラーケンの同名の地に通ふ道條で、土人が一の石斧を發見して、之を含有地の監督なる *E. K. Bezais* に手渡した。

(四) 露西亞村 *Ado-Tym* 地方の一丘上。

ギラーケンの報告。

余は此所に、樺太には嘗てトンチと云ふ不知の種族が正しく生存して居たと云ふ事と、此の種族はアイヌとは決して混同せらる可きもので無いと云ふ事との證明として、次の事を認めるのである。

アイヌは嘗て日本諸島全部に居住して居たが、やがて愈々強盛に、又多數に越して來た日本人の爲めに北方、就中樺太に遂ひ捲かれたと云ふ事は、爭ふ可からざる事實である。とは云ふものの、アイヌが北方に向つて移轉した際に、未だ嘗て人類の棲息して居ない地方に越したとは餘り受取り難い事である、況んやアイヌが誰れからも苦しめられないのに、同時に自分の考から物もあらうに、彼の氣候のかけ離れた熱い、肥沃な日本から、暗い此の樺太島へ居を据えたなどは猶

更ら合點の成り兼ねる事である。其反對に、アイヌは古くから住んで居た北海道から樺太へ向けて移つたと云ふ彼等の堅い主張があるにも係らず、多くの事情から考へて見ると、彼等が南方の國から此の激しい北國の樺太へ移轉したのは決して遠い昔の出来事では無いと云ふ事が證明されるのである。アイヌ語は丁度日本語のやうに、母音に富み、發音は冴えて明瞭である、そうして調和的な響を有して居る、是は特徴ある點で、凡て外部の印象に對して非常に感じ易いのみでなく、其感情も活發に發表するを努めて居る南邦人の言語を發揮して居るのだ。次にアイヌが南部から由來すると云ふも一つの證據は其土民服である。あの胸と首の開いた長い袍と、廣い短かい袖とは彼等の祖先には、樺太の霜や寒い風が知られて居なかつたを證して居る。之に關してギラーケンに余に一の口碑を話してくれた。即ち彼等が初めてアイヌと接した時、彼等の衣服に股引の無いのを非常に驚ろいたが、此衣服はやがてギラーケンを模倣した毛の多いアイヌにも採用されたと。

北海道アイヌが全く知らなかつた櫛乗りも、亦樺太アイヌを通じてギラーケンから傳はつたものである。是は櫛の形が全然同一で、犬の列べ附け方が同様であるので能く解かる。又其他廣い、犬皮製の上衣等の一切の冬服も皆ギラーケンの採用したのである。「ロシア語版には傍線個所が欠如する」。又かういふ事も有り勝の事である、即ちアイヌの文明は最初は石器時代であつた故、或時代に現今の居住地である北方に進んだので、そして彼等が鐵器を知るに至つてから初めて石器を棄てたといふので、是は全然否認する事は出来ぬ。それから又一方に於ては、樺太に於て斯く數多發掘される竪穴の遺趾や、石器や、土器の缺片を悉くアイヌの物として仕舞ふ事は之又甚だ困難な事である。之を解決するには先づ第一に何時から、又如何なる理由でアイヌが石器を放棄して土器を用ふるに至つたかと云ふ事を知らねばならぬ。シュレンク氏は其良著に斯う云ふ假定を載せて居る、即ちギラーケンは餘り遠くない昔に彼等より尚ほ開化した隣邦種族から學んだ土器製造を、清朝政府の敵視的感化からして再び之を放棄するに至つたのであると。然し彼は又此の工事——之に關しては彼の間宮林

藏も話した筈であるが——は樺太に於けるトンチの堅穴に發見さるゝ彼の土器の缺片とは何等共通の點も無いと主張して居る。此の學識ある研究者は、又是等の缺片はアムール河畔の各地方に發掘さるゝものと同じく、現今に於ては最早何等人種學上（エトノロギッセン）の關係も無い様な太古より起因して居るのだと云て居る。

何時もトンチと犬猿の間柄にあつたアイヌが彼等よりは決して手工も、土器製造も學ばなかつたと云ふ事は容易に理解される。

所が千島アイヌは其の先驅から土器の製法と用法とを教はる事が出来たのであるから、石器時代に於ける千島アイヌと該島の不知の住民との關係は前のは全然違つて居るものと云ふ事が出来る。是は日本の青年研究家、鳥居氏も其著『北千島アイヌ』に述べて居る。然し吾人は一體何時頃アイヌが北海道から千島及び樺太に移つたのかは明瞭には解らぬ。たゞ是等移住者が互に離れて仕舞つて、^{マコ}最早彼等の仲間が如何なつたか一向便りが無いので全然忘却して仕舞つたのであると云ふ事は解るのである。尚ほ後になつてから彼等は漸く日本人及び露國人から、自分等同種族の居住地は、日本人の西に、露國人の東に定められて居たと云ふ事を承知するに至つた次第である。こんな譯であるから、千島土人の知れ渡つて居る土器製造を基礎として、是等の術が又北海道及び樺太にも存じて居たと決定するのは不可能の業である。そして何故に他の一般のアイヌには、一の口碑も残らない迄に、土器製造が全然忘却されて仕舞つたのに、獨り千島アイヌの間には近頃まで是が保存されたかを説明するのは難いであらう。

日本で發見された石器時代の遺物と北海道の其れとを比較して見ると。北海道の石器時代は日本よりもズット後れて居る事が解る。此の結果として東京帝國大學の坪井^{正五郎}教授は、其の石器遺物の主人公だと推定して居るコロポックグル（Koropok-guru）は南方から北方へ追ひやられたのであると主張して居る。恐らくは是等の遺物は、トンチの遺物研究を

能く違つて居る日本の考古學者には、其の子孫は現今のエスキモーであると云ふ坪井氏のコロボク、グル族は北海道から樺太に向け、樺太から更に又北方へ移轉したと云ふ假説に對する有力な材料であらう。

トンチの堅穴、器物、缺片等と云ふ石器の遺物と、北海道に於ける其等に類似の遺物とを比較して見ると、北海道の石器創造者はトンチと何等の關係も無い事や、コロボク、グルは決して樺太に渡らなかつたのでは無いと云ふ事が解るばかりでなく、樺太に於ける石器時代の住民はアムール地方のものと同一であると云ふ眞らしい推定を下す事が出来るのである。樺太の古代住民とアムール地方の住民とが同一だと云ふ事に關しては尚ほ斯う云ふ事情が存して居る、其れはPolakow が樺太に於て石器時代から起原して居る土器の缺片と、現今本島にはもう無いが大陸には尚ほ棲息して居る野猪の骨を發見した事である、故に若し大陸の動物界と此島の其との間に何等の境界線も存して居ないとしたらば、今も非常に類似して居る此の地方には同じ人種も容易に棲息し得ると云ふ實際に確定的の主張を爲し得るのである。

此の推定は他の露國人、假令ばアムール地方の識者である Busse の如きも其著^(三)の『レフ、ダウビヒエ及びウラヒエの谷に於ける古代遺跡 *Anike Überreste in den Tälern Lefu, Daubiche und Uliche*』の論說中に明言して居る、彼が自から

樺太のプリモルスク及びボラコフに於て爲したる發掘の成績「ロシア語版では「F・F・ブツセ」がレフ河畔の堅穴住居で自ら実見したもので、ナダロフがホリ河畔で見たものを、サハリンの堅穴住居に關するボリヤコフやロバーチンの記述と比較した結果」は、彼をして終に樺太最初の住民は肅慎(Susŋin)系統の一部で、ツングース人種である挹婁(Ileu)と同族に屬するものであると云ふ結論に到達せしめたのである。此の滿洲及びウスリ地方の最初の住民は始めて支那の歴史家に依て書かれた、「ロシア語版では「について、ヤキンフ掌院の著書に記載された幾つかの漢籍情報を用いつつブツセは自説を開陳した。」其の説に依ると、此の挹婁族は山や森に、別けても小丘に好んで住家を構へて居た。用ゐた武器は箭と弓とで、矢の根は石製で毒が附けてあつた。彼等は狩獵と漁業とを

以て生活とし、非常に勇敢であつたので、近隣諸族は水陸からの彼等の襲撃に悩んで爲たと云ふ。

(三) アムール地方研究會報告 (Berichte der Gesellschaft für Forschungen in der Amurgegend) 第一卷、一八八「年」、ウラジホストツク發行。

余の知人である一人の日本人が、日本の研究家岡本柳之助氏の『北海道史と日露の外交的關係』「正確な書名は『日魯交渉北海道史稿』(1898)」と云ふ書から次の條を譯してくれた。曰く

『肅愼(又は Skucin 或は Hikusin と云ふ)は商賣上の取引で北海道の海岸を巡回して居た。彼等はタタレイの東部に住し、何等定まつた家も無く、そうして日本人と交易する爲めに屢々蝦夷(北海道)へやつて來た。彼等の風俗はアイヌとはまるで別物であつた』と。

此肅愼は日本最古の記録の一である『宇治拾遺物語』にも書かれて居る。

多賀城の古碑を見ると(仙臺市地方、鹽釜港の附近)肅愼族は陸奥國(日本の北部及び全蝦夷の古名)の西北、宮城縣(仙臺及び其附近の古名)から三千里の所に住んで居たと云ふ事が讀まる(四)。

(四) 岡本柳之助の著述に見える関連記載は以下の通り。「肅愼一ニ靺鞨ト云フ、宇治拾遺物語ニ曰、肅愼ハ即チまかちニシテ、まかちハ即チ渤海ナリト、邊要分界圖考ニ曰ク、肅愼ハみしはセト訓ムヘシ、[一]ノ多賀城ノ碑ニ曰ク、肅愼ハ去ニ陸奥宮城郡治ニ三千里、在ニ多賀城西北ト、其地大抵蝦夷地ト境域ヲ接ス、即チ現時ノ魯領沿海州、及満州ノ一部ニシテ、蝦夷地ト一輩能ク航スルヲ得ルヲ以テ、昔時其往來ノ頻繁ナリシコト知ルヘキノミ」(『日魯交渉北海道史稿』上篇二十三六、東洋社(印刷) 1898)——編者注。

數多の教育ある日本人は、余に向つて日本の古代書類には、アイヌが石器を用ひたなどゝは少しも書いて無いと確言した。アイヌ間にもこんな口碑は傳はつては居らぬ。然し東亞細亞に於ては石器時代は餘程おそく起つたもので、例令へば支那側から言つて見ても、ウスリー地方の大部分では石器時代は第十一世紀に起つたものである。

樺太とアムール地方と日本諸島とに於て發掘さるゝ石器の遺物と、東亞細亞に住する諸民族との比較研究が充分に成し遂げられて、多くの假定が實證され、従つて他の説が否認さるゝに至らない間は、余は樺太のトンチは肅慎族に屬する住民であつたと云ふ上述のブツセの意見に一致するのである。

樺太アイヌのシャーマニズム

「訳者」まえがき

この論文は、ブロニスラフ・ピルスツキ Bronislaw Pilsudski (1868～1918) が千九百九年、「グローブス Globus」誌上に掲載した《Der Schamanismus bei den Ainu-Stämmen von Sachalin》の翻譯である。原著者ピルスツキに関しては、《Materials for the study of the Ainu language and folklore》(Cracow, 1927 [正しくは1912]) の著者として、本邦で広く知られており、今更、改めて取り上げるまでもあるまい。彼自身の数奇な生涯は、この「アイヌの言語及び説話研究資料」の中に附記されている「自伝」が詳細に語っている。又、彼に関する解説は服部健教授の手になる「ギリヤーク」(札幌、1956) の中でも行なわれており、これらの著作を参照願いたいと思う。

さて、この論文で取り扱われている「樺太アイヌのシャーマニズム」という問題が、我国では、現在に至るまで、あまり顧られなかったと断言しても差しつかえあるまい。古くより、彼の地樺太で調査を行った我国の研究家達の中には、樺太アイヌの「トウス tusu」(巫術) が、北海道アイヌの「トウス」と異つていることに触れ、樺太アイヌのそれが、北部で隣接する異民族との交流から、シャーマニズムの影響を蒙つたのだと述べている人々も少なくない。しかし、アイヌのシャーマニズムについて、更に詳に、例えば、そのセアンスの手続きやシャーマンの服飾、祭具等に関して綿密な調査報告を行つたり、又、彼等のシャーマニズム的世界観にまで論及している様な総合的な研究は皆無に等しい。

こうした状態のまゝ、既に、樺太アイヌの「トウス」を直接観察する術もなくなつてしまつた事は、非常に残念なことである。私自身、戦前樺太を引揚げて来たアイヌの人々の中に、シャーマンをもとめたが、シャーマン様の憑依状態に入りうる者がほんの少数居たとは言え、彼等旧来のシャーマニズムを詳述してくれる様なインフォーマントには遂にぶつからなかつた。

かゝることは、唯、アイヌのシャーマニズムの問題に留らず、彼等から新たな民族資料を得ようとする者の等しく遭遇する事実ではあろう。

しかし、だからと言つて、このアイヌのシャーマニズムという問題を、何人も等閑にふしているわけではあるまい。この様な意味でピルスツキの本論文は、アイヌのシャーマニズムの問題を解決に近づける手段として、大いに役立つものと思う。筆者は、この論文が、今迄、我国で比較的取り上げられたことの少ないものであつた事を知つては居るが、それが決して論文の価値の低きが故でないと信じて敢て拙訳を試みた次第である。

本論文が、我々にとつて、貴重な価値があるという理由の一つは、ピルスツキ自身が、樺太に政治犯として流されていた折、身近に観察した諸事実を、詳細に記述している点であらう。かゝる体験を、最早持ちえない現状では、替難い資料価値を有するものであると言える。

唯、彼が、理論的な展開をあまり重視しなかつたためか、彼の用いているシャーマニズムという概念は、あまりはつきりしたものでない。又、彼が、簡単に、アイヌのシャーマニズムが、隣接異民族からの影響であるとの立場を取つて居る様だが、それは良いとしても、その理由を示す、何らの陳述もなされていないのは遺憾である。

自体、樺太アイヌに留らず、アイヌという民族全般に、シャーマニズムが存在していたか否か、又、存在していたとすれば、それが非常に古い時代から彼等の内に培われて来たものか、他民族から受け入れたものであるか等という問題は、一概に言えるものではない。これは、アイヌの宗教の主構造が祖先崇拜であるという如き問題についても言えることであつて、単に、アイヌの宗教問題に関るばかりでなく、アイヌ学（かゝる名称が許されるなら）の全般的成果の裏附けがあつて始めて解決しうる事ではなからうか。

最後に、アイヌのシャーマニズムという問題が難渋する理由には、シャーマニズムという言葉自体の曖昧さも含まれているに違いない。我々は、アイヌのシャーマニズムを論ずるにあたつては、ピルスツキ以上に、この言葉の概念を明確に規定しなければなるまい。そのためには、戦後出版された幾つかの優れた著作は、我々に大きな力を仮してくれる。中でも、Mircea Eliade の《Le Chamanisme》(Paris, 1951) と Hans Findeisen の《Schamanentum》(Stuttgart, 1957) の二書は、非常に参考になると思う。

以上、本論文に関わる若干の問題点に触れて見た。尚、この論文の入手にあたつて、服部健教授の手を煩わせたこと、又、訳文の校閲を狩野陽講師に願ったことを追記し、深く感謝の意を表したい。

和田 完

〔一九六一年三月〕

編者記

本訳稿はブリスワフ・ピウスツキのドイツ語版論文(“Der Schamanismus bei den Ainu-Stämmen von Sachalin”, *Globus* 95/5: 72-78, Braunschweig, 1909)を和田完氏が邦訳されたもので、北海道大学の『北方文化研究報告』十六輯(179-203頁、1961)に採録されたが、氏はその後、同稿を自編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』(47-73頁、所収、第一書房、1999)に再録している。本書では、三十八年後に更新された第2稿「サハリン・アイヌのシャーマニズム」を収録するが、本書の体裁を統一するべく、タイトルは第1稿の「樺太アイヌのシャーマニズム」を踏襲した。加えて、第1稿の「まえがき」も「解題」として転載する。

ピウスツキはドイツ語版上梓の前年にポーランド語版 (“Szamanizm u Ajnów na Sachalinie”, w: Tadeusz Pini (ed.), *Wieczory Polskie. Rocznik dla starszej młodości*, ss. 327-350, Lwów: H. Altenberg, 1908) を公刊していた。ドイツ語版はポーランド語版の抄録と見做すことができる。ピウスツキはまたアイヌ・シャーマニズムに関して「トゥス・クル」と題する新聞記事 (“Тус-куру (Из записной книжки этнографа)”, *Русские ведомости* 166: 2-3, 21 июля 1909 г.) も発表しており、樺太島原住民を対象とするシャーマニズム論 (“Szamanizm u tubylców na Sachalinie”, *Lud* 15-4: 261-274, 1909, 17-2: 117-132, 1910) も執筆していた。最後のポーランド語論文にはアルフレト・F・マイエヴィチ氏による英訳稿 (“Shamanism among the aborigines of Sakhalin”, in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 1: 391-437, 1998) がある。英語への翻訳に際しては、内容が大幅に重複するアイヌ・シャーマニズム論のポーランド語版 (1908) とドイツ語版 (1909) も参照されている。

和田完氏は二〇〇四年九月十二日に亡くなられたが、未亡人の和田芳子さんから、著作再録への御承諾を頂戴した。

二〇一七年三月十六日、札幌にて

樺太アイヌのシャーマニズム

アイヌという小民族は、十八世紀初頭以来東アジアの三つの地域、すなわち、北海道、サハリン、千島列島の一部に定着している。この民族は、非常に低い精神発達段階に留まり、生活は主に漁撈とアザラシやオットセイの捕獲によって支えられている。ただ、日本の影響が容易におよぶ地方では、畑作や家畜の飼育も行なわれていることが多い。何百年も昔には、アイヌは日本全域に分布していた勇敢で好戦的な民族であった。この民族を日本人は苦心の末北方へ押しやり、ついにその支配下に置くに至った。アイヌは、このように長い外敵との戦争を行ったばかりでなく、内紛、流行病、地震がうち続いた結果、かつては多くを数えた人口も、ほとんど十分の一にまでへってしまった。近年、彼らは二十万人にも満たないのである。この内の大部分、すなわち一万八千人以上が北海道の海岸地帯に、百人ほどが千島に、千五百人が、今ふたたび日本に帰属している南サハリンに定住している⁽¹⁾。古くからヨーロッパの旅行者が、アイヌに格別注意をはらったのは、主として彼らの外貌が他のアジア人種と著しく異なるという理由からであろう。大きな黒い水平に切れた目、形の良いかなりつき出た鼻、豊かな毛髪、男のひげや全身におよぶ体毛、がつちりとした体軀、こうした特徴はモンゴロ系、ツングース系の周辺民族と際立った対照をなしている。アイヌがこのようにアリア民族を彷彿させるような外貌を持っていることから、この民族がほとんど黄色人種にしまわれている巨大なアジア大陸の東辺に——しかも最東部はまったく黄色人種一色なのだが——いかにして移住して来たのだろうかという問題をひき起すに至ったのである。

この問題は未だ謎であり見解はまちまちである。私はここで、著名な民族学者シュレンクの見解を引き合いに出すに留めよう。彼は、アイヌがかつてアジア大陸の全域に分布していた旧アジア民族の一派で、やがて極東の辺域へと圧迫され

た末、現在の地域に残ったのだと主張している。私は本稿でかかる問題を取り上げるのではなく、単にアイヌの間に広く行われているシャーマニズムについて若干の報告を試みるものである。

アイヌはシャーマン⁽²⁾を「トウスクル *tusukuru*」と呼んでいる。彼等は、この言葉をキリスト教の司教にも当てている。アイヌにおいて、シャーマニズムの発達はサハリンに住む他の二つの民族であるオロツコとギリヤーク⁽³⁾より低い段階に留まり、また、アムール沿岸やさらに西方の他部族に比べても同様である。私は、アイヌのシャーマニズムが隣接民族との接触によって現今の形態になり、過去に支配的であつた呪術信仰を駆逐していったとの推察を立てることさえやぶさかでない。

アイヌの宗教の主構造は祖先崇拜である。死んだ父母や祖父母は、ふだんはこの世にある子孫たちを庇護している。しかし一度その寵愛の手を引こうものなら、どんな不幸がおよぶかもわからない。だからこそ、死んだ身内を敬愛し好意を示そうと努めるのである。死者と生者の間をもっとうまくとり持つ者は、老い先も短かく、いわば先祖たちが住む見えるあの世に片足を踏み入れているような老人なのである。一般に、アイヌにあつては高齢の者が非常に敬われ、部族の成員に大きな影響をおよぼしている。したがって、神に祈り犠牲を捧げるのは彼らの務めなのである。しかしながら、他民族においては、かかる長老というべき家長たちが家族シャーマンの域を越えて次第に独自の司祭階級を形成し、現に部族最高の地位に立っている場合もあるが、アイヌでは、シャーマンはこのような発展をたどつてはいない。また、アイヌのシャーマン儀式は決して独自の教義を表現するものでもなく、シャーマンの地位も他の民族におけるように世襲されるものでもない。ある人間が、シャーマンについて何も知らず、多くの場合その意志すらないのにシャーマンになつてしまふのである。シャーマンになる者は、たいてい思春期に激しい孤独感に悩むのである。誰かが家を空け、物思いに沈んで

海辺をさまようようなことが続くと、身内の者はすぐに「あれは精霊に宿所として選ばれ、精霊の道具にされてしまったのだ」と憶測するのである。こうした精霊は、普通「コシンプ *kosimpu*」と呼ばれている。家族や縁者は、彼の身に不幸がふりかかるかも知れないとの危懼を抱き一生懸命監視する。実際、不幸なことには彼が夢遊病者のようにさまよい歩き、森の中で行方不明になったり海で溺れたりする事態が起きることも少なくないのである。ある年老いたシャーマンは、私に次のような話をした。彼が若い頃、意識を失って自分がまるで鳥にでもなつて空中を飛んでいるかのように感じたことがある。その時、彼は、絶えず墜落して木っ端微塵になりはしないかと震えていた。しかし、幸にも彼は砂浜で忘我の状態から目覚めたのである。彼を探し回っていた両親は、やつこのことで膝まで水に浸かつて入江の中をこいでいる息子を見つけ出した。皆は彼の様子を見るやすぐに、彼の中で「コシンプ」が蠢いて彼の魂が将来さまよう運命にある様々な道を教えたのだと語り合つた。そして、シャーマン儀式に必要なありとあらゆる物が持ち込まれ、それが彼に手渡されると、彼は歌を歌い太鼓を叩きシャーマンの仕草で踊り始めた。これは、彼を選んだ「コシンプ」が彼の手と言わず足と言わず全身に取り憑いたためである。

また、別のシャーマンは次のような仕方で召し出しを受けたと語ってくれた。彼は三〇歳の頃、秋の山へ黒貂狩りに行った。森の中に入ると、四囲の木々は皆大きくかしいでいるように思われた。この木々の中に彼は一軒の住み家があるのを認めたのである。そこで、なおも近づいて行こうとすると、その家は消えてしまった。と、すぐにまた、わずかばかり先に立派な身なりをした二人の人間が目にとまった。だが、近づこうとすると、彼らもすぐに消えてしまった。家に帰ってからこの不思議な幻の話をする、彼の家族は再び狩に出るなと固く言い聞かせた。その後一年ばかり静かに家に腰を落ちつけていたが、突然奇妙で不思議な力に捕らえられ、シャーマンがよく出すような叫びをあげ始め、小屋を飛び出し

て海に飛び込んだ。皆は彼を海から引き上げ、彼に太鼓を渡した。こうして、それ以後彼はシャーマンになったのである。前述した二人のシャーマンはもちろん、他のシャーマン（といっても、私のサハリン滞在当時は千三百六十人のアイヌ人口中の八人に過ぎないのだが）も決して病人ではなく、他のシベリア民族のシャーマンに多数観察されるテンカン性の発作や痙攣のような明白な障害も持っていなかった。しかし、シャーマンの顔貌にはひどく神経質で隠微な影が窺えたし、自分について彼らの語る懐旧談を聞くと、幻覚にとらわれ易い性格の持ち主であることが察せられたのである。

シャーマンが単に、民衆に拡まる迷信を利用しようとするだけの卑劣な詐欺師なのか、それとも自らに超自然的な力を確信している人間なのかを確かめるのは容易ではない。しかし、シャーマンの儀式にあずかる者がどんなにプリミティブな人たちであるにせよ、もしシャーマンがありきたりの詐欺師であれば出席者の心をすっかりさらってしまうほど真に迫った憑依状態に陥ることは不可能であろう。したがって、シャーマンは単なる詐欺師というより、むしろ超自然的な力の信奉者と認めなければならぬまい。アイヌたちは、誰一人シャーマンがインチキだと思っていない。しかし、シャーマンの能力に対しては種々の評価が下されている。シャーマンには、ほとんど全能というべき一種特別の力「ヌプル *nupuru*」が認められていることが多いが、中には「アハチャン *axcian*」、すなわち不器用で無力な奴とみなされているシャーマンもいるのである。シャーマンとして入巫する可能性を持った人々は、頻繁に激しい情動興奮を示す過敏性と、発揚性と、ある種の巧みな芝居気を備えている。このような性質はしばしば遺伝するのであるが、アイヌは正しくシャーマンの力が父子相伝であると心得ている。また、際立つて呪術師や霊媒が輩出する多くの地方や集落もある。反対に、シャーマンの出ることがひどくまれか、全く出ない地方もある。例えば、サハリン南部では、常に予言者の資質を備えた人間に乏しいが、北部ではシャーマンが続出している。ただ、古い集落であるタライカは例外である。これには次のような因縁がある。こ

コトライカで昔戦争があり一人のシャーマンが殺されてしまった。彼の扶助霊がこれに激昂し、コトライカの住民は、将来にわたって誰一人いかなる精霊からも宿所として選ばれることがないという刑罰を下したのである。

シャーマンには男と女がいる。私の知っていた八人の呪術師中二人が女であった。彼女たちは、男のシャーマンほどの力はないので、そのため男のシャーマンに匹敵する信頼感を持たれていない。この女たちは、シャーマン流に叫びをあげ、太鼓を叩き、踊りを踊るものの、皆から認められずに蔑まれさえており、その術は悪魔に憑かれて行なうもので、神々に何かを願ったり未来を知ったりすることはできないのだと信じられている。しかし、アイヌの説話では往々にして女が男よりはるかに強い超自然的な力を備えていることがある。次の説話はその一例であろう。ある金持のアイヌが美しい妻を狐に誘拐されてしまった。妻を失い悲嘆にくれたこの男は、シャーマンの所へ行つて妻がどこにいるか教えてくれと懇願した。しかし、こう尋ねられても三人のシャーマンは一人として答えることができなかった。そこで、さらに三人の女シャーマンを招いたところ、その中で最年少の若い女が初めて妻と、妻を奪った狐を見つけたのである。

また、チエルペニエ湾（コトライカ湾）の東端にあるチュレニ島（海豹島）についても、この島がアイヌ女と海神の間に生まれた女の呪文の神秘的な力によつて作られたという話が伝えられている。ここにあげた二つの説話は、今日なおアイヌに明瞭にその痕跡を認めることができる母権制が、遠からぬ過去に家族や部族を支配していたということの証拠となりえるだろう。しかし、母権制が次第に崩れてゆき女の地位が低下するとともに、女は呪術師として人々の先に立ち影響を及ぼす上で、どうしても必要な潜在的な力をも失つていったのである。

シャーマンが持っている呪術をかけたたり解いたりする力は、彼が人々に大きな影響を及ぼすことを可能にし、かつまた、彼の存在価値を保証するものである。シャーマンになろうとひたすら望む者が後を絶たないのは、シャーマンがかかる力

を持ち、人々に対して支配的な関係に立てるという理由からであろう。元々呪術師の身分には、もっぱら、いわゆるニシパ・nispa という言葉が冠されていたという話である。この言葉は非常に大きな力を持った集落や部族の世襲の首長を指すものであった。しかし、呪術師が首長を兼ねる制度がやがて消滅してしまい、今ではニシパという言葉も、本来の意味とは関係なく、シャーマンであろうとなかろうと、単にある人間の身分を表わす私的な尊称となってしまった。

アイヌのシャーマンの活動領域は、他のシベリア民族のシャーマンに比べて著しく狭い。例えば、ゴルディ⁽⁴⁾において、シャーマンは埋葬式や死者慰霊の儀式をも司っている。アイヌの司祭たちが、司祭になる以前の生活様式を変えて、その神秘的な職責にのみ専心することがないのは、このような活動領域の狭さに原因がある。シャーマンたちは、アイヌの一般の成員と全く同様に、一人か、または家族と一緒に家計を切り回している。ただ、狩だけは嚴重に禁じられている。これは、いつも勝手な時にシャーマンの密儀を要求する乱暴な扶助霊の召し出しに、即座に答えられないほど遠出することは危険であると考えられているからである。

アイヌの見解によると、シャーマンの行為には、それを頼んだ者がたとえ身内の者であろうと、報酬を支払わなければならないという。こうしないと、扶助霊が容易に手を貸さないような事態になってしまう。しかし、謝礼は大した額ではなく、しかもシャーマンが自分でその額を決めるのでもなく（シャーマン自ら決めることは大変な違反行為と見做される）、依頼者が、どんな地位の者か、どんな人品を持つかによって決まるのである。すなわち、頼みに来た者が、その感謝の度合いや懷具合に応じて謝礼を置くのである。シャーマンがもつとも喜んで受け取るものは金属製品や皮革製品、例えば、斧、釣針、魚網、日本刀（シエパ・siepa）⁽⁵⁾、革紐などである。シャーマンは、病氣治療のためのセアンス（交霊会、巫儀）において、とりわけ犬を貰うことが多い。シャーマンに報酬として与えられる犬は、小屋でまだセアンスが行われている

うちに連れ込まれる。これは、精霊が犬を見て、ますます熱を帯びてくるからである。しかし、この犬は小屋で長くは飼われない。シャーマンが犬を精霊へ犠牲として捧げるため、ただちに殺してしまうからである。シャーマンが自分でもらった布施で金持ちになつたという話は、今だかつて耳にしたことがない。私が知っていた中で最も名高いシャーマンすら、当時すでに五七歳になつていたというのに、財産といえ一軒のあばら屋と若干の犬だけであつた。とにかく、彼は近隣の者よりはるかに貧しかった。最年長のシャーマンで、もう五十年以上この仕事に携わつていたコ^ホコ^ホKoko という男は、いまだに一度も自分の小屋も家庭も持つたことがなく、そのため、甥の家を点々と寄寓して回つていたのである。

アイヌのシャーマンは、ヤクトにおいて慣行となつてゐる「不幸なる者の保護者、貧者の父」たらんとする誓いを立てたりはしない。また、ブリヤートのシャーマンの習慣のように、彼らが貧乏人と金持に同時に呼ばれた時、まず貧乏人の所を訪ね、その報酬も決して申し出以上に要求しないというようなことも誓わない。しかし、同胞の苦悩を和らげようと絶えず努力しているアイヌのシャーマンの中に、高邁な心術と優れた利他的な感情を窺うことができるのである。シャーマンと語り合う時は、いつでも非常に興味をそそられる。それは、彼がしばしば、日常生活の枠をはるかに越えた空想を生き生きと語るからである。彼はまた、低い精神発達段階にあつてはほとんどお目にかかれなような深い同情を、自分に関係のない苦しみや悩みに向けることもまれではない。

シャーマンの密儀は滅多に催されない。アイヌは、未だ単なる慣習的行為として儀式を行なう段階に達していない。神々に向けられる祈りは決して上べだけのものでなく、不幸とか恐怖とかいう何らかの必然性によつて喚起されたのだ。シャーマンは少しも押しつけがましいところがなく、人が呼びに来ても多くの場合再三懇請しなければ腰を上げようとしてない。こうすることによつて、彼は自分に無条件の信頼が寄せられ、自分が絶対に必要なのだという確信を抱くことができるの

である。シャーマンと住民の関係は一樣ではない。例えば、村人の大部分はシャーマンを褒めそやし、彼の力を信じているが、一部の者は彼に疑念を抱いている。このような違いは、彼に対する個人的な共感と反感から出ている。しかし、恐らくここでも前述したシャーマンの個性が大きく左右しているのである。

ある地方の住民が皆、最も身近な所にいるシャーマンにかかるとは限らず、往々にしてひどく離れた集落のシャーマンの元へ出掛けて行くことがある。これは、自分たちと同じ所にいて、個人的に親交を結んでいるシャーマンより、遠くの方の方が、はるかに頼りになれそうで、えらそうに思えるからである。

シャーマンが目に見えない精霊と交わったり悪霊を祓ったりする力があることは、時には彼が氣にくわない者に危害を加えるため自分の呪力を利用するかもしれない危険な人物であるとの考えを抱かせる。こうしたシャーマンの復讐に対する恐れがあるからこそ人々は彼に畏敬の念をもつて、いら立たせないように心がけ、彼と口論したり不和となったりするのを努めて避けるのである。アイヌは、自分たちのシャーマンは、隣のオロツコヤ（サハリンの）ギリヤークやアムール沿岸のマングン⁽⁶⁾のシャーマンよりも、はるかに善良であると主張している。しかし、今では同族の呪術師でも、北部、すなわち、様々な隣接民族と相互に影響し合っている地方からの出身者に対しては、その悪業や執念深さを敢えて言いふらそうとする声を耳にするのである。多分、アイヌにおいても遠からず、シャーマンが悪霊と交わり、その忌まわしい力を用いて人間に危害を加える者であるとの咎を負わせることになるであろう。こうして、サハリンでもきつと、ヨーロッパ史でよく知られている魔女狩りや魔術師への迫害が記録されるに至るであろう。

現在でさえ、遠く離れた隣国の集落へでも旅立とうとするアイヌは、敵意を持った他国のシャーマンから身を守るために魔除けの呪物を携えて行くのである。最上のお守りとみなされているのは中くらいの大きさのキツツキの頭である。旅行

者は、体の調子がおかしいと思うとすぐ自分の体に小さな傷をつけ、そこからしたたる血を取ってキツツキの脳みそと混ぜ合わせる。こうしてできあがった呪物を器に入れ、これを枕元に置いて寝るのである。明け方になるまでに、この調合した呪物はたいいてい跡形もなく消え失せている。それは、敵意を抱くシャーマンの魂が、この呪物を食べ尽してしまったからである。このようにして、旅人の病氣は即座に治るのだが、後日決まってこの地方のシャーマンが死んだことを聞き知るのである。そのシャーマンは、呪術師を殺す作用のある人間の血と鳥の脳みそを混ぜて作った調剤を食べて、その毒に当たったのである。

シャーマンが重病人の所へ呼ばれると、セアンスを行なうに当たり通常犬が犠牲として捧げられる。多くのアイヌが、犬の血をシャーマンの扶助霊の好物だと考えているためである。

一九〇五年、サハリンにインフルエンザが蔓延した時、多数のアイヌがこの病に倒れた。この伝染病の発生原因をアイヌは次のように説明した。この病氣が発生する数カ月前に、アムール沿岸に住むマンダンの間で一人のシャーマンが死んだ。このシャーマンはマンダングンであつたが、以前アイヌの中で彼の職務を果たしながら一〇年以上も暮しており、そこでも大変な名声を博していた。ところが、彼は死の間際に次のような告白をした。彼の魂が、夜な夜な血に飢えて徘徊していたある日、彼はふる里で出くわした一人の男を餌食にしてしまった。だが、この殺された男の身内の者は、恨みを晴らさんものと、彼を待ち伏せて矢を射かけた⁽⁷⁾。その時彼は脇腹に傷を負い以後決して癒えることなく、ついにそれが元で死んだのである。このシャーマンの魂は、よそ者の自分を受け入れてくれ、大勢の人々と仲良く暮らしたアイヌの大集落を、いつも万全の備えで、敵意ある他のシャーマンの精霊の襲撃から守っていてくれたのである⁽⁸⁾。アイヌの考えでは、この男の死がインフルエンザの流行をもたらし、彼の死で防衛する者を失った村は惨事に悩むことになったのである。

一九〇五年の冬、インフルエンザ流行の時、海岸から小屋へ通じる小径に木の株で作った像が立てられた。この像には一振りの刀が下げられたが、これは病魔を追い払ってもらうためのものである（写真1）。すでに述べたように、シャーマンは誰しも自分を助けてくれる精霊を持っているが、同時に彼が祈りを捧げる特別の神々もいるのである。例えば、あるシャーマンは、月や火や高峰の神々に助力を乞い、その際鳥や狼が使者を務める。また、ある者は雲の神と太陽の神に祈りを捧げる時、取り次ぎとして狐を用いる。通常密儀を行なっているシャーマンは、彼の歌の中で自分に仕える動物の鳴声に似せた音色をたてて、その動物を精一杯まねるのである。この時、彼の優れた芝居の才が効果をあげるのである。なぜなら、そんな才能のお蔭で、居合わす者は皆、シャーマンがどんな動物をまねようとしているのか説明がなくても知ることができるに違いないのだ。シャーマンの頭上を飛び回っている扶助霊は、人間の目に全然見えない物を見ることが出来る。扶助霊は神々の元へ飛んで行き、相談を受けたことに対する助言や解答を携えて戻って来る。ただし、シャーマンの扶助霊たちが一人でも彼を見捨てるようなことになれば、呪術師は病気になる、超自然的な力を失い、もはやその職務を続けられなくなるのである。

シャーマンは、自分が善霊を動かす者か悪霊を動かす者か自らの口から語ることはない。しかし、周囲の者は誰でもそれをよく知っている。あるシャーマンが善霊よりむしろ悪霊に仕えることが多ければ、彼は長生きができず、その力もあまり効き目が無いのである。

シャーマンは、死後普通の墓場に埋められず、幾分離れた所に墓が設けられる。また、太鼓は墓に持ち込まれない。これは、死んだシャーマンの家族や親戚がシャーマンという仕事に必要な資格を受け継ぐとして、太鼓を墓に持ち込むのを妨げるからであろう。さらに、死んだシャーマンの精霊をより確実に我が意に従わせシャーマンの家に留めるため、彼

が埋葬される一兩日前に死者の左手に柳の枝で作った鞠をしばらく握らせておく。この鞠は後刻シャーマンの舞踏用の帽子に縫いつけられるのだが、シャーマンの精霊を引きとめ、意に従わせ、できるだけすみやかに彼の家、彼の家族の中に腰を据えさせる力がある。もちろん、精霊の宿る以上、そこが快適でなければならぬのは当然であるのだが。

シャーマンは普通死ぬ前に、死出の旅を見送る縁者たちに、彼の死後の最初の日の出か最初の月の出に墓から起き上り天に登るであろうと確言する。彼はまた、彼の太鼓の音が聞こえるかどうか良く耳を傾けてくれと頼むのである。もし万一そのようなことが事実となつてあらわれなかったとすれば、それはシャーマンが存命中に良からぬことをしたため、アイヌの考える死者の魂の住む地下の国へ、罰を課せられに追われているという兆しなのである。

アイヌの中には非常に巧みな手品師として広く名声を博しているシャーマンがいる。彼らは、ある時は恐怖に落し、ある時は驚嘆させるような業を用い、この自然民族の単純な心を巧みに捕えるのである。この手品は常に暗闇の中で行なわれる。それは、暗闇があらゆる精霊に欠くことのできない要素だからだ。シャーマンは手足を縛り太鼓を遠くに置き明りを消す。出席者は、ことごとく緊張の面持ちで座っている。やがて誰かが庭から家に近づいてくるように、どこかで低く太鼓の響くのが聞こえる。これは、すでに精霊がやって来ているという兆しなのである。それから、精霊は家の中を回り始め、居合わす人々を次々と巡るのである。この時、精霊に杖で触れられた者には魚取りのこと、狩のこと、病気のことなど、何なりと精霊に質問する権利が与えられる。足で地を踏み鳴らす音が肯定を表わし、杖が左右に振られる時は否定を意味するのである。明りが灯されるとすぐ精霊は消えてしまう。シャーマンは元の場所に縛られたまま座っている。また別の場合には、小屋の中に長い柳の皮で撚られた綱が張られ、それに小さな鈴がつけられる、前の場合と同様に、暗闇が立ち込めると部屋中に低いざわめきが聞こえ、同時に鈴が鳴り出す。シャーマンはいえ、見物人の要求通りそこに

ずっと縛られたままなのだから、すべてが精霊の仕業という他ない。このように精霊に命令を下せるほどのシャーマンであれば、自分の手にたつた二本の木片しか持っていないことをあらかじめ居合わせる者によく納得させた上で、これを擦り合わせて火を起こすことができるのである。シャーマンの術が実に非凡であつて非常に巧妙に行なわれることは、あるシャーマンが日本の商人に彼の術を見せて何百ルーブルかせしめたことからもうかがわれる。つまり、彼の術はその同胞ばかりでなく、あまり信用も期待もしていなかった日本人をすら満足させるに足るのである。しかし、このような巧みな手品師はアイヌの中にだんだんまれになつてきて、私が直接その「上演」に出席する機会にはついに恵まれなかった。私がこれまであげてきたことは、アイヌの友人の口から語られた事実に基づいて記したものである。

しかし、私は普通のシャーマンの密儀の方は度々目撃することができた。以下にその模様を書き記しておこう。

そこは、激しい波のうねりとざわめきが聞こえるオホーツク海の岸辺であつた。太陽はすでに沈みシャーマンが神々を呼び寄せる時刻に近づいていた。村の深い沈黙を破つて、にぶい太鼓の響が緩やかに、繰り返し繰り返し小屋から聞こえてきた。私はこれがシャーマンの儀式の開催に近いことを知らせる合図だと聞かされた。この儀式は、数週間来熱に浮かされている男の子が、どうしたら助かるかシャーマンが神々に問うために催されるのだという。私は急いでシャーマンの小屋へ行った。その内部は他の小屋と同様に薄暗く、多少明るい囲炉裏端ですら、やっと二、三の物が識別できるに過ぎなかった。そこには四十がらみの立派なシャーマンが静かに座っていた。彼の知的な顔は黒いひげに縁取られていた。彼は沈黙の体で、何人が入つて来ても目もくれなかった。とかくするうちに早くも小屋は一杯になり、まるで蜂の群があげるようなざわめきを立てていた。ただ、時々このざわめきを破つて子供がくすくすと明るい笑い声をあげるのが聞こえた。出席者にはいつもの活潑な様子がなく、これから始まろうとしている儀式の厳肅さに心を奪われていた。ようやく、

ひそひそとした話声が静まった頃合に、シャーマンは夢想から目覚めキセルをトントンと叩いて灰を落した。彼の合図を受けて二、三人の若者が、彼が着物を着るのを手伝うために近づいて行つた。呪術者はイラクサの繊維で作られた長衣を、膝と肘の所だけ長い削り掛けで縛りつけるのである。頭には古い黒色の帽子と言うか、むしろ紐状に撚った削り掛けでできている冠と言うべきものが被せられる。古い削り掛けの紐のうち、一本だけ白く新しい紐が混つていて冠をきっちり締めていた。なお、この奇異な頭飾りには、八ないし一〇センチの長さの御幣状に削られた木片が三本挿されている。この木片は儀式の直前にしつらえたものである。このうち二本は側面に、一本は前面につけられていて、まるで三本の角が生えているように見えた。冠を後ろから見ると、長い銀色に光った削り掛けの紐がひらひらとさがっている。この頭飾りは、実はシャーマンの扶助霊の御座所なのであり、シャーマンがこれを被った瞬間から扶助霊たちが活動を始めるのである。ここで、戸口が誰にも開けられないように固く閉ざされた。この戸が突然開かれて少しでも静寂を破るようなことがあると、シャーマンがひどいショックを受ける恐れがある。すなわち、たいていギギシと派手にきしむ小屋の戸を誰かが開けてシャーマンの密儀を妨げたため、シャーマンが突然死んでしまうような事態がすでに間々生じているのである。

シャーマンの身近に、ちょうどカトリック教会で用いる聖水を撒く払子に似たものが二つ置かれていた。アイヌはこの払子を「タクサ *takusa*」と呼んでいるが、これが教会の払子と異なっているところは、柄が短く、房の部分がずつと長く、もつと縮れた削り掛けを束ねて作っている点である。やがて太鼓がシャーマンの所へ持ち込まれた。太鼓の皮は卵形で厚みが二本の指を合わせたくらいの枠に張られている。裏側にはたくさんの紐が張られていて、これが中心にある小さな環に寄せ集めて留められている。シャーマンは左手でこの環を握って太鼓をしつかりと支え、右手に長さ三〇センチ余りの平たい棒を持つ。この棒は、最ん中がわずかに曲つていて端に犬の皮が巻かれている。シャーマンは、まず太鼓を火にあ

ぶって乾かす。次に、松の枝を一本ずつ火にくべ、これが燻り出し、あたりに樹脂の臭いが拡がっていく、この臭いは小屋中に立ち込めたが、囲炉裏のすぐそばに座っていたシャーマンの所がおそらく一番ひどく臭ったであろう。精霊はこの脂の臭いを非常に好むのだそうだが、私自身も間もなくその臭いの効能にうなずくことができたのである。低くかすかな半ば囁き半ば喘ぐような声が、シャーマンの肺腑から湧きあがってきた。彼は神経質に大きく息をし、激しい苦痛に襲われているように呻いた。と同時に、立て続けに打つ軽快な太鼓の音が鳴り出し、それが徐々に強く遅くなっていった。シャーマンがあげる声もさらに大きくなった。この声たるや人間の体から出るとは信じ難いほど様々な音色を持っている。シヤムンが吠える音、狼の咆吼、熊の唸りなどと言うまでもなく、カラスの鳴き声、があがあとという鴨の声、小鳥のさえずり、嵐にざわめく木々の音などにいたるまで彼の叫びの中に聞くことができるのである。シャーマンの扶助霊たちがそばに来たのである。彼は立ち上がって太鼓を打ち続けたまま、ふぞろいだがりズミカルで小さき足取りで囲炉裏を巡り始めた。その時、彼の歌は悲しげな長い鳴咽となり、やがてこれも消えてしまうと荘重な感情を込めた祈りを唱え始めた。ただ、時折祈りを遮って、祈りと何の関係もない声を長々とあげた。突然、威嚇するような叫びが湧きあがったかと思うと、すぐに違った音色で恐怖と不安を織り混ぜた鋭い叫びが立て続けに響きわたった。多分、シャーマンが悪霊の近づいたのを嗅ぎつけて、この叫びで追い払おうとしたのである。ついで、彼は前述した払子の一本を手にし、小屋の四隅でこれを振りかざして振った。それは見えざる魔物を追い出すためである。しばらく経ってから、呪術師は中断していた祈りを改めて唱え始めた。その中で、神々にこの哀れな病氣の子供に憐れみと助力を垂れんことと、病を癒す手段を示すようお願いした。祈りの一節ごとに時々拍子を変えながら太鼓が打たれた。すなわち、一度太鼓の中央を強く打ち、二度下端を弱く打ち、次に二度もつと弱く速めに打ち、そして、もう一度少し強めに打つか、前と同じ強さで二度ゆっくり打つのである。

時々シャーマンは、太鼓を顔の前に楯のようにして構える。彼の声はこの太鼓に当たって弱く心持よい反響音となる。裸足のシャーマンの足取りは軽ろやかで、小屋の中は静まりかえっているのに足音は全然聞こえないほどである。四五分も儀式を続けた彼は疲れ果てているらしかった。彼はひどく喘ぎながら、かすれた弱々しい声で水を求めた。彼の目はかすみ、顔には疲労と苦痛の色がありありと出ていた。ここで短い休息に入り、この間に水を入れた二枚の皿が彼に渡された。この皿の一枚には松の木釘が数本入っており、もう一枚には強い香りを放つ植物（イソツツジ）の小枝が混っていた。この植物はシャーマンの神がかりの状態を長びかせる効果がある。事実、彼がこれを飲むとたちまち元氣澆滅となり、足取りも軽く狭い小屋の中で、囲炉裏と戸口の間を駆けるように往復し始めた。彼の叫び声は次第に強く鋭くなっていた。今やこの儀式でもっとも重大な瞬間が始まるうとしている。精霊がシャーマンの口を借りて（彼自身はあずかり知らぬところなのだが）、病人をどう扱うべきか出席者に託宣を告げようとしているのである。病気の子供はもとより、集まった者は皆固唾を呑んでいた。彼らはすでにどれほど疲れていたかしのに、今やじつと耳を傾けて、火の消えた囲炉裏の周りを動き回っているシャーマンの姿から目を離さなかった。やつと、とぎれとぎれの言葉ながら神々の託宣が聞こえてきた。病気の子供の父をはじめ大勢の聴衆は二度と繰り返されない敵かな言葉を、一言も聞き洩らすまいと耳を傾けた。シャーマンは完全に意識をもどした後で何も思い出せないのだから、決して託宣を繰り返すことはできないのである。この時の神々の命令は次のように聞き取れた。

山麓に生えている白樺の木を捜し、東側から皮を剥ぎ、木部を少し切り取りなさい。この木片で「タクサ（払子）」を作り、子供の臥所の上に吊るしなさい。しかし、子供の着物には「サンザシ」の刺を縫いつけなさい。そうすれば、翌朝の日の出頃、願い事はかなっているはずです。

居合わす者はこの神々の命令を聞いて、ほっと安堵の胸をなでおろした。なぜなら、皆はもう子供が治ることを信じて疑わなかったからである。

シャーマンは、なお、しばらくの間、踊り、歌っていた。その声は、あるいは高く、あるいは低く響いていたが、やがてまったく聞こえなくなった。「シャ、シャ、シャ」と掛け声を掛けながら彼は「タクサ（払子）」に手を延し、これを手にして頭上で振りながら小屋の隅々を動き回った。まるで、こうすることによつて何か見えざる者を煙出しと窓を兼ねた天井の穴から追い出そうとしているようであった。これは、扶助霊にもう用はないから帰ってもよいぞという合図なのである。ここで、シャーマンは二本の払子の一本を小屋の隅（しき）で待ちかまえている男の子へ投げ与えた。これが受け取られると、すぐに戸が開かれ払子は庭に持ち出された。もう一本の払子は太鼓の下端にしっかりと結ばれ、たいてい次の儀式があるまでそのまま下げられている。

このようにして、このセアンスは終わったのである。シャーマンは当然のことながら、体を休めるために囲炉裏端に蹲っていた。集まった人々はしめやかにその場を立ち去り、大人も子供も等しくこの偉大な神秘に打たれていた。これは単なるお祭り騒ぎでなく、見る者に己の無為無力を感じさせずにはおかなかった。すべての者が、世界と人間を支配する強大な不可視の精霊の面前で自己の無力を意識させられ、自分の思考力では現にそこに実在するものの神秘を計り知る術もなかったのである。

しかし、アイヌの中にも懐疑論者がおり、シャーマンに対してだけでなく呪術一般にも批判的な目を向けながら、様々な現象の原因を探索しようと努めている者がいる。私は、ここで一つの実例をあげ、あらゆる民族の基本的な精神特性というものが、地上のいかなる場所でも時代を超えて共通であるということを証明しなければならない。

シャーマンに対していつも拒絶的な態度を取る、いわば「不信心」なアイヌの一人である金持ちで勢力家のアイヌが重い病で臥せていた。彼はちやうど私が逗留していた田舎町にいたので、私は彼の病床に医者を招いてやった。医者は彼に絶対安静を命じ塗擦剤も処方してくれた。私は、この患者が科学的な治療法の効き目を認めていたし、その上日本の温泉へ二度行つて、それが健康に非常に有効であることを身をもって体験していたから、医者への指示をきっちり守るだろうと思つていた。それで、翌日彼を見舞いに行つた時、彼が不在なのを知りひどく驚いてしまった。彼は、天氣が悪かつたのに隣のアイヌの集落（と言っても町から六〇キロ離れていた）へ行き、彼の「信心深い」親戚の小屋へ身を寄せていたのである。私は彼のことを問い合わせたところ、シャーマンをすぐに呼んで病人に取り憑いた悪霊を追い出してもらつたから、間もなく彼は健康を回復する見込みだとの返事であつた。患者自身の調子とは言えば、ひどく悪そうで精神的にも落ち込み弱り果てていた。彼の心は後悔に苛まれていたが、それなのに私の持つて行つた薬を断固としてつき返すのであつた。そして、シャーマンの教示に従つて作つたお守りが、きつと健康を取り戻してくれるはずだと語つたのである。

シャーマンは、おそらく人々を安心させるために、悪霊、つまり地獄に住む妖怪を病人の遙か彼方へ追い払つたと請け合ふのみでなく、まったく跡形もなく病人の体内から除いたとの証拠をあげようとするのである。このようなシャーマンの超自然的な力を具体的に証明するものとして、普通、釘、硬貨、木片、小石などのこまごました品が用いられる。シャーマンは彼の交霊の儀式を終えると、聴衆をまったく意識的に欺いてやつてゐることなのだが、これらの小物を示してそれがまさしく病人の苦痛の原因であつたのだと確言するのである。

シャーマンの意義は、その宗教的、倫理的な面にあるというより、むしろ実践的な面にあるといえる。シャーマンは、危険な病気にかかった場合に招かれるばかりでなく、流行病の際にもどうしたら悪疫の蔓延を阻止できるかを知るために

相談を受けるのである。また、猟運に見放された狩人は、どうすれば再び獲物にありつけるか神々に相談を持ちかけてもらう。アイヌではきわめてまれなことだが、窃盗事件が起きれば、シャーマンの多くは犯人を見つけることもできるのだ。さらに、遠くへ旅する前にはシャーマンの所へ行き、いつが好天に恵まれるか、強風や大波に襲われないかと彼の仲立ちによつて神々に伺うのである。自然に対する観察力を備えているシャーマンは、しばしば非常に正確に天候を予言することができ、この点では有益な助言を与えることが少なくない。私もかの地でたびたび旅行を行なったが、いつも天候に左右されていた。しかし、そんな時、シャーマンの助言がどんなに役立ったか個人的にも納得できたのである。また、あるシャーマンは嵐を鎮め、荒れ狂う波を嵐に変えることができ、逆にある者は、雨を降らせ悪天や嵐や雷雨を呼び起こす力を持つているという。

シャーマンは、近い未来のことを予言するよう頼まれると、気軽に答えてやるのである。一例をあげると、一人のシャーマンが一九〇四年に「今年は不幸なことが起こる」と予言したことがあった（事実、その年の内に、日露戦争が勃発したのであるが）。アイヌは数年前に彼等を襲った痘瘡を恐れていたから、それが再び流行しはせぬかと不安になったのである。それで、彼らはロシア当局へ種痘の強制接種を嘆願した。種痘の効力は、すでに以前から彼らにも知られていたのである。もちろん、同時にシャーマンの様々な助言に従つて身に迫つてゐる流行病を阻止しようとしたのである。例えば、各小屋の前に太い木の棒が木製の鳥を吊るして据えられた（写真2）。このタリスマン（呪符）は、不安を抱く人々を保護してくれるのだという。なお、一八九七年に痘瘡が流行した時、シャーマンに命じられて作つたタリスマンは、根のついたままの木を、根を上にして地に立てたものだ（写真3）。

ロシア政府がサハリンを植民地にしようとして送り込んだ植民者の間で、次のような噂が広まっていた。すなわち、先

住民のシャーマンたちが、かつて静かだったこの土地の住民へ悪人たちの加えたたえ間ない迫害と苦悩の報復として、この島を呪っているのだというのである。呪われた島では、災禍が頻発し、殺戮が繰り返され、生命財産が危険に曝され、かくして帝政ロシア全土から集められた種々雑多な国籍の流刑者たち相互の反目は収拾のつかぬまでに嵩じ、ついに彼らの共同生活はまったく不可能になってしまったのだ。私は、この噂を聞いた時、思わずポーランドの詩人、スウオヴァツキ⁽⁹⁾の詩譚「アンヘリ」の中で、一人のシャーマンが語る一節を思い出した。彼は、西シベリアの先住民、オスチャク⁽¹⁰⁾の受けた虐待の故に、外国の者たちへ次のような呪いを投げかけた。

太陽⁽⁹⁾はまた昇り恐ろしき日となろう

明るさも闇にまさる恐怖となり

静寂^(しじま)とて嵐より心を苛む

その日こそ汝ら互いに恐れ合はん

〔訳者注〕

- (1) この論文は一九〇九年に出版された。日露戦争後の南サハリンの日本帰属は一九〇五年である。
 (2) 〔原著注〕この言葉は、ツングース系の言葉から出ている「したがって、原語主義に倣するならば「シャーマン」「シャマニズム」と表記すべきである

——編者注。

- (3) 現在オロツコはウイルタ、ギリヤークはニヴヒが通称であるが、ピウスツキの表記に従った。

- (4) 〔原著注〕中部アムール地方の住民である（現在の通称ナナイ：訳者）。

- (5) 北海道アイヌ方言で鏢を意味する seppa（切羽）のことか。

現在ウリチと呼ばれる。いわゆる山丹人はこの民族のこと。

(7) (6) 「原著注」これは、次のようにして行われる。血に飢えたシャーマンの魂は、普通、夜中に、何らかの動物の姿になり、彼の餌食に近づく。この瞬間を逃さず、死体の傍で見張っていた死者の身内の者が、骨か木で作った矢を射かける。矢は鉄製はいけない。鉄製ならシャーマンの魂が容易に傷口から引き抜けるからだ。ちょうどこのようなことが、この場合も行なわれたのである。矢を射込まれたシャーマンの名は *Lysika* である。

(8) Majewicz 氏の指摘のように、ドイツ語版のこの部分は誤訳である。本書では Majewicz 氏の著作によって訳し直してある。cf. Alfred Majewicz, "Collected Works of Bronisław Piłsudski" vol.1, 1992 (Preprint 1), pp. 412-413. p. 727.

(10) (9) Juliusz Slowacki (1809~1849). ポーランドを代表するロマン派の詩人、劇作家。叙事詩 *Anieli* は一八三八年刊。現在ハンティが通称である。



写真1 インフルエンザの病魔を追い払うための剣を下げた木株



写真2 痘瘡に対するタリスマン（呪符）



写真3 逆さに埋められた木株（瘡痘に対するタリスマン）

樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産

解題

本邦訳稿の底本は、サンクト・ペテルブルグのロシア帝室地理協会民族学部門が発行する『ジヴァヤ・スタリナ』誌（73／74輯、一九一〇年刊）所載論文である⁽¹⁾。ピウスツキにはこのほかにも心理人類学や医人類学の範疇に属する著述が数篇あるが⁽²⁾、いずれも彼がヨーロッパに戻った一九〇六年以降の執筆である。とはいえ、叙述の「民族誌的現在」は一八九〇年代から一九〇五年まで、即ち、彼のサハリン滞在時であつて、この間に着想を得て野帳に書き留めたメモを、一気に吐き出したものと推察される。一九〇八―一九一二年はピウスツキの生涯で例外的に多作な5年であつた⁽³⁾。一九一二年には主著も上梓されている⁽⁴⁾。

当該論文は「女に関する人類学」とも称すべき異色の作品である。その内容は長々しいタイトルから容易に想像できるように、サハリンの原住民民族であるニヴフ（本文では旧称のギリヤークとして登場）、エンチウ（同じく樺太アイヌ）、ウイルタ（同じくオロツク）の出産慣行を比較考察するものであるが、その視線は双子信仰・畸形・両性具有・盲聾啞といった異常事象にまで及んでいる。記述には濃淡があつて、とりわけ微細にわたるのはニヴフとエンチウの事例である。「秘めごと」に肉薄するピウスツキの聴取能力には端倪すべからざるものがある。しかしながら彼の最大の武器は、相手の胸襟を容易に開かせるという天賦の才だったようである。そして最良の情報はいよつとすると、一九〇四年二月にわが子の出産に父親として立ち会つた際、端なくも恵まれた参与観察の所産だったかも知れない⁽⁵⁾。

アイヌの出産慣行に関しては日本人による研究もある。例えば関場不二彦（理堂）⁽⁶⁾や和田文治郎⁽⁷⁾は医師の立場から、

また和田完⁽⁸⁾は心理人類学者としてそれぞれに取り組んでこられた。彼らの研究成果は、ピウスツキ論文と相補的な関係にあるといえよう。

ピウスツキは一九一〇年の露語版に前後して、ほぼ同一内容の論文を波仏独語でも公刊している⁽⁹⁾。アルフレト・F・マイエヴィチ教授は、これら4論文を校合して英訳稿を作成し、『ピウスツキ著作集』第一巻に収録された⁽¹⁰⁾。故和田完教授は露語版のアイヌ記事の抄訳を公刊している⁽¹¹⁾。

本文中に見出される「見出し」や「小見出し」は、訳者による加筆である。

二〇一四年二月六日、札幌

注

(1) Б. Пигудский, "Роды, беременность, выкидыши, близнецы, уроды, бесплодие и плодовитость у туземцев о. Сахалина," *Живая старина*, книжки 73/74, вып. 1-2: 22-48, СПб. (1910).

(2) 例えは「シヤムニズム論」("Szamanizm u Ainów na Sachalinie," w: Tadeusz Pini (ed.), *Wieczory Polskie*, pp. 327-350, Lwów, 1908; "Der Schamanismus bei den Ainu-Stämmen von Sachalin," *Globus* 95/5: 72-78 1909; "Туэ-куру (Из записной книжки этнографа)," *Русские ведомости* 166: 2-3, 1909; "Szamanizm u turyków na Sachalinie," *Lud* 15/4: 261-274, Lwów, 1909; (dokonczenie), 17/2: 117-132, 1910) 'ハンセン病論' ("O trądzie u Głaków," w: *Księga Pamięćkowa XI Zjazdu Lekarzy i Przyrodników Polskich w Krakowie 18-22 lipca 1911*, pp. 284-286, Kraków, 1911; "Trąd wśród Głaków i Ainów," *Lud* 18/1-3: 79-91, Lwów, 1912; 邦語訳「ギリヤークとバイヌにおけるハンセン病」を本書に収録)。

(3) マイエヴィチ氏作成の最新版著作目録 (Alfred F. Majewicz, "Bibliography of Bronisław Piuski's Writings," in: Kazuhiko Sawada & Kōichi Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piuski*, vol. 2, pp. 428-433, Saitama, 2010) を参照されたい。ピウスツキは一九一四年三月、クラクフのポーランド人文・科学アカデミーに創設された民族学委員会の書記に任命されるまでは定職がなく、売文生活を余儀なくされた。彼が同一テーマの論考を複数の雑誌に発表し、また複数の言語でも公刊した背景には、稿料稼ぎという側面もあったであろう。

- (4) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow: Imperial Academy of Sciences (1912).
ピウスツキは妻のチユフサンマが一九〇四年二月十二日に長男助造を出産したとき、東海岸のアイ・コタンで同居中だったと想定され(拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書 877頁)、参与観察は十分に可能であった。またあるニヴフ女性は、ピウスツキの子供の末裔を自称しているとも伝えられる。
- (5) 關場不二彦「あいぬ醫事談」札幌：北門活版所(1896)・復刻版：『あいぬ醫事談』(河野本道選『アイヌ史資料集』第三卷 医療・衛生編)、北海道出版企画センター(1980)。
- (6) 和田文治郎「樺太アイヌの『なぐし』物語」樺太アイヌの治病術」『樺太時報』50: 90~107、豊原(1941)・和田完「アイヌのお産」和田文治郎遺稿」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5): 303~315(1987)・【再録】和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』142~161頁、第一書房(1999)。
- (7) 和田完「アイヌ語病名について——和田文治郎遺稿Ⅰ」『民族学研究』29/2: 99~112(1964)・「アイヌ語病名資料——和田文治郎遺稿Ⅱ」『民族学研究』30/1: 47~67(1964)・「B・ピウスツキの医人類学的業績——特に出産慣行に関する研究を中心にして」『国立民族学博物館研究報告』12/2: 499~511(1987)・【再録】和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』121~141頁、第一書房(1999)。
- (8) Bronisław Piłsudski, "Poród, cięża, i poronienia u tubylców wyspy Sachalinu," *Głos Lekarzy* 20, 22, 23 (1908); "część II" (1909). Lwów: "L'acouchement, la grossesse et l'abortement chez les indigènes de l'île de Sakhaline," *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris* 10: 692-699 (1909); "Schwangerschaft, Entbindung und Fehgeburt bei den Bewohnern der Insel Sachalin (Gilyaken und Ainu)," *Anthropos* 5: 556-574 (1910).
- (9) "Pregnancy, delivery, miscarriages, twins, freaks, fertility and sterility, and menstruation among the aboriginal inhabitants of the island of Sakhalin (Nivngu Ainu and Oroks)," *The Collected Works of Bronisław Piłsudski* vol. 1: 362-390. Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998). なお、米国・イェール大学の HRAF にはドイツ語版の英訳稿 (HRAF 15: Piłsudski RX2 Gilyak RX2, 1953; HRAF 8: Piłsudski Ab6 Ainu Ab6, 1964) が収録されている。
- (10) 和田完「B・ピウスツキの医人類学的業績——特に出産慣行に関する研究を中心にして」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』123~138頁、第一書房(1999)。
- (11)

樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産

現存する樺太島原住民関係文献の渉猟では、——人類学的視座からの研究がまだ不十分である——これら諸部族の性生活の領域にかかわるデータとは遭遇できなかった。私自身も時間が不足するのみならず、人間生活のこの興味深い側面では本音を聴取することが極めて難しく、また格別な知識を要する諸問題の追究に対する私の準備不足もあつて、同側面を系統立てて究明することには成功していない。私がこの領域で収集しえた知見を読者と分ち合うことを決断するに当たり、たとえ私が素人評論家の馬脚を現わし、またその所見がたとえ断片的で不完全、さらに首尾一貫を欠くものであつたとしても、どうか御寛恕いただきたい。

願わくは、原住民の間で暮らす素人が見聞しえたことを、問題により精通する研究者各位が然るべく補充し、修正されることを……。そのときは恐らく、以下に開陳する拙論が、そこで提起される諸案件の全面的な、より深い洞察力を伴う究明に役立つであろう。

本稿では分娩、流産と墮胎、妊娠、双子などの諸問題に議論を限定しておきたい。

出産（分娩・流産・墮胎）

ギリヤーク

ギリヤーク「現ニヴ」の間では「クルヴンド (klyvnynd)」と称される分娩行為が不浄なものと見做されるから、決して幕

舎内の炉端で行うことはできない。したがって、夏季のみならず冬場でも、たとえ最も厳しい酷寒の中ですら、妊婦は幕舎の近くに特設される掛け小屋に隔離される。そのために選定される場所自体が、分娩には然るべき敬意が払われないことをすでに物語る。小屋は、女たちが自ら用便を足す場所と見做している藪の中に建てられるからだ。同所は通例、かなり明確に区画されており、男らは誰一人として、その方角へ足を向けることがない。少年たちにも近くを駆け回って、覗き見ることは禁ぜられ、もし彼らが女の血痕を踏みつけてもすると、「トレムンド (toremund)」（四肢の麻痺）と称する怖い病に罹るぞと嚇すわけである。罹患者は運動能力を失って衰弱するといわれ、不治の病だから、とどのつまりは死亡する。

産婦は最初の陣痛に襲われると、「リヤン・ラフ (Lian-lah)」と称される掛け小屋（つまり産屋^{うぶや}）へ担ぎ込まれる。小屋自体も、これを機にあたふたと建てられるのだ。数本の棹を粗雑に接合し、古い樹皮や草で蔽って切妻屋根をこしらえ、床には干し草を敷き詰めるから、低い産屋は、その親族が鶴首する新生児を迎え入れるための「分娩室」というよりは、むしろ我らの大小屋といった風情である。新生児に贈られる祝福や愛情と、実際に示される厳しくて苛酷な応接との間の、我らの目には不整合と映る事態も、ギリヤークらにしてみれば何の矛盾もないわけである。赤ん坊を待ちうけるのは、我らの洗練された教育からはほど遠い厳格なスパルタ式教育であり、長じてはまた、さまざまながら決して穏やかでもまた優しくもない自然の只中での、困難で窮乏に満ちた厳しい生活ではないか。したがって小さな新参客にとっては、もっと快適な別の状況下での出会いの方がより有益ではないか、と仮想するようなギリヤークは一人もいないだろう。

妊婦は古着を身にとって産屋へ赴く。厳寒時は、より多くの衣類を持参する。普段着の着衣法と唯一異なる点は、妊

婦が下穿きを着用しないことにある。妊婦にほぼ常時付き添って介護するのは、己も数度の出産経験を有する一人の老女か中年女である。そのような「リヤン・アヴェン・シャンク (lan-aven-shank)」と称される産婆が近くにいないければ、妊婦の夫がその役を果たすが、一家の男子は、たとえ——ギリヤークの慣習によれば兄嫁に対する性的権利を有し、ある程度までは彼女の夫とも、そして常に彼女の子供らの「父」とも見做される——実弟であろうとも、夫の代役を務めることは決して許されない。

産婦は両脚を伸ばすことなく座位で分娩する。分娩座は幕舎内の板床と同じく約半アルシン（36^{センチメートル}）の高さにしつらえる。分娩時の産婦が厳しく求められるのは、右往左往せずにおとなしく端坐し、立ち上がらぬよう努めることである。産婦が難産に際して端坐を続けられず、痛みのあまり身を振りだすときは、産婆か夫が彼女の両肩を抑えつけて、禁止された身体の動きを阻止する。ギリヤークらが語るところによると、分娩中に立ち上がったたり転倒した産婦は、背骨に変形をきたすことになるという。いまだうら若いにもかかわらず、分娩時に平静や定められた姿勢を維持しえなかったため、すでにその時から不具となった気の毒な女とさえ、私は遭遇することになった。彼女の背骨は実際に湾曲し——ギリヤークはそれを「壊れた」(nashki chionkynd)と称する——、歩くことができず、彼女は出産の数年後に死亡した。

もし陣痛が長引いて産婦を苦しめるようならば、娩出を早めるべく着衣の裾で彼女の顔を扇ぐか、頭の上から口で息を吹きかける。赤ん坊は母親が自ら取り上げるが、彼女が余りにも衰弱している場合だけは、産婆がその役を務める。

ギリヤークはお産を人為的に支援する術を知らぬから、もし産婦が分娩できなければ彼女は死亡し、赤ちゃんもやはり死ぬであろう。「だが」そのようなことは極めて稀である。私は僅か1件だけ、そのような事例を耳にしたことがある。出産

に由来する死亡は「リヤン・シャレフンド (ʔan-šarexynd)」と称される。

ギリヤークは、女にとつて初産が最も難しいことを承知している。あまりに若すぎて、身体的に全く未成熟な娘の場合、初産はとりわけ重くて、難産となりがちである。

娘たちが分娩に関する講話を拝聴するときは、笑うことが禁止され、この行為には真摯な態度で臨むことが求められるが、さもないと、彼女らは将来において苦しい試練に見舞われ、尋常でない苦痛に耐えることになる。

胎盤（「エグリヤン・イニンド (eglan inind)」逐語的には「子供の食べ物」を意味する）をなるべく早急に取り出すべく、産婦の口には接骨木 (*Sambucus racemosa*) の削掛けをくわえさせる。この木の不快な苦味が産婦に嘔吐を催させて、その間には必ずや子宮内で筋肉の収縮が繰り返される。子宮からは嘔吐のあとで胎盤が容易に排出される、とギリヤークらは信じているからだ。上記の措置にもかかわらず胎盤が姿を現さぬならば、産婦は命を落とすことになるが、それは稀とはいえ、分娩中のギリヤーク女の許でも出来するという。胎盤は布切れに包んで、森の中の——とはいえ、幕舎からさほど離れていない——然るべき樹木に懸けられる。

極めて稀ながら、もし赤ん坊が胞衣えなを被かいて生まれるならば、胞衣（「エグリヤン・オク (eglan-ok)」は幸せをもたらすとされているから投棄せず、鄭重に干して、幕舎内のどこかに安置する。

出産時の新生児には、通常の男子名や女子名が与えられない。女の子が生まれたときは「ムキン・エグリヤン (mukin eglan)」(尻尾なしの赤ん坊)、男の子の場合は「モイ・イヴェンド・パネンド (moj ivend panend)」(ペニスを持って生まれた)

「犬の場合は「ムキンド (mukind)」(尻尾なし)」と呼ばれる。

と、それぞれ呼び掛ける。

指で膜囊が取り払われた新生児には、直ちに乳房を含ませる。赤ん坊の人生二日目には母親が冷水で洗うが、その身体へ容器から直に注ぐのではなくて、口に含んだ水を浴びせるから、風変わりな「洗礼盤」の水の低温も些か和らげられる。こうして、赤ん坊は丸2年間、日に2回入浴するわけだ。

もし新生児のいずれかの手足が正常でなくても、誰もそれを矯正しようとはしない。ギリヤークにはまた、赤ん坊の柔らかな頭を平らに「整形する」ような慣習もない。

産褥期の養生として、若い女には努めて外出することが奨励されるも、中年の女には却って自宅安静がよしとされる。しかるに産前には、両者とも可能な限り体を動かすことが有益と見做される。

産前産後の十日間、女は冷水を飲むではならぬ。もしお茶がなければ、渴きを覚えたときに熱湯を飲む。これらの両期間、妊産婦は紅魚「鮭鱈類」、塩漬け食品、ツンドラに生育する黒い莓 (*Empetrum nigrum*) を食することが禁ぜられる。ヴォトカは、産前にこれを飲むことは厳禁であるが、産褥期には却って有益とされている。

流産 (ルルンド (rurund)) は、ギリヤークの間で余りにも常態化しているから、彼らはそれを全く危険視せぬばかりか、病気とすら見做さない。己の一生で流産に一度も遭わなかったような女はほとんど皆無だ、と私は聞かされた。しかし、流産に見舞われつづけて、受胎から分娩に至る期間とされる太陰暦の十ヶ月の終わりまでに、月満ちて赤ん坊を産むことが一度も叶わなかったような女もまた、彼らの間では前代未聞である。ギリヤークの許で頻発する流産の原因の追及は、そのための信頼に値するデータを十分に持ち合わせぬ私には荷が勝ち過ぎるから、その任は専門家の医師らに委ねたい。ギリヤークはひよっとすると、ある種の早産体質を具えるような「人種」の一員であるのかも知れない。とはいえ、

この事象のかなり重要な原因には、間断なき重労働に服する女たちの過労や、彼女らの妊娠に対する「男らの」完璧な無関心が介在する、と私は考える。過重な家事は、妊婦になったとて些かも減じるわけではない。夫は誰一人、身籠った配偶者を庇護すべきとは考えない。だがその代わりに、細君に出来した流産を、彼は全く平然と、さまざまな愚にもつかぬ理由に帰せしめるのだ。ギリヤークは、もし子供が妊婦の顔を革紐や腰帶、あるいはまた匙・フォークや、弓・玩具・木製ナイフといった長めの木製品、そして鉤や釣針などで叩くならば、流産は起こりうると信じている。無害であるのは、立木から切り落したばかりの枝や棹による打撃だけだそう。転倒の際の強い打撃や打撲もやはり流産を誘発する。

ギリヤークの男は、細君の分娩の苦しみに際し、彼女に対して独特な配慮を示す。彼は身の回りのすべて（辮髪に結った頭髪、腰帶、履物の革紐、袖当て）を解き放つわけだ。そのとき幕舎内では結縛されたり、何かに結えられた物もやはりすべて解かねばならない。庭で斧が丸太に突き立ててあれば、夫はそれを外し、もし壁にナイフが差し込んであれば、それも抜き取る。舟も、もし木に結えてあれば解き放ち、銃からは弾丸を抜き、仕掛弓も弦を弛める。夫はまるで病人のように前をはだけて、屋内を縦横に歩き回るか何もせず板床に横臥して、細君の陣痛やその継続時間は夫の物忘れと、まさにこの方面での彼の不注意にかかっているから、いまだ解きほぐし、抜き去るべき物がないかどうか、ただひたすら思いを馳せるのだ。新生児の臍帯が乾いたあとで、この世にお目見えした嬰兒の父親は初めて仕事に取り掛かり、猟に出掛け、用足しにどこかへ赴き、友人を訪ねることができる。その時期は誕生後4〜7日が相場である。その間もまたその後も、誕生日に際して祝宴が催されることは一切ない。

細君はと言えば、この全期間にわたって産屋に籠らなければならぬ。そして、寒気が耐えがたいまでに暮り、しかも産

婦自身が幕舎の女主人である場合に限って、幕舎への帰還が慌ただしく行われる。

因みに、衰弱した女の許に起こりうる災難はさまざまな悪霊によつて引き起こされるから、最も重要な自然の秘儀の一つが執行される、みずばらしい産屋への精霊の侵入を阻止するべく、悪魔どもを退散させるに十分な虚仮威こけおどしとして戸口に斧を立てるのだ。

しかるに、この軽便で、あるギリヤークによるならば万全な措置も、常に功を奏するとは限らない。私は、ギリヤークの友人であるカンカ（Kanka）が駆けつけて、生まれたばかりの息子を助けてくれ、と懇願した日のことをよく覚えてい

る。産褥期の細君が不快きわまる狭い産屋で針仕事を余儀なくされたとき、嬰兒の頭にうっかりナイフで傷を負わせてしまったのだ。今一度は、別の友人の所で火災が出来た。褥婦が己の凍えた手足を暖めるべく起こした火が「分娩室」つまり産屋を炎上させたのである。そして、そのような事故が予期されるほどには頻発せぬとしたら、それは専ら疲労困憊して病身でありながらも、度胸や分別や労働能力を堅持する女の、類稀な意志力と忍耐の賜物である。そのとき新たに生まれる母性感情は、彼女の力量と意欲を、人類の男にとっては全く未知で不可解である水準にまで高めるわけである。

ギリヤークの女（独身の娘）たちは、羞恥心に駆られて墮胎を行うことがある。時には、流産を誘発するとされる措置に訴えることもある。恐らくは胎児を処置する術を知らぬことが、頻発する嬰兒殺しの原因であろうが、この件については後段で論じたい。

ギリヤークらは死産に対しても定見を有するが、この事象は余りにも稀であるため、そのような実例に関しては1件も

紹介してもらえなかった。

対話中に性関係やそれにまつわる諸事象を口にするに、ギリヤークらは極めて抑制的である。まさにそのゆえに、家族の新成員の到来を幼い子供らに説明するときは、気まずい話へと発展するのを回避べくこれ努めるわけである。出産が夏の場合、新生児は木の根や切り株の下から掘り出されたと語り、冬場では、産屋を建てるべく雪を掘り起こした際に、赤ん坊は雪の下で発見されたと説明するのだ。

同じ羞恥心は女に己の月経をめぐって、それを直接に指すような通常語「チヨホ (xox)」（血）で呼ぶことを差し控えさせる。女友だちとの会話や、男に対して体調不良のため性行為を拒むときの夜の対話で、女は月経を比喩的に「アンタハ・プシンド (antax pšind)」、即ち「来客中」と称するわけだ。

オロツコ

オロツコ部族「現ウィルタ」は概して、ギリヤークとあまたの習慣を共有する。出産時の慣習が指示するものに関しても全面的な類似が観察される。

例えば、オロツコの女も居住用空間ではやはり分娩できず、産婦のためには急遽、異なるタイプの掛け小屋が立てられるが、その産屋は、オロツコが日常的に使用する円錐状幕舎である。産婦はやはり座位で分娩し、その間は一切の部外者を遠ざけて、赤ん坊ですら同席を許さない。

妊婦はトナカイの頭部「の肉」を食べることが禁ぜられる。妊婦はまた屋外で眠ってはならぬ。就寝中に悪霊が体内に侵

入して、畸形児が生まれることもあるからだ。

オロッコでも流産の事例は知られているが、大半は人工流産である。通常は、恥辱感にかられた娘が己の腹を太い棒で圧迫して胎児を殺すという形で、墮胎が実行される。

アイヌ

サハリン原住民のうちで第三の部族であるアイヌでは、出産が全く異なる条件下で行われる。妊産婦を抑圧するような諸条件の完璧な欠如——これについては後述する——は、文化的民族である日本人との長期にわたるより密接な接触には帰せしめることができない。これらの交流は、アイヌもさることながら、日本や満洲の影響からやや遠ざかっているギリヤークの間にも均しく保持されているような、その他の粗暴な風習をさほど変えることがなかった。妊婦に示されるより配慮的な処遇の原因は、アイヌの間で女が享受する著しく恵まれた社会的地位に求めるべきである。女は、見知らぬ氏族へ売り飛ばされることがない。女系親族は男系親族より近い存在と見做される。概して言えば、アイヌの家族では、——たとえ解体段階にあるとはいえ、女の定めが多く、点で著しくより軽便であることを頗る強烈に印象付ける——母権制の残滓がいまだ歴然と認められる。若い女は婚出後も夫の家へ移ることを急がず、概ね当初の数年は両親の許に留まるから、初産は言わずもがな、その後も数度の出産を済ませるまでは、ほとんど常に実家で過ごすのである。私の知る中年の女は4度目の出産にもかかわらず、己の近親者たちが暮らす故郷の村へ里帰りしていた。

このこと一つをもつてしても、アイヌが妊婦に対しては、隣族のギリヤークやオロッコよりも多くの便宜を提供すると想定することはすでに可能である。そして実際にも、周囲の人たちの態度は苦悩に耐える者（即ち妊婦）への同情や、母になろうとする者への敬意で貫かれている。妊娠中の女は、より過分の配慮すら享受する。私が目撃した限りでも、家人らは

妊婦に対してより寛大でより優しく接し、その仕事の軽減に努め、彼女の怠惰や長い睡眠などにも平然と耐えていた。

妊婦が分娩のために家を出る必要はさらになく、戸口に近い炉端の位置に留まりつづける。幕舎内からは却って、すべての子供や若者が、時には中年の男らまでもが、分娩時には追い出される。第一に、アイヌは部外者の目が産婦の痛みを強めると考えており、第二には、能う限りの静寂が彼女には必須であるとも見做すからだ。床が汚れることを回避すべく、彼女を寝かせる場所には樅の小枝を敷き詰め、さらに古蔴蔴か古着を延べることもある。産婦は病人のように、何らかの古着をまとい、布製の帯——蓴麻^{いもぎ}で編んだ帯は使用しない——を軽く締め、左右いずれかの脇を下にして側臥する。もし冬場であれば冷えを慮って、両脚には履き慣れたアザラシ革製長靴も履かせる。

赤ん坊が産道から出るとき、産婦は両脚を大きく広げる。もし彼女が自力で脚を持ち上げられぬときは、衣類を丸めた大きな球塊が両膝の間に置かれる。

産婦には経験豊かな女が常に付き添って、産婦が最初の陣痛に襲われたときから、しつこく脇に坐しつづける。その役は通常、実母か気の置けない肉親の女が務める。夫の家で出産を控えた産婦の許へ、その家には負けず劣らず経験を積んで親切な——但し、さほど親密ではない——女がいるにもかかわらず、彼女の親族の女が出産に向けて馳せ参じる場面に、私は幾度か遭遇した。

産婆は分娩を早め、出産の苦しみを軽減するべく産婦に按摩を施す。産婆は一片の昆布を水に浸け、より短時間で粘液を出すべく加熱さえも試み、この粘液質の流体を両手で驚攪^きんで、初めに背中を強めに、次いでは胸から下腹部までをより柔らかなめにさすりつづける。その際に有効で好感のもてる手段とされるのは、柔らかな削掛けに包んだ干からびた蝙蝠である。この削掛けでも、やはり腹をさするのだ。それにもかかわらず、もし分娩が長引くならば、雌犬の腹から数本の

毛を引き抜いて、柳の削掛けに捲きつけ、これで再び按摩を行う。産婆役を務める女は、総じて女たちの庇護者である、逝去した女先祖らの精霊へ向けて請願を行う。その請願は通常、次のようなものである。

わしらの婆さん方よ、あんたらがいずこにお住まいだろうとも、今日はこの女の苦しみに免じて、どうか助けておくれ。

産婦の介護が可能であるのは、聡明で勇敢、己の感情が抑えられて、また産婦の呻きや叫び声にもひるまず、彼女への同情の余りに動揺せぬような女だけであるという。だが産婆は、身体的苦痛に対処するのみならず、病人を宥める能力も具えねばならぬ。もし初産婦の場合、産婆は、今やすでに子供を有し、育て、「利用し」——子供をめぐるアイヌ語独特の表現である——、子なし女らの羨望の的でもある他のすべての女たちと同様に、彼女もまた凜として陣痛に耐えるべしと説得する。

分娩に際しては夫も、また総じて一家の男衆も無関心ではいられない。産婦が呻きだすや否や、火の女神に対するささやかな供儀として、削掛けを伴う小さな棒——アイヌ語で「イナウ (inau)」と称する——を直ちに炉の一隅に立てる。「イナウ」は、同女神と親密な関係を維持する人たちを常に助けてくれるからだ。加えて、産婦の乳房の下には「チノエ・イナウ (cinoe inau)」(擦り合わせたイナウ)と称する長い柳の削掛けを擦った紐も結び付けられる。このイナウは、他のさまざま痛み——但し、激烈なものに限られるが——に際して用いることも珍しくない。万が一、その後も産婦が分娩できぬようなときは、一家で最年長の男が火の女神へ向けて再度の請願を行う。炉の中央で燃え盛る薪の脇に立てられた小ぶりのイナウがゆつくり炎上する中で、老人は小さな莫蓮に坐して、その場で即興の祈りを静かに囁く。その際にもし炎上する縮れた棒が祈禱者の方へ倒れるならば、それは祈りが聴き届けられて、産婦の痛みは程なく鎮まるといふ吉兆である。

アイヌの間では陣痛がかなり早期に始まって長く続く。産婦が、分娩の開始を告げる最初の兆候を見てから五日目に出産に至るようなとき、それは難産と見做される。

産婆は、赤ん坊を取り上げると「アシリチャチャイナンカラヘイ (asiri c'ač'a inankaraxy)」(「新しい爺さん、ようこそ」と告げる。新生児が女の子のときは、「チャチャ」の代わりに「パッコ (pakko)」(婆さん)と呼び掛ける。アイヌは、逝去した親族から子供が送られてくると信じており、地下界に住む故人らは、地上でその子孫たちが暮らすのと同じ国において、そっくり同じ状況で生活しているという。したがって、赤ん坊の臍帯をナイフで切断し、母親がその子を慌ただしくかき抱こうとするとき、赤ん坊は必ずくしゃみをするそうで、母親もまた、次のようにやさしく語りきかせるといふ。

アイノ！ ウオコ エラムボタラ・アナハチネナンコ (a ino! wok erambotara-anaxaci ne nanko)！——それ見なされ、あちらの方々もこの子を案じていなさるじやないか！

このときは、赤ん坊をこの世へ送りだした人たちがその子のことを案じて、丈夫でいるかどうか、無事に旅を終えたかどうかを気遣うのだという。

もし産婆の到着が間に合わぬか、あるいは分娩が予期せず始まるようであれば、産婦の夫が代役を務めることもできる。分娩の当日、夫は何もしないのが通例だが、それは、迷信的な掟がそう命ずるからではなくて、同情と精神の不安からそうなるのである。夫はまた、先祖が送ってくれた子の性別にも強い関心を抱くから、産婆にいずれかと訊ねると、「オホカヨ (okajjo)」、「マヘネク (maxneku)」——即ち「若」か「姫」——と彼女は簡潔に応える。ここでは、アイヌらが両性を均しく受け入れる事実を力説しておきたい。父親は息子をほしがるという声が私の耳に届くこともある。しかしながら、娘の出生に対する不満や苛立ちの声は、両親からもまた親族からもついぞ聞いたことがない。

もし産婦の夫によん所ない急用が出来した場合、もし細君と嬰兒がともに健康で、案ずべきことが何もないければ、早くも翌日には両者を残して外出することができるといふ。

だが夫は、母親と父親の双方にとって喜ばしい初日に、誕生を祝って催される酒宴には出席する。まず初めに、微塵切りの行者大蒜ぎょうじやんにんじく (*Alum victorale* ——「いわゆる「アイヌ葱」」) が火に投ぜられる。この植物は神々の好物と見做されるから、それを火に投ずることで、神々にも祝宴への参加を余儀なくさせようとの魂胆である。次いで調理されるのは、やはり稀な料理とされる行者大蒜の炊込み飯であるが、すべての隣人がこの料理を賞味すべく招かれる。彼らは参集すると、物音を立てぬよう、また病人を慮って静寂を破らぬようにも努めながら、調理された御馳走を、主人と喜びをともにしつつ、ひっそりと味わうわけである。

褥婦にもまた、能う限り良質の食物をふんだんに食べさせようと努める。提供されるのは米飯や、乾製魚のアザラシ油炒めである。液汁をあまた含む苺類や、消化の良いくない物は差し控える。例えばあるとき、私が一人の褥婦へ、普段なら大好物であるパンを勧めたところ、彼女はそれを頑として受け付けなかった。褥婦には冷たい物を一切食べさせず、あらゆる食物は温めてから提供する。

褥婦には五日間、針仕事や調理や一切の労働を禁じる。もし衰弱していれば禁止はより長期に及ぶ。順調であれば、褥婦は六日か七日目を迎えると床を離れて、日常作業に少しずつ復帰してゆく。

アイヌは子供たちに対して隠し事を全くせぬから、彼らは分娩の経過や、家族に新成員が登場する段取りについて、つぶさに承知している。

アイヌの間では産褥期にも大なる配慮が示される。例えば、按摩は産後も続けられる。痛みを止めるには、褥婦の体をさするときに用いる削掛けの中に、牝熊の干した子宮の断片か、一片の鉄鋸の刃を収めることが有効とされている。同じく昆布による按摩も実施される。アイヌの女たちは概して産後の腰痛に苦しみ、それを除去するべくさまざまな手段に訴える。褥婦の腰には、火に懸けた大鍋の中で加熱された温砂を詰めた細長い袋を宛がう。両脚の間には温めた接骨木の削掛けも安置し、これはしばしば取り換える。炉辺で暖めた幾つかの石も、やはりこれらの削掛けで包んで褥婦の腹に宛がう。接骨木の削掛けは、分娩の際に頗る功を奏した草（「カムルサ（kamurusa）」（にがよもぎ苦蓬）に代えること）もある。

もし褥婦が悪露（おろアイヌ語「ケモコ（kenoko）」の分泌に際して痛みを覚えるなら「アラコィキナ（arakoikina）」——彼らはこれを同定することができなかった——を煎じてその汁を彼女に飲ませる。「シモセネカ（simoseneka）」草（*Lamium*（偽葎）や、また「ゴネヌキナ（gonenukina）」と称する丈の高い別の草も煎じるが、これらの温かい煎じ汁では褥婦の全身を洗浄する。

産褥期には「オ・キナ（o-kina）」と称する植物の煎じ汁も飲ませるが、私はこれを同定することができなかった。

産後の4～5日間は、褥婦が重いガラス玉を幾つか身に着けることが有益とされている。

後産を加速すべく、褥婦の腹部を細長い絹地で縛り上げ、彼女は己の指を口の奥まで突っ込んで、嘔吐を催させる。それと同時に胎盤も排出されるという。

後産と膜囊は菰に包んで、通常は日没後に住居からやや離れた所まで搬出する。だが産婦が夜間に分娩した場合は、こ

れら後産の投棄は翌朝にのみ可能である。

サハリン南部に生育する一位いちいの木 (*Taxus baccata*) の小枝も、やはり衰弱した褥婦を恢復させる良剤とされる。これらの小枝は強く熱せられて、全身に限なく当てられる。

赤ん坊の臍帯は常用ナイフで切り、切断箇所には淡水産貝「ピパ (pipa)」の粉末を散布して、その後に布切れで結縛する。臍は常に癒着するようで、アイヌはヘルニアの事例を全く知らない。

アイヌは赤ちゃんの頭部を、生後五日までは日に数回、両手を駆使して整形するが、さもないと、みつともない形の頭になると考えている。やはり同じ期間中には頭部も（なかんずく頭頂部を）温かくて柔らかい木の削掛けで蔽う。アイヌらによると、頭は上部も額もまた下部も、すべて丸みを帯びなければならぬという。子供の柔らかな頭を整えつつ、その実現にこれ努めるわけだ。

初湯には清浄な温水を使う。男の子にはやや冷たい水、そして女の子のためには温かめの水を用意する。赤ちゃんには、樹皮製容器から少しずつ水を注ぎつつ右手で体を撫でる傍らで、左の手は床の上でこれを支えつつける。ギリヤークらが行なうような口からの散水は、その結果、赤ちゃんが眼病に罹る懼れがあるから禁止されている。

赤ん坊には、襁褓むすびをつけ終わると直ちに授乳する。初日の新生児に乳を与えるのは、乳の出る別の女であることが通例である。もしそのような女が近くにいないければ、母親が自らの乳房を含ませる。新産婦の乳が中々出ないときは「ト・アタ (to-at)」と称する特別な布切れを乳房に被せるか、植物の茎から分泌する白い液汁を乳房に塗布する。これは不凋花と

よく似た植物で、アイヌ語では「トペ・カラキナ (tope-kara kina)」（乳を作る草）と称する。布切れは、幾分腫れて痛みを伴う乳房を支えることを目的とする。彼女らが自ら語るところによると、アイヌの間では乳に不足するような女は極めて稀だそう。アイヌの女は、赤ちゃんが必要とする以上の乳を有するのが常であつて、母親らが己の乳の一部を床へ絞り捨てるか、同時に二人の赤ん坊に授乳する様子を私は再三見かけた。

アイヌの女らにとつて分娩時の会陰破裂は初耳だそう、それは十中八九まで起きたことがないのであろう。たとえ稀であれ、産婦が分娩を成就できぬことはある。私が承知するのは、細君が分娩時に死亡した寡夫の一例だけである。

褥婦に対しても、その健康に対する配慮は継続される。褥婦は、例えば自宅ではなく他家で出産して帰宅を急ぐときでも、産後十日までは旅立ちが許されない。そのような場合、彼女が逗留する家の主人は、出発に向けて準備した柔らかい削掛けを舟か櫓に敷き詰めて、その中に彼女を座らせる。

ギリヤークやアイヌらから出産をめづつて聴取したことを比較すると、分娩の経過それ自体もさることながら、家族生活全般においても、ギリヤークの女たちの状況は著しくより劣悪であるにもかかわらず、アイヌの分娩はギリヤークのそれよりも、より大きな困難と、より強い痛みを伴うという結論が導かれる。クラシエニンニコフは『カムチャツカ地誌』の中で、千島アイヌに関して以下のように記している^二。

彼らの女たちの分娩は、カムチャツカ人「カムチャツカ半島の住民、即ちカムチャダル」よりもはるかに難産である。ク

^二 アヌーチンのモノグラフ『東アジア人類学資料 アイヌ部族』（92頁）から抜粋された断片を転載する。

リル人「つまり千島アイヌ」が自ら語るように、彼女らはおよそ三カ月後に産褥を脱するからだ。

一九〇三年、産前にいたく苦しみ、分娩中に人事不省に陥った三十二才の女が、出産の数日後に死亡した。生きて生まれた赤ちゃんも、僅か二日しか生きなかった。この女は生後九才の長男を頭に4人の子供を残したが、末の息子は、彼女の死の一年半前に、この世に生を受けたばかりだった。

だが自然流産に関する限り、そのようなことは滅多にないと、この部族の多くの男女から聞いた。

私は、アイヌ人口の半分を占める東海岸における人口の動きを2年にわたって精査したが、流産の記録は一九〇三年が2件——妊娠8ヶ月の二十九才の女と、6〜7ヶ月の二十四才の女（両女とも1年〜1年半後には初産を成就した）——、一九〇四年は1件——太陰暦で妊娠9ヶ月目の二十九才の女——だけである。両年の同地における妊婦の総数は、十五才から五十才までの出産可能な女147〜155名に対して各25名である。

アイヌは、男親の梅毒が流産を誘発することを知らない。上記事例の1件では、あらゆるデータから推して夫が罹患していると判断されるほかならぬ梅毒こそ、細君の流産の原因と見做すべきである。彼は己の病と、ロシア人准医師によるその治療について、私に語ったからだ。

アイヌらは流産の原因をめぐって、妊婦は転んだときにひどい打撲傷を負うこともあるとか、夫の性器にできる天然の吹出物は「チゴマ (cigoma)」と称して、病気とは見做されないといった講釈を語ってくれた。もしその事実を細君とその親族へ包み隠さず告げるならば、流産は回避されるだろう。

妊婦にかかわる掟に関しては、何はともあれ、妊娠期を通してなるべくまめに歩くよう努めよという、一般命題に言及すべきである。すると胎児は大きくならず、産婦も格別な痛みに耐えることなく順調に分娩するであろう。分娩が近くなればなるほど、妊婦はより一層努めて動き回ることが有益である。もし余り長く座りつづけると、胎児は大きくなり過ぎて、産婦は娩出までの数日間苦しむことになる。

妊婦は、もし蟹の肉を食すると、生まれてくる赤ん坊の唇が蟹の缺のように裂ける（兎唇）から、蟹肉の摂食は禁止される。鳥の肉もやはり食してはならない。なぜならば、斜視に加えて、鳥のように回転する目を有する赤ん坊が生まれるからだ。私がそのような説明を聞いたのは、ナイロ「内路、現ガステロ」村のアイヌ女の許で兎唇と遭遇したときであり、またタコエ「多古恵」大谷、現ソーコル村のアイヌ兄弟の二人からは斜視の原因も聴取した。

産前の2ヶ月は妊婦が紐や糸を擦ることが禁止されるが、赤ん坊の腸も同様に捩れてしまうのを懼れるからだ。同じことは、妊婦が糸玉に糸を巻きつけても起きるであろう。

太陰暦で数えて妊娠7ヶ月が過ぎたならば、妊婦は男との頻繁な性交渉を避けるべきである。なんとならば、男の精液（「オウ^{エムベ}（owembe）」が胎児の目や口に達して——8ヶ月を迎えた胎児には脚・手・頭・眼球が完全に具わっているそうだ——、その子は弱視者となりかねないからだ。そのとき新生児の口内には余りにも多くの、やはり「オウ^{エムベ}」と称する白い粘液が滞留するから、その適時除去もままならなくなつて、胎児はまさに大量に溜まった粘液で喉を詰まらせて窒息死する。

産後の30〜40日間も、新産婦は性交渉が禁止される。

受胎が、例えば一度や二度の交接で忽ち成立するわけではなく、赤ちゃんは幾度にもわたる性交渉の結果であるという主張を、アイヌに特有の見解と認めるべきである。したがって、アイヌの女は、行きずりの男に身を任せることを己にとってさほど危険とは見做さず、より持続的な恋愛関係に陥ったときの結末を懼れる。

アイヌの生活では人工流産が別に珍しくなくて、ギリヤークよりもずっと頻繁に出来る。ギリヤークの生活が著しくより正常で、部族が自ら設定した枠の範囲で経過するのに対し、樺太アイヌたちはすでにほぼ2世紀にわたって、日本人という強力な外部要因の影響下にある。彼らは相対的に膨大な人数でアイヌ部族の生活に割り込んで、それを変貌させつつあるが、彼らを持ち込むものは、必ずしも文化的要素ばかりとは限らない。

性的欲求の充足を求める渡来者らの流入は、何よりもまず女の許に影を落とす。女と渡来者の内縁関係が雨後の筍のように叢生して、ほとんど公然と売春に携わるという、若い女らにとつてさほど珍しくもないタイプが成立している。彼女らは、いずれにせよ意識して母親になることは避けるものの、万が一にも妊娠したときは、さまざまな手段を試みる。

アイヌの女たちの間で従来から知られて最も普及している措置は、両手ないしは何らかの重量のある物体を駆使しての胎児の圧殺である。この措置は、幾世代にもわたり実践されてきたにもかかわらず、これに訴える女らにとつては依然として危険な手法であって、全員が罰を受けずに済ませられるという状況からはほど遠い。私の列席する場で老人たちが回顧したところによると、彼らがまだ若かった頃、「ホニウッカラ (xoni uŋ kara)」（腹を引っ掴む）と称される際どい作業をわ

が身に試みた女は、確かに赤ん坊は片付けたとはいえ、ほどなく自らの存在にも終止符を打つという事態がよくあったそう。私もまた、そのような完璧に衰弱して病床を離れられぬ若い女が、その後間もなく私の面前で落命するのを目撃したが、この女は数年前に人工流産を敢行して、それまでは壮健そのものだった健康を一遍に損ねてしまったのだ、とのちになって告げられた。だが私に対しては、そのようにして自宅で胎児殺しを幾度も上首尾に繰り返したような、おろし墮胎の達人たちは確かに存在したと断言する人たちもあった。

アイヌの女たちが墮胎を行う際の格別な手段と称したのは、腰の上の腹部を数ヶ月かけてきつく締めつづけることである。この方法によれば、第2、3ヶ月目には墮胎が楽に誘発されるといふ。その後は脇腹に数ヶ月間、痛みが残るそう。

この方法が不便と見做される所以は、仕事でもさることながら、専らその故にこそ墮胎にまでも訴えた情事の快楽に耽ることが、きつく締め上げられた女にとっては全くまなぬ点にもあった。

妊婦はまた子孫の出現を免れることを願って、例えば——あらゆる食料品や若干の家政用具を収める杣上の倉や倉庫に攀じ登る際に使用する小梯子のような——高所から飛び降りることもある。

もはや十分に好感のもてる手段と認めるべきは、以下のような人工中絶法である。即ち、通常は必ず上着と同じ丈のスリップのような肌着を、腰まで切除して、所期の結果が得られるまで着用しつづけるという方法である。しかるにこの中絶法は、明らかにほとんど知られておらず、恐らくは近年に導入されたものと推察される。なぜなら、それを私に教えてくれたのは、たった一人の女だけで、他の女らは初耳だと、驚きの声を上げたからである。

古いながらも、その使用については東海岸の北でも、また南でも耳にしたから、恐らくは十分な検証を経ていると思われる手段は、鉄鏝を含有する煎じ汁の摂取である。北部ではさらに何らかの草も加えるが、私のインフォーマントである男たちは、その名前を知らなかった。同地方の女たちとは、このようにデリケートな問題をめぐって、真摯な対話を交わすほどの友好関係を樹立するには至らなかった。

アイヌらの認めるところによれば、娘らは性交渉の完全な自由を謳歌していたから、人工流産は昔からかなり頻繁に行われたという。とはいえ、彼女らは恥ずかしがって、婚前に男の子と性的関係を持つことには乗り気でなかった。当時は恐らく、もつと別の多様な堕胎法が存在したかも知れない。今の女たちは——日本人らが己の故郷からその知識を携えてきた——彼らの諸手段を採用している。しかるに、私がこれについて訊ねた日本人漁夫たちからは、いかなる証言も得ることができなかった。私が遭遇した人々はひよつとすると、それについては実際に何も知らなかったかも知れぬが、現在の日本ではかなり厳しく糾弾され、処罰もされるような案件をめぐっては、私との率直な対話を避けたのかも知れない。比較的教養のある日本人からは夙に、北海道島の峡谷に豊かに自生するサフランの煎じ汁が、頗る信頼できる薬剤であることが教示されていた。

按ずるに、妊娠を予防するか、中絶するための手立てが日本人の間には少なからず普及し、そのための手法も豊富に取り揃えてあるようだ。アイヌの女たちもこれらの「シサムクスリ (sisam kusuri)」(日本の薬剤)の効能を信ずるがゆえ、今日の日本では禁止されているそれら薬剤を、彼女らが受け取るときに課された守秘義務は決して破棄されることがない。

双子・不妊・月経

出産をめぐる問題の考察に当たっては、双子の出生や、——多くの「原始的」部族とともにギリヤークやアイヌをも震撼させてやまぬ——同事象に対して抱く迷信的な恐怖にも言及することは時宜に適うであろう。

これら3部族のいずれにおいても三つ子の出生は知られておらず、それをめぐる伝承もまた皆無である。

ギリヤーク

だが双子や、——同性二子の同時誕生がむしろ通例であるから——同性双生児の出生はさほど珍しくない。私が承知するギリヤークの事例のうちで、年の頃四十〜四十五才の一組の双子とは面識があった。ギリヤークの全人口のおよそ4分の1を擁する地区で最近の十年間に誕生した同性双生児はスラヴォ村、ハジリヴォ村、ホイ「保惠」村（ポロニエ「ポロナイ」である）河畔、ソチハレ「左知、現ウスチエ」村の各一組であるが、いずれも死亡した。一九〇五年一月にはトク（Tok）という名のギリヤークの家族に女の双子が誕生したが、私の「サハリン」出立、即ち一九〇五年六月までは少なくとも存命であった。

しかし、私の記録したある古謡をめぐって、これを口述したギリヤーク女は、異性双生児に関する歌であると解説してくれた。同古謡では兄が妹「あるいは弟が姉」に恋をして、「私の心を諸手で受け止めておくれ」、即ち、彼の胸に触れるよう、さもないと死んでしまうから、と妹「ないし姉」に訴えているのである。

双子の一人は「山人」(「パリニヴフ (pal'niwux)')——貧者や弱者に対して時に優しく、また時には怖い山や森の強大な主人——から生まれたことを、ギリヤークらは信じて疑わない。したがってパリニヴフの子は、死後には親許へ送り届け

る必要がある。双子のうちのいずれが人間に起源を有するか^三を決定する術はないから、双子の双方を分け隔てなく扱う選択肢が採用される。

そこで双子はその死後に、大半のギリヤークらが己の死者に行うような火葬には、まかり間違っても付してはならぬ。さもないと、遺骸の火葬儀礼に参列した者はすべからず視力を失うことになる。双子の父母でさえも、山の精霊との縁関係は両親にも及ぶから、双子自身と同様に葬らなければならぬ。しかるに、もし双子のうちのいずれかが子供を有する場合、後者は、部族や氏族の通常成員と同様に処遇される。

たとえ生き延びた双子たちですら、よし大量の論拠をもって己の仲間と何も変わらないことの証を立てたとしても、生涯を通して疎まれ、たとえ友情を育むにせよ、また争うにせよ、彼らが秘めるとされる力は危険視されるのだ。

双子らには、各自が幼少期に自ら思い付いた名が授けられる。この名前はもはや、たとえ親族であれ、また部族の誰であらうとも決して与えられることがない。当該名は、謎を秘めた訪問者の死とともに消滅すべきものである。

幼少期に死んだ双子は、己の素姓に由来する迷信的恐怖を喚起させる。そのような山の精霊の子孫は、下界に下つても人々とは打ち解けず、また彼には人々に災難をもたらす力もあるから、慈悲を乞うべく努める必要がある。強力な山人らの一員の訪問先となった家族は、己の幕舎内か、その脇に建てた小さな小屋を「ナウ (nau)」「アイヌの「イナウ」に相当」で飾り立て、そこにはまた双子の姿を象った木偶も立てる。この木偶には、双子の両親もさることながらその子孫たちも、己

三 あるギリヤークによると、双子の一人は山から、今一人は海からそれぞれ到来したと説明された。

の食するものを頗る頻繁に供えて、これを2世代にわたって養いつづけるべきと考えている。曾孫ら「の世代」になつてようやく盛大な祭祀を行ったのちに、木偶とその小屋を遠くの山中へ搬出し、いずれの祭祀にも付きものの削掛け棒（ナウ）を立てることになるが、それ以降は「トングル エグリヤン（*tongr eglian*）」（双子）がこの氏族の許に戻ることはもはやない。

山の精霊らに慈悲を乞い、彼らを鎮静化することを意図した慣習の命ずる指示の不履行は、不履行者の許に諸精霊の怒りを招き寄せる。双子のいる家族では、はたまたその親族の家族でさえも、子供たちが発病しだして、しかもそのような「トングル エグリヤン」の復讐の兆候は、歪んだ頬骨、釣り上がった目尻、回らぬ首、そして各種の発作が通例である。これこそが、山岳からの暫時の訪問者が不満に駆られてしるかす悪戯であることは誰の目にも明らかで、そのような事例は「トングル エグリヤン シングルド（*tongr eglian singrud*）」（双子が立腹する）と称される。

双子の醸す恐怖は極めて強烈であるから、それをめぐる会話は若い女たちに聞かせることを禁じる。そうすれば、彼女らがそのような不幸に見舞われる可能性は遠ざけられたと考えるからだ。双子の母親からは、たとえ暫時の借用であれ、いわんや贈り物としては——なかんずく古物は——一切受領せぬよう、女たちは戒められるが、その際に唯一危険でないといふ見做されるのは、持主の属性が乗り移ることはありえぬとされる金属製品だけである。

人間の若干の身体的資質が物を介して伝達されるという信仰は、ギリヤークの間で脈々と生きつづけているが、因みに、不妊に対処する迷信的な闘争手段はこれに根ざすものである。子なしの女は、逆に多くの子に恵まれた女から下穿きの帯を分けてもらつて、それを常時身に着けねばならない。私のインフォーマントのギリヤークはこれについて「ある女の子

沢山はこうして、患者から健常者へと器物を介して伝染する疾病のように伝達されるのだ」と解説してくれた。

アイヌ

アイヌの双子に対する関係も、ギリヤークのものと大差ない。アイヌによると、双子のうちの一人は間違いなく悪鬼（「オヤシ（*oia*）」）から生まれたのだそうである。そのことだけでも、悪鬼の遺産から逃れようと努めた時期があったことはすでに裏付けられる。しかし、双子の一人を殺害する風習の存否をめぐって、これを容認するアイヌには遇う機会がなかった。千島アイヌらが双子の一方の命を奪うという直接の言及は、クラシエニンコフの著作中に見出される「双子のうち、一人は必ず殺害する」^四だけである。間接的証拠となりうるのは、第一に、双子のうちで首尾よく生き延びるのはただ一人だけで、こちらこそ人間から生まれた者にほかならず、死亡する方は常に悪鬼とかかわると見做すアイヌらの信念であり、第二には、悪霊に由来する赤ん坊を育てることに對するアイヌらの恐怖であり、また母親が全部族に對して負いつづける恥辱感である。この恥辱感は今も極めて強烈であるから、双子を産んだ女たちの情報入手することが唯一可能であるのは、そのような母親らとは親族関係を全く有さぬか、はたまたかかる不幸に見舞われた家族とは、若干敵対関係にあるアイヌたちからだけである。最後には、双方とも生存するような双子がその当時は一組も見出されないという状況である。とはいえ、セラロコ「白浦、現ウズモリエ」村の成人女子やアイ「相澤」村の成人男子のような、双子の片割れが生き永らえている事例はある。一九〇二年にはタライカ「東多來加、現ウスチエ」村で双子が誕生したが、いずれも数日後には死

四 アヌーチン前掲書（92頁）より引用。

亡した。

私が若干名のアイヌから聴取した——もし双子がいずれも生き残って成長するならば、幸運に恵まれて多くの獣を仕留め、分限になるという——伝承は果たして、これらの証拠を弱めることになるだろうか。だが、この伝承は近年になって日本人から借用された形跡もある。この件について訊ねたアイヌらのすべてが、その信憑性を必ずしも請け合うわけではないからだ。他の者らは、アイヌでもまた日本人でも双子ではただ年少者だけが勇敢な力持ちで、また強運にも恵まれるのに対し、年長の方は部族の通常の男と変わるところは何もないと語っていた。

アイヌもまたギリヤークと同様に、供犠によって新たな不幸の到来を回避するべくこれ努める。南では双子の母親の寝床の上に、通常の供犠に用いる削掛け棒「イナウ (inau)」を懸けるが、北「のタライカ地方」では、それに加えて至近の壁にも2体の小さな木偶を結び付ける。これらの木偶は、身の丈2ヴエルシヨーク（8・9^寸）ほどの滑らかに彫られた柳の棒で、双子の似姿であらねばならぬ。この場合の「イナウ」は「タクサ (taksa)」と称されるが、炉の灰が搬出される度に更新され、その後には神々へ向けて新たな供犠も行う。私はタライカ村のアイヌの家で、これらの呪具「セニシテ (senisite)」を見る機会があったが、再度の双子出生を防止するためのものである。しかし、すでに一度でも双子を産んだ経験のある女たちは、双子自身に劣らず「その再来を」警戒し、双子を世に送り出すという資質が己から立ち去らぬことの方を懼れるわけだ。但しアイヌの許にだけは、この問題をめぐってギリヤークのものととは正反対の見解が見出される。その際、草本類製品や衣服などの柔らかな物は、鉄・銅・銀製品やガラス玉など、硬くて、それゆえにまた長く保存されるようなすべて

の品物に比して、さほど有害ではないとされる。

一人の人から別の人へと身体的資質を移行させる能力は、アイヌらの見解にも存在する。例えば、子なしの女は、多くの子を有する女がこしらえた物品を自分用に購入して、これを着用し、使用もする。多産の女の革帯の端部を水で煮て、その煎じ汁を飲むこともやはり有益である。不妊の女がもし、娩出直後の女の後産の上に全裸で坐するならば、出産能力を獲得しようと語る伝承もある。若干名の夫らはさらに、いまだほとんど知られていないような新手段にも訴える。つまり、子なしのわが妻の枕の中に、彼女には内緒でナイフの模型である木の小太刀を忍ばせて、もし一年後にこの手法が功を奏さなければ、自分にはすでに、鶴首される子孫を家族に贈与することができるような、より若い新妻を迎える権利があると見做すわけだ。

しかるにアイヌらはまた、不妊がいずれかの配偶者の側に起因するものとも考える。すべては配偶者各自の血が「オイス (oisu)」（硬い）か、あるいは「ハプル (gapuru)」（軟らかい）かにかかっているとのこと。もし両者とも「軟らかい」場合、子供は頗る迅速に、結婚後1、2年目には誕生するのに対し、一方が硬くて、もう一方は軟らかであるときは、子供がかなり遅れ気味で、成婚後数年を経たからようやく生まれることになる。もし両者とも「硬い」血であるならば、結婚は子宝に恵まれず、もはや万事休すである。薬剤も、また上記の諸手法も全くお手上げである。シャマンに助言や指図を求めることは禁止されている。そしてシャマン自身もまた、これらの「不浄な問題」(「ピャキレオルッペ (pakire orus pe)」で神々を煩わせることには同意しないのだ。

しかしながら、不妊を遺憾と考える必要は全くない。子宝に恵まれぬ家族は、己の近親者家族から子供を養取することが恒例であるからだ。昔話では強運な勇者がしばしば、山なす障碍や難関をもとめせず美しい妻を獲得するも、「頗る強大」(「ウエンヌクル (wennukru)」であり過ぎたがゆえ、子孫を残すことがない。

ロシアの民衆のいわゆる純潔な乙女、アイヌ語では「ケイサハ、マハネク (kei sax maxneku)」(血のない女)と称される無月経の女も、やはり不^{うますめ}生女と見做される。そのような娘は嫁に行くことが厳しく禁ぜられる。性交渉が彼女に死をもたらす恐れがあるとされるからだ。私がアイヌらの許へ赴く暫く前のことであつたが、それまでずっと処女を貫いたといわれる一人の老女が死亡した。彼女はシャマンの素質を具えて、長いことシャマンを務めていた。若い時分に閉経となつた女たちもいるが、彼女らもやはり性交渉は差し控える宿命を背負わされるわけだ。対話でしばしば話題になつたある老人の細君は、彼の妻と見做されるにもかかわらず、まさにこの理由で若いときから一人寝を通してきたそうである。

女には閉経とともに、受胎能力と訣別すべき時も訪れることをアイヌたちは承知している。しかるにアイヌらは私に、女が更年期に達する平均年齢を告げることができなかった。N・V・キリロフ医師は一八九八年版『サハリンスキー・カレンダー』所収の「アイノ」と題する論文中で、その年齢を四十才としたためている。按ずるに、この数字は些か不正確であつて、1名ないし数名の人物から偶々入手された証言に立脚するものであろう。

ある多産家族の母親は年の頃五十六く五十八才で、その長男は三十四才だ、とアイヌらは私に告げたが、彼女は僅か3年前に閉経を迎えたばかりであつた。そしてそれが彼らの間では、必ずしも頗る例外的な事例ではないそうだ。

月経周期が不規則な女たちもいる。例えば一人の若い女は、私の滞在中の一九〇五年に感冒（インフルエンツァ）で死んだが、その夫が語るところによると、細君は経血の量が余りにも少なかったから、彼女を戯れに「男」と呼んでいたそうだ。その若いアイヌはこの状況を己の細君の不妊の原因と見做して、自分は子孫を持つべく、今一人の女を捜さなければならぬ、とまことに不本意そうに言いふらしていた。彼女自身はと言えば、折にふれて腹の中で何かうめ蠢くようなことはあつて、痛みを覚え、呼吸困難に苦しむこともあつたそうだ。

月経周期が太陰暦の一月ではなくて、一月半であるような女も稀ながら見出される。彼女らは「ケモ・ウトウル・トウイマ（keno-utur-tuina）」（血の間隔が長い）と称される。

アイヌの女では2〜3日が通常の月経期間であるが、4日も続いて、そのときは痛みを伴うような女もいる。

出産後は長きにわたつて無経期間が続くが、一、二度の月ものものを経て再び妊娠するというのが、最も標準的な周期である。しかるに、性交渉を抑制せぬような女らの間では、分娩後早くも5ヶ月目には、赤ちゃんに授乳中であるにもかかわらず月経が再開される。

月経中の女らは布製の蔽いを腰に巻くが、昔はアザラシの鞣革製の蔽いで臀部だけを覆っていた。座っている間は、この蔽いの上に血が滴り、着衣が汚れるのを防ぐ。日常生活で下穿きを着用せぬ女が歩きだすときは、床に血が垂れることもありうる。女たちはそのような粗相をせぬよう努めるにもかかわらず、私自身にもこれを認める機会があつた。ここにもまた女に対する態度をめぐつて、アイヌとギリヤークの間には膨大な違いが現前する。女を低級な存在とは見做さぬア

イヌたちの間では、たとえ彼女の血を見ても、あるいはそれを踏みつけたとしても、不愉快な結果は全く招来しないであろう。それどころか、女の経血を一滴でも見付けた者は、早速それを指で拭いたのち、己の胸にこすり付けねばならぬ。それは、人生で強運に恵まれ、またさまざまな願い事に際しても、人々に唯々諾々と受け入れてもらうためのすばらしい手段であるからだ。通常は念を入れて秘匿される月経帯（「オソロ（osoro）」と称される）を、もし男が見付けるならば、その小さな切れ端を主にねだって貰い受け、さまざまな場面で長期にわたる加護を約束する強力な呪具として、これを手元に保存せねばならない。長期の狩りに赴くアイヌたちには、そのような蔽いの小さな切れ端を身に着ける習慣があり、歩行中の猟師が脇腹に痛みを覚えたときは、件の切れ端を取り出して水に浸け、それで脇腹を拭うのである。

これらすべては、家族や氏族の生活において女が主役を演じていた頃の痕跡が、アイヌの間ではいまだいかに顕著であるかを如実に物語っている。

オロツコ

オロツコに関しては十分な情報を有さない。彼らが私に語ったところでは、双子が生まれることも稀にあるという。しかし、私が南サハリンでオロツコらの在住する多来加「現ネフスコエ」湖の周辺に滞在した（一九〇四年の春）には、当地のオロツコの間に生存する双子は一人もいなかった。彼らは、双子に対する恐怖など皆無だと断言したものの、彼らの証言には些かの疑念を差し挟む余地があると考ええる。この際にロシア人やツングースの影響がなかったかどうかを見極めるべきだろう。オロツコたちと親しく付き合うことはほとんどなかったから、ギリヤークやアイヌらの間で享受したような信頼関

係もなくて、的外れな内容の回答を聞かされたと感じることも、一再ならずであった。

身体的欠陥（畸形・両性具有・盲聾啞）

人間たちの子孫は彼らと瓜二つの筈である。「原始的」諸部族は正常なタイプからの逸脱を、か弱い存在である人間に害をなすべく虎視眈々と待ち伏せる、悪霊に由来する超自然現象と見做すのだ。新生児の畸形はすべからず悪霊の呪術に帰せられる。

アイヌ

アイヌたちは、人間が畸形児をこの世に作りだすことはありえぬと堅く信じている。もし子供の器官に何らかの畸形が見出されるならば、それは必ずや、悪霊が人間の子を何らかの方法で母親の胎内から奪い去り、己の子をそこへ収めたからにほかならない。この入換えは通常、妊婦が屋外で——森の中や庭先でさえ、概して言えば屋根のない所で——ぐっすり寝入ったときに出来る。小さな赤ん坊を一人でおくことは、たとえそれが住居内であっても負けず劣らず危険である。その時でも赤ん坊がまだ歩けぬ間は、悪霊が己の悪戯をしでかすことが危惧されるからだ。母親は取換えを防止するべく、たとえ片時でも嬰兒を幕舎に残すときは、その脇に鞘を外したナイフを置いておくのだ。

畸形児は、このことに鑑みて「チイタサレ アイヌ (chitsare ainu)」(取り換えられた者)と称される。皆も内々では畸形児を悪鬼の子(「オヤシポ (oyasi po)»)だと称するにもかかわらず、その両親の面前ではこれを決して公言しない。アイヌらは、畸形児の命を奪うことはしないものの長生きはせず、大半が生後数日で死亡して成年まで生き続ける畸形児は稀で、ほとんど零に等しいと確信している。

片方の目は頬に、もう片方は額にあるような、目の配置が非対称な畸形児の出生をめぐる伝承をアイヌらは語り伝えている。7年前、まだ若いのに極めて放埒な生活を送っていた一人の女が、十中八九までは日本人から梅毒を移されて目なしの赤ん坊を産んだが、嬰兒はその目のうちに死亡した。アイヌらは目なし子を「エスリ (esuri)」と呼ぶが、日本人からは、目なしの部族がかつて存在したという伝説も耳にしていた。彼らは目なし子を先天性の盲者とは区別して、盲目を畸形とは見做さない。だがそれは、両親の近親相姦に対する罰であると考えている。

アイヌらは最近のおよそ十年間、チコマウトウリ (Cikomau tui) という男の子の名を記憶しているが、蒲柳の質の子は八才まで生きて、天然痘の流行時にこれに罹って死んだ。彼の顔の片面は板のように扁平で、頭は不釣り合いなまでに狭小、両眼もやはり小さくて細かった。皆は彼を「取り換えられた子」と見做した。つい先頃、タコエ村生まれの成人男子が亡くなったが、その手足には指が6本ずつ具わる上に、彼の両腕は、——我らにしてみれば途方もないと映る毛深さを己の身で見慣れたアイヌらでさえも仰天するような——頗る長くて豊富な体毛で覆われていたという。

正常なタイプからの逸脱がさほど顕著でない事例の幾つかは、アイヌらもこれを悪鬼の仕業とは見做さず、「シンナイ (sin-naï)」「(格別な)」という名が授けられるだけである。例えば、暫く前には口髭を有する女がいたという。彼女は「レクスマハネク (yekus maxneku)」「(口髭の女)」と呼ばれた。今も存命のある少年の右手には指が2本しかなくて、「トウモムベ・トウシ (tu mompe-tus)」「(2本指の)」と呼ばれている。また性器の割れ目の周囲に恥毛が全く生えぬような女たちも見出される。

サハリンでもまた北海道でも、このような女を娶ることは夫の早死が危惧され、また子供らも、たとえ生まれたとしても成長せぬから、アイヌらはこれを危険と見做している。サハリンには目下そのような女はいないが、北海道では数名が今

なお健在であると聞いた。彼女らがかの地では「チエウカラム (cieukaramu)」——日本語では「カワランゲ (kawarange)」——土器かわらけのことであろう」というそうだ——と、そしてサハリンでは「オチエコママヘネク (ociekoma maxneku)」と呼ばれている。この場合は恐らく、何よりもまず脱毛を誘発するハンセン病の症状を疑うべきと推察される。もし陰唇の周囲の恥毛に「トゥレセケ (turseske)」と称する巻毛が1本ないし数本混ざっていると、夫にとつては好ましくないものとされる。例えば、ナイエロ「内路、現カステロ」村出身のそのような女の最初の夫は、全くの若死にを遂げて、親族らは彼女の2番目の夫の命運を強く懸念している。なぜなら、そのような女と暮らす夫は長生きが叶わぬと伝承が告げるからである。たとえ頭髪であれ、そこに巻毛を有するような女自身は、普通の人よりも際立って脆弱な生命力の持主であるから、いまだ幼少期から格別に慎重な対応が求められる。女の陰部、なかならず恥骨結合に生える巻毛をめぐつては、アイヌの間に興味深い伝承が存在する。そのような巻毛を見付けた男は、雄弁や、望むことは何でも叶えられる能力を付与する呪具を己のためにこしらえるべく、切斷する許しを女に乞わなければならぬ。数世代も前の話であるが、セラロコのあるアイヌは、そのような巻毛を求めて全村を巡歴しながら、見付ける度にそれを買い上げて、切斷個所に「セツパ (seppa)」(日本刀の鑢)を宛がうが、巻毛は貴重品とともに身に付けた。彼は「トゥレセケ」を2本入手するや、忽ち金持ちになった。

アイヌの間には両性具有者も見出され、もし女として生きるならば「ユカムレマヘネク (ukamure maxneku)」、「オチウシマヘネク (ocius maxneku)」と、またより男性的である場合は「ユカムレオホカヨ (ukamure oxkajo)」と称される。この畸形は超自然的な範疇に含めぬが、恐らくは、外見から判別しがたく、また当該人物にも直ちにでなく、多くの歳月を経てすでに十分な慣れが達成された頃に、ようやく浮上して来るからであろう。最近では、のちになって男性への傾斜をますます

す強めていった二人の女がいた。一人はチシコトケ (Giskotoke) という名の女であるが、数年前に若くして亡くなった。彼女は掛け値なしの女を自任して、日本人漁夫との間でしきりに浮名を流していたが、突如として、己の秘密を突き止めた友人のアイヌ女たちに付きまといだした。今一人の両性具有の女は25年前に六十五才の老婆として死んでいる。一人の両性具有の男に関しては、ただ伝承として語られるのみである。

対をなす器官であるにもかかわらず、若干の非対称性を示す事例もある。例えばセラロコ村のある女は、右手が左手よりも著しく短い。同村では、反対に左手の方が相対的にかなり短めだった男が、最近亡くなった。

私が存命する聾啞者と出会ったのは、マウカ村の男の1件だけである。しかし、私がアイヌらを訪問する暫く前には、今一人の聾啞者がタライカ村で死亡していた。聾啞者らは、畸形とは見做されていない。

私の遭遇した盲者は、七十才という超高齢のアカラ「赤浦」村の老人と、ポロオ^ホトマリ「幌泊」村の六十七才の老婆の、併せて2例である。

しかし一八九七年に実施された全帝国規模の国勢調査によると、サハリンにおける先天性の盲者は男3名、視力喪失者は男女とも各4名、そして聾啞者は男2名と記録されている。

ギリヤーク

ギリヤークたちは畸形児を「ミリク エグリヤン パランド (milk eg'lan parand)」(「悪魔の子に似た者」と呼ぶ。ギリヤークによると、彼らは生後2、3日で死亡するのが常だという。私のインフォーマントだったギリヤークたちは、それら畸形児がどのような姿をしていたかまでは語れなかった。この種の事例は明らかに極めて稀で、最近ではもはや長いこと出来ていない。

但し、ヴァンクシュヴォ (Vank'svo) 村の6本指の男のことは教えてくれた。ギリヤークらが語るところでは、両脚だけに極めて濃い毛髪が密生するような事例は少なくないそうだ。一九〇五年に死んだ一人の女には、両脚の間にやはり長い巻毛——「ポリク エンド ナヴルシユキ パネンド (pol'k end nav'ski panend)」(束をなして密生する毛)——が生えていた。だが彼女の夫は、それを自分にとって危険とは見做さず、あらゆる珍品同様に幸せをもたらすものと考えて、これらの毛髪では自分用の呪具(ギウル (gul))をこしらえた。これを語ってくれたギリヤークらが唯一知らなかったのは、彼が果たしてこの毛髪の束を切ったのか、それとも生えるがままに任せたのか、という一点だけである。

しかしながら、人体にかかわるこれらすべての特徴や類似の各種特徴は、畸形と見做されてはいない。このような異形の人は「ガイルリヤテンド (gair'atend)」(目印を有する者)と呼ばれている。彼らには専ら幸せをもたらすか、それを有する能力が帰せられる。例えば、アド・ティミ (Ado-Tym) 村のギリヤークの許に、体表のほぼ半分の皮膚が青みを帯びる娘が誕生した。彼女の父親は、娘が一連の成功をもたらすと期待して、その姿を誰にも見せぬようにこれ努めた。だが父親にとってはまことに遺憾なことに、少女の肌が少しずつ正常な色調へと変わりだして、私がこの話を聴取した一九〇五年には五才の少女の肌に、かつての色調の痕跡はごく僅かしか残されていなかった。ギリヤークらに兔唇をもたらすのは黒い神だそうである。口唇は山々を、裂け目は山間盆地を表現する。このような目印を具える人は、陸獣胤で幸運に恵まれるから、忽ち分限になってゆくそうだ。

悪魔的精霊とある種の親族関係にあるとされるのが、チック症の兆候を示す人たちである。例えば、トクという名のギリヤークの細君である今も存命の女をめぐって、私は次のような話を聴取した。

彼女が歩行するときは、決して真直ぐには進めず、時に右または左へと向きを変えつつける。ひっきりなしに

頭を揺すり、まばたきをして、一個所を長く見詰められない。だがその他の点では、身長であれ、声であれ、また知能においても彼女は正常である。彼女は「ヴェフリヨガランド (vev'logarnd)」と称されるが、それはある種の悪魔を指す「ヴェグル (vegyr)」という語に由来するものだ。

聾啞者は神の意志でこの世に登場する者であり、悪魔的なものはここに全く介在しない、とギリヤークらは説明する。現在、一人の若い聾啞者がアド・テイミに住んでいる。およそ20年前には極めて若い女の聾啞者が亡くなっていた。

両性具有（「ミルシユクインド (mirsukind)」）はギリヤークの間で、相対的にはかなり頻繁に出来する事象である。私自身も、女のような顔にもかかわらず、男として生活するギリヤークの中年男を知っていた。彼は次々と妻を娶りつづけて、今や数人の妻を有し、いずれにもやさしい夫であるが、彼女らから生まれた子供はいなかった。当初はある性と認められたが、十々十四才頃に別の性を発見した子供たちの事例を、私も2件ほど耳にした。1件では少女が少年へ、別件では少年が少女へと変身している。ギリヤークらは一九〇五年に、全く新しい両性具有者について以下のように語ってくれた。

ヌルヴォ (Nurvo) 村の五十才ぐらいのギリヤークには二人の細君と数人の子供がいた。彼は約2年前に発病し、1年ほどは体調がすぐれなかった。恢復するや、細君の一人を一切の婚資なしで己の親族へ譲り、今一人の細君も別のギリヤークの手に渡って、今や一人暮らしであるが、子供たちは彼の手許に残された。いまだ男の装束をまとってはいるものの、ギリヤークらはこぞって、彼は女になったと語り、面と向かって嘲笑するも、そこには不愉快なことも危険なことも生じない。

一八九七年の国勢調査はギリヤークの間の身体的諸欠陥に関して、次のような数字を報じている。先天性の盲者——男1名、視力喪失者——男4名、女1名、聾啞者——男2名、女1名。

オロツコ

オロツコたちはアイヌら同様に、出生した畸形児は悪魔がすり替えた赤ん坊（アンバプツテニ（*amba putyni*））と見做している。まさにそれゆえに妊婦は野天で眠ることが禁止され、また嬰兒は住居内であれ、また庭先であろうとも一人で残されることがない。だが、もし母親がその場を離れて、代役を務められそうな者もないような場合、赤ちゃんの脇には必ず斧かナイフを残しておく。ギリヤークらはそのような場合、やや離れた所に犬を繋いでおくのだ。

オロツコらにおける畸形や身体異常をめぐる詳細は、首尾よく入手することが叶わなかった。

一八九七年には、オロツコの間に視力喪失者が男女各1名、女の聾啞者1名、男の盲者1名が見出された。

ベ・ピルスツキ

アイヌ

本邦訳稿の底本は、帝政ロシアの代表的な百科事典版元ブログハウス・イエフロン社の『新百科辞典』第一巻（一九一一年、サンクト・ペテルブルグ刊）に収録された「アイヌ」と題する項目である（1）。当時のピウスツキは主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（2）を執筆中で、若干の関係論文も発表していたといえアカデミズムでは無名な在野の人に過ぎず、当該項目の執筆者として白羽の矢が立った背景には、リエフ・シュテルンベルグなど、在ペテルブルグの友人や支援者の強力な押しがあったものと想像される。ピウスツキとしては、潤沢な稿料に惹かれて引き受けたという事情も、恐らくあったであろう。

当該論文は、北海道アイヌ、エンチウ（樺太アイヌ）、千島アイヌのそれぞれについて、記述に濃淡はあれ歴史・言語・形質・伝統文化・現況にバランス良く言及しており、二十世紀当初の優れたアイヌ論の一つであった。アイヌといえは専ら北海道アイヌのみが話題となる昨今だけに、熟読に値する作品である。とはいえ現代の知見からは、もはや苔むした旧説や謬見と見做されるが如き記載も散見される。例えば、彼の人種観や母権制を前提とする進化主義的言説は、時代の制約を免れえなかったものとして斟酌さるべきだろう。記事末尾に所載の参考文献には、札幌の開拓使が明治十四年に上梓した『蝦夷風俗彙纂』（3）が見出されて、些か度肝を抜かれるが、本文に見える「日本の年代記」や「日本の歴史家ら」の典拠は恐らく同書であつたろう。

ところで本文では、やはり参考文献に見える『アイヌ・ロシア語辞典』（二八七五年、カザン刊）の著者、M・M・ドブロトヴォルスキーのアイヌ論を彷彿せしめる件にしばしば遭遇する。ピウスツキは一九〇二年の晩秋、シュテルンベルグを

介して同辞典を入手しており⁽⁴⁾、彼にとつては座右の書でもあったから、その序章第二節「アイヌ」⁽⁵⁾は熟読玩味したはずである。その影響はまた彼の「トンチ論」や医人類学的労作にも色濃く窺える。したがって、ドプロトヴォルスキー著「アイヌ」の拙訳を「参考論文」として本書に転載する。

二〇一四年二月十五日、札幌

注

- (1) Б. Пилсудский, "Айнэ", *Новый энциклопедический словарь*, Первый томъ, столбцы 599-603, С.-Петербург: Типография Акционерного Общества «Брокгаузъ-Ефронъ» (1911). A・F・マイエヴィチ編『ブロニスワフ・ピウツスキ著作集』一卷には、マイエヴィチ氏による英訳稿が収録されている (Bronisław Piłsudski, "The Ainu (1911)," A. F. Mawicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 1: 236-270, 1998)。なお、英語版に所載の30葉の写真 (Plates XI~XL) は、編訳者による補填である。
- (2) Bronisław Piłsudski, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Glasgow: Imperial Academy of Sciences (1912).
- (3) 肥塚貴正『蝦夷風俗彙纂』(前編十冊、後編十冊からなる和綴本)、札幌: 開拓使 (1882)。ピウツスキは同書を恐らく一九〇六年の春、東京「府下の骨董店」で入手したのではあるまいか (東京朝日新聞所載記事「露国人類学者」本書832頁参照)。
- (4) ピウツスキは同辞典を一九〇二年の「晩秋に入手」「復命報告5」本書42頁と記すが、九月二十一日(露暦同月八日)付のシユテルンベルグ宛書簡ではすでに「受領済み」と明言している [B. M. Дарышев, Г. И. Дударев и М. М. Прокофьев (сост.), *Бронислав Пилсудский и Лев Штернберг: Письма и документы (конец XIX — начало XX вв.)*, стр. 158, Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей (2011)]。
- (5) 書誌データは「参考論文・記事」所載のドプロトヴォルスキー著「アイヌ」を見られたい。

アイヌ

アイヌ——逐語的には「人間」を意味し、類称の「アイノス」や「アイン」はヨーロッパ人による歪曲形——は、いわゆる「古アジア系」と称される北東アジアの孤立部族の一つである。樺太島サハリン（南部）、蝦夷島アイユツ、千島列島クリルに在住する。日本の年代記の記載によれば、紀元後二世紀までは日本の全島をアイヌが占拠しており、七世紀には北緯38度以北の大部分をいまだ占有していた。アイヌと日本人の戦争は、なかならず八〜十二世紀には間断することなく続いた。これら二つの民の間では、同時にまた平和裏の混淆も展開されてきたから、現今の北の日本人の血管には間違いないく、少なからざるアイヌの血が流れている。東京湾の入口に立地する伊豆大島や琉球諸島では、アイヌと酷似したタイプの人々が見出される。アイヌは北へ退却したにもかかわらず、彼らが与えた地名は今日まで、ほとんど変わることなく保持されている。若干のアイヌ語は、蝦夷島と日本島の北の地方の日本人が常用する語彙にもやはり取り込まれている。

アイヌは十八世紀になってようやく日本人に全面的に屈服し、日本の歴史家らが述べるところによれば、最後の大蜂起は一七八九年に出来たという。征服されたあとのアイヌには、征服者に奉仕するべく強制労働が課された。独立を保持したのは、樺太島多来加（テルペニエ）湾岸のタライカ「多来加、現ネフスコエ」湖周辺に在住するアイヌだけである。日本の北方諸島嶼の近辺に外国艦船が出没しだすまでは、アイヌに対する日本人の対応は過酷を極めていた。抑圧されて不満をかこつ土着民を、日本政府はヨーロッパ人が敵対行動の足掛かりとすることを懼れたから、彼らに対しては新しい、より人

道的な政策をとり始める。

一八六八年、彼ら「北海道アイヌ」は対等な権利を享受する国民として承認された。近代日本の政府はアイヌの文化水準を引き上げるべく色々手を尽くした。一八九九年にアイヌの保護に関する法律「北海道旧土人保護法」が制定される。その主旨はアイヌに対する農業の奨励と、貧者・病者・不具者の救済である。一九〇一年にはアイヌ子弟の教育に関する規則「旧土人児童教育規程」が公布されるも、とどのつまり、日本人児童との共学を目指すものではなかった。

十七世紀初頭、樺太島のアイヌの一部が満洲朝の統治下に入って、アムール流域の土着民と同等の貢納が課された。満洲朝の支配は樺太アイヌにとつて厳しいものでなく、どうやら次第に弱まっていったようだ。樺太島南部にロシア人が到来するまで、アイヌは日本人漁業者の下で就労していたが、これら漁業者も己の半農奴的雇用者に対しては一定の配慮を示していた。

一八七五年以降、喜んで再び日本国民となる一九〇五年まで、「樺太」アイヌはロシア国民であつた。千島アイヌは目下、ただ色丹島に在住するのみで、一九〇〇年の同島における彼らの人口は僅か100人である。樺太アイヌの人口は、一八九七年の国勢調査によると1442人だったが、一九〇四年に私が実施した調査では男713人、女649人だったから、合計で1362人が49ヶ村に分住していた。蝦夷島——海岸と内陸——では、公式情報にもとづくアイヌ人口は一八七七年が1万6966人、一九〇三年は1万7783（男8669、女9114）人、そして一九〇六年には2万人以上と伝えられている。

かつては強大だった「アイヌ」部族に人口減少をもたらした要因は、(1)日本人との相次ぐ消耗戦、次いでは流血の蜂起、隣人(ギリヤーク「現ニヴ」やオロツコ「現ウイルタ」)との戦争、そして内訌、(2)地震や洪水、(3)伝染病(梅毒・結核・壊血病など)、(4)経済的生存条件の変化、(5)長期に及んだ政治的抑圧である。今日、アイヌの滅亡は中休み状態であり、アイヌが農業に従事する所「北海道」では平穏な暮らしが営まれている。

アイヌは、セイロン島のヴェッタとともに「原白皮人(proto-leucoderma)」、即ち原初的白人「種」民族に分類されている。その原形(protomorph)から逸脱するアイヌの特徴は、より低い頭骨、より深い眼窩陥没、直顎(orthognathism)、身長に勝る「マホヴォイ・サージエン」「日本語の「尋」に相当。両手を伸展した際、両手中指先端の間の長さ」の数値、より長い上肢。「モンゴル人種」との対比では、より小さな頭蓋示数(77・8)、より高度の低顔、目の内隅の上瞼における皺襞の欠如、高くて真直ぐな鼻、皮膚における暗黄色調の欠如、顔面や全体表に及ぶ極度の多毛、より長い下肢が指摘される。アイヌの平均身長は男157^{センチ}、女は147^{センチ}、平均頭高は22・5^{センチ}と21^{センチ}、上肢長の平均値72^{センチ}と66^{センチ}、下肢長の平均値は81^{センチ}と75^{センチ}である。

千島アイヌは、露米会社が就労のために連れてきたカムチャダールやアレウトと、一部ではまたコサックとも混血してきた。樺太アイヌはギリヤーク、オロツコ、オリチャ「現ウリチ」、日本人と、また近年では一部がロシア人とも混血している。私はサハリン東海岸に在住する660人のアイヌの間に、至近の3世代で90人(13・5%)の混血者を見出した。蝦

夷島では多くの場所でアイヌが日本人と混血している。これらすべてはアイヌの間に、モンゴロイドの特徴を具えるさまざまな形質タイプの形成を強く促した。

アイヌはがっしりした体格と、均整のとれた体躯の持主である。彼らの黒髪は肩まで垂れている。男はしばしば前頭部を頭頂まで剃り上げ、長い顎鬚を蓄える。日本化したアイヌは髪を短く刈り、口髭と顎鬚も剃る。女は唇に刺青を施すが、前腕の肘まで入れる者も少なくない。男は概して女よりもはるかに美しいが、日本人との混血者である女だけは、より愛くるしいタイプを示す。アイヌは頗る短気で気紛れ、醜聞を好んで喧嘩早い、他方ではまた客あしらいが良くて屈託がない。アイヌの主生業は漁撈と狩猟であるが、蝦夷島の多くの場所ではアイヌが上首尾に菜園経営・農業・牧畜に従事する。かつては犬が彼らの唯一の役畜だった。サハリンでは犬が橇の挽獣としても使役される。基本食料は海産魚（とりわけ鮭鱒類）、陸・海獣の肉、軟体動物、野生根茎類、野草、莓類である。アイヌはかなり以前より米食を始めており、米は日本人から購入してきた。米からはアルコール飲料の酒も醸造するが、彼らの酒に対する執着には並々ならぬものがあつて、酒盛りや酒宴が大盛況である。

アイヌは夏の衣装を、大部分は日本人から購入するものの、自らが蕁麻イラハサの糸（樺太のみ）か、榆の鞣皮繊維を紡いで織った自家製布地でも仕立てる。アイヌは大の装飾好きである。彼らの衣装は豊かで繊細な文様で刺繍される。衣服の裁断は、前開きの日本式着物ヤモノを彷彿させる。冬用の毛外套は犬の毛皮で縫製するが、稀にアザラシ・トナカイ・熊の毛皮を使用す

ることもある。長衣は——男物でも女物でも——布製か革製の腰帶を必ず締めるが、帯には刀子、紐で締める小袋、煙草入れを下げる。耳環を着用するのは女だけである。彼女らはまた首飾りや南京玉、指輪や腕輪も好んで身につける。夏は概ね裸足で歩き回るが、冬場には動物の毛皮でこしらえた履物を使用する。かつてのアイヌは好んで日本刀を佩帶していた。これらの刀は今や箱に収められて、日本製漆器、甲冑、飲酒に用いる髭篋〔捧酒篋〕、古式籠〔まがら〕、絹の古反物ともども家宝とされている。

アイヌの伝統家屋は常に方形の土台と木の骨組みを有して、蝦夷島では葦、樺太島では樹皮で蔽われている。後者ではかつて、多くの場所で越冬用の堅穴住居が建てられたが、今では東海岸北方の三ヶ村に残るのみ。倉は柱の上に建てる。かつての輸送手段は丸木舟だけだった。サハリンでは橈も使用するが、これには犬を、彼らの北の隣人（ギリヤーク）と同じ方式で繋ぐ。斧・刀子以外の主たる武具は弓であるが、弓射の際は矢に鳥兜（*Neonitum*）の毒を塗るのが通例だった。アイヌはありとあらゆる陸獣に対して様々な仕掛け式猟具を使用する。漁撈具は釣竿・鉤・網。現在のアイヌでは製陶術が知られていない。彼らの領域で発見される壺や土器片は、アイヌの言によると別の部族の物だという。それらの先住者を、サハリンでは「トンチ（*Tonci*）」、蝦夷では「コロポックル（*Koropokkuru*）」と称する。アイヌの家財道具は木製か白樺樹皮製である。鑄鉄製大鍋は古より、文化的隣人から入手してきた。女たちは極めて原始的な手製の「いさり」機を用いて蓴麻や樹皮鞆皮で粗布を織り、また菅では手の込んだ文様入りの蓴麻も編んで、壁に懸けたり板床に延べる。アイヌは鉋物や塩の採取法を知らなかった。

アイヌ語はかなりメロディックで、語彙や形式も豊富であるが、その特徴は一音節の語根、接尾辞と接頭辞の併用である。文字は全く有さぬものの、民衆の口碑伝承が豊かで、彼らは膨大な量の昔話・謎々・伝承・伝説を有する。歌唱が頗る盛んで、恋歌、酒歌、神話的内容の詩歌、英雄や往時の戦をめぐる歌謡などが伝承されている。踊りには両性が参加するが、跳躍、体躯の屈曲、手拍子で構成される。音楽は頗る未発達である。衣服・容器・鞆・墓碑に描かれる文様は概ね合成品線文であるが、日本の影響が顕著である。木製の髭篋では象徴的表象と並んで、実在するもの（動物・山・川など）の造形表現が卓越する。

アイヌの宗教はごくありふれたアニミズムとシャマニズムで、動物崇拜が顕著な役割を演ずる。そこで首位を占めるのは熊であるが、その殺害に際しては、この部族の生活で最大の祝祭「いわゆる「熊祭り」」が繰り広げられている。アイヌは死者を地表近くに埋葬し、他界は地下にあると想像する。死者崇拜はよく発達している。アイヌの思索によれば、死者は生者を支援する力を有するからだ。供犠ならびに宗教儀式全般では、様々に削り上げられた各種の削掛け棒（「イナウ」）の製作が欠かせぬが、イナウはアイヌの生活で膨大な役割を演ずる。シャマンの巫儀は著しく簡素であり、シベリア諸民族のそれとは頗る異なる。各種の垂飾りを伴うシャマンの衣装は欠如する。手太鼓は平板で、魚皮が張られる。

キリスト教は蝦夷島において若干の成功を収めており、英国教会が千名ほどの帰依者をアイヌとその子弟の間に見出している。色丹島に在住するアイヌはすべてロシア正教徒である。サハリンには僅か数名の正教徒が見出される。

アイヌの間では雄弁が最も重要な徳の一つとされるから、彼らの祈祷はすべからく、ほぼ同じ発展段階にある彼らの隣人らよりもはるかに長大である。アイヌが情熱を傾ける論争や相互遺恨や諍いでは、弁の立つ人たちが選ばれる。通常は、被害を蒙った側への償いの支払いで決着する。伝承や歌謡でのみ伝えられる血讐は裁判に席を譲っている。トーテムズムの役割が頗る著しい。例えばサハリンでは、本記事の筆者の調査によると熊・狼・鯢・雷鳥・ラッコや、川底に潜む伝説的動物がトーテムだった。

アイヌでは目下、母系氏族から父系氏族への移行が進行中である。母方の親族は今なお、父方親族よりも重要視されている。母の兄弟の影響は絶大である。女は完璧に己の意思で嫁に行くのが常であるとはいえ、直ちには夫の許へ赴かず、かなり長期間肉親の許に留まりつづける。婿養子の事例もしばしば見られる。夫は妻の身柄の代価として、岳父のために無償で働くことが通例であるが、ただ裕福な男だけは高価な品物を引き渡して、彼女を直ちに引き取ることができる。多妻は許されるも、妻たちは別々に暮らす。結婚は概ね隣接する家族間で取り結ばれ、近い親族の間で取り決められることも珍しくないが、婚姻関係は頻繁かつ容易に解消されている。支配権は昔から、一連の地区を束ねる氏族長や個別集落スタルシナの村長の手中にあった。権力は世襲されたものの、富と知恵が、出生によって獲得される権利を凌駕することも稀ではなかった。アイヌの間では老人が大いに尊敬されている。氏族長や村長に対する服従は絶対である。アイヌはかつて己の貧しい親族を、交易を求めて来島するアムール流域の土着民に奴隸として引き渡していた。これらのアムール土着民の間では今なお、アイヌの風貌を彷彿させるタイプの人物と遭遇することがある。

【参考文献】

- J. Batchelor, «The Ainu of Japan»
 J. Batchelor, «The Ainu and their Folklore»
 J. Batchelor, «An Ainu-English-Japanese Dictionary»
 J. Koganei, «Beitr[ä]ge z[ur] phys[is]chen Anthrop[ologie] d[er] Aino» (Tokio, 1893)
 «Eso Fuzoku Isan [蝦夷風俗叢書]» (日本語)
 Siebold, «Archiv zur Beschreibung von Japan»
 ドブrotヴォルスキー『アイヌ・ロシア語辞典』【露文】
 デ・アヌーチン『東アジア人類学資料』【露文】
 エリ・シュレンク『アムール地方の異族人たち』【露文】
 ロシアならびに外国の定期刊行物に発表されたエリ・シュテルンベルグとベ・ピウスツキの諸論文

ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病

解題

本文の元稿⁽¹⁾は、プロニスワフ・ピウスツキが一九一三年の当初から五月まで滞在したスイスのヌシヤテルにおいて「摺筆」された⁽²⁾。一九一〇年公刊の「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産」⁽³⁾に次いで、医人類学関係論文の第二作。今回のテーマは人類が認知した最初の病氣ともいわれる「ハンセン病」である。本文を通読するなら、ピウスツキが執筆の時点でハンセンによる癩菌発見の事実を弁えていないことは明らかで⁽⁴⁾、医学的には素人談義が展開されているが、その反面で、これはハンセン病に特化した極めて希有な民族誌である。

ピウスツキ自身が、ハンセン病は「バルト海東岸諸州で」流行病として存在する」と本文に記すから、故郷のリトワニアで過ごした幼・少年期には、恐らく同病について見聞する機会があったであろう。またカトリック信者の素養として、旧約聖書が蔵する同病絡みの情報も知悉していたと思われる。その彼が一九〇五年の春、離島する旅の途中に十二日ほど滞在したタライカ地方で、ニヴフ（本文ではギリヤーク）のインフォーマントたちが突如として胸襟を開き、ハンセン病について語りだしたとき⁽⁵⁾、彼は己の貴重な時間を割いて、その聴取り調査に邁進したことに疑問の余地はない。彼はその後2ヶ月半、北サハリンの幾つかのロシア人村に逗留して各種報告書の執筆に専念したが、その間もティミ川流域のニヴフからは折に触れて関連情報を入力していたであろう。樺太島を脱出してアムール河口の町ニコライエフスク・ナ・アムーレ（尼港）に到着したピウスツキは、この町に十日間滞在するが⁽⁶⁾、それは、彼がアムール・ニヴフからハンセン病情報を聴取できた唯一の機会である。このように慌ただしい旅の途上の限られた時間を縫って、ピウスツキのハンセン病調査は実施されたわけである。なお、彼はニヴフの癩者と面談する機会には恵まれず、入手された関連情報はすべてイン

フォーマントからの聴書きである。

ところで、元稿の執筆へ向けてピウスツキの背中を押したのは、一九〇九年十二月から翌年一月にかけてモスクワで開催の第十二回「ロシア博物学者・医師大会」における——本文に言及された——ハンセン病問題の討議だったと推察される。彼はロシア各紙の報道を取りまとめて、同大会の民族学部会に関する報告記事を執筆していたが⁽⁷⁾、そこに欠落するロシア極東の、なかならず原住民のハンセン病事情の報告を、己の義務と痛感したのではなからうか。

最後に、元稿に触発されて独自の研究を展開された二人の日本人研究者の仕事にも触れておきたい。一人は、ニヴフ象徴論の専門家である故黒田信一郎氏。彼はピウスツキ科報告書への寄稿論文「ギリヤークの世界像とハンセン病——資料の提示」で、ニヴフのハンセン病をめぐるピウスツキの叙述を6項目に分類して、それぞれに関係するテキストを邦文抄訳で提示している⁽⁸⁾。黒田氏はいわば元稿の最初の邦訳者にほかならない。今一人の澤田和彦埼玉大学教授はロシア文学者で、日露文化交流史の専門家でもあるが、「ピウスツキの観た日本」研究の一環として「野口（武林）男三郎事件」を掘り起こし、ピウスツキが滞在した頃の日本の世相を炙り出すことに成功している⁽⁹⁾。同事件は、ピウスツキが本文の末尾で言及する「不運な学生」が起こした猟奇殺人事件にほかならぬが、澤田教授は、その法廷の傍聴席にピウスツキと二葉亭四迷が並坐する情景までも想定しておられる⁽¹⁰⁾。

二〇一五年三月十五日、札幌

(1) 注

邦訳稿の底本は、ポーランドを代表する民族学季刊誌『ルート(民族/民)』の十八巻(一九一二年度、一九一三年刊)に発表された Bronisław Pilsudski, "Trąd wśród Głaków i Ajnów," *Lud* XVIII: 79-91, Lwów である。一九九一年には V・M・ドウラクノフ氏によるロシア語訳(B. Пилсудский "Прокказ у глыков и айнов," *Криведческий бюллетень* 1991-III: 85-97, Южно-Сахалинск) 九八年には マイエヴィチ氏による英語訳(Bronisław Pilsudski, "Leprosy among Nivngu and Ajin," in: *The Aborigines of Sakhalin (The Collected Works of Bronisław Pilsudski, vol. 1), pp. 346-361, 712-713, Berlin - New York: Mouton de Gruyter*) が上梓されている。なお、ピウスツキはザコパネ発信(一九一三年十一月二十一日消印)のシュテルンベルグ宛書簡で「オロッコ論の前半部をウラヂヴォストクへ送りました。ギリヤークとアイヌのハンセン病に関する小論も同様です」(*Бронислав Пилсудский к Лео Штернбергу: Письма и документы (конец XIX - начало XX вв.)* [「ブロニスワフ・ピルスツキとリエフ・シュテルンベルグ・書簡と文書(十九世紀末〜二十世紀初頭)」, стр. 226, Южно-Сахалинск, 2011, 本書 402 頁も参照された])と記すから、同地での公刊を期して自らが露訳したハンセン病稿も、アムール地方研究会宛に送付していたと解されるが、この「ロシア語稿」の消息は不明である。

(2)

拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」(本書 875 頁)。

本文の冒頭では「目下滞在する「スイスの」ヌシヤテル」にて執筆中とあるが、ピウスツキは一九一一年七月にクラクフで開催された第十一回「ポーランド医師・博物学者大会」で「ギリヤークにおけるハンセン病について」と題する報告を行っており、報告要旨が公刊されている(Bronisław Pilsudski, "O trądzie u Głaków," in: *Księga Pamiątkowa XI Zjazdu Lekarzy i Przyrodników Polskich w Krakowie 18-22 lipca 1917, ss. 284-286, Kraków, 1911*)。報告の内容は同要旨から推測するほかないが、ピウスツキは恐らく報告原稿を用意していたであろう。この報告は、愛妻マリア・ジャルノフスカの死(同年五月十二日)の痛手から立ち直って、学術研究に復帰するきっかけとなった重要な出来事である。その後の一年半はザコパネのタトラ協会博物館における民族学部門設置などで多忙を極めていたので、彼が「報告原稿」——もしあったとして——に必要な加筆を施して、摺筆にまで漕ぎつけるチャンスは、ヌシヤテル大学の聴講生になるまでありえなかったと思われる。いずれにせよ、ピウスツキは元稿をヌシヤテル滞在中に「摺筆」したと判断される。

(3)

日本では一九五〇年代以降——「癩病」を一九七三年に発見したノルウェーの Gerhard Henrik Armauer Hansen の姓に因んで——「ハンセン(氏)病」と公称するようになるが、それ以前は「癩病」「レブラ」として恐れられ、また俗称としては「かったい」「なりんぼ」「ふくよし」「ものよし」「どす」「天刑病」などが各地に流布していた『広辞苑』第二版 2297 頁、『平凡社大百科事典』初版、15 卷 290 頁)。ピウスツキが本文で言及する「どす」は、アイヌが和人から聴取した病名であるから、恐らく東北方言ではなかったろうか。訳稿では *trąd* (ポーランド語)、*ипокказ* (ロシア語) に「ハンセン病」を充てるが、歴史・民俗事象にかかわる際は「癩病」や「癩者」も併用する。

- (5)(4) 本文の「脚注6」に転載の、マイエヴィチ教授がその英訳稿に付した「訳注」も参照されたい。
ピウスツキは「樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より」で「ギリヤークらは自分たちの間にハンセン病が存在することを、恐らくは病氣中で最も怖しい病を想起することへの恐怖から、その存在を何度も否定した末に、ようやく認めた」（本書475頁）と記している。
拙稿「ピウスツキ年譜」（本書70, 879頁）。
- (7)(6) Bronisław Piłsudski, "Dział etnografii na XII zjeździe rosyjskich przyrodników i lekarzy w Moskwie (grudzień 1909 – styczeń 1910) (Według sprawozdań rosyjskich pism)," *Lud XVII*: 264-267 (1911).
- (8) 黒田信一郎「ギリヤークの世界像とハンセン病——資料の提示」、加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（『国立民族学博物館研究報告』別冊5）318-323頁（1987）【再録】黒田信一郎『ギリヤーク族の社会構造』236-241頁、東京：私家版（2001）。
Kazuhiko Sawada, "Japan in the Eyes of Bronisław Piłsudski," in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2: 109-118, Saitama (2010). 澤田和彦「ピウスツキと男三郎事件」『窓』57: 6-11頁所収、東京：ナウカ社（1986）も見られたい。「野口男三郎事件」ないし「臀肉事件」として人口に膾炙した猟奇事件の被告は、大阪市生まれの武林男三郎（1880-1908）。東京外国語学校露語科に在籍（1899-1902）するも3年後に除籍。「著名な詩人」は野口寧斎と号する漢詩人（本名野口一太郎）。その妹は曾恵（そゑ）。男三郎は一九〇四年、野口家に曾恵の婿として入籍以降は野口姓を名乗る。一九〇二年三月に出来した「臀肉事件」の被害者は十一才の河合莊亮。武林は莊亮少年を扼殺し、その「臀肉二斤」でこしらえたスープを寧斎と曾恵に食させたとされている。一九〇六年三月五月に行われた裁判では、河合莊亮、薬局店主都築富五郎、野口寧斎に対する三殺人と公文書偽造の4件が争われた。東京地裁の死刑判決——薬局店主殺害と公文書偽造の2件が有罪、被告が公判では否認した「臀肉事件」と寧斎殺害の2件は証拠不十分として無罪——は大審院まで支持されて、一九〇八年七月に絞首刑が執行された。
- (10) 武林男三郎は、二葉亭四迷が東京外国語学校露語科教授として最初に教えた学生の一人だった。澤田教授は彼を二葉亭の「不肖の弟子と言ふべきか」と評している（Sawada, *op. cit.*, p. 117）。

ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病

ハンセン病ないしレプラ (Lepre) は今なお人々の恐怖の的であり、ヨーロッパでは幾十世紀にわたって人類の無慈悲な荒廃者として知られてきたが、研究者らの尽力にもかかわらず完璧には根絶されるに至らない。同病は、今日では低い経済水準で悲惨な衛生状態の国々に専ら見出されるとはいえ、ユダヤ人やサラセン人と接触した八世紀に始まり、なかんずく十字軍遠征期以降に猛威を奮った欧州大陸でも、その記憶はいまだ完全には払拭されていない。昨今でも、かつて怖い病として憐憫の情を掻き立てた存在の名残には、ほとんど至る所で遭遇する。例えば、私が目下滞在する「スイスの」ヌシャテルでは美しい街路の一つが、中世にはそこに幾つかの避難所が癩者のために設営されたので「癩病院通り (Madière)」と呼ばれている。したがって、この通りに立つと想起されるのは、すでに感染防止策として患者の完全隔離が遂行された頃、また不幸な患者らはあらゆる権利が剥奪され、社会生活から放逐され、ときにはまた、さまざまな悪魔的行為——例えば児童誘拐、井戸への毒物投入、悪魔的勢力との結託、健康な人々を傷つける企み——までも癩者に帰せしめて激怒する群衆によって惨殺されるなど、益々過酷な対応に曝された頃のことである。

これらの癩病院がすでに十七世紀には軒並みに空き家となつて、フランスではその廃屋が、癩者の騎士らによつて十二世紀にイェルサレムで結成された聖ラザルス騎士団に提供された。十九世紀には食生活の改善、健全な住宅事情、衛生設備の漸次的普及のお蔭で、少なくとも中欧ではハンセン病が消滅したと思われた。だがブルターニュ地方や南フランスからは、ハンセン病の発生が依然として散発的に報ぜられる。またロシア帝国の若干部分——バルト海岸諸州、ベッサラビア、ドン・コサック地方——ではそれが流行病として存在する。ピロゴフ・アカデミー会員を記念する先の第十二回ロ

シア「博物学者・医師大会（一九一〇年）では、ロシアが直面する災禍の一つとしてハンセン病問題が討議された。統計資料が不十分なため、ロシア全体のハンセン病患者数をめぐって、ある者はおよそ二千名と推計し、またおよそ一万名と見積もる者もいる。

人口希薄ながらハンセン病が恒常的事象である地域を、私は二回通過した。それは、世界の最大河川の一つであるアムール川の空虚で気の滅入るような沿岸部である。人々はその地域を頗る怖れたから、そこを通過する際は同流域の村々から由来する食物を一切口にせず、癩者の比率が格別に高い村の住民との接触も極力回避する。そして不思議なことに、私が十日ほど滞在したトロイツコエ村では、郵便局長の細君がハンセン病に罹患したのだ。彼女は同病への恐怖から住民との接触を避け、感染の予防措置も怠らなかつた——そして、そのような予防措置は、例えば私も、また他の人々も一切講じなかつた——にもかかわらずである。

ハンセン病はアムール流域に在住する原住民の間でもやはり風土病として存続するが、これには、一八九七年に「全帝国規模の第1回国勢調査」でその総数が4500人と集計された、古アジア系諸族に分類される一部族のギリヤーク「現ニヴ」も含まれている。ギリヤークはハンセン病を数ある疾病のうちで最も怖い病の一つと見做し、多くの人たちはその名を口に出すことすら憚った。サハリンのギリヤークとは長期にわたり親交を重ねてきたにもかかわらず、同病の存否を訊ねる私に対し、彼らは繰返して虚言を弄し、その存在を否定しつづけた。興味深い事項を含む誠実な回答に、私がようやく接することができたのは、私のサハリン滞在の最終年「一九〇五年」のことである。以下ではそれを紹介する。

樺太島内陸部のティミ川流域と東海岸に在住するギリヤークはハンセン病を「クワトウンド (kwatund)」と称するが、島の西海岸とアジア大陸のアムール河口部のギリヤークは、それを「ハチュヂ (xatúdz)」と呼んでいる。

ギリヤークたちはその病原を、樺太島の全河川とアムール川を大群で遡上して、土着住民の基本食料となる鮭鱒類 (Salmo) の感染魚に見出している。漁獲物中には、魚肉の内部に白い蛆虫を——通常はその尾部に——蔵する魚が見付かることがある。そのような個体はやや細身であるから、その外見からも見分けられて、老練な漁師の目は現場でそれと識別するが、汚染魚を特定して廃棄する際は、それだけに頼るのではなく、内臓を抜いて、シベリア全域で「ユーコラ (jukora)」としてあまねく知られる乾製魚用に薄い肉片へと加工する際も、彼らは一足ずつ仔細に検分する。汚染魚との遭遇はさほど頻繁でないとはいえ、私がアムール流域でギリヤークから聴取したところでは、各漁期に一村当たり数足の汚染魚が見付かるそうである。内蔵抜きと肉捌きにおける手抜き、そしてその後の汚染魚——ハルイフルチョ (char'ityo)、即ち「蛆虫を抱えた魚」——の消費こそ、怖いハンセン病の本当の病因であるというのが、ギリヤークの所見である。

ギリヤークらは以下のような徴候にもとづいてハンセン病を診断する。まずは眉弓部の腫脹と眉毛の脱落のあとで、あたかも異常な肥満が出来するかのような全身のむくみ。次いで肌が黒ずみ、肉が落ち、傷口がただれ、変声し、無力症状が現れる。

ハンセン病は感染力が途方もなく強いと確信するゆえ、ギリヤークは罹患者をその他の家族員から隔離する。子供や十代の若者の場合だけは、家族とともに自宅に留めることを余儀なくされるが、そのときでも特定の場所、専用の寝床と食器が指定されて、それらにはもはや誰も触れることがない。しかるに大人の患者は完全に隔離される。通常は集落の近辺でなくて、少なくとも数キロは離れた別の川筋の畔に、患者用の小屋が建てられる。患者には食物が運ばれるが、決して

—ギリヤークは夜にしか着衣を脱がず、他人の前では決して脱衣しないから、体表に現れる斑点というハンセン病の最初の徴候は見逃される。

仕事を強いることはない。

感染した家長が一つ屋根の下に家族とともに留まったため、その後、予防的措置は家族全体を巻き込む羽目に陥るという事態が、今なお聞かれる。だが、ギリヤークらの証言によると、感染した家長は細君や子供たちを慮って自らが家を後にしたのち、本格的治療に専念する事例の方が多いようだ。患者は己の病の徴候が発症した家に留められることもある一方で、他の家族員たちは別の家を新築するが、患者の頻用した物は一切そこへ持ち込まない。

ギリヤークらは感染を防止するべく、例えば食器など、癩者の持ち物を受け取るときは、それを己の指先だけで触れて、たとえ微細な粉末さえも掌に残さぬようにこれ努める。彼らが癩者に近づくとき、彼が先に声を出すことは許されぬが、感染がそのような方法でも健常者に及ぶこともありうるからだそうだ。したがって、大急ぎで会話の口火を切るのは、常に健常者の方である。患者の中には、この迷信を承知するから沈黙を守り、拒絶されて己の不利を意識する者として諦念を抱きつつ、時には微笑みながら待つような人たちもいる。たとえ長いこと健康であつたとしても、癩者の細君とは誰も結婚しない。同様に、疾病の徴候を示す男は、たとえすでに婚約していたとしても、妻帯することはないであろう。

ハンセン病に対する恐怖にもかかわらず、この病は治癒不可とされてはいない。何よりまず有効であるのは特別な食餌療法であつて、患者には米・玉子・筋子も、魚・乾製魚（ユーコラ）・苺類も与えない。他方で摂食が奨励されるのは、熊も含めた獣の肉と脂肪であるが、あらゆる食用植物、なかんずく行者大蒜（*Allium victorale*）^{正しくは *Allium victoride* L. subsp. latissimum (Prokh.) Hult}「アイヌ語では *kio* と称する」^二も同様である。小型の胡麻斑アザラシの脂肪が禁ぜられる一方で、大型アザラシ類の獣脂はむしろ推奨される。

二 サハリンでは入植者や流刑囚らがこの植物を、その強烈な臭気にもかかわらず壊血病の予防食品として大量に食する。

ギリヤークの間ではシャマンが慢性病に関しても不可欠の助言・治療者であるのが通例とはいえ、通常のシャマンが癩者の治療に携わることはいらない。彼自身が感染を懼れるからだ、とギリヤークらは言う。病をもたらしした悪霊との闘争に挑むのは、最も強力なシャマンたちだけである。以下は、アド・ティミ (Addytwi) 恐らく、ティミ川上流の Ado-Tym の誤植であろう) のシャマンがナトロ (Natro) 〔東海岸のヌイヴォを指すようである〕の老婆に施した治療をめぐる記載である。彼は夜間に巫儀を執行了したあとで、満洲からもたらされた (把手なしの) 大鍋へ裸にした患者の老婆を収め、そこへ少量の水を注ぐや、彼女の全身を——通常の鉄製ナイフを模して予めこしらえてあった——木製のナイフで引掻きだした。彼はあたかも患者の全身に巢食していると想定された蛆虫を、こうして残らず掻き出した。当のシャマンが語るところによると、これらの虫は魚の体内に見出される蛆虫に酷似するも、頭部だけは黒いのだそうだ。大鍋はひっくり返して投棄された。患者は回復したものの、5年後に別の病で亡くなった。

ニコライエフスク・ナ・アムール近傍に暮らすギリヤークからは、ランクリ (Rankri) 村のアヴルク (Awylk) という名の女の癩者を、シャマンが治癒させたという別の事例も聴取した。彼らがアムール河口にある小島へ赴くと、シャマンは患者をやはり大鍋に入れて、彼女の全身を己の爪で引掻いた。再び想像上の蛆虫が鍋の中に落下して、同様な鍋で蓋をした中に閉じ込められた。患者の着衣は投棄されて、彼女には全く新しい衣服が着せられた。シャマンは、ギリヤークらが通常は宝物として保存する中国製金欄長衣を纏って、己の巫術を執行した。同長衣は、彼が患者の治療に同意したことに對する支払いとして、彼女の親族から受領したものだ。患者は恢復し、彼女の息子ラフバイン (Lahbain) と孫たちは目下、完璧な健康状態にある。

以下に記すのは、かつてシャマンの助言なしに実行されて頗る好ましい結果をもたらすこともあった、誰もが承知する

諸療法である。

(1) 裸の癩者が蟻塚の中に据えられて、もし蟻たちが患者を噛もうとせぬならば、もはや見込みなしだから凶兆だが、もし蟻どもが全身に群がって噛むならば、なるべく長時間蟻塚内に留めると、患者はやがて恢復することがある。

(2) はるかに強力なハンセン病療法は、殺害直後の熊の血と糞である。しかも患者は自らが熊を殺したのち、直ちにその腸を摘出して、その上を転げまわることも要求される。この治療は「チエフフノウルプシユンド (čehyf nout psund)」(熊の腹で己を洗う) と称される。(樺太島東海岸の) ケクルヴォ (Kekrovo) 村のある老人は最近亡くなったが、若い頃にこの療法でハンセン病を克服したそうだった。

(3) 第三の療法は、アムール・ギリヤークから聴取できただけであるが、頻繁な転地である。彼らは森の無住地のどこかに癩者のための小屋を建て、そこまで食物を届ける。訪問を繰り返すたびに——訪ねる回数が必要最小限にとどめるよう努めるが——、もし一定の改善(何よりもまず、患者がほとんど何も食べないことで判断するそうだった)が認められたならば、彼らは遠隔の静かな場所へ患者を連れてゆき、そこに新しい小さな小屋を建てる。そのような転地を繰り返したあとで、患者が(もし男の場合は)狩りに従事するのに十分な力を蓄えるまで回復することもある。そのときは単独で生活する機会が与えられる。彼は猟に従事しながら自力で小屋を建て、もし本復が得られたならば元の家と家族の許へ回帰する。しかしながら、そのような回復期の患者が冬と出食わして、荒涼たる処女林のどこかで凍死するような事態は、一再ならず出来ていた。

恢復の望みが断たれ、疾病が患者の身体を破壊しつつ次第に進行するならば、彼は殺されるのが通例だ、とギリヤーク

の親しい友人たちから告げられた。そのような計画的殺人は、若者や婦女子に立ち聞きされぬように、氏族の有力者たちの間で内密に相談された。この痛ましい緊急事態の実行命令は、常に癩者の至近の親族——男の場合はその父親か兄弟、女の場合は父親か夫——に課された。そのような執行吏は癩者の許に姿を現すと、別な場所への移動と小屋の新築を勧める。そして患者がどこかに腰を下ろしたとき、氏族命令の実行者は、彼の背後から心臓部を狙って手槍を突き立てる。樺太島での聴取では、弓矢が使用されると聞いた。武器は葬儀抜きで放置された遺骸の脇に投棄される。実行者は可及的速やかにその場を離れたが、彼は帰宅後、たとえ誰に對してであれ、その一件については一言も語ることが許されなかった。ギリヤークにとって特徴的であるのは、——氏族の一成員が殺害されたならば、殺人者の氏族の任意の男を殺して復讐すべしという——氏族の全成員に課せられた「血讐」の義務で、それは今なお厳守されている。他方ではまた神罰に怯むことなく、己の仲間を敢えて殺めることも辞さぬわけだ。按ずるに、この事態で主役を演じたのは、一方で、その絶望的狀態が自明である癩者の苦悩に對する同情であり、他方では、氏族の他の成員らの救済のため一成員を犠牲に供するという諦念に充ちた決断でもあったろう。癩者の殺害は、サハリン・ギリヤークのジェムラク (Jemlak) が私に語ったように、当該氏族を疾病で苦しめる悪霊の邪惡な行為に終止符を打つためには最良の手段なのだ。

この原始部族の聡明な心理もまた興味深い。患者の生命を左右する決定は、当人がすでに成人であるときにだけ可能だった。(およそ二十才以下の) 若い個人は、たとえ進行する残酷な病の不可避的結末が必至であるときでさえ、敢えて殺されなかった。若者に関しては「自然治癒力 (vis medicatrix naturae)」への希望が敢えて放棄されず、その他の人々にとって危険な病原菌となりうる個々の患者は早急に排除すべしという想念を鼓舞しかねぬ、もろもろの利己主義的な個人感情や氏族感情に、この希望は勝利しつづけた。ギリヤークは、伝染病と見做された場合を別にすれば、自らの病人や心身障害者に

は概して頗る寛容である。天然痘が蔓延すると、感染者らは隔離された避難所や家屋に収容されるだけでなく、もしその他の人々が未汚染の土地へ移る可能性があるならば現地に残置されることもあった。

以下では、いまだ存命中の患者より一層怖れられたと思われる死せる癩者をめぐって、さらにどのような注意が払われたかを紹介する。病人に取り付いていた悪霊は今や自由の身となって、他の誰かの身体に侵入する機会を窺っていると判断される。そこで例えば、親族が食物を届けるべく重篤な病人を訪ねるとき——家で調理された食物が届けられることは決してなく、もたらされるのは食材だけであって、もし可能であれば、彼はそれを素材として自前で己の食事を作らねばならぬから——、訪問者は避難所か家に入る前に、病人がいまだ存命か否かを確かめようとする。もし生活の徴候が見られぬならば、訪問者は入室せずに慌ただしく取って返した。それ以降、癩者が死亡した場所では滞在も、また莓摘みや狩猟も永久に禁止された。

ギリヤークは己の死者を主として火葬に付すとはいえ、癩者が集落の近辺、はたまた家族の暮らす住宅で亡くなった場合は別の葬法が選択される。アムール流域在住のギリヤークは癩者の遺骸を大鍋に収め、同様な今一つの大鍋で蓋をして漁網で包み、この柩をなるべく遠方の森まで搬出する。さらに頻繁に行われるのは川の対岸への搬出であるが、その際も柩は奥深い森の中まで運ばれて、遺骸を納めた大鍋が水辺に残されることは決してない。病人が使用した品物もすべからく柩の脇に供えられる。葬儀の参列者たちは、その復路でさまざまな場所に二、三日宿泊しながら、長い時間をかけて森の中を彷徨する。

死亡した癩者はサハリンでもやはり火葬に付されぬが、ハンセン病に関する情報を恐る恐る伝えてくれた友人たちは、その葬儀をめぐって何も説明できなかった。彼らが語ったのはただ、葬儀の参列者らが帰路では木粉を撒いて、足跡を隠

していたこと——彼らはそれを「ピジフ ヘウヴェヴンド (pizif heuwewund)」（己の道を蓋う）と表現する——だけである。その際はまた、自分らをとらまえることに恐らくは躍起である悪霊を消耗させ騙さんがため、彼らは行きつ戻りつ、藪を跳び越し、己の村に通じる道を外れて常に迷いながら、際限なく方向転換を繰り返すのだ。復路のある地点には全員のために新しい衣服が用意してある。この地点に到着する前に、葬儀で着用した衣服はすべて脱ぎ捨て裸になると、再び己の足跡を木粉で念入りに蓋いながら、清浄な着衣に近づいてゆく。新しい衣服を身に着けた人たちは、より静粛に、足取りを速めて帰途に就く。常に蛆虫の姿を取ると想像されるハンセン病の悪霊は、木粉が目に入ることを嫌悪すると考えられていて、上記の予防措置の実践で騙されるから、己に肉薄するハンセン病感染の危険はこうして回避された、と人々は安心するわけだ。

ハンセン病の分布域に関する限り、ギリヤークとゴリド「現ナナイ」に挟まれて暮らすオルチャ（マンゲン、「現ウリチ」の間で同病は最も頻発する、とアムール・ギリヤークもサハリン・ギリヤークも断言して憚らない。樺太島では東西両海岸とも、ハンセン病はその北部で出来ていた。ギリヤークらが「ハンセン病の悪霊は金持ちを好む」^三と確信するように、罹患者は専ら裕福な人たちだった。ティミ川流域のギリヤークと、その分布域の南限「つまりタライカ地方」に在住するギリヤークらは、決してハンセン病に罹らず、またアイヌが罹患したような事例も耳にしたことがない。

遺憾ながら、L・シュレンク (Leopold von Schrenk) やL・シュテルンベルグ (Leo Sternberg) といったギリヤークの生活の

三 例えば、この病は王も伯爵も容赦しない（“Ki [qui] n'épange ni roi ni conte”）と語る、十三世紀のフランスにおけるハンセン病観（“L'epreux”, *La Grand Encyclopedie*）を参照された。

研究者はハンセン病に言及せず、ニコライエフスク・ナ・アムーレに数年滞在した（ワルシャワの）ゼーラント医師のみの「ハンセン病はギリヤークの間でまま遭遇した」と記すだけである。同医師は「父親とその息子の2名の患者」を診たものの、「別の息子らは完璧な健康者だった」^四。政府がニコライエフスク近傍に創設したハンセン病施設院を、私は一九〇五年にわざわざ訪問したが、個人的にはギリヤークの患者と出会えなかった。しかも、原住民の患者とは誰一人出食わず機会もなかった。患者の介護に挺身するラトヴィア出身の修道女である修道院長によると、何名かの患者は死亡し、幾人かは、地元当局から患者の施設院強制収容を廃止する新指令が通達されると、親族らが引き取ったそうである。強制収容策はこの国で一八九六年に導入されたが、医師会の幾つかの大会で表明された諸所見を受けて、今や撤回されている。警察力の強制のもとで、己を震撼させるような官営の避難所に入るくらいなら、辛い日々に終止符を打つべく自殺する方がよほどまだ、と原住民の患者らが述べたような事例も、決して少なくなかったからだ^五。親族が感染の危険も顧みずに患者を引き取った事実は、癩者への憐憫の情の方が、彼に對する恐怖よりも勝ったことを如実に物語っている。

私は医学の専門家でないが、今なお未究明のハンセン病因論に鑑みて^六、私にとつても未解決である興味深い設問に敢えて触れておきたい。即ち、北ではギリヤークに、また南ではハンセン病のはびこる日本人らに取り巻かれているにもか

四 Н. Л. Зеланд (N. Seeland), "О программе исследования Гиликовъ," О гиликахъ [ギリヤーク研究のプログラムについて。ギリヤークについて], *Известия Общества любителей естествознания, антропологии и этнографии [при Московскомъ университете]*, томъ XLIX [IX?]: 123, Москва [1886].

五 一八九六—一九〇九年の間に、百名に及ぶ患者がそこには滞在した (*Прикорме* [沿海州], стр. 194, Москва, 1909)。

六 ビウスツキは恐らく、ハンセン (Gehard Armauer Hansen, 1841—1912) の名前と、この疾病に関する彼の研究を承知していなかったのだらう [マイエヴィチ氏が英訳版に付された「訳注262」からの転載——訳者注]。

かわらず、アイヌがこの病をほとんど完璧に免れているのはなぜか、という問いである。

私が「ほとんど」と記したのは、少なくとも当の樺太アイヌからの聴書きによる限り、ハンセン病の症例が彼らの間にもどうやら出来たらしいからだ。彼らはこの疾病を「パラアラガ (para araga)」ないし「パライコニ (para ikoni)」と称し^八、それは日本人の疾病「ドス (dosu)、ドシ (dosi)」——日本語でハンセン病を指す俗語で、アイヌはしばしば「トシ (tosi)」と訛る——であるとも付け加えた。しかるに「パライコニ」をハンセン病と認定することには些かの躊躇を覚えた。例えば、インフオーマントの樺太アイヌらが記憶していた癩者として、サカヤマ (Sakajama) [榮濱、現スタロ・ドゥブスコエ] 村のウェントウリマ (Wenturima) という女と、トウナイチ (Tunajeti) [恐らく Tunajci (富内、現オホーツコエ) の誤植であろう] 村の男の2名が挙げられた。なお両名とも管区病院に収容されたと聞いたので、医師たちに質したところ、彼らは梅毒を病んでいたことが判明した。また「パラアラガ」の症状をめぐるアイヌらの陳述も、真正ハンセン病に関する語りとしては得心がゆなかつた。ひよつとすると彼らは梅毒のある種の形態を、「カハタイアラガ (kahatj araga)」(梅毒) に帰せられる通常の症状とは区別するのではないか、といぶかつたからだ。私の見立ては、軍医として南サハリンに5年間勤務して、数多くのアイヌを診療したドブロトヴォルスキー医師「人物については、本書に収録する同医師の論考「アイヌ」に付された「解題」を見られたい」の二つの注記に^九、その裏付けが見出された。同医師は次のように記している。

^七 日本政府は一九〇七年、ハンセン病患者の登録と治療に関する法律を施行した。当時の公式統計資料は患者数を三万と記載している。しかるに、この国の全域に散在する憐れむべき人々の看護を一手に引き受けてきたキリスト教宣教師らは、この数字を過少と見做して、少なくとも十万人以上と推計している (*Mélanges Japonais*, 1907)。

^八 *ikoni* と *araga* は同義語で「病氣」ないし「痛み」、*para* は「広い」を意味する。

^九 M. M. Дюровскій, *Аинско-русскій словарь* [アイヌ・ロシア語辞典], Приложение [付録資料], [стр.] 68-69 [Приложение къ Учен[ным] Записк[ам]

私は一八六七年、スマオ (Sumao)・コタンのマウルカリ (Maurukari) の許で「パラアラカ (para araka)」——但し「ポロアラカ (poro araka)」ではない——の症例と遭遇した。アイヌらの見解によると、この疾病が昔から梅毒とは無関係とのこと、明らかな誤解である。

彼はさらに、島を南北に縦断する一八七〇年の診療行脚で収集した罹患者の統計データを引いて、「ポロアラカの2症例——一例は脚部炎症(梅毒)で、今一例は全身に拡がったウィルス性いぼ——とも記している。ところで辞典では、間違いなくアイヌの語りをそのまま「ポロアラカではなくて」パラアラカがハンセン病」と記載している¹⁰。ドブロトヴォルスキー氏がアイヌにおけるハンセン病の存在を信じていなかったことは、アイヌに関する疾病と医療に3頁¹¹を充てるにもかかわらず、同記載ではハンセン病に全く言及していない事実¹²からもさらに窺える。一八九六〜九九年にかけてサハリンに滞在した今一人の医師N・キリロフも、ハンセン病には全く触れていない。キリロフ医師は自らの観察ならびに日本人らの著作、なかならずく蝦夷島のアイヌの疾病に関する札幌の關場医師 (Dr. Segiba) 關場不二彦、理堂、書誌は本書317頁を見ら

камъ] Императорскій Казанскій Университет, Казань, 1875). 但し、「付録資料」は未参照である——訳者注。

¹⁰ ドブロトヴォルスキー『アイヌ・ロシア語辞典』245頁。著者は正確を期すべく「「パラアラカ」に言及するときは」「だが『激痛や重病』を意味するポロアラカではない」と、その都度注記している。

¹¹ 『アイヌ・ロシア語辞典』の序文(31〜46頁)。「実際はその序章第二節「アイヌ」で、本書に邦語全訳が収録されている。言及された「3頁」は43〜45頁に該当、本書66〜670頁参照——訳者注。

¹² 遺憾ながら、同著者の小冊子 *Русская (просто) народная медицина сравнительно съ народной медициной Сахалинских Айннов* [ロシア民衆と樺太アイヌの民俗医療をめぐる比較考察, Казань (1874)] を、私は未見である。「同冊子は、前年の一八七三年に『カザン市医師会報 (Записки Общества Врачей в Казани)』に発表された同名記事の別刷りであらう——訳者注。

れたい」の著作にもとづいて、アイヌに関する小論を一八九七年版『サハリンスキー・カレンダーリ』二三に発表している。

北海道（あるいは蝦夷）のアイヌにおけるハンセン病に関する限り、ヨーロッパ人を魅了するこの部族をめぐる長短はともあれ真摯な著述をものした著者らは、私の知る限り誰一人としてこれには言及していない。だが一人ランドー（Arnold Henry Savage Landor）だけは、同病の症状を示す「アイヌの」老女と（十勝川河畔の）止若（やむわか）^{〔Yamnika〕}（原著では Yamnika Landor, p. 55）と記載。現幕別）村で出会ったと記している^{一四}。しかしながら、この著者は騎乗での北海道踏破という、実際にも容易ならざる己の旅の全体像を、誇張も取えて辞さずに描出するから、彼の大袈裟な記述に対しては、当然ながら不信の目が向けられている。

ところで、私が北海道の白老、平取（Piratori）、新冠（Nikap）、日高（Mobe）で出会ったアイヌたちは、自らがハンセン病を知り、またそれが和人の間に広く蔓延することも承知するが、アイヌは同病に罹らないとまで極言した。和人をめぐるは大昔から「トシウエイシヤム（tosi wei sisam）」（癩病みの邪悪な和人）という誹謗語さえ存在するが、私はそれを、強制労働の頃にまで遡るからかなり古い、反和人的な小歌から書きとめた。

当該案件では気候条件があるいは地理的条件全般が一定の役割を演じうると想定すべき理由は皆無である。なぜなら、北海道には和人の患者がごまんといて、また樺太島でもハンセン病は白人系住民の間で、同病に通暁する医師らによって発見されていて、誤診の余地はほとんどないからだ。なるほど樺太島中部のティミ川とその諸支流に立地する村々では同病が出来たとはいえ、ともかくアイヌの血が強力に混入している土地のギリヤークらはハンセン病に罹らなかった。樺

一三 H. Kupriov, "Aiho [アイヌ]." *Saxamnickii kalendar' za 1897 g.* [正しくは一八九八年版]

一四 *Alone with the Hairy Ainu*, p. 54, London [: John Murray] (1893) [邦訳：A・S・ランドー著、戸田祐子訳『エゾ地一周ひとり旅——思い出のアイヌ・カントーリー』82～84頁、未来社（1985）]。

太島南部は、アムール流域から日本列島へと連なる弧状帯で、白人系住民や和人らにおけるハンセン病の存否に関して、確実なデータが欠落する唯一の地域である。だが樺太島のこの部分と、島の隣接部分や北海道北部との間の自然地理的差異は、この欠落をそれだけに帰せしめるには余りにも僅少である。島のその部分におけるハンセン病の不在を告げるデータは、より脆弱な医療態勢にむしろ帰せられるのかも知れない。そこに立地する村々はサハリン中部ほど密集せず、東西両海岸の長大な沿岸部に散在して、医師がその地に姿を現すのは、法医学的案情が出来るときだけに限られたからだ。

漁期に来島する数千の日本人漁夫、そして当地で越冬する数百名の日本人たちは——もしマウカ「眞岡、現ホルムスク」の大企業家デンビー氏 (Dembi) 「ロシア帝国に帰化したスコットランド人、George Phillips Dembigh」が夏場だけ招聘する一人の日本人医師や、新規の来島者を対象にコルサコフスク「天泊、現コルサコフ」港に投錨した船内で実施される、頗るおざなりな検査を度外視するならば——一切の医療から隔絶されていた。

その大半は北海道で暮らしているアイヌと和人の混血者が、果たしてハンセン病に罹患するか否かを判断するに足る情報を、私は持ち合わせない^{一五}。しかしながら、右で開陳したデータを勘案して、アイヌはハンセン病体質ではないとの仮説を、ここに敢えて提起させていただきたい。

この事象に何らかの説明を求める人は、食習慣が主要な原因だったのでは、と直ちに想起する。アイヌはほとんど専ら肉のみを常食とする民族であったが、魚がすでに主食の座を占めるようになるのは、つい最近のことに過ぎない。昔話の

^{一五} テイミ川流域と西海岸南部に在住するギリヤークは、その血筋の半分に、あるいは少なくとも一部にはアイヌの血が混入しているが、ハンセン病に罹らなかった。

定番は動物猟や食肉をめぐる語りである。食人習（カニバリズム）は今なお伝承で語り継がれているから、かつては広く行われていたであろう。北海道アイヌの生活の専門家である英国人宣教師のJ・バチェラー（John Batchelor）は、アイヌ人口を顕著に削減させた原因の一つとして、鹿猟の禁止と漁場の剥奪がもたらした食生活の変化も想定、かくてアイヌはほとんど菜食主義者になったと考えている^{一六}。樺太島における熊・トナカイ、その他の陸海獣や鳥類の潤沢さ、ならびにそれを狩ることの容易さは、ギリヤークやその隣人のオルチャの人々に来島を促してきた。樺太島住民の食卓には、アムール流域に在住する人々の食卓よりも、はるかに頻繁に肉が登場する。

機を見るに敏な民衆の思索もやはり同じ道筋を辿った。上述のように、ギリヤークは癩者に肉食を奨励し、回復期の患者は狩りに赴き、そのときに仕留めた獲物を専ら常食とする。日本人もまたハンセン病を克服可能と信じている。私の記憶によれば、アムール地方当局が新設のハンセン病施療院への患者の強制収容を命じる上記指令を傳達したあと、ロシア系住民の裕福なハンセン病患者数名が、日本で治療を受けるべく密かに出国した。その当時、日本では内密に人肉で治療するとも聞いたが、それを信じることに私は躊躇した。しかしながら、この迷信の存在を裏付けるような裁判が一九〇六年、私が滞在中の東京で出来したのだ。中学校を卒業して外国語学校で数年学んでいた若い男が、著名な詩人の妹である一人の少女と恋に落ちたが、彼女はハンセン病に犯された家族の一員だった。自分の婚約者を発病の危険から救出することを目論んだこの不運な学生は、十代の少年を殺害し、彼の「臀肉」でスープをこしらえて、己の恋人に食べさせた。裁判は

一六 J. Batchelor, *The Ainu and Their Folk-lore*, pp. 17-18; London (1901). 著者は、自らが熟知する幾つかの集落に特徴的であるに過ぎぬ事象にもとづいて、過度の一般化を行っているとは私は考える。アイヌは概ね、海や河川で捕獲した魚を常食にしている。「ピウスツキは一九〇三年九月に札幌でバチェラーと会い、同宅に「二・三日」泊めてもらっている（拙稿「ピウスツキ年譜」本書255頁）。言及された著書は、そのときに寄贈されたものではなからうか——訳者注。

その艶っぽい背景のせいで大評判となり、日本の知人たちは、人肉食によるハンセン病根治の可能性を、民衆は深く信じていると断言した。同様な迷信は中国にも存在すると伝えられる。ともあれ十二世紀のヨーロッパでも、ハンセン病は人血を浴びることで治癒可能とする信仰が広範に流布していたことは、当時の聖者伝にも、文芸作品集にも記録されている。したがってA・ジリー氏も、癩者に着せられた中世の重罪が必ずしも「濡れ衣」だったとは限らない、と断じている(A. Giry, "Lepreux," *La Grand Encyclopédie*)。

W・シエロシエフスキ(Wacław Sieroszewski)によるとヤクート〔現サハ〕人の間では、その住民が極めて劣悪な種類の魚を専ら常食とする北部の沼沢地帯に、ハンセン病は蔓延しているという一七。

「ザバイカル地方の」トロイツコ・サフスクで十六年を過ごしたJ・タルコフツェヴィチ(Julian Talko-Hryniewicz)教授は、一九一一年にクラクフで開催された「ポーランド医師・博物学者大会」で、専ら肉食に徹するモンゴル人はハンセン病に罹らぬのに対し、魚が食料として登場する土地のモンゴル人の間では同病に遭遇する、との所見を披瀝された一八。

一七 *Dwunastcie lat w kraju Jakutów* [ヤクート人の国における十二年], s. 121, Warszawa (1900). [この著作は以下の文献に再録されている。Wacław Sieroszewski, *Słotce podróżnicze. Wspomnienia (Dziela, tom XVIII (partia), części 1-2, Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961) — 訳者注。*

「ハタルコフツェヴィチ教授の『所見』は、一九一一年七月の第十一回「ポーランド医師・博物学者大会」におけるピウスツキ報告「ギリヤークにおけるハンセン病について」に対するコメントとして、「報告要旨」の末尾に付載されている(Piśniski, "O trydzie u Giliakow," s. 286)。以下はその邦訳である(マイエヴィチ教授の「訳注277」も参照した)——訳者注。

タルコフツェヴィチ教授の発言は次の通り。ハンセン病の症例は、教授の知る限り湿潤気候のもとに出来し、しかも劣悪な食生活が原因であるようだ。大陸性気候の中央アジア高地では、発言者がそこで暮らした十数年間に、モンゴル人やブリヤート人の間で一度だけハンセン病と遭遇したのに対し、バイカル湖岸の住民やヤクート人の間では同病がより深刻であり、また中国人の許でもより頻繁に出来る。『癩者の』殺害に関しては、中国で活動するカトリック宣教師たちが、ギリヤークの場合と同様に、患者らがその苦悩を終わらせるべく殺された事例を幾つか報じている。

この問題の解決が専門家らの課題であるべきことは自明ながら、民族学者にも、人類のこの怖い疫病の研究に可能な限り貢献し、またハンセン病との闘いに己の命を懸けてきた自己犠牲的な諸個人を^{一九}些かなりとも支援することは、やはり許されるであろう。

^{一九} ビウスツキの一九一一年の報告「要旨」「ギリヤークにおけるハンセン病について」は、ロシア人入植者と、大昔から在住する原始的諸部族の双方の間で、ハンセン病が風土病である領域として、カムチャツカ半島、アムール流域、バイカル湖岸を挙げている。彼が癩者に奨励される食品を論ずる際、感染者は雌魚の摂食を避けるとも仄めかし、推奨食品としては行者大蒜 (*Allium ursinum*) にも追加的に言及している「マイエヴィチ氏が英訳版に付された「訳注278」からの転載——訳者注」。

樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より

【解説】

サハリンのオロツコに関するプロニスラフ・ピルスツキーの未刊手稿

V・M・ラティシエフ

一九〇二年七月八日、帝室科学アカデミーの委嘱を受けたプロニスラフ・ピルスツキーは、ウラヂヴオストク（浦塩）から海路でサハリンへ赴いた。彼はペテルブルグの科学アカデミー民族学博物館「現ロシア科学アカデミー・民族学人類学博物館（クンストカメラ）」のために、アイヌとウイльтаの信仰や習俗に関する標本コレクションを購入するという使命を帯びていた⁽¹⁾。派遣された学者の地位は頗る尋常でなかった。彼は浦塩でアムール地方研究会（以下ではOIAKと略記）附設博物館に勤務していたが、一八八七年三月一日（露暦）の皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座し、十五年のサハリン流刑を宣告された国事犯として、四六時中警察の監視下に置かれていたからである。この頃には流刑囚からすでに流刑入植囚へと身分が変更されていたから、OIAKの陳情によって、彼はサハリンから浦塩へ移住することが可能となる。しかし、沿海州武官知事から浦塩市警察署長に送付された命令書は、B・ピルスツキーに「……何らかの瑕疵が認められたならばサハリンへ送還すべし」⁽²⁾と指示していた。

彼は今や、人としての尊厳を完璧に踏みにじられて十年以上の辛い生活を強いられた流刑の島へ、己の意思で舞い戻るので。だが学者の情熱は、人間的情念を凌駕した。ピルスツキーは自らが立てた一連の仮説を検証し、サハリン原住民に関する新資料を収集し、いまだ一八九六年に己を驚愕させたアイヌたちとより深く付き合う機会を、逸することはできなかったのだ。

彼は科学アカデミーの委託を見事に果たし、希有な学術的価値を有するコレクションが収集された。ロシア帝室地理協会は一九〇三年、「学術への顕著なる貢献」を評価して、プロニスラフ・ピルスツキーへ小銀牌を授与する。V・V・バルトリド教授の推挙上伸書は以下のように記していた⁽³⁾。

ロシアの学術は、骨身を惜しまぬ献身的な民族資料収集者として目下サハリン島に滞在するB・O・ピルスツキーを有する。科学アカデミー民族学博物館が所蔵する樺太アイヌの民族学関係コレクションは、専らプロニスラフ・オシポヴィチ「ピルスツキー」によつて収集されたものである。

ピルスツキーは科学アカデミーの委託遂行後もアイヌの文化と習俗の研鑽をさらに積むべく、南サハリンに留まることを決断する。彼を物心両面で支えたのは、中央・東アジア研究「国際協議会」「ロシア委員会」であるが、議長はアカデミー会員のV・V・ラドロフ、そしてその書記は（サハリンにおける刑期満了後すでにペテルブルグにいた）L・J・シュテルンベルグだった。ピルスツキーとシュテルンベルグは、多年にわたる友情と、サハリン・ニヴフのフオークロアをめぐる共同研究によつて堅く結ばれていた。ロシア委員会から3年にわたつて受領しつづけた資金のお蔭で、日本軍のサハリン占領がすでに現実のものとなる直前の一九〇五年六月まで、ピルスツキーは島に留まつて仕事を継続することができた。仕事の成果は印象的である。B・ピルスツキーはそれを要約して、復命報告書に記していた⁽⁴⁾。

私が持ち帰った資料は次の通りです。アイヌに関する民族学的記載1880頁、ギリヤーク（現ニヴフ）関係320頁、オロツコ（現ウイльта）関係180頁、アムール流域関係では400頁、記録したアイヌ語テキスト870頁（その一部は未翻訳）、ギリヤーク語285頁、オロツコ語13頁、収集したアイヌ語彙一万語以上で、ギリヤーク語彙はこれを僅かに下回り、オロツコ語とマングンのオリチャ（現ウリチ）語はおよそ二千語。撮影・済み写真乾

板約300枚。アイヌの歌や物語を蓄音機で収録した蠟管30本。

サハリンで収集された膨大な資料はピルスツキー自身が後続する歳月のすべてを費やして取りまとめ、あまたな学術刊行物の基礎となった。それらの多くは今や稀覯本と化してすでに久しい。生前のB・O・ピルスツキーはアイヌ・ニヴフ・オロツコの言語やフオークロアに関する記録をすべて整理して上梓することはできず、残された手稿類の間には数篇の論文も見出される。彼の学術的業績が認められ理解されるようになったのは、つい最近のことである。数篇の遺稿(言語テキスト、手稿)や民族学的コレクションが公刊され、ピルスツキーをテーマに掲げたシンポジウム資料も上梓されている⁽⁵⁾。レニングラード「現サンクト・ペテルブルク」、トムスク、ウラヂヴォストクの公文書館には、B・ピルスツキーの遺産として貴重な資料も保存されているが、これらはいまだ研究者の視野の埒外にある。つい先頃(二九八八年)、本稿の著者はトムスクのロシア連邦共和国極東中央国家文書館において、「樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より」と題するB・ピルスツキーの大部の手稿を発見した。

オロツコは、サハリン原住民の間で最も少数で、また研究面でも最も後れた民族である。彼らの独特な文化、特異な歴史の歩みには、従前より研究者が関心を寄せてきた。オロツコの起源、その経済活動、サハリン島での分布をめぐる最古の情報は、十九世紀の日本人やロシア人の著作中に見出される。日本人旅行家間宮林蔵はそのサハリン紀行においてオロツコにささやかな一章を割いている⁽⁶⁾。G・I・ネヴェリスコイ指揮下のアムール探検隊の隊員らが記した報告では、オロツコの習俗のさまざまな側面や、彼らの起源にも言及されている。これらの民族学的情報は、G・I・ネヴェリスコイ著『ロシア極東におけるロシア海軍士官たちの偉業』⁽⁷⁾に収められている。サハリンの学術的研究はアムール探検隊以降に開始された。L・I・シュレンクは古典的著作『アムール地方の異族人について』⁽⁸⁾を執筆するが、ここでは樺太島の

中部と北部におけるオロツコ集落の歴史・民族学的特徴が記載され、また彼らの居住域の境界にも言及されている。オロツコに関する興味深い記述は、P・P・グリーンやI・S・ポリヤコフといった研究者の著作⁽⁹⁾にも見出される。

しかし、オロツコに特化した学術的労作の嚆矢は、遺憾ながら長らく未知の学者だったブロニスラフ・ピルスツキーが著した、以下に収録する著作である。

B・ピルスツキーが、サハリン中部のポロナイ川流域で暮らしていたオロツコの許を訪ねたのは、一九〇四年五月のことである。この旅が行なわれたのは、彼が意図した真摯な研究のためには最悪の時機である。日露戦争が酣で、戦争の余波はサハリンにまで及んでいたからだ。そこでは島の防衛に向けた準備が始まっていて、タライカ（現ネフスコエ）湖畔に立地する最初のオロツコ集落ヴァリザ（Vareza）で彼を待ち受けたのは、挫折である。アイヌの友人の協力にもかかわらず、彼はオロツコのシャマンとの対話が叶わなかった。翌日のムイガチ（Mujgaci）集落では、オロツコの住民が一斉に森へ逃げ込んだ。ポロナイ河口から数キロの、ニヴフとオロツコが共住するソチガレ（Socigare「日本統治下の左知」、現ユージヌイ）集落でだけは、ニヴフの旧友カンカ（Kanka）の家に寄寓したから、ピルスツキーはカンカの口添えで、自分へ向けられたオロツコらの恐怖を取り払うことができた。オロツコは「正教徒の部族だからサハリン防衛部隊の隊列に加わるべし」、ピルスツキーの来訪は「武器を帯びる能力を具えた者の名簿作成が目的だ」といった噂を、誰かが広めたことが判明したからだ。信頼関係が樹立されると、ピルスツキーは次のように記した⁽¹⁰⁾。

アイヌの言によると鴉のように臆病なオロツコたちも、ほぼ全員が間もなく私を訪ねて、宗教的話題ですら臆することなく、あらゆることについて語るようになりました。

こうして二週間が過ぎ、オロツコらとともにポロナイ川を溯る舟旅でさらに二週間が費やされたが、その間にピルスツ

キーは「コルサコフスク管区から」ティモフスク管区へ移動した。このときに過ぎた頗る有意義な時間について、彼は以下のように記している⁽¹¹⁾。

「十二日の旅の間には」彼らから多くのことを学び、オロツコ語1500語と数点の謎々、短い歌2篇と昔話1篇を採録することができました。私はまたシヤマンの巫儀に数回列席し、シヤマニズムの若干の側面を解明し、ポリヤコーフがサハリンから持ち帰り、今は科学アカデミー民族学博物館に収蔵されている偶像と呪具の、ほとんどすべての写真についても説明を入手しています。

ピルスツキーが同地を再訪したのは一九〇五年三月である。インフルエンザが猛威を奮っていた。タライカ「東多来加村、現ウスチエ」では住民の4分の1がこれで落命した。食料事情も頗る逼迫していた。飢餓が始まる。それについて、彼は痛ましげに記していた⁽¹²⁾。

悲しみはそれぞれの家族にしみわたって、先回は聞こえた笑声もなくなり、私には快適で心地よかったこの一隅からは、喜びや賑わいも消えていました。これらの辛い日々には会話さえ聞かれなくなりました。

オロツコらに発注してあった物品や、すでに仕上がっている標本は、一覽表を作成した上で、彼らの許に預けて保管を要請せねばならなかった。

ピルスツキーは一九〇五年の四月と五月を、アイヌ資料を取りまとめながらティモフスク管区で過ごした。同管区ではまた、官吏らが提供するニヴフやオロツコに関する統計情報にも目を通した。

六月十一日、日本軍占領の丁度一ヶ月前、B・ピルスツキーは小型舟艇「ウラヂヴォストク」号でサハリンを脱出した。ニコライエフスク・ナ・アムーレ「尾港」からハバロフスクに至る途上で、彼はサハリンのオロツコの間で収集した「ワリ

乙資料の補充に成功する。島ではオロツコたちの間で、アムール中流域から交易のために渡来した数名のウリチと出会っていた。ピルスツキーはウリチ語辞書の作成過程でウリチ語とオロツコ語の親縁性に注目した。今度はハバロフスクへの途上でマリインスク近傍にあるウリチのウディン (Udin) 村に立ち寄って、「この部族の言語の小辞書」を検証する。一九〇九年、OIAK運営委員会宛の手紙に、彼は次のように記した⁽¹³⁾。

OIAKの一九〇七年の『報告』30頁に、ロギノフスキーによる調査の旅以前は「オリチャ*語に関する言語学資料がほとんどなかった」とあります。私にささやかな修正をさせてください。私がいまだサハリンにいた一九〇三〇四年、親縁関係にあるサハリンのオロツコ語と対照させつつ、オリチャ語の小辞書を自ら作成しました。数篇の言語テキストも採録しています。一九〇五年には若干数のゴリド語彙も採集し、その結果、両語の親縁性を確信しました。私はこれまでロギノフスキーの調査を知りませんでしたが、「予め承知していたならば」私の資料の一部を検証のため彼に提供できたのにと、まことに残念です。これらの小辞書（語彙数は両書とも約2000語）には言語テキストや文法的注釈も付して、中央・東アジア研究「国際協議会」「ロシア委員会」の要請で、満州・ツングース諸語の言語資料を収集しておられるV・L・コトヴィチ私講師へ引き渡しました。

*「オリチャ」は、十九世紀後半から二十世紀初頭まで使用された「ウリチ」の旧称である——原著編者注。

これらの資料は現在、クラクフのポーランド科学アカデミー図書館に保管されている。その内容は、ポーランド語とロシア語で著されたオロツコ語文法解説、語数2730を蔵するオロツコ語詳解辞典、オロツコ語地名・人名詳解辞典（322項目）であるが、その過半は一九八五〜八七年にボズナンのアダム・ミツキエヴィチ大学言語学研究所から刊行されている*。

* これらの《Preprint》版は『ピウスツキ著作集』四巻、第一章「ウイルタ／オロツコの言語・フォークロア研究資料」に収録されている（注5も参照された。）[Bronisław Piuski, "Materials for the study of the Uilta / Orok language and folklore," in: A. F. Majewicz (ed.) *The Collected Works of Bronisław Piuski*, vol. 4 (*Materials for the Study of Tungusic Languages and Folklore*), pp. 113-745, Berlin & Boston: Walter de Gruyter, 2011]. また「オルチャ（ウリチ）小辞書」も同著作集四巻第二章「ウリチの言語・フォークロア研究資料」に収められている[Bronisław Piuski, "Materials for the study of the Uikhan / Okhan / Mangun / Nani language and folklore," *op. cit.*, pp. 747-945]——訳者注。

サハリンで収集された資料は、B・ピルスツキーがその後に展開したすべての研究活動の基礎となった。大半の刊行物はまさにこれら収集資料の所産である。彼がクラクフ、ザコパネ、リヴオフ〔現在はウクライナの都市リヴィウ〕で資料の取りまとめに従事する過程では、あまたの困難に遭遇する。浦塩「OIAK」へ送付した数通の手紙で、彼は以下のように記している⁽¹⁴⁾。

……ここでの生活は途方もなく困難です。私が弁える唯一の知識が当地では全く評価されません。回想記の上梓では出版者が、あるいは少なくとも数ヶ月間何の心置きもなく仕事に専念できるような資金が必要です。今はその実現に努めています、容易には叶えられそうにありません。

ピルスツキーの学術的労作はフランス・英国・〔采国〕ロシア・オーストリア・〔スイス〕日本で公刊されて、代表的なアイヌ研究者の一人と目されるも、学位、はたまた高等教育修了証すら有さぬから、大学への奉職は叶わない。彼はこの理不尽な状況を、別の手紙で次のように記した⁽¹⁵⁾。

形式が中身よりも重要なのです。学生として、私は余りにも齢を取り過ぎていますし、学者としては学位を欠いています。己はポーランド人を自任するも、外国ではロシア人として処遇され、「へへ、ポーランド人なのか」と吃驚されます。また同国人にとって私は全くの余計者、一片のパンすらねだりかねぬ物乞いが関の山です。

しかるに、あらゆる困難にもかかわらず、学者は根づめて研究を続けた。今になって初めて、彼が学術に対しどれほど深甚な痕跡を残したかが明らかになりつつある。彼の学術遺産は遺憾ながら、さまざまな国々の古文書庫に散在することが判明した。どうやらさまざまな掘出物や予期せぬ発見がさらに期待できそうである。一九八六年には、それまで知られていなかったB・O・ピルスツキーの大著「個別アイヌ村落に関する若干の情報を付載する、樺太島アイヌの統治規程草案」⁽¹⁶⁾が上梓された。

新しい著作『樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より』は、間違いなく大きな関心を喚起するであろう。オロツコに関する資料はピルスツキーが長い時間をかけて取りまとめたものであるが、その研鑽の成果は、オロツコの言語学的研究を踏まえた歴史と民族学に関する大作となった。手稿はタイプ打ちされた大型用紙65葉で、「氏族・家族・社会」「名彙論」「トナカイ飼育」「戦争」「俗信」「葬儀・墓」「呪具」「祝祭」「医療」「子供の遊び」の10節で構成されるが、未完成稿であることは直ちに現れてくる。研究の論理に従うなら、著者はオロツコの現状へと筆を進めて一定の結論を導き、今後の研究課題も然るべく提起する所存だったと推察される。本著作執筆のすべての段階は、B・O・ピルスツキーのL・J・シュテルンベルグ宛書簡*によつて跡付けることが可能である。

* ラティシエフ氏は一八九六年、シュテルンベルグ宛ピルスツキー書簡（Бронислав Пилсудский, «Дорогой Лео Яковлевич...» (Письма Л. Я. Штернбергу, 1893-1917 гг.), Южно-Сахалинск, 1996)を上梓され、二〇一一年にはピルスツキー宛シュテルンベルグ書簡も併載する『ブロンニスラフ・ピルスツキーとリエフ・シュテルンベルグ——書簡と文書（十九世紀末〜二十世紀初頭）』（Бронислав Пилсудский и Лео Штернберг: письма и документы (концы XIX - начало XX вв.), Южно-Сахалинск, 2011)も公刊された。なお、以下の拙稿も参照されたい。"Sempberg's Letters to Pilsudski (1906-1909) et alii, preserved at Archivum Nauki PAN i PAU," K. Inoue (ed), *The Letters Addressed to Bronisław Pilsudski, et alii (Pilsudskiana de Sapporo № 4)*, pp. 15-91, Nipakata (2010) ——訳者注。

オロツコ論の執筆は、早くも一九〇七年に着想されていた。サハリン資料の取りまとめに没頭する中で、彼はL・J・

シュテルンベルグへ向けて真情を吐露する⁽¹⁷⁾。

私があればこれ色目を使うことにあなたが賛成されぬことは承知していますが、生きていかなければなりませんから、どう仕様ありません。それに私自身も、読者の関心を喚起できるかも知れぬテーマを幾つか抱えていると思います。例えば、「日露戦争の準備期にシエロシエフスキと実施した北海道の旅、私たちが遭遇した膨大な難儀、わがサハリンと日本におけるアイヌの生活や統治制度の違いをめぐる私の認識、北海道開拓に関する若干のデータ」などです。

あるいはまた、サハリンで初めてのアイヌ子弟のための学校をめぐる私の回想。

最後に、オロツコの生活や習俗に関する資料は分量も僅かで、ほとんど知られていませんから、より容易かつ迅速に論文にまとめられると思います。

当面は、御覧のように心積もりをしたためました。執筆稿が収録される当てがない限り何も書けません。

一九二二年、両辞書の編集作業が終わると、B・ピルスツキーは再び論文執筆に復帰する。L・J・シュテルンベルグ宛書簡で、「両小辞書には序文として私自身の印象から何かを記す必要があるでしょうから」、オロツコとオリチャについて公開された新情報の提供を彼は要請する。サハリンから発送したオロツコの統計表の返送も求めた⁽¹⁸⁾。

一九一三年十一月にスイスから送った葉書に、彼は次のように記した⁽¹⁹⁾。

オロツコの論文を終えようとしています。これはファン・ヘネップ (Van Genep) が自分の Revue で発表したいようですが、私は「浦塩の」OIAKにも打診しました。あなたが以前に同定のため私に送付された呪具や偶像の写真(かつてポリャコフが託した写真です)を、こちらでもあちらでも印刷用に供してもよろしいですか。

B・ピルスツキーはこの仕事に熱中した結果、両小辞書の序文ではなくて、独立した大著が出来る。十一月末にはすでにザコパネからL・J・シュテルンベルグへ宛てて、彼は以下のように報じている⁽²⁰⁾。

おロッコ論の前半部をウラヂヴォストクへ送りました。ギリヤークとアイヌのハンセン病に関する小論も同様です。

後半部の構想を練る中で、彼は己の情報不足を痛感する。一九一四年五月のL・J・シュテルンベルグ宛書簡で、彼は再びこのテーマに立ち返る⁽²¹⁾。

おロッコ論はすでに半ばまで書き上げましたから、何とかして擱筆したいものです。ロシア語では多分ウラヂヴォストク「VOI AK」が印刷してくれるでしょう。あちらへは手稿を送りましたから。あなたのお手元に親族名称表はありませんか。私のものは不完全です。あなたの記録にはむろん言及させていただきます。また物質文化のイラストとしておロッコの写真も集めていただけませんか。

その後間もなく勃発した第一次世界大戦、B・O・ピルスツキーのウィーンへの、そしてその後のスイスへの避難が、どうやら構想の遂行を妨げたようである。

著作が上梓されなかった経緯は、今のところ明らかでない。それは脱稿されており、古文書庫蔵のコピーには数頁にわたって編集者の加筆が見出される。トムスクのロシア連邦共和国極東中央国家文書館では、同著作がK・J・ルクスのファイル中に紛れ込んでいたが、ルクスはハバロフスクでソ連中央執行委員会付設北方諸民族支援委員会極東全権代表を務めた人物である。遺憾ながら、文書館の職員にとっても同手稿の来歴は不詳であった。

本手稿の公刊は専門家たちの間で大きな関心と呼ぶものと思われる。同稿には独創的な着想や帰結があまた認められる

からだ。学者の創作過程や方法論も明瞭に跡付けられる。それは、サハリンの原住民をめぐる既知情報を本質的に補充する労作である。

本稿は初めて印刷に付された *Preprint* 版である。テキストは原文通りに翻刻されている。

編者注

- (1) Б. О. Пилсудский, "Отчет Б. О. Пилсудского по командировке к айнам и орокам о. Сахалина в 1903-1905 гг. [一九〇三—一九〇五年に樺太島のアイヌとオロツコの許に出張した Б・О・ピウスツキーの報告]." *Известия Русского комитета по изучению Средней и Восточной Азии в историческом, археологическом, лингвистическом и этнографическом отношениях*, № 7: 20, СПб. (1907).
- (2) Центральный государственный архив РФСР Дальнего Востока [ロシア連邦共和国極東中央国家文書館], фонд 515, *опись 2, единица хранения 4, лист 1 оборот*.
- (3) *Отчет Русского географического общества за 1903 г.* [ロシア地理協会一九〇三年度報告], стр. 110, СПб. (1904).
- (4) Пилсудский, "Отчет Б. О. Пилсудского по командировке к айнам и орокам о. Сахалина в 1903-1905 гг.," стр. 49.
- (5) Bronisław Piłsudski, edited by Alfred F. Majewicz, *Alpi Prager Texte I-IV (Working Papers №№ 10, 11, 12, 13)*, Sapporo - Ropponi: ISCAR (1984, 1985); Bronisław Piłsudski, *Materials for the Study of the Orok (Ulta) Language and Folklore I: Фонетические и грамматические замечания к языку ороков. Орокие тексты* (Transcribed from the manuscript and edited by Alfred F. Majewicz), Working Paper № 16, Ropponi (1985); Bronisław Piłsudski, *Materials for the Study of the Orok (Ulta) Language and Folklore II: Grammatical Notes on Orok. Orok Texts. Orok-Polish Dictionary* (prepared and edited by Alfred F. Majewicz), Ropponi (1987); В. М. Латышев, "Проект Б. О. Пилсудского «Об устройстве управления айнов о. Сахалина» [「サハリン島アイヌの統治規程草案」]と題する Б・О・ピウスツキの草案," *Материалы к изучению истории и этнографии населения Сахалинской области* [Препринт], стр. 131-147, Южно-Сахалинск (1986); В. М. Латышев и М. М. Прокофьев, *Каталог этнографических коллекций Б. О. Пилсудского в Сахалинском областном краеведческом музее* [サハリン州郷土誌博物館所蔵 Б・О・ピウスツキ民族学コレクション・カタログ], Южно-Сахалинск (1988); 加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号), 吹田 (1987)。
- (6) "Kita Yezo Zuseki or a Description of the Island of Northern Yezo by Mamūa Kinzo (Translated and annotated by John A. Harrison)," *Proceedings of the American Philological Society*, vol. 99, № 2: 110-111 (1955). [開宮林蔵『北蝦夷図説』の英訳である——訳者]
- (7) Г. И. Невельский, *Подвиги русских морских офицеров на крайнем Востоке России* [ロシア極東におけるロシア海軍士官たちの偉業], СПб. (1878).

本書はその後、四版を重ねた。

- (8) Д. И. Шренк, *Об инородцах Амурского края* [アムール地方の異族人に ついて], СПб., т. 1, (1883), т. 2 (1899), т. 3 (1903). [ドイツ語原典は一八八一〜九五五年刊——訳者]
- (9) П. П. Грен, "Отчет о путешествии на Сахалин [サハリンへの旅に関する報告]", *Труды Сибирской экспедиции*, т. 1, СПб. (1868); И. С. Поляков, "Сахалин [サハリン]", *Живописная Россия*, т. XII, ч. II, СПб. (1895).
- (10) Пигуский, "Отчет В. О. Пигуского по командировке к айнам и орокам о. Сахалина в 1903-1905 гг.," стр. 37.
- (11) В. О. Пигуский, "Письмо командированного на о. Сахалин В. О. Пигуского (на имя секретаря) [サハリン島へ派遣されたピウスツキの(書記宛)書簡——「復命報告」]", *Известия Русского комитета по изучению Средней и Восточной Азии в историческом, археологическом, лингвистическом и этнографическом отношениях*, № 5: 30, СПб. (1905).
- (12) Пигуский, "Отчет В. О. Пигуского по командировке к айнам и орокам о. Сахалина в 1903-1905 гг. [1903-1905 年の「復命報告」]", стр. 48.
- (13) Архив Приморского филиала Географического общества СССР [ソ連地理協会沿海地方支部文書館], фонд 3, опись 1, дело 30, листы 3, 4.
- (14) Там же, фонд 3, опись 1, дело 30, лист 22.
- (15) Цит. по: A. Kuczyński, *Subeyskie szlaki*, s. 363, Włodław-Margżawa-Kraków-Gdańsk (1972).
- (16) В. М. Латышев, "Проект В. О. Пигуского «Об устройстве управления айнов о Сахалина» [В・О・ピウスツキの「サハリン島アイヌの統治規程草案」]" стр. 131-147.
- (17) Ленинградское отделение Архива Академии Наук СССР [ソ連科学アカデミー文書館レニングラード支部], фонд 282, опись 2, единица хранения 233, лист 189.
- (18) Там же, лист 108.
- (19) Там же, лист 112.
- (20) Там же, лист 116.
- (21) Там же, лист 118.

訳者記

ラティシェフ氏の「解説」は、マイエヴィチ教授による英文抄訳稿が『ピウスツキ著作集』第一巻の「編者注 457」(721~723 頁)に収録されている。

樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より^一

V・M・ラティシエフ編

氏族・家族・社会

オロツコは、頗る明瞭に識別された幾つかの氏族に区分されている。私が聴取できた6氏族 (xalen [xal]) の名称はダヒ (Daxi [Daxi])、ヴァル (Val [Val])、トリシヤ (Torisia [Torisa/Torisa])、ないしチョレン (Čoyrn)、シユクタ (Sukta [Sukta])、ムイカ (Mujka [Mujgati])、ゲタ (Geta [Geta]) である⁽¹⁾。それぞれの氏族は各自が居住する土地の名前を冠しているという。しかしサハリンではむしろ逆で、土地はそこを占有する氏族の名に因んで命名されたと想定すべきである。例えば、ムイカという地名は——タライカ湖畔⁽²⁾とボロナイ川中流域の支流の——2ヶ所に見出されるが、かつて後者にいたムイカ氏族が、のちに前者へ露営地を移したからだという。オロツコの故地はどこに求めるべきだろうか。もしオリチャ⁽³⁾の領域だったとすると(シユレンク説)、かの地にも同じ氏族名が見出されるはずである。それらを求めて、一八九七年の国勢調査データにもとづくS・パトカノフの著作⁽⁴⁾を参照するも、オリチャに関する資料中に、私は上記の氏族的名字を発見できなかった。だが国勢調査の記載が完全で信頼に値するか否か、定かではない。その作成者らは、そ

一 Bronisław Pilsudski, *Из поездки к орокам о. Сахалина в 1904 г.* (Препринт), 76 стр., тираж 700, Южно-Сахалинск: Институт морской геологии и геофизики, Дальневосточное отделение Академии наук СССР; Сахалинский областной краеведческий музей (1989). A・E・マイエヴァイチ氏による英訳が『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』一卷に収録されている (Bronisław Pilsudski, translated by A. F. Majewicz, "From the report on the expedition to the Orok in 1904," *The Collected Works of Bronisław Pilsudski* 1: 618-677, 1998) ——訳者注。

二 «Заниски Императорског[о] Географическаг[о] Общества по отъѣзду этнографин», т. XXXI [С. К. Патканов, *Опытъ географич. и статистич. тунгусскихъ племенъ Сибиря*], ч. II, Прочія тунгусскія племена [その他のシベリヤ系諸部族], СПб., 1906 г., стр. 125 и 128.

の場にたまたま居合わせた正確さにほとんど無頓着な人々で、頗る些細な記載の学術的意義は理解しないからである。私は、オリチャのヴァル氏族がアムール流域のモンゴリ (Mongol) 村に在住することを突き止めた。トリシヤ氏族は、もし絶滅していなければ、その起源伝承が伝える土地に現存するはずと推測される。一九一一年にサハリンを踏査したV・N・ヴァシリエフ氏は、ある(北の)オロツコから、自分の氏族はアムグン川源流のゴリユン (Gorjun) 湖地区から渡来したという証言を入手することができた^三。オロツコの氏族をめぐって私が聴取できたことは以下の通り。

トリシヤ氏族。

サハリンでは「北東海岸のヌイ湾の近くにオロツコの夫婦が三人の息子とともに暮らしていた。末の息子がアムール流域へ赴き、そこでギリヤーク娘に恋して所帯を持った。彼らからギリヤークの一族が派生してサハリンに広まり、スラヴォ氏族となる。同氏族は「トリシヤ・ハラ (Torisia xala)」、即ちオロツコのトリシヤ氏族と親縁関係にある。中の息子はそれ以前にアムール流域へ行き、オリチャの娘を娶ってそこに留まる。彼に由来するオリチャのトリシヤ氏族は、オロツコのトリシヤ氏族を親族と見做している。この氏族の成員は今もアムール流域から来島し、最近ではソフリースク近傍のオソ (Oso) 村から一人のオリチャが訪れた。長兄は家に留まって、オロツコのトリシヤ氏族を継続した。私のインフオーマントのパリヒン (Palixim [Palixim (Plis)]) の祖父は、南のオロツコの許へ赴いて、息子たちのためにシュクタ氏族から嫁を取るようになった。

ゲタ氏族については「戦争」の節で後述する。

シュクタ氏族のオシエバ (Oseba [Oseba (Plis)]) から聴取した同氏族に関する話は以下の通り。

三 Ошем В.Н. Вспоминания к изучению и описанию [V・N・ヴァシリエフのギリヤークとオロツコの許への出張報告] СШ6, 1912, стр. 5.

一人のオロツコがタイガで、トナカイのように苔を食する裸人を見付ける。彼を革紐でとらまえて家まで連行し、自分の氏族に加えた。この裸人からはオロツコのシユクタ氏族が派生する。先住者の方に由来する氏族は、ギリヤークのトゥルン (Turn) 氏族になった。

既述の両インフォーマントは、何よりもまず部族の生活や信仰、慣習をめぐって証言してくれたが、他の諸氏族に関しては何も語ることができなかった。按ずるに、いまだ必ずしも友好的ではない氏族について喋々した場合、その事実を知った先方から寄せられる苦情を慮って、彼らがそれを自粛したことは大いにありえよう。

それぞれの氏族は——オロツコが「エジハ (ydzigy byshy (Pis), ajax (Yam))」と称する——自前の守護霊「主を有するとされている。私はトーテム論をめぐる理論面での錯綜に鑑み、事がトーテム的な諸表象や諸区分にかかわるや否やという問題では、判断を留保する。それにまた私の収集した資料は余りにも少なすぎて、自信の持てる結論を導けぬからでもある。ともあれ、ポロナイ川の舟旅の最中にポヒヒノ (Poxino) という名のオロツコから、私のギリヤークの友人カンカ (Kanka) の協力で首尾よく訊き出せた話の諸断片を紹介する。因みにポヒヒノはカンカを同族者と認めていた（上記のトリシヤ氏族の項を参照されたい）。この「エジハ」(ギリヤーク語で「クシ (kys)」、またトンチないし西海岸方言では「クルン (kurn)」) は、保護下の人たちを常に助け、シヤマンの手を借りるまでもなく病気を治すこともできる。獣を仕留める度ごとに「エジハ」へ向けて、獲物が斃れた場所へ心臓の一片を投じる。同片を捧げる際は、「エジゲ バロ (ydzige baro [ajaxe baaru (Yam))」、即ち「主よ、お取りあれ」と唱える。新月 (agbindzibe [agbini bee (Yam)]) と満月 (tjesobe [teeso bee (Yam)]) の折は必ず、何らかの食物——常に最上の料理か最良の断片——を庭で投じて（但し火中に投じてはならない）「エジハ」に対し供犠をおこなう。この守護霊は空を飛び、地表を歩き、水上も歩行する。彼の姿は普段は見えないが、何らかの不幸を予告するときだけは、

庇護下の氏族に属する誰かに姿を見せる。しかしその際も本来の姿ではなく、老女や熊、またはその他の動物に仮装するのだ。この守護霊が不幸を追い払うべく姿を現わしたあとや、守護霊に助けを求めるときは、最上の料理をゆで上げ、ばら撒いて、彼へ犠牲を捧げるが、オロッコはその供犠を「チウチイ (ciuci [caawučuri Yam])」(ギリヤークは「チュフチュグンド (čuxčugund)」)と称する。オロッコのパリヒン (Palixin) は重病に罹ると、己の「エジハ」のためにトナカイを屠った。守護霊にはまさに何が、またどのような状況下で与えられたのかという私の問いに対し、パリヒンは詳細の開示を拒んだが、与えられたのは心臓の一片だったと推測される。これらの益々忘られてゆく興味深い旧習の細部にわたる究明は、オロッコや、サハリンの異族人全般の間で多少とも長期にわたり在住することを希望する旅行者や、民族学者らの今後の課題である。

トリシャ氏族は守護霊として「コーリ (kori [kōri (Pis), koori (Yam)])」という名の「鉄の翼を持つ」大鳥を有するが、それが飛び立つと太陽は完璧に蔽われてしまうそうである。シুক্তタ氏族の守護霊は「虎 (dussy [dusisa/dussy (Pis), duso (Yam)])」、ヴァリタ (Val'ta、「ヴァルの分派、以下を見よ」) 氏族もやはり「虎」、ムイカ氏族のそれは「メルガダ (myrgydy [myrgydy (Pis), mangeda (Yam)])」という名の存在、即ち「山の人」——「すべての野獣の主」——である。ただシャマンだけは巫儀の最中にそれを見て、頗る長い顎鬚を有する人の姿をしていたと語ってくれた。

この極めて興味深いテーマに関する私たちの対話は中断されて、その後にも何度も試みたにもかかわらず、私はもはや再開することができなかった。したがって、オロッコの信仰のこの興味深い領分をめぐっては、ただ諸断片の紹介だけにとどめる。

ダヒ氏族、ヴァル氏族、トリシャ氏族、ゲタ氏族は、私の聴書きによれば、ヌイ湾とナービリ湾のツンドラと、それ以

北——ダヒ氏族はツンドラの最北地域、ヴァル氏族は最南端、トリシャ氏族はその中間地域、ゲタ氏族はトリル (Toril [Pis]) 露营地——に在住するという。南方のポロナイ・ツンドラでは、シユクタ氏族がポロナイ川の大支流であるシシカ (Siska [Siska/Si/Sikka (Pis)], 即ち日本統治下の敷香) 河畔、ムイガチ (Mugaci) ないしムイカ氏族はタライカ湖近辺にそれぞれ在住する。これら両氏族は最も古くに南方へ移住したグループと見做されている。トリシャ氏族は北方のものと同一集団であるが、数名が僅か3世代前に北から移住してポロナイ河口付近に住みついて以来、徐々に南部に定着していった。北からはまたヴァル氏族の教家族も南下してきて、独立のヴァリチ (Valci) ないしヴァリタ (Valta [Waa(U)eece (Pis)]) 氏族を形成し、タライカ湖の北東岸に住みついた (その時期については聴取できていない)。南方諸氏族からは、一九〇四年のことと伝えられるがムイカ氏族から1名、ヴァリタ氏族からも1名が北の諸地域で暮らす一方で、ダヒ氏族出身の三人兄弟は南部地域のヌグル (Nuguru [Nuguri (Pis)], 野頃) 露营地に居住していた。

上で列挙したデータから、各氏族はかつて明確に一定の領域を占有し、他のいかなる氏族といえども、同領域を利用することはできなかったと結論できる。ツンドラを区分していた痕跡——トナカイの牧地や猟場の縄張り——は、以下のことから見て取れよう。一八六〇年代にツングース⁽⁴⁾が来島して以降、彼らとの間で協定が結ばれて、ティミ川左岸のツンドラの利用権はツングースらへ引き渡される傍らで、オロツコらは右岸のツンドラに対する自らの利用権を確保した^{四〇}。しかるにツングースたちは、彼らの設定した条件に敬意を払わず、己のトナカイ群にとって好適な牧地であれば見境なしにサハリンの全土を渉猟しだした。やがてはオロツコたちも明らかに、あらゆる点で畏怖の念を喚起せしめる己の遠い同

四 拙稿「Нужды и потребности Сахалинских Глизов [サハリン・ギリヤークの困窮と欲求]」, *Записки Императорского Охотнаго Имп. Русск. Леоп. О-ва* 1898 г., т. IV, ч. IV, стр. 24, [Хабаровск] を見られた。『本書には邦訳稿「樺太ギリヤークの困窮と欲求」が収録されている——訳者注」。

族者らの轍を踏みだしたから、今日の南部ツンドラではすでに乱脈極まりない牧地利用が横行している。一九〇四年に南のオロツコが在住していた7露営地のうちで、同じ氏族の成員だけで構成されるのは四箇所のみ、その他の露営地では——例えばシユクトウ (Šuktu [šdku] Pils), Sookto (Yam)) など、シソチガレ (Sočigare [sochare/sačigar/sačeer]) 左知 (Pils)) 村ではシユクタ氏族とトリシヤ氏族、ムイガチ村では同一名の氏族と、父親を介してオリチャのジャクスリ (Džakusui) 氏族にも帰属する一家族、そしてヌグル村ではムイカ、ヴァリタ、ダヒといった——さまざまな氏族の代表者が雑居していた。

オロツコの氏族は、父系氏族を特徴づける独自の性格を有する。したがって、血族は何よりもまず、ただ父系だけを辿って承継される。同一の氏族に属する者は、全員が氏族長の単一の(男性)祖先に溯る起源の共有意識で結ばれていて、全員が物的・法的諸案件では互いに助け合う義務を負っている。血讐、(アイヌとの)対外戦争や部族内の氏族間抗争における協力、異氏族の女の略奪に際する支援は、同一氏族のすべての成員に義務付けられる。各員はたとえ最貧者であろうとも、己の親族たちから庇護される権利を有した。とはいえ、幸運に恵まれるも、拡大する家政に見合うだけの人手が不足するような氏族員にとって、彼は常に逃え向きのただ働きの助っ人でもあった。宗教的観点からすると、オロツコにおける氏族の意味は、熊の殺害に伴う最も盛大な祭事において、氏族の成員たちが主人役を遂行するところに見出される。彼らはまた、それに先立つ数年間協力して仔熊を養ったように、祭りの出費でもやはり応分に分担する。ただ彼らだけが、仔熊の頭に飛びかかる権利を有し、すべての骨が集められて、森の中の、そのために特別に指定された場所へ搬出されるまで気配りを怠らない。別の氏族へ婚出した女たちとその子供らは、主人としての権利を全く有さない。

オロツコの氏族を支配するのは、絶対的な外婚規定である。昨今ですら、オロツコらはほぼ全員が正教徒であるにもかかわらず、たとえ正教会の宗規に照らして婚姻が許容されるような親族範疇の事例であっても、誰一人として己の氏族か

らは嫁を取らない。いかなる娘も、他氏族に婚出したあとは父親や兄弟の氏族の成員権を喪失するとともに、自分の夫の氏族の一員となる。

オロッコの氏族は女たちを交換してきた。例えば南のトリシャ氏族ではシুক্তタ氏族から女を受け取り、その逆もまた然りである。ムイカ氏族とヴァリタ氏族もやはりそのような二重の絆で結ばれていた。ただ二つの家族の間だけで女を交換するような事例も決して珍しくなかった。そうすれば、夫かその家族が妻の家族に支払うべき婚資が不要となるから、結婚はそれだけ容易となるわけだ。姉妹を夫の兄弟に娶せるといふ風習は宣教師たちの非難的だったと語ってくれたのは、オロッコらの近くで暮らすロシア人入植囚たちであるが、彼らとて、そのような親族の絆で結ばれた夫婦が現存することまでは恐らく見抜けなかったであろう。今日ではかつてのように、選択されたただ一つの氏族から嫁を取るといふ原則を実行することはもはやない。一方で、氏族同士を離反させてきた非友好的相互関係や、かつて繰り返された戦争の記憶はすでないが、他方では、ツングース、日本人、ロシア人との接触によって伝統的基盤が揺るがされ、キリスト教の受容は、長年にわたり大切に守り伝えてきたかつての異教的生活様式とは手を切るように説きつつ巡回する、宣教師がお経のように唱える義務も彼らに課したからだ。

オロッコには、生まれたばかりの赤ん坊、また一般には夫婦としての同居に不適な若年の少女をめぐって、結婚を約束する慣習はなかったと私は断言された。今日の少女は、およそ十六才から二十才までに結婚する。通常は若い男女自身が予め合意したのち、花婿は花嫁の肉親のもとへ初めて赴いて、彼女を自分に与えるよう求める。彼はしばしば、すでに年配の男性に仲人役を依頼する。妻のため直ちに支払うべきもの（婚資）が何もない貧しい男は、自前の所帯を営み、自分と与えられた女の代価として少しずつでも支払いが始められるようになるまでの1〜3年は、岳父の家に留まる。己の岳父

の許で過ごす間の隷属状態は、自由を愛するオロッコにとって苦痛であるから、妻に対する権利の獲得を他民族における労働で弁済させるような状況を世間は是認しない。そこで自尊心の強い若者は可及的速やかに自前の家政と、岳父に従属しない自活を開始するべく全力を傾ける。裕福な男は、自分が惚れた娘の両親から同意を得るや、岳父の家で互いに饗応しあつた翌日には、すでに彼女を連れて帰宅する。オロッコは妻の代価の支弁に際して、格別な協定は結ばない。もし乙女の両親が明確な要求を突きつけようものなら、世間は物笑いの種とするだろう。「娘の支援のもとで蓄財なされよ」と告げてやるのが至当である。「プテ・ジデフトウイチン (Put-dai dyf tuičin [put-y-ji dyf tuičin (Pis), putæ33] …… [Yam])」(赤ちゃんからお金をこしらえた) は、このような事例を当てこするオロッコの決まり文句である。しかしながら両親が支払いの僅少性か、余りにも長い支払期間に対して不満を述べることは構わない。不満の表明は、女婿に十分伝わるような形でなされるが、オロッコの間では岳父や、女を提供する氏族全体との友好関係の維持が、恐らくはまだ幼少期の愛着を捨てきれない女自身のためにも必至と見做されるから、暗黙の不満ですら驚くほど有効であつて、女婿は岳父の心を鎮める方策をあれこれ模索する。あるオロッコが私に語ったところによると、女婿が、不満をかこつ己の岳父に対し何を差し上げたら満足してもらえるかと訊ねたが、「自分で考えろ、お前が考えるべきだ」と言われたそうである。妻の代価としての支払いが通常はトナカイ・舟・鉄砲・衣服・大鍋、またオロッコの家財道具を構成するさまざまな品物でもなされるが、サーベルや毛皮などもそれに含まれる。婚資(カルイム)として引き渡される品物の多寡は、一方では花婿の資産に、他方ではまた女の質にも左右される。健康で働き者、また裁縫や毛皮加工で令名を馳せる女には、脆弱、怠惰、あるいは月並みな女よりも高額な支払いが求められる。裕福な家の娘は、父親から贈られたトナカイやさまざまな衣装からなる「持参財」を新所帯にもたらず。

つい先頃までは一夫多妻がオロツコの間でも行われていたが、宣教師に対しては秘匿され、人口調査に際してもきつと当局者の目から逃れていたろう。だがオロツコの一夫多妻は、それが存続していたその他の諸民族と同様に、日常的事象というよりむしろ原則や例外に過ぎない。私が知りえた一夫多妻の3例は、以下の記述で明らかのように、公的調査ではむしろ掌握されていない。一人の正教徒のオロツコは妻を二人（一人は非正教徒）有し、今一人のオロツコは二人の正教徒の女を妻と見做した（正式にはむしろ一人だけが記録された）。第3のオロツコでは二人とも非正教徒だった。裕福な人々ばかりで、家内労働で働き手が必要としたから妻を三人も抱えていた。彼女たちは同じ幕舎内で概ね仲良く暮らしたが、なしるこのように複雑な家庭内では、愛情も嫉妬もさぞかし少なかったであろう。

だがオロツコの間でも、彼らの比較的低位な精神的発達段階にもかかわらず、ロマンチズムにまで達するような深い愛情や、相手への強烈な憎悪を惹起する情熱が登場していた。相思相愛が余りにも強くなり過ぎた男女が、全員を束縛する道徳律を踏み外して、天然の隠所のどこかで相互愛の極致を満喫すべく遠方へ逃亡することもままあった。妻に逃げられた夫は——既婚女性との色恋沙汰だけがこのような結末を持ちえたから——己の親族たちの協力も得て搜索を開始する。そのような追跡行動の成否は——それに参加した人たちの熱意、張本人に対する尊敬の度合いなど——あまたな条件に左右された。追跡行はしばしば殺人で決着した。血讐の掟は殺された男の氏族の成員らに、同様に復讐することを義務付けるから、それを背景とした長きにわたる血腥い制裁や襲撃、つまりある種の戦争が繰り返された。私の耳がほんのチラリと聴きとめた、シュクトウ氏族とムイカ氏族の間、またトリシヤ氏族と・・・の間でかつて繰り返された戦争の原因は、きつとそのようなものだったろう。女を奪還する際は、熱情に駆られた流血の反復を回避するべく、第三の氏族に協力を要請することもあった。私はその究明に成功しなかったが、それは女の父親と兄弟たちの氏族に違いなかったと思われる。

彼女の代価（婚資）をすでに受領した同氏族は、新たに出来した事態に対処すべく、その婚資を女に去られた夫へ返却することを余儀なくされるであろう。そのような物質的要因はどうやら強力に奏功したようだ。なぜなら、そのような助つ人の氏族は、二人の逃亡者に追いつくや女を縛り上げ、そのまま夫に引き渡して、逃亡した女をかなり厳しく処遇すると伝えられたからだ。もし逃亡が繰り返されたならば、そのような女は憤怒の余りに殺されることさえあった。不義を働いた妻もやはり、しばしば命が奪われた。そして世論は今なお、不貞の妻とその愛人を殺した者を勇敢な男と称賛するであらう。だが妻たちの方も、嫌悪を催すような人たちと暮らすことを強いられるや自暴自棄となり、調理中の食物に毒草を加えて、己の冷酷な夫を毒殺していた。そのような毒殺事件は必ずしも珍しくなかったそうだ。しかし、その罪が発覚するや否や、毒物を混入した女は容赦なく惨殺された。犯罪の究明にどのような手段が行使されたかについて、私のインフォーマントは説明できなかった。存命の古老たちが今なお記憶する最後の数例は、六十〜七十年前の出来事である。

購入した女の所有者である夫は、もはや生活の支えでなく、重荷と化して鼻につく己の妻を、もし望むならば里に帰すこともできた。だが妻は追い出しても、子供たちは手元に残した。これもまた、父系氏族や家父長制家族の今一つの特徴である。夫婦関係がたとえどんなに耐え難くなろうとも、妻がこれを解消する権利を持たぬことは言うを俟たない。夫の死後、女は夫の実弟の、はたまた従弟ないし又従弟の妻になった。したがって、レヴィレート (levirate) の誤植であろう。婚は第3の成婚形式であった。兄の妻が、（ギリヤークの慣習のように）兄の存命中から弟たちの妻でもあったとの主張については、しかるべきデータを持ち合わせない。私の質問に対する答えは否定的なものばかりだったが、このような関係をキリスト教徒は非難するというオロツコの意識がそれに影響した可能性はありえよう。ギリヤークらがオロツコのものを見做している、二人の兄弟と一人の共通の妻をめぐる伝承を、私は何人かのギリヤークから直接に採録した。したがって、

五

そのような習慣がオロツコの間に実在したか、伝承がその箇所ではギリヤーク風に潤色されたかのいずれかであろう。ギリヤークの間では一妻多夫制（ポリアンドリー）が今なお隆々と存続している^五。ともあれオロツコの間では、一人の男の妻の代価が全員の協力で、舟や大鍋や宝物の形で支弁されている。一人の兄弟の死後、その妻が、彼女の両親に対する婚資の支払いに参加した今一人の兄弟へ譲られることは、別に驚くにあたらない。

夫は妻を亡くしても、生涯で三人以上の妻を持つことはできないとオロツコは考えている。もし四人目の妻を娶るならば、自身が彼女よりも先に急死するであろう。女の方は連続して四人の夫の妻となるが、四人目の夫に先立たれたあとは寡婦として留まらねばならない。さもないと5番目の夫との生活は頗る短くて、彼女は直ちに死ぬであろう。男と女の権利におけるこの違いは、相異なる性に専らかわる上記の数字が象徴するとされた対象——例えば、男の有する矢尻は三股奇数だが、白樺樹皮製の女の容器は四つ〔偶数〕の角を有する——の指示に根ざしている。オロツコはその際、概して女は男よりも多くのさまざまな願望を有するから、彼女には何ごとにつけても、より多めに宛てがわなければならぬのだと付け加える。しかるに一九〇四年当時のオロツコの間には、すべての先妻を亡くして5番目の妻を有する男がいた。だが彼はシャマンで、概して格別な男だったから、通常の生活規範を彼に適用することはできなかった。

五
 L・シュレンクは著書『アムール地方の異族人について』（3巻、19^{二六}）で、ギリヤークにポリアンドリーの存在を認めていない。しかるに、尊敬すべき著者の観察もこの点は正しくない。当該問題では今一人のギリヤークの権威L・J・シュテルンベルグに、私は全面的に賛同する。彼の論文「ギリヤーク」（*Этнографическое обозрение*, 1905, 別刷 21-12^{二七}）を参照されたい。「シュテルンベルグ論文の書誌は一部に正確な情報を蔵する。正しくは Лев Яковлевич Штернберг, "Тяжкая", Этнографическое обозрение № 1: 1-12 (1904) 》、引証された箇所は恐らく pp. 21-22 であろう。同論文は一九三三年に上梓された Л. Я. Штернберг, Тяжкая, орош, голынь, негодилцы, динь: статьи и материалы (Хабаровск: Дальний) に再録されている——訳者注。

女の主導する離婚など、かつては全く論外であった。彼女は己の意思を表明できず、親族とても彼女を代弁してくれなかった。彼女の唯一の庇護者は、自分を果敢に略奪して、己の行為の審理を一身に引き受けてくれるような男だけだった。だが今日では、女が己の運命について不満や抗議を申し立てるような事例もしばしば聞かれる。オロツコの間で育てられたのち、ロシア人の許に嫁いだ若いギリヤークの女が私に語ったところによると、まずは己の親族（実父は不在であった）によって、一頭のトナカイと数着の満州産長衣を婚資として支払ったオロツコの男へ引き渡されたという。一年後、彼女が貧しいオロツコの家族における己の窮状を母親へ訴えたので、母親は婚資を返却して彼女を引き取った。今一つの最近の離婚案件には、私自身がかわることになった。一九〇四年五月、ナイバル（Najnyr [Najyr] (bis)）集落のオロツコ女プナク（Punyk [Punyk] (bis)）が私を訪ねて来て、ムイカ集落のオロツコ、ドゥクシン（Dukšin）は彼女の娘オリガ（Ol'ga）を虐待すると訴え、娘と「持参財」の返還に応じるよう同オロツコを説得することを求めた。このオロツコ女を私の許に連れてきたのは、ティミ川流域にかつて住んでいた旧知のギリヤークたちであるが、件のオロツコに服従と、母親の希望の即時履行を命ずる「書付け」を記すよう、私を説得しだした。彼らは、十年ほど前に出来した事例を引き合いに出した。そのときは封筒に収めた一片の紙切れを私から受け取ったギリヤークが、「それを振りかざして」己の妻を掠奪者から取り返していたからだ^六。私は、あらゆる争点を慎重に審理し、双方の説明を最後まで聞くことの重要性を私の友人のギリヤークたちに納得させるべく努めて、そのような提案は断乎として断った。そして調停判事の来訪を待ち、同判事にオロツコ女の訴状の審理を委ねるよう助言した。しかしながら、事態は一刻の猶予も許さず、この僻遠の地を調停判事が訪れるのは、何らかの殺人事件が起きたときだけだから、憐れな女の身に降りかかった悪人どもの不当な仕打ちからは、私が彼女を守つ

六 拙稿「サハリン・ギリヤークの欠乏と欲求」[Zan[nekn] Il'pnamlypekarov] Otr[izna] Pycek, Icorp, O-ra, t. IV, b. IV, ctp. 32) [本書 116-117 頁参照]。

てやるべきだというのが彼らの反論だった。私の友人らは、私の落とし所をよく心得ていた。そこで私はいたし方なく、もし双方の合意が得られればという条件で調停判事を引き受け、踏みこじられた正義を回復することに同意した。安堵した一同は、ただ合意成立のみを念じた。数日後、彼らは愛くるしい若いオロツコ女を連れて来ると、彼女の夫も同時に父親を伴って到着する。審理は、私の最も親しいギリヤークの友人の一人の、ソチガレ村にあるカンカの幕舎で厳粛に進められ、十名以上のギリヤークとオロツコが列席した。オロツコ女はすでに到着して、戸口脇の女のコーナーに遠慮がちに腰を下ろしていたから、そこへオロツコの父親が入室するや室内は一瞬静寂となり、何が起るかを全員が見守る。ギリヤークたちはすでに朝方から、オリガを手放すことには両オロツコとも不同意で恐ろしく不機嫌だったこと、また両者とも奔放な性格で有名だから、掴みあい覚悟するよう、私に警告していた。父子の方からオリガへ容易には跳びつけぬよう、私は二人の若いギリヤークへ戸口に立って警戒するよう命じ、険しい顔で入室するオロツコらには、成るべく私の近くに坐することを求めた。審理では、ギリヤーク・オロツコ・アイヌが共住しオリチャも来訪する、この地区での共通語であるアイヌ語が採用された。オロツコらは喫緊の見解と希望を私に向けて語りだした。彼らの許でオリガは楽しく暮らしているのに、ギリヤークらが彼女を略取すべく唆していると断言する。私は双方の欲求充足のみを願っており、もしオリガが満足で、彼らとの暮らしを希望することが判明するならば、ギリヤークたちには、彼女をそっとしておくよう説得に努めようと答えた。訊ねられたオリガは目を落とし、おずおずと小声ながらきつぱりと、よりを戻してドウクシンと暮らすことは望まないと答えた。父親の老人はかつとなつて跳びあがり、我慢できずにオロツコ語で叫び出した――私には全く理解できなかった――が、一分後には激昂して幕舎から跳び出した。残った息子は私と対話を続ける。私は彼に向つて、オリガは彼と正式に結婚したのではなくて、彼女の夫だった従兄の死後に、レヴィレート権により初めて彼に譲られたの

だから、彼女の意思を尊重するよう説得にこれ努めた。ドウクシン（原文では *Duksan* と記載）がオリガを本心では愛しておらず、彼とその父親が彼女を自宅に留める動機は、かなり大きな彼女の「持参財」——3頭のトナカイ、あまたの衣料品、寝具、容器類など——にあった。したがってオリガには、最も大切な己の自由を獲得するべく、自分の財産の一部を放棄するよう説き伏せる。一方との、次いではもう一方との懇談が一時間以上延々と続けられた。遂に、双方からの譲歩が成立する。オリガは2頭のトナカイは諦め、1頭だけを確保することに同意し、夫の生前に獲得された家財道具からは僅か数点を、そして生家が提供した「持参財」はそのすべてを取り戻すことで手を打った。すべてがオロツコにとって必須条件と見做さるべく、私は紙切れにすべての決定事項を記載して、オロツコに署名するよう命じた。件のオロツコはそこへ「十字」を記入するが、丁度そのときチフメネスク哨所から到来した電信技士は証人として署名した。私は数ヶ月後にとあるギリヤークの幕舎で、仕合せ一杯のオリガと出会ったが、彼女は私の友人の細君とともに、私へ礼を述べた……。しかしながら、ギリヤークの古老数名——オロツコの古老らもきつと同様に考えたであろう——はオリガの母親を非難すると語った。一旦、女の代価として婚資を受領しておきながら娘は取り戻して、婚資を今一度得るべく彼女を別の男へ引き渡すなんて、ひどい悪習だというのである。オロツコは己の妻を打擲し、また彼女の生活は抑圧されてもいるが、古い世代の人々はこの問題を些かも案じてはいない。

オロツコの女の地位は、もとより羨むべきものからは程遠いが、一方ではキリスト教の布教の影響で、他方ではまた植民事業や、——白人では流刑囚の、そしてまた日本人の——男たちの大量流入の圧力の下でも次第に改善されてきている。これら外来の男らは女たちの側から一時的関心すら集める傍らで、彼らの部族の男たちの面前で女の意義を増大させ、多くの譲歩を強いて、彼女の人格尊重を促すようにも仕向ける。教会の影響は若年の少女らにより大きな自由をもたらした。

旧来の親族体系が消失してゆく中で、八、十才の少女が実の兄弟や(父方の)従兄弟らとともに遊ぶことを妨げる圧力も益々低下してゆく。だが昨今でも、かつては厳守さるべき掟だった兄弟・姉妹間の対話回避「人類学用語でアヴォイダンス」というを、私は年長者の間には認める。実の姉妹は長年にわたる別離のあとでも、兄弟に挨拶として接吻する権利を有さぬとも告げられた。男同士や女同士ならば、そのような場合、両親が子供らに對するように接吻を交わしている。通常の生活ではただ子供たちに對してのみ接吻は行われている。夫は他人の面前や昼間に妻とは決して接吻を交わさない。とはいえ東洋の民族はすべからず、この余りにも親密に過ぎる愛撫をみだりに人目に曝してはならぬと考えているわけである。

兄弟・姉妹間の厳しい関係規制にもかかわらず、オロツコの間では近親相姦に関する伝承が伝えられている。例えば、オロツコのコシユンギン(Kosjungen)からは以下のような伝承を採録した。二世代ほど前のことだが、トゥダシカ(Tudasika)という名のオロツコが己の姉妹と関係を持った。人々がそれを知ると、全員が兩名を忌避し、家から追放して、二人に森の中の彷徨を強いた。彼らは間もなく落命したと考えられている。このような自分の仲間からの追放や、確実な死が約束される所への放置が、償う余地のない罰であることは自明であるが、それは同時にまた、女に對する最も恐ろしい復讐でもあった。アイヌたちから聴取した——そこで語られるのはツングースであるが、オロツコにも同じような風習があったとアイヌらが語る——伝承によると、ある男が、己の愛撫を拒絶した女に復讐するべく、彼女を冬の屋外へ放逐したという。その女はすでに庇護者を亡くし、彼を頼って身を寄せていた憐れな寡婦だった。そして不幸な女は酷寒の中で凍死するであろう。アイヌらはこの話の落ちとして、それ以来、ツングースの女たちはそのような結末を怖れて、彼女らに關係を迫る男を決して拒絶せぬばかりか、彼女らの方から異性の代表者に言い寄ることさえあるとも付け加えるのだ。オロ

七 以下の拙稿を参照のこと。Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore, 1912, Cracow, pp. 137-142.

ツコたちが断言するところによると、彼らの間でも昔は、見知らぬ男の夜半の床を自ら襲うような女の猛者もいたが、そのような女はその後益々少なくなつて、昨今のロマンスでは女が概ね消極的な役柄に徹しているそうだ。だが男は話がある。性関係ではより抑制的なギリヤークらによると、気に入った女を見染めた「オロッコ」男は、彼女に対し直ちに肉体的欲求を覚えて、然るべき行為に好適な条件が整うならば、ことに及ぶのだという。しかるにオロッコは、男女を問わず性生活における節度を欠いた放縦を、ある種の病と見做す。そのような人は「コリヤナリ (*Kolija nari* [*Kolijā nari* (Pls), *kolija nari* (Yam)])」、即ち「虫を抱える人」と称される。人の体内に巢食つて不安を煽り、上記のような方向へと駆り立てる特殊な小虫が存在するそうだ。私は、その妻がまさにこれらの悪さをする小存在に取りつかれた一人の裕福なオロッコの話を聴取した。妻の不貞に対しては、裕福な人の方が貧乏人よりも大きな恥辱を覚えるそうだから、金持ちの夫は容赦なく妻を打擲するも、懲罰は一向に奏功せず、彼女はその後も放縦な生活を続けた。その後のある日、件のオロッコは妻とともに森へ出掛けて、オロッコが食用に供する、主として猫柳の木に生える茸を採集していた。彼らが森の中で蟻塚に遭遇すると、夫は妻を引つ摺むや蟻塚の中へ投じ、彼女が逃げ出さぬように押さえた。蟻どもは女の体表をくまなく這い回り、あらゆる開口孔を通じて体内にすら侵入して、そこに巢食っている虫どもを退治した。暫く経つたのち、夫は妻を近くの小川へ連れて行き、彼女を水に浸けて、全身に取りついた蟻どもを解放した。害虫がいなくなつて以降、妻は彼に貞節を守り続けて、正常な女になった。オロッコは小集団で、しばしば個別の家族単位で分散して、しかも長期間孤立した生活を送るから、サハリンの他の異族人よりも情欲の影響を蒙りやすく、激昂、あるいは羞恥心や他者に対する道徳的責任感では抑制不可のさまざまな感情の激発を中々抑えられぬようである。女に対する残酷な仕打ちは、ギリヤークやアイヌの許ではさほど聞かれぬから、恐らくそこに由来するのも知れない。例えば、すでに言及したロシア人入植囚の妻である

ギリヤーク女から聴取した、今一つの物語がある。話題は、シャマンのダルダガン (Daldagan) ⁽⁵⁾ がアクシニヤ (Aksiniya) という娘に如何にして「自分を愛する」よう強いたかであるが、両者の年齢差は30年を上回る。孤児だったアクシニヤはシャマンとその妻に引き取られ、娘として育てられた。ダルダガンは妻の死後、アクシニヤとの結婚を企てる。娘が抗って同意しないことに激怒したシャマンは、彼女を夜な夜な幕舎の柱に縛り付け、その頭には己のズボンを被せた。昼間も再び柱に縛って、同じ一つの食器で飲食をとにするよう命じた。私はこの話を聞きながら、喧嘩別れした夫婦を監獄の一つ獄房に収容して一对の匙と深皿のみを与えたという、ヨーロッパ中世の風習を想起した。強制が二人の和解をもたらしたように、アクシニヤもまた、とどのつまりはダルダガンに愛着を覚えて、数年を共に過ごしたそうだ。但し、彼女は当初発狂して、やはりシャマンになったのよ、と語り手の女は甚だ冷淡に付け加えた。アクシニヤがダルダガンを毛嫌いしたわけは、その齡のせいではなくて、彼がすでに四人の妻を持ち、彼女らはいずれも結婚後間もなく恐ろしい病——生きながらの身体の腐敗——で死んだからである。

嫁入り前のオロツコの娘は行動において完璧な自由を謳歌し、少女の純潔は誰も問題にしない。しかし、夫なしで出産した乙女は嘲笑の的となって、己の両親へ恥辱と落胆をもたらす。婚外子はオロツコ語で「トゥクサ (tuksa)」と称するが、「兎」という意味である。そのような私生児 (tuksa putie (kani)) は生家の氏族に残すことができぬから、婚出する娘は連れ子として婚家へ同伴する。だが夫もそのような子は必ずしも歓迎しない。ひよつとすると父親が敵対する氏族の男ではないか、はたまた家と家族に不幸を招きかねぬような近親相姦の所産ではなかったか、と疑心暗鬼に陥るからだ。そこで自尊心の強い堅物のオロツコは、私生児を連れた娘を嫁には迎えないだろう。彼女の運命は、世間の覚えがあまり芳しくない男の許へ嫁ぐことになる。娘の妊娠が家族全体にもたらす恥辱や迷惑を防止するべく、それを人為的に中絶する努力が

重ねられた。オロツコの女たちは——胎児が死亡して流産が出来するまで太めの棒切れで腹部を圧迫するといった——苦痛を伴うかなり粗暴な方法で墮胎を行った。正常分娩でこの世に生を受けた赤ん坊を殺害することも行われた。通常は嬰兒の出現を不満に思う生母（娘）が扼殺役も務め、遺骸は灌木の上に投棄した。両親はすべてを承知するばかりか、私生児との関連で起こりうる長期にわたる不祥事の回避こそ最大の関心事と心得るので、嬰兒殺しの手助けさえ行った。彼らはまた物質的損失も蒙った。彼らがその受領を夢にまで見た「婚資」は、もはや誰も娘のために支払ってはくれぬからだ。前述の語り手のギリヤーク女から聴取したところによると、あるオロツコ女は婚前に数名の子供を扼殺したものの、嫁に行ったあとで初めて子孫を熱心に育てだして、今ではすでに三人の子宝に恵まれているそうだ。

オロツコは女の血（*regu*）を恐れるから、月経時の女が経血の落下を防止すべく宛てがった血塗れの削掛けさえ見ようともしない。しかし、ギリヤークの許では男女別の特設されるような御不浄が、オロツコにはない。分娩時の女は——たとえ酷寒の最盛期であろうとも——その目的のために仮設する円錐状掛け小屋に隔離される。そのような掛け小屋内の温度が実際は幕舎内の室温と大差がない。掛け小屋もまたトナカイの毛皮で蔽い、屋内では火も焚くからだ。分娩時とその後の数日間、誰も、たとえ産婦の子らであっても掛け小屋への入室が許されない。産婦に付き添って面倒をみるのは、隣家の女か、特にその時のために招かれる親族の女が通例である。やむを得ぬ場合には夫が産婦に付き添う。オロツコの女は、ギリヤーク女と同様にやはり座位で分娩する^八。

妊婦にはトナカイの肉と脳味噌を食べさせず、また野天での就眠もやはり御法度である。なぜなら睡眠中の女の体内に

^八 詳細は以下の拙稿を参照のこと。「Роль, беременность, выкидыш у Гильков и Айнов Сахалина [sic]». Живая Старина 1910 г. [本書には邦訳稿「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産」が収録されている】。

悪霊が侵入して、胎児を取り換える懼れもあるからだ。そうすると妊婦は畸形児を生む「信じられている」。

少なくとも私のインフォーマントたちは三つ子や、それ以上の同時出産の事例を耳にしていないが、双子の出産は珍しくないという。私が聴取した限り、オロツコは双子に何の恐怖も抱いていないが、この証言には疑いを以て対することが必要と考える。ギリヤークやアイヌの双子に対する恐怖は頗る甚大であるからだ。一九〇四年、オロツコらは存命中の双子を一例も挙げることはできなかった。

隣人となったロシア人が及ぼした興味深い影響や、形成途上の新習慣として指摘されるのは、既婚の女が頭をスカーフで常に覆っているのに、未婚の女はそれを被らないという事例である。オロツコらは私に「坊さんがわしらにそう教えたさ」と語った。もし誰かが女の頭からスカーフを戯れに、ないしは悪意を以て剥ぎ取るならば、侮辱に対する制裁と過料の支払いを覚悟せねばならない。

以下では、オロツコの家族構成を物語る若干の統計データを引用する。同データは、南のオロツコに対して実施された最新の人口調査に依拠するもので、サハリン島武官知事官房は親切にも、その閲覧を私に許可された。調査は一九〇一年の冬、ルイコフスコエ教会の聖職者A・ヴィノクローフ神父が実施した。一年以上も個人的な付合いのあるこの聖職者の調査資料を、私は全面的に信頼するが、同神父は布教の義務を遂行しつつ、オロツコの間を一年以上も巡回してきただけに、その信頼はなおさらである。これらのデータを、同一家族に関する私の若干資料と比較する中で、ヴィノクローフ神父のデータは概ね現実に対応することが確認できたから、私はそれらを活用して、後述するような結論を導くことが可能である。

「南地区の」オロツコ人口は男126人（表1）によると、男子合計は123人である」に対して女は120人であつた。私は、すでに十年以上もサハリンに在住する二人のオリチャの男をオロツコに算入したが、一人は——オリチャの男とオロツコ女の娘である——オロツコ女と結婚し、今一人は彼女の父方の近い親族だったからである。特にこの時期に武官知事官房から北地区へ派遣された、やはり格別に熱心な官吏V・I・イヴァノフが実施した人口調査では、一九〇四年の同地区に男160人と女118人の居住者が判明した。以上から、男女の人口比がほぼ互角の——上述したオリチャの男2名を勘定に入れないければ、男121人で女は120人となる——南地区では、女の比率が「北地区よりも高いことは明らかである。もしギリヤークの年齢別人口値と比較するならば、「南地区の」人口構成は以下の通りである（表1）。

もし就労可能年齢を十五〜六十才と見做すならば、就労可能人口は男

(表1)		
年齢・性別人口構成		
年齢(才)	男	女
0	3	—
1~5	16	17
6~10	22	16
11~15	8	13
16~29	12	20
21~25	15	4
26~30	7	14
31~35	7	6
36~40	6	5
41~45	5	6
46~50	7	8
51~55	7	5
56~60	4	—
61~65	1	3
66~70	1	2
71~75	—	—
76~80	2	—
81~85	—	1
計	126	120

71「(表1)によると70「名、女69「同、68「名、合計で140「同、138「名、即ち全人口の57%、十五才以下の子供は男18「マコ「同、49「名、女45「同、46「名、合計93「同、95「名、37・8「同、39・1%、高齢者は男7「同、4「名、女6「名、合計13「同、10「名、5・2「同、4・1%となる。オロツコの間に超高齢者がいないことは明らかだが、その他の年齢別人口構成は概ね正常な分布を示している。しかしながらオロツコらに言わせると、昔は大層高齢な人々もいて、掛け値なしの子供へと変身したものだ。そうさ。これらの証言も、オロツコの寿命が彼らの歴史の近年になつて減りだしたと断ずるには、むしろ不十分である。

世帯数あるいはむしろ配偶者ペアは合わせて56組であるが、以下のよう

に分類できる(表2)。

同表からは、オロツコの女たちの出産率は低いと帰結するべきだろう。一家族当たりの平均児童数は2名以下となる。子なし家族のうちでも二十五才以下の女10名は、確かに、同齡集団でも4名の女が一子を有するから、そのすべてがもはや子を持つ見込みなしとは言えない。私がオロツコの間に大所帯を認めぬとはいえ、それは確かに実在する。ナイエロ(6)村のあるアイヌの老人は、大家族で育つ子供は全員が成人まで生き延びるわけではないという己の部族の所見を述べながらも、十名の子がすべて丈夫な大人に成長したという、己の知人のアイヌ家族のことを例外として紹介した。出生と死亡に関するたとえ数年分のデータでもあれば話は別だが、それを

(表2)		
各世帯(配偶者ペア)が有する子供の数		
子供の数 (人)	世帯数	
0	16	1人の養子を有する2組のペアを含む
1	9	1世帯は赤ん坊のほかに、夫の兄弟の息子を養育
2	8	6世帯では配偶者の連子(先妻・先夫の子)も合算
3	16	
4	4	
5	3	
計	56	

一切欠く以上、オロツコの現状を漸次的滅亡と見るか、それとも緩やかな微増に過ぎぬと解すべきかは、判断することができない^九。

結婚の可能な年齢——ここでは二十八〜五十五才とする——の男 58 名に対し妻帯者は 48 名、即ち 82・7% だったから、残余の男たちは独身生活を送っていた。出産可能な年齢——ここでは十五〜四十五才とする——の女 54 名のうちで既婚者は 46 名だったが、もし多妻者の 2 番目の妻だった 2 名——これについては三年後に知った——を顧慮するなら、既婚者数は 48 名、即ち 88・9% に変更すべきであり、未婚者数は僅か 6 名、11・1% となる。オロツコ女の間の閉経年齢に関する正確なデータはない。人口調査からは、5 名の女が四十の坂を越えても出産したことが判明する。

成婚の割合はかなり大きいが、それは宣教師らの影響によつて説明される面もある。とはいえ、すべての結婚が教会を介して行われるわけではなく、そのような事例は 56 件中で僅か 38 件に過ぎない。この際により大きな役割を演ずるのは、近年になってかなり改善されているオロツコの経済的要因であるが、これについては後述する。

個々の家族は自立した生活を志向する。例えば、すべての 56 家族は併せて 41 幕舎で暮らす^九が、(未婚の息子と同居する一人の寡婦を含む) 24 家族は独立の家政を営む傍らで、「残余の」32 家族は 16 戸の幕舎に住んだから、常に近しい親族の絆で結ばれる 2 家族——二人兄弟が 7 件、父と息子が 5 件、父と女婿が 2 件、寡婦の母親が妻帯した息子とその嫁の兄弟と同居する事例 1 件、親族関係不詳の 2 親族が同居する事例 1 件——が同居していた。

^九 日本の当局者は一九〇九年のオロツコ人口を 263 人と発表した、と私には伝えられた。しかし、この間に北地区から移住したオロツコ(の数を示すデータがなく、またボロナイ・ツンドラに在住したツングースがそれに算入されているか否かも定かでないから、人口の自然増について何らかの結論を下すことはできない。

一つの幕舎に暮らす住人は平均6名——最大数は12名、最小数は2名で、それぞれ1例ずつあった——であるが、3〜9名が通例であった。北地区での平均値は7・3名。私は北での事情を詳らかにせぬから、この差は自信を以て説明できない。私に言えそうなのはただ、この事象の原因の一つが、概ねより大きなトナカイ群を有する北のオロツコの裕福さに求められることくらいであろう。トナカイの大群はより多くの働き手を必要とするからである。

配偶者ペアの年齢差については、下表を見られたい（表3）。

その隣人たちと比較した場合、南のオロツコの特徴は、多くの女が己の部族の外に婚出する傾向に求められる。例えば、数

名の女はツングースに嫁いで、ツングースの間で暮らし、また3名はギリヤークの許へ婚出した。後者では夫の一名だけがギリヤークの許に留まったが、その他の夫はオロツコの間に移り住んだ。私が訪ねたときは、一人のオロツコ女がオリチャの男と暮らしていたが、オリチャとの結婚はそれ以前から知られていた。入植囚に嫁ぐ女たちもあって、私はチフメネフスク⁽⁷⁾哨所「現ボロナISK」でそのような一人と出会ったが、彼女はモルダヴィア生まれの入植囚と暮らして、4人の子宝に恵まれていた。アイヌたちが語ったところによると、オロツコ女は喜んで嫁に迎えたいが、オロツコの慣習によれば自分たちの女を代わりに渡さねばならぬことを懼れるという。アイヌの女は己の生家の炉から遠く離れた所、いわんや

(表3)
配偶者ペアの年齢差

配偶件数	
同齡の組	8
夫が 1〜5 才年長の組	10
夫が 6〜10 才年長の組	18
夫が 11〜15 才年長の組	1
夫が 16〜20 才年長の組	8
夫が 21〜30 才年長の組	5
夫が 30 才以上年長の組	1
妻が 5 才年長の組	3
妻が 6 才年長の組	1
妻が 20 才以上年長の組	1
計	56

異部族の許へはなおさら嫁に出すことができないから、彼らはそれをいたしかねるのだそうだ。

同事象の原因は幾つか認められるが、まずは南のオロツコにおける女の数的卓越を、私は第一の原因に挙げたい。その次に重要な役柄を演ずるのが、オロツコに固有の幾つの特徴である。彼らは穏やかながらも、恐らく情緒不安定な性格で、激情のあまり極端に走り、とりわけアルコールが入ると豹変するが、訓戒には過度に屈しやすい人々である。最も重要な論証としては、格別に希有な美德を具えるわけでもない宣教師らが特に尽力するまでもなく、オロツコらが唯々諾々とロシア正教を受容した事実が挙げられる。アイヌらは私との間でオロツコが話題になる度に、ある者はもはや死ぬことがなくなつたと信じこみ、またある者は、アイヌやオロツコに共通の信仰が教える地下界ではなくて、天上での死後の生活を願つて、彼らはキリスト教を受け入れたといつて嘲笑する。他人の影響に唯々諾々と屈するというこの性格は、オロツコのかつての生活をめぐる物語でも見て取れる。彼らはトナカイをほとんど喪失するや犬の飼育を始めて、はたまた住居までもギリヤーク風に建てだした。オロツコらは同様に己の衣装や日用食器も、いともたやすく新しいものに取り換えた。だがサハリン土着民の間で浮浪者（逃亡懲役囚）に最もやさしいのはオロツコである。有名なシベリアの強盗シロコロボフ⁽⁸⁾は回想記中で、そのことを証言する。サハリンで監獄から脱走したシロコロボフは、オロツコの許に安息の場を見出し、彼らの騙されやすい性格に乗じて弄した——病気を治せるふりをしたり、死者に向けて祈禱を唱えるような——若干の小細工のお蔭で暖かく遇されて、しばらく暮らしたのである。この善良さ、上級と認めた異人たちと接する際の自信のなさ、公民としての勇氣の欠落が如何にも目に余るから、アイヌは彼らを敢えてあざ笑ひ、鴉とも称するわけだが、その心は、この鳥と同様に憶病で、訳もなく恐怖に駆られると直ちに、彼らにとって安全と思われる場所へと逃げ回ることに求められる。だからこそ、アイヌはオロツコを輕蔑する傍らで、自信に溢れて勇敢なギリヤークには一目置き、敬意を払

って慎重に接しなければならぬわけだ。アイヌの熊祭りでは、これら両隣りの部族の代表者が列席する限り、ギリヤークには最上の席を提供するのに、オロツコに宛てがわれる席は、後者が気を悪くせぬことを見込んで、並みの場所が選ばれる。これら2民族の誰かとの間で悶着が出来たとき、もし相手がギリヤークならば、アイヌはお互いの間でそうするように仲介者を派遣するが、オロツコの場合は、自らで相手の許へ乗り込み、たとえ事態の個人的処理がどれほど不愉快であろうとも、摺り合いやさらなる遺恨といった格別な紛糾は起こらぬと踏んでいるから、自分で決着をつける。オロツコの方もそのような場合は、悶着の解決に己もこれ努めるだけである。そして泥酔者の場合だけは声を荒げて空騒ぎをするから、口論ないし遺恨も最終的解決には至らない方が多い。そして小心者らがアルコールの力を借りて、すでに解決済みか、忘却の彼方にあるべきことを蒸し返して、管を巻くことも珍しくない。オロツコらが己の隣族たちとどのように接し、また彼らの性格をどのように判断していたかも、私は承知しない。私にはアイヌやギリヤークの間に多くの親しい友人がいる一方で、彼らとは付き合いだしてまだ日も浅いことを、彼らはよく承知していたから、私に必ずしも気が許せなかったのは当然である。チフメネフスク哨所に在住するロシア人の間では、オロツコの性格や意見や相互関係をめぐって、これ以上立ち入った判断を誰からも聴取することができなかった。北のオロツコに関しては、サハリンのティモフスク管区の良識派官吏E・K・ベザンス⁽⁹⁾ [正しくはベザイス (Bezas), 以下では「ベザイス」に訂正] が行った観察を以下で紹介する。彼は己の職務である集落監視官としてティミ川の河口部や、それ以北に点在する石油の湖までしばしば赴いて、その際にはギリヤークやオロツコらとも頻繁に接触していた。オロツコはギリヤークよりも裕福だそうで、より清潔で収入も多いから、己の隣族を上から目線で眺めている。にもかかわらず、オロツコはあらゆるロシア人に対して卑屈で、小児のようなはにかみを以て接するのに、ギリヤークの方は剛毅かつ自立心旺盛で、あらゆる官吏とも誇り高く接していた。この事実は、

最初のサハリン研究者たちも指摘していた。ベザイス氏の与える指示に対しても、オロツコは直ちにそのまま実行するのが常である一方で、ギリヤークの方は理屈を並べ立てて口論を重ね、逃れようとこれ努めるのが通例だった。ある日、オロツコらが曳くベザイス氏の舟が浅瀬に乗り上げたとき、オロツコたちは即座に脱衣するや水に飛び込み、舟を深い所まで曳きだしたが、同様な事態に遭遇したギリヤークらは2時間も議論や口論に没頭して、激怒した官吏の叫び声も一顧だにしなかった。オロツコの驚くべき客人歓待や、ロシア人に対する好意的態度については、オロツコとかかわりのあつた教養ある漁業者（村の元教師）のS・G・ユルケヴィチが私に語ってくれた。つい先頃サハリンの旅から戻ったばかりの皇帝アレクサンドル三世・ロシア博物館の民族学者ヴァシリイェフ氏も、より世故に長けて、やさしさにも乏しいと二〇、ギリヤークに不利な評価ながらも同一の結論を下している二一。

未完のままだったオロツコ女をめぐる物語に立ち帰るに当たり、彼女らは応対や共同生活を通して、これらの柔和で優しく従順である特徴をより一層ふんだんに發揮するものと私は推測する。私が訪ねた数少ない住居で直に対話することができた女は、僅かに老女のシヤマン一人だけである。だが私は彼女らの動作や顔の表情から、同様な状況下で、つまり、未知ないしさほど親しくないアイヌやギリヤークの家族で受けた印象とは幾分異なるものを読み取った。アイヌの女の場

二〇 ここで私は——多くの人が理解せず、またしばしば敵意のように過大評価されがちの自立心と覇気に溢れるその性格に不満をかこつ——ギリヤークらの弁護をせねばならない。ギリヤークも、オロツコに負けず親切で、率直に謝意を表する能力も有する。私が一八九九年にサハリンを去るとき、一連の全く未知の村々を通過したが、どの村でも、宿泊や飲茶や鮮魚に対する支払いをさせてもらえなかった。「だってお前はギリヤークじゃないか」というのである。当初はギリヤークとの間で危険な悶着さえ起こしたシュレンクも、親しく付き合つて友好関係が樹立されると、彼らの忠節を十分に評価している（『アムール地方の異族人について』3巻）。

二一 『V・N・ヴァシリイェフのギリヤークとオロツコの許への出張報告』617頁（一九二二年、サンクト・ペテルブルグ刊）。

合には、住居全体を支配する女をしばしば実感させられ、その歩調や姿勢からは圧倒する真剣さや、完璧に自立して表明される善意、また時にはその逆の、客人らも主人らも含め、その場に居合わせた全員へ向けられた気紛れや不満が伝わってきたし、またギリヤークの女の場合は、幼時から躰けられた生真面目や閉鎖性のせいで古い礼儀作法という鎧を纏うため、その感情が外からはなかなか把握できぬ不可解なスフィックスのようだ、というのが第一印象だったのに、私が記憶するオロツコ女は全員から、常に秘められた好奇心に発するとはいえ客人を喜ばせ、たとえ僅かであれ満足も与えたいという卑屈な願望が漂っていた。もし純朴や善意がオロツコの男らの共感を喚起するとしたら、女の魅力によつて拡大された同じ諸特徴が、サハリンに少なからず見出される独り身の男たちにとつて極めて魅惑的であつても、またオロツコ女が生涯の好ましい伴侶として、ツングースやギリヤークやオリチャや、あるいはまた白人の家族に参入したとしても、格別に驚くことはなからう。

同時にまた（南の）オロツコにおける家族生活の基盤が、ギリヤークのそれより著しく脆弱であることも想定せねばならない。恐らくはここにこそ、女の生殖力の低さの原因も求められよう。オロツコの同族であるオリチャやオロチの家族崩壊に関しては、すでに六十年前も前にアムール流域を訪ねたシュレンクが記していたが^二、彼はギリヤークのより粗暴で不屈な性格を、家族関係のより強固な基盤と見ていた。

オロツコ同士の相互関係は、隣族のギリヤークや、ほぼ同然のアイヌよりも著しく単純である。家長の座は主要な入口の右か左側で、炬を取り囲む樺の傍が通例である。家長の妻は彼のすぐ脇に坐し、何人といえども両者の間に割り込む権利を有さない。このような慣習に敬意を払わぬ者からは、懲罰金を取り立てられるであろう。薄汚れた戸口の近辺には、

家族のその他の成員や、その他の家族や、家長に服する人たちや、そこではより従属的な役割を果たす人たちが配される。入室した当座の客は、占めるべき席が指定されず、見出された空所に腰を下ろす。しかし、中年過ぎの客人は常に家長の正面に座を占める。入室した客のために、アイヌの許に見られるような莫蔭や毛皮が敷かれることは一切なく、予期せぬ来客に対して、ホスト側が明示的に喜びを表明することもない。しかし、数分後にその客が座を占めるや、家長は開口一番で「シンビドチンビ (*simbi docimbi*)」(来てくれて嬉しい)と告げる。客人もまた同じ言葉を返すが、「シンビドチン (*simbi docsi*)」(わしの来たのが嬉しいか)と問うこともあり、それに対しては「イ、ドチンビ (*i docimbi*)」(おう、嬉しいぞ)のように肯定の回答が返される。その後、家長の側からは再び、賓客がもたらした外のニュースを訊ねるべく「ハイアリドゥニ」(*xai alduu bini*)「新しいものは何か」という問いも発せられる。その後にはすでに会話が始まる。たとえ客人には格別に語るべき話題がなくても、あらゆる民族の生活において思索の交換で話題に窮するようなことは決してない。それは、所謂「原始的」、「非文化的」と、またより正確を期される向きには「半文化的」とも称される発展段階の民族であっても、何ら変わらない。

主人と客の間で交わされる上記の挨拶は頗るしばしば、双方からほとんど同時に発せられる「ソロヂ (*sorodzi*)」にとつて代わられる。これはアムール流域のオリチャ (マンゲン) の挨拶語であるが、その方がずっと簡便なためオロッコの間でも益々頻用されている。客が幕舎に留まる間、主人は彼に己のキセルを差し出して、自分の煙草も一服は客人に振る舞う。客も、もし彼が望むならば同様にお返しする。親しい友人の間では、同じキセルをゆつくりくゆらせつつ交互に喫煙することもある。その際はキセルを楽に受け渡せるように、なるべく近接して坐るのだ。この習慣は特に女たちの間で顕著に認められる。たとえ滞在がさほど長くなくと、入室した客には必ず食事を振る舞わなければならぬとされている。客の

ために食事かお茶を用意して提供するのには女の務めである。客人が就寝する場所は、アイヌやギリヤークほど正確には指定されていない。しかし、多少とも尊敬すべき客は少なくとも主要な戸口の近辺に配されて、後ろの戸口に接する幕舎の縁に寝かされることは決してない。オロツコはアイヌと同様に、両脚を炉の方へ向けて就寝する。しかるに、外気の遮断が十分ではない幕舎へ強烈な酷寒が浸透してくると、ありとあらゆる体勢を取ることも余儀なくされる。ロシア人に嫁いだあるギリヤーク女が私に憤慨して訴えたように、オロツコらは下肢を暖めあうべく、一方の両脚が他方の尻に当たるような姿勢の二人一組で就寝するが、そのような就寝組を編成する際に性別や親族の絆は全く顧慮されぬそうだ。オロツコの幕舎では、アイヌの家長の支配権に由来する一特徴である緊張感や堅苦しさが感じられず、会話における自由も、オロツコの家内ではギリヤークよりも広範である。それは、両者の等しく共有する兄弟・姉妹間の関係や会話をめぐる禁忌が、オロツコではすでに廢れているからだ。オロツコが好んで取る姿勢の一つは、頤がほとんど両膝に触れるまで深くしゃがむ坐り方であるが、両脚を思い切り伸ばすことも、また両膝を折り曲げて「トルコ式」に坐ることもある。このような坐り方は女にも許されるが、アイヌの女もまたギリヤークの女も、そのような座位は決して取らない。オロツコはアルコール飲料に強く執着するが、その度合いはギリヤークをはるかに凌いでいる。チフメネフスク哨所に在住するロシア人らに言わせると、日本人の漁場で稼いだ給金のほぼ全額をオロツコらは飲み代に充て、それを専ら日本の米製ヴォトカ「サケ」で受け取ることすらあるそうだ。泥酔したオロツコは自制心を失い、喧嘩早くなつて暴力沙汰にも及ぶ。あるオロツコは酔払うと、奴はわしを罵った、あざ笑った、騙したと、ありとあらゆる小さな遺恨さえも蒸し返して、アルコールの勢いでこれらの敵に意趣返しを試みるという。素裸で家を飛び出すや唾を吐き、叫び声を上げながら、空拳で——あるいは手近にあつた棒を引つ掴んで——取っ組み合いに突進することもある。女が原因で掴み合いの喧嘩になることはないそうだ。

ヴオトカを少々口にしたオロツコは、もはや抑えが利かず、泥酔するまで飲みつづけるべく、ヴオトカにどれほど吹つかけられようと支払う用意がある。この機会を利するのはむろん、ぼろ儲けに余念のない食欲な人たちである。私がオロツコの間に滞在した「二九〇四」年は、彼らが「スピルト」「純アルコールに近い強酒」1瓶に5ルーブリを払うこともあったが、それは十中八九までスピルトではなくてヴオトカに過ぎなかったであろう。冬場にはアブラモフカ⁽¹⁰⁾村やオノール村で、やはり大枚1〜5ルーブルを叩いて、オロツコたちは一瓶のスピルト——信憑性はやはり疑わしい——を購入するのが通例である。素面のオロツコは自制するが、酔払うと己の妻を打擲することもある。

名彙論

オロツコはほとんど全員が正教徒であるから、洗礼の際には霊名が授けられるとはいえ、部族にかかわる名、即ち、先祖の名前を子供たちに与える習慣は今なお保持されている。あらゆる氏族は己の故人に因む名を名乗る人たちで構成され、それらの死者を支配する権利を有するとされている。新生児には——直系の父母ではなくて——祖父ないし祖母の名が授けられるのが通例である。両親ないし前世代の人たち全般の名前には手を付けるべきでないといわれる。名前は、何はさておき当該氏族の内部に留められるものの、友情の証として異氏族の人たちへ贈与されることもある。その際に赤ん坊が他氏族から受領した名前に対しては、然るべき支払いがなされるという慣習がある。伝統によつて定められた支払いでは、アラシ革製の紐や木製の深皿が充てられる。このような儀式を経た赤ん坊は、贈与された名に対して明示的な謝意が表明されなかった赤ん坊よりも長生きするであろう。例えばアイヌやギリヤークといった異部族の人たちからですら、自分の親友からは名前を受領し、また己の側からも名前を授与している。コタンケシ「古丹岸」⁽¹¹⁾村のアイヌ、エネケントウイエ(Enekenjue、一九〇五年に死亡)はオロツコ名を有したが、オロツコ語の原名は僅かに異なる発音のエネケントウイ(Enekenju)

だった。セラロコ⁽¹²⁾〔白濱（しららおろ）、白浦、現ウズモリエ〕村の若い女の名前クルパルンマ（Kuparunma）も、やはりオロツコ名クルパル（Kuparu）に遡及する。オロツコらは名前が個別の存在と結びついていると信じるから、同一の名前を帯びる二人の人間が共存することを許容できない。もしそのような事態が出来すると、その一人は必ずや直ちに死なねばならない。したがって、氏族の成員らはそのような事態を回避するべく、新生児が先祖の名の一つを継承したことを、さまざまに露営地に拡散する己の人たちへ直ちに告知して、ありうる不祥事の防止を警告する。名前は、仕合せな名、不幸な名、中立的な標準名への三区分が可能である。第一群に分類されるのは、頗る裕福であつたか、頗る長生きして、格別に恐ろしい病氣や苦痛もなく他界した先祖たちの名前である。不幸な名前に対しては禁忌が存在し、想起することも憚られる。そのような名前を子供に与えることも、同じ不幸を招きかねぬからやはり宜しくない。例えば、水死者や熊に殺された者の名は誰も採用せず、そのような名前は口にのぼせることすらしない。夭折者の名もやはり不幸な名前に分類され、忘却さるべき対象である。上記の諸事例が原始的部族の集団にあつては珍しくないから、使用可能な名前の蓄えが毎年目減りするのには驚くに当たらない。採用可能な名前の不足分は恐らく、新生児の両親らや、彼らの周囲に見出される博識者の誰かが新名を創出するという慣習によつて充填されたのであろう。命名者はいずれかの語から一音節を抜き出し、それに任意の語尾を加えるが、その際は創出された名前が当該部族の言語に不在であることと、特定の意味を有さぬことが留意される。そのような名が、禁忌とされた名前を音声的に想起させぬこともやはり配慮せねばならない。それもまた新生児へ不幸をもたらす懼れがあるからだ。禁止された名前は人々が口にしないから2、3世代後には忘却されて、言及された配慮も、現世代の人々が周知する不幸な名に限定されるであろう。

オロツコは綽名を有するが、次第に本名より多用されるようになる。綽名はオロツコ語で「フブリゲルブ（qupuri qy'bu

[hupuri gybu (Pis)]」と称するが、「おどけた名前」という意味である。例えばオロッコのパリヒンの綽名は「クル (Kuru [Kuru (Pis)]」、「オシエバは猫背であるからその綽名は「ブコ (Buko [pāko (Pis)]」(瘤持ち)、そしてオロッコ女のゴモチユダ (Gomoču-da) は「シガルマム (Sigyl mam [sigyham (Pis)] siigalu mama (Yam)]」(鼻に耳環を付けた囃)と綽名されている。この女はしばしば子供を亡くしたから、さらなる発病を防止すべく誰かの助言を入れて、アムール流域のゴリド「現ナーナイ」の女のように小さな耳環を鼻腔に通した。彼女が耳環を帯びなくなつてすでに久しいが、この綽名は保持されている。

綽名はある程度まで、多くの部族や民族の人間関係においても頗る広く行われるように、大人の年長者は彼のいる所のみならず不在の場合でも、その本名を口にするのができぬという慣習によつても惹起される。私との対話で実姉の本名——彼女はその綽名で知られていた——を口にしたあるオロッコは、彼女の名前を自分から聞いたことは決して口外せぬよう懇願した。姉は弟に腹を立てるばかりか、殴打する権利すら有すること、彼の方も己の非を認めるから、それに黙つて耐えなければならぬそうだ。年長者の誰かにどうしても言及せざるを得ぬようなときは、誰それ(赤ん坊)の父か母、あるいは話者よりも年少の誰その兄さん、姉さん、伯父さん、伯母さんなどと間接的に表現される(この慣習は人類学用語でテクニミーと称する)。親族間や互いに見知らぬ人々の間で必須のこの礼儀作法も、尊敬に値せぬ人たちには適用されない。オロッコの諺に曰く「何人も、はたまた犬ですら、乞食はその名で呼ぶことができる」と…。

キリスト教の洗礼名に関する限り、十九世紀初頭のユダヤ人の歴史がオロッコの間でも繰り返されることがある。少なくともオーストリアではユダヤ人が、金・銀などに言及するゴルトシュタイン、ゴルトベルク、ジルベルシュタインのような感じの良い名字を獲得するためにお金を払わねばならなかったが、賄賂を贈ることを潔しとせぬ者は、響きの悪い滑稽な名字を得ていた。オロッコたちも、単純明快で彼らの耳にすでに馴染んだ名前には、やはりより高額な支払いを要し、

黒貂その他の毛皮での支払いを望まぬ者には、重苦しくて馴染みないばかりか、後々に多くの喝采を浴び、はたまた不快事すら招くような名前が授けられた。宣教師や教会職員らは、正教儀式の終了に際して己の洗礼名を失念した人たちを叱責するからだ。私は、この事象を一般化することは敢えてせぬが、これはむしろ例外に属し、その行状をめぐってオロッコたちから再三の苦情が寄せられた一人の宣教師にかかわる事態と考えている。オロッコらが好む洗礼名は、男がイヴァン、アンドレイ、イエゴル、ルカで、女の場合はアンナ、マリヤである^{二三}。

故人の名前は口にされないが、金持ちの名は公言してもよい。金持ちはたとえ死すともやはり生者だ、とオロッコらは語るからである。

トナカイ飼育

ここでは、私が「甬」のオロッコたちとの対話から入手できた若干の特色を指摘するだけにとどめる。今日のオロッコは、ツングースのものと同一のトナカイを有するようだ。だがオロッコ本来の飼育トナカイは全く別の変種だった。今日のトナカイは専ら明色種であるのに、以前のものは常に著しくより暗色だった。その角は短くて、半アルシン「36^{センチ}」を超えなかった。ツングースのトナカイの方は長くて、枝分かれした角を有する。以前のトナカイはまた性質に關しても、今日のトナカイとはやはり異なっていた。前者は野生の特徴を色濃く残して無愛想だったから、屈服させて人の意思に従わせるには数本の革紐で繋がねばならず、一本だけでは常に不十分だった。トナカイが人を襲い、蹄で攻撃することも珍しくなかった。オロッコらは、昔日と昨今のトナカイの外形ならびに内面的特徴における違いを品種差で説明する。

オロッコらは明言しなかったが、それは完璧に説明可能な事態であるように思われる。オロッコのトナカイが野生化し

^{二三} Сахалинский Календарь 1896 или 1897 г. Статья Александрина «Из поездки к устью Туми [Александровин] 著「ティミ河口への旅から」」。

てしまったのだ。野生個体の毛皮や綿毛が、白か斑の色調を帯びる傾向を示す飼育トナカイに比して、常により暗色を呈することは概ね立証されている。次に、私の推定によると、野生化の道筋は以下の通り。オロツコには、彼らの飼育するトナカイの群れ近くまで野生トナカイを追いつける猟法があつて、今なお細々ながら実施もされている。牝トナカイの存在におびき寄せられた野生の牝トナカイが、飼育トナカイの牝どもを護る牝と闘い始めるや、その頃には近場からそつとにじり寄る猟師が、逆上してもはや危険に注意を払わなくなつた野生牝を仕留めるのだ。その際に野生牝と飼育された牝の交尾も間違ひなく起こりえただろう。この交雑に由来する仔獣はより野生的性格で、自由への憧憬も強かつたはずである。オロツコたちから聴取したところによると、彼らの伝承は、手なづけに抗いつづけてタイガへ逃亡した若いトナカイの話を伝えているという。しかるに、一定期間に間断なく継続された飼育トナカイの逃亡について、オロツコら自身は全く不可解な災難と語っていた。同事象は、突如としてトナカイ群を絶滅させるような疫病は一切なかったにもかかわらず、オロツコの経済生活においてトナカイドモをほぼ全滅させた点でまことに興味深いが、彼らにとっては説明のつかぬものでもあつた。オロツコの一部はギリヤークの生活様式を採用、挽獣として犬を飼育し、魚の豊富な川の畔により恒久的な露营地を設置しだした。建造物のタイプですら、オロツコたちは古い伝統を捨ててギリヤーク式住居を造営しだした。一八六〇年代にツングースたちがサハリンに移住してきたときは、最も裕福な数名のオロツコの許にだけ僅か数頭のトナカイが残されていた。ツングースからトナカイを購入しだしたオロツコらはトナカイ飼育を再開するが、彼らが現有するのはこれらのトナカイ群である。彼らの従来からのトナカイとツングースのトナカイとの交雑個体は保存されていない、と彼らは断言した。在来種は完璧に姿を消したそうだ。民族学者の責務として、私はこれらすべてを記載するが、動物学を専攻されるどなたかが現地調査を通して、この問題を解明して下さいよう切望する。別の場所、例えば北地区のオロツコ

の許では事情が異なるから、ツングースのトナカイとは一線を画するオロツコのトナカイがきつと残されているだろうし、またオロツコの伝承にもより詳細なデータが保持されているであろう。

『南』オロツコのトナカイ飼育における上記の事象をめぐって、私はアイヌからも事情を聴取したので、興味深い彼らの見解をここに紹介する。いまだ存命のアイヌ古老らの生活の中で大規模に出来した飼育トナカイの野生化は、彼らによると二つの原因に帰されるという。

「(1)」まさにこの時期に、オロツコが鯨の肋骨をトナカイ橇の滑り木に使用したこと。トナカイはこれら鯨骨の臭気に耐えられず、腹を立てて主人の許を去ったのだそうだ。それにはオロツコら自身も気付いて骨製滑り木の使用をやめたが、それはアイヌから借用されたアイデアだったという。オロツコは同時にまた、そのような骨をギリヤークや、アムール流域から渡来するオリチャに売ることも、その交易でアイヌと張り合うこともやめたそうだ。恐らくこの説明には一分の真実が潜んでいたであろう。実際にオロツコらも、骨製滑り木の使用は非実用的と判明したので放棄したと私に明言したからだ。オロツコが行き来する細道は、僅少な人口と、オロツコが通行する空間の広大さの故に、アイヌやギリヤークが占有する領域の小道よりも著しく脆弱にしか踏み固められていない。しかも——これら両部族の役畜である——犬であれば、さほど固められていない雪の上でも、はるかに容易かつ自由自在に通過するのに、トナカイにはそれが叶わなかった。骨製滑り木を履いた橇は、通常の橇よりもはるかに滑りやすくて、雪上を降下する際はトナカイにぶつかり、その両脚に痛みを伴う打撃を与えた。オロツコは橇の走行で制御棒を使用せず、御者は必ずしもすべての橇に搭乗するわけでもない。2〜3ないし4台で編成される橇の隊列の一台に御者が一人配されるのが通例で、その後ろに積荷を挽くトナカイたちがつき従う。骨製滑り木を履かせた橇に不具合を認めるや、オロツコは通常の木製滑り木を履く従来型の橇に回帰したが、

そのことを私に告げたインフオーマントは、この橇と鯨骨が在来種の野生化に与えた影響については否定した。

(2) 同事象の第二の原因として、アイヌらはこの部族の信仰に依拠して、他のすべての動物と同様に、蒙った被害に對しては悪意を以て報いる呪力を具えた彼らの犬どもの復讐を指摘する。かつては至るところで常に、そしてロシア人の集落から遠く離れた幾つかの露营地では今もなお、サハリンの土着民が一夏を通して放し飼いの犬たちは、魚の最終処理掛りの周りで、あるいは憔悴して半死半生の魚が少なからず見出される川瀬で、食料を自給自足するよう仕向けられる。これらの犬どもはあちこち走りまわる中で、きつと飼育トナカイの群れにも近づいたろうし、また吠えながらトナカイに飛びかかり、遊び半分でそのような群れを追い散らすことも十分にありえたであろう。単なる遊びから深刻な事態にまで事が及ぶこともありえた。さまざまな犬種からなる混成集団では、休眠中の肉食本能が容易に呼び覚まされるからだ。仔馬や仔牛が、まさに吠えかかる犬から逃げ回る間に、アイヌやギリヤークの犬に噛み殺されるようなことは今も決して珍しくない。同様な攻撃は恐らくトナカイの仔獣にも出来して、仔獣の死とオロッコの家政へ損害をもたらすこともあったであろう。そしてロシア人入植囚らが目下そうするように、かつてはオロッコらが腹立ちまぎれに、恨みの対象もさることながら、露营地やトナカイ群の近くに姿を現す犬どもにも無差別に発砲し、殺害していた。アイヌらは、かつて出来たオロッコによるこれらの犬殺しの件を私に訴えた。だが犬には悪霊が宿り、あらゆる遺恨に對して手ひどい復讐を加えるそうだ。そしてまさにこれら銃殺された犬たちの執念深い悪霊こそがオロッコのトナカイ群に、主人の許を去って森や山岳へ逃走するよう使喚したわけだ。そこで、オロッコらだけは犬の呪力を理解したから、完璧に十分な根拠がない限りは発砲することをやめたのだ。実際にも、アイヌはギリヤークと全く同様に——ギリヤークにはその後の事情聴取でしかと確かめた——、その不愉快な必然性を惹起した原因について隣人に明言せぬまま、他人の犬を密殺することは許容され

ぬと考えている。もしそのような事態が出来ると、殺された犬の悪霊は人間の体内に住みつく——その際は極めてしばしば幼子が標的となる——が、悪霊に取りつかれた者は病を發して死んでゆくのだ。

オロツコは駄乗獣としてのトナカイから主たる利益を得ることを期待するから、専ら聞き分けのよい強力なトナカイに育て上げるべく尽力する。乳はあまり利用せぬが、仕事に不適な個体は屠つて食肉とする。冬場は橇を曳かせるも、それ以外の季節には騎乗する。五才までの仔獣は群れの中で自由に過ごさせるのが通例である。私は去勢の時機については承知せず、その手順の詳細に関しても記録していない。仔獣の誕生は春が通例であるが、その第一歩からすでに自力に委ねて、仔獣の世話をオロツコは一切行わない。成獣の肉の方を好むから、若い仔獣を食肉用に屠ることはしない。仔獣の訓練は冬場に開始されるが、荷物を背負わされて、先行する他のトナカイの後ろから隊列を組んで従うことが強要される。トナカイは頗る穏やかな性格だから、オロツコにとつては御しやすいそうだ。たとえ——両脚の間を通して橇まで延びる革紐を取りつけた——面繫（おもがし）が頸に装着されても唯々諾々、何らの反抗も示さぬからだ。トナカイはまた人間の強要する荷物の牽引者としての己の役割も、やはりおとなしく遂行する。しかしながら、一旦自由を得て放牧されるや、トナカイは己の意思や御勤めへの不満を再三主張して、容易には己を捕捉させず、橇への繫留や挽具一式の装着にも中々応じない。私はある日、5人がかりの追尾をかわして2時間以上も逃げまわるトナカイの逃亡劇を目撃した。その現場は森だったから、人間の側に相対的な利があつた。トナカイはとどのつまり、角を目がけて投げられたアメリカの「投げ縄（lasso）」を思わせるような革紐で捕獲された。オロツコは時間や労力の空費を避けるべく、我物顔に振る舞う狭めの厚板（長さ半ビ）を長い革紐でトナカイの頸に結えつけ、その際、厚板は常時トナカイの膝に当たるように吊り下げるわけだ。その脚には一歩ごとに厚板がぶつかるから、反抗的なトナカイの逃走を阻止するのは明らかだ。この動物にとって不愉快な道具は「チ

ンガイ (*činčai* [čingai (Pls), čəgai (Yam)]) と称する。狩の最中はおとなしいトナカイでさえこれを装着する。必要があればそれを外して即刻出立できるよう、なるべく現位置の至近距離に待機させたいからである。人間たちが別の仕事で多忙な夏場は、それだけでなく昆虫の大群がトナカイを憔悴させるから、さらなる負荷をかけることはしない。だが夏のトナカイは採食の場や、昆虫から身を守る場所を求めて、露営地から遠く離れがちであるから、トナカイの頸には居場所を突き止める際の便宜を考慮して、独創的な鈴「カガルダ (*kanal'ca* [kəpda (Pls), kəapda (Yam)])」を懸ける。それは一枚の板切れと、その近くにぶら下がる舌状木片からなり、トナカイが動く度ごとに木片は板切れにぶつかって音を出す仕掛けである。このようにして発せられる音を頼りに、トナカイがたとえツンドラに点在する森の茂みに身を隠していようと、その所在は突き止められるわけだ。

オロッコはまたギリヤークと同様に、動物の知能が人間と同じく胆嚢に宿ると信じているから、この臓器を欠くトナカイは愚鈍な部類に算入される。この見解はひよつとすると、ギリヤークから借用したものかも知れない。一つの民族が愛し、また頗るあまたな利便もたらしてくれる飼育トナカイに対して、その同じ民族がこのような見解を抱くことは不自然だからだ。しかもまたオロッコらが私に語ったように、トナカイは高い知能を有することを立証する事例もあるではないか。吹雪の真っ只中で、小道のあらゆる痕跡が雪でかき消されても、またその主人が見渡す限りの雪原から脱出する望みを失ったとしても、この賢い動物は己の主人をわが家か、あるいはいずれかの住居にまで送り届けることは珍しくなかった。したがって、オロッコは上記の見解を野生トナカイだけに限定して、飼育トナカイは恐らく除外していたであろう。

後者に具わる知能は別の臓器に宿るに過ぎず、トナカイの場合は胆嚢が蹄の間にあるそうだ。これは「分泌腺 (*sajja* [sajja (Pls), sajaa (Yam)])」を指している。オロッコからの聴書きによると、トナカイは分泌腺が蔵する強烈な臭いの液体を、角の交代

時の葉として利用するという。トナカイは頭を蹄の所まで屈めて、角の脱落后にできた傷に、同腺から絞り出される分泌液を擦りつけようとこれ努める。強烈な臭気を発するこの分泌液はトナカイの足跡に臭気を残すから、猟犬はこれを辿ることで、野生トナカイの群れの所在地が突き止められる。

原始的民族が概してそうであるように、オロツコもまたすばらしい解剖学者であつて、トナカイの体を個々の部分に分けながら手際よく捌く能力を有するばかりか、動物学者のみが弁えうような身体的特殊性についても熟知している。一例を挙げるならば、オロツコは第一頸椎と頭蓋底の間にある空隙の存在を承知するから、己の飼育トナカイの屠殺では、まさにこの空隙を狙つてナイフを突き立てるわけだ。トナカイは即死する。屠殺者は必ず男が務める。肉の捌きや調理も同様に男の仕事である。それは恐らく、男らは格別の急務を抱えていないが、女たちの方はそれでも子供や病人をめぐり日常的雑務、裁縫や手繕い、家族のための調理で手一杯であるようなときに出来るからであろう。

オロツコがトナカイのために、風や悪天候に備えて納屋や庇掛けを建造するようなことは決してない。酷寒も雪も吹雪もむしろ愛するとされているこの北の動物が、何よりもまず苦しめられるのは、夏場のサハリンの森林やツンドラに百万単位でのさばる蚊・蚋・蛇である。したがって、オロツコは夏の到来を待ち構えたかのように己のトナカイ群を率いて、——風や霧、そして恐らくは塩分を含んだ植生にも事欠かず、しかもそこでは空気さえも、人と動物の双方を苦しめる夏の虫どもの数を削減しそうに思われる——海辺を目指すのだ。トナカイは海岸近くに見出される砂地の浅瀬に好んで屯し、湿った風を満喫しつつ、己の常食であるツンドラの苔さえも断念して、そこにひねもす留まりつつける。露营地近くのやや内陸部に、オロツコは柵囲いを造営し、夜間はトナカイ群をそこに閉じ込めて、中央部で焚き火を起こす。焚き火には朽木が投ぜられるから大量の煙が発生するわけだ。通常の柵で囲まれたそのような柵囲いを、私は数例目撃したが、その

規模は、露営地の群れの大きさ次第で区々であった。

オロッコの許における私の滞在はあまりにも短過ぎ、しかも夏場で、遙か彼方のツンドラで放牧されているトナカイとは、彼らもほとんど接触のない時節だったから、アイヌやギリヤークの間では目についた己の家畜——犬——に対する共感や愛情を、私は認めることができなかった。とはいえ、オロッコもトナカイへ敬意を払っているのは間違いない、そのことは殺されたトナカイの頭蓋骨に対する彼らの措置から見取れる。頭蓋骨はみだりに放置されず、先端がフオーク状の棒の上に安置されていた。頭が川の方に向けられたものもあった。それが果たして、殺された動物の頭蓋骨はすべからく削掛け（所謂「イナウ（Inau）」で飾られた杭の上に安置するという、アイヌの風習から借用されたものであるか否かを、私は究明できなかった。私自身はそんなトナカイの墓地に、ポロナイ河畔の放棄された露営地ボレド（Boled [Bodok (Pis)]）の近辺でも遭遇したが、そこにはかつてツングースたちが数年間暮らしていた。この風習は彼らにとっても特徴的だったようだ。

個人的見解ではあるが、——私が一度だけ群れの中で、そしてツンドラにおける昼間の旅では数回観察する機会があった——トナカイの鼻や目が示す頗る冷淡な表情から、トナカイは人間に対して全く冷淡で愛着を抱いていないように、私には思われた。恐らくは本能が、人間の意思で最も後れて馴化された動物の一つであるトナカイの意識に強く作用して、「汝の命令者の庇護がなくとも、いまだ生存は容易に全うできるぞ」と囁くのであろう。トナカイはどうやら、——もし庇護なく放置されると己の無力感から確実な死が約束されているとの危惧から、極限まで酷使された個体ですらあたる限りの感謝を、主人に向けて日常的に表明する——馬や牛や犬が有する感覚とは一線を画すような個別的対人感覚を幾許か有するらしい。

主人に対する敬意をほとんど伴わぬ同一の態度は恐らく、櫓を曳くトナカイの気だるい走行にも反映されているだろう。怒声をどれほど浴びようと、一様に沈滞して気だるい動きをトナカイが速めることはなからう。トナカイの一步一步が示すのは、重荷の運搬で己を使用することへの秘められた抗議であり、また「造物主」は自分をもっと高貴な別の目的のために創造された、との思いでもあるように私には思われた。ところで、われらの隊列のトナカイの一頭は活発な気性の持主だったから、追いつがる犬の速度に合わせて左右に跳躍し、緊張して怖そうな目つきで近づく己の命令者らに、その目や顔の表情を急変させつつ、5名の男に2時間もかけて己をとらまえるよう強いて、その気性を見事に発揮した。

私はサハリンにトナカイの疫病があったことを耳にしておらず、その自然条件もトナカイ飼育に合致しているようだ。近年にはギリヤーク、はたまたアイヌの間へのトナカイ飼育の波及も認められた。ツンドラ限界域に当たるタライカ(Tarika)⁽¹⁴⁾集落で暮らす二人のアイヌがトナカイを入手するも、いまだ櫓曳きには着手していなかった。ギリヤークの方は十名以上を数えるが、大量の飼料を必要とする犬どもは放棄して、飼料確保で人手を必要とせぬトナカイを購入しているわけだ。

個々の主人が所有するトナカイ頭数は、既述の通りである「但し本文には該当する記載が見出されない」。

戦争

オロツコが往時に行った諸戦争をめぐる伝承で首位を占めるのは、正確な判定は不可能であるものの、アイヌとの血腥い戦いである。これにかかわるすべての伝承——私はアイヌもさることながら、ギリヤークやオロツコ自身からも聴取した——は異口同音に、サハリンの最古参住民であるアイヌとオロツコが当初は友好的で平和な関係を保持したことを、そしてその後に出来した殺し合いは、異なる慣習への理解不足が原因だったと伝えている。以下では、オロツコのパリヒン

から聴取した伝承をそのまま引用する。

大昔のこと、何世代前だったか、わしらは知らぬが、アイヌのタライカ村の傍らに、一人のおロッコが細君とお袋と二人の息子とともに住みついた。上の息子はすでに十代半ばだったが、下の方は全くの幼子。ある日、おロッコの家を裕福なアイヌの有力者の一人が客として訪れた。喜んだおロッコはトナカイを屠って、自らの部族の料理で最も美味なものの一つ——トナカイの生の胃袋にアザラシ油をまぶした料理——をこしらえた。アイヌは、己がひどく不味い食物に腹を立てたことはおくびにも出さずに、出された料理を食べた。数日後、おロッコは上の息子とともにそれぞれのトナカイに跨るやアイヌの家を目指した。滞在中に主人が暫く幕舎を後にすると、一人の老女が泣きながらおロッコの許へ駆け寄って、女主人が炉上で調理中の肉には女の後産が混ざってあるから、その肉は食べるなかと彼に囁いた。おロッコは息子に一刻の猶予もなく家を出て、出立のためトナカイの支度をせよと命じたものの、己の行動を追跡しかねぬアイヌに疑念を抱かせぬよう配慮もした。父親もまた直ちに幕舎を出て、トナカイの背に跳び乗るや、父子ともども間に合って村から脱出した。アイヌらはまさにその瞬間に武器を手にして家から飛び出し、彼らのあとを追って射撃しだした。その夜半、おロッコの天幕の周囲には大勢のアイヌが雲霞の如く集結した。殺される父の叫び声で目覚めた息子は、天幕天辺の開孔から脱出してトナカイに跨ると、森へ向けて疾駆した。払曉に、アイヌらはすでに去ったことを認めて天幕を訪れた息子は、父母の遺骸と半死半生の祖母をそこに見出した。祖母は彼に、揺籠から幼い弟を取りだして、ティミ河口にあるおロッコ集落「トロ (Toro)」へ連れて行くよう命じた。彼女はまた、旅への備えとして最も脂の乗ったトナカイを屠り、その肉と獣脂で幼い弟を養うことも命じた。弟は揺籠の中で生きていた。赤ん坊の胸を狙った敵のナイフの刃は、

「ロン (Koso [Koso (Pis)])」と称する石環に当たって、赤ん坊の体をかすかに傷つけたのみ。若きオロッコは祖母の言いつけを守ってトロに至り、そこで暮らすオロッコたちへ体験談をつぶさに語り、彼らは別の氏族に属する人たちだったが、その集落に留まった。幼子は成長して有能かつ怪力の持主となった。弟はある日、己の胸に残る傷跡の由来を知りたがった。そこで兄が弟へ、アイヌのことやその残酷さについて物語るや、若きオロッコは自らの親族たちの殺害に対し復讐することを決断する。両名はもう二人の勇敢なオロッコを仲間に加え、四人でトナカイを駆ってタライカを目指した。そこでは専ら村々への夜襲を繰り返し、燃えさかる干し草で火を放ち、焔を避けつつ大慌てで家々を脱出する人々は殺した。その折に破壊された集落は、ヴァラパイ (Varapai [Varapai (Pis)]、藁貝)、タランコタン (Tarankotan [多蘭古丹])、ナイブトゥ (Naiputu)、タライカなどである。女らも決して容赦なかったが、最も美しい女二人だけは死を免れた。彼らは彼女たちを北へ連れ去り、それぞれの嫁にした。子孫からは「ゲタ」という呼称のオロッコ・アイヌ系氏族が出来た。この氏族には僅かながら子孫も現存し、「トリル (Toril [Toril (Pis)])」集落で暮らしているとのこと。だが、南のオロッコの間には、この氏族の成員が一人もいない。

この二部族間戦争をめぐる細部にわたるまでほとんど同一の伝承を語ってくれたアイヌらは一四、オロッコがアイヌの女たちを連れ去ったと断言した。その際は、ほかならぬこの血塗られた親族関係が斟酌されて、オロッコらを攻撃し、膨大な数の同部族者の死に対し復讐することは敢えて差し控えたのだが、もしオロッコ側が先に手を出すならば武器を取って応戦し、アイヌ側が確信する自らの優越性を立証する覚悟であるとも付言した。

一四 以下の拙著を参照されたい。Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore, Cracow. 1912, pp. 66-76.

オロツコのアイヌに対する攻撃は十中八九まで、さらに長期にわたつて継続されたであろう。オロツコからの聴書きによると、彼らはさらにテルペニエ (Terpen'ie) 〔北知床〕岬以北のサハリン東海岸一帯——ギリヤークとオロツコはこの一帯をカレル (Karel' [Karel' Pils]) 北サハリンの東海岸に連なる山脈名) と、アイヌはカレル (Karen) 二五 と称する——に在住するアイヌとも戦つて、後者に属する領域を占領したそうである。

アイヌの間には別の伝承も伝えられている。それによると、この荒涼たる無愛想な海岸では、河川に魚が全く遡上しなくなつた飢餓の数年間に住民の一部が死に絶え、また一部はギリヤークと混交したという。

オロツコが内訌でギリヤークと事を構へたことは一切なかつたそうである。しかし、女の略奪とそれに起因する殺人や、殺された同氏族者に対する血讐の義務をきつかけとする個々の氏族間抗争・内乱はあつた。

往時の戦争をめぐる問題にかかわる詳細からは、——アイヌやギリヤークの伝承によると——オロツコがトナカイに騎乗して敵に襲いかかるとき凄まじい喊声を上げたという、今一つの細部にも留意すべきであろう。ギリヤークたちはこれらの喊声を、神々に支援を求める呼びかけと説明したが、それはまた、トナカイに前進を強く促し、立ちほだかる敵を恐れぬよう叱咤する掛け声とその本領だつた可能性も大いにありうる。この細部は少なくとも、オロツコの戦い方をアイヌやギリヤークのそれとは区別するものだ。ところで、これらの土着民はいつも接近戦を挑み、急襲を旨としてきた。オロツコの真骨頂は、敵へ向けての果敢かつ決然たる進撃である。

アイヌらが今一つの興味深いオロツコの特徴として私に告げたのは、己の同部族者らには見られず、ギリヤークの間でもさほど顕著ではない、彼らに特有の驚くべき敏捷さや機敏さである。オロツコの歩き方は実に軽快そのものであるから、

一五 アイヌ語では子音「i」が発音されず、この例に見られるように「r」音で代替される。

この敏捷さをめぐって幾つかの伝承が伝えられていても別に驚くには当たらない。私はアイヌたちから以下のような伝承を、間違ひなくつて出来た事実として聴取した。

昔々、一人の未成年のオロツコが年老いた父や母と暮らしていた。春に国中が飢饉に襲われて、オロツコらは魚釣りに出かけた。この貧しい老人もやはり海岸へ赴いた。いずれかのオロツコらが老人を殺し、頭を切り落として杭に突き刺した。いきり立つ息子は殺人者らを襲おうとしたが、老母はナイフで息子の手首に傷を負わせて、彼に復讐を思いとどまらせた。その後、彼女は息子を厳しく育てた。母親が死んだとき息子はすでに大人になっていたが、秋になると狩りに出かけた。秋と冬は猟場で過ごし、春になると海辺に行き、己の家で暮らした。そのときは黒貂や川獺をあまた仕留めた。彼はある日、櫓を駆って別の集落を訪ね、そこで頗る裕福な男の美しい細君を見染めた。オロツコは彼女を盗んで己の家へ戻った。細君を盗まれた男は、3台の櫓に分乗する6名の勇士を率いて彼の跡を追った。凍結した入江を渡るときに氷が割れだして、彼らは引き返すことを余儀なくされた。改めて出直したときは人数が12名に増えて、舟でオロツコの村を目指した。彼の同村者らは、かくも勇敢な人たちから女を盗んだという暴挙に肝をつぶし、彼の企ては惨めな結末を迎え、彼もきつと間もなく落命するだろうと予測した。舟の一団が岸に近づくとき、オロツコは粗末な魚皮衣を身に着け、粗製の弓と矢入り箆を引摺むと庭に出た。細君には幕舎内に留まるように命じ、弓矢を戸口の上に置くと、己は木端を驚摺むや、後ろ手に組んで、海岸へと通じる小径を下っていった。そして立ち止まるとしやがみこんだ。到着した男たちは舟を岸に引き上げると弓を取り、彼を狙って射はじめた。だがオロツコは、飛んでくる矢をことごとく木端で遮り、彼を狙って飛来する矢を摺み取ることもあったから、彼の体には一矢も触れることがなかった。到来した男らの矢が尽

きると、弓射の的だった男は韋駄天走りて家へとつて返し、弓と箆を取り上げると、敵に向けて構えつつ、「戦いを挑む者は、殺害目標の男へ予めその旨告げるのが筋であるのに、箆にも棒にもかからぬ者と見くびられたか、お前たちはそれを怠ったから、わしの方も同様に振る舞うぞ」と言い放った。到来者らは手槍で迎え撃とうと身構えるも、彼は槍の柄や男らの肩の上を飛び回りながら弓射を重ねて一人残らず殺した。そして、彼らの舟の積載品をすべて奪って平然と暮らした。同村者らはこの期に及んで、彼が機転の利く男であることを初めて了解し、驚きの声を上げた。彼はある日、自分が怒らせた人たちと対決する用意があると告げて、屋外で自らを的に弓射を試みるよう、同村者らを挑発しだした。彼らが同意し、おロツコは地面に腹ばいとなった。彼らが矢を放つと彼は跳び上がって、矢は彼の下を通過した。より高い所を狙っても、彼は必ず適時に身を翻すからやはり当たらなかった。しかるに、木製矢尻を付けた矢で射るように命じると、矢は彼の脇腹に命中し、「木の神様は明らかにわしよりも勇敢でいなさるな」と彼はからかった。彼が遂に12名を率いて敵の村^{一六}を攻めたときは、住民の半分を一人で平らげた。だが同行した人たちはそこで、このように大きな村を皆殺しにしたら「神」の前で恥ずかしくはないか、だから戦は止めにした方がよい、と諫めて彼に思いとどまらせた。彼らは帰村して、秋には己の獵場を求めて、さまざまな川筋へ散っていった。彼に従ったのは併せて13名だった。彼は海に至近の川筋を選んだ。十日ほどその川筋を遡ったが、突如として、どうしようもなく家に戻りたくなって、翌日には帰途に就いた。彼が村に着いたとき、すべての住居からささやかな煙が立ち上るのに、中央に立つ彼の幕舎からは煙の痕跡もなく、屋根の天辺には残雪を認めた。こは如何にと驚き訝りつつ家並みに沿って走った。異様なもの——熊か悪魔

一六 これは明らかに、彼の父親を殺害した人々の村である。

か——が突然、彼の方へ疾駆してきた。その歯は口中に垂れ下がる氷柱つららの如く、丈のほど6サージエン「¹² 8」の尾は地表を引きずり、毛並みには瘤が散見され、四肢は熊であった。怪物は飛びかかるが、彼が飛びのくと、前者は後者の脇に横たわる。再び怪物は唸り声を上げて突進したが、彼も再び適時に脇へ跳んで弓射を開始するも、怪物の体には一矢も命中しなかった。残る矢が一本だけになると、彼は悪魔が跳躍する度にひらりと身をかわしつつづけた。もし最後の矢でも傷を負わせられなければ遺憾な結末を招くと考え、怪物の後ろへ素早く回るや、その肛門へ矢をぶちこむと、矢は矢羽根の最端部まで入った。怪物が今や尻を地面に擦りつけている間に、彼は手槍でまさにその心臓を一撃して殺した。そしてそれが「シカトロ (sikatro)」¹³ という名の牡の魔鳥であることを見届けた。その後、彼が家に入ろうとして戸口を叩いても中々応答がなかった。青ざめた顔の細君は、彼が猟に出かけると間もなく、この悪魔がやって来て家の周りをうろつきだしたから、彼女はどこにも行けず、何も食わずに閉じ籠っていたと語った。その後、オロツコは平穩に暮らしたが、剛毅の人としての名声は国中に轟いた。

弓射もさることながら飛来する矢から身をかわす術をめぐつても、かつては特別な訓練がオロチの間でも実践されていた事実は、一八八八年にOIAKが公刊したモノグラフ『インペラートル湾のオロチについて』で、V・P・マルガリトフ⁽¹⁵⁾が紹介している。同じ特徴はアイヌの間でも、オロツコの隣人である北のタライカ・アイヌだけに伝わる物語中に見

¹³ 「シカトロ」ないし「ロエ (koe)」はアイヌ語で海鳴を意味し、そしてオロツコ語でも同鳥を指すらしいが、アイヌはこの鳥が魔力を有すると見做している。

出される一八。したがって、戦闘術に関するこの慣習を、オロツコは己のかつての故郷から持ち込んだと想定することも可能である。

俗信

ここでは、私がオロツコらと敢行したポロナイ川の舟旅の間に聴取した俗信から、その数例を摘記する。

(1) もし誰かがくしゃみをしたときに痛みを覚えるなら、それは敵対感情を抱く人たちがその人を想起することを、もし痛みを伴わなければ、友人たちが噂していることを意味する。

(2) もし弓射に長けた誰かが(猟場以外で)立て続けに二度も的を外すならば、それは至近の未来に何らかの不幸が射手を見舞うことの予兆である。昔日のオロツコは、サハリンの他の土着民同様に、標的を定めての弓射に情熱を燃やした。通常の標的として選ばれるのは、開けた原野に屹立する何らかの大木だった。オロツコらが語るところによると、一人の高名な射手があるとき、ポロナイ川の岸辺に立つそのような大樹を標的として、立て続けに12回も外し続けたという。彼はその後、己の露营地「ドロ(Doro)」までは辿り着いたものの、そのほとんど直後にそこで絶命した。

(3) 顔面筋の痙攣は好天の到来を意味する。若干の人々は同様な痙攣を心臓や頭部に感じることもある。

(4) オロツコの(そしてまた同様にギリヤークの)見解によると、郭公は愛の、あるいはむしろ性欲の象徴であるそうだが、愛想を尽かした己の細君と手を切ることを目論んだ夫が、細かく刻んだ郭公の羽根をまぶした煙草を彼女に与えた、と伝承は語る。細君はキセルから煙を吸い込むや忽ち郭公に変身して、彼女はそれ以来、夫や人間たちを懐

かしんでひっきりなしに叫びつづけるわけだ。肘鉄を食らった男にとっては、郭公の羽根を潰した粉末を煙草に足して、そのような煙草をお目当ての女に振る舞うことが、女の好意を勝ち取るための最良の手段である、とオロツコらは考えている。

(5) 私がオロツコの間で認めたヒキガエルと毛虫に対する恐怖の説明を、いまだ聴取できないでいる。しかし、彼らが、跳びはねる蛙からどれほど熱心に逃れようとするか、あるいはまた、路上などを這う毛虫との遭遇を怖そうに避けようとする様子は、私も目撃した。恐らくそこには、いまだ未解明の何らかの世界観が隠されているのであろう。私にはそれを説明したくない風情で、これらの下等動物に対しては最も勇敢な人々が一様に強い恐怖心を抱くのだから、臆病心からそのように振る舞うわけではない、とも告げられた。

(6) 子供らが時折そうするように、もし蝙蝠を殺害するならば、やがて雨が降るであろう。

葬儀・墓

オロツコは死者を幕舎内の炉辺に安置する。遺骸の洗浄と着せ替えは女の務めである。他界へ旅立つ死者に持たせるべきものをすべて整えるまで、遺骸は二三日そこに留められるが、家族に新しい死装束を仕立てる余裕がないような貧しい死者は、それ以前でも運び出される。かつてのオロツコでは、各自がいまだ存命中に、死出の旅路で着用を希望する衣装や履物を一つずつ整える習慣が広く行われていた。これらの品々はトナカイやアザラシの毛皮でこしらえた特別な袋に収められて、生者はそれを決して着用しなかった。その後に、死後の生活で必須の品々が改めて死者用に製作されたが、この習慣は今や廃れている。死者の親族たちは、日夜を分かたず常時維持される火の傍らに坐して泣きつづける。死者の死を悼んで泣くことは果たして、受容したロシア正教の影響下でオロツコの生活に取り入れられた新事象と見るべきか、

それとも、なるほど隣人のギリヤークには己の悲しみを泣くことで表明する習慣がないとはいえ、近親者の死後の慟哭は「オロツコの間」以前から行われていたか、を私は究明できなかった。私はまた、死者に纏わせるべき衣装の数に關して明確な決まりがあつたか否かについても、やはり解明できていない。少なくともオロツコからの聴書きによれば、女には男よりも常に多くの衣装を与えるべきとのこと、ギリヤークらも同じ意見である。この世もさることながらあの世でもまた、女にはより多くのものが必要なのだそうだ。すでに正装された死者の遺体は、なるべく新しくて、さほど草臥れていない——天幕の蔽いとして使用されるが、昨今では概して布地で代替される——縫合された毛皮の断片で包んで、新造された櫓に安置する。その後、四人の男が櫓に載せた遺体をより汚い「後ろの戸口」(ドゥヴィウタ *duvi uty* [duvi uty] (Pis), duwwee ut) (Yam)) から搬出する。もし、より常設的な夏の住居で死者が出ると、その家は永久に放棄される。もしそれが天幕の場合にはこの指令が適用されないが、そのわけは恐らく、確かに同一地点に繰返し建てられることもあるが、ほとんど毎回新たな土地に新設される天幕は、余りにも短期の住居と見做されるからであろう。オロツコは故人が生前に使用したさまざまな品物——男にはナイフ・弓・手槍(老人には必ず鑄鉄製小鍋も)やキセルなど、女の場合はさまざまな容器、魚を捌く道具や裁縫道具一式——を棺に納める。これらの物品には必ずひびが入られるが、それは個々の物に宿る精霊を解放して、己の主人とともにあの世へ旅立つことを可能とする措置である。これら日常生活での実用品に加えて、——かつて病人の苦悩を緩和するべく作られた精霊の木偶である——「シヴア (*siy* [siy] (Pis), sawe (Yam))」【日本では江戸期以降「セワ」と記される】と称する呪具も納棺される。男女用とも棺桶は落葉松の——鋸で挽かれたものではなくて立ち割られた——板で製作された。その形状は引き伸ばされた台形を呈する。遺骸は頭をより広い部分へ向けて納められた。板で蔽われた棺は、高さが約1メートル半の三本柱に固定された、小丸太を組んだ台座に据える。オロツコはそのような墓を「イグダホルドスコ (*igdy*

xoŋ'dosko [jədy' hohosko (Pis), igde xodosko (Yam)]」¹⁹、即ち「柱上の棺」¹⁹と称する。柱の数は常に3本以下だったそう。子供の棺は割り抜かれた小桶2個からなり、一つは棺の底で今一つは蓋となるように重ねられた。そのような小棺は二本柱に支えられて、通常は大人の棺よりも高い位置に据えられる。そのような子供の墓に、私はタライカ湖岸の日本人漁場「トゥナシカクシ (Tunas'kakusi)」の近くで遭遇した²⁰。

しかし、柱上台座に安置する形の天葬は一般的事象でなかったという。天葬は裕福でより傑出した人たちのためだけに行われ、貧しい人々には別の葬法が存在したそう。落葉松の細めの丸太を隙間なく接合した枠組——「コリ (Kori [Kori (Pis)])」と称された——が製作されて、そこに遺骸が据えられた。この方法はオリチャの慣習を彷彿させる。そのことは、もし前記の葬法とも対比するならば、オロチ文化を大いに想起させる原初的伝統からの影響と、後代のオリチャの影響の双方が、オロッコの習俗では混交していることを示唆するのではあるまいか。昨今の正教徒のオロッコたちは、聖職者の命令に従って己の死者を土中に埋葬し、墓上には十字架を立て、より富裕な人々は墓の周りを柵で囲むこともあるなど、正教会の慣習通りに死者を葬っている。

死者は仰向けで、両脚を東へ向けて安置される。墓地として選ばれるのは露営地の近辺で、やや高まりを見せる乾いた一九 シュレンクはその著作『アムール地方の異族人について』3巻(144頁)で、ペダン (Pedan) 村——但しこれはオリチャの村で、墓はオロチ部族出身の女のものだったが——に見出された同様な墓について言及している。

二〇 日本の『東京人類學會雜誌』第287号(一九一〇年二月刊)には、「オロッコ」の大人の棺と子供の小棺を撮影した二葉の写真が掲載されていて、私の観察を裏付けるとともに、私からの照会に対する回答ともなっている。落葉松の高い枝に据えられて、反対側からは長い杭で支えられた子供の小棺には、揺籠も釣り下げられている。「『東京人類學會雜誌』第二十五卷二百八十七號(明治三十四年二月二十日號)」に所載の口絵には石田収蔵撮影の「樺太に於けるオロッコ種族の古風を存する架棺」、²¹「樺太オロッコ種族嬰兒の風葬」と題する2葉の写真が掲げられ、雑誌欄には「口絵説明」として小記事「オロッコの墓所」(197頁)も収録されている——訳者注。

場所が好まれた。だがもし仮住まいの天幕で、即ち偶々の逗留地で死者が出ると、その近くのどこかに葬られた。死者の家族は葬儀の間、参集者らを可能な限り気前良くもてなし、死出の旅に赴く親族へ最後の心遣いを示すべくこれ努める。屠られるトナカイは通常1頭だが、富裕者が死んだときは数頭の場合さえある。その他の食物も用意される。それぞれの料理は少しずつ小さめの食器に盛って、遺骸が屋内に留まる間は、その近くに供えつづける。死者は食物を必要とし、それを毎日受け入れると想像されている。葬儀後ですら三日間は、米、乾製魚、(もし可能であれば) ヴオトカ、煙草を墓前まで届ける。その際に鮮魚と新鮮な肉は禁物とされている。この期間が明けると、葬られた故人を象徴的に養うというこの儀礼行為も終了する。故人はすでにあの世に到着して、地上で暮らす人たちの支援はもはや不要になったと想像されるからだ。オロッコのパリヒンが私に語ったところによると、自分の細君の葬儀では4頭のトナカイを屠り、商店でも大枚37ルーブリを叩いてさまざまな食料も購入したが、裕福でないオロッコの懐にとつては頗る巨額の出費と見做すべきだったことだった。裕福な主人の家における死では、遠方の露営地に暮らす人々も葬儀に参集するから、さらに一層巨額な出費を招来する。なるべく広い範囲の隣人や親族の間では誰彼を問わず、ましてや金持ちには必ず訃報を通知するという習慣が存在する。

異常死や事故死の場合には葬式に顕著な変化が生ずる。例えば、オロッコは水死者を恐れて屋内には入れず、家の近くに残置して、飼育トナカイの毛皮で蔽う^二。その脇で焚き火を起こして、昼も夜も火を焚きつづける。焚き火の傍では弓や手槍を手にした数名の男が遺骸の警固に当たり、水死者の魂を持ち去った水の悪霊の到来を阻止する。万が一、悪霊が

^二 オロッコが通常使用するのは野生トナカイの毛皮であるが、このような場合、要するに死者のためには飼育トナカイの毛皮が用いられる。

姿を現して警固者らと格闘に及ぶような事態が出来するならば、女たちは非武装の足手まといにほかならぬから遠くに離れておらばならぬ。警固のために十分な人数が常時確保され、頻繁な交代のお蔭で新鮮な戦力と警戒心を十分に具えた警固が堅持さるべく、露営地にはなるべく多くの人々が招集される。葬儀用の食物も、やはり屋外の焚き火の近くで調理される。水死者の警固をめぐっては、やや趣を異にする以下のような説明をオロッコの一人から聴取した。即ち、水死者の体内に住みついた悪霊は、そこを離れて、周囲の人たちに害をなすこともあり得ると彼は想像したわけである。水中から引き上げられた水死者らは土葬に付されて、「ブニ (buni [buni (pis)])」と称する通常のあの世へ赴く。だが水死者の遺体が見つからぬような場合は話が別である。そのときは水の精霊の国へと赴くからだ。オロッコが想像する他界は地球の中心部に所在し、そこへと通じる道の入口は地表のどこかに存在するそうだ。あちら側でも自然の生活や生き物の活動は、人間が地上で見慣れたものとよく似た形で推移する。違いはただ、地上で夏のとき死者の国では冬、その逆の場合もありという点にある。われらの側の昼はあちら側の夜に当たるわけだ。恐らくはキリスト教信仰の影響と思われるが、他界への道は二股に分かれ、善人は楽しくて心地よい場所へ至る左の道に案内されるのに、悪人が連行される右の道は、シベリアのタイガやツンドラの夏に君臨する——すべての生き物の虐待者である——蚊や蚋や虻、またありとあらゆる不愉快な虫どもの大群が蟄集する、ぬかるんで湿っぽいツンドラだ、とオロッコらは語った。道が分岐する地点には「カラウ アムバ (karau amba [karau amba (pis)])」(灰色の「魔物」と称される悪魔が坐して、部族の伝統によつて確立された道德律を存命中に甚大かつ頻繁に破った者は全員を、苦難の場所に至る道へと差し向ける。悪魔は罪人らを煮えたぎる釜へ投げ込んで、全員を死に至らしめると想像する者もいる。ある伝承によると、一人の豪傑は、己を天国に行かせぬ悪魔の命令に服するのを拒み、強力なケルベロス「ギリシャ神話に登場する地獄の門番の色に飛びかかってもみ合い、その体をズタズタに切り裂いたという。に

もかわらず悪魔は生き返り、その後に、当代の著名なシャマンの一人へ、他界での新「市民」になるはずのこの豪傑の蛮行を訴えて、まさに同シャマンが豪傑の病氣治療として執行した巫儀の中で、そのように振る舞う彼に教唆したことを非難した。しかるに、シャマンはその事実を認めず、豪傑の蛮行で責めらるべきは我にあらず、と釈明した。こうして彼は命拾いたわけだ。他界は、生者が地上で見るものの反転図であるという言説は、一度死んでその後に生き返った人たちの証言によるものだそうだ。ある時、一人のオロツコが死んだが、葬られる時を待たずに二日後には息を吹き返した。彼は他界への旅の途上で見たことをすべて語り、従来からの言説の信憑性を裏付けた。ひよっとすると、この伝承の背景には昏睡状態の事例が関与しているかも知れない。

地下にも海があることについて、オロツコの伝承は以下のように物語る。

アムール流域から狩りにやって来たあるオリチャが、「フングラ (gungra [hungra (pis)])」ないし「パル (par [アイヌ語「ロ (par/paroho)」の借用か])」と称されるツンドラの「小窓」に落下し、この底なし孔に落ちた彼はむろん落命したが、事故については、この「小窓」の傍らで同オリチャの樹皮製帽子が発見されて、皆知るところとなる。オロツコたちは暫く経った頃、同人の遺体を死者の海の岸辺で発見した。地下に海があり、それが不運なオリチャの遺体を地上まで運んできたことは、誰の目にも明らかとなった。これらの「小窓」にはトナカイも落ちて、そのまま落命することもある。

オロツコたちは死者の名前を口にせぬが、例外は、彼らが「金持ちはたとえ死すともやはり生者だ」と語る富裕者の場合だけである。

呪具

オロツコは、特別な事業や各種活動で成功をもたらす一連の呪具を承知している。それらは「バヤキ (bajaki [bajaki] (Pis), bajacki [Jam])」と称される。それは常に、頗る稀にしか遭遇せぬから注意も喚起し、子供のように未発達な心のオロツコには、のちのちまでも想像力を掻き立てるような物体や、動物の一部あるいは完形の動物である。苦勞して発見した物や偶然に遭遇した物が、その他の何の変哲もない普通の品々とは異なるように、その持主はその他大勢から際立たせる何かを付与するが如き宝物を入手した、とオロツコは想像する。そのような「もの」はただ、それを今なお知らぬか、そのような珍品を己が目で確かめたことのない人たちに見せることはおろか、その存在すら知られぬよう秘匿する必要がある。そこに宿る魔力が少しずつでも抜けてゆかぬよう、はたまた完璧に消失してしまわぬためにも、それは自宅の奥深くにしまつて秘蔵にこれ努めねばならない。その後、大抵の場合は持主が己の呪具のことをポロリと洩らすか、老人が死の床で自分の子供らに告げた結果、呪具の効力が失われたあとで、人々はそのような機会を通して、先行する何世代かの人々が伝承する若干数の呪具に関する知識を、己の記憶に溜めてゆくわけだ。そのような呪具をめぐっては自由に語られるばかりか、のちに私が数点の呪具を受領する際に説明されたように、すでに多年にわたって誰の目にも触れたことのない「逸品」とまでも言い募られるわけだ。まさに以下の六点こそそれらにほかならぬが、幸運に恵まれて打ちとけた対話の中で、一点ずつ私に引き渡された呪具である。

- (1) 森で発見された熊の陰茎 (pens) は、熊狩りで膨大な成功をもたらす。
- (2) 罌にかかるか、銃で仕留めた純白の黒貂は、黒貂猟で幸運をもたらす。
- (3) アザラシの体表に瘤のように付着した毛玉は、この動物の猟で成功をもたらす（これに関しては、ただ古い伝承が語

るのみ。

(4) トナカイの角の先端には、同獣の脚部や頭部の図柄が見出されることもある。切断されたそのような端部は、野生トナカイ猟で幸運をもたらす。

(5) トナカイの胃の中に見出される、何らかの透明な液体で満たされた小袋は、トナカイ狩りで猟師に幸運をもたらす（この呪具についても、頗る遠い先祖らの伝承が伝えるだけである）。

(6) 銀色三三の魚、即ち、全身が銀で蔽われているように見える魚は、もし捕まえて秘蔵しておくならば、あらゆる魚の漁で幸運をもたらす。

オロッコのパリヒンは、これら六体の呪具をすべて提供した人物であるが、鳥は決して呪具にしない、と私に断言した。当のインフオーマント自身は鳥の呪具を有するにもかかわらず、その効力の減少を慮って、鳥やそれに類する動物について、私にはわざと否定して見せたのでないかと思われる。

祝祭

なるほどオロッコたちはロシア正教を受容したとはいえ、ロシア人入植因らが断言するところによると、キリスト教の祝日を祝うことはないそうだ。私自身はこれを確かめていないが、信じてよいと思われる。祝祭についていろいろ詮索しても、私が得た説明はただ、所謂「熊祭り」と称される伝統的祝祭に関するものだけだったからだ。そして、私はそのような祭りに参加する機会もなかったが、アイヌやギリヤークの熊祭りは承知するから、根掘り葉掘り訊ねる中で、オロッコの隣族たちの祭りに類似する若干の細部のみならず、若干の相違点も突き止めた。祭りの仕組みをめぐっては、如何

二三 サハリンには「銀の」と称される鮭鱒類の魚がいる。その特性をただ強度に有する同魚がここで言及されていることは明らかである。

なる目撃者——民族学者——といえども、意表を突かれるような特徴は何一つ見出さないであろう。

熊祭りは、漁期と最も大切な秋の狩猟期が終了した直後の、初冬に実施されるのが恒例である。アイヌやギリヤークと同様に、一つの氏族が全体として仔熊の養育にかかわり、また同様に祭りの実施や客人の応対でも氏族の各成員は協力が義務付けられるが、主要な出費を担うのは仔熊の主人の家である。通例では、自らの安寧を決定的に乱すことなくこの課題を引き受けられるほど裕福な男が、その役割を担う。若者らは招待されなくとも祭りに参加できるが、自尊心の旺盛な年長者たちには予め使者を立てて、格別に招聘せねばならない。ギリヤークやアイヌの人たちも参集する。

一部のインフオーマントによると、オロツコはそのため天幕を特設して、祭りはそこで行わねばならぬという。別のインフオーマントらは居住用の天幕でも举行できると語った。前者の意見は、主催者らが場所の狹隘さに鑑みて、容易に設営可能な客舎へ客人たちを案内するか、あるいは何らかの理由で、彼らが樹皮で蔽われた幕舎に冬も住みつづけるような場合に該当するのではないかと私は想像する。オロツコの慣習は、この種の家の中へ熊の肉を持ち込むことを禁じているからだ。

熊を育てたあと殺害する祭りはかつて、檻の中で三〇四冬養育したのちに举行されたが、昨今では祭りへの執着が薄れ、また参集する客人も減少したから、檻の中で二冬を過ごした熊が殺されている。動物は強力でないほど危険も少ないからだ。オロツコは熊の犬歯切りを行わない（この点ではギリヤークの慣習に従っている）。檻の四隅に飾りとして立てられた樅の枝には、「イリヤウ (il'au il'au (pis), il'au (am))」と称する削掛けを結びつける。殺害のために引き出された熊には、アイヌが用意する草製腰帯や削掛け製耳環のような装飾をオロツコは一切施さない。頸部と四肢が革紐で繋がれた熊の頭部には、この手順の最中に——そしてのちには遊びとして——、ただ氏族の成員（即ち熊の共同所有者）たちだけが跳びかかるが、そ

れ以外の者は誰もその権利を有さない。頭部を目がけて最初に飛びつき、熊の四肢に革紐を装着する間それを押さえつける役を務めるのは、熊を育てた家の最年長者であるが、病気の場合だけは彼の至近の親族がそれを代行する。熊は露営地のすべての家を一巡しつつ連れ回される。主人らの最年長者が行列を先導する。女は誰一人として行列に加わらない。熊とそれを引率する人々の後ろを、何台かの通常の櫓を曳く若者らが、それに積んだ大量の食物を熊が殺害される予定の場所まで運搬する。その通例の場所としては、露営地から0・5(1・5)ヴェルスター(500^{メートル}1・5^キ)先の森の外れのどこかが選ばれる。熊は地面に立てられた——「トウダ (tudy [tudy (pis), tuda (Yam)])」と称される——二本の棹状Y字柱の間に繋がれる。それぞれの柱の上には「イリヤウ」が東面して結縛される。主人は、「オリヒ (oli [olihi (pis), oli (Yam)])」と称する熊用の特別な小桶にあらゆる料理を少しずつ盛って、最後の食事を与える。この儀式が終わると、その食器は空になった熊檻へと運ばれる。その間に全員がそこを退去して、熊は暫く独りでとり残される。すべての客が住居群の傍らに参集すると、主人は集結した人々をねめ回しながら一人の強力で敏捷な若者を選び、熊を殺しに赴くことを命ずる。主人は己と同じ氏族の若者に白羽の矢を立てることができず、選抜される若者は常に——主人とその親族が嫁を取り、また己の女たちを婚出させる——氏族の一員である。主人との親縁関係は近いほど良いとされるから、射手としては専ら主人の実際の姉妹の息子か、彼の娘の夫が選ばれることになる。選抜された若者には、予め準備された——「パウラ (paura [paura (pis), paura (Yam)])」^{二三}と称する硬木で作られた——弓と(高々5本の)矢が授けられて、先頭に立つよう命じられ、その後ろを主人が、さらに後ろは男の集団と少年たちがつき従う。アイヌの祭りではほとんど最も重要な場面をなす熊へ向けた

^{二三} 恐らく錦木(ニシキギ)属の樹木 *Eryomimus?* であろう。私はこれを究明できなかった。樹木自体も実見する機会がなかった。ギリヤーク語では「ユル (jurn)」と称する。

口上が、オロツコの間では一切行われない。主人は——側枝は払うものの、その樹冠部だけは枝葉を残して削掛け（「イリヤウ」で飾り立てた——かなり長い（高々3畧の）樅の細木を手にとると、それで熊をじらしだして、その左脇腹を射手の方に向けさせようとこれ努める。射手の方は三々四歩離れた所から狙いを定め、好機を捉えるや真直ぐ心臓を狙って矢を放つ。彼は必ずしもそれに成功するとは限らない。弓射を三々四回重ねたあとも熊が絶命せず、傷ついて暴れまわるときは、主人が射手から弓を取り上げて、自らが可及的速やかに熊を始末するように努める。もし熊をいたずらに長時間苦しめるならば、主人とその同氏族者らは熊たちの支配者（高峻な山々の神）から報復される懼れもあるからだ。熊がすでに最後の息を引き取ったことが自明となるや、熊の胴体は頭を東へ向けて伸展させ、前脚は胴部に沿って伸長させる（オロツコの慣習はこの点で、熊の前脚を頭部の下に収めるといふギリヤークやアイヌのそれとは異なっている）。その後が始まるのが酒盛りと、家から届けられた食物の会食である。ここでも参加するのは男たちだけだ。己の肉親の許へ去った熊から受領すると見做された食物の共食が終わると、毛皮を剥ぐ作業に着手する。この作業には客人であるか、また主人らであるかに一切かわりなく、その道の達人たちが参加する。剥皮の際には胴体も個々の部分に切り分ける。肉を切るのは通常のナイフであるが、ただ眼球を抉りだし、心臓を取り出し、頭部を胴体から切り離すときだけは、各家に常備される三種の専用ナイフ——「マグリクチハ（*magli kuciga* [*magli kichia* (Pis), *magli kuciga* (Yam)]）」（禁忌のナイフ）——が使用される。これらナイフの各々の冠頭部には、熊の性器から採取した毛髪の本が貼り付けてある。これらの本の数から、何頭の熊がそのナイフで処理されたかを知ることができる。ナイフが廃用となるときは、それに「イリヤウ」を巻き付けて、熊の骨が堆積される場所に積み上げる。その際は同時にまた一頭の犬も扼殺する。熊の眼球は「イリヤウ」に包んで、骨とともに投棄されるが、祭りの進行中は、胴体から切り離された頭部の近くに安置される。肉と獣脂がすでに調理用に切り揃えられると天幕の中へ運

ばれるが、その際は戸口を通してではなくて、戸口の反対側の天幕用毛皮蔽いを軽く持ち上げて搬入される。熊の頭部もまたそこに、その他のものと同じく樅の枝を敷きつめた上に据えられる。肉の煮炊きと炙りが開始される。オロツコが炙って調理する部位は、胸骨、鎖骨、第一・第二頸椎、肩と大腿（つまり前肢と後肢）の筋肉、肺臓、心臓、直腸、肝臓、腎臓である。これらの部位の肉は女には食べさせない。オロツコは熊の胆嚢を薬として使用する（ギリヤークは熊の骨とともに胆嚢も檻内に放置して、格別には利用しない）。煮炊きには女たちも協力できるが、彼女らには胴体の前半身に触れることが禁止されている。三日目か四日目に熊肉の会食が開始される。容器が不足するのみならず、また禁忌のせいで調理が二ヶ所で実施されることは明らかだが、一つのささやかな炉の傍らでは煮炊きと炙りが頗る緩慢に進行する。主人は、最も重要で尊敬措くあたわざる客人たちを自らの身近に配し、また各氏族からは尊敬すべき人物を一人ずつ熊の頭骸骨の近くに着座させ、その他の人たちはやや離れた炉の周りに配置される。女たちは天幕の戸口近くに配されるが、女主人は主人の右手に座を占める。アイヌの熊祭りで見られるのと同様に、誰も靴は脱がない。肉を共食する間はヴォトカも振る舞われる。最も尊敬すべき客の前に瓶と猪口を載せた小卓が置かれると、彼は手酌をして猪口を飲み干すや、小卓を次の人へ引き渡す。小卓が一巡すると、今度は若い主人の一人が2杯目、3杯目と注いで回る。女主人たちに振る舞うことも禁じられてはいない。主人らも飲むことはできるが、酩酊は避けねばならぬ。口論を和解させ、悶着を収め、秩序全般を維持せねばならぬからだ。客の人数は正確に数えられ、熊肉だけに使用される白樺樹皮製の方形容器「アندوقマ（*anduma* [pisi]）」が各人のために用意されて、そこには数片の熊肉と獣脂に加えて、濃い味付けの植物性煮物も少しずつ盛られる。オロツコの許では骨から外された肉が配られるが、骨の方は主人らが特別な薙に集積して、壁際の毛皮の脇に置かれる。炙り肉の細片と茹でた舌は、男の参列者の全員になるべく行き渡るように配布する。客人らは配られた食べ物のほんの僅かを賞

味するだけで、各自は祭りに参加していない家人のためになるべく多く残そうと努める。したがって、各人は配られた容器を自宅に持ち帰り、暫く経った頃、容器には苺——苳桃、蔓苳桃、*Impetum nigrum*——や新鮮な「ルイベ」（最上のもは川カマスの「ルイベ」）を満杯に詰めて返却する。穀粉類の使用が広く行われるようになった昨今では、これらの贈り物に穀粉製練り菓子も加わる。但し、全くの貧乏人だけは空の容器を返却する。他方で、祭りの儀式に何らかの意味で違反した者は己の罪を購うべく、長い革紐や鑄鉄製の鍋を主人に献呈する。ところで熊祭りは、何らかの悶着や醜聞なしには決して終わらない。オロツコらは容易に酩酊し、ヴォトカの影響で羽目を外し、喧嘩早くなつて、大勢の人々がいる所では口論や掴合いのきつかけを見出し、とどのつまりは、上記のような品々で過料を支払う破目となる。熊祭りの間にトナカイを屠る決まりはないが、祭りに向けて少なからぬ量のアルコール飲料を用意する裕福な人々は、まさにそのためにトナカイを殺す。トナカイ肉は、なかなかこの肉でこしらえたスープは、——オロツコらの手元に届く代物がほとんどの場合——にそうであるような低級のヴォトカを飲用したあとの——特に不快な酩酊状態を緩和する最良の手段と見做されている。祈禱は祭りを通して全く唱えられず、火に対してすら一切の供犠もなされぬそうだ。この証言には、オロツコらが真実を隠すかも知れぬ理由が判るだけに、疑つてかかる必要がある。誰よりも長く逗留するのは、祭主の氏族が女たちを遣り取りする相手の氏族の人々である。これらの友人を可能な限り気前良くもてなすことは己の義務だ、とオロツコは心得るからだ。すべての骨が確められて、散逸した骨が皆無であるとの確信が得られると、いまだ日の出前の払曉にそれらを家から運び出して、当該の露営地がその目的のために常用する特別な場所へと赴く。椎骨はすべての骨を細い棹に通して、その上には頭蓋骨も載せる。棹の先を削掛け（「イリヤウ」）で飾り立てると、棹自体は、さまざまな樹種の棒で蔽われる骨の集積場の傍らで地面に突き刺して、垂直に立てられる。

上述した熊祭りの記載では、滅多に味わえぬ熊肉料理で構成される食物の共產主義的消費の残存、遊樂への願望、宗教的要素といった三要素を私は識別する^{二四}。「祭りには」上述のように、すべての列席者だけではなく、肉片や調理された食物の一部を届ける形で不在者もそれに参加する。遊樂に関しては、祭りの総体がある種の上演される演劇であつて、そこでは観客と演者が渾然一体となるものの、部族の生活では稀な酒盛りに身を置き、長きにわたるどんよりした灰色の生活から解放された感動を味わえたことで全員が満足を感じる。祭りの間に何らかの踊りが行なわれるか否かを、私は究明できなかった。もし行われたとしても、恐らくはギリヤークと同様に、その意義は頗る僅少であろうと思われる。だが祭りの合間に、観客にもまた競技者にも多くの感動と喜びを与えるトナカイ競走は常に挙行される。恐らくはその他の競技——高跳び、重量挙げ、弓射——も実施されたであろう。暇を持て余す大勢の若者らは全く当然ながら、これらの楽しい競技に持てるエネルギーを注ぎ込んだであろう。宗教的要素に関する限り、外見上はロシア正教を受容しているオロツコらの許でそれを説明するのは極めて難しい。私の詮索に対して、そのような要素の存在を彼らは断乎として否定した。しかるに、それが間違いなく存在することは、上で列挙したタブー（禁忌）や、偏に熊祭りと関連する特別な振舞いからも明らかだ。熊それ自体は神と見做されぬが、神は、つまり「高峻な山々の神」は、熊の毛皮を纏つて谷間に下りてくることもある。しかも熊は、この神の下僕であるから尊敬や配慮も享受するわけだ。熊は盛大に山へ送り返さねばならない。アイヌは大勢の同族者が参集する機会を捉えて、死者を悼んで慟哭する。ギリヤークは、この世に新たに到来する氏族の新成員

二四 詳細はドイツの *Globus* 誌に発表した拙稿 “Das Bärenfest bei den Ainustämmen” (1909) を見られたい。また『ロシア帝室地理協会紀要』に掲載予定の拙稿 “Медвежий праздник у Айно в Сахалине [樺太島アイヌの熊祭り]” も参照されたい。【このロシア語論文は一九一五年に、実際はロシア帝室地理協会の民族学専門誌『ジヴァヤ・スタリナ』に発表された。邦訳稿「樺太島アイヌの熊祭りにて」が本書に収録されている——訳者注。

へ与えることがそのときから可能となる、死せる先祖の名前を公表する。オロツコの熊祭りに死者とのかかわりが存在するか否かを、私は究明できなかった。

夏場の熊の殺害でも、やはり酒盛りはせねばならない。だが、すべてのオロツコは露営地に散っていて、客人を呼ぶ暇がないから、熊の肉は燻製にしておき、招待客がさまざまな露営地から熊肉の会食へ参集できる、適当な時機の到来まで待機するのが通例である。そのような祭りは単に「フプリ *Gupuri* [hupuri (pis)]」と、そして熊の殺害を伴う冬場の祭りの方は「フリアチ *(xuriaci)* [xuriaci (pis), xurigačuri (Gam)]」と称する。オロツコは熊の頭骨を削掛け（イリヤウ）で結縛する。森における熊の殺害後に木を削って熊の小像をこしらえたのち、殺して食べられた熊の個々の骨から同種の動物個体が再生するのをあたかも願うかのように、その木偶を骨とともに投棄する。オロツコは頭部を伴う毛皮を、アイヌやギリヤークと同様に売却することはない。もし毛皮を完形で売却すると、立腹した熊は売り渡した本人を殺すだろう。そのようなことができるのは、ただツングースだけである。

今一つの重要なオロツコの祭りは、その春の猟期に捕獲された全頭骨を水に投ずる「アザラシ送り」である。ポロナイ河口のタランコタン「多蘭古丹」で暮らすオロツコらの間では、この祭りが五月——沿岸を浮遊する氷塊群がテルペニエ（多加）湾岸から去ってゆく中で、氷の間を泳ぎ回りながら氷上で休息するアザラシに対する気楽な猟が終わる月——に挙行されるのが恒例である。完璧に肉の削がれた頭骨はせつせと倉に積み上げられる傍らで、骨だけは犬の食料として庭に投棄される。祭り当日の日没頃、すべての主人は銘々の舟で、自らが今回の猟期に仕留めたアザラシのすべての頭骨を村の対岸の川岸へと搬送する。各人には己の場所が定められており、到着後はそこに陣取って、持参した食物を頭骨に詰める作業に従事する。その際に使用される食物は、米飯、干した野生姥百合（*Fritillaria kamschatensis*）の根、花独活（ソルジクト

(*sol'dz'ikto* [sol'jiktó (Pns), sol'jika (Yam)]) の乾燥茎といった植物性食品だけである。頭骨の鼻孔に小ぶりの「イリヤウ」を差し込んだあとで、海の神に向けて一個ずつ水中へ投ずる。贈られた進物を受け取った海の神は喜んで、次の獵期には感謝の印として今期に劣らぬ量の生きた同じ動物を送り出すであろう。それと同時に、頭骨が水に投じられた場所には高さ1メートルほどの柳の棒を立てるが、剥がされた皮膜は切断されずにだらりと垂れ下がるとともに、棒の先は削り上げてもあるから、それは立派な「イリヤウ」である。一九〇四年「五月二十一日」、私は「オロツコ語で「シュクトウ」と称する」ソチガレ村でそのような祭りに列席したが、オロツコやギリヤークが頭骨を投ずる際に、何らかの祈禱を唱える場面には遭遇しなかった。頭骨をめぐる儀式を終えると直ちに、日のあるうちに舟漕ぎ競争が催されるはずの村に全員が取って返した。すでに家々から川岸に群がり出た人々は、熟年の男たち、若者たち、女たちがそれぞれ別個の集団をなして岸辺の高所に、オロツコもギリヤークも渾然一体となつて陣取り、その場には数名のアイヌさえ居合わせた。子供たちも大喜びで走り回つて、飛んだり跳ねたりしていた。一艘の大きな舟にはオロツコだけが乗り込んだものの、漕ぎ手が一人不足したから、一人のギリヤークが招聘された。今一つの小さな舟には四人の若いギリヤークが乗り組んだ。漕ぎ手の各自が持てる力を發揮するべく足を抑える革紐が結えつけられ、また櫂が外れぬようにと、櫂受けもろとも靱皮製の綱で結縛してあった。小舟では舵取りを務めるギリヤークが果敢な挑発的姿勢で舵を諸手に握つて立ち、漕ぐ際の邪魔にならぬように両袖ともたくし上げてあった。全員が上着は脱いで、慣習が許容するぎりぎりまで軽装の小さなズボン下と下着姿だった。裸身を人目にさらす権利はギリヤークもオロツコも有さない。川の中ほどまで漕ぎ進んだ両舟は舳先を揃えて停止し、発せられた合図とともに我を忘れて漕ぎだしたが、その熱中ぶりは、予め申し合わせた目標に近づくに連れて益々昂じていった。小舟は舳先で水を切つて走るが、大舟の方は余りにも揺れが激しくなつたから、一人の漕ぎ手は櫂を放して、反対側への

動きを繰り返しながら舟の平衡を保たねばならなかった。すべての観衆が目標地点への舟の到着まで見届けられるようにさほど大きな距離は設定されていない。川岸に坐する人たちは——ギリヤークはギリヤーク、オロツコはオロツコに対し——、それぞれが声を上げて身内を応援するが、年輩の人々は隣の人らと意見を交わすか、楽しい光景にやさしく微笑みながら沈黙していた。小舟が一着になった。両方の舟が出発点に戻ってくる。いずれの舟でも配置換えがなされ、小舟では舵取りが交代したが、大舟の方は漕ぎ手が席を換えて、革紐の締め直しなども行なわれる。再度の競走が開始されるが、小舟が再び100〜120サージェン(213〜256^ポ)も水をあげて大舟を制した。そこで漕ぎ手の総取っ換えが行なわれる。大舟に勝者のギリヤークたちが乗り、小舟には敗者のオロツコらが乗り組む。今度は後者が喜ぶ番で、オロツコたちは先頭に立ち、その舟是一位で到着した。すべての漕ぎ手の力は互角であること、そして小舟はあらゆる点において大舟に勝ることが衆目の一致するところとなる。小舟の持主で、またその製作者でもあるオタシ(Otasi)村のチャンチャイン(Chanchain)は、参集者全員からの賛辞を聞きながらかすかに微笑んだ。舟は鳥や鴨に擬えられ、また舟のさまざまな造り方や、良木を選んだのち快走に最も適した形を付与する能力をめぐっても議論が百出する。夜の帳が下りてきて女や老人らは立ち去っていくが、若者たちは今やただ夢中になって、さまざまな競技を続ける。二人がかりで舟を持ち上げだすや、力自慢たちは最も大きな舟を抱え上げたまま数サージェンも曳いてみせて、己の力を誇示する。その後はすっかり日が落ちて、夕食や家事遂行のため三々五々自宅へ呼び戻されるまで、格闘技や「縄跳び」「原文では「革紐跳び」が続いた。勝者らには何の褒美もなく、その夕べもさることながらその後の日々にも、彼らの機敏さや力量や優位性が話題とされる名譽だけで満足するのだ。各主人はそれぞれの自宅で夕食を開始するに当たって、その夕べには植物性食物だけに限られる食卓から少々を供物として火に投じて、この日の祭事全般に火の神も参加するよう請願するわけである。

オロッコは冬の半ばに所謂「グシベニベバチエ (gusi beni bybycie [gusi beeni baobačuri Yam])」と称する「一月の祭事」を挙行する。その原語での意味「驚の月のお供え」(Yam) は説明してもらえなかった。この祭りは恐らく、すべての神々が真冬には家に留まるから、送られる進物——「イナウ (inu)」「削り上げられた棒」や「サケ (sake)」「米のヴォトカ〔即ち酒〕」——も神々の手許に最も届きやすいと考える、隣族のアイヌから借用されたものであろう。オロッコがこのときに何らかの供物を捧げるか否か私は承知せぬが、その折に用意される料理として、熊祭りでは必須の、したがってまた宗教的意義も有する祭りでは必ず作られるはずの「ムシ (musi [musi Pisk])」の名も挙げられたから、恐らくはこの料理が捧げられたのであろう。「ムシ」は葎と植物の根茎とアザラシ油でこしらえる。

その際は「モニ (moni [moni Pisk])」「ソリ (soli [soli Pisk])」、米飯といった、その他の料理もやはり用意し、トナカイを肉用に屠り、ヴォトカも購入する。一家を張る家長はそれぞれが申し合わせた日に、客人らを自宅に招待する。その当番は全員の間を一巡するから、丸一ヶ月は御馳走攻めと酒盛りで明け暮れる。そしてこの間の祭りには、いまだ未解明ではあるが宗教的要素と、日常的要素といった二つの要素を見出すことが可能、と私は想像する。それは、すでに本命の猟期を終え、己の毛皮獣を首尾よく売却し、今や全員が一堂に会して、常に新鮮で興味深い狩猟の冒険談や、その成功と失敗や、何らかの未曾有の事象や、交易期の細事などなど、各自の感動を喜んで分かち合う猟師たちの祝祭である。

祭りや酒盛りは概して人々を結びつけ、団結や、社会問題をめぐる共同討議の機会を提供してきた。最も高度に組織された社会においてさえ、最も高邁な目的を掲げる会合が今なお午餐会・酒宴・儀式・舞踏会などを伴って行われているではないか。

オロッコは黒貂猟開始の前日、あるいはアザラシ猟のために初めて海へ出猟する前日には、しめやかながら宗教的意義

を有する祭事を催す。後者の場合、オロツコは小ぶりの「イリヤウ」と、少々煙草・米やその他の植物性食品を水中に投じる。それが海の神に対して、その慈悲心を求める供物であり、その対価として豊猟を祈願する進物であることは明らかである。黒貂用の罌を設置する前夜にも、通常の食物のほかに、オロツコ自身の食卓でもやはり珍品である植物性食品でも、動物の神を養う祭事が舉行される。この神は動物を統べるはいえ、植物——なかんずく日本や満洲からもたらされる食品（大豆や豌豆や米（*budo* *buda* (pis)）——は有さぬという理由からも、植物性食品は同神の氣に入るはずなのである。当日の猟師はほとんど必ず一頭の犬を扼殺して、その肉は食するが、骨の方は、それぞれの猟師が己に帰属する川筋に有する掛け小屋の脇のささやかな骨組の上に安置する。同骨組にはまた、さまざまな樹種で作られた小ぶりの「イリヤウ」も数本据えられる。犬は明らかに、動物の神の前に出頭して、黒貂やその他の毛皮獣の豊猟を請願する力を具えた使者である。あれこれの供物はいずれも、当然ながら各家族か、個別の猟師仲間が別々に捧げる。豊猟は個別の家族か、各集団の至近の仲間たちが一丸となつて請願するからだ。

医療

民俗医療の領域では、オロツコが使用する療法をめぐつて若干の語りが入手できただけであるから、ここではそれらを脈絡抜きで紹介する。

- (1) もし手が、とりわけ夕刻や夜半ごとに痛むならば、患部に干した蝙蝠を縛り付ける。
- (2) 手の指が痛んで、傷口が認められるときは、そこに羽蟻を宛がう。
- (3) 体のどこかに蟻が噛んだような痛みを覚えたときも、そこに羽蟻を宛がう。
- (4) 雀蜂が噛んだ患部には、何らかの獣脂を塗布する。

- (5) 手の指が曲がつて伸びないときは、そこに蝸牛を縛り付ける。
- (6) うおの目を治すには、それを熱い食器に触れさせる。
- (7) 腫れが生じたときは、強く熱した蓬の茎をそこに当てる。
- (8) 咯血の際は9個の石を火に投じ、強く灼熱したときに取り出して、それぞれの石へ次々と血を吐きかけるよう、患者に命ずる。
- (9) 激しい下痢の際は苦い蓬 (*Alum victorale*) を食べさせる。
- (10) 歯痛の場合は、飼育トナカイの歯を首に懸けさせる。
- (11) 風邪や骨の鈍痛の際は体表を指で摘まんで、暗赤色の痕が残るまでそこを圧迫する。この圧迫は歯で行うこともある。
- (12) 頭痛の場合も、額か鼻の上部をやはり圧迫する。
- (13) 物もらいができたときは、脇の隅の充血箇所小さな男の子の陰茎 (penis) を当てて治す。
- (14) 指が化膿したときは——その原因はしばしば、鮭鱒類の捕獲時に魚の口唇部を鷲掴んで運ぶときの擦過傷を介しての、魚毒中毒であると推定されるが——、その指を雌犬の膺に挿入させる。
- (15) 魚を食べる最中に小骨が喉に刺さったとき、もし古い漁網の切れ端を首に懸けるならば、小骨はひとりでに抜けて胃に達するか、口まで戻ってくるそうだ。
- (16) 煙草に加えられた磯躑躅 (*Ledum palustre*) の葉は人を強靱にし、咳も抑えるという。
- (17) 火傷のため唇に化膿性発疹が生じたときは、干したハコベラの葉を患部に宛がう。

(18) むくみや腫れは、乾燥した海蟹の殻の粉末で治療するが、患部には布切れを巻きつける。

(19) 仕事を終えたあとの鎮静剤として、少量の植物性外皮を服用する。

疾病に関しては、オロツコの間に蔓延する主要な病気を指摘することができぬため、若干の特徴を特記するだけに留める。例えば、彼らの隣人であるアイヌやギリヤークは脚気の洗礼をすでに受けており、日本人がもたらした病と見做すのに対して、オロツコが脚気に罹らないことは、まことに興味深い限りである。敢えて解釈を試みるとすれば、オロツコは隣族の土着民に比して、飼育トナカイであれ野生トナカイであれ、より多くの新鮮な肉を食し、乾製魚の摂食は著しく僅少である事実だけは、ここで指摘することができる。だが住居内における新鮮な空気に関しても、オロツコは抜群に恵まれていた。アイヌやギリヤークらが脚気に悩むことが通例の冬場に、ギリヤークは常に、そしてアイヌはかつてしばしば堅穴住居で暮らしていたが、オロツコの方は常に地表で、しかも全く未利用の土地で生活した。ゼーラント博士はそのギリヤークに関する著作中で^{二五}、脚気の原因を土壤に含まれるか、あるいは地下空間に生ずる瘴気に帰している。

オロツコでは伝染病（はしか、天然痘、感冒）の患者もやはり著しく稀だそうである。私が離島する際の一九〇五年には、アイヌの間で感冒（インフルエンツア）が猖獗を極めて、主としてオロツコとの雑居領域である北部「タイカ地方」でも多くの人々を墓場へ送ったが、オロツコの方は全く罹患しないか、罹っても軽く済んだそうである。オロツコにとつて通常の対処法

二五) 言及されるゼーラントの著作は H. D. Zealand (N. Seeland), "О программе исследований Гиллякова. О гилляках," *Известия Общества любителей естествознания, антропологии и этнографии при Московском университете*, томъ IX, часть 10: 66-126, Москва (1886) である。ピウスツキは同著作を自著「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」(本書はその邦語訳を収録)で、引用文献として提示している——訳者注。

——即ち、感染した家族は全員が、ときには罹患者だけを残置して、即刻にやや離れた新地へ移動するが、一切合財を携えての牧地の移動は容易かつ早急に実行可能であるから、彼らはこの移動を造作なくやってのけるわけだ——が、この場合の説明とはなりえないだろうか。

明らかに神経性疾患に属する興味深い病氣と見做すべきは、オロッコ語で「フニユク (*xunjuiku* [xun̄iku (pils)] xuniku (Yam))」、ギリヤーク語では「クマジンド (*kmazind* [km̄azind (pils)])」と称される疾病である。その症状は以下の通り。同病の罹患者は突如として何らかの特定の物体、往々にして誰かの許で見たものを所有するか、受領するという願望に取り付かれる。願望は、もし叶わなければ患者は今にも死に兼ねぬほど強烈であつて、その頃には全身にさまざまな痛みも覚える。患者を鎮静させるには、希望する物を拝借するか、その一部あるいは (例えば衣服の) 切れ端を与えるだけで十分であるが、極めてしばしば、犬の姿を模した呪具 (所謂「フニユクシヴァ/*xunjuiku siy* [xun̄iku siy (pils)] xuniku sawa (Yam))」をこしらえて、患者の寝具の上に吊り下げる。

オロッコの間にも梅毒が広まって、治療を受けないような患者は患部が破壊される第三期症状にまで進行していたと想定することが可能である。アイヌらから聴取したところによると、かつてのオロッコには身体の腐敗した者が大勢いて、続々と死んでいったという。しかし私は、今もなお二人——一人は男で、今一人は女——の患者が生きながら腐っているという話も聞いた。オロッコはこの病氣を「ゴヤエヌチュ (*goja ynuču* [goj̄ anučuri (Yam)])」「(別の病) ないし「特別な病」と称している。

ここで、オロッコはハンセン病に罹らぬらしいと指摘するのはまことに興味深い。それはむろん条件付きでのみ受け入れが可能であり、専門家の医師らが提供する検証されたデータも参照すべきであろう。民族学者の仕事は、記述する対象

民族の頭脳と心の中で躍動するものの議事録を作成することにある。オロツコはこの病を口にすることさえ怖れた、という可能性もないわけではない。例えばギリヤークらは自分たちの間にハンセン病が存在することを、恐らくは病氣中で最も怖い病を想起することへの恐怖から、その存在を何度も否定した末に、ようやく認めたからである。しかしながら、もしオロツコの主張が正しいとするならば、この事象の原因は肉に富んだオロツコの食事に求めるべきではなからうか。水に溺れた人は、もし生命の兆候を示すならば火の傍らに横たえて、何か温かい物を飲ませる。もし水から救い上げられた者が歯を食いしばっているときは、何らかの棒を使つて両顎の骨を力ずくでこじあける。次に、可能な限り温めるべく暖かな衣服で全身を蔽う。このような場合、シヤマンは救うことができぬと考えられているから呼ばれない。

子供の遊び

オロツコの子供の遊びの中で第一位を占めるのは、大人の仕事やその作業を真似るといふ願望に根ざす遊びである。したがつて少年らが何よりもまず情熱を燃やすのは、小弓を用いて的や、住居近くで飛びまわる小鳥を狙う弓射だ。先の尖つた短い棒を銚のように、何らかの標的を目がけて抛ることも、やはりお気に入りの遊びである。少女の方は、自分の母親や女たちを真似て、紙や布切れを切り抜いた人形の世話焼きを愛する。それは常に扁平な人形である。オロツコは立体的に彫琢された顔部を具える人像を大量に有するだけに、これは驚くべきことである。だがそのような木偶は、上述のように専ら何らかの疾病に向けて作られる呪具にほかならない。私はかつて、そのような木偶を玩具として抱く少女を一度も見たことがない。

オロツコやギリヤークの子供たちが「隠れん坊」に打ち興ずる様子を、私は幾度となく目にする機会があつた。一人か

二人の子を「鬼」として幕舎内に残すと、その他の全員が隠れ終わるまで鬼は目を開けることが許されない。子供らは庭や、周囲の隣家や倉の周りを走り回る。全員がすでに姿を隠し終えると、一人の子が「クーク(ぎぎ)」と大声で叫ぶ。この叫びは、すでに全員が隠れおせたから、幕舎内の鬼たちは探し始めてもよいことを意味する。子供らは手の込んだ策を凝らして巧妙に隠れるため、痺れを切らせた子が遂に自分から姿を現すまでは遊びが終わらぬことも珍しくないので、彼らは長い時間をかけて遊びつづけることもある。子供たちは鬼よりもむしろ隠れる側になりたがるが、それは恐らく、ほかの子らがすべて隠れ終えるまで、鬼は幕舎内で不動のまま長時間坐しつづければならぬからであろう。そこで鬼の役は籤で決められる。長さが1ゝ1・5アルシン〔71ゝ107^サ〕の棒の、一人がその下端を握るや、その他の子らも一斉に片手を突き出して、その棒を次々と掴んでゆく。その手が棒の最上段となった子が幕舎内に留まって、友人たちを捜す役を務めなければならない。

子供の遊びには「鬼ごっこ」もある。ここに果たして、隣接するチフメネスク哨所〔敷香、現ポロナイスク〕のロシア人入植囚の子供からの影響があったか否か、私は詳らかにしない。参加者の一人の子を布切れで目隠しすると、その他の子供らはそれぞれに、目隠しされた鬼の手や肩を叩き、また衣服を引っぱっては鬼に触れようとこれ努める。すると鬼の方も彼らを追って駆け回り、誰かを捕まえようと試みる。掴まえられた子が今度は鬼となり、目隠しをされて友人らをとらまえる役を務めるわけである。

オロッコの子供らは、大人たちもまた同様であるが、その動きが頗る機敏で軽快なように見える。この貴重な身体的特質は、新鮮な空気の下で活発に動き回る遊びの中で反復される訓練の賜物である。例えば、少年らは地面の上に印をつけて、そこから数メートル離れた所から片足で跳躍を開始して、数回の「けんけん跳び」でその印に着地しようと努める。

たとえ不首尾でも過料や懲罰は一切科されない。失敗に終わった子は、再び課題を遂行するべく跳躍を再開する。今一つの跳躍種目は、二人の仲間がある程度の高さで張つて支える革紐を跳び越える「高跳び」である。最も低い革紐の高さは、跳躍者の鼻の位置に設定されるのが通例である。彼がその高さを跳び越すと、次回からは革紐の位置が段々高められてゆく。若干の距離から助走して跳ぶ者もいるが、すでに十分敏捷な子らは、立ち位置からそのまま跳躍する。

今一つの遊びは以下の通り。一本の棒をほぼ膝に触れるほどの高さまで地面に突き立てると、そこから離れたのち、僅かな距離から身をのけ反らせて、頭で棒の先に触れようと試みる。試行を繰り返す間には転倒してしまふ子も出るから、その場に居合わせて己の出番を待つ仲間たちから、爆笑や喝采を浴びるようなことも稀ではない。

革紐を使用するものとして、今一つの「縄跳び」にも言及すべきであろう。かなり長い（数メートルの）革紐の両端を握る二人が、円を描きながらそれを回転させる間に、第3の子は革紐に触れることなく、そこを走り抜けようと試みる。したがって、革紐が高所にある間に、彼がその関門を駆け抜けることもあれば、好機を見計らつて低い位置にあるときに革紐の上を跳び越すこともある。この革紐の間を駆け抜ける遊びでは、それに参加する少女の姿も私は目撃した。

少女たちの方は、欧州のすべての民族の子供らにも周知の——対坐する二人が、両端を結び合わせた糸を両手の指の間で支えながら、さまざまな網文様を作りだす——「あや取り」で楽しい時を過ごすことを愛する。一方が相手の手から受け取る度ごとに、それぞれは時に2本、3本、4本の指を駆使して、そこからさまざまな組合せの文様を作成するわけだ。

子供や若者には、そして時には大人らの間でも最も愛される遊びの一つが、「輪っか」の投擲と棒によるその捕捉である。この「輪っか」投げ遊びの参加者らは平坦な空き地に、通常は住居列に沿つて伸びる小道に参集し、籤引き拔きの自由意思によつて二手に分かれる。各自は長さが2〜3メートルの細い棒を手にしている。一方の組の先導者が、——極めてし

ばしばウワミズ桜の——しなやかな枝で「輪っか」を抛り投げる。相手方の組は「輪っか」を棒で捕捉して、それを保持せねばならない。もし誰にもそれが保持できないと、その組の先導者は「輪っか」を相手方の組の方へ投げ返す。もし誰かが捕捉できた場合、一度に10点までの得点が得られる。もし一方が10点に達すると、次のような展開になる。組の代表者は、相手方が棒で投じた「輪っか」を、それ（の真ん中）を目がけて投げられる棒で捕捉せねばならない。彼はそのことに成功するまで20回も試みる必要があるが、その後には「輪っか」を取り上げて、両方の組の間の真ん中所に置き、己の棒は相手側の方に向けて投じるが、それが「輪っか」からなるべく離れた所へ落ちるようにこれ努める。次に、負け組の全員が棒の落下した地点へと近づいてゆき、地表に横たわる「輪っか」の中心を目がけて己の棒を投じた。もし誰かの棒が的に適中するならば、懲罰から解放される。勝ち組の側は、標的に当て損ねた人たちから一人を下僕として捕虜に獲って、遊びは最初から継続される。しかるに、下僕は敵陣の後方に配されるとはいえ、彼の以前の組は、敵方の誰にも捕捉されぬよう、そして捕虜となっている身内の男が必ずや捕捉するようにと念じつつ「輪っか」を抛るのだ。彼がもしそれに成功するならば己の組へと返されて、それぞれの側が捕獲した「輪っか」のスコアは一新されることになる。だが、一方の組の参加者がいずれも頗る敏捷で、下僕も一名ならず数名までも獲得して最終的勝者となることもままあるが、その頃には往々にして両親が子供らに帰宅を促したり、何らかの用事を命じたり、あるいはまた日没やその他の理由でもって、遊びに幕が引かれることも珍しくない。オロツコとギリヤークが雑居する大集落のソチガレで、私は両者の若者らがこの遊びに熱中する様子を觀察する機会があった。ギリヤークらは「輪っか」を「トゥトフ（*tutuf*）」と、また捕虜は「カクフ（*kakuf*）」と称する。オロツコの青年らによると、彼らも同じ名称を保持するそうである。私は怪しいと見たものの、確かめる機会には恵まれなかった。

オロッコらが旅の途上に掛け小屋で過しながら天気の好転を待つことを余儀なくされるときは、その強いられれた無為の時間が余りにも長くてしんどくならぬよう、ほんの一寸としたことで気晴らしをしようと努める。私はある日、ポロナイ川を溯る舟旅の途中でこの退屈払いの実態を目撃した。川で直前に捕獲してわれらの昼食となった川カマスを食べたのち、オロッコらはこの魚の下顎骨を外して己の頭に載せた。頭を軽く動かすと、下顎骨はわれらの天幕の地面の床に落下する。もしその歯が上向きならば、直前に問うた質問には肯定的な回答が得られる。もし下顎骨が歯を下にして横たわる場合は否定の回答である。オロッコらは何時間にもわたって天候や、トナカイ・熊・鴨やその他の鳥に遭遇する機会や、鮭・鱒類の早急の溯上や、その豊漁をめぐって、そしてその頃には酣だった日露戦争の終結などについても、数限りない設問を提起すること、この素朴な遊びに延々と打ち興じていた。

予言とそれを用いての遊びの双方に役立つ材料としては、川カマスの顎の今一つの、尖端が軟骨で終わるという特徴を有する骨も挙げられる。その一端をさらに尖らせるべく、これを暫く火で炙りつづける。その後何らかの設問を唱え、この骨を背後へ抛り投げては、その行方を見届ける。もし骨が天幕の布製蔽いに突き刺さるか、その小柱に引掛かるときは、所与の設問に対する肯定的回答を意味する。それがもし跳ね返って床に落ちるならば否定の回答である。提起される設問には真摯なものも、また面白半分のものもあるとはいえ、それは明らかに遊びであって、それ以外の要素を私は認めなかった。とはいえ別な要素がかつては存在し、そのような予言が向後の行動決定で顧慮されえたことは言うを俟たない。しかしながら、私の道連れのかつては若者だったオロッコたちはそれについて何も説明できなかった。彼らは、川カマスを食べたあとのオロッコはいつも同じことを行ってきたが、わが家で実施するこの遊びはむしろ、旅先で天幕に坐することを強いられながら、不快かつ不要な雨のやむのを待つときよりも、はるかに短時間で切り上げるのだと語った。

近年のオロツコ（の男）、なかなか若者はトランプ遊びに習熟しているが、それが入植囚らの手を経て彼らの許へ伝えられたのは決して昨今のことではない。数名の青年が一つ幕舎に集って、流刑囚の間で有名なゲームの「ダムカ」「オクルカ」「ドウラチョク（ババ抜き）」に興じる。あるゲームは自前のオロツコ名「バルシエ（*parse [parse (p)is]*）」までも有する。しかるに、われらの道中でトランプが話題になったとき、若者らはそれを持参していなかったから、ゲームの規則を私に解説できなかった。同じオロツコらは、トランプでお金を賭けることは極めて稀で、もし賭けたとしても少額だから、負け金が2ルーブリを超えることは決しないと断言した。賭け事は彼らにとつて未知である。敗者はほとんどの場合、負けゲームで溜まったチップの数だけ額の爪弾きを受ける。トランプは隣人であるロシア人入植囚から教わったとはいえ、彼らと一緒にゲームをすることは好まない。ロシア人は、自分らをむかつかせる、いかさまが大好きだからだそう。自らはゲームに対し、いつも真摯な態度で臨んでいる。

出典——ロシア連邦共和国極東中央国家文書館（ЦГА ДВ РСФСР）所蔵のタイプ打ち複写稿（фонд Р-623, опись 1, дело 58, листы 1-64）。〔極東中央国家文書館は第二次世界大戦時にトムスクに避難していたが、現在は浦塩に戻っている。現名は極東・ロシア国家歴史文書館（РГИА ДВ）——訳者注〕。

編者注

(1) ダヒ、ヴァル、トリシヤ、ゲタの4氏族は、現在のノグリキ地区に在住していた。それは、ヴァール村やダギ集落といった居住地点の名に反映されている。ムイカ氏族はスミルヌイフ地区ペルヴォマイスク村や、オロツコのムイガチ村が立地していたネフスコエ（多来加）湖の南岸に在住した。シュクタ氏族は、ポロナイ川の河口に流入する右方支流レオニドフカ（旧称シスカ）川の流域に在住した。ここに

(2) タライカ（多来加）湖の現名はネフスコエ湖〔原文では「編者注15」に配置されていた〕。

- (5)(4)(3) オリチャは、十九世紀後半の民族学文献で使用された、アムール下流域のハバロフスク地方ウリチ地区に現住するウリチ民族の旧称。ツングースは、二十世紀の二十〜三十年代まで使用されたエウエンキ民族の旧称。
- (5) シヤマンのダルダガン。ダルダガンというシヤマンの名はサハリンの地名に銘記されていた。ポロナイ川上流のダルダガン河畔に一八九一年、ダルダガンという名のロシア人村が創設された。この場所は定住地として不適だったため、「一八九七年一月二日付の武官知事令」により、「ダルダガン村は居住地点、覽から削除された。ところが、ダルダガン村はその後に再建された。一九八五年六月二十四日付のサハリン州執行委員会決定第221号により、ダルダガン集落は登録名簿から抹消された。
- (6) ナイエロ〔内路〕村は一九四七年以降、ポロナイスク地区の労働者集落ガステロ。
- (7) チフメネスク哨所〔敷香〕は一八九九年に創建された。現名はポロナイスクである。
- (8) 盗賊のシロコロボフ。フョードル・シロコロボフ(1851〜?)はサハリン流刑囚。残酷さでシベリア中にその悪名を轟かせた犯罪者。N・J・ノヴォムベルグスキーは一九〇二年、サハリン流刑中のシロコロボフと面接して彼の自叙伝を聴取し、それを自著『サハリン島』(H. Я. Новомбергский, *Остров Сахалин*, стр. 175-251, СПб., 1903)に収録した。同書には手押し車に繋がれたシロコロボフの写真が掲載されている。
- (9) ベザイス・エドゥアルド・カルロヴィチは、一八九五年からティモフスク管区第一区の集落監視官を務めた。
- (10) アブラモフカは、ポロナイ川とオノール川の合流点から南へ7キロのポロナイ川右岸に所在した元ロシア人村。一八九七年に設置され、一九八五年六月二十四日付のサハリン州執行委員会決定第221号により登録名簿から抹消された。
- (11) コタンケス〔古丹崖〕村はニトウイ〔新聞〕川の河口に立地するアイヌの古村。一九四七年以降はマカロフ地区ノーヴォエ村。
- (12) セラロコ〔白漣(しららおろ)〕村は、一九四七年以降ドリンスク地区の労働者集落ヴズモリエ。
- (13) アレクサンドリン・アレクサンドル・イヴァノヴィチ(1863〜1918)は「人民の意志」党々員。一八八七年の「ドン裁判」(J・I・ペトロフスキーその他の事件)で死刑が宣告されたが、十八年のサハリン流刑に減刑された。B・ピルスツキーが言及するのはA・I・アレクサンドリンの論文「大ティミ、ナービリ両河流域の旅より」(一八九六年八月)〔A. И. Александрин, "Из поездки по рр. Б. Тымь и Набиль (в августе 1896 г.)", *Сахалинский календарь*, стр. 92-107, 1897)である。
- (14) タライカ〔多来加〕村は、ネフスコエ(多来加)湖とオホーツク海を繋ぐ水路の砂州に立地した最北のアイヌ古村。一九四七年以降はポロナイスク地区ウスチエ村。一九六五年一月二十六日付のサハリン州執行委員会決定第27号により、居住地点は登録名簿から抹消された。
- (15) マルガリトフ・ヴァシリイ・ペトロヴィチ(1854〜1916)は、著名な極東の郷土誌家・考古学者・民族学者。アムール流域、ウスリー地方、サハリン、カムチャツカで一連の踏査旅行を実施した。極東地方の考古学や民族学に関して一連の学術的著作がある。

訳者記

本文に登場するウイльта語に関しては、山田祥子氏（網走、北方民族博物館）の御校閲を賜った。同氏が御自身の研鑽成果のみならず、諸先学の仕事（池上二良『ウイльта語基礎語彙』（1980）、淵淵久治『ウイльта語辞典』（1981）、津曲敏郎「B・ピウスツキのオロッコ語文法記述について」（1987）も参照された上で、懇切丁寧なコメントを寄せて下さったことに対し、ここに厚くお礼を申し上げる次第である。山田氏のコメントは、本文中の角括弧内に収めて「[Yamladai]」と付記してある。同様に「[pisluski]」と付記されたウイльта語情報の出典は、アルフレート・マイエヴィチ氏が編集されたピウスツキの「ウイльта語辞典」と「ウイльта語固有名詞集成」であるが、『ピウスツキ著作集』四巻（2011）に収録されている。ピウスツキのウイльта語表記における一母音—キリル文字—ハ、ポーランド語—y—には音韻表記—ハが対応する。同母音の片仮名転写では、山田氏の「ほとんどの場合「エ」音で表わしていいように思いますが、第二音節以下ではむしろ「ア」音に似ています」という御教示に従った。

元稿で数ヶ所に見出される「字間隔を拡張した」強調表現には二重傍線を当てる。

なお、「子供の遊び」の節に登場する「輪っか投げ遊び」については、西鶴定嘉氏がエンチウ（樺太アイヌ）の事例を解説しておられるので、以下にそれを転載する。

「遊戯ウコカーシシ（Ukokarishi）」

水松（フアラマニ）の枝で直径四十糎程の輪（カリシ）をつくり、六人が三人宛二組に分れ、一列に味方の並んでゐる前に、敵が件の輪を轉ばして來たのを、各々が約三米の棒をもつてゐて三人中の誰かが突とめれば一ゲームを終る。かくすること五回に及べば敵一人とつて捕虜とする。かうして敵を皆捕虜とした方が勝となる（西鶴定嘉『樺太アイヌ』13^頁、豊原：樺太文化振興会、1942【復刻版】札幌：みやま書房、1974）。

ソチガレでオロッコとギリヤークの子供らが打ち興じていた「輪っか投げ遊び」が、樺太アイヌの「ウコカーシシ」と原理的に同一の遊びであることに疑問の余地はない。

樺太アイヌの熊祭りにて

解題

本作品は、ピウスツキが亡くなる三年前にペトログラードでようやく上梓された力作である⁽¹⁾。96頁に及ぶ分量もさることながら、自らが参与観察した熊祭りを微細にわたって活写する民族誌の白眉でもある。これほどまで臨場感に溢れる熊祭りの記録は例がなく、映画やテレビドラマのプロがこれに目を通すならば、シナリオの底本として活用したい、との衝動を禁じえぬのではあるまいか。

ピウスツキは一九〇二年九月十三日、コルサコフスク（大泊、現コルサコフ）から東海岸のオタサン（小田寒、現フィルソヴオ）、セラロコ（白浦、白濁（しらおろ）、現ヴズモリエ）まで足を伸ばして、十月八日にコルサコフスクに帰着している『拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書 871 頁⁽²⁾』。本作品の背景をなすシヤンツイ（落合、現ドリンスク）、オタサン、セラロコでのフィールドワークは、この旅の中で実施されたものと想定される⁽²⁾。なるほど本文にはオタサンにおける熊祭りの実施年が明言されていないが、一九〇二年であることは間接的に示唆されている。冒頭に登場するタムキン、ウサイロ兄弟との出会いを「七年前」とする言及は、ピウスツキが一八九六年八月にシヤンツイに滞在した事実とよく符合する。一九〇二年八月以降は「七年目」に入っていたからである。また本文末尾の「付録資料」No. 45 にも、オタサンでは熊祭りが一九〇二年と一九〇四年に実施されたと記載されている。なお、ピウスツキは「復命報告 1」に「私たちは九月、オタサン村小田寒とセラロコ村白浦での熊祭りで出会っていた」⁽³⁾と記し、それが一九〇二年の出来事だったことは文脈より明らかだから、本文が記載するオタサンでの熊祭りが、まさに一九〇二年九月下旬に挙行されたことにはや疑問の余地はない。

ピウスツキの本格的アイヌ研究は——したがってまたアイヌ語学習も——一九〇二年七月に着手されたばかりだから、このフィールドワークはその初年度、しかも開始後僅か三ヶ月の時点で早くも実施されたことになる。

盟友にして畏友のリエフ・シュテルンベルグと交わした書簡を繙くならば、ピウスツキが「樺太アイヌの熊祭り」と題した初稿をペテルブルグへ送付したのは、遅くとも一九〇七年二月以前だったことが判明する⁽⁴⁾。同稿が紆余曲折を経て陽の目を見るまでには八年余りの歳月を要した。その経緯⁽⁵⁾には立ち入らぬが、シュテルンベルグはそれを文学的に過ぎると評して、学術論文の体裁を整えるよう叱咤激励しつづけた。とどのつまりは、ペトログラード（帝都サンクト・ペテルブルグの当時の公式名称）のロシア帝室地理協会民族学部門が発行する『ジヴァヤ・スタリナ』誌（一九一四年度、一九一五年刊）に収録された。

ところで一九一〇年には、本作品と同工異曲のポーランド語版とドイツ語版がすでに上梓されていた⁽⁶⁾。そして一九九八年にはマイエヴィチ訳の英語版⁽⁷⁾と和田訳の日本語版⁽⁸⁾も刊行された。但し、故和田完教授が底本とされたのは『グロブス』誌所収のドイツ語版である。

二〇一三年十二月、札幌

(1) 注
Б. Пилгудский, "На медвежьей праздник айнов о. Сахалина," *Живая старина* (1914 г.), годъ XXIII, вып. 1-2: 67-162, Петроградъ (1915). 二〇〇七年には現行正書法による現代ロシア語版 ("На медвежьей праздник айнов о. Сахалина," в: *Бронислав Пилгудский,*

Айны Южного Сахалина (1902 - 1905 гг.), стр. 107-206, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство) も公刊されている。

(2) 本書所収の「復命報告」によると、ピウスツキは一九〇二年九月十三日から十月七日までの間、即ち9月下旬にオタサンとセラロコの両村で行われた熊祭りに参加したと記している（一九〇三〜一九〇五年に樺太島のアイヌとオロツコの許へ出張したB・O・ピルスツキの報告」、本書39頁参照）。

- (3) B. Пилсудский, "Предварительный отчет о поездке к айнам о. Сахалина в 1902-1903 гг. Бронислава Пилсудского," *Вестник Сахалинского музея* 3: 400 (1996). 本書にはその邦訳「一九〇二〜一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報」が「復命報告1」として収められている(引用箇所は本書14頁所収)。同報告に「私たち」とあるのは「コントロー」本作品では「カンタロ(内藤勘太郎)」——をはじめとする「ルレの人々」のことであり、このときの出会いが縁で、ピウスツキは一九〇二年十一月二十二日〜十二月十四日にルレ(魯禮)を訪ねてくる。
- (4) L. Sternberg, "Sternberg's Letter to Pitsudski no. 5 (February 17, 1907 from St. Petersburg)," *Pitsudskiana de Sapporo* no. 4: 37, Niraaka (2010). 当初のタイトルは「Медвежий праздник у Айнов о. Сахалина [樺太島のアイヌの熊祭り]」で、『ロシア帝室地理協会紀要』に掲載される予定であった(本書収集の「樺太島のオロシコクの一九〇四年の旅より」466頁、脚注二四参照)。
- (5) 詳細は以下の三著作を参照された。Bronisław Pilsudskii, «Дорогой Лев Яковлевич...» (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893-1917 гг.), Южно-Сахалинск (1996); Sternberg, "Sternberg's Letters to Pitsudski (1906-1909) et alii," K. Inoue (ed.), *The Letters Addressed to Bronisław Pitsudski, et alii (Pitsudskiana de Sapporo* no. 4), pp.15-95, Niraaka (2010); B. M. Латышев, Г. И. Дударев и М. М. Прокофьев (сост.), *Бронислав Пилсудский и Лев Штернберг: Письма и документы (конец XIX - начало XX вв.)*, Южно-Сахалинск: ГУП «Сахалинская областная типография» (2011).
- (6) "Na niedźwiedziem śwignięcie u ajinów z wyspy Sachalinu," *Sfinks* 7/21: 206-21; 8/22: 106-13; 8/23: 299-309; 8/24: 489-501, Warszawa (1910); "Das Bärenfest der Ainen auf Sachalin," *Globus* 96/3: 37-41, Braunschweig (1910). 一九一五年刊のロシア語版は、波・独語版に対して、最も充実した内容の「決定稿」へ位置づけられている。
- (7) Translated by A. F. Majewicz, "On the bear festival of the Ainu on the island of Sakhalin (1914, 1909)," *The Collected Works of Bronisław Pitsudski*, vol. 1, pp. 438-561, Berlin - New York: Mouton de Gruyter (1998).
- (8) 和田完訳『ロロニスワフ・ピウスツキ著サハリン・アイヌの熊祭』『小樽商科大学人文研究』九十六輯11〜41頁(1998)。【再録】和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭(ピウスツキの論文を中心に)』(3〜45頁所収、第一書房、1999)。

樺太アイヌの熊祭りにて

シヤンツィ(落合)にて

南サハリンのコルサコフスク哨所「日本統治下の大泊、現コルサコフ」を出立した私が、最初に立ち寄ったのはシヤンツィというアイヌ村「露領下でガルキノ・ヴラスコエ、日本統治下では落合、現ドリンスク」である。そこでは土着民の幕舎が3軒、ナイバ川とその最大支流であるタコイ川の合流点近くの、一段高まったナイバ河岸に繁茂する柳の叢林中にひっそりと佇んでいた。幕舎の主人——私の友人ウサイロ (Usairo) ——は、入口から見て左手の炉端の主人席に、広い板床を背に坐して、元氣よく燃え盛る焰と、喫煙時に炭火を拾い上げる二本の長い木箸を思慮深い眼差しで見つめ、灰の上に筋をつけながら炉内を掻き回していた。私は同じ炉端ながら、客人の定席として床に延べられた莫蔭もかげの上に、自宅の奥壁を背にして腰を下ろした。挨拶を交わした私は單刀直入に、間もなくオホーツク海岸で始まる熊祭りの話題で口火を切った。

今年の熊祭りは——主人は語る——、わしにとつても、わしらすべてのアイヌにとつても迷惑千番な話だ。今はまさに山獵に出かける時なのに、あそこは全くもって真逆の方角だ。もし祭りが長引けば、この秋は黒貂の罽かを仕掛けることが叶わんだらう。「ユル (Yur)」（仕掛弓）と罽が捕らまえてくれるだけで我慢せねばなるまい。だが祭りには、行かんわけにもいかない。来年はわし自身が「カムイアシンケ・ト (Kamui asinke-to)」（熊を連れ出す日「即ち熊祭り」）を控えとるからだ。今回行かなけりや、わしの折に集まってくれる客も減るだらう。長老たちは遠くか

—「解題」の冒頭で言及したように、ピウスツキがこのとき「コルサコフスク哨所を出立した」のは一九〇二年九月十三日のことである——
訳者注。

らわざわざ来られるわけで、この一年で、彼らを招待する好機は今を措いてほかにはあるまい。

オホーツク海岸のアイヌたちはなぜ、そのような時機に祭りを思い付いたのか、と訊ねる私に対して、彼は次のように告げた。

春に彼らは大きな不幸に見舞われた。6名の若者が海で溺死したのだ。若者らはある朝、アザラシ撃ちに出掛けたきり、遂に戻らなかつた。彼らの親族は丸一週間、望むらくは家から遠く離れたどこかに流れ着いてくれて、明日にでも舟か徒歩で帰って来ることを念じたが、彼らの期待は空しかった。十日目に彼らの丸木舟の舳先がオタサン村〔日本統治下の小田寒、現フィルスツウオ〕近くの海岸に打ち上げられた。遺体は依然として見つかつていない。凄まじい遭難だ。親族らは、掟が命ずるように肉親を葬ることも、悼み、死装束を着せることもできなかった。水死者が住んでいた家は放棄し、使用していた遺品は壊して投棄せねばならぬ。したがって、熊も時期を早めて、初雪が降る前に殺されるわけだ。熊を飼育していたのはほかでもなく、まさに死者を出した家族だったからだ。

私が、祭りには一緒に出掛けたいとウサイロに伝えると、自分がたつた今話した事は誰にも語ってはならぬ、と彼は釘をさした。アイヌは概ね、不幸で恐ろしい出来事を想起させられることを嫌うから、もし水死者の親族にそのことを詮索しだすならば、それでなくとも悲嘆に暮れている人の、心の傷に塩を擦りこむばかりか、彼らの反感さえも買いかねず、すると彼らから何かを聴きだすことは、ほとんど不可能になるというのだ。

初日（小田寒到着）

翌日、地元の入植囚から借りたがたびしの四輪荷馬車を牽く一対の駄馬は、大勢のアイヌがその頃には徒歩でもまた舟でも全島から馳せ参じている場所へと、われらを搬送していた。荷馬車には、祭りで私の通訳を務めることに同意したウ

サイロのほかに、まっさらな魚皮衣をまとう彼の細君も同乗している。彼女はまた、銅製の透かし彫り金具や円環で飾り立てた重そうな革帯も腰に締めていた。

私がウサイロと知り合ったのは、今を去る七年前のことである。

ウサイロは同族者の間で、敏腕の獵師であるだけに留まらなかつた。彼はまた隣人のロシア人から逸早く農作業の術^{すべ}を学んで、すでに数年も馬鈴薯を植え付け、1〜2ブード「 $16 \cdot 4 \sim 32 \cdot 8$ 」の小麦を收穫し、馬の飼育にも意欲的に取り組んでいた。彼には必ずしも稀なことではなかつたが、ほろ酔い加減になると、冬場は橇をぶつ飛ばし、夏には馬で疾駆することに情熱を傾けた。ロシア人村を通過する段になると、彼は入植囚の行状を真似て千鳥足で歩きながら叫び、放歌するのだつた。彼は恐らく、それこそが粹で文化的な人間に必須の条件だ、と信じて疑わなかつたのであろう。だが最近になって、この地区の警察業務を司る新任の監督官は、自分の監督下の住民に活を入れようと決し、路上での放歌を禁止する。同官はかくて、温情的な訓示を聞き入れようとせぬ酩酊したウサイロを拘束して、ブタ箱に一昼夜ぶち込んだ。ウサイロはすでにおとなしく鎮まって出所するも、心の奥底には、自分に向けて強制力が行使されたことで、権力の小さな代表者に正義を求めるのは徒勞である、との深い確信が秘められていた。

われらはそれと気付かぬうちに、最も近いロシア人村のドウブキ「日本統治下の榮濱——「サカヤマ」とも称した——、現スタロ・ドゥブスコエ」まで8露里「 $8 \cdot 5$ 」を走破し、以降は針路を北へ転じて、オホーツク海の沿岸道路を走りつづけた。

海と密林の間に絵のように美しく展開する最大のアイヌ集落の一つ、オタサン村にわれらが近付いたときは、すでに昼の三時を回っていた。われらの接近を遠くから嗅ぎつけた無数の犬どもが吠えだして、そのとき村の路上にいた人々は、われらの方に注意を向けることを余儀なくされた。数十人の子供が、家々の前に飛び出してきて嬉しそうに走りながら、

予期せぬ客人らに好奇の眼差しを向ける。彼らのほとんどは直ちに「ヌチャ アリキ (nucharik)」(ロシア人がやって来た) と叫びながら自分の幕舎へ駆け込んで、このニュースを身内の者らに告げた。1分後に各家の暗い玄室からは人影——多くは女だった——が続々と現れて、ある者は立ちどまり、またある者は倉の方へ悠然と歩きながら、村の最も奥にある幕舎へと向かうわれらをねめ回していた。ここには、ウサイロの兄のタムキン (Tankin) が住んでいる。彼はウサイロよりも年長だったが、父親の残した家と家政を弟に託して、己は細君のためにオタサンへ移住する。そこで暮らす彼女の年若い母親が、一人娘を遠くに遣りたくなかったからだ。

馬車を降りて自分の家の方へ歩きだした私を認めるや、タムキンは「シランクリ (Sirankuri) !」と叫んだ。

タムキンもウサイロと同様に、かつての出会い以来の知己である。しかし彼は気さくで話好きだったから、われらはより親しい間柄だった。タムキンはあらゆるロシア人に懂れていたから、「コルサコフスク」管区を巡回する何人かの役人の下で通訳と道案内を務め、自分の友人は無差別に「シランクリ」、つまり「親類」と呼び掛けていた。

彼は私の到来をいたく喜んで、己のすぐ脇の賓客用板床を私に宛がい、奥壁の際に寝具を延べ、私のトランクや箱類もそこへ並べて、広くもない彼の幕舎に蝟集^{いしゅう}して、好奇の目で私を見つめる余所^{よそ}の子らは、全員を追っ払ってくれた。

十分後、われらはすでに、私と主人の間の板床に据えられた低い小机の前に対坐して、とても美味しいとは言えぬものの熱くて、旅のあとでは十分に有難い茶を啜^{すす}っていた。

すべては清潔そのもの——と、タムキンは断言する——さあ、一気に飲みなされ。わしの妻はすでに紳士方へ茶を出す作法を身に着け、客用の格別な茶器も揃っていて、「家族用の」茶を欠かすこともない。「シランクリ」が通過なさるときは——ここで彼は小商人、監督官、巡回役人など、地元のロシア人貴族層を列挙しだした——、

いつもわしの所に寄ってくたさる。最近では、集落監視官も治安判事も拙宅で茶を飲まれた。わしは何しろ、この地でただ一人ロシア語が話せるからな……。来年には客人が冬を暖かく過ごすべく、わしらもロシア式百姓家を隣に建てる心算だ。建てられるともさ、わしらの年老いた「シランクリ」たちがシヤンツイで建設する様子を、仔細に見といたからな。

饒舌なタムキンは止めどなく早口にまくし立てた。

北からの客人たちがまだ姿を見せぬため、準備は恙なく万端整ったにもかかわらず、祭りは数日間延期となっていた。私はタムキンと連れだつて、祭りの会場となる家へと向かった。

二つの炉を備えた16平方サージェン「Ⅱ72・8平方^サ」ほどの大きな家は、私の実見の限り最も明るい家屋だった。普段は煤けて暗い側壁も、新しい白莫蔭で蔽われている。莫蔭を縦断する暗褐色の美しい文様は、少なからざる労働と、限られた女だけが弁えるような技量が莫蔭製作では費やされたことを窺わせる。このように長い花莫蔭をこしらえたのは、祭りを準備する家の親族である特別な女名工たちである。彼女らはむろんこれを無報酬で製作するわけだが、すべての人に喜びをもたらし、他家に勝るとも劣らぬか、ひよつとすると最も見事かも知れぬ作品を大勢の来客へ誇示できた一家に、その誇りをさらに高めさせたとの意識は、彼女らにも満足感を与えるのだ。

幕舎の入口を入ると忽ち、酒造工場や発酵第一期のビールを思わせるような、鋭い異臭が鼻をついた。タムキンは私に、米で製造中の「サケ(sake)」[酒、本文でsakeと記載される「自醸酒」を、今後は「酒」と表記する]が臭源だと説明する。確かに、炉の上には大鍋が吊り下がり、その中では米がぐつぐつ煮えている。奥壁の脇に据えたロシア樽は、冬用毛外套や綿入れ長衣で上から蔽われ、また側面にも縛り付けてある。ここでは「酒」が醸造中だった。別の樽の脇には篩ふるいを手にした青年が立

ち、第三の樽から掬い上げた濃厚で半ば酸化した米粥を濾^{こし}している。液体は樽に集められるが、濾^{こし}粕の方は容器に移して再び水で割られる。この工程が数回繰り返されると、その度ごとに、さらに薄い飲料が得られる。最も弱い飲料は「水酒」、即ち水っぽい「酒」と称して、専ら女や子供らに与えられるそうだ。この作業に携わるのは男たちだけである。板床の上に散在する「酒」専用の日本製漆器や盆や髭篋^{ひげべら}は、ここで先刻、完成した「酒」の試飲会、ないしは2、3人による毒見が行われたばかりであったことを物語る。私がアイヌの手製アルコール飲料の製造をじっくり観察する間に、タムキンは席を外したが、大慌てで「戻ってきて」、直ぐに「戻ると言い残して姿を消した」。

私は説明を受ける当初から、彼が気まずい思いをしていることには気付いていた。本能的に、板床に寝そべる二人の若い衆を一瞥する。その一人の愚痴っぽい口調はどうやら、私の存在を咎めているようだった。それは私とほぼ同時に入室した若い男で、日本人を彷彿させる。彼はズボンを穿き、小ロシア風の刺繍入りルバシユカを着用する。頭髪は短く刈り上げ、顎鬚を剃り、ただ上唇の上だけは、伸び盛りの口髭の産毛^{うぶげ}で黒ずんでいる。彼の苛立ちは、私の脇を黙って通り過ぎて、これ見よがしの投げ遣りな態度で板床の上に倒れこんだときでさえ、その顔から窺えた。家の主人——私はすでに紹介されていた——は広い肩と大頭の持主、満面に黒鬚を蓄え、縮れ気味の後ろ髪が肩にかかる四十絡みの男だが、「彼もまた」私の気付かぬ間に退出していた。

私は戸口近くの女のコーナーを瞥見して、床に蹲^{うすくま}る年配の女たちの存在を認めた。彼女らは、「アイヌ語で」「オリコン(onikon)」と称する、干して平たくなった菅^{すげ}で小ぶりの袋を編んでいる。これらの小袋は、同じく菅製の腰帯——熊を殺した日に遺骸に添えられる装飾品——に結び付けられるのだ。やや若い数人の女たちは「ハハ(hax)」と称する植物(「アイヌ語樺太方言で「姥百合」を意味し、学名は「*Fritillaria kamschatensis*」)の茹でた根を木桶の中ですり潰している。

幕舎内の緊迫感と、人を避けるような在室者全員の視線を痛感した私は、その場から立ち去ることを最善の策と見做し、姿を消したタムギンを捜すべく退去した。自宅近くで作業中の彼を見つける。低い柱の上に渡された、犬を繋ぐ丸太を調整中だった。タムギンは一切の説明抜きで、村外れの小さな家に住む熊の主人を訪ねて、好を通ずるべきだと闇雲に言い張った。住居の狭隘性に鑑みて、祭りは親族の広大な幕舎で挙行されるわけである。

私はささやかな土産物を携えて、指示された住宅へ向かった。それは掛け値なしの新居で、4露里 π 4・27^緯北方に所在する隣村モトマナイ (Motomanai) [日本統治下の眞苫] の近親者からなる猟師組の死後、この春に新築されたもの。モトマナイは放棄されて、遺族の数家族はオタサンへ移住した。そのうちの一家族が村外れに自前の幕舎を建てるが、私がたつた今入室したのは、まさにその新宅にほかならない。

私を出迎えてくれたのは、背が高く、穏やかで威厳のある五十五才ほどの熟年者。その顔は雀斑だらけながら、薔薇色の顔、大きくて柔和な目、身辺に漂う安らぎには忽ち好感を覚えたので、私たちは初対面から友人となった。

この尊敬措く能わざるテクンカ・チャチャ (Tekunka-čacā [čacā] は「老人」の意) のことは、すでに聞き及んでいた。アイヌらは彼を、例えば老齢まで二つの家の采配を振る男と評している。裕福な娘と結婚したテクンカは、彼女の兄弟が自立した家長の才覚を欠くため細君の家の采配も振るからだ。だが彼は己の家族でも長男だったから、自分の身内の許で暮らす機会は余りなかったとはいえ、一家の支配権は依然として彼の手中にある。この家族の男子はすべて死に絶えたから、北の村落で生き残った一人の甥っ子を直ちに招致して、全員が力を合わせて小さな幕舎を新築したわけだ。その幕舎の主人となったのが、今は私の脇に坐す、痩せぎすで落ち着きのない目の件の甥っ子。彼はまた高名なシヤマンでもある。

彼も老人も、酒を飲む際に用いる椀・盆や、さまざまな浮彫りが施された（へ）簞など、漆塗り器物を手分けして点検中だった。彼らは一点ずつ布切れで丁寧に拭き、特別な記号がナイフで刻まれている外底を一瞥する。一つの家が所蔵する漆器類だけでは客の全員に行き渡らないこともあり、その際は隣家から拝借するが、村のすべての家から掻き集めることも稀ではない。そこで、それぞれの主人は己の器物に、あとで容易に識別できるよう、また無用な手違いも回避するべく自前の記号を彫りこんでいた。

新参の若主人は同時に、それぞれの器の来歴も学んでいる。老人は突如思い立つや、椀や簞を暫くひねくり回し、他の器物との比較考察によつて甥の質問に答えてゆく。甥つ子は概ね遅滞なく回答を受け取る。例えば、ある椀は、老人の西海岸出身の曾祖母がかの地から持参したもの、別の2個は祖父が隣村のアイヌから、刀やその他の品とともに侮辱罪の償いとして受領したもの、より新しい同種の椀4個は、日本人漁業者が東海岸で初めて操業した年に、老人の父親が彼らから購入したもの、さらに1個の優美な椀は年代物だが、ある南の村から到来した老人の熱烈な攻勢に負けて、現家長自身が一頭の犬と交換したもの、であることが判明した。その他の器物もやはり、魚・鳥・動物・山の姿か、あるいは簡素なアイヌ文様だけが彫られている「イクニシ（ikunishi）」「髭簞」——「捧酒簞」とも称し、北海道では「イクパスイ」という——と同様に、自らの正確な系図を有していた。

すべての器物の点検が終わると、大型の「行器（しんどゴ）」——「外居」とも表記され、アイヌ語では「シントユ」へ戻された。「行器（シンドゴ）」とは、板を筒状に曲げてこしらえた漆器のことで、屋内の奥壁の脇の、板床の代わりに設置された低い棚の上に据えられている。

椀は合計で20個が数えられたが、飲酒に際しては、並坐する二人の客に一個の椀が配されるから、これは40人分に相当する。この数ではむしろ少なすぎるから、拝借を申し入れるべき隣家が選定される。

炬端の主人席に坐する瘦せぎすの中年女がおもむろに立ち上がり、戸口近くの女のコーナーを暫く掘り返して、そこから余り大くない行器を取り出した。

彼女からそれを渡された老人は、ただその内側を覗いただけで、脇へ押しやった。

これはもはや汝ら女の仕事だ——と、彼は告げる——自らで椀の采配を振るべし。わしらが関与すべきことではない。

私は、その曲物細工わづものを暫し手に取り、その中に納まる数十個の、男物よりやや小ぶりの同様な塗椀を眺めた。女物はさらに、椀の内側に施文も色違いの縁飾りも一切施されず、すべてが一樣に赤く着色してあることでも、男物とは違っていた。これらの椀は「イタング(itang)」と称するが、男物の方は「トゥキ(tuqi)」「tu」と呼ばれる。

私はコルサコフスクの知人の要請を念頭に、熊皮の値段をめぐる駆け引きを逸早く始めることを目論んで、熊の毛皮について老人と対話を開始するも、熊の殺害と祭りの終了も待たずに、その売却を云々することはもつての外だ、との回答を得る。そのとき子供たちが駆け込んできて、老人とその甥に、「酒」造りが進行中の隣家へ赴くよう注進した。彼らは非礼を詫びて出掛けたが、私は彼らの助言に従って、一刻も手を休めぬ女たちの仕事ぶりに注目しだした。10人は下らない。彼女らはときたま互いに囁き合うだけで、顔に笑みは見られず、最も辛い時期は過ぎたものの、いまだ癒えぬ悲しみが幕舎内には漂っていた。

一人の若くて美しい娘は、「シトゥル キナ (situru kina)」と称する花独活^{うど}の、食用にもなる干した茎で腰帯を編んでいる。やや年長の別の娘は、細くて柔らかい草の束を撚^ねって太めの束をこしらえているが、アイヌはそれをポルチャンキ「ロシア人が長靴を履くとき、足に巻きつける布切れを意味するロシア語」の代わりに履物の中に収める。私に告げられた名称は、履物用の草が「チ・オシケ ムン (ci-oske mun)」で、編み帯の方は「チ・オシケ キナ (ci-oske kina)」だった。

二人の中年女は子供を膝に載せて、姥百合の根 (ハハ) や、サハリンの俗語で「野生の馬鈴薯」と称する円形の「トマ (tona)」、*Corydalis ambigua* (蝦夷延胡索^{えぞえんこそう}) の塊茎^{いらいこん}を、蓴麻^{いも}製の糸に通す作業に従事している。これらの根茎はいずれも、5連ずつ束ねなければならない。

これらはすべて、すでに板床の上にある乾製樺太鱒の束や、1フント「409・5^{mg}」の満洲煙草とともに小ぶりの墓座に並べて、それに繋がれた草製の引き綱で縛り上げねばならなかった。

この荷物は、殺された熊の魂が人間界を離れて、己の親許へ赴くときに携帯するであろう。

戸口では、大型桶の脇に二人の女が蹲^{うすくま}っている。一人は、茹でた姥百合の根を「すりこぎ」で搗り潰しており、今一人は白味を帯びた液体を時折、別の容器から同じ桶に注ぎ足している。この容器の底には、樺太島のあちこちで見出される脂っこい粘土の塊が沈んでいる。女がそこへ水を少々注ぎ篋で掻き回すうちに、所期の白っぽい液体が得られる。その液体は塩気が全くなって無味ながら、根茎と苔桃の実で味付けされているから、祝祭では欠かせぬ定番料理となっている。この料理は「トイ・ウシ (toi-us)」、つまり「土を混ぜたもの」と呼ばれている。戸口の別の側では、初老の女が一人の少女の助けを借りて、やや小ぶりの桶で「プービ (puhi)」という名の料理をこしらえている。彼女は苔桃を姥百合の根と混

ぜ合わせながらアザラシ油を注いでいた。

板床の上では一家の女主人が、「キウ (kin)」という植物の干した大型玉葱状の球根を袋から出して並べているが、これら球根は米と一緒に煮て、「エラパシ (erapaši)」と称する料理が作られる。炉辺に坐して、炉の上に架かる鍋の加減を見守る女から声がかかると、女主人は鍋を下ろして、すでに茹で上がった「トマ」の球根を匙で掬いだすが、これらにはのちにアザラシ油が注がれた。

「晴れ」の伝統料理の準備が今や酣である。戸口を押し開いて迫る子供らは入室させず、外で遊びなさいと、邪魔をせぬよう命じたから、いまだ母親の手を必要とする乳児だけが屋内に残された。ある母親は、そのような乳児に目一杯授乳すると十才の女の子へ引き渡して、その子の背中に括りつける。真剣な表情の小さな子守りは、遂行すべき責務に対する誇り高い自覚に溢れて、元気にはしやぎ回る子供らの群れに合流すべく出て行つた。

観察を終えると、私は幕舎をあとにした。

一連の建物の脇を通り過ぎ、そこを走り回る——笑顔を見せるも、多くは洗顔した形跡のない——子供たちを眺める中で、私は若干の子の顔にできものか化膿性発疹を認め、また指に布切れを捲きつけた子らにも注意を向ける。私は治療を試みようとして決断して、泣きじやくる顔が瘡蓋かさかただらけの少年を宥めるべくやつて来た母親に近付き、薬は要らぬかと訊ねるも、返って来たのは「コペイカイシヤム (kopeika isiam)」つまり「御足がないよ」という、そつけなくも悲しい返事だけだった。サハリンでは医療支援が無料で提供されるとはいえ、中心地から遠く隔たる所は准医師や包帯師の支援下にある。彼らは住民を、どんな薬剤であれ「謝礼」を渡すように躰けているのだ。私は女に、支払いは不要だと告げて安心させた上

で、自分の携帯薬囊を取りに走った。

晴天である。私は好奇心むき出しの子供らに囲まれて、前庭にでんと腰を据えた。何人かの勇敢な少年は「クスリレベカイン (kusuri repkain) ！」(薬が一杯だ) と叫んで走りだし、この知らせを自分の母親らに伝えた。「瘡蓋の少年を」消毒後、清潔な綿を載せ、新しいガーゼを被せて包帯を巻き、できものには軟膏を擦り込み、るいれきの瘡蓋にも清浄な魚油を塗る間に、私を取り巻く子連れの女たちの数はどんどん増えていった。「ヤイ、アタイサハ (ai ai sa) ！」(ほれ、ただよ、支払い無用だって) という囁きを耳にしながら、私の許へ続々と駆けつける性や年齢を異にする子供たちを、私は治療せねばならなかった。すぐ傍に、大幕舎の中で私の存在を咎めてブツブツこぼしていた若いアイヌの姿を認めて仰天する。彼は自分の兄弟のために歯痛鎮静剤を求めた。

私が病人の診療を終える頃にはすでに夕闇が迫っていた。無論、全員に支援の手を差し延べることは叶わなかったが、今夕は村人たちと近づきになって、その後、私たちの友情は深まるばかりだった。

お茶の時間に祭主殿を招待する。彼は一人でなくて、自分の娘とその夫を連れてきたが、夫はなんと件の顔を剃った若いアイヌだった。

私たちの対話は、老人もまた彼の女婿も、私が収集する民族学コレクションのために様々な品物の製作を約束することで締め括られ、当面は私が持参した品々から幾つかを選んで前払い金として受け取るや、これでわれらはすでに緊密な友人関係で結ばれたと宣言した。

彼らが立ち去ったあとで、タムギンは内密に若いカンタロ (Kantaro) [Kontoro] とも記されるルレ村 (魯禮) の若い家長、日本名は内藤

勘太郎。一九二〇年まで魯禮部落惣代、翌二一年に白濱村会議長に就任したが、同年死亡（千徳 1929: 54, 67）——死去者はそう呼ばれていた——が先ほど示した不満の理由について説明してくれた。彼は氏族の酋長の息子だったが、強い性格の欠如や、実父との頗る芳しくない不祥事のせいで、今や権威も影響力もなくなっている。実父は彼の相続権を廃絶することすら望んだが、死の直前に親族のとりなしで思い止まった。カンタロは自分の家族の威信を回復させることを夢見て、ロシアの当局者に対しては、いつも率先して協力を惜しまなかった。例えば過ぐる夏には、国有樺犬の飼料を確保すべく漁撈に従事する徒刑囚らに、己の幕舎を提供した。監獄監督官が恒例の年次人口調査のために巡回するときは、同官を犬轡に乗せて海辺の道を無償で走破したことも一再ならず。この祭りの前にも、カンタロは集落監視官を訪ねて、祭り用アルコール飲料の購入許可を求めた。だが彼とは面識のない同官は、気分もすぐれなかったから彼を追っ払い、剩え、お前は村の代表とか称しながら、その実は村のためではなく「己のために」アルコール飲料の入手を願ひ出るとは、まことに不屈き千番とまで痛罵した。感謝の言葉こそあるべき上司のこの悪態、極めて不当なる無作法と不正義にいたく立腹したカンタロは、2週間が過ぎた今もなお腹の虫がおさまらないのだ。彼が請け合うところによると、日本人の上司が配下の者に対して、このような振舞いに及ぶことは決してないそうだ。彼は日本人の規律を承知している。北海道の親族のアイヌの許で丸一年も暮らしたことがあるからだ。彼はそこで日本式に頭髪を整えて以来、かつてのアイヌ式調髪は忌避している。

わしにとつて——どこかで少々聞こし召したタムギンは続ける——お上はよい方々ばかりだ。いつ申し上げるべきか、暫く様子を見るべきか、方々との付き合い方を心得とるからな。だがオタサンのアイヌは、ロシア人をさほど尊敬してはおらぬ。ここでは5年前に山火事が出来して、村全体が焼け落ちたのだ。支援を求めたところ、折しも知事が自ら通るかかって、被災者への支援を約束された。だがしかし、すでに5年が過ぎたというのに、

彼らは鏢びた一文受領していない。入植囚らが挙って語るところによると、「御足」は届いたが、地元当局がそれを着服したのだそうだ。

私たちの対話は、突如として入室してきた未成年者によって中断される。彼は「イナウ (inu)」（装飾と供犠の役目を担う削掛け棒）作りに精出すようタムキンへ伝えに来たのだが、私には祭主の老人からの伝言として、開始された踊りを見に来るよう声がかかる。踊りはさほど長い時間ではないが、祭りの準備開始の初日、つまり、腰帯を編み、「イナウ」を削り、「酒」を煮だして以降、連日繰り広げられるのだ。踊りの会場となった家に近付いていくと、われらの耳には調子のよい足踏みの音や、聞きなれぬ唸り声が飛び込んできて、合間には絶叫も差し挟まれる。私は暫し立ち止まって、この異様な騒音に耳を澄ませた。タムキンは私に「ヘチリ ハウ (heci hau)」（踊り手の叫び）だと説明した。

幕舎に入った私は、入口の右手に二つの動く輪——男の輪と女の輪——を見出した。それぞれの輪は8名編成で、いずれも互いに体をびったり寄せ合っている。男たちは奥壁近くの板床と炉の間、そして女らは板床と炉と前壁の間で踊っている。男女とも拍子を合わせて手を打ち鳴らす。全員は手拍子と同時に軽くしゃがみ、次いで飛び跳ねると「左足で着地し」、体を伸ばしながら左足に右足を揃える。皆が右手の隣人の方へ顔を向けている。男女とも何人かは目を瞑っている。踊り手は各々が塩辛声で何かを叫び、ときには激しい声門閉鎖音も発するから、私は折りに触れて、あたかも動物園で野生動物が餌を食べるときに発する唸り声を聴いているかのような気分に見われた。

興奮した踊り手たちが己の強靱な咽頭を酷使して発する音声に、耳を澄まして聴き取ろうと努めたものの徒労に終わる。各自が自分なりに叫ぶから、極めて多種多様な声が混じり合う。あとで受けた説明によると、踊りの輪は折半されていて、

それぞれの四人組に音頭取りがいるとのこと。彼が最初に声を上げると、直ぐの隣人がその音声を繰り返し、次いで後続の二人も順々に反復するが、その頃には音頭取りがすでに別の何かを叫んでいるから、ある瞬間の音声は、輪の四人組の各自が発する音の総和である。場合によっては、四人組が音頭取りに従わぬこともあるが、すると、調子外れにはさらに輪がかかるわけだ。

私は後日、男女の踊り手の歌について、若干例を記録することに成功した。それらは、意味をなさぬ音声で構成されている。

以下は男の歌の事例

(1)

nāō	hēcēŭ	mm
vjaō	hōpō	mm
vējā	hōpō	mm
vēō	hēpēŭ	mm

(2)

ōnivé	ārō	ehm
ōnivé	ārō	ehm
ōnivé	ārāhé	ehm
ōnivé	ārāhō	ehm

女の歌の事例

(1)

önivé	hëhë	ehm
önivé	hiöhá	ehm
önivé	ärähó	ehm
indiriyá	kököté	mm
indiriyá	kököté	mm
indiriyé	kokoté	mm
indiriyá	kokoté	mm
indirivá	kokoté	mm

同時に別の四人組は以下のような音声を順々に発する

ehm	hym	häu
ehm	hym	haj
ehm	hym	häu
ehm	hym	häu
ehm	hym	hej

あ
る
こ
は

ehm

hym

hãu

(2)

rahaá

háã

uvohá

rahaá

uvoa

rahaá

uvohó

rahaá

ieé

rahaá

iehá

rahaá

uvoha

rahaá

iehé

rahaá

(3)

ántata

hijó

harr

hijó

ántata

hijó

harr

hijó

ántata

hũöü

harr

hijó

ántata

hieré

harr

hijó

ántata

huaná

harr

hijó

ántata

hiere

harr

hijó

ántata

hieí

harr

hijó

ántata

hõrr

harr

hijó

ántata

huana

harr

hijó

音頭取りは時々くると身を翻し、輪に対して垂直の姿勢を取ることがあり、先導者のあとを追う踊り手らは彼の右手でなくて、その左手に立つように、全員が立ち位置を変えてゆく。そして踊りの輪は右回りとなつて、しゃがんだあとは右足から踏み出していく。反対方向への動きはアイヌらにとつても余り楽ではないから、右回りの輪舞は女の輪でもまた男の輪でも長続きせず、彼らは歌うことは止めぬものの跳躍の代わりに、ただ拍子をとつて歩きながら、再び元の態勢の左回りに戻つてゆく。

女たちが10秒間に15回跳躍するのに対し、男らの場合は僅か10回に過ぎないが、跳躍はより高く、蹲踞そんきよはより深く、叫ぶ回数も、より少ないがもつと声高である。

およそ半時間後に踊りは休憩となる。疲れた踊り手らは顔の汗を拭いながら、輪を崩すことなくその場の床に蹲つて、互いに話を交わしあう。飲み水を求める。立ちあがり前庭へ出て、深呼吸をする者もいる。

男の輪ではほとんどが若者たちであるが、音頭取りだけは、疑いなくすでに経験豊富で謡いの通として名を馳せた、顎鬚を蓄える中年のアイヌだ。8名の男は全員が、祭りの全期間にわたつて祭主が特別に招聘した人たちである。彼らは常に自分の部署を離れず、深酒をせず、輪に欠員が生じぬよう気を配る責務も負っている。のちには、さまざまな客人が彼らの代役を務めたが、彼ら自身はその際も遠くには行かず、客人が踊りに飽きないかどうか見守り、彼が踊りの輪から外れるや否や、己の元の場所に戻つて行く様子を、私は幾度となく目撃した。

女の輪では大半が老女たちだ。彼女らは魚皮製の長衣をまとい、腰帯には銅製の裝飾金具や円環を吊り下げるにもかかわらず、同じ輪の若い娘らに引けを取らぬほど素早くかつ長時間跳びつづける。彼女たちの間にも、踊りに夢中になって、

疲れることを知らぬかのような情熱的踊り手がいる。女の輪では頗る頻繁に交代が觀察される。格別な指名を受けたような踊り手は皆無である。女の志願者はわんさというからだ。もし誰かが子供の許や自宅に呼び戻されても、彼女の代役を直ちに務められる者は常に見出される。私は輪の中に一度ならず、赤ん坊を懷に入れた女も目撃した。それは彼女が愛児を抱えて飛び跳ねることを妨げなかったものの、この急激な揺れが小さな存在のお氣に召さぬような事例はなきにしもあらずだ。赤ん坊は泣き声や金切り声を上げるから、母親は踊りを止めねばならず、さもなくば、幕舎から連れ出してくれそうな娘へ赤ん坊を託すのである。

この日は、踊りが一向に盛り上がり、客人も僅かで、誰にも「酒」は提供されなかった。祭りの準備が続けられる間は、ひたすら義務を果たすべく踊らなければならぬわけだ。

タムキンも含めた何人かの男が床に坐し、柳の棒を曲がったナイフで削り上げて、いわゆる「イナウ」をこしらえている。削りの作業は棒の中から始めて、天辺のやや手前で止める。細長くて薄い、縮れた削掛けが得られる。ともに絡み合うこれらの削掛けが幾重にも重なり、削掛けの下方には細い軸の四周に垂れ下がる辮髪のようなものが出来上がる。未加工の下半部は端が切り落とされて、短くて下端の尖った棒となる。このような「イナウ サバ (inuu sapa)」「イナウの頭」は 60 本用意する必要がある、本日はその作業を終了させる。タムキンはナイフと斧を駆使するあらゆる作業の名工として、耳輪と桁を伴う——耳輪や桁からも削掛けが垂れ下がる——より複雑な 2 本の「イナウ」と取り組んでいる。これらは、殺害前の熊を繋ぐための丈の高い Y 字形の柱に取り付けるべき 2 本である。一人の女がタムキンの許へ苔桃入りの袋を届けるが、彼はあとで、最も重要な「イナウ」の若干の箇所を苔桃で赤く着色した。

祭主の老人と数名の男らは、柳の木の細い削掛けを撚り合わせた新造の紐で、熊用の古い耳当てや、過ぐる年にこしら

えた同じ柳の紐を捲きつけた煤だらけの細長い束を補修している。束の内部を覗くことは許されなかったが、紐の累積が余りにも密だったから、「たとえ許されたとしても」何かを見分けることは難しかったであろう。のちに受けた説明によると、ここに秘蔵されているのは呪具であり、それぞれの家族には鳥、珍木の破片、熊の像といった、独自の呪具があるとのことだった。

本日はまた熊を射殺するときに使用する弓も作られ、やはり熊のために用意されている3本の矢も点検された。

これらはすべて、宝物を安置するために奥壁の隅近くにしつらえた低めの棚に置かれるが、そこには家の守護神へ捧げられた「イナウ」も立て掛けてある。

二人の女は、草を撚り合わせた長さが2サージェン「 $\parallel 4 \cdot 3$ 」の四面体の腰帯を、黒い布切れで縁取る作業を終えようとしている。

炉端の主人席に坐すテクンカ老人が幕舎内をぐるりと見渡しして、皆へ「ヨチヘマカ (joc hemaka) ー」(もうよい、終わりだ)と、大声で宣したのは夜半近くのことだった。

踊り手らは舞うことをやめる。静寂が訪れて、聞こえるのはただ、板床の上で眠りこける成人男子若干名の軀いづみと、家路に就いた人たちの扉の開閉音だけ。タムキンは起き上がって、散在する削掛けや木端を己の坐する板床に集め、その他のものともども鄭重に庭へ搬出し、家の裏手に立つ「イナウ」群の許に置いた。数枚の草製の古莫蔭——そこでは削掛けが「イナウ」の役目を果たす——は再び室内へ持ち込まれて、鄭重に棚の上に安置された。

私はすでに別れを告げて退去する気になっていた。しかしながら醸造中の「酒」は果たして仕上がっているか、それと

もいまだ十分に発酵していないかを判断するべく、私とタムキンに試飲が提案された。

「酒」に目のない数名の老人たちは毒見がある筈と踏んでいたから、帰宅を急がずぐずしていたが、敷居口で長靴を脱いで炉の方へ向き直るや、二人一組で奥壁を背にして腰を下ろした。彼らに続いてタムキンが座るが、神酒みきを戴く儀礼が要求するように長靴はやはり脱いでいた。二人一組の客人の前に運ばれた盆に載るのは漆塗りの椀一個と、その上に置かれた二本指の幅で長さが6く7ヴェルシヨーク「26・7く31・1サ」の筧の一式。一人の青年が漆塗りの特別な柄杓で樽から「酒」を掬うと、把手付きの同様な容器に空けて、しかるのちに、今や遅しと待ち構える老人たちの方へ歩み寄る。各組では、年少ないし劣位を自任する方が左手で椀を取り上げ、右手では筧を軽く持ち上げる。椀に「酒」が注がれると、その中へ椀を戻し、次には両手でこの椀を支えつつ自分の隣人に差し出すのだ。勿体ぶって椀を受領した方は感謝の印として、それを顔の高さまで持ち上げるが、差し出した方もお返しに簡単な挨拶を述べながら、両の掌で己の顎鬚を撫でる。すべての動きは緩慢で厳粛だった。椀の受領者はそれを直ちには飲み始めない。彼は右手で筧の端を掴むと、椀の上でそれを数回動かしたのち、筧を椀に戻して、再びそれを高く掲げる。これの意味するところは、高価な「甘露」ネクターを賞味する機会が恵まれたことに対する神々への感謝である。そして遂に筧を手取るや、老人はそれで口髭がひどく液体に浸からぬよう髭を持ち上げながら椀を底まで空けて、しかるのちに濃厚な「酒」の残滓を人差し指で拭って、その指を舐め回した。それが終わると椀は盆に戻される。件の酌掛りが直ちに近付いてきて、同じ椀へ今一度「酒」を注いだ。そして忽ち椀を空にした男は、自分の番を静かに待ちつづける隣人へ椀を引き渡し、彼らは役割を交代して同じ儀式を執行するのだ。

「酒」はいまだ心持ち弱ずると判断されたから、樽には改めて上からと胴部に大皮の毛外套と綿入れ丹前が捲きつけられて、しかるのちに散会した。

二日目（白浦へ）

われらは翌朝になって知ったのだが、久しく待ちあぐねた「スピルト」〔純アルコールに近い強酒〕は深夜にコルサコフスク哨所から運ばれてきたそうだ。セラロコ〔日本統治下の白浦、白漣（しらおろ、現ウズモリエ）〕からも使者が到来して、北方の諸集落から来られた客人は全員がかの地に着かれたとの知らせをもたらす。祭りは明日決行となる。本日は至近の諸村落へ既定の日程を連絡するべく、また多少とも重要な賓客には今一度招聘の意も伝えるべく急使が派遣された。南には、いまだ払曉に二人の若い衆が急派されていた。北へはウサイロが馬で赴こうとしている。彼は馬を2頭有するから、随行を求める私の提案さえも嬉々として受け入れた。

われらは茶のあとで直ちに2頭の小型馬に跨り、だくあし跑足で村をあとにした。程なく、海辺に立つ未完成のロシア式百姓家に到着する。それまでは上機嫌で私と無駄口を叩いていたウサイロがすっかり黙りこんで、ひたすら建物とその周囲へ、眉を顰めつつ虚ろな視線を投げかける。

ここが、いまだわが家でお前に語ったことがあるモトマナイ〔眞苫〕だ——と、小屋の説明を求める私に対してウサイロは悲しげに言い放った。

つい先頃悲劇に見舞われたばかりの昨今の知人らの廃村を、私は一目でも見ておきたかった。ウサイロはあらが抗わなかったものの私には同行せず、下の海辺で待っていると告げた。高台に達すると、海で遭難死を遂げたこの集落の住民たちが建

てたロシア式百姓家の背後に、半壊状態のアイヌの大幕舎を私は見出した。これが意図的な破壊であることは、幕舎も屋根も壁もいまだ強靱で、老朽の兆しを全く示さないことから瞭然だ。屋根は一部が引き剥がされ、扉は破壊され、屋内でも板床や棚が叩き壊されている。壊れた日用品が一面に転がる。これらはいずれも遭難者らのものだったから、アイヌの慣習に従って破棄せねばならぬのだ。このような品々を使用することは、同様な不幸をわが身に招きかねぬから危険を伴うと見做されている。タムギンの細君は昨夜、手だれの獵師として名を馳せたモトマナイの友人らから貰った、アザラシ油入りの内臓袋を所持していたと私に語った。彼女は、彼らの死を知るや否や獣油をすべて空けて、内臓袋も破って捨てたそうだ。

ウサイロの待つ所へ私が戻ったとき、彼は何も言わず、ただほっと溜息を吐いただけで、われらが遂にこの場所をあとにできることを喜んだ。

自らの不愉快な想念を払拭せんがためか、あるいは私がモトマナイとそれにまつわる出来事について語り出すのを懼れてか、ウサイロはより饒舌となつて、われらの眼前にくつきりと聳える一連の切り立った岬の輪郭について講釈を始めた。

ロシア人入植囚らが残した二つの廃村と、ロシア人集落セラロコ（ここには電信局と監獄用倉庫がある）を通り過ぎたわれらは、セラロコの1・5露里「1・60」北方に立地する数戸の幕舎へ向けて急いだ。

これらアイヌ幕舎の前庭では15名ほどの人々が、一見して何の屈託もなさそうにぶらついている。彼らは北からやつて来た客人だった。出迎えるべく出てきた家長の息子は私を幕舎の中へ招き入れる。家長の左手の炉端には、新しい明色の莫蔭が延べてある。私は、そこが自分のために設けられた席だと判断した。

「家長は」背の低い白髪の老人で、深い眼窩の奥に隠れた両の眼だけが辛うじて見分けられるほど繁茂する顎鬚と、小さな目玉の持主だが、坐したままで腰帶を整えて長衣を正し、その折り曲げた膝近くの床に据えた長持ちには数本のキセルが並べてある。私が莫座の上にすっかり腰を下ろしたと見るや、老人は私へ向けて莊嚴な挨拶を始めた。両手を前に突き出して、片方の掌をもう一方の掌に三度すり合わせたのち、両手で顎鬚を撫で、諸手を下へ降ろし、再び顎鬚の高さまで持ち上げる。彼は挨拶を終えると、私が己の陋屋を訪ねてくれたことは嬉しいと述べて、変わらぬ友情への希望を述べた。

フムカ (Fumka) 老人——家長はそう呼ばれた——は、知恵、処世能力、賓客歓待の心が人一倍拔きん出ている。ここセラロコにロシア人が到来するまでは、日本人の役人や漁業者が幕舎に加えて、東海岸における漁業拠点も構えていたが、彼らはそれら日本人の甚大な影響下に成長した。日本人は当時まだ若かったフムカに日本語の読み書きも教えたから、彼は今なお「片仮名」文書は理解できる。当村の氏族を束ねる酋長の息子であるフムカは、この称号を自らも保持し、父祖の遺産を浪費せぬことは言わずもがな、それを自力でも少なからず増やしてきた。こうした莫大な富——日本の古い甲冑、刀や柄や脇差、漆塗り器物——は、貴賓コーナーの板床に並べた幾つもの箱に納めてある。この大家族はあらゆる食料を大量に備蓄するので、来客が年中絶えぬにもかかわらず不自由することがない。なかんずく泥濘期や就労の季節、とりわけ漁期には、そこに余所人の姿を見かけぬことは稀である。

家長の最年長の未婚の娘が、コップ入りの茶と、別々の小皿に盛った砂糖や和菓子を、盆に載せて私の許へ運んできた。そのときウサイロも入室して、私の傍らへ黙って腰を下ろした。だが一分後には跳び上がって、私の後ろを回り、自分の方へ両手を差し延べる老人の前に跪きだした。ウサイロも諸手を差し出して、開かれた掌を互いに握り合うと、彼らは

支え合う手を8回から10回も揺すって、それぞれが相手の手を己の方へと引き寄せあう。次いで再び掌を取り合った両者は同じ仕草を二度、三度と繰り返した。そのあとで、老人が私を迎えたときと同様な、通常のアイヌ式挨拶も交わし合った。ウサイロがあとで解説してくれたところによると、彼はフムカと一年も顔を合わせていなかったから、老人とは「ウモム (nuumun)」と称する、長くてよりこみいった挨拶をせねばならなかったそうだ。若い者が年寄りに初めて挨拶する時のように……。

われらがお茶を戴いていると、家の裏手から熊の咆哮が聞こえた。それが余りにも長く続いて異様だったから、私は、アイヌが「歌う」と形容する熊の唸りを一瞥すべく庭へ出てみた。二つの丸太造りの大型檻——丸太を粗く積み上げた檻の四隅は「イナウ」で飾り立てて、屋上は何本もの重い角材で抑えてある——には、「二人の捕虜」が閉じ込められている。一つの檻では、暗褐色の大柄の牝熊が壁際を歩き回り、今一つの檻には牡熊が寝そべって、自分の美しい「隣人」を眺めている。樺太島のタイガを支配する強大な主「牡熊」は、右脚の上に頭を載せるや、その脚を口に銜えて振り回しつつ、大口を開けた大愚図にとっては能う限りの打ち震えるやさしい声を発しつつける。牡熊は、まわりに集う人間どもの存在なぞ意に介さず、10分以上も自由の身への憧憬を情熱的に吐露しつつけた。

私がお茶を飲みに戻ると、今は壁に懸けてあるが、かつては自分もたぐさんの首輪を有していたことを想像できるかと家長は私に訊ねてきた。それは樅の若枝を丸めてこしらえた小ぶりの輪で、細い樅の根つ子が螺旋状に捲きつけてある。この輪つかは、タイガで仔熊を捕らまえたあと、これを連れて帰るときに使用した首輪だった。

そして家長は、己の誇りの対象である動物たちをめぐって蘊蓄を傾ける。

牡熊も牝熊もすでに二冬育てておるから、いずれも二才半だ。熊にはいまだ「ラム コシネ (ram kosne)」(「軽い

魂」が宿るから、この時機に殺すのが一番だ。やがて魂が重くなると塞ぎこむ。しかし、三冬も飼いつづけるアイヌもおる。そして「シヤンタ (shanta)」(アムール流域のオリチャ「現ウリチ」だけは熊を5〜6年も飼育する。そのような熊どもは完璧に耄碌しておるのだ。

もしアイヌが森から初めて仔熊をもたらずような場合は、一冬のための飼育もありうる。

かつて東海岸のほとんどすべてのアイヌが造営していた竪穴住居の中には、仔熊を決して入れなかった。だが夏小屋には出入りを許すのみならず、奥壁の際の炉辺に檻を設置することさえある。そこには中年女の誰かが必ず詰めていて、熊が退屈せぬように世話を焼く。冬場には極めてしばしば、バラックのように熊檻の四周を草の束で蔽うこともある。その前面の一部に設けられる開放口を介して、熊には食物が与えられる。

私の前に横たわる牡熊は、僅かに白毛の混じる種類に属するが、牝の方は総身黒毛である。老人は前者が小さな仔熊のとき、大枚16ルーブリを叩いてロシア人猟師から購入したが、後者は隣村のマヌエ「日本統治下の真縫、現アルセンチエフカ」に住む老人の甥っ子が森の中で捕らえたものだ。

今では仔熊を見付けることがますます難しくなつて、アイヌの全村落で毎年飼育する熊の総数は高々4〜8頭に過ぎない。だからこそ値段もばか高いわけだ(付録資料No.40参照)。

森の中で仔熊を捕獲する幸運に恵まれた若い衆は、すでにその名声だけで満足して、通常はこれを同族の名望家に贈るが、にもかかわらず彼らには伝統に倣つて少額の支払いもなされる。彼らが決まって受領するのは数サージェンのアザラシ皮革(運が良ければ未加工の毛皮)と、一頭の犬(しばしば雌犬)である。老齢の雌犬は、もし山々の神が犬の持主の許へ長いこと熊を遣わさぬような場合に殺されて、同神の許へ使者として派遣される(付録資料No.5参照)。

熊の飼育に要する出費もばかにならない。アイヌ自身の食物よりも悪くないものを与えねばならぬからだ。与えるのは主として魚だが、コマイとキュウリウオだけは熊の口に合わない。これらを食べると体全体を猛烈に引掻きだすからだ。またカジカを餌として育てると、この「頭でっかち尻すぼみ」の同魚のように、熊は不細工な体躯に生長するであろう。肉に関する限り、アザラシと鯨の肉だけは熊に与えることができる。余所の人たちに熊の飼育を支援する義務はないものの、通常は至近の村々から、家長たちが樺太鱒ユイコラの乾製魚を一束ずつ熊のために送り届けてくれる（付録資料No. 6 参照）。

私がアイヌに関するある書物で出喰わした、幼い仔熊は女が乳を与えて育てるとの記載について質したところ、老人はその正しさを確言した。それは、いまだ乳児期の仔熊を捕らまえたときにだけ極めて稀ながら出来る。その際の仔熊は頗る小さいからミトンに入れて持ち帰るという。授乳に当たる女は、乳児期の子供を抱えず、またその予定もないものの乳房にはいまだ乳を蔵するような中年女が選ばれる。仔熊への授乳は6ヶ月まで続けられる。「乳母」はこの全期間を通して女の仕事には手を染めず、煮ることも食物にナイフを当てることもまた裁縫も差し控えるのだ。熊祭りでは、自分が乳を与えた熊の肉を、彼女は食べない。

仔熊がいまだ小さなうちは幕舎内の奥壁の傍らで育てられる。幕舎内に運び込まれるとき、女たちは歓迎の印に泣き、男らは人に向けてするのと同様に、彼に対して「イナンカラ・ヘイ（inankaraxay）」を行う。客人が招かれ、「酒」が振る舞われる。仔熊がすでに生長を遂げると檻の方へ移される。アイヌの間では、仔熊がとりこ擒の賓客の身から脱出することに成功した事例が、極めて稀ながら知られている。

最初の冬を越して春になると、アイヌは仔熊の犬歯を4本とも鋸で切断する（付録資料No. 46 参照）。

アイヌの隣人であるギリヤーク「現ニウ」やオロッコ「現ウイルタ」はこれを行わない。アイヌはその理由を、牝熊における犬歯の切断はアイヌの女に施される両唇部への刺青に均しく、牡熊の場合は男における前頭部の剃上げに相当すると説明した。切断作業の終了後、切り残された歯は焼け焦げた薪で黒く染める。犬歯の先端は削掛けの束の中に納めて結縛し、熊檻の四隅に立てられた「イナウ」に結び付ける。

熊が体調を崩して、主人らに少なからぬ心配をかけるようなことも珍しくない。したがって、正しい給餌には大きな注意が払われる。そしてその任務は常に一人の経験豊かな中年女に託される。彼女は毎日、細長い桶に餌を入れて運び、その都度食欲の加減を点検して、被養育児の僅かな変調すら決して見逃がさない。老人の許では熊が二頭とも病に倒れたことがある。彼らの檻の脇には数本の丈の低い「イナウ」が縦の茂みを背にして立っている。これは「セニシイナウ (senishinau)」、即ち治療用「イナウ」だ。牡熊は恢復したものの、牝の方は憂慮すべき状態が長く続いた。牝熊は餌を取らず、身動き一つせず横臥して、今にも死にそうな状態となる。彼女の全身を「チノエイナウ (chinoeinau)」（柳の削掛けを擦ってこしらえた長い紐）で縛り上げて、「イナウ ルウ (inauru)」と熊の像を納めた束も頸に懸ける（付録資料 No. 9 参照）。そして炉の中には新しい「ウンヂイナウ (undzi inau)」（火の女神に捧げる「イナウ」）も立てたが、アイヌの守護神へ向けた熱烈な請願のお蔭で、衰弱した牝熊もようやく健康を取り戻すことができた。彼女はその後一度も病むことがなく、今では牡熊の体軀を凌ぐまでに大きく生長している（付録資料 No. 7、No. 8、No. 11 参照）。

われわれの会話中も、多くは女や若者たちだったが、大勢の人たちが幕舎と庭の間をしきりに往来していた。忙し^{せわ}さや不安や慌ただしさが見て取れる。われらが到着する直前に、客人たちの朝食が終わったばかりだった。彼らは東海岸のさまざまな集落から、はたまた西海岸からもはるばる到来して、オタサンへの出発を待ち構えている。今は家人用の昼食が

準備中。私はこの大幕舎内に子供たちも含めて18名の住人を数えた。かなり頻繁に新しい薪が運び込まれて一つの炉へ、またもう一つの炉へと投ぜられてゆく。米がぐつぐつ煮えており、この裕福な一族では「酒」の醸造がさらに一層大規模に進められている。今年は頗る豊漁だった。アイヌに鯿と樺太鯿の漁撈が認可されたセラロコ湾は、最も便利な漁場の一つとされている。アイヌが日本人から購入した海用定置網を用いて自前で操業するのはこれで二年目だが、ここに漁場を有した日本人の下で被雇用者として就労を余儀なくされていた過ぐる歳月と比べて、遥かに大きな稼ぎを上げている。フムカと、アイヌの「漁撈」組合の総代と見做されるその女婿と、定置網の作業に習熟した若くて機敏な息子は、自らの気前よさを誇示すべく「酒」の醸造には大量の米を惜しみなく放出した。一族の女たちもまた世帯を切りまわし、大切な客人らをもてなす己の能力をめぐって、皆の称賛と承認を勝ち取るべく労力を惜しまない。彼女らは丸一週間、苔桃や蔓苔桃の採集に従事していたが、今は熊たちのために2本の草製腰帯を編み上げること邁進する。祭りに必要な「イナウ」の半分がすでに仕上がったことを受けて、彼女らはようやく昨日から、慣習に倣ってこの作業に着手できたのである。ここでは些細な作業すらも賑やかで活発に進められるが、そこにはまた競争心や秘められた願望もそこはかとなく感ぜられる。彼らはさまざまな土地から参集した民衆の前で、友好関係にはあるもののより貧しいオタサンの一家より、ずっと格好良い姿を見せたいわけだ。私はかねがね全員がセラロコの「ニッパ（niŋpa）」の權威に服する筈だと踏んでいた。この地を訪ねるのは初めてだがとても居心地がよい。皆の顔には愛想のよさと喜びが覗える。若者が動き回り、作業を進め、笑い交わしている、幕舎のもう半分では陽気な笑声と冗談話が絶えない。老女は炉端に坐して、鑄鉄製鍋で調理中の魚スーポの

加減を見守るが、彼女も老人も、幕舎内で出来るすべてのことに對して無関心ではなかった。彼らの許には、助言や指示を求める者が殺到するし、彼ら自身もまた然るべきものを提供するよう、あれこれを然るべく遂行するようにと、てきぱき命じていた。

一日があつという間に過ぎて行つた。私は全村と知り合いになる。老人の女婿であるモイマ (Mojima) からは昼食に招待された。彼は、豊かな漁場のかつての持主だった日本人の建てた、村外れの古い住宅で暮らしている。私はまたさほど大きくはないものの、図外れて清潔な幕舎にも立ち寄つたが、そこでもやはり祭りへの準備が進められていた。小柄ながら恐ろしく不機嫌な熊が、檻に噛みつきながら憤怒の唸りを上げて、その存在を絶え間なく知らしめる。ロシア風に建てられたこの幕舎でロシアの衣装をまとつたアイヌ女、つまりロシア人入植囚の細君と出会つた。彼女は「セラロコ」集落から姉妹と兄弟たちを訪問したわけだが、彼女の肉親らは頗る貧しい暮らしで、自前の家政ではほとんど何も有さず概ね伯父のフムカの家で働いている。彼らは、漁場で古参の日本人漁夫とアイヌ女との間の子供たちであるが、この日本人が細君も子供らも放擲して以来、すでに15年が経過していた。

最後の幕舎から出たところで、われらは隣村マヌエから来たアイヌと遭遇するが、彼は自らを「コレ・コレ (Kore-Kore)」ないし「マカ・マカ (Maka-Maka)」と名乗つた。浮浪者にこの綽名が付けられたわけは、彼が自前の家を持たずにあたらしい青春を村から村へ、漁場から漁場へと放浪しつつ過ごしたからだ。まさにその故に日本人は彼を日本語で「コレ・コレ」と呼び、アイヌは己の言語に翻訳して「マカ・マカ」と称している。コレ・コレはウサイロ同様にロシア語をかなり良く操るが、より饒舌で冗談を好み、私があとで認めたように、話に途方もない尾鰭をつける性癖がある。彼は私を押し止めて、その場で自分の語る昔話の小品を私に書き取らせて、昔話はあとでフムカの家において全員列席の下で読み上げるよ

うに命じた。私は数回繰り返さねばならなかったが、私の復誦は大爆笑を呼びつけ、にたりとほくそ笑むコレ・コレにだけは大満悦をもたらした。

親切な家長の娘は、私がフムカの幕舎に戻るや否や茶を運んで来て、精選された大粒の苔桃を盛った皿も盆に載せて勧めてくれた。

われらが村内巡歴を終えた頃には、アイヌの伝承によると、かつては当地を支配する竜の住処だった高峻な禿山の背後に、太陽がすでに姿を隠しつつあった。私が出立を口にするや、主人らのみならず、老いも若きも異口同音に異議を唱え、再び干潮が始まって、もうほとんど満月の月が昇る遅い時刻まで留まるように口説きだした。

われらは客あしらいのよい賑やかな幕舎に留まるが、踊りまでは待てなかった。退去した若者らは小さな幕舎に籠って「イナウ」作りに励んでおり、皆がフムカの家を集結するまでには数時間を要するからだ。われらは九時頃に旅立った。われらを見送りに表へ出た主人たちは、オタサンの祭りが終わった直後に始まる「セラロコでの」熊祭りには必ず到来すべし、と招待の辞を述べた。オタサンはセラロコより年長とされているから、祝祭の実施順でも優先権を有するわけである。

明日の夕刻にはまた会おう——と、ヨーロッパ式に別れを告げることが欲したフムカの息子は、私と握手しつつ告げる——われらは多忙であるが、一夜だけは参上するであろう。

ピリカ オマン (Pirika omán) ——(良い旅を)——われらの馬がすでに数歩踏み出した頃、男声と女声の入り混じる不揃いな合唱が轟いた。

ピリカ オカヤン (Pirika okajan) ——(御機嫌よう)——私とウサイロはお返しに叫んだ。

われらは同夜、長く延びるオタサン村に到着した。まだ誰も眠っていない。それぞれの幕舎ではいまだ炉の火が燃え盛

り、もくもくと立ち上る煙は翌日の晴天を告げていた。

三日目（前夜祭）

もはや早朝とは言えなかったが、私は目覚めると直ちに、皆が直近の一夜を共に過ごす予定の幕舎へと急行した。そこでは早くも人の動きが見られる。男の子らは日本の綿入れ蒲団にくるまって、板床の上でいまだ就寝中であるが、大人たちはすでに働いていた。テクンカ老人は、一束の葉煙草や根茎や履物用の草を引き綱の上に並べ、次いでそれを熊が旅立つときに携行する荷物の形に縛り上げてゆく。数名の若い衆は朝食を終えて、「トウグシ（tugusi）」（Y字形の高木）はどこで発見できるかを説明するテクンカと今一人のオタサン・アイヌの話に耳を傾ける。入室した二人のアイヌは、これから6本の「ペケレイナウ（pekereinau）」（熊の殺害会場の壁を飾り立てる丈の高い6本の「イナウ」）を求めて入山しますと告げる。一人の中年男は斧を驚攔むや、熊の頭部を安置するY字形細木を伐採すべく退出した。数分後には10名以上の未成年者が、熟知する至近の林から必要とする樅の若木60本をすべて伐って来ることを請け合って、森へ向けて出発した。

これらの仕事は必ずや、祭りのまさに前夜に完遂せねばならぬと私は説明された。

飲茶ののち、私は再びこの幕舎に戻った。熊の腰帯の総仕上げを見せてくると、テクンカが約束していたからだ。

草を編んで作られ、腰帯に縫いつけられる数平方ヴェルシヨークほどの小袋には、食用植物の根や苺類が詰め込まれていく。袋の数は7個。そのうちの3個は暗色生地の端切れを縫い合わせた四隅の尖った袋で、残りの4袋は方形を呈する。一つの小袋には幾片かの炭が収められた。しかし、袋の個数は慣習によって確定されていないから、一人の女がどこかで小袋を発見するや、老人はそれも帯に結び付け、そこへは姥百合の根や苔桃を詰めるように命じた。腰にはまた二種類の

ナイフや、一対のスキーとそれに付属する杖といった即製のミニ模型も結え付けられた。今は雪がないからスキーを帶に
着けることは無用だ、と誰かが抗うと、熊が目ざす山々はすでに雪で蔽われているから、スキーは必ずや役に立つであろ
うと、テクニカは説明した。

幕舎の家長の息子である少年が駆け込んできて、アイ村「日本統治下の相濱」の方から大勢の人がやつて来ると告げた。比
較的手の空いた者か、好奇心のより旺盛な者に限られたが、女たちは玄室へと殺到する。前庭に出た私は、そこに20名ば
かりの男女や子供たちを認めた。彼らは一列になつて進んでくる。ほとんどが何らかの荷物を背負っている。幾人かの女
は足手まといになる子供をおぶつて、その上に上着を羽織っている。男たちは晴れ着の長衣をまとい刀を佩帶する。未
成年者も各自が小ぶりの振分け荷物を肩に担いでいる。夜間に身を蔽う予備の衣装もそれぞれが携帯する。群衆はすべて
ばらけて、さまざまな家に吸い込まれていった。祭りの会場となる家には誰も入らない。そこで最も望まれないのが客人
であり、しかもそこでの寝心地たるや最低で、就寝不可ですらあることは周知の事実だったからだ。

客人は一日中、南からも北からも三々五々参集しつづけた。家々に面する路上に屯する人たちは、ますます増えてゆく。
四方八方から悲鳴や子供の泣き声が響きわたる。駆け回り、飛び跳ね、お喋りに夢中の子供たちと、私は至る所で出喰わ
した。彼らはまたあらゆる新着客を目ざとく見分けては、どこそこの村の者だ、と私にも逐一解説してくれた。Y字形の
高柱「トウグシ」、樅の若木、さらにその他の必要な棹が搬入されると、子供らの間からは歓声や陽気な悲鳴が一斉に沸き
起った。

大幕舎ではすべてが元のままだった。昼食後にそこへ立ち寄ると、数名の男が「酒」作りに専念し、タムキンは3名の

男とともに最後の大型「イナウ」を削っている。腰帯は完成品が奥壁に懸かっていた。女たちは本日の客人らが着座する予定の板床から寝具や衣類を片付けている。別の女らはさまざまな食物を運び込んで、二人の老女が埃を払いつつある棚の上に然るべく配置してゆく。娘っ子らは隣人たちの幕舎から木製の鉢や匙、その他の酒宴に必須の食器を運んでくる。幕舎内は埃が立ちこめる。床には布切れや木端があまた散乱する。棚と板床の本格的な清掃が進行中だが、これが平時にしばしば繰り返されるようなことは恐らくないだろう。

私は大急ぎで幕舎をあとにして、祭主らの暮らす一番端っ子の小幕舎を訪ねた。そこには余りにもたくさんの人が集結していたから入室する余地がなく、ただ暫し戸口に立ち尽くすばかり。ほとんどすべてが北からの客で、一部はテクンカとその甥っ子——彼はかの地の娘と結婚していた——の親族であるが、全員が集って静かに黙々と昼食中だ。それぞれはスープの入った木椀を両手で抱え、すぐ脇には米飯を盛り上げた陶製碗がある。スープの椀と米飯の碗を交互に手に取りつづける。後者は忽ち空になってゆくから、いまだ温かい米飯を収めた飯櫃の傍らに坐す女主人は、客人のために「お代り」をつけていく。アイヌの習慣によれば食事中の会話は禁物とのことで、大人数にもかかわらず幕舎内は静粛で、聞こえてくるのはただスープを吸るときに発せられる大きな音ばかり。アイヌは椀に口を着けてスープを飲むからだ。ときには空になった飯碗を女主人へ向けて差し出す客人の「ナー（*ne*）！」（もう一杯を）という叫びが屋内に轟くこともある。戸口の片隅では三人の少女が木桶を取り囲んで蹲り、乾製魚の切れ端を噛んでは食器の中へ吐き出している。私の脇に立つ若い男が語るところによると、「マハルウ（*maru*）」と称する乾製魚の切れ端は樺太鱒か鮭の、骨と外側の分厚い肉層の間の肉の断片だとのこと。「マハルウ」でこしらえたスープは最も美味な料理の一つとされる。干した魚肉の細長い断片は、煮る前に柔らかくするため噛み砕かれるが、丈夫な顎を有する若者たちにその任務は託されるわけだ。魚を噛み砕く際には

必ず幾許かの唾液も残留するから、この作業に従事できる者はただ完璧に健康な少女だけに限定されている。

大どもの激しく吠える声が、次いでは荷馬車の車輪の軋む音も聞こえた。人々はアイから誰かが到着したものと推測する。事実、幕舎から出た私がそこに認めたのは、普通の荷馬車から下りてくる老人の姿で、アイ村を通過した折にすでに面識を得ていた人物にほかならなかった。老人は馬の世話を少年に託すと、甲高い声で私に挨拶し、近付いてくるアイヌたちとも大声で談笑しだした。まずは彼の衣装、長衣の前面で袖と返し襟を縁取る青い生地に施された広くて豪華な白刺繍、色違いの糸で編み上げた幅広の腰帯からして、彼をすでに「ニッパ (nip̄pa)」（裕福で尊敬措く能わざる人物）と断ずることは可能だ。事実、アイの二兄弟は東海岸でも一、二を争う資産家と見做されている。彼らは裕福な一族の出身で、父親は日本人の下で酋長を務めたが、兄弟はここ数年の間にのし上がって、他に抜きん出た存在となる。弟の方は若い頃から日本やロシアの官憲にうまく取り入り、つい先頃は漁場の賃借許可を取り付けた上で、日本の漁業者と組んで実入りの良い個人事業を展開している。コルサコフスクへは常時往来し、日本でさえすでに二度も赴き、この折もリウマチ治療のため日本のどこぞやの温泉に逗留中だった。弟は好んで日本人やロシア人の間を泳ぎ回り、自前の資産を友人らとともに景気良く蕩尽して己が甲斐性を誇示する。たった今到来したばかりの兄の方は、逆に、同族者の間で自らの名誉を高める方をむしろよしとする。

当時のアイヌの間で馬を所有する者は頗る僅かだったが、アイ村の分限が有するような高価な馬はどこにも見出せなかった。脇腹が重労働に服して汗まみれの馬から装具を取り外す間、老人は甲高い声を上げながら両手を振り回し、ときには腰までも下ろして、自分の旅や、つい最近、前の馬を売り払って、その駿足の故に購入したばかりの馬の話をやたらと繰り広げる。老人の若い娘は馬車に近付いて、絹製衣服や暗青色の南京玉を収めた小ぶりの包みを下ろし、息子の方は、数

本の刀が収納されている草製の袋を運び出していた。

老人が立ち寄ろうとした小幕舎では、あまたの客人が昼食中であるのを見て、彼はあえて入室を差し控えた。彼は、遠方からはるばる到来した北の人々の一人一人とアイヌ式挨拶を交わす長丁場をこなす覚悟ではあったものの、彼らが食べ終わるまで待つのは、己の沽券にかかわる由々しき事態である。少年の一人に、食事が終わったら知らせよう言い含めるや、彼は隣人の幕舎へ目標を転じ、凜とした誇り高い足取りで入室したあとは、ひたすら己のことを大声で語りつづけて、同行者らには一語も発することを許さなかった。

いつの間にか日没となるが、それは祭りの参加者の全員にとって、能動的作業に着手するための合図でもあった。主室と玄室を掃き清め、板床を清掃し、障壁となりうる不要物も片付けた。三名の老人が呼ばれ、一人ずつに「酒」が注がれて、神々に向けた供儀儀礼の執行が託された。一人は庭へ出て、明かり窓を介して椀と捧酒篋を受領すると、家の裏手に立つ村の守護神へ捧げられた「イナウ」の傍らに腰を下ろす。今一人は木製容器を抱えて、「酒」造りの度ごとに海神へ向けて供儀がなされる浜辺へ赴くが、「イナウ」を納める倉はその故に「サケ イナウカルシ (sake inakarusi)」と称される。第三の老人は、このような場合にだけ特別に使用される古莫蔭の上に、炉の火に対面しつつ腰を下ろし、炉の中央に立てられた、縮れた削掛けを伴う小ぶりの棒 (イナウ) が燃え尽きて灰と化すまで両手で椀を支えて、火の女神へ向けて長い祈りを唱える。老人は祈り終えると「酒」を半分だけ飲み、残りは女主人と、この炉を主として保守してきた女へ引き渡す。一人の中年女が履物を脱ぎ、頭からは鉢巻も外して、あたかも重荷に耐えるかのように体を恭しく折り曲げながら、掌を合わせた両手をやや前方に持ち上げて老人の方へと進んだ。彼女は老人の前に跪き、自分に向けて差し出された彼の手か

ら腕を受領すると、それを両手で支えつつ、ゆっくりと手元に引き寄せる。このとき老人は己の右の掌で彼女の左手を軽く撫でた。男が飲み残した「酒」を引き渡す行為は「パ・ケシ(pakes)」つまり「腕の端、残りもの」と称される。女主人は腕の上から、髭を有さぬ彼女にとって無用の捧酒篋は取り上げて、首の後ろの襟口に差しこみ、「酒」を悠々と飲み干した。その後、濃厚飲料の残りを腕から人差し指で拭って、指に僅かな液体が付着することに、それを舐めつづける。飲酒と腕の清掃を終えると、彼女は後ろ襟から捧酒篋を引き抜き、腕の上に戻して、恭しく老人に差し出す。彼は腕を両手で受け取って、頤の位置まで持ち上げる。儀式はこれで終了した。

私は庭へ出た。家の裏手の森の外れでは、若者や大人のアイヌからなる一団が「イナウ コ (inau ko)」（熊の殺害場）を整備している（写真1）。下方の枝は切除されるも、天辺に緑の樹冠の残る60本の樅の若木が、一種の壁の如く列状に打ち込まれてゆく。やや前方には丈の高い6本の「イナウ」が一直線に立てられ、そこにはのちに「2本の」長いしなやかな枝が横なりに2アルシン「142^{サシ}」の高さで結縛されるが、これらの「イナウ」の間には、同様に削り上げた60本の短い「イナウ」も立てられて、はたためく削掛けの束の密集帯を形成する。仕上げられた美しい壁の前では、数歩離れた所に高さ5サージェン「10・7^{サシ}」のY字形細柱を打ち立てて、二股の両端はいずれもふさふさの「イナウ」で飾り立てる。正面舞台の化粧が進行する間、少年たちは、立ち枯れたとはいえ依然として丈の高い草叢を踏みしめて、熊檻に至るまでの通路を確保する。

大幕舎内では最後の準備が慌ただしく進められた。主人らは自分の刀と箆なべを数点ずつ、幕舎の右壁を蔽う明色莫座の上

方に然るべく掛けてゆく。女のコーナーでは南京玉や絹の子供服が、壁に刺した棒に吊るされていく。若い人たちが次々入室し、重要客の名代としてその刀を引き渡してゆく（客人自らが刀を持ちこむことは稀である）。徒歩でやってきた者は、頗る貴重で高価な刀を持参した。だが舟で到着した客人は質的にやや遜色のある刀をもたらしした。一級品とされた宝物を海路で運ぶことは大罪と見做されるからだ。

テクンカは一つの刀を取り上げ、その印をあたかも記憶に留めるかのように凝視して壁に掛けた。幅広い刺繍入り剣帯に吊り下げられた刀は、これで4束となる。

同時に家主の方は、家の守護神の「イナウ」近くの一隅に横たわる幾つかの編み袋から、刀と鞘、「セヘバ（*gepa*）」（剣鰐）や剣帯を続々と取り出してゆく。これらはすべて布切れか樹皮で別々に包んであった。刀に柄、そして鰐セヘバを装着する作業には、少なからぬ時間を要した。

女たちは女主人へ、持参した大小様々の中国製南京玉や、古い金襴緞子衣装や、現代の極彩色絹地でこしらえた刺繍入り羽織や、防寒頭巾型の帽子などを引き渡してゆく。これらはすべて、祭主の品々と一緒に懸けておき、朝になれば子供らに着せる予定であるが、当面は刀剣類と同じく、すべての客人らが直近の夜や、後続する祭りの日々を過ごすことが予定された室内を飾り立てる役目を果たした。

老人が祈りと火の女神への供犠を終えると直ちに踊りが始まった。そのときは僅か数分間舞っただけで、男女いずれの輪も庭へと繰り出して、熊檻の近くで飛び跳ねつづける。そこでは輪舞が終わる直前に双方の輪が一斉にほじめて、先頭

は男たちで、その後ろに女らの続く行列を編成し、彼らは通常の蹲踞と伴唱は続けながら檻の周りを廻つてゆく。それには檻の中に鎮座する熊も少なからず氣を奪われたから、己も檻の中をぐるぐる回つて、大声を上げる人間どもの動く姿をじろじろと睨みつける。この情景は集結した物見高い子供たちに、筆舌に尽くし難い歓喜をもたらした。

庭での舞を短時間で切り上げた踊り手たちは幕舎に戻り、その後は合間に暫しの休憩を挟むだけで、朝の到来までそこで踊りつづけた。

数名の少年が駆け込んできて、すべての幕舎を回り、すべての客人にすでに声をかけてきました、と自らの任務遂行を報告する。

主人らは右側の炉の周りに坐しているが、そこではテクンカの尊大な物腰が際立っていた。家宅の右半部は客人用として全体が空けてある。入口の左右両側に坐する女たちは、左半部で犇めき合う子供らへ、何とかして大人の邪魔にならぬよう暫くたつてから来るように諭すか、何かを運んでくるように言いつけて、全員を追い出した。

客人たち——老人や中年者や若者——が次から次へとやつて来る。全員が蓐麻や楡鞆皮製の民族衣装の新しくて清潔な長衣「アトゥシ」に身を固め、アイヌの女たちが日本製の糸で編み上げた豊かな色彩の腰帯を締めている。多くは裸足であるが、靴を履いている者は入室の際に脱いで玄室に残してゆく。祭りでは、履物を身に着けたままで酒を飲むことが禁じられているからだ、しかも、板床に靴を履いて坐するのはまことに見苦しい。

炉端近くには年長者らが座を占めて、若年の人たちは第二列に腰を下ろすが、なかには己の社会的地位を弁えて、出し

やばらずに左側の板床へ直行し、物陰に腰を下ろす者さえいる。女たちは、戸口が設けられた壁と、二つの炉の間に開けた大空間すらも通過するのを差し控える。

客の集合はまだ終わらないのに、幕舎は人で満杯になったようだ。テクンカは家主に合図を発して、客人を然るべく着席させた。司会役を務める家主は肩幅が広くて、鋤状の鬚を生やした男である。彼は奥壁の隅に立って大声を上げながら、列席者へ次々と席を指示しだした。

誰よりもまずは、見事な祈祷を唱える能力を具えた一人の老人を、奥壁の際に据えた「酒」の容器の前で、二つの炉の間の通路に對面して座らせた。同容器の向かいにはテクンカの近親者から、年の頃二十才ほどの若いアイヌが配置されたが、この場では彼がもてなしの主人役を務める。

次に呼ばれたのは最も尊敬措く能わざる客たちで、板床の席に案内される。まさに炉の真正面の2席は、遠来の客人のうちで最も重要な2名に指定された。彼らの前には「酒」を満たした方形の脚付容器が据えられるが、同容器はその故に「ケマ コロ シンドゴ (kema koro sindogo) [脚をもつ行器]」と称される。彼らの右から女のコーナーにかけて指名されたのは、近在する諸村落の——それ故にまた祭主とは親族の絆で結ばれている——老人たちであるが、左側の席は遠来の尊敬措く能わざる客人らに宛てられた。

次いで、客人らはすでに奥壁に沿った床に互いに對面する二列をなして配される。一部は左側の板床に座るよう案内されたものの、その他は全員が、炉と右側の板床の間に開けた空間に座を占めた。

そして板床でも床の上でも偶数の人々が坐している。酒を飲むときは対をなして腰を下ろすからだ。各組の前には盆が運ばれ、そこには捧酒籠を載せた椀が見出される。

客人はそれぞれに指示された席に着く前に、立ち位置からちよつと蹲つて、以下のように挨拶する。まずは火に対して、次いで家の守護神へ捧げられた「イナウ」が立つコーナーに向けて、そして最後には自分の相手ないし隣の組に対して、両の掌のすり合わせと撫鬚を繰り返すわけだ。

客人に対する座席指定が進行中はすべての客が常時沈黙を守り、視線を落として、周囲で起きていることには無関心であるかのように坐しつづける。各自は、自分に声がかかるのを心待ちにするというような素振りとは、一切見せぬようにこれ努めた。

若干の部分がすでに着座すると、相互間の挨拶が始まる。例えば、一人が遠くに向けて掌をすり合わせたのちに両手で顎鬚と胸を撫でる緩慢な所作を終えると、いずれかの者がその場から走り出し、年長の相手の許に詰め寄つて、長きにわたる別離ののちに想定される、より長めの挨拶を行うわけだ。

これらの目による無言の挨拶や、同じく沈黙裏に進行する双方からの挨拶の息の合った開始は、まことに珍妙なる光景である。若者らは黙つて座りながら、腰を下ろしてゆく客人を額越しに物色する老人たちの目の視線による出会いを求めながら、とある視線を捉えるや諸手を前に突き出し、両手の五指を互いに絡み合わせる仕草をして見せる。

これらの空中を飛び交う相互的挨拶は半時間以上も続いた。二十〜二十五才の若者は、アイヌの慣習によれば、未知の

同族者や久しく逢わなかった同族者とはすでに正式な挨拶を交わすべき年齢に達したと見做されるが、覇気が不足気味の何人かは、踊り手らの輪の背後で左側の板床の陰に隠れて、見える所に坐する客人の行動をただ注意深く見守るばかりだった……。

「酒」の配布が始まる。祭主側から数名の若者が、着座する人々の間を巧みに歩き回りだして、着座者らの前の数ヶ所に置かれた容器から「酒」を汲んでは、客人たちへ順繰りに配つてゆく。それぞれの組では、一人が盆に載せた碗を引き寄せ、それに「酒」を満たして隣人に差し出すが、次には同じ行為が逆の方向で繰り返される。碗を受領した者は感謝の印にそれを軽く持ち上げるが、差し出した方もお返しに、両の掌で顎鬚と胸を撫でなければならぬ。

すべての組がすでに碗を一つずつ受領すると、二巡目の「酒」の配布も始まるが、今度は最初に飲んだ方が碗を支えて、それを満杯にした上で相手へ引き渡すのだ。

招聘された踊り手たちも、一人ずつ順繰りではあるが「酒」を受領する。女たちに注がれるのは小さな碗であつて、しかも「男の場合のように」縁まで並々ではない。女のコーナーには水で薄めた弱い飲料を収めた容器が据えられているが、それととも、炉と戸口の間の床にばらけて座る客人の女たちに対してたまさか注がれるのみ。女主人らは目下、両方の炉で魚スープの調理に大童である。スープはのちほど「酒」の配布が途絶えたときに、すべての客人に提供された。

全員がすでに一椀ずつ飲み終えて、容器は空となる。大方の注意を惹いたのは、整わない喜劇的な顔をした禿頭の老人である。彼は、いまだ酒が配布される前だったが、「酒」を飲むときのアイヌの古い儀式が今や正しく継承されていないこ

とを諄々と論していたが、幕舎の奥の部分の中央に据えられた容器の後ろに座を占めている。彼は結びの祈りを唱えだそうとしていた。抑えられたとはいえないまだ蜜蜂の巣の中のような残響の残る、数十組の人々の会話がピタリと止まる。踊り手らも床に腰を下ろして沈黙する。女たちは子供らを叱りつけて黙らせたものの、そのことはおくびにも出さずに、皆の敬愛する陽気な老人の言葉にやはり耳を傾けてゆく。

老人は、真向いに坐する祭主一族の一人の若いアイヌの方へ手を差し延べて、片方の掌をもう一方の掌で撫でながら、次のように語る。

君たちの古い先祖や古老らの「イナウ」はすでに老いさらばえて腐り、倒れてしまふたけど、君らの生まれた村じゃ今やこれらの「イナウ」が若返り、山の森からもたらされた新鮮なもので蘇った。君たちの土地にて、今日は遊び戯れるとしよう。君らと縁があつた仔熊は村へもたらされ、家の裏手に住まわされて、君たちとともにすでに二冬を過ごした。今年は、山中の親許へ去つてゆく彼を見送るべく、わしらは参集している。もし君らがそうするならば、来年（の春）には、河谷に接する山の斜面を徘徊する男の誰かは、きっと仔熊と出喰わすじやろう。わしらは君たちの村の家々の裏手に再び参集して、遊び戯れることになるう。これ以上長い話をするのは気が咎めるゆえ、この先の話は切り捨てて、手短かに申した次第じや。

老人は、こう言い終えたと顎鬚を撫でた。真向いに坐した若い男も同じ仕草で応える。老人は次に「行器」を手にとり、この容器を両手でこすりだして、さらに言葉を継いだ。

この「行器（シンドゴ）」は、日本の地から二つの海を渡り三つの海を越えて、人の住処である当家にもたらされ、奥壁の際に据えられておる。これ（容器）を見ると、まるで婆さんがこの家におりなさるように、わしには思える。君のそこじゃ今や、海を越えて運ばれた米が発酵中じゃ。君らの孫、神の孫は夜明けに目覚めると、己の住居から森や山々を越えて、それらの頂へ向けて旅立たれるじやろう。君たちのそこじゃ、この「酒」が屋内で発酵し、君らは孫のために見事な御馳走を用意し、道中の食べ物もこさえておられる。未完の弁からはこれらの言葉を、君のために申し述べる次第じゃ。

老人は最後の数語を発する際に「行器」を軽く持ち上げてから、床の上に戻した。真向いに坐する若いアイヌは、弁士の腕へ並々と酒を注いだ。それが飲み干されると、二人は会釈を交わして立ち上がった。これで儀式は幕となる。「行器」の許に呼ばれた家の女主人は、己の指どもを駆使して、容器を完璧に清掃せねばならなかった。

ところで、暫時中断された酒宴はさらに続いた。客人らの配置換えが課題として浮上する。祭主は、誰も怒らせぬよう、この祭宴の夜に設けられた幾つかの名誉席には最もふさわしい人が座るよう、また仲間外れに遭うか侮辱された人を出さぬように配慮せねばならない。最重要席に新たに指名されたのは、アイ村の資産家と、さほど高齢ではないが有力者と評される北方の豊かな村の村長である。最大の有力者らは板床の席に留められたものの、その他は全員がそこから床の席に移され、板床へ昇格したのは、より目立たない席に坐していた人たちである。祭主の今一つの配慮は、両者が互いに対等と見做し合うような客を組み合わせて座らせることに向けられる。さもないと、並坐することを強いられた人たちが、い

まだ同じ椀から飲まないうちは会話で気づまりを覚えることだろう。ある者は当惑し、また腹を立てる者もあろう。敵対関係にある人たちに一つの椀から飲むよう強いることも、やはり決してあつてはならぬ。したがって、然るべき席を指定するべく誰かを呼び上げる前には、采配者がすべてのデータを秤量し、列席者の全員に常時目を光らせ、しかるのちによりやく、あれこれの客人の名を決然と叫んで、彼にその席を指定するわけだ。一切の優柔不断も、一度口にした決定の変更も無作法の極みだ。客人の側からなされる拒絶もまた劣らず許し難い。あれこれの人物に対する敵意など祭主でも知りえぬ筈だと考える客人の中には好機を捉えて、他人には気付かれぬように、自分をそのような人物とは同席させぬよう祭主に耳打ちする者もあつた。

客人たちは遂に然るべく再配置されて、祭主の近親者から選ばれた数人の酌掛りが、手際良く全員の椀に注ぎ終える。注ぎ分けの手順は前と同じである。右側の板床では、別個の組ながら並坐する者同士が同時に椀を上げて飲む。これはまさしく最上の名誉席でもあつて、「イタンギウトムシコチ (tangiwomus koci)」(椀がぶつかり合う所)と呼ばれている。

床に坐す人たちのうちでは、顔を戸口へ向けた方が最初に飲む。

炉の周りや板床の上で犇めき合う若者らは、手から手へと受け渡される一つの小ぶりの椀から「酒」をいただく。踊り手らも「同様に」もてなされる。

活気が増してくる。あちこちの片隅で交わされる会話もすでに声高となつて、ほろ酔い機嫌の人たちは坐して歌を口ずさみ、手拍子を打つ。

板床や床に坐する初老の男たちからも、何人かはあれやこれやの女へ「パ・ケシ」（腕の飲み残し）の受領を促して、しきりに声をかける。腕の中身を飲み干さずに残しておいた老人は周りにいる年少者へ、残り酒を与えたいと思う女の名を告げる。すると、より機敏な誰か、あるいは祭主側の誰かが、注目を浴びたその女へ大声で呼びかける。客人のほぼ全員が、「パ・ケシ」は酒宴の女主人らへ差し上げるべきだと考えているから、極めて頻繁に飛び交うのは彼女らの名である。とはいえ、ほかの者たち、とりわけ老女や中年女らのことも決して忘却されるわけではない。それはまた久しく顔を合わせていない女親族や友人の細君へ、挨拶の言葉を掛ける好機でもある。呼ばれた女は己の座所からゆっくり立ち上がるか、踊り手の輪から出てきて、手の空いた女に代えてくれるよう頼みながらも、片隅で履物を脱ぐのだった。通常はその後に、女専用の漆塗り腕を棚から取って、腕と被り物を懷に仕舞うと、体を強く折り曲げてゆつくりと、びつしり着座した客人らの壁をかき分けて進んでゆく。彼女は、声を掛けてくれた男の前に跪いて腕を受領すると、その場で飲むこともあるが、概ねは持参した容器へすべてを空けて、この容器はその後手元に置かれる。「清掃」された腕は恭しく元の場所へ戻されるが、受領した酒は再び客人たちの列を通り抜けて、女のコーナーへと運ばれる。ほとんどの女たちは各自が、受領する「残り酒」を流し込むべく、自前のガラス瓶や土器かわらけを携行していた。

女らはこれらの「残り酒」を、酒が切れたときの迎え酒として夫や親族に渡すのが通例である。迎え酒を渴望する客人の誰かに――必ずしも安値ではなくて1瓶20〜30ルーブリが相場だったから――喜んで売却するようなこともよくある。だが、余所の集落からやって来た客たちの間には、酒宴に列席できなかった親族らへの土産となすべく溜めてゆく人た

ちも少なくない。

酒氣が弱い頭に効きだす。滅多にこの村に來ない人たちが陥りがちな憂鬱やある種の緊張は消えてゆく。自らの尊嚴を忘れる者あり、また己の悲しみや心痛を暫時、記憶から消してしまふ者もいる。舌は呪縛から解き放たれ、脳味噌はますます元氣に働きます。静坐して黙考するような組は一つとしてないようだ。

客人の間から一人また一人と飛び出して、やる氣満々で踊り手の輪の中に割り込んでゆく。8名のうちからは誰かが抜けてゆくが、輪の中での跳躍は威勢よくつづけられ、咆哮もますます大きく明瞭になっていく。輪の中へ割り込んだ男が、数分後にはすでに大声で「ヨシ・タ (yosita)」「(もうやめた)」と叫びながら輪から去っていく。

大方の哄笑を買ったのは、女の踊り手の輪の中へ駆け込んだ、純白の長衣を身にまとう長身の男である。彼は腕組みをして、彼女らとともに飛び跳ねるが、踊る女の通常の動きを大袈裟に真似るから、力余つて臀部を突きだす格好となるわけだ。

資産家のシレクア (Sirekua) 「前出の「アイ村の資産家」。アイ・コタシの「シレクアイヌ」はピウスツキの妻チユフサンマの父親である」は、舞の最中に足をもつらせて転倒した細君を見て、板床から彼女に向つて叫んでいたが、いきなりそこから駆け出し、輪の中へ飛びこんで、彼女に舞の作法を教えたから、皆は頗る御満悦である。

右側の半部に坐する人たちの間から何人かが、深呼吸するべく庭へ繰り出して、新たな人の動きが出来る。退室と再入室にあたっては、それぞれが腕の相方に向けて軽く会釈する。

多くの人の視線は、自席から飛び出して、最近のアザラシ猟の様子を興奮して語る能弁なノカンルチャ (Nokanruca) に

注がれる。彼は蹲り、身を振り、突出する氷山の陰に身を隠す様を実演で示し、次いでは、あたかも鉈を前へ突き出すかのように床に倒れて、「ケ(ge)！」(ほれ、そこだ、「ヤイキシテ(yaiksite)！」(危ないぞ)という叫びで表現される、観衆の承認の下で起き上がってゆく。

ノカンルチャの背後では、顎鬚を刈り込んだ中背の老人が軽く跳びつつ、途切れ途切れながらも心の籠った声で、アイヌが愛唱する酒席の歌「スニチャ(suniga)」「シノツチャ」であろう」を披露する。これは酒宴をめぐる詞章や、「酒」を戴くことの喜びの表現などからなる簡単な即興歌だ。老人はリズムカルにしゃがむ度に、伸ばした両手を軽く下ろしながら、着座する客人らの前を練り歩き、遂には、観衆に向けて頭を下げながら自席に腰を下ろした。だが彼のあとには第二の、次いでは第三の歌い手も登場する。着座者たちの顔に浮かぶ至福の微笑みは、彼らがどれほど満足しているかを雄弁に物語る。彼らは歌の単調なメロディーを鼻声で口ずさみ、調子を合わせて手拍子を鳴らすのだ。

誰かが大声を上げて、英雄伝承の名手である己の隣人に、これら過去をめぐる詩情から最愛の数連をこの場で歌い始めるよう強要する。叫んでいるのは、どうやら西海岸からの客人らしい。東海岸のアイヌの間ではこれらの「ハウキ(hauki)」[英雄詞曲]を、酒宴が催される家で歌うことは禁止されている事実を、彼は知らないか、失念しているからだ。

「酒」はもはや注がれない。祭主側は、熊を檻から引き出すという難事業に際し、全員が素面であるようにと慮るからだ。今やほとんど全員が喫煙中だ。板床の上には中央に窪みのある小ぶりの石があり、喫煙用火種として炭が一つずつ置かれているが、キセルの灰をそこへ落とすこともできる。

何人かの客が立ち上がって、煙草入れの小袋とキセルを取り上げると、不退転の決意で退出する。人々は彼らを追って

「キラアイヌ (kira ainu)」「逃亡者」との叫びを上げるも、止めるところまでは誰も踏み切らない。容易に酩酊して喧嘩腰となるような人たちもいるからだ。喧嘩や何らかの不測事態も容易に起こりうる。誰かが「酒」をぶちまけたり、どこかで「イナウ」を傷つけたり、要するに無作法をしかすかも知れない。行き着く先は訴訟と、然るべき償いであろう。その際に罰金が科されるのは、不始末を起こした酩酊者本人ではなくて、集会で彼を引き留めた——その事実が立証できればの話だが——方である。

まさにその癪癪と気難しさで名を馳せるある金持ちは、姿を消さぬうちにどこかに寝かせつけるべく、親族が彼を庭へ呼び出すことになった。

かつては令名を馳せて尊敬を集めていたが今はすでによぼよぼの老人である、酔っ払った半盲の老シャマンは左側の板床の若者らの間に横臥して、「踊らぬ者に「酒」はやるな、踊る奴だけに飲ませるべし！」と喚く。このような狭さにもめげない子供たちは、ふざける余地を見出し、周囲の騒音や喧噪にもかかわらず関心事や笑いのきっかけを見出してゆく。本人が気付かぬ間に額に炭を塗られた一人の子を、ほかの子らは全員で囃して、彼を指差しながらはしやぎまわる。二人の子は丁半賭博に耽る。一人の年長の子は、小さな子らの耳をふざけて引つ張り、そのあとで身動き一つしなかったかのような振りをする。ときたまブロックンなロシア語も聞こえてくるが、これを互いにひけらかしあうのは、タコエ村とシヤンツイ村の最もロシア化された若者たちである。

私は、このような縮詰めの狭所でも楽しくできる人々の能力に一驚した。

家宅の面積は12ゝ15平方サージェン^{『54・6ゝ68・3平方』}足らずなのに、この祭りでは合わせて210名の男女や子供

たちを数えた。

イエソ「蝦夷」島のアイヌは祭りの大部分を庭で執り行う。かの地の気候はもつと温和だから、踊りも饗宴も野外で行うことが可能である。だが樺太島ではそれが不可能だ。祭りは十一月末か十二月初めに実施されるのが恒例だが、その頃にはすでに雪が少なからず降るから、ぱちぱちと元気にはげる火の傍に座を占めることを皆が希望する。かつては大半の樺太アイヌが冬場には堅穴住居に移動したとはいえ、そこでは熊祭りが決して挙行されなかった。これらの堅穴住居には、「酒」を飲む際に使用する漆塗り容器さえも持ち込まれなかった。そこでは木製漆器がたやすく壊れたからだ。

私は幕舎の右側を再度一瞥する。そこにより声高な会話が沸き上がったからだ。セラロコ以来の旧知である陽気なモイマが、颯めつ面を四方八方に振りまきつつ「芸者」^{ゲイシャ}が日本の舞台で踊る様子を実演し、彼女らの歌を真似ようとこれ努める。彼は2年前に日本人漁業者とともに函館へ赴き、そこで冬を越した。彼はこの旅が御自慢で、己を世故にたけた人物と見做すから、コルサコフスク「喧所」にすら赴くこともなく人生を過ごしている人々とは、自分の見聞を喜んで分かち合うのだ。

幕舎の中ほどでは眉目秀麗の中年男が、客人の列の中にうなだれて寡黙に坐する別のアイヌに向かって、腹立たしげに喚き散らしている。後者はどうやら前者を何かで傷つけたらしい。二人の若い家長が立腹した男を宥めようと努めて、すでに顔面蒼白の細君が、ありうべき醜聞を回避するべく静かな場所へ連れ出そうと待ち構える戸口の方へと、彼をじりじりと誘導してゆく。

そのとき、高身長で恰幅のよいテクンカが入室し、右の炬へと直進して、主人席に坐する低身長で弱視の老人ウコホテ

(Ulkoite)——彼はピーピーと大声を上げて、やや離れた所にいる男と口論中だった——を、いつもは静かな顔にあからさまな不満の表情を露わにして炉端から立ち退かせた。テクンカはウコホテと同じ村で暮らし、自分の娘を彼の息子の許へ嫁がせたとはいえ、本日の大集会の席でのかかる馴れ馴れしさ、祭りの儀式をめぐる規則違反、はたまた日常的慣習の侵犯は、許容することができなかったからだ。主人席に坐しうるのは肉親だけであつて、罷り間違つてもウコホテが敢行したような妻と夫の間柄ではない。席を空けさせようとして迫るテクンカを認めたウコホテは、炉の一隅に身を寄せるが、そこにはテクンカの細君がいつもの女主人席に坐して、安らかに眠る三才の女の子を膝に抱えていた。

炉端から叩き出されたウコホテは板床に避難し、その縁に腰を下ろして幕舎内をじろじろと物色しだした。全く思いがけなく、彼はその好意的な視線を私へ向けて、幕舎中に轟くような大声で叫びだす。

チャンギ サケ イクレ・ヤン (T'ang'i sake ikure-ian) ——「ロシア人にも酒を飲ませろ」——とウコホテが叫ぶや、10名ほどの些か聞こし召したアイヌは、直ちに彼を支持した。

すでに酒宴の当初から、私は否応もなく他の客人とともに板床席に座らされて、「酒」を飲まされそうにもなるが、そのときはいまだ皆が素面しらふだったから、私の願いは聞き入れられ、放っておいてもらえた。今はもはや逃れることがさほど容易ではない。祭主らもやってきて、やはり懲憊しだしたから、私はウコホテと並んで名誉席に着かねばならなかった。

会話が寸時中断されて、皆の顔は生気を蘇らせる液体への至福の思いから輝きだす。飲酒を再開するための格好な口実が見出されたわけだ。女たちは、準備の整った魚と茶の提供をしばし待つよう命ぜられた。

そして「酒」の配布が進行中の間は、有志の歌い手が続々と志願して、両手を突き出し、優雅にしゃがんで顎鬚を震

わせ、人体によって占拠されていない僅かな空間で後退と前進を繰り返してゆく。胸で発声する数語のあとで、歌い手らはその都度、アイヌが殊のほか好む打ち震える喉音を連発する。

私は後日、若干の歌を筆録することができたので、そのうちの2篇を翻訳で引用する。

(1) この歌はわしが自ら作りしもの

ナウレ ナ エ… エ… エ… (Naure na e… e… e…)

若き頃よりそれでただ侘しさを追い払いし

ナウレ ナ エ… エ… エ…

己にはいつであれ 神々の声に耳傾けることを課し

ナウレ ナ エ… エ… エ…

神々が常に わしのことを記憶されるべく

ナウレ ナ エ… エ… エ…

わしはひたすらそうして 生きる

ナウレ ナ エ… エ… エ…

今や老いさらばえるもやはり この歌を歌いつづけよう

ナウレ ナ エ… エ… エ…

神々にこれを聞いて頂くべく やはり常に努めよう

ナウレ ナ エ… エ… エ…

(2) わしは老人 若者は「酒」を作れり

ナウレ ナオ エ… エ… エ… (Naure nao e… e… e…)

「酒」のお蔭で わしはただ歌を口ずさむ

ナウレ ナオ エ… エ… エ…

悪しき老人なれども 「酒」のお蔭で

わしは ただ大声で歌うことができる

ナウレ ナオ エ… エ… エ…

暫時静まった集会は、再び騒然となる。組ごとに對話が弾む。私の相棒は、同じ腕とともに飲まねばならぬウコホデだ。

——お前はわしが誰だか知つとるか？——半ば酩酊した老人は己の小ぶりの頭を持ち上げて訊ねるが、それは勿体ぶるというよりもむしろ眼病の所為でそうするようだ。上瞼は中々言うことを聴かないらしく、やつとのことで持ち上がった。

——わしはともかく管区おさの長だ。ここじゃわし一人だけが「ニシパ」(nispa)で、ほかの連中は「ウタラケシ」(utarakesi)「いマゆる水夫さん」さ——と告げて、幕舎内を手で指しながら案内しだす。目を中央の板床に向けて、そこに最北端の村の尊ママトロス

敬措く能わざる長老を認めるや付け加える——「タライカ チャチャ (Tajika caca)」(多来加タライカの老人)は、ちっこいながらもやはり「ニシパ」だ。

氏族長は全く同じ表現で、このテーマをめぐって止めどなく早口で喋りまくる。会話を別の方向へ転じようと試みるも、

徒勞であつた。朦朧となつた彼の頭は強情な馬よろしく、先へ進むことを肯んじない。彼は格別の誇りをもつて、日本人の統治下で己の父親は「おき 海岸全域の長だつたから、自らは就勞せずに村々を巡回し、一人だけ当局と話をする權利を有した」ことなどを力説した。

老人はほどなく私を放免してくれる。一団の剽輕者ひょうけいらがすぐ近くで、ある遊びを思い付いたからだ。

一人の老人が干した草の茎の束を両手で支えた。一つの茎の先だけに結び目がある。すべての端部を均等に揃えて、その部分を掌で蔽つて攪むや、老人は希望者へ、掌中の束から一本ずつ選んで、その茎を引き抜くよう提案する。結び目のある茎を引き当てた者は、残された酒の最後の椀を受領した。今宵はもはや客人らへ酒を出さぬことが決定される。すでに十分酩酊していたから、熊の殺害までは断酒が妥当とされたわけだ。

板床からも床からも食器が片付けられて、板床の上の棚に並べられる。客人たちに出されたのは乾製魚ユーコラの煮物と、椀に注いだ茶である。誰かがお茶を断り、生水を求めた。生水は急須と大鍋にすべて空けてしまつて、大鍋ではすでに踊り手や婦女子など、別の客人集団のために何かを調理中である。数人の若い娘が水汲みに出かけようとした矢先に、老人たちが大声を上げて制止し、今一度、アイヌの古い遊びを挙行するよう命じた。

乾燥した丈の高い草の束が運び込まれ、2本の茎は觀衆の目から隠された端部が結び合わされ、別の端が均等に整えられると、尊敬措く能わざるタライカの長老がそれを握り拳で驚攪む。その間には女たちとも、誰が遊びへの参加に同意するかをめぐつて交渉が進められる。別の茎と結ばれた茎を引き当てた男は、女とともに水汲みに赴かなければならぬわけ

だ。白髪の老人たちは笑声と冗談を交えながら、あれやこれやの老女や娘の名を喚き散らす。全員が異口同音に断る。最後に白羽の矢が立ったのは、陽気で機敏、若い頃はさらに一層の機敏さと人付き合いのよさで定評のあった一人の中年女である。彼女は敢えて籤引きには挑戦しない。彼女用に指定された茎はわざと引き上げてあつて、すでに確定されているからだ。皆の声援に送られて、桶を抱えつつ庭へと向かったのは、天恵の「酒」をめぐる歌を誰よりも見事に歌い上げたばかりの、片足を軽く曳く、年寄りと言うにはいまだ若すぎるアラケムシ(Arakemus)であつた。

その後、彼らが幕舎内に水を運び込むと、どえらい哄笑が沸き起こり、四方八方から冗談や喚声が飛び交うから、踊り手らさえ黙りこんで、その場の遊樂に加わつた。

女が一人で闇夜に男と一緒に小川へ赴くとはいへ、今宵は誰も、何か怪しからぬことを疑う余地はない。熊祭りの間は両性間の「みだらな」関係が「厳禁」とされているからだ。だがこの禁制も、伝統的禁忌を比較的よく記憶する北のアイヌの間で効力を保持するのみである。南に近いこの地では目下、熊祭りの際に節制が義務付けられるのは祭主側の人たちだけ。この掟の侵犯は、熊自身によつて暴かれるとの信仰が深く根付いているだけに、それは厳正に遵守されるわけだ。そのような場合は、惜別の辞が述べられる際、熊が誰の目にも明らかな性的興奮を示して、祭主側はすべての参集者の前で面目を失うであろう。

怠けないで踊りなされ！——と、黙り込んだ二つの輪の踊り手らへテクンカが怒鳴りつけた。

すると彼らは嬉々として、跳躍と、人間の声とも思えぬような異様な発声を再開する。

踊り手たちの興奮は、女の輪へ受け入れてもらえぬ未成年者の群れにも伝染する。それだけでなく、そこには踊りを希望する女がわんさとして、疲れるか、赤ん坊の許へ呼ばれた女にとって代わるべく、出番を待ち構えているのだ。

未成年の少女たちは戸口の左側で自前の輪を編成していた。しかしながら彼女らはほどなく、幕舎内が窮屈になったとの理由で庭へ場を移すように命ぜられる。彼女らは騒然となつて走り出し、そのあとには少年たちの徒党も従つた。

幕舎内には新たな事態がもはや出来せず、踊りが間断することなく続いた。

暑くなつた踊り手たちは、長衣から諸肌を脱ぎ、腰から垂れる両袖を四方に揺すりつつける。踊り手らの近くに坐するのは、遠方の村々からやつて来た数名の若い青年で、舞で発せられる叫びに聴き耳を立て、即座にすべてを把握しようとして努める。彼らは伴唱のすべてを記憶して、後日に彼らの村で同じ祭りが挙行されるときには、身内の者らを驚かそうとの魂胆である。

年輩の客人の間では人氣が疎らとなる。居残る人たちはまだ対話を続けるも、両足を伸ばして座る者、支えなしでは姿勢が保てなくなつて仰向けに横たわる者など、すでに楽な姿勢を取りだした人たちも少なくない。ここでは女の方が優勢であるが、彼女らは子供を寝かせてから幕舎へ駆けつけたもので、戸口の壁から二つの炉までの全空間を占拠している。彼女らはすべからず煙草をくゆらせ、中には二、三人で屯して、あたかも密談のように、ひそひそ話を交わす者もいるが、十中八九までは男らの衣装や、壁に懸けられた莫産を品定めするか、あるいは彼女ら自身の地元やその他の客人をめぐつて、最新のニュースやゴシップを互いに交し合うのであろう。

各自の腰には空の鞆がぶら下がる。このような修羅場では、いつ何時でも傷害沙汰が起きかねないから、この夜はナイフを抜いておかねばならない。因みに、今夕はナイフの使用が全面的に禁止されており、刃物での切断を要するような料理は作られない。

私は、若年者らの舞を拝見するべく幕舎の外に出る。

村全体に沿って延びる道路には、ちらほらと男の影が見え隠れする。彼らは帰宅したとはいえ、慣習が徹夜を命ずるのだから、この夜に就寝するような者は極めて稀である。

海岸へ通じる小径を行き来しながら、私はうねる波の音や、幼稚な舞に伴って歌われる異様な歌唱の明瞭な大喚声に耳を傾けた。

祭りの会場となった幕舎の近くで跳ね回る数十名の子供らの賑わいが、私をそこへと吸い寄せた。月光の下で、肩まで届く長髪を振り乱しながらせかせかと動き回る少年たちの、剃り上げたばかりの前頭部がちらちらと仄めく。やや年少の子らの頭頂部では、その中央に残る頭髮の束に結ばれた「ハ・チリ (hax-ciri)」と称する小南京玉製装飾が揺れている。腰帯ではブリキ製の「ガラガラ」や小刀の木製模型が揺れてさんざめく。

口の周りに小粒の黒斑を幾つか有する未成年の少女たちは、背中に眠る乳呑児をおぶって子守り役を務めながら歩き、遊び、踊るのだ。

子供たちはすべて、熊檻の前で踊るさまざまな年齢の娘らの輪の周りに集っている(写真2)。音頭取りはすでに成人の乙女ら二名で、どうやら年少の子らに舞で発する喚声——これは歌とは到底呼べぬような代物である——を指導しているようだ。少女らの未熟さが頻繁に露呈される。踊りが遅滞するや、年長の娘らは、ある子の部署に別の子を立たせるか、誰かを輪から完全に追い出して、入れ替えを実施する。輪が軌道に乗りだすと手拍子を打ち、大人の場合ほど強くは耳を襲わぬものの大声を上げながら跳躍を始める。だが再び何らかの故障が出来る。娘の一人がへまをやらかして輪から外れると、「やる気がない」と評されて別の子の探索が始まり、「キワ (kiwa)」（それ行け、動け）という掛け声、そして輪の年長ボスからの新たな訓示へと進んでゆく。ただでさえ眠りに就けぬ熊は、忙しなく向きを変えながら檻の中を歩き回る。

熊を怒らせることは禁止されていて、子供らの誰一人として、そのようなことを思い付く者はいなかった。

さまざまな幕舎から聞こえていた声が途絶えて、踊り手らが飛び跳ねる規則正しい物音も聞こえなくなった。私は家の外から奥壁へ近づき、何物にも蔽われていない明かり窓を通して、その中央部を一瞥する。

ガンカ (Ganka) ! カムイイルシカ (kamui irusika) ! (いけない、神さまがお怒りなさるよ) ——と、声に聞き覚えのある子供たちが一斉に叫び出した。

この4分の1平方アルシン「³⁶約四方」ほどの小窓から覗き込むことは、誰にも許されない。それを介して御覧になれるのは、人間どもの行状を見守る「神々」だけに限られる。普段は何枚かの薄板で蔽われているが、今はたまたま開放されていた。神々はたとえ遠くからでも「小窓を介して」酒宴に参加することができるわけだ。

それでも私には踊り手の全員に食事が提供されたことが確認できた。彼らの大半は食事が終わり次第舞い始めるべく、輪から外れぬままで食事をとる。輪の中に坐したまま疲れて眠り込んでしまった一人の女の踊り手は、何度かの突き押しで起こされた。

タムキンが夜明けまでに新しいことは何も起きないと請け合ってくれたので、私は家路についた。

われらは寢床にはつかなかったものの、暖まって、英気を養わねばならなかった。

四日目 (本祭)

一時間後、私は外出して現状を見て回った。踊りはだらだらと続いている。全員が眠たそうに見える。女らは床に座り込み、体を曲げて舞の叫びを上げ、右手では拍子を合わせて膝を打ちつづける。男たちは踊りを中断し、床に坐したまま体を伸ばして休んでいる。話をする気力すらない。幕舎内には頗る僅かな客人がいるだけで、活気は全く見られない。

さまざまな片隅に坐する女たちも、頭を垂れて床を見つめながら黙りこくる。熊檻の周りには誰もいない。だが、熊は眠ってはいない。尋常でない動きや騒音に心を乱されて、己の狭い牢獄内をうろうろと回りつづける。

空が白みだして、東部の水平線に明るい帯が現れるや、私の耳が捕捉したのは低く押し殺した嗚咽である。二人の老女が両手で目を蔽いつつ幕舎をあとにして、熊の檻の方へと向かう。地面の上に倒れ込んだ女らは、頭をそこへ押し付けて、ますます声高に泣きつづける。数分も経ぬうちに、彼女らのすぐ脇には数十人の男女がすでに集結していた。すべての幕舎からも客人たちがやってきて、嘆き悲しむ老女らに合流してゆく。大方の人たちは滂沱たる涙で近付いてくる。

100人を超す人々が啜り泣き号泣しつつ、己の悲しみを声高に吐露する。アイヌが涙もろいことは私も承知していた。ギリヤークらが駄々をこねる自分の子を叱りつけるとき「ヴウンド クギ ヴァランド (Vund kugi varand)」(「アイヌみたいに泣くな」と戒めるからだ。しかし、大の大人が子供のように泣きじやくることなど、私には想像だにできなかった。地面にへたり込み、両膝に肘をついて、悲しみに暮れる顔を手で蔽う者あり、立ったままで頭を檻に押し付ける者もいる。女らは地表に伏臥する。全員が涙をとめどなく垂れ流し、鼻からは鼻水も流れ落ちる。嗚咽や慟哭はますます強くなつて、広い空間の全方向へと轟きわたる。これを聴きつけた人たちは、村外れの幕舎からも遅ればせながら慌ただしく駆けつけて、慟哭する人々の数を増加させる。高く震える、悲哀と絶望に満ちた女らの声は心を刺し貫き、依然として平静な私の神経をも揺さぶりつづける。平静を保てなくなった私は、誰に対して同情すべきかすら判然とせぬままに顔を背けて、濡れた目頭を拭った。よく揃って調和のとれた哀歌は皆無で、各自が各様に号泣し啜り泣くものの、幾人かの女が声を合わせて歌うリズムカルな慟哭が、一際鮮やかに響くこともあった。

慟哭する男女の混成集団にじっと目を凝らしているうちに、より大勢の人に取り巻かれている数名の中心人物を、私は見分けられるようになった。これらの人物の許にはのちに、慟哭する男たちもやってきて地上に並んで横たわる。これは、春に水死した人々の女の親族たちである。これらの老女は手を取り合つてリズミカルに慟哭し、号泣しながら、組んだ手を一斉に持ち上げ、そして下ろしつづけた。

あとからやって来た男らは概ね遠来の客人たちであつて、お目当ての女がどこにいるかを目で追つて捜すが、隣席の人たちへ訊ねる者もいる。彼らはその女の許に至るや、その頭に寄り添うか、その膝に顔を押しあて、己の手を彼女の手に重ねて慟哭するが、恐らくは何事かも囁くのであらう。このような女の許を去るとき、彼女の手をとつて接吻する者もある。彼らは泣き腫らした顔で立ち上がると、混雑する人体の山の中で、その傍らに寄り添つて泣くことをやはり己の義務と見做す、別の女を見付けようと努める。このような人々の動きは、慟哭を共有する哀悼が繰り広げられるほぼ全期間を通して、長時間継続された。

地表に並坐する二人の女の許へ、男たちが一人また一人とやって来ては、彼女らの脇で慟哭し、号泣する彼女らの肩を軽く叩いてゆく。

彼らが哀悼を捧げたのは熊でなく、亡くなった人たちにほかならぬことは明らかであるが、そのことは後日、事後の聴取の中でも確認された。

死者に対しては確かに、以前にもすでに慟哭の機会があつた。新たに村入りした人々はその都度、死者の肉親である老

女らとともに特別な幕舎——その間、子供やその他の男たちは別の幕舎に案内されていた——に隔離されて、慟哭を交わし合わねばならなかったからだ。それを今実行するのは、上述のように祭りの当日に到着したため、そのような老女や女たちとともに隔離されるという機会には恵まれなかった人たちである。

私はおよそ半時間ほど、この異様ではあるが悲劇的な舞台における無言の証人であった。大人の連中は私の存在を完璧に無視してくれた。多少とも構ってくれたのは数名の未成年の少女や少年だけである。子供らは、その他の人たちと同じような悲哀を共有するには余りにも幼すぎたから、哀悼というよりはむしろ好奇心から、僅か一時間前には陽気に騒いでいた人々の無限の悲しみを見守っていた。

群衆からは徐々に、歩きながら手や長衣の袖で涙や鼻水を拭う男らが立ち去りだした。号泣は鎮まる。慟哭も鎮静化する。群衆も解散してゆく。大方はいまだ頭を垂れているが、それぞれは一人ずつ黙りこくって小川へ直行し、熱心に洗顔していた。同じことを幕舎の軒先で試みる者もあった。全員の顔からは厳粛と静寂が窺えた。

何人かからは後日、号泣の際には喉や鳩尾に痛みを覚えたという率直な感想も聴取した。みぞおち

女たちはやや長めに慟哭を続けたが、心痛の鎮まらぬ二、三の老女は檻から離れた所で、熊を檻から降ろす段になっても鳴咽を止めなかったから、老人たち、とりわけ熊の主人が幾度となくやってきては、彼女らへ泣きやむように命じなければならなかった。

老人らは幕舎へ戻って板床に腰を下ろし、そこで「酒」の饗応に与かる。彼らは熊の「頭」に挑む役を誰に託すか、熊

に腰帶や耳当てを着せるとき誰がその頭を押さえるか、告別の辞を述べる弁士には誰を選ぶべきか、檻から降ろす際には誰が「イナウ」を捧げて迎えるか、といった問題を審議した。この寄合いにはただ長老だけが出席する。尊敬措く能わざる客人ではあってもいまだ白髪を蓄えぬ者は、幕舎内の炉端に坐するとはいえ議論には参加しない。彼らはそれでも耳をそばだてて、長老たちのもの静かな声に聞き入っていた。

幕舎内での踊りはもはやなかった。すでに経験を積んだ乙女数名の指導下に未成年者らで編成された「女の輪」は、熊の「館」の近くで気だるそうに飛び跳ねていた。

小窓の脇には、祭りの主賓「熊を指している」のために趣向を凝らした食事を細長い桶に盛って届けてきた女が蹲っていた。若い男たちの出番である。10名足らずの若者が、熊を「引き出す」際に使用するトド革製の太い革紐を熊に装着させる作業に着手する。それはすでにループ状に結縛された革紐を熊の腹部に装着させるべく、檻の隙間を通して投げ込むわけだから、容易でない仕事だ。革紐は数本を撚り合わせて補強されている。熊は2本のループで締め付けねばならない。各ループの両側に長く延びる革紐が一端は右へ、そして他端は左に引かれた。熊は身震いして、以前よりも激しく檻の中を走りだす。これらの異常事態に驚愕するわけだ。大きなループが用意されて、熊がそこへ前脚を突っ込む——そうすればそれを即座に引き締められる——ように、さまざま企てが繰り広げられた。だが、熊は激しく前後して暴れまくるから、ループが捕らまえたのは頭だけか、頭と片方の前脚か、あるいは首尾よく抜け出せた熊の片方の後脚だけを捕捉するなど、と散々な結果である。ループの装着作業を指揮する二人は、先端に革紐を捕捉したり支えたりすることが可能な袂りを入

れた長い棹を、それぞれに駆使して革紐の動きを調整する。何人かの男は、熊をどの方向へ動かすべきかという咄嗟の判断にもとづき、檻の隙間から差し込んだ棹の操作で、前や後ろから熊をけしかけるように努める。革紐のそれぞれの端つ子を数人ずつで握りしめる若者たちは、指揮者らから指示を受けるや否や、一斉に引き始めねばならなかった。

不首尾のあとには必ず絶叫や相互の罵り合いが続く。何人かの年長者はその際、激しい譴責や身振りだけに留まらず、失策で狼狽する青年の許へ駆けつけて、彼の手から革紐か棹を奪うと、その難業を自らが実行してみせた。

喜びや不満の喚声が、近くで踊りつづける少女らのささやかな声をかき消しながら、間断することなく繰り返された。

少女たちは気乗りのせぬまま、慣習がこの瞬間に求める儀式をお義理のように遂行しつつ踊りつづけた。彼女らの目を惹きつけたのは、檻からやや離れた所で進行中の光景である。幕舎内に夜を徹して懸けられた高価な珍品を、女たちが子供らに着せている。母親はわが子に、そして子なしの女は己の甥っ子か親族の子に装わせるのだ。年長の子供らは対象外である。これらの「コンソンド」(hasondo) (宝物) には中国や日本からもたらされた金襴の古長衣も含まれる。金糸や色違いの絹糸で刺繍された花・枝葉・竜などの文様は、長きにわたる己の時を通してこのような祝祭をまた見てきたと想定される色褪せて擦り切れた衣装の上でも、いまだ判別が可能である。ここにはまた、一見して最近購入されたとおぼしき通常の日本の絹製「着物」^{キモノ}もある。もはや新品間違いなしと見えたのは、アイヌの女たちが自ら斑模様様の日本製絹地でいまだ歩けぬ子供のために仕立てたシャツや短上着である。子供らの多くは、同様に美しい日本製絹地仕立ての頭巾のようなものも頭に被っている。盛装した子供たちは全員が、小さきまぎまで多彩な色調の南京玉製頸飾りを、幾重にも胸に懸け

ている。一際目立つのは、今や格別な珍品と化した満洲伝来の碧色の石製・陶製大玉である。日本人がアイヌ向けに特製した安物のガラス玉も散見される。

陽気ながら必ずしも清潔な顔ではない子供たちが一列に並んで、風変わりな仮面舞踏会よろしく、その場で足踏みを続ける。広くて余りにも長すぎる袖が、ほとんど地面すれすれまで垂れ下がる。たくし上げられた裾は腰帯で抑えてある。これらすべてが仮装者を強く連想させる。誰一人としてふざける者はいない。全員がようやく自分の身にも振りかかった、祭りで果たすべき大役の重さを噛みしめている。熊が人間界から立ち去る際は、どれほど盛大に見送られたかを見せつけねばならない。普段は誰にも見せず、袋に納めて幕舎の暗所に幾年も秘蔵してきた高価な品々が、偏に熊のためにわざわざ披露されるわけだ。

女たちが幼い子供らの盛装にかかずらう間、男らの方は幕舎から祭りの正面舞台まで、夜を徹して壁に懸けられた刀や古式箆を運び出す。そこへはまた数枚の特製莫藎も運ばれるが、それらは前夜に設営した柵に括げて立てかける。

「イナウ・コ」、即ち「イナウ」がそこに設置されて、熊の殺害が実行される現場は、小ぶりの柵と、その前に立てられた丈の高い柱からなる。

柵は、高さ3・25〜4アルシン〔231〜284^{cm}〕の樅の若木60本を、密着して一列に打ち立てたものだ。これらの樅の木は下枝が払われるも、樹冠部だけは枝がそのまま残されている。樅の樹列と並行して、そのやや前方には同じ背丈の「イナウ」6本（いわゆる「ペケレ・イナウ（pekerinau）」（崇高な、光り輝く「イナウ」）が等間隔に立てられる。これら天辺にふさ

ふさの「イナウ」が結縛された長い棒杭の設置順は以下の通り。(1)「シュンクウ/sunku(=樅)」、(2)「イフレカニ/ihurekani(=樺の木)」、(3)「タニ/taxni(=白樺)」、(4)「シュンクウ(=樅)」、(5)「ヤユフ/jajuf(=榎松)」、(6)「イフレカニ(=樺の木)」。これらの杭には2本の細い竿が横なりに地上1・5アルシン「106・5センチ」の高さで結縛されて、猫柳でこしらえた短めの「イナウ」60本が竿の間に、互いに近接して差し込まれる。柵にはまた大きく広げた莫座も何枚か立て掛ける。

村の諸幕舎の戸口と同じ方角に向けて設置された柵の前方には、「トゥグシ」と称する丈の高い樅か榎松のY字形の柱を立てられる。「トゥグシ」用の木は、6本の「ペケレイナウ」や60本の樅の若木と同様に、必ずや熊を連れ出す日の前日に伐採せねばならない。

「トゥグシ」からは枝が払われて樹皮も剥離される。柱を立てる前には二股の各先端に「イナウ」が結縛されて、一方には、撚り合わされた削掛けでこしらえた数個の耳環が、またもう一方には幾つかの削掛け製小球が、それぞれ取り付けられる。前者は二股の短い枝に結ばれて女の「イナウ」と称されるが、小球を据えつけた長い枝の方は男の「イナウ」と呼ばれる。二股の下方の柱には小棒が釘として打ち込まれて、そこにも小「イナウ」を取りつける。

細いながらも丈の高いY字形の柱が同時に用意されて、熊の頭部が森へ搬出されるまで柵の傍らに立ち続けるが、これにはあとで熊の頭蓋骨が装着される。この柱は「イソクア(iso kuā)」(熊の樺)と称するが、また「ケヨホニ(kejox-ni)」ないし「ケイ・オ・ニ(kei-o-ni)」(「頭蓋骨を嵌め込むための樺」とも呼ばれる。同柱は、もし「トゥグシ」が榎松であれば

樞が充てられ、逆に、それが樞の場合は楸松が使用される。

柵の近くで、いろいろな刀を然るべく吊り下げ、配置の調整までもこなすのは祭主本人である。これは重要な仕事だから余人に託すのは危険であろう。刀の配置では刀剣に関して少なからぬ造詣が求められる。それぞれの刀は刀身の品質というより、むしろ刀身に施されたあれこれの文様や、鞘に彫られた装飾をめぐる独特な価値体系に照らして応分の品格を具えるわけだ。山や雲を模した曲線、鷲や大鳴の足跡、はたまた熊の足跡までが彫り込まれる事例も少なくない。

祭主は謙譲の精神から、余所人のもたらした刀剣は重要な位置に、即ち、柵の右端（柵に向かう位置からするとその左側）から吊るさねばならぬし、己の持ち物はたとえどんなに優れていようとも、もう一方のさほど重要でない柵の「左端辺りに配する必要がある。

刀はそれぞれが、煙で煤けてはいるものの、美しい装飾や織り柄の痕跡を留める幅広い剣帯に吊るされる形で、3刀か4刀ずつ一括して掛けられる。

さまざまな刀の間には、全面が小ぶりの銀板で蔽われた扁平な木製箆も各所に掛けられた。熊の胴体を切断する際に専ら使用されるナイフ類を収めた特別な小箱（写真3）や、「イナウ・ルウ（inau-ru）」と称されて、削掛け製の紐でぐる巻きにされた包み状の呪具など、熊崇拜にかかわる品々もやはり幾つか運ばれてくる。それぞれの包みの中身が何であるか、外からは覗えなかった。呪具の持主はそれの他言を憚る。中身の正体が未知である間だけ呪具は威力を有するとされるからだ。だが若干の所有者は、すでに数世代の持主を経たこれらの束の中身を自分でも承知していない。一家の秘蔵する呪

具に関する伝承を息子に伝える暇がなかった父親の急死後に、家長の継承を余儀なくされた少なくとも一人の若いアイヌは、どうしても秘密を知りたかったから削掛けをほじって、その中身を見ようと試みたがそこには何もなかった、と私に語ってくれた。遠い先祖が呪具として納めた物体がすでに朽ち果ててしまったことは明らかだ。祭り用にここで披露されるのは熊の主人「つまり祭主」に帰属する呪具だけである。これらは壁のど真ん中に掛けられるが、そこにはまた満洲伝来の金欄長衣2着も見出される。一家はこれらを壁に懸けるために使用し、子供に着せることはない。

柵の傍らの草の上には磯躑躅製の単弓が僅かでも湿気を吸って柔軟性が増すようにと、早くも前日から寝かせてあった。弓と数本の矢は祭りの会場の中央に立てられて、そこにはまた一本の長くて細い「イナウ」も壁に立て掛けてある。

祭りの準備が終わって全員が幕舎の方へ戻ったとき、その檻の周囲では熊にループを装着する作業が、依然として声高の激しい罵り合いの中で続いていた。

長老らの寄合いに参加した尊敬措く能わざる客の一人が幕舎から出てきて、熊を引き出す際の幾つかの重要な役に長老たちは誰を選抜したかを庭にいる人々に報告する。決定は是認や否認の表明なしに受け入れられた。長老らの決定には誰も抗わず、あえて抗議するような者は皆無である。皆はただ、膨大な人出の中で熊の頭に掴みかかり、装飾を施す間はその頭を押さえつづけるという羨むべき役回りに、白羽の矢が立てられた人たちの姿を目で追い求めるのみだった。若者なら誰しも、己の技量と勇気を発揮したかったであろうが、長老らの判断は、遠来の客人らを満足させることを狙ったものだった。アイヌの伝統慣習に従うならば、時も辛苦も惜しまず、数百露里の難路も遠しとせず、岩がちの海辺の道を走

破して到来した人たちへ、優先権を与える必要があるのだ。選抜された二人は年の頃四十で、いずれも肩が広くて頑丈な体躯の男であつたが、己の衣装を正すと、しゃがんで腰帯を締め直し、運動を妨げるようなものがないかどうか点検を進める。彼らは自らの不首尾に乗じた熊が己を齒や脚で抱え込むような不測の事態に備えて、数枚の長衣を自衛のために重ね着していた。

腕組みをして脇に立つアイヌが解説してくれたところによると、熊に跳びかかる役の男はかつて、犬皮の毛外套を裏返して着用したものだという。これは怪我を回避する最良の予防策と見做された。

私は急遽タムキンの幕舎の方へ駆け出して、その役目をすでに果たしうる写真機を取りに戻った。私は道端の雑木林の中に、瞬時の痙攣を繰り返しつつ全身を震わせて横臥する中年のアイヌを認めた。そこに通りかかった女はただ微笑みただけで「カンギカラアイヌ (kangi kara ajinu)」「カンギを作る人」と呟き、己が目にしたモノは全く見ない風で立ち去った。横臥する男は「熊の匂い」に当てられて発病したことが判明するが、病はアイヌ語で「イソイコニ (iso ikoni)」「熊の病」と称される。病人に水を届けるか幕舎に収容しては、という私の申し入れは一蹴された。発作はどうやら、微やかながらも冷たい朝風が通う新鮮な空気の許の方が凌ぎやすいようだ。私が連れてきたアイヌは、病人がなるべく早急に意識を取り戻すべく、熊の殺害が行なわれる予定の場所へ赴き、そこに立つ「イナウ」から削った数本の長い帯を繋ぎ合わせると、病人の首と両手をそれで縛り上げた。四半刻が過ぎると、彼はすでに元氣一杯で群衆の中に見出された。

私が檻の方へ戻ると、そこに喚声が沸き上がった。熊にはループが幾つか装着されて、革紐もピンと張られている。熊

の引き出しが着手された。老人たちは幕舎から蒸し米、姥百合の根、蝦夷延胡索^{えぞえんごさく}、腰帶、耳当て、根茎や煙草を包み込んだ莫座の束を、大皿に載せて運び出す。束の脇には2本の矢も差してあった。

一人の中年女が、熊の給餌に常用した細長い桶に山盛りの米飯や、アザラシ油をかけた食用根茎類を盛って出てくる。それは、熊がこの地の友人らの許でとる最後の送別の食事だった。

幾人かの老人は、予期される光景をよりよく眺めるべく幕舎の屋根に登りだす。もっと元氣のよい別の老人らは、周りの人たちを整理してゆく。着飾った子供や、同様に着飾る赤ん坊を腕に抱える娘らは、檻からやや離れた脇の方に立たされ、あとで熊が家から殺害の現場まで引き廻される予定の道に整列させられた。

各自が棹を手にした青年たちは、檻の前方に数歩ずつの間隔で配置される。さらに元氣のよい長身の老人は、幕舎の壁際に立てられた、枝は払ってあるが先端から削掛けの垂れ下がる細長い樅の木を手にとって、熊が檻から出始める時を今や遅しと待ち構える。

その間に檻の方では、天井を押さえていた角材が投下されて半分まで取り壊されると、人々は熊が地上に降りてくるのを待った。

疲労困憊した熊は身動き一つしない。そこで、取り外されていない檻の天井部分に立つ男らは、驚愕したか疲労困憊の「捕虜」を興奮させるべく、首を可能な限り下へ伸ばしながら棹で威嚇し始める。これは明らかに功を奏して、氣を取り直した熊は、突如として最上段の丸太まで跳び上がるや、地上へ舞い下りて左右をねめ回した（写真4）。全員が叫びをあ

げて両側へ後退した。

熊の前に立ちはだかるのは「イナウ」を掲げた老人で、それを振り回しながら、その都度、動物の額を軽く打つ。ピンと張った革紐の両端は8〜10名ずつで握っているから、熊は動きがとれない。

老人は以下のように自らの課題を遂行する。その際は常に、初老ではあるが視力のすぐれた者が選ばれる。彼は熊がいまだ檻の上にいるうちに「イナウ」で一打を加えたのち、己が大声で歌う歌に調子を合わせて軽く跳びながら後退してゆく。彼は熊に向かつて、上機嫌を示すこと、そして偏に敬意を表することのみを願う若い人たちに危害を加えぬことも懇願した。

以下は、その歌詞^二である。

タンベクスピリカランポ エヤイコンテカンネ エアシン チキンピリカ パンロ (Tambe kusu pirika rampo ejajkonte kanne easin cikin pirika panko)。タンベパテスクッアイヌウタラワネイケアイシコヤイトウナレクスアンキヒタネ (Tambe pate sukúp ajnu utara wa nejke aj ško jajunare kusu ankihi tane)。ナハアンクスタオロワエチキチキンピリカ (Nax an kusu ta oro wa eciki cikin pirika)。スクッウタラエチネクスタンベヤイラム オホタエチコロチキンピリカ (Sukuf utara ecine kusu tambe jaj ram oxtá ecikoró cikin pirika)。タンベヤ

^二 手稿に認められる字母転写方式の不統一、また目下国外に在留する著者とは現時点で連絡が取れないという実情にも鑑みて、編者はこゝでも、またこれ以降 (628-633頁) でも、アイヌ語テキストにおける表記の完璧な正確さは保証することができない——原編者注。

イウチャトウナレイタアンキタネ (Tambe jaj ućatunare ita anki tane)。

もし、汝が上機嫌でお出ましあらば、良きことあらん。これにつきては、若きウタリらがひたすら敬意をこめて考えておるぞ。じゃから、汝が今後ともかくのごとく振る舞うなれば、良きことのあらん。若きウタリらも、それを心の中に持つならば良きことあらん。わしはこれを敬意とともに言上する次第じゃ。

簡潔な口上が終わって、老人は脇へ退去する。「イナウ」はのちに、「イナウ・コ」の飾り立てた柵へと運ばれた。革紐が僅かに緩められると熊は数歩前進したが、その後は忌々しげに歯で紐に喰らいつき、齧りだした。皆が動揺して、どえらい騒ぎが持ち上がる。熊の口へ棒切れを突っ込むよう命ぜられたが、ほとんど効き目がない。動物は自分の立場と、己に迫る運命を理解したようだった。何とかして自由を得ようともがく熊は、憤怒を益々募らせて革紐を齧りつづけ、棹の殴打にも、また折れた棹の尖った先による脱毛をきたすほど凄まじい足裏への刺突にも全く怯む気配がなかった。

列席者たちは動揺を募らせて喧騒が強まる。叫び声の中には不安も聞こえてくる。熊は棒切れで血まみれとなつた口から革紐を吐き出した。ミーシユカ「ロシア語で熊の俗称」は再び檻に収容して、これまでの革紐はもはや頼りにならぬから、新しい革紐で縛り直すことになった。

熊が今一度、檻の前の小広場へ迂り降りてくるところを十分に身構えて、熊の一举一動を見守る眉目秀麗で逞しいアイヌが一跳びすると、彼はいつの間にか腹で動物の鼻面を押さえて、両手はその頸を抱えこんでいた。その瞬間、格闘の助っ人に指名されていた別のアイヌは、熊が頭をもたげて己の敵を振り払わぬよう、前者の背中にすでに馬乗りとなつてい

た。二人の男が背後から飛びついて胴体を地面に押し伏せる。熊の背に太い丸太が渡され、その両端は数人がかりで圧せられたから、熊は起き上がることも、また寝返りを打つこともできない。熊の四肢の動きを封ずるべく、地表近くで交差する2本の棹がそれぞれの脚に密着して打ち込まれた。

これらはすべてが一瞬のうちに行われたから、一分後には熊の姿がすでに見えず、彼が立っていた所には上下に積み重なる人間たちの山があった。

熊との格闘を幕舎の屋根から眺める老人らや、遠巻きに立ち尽くすアイヌたちは、ありとあらゆる助言や掛け声を間断なく叫びつづける。任務の遂行者らも、不愉快千番な抱擁から逃れるべく、たうつ熊の動きをめぐって、互いに警告を発しながら騒ぎたてる。この人間の山へ向けて、熊の腹部に装着すべき草製の編み帯を携えた二人のアイヌが忍び寄る。長時間の奮闘の末、腰帯を遂に熊に装着し、その背中に包みを結縛することにも成功する。だがまさにその瞬間に、熊は己の身体部位で最も可動性のある鼻面を、何とかして反転させようともがきだした。熊の頭へ最初に掴みかかったアイヌは手に痺れをきたして、野獣の絶望的妄動を制することがもはやできなくなる。熊が頭の自由を取り戻して、誰かに噛みつく懼れが現実のものとなった。

群衆は再び忙しく動きだし、悲鳴も上げだした。彼らは互いに話の腰を折りながら相手の説得にこれ努める。他人を非難して喚く者もいるが、5、6名の些か聞こし召した老人らは、たとえこのような形であれ、重要なながらも危険と背中合わせの祭りのこの場面に立ち会えたことの幸せを、甲高い声でまくし立てる。遂に彼らは合意に達した。一瞬の静寂が訪

れて、皆は黙して合図を待つ。その直後に、熊にかかずらってきた人たちが、甲高い叫びとともにその場から四方八方へ飛びのいた。熊はよれよれの胴体を伸ばして、己の虐待者らを憎々しげに睨みつける。しかし、熊があちらこちらへ、よろよろと踏み出すや否や、突如として一人の命知らずが、続いては男の徒党が、その上に覆いかぶさって、観衆の目から隠してしまった。熊は一声もあげぬから、絶命したと考えることも可能だった。だが、人の背中や胴体の彼方に生きもののうごめきがあることは——強大な野獣を押さえつけて、それに打ち勝とうと努める人たちの——頻繁な脚の動きから明らかだった。

熊は四半刻が過ぎると独りで放置される。彼の胴体には編んだ腰帯が捲きつけられ、背中にもさまざまな食料を収めた編み袋が幾つも帯に縫い付けられ、両耳には、ギリヤークが冬場に着用するものを彷彿させる耳当ても結び付けてあった。

余所では聴取できるような頭部の装飾が、ここでは施されない。それは、アイ村以南のアイヌの許でのみ実施されているからだ。

熊は今や準備完了である。もはや連れてゆくべき時刻ながら、延々とした長談義のあとで、祭主は若い人たちへ、希望する者の全員が熊と暫く遊び、その頭に跳びかかることを許した。

若者たちが騒ぎ始める。熊の頭へ挑む決心のついた者たちは、熊の前方に開けた空所に集まってゆく。相互の牽制と、誰が最初に挑むかをめぐって談議が始まる。何人かは、ひどく酩酊して前に飛び出そうとする小ぶりの山羊髭を生やした騒々しいアイヌを引き止めている。彼は制止を振り切って飛び出し、「ピリカクババワネノ (Pirika kubāba wa neno)」(よ

ーし、おれを食わせてやるぞ」と叫んで突進する。介入した祭主は乱心者を鎮めるべく、棹を振り回さねばならなかった。北からやって来た若者らは控えめに立ちつつける。彼らは、これらのほとんど未知の仲間の間で遠慮してもいたが、熊の頭に跳びかかるのはただ長老に命ぜられた者のみ……、という自らの慣習にも縛られているからだ。

それにまた、彼らが己の技量を誇示する必要はどこにあるか。彼らは熊狩りにおける最優秀猟師の誉れを享受しており、己の隣人であるギリヤークだけにはやや引けを取るとはいえ、「捕虜」の取扱いに頗る長けた猟師としても、その名声は定まっているではないか。

熊が後脚で立ち上がったのは、最初の命知らずがすでに駆け出したまさにその時である。彼はそれを適時に認めたから、観客の全員が喚声を上げる中で脇へ逸れて跳躍した。熊が再度四足で立ち上がらぬうちに、一人の若いアイヌが熊の頭へ跳びかかって、直ちに脇へ飛び退いた。同じことを、第二、第三のアイヌも繰り返した。私の観察によると、彼らは熊が視線を下へ向ける頃合いを見計らって、その頭に跳びかかるのだ。これで数秒が稼げることは明らかで、熊の方は己を攻撃する者に対して、自分の爪や歯を準備することが叶わぬわけだ。

しかし、中には完全に側面から、あるいは後方から熊の鼻面に挑むような輩もいるが、このような跳躍は嘲笑を浴びるだけである。

ヘマカ(Gemaka)！「それまでだ——と、祭主は大方の喧騒の中で叫んで、遊戯を中止させた。

長老たちは屋根から降りだす。若者らは武器として使用した棹を投げ出した。行列は檻から家の奥壁の脇を抜けて、左

折したあととは会場へと進んでいった。

熊の数歩先を行くのは彼の主人であるが、吊り紐に包みを結び付けて身に着けている。これは熊を格別に喜ばせるものとされている。熊はそこに、遠路へ旅立つ自分のために用意された食料を運んでくれる主人の側から示された、行き届いた配慮を見出すからだ。

盛装した子供たちは、四方八方を睨みつけながら気だるそうに歩を進める熊の通過を見届けるや、すべてを貪るように見守る観衆の群れに合流して行進を続けた(写真5)。誰よりも長く泣きつづけていた三人の老女が、いまだ軽く慟哭は続けながらも一本の革紐の端にすがりついている。元氣一杯の餓鬼ども5、6名が、明らかに会場へ一番乗りしようとの魂胆で先頭に飛び出そうとしたが、即刻に大目玉を食らう。皆と一緒に行けと命じられて、彼らは呼び戻された。熊より先を行く権利は誰も有さぬわけだ。

熊は、己のために「イナウ」や刀や箆や呪具、即ちアイヌの有する高価なものを総動員して飾り立てられた会場(写真6)を、遠くからでも喜びを噛みしめつつ眺められるような道筋をたどって連れ回された。

私は熊の見せる平静な振舞いに胸を打たれた。

イナウ マウヌケチャラシポ アンネナバコ (Inau mau nu kečarašo an ne napko) 「イナウ」の香りを嗅いだから喜んでいる——と、私と並んで行くアイヌが解説してくれる。

彼は他のすべての同族者らと同様に、熊にとって最も喜ばしいのは森の外れで準備されたような満艦飾の「イナウ」を

眺めることだ、と堅く信じて疑わぬわけだ（付録資料No. 33、No. 34参照）。

そのすぐ傍まで連れて来られると、熊は何本かの革紐で二本のY字柱（トゥグシ）の間に繋ぎとめられた。一本は新設の柱だが、「イナウ」を欠いたもう一本は、数年前の先回の熊祭りで使用された古い柱である。革紐の両端が柱にしつかり結縛されるや、熊には、彼の専用桶に入れて運んで来た米飯と根茎類からなる最後の御馳走が与えられる（付録資料No. 4参照）。

疲労困憊した熊は、己が直面する未曾有の対応から頗る良からぬ事態を嗅ぎ付けてぐずぐずし、食物にも直ぐには口をつけない。彼はせかせかと動き回り、横になり、不満げに鈍い唸り声を上げて、脚で地面を掘り返しだした。だがこれは、彼の主人を些かも動じさせない。熊が桶の中のものを少々味見するや否や、桶は持ち去られた。

祭りでは最も厳粛な瞬間が到来する。

予め指名された長老が長さ1・5サージェン（『3・20』の細長い「イナウ」）を手を抱えて進み出ると、その一端を掴んで、螺旋状に垂れ下がる削掛けを熊に向けて振り下ろした。

己の友人たちを地上に残して立ち去ろうとする熊は、間もなく、彼らの告別の辞を耳にせねばならない（写真7）。幼時から人手で育てられた熊は、人が死後に赴く西ではなくて東を指すであろう。したがって、長老は顔を太陽の方に向けて立ち、告辞を述べねばならない。

全群衆は半円状に立ち並んだ（写真8）。数人の中年男が弁士の傍に寄ってきて、告辞が始まるやその一部始終を食るように静聴した。これは、その内容を知りうる唯一の機会である。アイヌたちは格別な理由がない限り、祈祷もまたこの莊

厳な告別の辞も決して繰り返してはならぬとされている。だが今回は、叡知の誉れが高くて大きな權威を有するも、この地へは滅多に來られないタライカの長老の弁舌が、探究心の旺盛な人たちの関心を刺激したわけだ。

長老は2〜3語を発することに軽くしゃがんで「イナウ」を上げ下げしつつ、祈りや重要な對話に特有の途切れがちな^{レチタイウ}叙唱で語りつづける。打ち震えながらも明晰な声が、お通夜のような沈黙の中に屹立する人々の林に轟きわたる。

告辞の内容は以下の通り。

クカムイミチヒピリカノチオントウイカアネカラ・カラ、トゥパイエカスウコナナシエチ・エカラ・カラ、タンアシシトーケウラン・コシネ・カアネカラ・カラ、トボチパハノカトパハノウオカラメチウアネカラ・カラ、イナウチュフキリアネカラ・カラ、トミエアイコロアネウラン・コシネ・カキワアンテ、タンカムイシンタアネカラ・カラ、タンネコンタケアン・チュフトウタンカ、タハコンコンタケアイヨボキンテエコシシンタパケチュフキコテシンタトウヨロエヤイオマレ、トウイナウチュフキ、トウ・トミチュフキシンタトウヨロエヤイオマレエキワ・アンテ、シンタパケヘエヤイ・コ・ユフパ、シンタケセヘエソニタタレ、エキワアンテ、カトニシヨロエニセ・ヌマエキワタンネ、エキヤラポキヒトウペケレウララエソカクレチウ、メトホシリカワウエカンニシユヌアネヤイカラ・カラ、キワタハネ、タハハネウララメトホシリカタコン・ニセパイキレ、タンベパタネコシレヤーヌ、シンタコ・チャツセエキワタンネウチャカシノトイルサンキニタツサム、エシンタオランケエキワネヤ、ネヤオウ^シノトウ・

イナウ シケ エチ ヘンジョロカ ラリカンネ (Ku kamuj miclihi pirikano ci ontujka ane kara-kara, tu pajekasu ukonanas eci-ekara-kara, tan asis tōke uran-košne-ka ane kara-kara, toboci paxno, kato paxno: wokarameciū ane kara-kara, inau čuf kiri ane kara-kara, tomi eai koro ane uran-košne-ka ki wa ante, tan kamuj sinta ane kara-kara, tanne kontake an-šuf tu tan ka, taxkon kontake ai jobo kinte ekōš sinta pake čufki kote sinta tujoro ejai omare, tu inau čufki, tu-tomi čufki sinta tujoro ejai omare ekiwa-ante, sinta pakehe ejai-ko-juŋpa, sinta keseh e sonitatore, ekiwa ante, kato nišoro enise-nuna ekiwa tanne, ekija rapokih tu paker urara esoka kureciū, metoxsiri kawa wekan nišunū ane jaj kara-kara, kiwa taxne, taxtaxne utara metoxsiri kata kon-nisepajkire, tambe patne kosire jānu, sinta ko-čassee ekiwa tanne ućakašno tojru sanki nittasam, esinta oranke ekiwa nejā, nejā oušno tu-inau sike eci pendžoroka rarikanne)。ト
 ウ・トシ・シケ エ・パンジョロカシ モイレ アハカシ エトウマン ノイパカ エキ・ラポキヒ アチャネ トリ
 ポ、タンバハネ エウハウエ ポポ、タンベ パテ エ・コナシ カンネ エ・アハカサ クンベネ、エキ・ラポキヒ
 チャカシノ トイル カムイカハ トウーカル フネ トウ トキヒ エウレンカレ ヌイケ トウ トキヒ エウレンカレ
 (Tu-tomi-sike e-pandzoro kasi mojre axkas etuman noipak eki-rapokihni acane tori popo, tamboxne euhawe popo, tambe pate e-konanas kanne e-axkas kumpene, eki-rapokihni ućakašno tojru kamuj kax tuka rufne tu tokihni eurepkare nuŋke tu tokihni eurenkare)。タンベ パテ コヤイ・ラマッテ エキ クンベネ (Tambe pate kojai-ramatte eki kumpene)。
 エキ ラポキヒ タバ アシシ トイル チュフカ コパケ、アシシ トイル コロ カヘマ エトコ カハト

イル エヤイカリレ アフフ チュフ コパケヘ エマカン トイル フレキ エマカン トイル、エヤイストマクント
 イル、タン カムイ モー・ル エコシレナ テヘネ (Eki rapokini tap asiš tojru čufka kopake, asiš tojru koro kaxkema
 etoko kax torju ejajkarire ahup čuf ko pakehe emakan tojru fureki: emakan tojru, ejajstoma kun tojru, tan kamui mōru
 ekosirena texne)。モル コアフン エトコタ リキン チュフ コパケタ エコヘ・エパル、モルトウヨロ エコア
 フンチキ オロワ タンネ エコロ カヘケマ エコロ オンモ (Moru ko ahun etokota rikin čuf kopaketa ekohe/eparu,
 moru tujoro eko ahunciki orowa tanne ekoro kaxkema ekoro omno)。ピリカ エウエヌシカネ エキ キワ オボキン
 ノ (Pirika ewenuškane eki kiwa opokino)。ウレシケ イタラ エンチウ ヘンキ テタ オロワ ウレシケ イタラ、イ
 タラ カシケヘ アネ ウオントウイカ、ネヤ イタラフ エカトウ コロペ ネヤシリナ・ケタ エシ・セヘタ・サレ、
 タンベ パテ コヨハイシタン チキ ナンコ (Ureške itara enciu henki teta orowá urešké itara, itara kaxkehe ane
 wontu)ká, neja itarhu ekatu korope nejasiri na-keta esi-sexta-sare, tambe pate kojohajštan ciki nanko)。

【日本語訳】

わが美しき孫よ、わしらは汝を立派に養えり。二年^{ふたしせ}余り、わしらは汝とともに暮らせり。この改まりし日、女子^{おなこ}
 や男^{おのこ}らは汝が心を軽やかとなし、哀惜とともに汝をば見送るなり。わしらは汝がため「イナウ」をこしらえ、汝
 を喜ばすべく刀を掛け、二股の柱も立てり。柱の長き枝は日輪により近く、短き枝はやや低めなり。汝が「シン

タ」三の天辺は陽光に触るる。これに坐すれば、新たなる「イナウ」や、懸けられし宝物どもより発せし光をば、
 ともに持ち去るべし。己が身を「シンタ」に結びしのち飛び立つべし。男おのこが黒雲に乗りて雲々が許へ昇るべし。
 まさにその折、高き山々の彼方より輝ける霞の降り来たりて、汝が行方を見守るべし。山々が上つ方なる鰯雲、
 いや増しに高く昇るらん。かかる光景を眺めつつ己が「シンタ」を滑らすならば、汝は落葉松の生い茂れる山が
 斜面の森に降り立ち、わしらが指示する道を行くべし。汝が背には、頸が近くに「イナウ」を収めし荷、尾なる
 方には刀を収めし荷のあるべし。荷が重さに身を屈めながら、汝は全身を揺すりつつ心して歩むべし。その頃に
 は、汝が御馳走の受け手たる伯父君の鳥（即ち、渡鴉）ども、四方八方から汝をば包囲して叫び募るべし。かく
 の如く行くならば、道が上にて動物が足跡を見付くべし。大いなる足跡の対をなせる穴のみならず、小さき足跡
 が穴も見出すべし。それら足跡をば忠実に踏み行くならば、汝は日のいずる方へ通ずる新しき道を歩むこととな
 らむ。この新しき道は、汝が到来に備えて汝が母の作られしものなり。日の沈む方へ向かう道は死者がたどる道
 なれば、危うき道なり。前者が道を行くならば、汝は己が家にたどり着くべし。帰宅せしとき、汝は家に入る前
 に喜びの余り飛び跳ねだすべし。汝が母たるおな姪は、やさしく汝を迎えるべし。しかるのち、汝の生長せる所、汝

三 「シンタ (shinta)」は一種の櫓のようなもので、一般には英雄物語で摩訶不思議な力の持主である勇者が搭乗して、数百露里を駆けめぐ
 る乗物である「通常は「揺籠」を意味する」。熊にとっては、Y字形柱の二股部の窪みが「シンタ」であって、それに乗って両親の許へ旅立つと
 されている。

が祖父たる人間どもエンチウの古より暮らし、汝も養い育てし所をば想起すべし。そして明くる年ともなれば、己が代わりとて、汝に似たるものをば同じ村へ送り出すべし。わしらはそのみを、ひたすら待ちつづける所存じや（付録資料No.3 参照）。

長老は語り終えると、「イナウ」の垂れ下がる削掛けで今を最後と「熊を」軽く打つや、近くに立つ男らへそれを渡して、静かに脇へ退いた。

皆は告別の辞が見事に述べられたと見做すものの、称賛の声は誰からも上がらない。各自がそれぞれに、この難題は立派に遂行されたと考えるわけだ。熊も満足していることは、弁士が振り回す「イナウ」が破壊されずに済んだ事実からもすでに断じうるから、来年にはこの村に再び仔熊がもたらされるであろう。

人々は依然として深い沈黙を守りつづけた。祭主は列席者たちへ視線を走らせて、熊殺しという大役を託すべき人物を物色する。予断を以って当たることは許されぬ。殺害について語ることすら禁物であつて、禁が破られるならば、弓射における不首尾もさることながら、神の怒り……さえも覚悟せねばならぬからだ。

射手は若者のうちから一人を選ばなければならぬ。この際の禁忌は皆無である。祭主の親族であれ、また全く余所者の男であれ、均しく熊殺しの執行者たりうるのだ。彼らのうちで、より控えめな人たちは予め遠くの方に立ち、この瞬間にはすでに人々の背後に身を隠している。幾人かの若者は、その反対に、注目を惹くべく後列からせせり出しては来るもの

四 「エンチウ (enchiu)」は人間全般や男を意味するのみならず、樺太アイヌの自称でもある。したがって、この箇所は「わしらエンチウども」と訳出することも可能であろう——訳者注。

のあえてねだることはせず、半円の中心に立つ祭主の顔の直視さえも避けている。

それまでは家長としての權威を主張しなかった長老たちからも、あれやこれやの名を名誉ある役に推挽する遠慮のない声が飛び交う。祭主はそれらを拝聴するも返事はせず、名前の挙がった者の全員を一人ずつ、黙って独りで秤量する。彼は遂に一人の若者の名を叫ぶ。それはいまだ口髭も有さぬ二十二才の長身の青年で、北方のナイエロ村〔日本統治下の内路、現ガステロ〕の出身者だった。この可哀相な男は乙女の如く頬を朱に染めて脇へ飛び出し、人々には背を向けて地面を見つめつつ抗議の意を表明する。だが、これは全く功を奏さなかった。祭主の見解に賛意を表した長老たちは、赤面するフレニシタンギ（*Furenisangi*——これが彼の名前である）に対して、前に出て己に課せられたお役目を遂行するようにと急き立てる。やや年長の同村者らが彼を無理矢理に向き直らせて、二、三のやさしい言葉を掛けて励ます最中に、家長の一人が、すでにピンと張られた弓と一本の矢を彼に渡した。

フレニシタンギは熊に近づくとき四歩ほど手前から、熊が左脇を向けて心臓を狙える位置に立つ度に照準合わせを始める。熊はあちこちへと突進して、静止することがなかったから、弓を構え、また下ろすという行為が何度も繰り返された。

老人たちは手を拱いておれなくなる。熊を初めてその親許へ送り返そうとする若くて経験不足のフレニシタンギに対して一人また一人と、何らかの助言を与える。白髪の長老が熊に肉薄して、矢が真直ぐ心臓に当たるべく狙う箇所を棹で指示した。

遂に好ましい瞬間が見出されて矢が放たれると、熊は突如として飛び跳ね、荒々しい声で吠えるや、片脚で矢柄を捕ら

まえて破壊した。まずはどす黒い血が、次いで鮮血が傷口から迸る。熊は急速に力を失ってゆく。片脚で地面を搔きむしって、怒りに満ちた足掻きを辛うじて二度ほど繰り返すや、四肢の動きが鈍重となり、目には形容しがたい悲哀を浮かべたが、やがて地面に崩れ落ちて呼吸が静かとなり、止まってゆく。深い悲しみと非難に満ちた両の眼は、立ち尽くす観衆へ向けて、その視線を左右に走らせた。動物はどうやら、かほどの苦行を己に強いたにもかかわらず、偏に快きことのみを与えたという子供じみた信仰で一杯の人たちへ、敵意の欠如を示すことで憐憫の情を喚起したい風情である。

フレニシタンギは熊の断末魔の苦しみを、すべての観衆とともに息を潜めて見守りつづけたが、ほっと溜息を吐いて、もはや不要となった弓を引き渡した。

弓射はつきに恵まれた。射手は己の大きいなる使命を、一矢を浴びせるだけで遂行する。熊が苦しむことはなかった。長老は御満悦である。ひよつとして不成功もありえたではないか。的外れの弓射がひたすら動物を傷つけるだけとか、熊は憎々しげにのたうちまわるも死にきれぬ、といったこともままある。殺害の経過が長引き、立腹した祭主が一頭の犬すら償いとして射手から徴収することもあるが、犬はその場で直ちに扼殺されて、腹を立てたままこの世から去りゆく熊の寛恕を求めて、後追いで派遣されるわけだ（付録資料No.25参照）。

強面の動物とて、臨終の数分間はアイヌらを嚇すことをやめた。熊を両の柱に繋いでいた革紐が解かれる。生命の微かな兆候を示す身体へ、祭主から指示された3名の老人が飛びかかる。熊が急激に身震いしたまさにそのとき、儀式の列席者の一人が全員的笑声の中に飛び出してくる。「怖いのかい？ 噛みつくぞ?!」——と、喧しい叫びが四方八方から上がる。

その老人は平然と、三人がかりで3〜4分押さえ付けている熊の体に改めて凭^{もた}れかかった。

ギリヤークの許では、熊が最後の息を吐くまさにその瞬間に、熊祭りを通して唯一の、熊に向けた口上が述べられる。樺太島のアイヌは恐らく、ここでは格別の意義も有さぬこの習慣を、隣人「のギリヤーク」から借用したのであろう。なぜなら、告別の辞はそれ以前に、しかもより莊嚴に、アイヌに特有の雄弁を駆使して陳べられていたからだ。

熊の死骸は後脚が伸ばされ、頸と下頬の下には「イナウ」が供えられて、数分後には、飾り立てられた柵の近くまで曳いて運ばれ、樅の小枝が敷き詰められた上に安置された。熊の腹に廻らされていた革紐が解かれ、祭り用の「晴れ」の腰帶や耳当てもまた同様である。

熊の鼻面は東方へ向けられた。頭部には既述の「イナウルウ」の束が載せられ、頸には吊り紐と、それに結ばれた携帯食料入りの荷物が懸けられ、荷物にはまた2本の矢も差してある。下半身では尾の近くに一刀が置かれて、矢入りの古式箴^{かん}が両脇に立て掛けられる。肛門は、ギリヤークの場合は塞がれているのに開いたままだ。

このように装飾された胴体の前方に置かれたのは、幾つかの漆塗り容器で運ばれてきた米飯、数種の食用植物の根、そして「酒」である。

熊の左右両側には莫蔭^{もえん}が延べられて、客人らが着座してゆく。二人一組の客人のそれぞれの前には、幕舎内でもそうだったように、一對の椀と髭篋^{ひげかぶ}「つまり捧酒篋」を載せた盆が届けられた（写真9）。

老齡者は全員が無言で礼儀正しく着座してゆくが、若い衆は勞力奉仕に参加するか、やや離れて立ち尽くしていた。

女たちは、熊殺しの現場には列席しない。彼女らは家路に就いたが、自分の子らを着替えさせて、晴れ着を左の端から壁に懸けてゆく作業がまだ終わらぬ者だけが居残っていた。

私には、上記舞台への女の参加をめぐつて禁忌は存在しないと説明された。しかしながら、彼女らは、己が好意を寄せる動物の射殺や苦悶を眺めることには、喜びを見出さないのでそうだ。

女主人らは、専ら植物を素材とする完成料理を持参し始める。ほとんどの料理は、野草の根にアザラシ油をかけたものからなる。白粘土を混ぜたような、より込み入った製法の料理については、すでに述べた通りである。

数日前に調理した料理を温めるべく、壁からやや離れた所で焚火が起こされた。ここでは、熊檻に使用した丸太が薪として焚かれる。

「酒」も、またここに配膳される森の食品で作った料理も、すべては熊の側から提供された御馳走と見做される。

ヌチャサケ エレ・カネ (Nuča sake ere-kane) ! (ロシア人へ「酒」^{サケ}を飲ませろ) ——と、長老の一人が叫び、私を傍

に呼び寄せて熊の前に座らせ、私に碗を授けながら告げる——イソ オロワ パケシ (Iso orowá pakeś) (熊から授かった御馳走じゃ)。

柵の傍らに坐して駄弁を弄するか、はたまた沈黙していた男らさえも、温めた食事を盛る各人用の木製深皿を配りだした。客人たちは食べないで、小集団の中に立つ子供らと呼び寄せて、食物を盛った深皿を彼らへ授ける。空になった食器は焚火の許へ戻される。そこでは女たちが別の料理を盛りつけて、再び大人たちの許へ運ばれるが、同じことはさらに繰

り返されていく。慌ただしい奔走が出来する。皆が駆け足で動き回り、新しい相手と遭遇しては哄笑する。子供らも至極御満悦だ。普段の生活では、甘い根茎類がこれほどふんだんに食卓を賑わすことなど滅多にないからだ。

年長者らの注意はこの元氣一杯の餓鬼どもに向けられる。子供たちはすでに満腹となつて、嬉しそうな歓声を上げながら粥の匙を互いに投げ合いだして、もし誰かが匙を捕らまえ損ねると、それは遊戲に参加する子らの誰かの顔か衣服に当たるのだつた（付録資料№37参照）。

数人の子供が脇へ出て、木製の平匙で少量の粥を掬うと、海や川や森や山の方角へ抛りながら、御馳走の一部を送つてくれたそれぞれの然るべき神の名前を叫びつづけた。

これには参加しない若者らが、丈の高い柱の近くに屯する。彼らは、熊から外した草製腰帶を二股の窪みに懸けるべく試投を繰り返していた。

低すぎだ！ 脇へ逸れたぞ！——と、試投で失敗する度に喚声が轟いた。

腰帶が遂に二股に懸かると、年の頃十四ゝ十六の未成年者たちが柱に登りだす。その窪みは地表から2・5ゝ3サージエン「5・3ゝ6・4」の高さにあつたから、表面が滑らかに削られた柱をよじ登るのは必ずしも容易でない。そこまで登ることに成功した器用な若者は、自分に対する称賛を騒々しく叫ぶ仲間を上から睥睨する。この少年はそこに坐したままで、帯にぶら下がる幾つかの袋をナイフですべて切り開くや、姥百合やその他の植物の根、そしてまた莓類もそこら取り出して、一部は自分が食べ、一部はまた下で騒ぎ回る子供らへも氣前よく抛りつづけた。

食事がようやく終わると、疲れはしても満腹の客人たちは一斉に立ち去った。3、4人の女主人や子供らは、ここに列席しなかった女らに振る舞うべく、食器や食べ残しを携えて家路についた。

地面に安置された熊の周りからは人影がなくなる。そこで慌ただしく動き回るのは祭主の一家と、彼の娘や姉妹らの婿殿のみ。後者の人たちは祭りでも甲斐甲斐しく働いて、岳父や妻の兄弟を助ける義務を負っているからだ。

女婿たちや、祭主とその一家の女子近親者の婿たちは、祭りの執行に要する出費も応分に負担する。この義務は、その他のすべての人々には課されていない。しかし、祭りの会場となった家と親族関係にある女たちは、僅かな量とはいえ根茎や莓類を持参する。

熊の剥皮は余所人が担当せねばならず、祭主の家族員らは専ら作業の正しさや正確さを見届けるだけである。

熊に着せられている物はすべて外して、脇へ鄭重に別置される。次いで熊は仰向けにひっくり返されて、柵に懸かかる煤けた古箱に納められた特別なナイフ一式を駆使して、剥皮作業が始まる。

一人の青年がうっかりして、己の腰帯に吊るした鞘からナイフを抜いて皮を切りだすや否や、祭主は捷に背く行為だと怒鳴りつけ、そのナイフは罰として彼から取り上げてしまった。肉を切るナイフのほかに、性器の周囲の皮を切り取るのに用いる特別なナイフもある。このナイフは、のちに頭皮の剥離でも使用された。

作業は、鎖骨から尻まで一直線に開腹することから始まる。だが、この線の中ほどにはささやかな幅の切残しがある。

それは指で引き裂かねばならず、「ヌマトウエ (numatue)」（ボタンを外す）と称される。それを首尾よくなしえた者は、熊

狩りで獵運に恵まれるだろう。数名の青年が胴部解体の助っ人に指名されて、互いに相手をからかいながら集まりだした。率先して申し出た若い男は「ボタン」に中指を引っ掛けると、右の掌で腹の上部を叩きながら「フー(hu)！ フフ(hu)！」という掛声とともに全力で引っ張るも、暫くは真直ぐに伸ばせぬほどの痛みが指に残るだけだった。ほかの者たちも試みるが、いずれも不首尾に終わった。これは、不成功者の全員が春には、彼らに明らかな好意を寄せるような熊とは遭遇しないことの予兆である。タライカからやって来た若いアイヌに白羽の矢が立って、力試しに挑戦し、北の人たちの心意気を見せてくれと言ひ募られる。子供らが、茹でた根茎を僅かに盛った碗を運んで来て、熊から1サージェン「Ⅱ2・13」の所に置くと、件のアイヌは「ボタン」を引っ張るや「ゴーゲ(goge)！」と叫んで碗の方へ飛び退いたものの、彼が手で掴んだものが、碗ではなくて土くれだったから爆笑が上がった。この遊びはほかの希望者たちによっても、同様な「成功」を博しつつ繰り返された。「ボタン」は余りにも広すぎると認められて、少々切り詰めることが決まる。誰かが遂にそれを外すことに成功したときは、彼が近い将来の熊狩りで獵運に恵まれるだろう、と皆が確信するのだった。

剥皮にはさほどの時間を要しなかった。頭部は毛皮とともに残されるも、胴体はすでに頸部から切り離されている。その後、肉から獣脂を削ぎ落とす作業に着手するが、掌ほどの幅に切り揃えられた獣脂は用意した短い桶に収められた。

熊には厚さ2・5ヴェルシヨーク「Ⅱ11・1^特」の脂肪層が見出されて、熊の飼育者らは格別に鼻高々であった。

次には四肢が切断され、胴体が二分されて、内臓の取り出しが始まる。

内臓脂肪が切り離されたのちに、食道・肝臓・胆嚢・肺臓・心臓も抜かれる。ここで発見された矢筈は回収された。

それはまだ別の機会に使用が可能だからだ。矢は長期の使用に耐えれば耐えるほど、より高い評価が付与される。胃や大・小腸は棒を用いて裏返し、洗滌して糞を除去するが、小臓器類はそのまま特別な桶に別置される。熊の給餌に使用した食器には内臓脂肪や腎臓や腹膜（「カピラカム」(Capirakam)）が収められる。全身は四分割された。

家長の一人が見守る中で行われた作業が終わると、幕舎内への肉の搬入が開始された。四肢・胴肉・獣脂は戸口から運び込まれるも、頭部を伴う毛皮や、肝臓・肺臓・心臓などといった小臓器は、奥壁に設けられた明かり窓を通して入れられる。熊の頭近くに供えてあつた食物を盛る幾つかの大皿も、この窓を介して搬入された。

正面舞台の傍の壁からも、そこに懸けてあつた刀・箆・呪具・衣装・南京玉は撤去され、すべては幕舎内に運ばれて、昨夜の配置通りに並べられた。

熊の毛皮は奥壁の近くに、しかも頭を住居の内側に向けて安置する。熊はいまだそこにおいて、大酒宴に参加せねばならぬからだ。

毛皮の上には糧食を収めた荷物のほかに刀や矢を収納した箆も安置される。鼻面の周囲には食物や「酒」入りの容器が置かれ、また熊の物品を納めた箱から取り出されたキセルや、煙草入れの小袋や、炭用の小石「灰皿」も並べられた。

祭主は真つ先に熊の頭部の直前に腰を下ろして、そこに立てられた食器から「酒」を啜り、また熊のキセルでも一服くゆらせた。これは、彼が熊から授かった御馳走である。この儀式を終えるや否や、祭主は若者や女らへ舞い始めるように命じて、自分は幕舎内にいる老人（付録資料 No. 23 参照）や若者らを熊の許へ呼び集めて、熊からの「パケシ」(pakesh)・「酒」・煙

草を授けだした（付録資料No.19 参照）。

炉端の莫蔭に腰を下ろした長老の一人は再び、炉の中央に立てた小「イナウ」が燃え尽きるまで祈りを唱えた。彼が火の女神へ呼び掛ける間支えつづけた椀に残る「パケシ」は、掟通りに一家の女主人がこれを受領した。

男の踊り手たちの輪が今度は戸口の左側に配置される。前の場所は、熊肉の調理役を託された人たちの占めることが予定されるからだ。

私は使者とともに何軒かの幕舎に立ち寄るが、至る所で、疲労困憊して安眠・安息を放棄しながらぬ人々を目撃する。何人かは二度、三度と叩き起して、客人らの集会が彼らの到着を待ち構えている、と伝えねばならなかった。

より弱い人たちの寝ぼけた青白い顔は、昨夜「の出来事」と興奮が彼らを極限まで困憊させたことを物語る。だが、長引く集合に腹を立てて、一刻も早く酒宴に着手するよう要求する人たちもいる。今や中庸の枠内に留まるよう強いるものではなく、飲酒への渴望は我慢の限界を超えようとしていた。

一時間も経たぬうちに、皆はずでに一人残らず御機嫌となる。女たちも、なかんずく踊り手までが飲酒を強要されて、子供らにも「酒」が与えられた。筆舌に尽くしがたい喚声は、踊り手らの喉音を完璧にかき消した。

熊の頭の脇には二人の中年のアイヌが静座している。彼らには頭皮を剥ぐ役が託されていたから、重要なお役目で粗相のないように、深酒は慎まねばならない。彼らには、作業終了後に埋め合わせが約束されていた。

女たちにはこの日、より大袈裟な儀式を交えて「酒」が振る舞われた。彼女らは戸口近くの壁際に二列に並んで座らさ

れて、女用の弱い「酒」が振る舞われる。女主人は朱塗りの小椀に次々と注いでゆく。椀を受領する際、彼女らは頭を下げるも、それ以外には、両手を動かすような仕草など一切行わなかった。

客人らの席替えは、前夜同様にしばしば繰り返された。祭主は、大きな諍いに至らぬよう注意深く見守らねばならぬ。酒宴では、血の気の多い人たちを故意に引き離して、もの静かで落ち着きのある人々を彼らの間に座らせる。しかし、それが必ずしも役立つとは限らない。喧嘩早い人たちは遠くの隣人の間から、己の挑戦的な言辞に応えてくれそうな相手を見出だして一触即発となる。喚き声が上がって、うなだれたまま隣人らの口論が終わるのを今や遅しと待ちつづけるおとなしい人たちを挟んで、二人の男が頭を振り、手を回しながら罵り合う様は滑稽である。アイヌは他人の喧嘩に介入することを好まない。己自身も容易に巻き込まれかねぬことをよく承知するからだ。

交わされる会話は、たった今終わったばかりの、熊の連れ出しから殺害に至るまでの話で持ちきりである。客人らは過去のことに思いを馳せつつ、以前の祭りとの比較談義に花を咲かせる。ある一隅では、彼がかくも容易に熊殺しをなしえたわけは、手中に「カムイ (kamui)」（超自然的な力）を有するからだと説く。別の一隅では、数世代の生活体験から幾つもの例を開陳しながら、熊を連れ出す日の穏やかな晴天を根拠に、幸運をめぐる予言の正しさを言い張る者もいた。

壁に懸けられた刀の数々にあまたの関心が寄せられた。今は祭りの最中ながら、刀への言及がすでに可能である。今回初めて祭りにお目見えした数本の新刀が称賛の的となる。それらは、所有者たちが最近に日本へ発注して入手したものだ。己が先祖伝来の財産を増やしている資産家であるという事実を全員に誇示することを狙って、わざわざここへ持参さ

れたものだ。

実の伯父や、その他の近い親族も佩刀して祭りに現れたにもかかわらず、別途に一刀を持参した余りにも厚顔な若者が、密やかな非難を浴びている。芳しくない手段で入手した財産をこのように見せびらかすのは、はしたない行為と見做されるからだ。却って、かつては豊かだった酋長の最後に生き残った唯一の子孫で、その年齢にもかかわらず名誉席に着かされた若いアイヌが、全く零落してしまったことに人々は驚きを隠さない。彼が、かつては重要だった己の氏族を代表して一刀も持参しなかったからだ。

南のアイヌの一人が説明するところによると、金持ちで尊敬もされているチベカ (Tibeka) は、テクンカの友人でもあるが、とるに足らぬ小者にもかかわらず己の部族で最重要人物を自任するウコホテとの鉢合わせをひたすら回避するべく、祭りには顔を見せなかったそうだ。ウコホテは夏日のある酒盛りの席で、チベカの所持する刀どもをめぐって侮蔑的言辞を弄し、剩え、それらを汚物ふき取り用の木端とも称したのに、自分の刀は褒めそやしたという。立腹したチベカは今に至るまで仲直りせず、己を侮辱したウコホテと出会いそうな所へは、かなり近い親族であるにもかかわらず近寄ろうとはしないのだそうだ。

昔のアイヌは熊祭りに際して、己の所持する刀剣類の開陳を公式行事としてきた。博識で刀剣にも造詣の深い人たちが、すべての刀を仔細に検分したあとで、誰が最大の金持ちであり、次席は誰であるかなど……を決定してきた。もし自信過剰な男がいると、懲らしめるべく、祭りには頗る優れた刀をあまた持参して自信家の鼻をへし折り、正当な根拠以上に自

慢し過ぎるとして、彼を叱責しだすのだ。それはしばしば、恥をかかされた者を益々依怙地にさせる。彼は新しい宝物を続々入手しながら、自分が熊祭りを主宰する機会を待ちつづけたあとで、己の刀をすべて開陳して、自分を嘲笑した人たちを打ち負かしたことを誇示するわけだ。

この話をしてくれた老人によると、かつての自分は熊狩りの最中に頭で音が鳴り、こめかみや額にも何かが走るといふ形で、その成功は常に予知できたと断言する。しかるにアイヌらは彼の言うことを信じてはくれず、彼の能力もやがて消失したそうだ。

北から来た重要な客人の一人が私の許へやって来て、仕上げたばかりの木彫籠（「酒」を飲むときに使用する捧酒籠）の上に私の名字を記してほしいと願ひ出た。彼はかつてオタサン村での熊祭りに初めて参加した折、東海岸の重鎮らとの愉快な出会いを記憶するべく、籠の表にさまざまな刻みを彫り込むよう個々の客人に依頼したこともあったそうだ。彼はこの籠を家に持ち帰って、自分が催すあらゆる集会や酒席では必ずや、ここでもに過ぎた楽しい日々を思い出すことであらう。

私の署名に愛想良く礼を述べるアイヌとの対話が終わらぬうちに激昂した声が轟いて、他の100名が発する騒音を制圧した。テクンカの甥っ子が飲み過ぎして、北の友人たちと喧嘩をおつ始めたのだ。祭主はやつとのことで、己にとって不愉快な騒ぎを鎮めることができた。

喧嘩は、はたまた取っ組み合いですら集会には何らの衝撃も与えない。それは活気や陽気や騒音、辛辣な言辞や安易な

興奮を惹起しがちな「サケプリ (saké puri)」(「酒」)の上の無礼講であるからだ。しかしながら、祭主は平静沈着で、誰に対しても同じように愛想よく振る舞うことが求められる。

テクンカは甥の暴発を償うべく、踊り手らにはもつと賑やかに舞うよう、そして伺候する青年らにはもつと早く客人たちに酒を注いで回るよう、大声ではっぱをかけた。

私たちの番が来ると、彼女らは無理強いを恐れて庭へ逃げ出した。幾人かはただ係わりを断つべく少し口に含んだのち、玄室へ出ては吐き出している。しかし、これを行うのは酒を全く好まず、ほとんど未知の若者らの前で酔態を見せることを恥とする娘たちだけだ。なにしろ若者らは娘たちを厳しく断罪して、芳しからぬ名声を島中に撒き散らすではないか。

北海道では今なお許されるにもかかわらず、女が「酒」の酌係りを務めぬことに、私は一驚させられた。サハリンでは「酒」が恒常的に不足するから粗末にはできず、彼女らからは酌係りの権利を剥奪せねばならぬそうだ。彼女らは誰にどれだけ注ぐことが可能か、また、どれほど注ぐべきかもよく弁えず、若干量は後々のため迎え酒用に隠しておくという分別もないとのこと。だが、完璧な禁忌は今日でも存在せず、若干の家族では女たちが「酒」を造り、酌係りも務めるが、その際は、北海道でそうするように、女たちは頭にねじり鉢巻きを締める。

娘やいまだ老齢に達しない女らがしきりに、二、三人連れで入室し、また外出してゆく。すべての男の頭が朦朧となっているきょう日には、人気の疎らな道を女が一人で出歩くのは危険である。半ば酩酊した客人の誰かが、通りがかりの女を待ち伏せて、子供らの存在などは、もし親族の子らであれば意に介することなく、藪の中に引きずり込むようなことが

容易に起こりうるからだ。多少とも美しい娘らの間では暴行から身を守るべく、親しい従兄弟らにある種の護衛のように同伴させる者もいる。彼らはそのような美女のあとを追って外出し、影の如く僅かな距離を置いて随行するわけだ。

それにもかかわらず、嫉妬深い夫や求愛者らは、己の細君や恋人の姿が多少とも長時間見えないと、必ずしも平静ではられない。

どんな祭りといえども、いわゆる「マタ・オルシペ」(matousipe) (女をめぐる事件) なしには終始しない。

この猜疑心や、配偶者の貞節違反に対する危惧がもとで醜聞が出来することも珍しくない。そのような醜聞の一つは、私も目撃することとなった。

賑やかに歓談する人々で充滿する幕舎へ、年の頃三十ほどの美女が入室し、目立たぬように炉端に腰を下ろした。踊り手の輪の中で、ほろ酔い機嫌で踊っていた彼女の夫オマヌ (Omanu) は、歌を中断して腹立たしげに細君を叱責する。彼女は一時間前にどこかへ姿を消して、彼が一人また一人と子供をやって捜させたものの、彼女を見付けることはできなかったからだ。細君の親族の一人で、北のアイヌであるワリラン (Warilan) [内路 (ナイロ) の当時酋長で、のちに部落総代となったワリランアイヌ [千徳 1929: 89-90)] は、彼女の窮状を見かねて、今は祭りの最中で、尊敬措く能わざる客人らもおられて、細君と落とし前をつけるべき時ではないから、内輪揉めはやめて、細君との対決もあとに回すよう夫君に助言した。

それほどまで身内の女をかばうのであれば、彼女を連れて帰ってもよいぞ!——と、夫は表情をさらに一層陰しくして叫んだ。

連れて帰ってやろうともさ——と、女の実の兄弟がそこへ割って入る——但し、彼女一人ではなく、彼女の子供たちもろともだ。

離縁に際して、子供らは父親の許に残されるのが通例とはいえ、もし同居生活の破綻に関して父親が全面的に有責である場合は、一人の子供も渡されない。

トゥル オマン、トゥル オマン (Tur oman, tur oman) ! (連れて行つちまえ) ——と、オマヌは怒鳴りつけた。連れて行くとも、だが、それで異存はないのだな? ——北のアイヌは再び腹立たしげに反問する。

クソ (Kuso) ! シルミッサニ ウタラ (sirumissani utara) ! (糞つたれ、乞食野郎) ——と、オマヌは幕舎中に轟く罵声を上げた。

余りにも無礼な侮辱的言辭が発せられて、北のアイヌらは興奮しだした。喚声上がる。痛い所をつかれたワリランは跳び上がって、今にも己の侮辱者と取っ組み合いを始めそうになるが、テクンカと今一人の老人が引き止め、ワリランを脇に座らせて、やさしく説得しつつ「酒」を振る舞った上で、自らの尊敬する愛すべき方に対して、己の家で無作法がなされたことを詫びた。

これと同時に、シレクア「シレクアイヌ」老人はオマヌの許へすつ飛んで行き、彼の頭髪を引っ掴むや、踊り手の輪から引きずり出した。次いで、ワリランと他の北のアイヌらが祭りに持参した刀どもをしかと見るよう命じて、このような刀がオマヌや彼の親族の許にあるかどうか、と問い質した。

もしお前がもつと優れた刀を所持するならば、見せてみよ。そうして初めて、かのような言辭は吐くべし！
大半の人々は不当に傷つけられた北のアイヌたちの方を支持した。

アシンケ・ヤン、アシンケ・ヤン (Asinke-jan, asinke-jan) ! (引き出せ、追い出せ) ——と、四方八方から叫び声がかかる。そして、意気盛んなオマヌは幕舎から外へ抛り出された。

そこでワリランは些か溜飲を下げて、列席者全員の前で次のように言明する。

わしはいまだ若く、暮らし向きも楽ではない。今は先祖から受け継いだ一刀と、黒貂の猟運に恵まれた年にわし自身が入手した刀の二刀を持参しておる。わしは冬に今一度ここへ戻ってくるが、もつと仰山の宝物を携えて来るから、オマヌにも己の資産を開陳させるがよい。もし奴の方が多かったならば、わしは敢えて、侮辱に対する償いは要求せぬつもりだ。

そう、その通りだ、よくぞ申した——客人らは口々に叫ぶ——奴らに己の資産を披露させよ。

オマヌはもはや戻らなかつたが、いずれも貧乏人だった彼の兄弟と伯父はうなだれて座りつづけ、この挑戦に黙って耳を傾けていた。

出来した事件はこれで終わらず、ワリランはのちに一匹の犬と劍鏢一個を償いとして受領したが、いかなる事案であれ、祭りの最中にこれを審理することは不可とされているから、皆は見たり聞いたりしたことを今は忘却して、酒宴の進行を乱さぬようにこれ努めたわけだ。

雰囲気が増してゆく。いかなる不用意な言葉遣いも、罵り合いや悶着をもたらしかねない。

「酒」の席ではごく普通の月々をめぐる論争ですら、南北のアイヌは見解を異にするのみならず、隣人同士でさえ合意を見ぬことも稀ではなく、こうした論争が白熱する罵倒合戦も誘発していく。

女たちは、たとえ酩酊しても平静に身を処すが、より激しい声を発しつつ夢中になって飛び跳ね、ただ普段よりも意欲的に己の舞を披露する。本日の彼女たちは、昨日のようなエネルギーは喪失した男たちを、無条件で打ち負かしている。

一人のアイヌが板床から跳び上がり、煙出し孔の方へ聞き耳を立てつつ飛び跳ねながら、「静かに、お静かに！」と叫んで全員の注意を喚起する。皆は度肝を抜かれ、歌も喚声も話し声も鎮ま^{ひようきんもの}ってゆく中で耳をそばだてた。すると、この剽軽者^{ひようきんもの}は大笑いしつつ元の席へと戻ってゆく。全員をかくもたやすく騙せたことに、彼は大満悦だった。

私は長老たちの脇に腰を下ろして、活気に溢れるも穏やかな、彼らの会話に耳を傾けた。ここでは商いが進行中だ。酩酊気味のアイヌらは、品物と犬との交換に情熱を傾ける。オタサンの長老の一人は、己の小さな孫息子を膝に載せて、自分の犬の長所をあれこれ捲くし立てる。彼はこの犬と、己がすっかり惚れこんだ、目下の酒席での己の隣人が持参した刀の鏢との交換を申し出ているのだ。とどのつまり、犬を実見する運びとなつて、商いの当事者二人もさることながら、商いに興味を抱くだけでなく、暫し外気に当たることを望んだ数名までが連れだつて見分に赴くことになる。私も彼らに同行した。

路上はいまだ明るいが、太陽は西に傾いている。半ば酩酊した少年らは金切声を上げながら、先を争つて、静かなしぶ

きを上げる海辺までひた走る。少女たちはほとんどが赤ん坊を背中に括りつけて、粉末状の砂を静かに掘り返しながら浜辺で遊んでいた……。

本日はもはや、祭りをめぐって新しいことは何も予定されていない。もてなしは早々に終えねばならない。すべての客人は昨日の眠られぬ一夜で疲労困憊しており、多くの人たちはもう飲めない。踊りも日没の直後に終了している。村全体にはほどなく、繋がれた犬どもの名状しがたい遠吠えが響き渡るが、倉から餌（樺太鱒の干した骨）を運んでくる御主人に対して、彼らは夢中になつてもがきつづけた。

私が外に出た頃はすでに黄昏だった。各家の近くには、口角沫を飛ばして議論を続ける一群の人々が屯している。それは、己の宿である幕舎に集結するわけだ。そこでは宿泊客のために夕食を調理中であるが、いまだ仕上がっていないかった。3、4軒の幕舎の周りでは、どこかで夕食用の酒を購入すべきか否かをめぐって交渉が続いている。若い男や未成年者が使者として、ロシアの「スピルト」か日本の酒を所蔵すると想定される家の主人たちの間を駆け廻って、その後値段を報告してゆく。北の人たちは、ごく最近にロシア人、なかならず日本人の影響で南に導入された——あらゆる酒宴で客人が酒を買い揃えるという——習慣に些か当惑していた。「オタサン」家長たちは、自分に可能なことはすべて完遂して、何人といえども己の吝嗇や、客人の望みを丸ごと叶える鷹揚さの欠如をあげつらうことはありえぬと見做したから、彼らが「客人による酒の購入」異を唱えぬことが判明すると、北の人々は酒の購入に参与せざるをえなかった。さもなくば、南のアイヌらの目には、彼らが貧しくて、遊樂する能力にも欠けると映りかねない。北のアイヌの伝統的名声を護持し、

日本人支配下で強制労働に服する機会のなかったアイヌの間では、資産が底をつくことはなかった事実を立証せねばならない。弱みを突かれた遠方諸村落の長老や村長らは酒ないし「スピルト」調達で自らが次の当番を引き受けて、もてなしを受けることに同意する。交渉やひそひそ話、せわしない奔走や口論は終わりを告げた。身を屈めて低い戸口から入室する人影が一組また一組と、幕舎の玄室の中へ消えてゆく。子供らは終日走り回って、散策で食欲をつけていたから、もつと前から食事を求めて、炉の明るい焔で照明された幕舎へと集合していた。

戸口が音を立てて開かれ、昂揚した急ぎ足の若い娘が、白樺製の小桶を両手で抱えて玄室から出てきた。家から少し離れると立ち止まり、あたりをぐるりと見渡すや、ほとんど駆け足で倉へと向かう。接骨木にわとこの茂みから飛び出した人影が直ちに姿を消すと、娘のしなやかな姿もそれを追って見えなくなった。

それぞれの幕舎からも女の影が次々と走り出して、予め申し合わせた場所で待ち構える恋人の許へと急ぐ。恋人たちは夜の密会の機会を逃すことよりも、冷えた夕食を覚悟するか、それなしで済ますことの方をむしろ選んだ。

別の場所では、別種の光景が展開される。隣接する幕舎の一つの脇では、罵り合う二人の男が睨み合って立ち尽くし、彼らを引き離れた10名ほどの男が周りを取り囲んでいる。喧嘩や、すでに行われた取っ組み合いの原因について私が訊ねる暇もあらばこそ、海の方からはどえらい喚声が届きだした。集結した人々の一部と連れだつて浜辺へ赴くと、全身びしょ濡れのまま家宅用建物の立ち並ぶ方へと引き摺られてゆく、口髭も蓄えぬ若いアイヌと出喰わした。

ロシアのヴォトカを飲み過ぎて、もう気が触れとるぞ。海へ身投げしよった。やつとこき救い上げたのだ――

と、前からいた人たちが説明してくれた。

われらが帰宅する途上で、自宅に同居する親族の一人へ届けとばかりに、倉の広場に立ち、憎々しげに喚いていたのは祭りの会場の家主、肩幅の広い主人である。この親族が夕刻の酒宴で家主の吝嗇をなじり、自分は漁期に米を丸一俵も稼いだのだから、ある程度までは酒を好きなように措置できる筈だと仄めかしたからだ。家主はすでにひどく酩酊してはいたが、倉の中へ駆け込むや、「俵を持って、とつとと失せろ」と自分の従兄弟へ向けて叫びながら、その米を今やぶちまけるのだった。

立派な押し出しながらも控えめな人たちが、酒気に煽られて心の平静や落着きを失ってゆき、些細なことがその自制心までも奪ってしまう。

五日目（熊肉の会食）

熊肉のもてなしが予定される翌日は、皆が朝寝坊を決め込んだ。客人たちは家々の周りや浜辺を散策する。すでに着替えを終えた子供らは、寸前まで水に浸かっていた波打ち際を駆け廻って、荒れだした海が投棄した貝を採集する。空の貝は砂浜に投げ捨てるが、身のある貝は、からげた長衣の裾の中に溜めてゆく。東海岸では滅多にお目にかかれぬような昆布の葉茎は細い棒に刺して、豊漁の最上の獲物よろしく軍旗のように仰々しく掲げながら、それぞれの家まで運んでゆく。

チャチャ ウタラ ニナハチ (Cača utara nina-xci) ! (老人たちが薪を割っている) ——と、海辺の木立まで私に随行した未成年の子らが叫んだ。

われらは実際に、勿体ぶって枯木を集め、切株や倒木を割って木端にする数名の老人を、そこに見出だした。そのような女や子供の仕事は、如何にも老人には不似合いであるが、戯れに行われるのだと説明された。アイヌの許では、とりわけあまたの客人がこのように長期にわたり逗留するときは、朝に酒が供されることがない。村長らの執拗なる懇請に応えて、テクンカは働かざる者に与えるべからずと冗談半分に告げた。そこで老人たちは数ある家事への己の参与を証すべく、斧と革紐を手に、いそいそと至近の林へ赴いたわけだ。老人らは互いに哄笑を交わしながら、自分の薪束を幕舎の戸口近くへ投げ出してゆく。「子供らの薪だぞ」、「女がお前のために割ったのじゃ!」という陽気な叫び声が聞こえてくる。しかるのちに老人たちは腰を下ろし、子供のように嬉々として僅かな量の酒を拝領するが、それは彼らを少し元気づけて、祭りの中核をなす饗宴の開始まで大過なく過ごすことを可能とした。

熊肉の調理はすでに前日から着手されていた。熊檻の丸太を割った薪で火も起こされた。本日は、煮上がった肉を小片に切り刻んで、奥壁の際に敷き詰めた樅の枝の上に並べてゆく。家の裏手では、熊檻からほど遠からぬ所に、同様な薪を用いて焚火が起こされ、そこでは心臓・肺臓・肝臓や、前脚の筋肉が炙られる。これらの臓器は火から下ろされると、焼かれた肉として、明かり窓を介して室内に戻された。

熊の胴体で女が食べてはならぬ肉は、また炙ることも煮ることも彼女らには許されない^五。

しかるに、彼女らに禁止されていない部位の調理には参加も可能であるが、こちらでも男手で用が足りるからと、男た

五 上記の臓器や部位のほかに、脳、すべての頸椎骨、頭の肉も禁忌の対象である（付録資料 No. 41 参照）。

ちだけで片付ける。女らには別の仕事がどっさりあるからだ。

後脚と胸肉の筋だけは生のまま残しておく。これらは倉に仕舞っておいて、さまざまな理由で今回の祭りには来られなかったテクンカの友人たちが訪れたときに消費されるであろう。茹でた尾は盆に載せて頭部の近くに安置してあつて、飾り立てた熊の毛皮の両脇に常坐する二人のアイヌが、毛皮と触れ合わせぬように目を光らせる。切り落とされた両耳と、口の周囲の細い毛皮帯は、すでに壁に懸けられていた。

下顎骨が外されるや否や、朝方から終日継続されてきた踊りにも、恐らくは憔悴した踊り手らに安堵の息を吐かせて、終止符が打たれた。これ以降は、幕舎内に依然として在席する熊も声が上げられなくなるそうだ。熊祭りに際してのみ使用され、すべての骨が、茹でる前にこれで切り離される小ぶりの斧で、熊はたまたま牡だったから頭蓋骨の左側が打ち壊された。もし牝熊であれば、孔は頭蓋骨の右側に穿たれた筈だ。熊の脳髓を南のアイヌは食しないものの、北のアイヌが必ずしも嫌いではないから、そのための特別な鉢が用意される。鉢には塩が撒かれ、「酒」も注がれた所へ、液状の脳髓が流し込まれる（付録資料No.19、No.20参照）。頭蓋骨から剥いだ頭皮は小ぶりの円環のような形状を呈する（付録資料No.10参照）。四肢もやはり爪をつけたまま根元から切断されるから、熊皮の値打ちが、今やヨーロッパ人にとっては大幅に損なわれてしまう。サハリンには五体の揃った熊皮を売却する土着民が一人もいないから、完形の熊皮を所望する者は、ロシア人猟師から購入するのが通例である（付録資料No.35参照）。

下顎骨から削り取られた肉が茹で上がると、テクンカは全員を昼食の席へ招集するように命じた。

若者たちは、それぞれに割り振られた幕舎へと散ってゆくが、入室すると、いきなりしゃがみ込む。彼らはまず簡単な挨拶を済ませると、「宴会にお願いいただきたく罷り越しました」と告げる。すべての若者や子供らは、一切の儀礼抜きで呼びかけた。

招集は遅々として捗らず、その列席なしでは客人の着座すら憚られるような数名の重要人物には、数度にわたって使者が立てられた。

幕舎内は立錐の余地もないほど立て込んでいるが、入室者は依然としてあとを絶たず、どこかに己の席を見出だして、目立たぬよう静かに腰を下ろしてゆく。全員が再びもの静かで厳かな面持ちを取り戻していた。口論は皆無で、会話すらもただ隣人同士の間だけで小声で交わされる。

テクンカが立ち上がり、すべての客人を見回しながら、名誉席につくべき人物の名を大声で告げてゆく。床は再び、勿体ぶって坐する黒髪の客人らで満杯となった。

もし誰かが遅れて到着すると、若い家長らが「チュイシネアイヌアグン (cu sine alnu agun)」(今一方が御到着です)と大声で報告し、テクンカはこれを受けて、到来者をどこに着座させるべきかを慎重に商量する。彼には、他の人々に少々詰めてもらって空いた場所を指定するか、祭主の熟知するもつと若い客人の誰かが占める席に着かせて、後者にはより遠くの左側の板床へ移ってもらうことになる。

客人らの座席指定が進捗する間、祭主一族の若者たちは、奥壁の際に沿って僅かに残された空間に、熊肉だけに使用さ

れる特別な皿（箱の蓋に酷似する、四周に平板を縫いつけた方形の盆）を並べてゆく。煙と獣脂でやや黒ずんだ皿の各々には、骨付き肉の一片、肋骨一本、細かく刻まれた柔らかい肉の数片、そして少々の獣脂も盛られる。これらはすべて、手槍なしの刀の形をした特製の串に刺し通してあった。

テクンカは全員を着座させると、自分は女のコーナーに設置された板床の端っ子に腰を下ろして、若者らにてきばきと指示を与えだした。彼はまず上等な骨付き肉片を数個選び、耄碌したとはいえ尊敬措く能わざる、祭りに欠席した近隣諸村の老人たちの許へ届けるよう命じる。次いで、最初の盆は「カントウ (kantu)」（骨）とともにテクンカ自身が受領した。

彼と並坐する長老らが左右の肘肉、別の長老たちは左右の肩肉をそれぞれ受領する。タライカの長老には、最も尊敬措く能わざる客人として左の肩甲骨が与えられた。次いで大腿骨、膝骨など、即ち、その周辺の肉が最も美味と見做される骨をそれぞれ盛りつけた盆も配布される。伺候者が祭主の指図であれこれの皿を配り終えるたびに、骨が見出され配布されたことを報じるべく「トウタノ (tutano)」ないし「オロワ (orowa)」(「次は、」ないし「それから?」)と声高に叫ぶ。テクンカは暫し黙考し、次々と客人を見回しながら采配を振りつづける。大型骨の配布が終わると、その他の客人には、すでにほとんど専ら骨なしの肉が手際よく配られる。人々が皿を受領するや、各自は感謝の印にそれを軽く持ち上げて、己の膝の脇に下ろしてゆく。テクンカが肉のさらなる配布に関与することをやめると、すでに皿を受領した者は一斉に挨拶（掌の摺り合わせと撫鬚）を交わして食べ始める。皆は腰帯からナイフを取り出して、熱心に骨から肉を削ぎだした。長老らは手が震えて、作業が中々捗らぬから、己の息子や近親の少年らと呼ばひ寄せる。彼らは人込みをかき分けつつやって来て、

傍らに腰を下ろすや、骨から肉を削ぎ落としながらも、美味しい料理は己の両頬にもせせと詰め込んでゆく。肉を食べ尽くせなかった者、例えば、より多くの量がわざと与えられたすべての村長などは、先の尖った棒にそれを刺したあとで席に包むか、女らに託して丸太の壁の隙間に差し込ませる。家に留まった家族への土産として持ち帰ることを意図した肉といえども、祭りの終了後でないと幕舎からの持ち出しは叶わぬからだ。

次には、炙って小片に刻まれた「禁忌」の肉を男の客人の全員へ少しずつ配布するべく、裸の骨を載せた盆が片付けられだした（付録資料 No. 21、No. 22 参照）。

下顎骨から肉を削ぎ落とす役目が託された2名は、骨を載せた盆を返す際に、幼い仔熊を森からもたらしたアイヌへの贈物として、それぞれが一本の矢も添える。後者は若い家長集団の一員として肉を配っていたが、すべての骨が特製蓆の上に集められ、決して床の上などに残されることのないように、今はひたすら目を光らせている。舌骨を受領した客人もやはり一本の矢を盆に添えねばならない。これら3名は儀礼の遂行時に家主から一矢を拝借したが、のちには必ず酒宴の主催者へ、己の矢を一本ずつ送り届けねばならない。

客人たちが熊肉を食べ終えて、配布された柔らかな削掛け——これらはのちに回収されて、骨とともに別置された——で、獣脂にまみれた指を拭いだしたところで、次に何をなすべきかをめぐって論争が起こる。何人かは女の取り分として残された肉で直ちに彼女らをもてなすよう要求したが、男たちに「チカリベ (čijikaribe)」（植物でこしらえた料理）も出して、その上で女らをもてなすべしと異見を開陳する者もあった。大半の人たちは一刻も早く解放されることを願っていた。

テクンカは「チカリベ」を出すように命じた。女主人らはせかせかと動きだし、漆塗碗にてきばきと、すでに熊殺しの当日に出された各種の粥を満杯に盛りつける。このような料理に食指の動かぬ男らはさまざまな年齢の少年たちの間に、姥百合の根などをががつ平らげてくれる頼り甲斐のある助っ人を見出した。同じ少年らによる満杯碗の客人らへ向けた運搬と、空碗の女主人らの許への返却が活発に展開されて、女たちはその都度、空の碗へ新たな珍味を盛りつづけた。

遂に女の番が回って来た。年長の女主人だが祭主の細君ではなくて、彼の四十才の姪っ子が女の客人たちを呼び寄せ、互いに対面する二列に並ばせて、幕舎の前壁に沿って目一杯に着座させる。座席の指定に当たっては、各自の社会的地位も考慮される。最初に呼ばれた女たちは謙譲の美德を発揮して中々腰を上げず、仲間の間で目立つことを嫌うから、度重なる懇請を強いる結果となった。

女のために残された特別な部位は尾、(三分割された)下腿骨、^{ブレトブレチエ}前肢前膊部の無名骨である(付録資料№41参照)。^{ヒョウツツ}橈骨や腓骨、また寛骨下部の2骨は、より高貴な女らに配られる。尾は主として熊の面倒を見た女が受領するのが筋であるが、彼女は十分な熟年者ではないから、盆を持ち上げ、そして地面の上に下ろした老女、つまり彼女の伯母に与えられた。長老らは、慣習とされた次第を一切の省略なしに遂行するように求めたので、老女は周囲の爆笑に当惑しながらも、右手の人差指で左手の掌を軽くこすり、右手を上へ伸ばしたあと、同じ人差指を長衣の上から肘まで、さらに上唇部の左端から右端まで滑らせつつ頤まで下ろして止めた。これは女が感謝を表現する所作であって、北海道のアイヌの間ではごく取るに足らぬ場面においても保持されているが、サハリンではすでに全く行われなくなっていた。

女たちへのもてなしは間もなく終わる。彼女らは立ちあがり、食べ切れなかった粥を収めた椀を抱えて家路についた。傾く太陽の光がもはや煙出し孔を通して差し込まなくなつて、幕舎内はすでに暗くなりだした。テクンカは熊の頭部と骨を森へ搬出する作業に慌ただしく取りかかる。

残る客人はすでに僅かだ。彼らはそれぞれに、長時間坐し続けた手足を伸ばしてゆく。忙しく立ち回るのは若者らだけで、熊の骨を本来の位置に並べ直し、熊肉が置かれた樅の枝を回収し、肉を茹でた鍋と、肉を運んだ盆も清掃してゆく。

この作業に従事する若者らの一部は庭へ出て、家の裏手で、窓を通して手渡される品々を受領してゆく。真つ先に渡されたのは熊の頭蓋骨で、下顎骨と合わせて、細くて丈の高いY字形の「イナウ」の上に安置された。これは牡熊の頭部だったから、一本の棒が左の眼窩に刺し込まれた。牝熊の際は右の眼窩に通される（付録資料No.18参照）。頭骨には植物の球根が詰められ、鼻にも一本の小ぶりの「イナウ」が差し込まれた。

小ぶりの円形容器に収めた「酒」とともに、二組の椀と篋もやはり引き渡される。大皿に盛つて熊皮の脇に常置されていた米飯、姥百合の根、蝦夷延胡索（エゾエンゴサク）の球根も一括して搬出される。腰帯からは履物用の草が一束と少量の煙草が引き抜かれる。革紐一本と一挺の斧も二人の若者によって手渡された。

その間、老若の男子や婦女子らが続々と幕舎の奥壁を目指して参集する。家路につかんとする熊に別れの挨拶を告げるべく全員が集合した。涙も告別の辞ももはやなく、皆は慎ましく静粛に振る舞う。祭主の一族が準備万端整っていることを確認するや、行列は、森へ通じる小径を目指してゆつくりと動き出した。先陣は「イナウ」に安置された頭部を掲げる

男が務め（付録資料 No. 18 参照）、その後ろに、削掛けにくるまれた両眼、両耳、鼻、2個の椎骨、下唇部、四肢骨と食道が、さらには蓆に納めた骨類、血まみれの樅の枝々と削掛けが続いて、行列の殿を務めたのは大皿や「酒」、斧や革紐を運ぶ人々である。その後塵を押しつつ、私も参列が許されて、私の写真機の運搬を手伝う少年たちの一群も私に付き添った。行列は男だけで編成される。女たちは、屋外での「イナウ」建立にかかわる儀礼行為には参加する権利を有さぬからだ。われらは、幾世代にもわたって使用されたことの明らかな、よく踏み固められた小径を行進した。小高い落葉樹の生い茂る林を進むにつれて、深い陰翳と涼気が募ってくる。乾季にもかかわらずかなりな湿気を帯びて、一歩ごとに揺れ動く地面の小さな草を抜けると、僅かな勾配の登り道を山麓へと近づいてゆく。落葉樹林が終わり、針葉樹林が始まる。早くも遠方には樹木の枝々を透かして、緑と灰色の森を背景に白々と輝く削掛けが見えてきた。

その後、地面に打ち込まれた幾本もの丈の高い「イナウ」の前に差しかかると、皆は直ちに立ち止まる。それらが数十年前に時期を異にして立てられたことは一目瞭然である。すでに朽ちて地上に横たわる「イナウ」もあり、また背後に倒れた樅松の太木の、上下に突き出した枝々で形成される天然の柵に凭れ掛かるものもある。いまだ老化する暇のなかった幾本かの「イナウ」は真直ぐに並立する。これら供犠物件の年齢差は、優美に渦巻いて垂れ下がる削掛けの束の——濃褐色から明色か、ほとんど白色に至るまでの——色調から読み取ることが可能である（写真10）。

会場に到着した人々は直ちに、持参した熊の諸器官を、他の「イナウ」とともに地面に打ち込まれた細い「イナウ」に結縛する作業に着手した。骨や樅の枝は、やや離れた所にある集積場へ投棄される。そこにはこんもりとした堆積があっ

て、同種物件が以前から投じられてきたことは明らかである。

皆は腰を下ろして「酒」を飲み、掲げられた頭蓋骨の前にも数滴たらさねばならなかった。

少年たちは自らが持参したものをすべて平らげると、米飯と百合根を匙で掬っては「エチノミヤン (ecinómi jan)」(犠牲としてお収めください) と叫んで、四方八方へ撒いてゆく。酒宴のこの最終場面に——今もその庇護下にある弱々しい者どもを間違ひなく見守っている筈の——森や川や山の神々も参加されるようにと……。

われらの仲間が挙つて、来た道を辿りつつ家路につく頃には、鬱蒼とした森の密林に夜の帳がすっかり降りていた。

村は完璧な静寂に包まれている。熊がその夜は旅の途上にあるから、なかならず酒宴が催された幕舎では、コトリと音を立てることも許されぬとされていた。同様な静肅の励行は、熊が遂に己の生家に到達する筈の翌日にも要求される。熊はこの日に、人間たちとの共同生活を通してどのようにもてなされたか、また如何に盛大に見送られたかを母や父に告げ、「メト^ホカムイ (Metox kamui)」ないしは「メトトウシ^ベ (Metouspe)」(高峻な山々の神である己の主人)の許へ、持ち帰った贈物(祭りで懸けられるか、安置された品々のすべての似姿)を届けるからだ。この強力で恐ろしい神は人間の姿をしてもいるから、彼に送られた料理も、刀や絹の衣装も、なかならずこの機会にかくもふんだんに製作された「イナウ」もこよなく愛するわけだ。

贈物が果たしてどのように受け取られるかは依然として不分明だから、内心で不安も抱かず、また格別な表敬行為もなしに、その時を漫然と過^{ゴッラフイ}すことは不遜に過ぎるであろう。このこと一つだけでも、自らが配下に抱える無数の「内股歩き」

「熊の異名」の四足獣を、もはや人間どもの許へは派遣せぬと決められる神を、立腹させるにはすでに十分であるからだ。

若干の客人はすでに帰途についている。至近のセラロコ村からやって来た客人らは、自分たちの祭りに対処するべく全員が立ち去った。

私は、祭りの最終幕に参加したすべての人たちとともに幕舎に入った。われらに同行した一人の若者は、熊の骨を残置した森から運んできた一束の薪を肩から炉端に投げ下ろす。女主人はこれらの枯れ枝を直ちに、明るい焔で家宅の屋内全域を照明する火の中へ投じだした。

余り多くなかった客人らは炉端に密集し、半円状に坐して沈黙する。何人かの膝の上では薄汚れた丸顔の赤ん坊がまどろむ。皆の顔には疲労と精神集中が認められる。沈黙は、並坐する二人の鬚面男が交わす小声の会話で……暫し中断されることもある。遠方の村々からやって来た客人らは、間もなく初雪が降るのだろうか、黒貂狩りにはまだ間に合うかどうか、と思案投げ首である。

女主人らは、神々へ供犠する日に向けて特別に調理される行者大蒜（アイヌ語に「アユヌ」）（*Allium victorale* [「アイヌ葱」とも称される]）の煮物を配りだした。これに先立つ日々には、食事に行者大蒜を加えることが禁ぜられていたからだ。

肉片を付けて隙間に突き刺された棒の数は目立って少なくなった。近隣の幕舎から（自家用薬の）拝領に駆けつけた少年たちが、壁や横木の間に刺しこまれた獣脂片も持ち去るからだ（付録資料No.17参照）。肉の搬出問題は今や解決されていた。熊は不在だから、その体のすべての部分を幕舎内に留める必要はないと思案されるわけだ。炉の上の横木には熊の胆嚢（い

わゆる「熊の胆」を収めた小袋が吊り下げてあつて、乾燥後には数ルーブリの対価で日本人への売却が想定されていた（日本の医術では胆嚢が生薬として流通している）。

壁にはいまだ刀や箆が幾つも懸けられているものの、その数はめっきり少なくなった。客人たちが次々に立ち去っていく際は、己の宝物も回収してゆくからだ。

祭主の刀どもは、冬になって、残された熊肉の断片を食べ終える日まで壁面を飾りつつける。

「イソ チケ (iso cike)」「熊の荷」と称される小荷物は、奥壁の傍らの棒杭に架けられている。そこに納まる根茎類は、女の食すべきものとはされていない（付録資料 No.13 参照）。

夕食後、私は鉄製楽器「ムックン (mukun)」(ウクライナ楽器「ドルウムリ」の一種 [北海道アイヌの「ムックリ」に対応]) の静かな音色^{ねいろ}を、己の滞在中では初めて耳にした。上半身を起こして横臥する若い娘が、楽器を歯で噛んで支えつつ細長い舌片を右手の親指で弾いて、か細いながらもリズムカルな金属音を響かせる。私になされた説明によると、祭りの最中の演奏も禁じられてはいないが、恒常的喧騒を顧慮するならば、静かなアイヌ楽器の演奏は演奏者自身もさることながら、聴衆にも、何らの喜びも与えぬからとのことだった。

六日目

翌日は静けさが際立っていた。村全体を包む静寂は、騒がしくて慌ただしい一連の日々のあとでは一入格別である。路上も大人や子供たちでこった返していない。男や女や子供らからなる大集団は、朝のうちにセラロコへ向けて出発してい

た。テクンカは女婿たちとともに幕舎内を片付けるが、5名ほどは熊の毛皮にかかり切りである。

毛皮は、椴松や樅の長棹3本と、横にわたす短い4本の棹で構成される長方形の木枠に張られた。毛皮の四隅は、貫通孔に通された草の茎製の細引で枠の棹に結縛される。両耳と肛門の孔には削掛け付きの棒を差し込む。拡げて張られた毛皮はその後、家の裏手で長い竿に吊り下げられ、干し上がるまでそこに吊るしておかねばならない。しかるのちに初めて、毛皮はすでに村からの搬出が可能になる（付録資料No.10、No.14、No.15参照）。幕舎内では予めすべての古灰や、土と混ざって硬化した燃えかすを炉から掻き出しておいて、新しい砂を搬入する、つまり、炉を更新しておかねばならない。

それまでは、控えめな生活が家屋内では営まれる必要がある。炉や「イナウ」をめぐる慣習の些細な違反と雖も、神々の怒りを買って、さまざまな不幸……も招きかねないからだ。

私は、関心を共有する子供たちとともに、毛皮を拡げて張る過程や、漆塗りの食器類を「行器（シントゴ）」に仕舞う次第を注意深く見守りつづけた。腕も熊肉用の盆も決して水で洗ってはならず、ただ柔らかな木の削掛けで拭き取るだけであつた。

熊の耳当て、「イナウ・ルウ」、キセル、煙草入れ用小袋、石の灰皿、熊殺しの後に小ぶりの木片で必ずこしらえる熊の小像「イノカ（Inoka）」など、毛皮の周囲にあつたものはすべて、いずれも長方形で煤だらけの、幾つかの小ぶりの箱に納められた。箱の一つは、——家の裏手に立てられ、その近辺には枠に張った毛皮も干してある——「イナウ」に架けられた。いまだ幕舎内に残されている革紐は倉へ運ばれて、やがて何の変哲もない紐となるわけだ。但し、新しい花萼と、その

上に懸けられた祭主の幾つかの刀と箆だけは壁面で威容を誇示しつづけた。

落合へ

正午に、いまだオタサンに残るアイヌたちと別れを告げた私は、いざ家へ、そして猟へと気負い立つウサイロとともに家路についた。

われらは旅の途上で二つの小さなアイヌ集落に立ち寄ることになった。われらを迎え入れた二人の長老や数名の女は、祭りの詳細を根掘り葉掘り詮索したが、彼らが何よりも知りたがったのは、誰が熊を掴まえたか、誰が殺したか、告別の辞を述べたのは誰かだった。

われらが道中で茶をもてなされた幕舎の主人である超高齢老人には、長時間にわたる熊との騒動にもかかわらず一人の怪我人も出さなかったことへの素直な驚きを伝えた。同老人は、熊が噛みついたり、噛み殺したり、人肉を食するのは、ただ虐められたり、罵詈雑言を浴びせられたときだけだと語った（付録資料 No. 16、No. 28、No. 29、No. 35 参照）。

私はこれ以降も、遺憾ながら同じくオタサンとそれに隣接するタコエ、セラロコ両村での熊祭りに、5 回ほど列席する機会があった。儀式次第のすべての儀礼は全く同一だった。以下では、それらの特徴を列挙する。

セラロコ村だけは殺害対象となる熊が2 頭いた。そのような場合、祭りは同時に挙行されるのが通例である。踊りともてなしは一つの幕舎から次の幕舎へと、順を追って実施される。とはいえ熊の連れ出しは、より年長の家長の家からまず始められる。私が列席した年は、祭りが時間をずらせて行われた。熊が最初に連れ出されて殺されたのは、余り裕福でな

い家長の小ぶりの幕舎からだった。その際、後者では老齡の父親が一年前に死亡したものの、その存命中に仔熊が檻へ移されたという状況が斟酌されたわけである。

一人のアイヌの許で直ちに2頭の熊が連れ出されたときは、まず牡熊が殺されて、牡熊はそのあとを追った。同一の次第が、肉の調理やその会食でも、また頭部や骨格の森への搬出に際しても遵守された。

あるとき、2頭の熊をあの世へ送り出す際に一匹の犬が扼殺されたことがある。犬の扼殺は熊たちの殺害後に行われた。しかし、その後の優先権は犬の方に移されて、まずは犬から剥皮され、その肉も最初に食された。

私は、初老の男たちがいわゆる「ヨリタク (yoritaku)」（告別の辞）を生涯で初めて述べる場面に、自ら立ち会う機会が二度ほどあった。彼らはそのとき全集会を代表する弁士として、この大役を常ならぬ莊嚴さをもって、即ち、肩に刀を懸けて遂行した。一件では、熊に別れを告げる主人が己の告辞を陳べる間、その父親が水死したばかりの、いまだ幼い己が孫息子を背負いつづけた。

民族学者たちが幾久しく関心を抱き、さまざまに解説してきた熊祭りの解釈と取り組む役目は、その筋の権威者へ譲るとして、私は敢えて、この問題をめぐる自らの仮説を略述しておきたい^六。

私は、この樺太島のアイヌの実践する祭祀において、全く別個の4要素を識別する。

^六 以下で開陳される熊祭りの起源と意味に関する所見は、著者自らが全面的に責任を負うべきものである——原編者注。

まず初めに、この酒宴は原始共産制の残滓であつて、野生人猟師の食卓には滅多に載らぬ美味な動物肉の共同消費がその眼目である。アイヌの間では今なお、一軒の家で一族によつて調理されるとはいへ、通常のものでなくて趣向を凝らした料理は村人の全員に分配される習慣が保持されている。幕舎に客を招く動機としては、各種の根茎類で粥を仕上げるだけで十分であり、この御馳走は不在者の許へも、些かなりとも深皿に入れて送り届けられる（付録資料№13参照）。アザラシやトナカイ、またその他の動物を仕留めた猟師は、その肉を己の隣人たちのみならず、やや遠方の親族とも分かち合うことを己の義務と心得ている。森で仕留められた熊も、その時点で招集しうる最大限の客人とともに、やはり消費される。幼少時に森で捕らまえた熊や狐を、その毛皮が人間にとつて少なからぬ価値を有する成獣にまで育てたような場合も、例外ではありえない。

この共同消費の原則がどれほど強力であるかは、儀礼が全体として食物を早急に平らげ、祭りの間にすべての骨を元通りに整えることを求めるとはいへ、祭りに欠席した友人たちのために熊肉の一部が残されることから窺えるであろう。祭りの記述からは遊楽という第2要素も強く窺われる。アイヌは遊楽への欲求が度外れて強いような、低位の発展段階にあるからだ。

熊祭りは一つの村や氏族にとつてもさることながら、ほとんど部族を挙げての壮大な遊楽である。人々は遠路も厭わず、老人らは友人と会つて語らうべく、若者らは暫時陽気に騒いで踊り、己の美と技量を披露し、人々を品定めせんがため、そして子供らは祭りの賑わいを満喫し、おいしいものをたらふく食べるために参集する。皆は新調服か一張羅を身に着けて、己の美的欲求を充足させるのだ。まさにそのためにこそ刀や簞も持参されて、彼らにとつて高価な品々を誇示する小

展示も催されるわけである。

熊へ向けた口上それ自体にも二つの側面が垣間見える。一つは多少とも真摯な側面——これについては後述する——、今一つは遊樂の側面である。若者らが熊の頭へ次々と挑んでゆくとき、彼らは熊と遊んでいるわけで、同時にまた敏捷さを鍛え、また勇敢さも養うわけだ。老人が「酒」を飲むときに告げる口上でも、熊とともに遊樂（「シノ^ホ（sinox）」）に興じることが直言されている。

熊祭りには気晴らしや遊びの要素以外に、死者へ向けての追悼や追善も関与するが、これについては既述の通りである。熊を連れ出す前日と当日には、満杯であるべき愉悅の時間が乱されぬよう、客人を挙げての集団的哀悼の機会は払暁前に、つまり、祭りの導入部がすでに終わりつつあるものの次なる核心部はいまだ到来せぬ、まさに端境期に設定されるわけだ。この死者追善の慣習は十中八九まで全く自然な成行きとして発生したものであろう。祭りのためにやってくる客人の多くは、このような寄合いの時にしか互いに顔を合わせない。彼らはまさにこの場において、ともに快適な時を過ごすことを期待した若干名の家族員が、祭主一族ではすでに存命でないことを知るであろう。死者の親族たちもこの特筆すべき日には、失われた近親者の不在をより切実に痛感する。共同の哀悼は肉親らの悲しみを和らげるとともに、故人への表敬でもある。したがって、身近な人、なかならず尊敬措く能わざる人の死後には仔熊を獲得して育て上げたのちに、それを「檻から連れ出す日には親族や友人らが大集結して、あの世へ旅立った親しき人へ盛大な哀歌を捧げる機会を設けるべし、という信念が次第に成立したわけである。

ペウレライアイヌシッヒアナミータンベピリカ(Peure raj ainu sirhi anami - tambe pika) 死者の代わりに仔熊を檻に入れた、これは良いことだ——と、打ちとけた話しぶりの一人の初老のアイヌが私に説明してくれた(付録資料 No. 1、No. 2 参照)。

上で記載した祭りのあと、同村で次の熊祭祀が挙行されたのは一九〇四年、即ち、前者の一年後^{マニ}「二年後」の筈であるであつた。さらに大勢の客人が招待されて、直ちに2頭の熊が殺された。後日にアイヌらが私に語ったところによると、水死した故人らの親族たちは、不幸が彼らを襲つて以来その心に忍び込んでいた悲しみを吹っ切ることができたそうだ。祭りのすべてが死者たちへの追悼に充てられているわけではないことは、余りにも長く涙を流しつづけた老女らが、止めどない慟哭を制止され、はたまた彼女らに向けて声も荒げられた事実が、これを如実に物語る。涙は、大勢の人々がまさにそのために集合した遊樂に不相応だろうし、またそこでは恐らく最も優勢である宗教的要素にも、負けず劣らず似つかわしくなろう。

アイヌの間で熊が神と見做されぬことに議論の余地は全くありえぬが、熊はまた神へ捧げられる犠牲でもない。アイヌの見解によると、熊が服属する神は「メトホカムイ(Metokamu)」ないし「メトトウシ・ペ(Metous-pe)」(高峻な山々の神)である(付録資料 No. 30 参照)。この神は当該種の四足獣を指揮・使喚し、人間どもを安堵させよとの特命を授けて、山々の頂から河谷へと派遣する(付録資料 No. 36 参照)。人間たちは養育した仔熊を殺すとはいえ、実際は何らの危害も加えていない。アイヌはあらゆる動物が死後には再生することを堅く信じて疑わぬから、その頭部だけは決して放置してはならない。仔

熊の方は人間によって村で育てられたあと己の肉親たちの許へ赴くが、それが四周にひたすら喜びのみをもたらすことは言うまでもない。したがって、謝罪の言辞も、また寛恕を求める口上も一切不要である。幾人かの旅行者は熊の殺害に先立って語られる口上をまさにそのように「謝罪の言辞」と説明してきた。先に引用した言説は、私が2年ほど親しく付き合った聡明なアイヌの語り口を筆録したのだが、そこに謝罪の仄めかしすらないことは一目瞭然である。見出されるのはただ、自らの身代わりとして「己に類する存在」の派遣を熊に促すべく、人間界における彼の逗留をより快適なものにしようとする熱意だけである。

熊は己が家、自分の主人の許へ出立するとき、後者に対する人間からの贈物（祭りの日に柵の傍らで威容を誇ったすべての品々の「魂」）を携えてゆく。山々の神は人の姿をしていて、人間の好むものはすべからず愛好し、人間の品々を受け取るためにこそ、それらの見返りとして、折に触れては熊を送り出すわけだ。山々の神を喜ばせ、慈悲心を起こさせることが、後日にこの神から自分に示される好意的な配慮を期待する憐れな猟師にとっては重要である。その下僕たる熊は使者として、人間が神々の許へ遣わす通常の仲介者（犬）に取って代わる。もし猟師が長いこと熊と遭遇せず、幼い仔熊を捕らまえることにも成功せぬならば、アイヌたちは犬を扼殺して、熊の頭部と同じ場所に立てられた「イナウ」にその頭部を掲げる。犬の魂は山々の神の前に出頭して、その怒りを和らげ、人間に対する好意を再び喚起するべくこれ努めるわけだ。

しかしながら、熊は元来が人間に好意を抱き、その運命に影響を及ぼしうる存在でもある。新しい土地に住みついた場合は仔熊を捕らまえて、無病息災をもたらすべくこれを育て上げる。かつてのアイヌは別の動物（狐）も手元に留めて飼

育したとはいえ、狐が将来の明るい希望と結び付くことはなかった。却って、狐はいつも人間に害をなす機会を虎視眈々と狙っている。熊が悪事をなすのは、ただ何らかの理由で立腹したときだけに限られる。人間を庇護しようとする熊の願望は、人間を己の親族と見做す信条に由来するものだ。サハリンに見出されるアイヌの氏族の幾つかは熊を己の守護霊と見做しているが、この守護霊は個々の氏族の起源をめぐるアイヌの伝承中で、かなり明瞭に描出された各種トーテムの一人員として登場してくる。

熊へ向けて述べられた口上では、彼は孫息子と呼ばれる。私が採録した詩篇の一つでは、このアイヌと熊の親族関係の端緒が叙述されている。アイヌの始祖は半神半人であつて、この種の歌謡ではいつも「ヤイレスポ (Jairesupo)」(己が自らを育て上げた者) と称されるが、己の息子を牝熊に孕ませた張本人であつた。親熊らはその子連れて鬱蒼と茂る森を抜け、山々の斜面を下り、「ヤイレスポ」が幼子に見惚れて己の許に引き取るべく、峡谷地帯にある彼の家の傍らに残置した。このとき以来、仔熊を育て上げてのち、人間や山々の神のいずれとも結ばれた親密な絆や、子供のように無邪気な原始人である毛深いアイヌたちの単純明快ながらも神秘に満ちた生活へ「内股歩き」の四足獣が及ぼした影響に、それぞれ見合うだけの荘厳さの中で、その熊を殺すという習慣も始まったのだそうだ。

付録資料

最後に、熊崇拜をめぐってアイヌたちから聴取した若干の追加情報を、以下に掲げておく。

- (1) もし頗る裕福な男の誰かが死ぬと、よしそれが夏であれ、また冬場であろうとも熊祭りを催して、死者の埋葬以前に熊を殺害する。
- (2) 熊祭りの最中は熊を殺す前の三日間、死者の葬儀のときと同様に、調理では（アザラシ油などの）獣脂を一切使用してはならない。さもないと熊には脂肪がなくなつて、その脂身は水のように液化化するからだ。主人は参集した客人たちの前で面目を失うことになる……（ルレ「魯禮」村にてカンタロ「内藤勘太郎」談）。
- (3) 告別の辞では、幼い仔熊を捕えた場所に概ねかわる川や山の名称が言及される。それぞれの村には自前の特別な獵場があるので、告知者は、たとえ余所人であろうともこれらの地名は承知しておかねばならない（本稿564-568頁に収録された「告別の辞」では、告知者がそれらの固有名詞に言及していない）。
- (4) 熊の給餌に使用される容器（イソ オイベ (iso oihe)）の上では、何も刻んではならない。
- (5) 仔熊の捕捉者自身が、それを黒貂や狐などの毛皮と交換することは禁物である。この禁を犯した者はもはや、成獣であれ仔獣であれ、一切の熊を見付けられぬであろう。捕らまえた仔熊は親族の老人の誰かへ渡す必要がある。獵師はその代わりに革紐と犬を受領するが、あまたな子孫をもたらしうる雌犬であれば申し分なしである。仔熊の受領者に雌犬がない場合は老犬を与えねばならない。後者は可及的速やかに山々の神の許へ送らるべきである。

ナイエロ「内路」村のアイヌであるムシノ^ホテ (Musinoxte) は、そのような老犬を2年も使用したため熊が不満を抱き「ラムパセ (ramu pase)」、逐語的には「魂が重くなる」、ムシノ^ホテは熊の足跡を一所懸命に追ったにもかかわらず仕留められなかった(ナイエロ村にてヌクンボ/Nukunbo 翁談)。

- (6) アイ村のシレクア「シレクアイヌ」がウサイロの熊のために2・3ブード「32・8・49・1^{45分}」の乾製魚の束を送り届けた。彼らは近い親族ではなかった。私には「イソイヌヌカレオヤコタンオロワイソエペ (iso inunukare oia koŋan orowá isô epe)」(熊を憐れんで、余所の村がそれを養う)と説明された。この束は倉の中で他の食糧と混ざらぬように別置されて、専ら熊の飼料として用いられた。シレクアは恐らく若い仔熊を獲得して己の村で飼育するべく、熊とその「山の主」の機嫌をとりたかったのであろう。彼は大金持ちと見做されてはいたものの、自分の村では久しく熊祭りが挙行されていなかった。

- (7) 熊が病気になる、「イソセニョテ (isô senjote)」(熊を治療する)と称される「イナウ」を熊檻の傍らに立てる。私が一九〇二年にマウコ (Mauko) ハで実見したのは、檻の裏手にある2本の樅の木の脇に立てられた2本の同様な白樺製の「イナウ」である。これら「イナウ」の背丈は地上2アルシン4ヴェルショーク「160^寸」。

ほぼ同様の「イナウ」は他の村々でも見たが、通常は檻の裏手に見出された。

- (8) セラロコで(一九〇四年に)出来したことだが、それまで病氣と全く無縁だった一頭の仔熊が発病し、突如として

八 本文では「マウカ」と表記されるが同一地名。日本統治下の眞岡、現ホルムスクに該当する——訳者注。

食物を受け付けなくなった。丸太小屋「熊檻」へ入ったアイヌたちは、擦り合わせた「チノエイナウ (cinoe inau)」で熊の胴体、頸、四肢の各先端を縛って、古い「イナウ ルウ (inau ru)」と新造の「イナウ ルウ」が一本ずつ捲きつけられた「イノカ (inoka)」(熊の木偶) も頸に懸けた。老人が新しい「ウンヂイナウ (undzi inau)」(火の女神) に捧げるイナウを作ると、その前で暫らく祈りを捧げた。そして4本の「チコケラメスイナウ (ciko ke ramesu inau)」もこしらえて、これで帯のように四隅を塞いだ。全員が参集して見守りつづけた。辛うじて生きてはいるものの死の淵にある熊を4名の若者が庭へ搬出し、(アイヌ式に) 左へ回して家の裏手の干し草の上に、頭を海の方、日の出の方角に向けて寝かせた。いまだ家の中では水や、行者大蒜ぎょうじやんにくと蓴麻いらべんの根の煎じ汁を力ずくで飲ませようと試みた。庭に横たわる仔熊の背後には白樺製の「ヌサ (nusa)」^九と、樅の若木でこしらえた「イナウ ケマ (inau kema)」(イナウの脚) が立てられた。老人は「ヌサ」の前に坐して暫く祈祷する。仔熊が死ぬと、順繰りに警固してきたアイヌの一人がその死を皆へ告げるや、女らも男らも熊の前の雪中に座り込んで泣きだした^{一〇}。泣きやむと、家の裏からさらに五、六十歩ほど海寄りの所まで仔熊を運び、頭はやはり海へ向けて「スンクウ フウッテ (sunku hu fte)」(敷き詰められた樅の枝の上) に寝かせた。背後には樅製の「ヌサ」も立てられた。「イソ マキリ (iso makiri)」(熊用の特別なナイフ) を取りに戻ったあとで皮を剥ぎだした。胸と腹の上の2ヶ所には「ボタン」

^九 一群の「イナウ」で構成される祭壇、「ヌササン」とも称する。

^{一〇} 「ペウレ フレヘネヘマカテ コタン アイヌ ウチシカラ (Peure furexe henakate kotan ajnu uciš kara)」(育てた仔熊が死ぬと、村人らは挽歌を作る)。

と称される切残しがあるが、これを指で引きちぎった者は、熊の咆哮を真似て「オー！オー！(o-o)」と叫びだした（この場合も熊祭りのときと同様に、切り残された皮の小片を引き破れた者は来るべき熊狩りで獵運に恵まれるであろう）。熊の体が解体されて、「祭り」で殺された時と同様に腑分けされると、肉は戸口から屋内へ運ばれるが、頭付きの毛皮は窓を介して搬入された。頭の上に一刀が置かれて、近くには「トイ・ウシ (toi-us)」(本稿 497 頁参照) と称する食物のほかに、米飯や姥百合^{サラナ}の「根」や「酒」も並べられて、毛皮は然るべく安置された。「コソンド (kosondo)」[宝物]も懸けられるとはいえ、吊り紐付きの荷物は作られず、踊りもやはりない。オタサンとマヌエから客を招集し、彼らを二人組に編成して着座させ、「酒」を振る舞い、ほかの人々とは一緒に参加できなかった尊敬措く能わざる客人たちの分を残した上で、肉も食べさせた。頭部と骨はいつもの場所へ搬出された（若いアイヌのニカ^{ニカ}/Nikako 談）。

- (9) 熊が森の中で殺されたあと、仕留めた獵師は熊の木偶「イノカ」をこしらえて、既存の木偶にも削掛けを新たに擦った「イナウ・ルウ」の紐を一本ずつ追加する。これら木偶は時の経過とともに、同様に捲きつけられた紐で全身が蔽い尽くされる。木偶はすべて熊専用の箱に収納され、熊崇拜にかかわる祭祀が執行されるときだけ箱から出される（アイ村にて）。

- (10) 「イナントウシ (inatus)」とは熊の頭部から剥いだ皮のことで、その形状は小ぶりの円環を呈する。私は（二九〇四年に）フヌ^{フヌ} (Xunup [日本統治下の斑伸]) 村で、これら頭皮の束が（家の裏手の）「イナウ」に懸けてあるのを目撃し

たが、その上には犬の頭骨が載せてあった。熊鼠に齧られるのを恐れたから、屋内に仕舞ってあった箱から取り出して庭に持ち出したものだった。南のアイヌらは口唇部の周囲を細い带状に切り取って、やはり熊の専用箱に納める。

- (11) マウコ村では、熊を楽しませ、同時に檻の腐った床も修理するべく散策に連れ出したあとで、全員が熊の主人の家に集まってもてなしを受けた。出された料理は魚や、何らかの植物の葉と茎の煮物。その折に在村した男は余り多くなかったから、熊を引率する男らには女たちも手を貸して、彼女らは会食にも加わった。しかし「酒」は出されず、一切の祈祷……も唱えられなかった。

- (12) 中底に熊の描かれた漆塗り椀を、アイヌらは「トンチ・イソ (tonci-iso)」と呼ぶ。私はその説明を聞きそびれたが、恐らくは「トンチ・イソ (tonci-iso)」(「トンチ (tonci) の熊」) に由来するものであろう。「トンチ」は伝説上のサハリン先住民で、のちに姿を消してしまった人々の呼称である。

- (13) 「イソシケ (iso sike)」は「熊の荷物」。「そこに収められた食物はすべて男らが食し、女は決してこれを食べない。タライカ村やナイエロ村〔内路、現ガステロ〕のアイヌが、例えばアザラシ猟などに遠出する際は、この「荷物」を携帯する。そこに収められた食料を食べ終わると、吊り紐はその都度、別途に選定される場所に「イナウ」を立てて、そこに懸けられる(ナイエロ村にて)。

- (14) 木杵(伸長具)に張られた熊の毛皮が干し上がって、すでに使用が可能になると、木杵は家の裏手にある「イナ

ウ」の傍らに立てられる。熊の耳孔に差し込んであった小「イナウ」(「エヌシ」*enusiſi*)も、同じ「イナウ」の脇に置かれる。そして新しい「イナウ」が家の裏手に立てられるが、これを期して毛皮の売却は初めて可能となる。「イナウ」は山々の神「メトホカムイ/Metoxkamuy」の許へ送られる。オタサン村のテクンカは、祭りと熊皮の乾燥後も新しい「イナウ」を立てなかったが、その代わりに古い「イナウ」の上には「イナントウシ」(*inantsi*) (熊から剥いだ頭皮)を懸けた。

(15) オタサン村のアイヌ、ガイバテ (*Gajbate*) 宅で、家の裏手の「イナウ」に懸けられた皮を私は目撃するが、その上には熊用物品の専用箱も吊るしてあった。

(16) その生涯であまたの熊を倒した勇敢な男を、熊はせめて一度でも、そしてたとえさほど強くではなくとも噛み付いてやらねばならない。私はその一例として、(西海岸の)アイヌ、サムバクス (*Sambakus*) の話を聴取した。彼はすでに老人となつてからも、熊を手槍で仕留める方法を他の猟師らへ伝授するべく、彼らの前で率先垂範を試みた。熊は彼の手「ドプロトヴォルスキーによると、「指先」だったとある」を噛み切つたものの傷は完治している。サムバクスと彼の一族は「キムン マハネク (*kinun maxneku*)」(「森の女」)を守護霊とするから、彼は狩りに際して極めて勇敢で、あまたな成功も収めたが、彼の息子もそれらの資質を受け継いでいる。

(17) 東海岸南部のアイヌは、森で仕留めた熊であれ、飼育した熊であれ、その脂身は無差別に利用する。子供に頻発する湿疹をこれで治療するのだ。北のアイヌはただ「森の熊」の脂身だけを薬剤として使用し、その脂身は魚の

調味料にも用いる（ナイエロ「内路（ないろ）一村にて」）。

- (18) 南のアイヌが熊の頭部を森へ搬出するとき、のちに頭骨を載せることになる棹は別途に運ぶこともある。北のアイヌは常に、このY字形の棹（ケヨニ/kejoyni）へすでに差し込まれた頭骨を掲げて家をあとにする。もし熊が牡であれば棹は左の眼窩に通されるが、牝熊の場合は右側の眼窩となる。右側はより重要と見做され、牝熊にはより大きな敬意を表すべきとされている。右手は左手よりも年長と見做される（ナイエロ村にて）。

- (19) 南のアイヌは熊の脳髓を食さぬが、北のアイヌはそれに塩を振って、「チヌヌカ イタンギ（cinunka iangi）」（禁忌の碗）の中で「酒」と混ぜ合わせるだけで生食する。これらの碗は熊祭りのときだけに使用され、幕舎内では熊の頭部の脇に置かれる。因みに、この碗に残された「酒」は「パケシ（pakes）」（熊が飲み残して贈った酒）と見做され、一滴も残さずに飲み干される。熊の頭骨には根茎類や植物性食料が詰められる。鼻に差し込まれた小「イナウ」は「エンコルシベ（enkoruſipe）」と称される（ナイエロ村にて）。

- (20) 北海道のアイヌは——少なくとも沙流川^{サル}流域のピラトリ「平取」村では——熊の脳髓をナイフで切り取って、もし肌にあたつくようなら危ないから食べない。そうでなければ生食するか、串刺しで炙ってから食する（決して煮ることはない）。牡熊の頭肉の断片は左手、また牝熊のそれは右手を、それぞれ用いて食べる。女の内では禁忌の肉を食することができるのは、（猟で仕留めた場合の）熊を殺した男と親族関係にある者だけに限られる（ピラトリ村にて）。

- (21) ピラトリ村のアイヌらは熊の心臓を部外者には一切与えない。それを食するのは熊を殺した男と、彼の肉親だけ

で、そこからは女も排除されない。

- (22) 北海道アイヌも熊祭祀の間にあまたな禁忌を遵守していた。だが習慣が変化する中で、禁制や掟の数が年々減りつづけている。ますます多くの違反が、世間に知られぬよう内密裡に繰り返されている。例えば、今や長骨を割って煮ることが横行し、隠匿された骨は客人のいない間に煮て、スープをこしらえる(ピラトリ村にて)。

- (23) 切り離された熊の頭部の傍らで祈りつづけたアイヌは、その夜は細君との同衾が許されない。彼は奥壁の片隅で一人寝を余儀なくされる(ピラトリ村にて)。

- (24) アイヌはかつて狸(モユツ/mojuk) (学名 *Myctereutes procyonoides*) も柱の上に設置する檻で飼育していた。狸を恐れぬ犬どもが、この動物にかかずらつて消耗させるからだ。狸狩りは犬たちの支援下で進められた。仕留めた狸は「イナウ」が立てられ、もてなしも行われた。狸は肉が美味で栄養満点だから大勢の人が集まった。頭部は盆に載せて莫座の上に置かれた。狸の餌は黍だったが、米が与えられた狸は檻から逃走していった。狸を殺害する際も、熊祭りと同等に盛大な祭りが挙行される。その毛皮の価格は2〜5円^{イェン}だった(ピラトリ村にて)。

- (25) 熊はピラトリでもモンベト(Mombet) ーでも弓で射殺されるが、すでに瀕死の熊をさらに圧殺した。矢には毒を塗ることもあり、傷口の周りの肉が切り取られた。射殺を託された男が失敗を重ねると、二の矢、三の矢が放たれたあとは、主人が自ら弓を取って熊を射殺する。熊が己を殺すべく用意された柱に繋がれるのに抗うならば、

二 ピウスツキの調査経路から判断して、これは沙流川河口部の「日高」門別(もんべつ)であろう——訳者注。

ときには夜を徹して連れ回したあげく、払暁に檻の中に連れ戻して主人が自ら射殺することもある。熊はその後、ときにはすでに死後に、またときには断末魔の中で圧死させられる。

(26) ピラトリでは、主人や女主人の指示によつて客人らの席が順繰りに指定されると、指示の実行者は己の右手で客の左手を取つて、所定の席まで案内してゆく。

(27) ピラトリでは熊の性器を、牝熊の子宮と同様に削掛けて包んで、自立する「イナウ」に懸ける。サハリンではこの重要な状況を見逃していたことを白状せねばならない。加えて、牝熊の子宮は乾燥して、出産時……の薬剤として使用する。

(28) 牡鹿の鳴き声によく似た叫び——「オーイ・オーイ (ōiōi)」——を上げ、鹿どもを騙して己の方へおびき寄せる熊がいるそうだ。声を上げたあと、反応がないかと耳をそばだてる。もし些かの声か葉ずれでも聞きつけるや、その方角へ向けて突進し、獲物に襲いかかる。一度でも人肉の味をしめた熊は、すでに人を見るだけで見境なく攻撃する。このように危険な熊は「ホトウエウエイ ユク (hotue wej yuk)」「人を欺く悪獣」と称する。その前半身は赤色で、後半身は暗色を呈する(北海道島、ピラトリ村に)。

(29) 北海道アイヌは三種類の熊を区別する。①「クンネカムイ (kunne kamu)」(暗色の熊)はやさしい性格、②「フレ (fure)」(赤色)は怒りっぽい気質、③「レタラ (retara)」(明色)は気立てのよい熊。また犬のように小柄ながら頗る獐猛な熊もいて、和人もアイヌもしばしば噛み殺したものの、今はめっきり少なくなった。経験を積んだ猟師

らはこの熊も狩っていた。局所的に被毛が欠落する熊もいるが、その毛色は決まって暗色である。巢穴は地上に設営する。長い尾を有する熊もやはり性悪と見做されて、「アラサルシ (arasaruši)」と称される(ピラトリ村にて)。

- (30) 「ヌプリ コロカムイ (nupuri koro kamui)」(山々を統べる神)と「イソカムイ (iso kamui)」(熊)は「シナウタラ (sina utara)」(起源を共にする仲間)であるものの、「山々の神」だけは頗る重要な神である……。熊と狐は親族関係を有さぬが、^{モユク}狸(上記の №. 24 参照)と熊は起源を共有する。ところで、鴉は熊の伯父に当たると「パシクルイソカ ムイコロ アチャ (paškurui so kamui kor aka)」(ピラトリ村にて)。

- (31) 北海道の熊は、草もザリガニもヒキガエルも魚も食するそうだ(ピラトリ村にて)。

- (32) 熊祭りの進行中は誰であれ、たとえ祭祀に参加していない人たちであろうとも、銃による狩猟や、あらゆる野獣に対する仕掛弓の設置が禁じられる(拙著 *Materials for the study of the ainu language and folklore*, Cracow, 1912 に所載の諸伝承を参照されたい)。

- (33) セラロコで催された熊祭りで熊を檻から出そうとしたとき、一人の入植囚が銃を携えて現れ、興味深い光景に目を凝らしていた。アイヌらは銃を隠すように申し入れる。死に至るまでは楽しいことのみを見せねばならぬ熊に、銃を誇示するのはよくないと思案したからだ。鉄砲は熊に、同胞をあまた斃した破滅的武器を否応なく想起させよう。入植囚は申し入れに同意しなかったから、アイヌらは私に支援を求めた。彼は私の信念と辛抱強い要請を容れて、土着民の慣習に敬意を払うことを余儀なくされた。

(34) 一九〇三年にタコエで熊祭りが挙行されたとき、アイヌたちはすべての祭祀儀礼を寸分も違えることなく忠実に

遂行するよう格別に尽力した。その直前に有力な郷長スタルシナが発病して、熊の不満が病因と説明されたからだ。そのと

きも、蝟集した入植囚らに禁止された場所には立ち入らぬよう申し入れる任務が私に託された。「イナウ」や莫座や宝物で飾り立てた正面舞台へ向けて行列が動き出す前には、彼ら全員がそこから退去するよう、私は説得せねばならなかった。それは、通過してゆく熊へ装飾や、——同舞台への道に沿って最前列に並ばされた——絹で盛装する子供たちを見せるためだった。

(35) 熊が人間へ送りつける病気は「チコサラ (tikosara)」と呼ばれる。熊の不満の動機はさまざまだった。

① 例えばタコエ村では、父親らが熊をあまた仕留めた練達の猟師だったにもかかわらず、若者たちが熊狩りをやめしまったのが、熊には不満だったようだ。たとえ一頭でも熊を仕留めた者は決して「チコサラ」に罹ることがない。郷長スタルシナのバグンカ (Bagunka) 一二は、若者が父祖伝来の慣習を放棄したことと罰せられたのだそうだ。

郷長は夢を見たあとで己の病因を皆へ「そのように」説明した。

② 熊に関して確立されている何らかの掟の侵犯。私は一九〇五年にニコライエフスク「尾港」で、正教の洗礼を受けて著しくロシア化したアイヌのカハコ (Kaxo) (イヴァン・グリゴリエヴィチ) と出会った。彼が訴えたところでは、かれこれ4ヶ月も四六時中睡魔に襲われ、倦怠感が続くのに己を病人と呼ぶことはできず、体のどの器官

が痛むのかも明言できぬそうだ。これぞ熊の病なりと私に告げた。彼がかつて己の代父（ある将校）に敬意を表すべく、頭为天辺から爪先まで揃った完形熊皮を彼に売却したことに、熊は腹を立てたというのだ。

③ 檻の中で飼育される熊に対する劣悪で心の籠らぬ面倒見。ある「オイナ (Oina)」(神謡)では立ち去る熊が、自分を手厚く養わず、しばしば辛く当ったことを根に持つて人間の許に病を残したことが謳われている。

子供や女らは「チコサラ」に罹らない。この病では誰も死ぬことがない。同病は「イナウ」の建立や、熊への使者として派遣される犬の扼殺によって治すことが可能である。殺された犬の肉が調理され食される間、犬皮の上には一刀と一对の耳当てが置かれる。いずれの品も熊を喜ばせて、慈悲心を起こさせる。私は当初、刀を熊に対する嚇しと捉えていたが、私が受けた説明によると、熊はこれを嚇すのではなくて、むしろ御機嫌を取るべく努める対象であつて、しかも熊は刀で殺されたことがかつて一度もないから、刀を全く恐れぬそうだ。

(36) アイヌのある伝承では、檻に閉じ込められた熊の死に至るまでの滞在が「アンコウタサ (ankoutsasa)」(人間の許での食客暮らし)と語られている。

(37) 一九〇二年のセラロコでの祭りでは、熊殺しの直後の酒宴中に子供らが匙を投げ合つてるとき、日本の函館へ一度ならず赴いたことのある「セラロコ」の家長モイマが日本の干菓子を高々と抛りだした。投ぜられた菓子を追つて、子供や若者らが歓声を上げて落下点へと殺到する。和菓子を収める大きな包みを持ちこんだモイマは一個ずつ投げつづけたから、この遊樂は長時間続いた。これは日本の風習であつて、自らの文化的隣人の影響下にあ

るアイヌらが借用したものだ、と私には説明された。

- (38) 西海岸で催される熊祭りに関してはマウカ村の一人のアイヌから、東海岸のものとは些か異なる以下のような詳細を聴取した。熊の殺害が託される老人は恐らく彼の親族のようだが、熊を飼育した家では暮らしていない。同老人は親族の少年を伴って祭りに到来した。この少年には絹の衣装(コソンド)をまとうせて、熊の殺害に用いる矢を運ばせる。弓射の際、熊の主人は射手とともに前面に立つが、少年は後ろに控える。

- (39) もし誰かが生まれて初めて仔熊を捕らまえたとなると、かかる仔熊は二冬飼育してはならず、当年の冬場だけ養われる。一九〇四年、ナイエロ「内路」村のアイヌたちはまさにそうすべきであつたが、「日露」戦争と物情騒然たる世情に鑑みて祭りは延期された。購入されたか、捕獲経験者が捕らえた仔熊は二冬飼育される。

もし誰かが森の中で生まれて初めて熊を仕留めたとすると、それはいずれかの老人へ引き渡さねばならず、本人は肉や毛皮を利用することも、客人らを己の許に招くことも御法度である。さもないと、熊狩りではもはや猟運に恵まれぬであらう。老人は代わりに頗る優れた矢を授ける。もしこの矢で熊を仕留めるならば、その矢はもはや使用してはならぬ。その矢は休息させて、それに関する伝承を作る必要があるからだ。彼が次に仕留めた熊は(仔熊の場合と同様に)犬との交換で手放すことが可能となる。この犬は可及的速やかに熊の許へ送り届ける、即ち、熊への犠牲として扼殺せねばならない(ナイエロ村にて)。

- (40) 以下では私がアイヌの許に滞在したとき、熊祭りが実施された村落を列举する。

① 一九〇二年はトマロロ「泊居^(しまりおる)」、コモシロロ「小茂白」、オタス、タライカ、セラロコ(祭主2名、熊3頭)、オタサン、トウナイチ「富内(トンナイチャ)」(合計)7村落、祭主8名、熊9頭)。

② 一九〇三年がタコエ、マウカ(合計)2村落、祭主2名、熊2頭)。

③ 一九〇四年はオタサン(熊2頭)、セラロコ(熊3頭)、クスナイ「久春内」、マウカ(合計)4村落、祭主4名、熊7頭)。

- (41) 熊肉の以下の部位は炙られて、女には食させない。「ノホキリ(noxkiri)」(頸から鎖骨にかけての肉)、「サンベ(sambe)」(心臓)、「ハパヌ(hapanu)」(肺臓)、「テプウト(teput)」ないし「ウラカ(uraka)」(肝臓)、「エンテイエ(enteje)」(前脚の筋肉)。女にとつて禁忌とされた部位はそのほかに「ケオロ(keoro)」(脳髓)、「キライカム(kirai kam)」(頭部の両脇肉)、「ケオカムタシ(keo kam tasi)」(第一頸椎骨付近の肉)、「チヌヌタシ(chinunuk tasi)」(第二頸椎骨)、「クシタシ(kuci tasi)」(その他の椎骨)、「アカポニ(akaponi)」(第八頸椎骨)である。女に通常与えられる部位は「オホチャラ(oxčara)」(尾)、「キリケウポニ(kirikeuponi)」(三分割される無名骨——下部の二つは裕福な女、上部は貧しい女らに与える)、「ウトニポニ(utoniponi)」(下腿骨——腓骨と脛骨)、「アムニポニ(amuni poni)」(前肢前膊部、^{プレートプレチエ}橈骨と尺骨)。
- (42) 熊祭り期間中の各日の名称は以下の通り。

熊殺しの前日——「ヌマンニヤト(numan nija to)」(昨日、前日)。不寝の一夜は「オシリコトノウクラン(osirikotono ukuran)」(徹夜)と称する。

熊を連れ出す日——「カムイアシン ト (kamui asin to)」「熊が出る日」、あるいは「イヨマンテ (ijomante)」「(omante は「送る」という意)。

肉を食する日、客人らの日——「ウタラ コロ (utara koro)」「人々を持つ」、あるいは「ウタラ ウロ_ホテ (utara uro_{te})」「(人々を隣同士で座らせる)。

熊の骨の搬出日——「ケイアシン ト (kei asin to)」「頭蓋骨を運び出す日」、あるいは「ケイ マカント (kei makan to)」「(頭蓋骨を森へ運ぶ日)。

その翌日——「ヨ_ロ イヌヌカ (yok inunuka)」「(後続する禁忌の日)」。この日に熊は己の家に帰着するから、幕舎内では大きな音を立ててはならぬ。

(43) コタンケシ「東海岸北部の古丹岸、現ゴリヤンカ」村で、私は次のような物語を聴取した。あるとき、ある幕舎で熊について不遜な意見が述べられた。そのとき幕舎内には老人と老女しかいなかったが、一頭の牝熊が忽ち玄室へ闖入し、次いで幕舎内にも入ってくる。老人は前をはだけて毛深い胸を露出し、両の眼も大きく見開いた。牝熊はじろりと一瞥して、何の悪さもせず立ち去った。

(44) ナイエロ「内路村のアイヌたちはギリヤークの熊祭りについて語ってくれたが、彼らには頗るあまたのタブー (huma) があると、驚きを隠さなかった。そのわけは恐らく、例えば祭主らは熊の肉が食べられず、女たちは熊殺しの現場に近付けないなど、これらのタブーがアイヌ自身のものとは異質だからではなからうか。「ギリヤークの

熊祭りに」熊の殺害役として招かれたアイヌは一人もいなかった。

(45)

以下では、私が二度ほど——残念ながらも若干の場面だけに限られるが——列する機会に恵まれた、森で熊を仕留めたあとに催される2件の祭祀について、その概略を紹介する。

例えば一八九六年八月、私はシャンツィ村である幕舎に立ち寄った。屋内奥壁の(戸口から見ても)左隅に、熊から剥ぎ取った毛皮が見えたからだ。頭部は樅の枝を敷き詰めた上に安置されるも、毛皮の後半身は棹に懸けてあった。毛皮の上に古い刀が安置され、両側には矢を納めた籠各一個と「イナウ」が据えてある。頭部の両側にはキセル、煙草入れの小袋、炭火と喫煙用の小鉢、行者大蒜と姥百合「の根」入りの米飯を盛った大皿が並べてある。

熊の上には弓型の「イナウ・ルウ」(削り掛けを燃り合わせた紐の束)が垂れ下がる。すぐ脇では数名の男が熊の胴体を解体し、一名は炉端の莫座に坐して「イナウ」を削っていた。翌日には肉を食すべく客人らが参集するからもうと大きな祭りになると言われたので、私は再びこの幕舎を訪ねた。毛皮はすでに板床から撤去されて、そこにはただ熊の頭蓋骨だけが残されていた。戸口の左側(したがって、アイヌらにとっては右側)の板床には5人のアイヌが胡坐をかいていた。祭主と彼の兄弟は、熊肉用の特別な盆に茹でた肉を盛りつけてゆくが、各盆に盛られるのは一本の肋骨と骨付きの肉片だった。各自は恭しく受領した盆を、勿体ぶって敬虔に持ち上げると、目の前の板床の上に下ろす。幾人かはさらに両の掌を摺り合わせて、両手を顎鬚まで持ち上げたあとで、胸の上を滑らせて下ろしながら盆の上で簡単な挨拶の儀式も執行する。肉が全員に、はたまた少年らにまでも配布されると、会食が

開始された。大はしやぎの少年たちは（左側の）板床の上で飛び跳ねながら、肉を盛った盆を受領してゆく。若干の部分は椀に入れて女や娘らにも配られる。下顎骨は最も尊敬措く能わざる客へ献上された。その客はごく僅かな肉片を切り取るだけで、隣席に坐する客人へ盆を引き渡す。この客人が肉の削ぎ落とし作業を終えて盆を祭主へ戻すと、後者は箆から抜いた一本の矢を、盆に添えて再び最年長者へ差し出した（本稿55頁参照）。二人の少年が呼ばれて、顎骨から削ぎ落とした肉の共食に参加する。その後、下顎骨は頭蓋骨の下へ納められた。食べ切れなかった肉は、各自が蓆の切れ端に包んで手元に置く。肉を削ぎ落とし終えた骨は、祭主が奥壁の脇へ山なりに積み上げてゆく。その後根茎類でこしらえた第二の料理が木鉢に盛って配られた。女たちが盛りつけると、子供たちが配ってゆく。食器を受領する際、各自はそれを板床に置くか諸手に抱えるが、軽く持ち上げる仕草は行わない。食事が終わると喫煙が始まる。すべての骨と、熊の血にまみれた櫓の枝を集めて、蓆に包んで結縛し、また根茎類を詰めた頭骨も短い「イナウ」で飾り立てると、全員は家の外へ出て、祭主が頭蓋骨、骨格、熊の頭部周辺に並べてあった料理を窓越しに引き渡す様子を見守った。その後、少年数名と祭主とその兄弟が、それぞれ上記の品々のいずれかを両手に抱えて森へ向けて出発する。先頭を行くのは頭蓋骨だった。

肉の会食の際は、一本指の打撃で肩甲骨の破壊が試みられたことも付言しておきたい。さらには、頭部を付けたままの熊皮が幕舎に搬入されたとき、男らはその前で掌を摺り合わせて通常の挨拶をする傍らで、女たちの方は泣きじゃくった——多少とも久しく顔を合せなかった人物に向けてなされる通常の女の挨拶である——とも告

げられた。

一九〇四年十一月、数名のアイヌと連れだつて北からモグンコタン「日本統治下の馬群潭、現ブガチョウオ」村に到着したとき休息に立ち寄つた幕舎で、われらは数日前に森の中で仕留められた熊にかかわる祭祀の終幕と遭遇した。当村と周辺数ヶ村における住民数の僅少性に鑑み、消費される肉は僅かに留められた。したがって、祭祀は今日に至るまでいまだ完結していない。所定の場所である窓辺の板床には南京玉類、2刀、――すでに黒ずんだものから灰色、完璧な明色、そして新品に至るまで――さまざまな色調の「イナウ・ルウ」が並べられて、いずれも数ヶ所が黒と赤の布切れで結縛されていた。一刀の上には二対の熊の耳当てが置かれて、一対は明色の新品だが、古い黒色の一対には一本の真新しい紐が付け足してあつた。壁際に並ぶのは2本の矢と、――熊の性器の毛が貼り付けられたさまざまな寸法(但しいずれも4分の1アルシン「 $\parallel 17 \cdot 8$ 寸」を超えない)や形状の――熊の木偶「イノカ」5体である。2体の木偶は、「イナウ」の削掛けを撚り合わせた新造の紐(「イナウ・ルウ」)で結縛してある。さらにキセル、ロシア製シガレットケース(熊を仕留めた祭主の購入品)、小ぶりの容器(樹皮製編み籠)、古色蒼然たる籠も見えるが、そこにはまた熊の毛皮も鎮座する。その先に散在するのは熊肉用の盆で、幾つかの骨や肉用の串も見えた。「酒」用の漆塗り容器も定位置(上段の棚)にある。「イナウ・ルウ」(あるいは「チバノ(cipano)」)には、祭主の妻の兄弟が見付けたねじ曲がる木の根っ子の束が差してあつたが、これは「イシヤンケ(isanke)」(呪具)である。一見して、その古さは明らかな一つの盆には2頭の熊が彫り込んであつた。説明によると、これはコタンケ

シ村で購入して育てた仔熊を表現したものだそうだ。残念ながら祭主は、これ以上の立ち入った説明を拒み、私の友人である道連れたちもなす術がなく沈黙していたが、のちになって、私が祭主から聴取した以上に付け加えることは何もないと語った。われらの最年長の仲間の許へ盆に載せた肉が運ばれたとき、この幕舎で暮らす一人の老人が若い主人に骨の取扱い方を指導した。肋骨は盆を届ける者の方に湾曲部を向けて、その両端が受領者の方に向くように置かれる。串は盆に載る次なる骨へ縦なりに刺し込まねばならない。老人は僅かな肉を賞味すると、並坐する者へ盆を渡した。同じことが繰り返されて、その盆は、私と一緒に到来したアイヌの全員の間も一巡する。われらは肉を食し茶を飲み終えるや、慌ただしく舟に乗って出立した。

(46)

一九〇四年六月、私はナイエロ村「丙路」にて熊の「ㇿ 齒切断式」に列席した。この作業は暑くなる前の早朝に遂行せねばならない。さもないと熊は齒を切られる最中に発病するか、落命することすらあるからだ。予め指定された日に全村の男たちが集合し、熊に革紐を掛けて檻から引き出す作業に着手する。二人の男に熊の頭に挑む役が託された。選ばれたのは、祭主が敬意を表して、その功名心を満足させることを欲した二人の勇敢な青年である。熊の背は十文字に縛った二本の棹で押さえられた。次いで、熊が棹組みに益々強く押し付けられる中、その体が革紐で縛り上げられてゆく。皮紐が余りにも強く体に食い込むことを慮って、前脚と後脚の間に十文字に渡した干し草の束で胸部と臀部が蔽われた。熊がもはや身動きできなくなると一個の棒切れが口の中に差し込まれ、棒切れが革紐で下顎部に結縛されると、後ろの方へ強く引き寄せられた。その後、作業参加者の一人が浅い刻みの

施された特別なナイフ「一種の鋸であろう」を駆使して、4本の犬歯をすべて切り落としてゆく。犬歯から切断された端部は「イナウ」の削掛けで包み、熊檻の四隅に立てられている「イナウ」の一つにそれぞれ結縛された。切り詰められた歯の表面は、予め屋内で準備してあった黒焦げの薪片で黒く着色される。しかるのちに熊の革紐が解かれ、棹を組んだ杵も持ち上げられて、浜辺での散策に連れ回されたあと、熊は檻の中へ戻された。もしそれが牝熊であれば、親許への帰還後に、自分はアイヌ女に倣って刺青を施されたと語るが、牡熊の場合は犬歯の切断を、アイヌの男らがサハリンで実施するような前頭部の剃上げと称するわけだ。

ギリヤークとオロツコは熊の犬歯切りを実施しない。オロツコが私に語ったところによると、アイヌは日本人の来島後にこの習慣を導入したに過ぎぬとのことである。もしどこかの村で人数が少なすぎて作業遂行に必要な人材が不足する場合、アイヌは犬歯切りを行わぬこともある。しかし、そのときは必ず次の仔熊にも犬歯を残す必要がある。概して言えば、仔熊の養育では飼育期間が、例えば一年、二年、三年と自由に設定されるように、若干の変更は可能であるが、そうした変更は常に前後する2頭の仔熊に適用せねばならぬ。さもないと、「山々の神」が驚いて不満をかこち、熊は噛みつき、いらつくであろう。これらの措置を象徴的に明示するのは、Y字形木柱「トウグシ」である。二股の一端は、「オイナ」が物語るように第一の仔熊に帰属する傍らで、別の一端は、その身代わりとして人間の許へ送られる仔熊にかかわるからである。犬歯切りに使用される小鋸はその他の熊用物品と併せて、常に専用箱へ納められるという事実も付言しておく。

「熊の養育に関する神謡」

イソ レ^レケ オイナ (Iso reske ojina) 111

5く6語ごとに繰り返されるリフレインは、次のような意味を有さぬ常套音声で構成される。
 ヘ ア ウム クーウエ、パイケン ウン チケ、パイケン ウン クス。

he a ŷm kūwe, pājken ŷn cke, pājken ŷn kūsu.

アナンテ ホコ アン トウラ カンネ / サンケ ニタ^サ サム アンクス キナ、/ マクン ニタ^サ サム アン トウラ カンネ ア
 ノロイキ^二。アン・キ ロカイネ タ^ハ ニネワ スンクウ トウラ ウソトウ^シ ト^コホ アネカリ。タンベ レンカイネ ア
 ナンテ ホコ イタ^ク オマンテ^二「テタ ボイタ オ^ホカヨラム ボ アナンテ マチヒ イコンデ カネ」ナ^ハエ。タンベクス ア
 ンキチ。アンキチ ロカイネ、テマナ^ハ ネ・クス エンチウ チルル アタ^ハキーナ。インカラ アナコ、ネイタ クスク^フタ・
 チモレ。ヤイレスポ アンヌカラ キーナ イチシヤンク^シテ。アナンテ ホコ チルル フアイエ ボクンテ、エンチウ チル
 ル アイエルエカ。アン エンチウ ホ^コホ アナンテ ホ^コホ ヌカラ クニ アン エトウンネクス、アン テ^ケヒ アニテ^ハ チ
 ヤシ アネカラ・カラ。ヤイレスポ アヌカラ ヤコクチヒ レ ホン^プシ エカラ カラ。タバ オロワノ アナンテ ホ^コホ ア

111 一九〇三年五月、トウナイチ村のアイヌ、クサイ(Kusai、三十才)の口述を記録した「タイトルは「熊の養育に関する神謡」を意味する」。

112 以降では「文章の切れ目を示す」補助標識(ノ)を省略する。文章の切れ目では、小休止の直後に上記のリフレインが歌われる。

ン・トウラカンネ アンコロ チセ アンコヘマ^ハナラエ。アンコロチセ オ^ホタエシレパアン。タバオロワノオカヤ
 ナイネタイシネトケタンヘロンネノムシヤンケコア^ハカサン。ヤヤシ^シトウイマインカラアナコラ^ハキホ^ムポ
 アンテス・カンネオカヤン。アノコホシユウリヤ・コンノオカヤン・アイネセミ・コニヘイトモシマ。タンベレ
 ンカイネタネアケシエネライツエヘテセ^シケアンキキナ；タンヘロンネーノ、ライツエヘテセ^セケアンキロカ
 イネ、タンヘロンネノイコニムフルネアナンテホ^コホイコヤイカラ。タンオロワノポヌアン；ネヤイケイ
 カト^ッコロペアンコロ。タンオロワノセトウルカワナムワ^ハカアンコタタ・タタ、コトロカワセセ^ヘワ^ハカアン
 コタタ・タタ、チセトウヨシナイ・ペカカムイボンホロケウボチア^ハカシア^ハカシテアネヤイコヌ^フテ。アナンテホ
^コホポヌ・アンヒイスホマカラクスアシン。オカケタアンエンチウホ^コホタンベ^バテアンエライストマカラ
 アンキ・クス、コバイカレキナ、タンベレンカイネサンケニ^タシサンアノロイキキナ、マクンニ^タエサンアノロ
 イキキナホロカルルケ^シエリキユナイヘケナシカスフアノロイキ、サチラトリレコ^ッケハウヘ、タンベ^バテア
 ンコヌクルカネ、ケナシコイキアン、アム^ポホアンエンチウホ^コホ、アネシ^シラ^ハテカラ。タンベレンカイネサ
 ンケケナシサムサパン、アンキロカイネネイタクスク^ッタチモレアナンテホ^コホアンヌカラ、アム^ポホアンコ
 ンデ。タワオロシネネマカパン、オカヤン。オヤパネシロママ^ハノアンテレヤ^ハカアンコヤク^シ、コチュウキエ
 アム^ポホアネ^ケアンラムヌアンキークス、タンア^シシ^シトイルアンカラ。トウ・ケサ^ンテ^ヘコア^シシ^シトイル、トイ
 ルオプ^チケタアンテ^レヤ^ハカアンコヤク^シカンネオカヤン。

Anante hoko ʔn tura kʰanne / sʰanke nʰas sam ankus kʰina, / makun nʰas sam ʔntura kʰanne anorʷojiki [1]. An-ki rokʰajne tʰxni nʰewa sʷnku turʰ usʷtus tokhʷ anekari. Tʰambe renkʰajne anʰante hokʷ itʰk omʰante: “tʰeta pʷjʰta ʷxkajo rʰampon anʰante mʰachi ikʷnde kanʰ” nax e. Tʰambe kusʷ ankʰici. Ankʰici rokʰajne, tʰemanax nʰe-kusu ʰnciu ci rurʷ ataxkʰina. Iʷnkar anʰko, nʰjʰta kusʷ kʷfta-cimʷre. Jajresʷpo annukarʰ kʰina iciʰankʷstʰe. Anʰante hokʷ ci ruruhʷ aje bokʷnte, ʰnciu ci rurʷ ajernekʰ. An ʰnciu hokhʷ anʰante hokhʷ nukʰara kunʷ an ʰtʷnne kusʷ, an tekʰi anʷ tʰex ʰasi anekarʰ-karʰ. Jajresʷpo annukʰara jakʷ kucʰiʷ re hompus ekara karʰ. Tap orowanʷ anʰante hokhʷ an-tura kʰanne ankorʷ cisʰe anko hemaxnarʰe. Aʷkoro cisʰe oxʰa esirepʰ an. Tan oro wanʷ okajʰanʰjne taj sinʰe tʷke tan herʷnneno muʰsanke koʰaxkasʰan. Jajʰisʷ tʷjima ʷnkar anʰko pʰaxki hʷmpon ʰntesu-kʰanne okajʰan. Anʷokoho űurʰ rijʰ-kʷmmo okajʰan-ʰjne semi-kʷnʰne itomoʰmʰ. Tʰambe renkʰajne tanʰe akeʰenʰe raj cex tesʰʰke anki kinʰ; tan heron nʰno, raj cex tesʰʰke anki rokʰajne, tan herʷn nʰno ikʷni muʷnʰe anante hokhʷ ikojʰajkarʰ. Tan orowanʷ pʷnu an; nejʰjke ikaʷ koropʰe ankorʷ. Tan orowanʷ setʷru kʰawa nam vaxka ankotʰta-tʰta, kotʷoro kawʰ sʰesex vaxka ankotʰta-tʰta, cisʰe tʷjonnaj-pʰeka kamʷj pon hopokʰʷpo ci ʰxkas akkaʰtʰe anejʰajkonutʰe. Anʰante hokhʷ pʷnu-anʰi ishomʰ karʰ kusʷ asʷn. Okʰakeʰta an ʰnciu hokhʷ tʰambe patʰe an erʰjʰstoma karʰ anki-kusu, kopʰajkarekʰina, tʰambe rʰenkʰajne sʰanke nitʰs san anʷorʷojki kʰina, makʷn nitʰsesan anʷorʷojki kʰina hʷroka Rʷrʷukeʰ erikʷjʷnʰajne kenʰs kasuhʷ anorʷojki, sʰacira tʷri rekʷʰke hʰuʷbe, tʰambe pate ankonunukuru kanʰ, kenʰs kʷjki an, am pʷho an ʰnciu hokhʷ, anʰisʷ raxʰtʰe karʰ. Tʰambe rʰenkʰajne sʰanke kenʰs sam sapʰan, anki rokʰajne nejʰta kusʷ kʷftacimʷre anʰante hokhʷ an nukarʰ, am poho ankonʰe. Tʰawa orʷ sinʰene makapʰan, okajʰan. O jʰa

páne siromám pahnó antére jaxká ankojâkus, kočuki e am póho anék an ramú nú ankī kusu, tan asís tojru ankará.
 Tu-kesântexko asís tójrū, tojru opuciketá an tére jaxká ankojâkus kanné okajân.

ナシエ ハチ コイソ イタク クス。

Nāše hác̄ko išo iāku kusū.

アニレ^セケシ、トウ・ヘム^ムバハ^ム アニレ^セケシ、アネヤユコライ^ムパ^ムシタニ^ムアニ・アシ^ムンケシ、イナウ^ムコト・オ^ムタ^ムア
 ニトウ^ムラ マカ^ムパ^ムハチ、イクルカタ^ムトミ^ムシケ、イ^ムペン^ムチ^ムヨロ^ムカタ^ムイナウ^ムシケ^ムア^ムンコロ^ムテ。ヤイレ^ムス^ムボ^ムイヨリ^ムタ^ムコ..
 「ナ^ムハ^ムテ^ムエ^ムマ^ムカン^ムチ^ムキン^ムタン^ムネ^ムフ^ムカラ^ムエ^ムサ^ムシ^ムエイ^ムシ^ムナ^ムトウ^ムイ^ムパ^ムタ^ムナ^ムン^ムコロ^ムペ^ムチ^ムリ^ムオ^ムカ^ムカラ^ムエ^ムマ^ムカン^ム
 チ^ムキン^ム、タ^ムネ^ムペ^ムケ^ムレ^ムエイ^ムシ^ムナ^ムトウ^ムイ^ムパ^ム、タ^ムハ^ムコン^ムラ^ムオイ^ムシ^ムユ^ムイ^ムエ^ムオイ^ムカリ^ムカン^ムネ^ム、エ^ムマ^ムカン^ムクス^ムネ^ムイ^ムケ^ムア
 チ^ムヤ^ムネ^ムトリ^ムポ^ムボ^ムタン^ムバ^ムキ^ムクス^ムネ^ムイ^ムケ^ム、レ^ムコ^ムッ^ムケ^ムハウ^ムヘ^ムエ^ムヌ^ムクス^ムイ^ムキ。エル^ムウ^ムオ^ムカ^ムサン^ムケ^ムヘ^ムア^ムチ^ムヤ
 ネ^ムトリ^ムウ^ムチ^ムヤ^ムラ^ムハウ^ムオ^ムレ^ムハウ^ムヘ^ムエ^ムヌ^ムクス^ムイ^ムキ。タン^ムア^ムン^ムコロ^ムネ^ムチ^ムリ^ムヒ^ムピン^ムネ^ムシ^ムヤ^ムン^ムフ^ムチ^ムユ^ムフ^ムカ^ムウ^ムト
 ン^ムネ^ムヘ^ムス^ムエ^ム、マ^ムハ^ムネ^ムナイ^ムヘ^ムチ^ムユ^ムフ^ムポ^ムク^ムト^ムン^ムペ^ムヘ^ムス^ムエ^ムタ^ムウ^ムト^ムウル^ムケ^ムヘ^ムエ^ムア^ムン^ムト^ムウ^ムカ^ムサ^ムチ^ムラ^ムア^ムン^ムトリ^ムポ^ム
 ボ^ムタン^ムバ^ムハウ^ムヘ^ムア^ムン^ムクス^ムネ^ムイ^ムケ^ムイ^ムコ^ムヌ^ムフ^ムラム^ムネ^ムエ^ムコロ^ムカン^ムネ^ムエ^ムマ^ムカン^ムクス^ムイ^ムキ。エ^ムコ^ムラン^ムト^ムホ^ムト^ム
 タ^ムン^ムア^ムシ^ムシ^ムト^ムイル^ムエル^ムエ^ムト^ムホ^ムサ^ムン^ムケ^ムヘ^ムエ^ムカ^ムラ^ムカラ^ムル^ムウ^ムオ^ムプ^ムチ^ムケ^ムタ^ムエ^ムコ^ムラン^ムト^ムホ^ムト^ムエ^ムテ^ムレ^ムクス^ムア^ムン。
 エ^ムコ^ム・エ^ムカ^ムリ^ムクス^ムネ^ムイ^ムケ^ムピ^ムリ^ムカ^ムア^ムネ^ムオ^ムン^ムト^ムウ^ムイ^ムカ^ムハ^ムウ^ムサ^ムメ^ムア^ムハ^ムカ^ムシ^ムエ^ムチ^ムキ^ムカン^ムネ^ムエ^ムウ^ムコ^ムヤ^ムイ^ムラ^ムエ^ムチ^ムキ^ム
 クス^ムイ^ムキ」。

アンヌデ マカパン アシリ シメンケ、アシリ ソートウイパ アンキテ マカパン。ソンの カイキ ヤイレスポ イヨリタ
ク。ペノ マカパン、アンコラント^ホト コロ チセヘ オ^ホタ アフパン。ヤイレスポ トウ・イナウ シケヘ プヤラ・カリ
ナフンケ。アン・コラント^ホト ポボ エエン^ツウ、イナウ シケ エエン^ツウ、アフパン、アンコラント^ホト アンコウエ
ベケレ・ヤイレスポ ピリカ イレ^セケ イエカラ・カラ、タンベ レンカイネイ シレチャカシノ イエカラ・カラ。パテ
ンコロ ヘンギヘナ イナウ ウサラエ イキレクス、ナ^ハエ・アンコロ シンタ ハリキ コンタハ タンベ タ^ハネ アノカ
ンコロヘ、シモン コンタハ ネイパ ケチウノ イカ^ハコロペ イシタサエレクス、ナ^ハエ。アンコロ ヘンギヘナ イ
ウ アンコ ウサラエ マヌ。イセトウル カタ タタ・タタ、アンコロ ヘンギヘナ イエヤイコヌ^フテ。タン オロワノ リテム
パネ シロマンテ、ヤイレスポ エヘ ネノ イカ^ハコロペヘ アンコンデ マヌ。タン オロワノ アンコロ^ーアン ト^ホト
ウラ ピリカ オカイ アンキ マヌ。

Anireskesi, tu-hémpaxpa anireskesi, anejajukorajpaxsi taní ani-asinkesi, ináu kot-oxá aní turá makapaxci, ikurukáta tomí
siké, ipénóro káta ináu siké ankoroté. Jajiresúpo ijoriáko:

“náxte emakáncikin táne húfkar esási ešinatupá tanán koró pecirí okákara emakáncikin, táne pakeré ešna tuijá,
taxkón raóšuj eojkári kanné, emakán kusu néjke ácane torí pópo támba ki kusú néjke, rekóske háuhe enú kusú iki.
Erú okasánehé ácane torí učara hawore háuhe enú kusú iki. Tan ánkoro necirhí píme sijnahu čufka utónne hesué,
máxne najhe čufpokutonpe hesué ta uturukhé ean túka sácira an torí pópo támba háuhe an kusú néjke ikonúpux

rámne ekoro kanne emakán kusu ikí. Ekorán toxtó tan asís tójrú erú etox sánkehe ekara kará. Ru ópuci keta ekorán toxtó etére kusú an. Ekó-ekári kusú néjke pirika ané onuikahá usáme áxkaś ecikí káanne eukojajra ecikí kusú ikí.”

Annúte makapán asiri siménke, asiri sôtupá ankíte makapán. Sónno káiki Jajresupo ijoritaku peno makapan, ankorán toxtó koró cisehé oxá ahunán. Jajresupo tu-ináu sikehé pujaá-karí anahúnke. An-korán toxtó pópo éénk u, ináu sike éénk u, ahupán, ankorán toxtó ankowebekeré: Jajresúpo pirika ireské iekará-kará, támbé rénkajne isiréakasnó iekará-kará. Paté áñkor héngihena ináu usaráé iktire kusú, nax e; áñkoro sintá hariki kontahá támbé taxne anoka an koropehé, simon kontahá nejpa keciunó ikáx koropé isitasáeré kusú, nax e. Áñkor héngihená inau áñko usárae manú. Iséturu káta táta-táta, an korhéngihená iejaikonuxté. Tan orowanó ritem pane siromante, Jajresupo éhe néno ikáx koropehé ankónde manú. Tan orowanó áñkor — áñ toxtó turá pirika okáí anki manú.

ロシア語訳「邦歌」

熊の養育に関する神謡（オйна）

わしは旦那とともに海辺の森を歩いていた。森では川の源流付近を散策していた。そうするうちにわしらは、白樺が縦と競って枝を拡げている所に至った。この（二つの樹木の）中間地にいるとき、旦那がわしに「わが妻よ、ここに愛撫して

くれ」と言った。そこで、わしらは事に及んだ。わしらが愛を交わしていると、突如として、わしは人間のペニスの味を感じた。見回すと夫のすぐ脇には、山々を隈なく徘徊するヤイレスポがいるではないか。わが旦那のペニスの味はいまだが、ヤイレスポの一物はもつと旨い。わしの人間の旦那にわが旦那を見せたくなかったから、その目を両手で蔽った。わしがヤイレスポを一瞥したとき、彼は三つの結び目^{一五}を有する腰帯を仕上げたところだった。その後、旦那とともにわが家を目指し、帰宅した。そしてそこで暮らすうちに、ある日、(家の)前壁の周りを歩き回って清掃中に、ふと眼を落とすと、腹を膨らませて背筋をびんと張って暮らす(自分を見出した)。旦那とともに越冬したあとで、わしは加減が悪くなつた。だから、戸口の傍らの焚火近くで瀕死の魚のような格好になった。わしが前壁の脇で瀕死の魚になっている(横臥すると、わが旦那はわしのために病人用枕をこさえてくれた。その後、出産を終えると、己に似た者をわしは抱えていた。その後、背中に冷水を、そして前半身には温水を浴びせつづけた。殊の外美しい男の幼子が家中を歩き回るのを見て、わしはひどく喜んだ。わが旦那は、わしが出産を済ませると、わしの性を暖める^{一六}準備のために外出した。その後はただ一つのこと、わしの人間の旦那の前で自慢することのみを念じた。春になると、わしは海辺の森へ赴いて、(その)川の上流域の森を散策した。川を遡ってホロカ・ルルケシ(Goroka Rurukes)^{一七}の森を散策した。一羽の「サチラ(Sactra)」鳥^{一八}が

^{一五} これら三個の結び目については、口述者本人もまた数名のアイヌも説明することができなかった。旧知の朋友である長老らに確かめるべきだったが、失念してしまった。

^{一六} アイヌの女たちの慣習。

^{一七} 逐語的には「向いの海の果て」を意味するが、詩に登場する地名。

^{一八} 鳥の名称であるが、私は同定することができなかった。

叫びつづけるが、それはわしの氣に召した。森の中で根茎類を掘りながらも、己が息子に人間の旦那に披露したいという一念は温めつづけた。そこで森を抜けて、海の方へ近付いて行つた。そして、「人間の旦那と不意に出遭つた。息子を彼に渡した。それ以降は独りで歩き回つた。翌年は、ずっと待ちつづけたが「息子」現れず、（再会できなかった）。秋までは息子の到来を期して、新しい道が用意してあつた。日ごとに新たな道を作り、その道の先の海辺で待ちつづけるも待ち人來たらず、といった日々を送つていた。

今度は幼い熊が語る。

僕は養われた、2年も養われました。人々は今や「僕」連れ出す準備をしていました。彼らは僕を連れて「イナウ」の前まで來ました。僕自身が背中の前に宝の荷、後ろにも宝の荷を背負っているときに、ヤイレスポは別れの餞にこう告げました。

さて、そなたが川へと通じる長い山腹をあまた横切り、川沿いに連なる長い峡谷や短い峡谷を幾つも越えて行くとき、汝のあとを追つて一羽の「伯父さん鳥」（即ち、鴉）が土産の食物を運んで行くとき、そなたはその叫びを耳にし、また背後からは「伯父さん鳥」たちの合唱も聞こえるだろう。わしの川筋では、日の出の方角へ流れる「男の支流」と、日没を目指して下る「女の支流」を見出すであろう。両支流のど真ん中には分水の高まり（がある）。土産の食物を運ぶ「サチラ」鳥の叫びもあろう。そのときは喜び勇んで行くがよい。そなたの母はこの新しい道を、前の汝の道に沿つて作られて、道の外れでそなたを待っていないさる。わしが手厚く養つたそなたが

母上と出会って、ともに行くとき、（汝はその間に見聞したことを）母に物語るがよからう。

僕はこれを聴きながら、改めて髭を剃り^{一九}、改めて髪を刈って^{二〇}先を急ぎました。ヤイレスポが餞で告げたように、僕はまさに、そのように出立して母の家に至り、ヤイレスポ（が託した）「イナウ」の荷を窓越しに渡しました。母は土産の食物と「イナウ」の荷を受け取ってくれました。僕は中に入ると、ヤイレスポはきちんと養ってくれて、そのあとで道中の指示も与えて、「イナウ」を配る役を僕に命じたと母に告げました。母は、僕の「シンタ」^{二二}に割り振られたのはY字柱の左側の短い方の枝で、右の枝は、明くる年に僕の身代わりとして送られる、僕に似た存在^三のものと仰せられました。そして春が来ると、ヤイレスポのお告げ通り、僕に似た存在が（彼に）贈られました。それからは、母と一緒に幸せに暮らしました。

アイヌたちはこの伝承を、熊を殺すときに執行される祭祀の説明として語ってくれた。その際、これはまた「サバネオイナ (sapane oina)」、即ち、数ある伝承歌のうちで「最も重要な神謡」だとも告げられた。

^{一九} 熊の鼻や目の辺りの皮を剥ぐことが示唆されている。

^{二〇} 熊の頭の剥皮が示唆されている。

^{二二} 本文 567 ページ参照。

^三 付録資料 No. 46 参照。



Рис. 1. С. Такое. Медвѣжій празникъ зимою. Приготовленіе мѣста, гдѣ должно произойти убіеніе медвѣдя.

写真1 タコエ村。冬場の熊祭り。熊の殺害現場の整備



Рис. 2. С. Такое. Медвѣжьи клѣтки. На одной изъ нихъ и около нея—інау, приготовленныя для украшенія столбовъ на мѣстѣ, гдѣ должно произойти убіеніе медвѣдя.

写真2 タコエ村。熊の檻。一方の檻とその周囲には、熊の殺害場に立てる柱の装飾用に製作されたイナウが見える。



Рис. 3. С. Ай. Инау сзади дома и подвѣшенный ящикъ съ ножами для рѣзанія медвѣжьяго мяса и съ колчанами, въ которыхъ хранятся стрѣлы на медвѣдя.

写真3 アイ村。家の裏手のイナウと、それに掛けられた箱。



Рис. 4. С. Серароко. Медведь, выведенный из клетки, не хочет двигаться.

写真4 セラロコ村。檻から降ろされて、動くことを拒む熊。



Рис. 5. Медвѣжій праздникъ. Мимо дѣтей, одѣтыхъ въ шелковыя платья и украшенныхъ разными бусами-ожерельями, проводятъ медвѣдя.

写真5 熊祭り。絹の衣装をまとい、さまざまな南京玉製の首飾りを幾重にも胸に懸けた子供たちの脇を、熊は見送られる

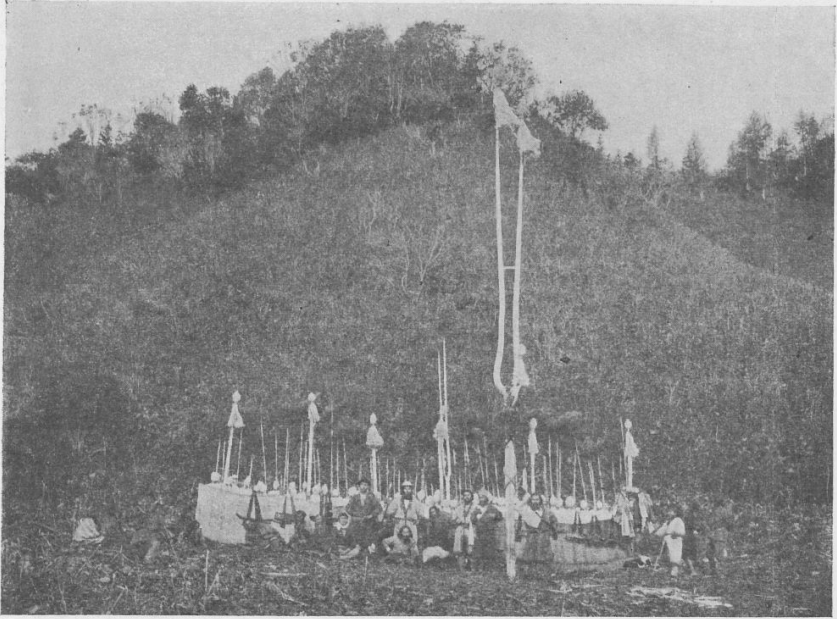


Рис. 6. С. Серароко. Медвѣжій празникъ осенью. Общій видъ мѣста, гдѣ произошло убіеніе медвѣдя. 1902 г.

写真6 セラロコ村。秋の熊祭り。1902年に熊の殺害が行なわれた現場の全景。



Рис. 7. С. Отасанъ. Медвѣжьій праздникъ зимою 1905 г. Прощальная рѣчь.

写真7 オタサン村。1905年冬の熊祭り。告別の辞。



Рис. 8. Медвѣжий праздникъ въ Серароко зимою 1905 г. Прощальная рѣчь.

写真8 1905年冬のセラロコ村における熊祭り



Рис. 9. С. Отасанъ. Медвѣжій праздникъ осенью. Пиръ послѣ убіенія медвѣдя.

写真9 オタサン村。秋の熊祭り。熊の殺害後の酒宴。

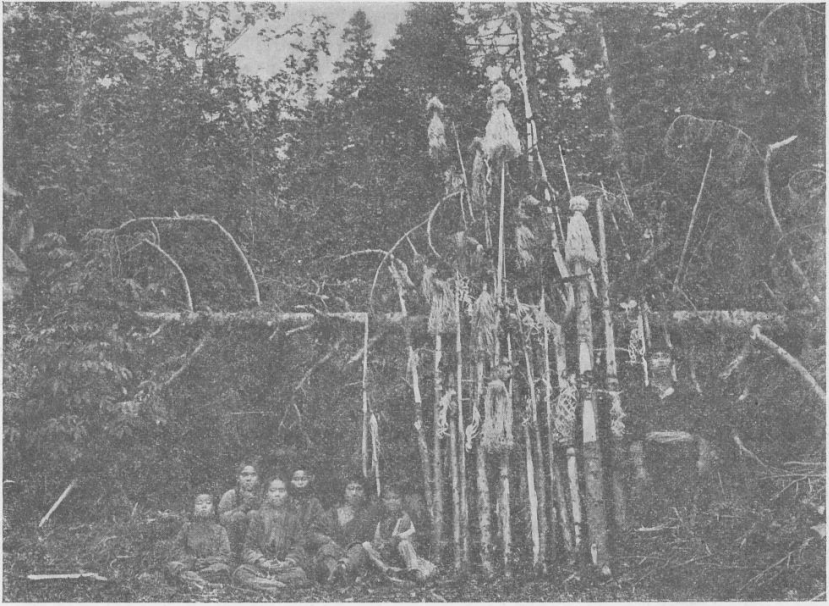


Рис. 10. С. Отасанъ. Осенній медвѣжій праздниѣ. Мѣсто въ лѣсу, гдѣ складываются медвѣжьи кости и на палки насаживаются медвѣжьи черепа. Здѣсь же устанавливаются інау въ честь бога горъ.

写真 10 セラロコ村。秋の熊祭り。森の中で熊の骨が安置され、棹の上に幾つかの熊の頭骨が掲げられている場所。ここにはまた山々の神へ捧げられた「イナウ」も何本か立てられる。

参考論文・記事

アイヌ

M・M・ドプロトヴォルスキー

本稿は、一八七五年にカザンで上梓されたM・M・ドブロトヴォルスキー著『アイヌ・ロシア語辞典』の序章第二節「アイヌ」⁽¹⁾の邦訳である。辞典は樺太島における「日露雑居期」のまさに終焉の年に公刊されたから、これは「日露雑居」下のエンチウ（樺太アイヌ）の状況を簡潔に記述する希有な作品といえよう。

ミハイル・ミハイロヴィチ・ドブロトヴォルスキーは一八三六年にニージニー・ノヴゴロド県アルザマス郡ストレルキ村の貧しい聖職者の家に生まれた。学歴はアルザマス郡神学校入学（一八四六年）、ニージニー・ノヴゴロド神学校（セミナリヤ）進学（五二年）、ニージニー・ノヴゴロド中学校（ギムナジヤ）を経てサンクト・ペテルブルグ医科・外科学院入学（五九年）。一八六五年、同学院を修了して医師免許を取得すると直ちに軍務を志願し、東シベリアへ赴任した⁽²⁾。

ドブロトヴォルスキーは、樺太島に着任した一八六七年から博士号取得試験のため離島する七二年までの5年間、軍医として勤務する傍らエンチウの間でも医療活動を展開した。アイヌ語は医療実践の中で身に着けたものである⁽³⁾。彼は辞典の記載中で日本語資料を原文引用しているから、必要に応じて日本語も修得していたと推察される。

一八七二年の帰郷以降はカザン市と静養先のケムリヤ村で過ごした。彼は咯血を繰り返す中でアイヌ・ロシア語辞典をほぼ擱筆するも、生前の公刊は叶わなかった。持病の肺結核が重篤化し、七四年十月二十四日に彼の命を奪ったからである⁽⁴⁾。享年三十八才。その遺志を継いで遺稿編纂を引き受けた実兄のI・ドブロトヴォルスキー・カザン帝大教授は翌七五年、『カザン帝国大学紀要』の別冊付録として辞典の上梓に漕ぎつけた。なお、ドブロトヴォルスキーは「続篇」としてロシア・アイヌ語辞典の執筆を計画していたが、見果てぬ夢に終わる⁽⁵⁾。

以下の本文は、『ロシア帝室地理協会シベリア支部通報』（一八七〇年一巻2〜3号）に掲載されたドブロトヴォルスキー執筆の一八六八年度南サハリン駐屯軍健康調査報告⁽⁶⁾から、編者のI・ドブロトヴォルスキーがアイヌに関する記載を抜粋し、『辞典』の「序章第二節」として転載したものである⁽⁷⁾。

邦語訳は北大附属図書館北方資料室所蔵の複写製本版を底本とした。原本は児玉家が保存と推察される。ワルシャワのL・ヴァドフスキの旧蔵印が捺された同書は、内表紙に見出される献辞によれば、ヴァツワフ・シエロシエフスキが一九〇三年の北海道アイヌ調査に際してポーランドから持参したもので、同年七月二日にジョン・バチエラー師へ寄贈され、さらに一九四〇年五月二十日には児玉作左衛門博士へ転贈されたという、頗る数奇な来歴を有する⁽⁸⁾。

なお、邦訳中の「小見出し」は原文になく、訳者の加筆である。訳注は基本的に本文中の角括弧内に収めた。

二〇一三年八月八日、札幌

注

- (1) М. М. Добровоторский, "Айны," в: *Айнско-русский словарь / Айну-русский словарь* ([Приложение к Учен[ым] Запискам] Императорского Казанского Университета 1875 г.), стр. 31-46, Казань (1875). チェーホフの『サハリン島』には本著者が「ドブロトヴォルスキー医師」として登場するから、御承知の方も多いであろう。
- (2) И. Добровоторский, "Нѣсколько словъ объ авторѣ словаря," в: *Айнско-русский словарь*, стр. 5-7.
- (3) Там же, стр. 8, 10, 11. 樺太島のロシア人にとってアイヌ語がいかに重要であるかは、本文でも言及されている。
- (4) Там же, стр. 10-12.
- (5) Издатель [И. Добровоторский], "Предисловіе," в: *Айнско-русский словарь*, стр. 17.
- (6) М. М. Добровоторский, "Южная часть острова Сахалина (извлечено изъ военно-медицинскаго отчета)," *Известія Сибирскаго общества Императорскаго Русскаго географическаго общества*, т. I, № 2-3, Иркутск (1870).
- (7) И. Добровоторский, "Нѣсколько словъ объ авторѣ словаря," стр. 8-9; Издатель, "Предисловіе," стр. 16.

(8) 内表紙に残された蔵書印と二組の献詞は、上端から中段にかけて以下のように列挙されている。«L. Wadowski/ Warszawa./ Marszałkowska,

121»; «To dear, kind Rev. John Batchelor/ from Wacław Sieroszewski/ in grateful remembrance/ of Kiū-Mororan Japan/ Jul. 2nd 1903»; «To Dr. S. Kodama/ Sapporo May 26th 1940/ John Batchelor». シェロシエフスキは一九〇三年、バチェラーの布教の旅に随行して、七月二日に旧室蘭に滞在した折、この辞典を感謝の印に献呈したと推察される (Cf. K. Inoue, “The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903,” in: Kazuhiko Sawada & Kōichi Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2: 12, Saitama, 2010)。バチェラーは帰国を決断して札幌を離れるとき、同書を児玉作左衛門北大教授へ贈呈したのであろう。

アイヌ

M・M・ドプロトヴォルスキー

アイヌ——*ainu* なる語は「アイヌの男 (*ainec*)」や「人間」を意味する——は「われらが記載する地方」一の真の土着住民である。この民は今日のわれらにとって極めて重要である。われらは己の欠乏を充たすべく、彼らの支援を常時求めねばならないからだ。例えば、旅人は概ねアイヌの幕舎 (*ユルタ*) に一夜の宿を借りる。遠距離の出張旅行中に頻発する食料払底に際しては、アイヌがわれらに米や魚を提供する。乾製魚 (*ユーコラ*) を欲するとき、われらはそれをアイヌから購入するし、網糸も彼らから入手する。われらが未知の土地を行くときは、アイヌが道案内を務め、われらを橈や舟に乗せて運んでくれることも稀ではない。加えて、ロシア人は黒貂や川獺、獣脂や日本産煙草、またその他の品々までも、通常は頗る手頃な値段で彼らから譲ってもらう。当地に在留するロシア人はさらに、われらが日本人と折衝する際に仲介語となるアイヌ語を学ぶことも余儀なくされる。この言語は当地に在留する日本人もほとんど全員が学んでいるからだ。その上、「われらが記載する地方」の地名はほとんどがアイヌ語からの借用である。したがって、われらは本稿で、医学関係で重要なことにはむろん格別な注意を払いつつも、アイヌとその言語についてやや詳細に検討する。

— 即ち「樺太島の南部」を指す。——本稿は M・M・ドプロトヴォルスキーが作成した一八六八年度報告の一部であり、そこから逐語的に正確を期して翻刻されている。したがって、ここでは「当該例のように」それが前出する記載の継続であることを示唆する表現に遭遇する——
 原編者注。

概況

- アイヌは、頭蓋骨の形状では短頭型、顔面特徴では「モンゴル人種」ニに属する。彼らの部族は——東海岸がテルペニエ〔日本統治下の多来加〕湾、また西海岸ではクタウジ〔Krauzi〔北緯50度線直下のキトウシ Kiousi か〕村をそれぞれ北限とする——樺太島南部の全域に居住する。アイヌ部族の分派はそのほかに、マツマイ〔Makmai 三〔松前、即ち北海道〕のほぼ全域と、これに隣接する諸島嶼にも在住する。当地のアイヌは、クリル諸島〔千島列島〕にも概ねアイヌが居住すると語る。クリル諸島の島名はカムチャツカに至近の島々に至るまで、これらの証言を完璧に裏付ける。例えば、シムシル〔Simusir〔新知〕〕、ケトイ〔Ketoi〔計吐夷〕〕、ムシル〔Musir〔牟知〕〕、シヤシコタン〔Šiaskotan〔捨子古丹〕〕、当地の発音では Šiōs'kotan〕、オネコタン〔Onokotan〔温禰古丹〕〕、ポロムシリ〔Poromušir〔幌筵〕〕などはすべてアイヌ語である。当地のアイヌが熟知するのは同族のマツマイ〔松前〕分派だけで、マツマイの西側^ニで暮らす分派は「サルン・ウタラ/Sarun-ūtara〔サルンタラ/Saruntara、サルンクル/Sarinkuru〕」、ソヤ〔宗谷〕やマツマイの北辺に在住する分派は「ヤウヌタラ/jauntara〕ないし「サヤ・ウンタラ/Saja-ūtara〕、そしてマツマイの東側に住む分派は「チュウカ・ウンタラ/Čuwka-ūtara〕とそれぞれ呼ばれている。マツマイのアイヌは当地のアイヌを「レプン・モシリ・ウタラ/Trepun〔正しくは Repun]-mosiri-ūtara〕（レプン・モシリは樺太島のアイヌ名）と称する。われらはサハリンにおけるアイヌの実人口を確実に把握していない。日本人から聴取した情報によれば、さまざまな日本人集落に被雇用者ないし債務者として登録されているアイヌは、男女合わせて2885人である。なお、テルペニエ〔多来加〕湾岸の
- ニ 『医学事典(Dictionnaire de Médecine etc.)』で「人間 (Homme)」の項目を執筆したド・ニュスタン (de Nysten) は、アイヌをコーカサス種 (espèce) のクリル人種に分類している——原注。
- 三 ドプロトヴォルスキーはこの語を、別の手稿では Maomaj と表記している——原編者注。

ウスロ (Usuro) 川以北に在住するアイヌは日本人の支配を免れていたから、この数値には含まれていない。ルダノフスキーの集計によると、サハリンには男女合わせて2418人のアイヌがいた。ほとんどすべてのアイヌ村落を熟知し、大方のアイヌとも個人的面識すら得ていた通訳のヂヤチコフが収集した情報によると、サハリンのアイヌ人口は合計で2050人。この最後の数値が、真実に最も肉薄するようである。昔のサハリンではアイヌ人口がはるかに膨大であった。ブツセ「日本統治下の遠淵」^{【とおふも】}湾の近辺だけでもアイヌの大村落は八ヶ所にあつたのに、昨今では三ヶ村となり、全3村を併せても7幕舎が見出されるのみである。内淵(ナイプチ)河口の周辺にはかつての村落の痕跡があまり認められる傍らで、現存するのは1村、2幕舎だけ。アイヌ部族根絶の主たる原因は、古老らの話によれば、彼らが以前に繰り広げた殲滅戦争だという。例えば、200人の住民を擁したポロペトゥンコタン(Poropetunkotan)村——その場所に今はムラヴィヨフスキー哨所「日本統治下の遠淵」が所在する——は度重なる戦争で消滅した。アイヌらは今なお、あるときはタライカ・アイヌとオロツコ「現ウイльта」の間で、またあるときは内淵河口においてナイプチ・アイヌと松前の軍勢との間で展開された流血の死闘や、アイヌがギリヤーク「現ニヴコ」に殲滅されたムカラ・エンルム(Mukara-entrum「正しくは-entrum」=斧の岬)の激戦を記憶している。恐らくは、石斧や石鏃やその他の石器時代の遺物を当地に残したトンチ(Tonci)も、勇猛果敢なアイヌに恐れをなして当地から立ち去つたのである。この部族の根絶をめぐるその他の原因は数あれども、主なものを挙げるとすれば、アイヌ語で「日本の病」と称する梅毒、壊血病や急性発疹(麻疹)、猩紅熱や疱瘡である。グレーン[*P. von Gienh*]によると、疱瘡は至近の10年間にサハリン北部の一連の村落を全滅させたという。加えてアイヌ女は少産であつて、生涯の出産件数は平均3〜5件、8回以上の出産経験を有する女は皆無である。

形質

アイヌは低身長ながら頑丈な体軀を有し、皮膚の色は完璧に浅黒いものの、やや黄色調を帯びる。人生の大半を暮舎内の極度に微弱な照明の下で過ごす女たちの顔は鈍い黄色を呈し、紅顔のアイヌ女は極めて稀である。当地のアイヌは額と頭頂部を剃り上げ、頬鬚の上部を帯状に剃るから、両の耳許には一本ずつ小さな毛髪の房ができるが、これを「顎鬚の脚」(レヘケム/lexkemá [正しくは rexkemá]) と称する。後頭部の頭髮は裾を丸く刈るが、肩口まで垂れ下がる。ほかの分派のアイヌらの鬚はまた別様に剃り上げられる。アイヌの女は額も頭頂部も剃らぬが、その長い頭髮は、やはり裾を丸く刈られて肩口に垂れる。アイヌの間で縮れ毛は稀であるが、顎鬚は半ば縮れている。頭髮の色は鴉の翼のように漆黒ながら、顎鬚の間には赤茶けた色調も認められる。眼裂はやや上がり気味、唇は分厚い。女は十才以降、日本製の鯨油用煮沸釜に付着した油性煤で両唇部を着色(シヌイェ/sinuje [「刺青」])してゆく。そのためにはまず唇に小さな切り込みを施す。唇に煤を擦り込むと傷口に激痛が走って腫れてゆくから、女はしばしば口も開けられず、三〜四日は専ら管を介して流動食の摂取を余儀なくされる。刺青は年間に1〜4回実施されるが、若いほどその回数は多い。当初は上唇の中央部のみが着色されるだけで、刺青はその後ゆつくりと両唇部の全域に広げられてゆく。老女には刺青が施されないが、褪色した古い傷跡のせいで彼女らの唇は鉛色を帯びる。

衣文化

アイヌの衣装は多様でなく、概ね短めでゆつたりとした各種長衣からなる。シャツの役を果たすのは、満洲・日本・ロシア産の生地でこしらえた膝までのガウン(チンパイ/čimpai ないしエアラ・イミ/ear-imí)である。このガウンの上に羽織るのが「アヘルシ/artsus」[正しくは axrus]と称される別の長衣。「アハルシ」の素材は、南サハリン産樹種のカランニ(karānni [「アカ

「ダモ」の木」とオピウニ (opíwuni「オヒョウ」の木) の鞆皮である。カラニ製の長衣が赤味を帯びるのに対し、オピウニ製は黄白色を呈する。女は「アハルシ」の代わりに、概ね魚皮製長衣——鮭皮製の「チュフ・チエ」・カヤ/čuf-čep-kajā か、樺太鱒の皮で縫製した「ゲモイ・カヤ/genoi-kajā」——、稀にはアザラシ皮製の長衣も着用する。寒気が増してくると「アハルシ」の代わりに、あるいはその上に、アザラシ皮製の長衣か長裾上着 (カフタン) を羽織るが、冬場には犬皮の長衣を着用する。今年着任した日本の役人たちはアイヌの氏族長らに、日本軍将官用マント (チョ・フルテ/čö-furite やケ・フルテ/ke-furite) を与えた。長衣のほかには、ズボン (オヨー/ojju [正しくは oio] ——ギリヤーク語)、頗る稀にしか使用しない犬皮製の長い膝当て (オボム/obomu)、脛を蔽うのみで足部の欠如する特製靴下 (ガンパキ/gampaki)、頭部がイトウの皮やアザラシ皮仕立てで胴部は——前者がアザラシ皮製、後者では犬皮製——の長靴も使用される。暖季には頭に何もかぶらぬが、寒季や強風の際は首にマフラー (レクトウンベ/tekutumbé [正しくは tekutumbé]) を巻き、頭にはターバンを彷彿させる長いスカーフ (センカキ/sen'kaki) を巻きつけるか帽子をかぶるが、冬場には帽子に長い耳当ても取り付ける。道中は藁か草本類でこしらえた履物 (ワランヂ/warandži) を、また村内では泥濘期に木靴 (ピラハカ/piraxka) も使用する。アイヌの長衣は腰を革帯で締めるのが通例で、腰帯には木鞘に収めたナイフが常時吊るされ (在宅の女は概ねただ一つの鞘を携帯する)、また火口・火打石・火打用銅片を収めた小袋も下げる。道中で腰帯に吊るして携帯するのは、——男用がイノソク (inossoku) とサ・マキリ (sa-makiri)、女用はエピリケ (epirike) とオコレ・エピリケ (okore-epirike) と称される——ナイフ二丁と、——キセルや食事用箸、結び目をほどこした鹿角 (オホキタ/oxkia) を収めた——木製ケース (イリモロ/irimoro) である。女たち、なかなか若い女や娘らは 20 ～ 70 個もの銅製の板や環で装飾された腰帯を着用する。彼女らは両腕に腕輪、手指には幾つもの指抜きや宝石入り指輪をはめる。両耳に大小様々なリングや耳環を下げ、胸には革製頸飾りやメダル様の鉄製装飾 (セハバ)

seppa「日本刀の鐔」を懸ける。子供の衣服には、大人たちも好んで使用する明色のボタンが幾つも縫い付けられ、子供の額にはしばしば、南京玉で刺繍された三角飾り（ホチリXoxiri）が垂れ下がり、腰帯には銅製ガラガラ（コンリKoriko）も吊り下げる。櫓で走行するときは、ガラガラを犬に結び付ける。概してアイヌは装飾好きである。袖や襟や裾の縁は黒地の帯で装飾されるのが通例で、モルドヴァ民族の事例をやや彷彿させる飾り布が襟の背後に垂れ下がることも珍しくない。装飾はまたターバンにも帽子にもミトンにも、要するにアイヌの細工物のほとんどすべてに施される。

住文化

アイヌの風貌と衣装をめぐる記述を一段落させて、その習俗の叙述に着手したい。アイヌの村々はほとんどすべてが海辺の河口に立地している。集落内の戸数は1戸から20戸の範囲に収まり、大半が2戸、3戸、4戸からなる。幕舎は樹皮と板で構築され、外壁と屋根は葦か菅（^{すげ}）で蔽われる。通常は一軒の幕舎に一家族が暮らす、二家族のこともある。最も効果的に風から防御された側に設置される戸口を入ると、密閉されて暗い低めの廊下があつて、そこには仔犬どもが収容され、犬の給餌桶や薪も置かれている。幕舎の戸口は薄板を繋ぎ合わせた引き戸、床にもやはり薄板が地面に直接敷き詰めてある。両側の壁際には、細長くて低めの板床が連なり、その上には莫座が延べられる。入口の側と、それに対面する側には板床が設置されない。これらの板床には、さまざまな小物を収納する引出しが作り付けてある。幕舎の両側の板床に近接して方形炉が切つてあるが、それはむしろ、単に幾つかの角材で仕切られた床なしの場所と述べる方がふさわしかろう。小さな幕舎では唯一つの炉が屋内の中央部に設置される。炉内では昼夜を分かたず、火が常時維持される。切妻屋根の真ん中には――幕舎には天井がない――二つの天窓が煙出し用に設けてあり、そのうちでは風下側の天窓だけが常時開かれている。幕舎内には窓がないから、天窓はまた採光装置も兼ねる。煙出し孔があるにもかかわらず、幕舎内には煙

が大量に充滿して目を強く刺激し、朝方には一酸化炭素による激しい頭痛に襲われる。入口の左側の右隅に、家神へ捧げられた犠牲（チセ・イナウ *tise inau*）が立て掛けてある。これらの犠牲は縮れた削り掛けで飾り立てた数本の棒からなる。同じ隅の炉辺には火の神へ向けた犠牲（ウンデ・イナウ *undi inau*）も立てる。通常は炉の周りに莫蔭が延べてあつて、そこで一家が団欒する。イナウのすぐ脇が最年長者の定席で、女主人は入口の側に坐する。炉の上には丸太を組んだ方形棚が一、二基吊り下げてあつて、衣類を乾かし、魚を干し燻蒸するために利用される。炉の上にはまた吊り鉤も下がっていて、煮炊き用大鍋が架けてある。入口の側には幾つかの水桶や汚水桶が立ち並び、反対側には米やその他の食糧を収めた日本製小桶も並置される。板床の上に棚や、またさまざまな家財道具を載せるための狭い飾り棚さえ作り付けることも珍しくない。壁面には獣油を収めた内臓袋や紐類や柄杓などが吊るされ、また神々へ供犠された鳥の頭を付けた棒が壁に刺しかけてあることも稀ではない。幕舎の近くには、犬を繋ぐための小柱や、野鼠の被害を防止するべく4本の小柱の上に建てられた乾製魚用の丸太造り倉庫（プウ *pu*）が立ち並び、また熊祭りに向けて飼育する熊の檻（カムイ・チセ *kamui-tise*）も、しばしばそこに見出される。通常は村の近くに、古い「イナウ *inau*」を納めるべく倉が建てられる。アイヌは越冬用に堅穴住居（トイ・チセ *toi-tise*）、ないしは狭小な住居（チュ・チセ *cut-tise*）を森の中に建てることもあり、酷寒時にはそこで暮らす。住居から遠く離れた所ではしばしば宿泊する必要がある場合、アイヌは樹皮で小ぶりの仮小屋（クチャ *kutsa*）を造営する。漁場の近くには魚の燻製小屋や鰯用乾燥小屋を建てる。アイヌはこれら以外の建造物を有さない。アイヌの住宅では室温が外気温とほぼ等しく、冬場には零下15度ないしそれ以下にまで下がることもある。アイヌが就労していないときは何時間も、また幾日も炉辺に坐しつづけて、満洲産か日本産の、あるいは自家製の木製キセルをひっきりなしに燻らせつつ無為に時を過ごす。一家の女主人だけは食事の準備と家族への配膳（アイヌは一日に4〜8回も食事をする）、犬の給餌、衣

服の縫製や機織りにひねもす忙殺されつづける。幕舎内では無数の蚤が跋扈するから、ロシア人の多くは、たとえどんなに疲労困憊していたとしても、そこでは安眠できない。アイヌ自身もまた然りで、もし気温が許すならば、男どもは好んで、秘部をきっちり蔽つてくれる褌（テバ/lepa）一丁の素裸で炉辺に坐しつづける。寒季には「孫の手（シキキ・キ・ニ/siki-「正しくは siki-ki kin」）」を借りて蚤の攻勢から逃れる。アイヌの方も、ロシア人の家宅ではロシアの蚤に不慣れのためやはり安眠が叶わない。アイヌは、己の家にはびこるのはすべて犬の蚤だから人様をさほどひどくは噛まないという理屈で、ロシア人の蚤は危険と見做すわけである。

食文化

アイヌの主生業は生き延びることを旨とする。アイヌが日本人の下で就労せぬような場合は、一夏を通して漁撈に、また越冬用の苳や草本類や根茎の採集にも邁進する。冬場には黒貂・川獺・アザラシ・トドを捕獲する。女たちが専念するのは亜麻や蓴麻（いんげん）からの糸紡ぎ、機織り、衣服・履物の縫製、魚の内臓抜きや燻製・乾燥作業（アイヌは魚を塩蔵加工せず、塩も全く食さぬが、多くの者は汁に海水を加える）、魚皮の加工、草本類や蕈を用いての蕈座製作、そして食用草本類や根茎の採集である。

魚以外でアイヌが食するのは、日本人がもたらす米、あらゆるユリ科植物やハクサンチドリ「温帯産の野生蘭」の根、多くの草本類、各種二枚貝（総じて当地産の牡蠣と帆立貝は頗る美味である）、海栗（うじ）、海鼠（なまこ）、犬、熊、アザラシ、トド、そしてまた海岸に漂着する鯨。行者大蒜（きょうしやうじやにんじく）（キト/kitō）の炙った若葉、鯉の卵とあえて食される茹でた春季花の鱗茎根（トベ/tomā [即ち「蝦夷延胡索（えぞえんこ）」の塊茎]）、汁に入れた鯨の尾鰭（フンペ・ケマ/xunpe-kena）、生食されるイトウの胸骨の軟骨曲柄（オヤサベ/oiasape）は格別な美味とされている。蛸（アホコバ/axkōpa）もまた美食の一つに挙げられる。だが主

食と言え、とりわけ冬場には唯一の食料でもある——野天干しの、あるいは炉上で干すか燻製にした——「乾製」魚を描いてほかにない。夏場にはこの乾製魚が「見事な芳香」を醸して、私には耐えがたい悪臭と思われるのだが、わが軍の兵卒らは旨そうに舌鼓を打つ。アイヌは米から自力で、アルコール含有率の異常に低い特別なヴォトカを醸造する。日本製の酒（サキ）も有し、またロシアの「スピルト」「純アルコールに近い強酒」さえも生のままで飲む。アイヌはわれらの酒に病みつきで、機会に恵まれるや酔い潰れるまでとことん飲みつづける。私が彼らとの付き合いの中で遭遇した酒を嗜まぬアイヌはたった一人だけであるが、彼はどうかやら病気のせいで飲めないらしい。女たちは余り飲まぬとはいえ、彼女らの間にもわれらのスピルトに目のない者が実在する。酩酊した男らは民族の踊り（タ^ハカラ^ヤカラ）を舞いだすのが常で、その際は歌詞なしの唄（ム^ノツエ^ホ）か、歌詞付きの歌謡（ユカラ^イ）を披露する。「ム^ノツエ^ホ」で聞かれる咽頭音や鼻音はまことに聴き苦しい。アイヌ男の舞う姿は、同時に歌詞なしの唄も歌うようだと、まさに「セルガチの熊さんダンサー」^四そのものである。

習俗

アイヌの習俗をめぐって言及さるべき事柄は以下の通り。アイヌは次の3方式で挨拶を交わし合う。（1）諸手方式（ウ^ムライ^バ／umurai^{ba}）——当事者たちは親指の先を互いに突きあわせ、4本の指を交互に絡み合わせて挨拶する。（2）揚手・撫鬚方式（イナ^ンカラ^ハテ／inankarate）——両手を軽く持ち上げて顎鬚を一撫でする。（3）蹲踞方式（ウ^{ラン}カラ^バレ／urankarabare）。3方式はいずれも独創的（sui generis）で、専らアイヌ部族に独特な事象のように思われる。最後の蹲踞方式ですら日本式

四 著者の生まれ故郷であるニージニー・ノヴゴロド県セルガチ郡の郡都セルガチ市近郊にあるクリウチエヴォ村は、熊使いたちの出身地として有名だった。彼らは熊に踊りなどを仕込んで、その芸を披露しながら国内各地を巡業していた——訳者注。

とは全く異なる。大半の男は一人の妻を有する。ただ僅かな数の富裕者だけは別々の村に、妻を一人ずつ保有する。そのような場合、男はそれぞれの村で独立世帯を営む。妻の不貞に対して、夫は愛人から「償いとして」一刀を受け取り、再度の不貞でも愛人は別の一刀で片が付けられるが、さらなる不貞が発覚するや、夫は愛人を殺す権利を獲得する。被害者のアイヌは復讐する代わりに、首を吊って果てるか、より稀ながら己の腹を掻つ切る（ペ／*pe'e*）方をむしろよしとする。そのような場合は、彼の家族が加害者から2〜4振りの刀と2〜3着の衣装からなる償い（アシンベ／*asimpe*）を受け取る（加害者は専ら日本の役人たちである）。同様な償いは殺人に対しても科される。満洲刀は一振りが黒貂10〜15疋に相当するから、このような償いは富裕者にとって格別に重いものではないといえ、アイヌの間では依然として殺人が頗る稀である。アイヌは、もし債務者が期限までに皆済せぬならば、彼からは糸一本に至るまで捲き上げる権利（モナシ／*monasi*）を有するといわれるにもかかわらず、彼らはなかならずギリヤークとの商取引では驚くほど不誠実である。

特記すべき慣習のうちで、医者にとって興味深いのは次のような事例である。洗顔の習慣を有さぬアイヌは、顔をときたま、時には両目だけを——通常はうす汚れた——濡れた布切れで拭うのみ。体もやはり洗わず、入浴することもほとんどない。新生児には歩き始めるまで名前を与えない。その後も十才を迎えるまでは固有名を授けない。十才以降に与えられる本名は、最近亡くなった祖父（あるいは祖母）の令名を継承すべく改名されるような事態——この習慣はアイヌ語で「ウレイケシコロ／*urêkes'koro*」と呼ばれる——が出来しなければ、終生保持される。ときには二つの名を持つ者もいる。アイヌは己が何才であるかを決して口外しない。年齢については親族も、また他人も語らぬであろう。もし医者が、正しい治療を担保するため病人の年齢を知ることが必須だと告げるならば、病人は遠回しな表現で説明するであろう。例えば、「ロシア人がクスン・コタン（Kusun-kotan [日本統治下の楠溪町、現コルサコフの一部]）にやって来た頃、わしはまだ少年だった」、ある

いは「わしにまだ白髪（しらかみ）はなかった」のように……。それは、己の年を告げてしまうと、必ずや寿命が縮まるだろうという俗信にもとづいている。多くの者は死者の霊を怒らせることを懼れるから、死者についてもやはり口を閉ざし、己の年齢のときと同様に「知らない」と言い逃れるのだ。「誰それ」はどうしているかとしつこく問ひ質されたアイヌは、もしその人が死んでいるならば「マコロ（makorō）」（寝ている）とか、「シンマコロ（simmakorō）」（働かずに休んでいる）と答えるであらう。但し、アニワ湾岸の住民らだけは「ライヘマカ（raijemakā）」（正しくは *raijemakā*）（死んだ）と率直に語る。病気のアイヌは髭を剃らず、髪も切らない。重篤の病人に対して、ほかのアイヌらは挨拶すら交わさない。アイヌが臨終を迎えると、親族や知人は病人の最後を見届けるべく（イカオネカ（ikāoneka））全員が集合する。これらの習慣が病人の心理状態に甚大な影響を及ぼすことは、改めて言うまでもない。治療中の病人は、己の病状改善を黙して語らない。そこには、たとえ医者に対してであれ、病状の改善を告げたならば病気は必ずや悪化するだろう、という俗信が関与している。つまり、医者や己の客観的診断に頼るべきで、自分の病状は相変わずだと語る病人の話を鵜呑みにしてはならない。もし同じ村で二人のアイヌが同じ病に罹ったとするなら、双方に同じ薬を与えてはならない。彼らの一人は必ずその薬を服用しないからだ。そこに介在するのは、もし二人が一度に同一の薬で治療されると、一人はよくなるのに、今一人の病状はむしろ悪化するという俗信である。

信仰

アイヌの宗教は物神崇拜（フェティシズム）に遡及する。そのように断ずる所以は、彼らの間に不可視的存在や聖獣の諸表象が今なお健在であるところに求められる。それはともかく、今日のアイヌは無数の——善悪（よこ）のもの——不可視的存在を神格化している。神々の本質について、彼らの生態について、また彼らの相互関係についても、アイヌらは一切語ら

ない。ただシヤマンだけが厚顔千番にも、神々を実見し、その声も聴くと語り、アイヌたちは彼らの言うことを盲信する。重要な善神は以下の通り。山々の神（ヌブリ・カム^イ/nduburi-kamui）、海の神々（アト^ツ・カム^イ/atu-kamui）、天体の神々（チュフ・カム^イ/čuf-kamui）、家付きの神々（チセ・カム^イ/čiše-kamui）、炉の神々（ウンヂ・カム^イ/undži-kamui）、シヤマンの神々（トゥス・カム^イ/tus-kamui）、造物主（コタン・カラ^ベ/kotan-karappe）、地下神（ト^イ・カム^イ/toj-kamui）、漁撈や狩猟の神々（コ^イキ・カム^イ/koiki-kamui）、守護の神々（シカ^シマ・カム^イ/sikás'ma-kamui）。個別の国や島や丘、あらゆる村や場所は各々が守護神を有するから、守護にかかわる神々は無数に存在する。各善神の役割は、その名称からおよそ見当が付くので、ここではただ「ト^イ・カム^イ」は地震を起こさせると付言するだけに留める。アイヌはこれらの神々の姿を概ね承知していない。但し、「炉の神」だけは愛らしい姿の少年として、夜な夜な灰の中から現われるし、月神の顔も晴れた宵には月面に見ることができ。周知の通り、ロシアの民衆は月面により複雑な情景——アヴェルを殺そうとするカイン——を見出している。善神たちには犠牲が供される。

悪神に区分される主な神々は、あらゆる病気をもたらす「オヤシ/ojasi」、人間を精神錯乱させる「ウエン・オヤシ/wen-ojasi」、強烈な音を発する「カンナ・カム^イ/kana-kamui」（雷神）である。悪神たちには供儀を行なわない。しかしながら悪神は善神から独立しているので、アイヌは悪神らのもたらす災難から逃れるべく一連の——概ね滑稽な——方策を案出している。ここでは幾つかの方策に言及する。アイヌに酷似する姿の「オヤシ」が夜半に、もし村中をくまなく徘徊するならば、この村には諸々の重病、なかんずく肺の病が発生するから、これはまた「咳の神（オンキ・カム^イ/onki-kamui）」とも称される。幸いにも「オヤシ」の接近は特別な音を伴うので、アイヌらはそれを聞きつけるや、炉辺のイナウの脇に横たわる石（アンチ/anci）を直ちに火中に置くと「オヤシ」は退散する。アニワ湾岸で聞かれる「アンチャ/ancı」恐らく前出の

「アンチ」に關係するであろう」が、ほかのアイヌの許では「ウンヂ・クスリ/undži-kisuri（火の薬）」と称される。「ウエン・オヤシ」——別称「ウエン・カムイ/wen-kamui」——（悪霊）は、旅人を順路からおびき出し、道に迷つて餓死するように仕向けるから、ロシアの「昔話に登場する」「レーシイ（森の精）」の役割を幾分かは果たしている。もし自分を名前と呼び、道を外れるよう誘惑するこの精霊の声を聞きつけたなら、アイヌは「ハンカケマー チェエヘ クニヌキ/xanka kema - teex kuini nu ki」——逐語訳「夜にわれを嚇すなかれ」——という呪言を唱えねばならぬ。すると悪鬼は退散する。この精霊は、夜中の路端に火を並べるか、後ろから迫いすがるという二通りの遣り口で、人間を精神錯乱へと追い込む。夜半の路上に悪霊の火を見たアイヌは、犬の片耳を切り落として、その血を顔に塗りたくるならば火は消えてゆく。臆病なアイヌはそれでも大恐慌をきたして、最寄りの幕舎に駆け込むや卒倒してしまうことも珍しくなく、人々は彼に冷水を浴びせるか、腕からの放血さえも試みる。もしある男が夜中の路上で悪霊の足音を背後に聴きつけると、下着を脱ぎ、二丁のナイフを鞘から抜き、身を屈めて、両のナイフを後ろに向けて振りかざしながら突進する。「ウエン・オヤシ」はアイヌのナイフに恐れをなして——ひよつとすると、この光景を恥じてかも知れぬが——退散する。アイヌらは、なにかんづく精神錯乱は不治の病であつて、突然死を招きかねぬとも見做すだけに、これには恐怖を募らせる。発狂者は家宅で暮らさず、森を彷徨する中で、自殺か餓えで頓死を遂げるであろう。

供儀

アイヌが善神たちに捧げる犠牲はさまざまである。アイヌが山々を踏み分けてゆく折は、山々の神へ向けて一摘みの煙草を投じる。酒を飲む際は、口髭を支える役を務める筈（イクニシ/ikunish「奉酒筈」、北海道では「イクパスイ」と称する）の先を「酒に浸けて、掬えた一滴を村の守護神に向けて供儀する。『犠牲に供した』鳥の頭については既述の通りである。加えて、毎年

十一月には、彼らが山々の神の息子と見做す熊を殺して、同神に対する贖罪の供儀も行う。アイヌたちは夕刻と夜のほとんどすべてを踊り明かし、かつ飲み明かしたのち、朝一番では熊の檻(カムイ・チセ/kamui-tise)を四方八方から取り巻いて、その死を悼んで慟哭する。大半は頭を蔽ったまま地面に大の字なりに伏せるが、跪く者も少なくない。滂沱として流下する涙と、氷柱のように凍りつく鼻水から推して、アイヌたちが心底から泣いていることは明らかである。午前十時頃、熊の腹の周りを革紐で縛って檻から解放し、幾つもの小冠^五をかぶせ、正面舞台へと連れてゆく。半円状にしつらえて膨大な数のイナウで飾り立てられた同舞台には、豪華な絨毯や肩掛け、スカーフや黒貂「の毛皮」も添えられる。この半円の中央には熊が、あまたのイナウで飾られたY字形の二本柱「の間」に繋がれ、弓で射殺される。数名の男がその脇に伏して、今を最後と慟哭する。祭りの締め括りは、この熊の肉を食する会食と、改めての酒盛りである。だが、アイヌが最も頻用する犠牲は、縮れた削掛けで装飾された大小様々の棒(イナウ)であるが、イナウの寸法は2ヴエルシヨーク「約9^{サセ}」から1・5サージェン「約320^{サセ}」までの範囲に収まる。神々に供儀されるイナウは、それぞれが別途に作られる。そしてすべてのイナウには人体の諸部位が見出される。例えば、イナウは頭(エプシシ/epusis、イナウ・サバ/inau-saba)、頭髮(イナウ・トゥ/inau-tu)、脳天(イナウ・エトホ/inau-etoh)、耳輪を付けた両耳(ウ・ニンカリ・コロ・イナウ/u-nin-kari-koro-inau)、首(レクフ/trekuf「正しくはrekuf」)、両手(テキ/téki)、胴体の前部(コトロ/ktorô)、体毛(ヌサ・コトロゲ/nusa-ktor[ogé])を具えている。「頭なしのイナウ」を仔細に観察するうちに、それは人身供儀の残滓ではないか、という想念が私の頭をよぎった。嵐に際会して海へ投ずる「海のイナウ」の形姿や、大きく抃げたその両手や、細かく刻まれた腹部は、聖書に登場する預言者イオ

五 私(は、サムバクス(Sambaks)という名のナイエロ(Najero)「日本統治下の名番(ナヨリ)、現ペンゼンスコエ」のアイヌを治療する機会があった。彼は熊祭りの際に小冠をかぶせる作業に従ったとき、熊に指先を噛み切られたのである——原注。

ナ「ヨナ」の物語を彷彿させる。アイヌら自身は恥じて、そのことを語るのを憚るが、アイヌのすべての分派のうちで大昔に食人者（ウンカヨ/*unkajo* [正しくは *unkajo*] だったのは、チュウカ・ウンタラ（*čiwka-untara* [即ち北海道の「マツマイ松前」の東側に住む分派]）だけだと断言する。アイヌは不死の精霊（ラム、*ramax* [正しくは *ramax*]、南のアイヌではラムチ/*ramči* [正しくは *ramáci*]) の存在を受け入れており、これらは死後に「ポホナ・コタン（*páno-ko-tan* [正しくは *poxna-ko-tan*]) —— 逐語的には「下の村」を意味する——へ赴くと考えている。この村はどことなくイスラム教の天国を思わせるし、同時にまたロシアの地獄も彷彿させる。善人たちはそこであらゆる肉体的快楽を享受するが、悪人らは、よく知られる「最後の審判」の絵さながらの責苦に苛まれる。「ポホナ・コタン」での昼夜の交代は、この世と真逆であって、この世が昼のとき、あちらは夜、逆もまた然りである。動物のうち「ポホナ・コタン」で暮らすのは犬だけ。アイヌは熊の死後の住処を森（ヤマ・コタン/*jamä-ko-tan*)、アザラシとトドの場合は海（アトツィ・コタン/*atuj-ko-tan*) にそれぞれ割り振る。それ以外の動物は死後の生命を有さない。

医療

アイヌの医療は十分に原始的であり、私がかつてニージニー・ノヴゴロド県の村々で占い師や呪医から聴取したものや、ヒルシエル博士がその著書（*Compendium der Geschichte der Medizin* [医学史概論] von Dr. B. Hirschel, 2 Aufl. 1862, p. 17-34）で記述するような医療とも何ら異ならぬが、細部に些細な違いが認められることは言うを俟たない。病因論に関しては宗教に関する一論文を参照した。発病者は直ちにイナウをこしらえ、それを守護神へ犠牲に供する。同様な犠牲は治療後にも捧げられる。もしイナウが有効でなければ、シャマンを招いて治療を依頼する。シャマン（トウス・アイヌ/*tsu-äinu*) はアイヌの間で神官・奇術師・呪医の役割を演じるから、特別なイナウ（タクサ/*takusa*、ウエレタクサ/*weretakusa*、トウス・イナウ/*tsu-inäu*) を製作し、手太鼓（カチョ/*kacö* [正しくは *kacö*]) を手にすると、夜間に火を落としてから巫儀に着手し、シャマンの神々（トウス・カムイ

tsu-kamij) を呼び寄せる。これらの神々が、病人の治療に用いるべき薬を彼に告げる。アイヌらは己のシヤマンたちについて、占い師や奇術師をめぐつてわれら「ロシア」の人口に膾炙するものと同様な、奇想天外な話を物語る。例えば、シヤンチャ (Sianča) 日本統治下の落合、現ドリンスク) 村のペプトウ (Pepu) は、底の抜けた桶で水を汲んで来たり、キセルを打ち砕いて口に含んだあと、完全無欠なものを取り出したり、弓で己を射させたあとで、観衆の着衣の中から矢を見付けたり、内臓から肉塊を吸い出して、それを病として披露する……などなど。クスンコタン「桶溪町」のシヤマン、シルブシシ (Sirubusis) は先頃、死せる乙女の魂を、冷水の入った碗からその肩口に注いで、彼女を蘇生させることまでやってのけた——魂はシヤマンだけに見えるもので、小さな小鳥の姿で心臓の中に宿るとされている。アイヌが罹患する主な疾病は以下の通り。なかんずく膿漏性結膜炎 (conjunctivitis blepharitis) と血管角膜炎 (keratitis vasculosa) のような眼の炎症とその諸後遺症、耳漏、咽頭炎や気管支炎、胃腸炎、肺結核、瘰癧^{ろいれき}、壊血病、淋病、梅毒、疥癬、癰(フルンケル)発疹、吹出物、リウマチ、神経痛。禿頭症はアイヌの間、なかんずく男の間では極めて頻繁に認められるが、その原因はさまざまである。高齢者は極めてしばしば白内障を患っている。春先には一連の村々で眼や消化器の炎症が集団発生することがよくある。冬場には、食糧不足から壊血病が猛威をふるうことも珍しくない。アイヌは歯茎の壊血病 (チアス・デ・シアテ) を、拘縮を伴う脚部の壊血病 (チオネ・シオン) から、また第一期梅毒 (カサ/カサないしニシボン・アラカ/nispon-araka = 日本の病) を、性質梅毒 (ポロ・アラカ/poro-araka = 大病) から、それぞれ区別する。最後の梅毒に至っては、これら二種の疾病間の因果関係さえも彼らは承知していない。トゥナイチャ (Tunača) 日本統治下の富内(とんない)、現オホーツコエ) の近くで会った若いアイヌは、崩壊したゴム腫由来の膨大な腫瘍が右の肩甲骨、左肩と右前膊部の内表、右鼠蹊部、双方の脛にまで転移していた。そのようなゴム腫の幾つかについては、腫瘍の周囲を触診することができた。患者は3年前、細君から「カサ」「即ち、第一期梅毒

毒を貰っていた。細君はかすれ声で話していた。私は、彼女の口蓋垂に大きくて深い腫瘍を見出した。双方の乳房にもやはり腫瘍があつたのに、彼女は見せてくれなかった。病因は明らかであるにもかかわらず、患者（夫）は己の「ボロ・アラカ」が「カサ」とは全く無関係で、「大病（ボロ・アラカ）」は大昔からあつたが、「カサ」を自分らの許へもたらしたのは日本人であると断言して憚らない。畸形の症例としては、兔唇と下肢湾曲に遭遇した。私は一八六七年末、無頭の畸形児を出産したナイエロの若い女（コセンコランマ/Kosen koramma）の三日遅滞後産を治療するという、興味深い機会に際会した。

アイヌが語るところから判断するならば、この事例は、サンチレールの分類による第一級無頭症、即ち「アセファール[acéphale]」に帰属させるべきである（*Traité de Tératologie* [畸形学概論] par S.G. Saint-Hilaire, tom sec, page 337）。アイヌの薬剤で比較的注目に値するのは「イケマ/ikema」である。それは樺太島の南端部にだけに自生する山岳植物の根であるが、中国の高麗人蔘（ジエンシエン）やロシアの伶人草（ツァーリ・トラヴァ）に匹敵する、真正正銘のアイヌの万能薬である。これはあらゆる疾病に効き目があるものの、肺病にはなかならずく有効である。加えて、イケマは黒貂・川獺・熊の猟でも誘引剤として使用され、ただこれを軽く噛んで帽子の中へ数回吐きだすだけでも、おびき寄せられた獣は、仕留められるまで決してその場から逃散することがない。アイヌが食用に供する脂っこい白粘土（チエトイ/cetoi、あるいはケトイ/ketoi）は、攪拌を重ねて水に溶かした溶液が吐剤としても用いられる。高熱と悪寒を伴う各種熱病（シラツテ/sirate）で舌が乾き、白苔が生じた場合は、舌の上に獣脂を載せ、それを篋で動かして舌の表面をこする。腎臓病（キノピ・アラカ/kinopi-araka）の治療では犬の腎臓を食させる。壊血病の治療薬となる「イチヤラプ/icárapu [= ニじやく]」と行者大蒜（キト/kitó）は、いずれも当地のアイヌや日本人らが一年を通じて好んで食する野草である。下痢の際は「イルレ/irure（あるいはエル/eru）」[酸模^{すいご}]を食べる。咳止めには、芳香のある「ヌフチャ/núxča」[藏薹^{さいがい}屬]や「フラウエン・キナ/xurawen-kiná（フラ・ウエン・チボク

「xura-wen-čipokū」]「樺太人參」の煮出し汁を飲む。肺病治療では、汁に入れた円錐状の八面体魚「イシサハチ^エ/jisaxčëb「八角か」を食するか、イトウの胆嚢（メギ^ム/meg'um）で胸を^ツするか、「タラマニ/tarāmani」]「芯の赤い針葉樹の灌木」の温湿布を施す。蛇に噛まれた場合は温湿布に「オヤウ・キナ/ojaw-kinà」草を収める。梅毒の治療では「ウライネキナ/urānekina」]「ナツバ」の煮出し汁を飲ませる。傷口には「アネカニ/ānekani（「トカスグリ」）から剥がした木質部か、「ススニ/susuni（「柳」）の皮をすり潰した粉末で蔽うが、アイヌが語るところでは迅速に治癒するという。炎症性腫瘍には、クスナイ（Kusunai「日本統治下の久春内、現イリインスキー」）付近の海岸にしばしば打ち揚げられる「ソイエ・スマ/sojē-sumà（「有孔石灰石」）の粉末が塗布される。この石灰石に見出される、深さが指一本ほどの形の整った円筒孔を、アイヌは「ウクルペ/ukrūpe（「蛭」）の仕業に帰しているが、炎症性腫瘍は「ウクルペ・チュ^ム/ukrūpe-čuf」と称されて、やはり蛭の蚕食に帰している（われら「ロシア」の民衆の間で同じ役柄を演じるのはフィラリアである）。この薬剤や、同様にまたギリヤークも用いる貝殻粉末の塗布のお蔭で、顕著な腫瘍が忽ち治癒していく様子を、私は二度ばかり目撃して、同粉末が当地では温湿布の役を果たしていることを確信した。「ピンニ・キナ/pīni-kinà」草の分泌液は、眼瞼炎（bepharitis）や結膜炎（conjunctivitis）用の施薬として眼に塗布される。あらゆる炎症性眼病に際しては、帽子の庇のような「シカハカ/sikaxka（「護眼帯」）を着用する。二重視のときは片目用護眼帯（シカム/sis'amū）を着ける。頭痛の際は「コンケニ/kōnkeni（「木の内皮」）を頭に捲きつけるか、毒草の「スルク/s'uruku（「鳥兜」）の根で体をこする。アイヌはこの根を用いて矢に毒を塗るが、それとは知らずに己自身を中毒させることも稀ではない。疥癬の患部には毒草の「クウキナ/kuw'kina（「バイケイソウ属の毒草」）の分泌液を塗布する。同草の分泌液は疥癬患部に激しい刺激を与える。疥癬（ヨアシ^シ/yōasis）の治療には、この草の灰を油に混ぜたものも使用される。アイヌらが語るところによると、この薬剤はしばしば病気に治癒をもたらすが、奏功しないこともままあるという。ヘル

トヴィヒとキュッヘンマイステルの実験では、バイケイソウ属の毒草を服用しつづける中で——その際に皮膚の炎症が進行する結果——、疥癬虫とその卵を物理的に除去すると、好結果の得られたことが知られている (*Deutsche Klinik*, 1851, 34)。アイヌたちは病氣治療をめぐって、シャマンに支援を求めることもさることながら、日本人「医師」に相談することも珍しくない。彼らは己の医療よりも、われらの医療の方により大きい信頼を寄せている。

その惨めな衛生状態と、常軌を逸した罹病状況にもかかわらず、アイヌらは高齢に達するまで長寿を全うしている。私の掌握する限りで、百才を超す高齢者は、かつて満洲人から、恐らくは島の統治を安堵された文書を受領したセトクレロ (*Setokuréro*) 「シトクレラン」、「名寄の楊忠貞」として知られる) 翁、ナイエロ (*Náiero*) 日本統治下では東海岸の内路か、西海岸の名寄のいずれかであろう) のケサントマ (*Kesantamā*) 媼、シララカ (*Shiraka*) ビウスツキは「セラロ」と記載、日本統治下の白浦、現ウズモリエ) のムソホテ (*Musoxte*) 翁、トブチ (*Tōbuti*) 日本統治下の遠淵、現ムラヴィヨウオ) のヤマスク (*Yamásuku*) 翁の4名である。

小田寒での熊送り

石田 收藏

解説

エンチウ（樺太アイヌ）の熊祭りについては、さまざまな著者が断片的な記録を残しているが、以下に収録する石田収蔵の記事は最も詳細で精彩に富んでいる。しかも石田がこのとき参与観察したのは、ピウスツキの場合と同じ東海岸のオタサン（小田寒、現フィルソヴォ）で行われた熊祭りで、彼は一九〇七年八月一―二日にこれと遭遇したと記すから、ピウスツキの調査から僅か五年後のことであつた。但しそれは、ピウスツキが記録したような人間に飼育された仔熊の「送り」ではなく、森で成獣を仕留めた際に実施される「送り」だったから、両祭祀はむしろ相補的關係にあるといえよう⁽¹⁾。

石田収蔵は金田一京助、二条家銅駄坊陳列所の野中完一、石田の郷里から随行した従僕一名とともに、一九〇七（明治四十）年七月十三日から九月初旬にかけて「五十有餘日」の南樺太調査を実施した。一行はコルサコフ（大泊）に上陸後、ポリシヨエ・タコエ（大谷、現ソーコル）、ガルキノ・ヴラスコエ（シャンツイ、落合、現ドリンスク）、ドウプキ（ドブキ、榮濱、現スタロ・ドウブスコエ）、ナイブチ（内淵、現ウスチ・ドリンカ）、アイ（相濱）を経て、八月一日にオタサン着、二日に「熊送り」の本祭に列席したあと、翌三日はシララカ（セラロコ、白漣^{しららお}）へ赴いた。その後は「忠僕」と二人で北上する。そして多来加地方のシスカ（敷香、現ポロナイスク）、タライカ（東多来加、現ウスチエ）を歴訪して、ギリヤーク（現ニヴフ）とオロツコ（現ウイльта）の調査にも従事したから、あたかも一九〇二―一九〇五年のピウスツキの足跡を辿るような旅であつた。

本「参考記事」の出典は、石田収蔵が『極北の別天地』に「序論」として寄稿した「樺太あいぬ風俗瑣談」である。本稿は（一）「私の樺太視察」から最末尾9頁分（12～20頁）を翻刻転載した⁽²⁾。石田は一九〇七年夏の南樺太調査の経過を、

適宜「小見出し」を立てながら独特な叙述スタイルで報じているが、その大略は右記の通りである。転載文では「ナイプチなるアイヌ村」と題する小見出しを受けて、いきなり叙述が展開されることに面食らう向きもあるが、原文通りであるので寛恕願いたい。前後の脈絡を辿るべく原文を参照されることをお勧めする次第である。

*** *** ***

『極北の別天地』の編著者青山東園（樹左郎）は一九一七（大正六）年の春、邦領南樺太でエンチウ調査を実施したが、同書は翌年に上梓された調査報告書である。なканずく「樺太あいのぬの舊慣と習俗」と題する「本文」は、三人のエンチウ長老からの聴書きを20項に按配して取りまとめたもので、当時のエンチウ事情を伝える極めて重要な情報源である⁽³⁾。なお、豊文社版『極北の別天地』だけは冒頭部の「口繪」に「酋長ばふんけと著者」と銘打つ写真⁽⁴⁾を収め、次頁には「アイヌ王バフンケ」と題して、以下のような一文を掲載している。

寒天地樺太を想像するの時、平岡定太郎の名を知らざる者ありと雖も、恐らくはアイヌ王バフンケの雷名を知らざる者なかる可し。彼は容貌頗る魁偉、其顔面は、六尺五寸と云ふ長軀に比して、不釣合に見ゆる程大きく、併し頭部より頤にかけて、蓬々然たる毛髪を以て包まれたる相貌は、良く言へば、露の杜翁の肖像に髣髴し、悪く言へば動物園の獅子其儘なり。相濱村の自宅にては、宿屋を業とす。其娘は露國の博物學者ペルチユスキーと云ふ人の妻となりて、既に二人の混血児を擧げたるも今は離婚となり、同族に再婚せり。此撮影は咄嗟の思付なりしを以て、異人バ翁は酋長の盛装を着服する暇なかりしを痛く遺憾となせり。

バフンケこと木村愛吉（1866～1920、当時六十三才）は、ナイブチ以北タライカまでの東海岸を束ねる「酋長（コタンサバネク）」と己を紹介しているが⁽⁵⁾、アイ・コタン（榮濱郡相濱村）にロシア式百姓家、即ち「宿屋」を構えていた。プロニスワフ・ピウスツキは一九〇二年の冬以来、バフンケ宅を根城としており、右で「露國の博物學者ペルチユスキー」とあるのは、ピウスツキのことである。但しバフンケは、ピウスツキの配偶者となったチュフサンマの実父ではなくて、叔父（実父の弟）である⁽⁶⁾。

「参考記事」の記載から判明するように、石田ら一行は七月三十一日、「露式の馬車」でドゥプキを発ち、ナイブチでエンチウの鱒漁を視察したあと、アイ・コタンに到着して一泊、宿泊先はバフンケの有する「宿屋」であつたらう。石田もやはりバフンケを容貌魁偉の巨漢、日本語やロシア語にも堪能で「土人の信賴一層多大」と評していた。

一方、青山はバフンケとの初対面の印象を以下のように綴っている⁽⁷⁾。

編者曰、異人バフンケと編者との初対面の場所は、樺太豊原の素朴なる旅人宿北海屋の下座敷なりき。片隅に爐を切りし一室に、盃を傾け居たる大男バフンケ、匆惶として膳を取片附け爐を介して談ず。辭出の際紀念の揮毫を委嘱す、バ翁應て曰く、『文字は全く知らぬ』と、然らば繪でも〇〇でもと強請したるに、『私は刃物で彫刻は出来るが、毛筆を操つた事はないから夫れも描けぬ』と、相貌、露のゴリキイの寫眞に髣髴たる、異種族酋長の眉目に、は、謝辭に窮して悶々たるの表情ありき。酋長すら全く文字を知らざるなり。

バフンケの相貌に接して、青山樹左郎はロシアの文豪リエフ・トルストイやゴーリキイを、千徳太郎治は西郷隆盛をそれぞれに想起していた。

二〇一五年八月十五日、札幌

(1) 注

後者は、北半球北辺の森林帯に広く分布した「熊の殺害に伴う儀礼複合（所謂「熊祭り」）であるが、仔熊の飼育を伴う前者は、それを絢爛な祝祭にまで高めたものとされている。ピウスツキは「樺太アイヌの熊祭りにて」の末尾に収録した「付属資料」No.45で、熊を森で仕留めたあとに催される「送り」儀礼の——一八九六年八月のシャントツイと一九〇四年十一月のモグンコタン（馬群潭、現ブガチョヴオ）における——二事例についても記載するが、いずれも部分的な記録に留まっている。ところで石田の方は小田寒に滞在した二日間、その一部始終を観察した。両者の観察地が異なるとはいえ、いずれも東海岸に立地するアイヌ・コタンであるせいか、記載内容は、精粗の差はあれ概ね符合している。

(2) 青山東園編『極北の別天地』は、タイトルと内容をやや異にする少なくとも3書が同時刊行されている。①『極北の別天地／あいぬ生活と樺太事情』東京：豊文社（初版、大正七（1918）年三月十二日、再版、同年四月一日）、②『樺太事情と極北の別天地／アイヌの生活』東京：日本青年通信社（初版、大正七年三月十二日、増補六版、大正九（1920）年九月二十五日）、③『極北の別天地／樺太案内』東京：廣友社出版部（初版、大正七年三月十二日、増補六版、大正九年九月二十五日）。石田の「序論」（1～20頁）は同一紙型の儘で3書に収録されている。

(3) 前掲書「本文」（1～118頁）所収。表紙にまで編著者と併記される三名の口述者は、①東海岸榮濱郡相濱村バフンケ酋長、日本名木村愛吉（当時六十三才）、②西海岸真岡郡廣地村宇多蘭泊在住「対雁アイヌ」のアトイサランデ、日本名大村勘助（当時六十六才）、③西海岸野田村宇登富津のシベケンニシ部落頭、日本名野田安之助（当時四十九才）。青山は「書中土人の説話は頗る厳正に述者の意を尊重し一言半句も忽せにせず、況や著者の専斷、參酌を以て」の述旨を加減せしが如きことは毫末もあらず」と明言している（「緒言」5頁）。

(5) (4) 口絵写真は、本書727頁（Photo 1）を見られたい。

前掲書「本文」（は）酋長の項、23頁。

ピウスツキは彼を「バグンケ」、「ボグンカ」と記していた。チュフサンマの実父は、「樺太アイヌの熊祭りにて」に登場するバフンケの兄「シレクア」、千徳太郎治は「シレクアイヌ」と記載している。

前掲書「本文」、「（ろ）文字」の項、19～20頁。

小田寒での熊送り*

石田 收藏

ナイブチなるアイヌ村

を視察しきさつしました。此村は東海岸とうかいがんに於けるアイヌ部落こすうやくでありまして、戸數約五六、ナイブチ河静かに其西を流れて、茲に土人が一年の收穫しうくわくを為すのであります。波をうつて潮さかのぼる鱒わねの群むれを途みちに擁ようし、網中に生虜いけどりする狀は實に巧たくみなもので、其時の活潑くわつぱつなる動作は嘆賞たんしょうに値するものであります。婦女子ふじよしは主として魚を開截かいさいしますが、又男子と共に曳網ひきあみに従事する者もあります。斯の如き時と雖も頭に帽子ぼうしを戴いたき、身に長き衣を纏まとつたる儘、膝ひざを没する深き所にありて、男子に劣らぬ働きを敢あてするのでありますが、彼等は裾すそを搔かき上ぐる事はなさゞれば濡れた衣服いふくの儘で、岸邊に魚の鹽造しほづくりに餘念なく、或は砂上に腰こしを据すえ、魚を料理したる血まみれの手で、餓うに泣く嬰兒えうじに乳ちを含ふくませ、暫く休やすらふもあり。何れも馴れぬ目には奇きなる映像えいさうでありました。漁期を通じて獲えたる一部は割さきて邦人と交易かうえきし、彼等たは他の衣食品いしよくひんを得るのであります。ドブキーより予等は露式ろしきの馬車を驅かつて道を北にとりて、アイヌ村に着ききました。こゝは

曾長バフンケの占拠

する所であります。曾長は五十に近きき巨漢きよかん、其逞たくましき骨格こつかくと、威あある相貌さうめいとは、他に見みざる所でありまして。彼の聲望せいぼうは驚おどろく可たくもので、バフンケの名はよく全島を震駭しんがいして居ります。彼れは巧たくみみに邦語を談だんじ、露語に通つうじ、外交に敏びんなる

* 石田收藏「樺太あいぬ風俗瑣談」青山東園（樹左郎）編著『極北の別天地』7、15頁所収、東京：豐文社（1918）。表題は転載者が加筆した。

を以て、土人の信頼一層多大なるものであります。予等此處に一泊し、明日はオタサンなるアイヌ部落に向つて北進しこゝにては二泊し、恰度其時熊送る祝ひの席に列し、一つの土産話を得たのであります。熊祭りの心的状態と、其に伴ふ宗教的行為とは、共に世に知るところのもので、事新しく記述するは殆んど要なき業であるが、若し同好者に参考の資ともならば此上なき事と思ひ、予が實見を書き連ねることにする。

恰かりオタサンに宿泊した日には、在住一土人が單身深山に入り大熊を銃殺したと云ふ評判が村中に高かつた。其日は丁度其熊を送る祝ひの前日、屋外には大きな熊皮を高く張つて乾し、其近くには釜を据えつけ肉や骨を煮て居た。又某の住宅にては寶物を神窓近く壁にかけ、主人自ら刀をとりて其前に坐し、熊の頭部より肉切をとり除くに餘念もなかつた。翌くれば愈々

熊送る祝ひの當日

余は二時頃招きに應じて某の住宅に赴いた。小さな入口をくぐると、客已に室に充ち、今や配膳の準備最中であつた。室の中央の大なる爐には餘燼燐より、室内異様の臭氣に充たされ其不快云ふからざる程であつた。集へる人に驚き、何れも怪訝な顔付して予を凝視せる間を、言はるゝ儘に席に着いた。

此日室内の設備

と云へば神窓(入口と對する東側の壁に開いてある小窓)の左方に、美はしき紐もて寶刀懸けられ柄には木の削り掛にて作りし一對の品かけられ、其先端には二本の矢が立てかけられ、其他窓近くイナオと共に吊るされたるは、熊の舌、耳、

足の皮、脳等であつた。本尊たる頭骨は、寶刀の下に安置され、其下顎の下には、長さ五寸許りの木を熊の形に刻める小熊は横たへられ、又左顎の下と同様な小熊は、頭骨の上に一個、右側に二個何れも真向に置かれ、其前の膳にはヒゲベラを添へて、盃は供へられてあつた。

當日の馳走

室の北側なる一段高き坐には、年長の男子坐を占め、爐の周邊には中年の男子と子供は着席した。主人先づ立ちて、肉（湯で煮たるもの）を盛りたる盆三個と、百合（他の植物と混じり海豹の脂で煮たもの）を盛りたる椀一個とを頭骨の前に供へたる後、吾人の三四食分の量ある肉の膳を上座の客に据えろと、客は各自に携帯せる小刀の鞘を拂ひて見る間に食ひ盡す、其時主人は再び立ちて下座の客に配膳し、之も終はると、次は百合の合煮を椀に盛り、へらを添へて各人に頒けた。聽て食事も済めば下座の客は暇を告げて歸り、暫くして婦女の一團入り來り、何れも爐の南側或は入口に近く座を占める。主婦は之に百合を配つたが、其容器は先客に用ひしものを洗ひも拭きもせぬ其儘のものであつたが、彼等は其を意とする所なく、脂と塵にまみれしへらもて巧みに食ひ盡した。主人は更に肉を膳に盛りて配ると、彼等は双手を擧げて拝し、然る後小刀を出し骨より肉を切りとり食する様男子と異なる所はなかつた。食し終ると何れも草の葉にて手や小刀を拭き清めた。此間上座に並べる先客は各自に身を寛ろげ談笑に餘念がなかつたが、次に主婦は手造りの濁酒を持ち出し、之れも飲み終ると主人は大なる鍋に百合の煮たるものと飯とを等量に混入し、更に海豹の脂を加へて攪き廻し、其幾分を先づ頭骨に供え、残れるを椀に分け上座の客より配つた。子供は此時何れも微笑みつ御馳走に預つたのである。之にて食事

は終つたのであるが、

其後の式と云へば

右終りて主人は頭骨の前に跪き、其傍に置かれたる壇より少量の神酒を盃に移すと、上座なる古老の一人進み出で、足座して、上に添へたるヒゲペラを右手に取り、盃を一回廻したる後、徐に飲み干した。續いて同様に神酒を戴けるもの數人、是にて式は終つたが、当時は折悪しく酒の缺乏せる場合なりしたため、盛宴を張る事は出来なかつたのである。諸尚も調査に日を進め八月三日と云うに、東海岸に於ける屈指の港灣として世に知られたるシラ、カに宿りました。夕食後北數町なるアイヌ村を訪ねたのでありますが、時過ぐる間に雨となりたれば、調査もそこ／＼歸路を急いだのであります。あくれば八月四日、各自獨立の行動をとる事になり余は忠僕一人を従へてシラ、カより約二里のアイヌの土人部落を訪れ土俗調査と撮影とに時を過ごし、轉じてシスカに滞在すること十有餘日、此間主として北部土人ギリヤーク、及びオロツコの調査に意を向けたのであります。又北方北里なるタライカに土人を訪ね、湖畔に石器時代の遺跡を発見し更に汽船幸照丸に投じて海豹島に航し、群る海獸の生態を學び、或はポロナイ河畔に散在する堅穴発掘を試み、かくて日を重ぬる事十有餘日、予等こゝに懷かしきシカス^マを後に見て歸路についたのであります。指折り數ふれば、予等さきにコルサコフに上陸せしより茲に五十有餘日、其日時は決して短かしくすべきあらねど、過ぎ去りては一夜の夢と異なる所がないのであります。



53 才のチュフサンマ（北里闌撮影）
1931年8月15~16日、白濱にて【北里1932】

樺太島におけるチュフサンマとその家族

井上 紘一

プロローグ

ブロニスワフ・ピウスツキは十五年の懲役刑を宣告された国事犯として樺太島へ流刑となり、極東地方で十九年（一八八七年八月～一九〇六年八月）の在住を強いられた^二。一九〇二年十二月十四日（ユリウス旧露暦による——以下では「ユ暦」と略記）、彼は南サハリンの東海岸で越冬するべく、同地のアイ・コタンにあるバフンケ（アイヌ）「酋長」——日本名木村愛吉——所有のロシア式丸太小屋に住みつく。バフンケにはチュフサンマという名の姪がいた。ブロニスワフは恐らく一九〇三年二月初旬^三にこの娘と恋に落ち、また恐らく同年九月末^四にはコタンの全員が集って、両名のためにアイヌ風の婚礼が挙行された。一九〇四年二月十二日に長男助造がアイ・コタンで誕生するが、アイヌ名は付けられなかったようである。一九〇五年十二月十八日に第二子の長女キヨが生まれた頃、父親は日本へ向かう途上だったか、すでに日本にいた。ブロニスワフは己の家族を得たにもかかわらず、一九〇五年九月半ばと想定される樺太島との訣別に際し、この家族とも永久の別離を余儀なくされたのである。本稿は日本領南樺太期（一九〇五～四五年）に的を絞って、濃霧に蔽われた彼らの家族史へ向けて幾筋かの光を照射することを目的とする。

^一 ブロニスワフ・ピウスツキ（Bronisław Piłsudski）は一八六六（慶応二）年十一月二日、ロシア帝国ヴィルノ県（現リトワニア）のズーウフ荘園（Zulów/Zulowo, 現 Zaravas）にて、由緒正しい名門士族（szlachta）ピウスツキ家の嫡男として呱呱の声をあげ、一九一八年五月十七日にバリで客死した。

^二 ブロニスワフ・ピウスツキに関する伝記情報はあまた公刊されているが、ここでは基盤的著作6件を挙げておく——Majewicz 1998a; 1998b; 2000; 2011; Latyshev 2008; Sawada & Inoue 2010。

サハリン時代のチュフサンマの家族

チュフサンマの系譜に関しては、千徳太郎治^三の著作『樺太アイヌ叢話』（1929）が最も信憑性の高い詳細を提供する。同書はチュフサンマの父親をシレク（アイヌ）（Sireku(ainu)）（一九二〇年以前に死亡。ピウスツキは彼をシレクア（Sirekua）と記すので、本稿でもこの名を採用）と記載、そして一九二五年に亡くなった兄のポンチク（アイヌ）（Poncku(ainu)）には息子運太郎がいたが、彼女は一九〇四年に助造、一九〇六年にはキヨを出産したと記している。チュフサンマとその子供たち、運太郎、レーヘコロ（アイヌ）（Rehe(koro(ainu)）（後出））は、千徳が自著を撰筆する一九二九年には白濱^四で健在だった〔千徳 1929: 64, 66-67〕ところで彼女の叔父バフンケ（シレクアの弟）は、ロシア時代末期と日本時代初期（一八六〇年代最後の四半期〜一九二〇年）に

^三 千徳太郎治（1872〜1929）は日本人千徳瀬兵衛を父とする混血アイヌで、一八七二年一月に内淵（現ウスチ・ドリンカ）にて出生。一八七五年、家族とともに北海道の対雁へ移住、「対雁学校」に通って日本語の読書きを習得する。一八九五年に帰島したあと、一九〇二年にはプロニスワフ・ピウスツキと出会い、ロシア語の特訓を受ける。したがって、一九〇三年夏にはシエロシエフスキとピウスツキの北海道アイヌ調査に、アイヌ・ロシア・日本語通訳として参加した〔Inoue 2016: 77-78〕。両名は彼の名をタロンチ（Tarondchi/Taronei）と記載するが、本人はキリル文字で *Tapondou/Tapondzu* と署名していた。千徳は一貫してこの家族のすぐ近く、即ち小田寒（現フィルソヴォ）や内淵で暮らしていたから、同家族の全員の情況全般に精通していた。因みに、西海岸・多蘭泊のアトイサランデ（大村勘助）は千徳（仙徳と記載）を「氏は樺太アイヌ族には稀に見る學者にして、日本文字も書けば露西亞文字も書く、書物も、平易のものなれば、スラ／＼と讀む。日露戦争當時は、我軍營にありて通譯を勤めたる人、自分の娘にも春と云ふ名前を付けて、全く日本人を氣取れり」と評している〔青山 1918: 88〕。千徳は一九二九年八月に急死するが〔金田 1934: 186; 1937: 152〕『樺太アイヌ叢話』は同年八月十日に上梓されていた。

^四 政府は一九二二年、東海岸10コタンのアイヌ向けに集住村の白濱を建設した。即ち、北端のオハコタン（箱田から南へ連なるマヌエ眞縫、シララカ白浦、オタサン・小田寒、アイ相濱、ナイブチ内淵、サカヤマ榮濱、ルレ魯禮、シヤンチャ志安落合、タコエ大谷の十ヶ村）である。各コタンの所在地については、プロニスワフ・ピウスツキが自らの路程も加筆して作成した「サハリン地図」（本書所載の「復命報告 5」〔73頁所収〕を参照されたい。地図に白濱は欠如するが、小田寒と相濱の中間に立地するであろう。

における南サハリン東海岸のエンチウ（即ち樺太アイヌ）の間で最大の著名人だったから^五、千徳はバフンケについてより詳細

五

読売新聞記者松川木公（本名清）は一九〇八／九年、日本領南樺太で一ヶ月の冒険取材を敢行した。松川はバフンケや彼が暮らすアイ・コタンについて以下のように記している。「アイ村は純然たるアイヌ部落で、家数は五六戸も有らうか、吾々一行は彼の有名な酋長バフンケの家に投じた。バフンケは日本名を木村愛吉と言ひ、東海岸に於けるアイヌの總取締で、其の雷名は樺太全島に轟いて居る。」^{〔假令「樺太長官平岡定太郎」「三島由紀夫の祖父の名を知らぬ者」があつても、恐らくバフンケの名を知らぬ者は無からう、彼は容貌頗る魁偉、身の丈は六尺五寸「197」に餘り、其顔は此偉大なる身體に比してすら不釣り合を感じる程大きくて、而して威厳と愛嬌とに富み、」加ふるに太く丈夫さうな毛は頭から頤まで包んで居る正に天下一品の面魂、動物園の獅子を見るやうな感がある〕}〔松川 1909: 104〕。因みに松川のアイ・コタン訪問は、ブロニスワフが最終的に離島した一九〇五年秋の謹か三年後になされた。二年後の一九〇七年には、人類学者石田收藏がアイ・コタンにバフンケを訪ねて、「バフンケ 酋長は五十に近き巨漢、其逞ましき骨格と、威ある相貌とは、他に見ざる所でありまして、彼の聲望は驚く可もので、バフンケの名はよく全島を震駭して居ります。彼れは巧みに邦語を談じ、露語に通じ、外交に敏なるを以て、土人の信頼一層多大なるものであります」〔石田 1918: 9、本書 677-678〕と評した。

一方、一九一七年の春に南樺太を訪ねた青山東園（本名樹左郎）は、バフンケを含む3名のエンチウ長老の語りからなる、ある種の民族誌を公刊するが、バフンケとは一九一七年三月二十一日に面接していた。そのとき六十三才と記載されたバフンケは、一八五五年生まれと想定される。民族誌の章は「樺太あいのめ、舊慣と習俗」と銘打たれている〔青山 1918: 118〕。青山と千徳の両名ともバフンケの記載に際しては、上記の松川による特徴描写を援用しつつ、ロシアの文豪レフ・トルストイやゴーリキー〔青山 1918、「アイヌ王バフンケ」——口絵への解説（豊文社版にのみ見出される）、20頁、（本書 675頁に全文所収）、明治維新の悲劇的英雄西郷南洲〔千徳 1929: 65〕になぞらえていた。

バフンケに関してこれまでに確認できた画像は、青山が「バフンケ酋長と著者」と銘打って自著に掲載した上記の（豊文社版のみに見出される）口絵写真だけである。そこではバフンケが、脇に立つ青山と並んで低い椅子に坐しているから、彼が身の丈197^{cm}超の大男であるとは誰も想像せぬだろう〔Photo 1〕。今一葉のバフンケ写真〔Photo 2〕は、ブロニスワフ自身が一九〇〇〜一九〇五年に撮影したものとして V・M・ラティシエフと M・M・ブコロフィエフが紹介しているが、十分な同定証明は遺憾ながら見出されない〔Latyshev 2008: 247; Pokofiev 2010: 375〕。にもかかわらず「バフンケ」の両画像、とりわけ両者の顔面特徴の間に認められる一定の類似は——およそ五十才（一九〇〇〜一九〇五年撮影）と六十三才（一九一七年撮影）という——年齢差を顧慮するならば否定しえぬだろう。加えて、A・F・マイエヴィチは第3の事例を「アイのアイヌ男子（Bagunka ~ Bafunke-ainu?）」と疑問符を付しつつも提起していた〔Majewicz 2004: 463, plate CCXXXVII〕。

に記載している。バフンケには子がなかったので、レーヘコロ(アイヌ)(千徳はレエコロアイヌと記載する——日本名木村愛助)という名の親族男子を養子として財産を相続させた。バフンケは明治初年に小田寒から相濱へ移住し、一九二〇年に亡くなるまで同地で暮らした。没年は、上記の白濱集住の前年に当たる。バフンケはアイ・コタンの曾長だったが、初代曾長はハセランケである〔千徳 1929: 64-65〕。

松川によると、ロシア式丸太小屋は3室で構成され、ロシアの百姓屋(ロシア語 *brevčatyj dom*)のようにペチカも備わっていた。この家屋について「樺太でも有名な暖かい家」との定評を伝えながらも、彼は「屋内に便所の設けがない」ことに不満を漏らしている〔松川: 105-106〕。一九〇二年十二月十四日^七にプロニスワフ・ピウスツキが転がり込んだのはまさにこの家にほかならず、その際に彼は「ロシア風に造作された裕福なアイヌの家に寄宿して、そこを根城と決めました」〔本書 40^八〕と記している。

「サハリン島アイヌの各種生業と経済状態の情報(1900-1905)」と題するロシア語古文書ファイルは、アイ・コタンにおける戸口調査の結果を表示している^六。したがって、表に盛り込まれた年齢情報はシレクアとその親族の生年を——シレク

[Photo 3 参照]。リトワニア人画家アドマス・ヴァルナスは一九一二年にクラクフで、プロニスワフ・ピウスツキの油彩肖像画 [Photo 4] を製作した(その原画はつい先頃ワルシャワで発見されて、今はワルシャワ近郊のスレューヴェクにあるユゼフ・ピウスツキ博物館に保管されている)。偶々ではあるが、Photo 2 と Photo 4 でモデルの着用する晴れ衣は十中八九まで、同一の陣羽織(エンチウ語で *atuu*)であると感じた。その意味するところは、プロニスワフがこの衣装を纏うバフンケを撮影したあと、彼はそれをバフンケから寄贈されたということだ。したがって Photo 2 はもとより、衣装タイプこそ異なるも顔相全般の近似性を顧慮するならば、Photo 3 もまたバフンケ画像にほかならぬであろう。^六の文書 (RGIA DV 1900/05) はウラヂヴォストクの極東・ロシア国家歴史文書館に収蔵されている。アイ・コタンには3世帯が暮らし、5棟の家屋があった。第1世帯は家長の *Gastrank ajnu* [即ち *Hasecrank*] (三十三才) と5名の家族員で構成され、第2世帯の構成員は家長の *Sireku a [Sirekuajnu]* (五十四才)、その配偶者 *Skujkeramma* (四十九才)、娘 *Cusjamma* [即ち *Chuisamma*] (二十六才) と彼女の息子〔名前は欠如するも

明らかに助造を指している(一才)、そして家長の実弟 Bagun ajnu [Bahunké(ajnu)](四十九才)と彼の配偶者 Makuntukarima (三十七才)、さらに親族の少年三名——Rege koro [Rēhekoré(ajnu)] のちにバフンケの養子(十五才) Rikijahko (十四才)、Usaitoh ajnu (九才) の計9名からなる。第3世帯を構成するのは家長 Tokkos [Tokkōsē](三十八才)とその配偶者 Nisrukairima (三十三才)、息子 Sociware (六才)、娘 [名前は欠如(一才半)]、トテコーセの姪 Amkuku (十二才)と彼女の娘 [名前は欠如(一才)の6名である。トテコーセはシレクアの末弟である(注八参照)。ハセランケはチセ(cise)と称されるアイヌの伝統家屋一棟を有するのみであるが、シレクアとトテコーセの兄弟はそれぞれがチセとロシア式丸太小屋を構えていた。戸口調査が実施された一九〇四年のアイ・コタン人口は21人である。実施年は、一九〇四年二月十二日に生まれた助造の年齢(二才)から推定した。

第2世帯の家族構成については、田村将人がその邦語論文で紹介している [田村 2013: 121-122]。この世帯は二人の兄弟とその家族、そして親族の子供3名からなる大家族である。助造はエンチウの伝統に従っていまだ命名されず、またバフンケもレーヘコロを養子にしてはいなかったようである。同表はまたシレクアの資産を「倉3棟、牝牛1頭、雌犬2匹、橈犬12匹、丸木舟1艘、和式漁り舟2艘、投網1張、海用定置網1張、銃2挺」と列挙している。ところで、一九〇九年一月八・九日にバフンケの丸太小屋で2泊した松川は、翌朝に彼らの家宝を見る機会に恵まれて、「多くは刀又は槍の類であるが満洲邊から来たものらしい、煙管の如きも亦同一の臭味を帯びて居る、尤も日常使つて居るのはサビタの枝に孔を明けたものだ、其れから「チヨイネツプ」と稱する彼等手製の食器(チヨイネツプに一種あり)、「一は圓く、一は細長い、圓いのは椀又は盃で、細長いのは皿だ)」「簞[kunisi、いわゆる「ひげべら」]、糸巻、煙管入れで」「帆立貝で造った油皿等」[松川 1909: 107]。『昔し満洲三姓都統よりバフンケの祖先に與へたる公式の消息文』[前掲書: 108]と具体的に記載している。松川はその際、「時々人類學者などが出掛けて行て、アイヌの最好物たる煙草の五匁か赤い切地の一尺も呉れて遣て置で、『オイ此品は大變立派な物だね、呉れないか』など、正直なアイヌ等が強いて否み難めるを良い事にして、どしどし持て来て了ふので、『…彼が屢々斯る手を喰て既に其家寶の大部分を持ち去られて了つたのを甚だお気の毒に思ふ』[前掲書: 107-108]とコメントしていた。だがバフンケは、エンチウ社会では最も裕福な男の一人だった。先見の明のある起業家として、ロシア時代には東海岸で日本人漁業者と組んで2漁場——イタタクスナイとオチヨホボカ、いずれも一八九七年開業——を経営していたが [千徳 1929: 50-51; 田村 2008: 95-96; 本書 196: 215]、日本時代になると、彼は「驛締」兼、渡船及部落總代等の公職にも就かれ、公衆の爲め盡くされたのである [千徳: 64、65]。しかるに、アイ・コタン第2世帯の家長は、バフンケではなくて、その兄シレクアだった。因みに、内淵とサカヤマ(榮濱)間で2漁場——その一つは田村によると一九〇〇年開設のエンルンコマナイ漁場——を経営していたアイ・コタンのトチムランケトチモランケは、シレクアの末弟トテコーセと同一人物

ア一八五一年、バフンケ一八五六年、トテコーセ一八六七年、チュフサンマ一八七九年、アムクク一八八三年、レーヘコロ一八九〇年、そして助造はむろん一九〇四年——と推定することを可能とする。そこにはチュフサンマの兄であるポンチクの名が欠如するが、当時の彼は余所で暮らしていたのであるう。ここではただ、ブロニスワフ・ピウスツキが同表に登録される可能性もあったことを指摘しておきたい。彼は、タライカ地方とサハリン北部のティミ河上流域で踏査中だった6ヶ月半（一九〇四年三月三十一日〜十一月十三日^{〔ユ暦〕}）を別にすると、アイ・コタンの近辺に滞在する中でまさにこの丸太小屋の一室を間借りしていたからである^{〔井上 2013a: 68-69; 本書 871~872, 875-878^{〔ジュベ〕}〕}。戸口調査は恐らく彼のアイ・コタン不在中に実施されたのであろう。

「南サハリンのコルサコフスク管区に在住する原住民の戸口調査(1886-1887)」と題する今一つのロシア語文書によると、アイ・コタンはアイ川（相川）右岸に立地し、2「ユルタ」からなるアイヌ村落として紹介されている^ハ。バフンケは一八

ではなかったろうか。後者もまたチセとロシア式丸太小屋を所有していたからである。

^セピウスツキはポンチクを主著『アイヌの言語・フォークローア研究資料』の語り部の一人として、「昔話 No. 13」（一九〇四年一月）口述、語り部 *Ponika*、二十八才、アイ村」のように紹介している^{〔Pisudski 1912: 133〕}。かくて彼の生年は一八七七年と想定される。千徳は一九〇六年六月十五日^{〔ユ暦〕}、東京のピウスツキ宛にアイヌ語で記した第2信に「*Ponika* が親族と喧嘩して、彼らは今オタサンで暮らしている。*Ponika* の娘が死にました」^{〔Majewicz 2004a: 725; 参照：丹菊 2001: 206〕}と記した。そこでポンチクは家族を有し、少なくとも一九〇六年には親族と不仲だったことが判る。

^ハこの文書（SPbF ARAN 188687）は、ロシア科学アカデミー・サンクト＝ペテルブルグ支部文書館に収蔵されている。チュルク系語彙 *yurt* に対応するロシア語 *yurta* が、当該文脈では、アイヌ語で *cise* と称され、壁と屋根が樹皮で覆われるエンチウの伝統家屋を、またそこで生活する世帯をも含意している。第1ユルタを構成するのは、家長 *Onyryku* (六十才)とその配偶者 *Kono* (五十才)、^{〔長男 Bagunka (三十五才)とその配偶者 Nigparata (二十八才)、次男 Sijanu (三十二才)とその配偶者 Miceune (二十三才)、三男 Sifiku (三十一才)とその長男 Ponchukku (七才)、長女 Winkono (四才)、四男 Tacköse (二十八才)、Onyryku の娘 Irganunke (二十五才、寡婦)とその娘 Ankukku (四才、孤児)の計12名で、第2ユル}

六八年以降の数年間に——十中八九まで兄のシレクアとともに——オタサンからアイへ移住していたから〔千徳 1929: 64-65〕、二十年を経るとそこには、12名の家族員が父親 Onryku を頭に戴く大家族が成立したわけである。

一方、プロニスワフ・ピウスツキはその著作を通して、シレクアとバフンケを格別に裕福なアイの二兄弟と記すだけで、自分との関係ではバフンケをただ「家主」と、そしてシレクアは（事実上己の岳父であるにもかかわらず）「バフンケの兄」と言及する以外は、まったく沈黙している^九。それどころか、プロニスワフは己の全著述を通してチュフサンマとの結婚、

タの方は家長 Oatie (五十才) も含めた七人家族であった。したがって、一八八六〜一八八七年におけるアイ・コタン^十の人口は 19 人、第 1 ユルタは上述のように 12 人。Onryku は四男一女の父親だった。ミハイル・M・プロコフィエフはまさにこの文書に依拠して、Onryku の長男は Bagunka (即ちバフンケ) で、Siriku (即ちシレクア) の子供たち Pončukku と Winkono とは即ち、ポンチクとチュフサンマにほかならぬとの結論を下している [Prokofiev 2010: 374 (footnote 12), 381]

同文書の特徴は、Bagunka が Siriku より四十年長であることに求められる。しかるに RGIA DV 1900/05 によれば、シレクアとバフンケの生年はそれぞれ一八五一年と一八五六年であり、青山は後者の生年を一八五五年と示唆している。加えて、千徳もピウスツキもバフンケをシレクアの弟と明言する。そこでわれわれはこの特徴を、そしてまた両文書間に見出される年齢差——プラス 8 年 (Teteköse vs. Teteköse)、マイナス 5 年 (Siriku vs. Sireku)、プラス 4 年 (Bagunka vs. Bahunka)、マイナス 4 年 (Winkono vs. Chusamma)、マイナス 2 年 (Pončukku vs. Pončuk)——も度外視することを余儀なくされた。にもかかわらず Anukku と Amkuku に関する限り、一八八七〜一八八八年に [Trijanunka の娘 (孤児、四才)] と記載される傍らで、一九〇四年には [Tetekos の姪 (二十才)] と明記されているから、両者に年齢差は認められない。母親の死後に孤児となった Anukku は恐らく末の叔父の庇護下に入って、第 3 世帯で同居していたものと思われる。

同文書によると、相川は平底船による航行が可能であり、そこでは鮭・樺太鱒・コクチマス・イトウ・コマイ・ウグイが、そして春季には鯨も捕獲できるという。

プロニスワフは一九〇二年九月、オタサン（現フィリソウオ）で行われた熊祭りに参加して、詳細な記録「樺太アイヌの熊祭りにて」（1915）を執筆している。その途上では長老を表敬するべくアイ・コタンに立ち寄り、その後、オタサンに到着した同長老と再会した。その情景を「彼は以下のように描写する。『…幕舎から出た私がそこに認めたのは、普通の荷馬車から下りてくる老人の姿で、アイ村を通過した折にすでに面識を得ていた人物にほかならなかった。』」事実、アイの二兄弟は東海岸でも一、二を争う資産家と見做されている。彼らは裕福な

妻子の名、はたまた彼らの存在自体にも、言及することは一切なかった。したがって夫の離島前後を問わず、チュフサンマの動静を伝える基本的知見は日本語資料に求めざるをえないわけである。

そのような基本文献の一つは、能仲文夫^{二〇}が執筆して樺太の出版社が上梓した『北蝦夷秘聞——樺太アイヌの足跡』（1933）である。能仲は彼らの結婚について、「秋も漸く深くなつて行こうとする」[著者によると一八九七年?]「九月の下旬、全

一族の出身で、父親は日本人の下で曾長を務めたが、兄弟はここ数年の間にのし上がって、他に抜きん出た存在となる。弟の方は若い頃から日本やロシアの官憲にうまく取り入り、つい先頃は漁場の賃借許可を取り付けた上で、日本の漁業者と組んで実入りの良い個人事業を展開している。コルサコフスク「大泊、現コルサコフ」とは常時往来し、日本でさえすでに二度も赴き、この折もリウマチ治療のため日本のどこぞの温泉に逗留中だった。弟は好んで日本人やロシア人の間を泳ぎ回り、自前の資産を友人らとともに景気良く蕩尽して己が甲斐性を誇示する。たった今到来したばかりの兄の方は、逆に、同族者の間で己の名譽を高める方をむしろよしとする「本書223頁」。上に引用した著作中では兄の名が「シレクア」と記載されるから「本書533, 563, 609頁」、弟の方は「バフンケ」本人にほかならない。兄は自分の息子と娘を同伴していたため、ブロニスワフは兄と妹の行動を以下のように描出する。「老人の若い娘は馬車に近付いて、絹製衣服や暗青色の南京玉を収めた小ぶりの包みを下ろし、息子の方は、数本の刀が収納されている草製の袋を運び出していた」「本書224, 225頁」。われわれは今や前者がチュフサンマ、後者はボンチクであることを承知しており、一九〇二年当時の年齢はそれぞれ二十四才と二十六才だった。したがって、ブロニスワフとチュフサンマの初顔合わせは、一九〇二年の——もしもこれに先立つアイでなかったとすれば——オタサンで成立したと断じて大過ないだろう。しかるに、ブロニスワフは同著作でも（この折はむしろ、いまだ配偶者ではなかったが）またそれ以外でも、己の配偶者に言及することはなかった。

一〇。能仲文夫（1907～1982）はジャーナリスト・実業家。一九三三年以前は豊原（現ユジノ・サハリンスク）の日刊紙「樺太日日新聞」（以下では通称の「樺日」で代替する）で記者を務めたが、戦後には東京の星光化学工業で社長にまで上り詰めた。序文を寄せた木下又三郎によると、「著者は二ヶ年に亘つて、樺太に関するあらゆる文献を涉獵し、更らに島内各地を巡つて具に史實を考證し、時に旬日曾長の家に据り込み、……」[能仲1933: C1]と紹介されている。能仲は同書の第一章をシンキンチョウ（即ちチュフサンマ）の悲恋物語（第一章のタイトルは「参考文献」を見られたい）に充てて、彼が度外れた「語り部 騙り部」であることは直ちに明記しておくべきだろう。したがって彼の記述は、必ずしも信頼に値するとは限らない。

部落民が集つて茲に盛大な結婚式は挙げられたのである。花婿であるブ氏は三十才、シンキは十八才であつた「能仲¹⁰」と伝えている。その不正確な記述にもかかわらず、プロニスワフとチュフサンマのためにアイヌ風の婚礼がアイ・コタンで挙行されたのは、紛れもない事実である。それゆえ、彼らの結婚はエンチウの規範と慣習によつて裁可されたわけである。

能仲がわれわれの知見に対してなした今一つの寄与は、(一)二人の恋のなりゆき、(二)夫との離別、そしてその理由、(三)チュフサンマと子供たちのその後、をめぐる彼女の語りを、能仲は曲りなりにも記録しえたことにある。

二 角括弧に収めた細字記載は引用者による注記である。著者はピウスツキの名前をブリードスキーと記載するから「ブ氏」はそれらの略称を意味する。著者が想像した結婚の年は極めて不条理である。彼はそれを、プロニスワフが一八九六年七月八月に測候所を建設するべく初めてサハリン南部へ派遣されたときの話と混同したのではなからうか。婚礼の実施年は、幾つかの状況証拠から一九〇三年と割り出されている「井上 2013a: 64, 66; 後出の記載も見られたい」。すると一九〇三年九月には花嫁が二十五才、花婿は三十七才になるから、いずれも七年ほど加齢させる必要が生じる。著者はチュフサンマの名を「シンキンチョウウシンキ」と記すが、子息の木村助造は一九四〇年に母親の名前を「ジユウサンマ」——その音韻表記 *cuh sammah* はアイヌ語で「太陽から下りて来た女」を意味する——と断言していた「AAN 1940」注五七参照。しかしながら、第一章は概ね能仲によるチュフサンマの聴取にもとづくから、これらの誤解が彼女の記憶違いに由来した可能性も完全には排除されない。

二 一年後、ある記者は能仲の記載に追加する形で「二人は何もかも知っている情の曾長——バフンケの取計らひで「三」盛大な結婚式を挙げた」井上 2010b, part II: 194-195 (樺日紙所載一九三四年一月十日付記事「愛し夫よ何處? 三十年の戀を秘め、老メノコは泣く」、本書 848 頁)と記した。アレクサンデル・ヤンタ『ポウチンスキも一九三四年一月九日に白浦で、この婚礼の記憶を白川仁太郎と木村愛助から聴取して、「彼らの結婚式が、古い伝統に則り、厳かに盛大に行われた」ヤンタ『ポウチンスキ 2013: 140』と記録している。

(一) 二人の恋のなりゆき

われわれは当面、一九〇五～一九二九年におけるチュフサンマの動静に関して二組の情報を有する。その一つは一九〇九年一月八～九日にバフンケを訪ねた松川木公が提供するもので、「娘のチュサンマは露國の人類學者（或は博物學者とも言う）ベルチユスキーの妾になつて居て二人の混血児さへ儲けたと言ふ……」〔捨てられたチュサンマは今シラハカ「ロシア名セラロコ、日本名白浦、現ウズモリエ」のシリキシタン^{二三}と言ふアイヌに再婚して居る」〔松川:105-106〕と伝えていた。因みに、青山東園は同記載を大雑把に借用して自分なりに「露國の博物學者ベルチユスキーと云ふ人の妻」と記している^{二四}。いずれの場合もチュフサンマは「バフンケの娘」と記載されるが、松川には実際に、そのように紹介されていた^{注一五}。

今一つは千徳太郎治の『樺太アイヌ叢話』（1929）中に見出され、以下のように伝えている。「チュサンマは、日露交戦前、樺太に露國モスクワ大學より人類學研究に來島したるポーランド人にて理學士ブロニスラフ、ビルズウスキー」と出会う。「氏は、三四年滞在中令女と終に男女の交を結び、「明治三十七（一九〇四）年一子を生む、木村助藏」（同三十九（一九〇六）年に一女（きよ）の二子を産み、「是等は健全で白濱部落に居るなり」〔千徳 1929: 65〕。彼はまた、日露戦下の一九〇四年七月頃、日本の戦艦が相濱（アイ・コタン）を砲撃したときの一件にも触れて、「人には別に傷はないが、危くチュサンマ（アイヌ婦人）木村愛吉氏の姪が今少し遅れて自己の居所を立ち去つたら、砲弾に當つて死ぬ所であつたが、幸に早く

^{二三} 千徳は一九〇六年六月十五日、自分たちでキリル文字を用いて創出したある種の「アイヌ文語」〔Inoue 2002: 122 参照〕で東京のビウスツキへ向けて、「Серапока Сирисеян майи хон фу апаря райкемаи（セラロコでシリキシタンの細君が胃病で死にました）」〔Majewicz 2004a: 707, 725; 参照・丹菊 2001: 209〕と記した。のちにシリキシタンは、遅くとも一九〇九年一月以前にチュフサンマの第2配偶者となった^{二四}。

^{二四} 青山 1918 — 「バフンケ酋長と著者」と銘打つ口絵〔Photo 1〕に付された解説「アイヌ王バフンケ」所収（本書 674^頁参照）。

立ち去ったので命びるゐをした。又家の横張の處に彈丸の破片が當つて残つていた^{二五}」[千徳 102-103]と記している。そのときのチュフサンマは、生後5ヶ月の愛児(助造)を胸に押し当てていたのではあるまいか。

能仲が松川、(石田の著述を含む)青山、千徳の著書を参照したか否かは、彼が典拠を一切明記しないから定かではない。にもかかわらず本稿の著者の印象では、能仲が少なくとも千徳の著書には目を通したと思われる、さらにいえば、東京で一九二九年に上梓されたばかりの同書を繙く最中にチュフサンマへの関心が芽生えたのではなかったか、とさえ邪推される。しかるに能仲自身は、「教授は」^{二六}單身歸国したのである。後に取り残された教授の妻はその後行方不明を傳へられてゐたが、端しなくも樺太のアイヌ部落の一隅に盲人となつて、今もなほ生存してゐることを発見した」[能仲 1933: 23]と記していた^{二六}。

プロニスワフ・ピウスツキをめぐる真実は以下の通りである。一九〇二年七月、彼はロシア帝室科学アカデミーによつ

^{二五} 松川によると、バフンケはそのとき砲彈の一片を至宝の一つとして取り出し、「此品も亦私の大切な紀念の寶物です、是が爲に私の娘チュサンマ^{二七}はベルチユスキーと悲しき別れをしました」と語つたという。松川は同船を「対馬艦」と特定している[松川: 108]。彼の家が狙われたのは、その紛う方なきロシア式建物のせいであつた[千徳: 104]。端なくも一九〇四年七月には、プロニスワフはティミ河上流域のギリヤーク(現ニウフ)の間でフィールドワークに従事しており、弟のユゼフ・ピウスツキの方は来日して二十日余り滞在していた[井上 2013a: 69; 本文 877^{二八}]。

^{二六} 「教授」とは、「當時モスコウ大學の教授で人類學者として知られた、ポーランド人理學士、プリードスキー氏(アイヌはプズスキーと呼んでゐる)」「能仲^{二九}」のことを指していた。能仲はまた「教授は政府の命を奉じ、一八九六年(明治二十九年)の春、囚徒等を輸送する義勇艦に乗じて樺太に渡つたのである」、そして彼の使命は「囚徒の教化・訓育」だつた[能仲: 同^{三〇}]とも記している。彼は自らの調査結果のみならず想像力も自由に駆使して己の記述を飾り立てているが、ピウスツキの現地名とチュフサンマの盲目以外は事実背馳する。

て、ウラヂヴォストクからサハリンへ派遣された^{一七}。その使命は、アイヌ（現エンチウ）とオロツコ（現ウイルタ）の民族標本収集、ならびに両者のフオークロア資料採集だった。彼はその後、一九〇五年六月に大陸へ向けて離島するから、樺太島ではフィールド調査に孜々として従事しつつ、ほぼ三年を過ごしたことになる。彼の踏査行は、日露戦争の開戦前夜（1902~1904）や戦時下（1904~1905）という厳しくて不穏な情勢下で遂行されたにもかかわらず大成功を収めて、幾つかの博物館に一級品のアイヌ・コレクションをもたらし、後世にはサハリン民族誌に関する生の記録を残した。

かくてプロニスワフは一九〇二年九月にオタサンでチュフサンマと初対面を果たし（注九参照）、十二月十四日以降は既述のようにバフンケの丸太小屋の一室を間借りしていた。この家はその際、「彼の根城」とも形容されたのである。

では、関連する能仲の記述を見てみよう。

彼は次のように記している。

かくてプ氏が全島を跋渉して^{マモ}、相濱のアイヌ部落に入つたのは「著者によると一八九七年」五月の初旬であつた。當時相濱には樺太アイヌの總本締めとまで云はれた、木村バフンケアイヌが住んでゐた。彼の偉令は全島のアイヌ達を壓してゐた。プ氏はこのバフンケ酋長の好意に依り、ここに暫く逗留することになつたのである。そしてプ氏のアイヌ研究の第一歩は始められたのであつた。酋長には一人の美しい娘があつた。彼女の名はシンキンチョウと呼ばれてゐた。まだ十八になつたばかりの小娘ではあつたけれど、年よりも大人びてゐた。父のバフンケは目に入れてもいづくない程娘を可愛がつた。シンキは村のメノコ達とはくらべものにならぬ程、

^{一七} 彼は一八九七年、十年に軽減された刑期を勤めあげて元既決囚の身分を獲得するも、同身分の居住は島内に限定されていた。サハリンからウラヂヴォストクへの転出が許可されたビウスツキは一八九九年、ロシア帝室地理協会傘下の現地博物館、即ちアムール地方研究会（略称 O I A K）附設博物館の物品管理人に就任する。

美しくそして利口であつた。若者達はピリカメノコ（美しい娘）だと云つて、彼女を中心にいつも朗らかな話題に花を咲かせてゐたのである。――こうした噂の中にあつて、シンキは何時も、眞面目によく働いた。そして、プ氏の身の廻りまでも何くれとなく世話をしたのである【能仲：7】。

――モスコウつてそんなに美しい處ですか、私も一度行つて見たいと思ひます――彼女は何時もプ氏の側に寄り添ふて、まだ見も知らぬ露西亞の話をきかされるのが、唯一の楽しみであつた。そして、プ氏はシンキからアイヌの言葉を聞き、それを辭書にするのが仕事であつた。彼女は露人と見れば、誰もアイヌ達を虐げる悪者とのみ思つてゐたが、今始めて一人の親切な露人をこゝに見出したのである。いつしか彼女の心に焼きつけられたのはプ氏の姿であつた。それは戀と名づけるには影薄いものであつたけれど、自分達より利口な人、偉らい人、さう想へば想うほどプ氏がいとしかつた。二人の間は日一日と親しくなつて、それがやがて、はつきりと戀に變つて行つた。

その夜は星がきら／＼と輝いて、空は黒水晶のやうに澄んでゐた。波打ち寄せる濱邊の小砂を踏みしめて愛を囁く二人の姿があつた。――結婚してもきつとあなたは、私などのやうなメノコはきらいになります、そのときの私の悲しみ、私は結婚しない方が幸福かもしれません――シンキは下うつむいて悲しさに言ふのであつた。――俺には妻も子もない、露西亞に歸つても待つてくれる人はいないんだ！ 淋しい生活、それを救つてくれたのはお前だ。なんで可愛いお前を棄てることが出来やう――「力強く言ひ終つたプ氏はシンキの手をしつかりと握つた【能仲：8】。

狭い部落に二人の間はいつしか知れ渡つていた。美しいメノコを異国の人にとられた、さう思ふと彼女を慕ふ部落の若者たちはプ

氏を怨んだ。けれど「親切なるロスカイ」で通つてゐる彼に對しては、怨を口にする者としてなかつた。父バフンケも熊獲りの歸り道樂しさうに語つてゐる二人の姿を見たことが幾度もあつた。そんなときには曾長は見ても見ぬ振りをしてゐた、寧ろ曾長の顔には喜びの色さへ漂つてゐたのである。――いとしい娘、しかも曾長の娘だ、なんで異国人の妻とすることが出来やう――「バフンケの妻は異国人であるブ氏との結婚には賛成はしなかつたが、いちらしい娘の姿を見ては、強く反抗する氣にもなれなかつた」〔能仲⁹〕。

以上の長々しい引用文は概ね、能仲がチュフサンマの口から直に聴き取つたものだったと考えてもよからう。それに対する能仲の尽力には感謝すべきであるが、にもかかわらず上記の出来事は、一八九六―一八九七年でなくて、ただ一九〇二―一九〇三年にのみ起こりえたはずである。したがつて、彼女はそのとき二十四―二十五才であつた（注九参照）。

ブロニスワフ・ピウスツキはアイ・コタンとその近辺に四ヶ月半（一九〇二年十二月十四日―一九〇三年四月三十日^{〔ユ暦〕}）在住するが、その間の半月（二月十五日―三月一日^{〔ユ暦〕}）は東海岸のルレ（魯禮）に滞在していた。その後は南東海岸をアイヌの丸木舟で巡回、半月（四月三十日―五月十六日^{〔ユ暦〕}）がかりでオブサキ（負咲）、オチヨ^ホポカ（落帆）、トウナイチャ（富内）、アイルポ（愛郎）の4コタンを歴訪した〔井上 2013a: 66、本書 872頁^{〔下〕}〕。したがつて（能仲が上で言及していた）「五月の初旬」には、彼はまさにこの舟旅の真最中であつた^{一八}。

^{一八} ピウスツキは自らの復命報告中で以下のように語っている。「私は十二月十四日から三十一日にかけて、晩秋に入手したドプロトヴォルスキー^{〔アイヌ・ロシア語〕} 辞典の研究と、その最初の検証に取り組みました。検証は所期の成果を上げなかつたとはいへ、私が利用することの可能なより多くの語彙を獲得し、予期される出合いで語り合うことが想定された、ロシア語を全く解さない子供や女や老人らのために、さまざまな成句や設問を「アイヌ語で」作成しました」〔本書 42頁^{〔下〕}〕。それは実際のところ、彼がアイヌ語を本格的に学ぶ最初の機会であつた。彼が同時に「シンキからアイヌの言葉を聞き、それを辞書にする仕事」にも邁進していたことは大いにありえただろう。一九〇三年

プロニスワフ・ピウスツキはその後、ポーランド人作家ヴァツワフ・シェロシエフスキ、千徳太郎治とともに3ヶ月ほど（六月二十四日〜九月二十四日^{ユ暦}）北海道に滞在してアイヌ調査に従事した。アイ・コタンに帰着したのは一九〇三年九月二十九日^{ユ暦}である^{『シェロシエフスキ 2013: 井上 2010a: なかんずく本書 875~876 頁参照』}。したがって、九月下旬にアイヌ風婚礼がアイ・コタンで挙行されたのは、それ以降のことである。

アイヌの著名な学者である知里眞志保^{一九}は、一九四〇年代初年に白濱でチュフサンマに関する生情報を収集していたが、以下のように記している。「この物語は有名な話であり、興味深い話であるから、しばしば事実が曲筆、加工されて伝えられている部分が多い。われわれは白浜を訪れ、その昔、ピルスツキー氏をよく知る故老たちや、遺児の一人にも会って聞いた事実を述べて、誤伝を正しておきたいと思う。その一つは、チュフサンマの結婚を、母親は許したが、父親は反対もしくは黙認したように伝えられている点である。これは両親ともはげしい反対をしたにもかかわらず、いわゆる自由結婚をしたというのが事実である」^{『知里 1973: 150, 1979: 17』}。ここでは知里が、能仲とその同僚の伝える結婚問題へのバフンケ

一月初めには、彼のサハリン滞在の延長申請が受諾されたとの通知がサンクト・ペテルブルグから届いていた。しかも3年（1903-1905）の延長が認められたのだ^{『井上 2013a: 66, 本書 82 頁』}。研究計画と人生プランは必ずや更新されたであろう。彼は引き続いて「二月一日、アイ村に帰宅後、二月十五日までアイヌ語の実践的学習を継続しました」^{『本書 42 頁』}と記している。彼はアイヌ語の先生として「ロシア語を比較的良好に話す十六才の青年」だけに言及するとはいえ、チュフサンマは恋人であるだけに留まらず、彼にとっては遥かに理想的なアイヌ語教師でもあったことが十分に考えられよう。それはともかく、上記の出来事は一部始終が、一九〇二年から一九〇三年にかけての真冬に出来ていた。因みに熊狩りは、当時のエンチュウにとって晩冬の生業だった。

^{一九} 知里眞志保（1909-1961）は幌別（現登別市）生まれの北海道アイヌ、卓越した言語学者。一九三七年、東京帝国大学卒業。一九四〇年以降は豊原（現ユジノ・サハリンスク）の豊原高等女学校で教鞭を執る。その著作「樺太アイヌの生活」は概ね、白濱でのフィールド調査にもとづいて執筆されている。

のみの関与とは対照的に、彼女の両親だけに言及していた事実は格別な注記に値する。バフンケはひよつとすると、ほかならぬ両親の激しい反対のせいで、伝統的なアイヌ風婚礼^{二〇}の挙行に（叔父ないし曾長の立場から）率先して踏み切ったのではなかったか、と本稿の著者は考えている。今一つ、千徳が一九二九年にチュフサンマをバフンケの「姪」と明記していたにもかかわらず、能仲は彼女を依然として「娘」と記載し続けた事実にも注意を喚起しておきたい^{二一}。

（二）夫との離別、そしてその理由

この節は能仲の独壇場であって、以下のように記していた。

かくて三年の月日は瞬く間に過ぎて、一九〇四年（明治三十七年）三の十月となつた。今まで表面だけは穏やかであつたサハリン島も、俄かに重苦しい雰囲気に包まれたのである。それは日露の開戦であつた。コルサコフの守備隊からは、兵隊が露人部落を訪れては、盛んに義勇兵を募つた。その頃プ氏のもとには本國にある兄ビルスツキー氏〔即ちユゼフ・ピウスツキ〕^三から、頻りに暗號電

^{二〇} しかし、バフンケは一九一七年の春に「婚禮の式は別にありません」〔青山 1918: 96〕と語っていた。

^{二一} 能仲の誤謬は一九三四年一月、ポーランドの作家アレクサンデル・ヤンタ『ポウチンスキ（1908-1974、散文作家、詩人、ジャーナリスト、稀観書好事家）がプロニスワフ・ピウスツキの遺族を求めて来樺したとき同僚によって正された。その際、能仲の著書に依拠しつつあまたの記事をものした樺太の記者たちは、報道合戦を繰り広げる最中に、チュフサンマの呼称をバフンケの「娘」から「姪」へ切り替えることを余儀なくされた〔井上 2010b, Part II: 191-197、なかんずく 194 頁、本書 267 頁〕。

^三 これは首尾一貫を頗る欠いた年代設定である。もし彼らの結婚が一九九七年九月に行われたとすれば、能仲はここに「一九〇〇年十月」と記載せねばならぬ筈である。管見では、日露戦争が一九〇三年二月十日（一月二十九日^三）に勃発していたから、彼はそうすることができなかったものと推察される。

^{三三} ユゼフ・ピウスツキ（1868-1935）は、能仲の記すようなプロニスワフの「兄」でなくて、年子の「弟」である（ユゼフについては、注三

信が飛來していた。プ氏はその電報を見るたびに露國が不利であることを知った。續いて『旅順「即ちポルト・アルトゥール」も近く陥落す』と云ふ電報を受取つたのである。然し一方露國の守備隊は依然として、連戦連勝日本軍全滅を報告し、働ける者と見れば殆ど強制的に義勇軍に加へたのである。その頃既に本國から輸送される糧食も、全く杜絶へて、商店などには食糧品の影さへ見ることが出来なかつた。この有様を見たプ氏は愈々露國敗戦と見たのである。そしてプ氏は兄からの電信を見るたびに、何かしら其顔には湧き立つやうな喜びと、又打つて變つた哀愁とが漂ふのであつた『能仲! 12』。

兩國の戦ひは愈々激烈の度を加へて行つた。さしも難攻不落と云はれた旅順も、陥落は最早時日の問題となり、而も露國內には早くも敗戦を噂するものさへあつた。『…』プ氏は今は早や躊躇すべき秋ではないと考へた。けれど、最愛なる妻、そして美しい二人の我が子^{二四}、それを思へばプ氏の決心にもぶるのであつた。『妻のシンキは今日この頃たゞならぬ夫の態度、それが不審でならなかつた。ひつきりなしに配達される秘密の電報、屹度重大なことがあるに違ひないとは察しられたが、何かしら怖ろしさがこみあげて來て、訊ねてみる氣にもなれなかつた。何時も楽しい夕餉の食卓につく前にプ氏は神にお祈りをして、子供を抱いて笑ふのが常であるのに、電報の來た夜からは物思ひに沈み、笑い顔さへ見せてはくれなかつた』『能仲! 13』。

アイヌ達も食糧の欠乏に苦しめられてゐる露人達を見て、ロスカイは負けに違ひないと思つた。『…』プ氏にとつては愈々最後の

七と五五も参照されたい。

^{二四} 当時の夫妻が有した子は一人（助造）だけであつて、キヨは恐らくチュフサンマの胎内に宿つていたと推測される。プロニスワフがそれを承知していたか否か、定かではない。

決断をせねばならぬときが来た。それは『旅順陥落』^{二五}の報を手にしたのである。プ氏はじつとその電報をみつめてゐたが、やがて手は振へ、唇は引き締まり、見るからに何か決心をしたかの如くであつた。――さうだ、俺は露國のために死んではならぬ。俺は祖國ポーランドの再興を圖らねばならぬ責任があるのだ――彼の心には俄然祖國愛が燃えたのである。そして直ちに出發すると云ふ電報を始めて兄ビルススキー氏に打つた「能仲」¹⁴。

その夜はしと／＼と大雪が降つてゐた。プ氏は事の一切を打ち明けて、父バフンケに、妻子を連れて行くことを嘆願したのであつた。けれどバフンケは異國へ娘をやつては同族達に顔向けが出来ぬと、どうしても許してはくれなかつた。シンキも父に泣いて頼んでは見たけれど義理固い父に一言のもとに刎ねつけられてしまつた。プ氏は泣き崩れる妻を勞わりながら、確く約したのである。――

――きつと迎へに来る、お前も子供たちも病氣をせずに達者で暮らしてくれ――

いよ／＼出發する日が来た。たとひ迎へに来ると慰められはしたものの、シンキにとってはそれは耐へ得られない、悲しみの日であつた。数多のアイヌと訓育を受けた露人たちは、別れを惜しんで見送つた。やがて毛皮に身を包んだプ氏は、十頭曳きの犬橇の人となつた。妻のシンキはまだいたいけない乳呑児の我が子を背負ひ、さつきから、張り裂けるやうな悲しみを制へて雪の中に埋くまつてゐる。橇は動き始めた。虫が知らせたか、プ氏はこれが最後の別れになるのではないかと思ふと、後髪を引かれるやうな氣持だつた。今まで眼に涙をたゝへ、黙つて下うつむいてゐたシンキは、突然半狂亂になつて、走り行く橇の後を泣き叫びつゝ追つたのである。けれど、走り出した橇は止まらうとしなかつた。プ氏は手をあげて、幾度々も後振り返り、別れを惜しんだ。走り疲れた

シンキはバツタリと雪の中に打ち倒れた。そして、大聲を擧げて泣きわめいた。見送るバフンケの眼にも何時しか熱い涙が宿つてゐた……。櫓は吹雪を衝いて吸ひ込まれるやうに、一路アレキシサンドル「島の北西岸にあるアレクサンドロフスク哨所、当時の島都であつた」へと向つたのである「能仲 14～15」。

今のわれわれには遺憾ながら、能仲がチュフサンマの語りをどこまで忠実に伝えているか、また彼自身の解釈や想像力によつて彼女の言説がどれほど修正され、あるいは捻じ曲げられたかも、然るべく検証する術がない。とはいえ本稿の著者の印象による限り、(1) 一九〇四年十月以降、ブロニスワフは弟のユゼフ・ピウスツキないしその他の誰かから「暗號(秘密)電報」を頻繁に受領していたこと、(2) 一九〇五年一月一日の旅順陥落は彼が離島を決断する際の決定的要因だったこと、(3) 一九〇五年三月六日^{ユ歴}二六に出来した彼のアイ出發をめぐめる痛ましい離別の情景の三件では、能仲は実話を語りえたのでないかと思われる。

しかしながら、ブロニスワフ・ピウスツキはこの折、アレクサンドロフスクへ直行したわけでも、また能仲が伝えるやうに弟の待つポーランドへ向かつたのでもなくて、概ねサハリン北部のロシア人村——オノール、ルイコフスコエ(現キーロフスコエ)、デルビンスコエ(現ティモフスク)——に3ヶ月(三月半ば～六月半ば^{ユ歴})滞在した。彼はそこで数件の調査報告

二六 日付は彼の復命報告による「本書 67 頁」。因みに、彼のアイ・コタン出發は、遺憾ながらやはり日付を欠くものの、知里によつても記録されていた。「二人の訣別の日がついにきた。その日、粉雪が霏々と降つていた。二人は永久の別れを無言のうちにこめて、コタンのはずれに立つた。ピルスツキーは大櫓に跨つた。十数頭の曳き大はけたましく吠える。トク! トク! トク! トク! (急げ) の号令でアレキシサンドロフスクを目指して櫓は駆け出した。北へ、北へ、故国へ去つて行くピルスツキーの姿は、疾駆する櫓とともに雪煙の彼方に消えてしまった」[知里 1973: 149; 1979: 16-17]。

を摺筆して、サハリン島知事へ首尾よく提出している。しかるのち、彼は一九〇五年六月十一日^{二七}にアレクサンドロフスクを發つて、大陸のニコライエフスク（尼港）へ向かった『本書 68～69頁』。そして八月の初めには、3年間留守にしたウラヂヴォストクに帰着する [Babseva 2010: 404]。しかるに彼は今一度、ポーツマス講和条約締結（九月五日）後——恐らく九月中旬——にサハリンを再訪する^{二七}。これは彼にとつて三度目、最後から二番目の樺太島訪問で、その目的は何よりもまず妻と息子に会つて彼らを島外へ連れ出し、故郷へ帯同することだったと推察される^{二八}。

^{二七} この件についてアルフレド・F・マイエヴィチは次のように記している。「ピウスツキは一九〇五年の秋に三度目の来島を果たすが、今回は戦争の結果として日本人占領下にあつた南サハリンで、己のアイヌ家族——Cushannaという名の妻（日本名木村シンキンチョウ、当時は身重で、十二月十八日に娘のキヨが誕生）と二才の息子助造（アイヌ名の記憶は保存されなかった）——が暮らすアイ村（現ソウイェツコエ、相川河口に所在）へ赴いた。だがCushannaの親族は彼女の離村を許さなかった。この脱出騒動を伝える公刊資料は、ウラヂヴォストク誌『極東の自然と人々』に「日本人占領下の南サハリン」と題して発表された2篇の記事（「4号、5号所収」、一九〇六年二月十九、二十六日刊）である」 [Majewicz 1994: 2-3]。マイエヴィチは「脱出騒動」の典拠として、ピウスツキの親しい友人ニコライ・P・マトヴェイェフが主宰する同週刊誌の記事を明記するも、両記事中には「騒動」の片鱗も見出されな^{二八} [Pisudski 2012: 20-22; 24-27]。もし行間を精読するならば、ピウスツキがポーツマス条約の直後に日本占領下の南樺太へ足を踏み入れたことは、辛うじて読み取れるだろう。まさにその故に、マイエヴィチはプロニスワフのサハリンへの旅に「一九〇六年秋」という時を付与できたのであろう。一方、『プロニスワフ・ピウスツキ評伝』（第一巻）所載の「Bronisław Pisudski Chronicle」と題する共著記事は、この一件に「初秋（九月中旬?）」と「十一月初旬」という二つの日付を宛がっている [Bajor et al. 2013, Part I: 467, 489]。私は前者を選択するが、それは単に、ピウスツキのサハリン行の主旨が、チュフサンマとの約束を果たすことだったという私の想定に、よく符合するからに過ぎない。因みに、ピウスツキは一九〇五年に今一度訪權していた（「十一月初旬」?）。彼は一九〇六年十二月二十八日付の「南サハリン（第一書簡）」と題する記事に「いまだ日本人支配下の島を去り、『日本で』日本人の客となったあとで、不運な年である同じ一九〇五年に、私は再度当地を訪ねることになった。アレクサンドロフスク哨所は雪に埋もれていた」 [Pisudski 2012: 30] と記すからだ。これは彼にとって四度目で最後の訪權だった。彼が果たして、この際にもアイ・コタンを訪ねたか否か、定かではない。

^{二八} その当時のプロニスワフの自己意識を付度するなら、彼の「故郷」はロシア帝国ヴィルノ県（現リトワニア）であつたろう。したがって、

既知の結果から推論するならば、彼はこの度もチュフサンマの両親のみならず、叔父のバフンケの説得にも失敗し、悲しみに打ちひしがれてアイを後にしていたであろう。プロニスワフ・ピウスツキにとつてはこれが、彼の家族——チュフサンマと助造、そして母の胎内にいたキヨ——との最終的な今生の別れとなった。

一年後の一九〇六年八月十一日、千徳太郎治は在京のピウスツキ宛に第3の、恐らくは最後の手紙を執筆した。同書簡の末尾では、ある種の非難と叱責を込めて「あなたは自分の妻子のことを完璧に忘却しておられる。あなたが御自身の子を産ませた女がなぜ、これほどまで悲惨・不如意でなければならぬのでしょうか」[Majewicz 2004a: 727; 参照：丹菊 2001: 223]と記していた^{二九}。ピウスツキは八月三日に離日していたから、ヨーロッパの住所へ転送された手紙に目を通せたのは、欧

彼は自分の家族を、兄弟姉妹の在住するヴィルノ（現ヴィルニウス）へ連れて行くことを立案したであろう。彼は一九〇五年四月三十日^{三〇}、両首都（サンクト・ペテルブルグとモスクワ）を除く帝国全土で居住地を自由に選択する権利が回復されたとの通知を、サハリン島知事から受領していた。彼の刑期は一九〇四年八月十一日付の特赦令で最終的に満了したからである [Babuseva 2012: 405-406]。かくて彼は、生まれ故郷のリトワニアへ戻る現実的可能性を獲得する。間接的ながらも、サンクト・ペテルブルグのリエフ・シュテルンベルグヘロシアに戻るための無料乗車券を要請する際に、己自身のみならず配偶者の分までも申請していた可能性を示唆する証拠が存在する。恐らくは同要請を受けて、ロシア交通省事務局は一九〇六年三月三日^{三一}（グレゴリウス暦では十五日）、ペテルブルグまでの一等車2席分の無料切符を、ウラヂヴォストクのプロニスワフ・ピウスツキ宛に発送していた [Bajor et al. 2010, Part 2: 386]。しかし彼はそのとき、ヨーロッパへ単身で戻るというまったく別の選択をして、すでに東京きへ向けた。

^{二九} 千徳は一九〇六年、内淵から東京のピウスツキへ向けて「アイヌ文語」で記した手紙を少なくとも3通（六月四日、十五日、八月十一日付）送っていた。チュフサンマについては、六月四日付で「あなたの奥方も少々病みましたが、今は娘さんが生まれて、一刻も早くあなたと会いたいそうです。まだ再婚していません」[Majewicz: 2004a: 724; 参照：丹菊: 2003]、同十五日付で「バフンケやその他の人たちも健勝です。チュフサンマには二人の子（息子と娘）がいます。彼女は今も息災です。いまだ再婚してません。いつもあなたの帰りを待っています」[Majewicz: 2004a: 725; 参照：丹菊: 2003]、そして八月十一日付では「わが村のアイヌたちは今や皆息災です。バフンケさんはいつもあなたを待ち続けておられます。あなたの二人のお子さんも元気で、チュフサンマによると、息子も娘もニシバ」[アイヌ語で「旦那」の意、ここではピウスツキを

州到着後のことである。

周知のように、ピウスツキは人類学的フィールドワークで写真機を活用した先駆者の一人として、素晴らしい人類学的写真コレクションを残している。したがって、同コレクション中に彼の家族写真が見出されたとして何の不思議もないだろう。にもかかわらず、頗る蓋然性の高い写真に関してすら然るべき撮影データが欠如するため、われわれは一片の写真の特定さえ成就できずにいた。しかるにミハイル・M・プロコフィエフは先頃、ピウスツキ自身が一九〇二～一九〇五年に撮影した写真コレクションから4葉を、そのような家族写真と断じて公表した [photos 2, 5-7 参照] ^{三〇}。

最後ではあるが頗る重要な案件として、助造とキヨの生年を確定しておくべきであろう。前者に関する限り、助造は一九〇三年二月十二日の生まれと伝えられてきており、また戸籍簿でもそのように明記されているとはいえ、彼の生年は千徳の記載に従って「一九〇四年」を採るべきである。なぜなら、すべての状況証拠が一斉にそれを一九〇四年と指示するからだ。他方でキヨの場合は、実際に一九〇五年十二月十八日に誕生していたから^{三一}、千徳の与える一九〇六年の方が破

指す」を彷彿とさせ、顔はどちらもあるあなたにそっくりとのこと。今はチュフサンマも元気で、毎日、あなたをひたすら待ってます」 [Majewicz: 726; 参照：丹菊：213-214] と記していた。

^{三〇} Prokofiev 2010: 369, 372-373, 375 (photos 1-4). 彼はその際、ポンチク(アイヌ) (Ponchiku と記載)、彼の妻と娘、妹チュフサンマと息子助造、彼の従姉妹 (photo 1) 、チュフサンマと少女 (photo 2) 、チュフサンマと二人の少年 (photo 3) を特定している。photo 4 に関しては脚注四を見られたい。プロコフィエフによれば、アイで撮影された写真 [photo 7]、即ちプロコフィエフ論文の photo 11 に登場する右端の男性がまず、SPbF ARAN 1886/87 に依拠して「Omyryku の孫息子 Ponchukku」と判定されたという。しかし、彼の判定を支える決定的証拠は RGIA DV 1900/05 中に見出される。同文書によると、一九〇四年におけるアイ・コタン第1世帯は、家長ハセランケ (三十三才) と彼の妻 (二十六才)、息子 (十六才)、そして家長の既婚の姉 (三十九才) と二人の未婚の弟 (二十九才と二十四才) の6名で構成されていたから、ハセランケと二人の弟は「件の男性」の候補者から安んじて除外できるわけである。

^{三一} この日付がどの暦法にもとづいているかは不詳である。もしグレゴリウス暦であれば、キヨは恐らく、父親が日本へ赴く途上で生まれた

棄さるべきである。

(三) チュフサンマと子供たちのその後

著名なアイヌ学者の金田一京助は一九二九年晩夏、初秋、三度目の最後の訪樺で初めて白濱を訪ね、一週間滞在した。その折に記された柳田國男宛私信が「樺太だより」と題して「東京朝日新聞」（九月二十日、二十一日付朝刊）に掲載され、一九三四年には随筆集『北の人』に収められている。私信では、一九一四年に相濱で会った八才のキヨが「白濱旅館」の女将を務めていて、「言葉は常のアイヌの娘と違ひませんが、一見、ます／＼西洋婦人そっくりの風貌になつてゐまして、物腰・表情は少しもアイヌらしくありません」〔金田一 1934: 172〕と感慨深げにしたためている。キヨは二十三才だった。

金田一は彼女の母「チュフサンマ」、夫「大谷熊吉」、十八才の異父妹「白川セツ」にも言及するが、名前は記していない。だが、ピウスツキのことは「ピルスツスキイ博士」と記し、ユゼフを「弟」と正しく把握していた。特筆に値するのは、ピウスツキの死が白浦の「露人の通辯」によつてすでに伝えられていたことである〔前掲書 172-173頁〕。「通辯」は間違いなくアダム・ムロチコフスキ（注三九、四一、五四参照）で、この通辯を伴う「ポーランド人の坊さん」の白濱訪問は同国のパテク初代駐日特命全権公使の初訪樺（一九二五年八月——注三八、三九参照）とかかわっていたであろう。したがって、一九二五年

ことになるが、ユリウス暦の十二月十八日に当たる同月三十日の場合、ピウスツキはすでに間違いなく東京にいた。

以降はチュフサンマも「夫の死」を承知していたはずである。

能仲は最終節「老メノコは泣てゐる」で以下のように記していた。

シンキは今盲目となつて樺太東海岸、白濱のアイヌ部落に細々と煙を立てゝゐる。プ氏が立つてから彼女は毎日北の方を眺めては、夫ブズスキーの迎へに來る日を持ちあぐんで、涙の日を送つてゐた哀れ彼女は泣きに泣いて、その眼は潰れてしまつたのである^{三二}。メノコはさう言つてゐる。美しかったシンキも今は五十二となり^{三三}、二人の子には孫まで出來てゐる。その利口であつたシンキも、盲目となつてからは一層夫戀しさに惱まされ氣が狂ひかけやうとしたことさへあつた。けれどシンキは『私の夫は必ず歸つて來る』さう思つては、自ら慰め暗い人生にたゞそれを一つの望みとして、今もなほ不自由な体を支へ黙々として働いてゐる^{三四}。プ氏が立つとき『決してこの俺のことは、話してはならぬ』さう言われたシンキは、今でもそれを固く守つて語らうとはしない^{三五}。『能仲：17』

^{三二} この点に関して知里は次のように述べている。「晩年は不幸な女であつた。死ぬ数年前より、かつてのピリカ・メロコボ「美しい娘」も目を病み、盲目となりはて、いまから七年前、淋しく白浜コタンで死んでいった」【知里1973:149;1979:17】。知里によると、彼女の盲目が長期の涕泣とは無関係だという。

^{三三} チュフサンマの当時の年齢から推して、能仲は一九三〇年に彼女と面談した筈である。

^{三四} 彼女に対するブリスワフの堅い約束や盲目の原因をめぐつても、知里は以下のように論評する。「チュフサンマは別れに際して、お互に話し合った上、待ちわびていたわけではない。まもなく、再嫁したのが事実であり、盲目となつたのもそのためでなく、晩年になつてからの事実である」【知里1973:150;1979:18】。彼女が一九〇九年以前に再婚していた事実は松川木公がすでに報じたが【松川:106】。知里はさらに「その後間もなく、チュフサンマは二子を連れて他家へ再嫁し、白浜に居住した。そして数児をさらにもうけた」【知里1973:149;1979:17】と加筆している。因みにチュフサンマは、新設された白濱村へ十コタンの住民が総移住する一九二一年までは（注四参照）、子供たちとともに白浦のシリケシタン宅で暮らしていた筈である。再婚後に生まれた子供は、白川セツ（1911-1945）とその弟「いそじろう」である【一〇一六年六月二十二日に帯広で行われた、キヨの三女高橋ひとみさんとの面談で聴取】。

^{三五} 能仲は第一章の「附記」で次のように記していた。「筆者が白濱のアイヌ部落を屢々訪問してゐるうちに、偶々一古老と會談の際この話

「アイヌ生活の四季」と題する第一節で小部分を占めるに過ぎぬ知里の文章^{三六}は、能仲の名にまったく触れぬとはいえず『北蝦夷秘聞』の書評であるようだ。そして知里の論評は、確かに能仲に対するかなり厳しいコメントで、またチュフサンマにとつては残酷に過ぎるとも言えるが、真実により近いもののように思われる。能仲はとどのつまり、自らの聴取を通してチュフサンマの当時の心情を把握し、彼女の心象風景を彼なりに忠実に物語ることができたのであろう。

なお能仲は同節で、樺太におけるブロニスワフの遺族へポーランド側から寄せられた配慮に言及できたことは、もっと重要である。より正確を期すなら、この配慮は彼の弟ユゼフ・ピウスツキが提起したものと伝えられていた。

能仲は以下のように記す。

ブ氏は「……約束を果すこともできず、不幸にも巴里で客死してしまつた^{三七}。その後ピルスツキー氏「ユゼフ・ピウスツキ」は弟が樺太在任中、アイヌのメノコと結婚したことを、うす／＼知つてゐたのか、五年前駐日公使であり、現にモスコに駐在してゐるバテック氏^{三八}を通じて、シンキとその子の所在を調査せしめたので、公使館より書記生がわざ／＼所在確かめに來島したことがあつた

をき、シンキの家を訪ねたが、彼女は容易に語つてはくれなかつたが、『私はロスカイ（露人）である夫に傳へるから』と、悪いとは知りつゝも、盲目のシンキを偽つて訊ねたのである。漸く老婆はアイヌ語や日本語をまじへて、記憶を辿つて語つた……「能仲」¹⁷。

^{三六} これは知里の著作「樺太アイヌの生活」中に見出される「知里 1973: 148-150; 1979: 16-17」。

^{三七} ブロニスワフ・ピウスツキは一九一八年五月十七日にパリで自死を遂げた。半年後の十一月十一日、ポーランド国家は、彼の実弟ユゼフ・ピウスツキの強力な指揮下に再興されて、ユゼフは新生ポーランド共和国（Rzeczpospolita Polska）の初代元帥（Marszałek）に推輓され、さらに首席（Naczelnik）にも就任したが、大統領になることはなかった。彼は一九二六年五月十五日の所謂「ピウスツキ・クーデター」により陸軍大臣に就いて以降、一九三五年の死に至るまで同ポストに留まつた。

^{三八} スタニスワフ・パテク（Stanisław Patek, 1866-1945）はポーランドの初代駐日特命全權公使（在任 1921-1926）だった。

が、遂に生死の程さへも知れずに空しく歸つた^{三九}。樺太廳當局でも當時その調査を依頼されたが、何にしても露領のこともであり、且又ブ氏とは一体如何なることをした人かそれすらも判然としなかつたので、居らぬと回答したものであつた「能仲¹⁶」。

能仲文夫の最大の功績は、彼の著書がユゼフ・ピウスツキを衝き動かして、新しい措置を講じせしめたことにある。ユゼフは、自分の代理人に任じたポーランド人作家アレクサンデル・ヤンタ¹⁷ポウチンスキへ、ブロニスワフの遺族に対する本格的探索を実行し、彼らをポーランドへ呼び寄せることも命じたと伝えられている^{四〇}。ヤンタ¹⁸ポウチンスキは一九三四年一月に南樺太へ到来し、予期せぬ幾つかの僥倖に恵まれ、また日本人・ポーランド人・エンチウを問わず、あまた

^{三九} パテク公使は一九二五年八月、チエコスロヴァキア公使とともに日本領南樺太の首都豊原を訪ねている「樺日紙記事「波蘭及智恵古の公使來島す」(掲載写真のキャプション)、一九二五年八月二十五日付」。因みに、アダム・ムロチコフスキは一九三四年一月八日、十年前に樺太在留ポーランド人を代表して「(パテク)公使のための晩餐会を準備しました」「ヤンタ¹⁹ポウチンスキ 2013:13」とA・ヤンタ²⁰ポウチンスキへ語っていた。恐らく件の「書記生」は、「五年前」という記載から推定される一九二五年に同公使に随行したか、遅くとも同年中には訪樺したもののと思われる。

^{四〇} ある樺太の記者は、「ピ氏『ユゼフ・ピウスツキ』は「『日本公使館の「能仲の著書に関する」報告に依つてその後の状況を知り」」「今改めて調査方を命じたのである」(井上 2010b, Part II: 197)「樺日紙前掲記事所収、一九三四年一月十日付」(本書 83頁)と報じていた。粗し、別の記者は「ポーランド公使館に寄寓してゐる同國新聞記者アレキサンダー・ヤンター氏は「公使館の依頼を受け」去る四日、「連絡船で調査の爲來島」(北海タイムス所載記事「國際悲戀、酋長の娘に」廻る卅年目、喜びの春」(一九三四年一月八日付朝刊、本書 85頁)とも記していた。能仲は第一章の序節「地獄の島、サハリン島」で、「この一篇が義兄²¹である前ポーランド大統領²²、現同國陸軍大臣、ピルスツキー氏にメノコが健在であることが知れてくれ、筆者の喜びとする處である」(能仲²³)と記していたから、彼の希望は叶えられたわけである。とはいえ、この一件についてはその一部始終が、ポーランドで見出される関連資料に依拠して精査・検証されることを切に希望する。

の人々の善意にも支えられて、樺太東海岸の白濱でチュフサンマとキヨ、そして白浦では助造にも会うことができた^{四一}。

四一 この興味深い記録は、彼の旅行記『地球は丸い』（1936）所載の「サハリンでポーランド人を訪ねる」と題する章に見出される「ヤンタ・ポウチンスキ 2013: 109-147」もしヤンタ・ポウチンスキの記述と彼の樺太旅行を取材した新聞記事との両情報を総合するなら、最も蓋然性の高い旅程は以下の通り。

一九三四年一月二日、ヤンタ・ポウチンスキは東京の上野駅を青森へ向けて出発したのち、函館行きの連絡船内で一泊、函館からは汽車で稚内へ向かう。一月四日、別の連絡船で大泊に入港後、直ちに豊原行き列車に乗り込んで旅を続けた。豊原では最も豪華な日本旅館「花屋本店」に止宿する。一月五七日は花屋本店に滞在して、ポーランド人のカトリック聖職者や、日本統治下の樺太に残留したポーランド人らを訪ねる。一月八日、菱沼右一とともに列車で白濱へ向い、そこでチュフサンマとキヨに会う。その後は単身で白浦へ赴き、北サハリンからの亡命ポーランド人アダム・ムロチコフスキ（Adam Mroczkowski）宅で一泊。一月九日、前日の約束通り、助造が白川仁太郎と木村愛助に伴なわれて白浦着。一月十日、プロニスワフの家族発見を伝える第一報を豊原からポーランドへ向けて打電。その後の日程を、ある樺太の記者は次のように伝えている。『今日（十日）は新場「現ダーチノエ」の同国人「残留ポーランド人ミハウ、ユゼフ・ルボヴィエツキ」を尋ねて同家に泊り、「十二日の連絡船」で退島します』。『…尚ヤンタ氏は十二日に退島、「札幌」に寄つて、「内地は日光の絶景を探り、「東京に向ふ筈である」「樺日紙所載記事「ヤンタ氏はプ氏の愛児の今後に就ても援助——白浦部落の同国人方で助造と會見し身の振方の相談をも受く」、一九三四年一月十一日付夕刊、本書 856 ページ所収』。

ヤンタ・ポウチンスキは一週間足らずで、ユゼフ・ピウスツキにとつて十年がかりの懸案だった課題を見事に成就することができた。だが、もし彼が享受することのできた幾つかの僥倖やあまたの人々の善意なかりせば、これが出来ることは決してなかったらう。最大の幸運は疑いなく、東京の中央情報社々長で、かつて樺日紙主筆を務めたこともある菱沼右一との出会いだった。菱沼は以下のように記している。『函館の車中で話伴れになったポーランドの青年新聞記者アレキサンダー、ヤンタ君と「天泊行き」の連絡船で「同船した。」「ヤンタ君は年が若い」「實に好く東洋の諸問題や各地の事情に精通して居た」「三人の話はそれからそれと半日もたいた」「續いた」「樺日紙所載の菱沼署名記事「樺太の旅（一）」、一九三四年一月七日付、本書 839, 840 ページ所収」。菱沼は偶然にも若きポーランド人記者を、満洲国外交部大橋忠一次長（事実上の外務大臣）に紹介する機会があったので、三名の船上鼎談は半日も続くことになった。一方、ヤンタ・ポウチンスキは次のように記している。『甲板で日本人にあった。彼は私に對し、この国ではあまりないような質問を英語で尋ねたのだった。」「私には彼に借りを作らないように返事をした後、彼に對しても同じ質問をした。彼はジャーナリストで、東京の「中央情報」という雑誌の編集長だと

る四二。

以下ではヤンタ「ポウチンスキ」の記述から、一九三四年一月八・九日の白濱・白浦訪問にかかわる箇所を抜粋して紹介する。

一月八日の白濱訪問について、彼は以下のように記している。

シンキンチョに会いに行った。彼女はすでに私たちの到着を知っており、私たちに会いたいとじりじりと待っていた。アイヌ人の誰かが彼女の手を取って連れてきた。彼女は盲目だった。彼女は目の上に黒い眼隠しをしていて、その眼隠しの下にはシヨールを巻

分かった。「……」彼の名は菱沼右一といった。二年半サハリンに住んでいたとのことである。彼はこの地方について語り始めた。「……」『ピウスツキ元帥のお兄さんのプロニスワフがサハリンに住んでいたことはご存知ですか』と彼は尋ねた。「私は、自分は知っているし、サハリンと北海道の原住民であるアイヌ人に関するプロニスワフの研究についても聞いたことがあると言った。『日本のタイトルで『樺太「正しくは北蝦夷」秘聞』という本をご存知ですか。私の義理の弟である能仲文夫が書いたのですが、プロニスワフ・ピウスツキのサハリン滞在史と彼の恋愛事件に丸々一章を割いています』」「それはまったく知りませんでした」「いいですか、ロマンですよ。本当のロマンです。サハリンでは予期せぬものがあなたを待ち受けていますよ。それをあなたにお見せしてご案内し、見つけ出すことをお願いしますよ。私と義弟はそのことを知っていますから。もう何ヶ月もこの問題の痕跡の探索に費やしてきました』」「ヤンタ「ポウチンスキ」2013:115」。

一月八日、菱沼は白濱へ向かう車中で、ヤンタ「ポウチンスキ」のために能仲の第一章を英訳する。ヤンタ「ポウチンスキ」のちに、能仲自身によるあまたの誤報も含むこの英訳テキストを自らの旅行記に収録した「ヤンタ「ポウチンスキ」133」。彼はまた菱沼の車中講義の最後の部分も記録している。「彼の娘はアイヌ人の許に嫁に行き、今では四人の子供の母親になっているという。しかし、菱沼氏が言うには、子供たちの顔はアイヌ風ではないとのことである。前回サハリンを回ったときに、彼は子供たちに会ったらしい。子供たちが誰に似ているかは明らかである。」「私のアイヌ人の親友の助けを借りて子供たちを探してましよう。シンキンチョもまだ生きていますが、ただ目が見えなくなっています」と彼は告げる「ヤンタ「ポウチンスキ」2013:133」。他ならぬ菱沼の「白川仁太郎や木村愛助（即ち、バフンケの養子で相続者のレーヘコ）」を初めとする「アイヌの友人たちの心温まる支援のお蔭で、ヤンタ「ポウチンスキ」は白濱と白浦において、プロニスワフの家族全員と出会うことができたのである。

四二 ヤンタ「ポウチンスキ」は本文中で日付には言及していないから、以下では個々の日付を関連する新聞記事から援用する。

いていた【Photo 8 参照】。彼女は悲しみに満ち、誇りに溢れ、素晴らしい黒い髪をしていた。結婚したアイヌの女性の習慣として、唇の上に入れ墨をしていた。盲目の人に特徴的な歩調で何歩か進んだが、しかし、しっかりと立っていた。まだ老いておらず、五十歳だった。彼女は何も言わなかったが、彼女の後ろにいた私の同伴者のアイヌ人【たち】^{四三}が話した。名前がキムラ、シラカワ^{四四}、ジュサウンマ【原文では Dzusaunma】と言った。どれが一番正確な名前前で、どれが現在の名前なのか決定するのは難しかった。彼女の息子は、苗字が木村（キムラ）、名前が助造（スケイゾウ【原文で Skeiō】）と言った。娘はキオ【原文で Ko】「キヨのこと」といった。息子は村にいなかったが、娘は隣の家の敷居を跨いで出てきた^{四五}。少しびびくりしたようで、取り乱していた。彼女の夫はアイヌ人名前を大谷熊吉^{四六}（Otani Kumaksci）（オオタニ・クマクスチ）と言った。三人の娘と一人の息子がいた^{四七}。父親は、キオと同じよう

四三 彼らは十中八九まで白川仁太郎と木村愛助であらう。

四四 二〇一六年六月二十二日に高橋ひとみさんに質したところ、「白川」はチュフサンマの再婚相手だったシリケシタン【松川 1909: 106】の日本姓であることが確認された。つまり「木村」は彼女の旧姓、チュフサンマは個人名である。

四五 大谷キヨ・熊吉夫妻の住宅は、チュフサンマの家に隣接していたことが判る。キヨは至近の隣人として母親の面倒も見られたわけだ。

四六 彼は「よく露語が出来て、露領時代には権勢のあつた」大谷のオハイベールカ酋長の息子で、金田一京助が一九二九年晩夏に白濱を訪ねた折、キヨと共に「白濱旅館」を営んでいた【金田 1934: 177】。白濱への集住が開始された一九二二年八月一日、大谷（タコエ）村の部落総代だった大谷熊吉は、八人の前部落総代とともに新設村白濱の村会議員（原文では「評議員」）に任命され、村会議長には露禮部落総代の内藤勘太郎が就任する【千徳 1929: 67】。

四七 一九三七年、一九三八年、一九四一年と三回にわたって訪樺した言語学者の服部健によると、夫妻には三人の娘—みどり（一九二三年生まれ）、なみ（一九三一年生まれ）、ひとみ（一九三八年生まれ）——がいたという【服部 1936: 154】。高橋（旧姓佐藤・大谷）ひとみさんは二〇一六年六月二十二日、自分には二人の姉と三人の兄弟がいたと語っている。その説明によると、長姉みどりさんは相馬岩二郎へ嫁いで娘の君江をもうけたが、彼らが離樺する一九四八年の二年前、即ち一九四六年に白濱で亡くなり、三人の兄弟はいずれも夭折されている。父親の熊次郎もやはり白濱で一九四六年十月に病死されたそうである。

に黒い肌【髪】の持ち主だった。私の前で長女^{四八}を見せたがり、家の奥から手で彼女を連れて来た。顔が丸く、大きな黒い目をした、しかし髪の毛は完全にブロンドの四歳の女の子【Photo 9 参照】だった【ヤンタ=ポウチンスキ 2013: 135】。

白浜のアイヌ人が約束通り「白浦に」やって来た。私は列車の中でアダム・ムロチコフスキと一緒だった。彼はパンをすべて売り尽くし、【私たちは】アイヌ人たちに御馳走し、思う存分おしゃべりをするためにやって来たのだ【拙訳によれば「帰宅する」】。白川成人（シラカワナリト）【原文では白川仁太郎】、木村愛助がいた。先ごろ話題になっていた助造少年を連れて来ていた。昨夜遅くに白浜に戻って来たとのことで、私がここにいることを知って、とても会いたがったのだという。言った通りだった。彼の顔立ちはアイヌ風ではなかった。顔立ちは鋭く、力強くはつきりとしていて、とても威厳に溢れていた【Photo 10 参照】。とてもどぎまぎしており、日本語以外は何も話さず何も理解しなかった【ヤンタ=ポウチンスキ: 140】。

話題は助造に移った。彼は三十二歳^{四九}だがかなり若く見える。職業は漁師で、アイヌ人はすべて漁業に携わっている。その後に大【櫓】に乗り始めた。東京の展覧会「『博覧会』である」^{五〇}までも三十頭の犬をつけた大櫓でやって来た。天皇の娘を大櫓に乗せ、彼の犬と櫓はみんな気に入ったそうである^{四九}。しかし、今の暮らし向きは悪い。漁業はうまく行かなくなり、犬も売らねばならなかった。手元には何も残らなかった。貧困の中で生きているにもかかわらず、金銭や施しを中々受け入れなかった。特にシンキは半

四八

「長女【ヤンタ】」とは一九三一年二月二日生まれの子、高橋旧姓大谷ナミ子さんの筈である。ナミ子さんは二〇一六年三月一日に北海道広尾郡大樹町で逝去された。享年八十五才。

四九 これは恐らく、一九三〇年三〜四月に東京・両国の国技館内外で開催された北海道拓殖博覧会であろう。但し、木村助造が同博覧会に参加し、犬櫓走を披露した事実はいまだ確認できていない。

ば諦めながら、しかし強情に、プロニスワフから何か生きている印や思い出の品が届くという考えを捨てていなかった^{五〇}。子供たちはそうではなかった。どこから情報を得て、どうして覚えていることができるというのだろうか。今となってはただ古い親友である。『直前の「句点」は削除して読みたい』『白川仁太郎と木村愛助はこの子供たちを違った風に見ていた。子供たちを眺めながら言った。子供たちに話しながら、彼らの考えや感覚の中に、思い出や、聖なる偉大な記憶を植え付けようとしていた。彼ら』が現在生きている、そして、これからもずっと生きていくであろうサハリンには、決して戻ることのないこの人物に関する記憶をである。彼らは、その人物がここにいたということの証人なのである。

列車に乗る時間になった。明後日『原文では「明日」』には豊原から東京への帰路に就く。白浜までアイヌ人たちと一緒に帰った。私にアイヌのサーベルをくれた。私はそれをポーランドへ持ち帰って、ピウスツキ元帥に贈り物として渡した『拙訳によれば「私に一振りのアイヌ刀が託されたが、私はそれをピウスツキ元帥への贈り物としてポーランドまで持ち帰るつもりだ」』^{五一}。

『白浜駅で下車した』彼らは車窓の向こうでずっと立っていた。いつもより早く舞い降りた夜の闇の中で、駅のホームに降りた。入句に相当するこの一句は削除、車窓の向こうで立ったまま私に手を振った。私は「客車のプラットフォームに降りた。列車が動きはじめたが、私は彼らを見ていた。彼らは誰もいなくなった駅の線路に長い間立っていた。夜の中に沈んだ三つの黒い影が^{五二}、雪を背景

五〇 この記載はわれわれに、能仲文夫による同様な記述を想起せしめる。

五二 ヤンタ『ポウチンスキは恐らくユゼフ・ピウスツキが亡くなる一九三五年までに、このアイヌ刀を彼へ手渡すことができたであろう。ポーランドの同僚が刀をめぐる関連情報や刀自体を、国内で掘り起してくれることを期待したい。ところで、友人のヴィトルト・コヴァルスキ（プロニスワフやユゼフの末妹ルドヴィカの孫）は、ヤンタ『ポウチンスキが果たしてユゼフ・ピウスツキに会えたかどうかとの私の質問に対して、二〇一五年十二月三日付のメールで「私は怪しいと思う。ピウスツキ元帥は一九三四年まで、古い付き合いでごく内輪の限られた人たち以外、人と会うことはほとんどなかったからだ。しかし、ヤンタが兄弟の誰かと会う機会ならば十分にありえたらう」と記した。

五三 白川仁太郎 木村愛助、木村助造の影である。

にしてとてもはつきりと見えた。カーブを描く列車の尾」が私の向こうにあるものをすべて隠すまで、彼らはずっと佇んでいた「ヤンタ＝ポウチンスキ：140-141」。

一月十一日付の樺日紙は、ヤンタ＝ポウチンスキが九日午後八時二十五分に豊原駅に到着、花屋本店に投宿したと報じている。取材した樺日紙記者によると、ヤンタ＝ポウチンスキは自分の調査結果について、記者へ次のように語った。「未地の土地へ一人旅、謎の様な話を辿つて来たが、「菱沼氏に偶然出會ひ、「多大の援助を受けて非常に嬉しく思ひます、故プ氏の愛児等には、「白川氏の努力で面會する事が出来て本懐とする處です。「木村助造はこの部落から離れて生活したいと云つて居るから、「その旨陸相へ傳へて見ます、閣下も出来る限りの事はすると思ひます」『樺日紙所載前掲記事、一九三四年一月十一日付タ刊、本書 856 ページ」。

一方、別の地方紙北海タイムス（北海道新聞の前身）は同伴について次のように伝えていた。「ヤンタ氏の語るところによれば、木村愛蔵（ママ）（三）（プ）マズスキー氏の長男（を）さんは、「叔父さんであるポーランド國陸相ビルズズキー將軍（ママ）に照會の上、「多分向ふに行くやうになるだらう、次女のヨシ子（ママ）（二八）さんは、「母親のシンキさんと一緒に相濱（ママ）正しくは白濱（ママ）部落で暮す事になるだらうが、「ビルズズキー將軍からは相當の扶助料が送られて来る模様で、「いよ／＼今こそシンキ親子に恵まれ春た（ママ）」一字前へ戻して読みたい」が訪れた」五三。

五三 北海タイムス紙所載記事「長男は父の國へ、母娘は相濱（ママ）で——シンキさん一家に春」、一九三四年一月十一日付朝刊、本書 854～855 ページ所収。記事では対象人物の名前に誤記——助造とキヨの代わりに愛蔵とヨシ子——が認められるが、「將軍（ならびに注四〇などの「大統領」）は、『北蝦夷秘聞』の著者による誤認に由来する。同著はその際の報道合戦に参戦した記者らの座右の書だったが、能仲はユゼフ・ピウスツキの肩書を「元帥」の代わりに「將軍」、そして「国家首席」の代わりに「大統領」と記載していた。能仲の元來の語形（プリー

しかしながら北海タイムス紙の大見出しに謳われた「春」(注五三参照)が、「シンキの家族」にはついぞ到来しなかった。ヤンタリポウチンスキが今後ともプロニスワフの子供らを支援し、また「シンキの家族」とユゼフ・ピウスツキの仲を取り持つ役も果たす、と伝えられた約束にもかかわらず、その後、関係する人たち(なканずく木村助造、白川仁太郎、木村愛助、菱沼右一など)と連絡を取るようなことが皆無だったのではないか^{五四}と本稿の著者には思われる。彼らはどれほど驚愕し、また失望したのであろうか。にもかかわらず、今だから言えることとはいえ、ポーランドへ赴くことに頗る乗り気だった助造は、ポーランド人が第二次世界大戦下と戦後を通じて耐え忍ぶよう強いられた情況の犠牲者となることは、辛うじて回避できたわけである。

ヤンタリポウチンスキが一九三四年一月十日に豊原からポーランドへ送った電報が果たして、本国のいずれかの新聞やラジオで報じられたか否か、定かではない。それはともかく、彼は一九三六年にこの興味深いサハリン挿話を、それが挫折に終わった経緯に言及することなく公刊した^{五五}。

ドスキーとブズスキー、したがって略称「プ氏」が頻用された^五が、次第に「ブリードスキー→ブリードスキー、ブズスキー→ブズスキー」のように変貌を遂げていったのはまことに興味深い。

^{五四} 彼ら相互間の交信記録が、現在のわれわれの利用が可能な形では保存されなかった可能性は、むしろ排除されない。因みに、ヤンタリポウチンスキは、日本語に堪能だったアダム・ムロチコフスキを介して、彼らとは頗る円滑な意思疎通が図れた筈である。それは一九三四年一月九日の白浦でも、またそれ以降でも同様であろう。

^{五五} ヤンタリポウチンスキは、「サハリンでポーランド人を訪ねる」と題する初稿を十九回連載記事(XXIII、一九三四年六月十五日～八月十四日付)としてワルシャワの有力日刊紙『ガゼタ・ポルスカ』に発表していたことが判明した。彼は同年八月にワルシャワへ戻っていたから、七月二十八日付の同紙に掲載された「XIV 白濱」は旅の空で擱筆されたことになる。「二〇一六年十月十日、十三日にワルシャワの井上久仁子さんから寄せられた情報」だが一九三六年に上梓された単行本の方でも、極めて遺憾ながら「挫折に終わった経緯」にはまったく触れておらず、その経緯について執筆されえたかも知れぬ「序文」も「跋文」も欠いていた。

小樽新聞（北海道新聞の前身）は一九三九年六月十五日、「国際愛卅年ぶり／アイヌの老婆に『春』——ピルスツスキー將軍^{〔五五〕}／實弟^{〔五六〕}の遺族を引取る」と題する記事を掲載した^{五六}。幾多のいかがわしい情報にもかかわらず、われわれはそこ

一九三五年五月十二日のユゼフ・ピウスツキの死が国家を震撼させ、この一件も含めたあらゆる事柄に深甚な衝撃を与えたことは言うを俟たない。ヴァツワフ・イエンジエヴィチによると、一九三四年以降衰えだしたピウスツキ元帥の健康が、翌三五年にはさらに悪化した、と以下のように記している。「二月三日、最愛の姉ゾフィア・カデナツィがワルシャワで死去する。これは精神的大打撃だった。二月七日、葬儀のためヴィルノへ赴く。」「四月二日、元帥は英国のアンソニー・イーデン外相を引見する。彼は会見を通して頗る脆弱で、得意なフランス語を極めて辛そうに話した。」「彼の健康はさらに悪化する。彼は医師を嫌っていて、診察は拒絶していた。しかし、ウィーンの医師ヴェンケンバハ教授の診察を受けることには遂に同意し、教授は四月二十四日に来訪する。同医師は胃癌と肝臓癌との予備的診断を下して、これを首相と大統領に伝えるよう示唆する。」「彼の容体は坂道を転がるように急変する。五月八日、ヴェンケンバハ教授が再訪して自らの予備診断を確定させた。五月十一日の夕刻に吐血を始め、日曜（五月十二日）の朝も咯血は続いた。彼の意識は事実上の混濁状態にあった。」「午後八時四十五分、最後の息を引き取る」[Łędziński 1977: 340]。

一方、ウィトルト・コヴァルスキは、本稿著者宛の二〇一五年十二月五日付メールで以下のように記していた。「一九三四年、ピウスツキ家の年長者たちの健康がとみに悪化し、一九三五年には家族内で——まずはズルカ（ゾフィア）、次いでユゼフ、その直後にはアダムと——死者が相次いだ。一度、元帥とその姉弟が逝くや、この拡大家族は実質的に瓦解し、以前ほど頻繁には世間話を交わさなくなった。」「一九三五年の災禍を生き延びたヤンとカジミエシュの両兄弟にとつて、プロニスワフは五十年ほど前のかすかな記憶でしかなかった」。

^{五六} これはまことに奇妙な新聞記事である。一九三九年六月十五日付の同記事は、ポーランド電信電話公社とポーランド・ペンクラブから一九三九年に日本へ特派されたポーランド人ジャーナリストのアレクサンデル・ピスコルが、プロニスワフの家族と会って彼らをポーランドへ招くべく近々訪樺する予定と報じた。しかもその使命は、一九三五年五月十二日すでに他界していたユゼフ・ピウスツキ（注五五参照）から拝領したものとも伝えていた。加えて、その大見出しが「アイヌの老婆に『春』」と謳うとはいえ、当の老婆であるチュフサンマは一九三七年一月十八日に亡くなっていた（注五七参照）[井上 2010b, Part II: 198、本書 857-860 ページ]。ところで一九三九年には、日本がノモンハン事件でソ連やモンゴル人民共和国と交戦中（五月〜八月）、独ソ不可侵条約の締結（八月二十三日）、ドイツがポーランドへ電撃進攻して第二次大戦が勃発（九月一日）していたが、辣腕ジャーナリストのポーランド愛国者として日本に滞在するピスコルには、サハリンへの旅に時間を割く余裕なぞありえなかったろう。事実、この旅に関する続報は発見されていない。ピスコルの日本滞在（一九三九年四月初旬〜一九四二年七月三十日）に関しては、上記拙稿の脚注 33 を見られたい[井上 前掲論文: 198-199、本書 839 ページ]。

に、従前までは未知であった次のような情報を見出した。「昭和十二・九三五年に至り「…」その遺児「木村助造」は東京に赴きポーランド公使館まで訪れたのであったが、「真偽不明でそのまゝとなつた」[井上 2010b, Part II: 200-201' 本書 862 頁]」五七。

ところが実際はこのサハリン・ミッシェン、ビスコルは遂行していたことが判明した。即ち、ワルシャワの国立近現代文書館（以下では AAN と略記）所蔵の「B・シュチェシニャク・メモ」に、「アレクサンデル・ビスコルが訪樺してプロニスワフ・ピウスツキの子供たちと会い、彼らに関する聞き書きも記録している。彼は写真も撮影した」「B・シュチェシニャク旧蔵資料」sygn. 95, no pagination)と記されていたからだ。ビスコルがその記録を一切公表しなかったのは、まことに残念である。

ボレスワフ・シュチェシニャク (Bolesław Sześciński, 1908-1996) はポーランド日本学の魁の一人である。ワルシャワの東洋研究所付属東洋学院で梅田良忠から日本語を学んだ (1931-1935) あと、日本に5年滞在 (一九三七年五月-一九四二年八月)、現地雇用館員として駐東京ポーランド公使館 (一九三七年九月三十日まで)、そして昇格した同大使館 (以降一九四一年十月まで) に勤務した。加えて、日本史専攻の大学院生として早稲田大学に在籍する (1938-1942) 傍らで、立教大学講師もこなし、立大では本邦初のポーランド語とポーランド文化を講じた (1939-1942) [Dąbrowski 2000: 101-102]。そして一九四二年八月、英国へ向けて離日、と記載されている (彼は恐らく七月三十日、日英交換船「龍田丸」で A・ビスコルとともに出国したと思われる [本書 862 頁参照])。一九四八年以降は米国で暮らし、一九九六年十二月十六日にインディアナ州で没する。彼は同州のノートルダム大学で歴史学教授として長らく教鞭を執っていた [Dąbrowski: 101-102]。

全否定のようなニュアンスにもかかわらず、どうやらポーランド公使館では木村助造が白濱の住所を公使館の誰かに残すことができたらしく、その住所に対して (あるいは一九三九年の夏に樺太へ赴いた筈のビスコルから入手できた助造の現住所へ)、シュチェシニャクは必ずや助造宛の手紙を送付していたろう。なぜなら、助造は一九四〇年一月十八日、「拜復」御手紙下さいまして誠に有り難う御座います」[AAN 1940] という常套句で始まる返信を代筆してもらったからである。この返信は一九四〇年一月二十日、小田寒局から「東京のポーランド公使館」へ向けて発送された。同返信は次のような概要を知見をわれわれに提供する。(1)「私の母のジュウサンマは昭和十二・九三七年一月十八日に死去してあます。あなたの御手紙にはシンキンチョウと書いてありますが違ひます」、(2)「父の生前中の事を…」一番善く知って居た木村愛助と言う人が今生きて居れば五十歳以上になります」[AAN 1940]。

木村愛助レーヘコロはチュフサンマの義理の従弟である。彼は一九三四年、函館で一九〇三年に撮影されたプロニスワフのポートレートをやンタリボウチンスキに見せていたが、「ピウスツキが出発間際に残した写真」「ヤンタリボウチンスキ」であった。助造とキヨは、いまだ三十七才の若き父のまきにこの写真 [Photo 11] を目にする機会があったに違ひない。樺太の記者によれば、チュフサンマも「今尚ブ

「ブスキー氏の『同じ』写真^{しや}を肌身^{はだ}離さず所持^じして居た」[井上 2010b, Part II: 197, 本書 854 頁]という。ところで、シュチェシニヤクは若い助造とキョのツー・ショット写真 [Photo 12] を雑誌論文に掲載しているが [スチエシニヤツク 1946: 47], 十中八九までピスコルが一九三九年の夏に、恐らくは白濱で撮影したものであろう (注五六の「シュチェシニヤク・メモ」参照)。

因みに、AAN には B・シュチェシニヤクの木村助造宛返信の下書きが収蔵されている [シュチェシニヤク旧蔵資料 sygn. 95, no pagination]。日付を欠くこの英文草稿は助造の返信に対するお返しとして、一九四〇年一月以降に執筆された筈である。なぜなら、そこではまず助造の返信に対する謝辞が述べられたあと、第1信の「シキンチウ」に代えてチュフサンマを「ジュサウナ (Jusanna)」と記載し (助造のコメントはかくて部分的に受容された)、さらにチュフサンマの生年月日と出生地、シュチェシニヤクが第1信で求めた助造の写真に加えてキョとチュフサンマの写真の惠贈、夫としてのプロニスワフに対するチュフサンマの人物評などを含む、9項目の設問までも提起されていたからだ。下書きは英語で記されているから、第1信もやはり英文だったろう。助造が返書を作成するに当たってあまたの時間と奔走を要したことは推察に難くない。加えて、その浄書稿が助造へ送られたか否かも定かではない。ともあれ、当時のポーランドはドイツ軍占領下であり、在京ポーランド大使館は一九四一年十月二十三日に閉鎖された。

シュチェシニヤクは一九四〇年、「^マ国際實話^マ波蘭初代大統領^マの實弟^マとアイヌ娘の戀愛^マローマンス」と題する論文を月刊誌『實話讀物』(九卷六號、六月號) に発表した [スチエシニヤツク 1940]。著者の肩書は「ポーランド大使館書記」となっている。論文は山梨芳隆が邦訳しているから、原文は英語だったと思われる。あまたの誤報を擁する能仲の著作を大幅に踏襲する同論文は、格別に独創的な作品とは言いがたいものの、樺太島におけるプロニスワフ・ピウスツキとその家族について叙述する二番目の仕事にはかならず、また同テーマで「本を書く」ための第一歩でもあった (木村助造によると、シュチェシニヤクはその第1信で「本を書く」構想に言及したと述べている [KAN 1940])。彼は同構想の実現を期して一九五〇年代半ばまで、木村助造を含む関係者へ照会の手紙を送り続けた。AAN には少なくとも3通の「回答」(白浦のadam・ムロチコフスキから届いた一九四〇年一月二十八日付の返信、ニューヨークのアレクサンデル・ヤンタリポウチンスキからの一九五五年十一月四日付返書、ユゼフ・ピウスツキの二番目の妻アレクサンドラ・ピウスツカがロンドンから寄せた一九五六年三月四日付の返信) が収蔵されていて、adam・ドンブロフスキが『テキ・アルヒヴァルネ』誌 (4 卷 26 号) で公刊している [Dąbrowski 2000: 103-107]。

シュチェシニヤクは一九五四年、九世紀以来のポーランドと日本の文化交流史の総覧を試みる中で、プロニスワフ・ピウスツキについても簡潔に言及していた。「頗る興味深いのに知られていないのは、プロニスワフ・ピウスツキが一九〇〇―一九〇五年に南樺太のアイヌの間で暮らした生き様や、その間になし遂げた学術的業績である。プロニスワフ・ピウスツキはそのときアイヌの酋長の娘と結婚して二人の子供、息子と娘を有していた。妻は一九三八年^マ二月にサハリンで、貧困と半野生的な生活条件のもとで暮らす目的の不自由な普通のアイヌ女として亡くなった。ポーランド人流謫者の古い友人らから得られたアイヌの古老たちや彼の息子・木村をめぐる懷古談、そしてプロニ

記事の末尾には次のような興味深い注記が見出される。「遺児たる木村某は毎年白濱から西海岸多蘭泊〔現カリニ〕の漁場へ出稼ぎに来てをり、その母たるシンキは現在盲目の老婆となつてゐるといふ」〔井上 2010b, Part II: 201、本書 862 ページ〕。執筆者は遺児の名前を承知せず、またチュフサンマがいまだ存命であるとも考えていたのは明らかである。にもかかわらず、木村助造は出稼ぎ漁夫という身入りがよい仕事にも就いて生計を立てていた事実が、そこからは端なくも窺える^{五八}。本稿の著者が偶々対話する機会があつた一九八〇年代後半、高橋延清教授^{五九}は、木村助造が一九四八年までは東京大学樺太演習林に在職し、彼の監督下で勤勉な職員として就労していたが、北海道移住後は直ちに富良野の東大北海道演習林に雇用されて、定年までその職を全うしたと語られた。

エピソード

北海道大学は二〇一三年、医学部第一、第二解剖学講座におけるアイヌ人骨の収蔵経緯に関する公式調査報告書を公開

スワフ・ピウスツキのサハリン版悲劇に関する詳細は、首尾よく収集できている。そうした情報は札幌の樺太庁図書館^{マモ}や古文書庫^{マモ}でも、そしてまた一九二二～一九三六年に「サツポロ・シンブン」紙^三の時期に「札幌新聞」は存在しない、あるいは「札幌の新聞」の意^一に掲載された、ある古参警官の回想にもとづく記事からも入手が可能であろう〔Szczesiński 1954: 170; 1964: 11〕。彼が「本を書く」には、いまだ機が熟したのとは明らかである。彼は同構想を一九八七年まで温め続けたことが判明している「ユゼフ・ピウスツキの次女ヤドヴィガ・ヤラチエフスカが一九八七年十月二十六日、ロンドンからシュチェシニャクへ送った書簡（AAN所蔵シュチェシニャク旧蔵資料 57gn. 15. ss. 35-36）を参照されたい」。彼が存命中に同構想を実現できなかったようであるのは、まことに遺憾である。

^{五八} 一九二九年に白濱を訪ねた金田一京助も、木村助造が「漁場で働いて」と記していた〔金田一 1934: 177-178〕。

^{五九} 高橋延清（1914-2002）は著名な林学者。32年にわたって東京大学北海道演習林長（1942-1974）を務め、戦前は北海道演習林の支部だった樺太演習林も管掌していた。後者は東海岸の広大な森林（相川全流域と小田寒川流域の一部）を経営し、相濱・白濱・落合に事務所を構えていた。東大北海道演習林提供の履歴書によると、木村助造は樺太（1935-1948）と富良野（1948-1967）で東京大学に雇用されていた。

した[北海道大学 2013]。報告書は同大学が「1,000 体近いアイヌ人骨を保管している」[前掲書 1]「…お預かりしている」——同大学のホームページより」と記すが、内七十一体は日本領南樺太から将来された遺骨である。本稿の著者は七十一体のエンチウ(樺太アイヌ)遺骨の間に「バフンケ酋長の頭蓋骨」を偶々見出す破目に陥ったが六〇、その際の衝撃は筆舌に尽くし難いほど強烈であつた。

六〇 報告書はバフンケの頭骨に直接言及していないが、「北海道帝国大学・北海道大学医学部第一解剖学講座・第二解剖学講座収蔵アイヌ人骨一覽(二〇一二年十二月四日現在)」と題する「巻末資料 3」は、「相浜 1」と命名された人骨第 943 号を、医学部第二解剖学講座[の関係者]が一九三六年八月に相濱で発掘した成人頭骨と記載し、「性別不明^{マコ}」「個人特定可能」と特記している[北海道大学 2013: 180]。北大は二〇一六年九月三十日、個人が特定された十六体の遺骨一覽をホームページで発表した^{マコ}が、最後の遺骨(No. 16、五十才以上の男性)は「昭和十一」「一九三六」年八月一日、樺太島(旧樺太豊栄郡栄浜村相浜)で発掘」と記載されている[http://www.hokudai.ac.jp/14.12.2016 閲覧]。「相浜 1」はエンチウ遺骨七十一体中で唯一「個人特定可能」と記載されているから[北海道大学: 177-180] No. 16 の遺骨は間違いなく「相浜 1」の筈である。「相浜 1」と「バフンケの頭蓋骨」の同一確認を求める本稿の著者の申し入れを、北大は個人情報保護を口実に峻拒された。とはいえ、同書では個人の特定された遺骨の事例として二人のアイヌ著名人——「樺太酋長バフンケ」と「日高酋長ベンリウウ」[正しくは平村ベンリベンリウク]——が言及されている[前掲書 86、87^{マコ}]。

「アイヌ人骨一覽(二〇一二年十二月四日現在)」は千十四体を列挙して、それぞれに一連番号(1-1014号)を付与していた。だが、この合計は最終値とは言えぬようだ。報告がより新しい推計(1,000 体近いアイヌ人骨)を冒頭に提示しているからである[前掲書 1^{マコ}]。しかしながらエンチウ遺骨に関する限り、その総計九十一体——一九三六年に樺太からもたらされた七十一体(871-919 号の四十九体と 940-961 号の二十二体)と、一九六五年に対雁で発掘された二十体(920-939 号)——は最終的確定値のようである。したがってエンチウ遺骨は全体の一割を占めている。一方、南樺太における墓地発掘は一九三六年七月から八月にかけて内淵、露禮、相濱、大谷、志安、白浦等で、児玉作左衛門が実施したと報告書は記している[前掲書 29、43^{マコ}]。児玉は北大医学部第二解剖学講座の教授(1929-1959)だったが、一九六五年八月にも江別市の対雁共同墓地を発掘して、二十体のエンチウ遺骨を入手していた[前掲書 59、61^{マコ}]。以上の与件をすべて勘案するならば、「相浜 1」は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で児玉教授とそのチームによって掘り出されたとの結論を、安んじて下すことができる。当時の相濱(旧アイ・コタン)は、他の 9 コタン同様に、全住民が新設村白濱へ総移住した一九二二年以降、廃村となっていた。児玉らは恐らく誰に邪魔されることもなく、己の仕事を粛々と進めることができたであろう。

二〇一七年四月、木村和保氏——木村助造の一人息子でブロニスワフ・ピウスツキの唯一の男系孫、したがって日本におけるピウスツキ家嫡出の嗣子——は祖母チュフサンマの叔父（即ち木村愛吉）の頭蓋骨返還申請書を北海道大学へ提出した。同大学の「アイヌ遺骨等返還室」は木村氏の請求を審査し、近い将来には、「バフンケ頭骨」を正統な遺族に返還するか否かを決定するであろう。その回答がいずれであれ、北海道大学は以下の設問に対し、誠実に答える責務を負っている。

- (1) 一九二〇年の埋葬後十六年しか経っていない木村愛吉の墓は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で、果たしてどのように、何故、また誰によつて、暴かれることになったのか。
- (2) 「相浜1」が木村愛吉に帰属することを立証する議論の余地のない根拠は何か。「樺太酋長バフンケ」なる名称が、他の七十体のエンチウ遺骨とは違って、例外的に記録されえたのは何故か。
- (3) 北海道大学は木村愛吉の頭蓋骨取得以降八十年の長きにわたって、その存在を学外、なかんずく彼の子孫へ向けて発信することを怠つてきたのは何故か。

参考文献

- 青山東園
1918 青山東園（樹左郎）編著『極北の別天地——あいぬ生活と樺太事情』東京、豊文社、『極北の別天地——樺太事情とアイヌの生活』東京、日本青年通信社、『極北の別天地——樺太案内』東京、廣友社
- Babsteva/Babceva, Ираида И.
2010 Бронислав Осипович Пилудский во Владивостоке. 1899-1902 гг. [ウラチウオストクにおけるブロニスワフ・ピルスツキー (1899~1902 年)], in: Sawada & Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1: 385~413

- Bajor, A. A., and G. I. Dudarets, V. M. Latsyshev, I. I. Babiseva, K. Inoue, K. Sawada (comps.)
 2010 Bronisław Piłsudski Chronicle. in: Sawada & Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1 (Part 1: 1866-1905): 445~490; vol. 2 (Part 2: 1905-1984): 379~414
- 知里眞志保
 1973 樺太アイヌの生活『知里眞志保著作集』3巻 145-209 ペー、東京、平凡社、山本裕弘編著、知里眞志保・大貫恵美子共同執筆『樺太自然民族の生活』9~94 ペー所収、東京、相模書房 (1979)
- Dąbrowski, Adam Grzegorz
 2000 *Przyczynki do biografii Bronisława Piłsudskiego w spuściznie Bolesława Szczesińska* [ボレスロフ・シウチエシニヤクの遺産におけるブロニスワフ・ピウスツキ伝への寄与], *Teki Archiwalne* (Seria Nowa) 4(26): 99-107
- 服部 健
 1956 『ギリヤーク——民話と習俗』札幌、楡書房、【再録】谷川健一責任編集『北の民俗誌——サハリン・千島の民族』(日本民俗文化資料集成 23) 257~334 ペー所収、東京、三一書房 (1997)、『服部健著作集——ギリヤーク研究論集』130~214 ペー所収、札幌、北海道出版企画センター (2000)
- 北海道大学
 2013 『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』札幌
- 井上絃一
 2002 Inoue (ed.), *B. Piłsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok (Piłsudskiana de Sapporo no. 2)*, Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University
- 2010a The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903, in: Sawada & Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2: 3~37
- 2010b 日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903—1939)『関西外国語大学研究論集』№ 91: 267~280 (Part D); № 92: 185~201 (Part II) 【露訳】K. Иноуэ (перевод А. В. Фетисова), Статьи о Б. Пилсудском в японских газетах (1903-1939 гг.), *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* №16: 145~172 (2012)
- 2013 井上絃一編『ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事——白老における記念碑の除幕に寄せて』札幌、北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php?name=381>

- 2013a プロニスワフ・ピウスツキ年譜、井上編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事』63～76頁所収
- 2016 A Case Study on Identity Issues with Regard to Enchivs (Sakhalin Ainu) ——Reconsidering B. Piłsudski's "Draft of Rules for the Establishment of Authority over the Sakhalin Ainu" (1905), 『北方文芸研究』9: 75～87、札幌、北海道大学文学研究科
- 石田收藏
- 1918 樺太あいぬ風俗瑣談、青山東園編著『極北の別天地』7～15頁所収、東京、豊文社
- ヤンタ^ホウチンスキ、アレクサンデル
- 2013 (佐光伸一訳)「樺太のポーランド人たち」井上編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事』109～142頁所収、【原著】Aleksander Janta-Potczyński, U Polaków na Sachalinie [サハリンでポーランド人を訪ねる], in: A. Janta-Potczyński, *Ziemia jest okragła*, ss. 241～298, Warszawa: Ró (1936) [初出は16回連載の新聞記事 U Polaków na Sachalinie (1-xviii), *Gazeta Polska*, 一九三四年六月十五～八月十四日、ワルシャワ]、【部分英訳】A. Janta-Potczyński (transl. by A. F. Majewicz), Shitahama and Shitaura, in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 3, Appendix 3: 731-744 (2004)
- Jedzjejewicz, Wacław
- 1977 *Kronika życia Józefa Piłsudskiego 1967-1935* [Tom drugi 1921-1935] [ユゼフ・ピウスツキ年譜 1967-1935 (第二巻 1921-1935)], Londyn: Polska Fundacja Kulturalna
- 北里 闌 (たけし)
- 1932 『日本語原研究の道程 (続篇)』、『日本語の根本的研究 追補』、大阪府豊能郡豊中町「現豊中市」、紫苑會
- 金田 一京助
- 1934 樺太便り、金田一京助著『北の人』177-181頁所収、東京、梓書房。増補改訂版は青磁社刊 140-150頁 (1937) など、初出は『東京朝日新聞』記事「樺太だより」(一九二九年九月二十、二十一日付朝刊所収)
- Latushev/ Латышев, Владислав М.
- 2008 *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского* [プロニスワフ・ピルスツキのサハリン生活], *Прологомены к биографии*, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство
- Majewicz, Alfred F.
- 1994 *Bronisław Piłsudski w Japonii* [日本におけるプロニスワフ・ピウスツキ] (PIEOS Monograph series 6), Słeszew: International

- Institute of Ethnolinguistic and Oriental Studies
 1998a Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 1 (*The Aborigines of Sakhalin*), Berlin & New York: Mouton de Gruyter
 1998b Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 2 (*Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* (Gracow 1912)), Berlin & New York: Mouton de Gruyter
 2004 Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 3 (*Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore 2*), Berlin & New York: Mouton de Gruyter
 2004a (transl. by A. F. Majewicz), Sentoku Tarōji's letters from Sakhalin to Bronisław Pilsudski (1906), in: Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 3: 700~730
 2004b A. Janta-Potczyński (transl. by A. F. Majewicz), "Shirahama and Shiraura," in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 3, Appendix 3: 731~744
 2011 Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski*, vol. 4 (*Materials for the Study of Tungusic Languages and Folklore*), Berlin & Boston: Walter de Gruyter
- 松川木公
 1909 松川木公 (清) 『樺太探検記』東京、博文館、【再録】『明治北方調査探検記集成』第十卷所収、東京、ゆまに書房 (1989)
 能仲文夫
 1933 前波蘭大統領「マニ・現同國陸軍大臣を兄「マニ」に持つ盲目の老メノコは泣く——今もなほ白濱のアイヌ部落で死んだ夫の歸りを待つてゐる、能仲著『北蝦夷秘聞——樺太アイヌの足跡』第1章、1~18頁所収、大泊豊原、北進堂、【復刻版】東京、第一書房 (1983) 【英文抄訳】(Probably transl. by B. Szczesniak), *Blind-Old Menoko Weeps* (A A N 蔵: Akta i zbiór Boleśtawa Szczesniaka, sygn. 95, no pagination (13 sheets successively paginated) 【露訳】Фрумио Нонака[сиел] (перевод Ю-Чан-Нам), Почему плачет слепая старуха-много из села Сирохамала[сиел], *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*, № 12: 125~140 (2008)
- Pilsudski, Bronisław
 1912 *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Gracow: Imperial Academy of Sciences (1912) 【復刻版】K. Retsing (ed.), *Early European Writings on the Ainu Language*, vol. 10, Curzon (1996); A. F. Majewicz (ed.), *Materials for*

- the Study of the Ainu Language and Folklore (Stasow 1912)* (*The Collected Works of Bronisław Pilsudski* 2): 1~272, Berlin-New York: Mouton de Gruyter (1998) 【露訳】Бронислав Пилсудский (перевод В. Д. Косарева), Материалы для изучения айнского языка и фольклора, *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* №7: 26~205 (2004) 【ポーランド語訳】A.F. Majewicz, *Dzieje i legendy Ainów*, ss.118-121; 135-140; 144-165; 177-184; 193-214; 220-221, Warszawa: Wydawnictwo Iskry (1983) 【邦訳】B・ビウスマンキー(北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語研究会訳)『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料』『創造の世界』№46~48 (1983) 、『№49~52 (1984) 、『№53~56 (1985) 、『№57~59 (1986) 、『№61~63 (1987) 、『№64~67 (1988) 、『№70~72 (1989) 、『№74~75 (1990) 、『№77~78 』80 (1991) 、『№82 』84 (1992) 、『東京』小学館。部分的邦訳は和田文治郎「樺太アイヌに傳はる昔話」『北方日本』15/2: 100~107(1934) 、『知里眞志保著作集』樺太アイヌの説話(一)、『樺太廳博物館彙報』3/1 (分散収録)(1944) (また平凡社刊)『知里眞志保著作集』第1巻 251~372頁(1973) に再録。
- 2012 Бронислав Пилсудский, Из Японии——Корреспонденции в журнал «Природа и люди Дальнего Востока» (1906 г.) [日本より——『樺東の自然と人々』誌への寄稿記事], в: кн. Б. Пилсудский, Японские заметки, часть первая, стр. 5~72, Южно-Сахалинск
- Prokofiev Mikhail M.
- 2008 Михаил М. Прокофьев, Айнская семья Бронислава Пилсудского: правда и вымысел [プロニスラフ・ピルスツキーのアイヌ家族], *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*, 12: 114~124
- 2010 (transl. by Adam Rotundniak), Bronisław Pilsudski's Ainu Family in Southern Sakhalin (1902- 1905), in: Sawada & Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Pilsudski*, vol. 1: 367~382
- Sawada, Kazuhiko, and Kōichi Inoue (eds.)
- 2010 *A Critical Biography of Bronisław Pilsudski*, vols 1-2, Faculty of Liberal Arts, Saitama University
- 千徳太郎治
- 1929 『樺太アイヌ叢話(全)』東京、市光堂。【復刻版】河野本道(選)『アイヌ史資料集』第六卷『樺太編』(分冊収録)札幌、北海道出版企画センター (1980)
- シエロシエフスキ、ヴァツワフ
- 2013 (井上紘一訳)『毛深い人たちの間で、井上編』『ポーランドのアイヌ研究者 ビウスマンキーの仕事』77~108頁。【原著】Wacław Sieroszewski, Wśród kosmatych ludzi, in: W. Sieroszewski, *Szkice podróżnicze. Wspomnienia (Dzieła, tom*

XVIII *Varia*), ss. 219-274, Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961´ 初出 1927) 【英訳】(transl. by A. F. Majewicz), Among hairy people, in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 3: 661~699 (2004) 【露訳】(перевод И. А. Соловьевой, Среди косматых людей, Известия Института наследия Бронислава Пилсудского № 8: 46-88 (2004)

スチエシニヤツク／シュチェシニヤク

1940 ポレスラウ・スチエシニヤツク(ポーランド大使館書記)(山梨芳隆譯)「△国際實話▽波蘭初代大統領△の實弟△とアイヌ娘の戀愛ローマンズ」『實話讀物』(明朝六月號) 九卷六號、38~48^{ページ}、東京、實話讀物社(昭和十五年六月一日刊)

1954 Bolesław Szczęśniak, *Połonica japońska* (Materiały japońskie dotyczące wpływów kulturalnych oraz wiedzy o Polsce w Japonii) 【日本のポロニカ(文化的影響)ならびに日本におけるポーランドの知見に関する日本資料】、*Teki Historyczne/Cahiers d'histoire/ Historical Papers*, t. VI (3/4): 160~174, Londyn - Nowy Jork - Paryż - Rzym: Polskie Towarzystwo Historyczne na Obczyźnie 【再版】*Połonica japońska*, in: *Biuletyn Wewnętrzno-organizacyjny Zrzeszenia Polskich Profesorów i Wykładowców Szkół Akademickich na Obczyźnie* № 3: 3~15, Londyn (lipiec 1964)

田村将人

2008 日露戦争前後における樺太アイヌと漁業の可能性『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史——2005-07年度調査報告』91~107^{ページ}所収、札幌、北海道開拓記念館

2013 異民族に関する法律作成についてのサハリン島武官知事官房ファイルに見るピウスツキの事績、沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』(リベラル・アーツ叢書5) 113~129^{ページ}所収、さいたま、埼玉大学教養学部・文化科学研究科

丹菊逸治

2001 丹菊逸治(翻刻、訳註)、萩原眞子(解説)、△資料▽千徳太郎治のピウスツキ宛書簡——「ニシバ」へのキリル文字の手紙▽『ユーラシア言語文化論集』4(4): 187~226、千葉大学

手稿資料

AAN

1940

『ボレスラフ・シュチェシニヤク宛木村助造書簡』(邦文)——ワルシャワの国立近現代文書館 (Archiwum Akt Nowych (AANと略

記) 所蔵文書: Akai zbiór Bolesława Szeceśniaka, sygn. 95, no pagination (便箋二枚と封筒)。同書簡は一九四〇年一月十八日に執筆されて、同二十日、「東京波蘭公使館」の「ボレスラフシチエスニャック」宛に樺太の小田寒局から発送されている。書簡 (Pd f 版) は澤田和彦氏提供。

木村和保氏によると、父君の助造氏は目に一丁字もなかったそうである。同書簡は助造氏の口述を誰かが代筆したものである。使用されている便箋の右欄外には二枚とも「土人漁場管理事務所」と印刷してあるから、代筆者は「土人漁場管理事務所」関係者ではなかったろうか。日付が「昭和十四(一九三九)年一月十八日」と記されていたのは、代筆者のうっかりミスだったろう。なぜなら、封筒に押された消印は辛うじて「昭和十五年一月二十日」と読めるからだ。

同書簡の英語訳がやはり AAN に収蔵されている (同じく sygn. 95)。この英訳稿を公刊したドンブロフスキ (Adam Grzegorz Dąbrowski) は「シユチェシニャク自身を訳者に想定している [Dąbrowski 2000: 103]。そして英訳稿では日付が「一九四〇年一月十八日」と明記されているので、やはりシユチェシニャクも手紙に記載された「年」の誤記に気付いたことは明白である。因みに、チュフサンマはちょうど三年前の一九三七年一月十八日に亡くなっていた。

RGIA DV

1900/05 文書「サハリン島アイヌの各種生業と経済状態の情報 (1900-1905)」中の「アイ村」の項 (Деревня Ай из документа: «Святыни о родѣ занятій и экономическомъ благосостояніи айновъ о. Сахалинъ» (d. 171 ob), в папке под длинным заголовком «Переписка съ канцеляріей Приамурскаго генерал-губернаторства, начальниками округовъ Александровскаго, Корсаковскаго, Тымовскаго и ихъ рапорты о выработкѣ законоположеній для нерусскаго населенія острова, списки нерусскихъ селеній Александровскаго округа, свѣдѣнія о числѣ гилыковъ и др., таблицы ценъ на животныя и другіе предметы. Начато 16 Маѣ 1900 г. Окончено 12 Апреля 1905 г.» (d. 1133, op. 1, d. 2031, л. 156-179) ——ウラヂヴォストクの極東・ロシア国家歴史文書館 (Российский государственный исторический архив Дальнего Востока (РГИА ДВ), Владивосток) 所蔵。同文書はアレクサンドル・А・トロポフ文書館長とヴァデム・А・トゥライエフ氏の好意で入手・閲読が可能となった。

SPbF ARAN

1886/87 「南サハリンのコルサコフスク管区に居住する原住民の戸口調査 (1886-1887)」(«Перепись инородческому населенію, обитающему въ Корсаковскомъ Округѣ на Южномъ Сахалинѣ. Начато 14 Декабря 1886 года. Кончена 10 Марта 1887 года») ——ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルク支部文書館 (Санкт-Петербургский филиал Архива Российской Академии Наук (СПбФ АРАН), d. 282, op. 1, d. 92, л. 139) 所蔵。文書 (Pd f 版) はシハイル・М・プロコフィエフ氏提供。

家族写真 *



[Photo 1] バフンケと青山東園 [青山: 1917]

* 写真の貼り付けは北大スラブ・ユーラシア研究センターの兎内勇津流氏にお願いした。

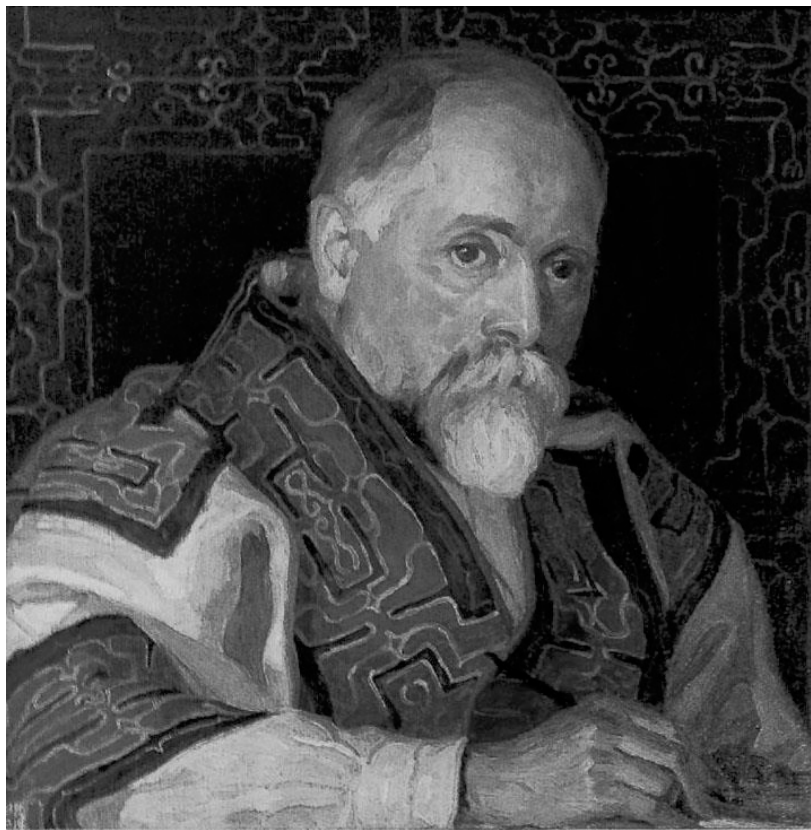
兎内氏の御支援に対し、この場をお借りしてお礼申し上げたい。



[Photo 2] バフンケ (1902-1905 年、ピウスツキ撮影)



[Photo 3] バブンケ (1902-1905 年、ピウスツキ撮影)



[Photo 4] ブロニスワフ・ピウスツキの油彩肖像画 (1912 年 A・ヴァルナス作)



[Photo 5] チュフサンマと少女 (1902-1905 年、ピウスツキ撮影)



[Photo 6] チュフサンマと二人の少年 (1902-1905 年、ピウスツキ撮影)



[Photo 7] 助造を抱くチュフサンマとその親族 (1902-1905 年、ピウスツキ撮影)



[Photo 8] 1934 年 1 月のチュフサンマ [Janta-Polczyński 1936]



[Photo 9] チュフサンマとナミ子 (1931-1933 年撮影) [能仲 1933: 1]



[Photo 10] 1934 年 1 月の木村助造 [Janta-Polczyński 1936]



[Photo 11] ブロニスワフ・ピウスツキ
(1903 年夏、函館の井田写真館にて撮影)

(43)

— スンマ — 口 際 國 —



の有名な人種學者で科學者たるワクラウ・シエロススキーであつた。この人はつい最近までボーランド翰林院の院長をやつてゐた人で、日本に關する本も五、六點、書いてゐるが、日本來朝中に、佐々木信綱博士に會つたこともある。

シベリアに流されてから、ふたたび、ボーランドに歸るまでの永い年月に、彼がビルズグスキーが會つた同國人は、實にこの人一人だけだつたらしい。



長と(ウツケス・ラムキ)男長た來出に間の娘ヌイアとキースツルビ
るみてん住に村演白落部ヌイアの木樺在現ちた(ヲキ・ラムキ)女

アイヌ娘との邂逅

いくら眞面目な學徒であり、ひたすら學問的研究心にあふれた人間ではあつても、ビルズグスキーも若い情熱にたぎつた男だつた。主としてオホーツク海岸の(アイハマ)村のアイヌ人の部落に住んでゐたのであるが、血も色も風習も言葉も、何も彼も異民族ばかりを相手にする孤獨的な生活には、時々、たまらない淋しさや寂寥を感じたことであらう。それにかへて、加へて、日毎にこの祖國への郷愁である。多血多感の彼は、これには少なからず、苦しんだことであらう。

一日と日が過ぎて、その生活にも慣れ、住民との交りもねんごろになつて行くとともに、彼の名聲もだん／＼上つてきて、アイヌ人たちも、「先生」「先生」と親しみ、うやまふやうになつた。なにしろ、西歐的な知識を持つ、白智な美丈夫だつたから、最後には(アイヌの王)といふ尊稱をたてまつられるに到つたのであるが、この當時、既に相

[Photo 12] 助造とキヨ (1939年の夏、A・ピスコルが白濱にて撮影と推定される) [Szczęśniak 1940: 43]

毛深い人たちの間で^一ヴァツワフ・シエロシエフスキ
井上 紘一 訳

プロローグ

私の極東への旅は「頗る政治的」な動機に発する。一九〇〇年、ロシア帝国の憲兵隊がコジョン教授宅を搜索した際、ステファン・ジェロムスキと私の名前が運悪くも記載された手紙を押収した。私たちはまさにこの手紙がもとで、「国民詩人 アダム・」ミツキエヴィチ記念碑の除幕式当日に、労働者が碑の周辺で展開した見事なデモ行進を組織した廉で告発され、またその日のために準備された焰のような檄の執筆者にも帰せられる。デモ行進は実に見事で、檄文も格調高い美文ながら、組織者と執筆者はいずれもユゼフ・ピウスツキとスタニスワフ・ヴォイチェホフスキの兩人だった。しかるに、檄の「文体」にいたく幻惑された憲兵隊は、名のある文士の作品の筈だと執拗に拘った。そこで私は城塞監獄^{ツィタデル}に収監されたが、ジェロムスキの方は、そのとき見舞われた大啖血のお蔭で辛うじて難を逃れる。私は監視つきを条件に保釈さるも審理は

一 初出は二〇一三年公刊のヴァツワフ・シエロシエフスキ著、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」(井上紘一編『ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事〜白老における記念碑の除幕に寄せて〜』77〜108頁所収、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター刊)。原文は章立てを一切欠いているが、訳者の判断で五節に分けて適宜小見出しも加えた。訳者の注記は本文中の角括弧内に収める。原典… Wacław Sieroszewski, "Wśród kosmacth ludzi," in: Wacław Sieroszewski, *Szkiele podróznice. Wspomnienie* (Dzieła, tom XVIII Varia), ss. 219-274, Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961).

長引き、一年ほど経った頃、遂に祖国（故郷（na rodinu【ロシア語】）のイルクーツクへ「帰される」との噂が耳に入る。イルクーツクは、私が十五年をヤクート地方で過ごしたのち、町人の住民台帳に登録された「故郷」である。「帰郷」案はどうにも好きになれなかったので、私はビョートル・セミヨノフ元老院議員に泣きついた。同議員は、私もその一会員であるサンクト・ペテルブルグの帝室地理協会副総裁だった。

セミヨノフはかつて「オフラナ」〔帝政ロシアの政治警察〕の抵抗にもかかわらず、地理協会から金牌を授与されたヤクート人に関する拙著を楯に、私のポーランド帰郷権の獲得に尽力してくれたことがある。

私の気高い庇護者は、自分の力の及ぶ限り何でもしようと約し、そのために、関連情報はすべて提出するよう求めた。数日後、彼は暗い表情で、もはやお手あげだと告げ、ワルシャワ総督府は政治案件全般に「広範な自治権」を享受するばかりか、「かの地の憲兵隊もシエロシエフスキ一族を不倶戴天の敵と称するが、それも故ないことではない」と語る。そこで見せられたオフラナ文書からの抜粋には、まず一八一八年は軽騎兵、次いで一八三〇年代には「武装蜂起軍（wojsko insurencyje【ロシア語】）将校だった私の祖父カイエタンを筆頭に、一八六三年が父方の伯父たちと父、そして一八八〇年代は私の姉妹たちと従兄弟のように、シエロシエフスキ一族のすべてが「叛徒」として列挙され、末尾には私自身が同列に「殊の外頑迷にして（osobo uporstwujuszczji【ロシア語】）危険思想の持主と特記されていたのである。私は「万事休す」と観念した。

——だが、そんなことはどうでもよい……。われわれはこうしよう！……と、温情高潔のわが元老院議員は、私の落胆ぶりを見かねて慰めてくれる——われらは目下、極東に関心を有する。あなたのために科学アカデミーと協力してアイヌ調査を企画しよう……。日本列島北方の島々にはそう呼ばれる部族がいるが、われらの農民に酷似した毛深い人たちからなる頗る興味深い部族だ……。あなたはそこへ一二年赴いて資料を収集され、研鑽も積まれるがよろしい。著書を出版しよう。ヤクート人に関する著書ですでに経験されたように、その本のお蔭で、あなたは再び祖国への帰還を果たされよう……。

果たしてどうすべきであるか?!……。設けて間もない家族や、数年前に取り戻したばかりの祖国を、おいそれとは見捨てる気にもなれず、私は数日間沈思黙考を重ねつつ己との闘いに明け暮れた挙句、今は政治犯流刑囚としてサハリンに滞在中の——ほかでもないピウスツキ元帥の兄——ブロニスワフ・ピウスツキの同行がもし認められるならば、との付帯条件を提示して受諾を申し出た。こうして調査団は全面的にポーランドの標識を帯びてゆくが、加えて、アイヌ語を縦横に駆使するブロニスワフ・ピウスツキはアイヌたちを支援・擁護し、面倒も見てきたから、彼らの間では絶大な人気を博している。彼はまた戯れ半分ながらも「アイヌの王様」という尊称すら奉られているのだ。

件の付帯条件が受け入れられて、半年間の予備研究を済ませると、私は蒙古・満洲・中国を経由地に選定して、日本へ向けて旅立った。

函館

一九〇三年の六月半ば、私は北海道——旧称蝦夷島^{イェッソ}——の南端に立地する最大の港町函館にいた。和風の「小ホテル・キト」〔実際は「キト旅館」〕に止宿する。そこでは一泊一円（2ボーランド・ズウオテイ）で清潔な畳敷きの小部屋が与えられ、家具調度は僅かに衝立・青銅製火鉢^{ヒバチ}に加えて、鶴の立ち姿を描いた掛物^{カケモノ}が壁に懸かるのみ。食事も、その方がはるかに安上がりだから日本料理屋で済ませる。数ヶ月に及ぶ日本滞在のお蔭で、私はすでに日本の料理や習慣を学び、言葉さえも身に着けるようになった。英和「和芸袖珍辞書の助けを借りて首尾よく意思疎通を図ることもできた。私が各単語の脇に記された漢字を相手に示すと、対話者は頷いて一呼吸するや、同じ辞書の中に私の必要とする漢字とその英訳文を直ちに見つけてくれたからだ。万国共通の擬態語と身振りや、自尊心の強い日本人なら誰しも学校英語を通じて学ぶような、幾つかの「ピジン」語彙^三の総動員は、最高に陽気で活気に溢れる賑々しい会話を創出した。旅館内の人々は、客も含めた全員が参集して会話に耳をそばだてるし、店舗内でおっぱじまるときは道行く人の半分が忽ち蛸集する。全員がお喋りに加わり、私の辞書を奪い合い、大声を上げて哄笑する。なかんずく旅館の娘（*musime*）「女中のことであらう」たちは、「愛し

二 一九〇三年四月五日、長崎に入港したシエロシエフスキは五月十六日以前に函館入りを果たしていたから[K. Inoue, "The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903," *A Critical Biography of Bronisław Pilsudski*, vol. 2: 9-11, 2010] この「日付」は彼の函館到着を示唆するものではない——訳者注。

三 中国語・日本語・ロシア語の単語が入り混じったチャンポン語彙。

てるわ」「同衾しよう」「贈物を下さい」といった、爆笑を買うような漢字を好んで探し当てるのだ。アイヌについて何かを聞き出そうとするも、然るべく手を振りながら「far（遠い）」と言って、軽くあしらわれてしまう。美しい娘らはおちよぽ口を膨らませて「面白いことは何もないわ」とか、「アイヌ・デス・ドウルティ（dip）」（アイヌは汚いです）とか、「アイヌは犬を恋人にした娘の末裔だ」とか、はたまた「腰から下は犬の姿で、尻尾さえあるのよ！」とまでも極言する。

もうとうの昔にここにいる筈のブロニスワフ・ピウスツキの到着を待つ間、私は神社仏閣・劇場・博物館などを歴訪しながら町とその周辺を散策した。近在する駒ヶ岳^{コマガケ}火山の登頂すら計画していた矢先のある日、ロシア領事のヘデンストルム（Hedensholm）氏が不意に訪ねて来て、ますます激化する「日本の民族主義的宣伝」……に鑑み、旅館を出て領事館へ移るよう要請、さもなくば私の安全は保証しかねると告げた。

—— いずれ頓挫する筈だ……。彼らがそれを敢行することはまずなからうが、暴走はありえよう……。日本の群衆が何をしでかすかは量りかねる…。数年前、ドイツ軍の膠州（Kiao-choo）^{コウカウ}占領に対する新聞の煽動報道を受けて、当地では白昼堂々とドイツ領事が殺されたが、司直はいまだ犯人を挙げるには至らぬ…。嗚呼、アジア人は虎のごとく、礼儀を弁えるも残忍である…。警戒を怠らぬこと、また独りでの外出は避けること、なかならず当地の要塞などには近づかぬよう、そして写真撮影は一切差し控えられよ！……と、彼は意味深長に締め括った。

領事は人員を差し向けて、まさに拉致さながらに私の身柄を領事館へ移させた。そこは私にとって頗る快適ながら、十

分に…退屈もかこつ住処だった。私は不愉快な壁で忽ち外界から遮断されて、昨日までの知己は冷ややかな挨拶で私を遠ざけるし、陽気な娘ムシメらもはや微笑んではくれず、いつもなら僅かな小遣錢と引換えに、植物や甲虫しちちゅうの採集を賑やかに手伝つてくれた子供たちの群れまで、跡形もなく姿を消した…。

そしてプロニスワフ・ピウスツキも一向に到来する気配がない。彼に宛てて手紙や電報を送るも梨の飛礫、遂には、金欠病こそ彼の到来を妨げる首魁との想定で送金までも試みるが、返事すら届くことがなかった…。余人をもつてプロニスワフ・ピウスツキに代える案が度々脳裏をよぎるも、和人以外に余人を想定するのは不可能であるのに、アイヌらは和人こそ土地の篡奪者と見做しているから…、代案は事態をややこしくするだけだ。私は長考熟慮の末、アイヌ・英語小辞典を小脇に抱えて独りで調査に赴くことを決断する。とどのつまり、私は生涯で今一度、ヤクトト人の間で遭遇した状況に倣つて難局を乗り切ることにした。

梅雨の季節が到来し、太平洋からは刺すような季節風ヤッセ（山背）が絶え間なく吹き荒れ、低く垂れこめた雲は車軸を流すような雨をわれらに間断なく浴びせかける。伝説・昔話・信仰を聴取するにはうつつけの季節だ…。領事館に引きこもる私は、強いられた無為に怒り心頭である…。時間潰しに和人たちから様々な情報を収集する。

遂にある日、サハリンから手紙が届いた。密かに運んでくれたのは病氣治療の目的で日本の温泉にやって来た、ある女教師である。プロニスワフは電報やお金は受領したものの、サハリン知事が「広範な自治権を行使して、ペテルブルグや

東シベリア総督府からの命令にもかかわらず私の出国に許可を出さぬ」ので、出発できない旨伝えてきた。

嗚呼これぞまさしく、広範な自治権を、民に損害をもたらすときは意欲的に行使するのに、生活の福利や安寧がかかわるときは臆病を極めこむ、あの世界に冠たる官僚主義だ。絶望的な電報が再び、ペテルブルグとイルクーツクへ向けて発信された。

噴火湾

私はその間、長老派教会北海道伝道団々長のバチエラー氏 (mister Batchelor) とともに、噴火〔内浦〕湾 (Volcano Bay) の湾岸に立地する至近のアイヌ村を幾つか巡回した。旅程は室蘭 (Mororan) まだが蒸気船、以遠は帆船で湾内を数十キロ航行、上陸後は騎乗で『伊達門別町から有珠 (Uru) 村に至るものだが、すばらしい旅であった。

この地方は和人によって開拓され、完璧に農地化され、立派な道路や清楚な和風家屋も完備するから、日本列島北部の諸地方と比べても全く遜色がない。例えば植生でさえも米・小麦・大麦・印度藍・空豆・油菜・亜麻といった栽培植物や、樺・樺ぶな・ハンノキ・松の森林性樹木、道路の両側に植樹されたキリン (Kurin 「桐の木」であろう) の美しい並木などは全く同じだ。キリン樹は和人が当地へ持ち込んで北の風土に順化させたもの。その軽くて共鳴性の高い木材は琴 (harp) や下駄 (sandai) の製造に利用されている。

稠密に居住する和人住民の間には、2〜3戸の葦小屋からなる小さな村々など、アイヌの残像があちこちに点在する。

葦で階段状に葺いた大屋根で蔽われる葦小屋は、ポーランドの葦葺小屋を彷彿させる…。ミステル・バチエラーの信者は大半がアイヌだったから、私たちは概ねこうした住居に寝泊まりする。

尊師が証明書を執筆し、訴えに耳を傾け、争議を仲裁し、儀式を執行するなど自らの務めを果たされる間、私は内装や生活用具や衣装を観察し、子供らと親しく交わり、家屋や人々を撮影した…。さらには古い信仰や習俗の痕跡もあまた発見する。あちこちの改宗者らの家の前にも、削掛け呪具の「イナウ (inu)」が林立するすばらしい「ヌサ (nusa)」が見出され、そこにはかなり前に殺された熊・狐・狼…の干上がった頭部も、杭に刺して掲げてある。屋内にも古びた削掛けの「イナウ」が随所に散在するも、すべては恥ずかしそうに隠されるか、さもなくば尊師が現れると忽ち姿を消すのだ。

同じことは私の研究においても出来た。私の「世俗的」な質問に対して、地元の人たちは洪々と投げ遣りな回答をくれたが、尊師自らも彼に特有の聖書文体というやや不思議な手法で説明する。彼は私の研究には頗る好意的だったものの、私たちの見解は水と油ほどかけ離れていたから、両者の議論は一部が英語で、一部はミステル・バチエラーの弁えるロシア語でも行われたとはいえ、全く不毛であった。尊師は至る所で、最初に神が人類に授けられたものが、偏に彼らの罪と野生化の所為で崩れて墮落した「宗教」の痕跡を追究するが、私の方はアイヌの信仰の内に仏教や儒教の浸透で破壊されたとはいえ、偉大なるシャマン信仰の見事な残像を認めるのだ。ミステル・バチエラーはアイヌが白人種に属し、シベリアから満洲と朝鮮を経由して南の群島に到達したと主張する。私はといえば、黄色い肌で薄毛の周辺諸民族とは著しく異

なるこの謎の部族に、滅亡した原人類、つまり大昔に太平洋の底に沈んだ大陸——東のアトランティス——の住民の痕跡を求める見解に傾いていた。

この所説については、幾つかの伝説が仄かに語るのみならず、地質学研究も、蝦夷島と千島列島は日本列島の中・南部の島々より古いと断ずる結論を報じ、海深測量の結果もまた同断である。加えて、アメリカ大陸とアジア大陸の内陸部には見られぬのに、両大陸の相対する沿岸部だけに残存として発見される事例、例えば、若干種の甲虫や植物のように海流で運ばれることも、また「オオツノヒツジ」の一種「*odmiana skalnych baranów*」[英訳者 A・F・マイエヴィチ氏は「ニンジンボク」の一種「*rock chaste trees*」(*Vitex agnus castus*) を充てている]のような風任せの移動は考えられぬ、若干種の動植物の事例をめぐっても同趣旨の見解が伝えられている。

今や絶滅の危機に瀕するコリヤーク、カムチャダル、ギリヤーク、ゴリド、なかんずくアイヌといった諸民族は、彼らの現今の隣人たちとは顕著に異なるのに、絶滅したか絶滅に瀕するアメリカの原住諸民族とは、その習俗や外貌に関して極めて多くの類似を共有するから、今は消失した島々——はたまた諸大陸——が形成する架橋を介して、両大陸の間には密接——そして古い時代には容易——な接触が存在したという確信が期せずして生まれてくる。もしこれらの土地にかつて住民がいたとすれば、アイヌは間違いなくその末裔であろう。この仮説がどこまで正しいかを検証すること、それが私の課題であった。したがって、尊敬措くあたわざるバチェラー氏は、自らが聴取されたアイヌ情報の通訳に際し、無意

識ながらもそれを逐一潤色なさるから、氏の仲介は私の仕事にとって深刻な障碍となった。そこで、着手した研究に熱が入るにつれて、私はブロニスワフ・ピウスツキの到着をますます熱烈に渴望するようになった。

だが、ミステル・バチエラーは一つのすばらしいチャンスも恵んでくれた。つまり、私のために人類学的身体計測への道をつけてくれたのだ。アイヌは、あらゆる原始民族の例に洩れず、被検者ないし被撮影者の身体が計測や撮影の実行者の所有物と化すと見做されるような、己の理解を絶するような行動には恐怖を覚える。加えて、アイヌの抵抗は、身体計測が日本軍への自らの徴兵——それまでは兵役が免除されていた——を促進するのではないかとの危惧によっても強められた。しかるに導師は自らの教区民の偏見を打破することに成功したから、私は男女十数名の計測を室蘭と有珠（ウシ）の周辺で実施することができた。——しかし計測の結果は、アイヌの慣習・信仰・生活用具・衣装のみならず、また彼らの人類学的形質タイプにまでも和人の影響が深く及んでいることを、私に強く確信させた。被計測者の大半は混血者であり、恐らくは「4分の1混血」（kwarteron/quadron）^{イエツツ}の和人でさえあった。それを物語るのは、頭蓋骨の形態と筋肉組織であるが、止めを刺すのは、蝦夷の東部や北部およびサハリンに在住するアイヌよりも遥かに微弱な多毛性である。

ブロニスワフ来函

したがって、極度に落ち込んで函館に戻った私は、難局から如何に脱すべきか思案に暮れていた矢先に、晴天に霹靂のごとくブロニスワフが姿を現した。彼は陽気で元氣澆刺、国外用旅券を交付せよとのペテルブルグからの断乎たる命令が

サハリン島官吏の間にどのようなパニックを起こしたかを、面白おかしく物語る…。

——これはポーランドの陰謀だ、あなたはシエロシエフスキでなくて、偉大な革命家である私の弟ユゼフであり、しかも私を連れ戻しに來たのだ…と、彼らは固く信じて疑わなかったのですよ。けれども、彼らはもはや抗うことができなくなつて、この通り私はここにあります…。サハリンの通訳も一緒に連れてきました。半分アイヌで半分は日本人ですから、どちらの言葉もよく知つてますし、ロシア語さえも話せます…。名前はタロンチ (Tarontsi) せんどうたろうし 本名は千徳太郎治)…。頗る頼り甲斐のある男です…。あなたも私も日本語ができませんから、日本の当局者との対応では必ずやすばらしい潤滑油になつてくれますよ…。

タロンチの給料と生活費は、われらのつましい調査費をかなり逼迫させ、混血児の落ち着きのない目と狐のような顔も私には全く気に入らなかつたとはいえ、彼をサハリンへ送り返し、しかも給与の一部を契約不履行の違約金として支払うのに要する費用は、彼が残留する際の経費のほぼ半額に匹敵すると見込まれたから、私は妥協せねばならなかつた。

われらは大車輪で旅支度に着手、必要な食糧と物資を購入して研究計画を策定した。それによると、われらの実地踏査は、和人の影響が最小限に留まる東と北の最果ての集落から開始すべきとされた。まずそこで、形質と習俗の両面でアイヌの基本タイプを確立させた上で、フオークロア・信仰・人種における様々な変異を跡付けながら、より和人化された中央部へ向けてゆっくり移動する予定であつた。しかるに、ある事件が出来して、われらの当初計画は忽ち逆転を余儀なく

されたのだ。

シバンラムとの出会い

ある日、ブロニスワフが私の許へ駆け込んできて、すべてが順調で現地のアイヌたちともすでに友好関係を樹立したから、計画は変更して出会いを活用すべきだ、と彼はえらい剣幕で捲し立てた。

——「活用する」たって、一体どのように？ 何を「活用する」のだ？

——直ちに彼らを引見してくれ。

——誰をだ？…。

——アイヌたちを。

——彼らはどこにおるのか？…。

——ここにいるよ…。

ブロニスワフは廊下へ向けて半開きの扉を指さす。私はまさにそこに、がっしりとした体格のアイヌの立派な蓬髪頭を認めた。身振りで彼に入室を促す。身に着けた白地の長いキモノは黒と青と赤のアイヌ文様で刺繍が施されている。裸足ながら、逞しい脛を蔽うのは破れかぶれの薄汚れた脛当。入室すると忽ち床に蹲って、両耳の脇に垂れ下がる巻毛と黒々と輝く長い顎鬚を撫でだし、しかるのち祈るように合わせた両の掌をすり合わせる。このアイヌ式挨拶——「カラクテ」

(karaky [辞書には karate~karapie と記載される]) —— はブロニスワフがすでに手解きしてくれていたから、私も客人の前に蹲るや同じ仕草を繰り返す。お決まりの茶が出てきて対話が始まる。客人は自らをシパンラム・ノムラ (Spaniam Nomura [日本名は野村芝蘭]) と名乗り、^{モロラン} 室蘭東方の海辺にある白老村で暮らしていると告げる。彼はそこで自前の資産、舟や網を有するも、旅の和人が持ち込んだ大きな儲け話に乗せられて、細君や数名の隣人とともに大阪の博覧会〔浜寺で開催の第五回内国勸業博覧会〕へ赴くことに同意、彼らはそこにアイヌの村を「設営」し、「熊祭り」を上演することになる。三ヶ月にわたって「上演」しつづけたものの、和人の興行師は彼らを欺き、一文も支払わぬまま破産し、逐電してしまった。したがって、物品・鍋釜・薬缶や銀の装飾など…売れるものはすべて売却するも、辛うじて確保できたのは函館までの汽車の切符だけ……。当地では文なし、知人もいなかった…。

—— 無一文じや旅籠^{はたし}とて門前払い、わしらには一夜を過ごす場所ありません…。大阪を発つてからは一粒のコメも口にしておりません…。妻は病人です…。博覧会で脚氣^{ペリペリ}を患いましたのに、その病すら客に見せるよう…言われましたよ。どこへ訴えたものか、見当もつきません…。ここじゃ誰も、わしらに見向きもしません…。わしらは「アイヌ」だ…。和人たちはわしらを嫌っておる。馬鹿にしておる…。溺れて死んだ方が余程ましだ……。すると、「善霊」は突如として、気高い心の「旦那」^{ニシヤバ} (niszpa) をわしらの所へ送ってくださいったわ…。

頭と感謝の眼差しをブロニスワフへ向けつつ、彼は再び自らの「莊嚴な顎髭」を撫ぜながら、全身を折り曲げてお辞儀

をした。

——実に不思議な巡り合わせだ……プロニスワフが会話に割って入る——路上に立ち尽くし、途方に暮れてあたりをきよるきよる見回す人たちが目に止まる……。私が近づきながら「そこで何してるのだ」とアイヌ語で声をかける。彼らは一瞬雷に打たれたように身をすくめた。声を失って立ち尽くすばかり。一人の女が泣きだす。和人たちが蟬集する。そこでアイヌらを脇へ連れてゆき根掘り葉掘り訊ねる……。彼らに弁当ベント（bento）（米飯を詰めた小箱）を買ってやる……。するとようやく、彼らの舌は呪縛から解かれてゆく……。奇蹟ではないか……。われらの旅立ちの前日に……。彼らの所へ赴くのはごく自然の流れだ……。われらは直ちにアイヌ的生活の核心へ、しかも友好関係のもとで案内されるだろう……。しからば、われらの仕事は完璧に別物となるよ、私は彼らをよく知っている。われらの寸志に対し、彼らは全身全霊で応えてくれよう……。私は1円（2ズウォテイ）を与えたが、少な過ぎた。彼らには汽車賃も煙草錢も当座の路銀も渡さねばならぬ——と、プロニスワフは熱弁を締めくくった。われらの会話中に姿を現したタロンチは、はるかに抑制的だった。

——金は渡すべきですが、ほどほどにせねば——と物静かに忠告する。

渡したのは4円である。ノムラは嬉しさ余って声を失う。彼は肉付きのよい顔に心からの愛情を浮かべて、細君は帰宅させるものの、われらを支援し、また付き添うべく自らは残ることを申し出る。われらは合議の末、申し出は断った。街中まちなか

では彼を必要とせぬから、彼も直ちに帰村して、そこですべての膳立てを整えるがよい……と。彼は「エイロ・ロ・ロイ (eilo-ro-ro) !」(「何というすばらしい贈物だ」)、「ヤイ・ラ・イゲレ (ai-ra-igere) !」(「有難う」)と、間断なく繰り返しつつ退去した。

白老

初日

数日後、われらは室蘭^{モロファン}から単軌鉄道で東へ向かった。線路は太平洋の岸边に沿って伸び、紺碧の波が随所で砂浜に打ち寄せる。黄金の筋をなす陽光が、先頃の驟雨で見事に甦った一帯に降り注ぐ。鬱蒼と茂る森で黒ずみ、青白い浅瀬に縁取られた岬が、青い海と空へ向けて幾筋も張り出している。内陸には薔薇色の巖を頂く紫の山並みが延々と伸びる。幾つかの山頂は煙を吐いており、火山だった。至近ではさほど高くない青白い円丘が払暁の藍のなかでまどろむ。海と山並みの間に横たわる平地には村や小さな町があまた認められ、一軒家もあちこちに点在する。

これらの家々の間では、葦壁のアイヌ家屋に高く聳える葦葺き屋根が一際目を惹いた。こうした家は必ずしも多くないが、個別に小さな集落^{いらいら}をなして海辺や漁場に集結している。樫・楓・榆の木々……繁茂する接骨木^{にわとこ}・行者大蒜^{にんにく}・針槐^{えんじゅ}の緑地、巨大な蕁麻^{いらいら}の繁み、立ち枯れた玉蜀黍や黍の畑。これらすべてが家屋をすっぽり囲っているから、ごく最近までは森の民にすぎなかった人たちの巢窟が、莫大な労力を投じることですら辛うじて本来の藪から離脱できたかのような風情であ

る。一方、小ぶりで端正な和人の家屋は、その周辺に野菜畑や花壇を残すのみ、全体が太陽に向けて露出されている。われらは幌別（Horobec）、登別（Noribetsu）、その他の駅をやり過ぎした。アイヌの家屋がその数を増してくる。5番目の白老駅で下車した。

線路が村を南北に折半している。北側は和人たちの居住区だ。そこでは文化が感ぜられ、ほとんど一つの町をなしている。美しい端正な家々がかなり整然と連なる広い通りには、各種店舗・郵便局・学校・警察署・測候所や、地元の農業関係事務所などが軒を連ねる。往来の激しい通りでは色とりどりの着衣の子供たちの群れが、下駄の音を響かせて走り回る。われらが下車して列車が動き出すや否や、その大半は未成年者だったが、物見高い群集がわれらを取り囲んだ。彼らから村には旅館があると聞かされて、その旅館へと向かう。

ノムラ・シパンラム氏には到着を手紙で知らせてあったのに、われらの期待に反して、彼は出迎えに来ていなかった。

旅館は結構清潔だったが、われらの旅の目的を知った宿の亭主は強気に転じ、小さな部屋の一人分の宿料としては、大都市の一級ホテルに泊まれるほどの法外な額を吹っかけてきた。われらは荷物を預けると、別の宿を求めて南側のアイヌの村へ足を向ける。道すがら私は持論を開陳する。われらはアイヌとともに暮らし、一緒に食べ、飲み、眠り、身繕いも可能な限りアイヌ風にせねばならぬ、さもなくば、彼らに打ち解けてもらうことも、またその生活を知ることとも叶わぬではないかと。このアイヌ化案に対し、ブロニスワフは直ちに賛成してくれたものの、タロンチだけは顔を顰めて難色を

示す。むしろヨーロッパ化か、日本化の方が好ましい……との表情を隠さなかった。

——何の益もないこと、ただ汚いだけです——彼は苦々しげに説く——アイヌはどこも一緒、ヴォトカをやればやつぱりやつて来ますよ……。

アイヌ・コタンは、馬鈴薯・豆・玉蜀黍・葱やその他の野菜が植わる畑の間に雑然と点在する家屋からなる。壁と屋根は葦造り、窓にはガラスも、はたまた和風の「障子」(szodsi)も使われてない。戸口に懸かるのは蓆である。気温が「摂氏零下12度から15度に達して、吹雪が連日吹き荒れることも珍しくない冬場は、一体どうして凌ぐのだろうか。だがこのときは緑に包まれた家屋が一幅の絵のような美観を呈し、まさにポーランドの風物を彷彿させる。家々は雑な列をなして海辺に至るが、そこには黄色の砂浜で縁取られた大きな湾が広がる。舟着場と網漁に眺え向きの浜である。砂丘には一連の大型漁舟が丸太の台座に鎮座し、舟の陸揚げに使用する巻上げ機も何台か目にとまった。

陸の側では、樹木の繁茂するチャシ・コツ (Czasi-kot) の鮮緑色の山並みが湾を半円状に取り巻き、その背後の一端には有珠 (Udzu) 火山の赤茶けた頂きが聳え、他端では青い海原へ切り込む暗い岬の彼方へ、砂原岳 (Sawaradzi) の大火山口を縁どる薔薇色の円錐が、照り輝く腐生植物 (hostocza) の間からいきなり突出する。ペツ (Pec) 川「「ペツ」はアイヌ語で「川」を意味する普通名詞、ここでは白老川を指すようだ」は村を縦断して海へ注ぐ。われらは砂地の広い道をゆつくりと歩んだ。神の造られしが儘に全裸の子供らは吃驚して遊びをやめ、われらをじっと凝視する。家々の奥には人の気配がするも誰一人姿を見

せず、村はまるで死者の世界のようだ。

シパンラムの住まいを訊ねようにも、その相手が見当たらない。上唇部に見事な刺青を入れた婦人が通りかかるが、われらを認めるや、あたふたと道を取って返した。さらばとて、とある家を訪ねる積りで戸口に懸る蓆の前に立ち、アイヌの習慣に従って、3度の咳払いで来訪を伝えようとした矢先に、近くから優しい叫び声がわれらの耳に届いた。

——キーク、キーク！

タロンチが素早く振り返る。隣家の前には今しがた見かけたばかりの婦人が、勝るとも劣らず美しい刺青を施した今一人の婦人と立っている。両婦人はわれらを驚いたように見つめながら、耳の脇に垂れ下がる自らの毛髪を撫でていた。

——あれは、われらのマダム、シパンラムの細君だ——と叫んで、ブロニスワフは彼女らの方へ駆け寄る。

彼のあとをわれらが、われらのあとは子供や犬どもが追う。戸口には、乱れ髪の女たちや顎鬚を蓄えた男らが相次いで姿を見せる。その一人が重々しい足取りでわれらの方へやってくる。男はわれらの二歩手前で蹲るや、ブロニスワフの目を見据えて「カラクテ」を始める。つまり、掌を祈るがごとくすり合わせ、重々しく顎鬚を撫でだしたのだ。ブロニシワロニスワフの愛称、ここではピウスツキを指す」も同様にカラクテを返すと、二人は堰を切ったように対話を始める。彼らは大まじめで相手の健康や互いの家族の健康、漁の成果など……について訊ねあつた。

このアイヌはシパンラムの兄だった。われらはタロンチも例外とせず全員が順繰りに、やはり大まじめでゆつたりと挨

拶の儀式を交わし、相手の健康や家族の健康、漁獲について語り合った。その後、シパンラムの兄は、婦人たちが恭しく待ち構える家へわれらを誘う。シパンラム夫人のキモノの中には、団子のように丸々肥えた末息子が裸身を潜めていた。シパンラム夫人自身は一步も動かず立ち尽くしていたが、われらが近づき、私の目が鹿の目を思わせるやや怯えた漆黒の彼女の目と交差すると、彼女の右手がゆるゆると持ち上がって耳の脇に垂れる毛髪の束を撫でたあと、その束を唇の刺青の上へ引き寄せ、両腕に沿わせ、さらにはだりと垂れた左手に沿って指先に至るまで走らせた。それが女のカラクテ、つまり挨拶であることを知った私は、お返しに掌のすり合わせと撫鬚を3度繰り返した。シパンラム夫人は作法を心得ていたから、私が団長だと知って、私から挨拶を始めたのだ。私たちは再び、お互いの健康、家族の健康、漁獲についてひとしきり語り合う。しかるのち私が別の婦人を応接する間、シパンラム夫人と挨拶を交わしたのはブロニスワフである。

彼とのお喋りは長引いた。ネンタシク (Nentsik、これがシパンラム夫人の名前だった)さんは次のように語ったそうだ。彼女の夫は、われらに新鮮な魚を振舞うべく、隣人と連れ立って海へ出かけて留守である。彼女は義兄とともに出迎えに駅へ赴いたものの、列車の到着に間に合わなくて、われらを見つけられなかった。われらは汽車に乗って立ち去ったと告げる者もいたという。

——よくある和人の嘘ですよ。われらは悲嘆に暮れて帰宅しましたが、その間に、わしの姉妹のイシユウチ (Isiuchi)

が「ニシパ (nišpa)」（旦那）の姿を路上で見かけて、旦那方はもう到着していると申しました。

——到着してますとも、長居のつもりです……と、プロニスワフは笑いながら、交わされている会話を私に
通訳する。

われらは屋内へ招じ入れられる。箱・樽・什器・道具類が満載の大きな玄室を通り抜けて、入口に対面する大窓や側壁に設けた幾つかの小窓を通して採光される、広々として清潔な主室 (chana) に入った。窓辺には就寝用の板床が低くしつらえてある。主室の中央に四角く仕切られた炉では火が燃え盛り、その煙は鈎や横木、そこから吊下がる魚を黒く染めながら高い屋根裏の深い漆黒の中へ消えてゆく。屋内に天井はなく、粘土を踏み固めた床の炉辺には、数枚の美しい葦製の
蓑蔭が延べてある。

われらは請われて東面の大窓の側に座った。その場所は室内でも特上席とみなされているからだ。主室には、箱類を別にすると椅子はおろか家具も一切なかったから、われらは床へ直に腰を下ろした。茶と菓子でもてなされたあと、飛び切り上等の燻製魚も振舞われる。その座を取り仕切ったのはシパンラムの兄であるが、ネンタシクとイシユウチも然るべく手伝った。大勢の子供がひそひそ囁きながら主室を縦横に駆けめぐり、若い娘の姿が玄室の闇をよぎる。

——きつとシパンラムの娘シヨトウナシ (Siounas) に違いない。彼が慌てて大阪から戻った理由の一つだった…。

和人格や魚の仲買商らに娘が「熱を上げている」という怪しからぬ噂が彼の耳に届いたからだ…。細君が煩くせ

がんで帰村を急かせたから、彼は博覧会事務局に損害賠償さえ求めず、持物を二束三文で叩き売った…。細君の持病とされた「脚氣」^{ペリペリ}すら、なぜか急に直つてゐるぞ…。ほらね!…。そうだろう!…。だが後生だから、娘には目を向けないでくれ…。あたかも彼女はここにいないかのように。さもないと彼女は姿を隠し、二度と戻つては来ぬだろうさ。私は彼らを熟知している——と、ブロニスワフは私に警告した。

茶会が終わると、主人の兄はわれらに大形魚捕獲用の長槍や、魚網・釣竿、その他の漁具を披露した。その後、われらを村内視察に連れ出して、道すがら、アイヌが高い柱の上に倉を建ててきたわけを語る…。

—— 蟻・野鼠・甘日鼠・狐の害を防ぐためです…。昔は住居も柱の上に建てたものでした。

彼はわれらを海辺に案内した。そこには、舟置場からほど遠からぬ砂丘に見事な「ヌサ・カムイ (nusa-kamui)」が見出されるが、出漁時に海の神々へ敬意を表すべく立てられたものだ。そこには何本もの「イナウ」が横なりに林立する。イナウとは、巧みに仕上げられた削掛けを伴う、人の背丈ほどの柳・水木・榛^{はしばみ}の枝の呼称であるが、その天辺に集中する削掛けの束は、逆さに立てた「カトリック教会で聖水を撒くときに使用する」「^{ほっす}払子」を彷彿させる。岸に並ぶ舟には、ふさふさとした同様の「イナウ」ながらやや小ぶりのものが、それぞれの舳に取り付けてあつて、これは「カムイ・ルウ (kamui-ru)」(道の神)と称する。

われらの散策には子供らの群れが遠巻きに随行したが、われらに向かつては、耳も顔もピンと尖つて、ジャッカルを思

わせる半野生の犬どもが、麻・蓴麻・巨粒蕎麦 (*Polygonum sachalinensis*) の繁みに身を隠しながら、けたたましく吠えつづけた。大人の住人たちは建物の蔭や暗い玄室に身を潜めて、われらを仔細に観察していた。帰路では、高い支柱の上につらえた木製の大型檻で飼育されている小さな狐 (*szumari*) を視察した。

——雪が降れば犠牲に供する予定です!——と、アイヌは説明する。

夕刻が近づく。女主人はますます落ち着かなくなり、しきりに外へ出ては海上を見やるも、シパンラムの戻る気配はなかった。待つのもこれまでだ。われらは別れの挨拶を済ませて、旅館へ向かった。

第2日

翌朝、われらが目を覚ますと室外から来訪を告げる咳払いが聞こえてきて、われらの部屋へ日本式にいざりつつ入って来たのは、ノムラ・シパンラムである。われらは順々に、長いこと掌をすり合わせ鬚を撫でながら、健康・家族・漁獲を訊ね終えると、ノムラは再び咳払いを3度繰り返して、威儀を正して語りだした。

——立派な「ニシパ」である旦那方にお目にかかれ、この僻地とやつがれの陋屋へ御光臨も賜りまして嬉しい限りです……。海では何が起こるか知れませんが、昨日は夜半に漁から戻りました。旦那方の天界での取りなしのお蔭で幸いにも大魚を仕留めまして、いまだ昨夜のうちに旦那方を夕食へお招きすべく参上したものの、ガタピシ列車での長旅でお疲れになり、すでに御就寝でした。ですから、高貴な「ニシパ」である旦那方を起こす

ことは差し控えましたが、今はわしの家人一同、いや全村すら挙げて、旦那方とともに海の幸を饗食し、各自に配当される肉片を持ち帰るべく、賓客である旦那方の御到来を待ち構えております…。今でこそわしは貧しいが、祖父と父は「ニシパ」で、やつがれもここの村長でありましたから、わしの隣人らは挙って、騙された憐れなアイヌに救いの手を差し伸べて下さった異国の「ニシパ」とお近づきになれるよう、心から願っております…。

長広舌は自宅で催す祭宴への重ねての招待で締め括られた。私は宿の件の方が先決だと主張したが、それはおいそれと片付くような問題でない、このような重大事では準備と議論に長い時間をかけるのがアイヌの流儀なのだ、とブロニスワフは断言する。そこで、ブロニスワフはまず手初めにシパンラム邸の見事な造りと壮大さを褒めあげたが、これは主人を欣喜雀躍させた。次いで、宿の亭主の食欲と不親切や、去来する来客のもたらす恒常的騒音と騒擾に対する不満を訴えた挙句、彼は以下のような含蓄に富む謎までも掛けたのだ。即ち、われらが住居・生活の対価として支払う金子が、もしあの狡猾な和人ではなくて、例えば彼シパンラムのようなわれらが友、ないし彼の指名する誰かの手に渡るとしたら、われらにはその方が遥かに好ましいのだが…と。

シパンラムは、われらの提案に明らかにさまざまな驚きを示して、自らの貧困・無知蒙昧、快適な暮らしの欠如、われらのような紳士には相応しくない劣悪な食事、商店・郵便局・役場の遠隔性…について再び語りだした。彼の抗弁ならびに振舞い全体が、私には些か腑に落ちない。われらは持論を曲げなかった。すると、利益を侵害された和人たちが彼に危害を加え

ることを実は心配しているというのだ……。私は一笑に付して、それは全く和人らの見当違いだ、われらはいずれにせよこの旅館を去る心算であつて、行き先は、もし彼の所でなければ誰かほかの者の家、あるいは隣村の社台(Satai)か、厚真(Ama)、はたまた平取(Piratori)までも足を伸ばすかも知れぬと告げた。

——われらが会いにきたのはアイヌであつて和人ではない——と私は駄目を押した……。

地名の列挙に加えて、「駄目押し」が漁師をいたく感動させる。彼はわが国の農夫と全く同じ仕草で頭を掻きむしり、自分では当然ながら喜んで迎えたい、しかし……かほどの重大事だから細君とも相談せねばならぬと語った。

彼は退去に際し、タロンチとなにやら囁き交わしたが、その後は再び日本式に恭しく後ずさりしつつ戸口の外に消えた。だが直ちに戻ってきて敷居の手前から、宿の主人にはいくら払うのかと訊ねる。われらが数字を告げるや、彼は「ハイエ・ク・ラム(haye ku ramu)」(嗚呼、神様)と呟いて、長いことものの想いに耽る。戸を静かに引いて閉めたものの、彼がその場から立ち去った気配はなかった。プロニスワフは嬉々として、あれこそアイヌに典型的な振舞いであり、すべてはわれらが望むように落着くと断言するも、私は何かよからぬ予感を覚えた。再び訪意を告げる咳払いが廊下に響き渡り、戸が引き開けられると、隙間から覗いたのはシパンラムの蓬髪頭と、爛々輝く両の眼である。

——承知しました、引き受けましょう。宿の亭主に支払うのと同額をわしにお払いください。わしは旦那方に恩義がありますので断れません。但し、各村戸長(kaku-song-kocio) (村長と警察署長を兼ねる役職「当時の白老郡各村戸長役場

の「各村戸長」は佐伯茂治を訪ねて、なぜアイヌとの暮らしを望まれるのか、そして、わし即ちシパンラムは恩義に報いるべく!!…旦那方を引き受けねばならぬことも説明して下さるようお願いします。

——まことに結構——。即刻、各村戸長を訪おう。

私は、彼の悩みが遂に突き止められたので同意する。だが、われらが着心地のよい日本のキモノをヨーロッパ式装束に着替える暇もあらばこそ、部屋の敷居の前に姿を現したのは、ほかでもなく各村戸長その人である。その出立ちは洋装で、金ピカ・ボタン付きの黒い警察官用制服を纏い、筋入りのズボンをはいてゲートルを巻き、サーベルを佩帯するという、完璧な「正装」だ。敬礼し、サーベルを外して畳の上に跪き、武器は脇に置く。私たちは握手し、「今日は (koniszwa)」と日本語で挨拶を交わす。われらが頂戴した名刺には、長々しくもすばらしい彼の肩書が、日本の漢字のほかに英語でも記してある。われらもまた極東での慣例にしたがって、お返しに名刺を差出す。私に言わせるならば、西洋で実践されるような、自らの名をもごもご口頭で名乗ったのち、客人の住所を紙切れに書き留めたり、その個人情報婉曲な方法で聞き出す労を重ねることに比べると、名刺の交換は遥かに礼儀に適った慣行である。

シパンラムは姿を消した。そこで、この和人との間では旅や天候、当地訪問の目的をめぐって、ごく普通の社交的会話が始まる。

お決まりの茶と和菓子とケーキが出てくる。各村戸長は学術の高邁なる使命や、日本政府による学術の重用や学者支援

をめぐって長口舌をふるった。

—— されどもわが国の教授にはそれぞれに自前の専門領域があり、その埒を外れることは許されぬ…。ところで、貴殿らは何を探しておられるか。

—— 何よりも先ずアイヌの神々について学びたい…。と、私は彼の不安を鎮めることにこれ努める。

—— ほう、あの木の削掛けの「イナウ」とな？…。と見下げるように彼は笑う—— そいつは研究しても宜しいが、地図を書くことは罷りなりませんぞ！…。

—— われらは日本製の地図を所持しております—— と私は応じた—— それはともかく、あなたはわれらに関して札幌の総督 (general-governator) 「当時は官選の「北海道長官」」から特別な訓令を受けておられるでしょうね…。

—— 本官は如何なる訓令も受理しておらん…。本官が申すことはすべて、掛値なしに本官の衷心と、貴殿らの安寧を慮る本官の懸念に発するものである…。本官は貴殿らに用心を怠らぬよう忠告しておく。アイヌは頗る貪欲で狡猾であるぞ。したがって、貴殿が博物館のために購入する物品の支払いは、本官立会いの許でなさらねばならぬ。本官が彼らに支払いを行うであろう。本官がこれを求めるのは、上司からの指示であるからだ。本官は貴殿らを教導せねばならぬ…。

彼は長々と喋ったのに、タロンチの翻訳は短かった。最も肝心な部分を隠したのではなからうか。警官は退去に際し、

シパンラム宅におけるわれらの宿泊を寛大にも認めてくれた。

——つまり、あなたはそのことをすでに御存知でしたか。

——本官は何でも承知しておる！……と決めつけて一札するや、彼は戸口へ向かつて歩き出した。

しかしながら、ポーランドについては何も知らず、われらの度重なる抗議と説明にもかかわらず、彼は相変わらずわれらを「ロシア人」(Rus)と呼びつづけた。

その日の夕刻、シパンラム宅へ引越した。われらはそこで心温まる歓迎を受ける。東壁の「聖なる窓」の右手に当たる貴賓コーナーがわれらの指定席だった。そこにはわれらのために、菖蒲製の薄縁が板床の上に延べられ、木枕も添えてある。上掛けと小さなクッション枕は自前で携行していた。主人は直ちに「小さな祈り」を執行する。つまり、われらの持参した一瓶のヴォトカを、彼はまず金色の熊が底に描かれた赤い漆器碗へ空けて、それを一気に飲み干した。飲み干す前には数滴を炉の上に振り撒いて、「火の女神」向けの短い祭文を唱えた。

——彼女は女であるから——彼は解説する——どんなに些細なことでも腹を立てるのです。ですから、旦那方の到来を祝賀する本番の「ヌサ」は明日執り行われるにもかかわらず、彼女は今日もまた慰めてやらねばならんですよ……。

少々酔っ払った主人は、われらが独り寝で「退屈」せぬよう、自分の娘を夜の床に侍らせようと申し入れた。われらの

拒絶に彼は愕然となり、暫くの間、気落ちして座りつづけ、もの思いに耽る。

—— しからば、わしの女房を差し向けよう……。女房ならば、よもお断りなさらないでしょうな……！——と、彼は厳肅に告げた。

—— 君は阿呆か……！—— ブロニスワフは食ってかかる—— われらは和人の商人ではないぞ、われらにそのような習わしは無縁だ。

—— 無論、わしは阿呆でしょう……。けれど旦那方のような友人には、わしらが持っている最上のものを何でも差し上げるのです……。もし旦那方が函館で救って下さらんなら、わしらはどうなつてたでしょう……。和人はわしらを浮浪者として牢屋にぶちこみ、不名誉千番にも鎖をかけて家まで護送した上、罰金まで科したことでしょ……。ともかく、わしの祖父と父は「ニシパ」で、わしも数年前は当地の公選村長だったので……。——と、彼は向きになつて復唱した。

女たちがこの会話を聞いていたかどうか定かではないが、彼女たちのわれらに対する態度は直ちに途方もなく親密となつて、年頃のショトウナシはあからさまに媚を振りまいた。

第3日

翌日、朝一番で風呂が用意される。蚤や虱に一晚中情け容赦なく襲われつづけたわれらには、風呂がとても有難かつた。

シヨトウナシと叔母のイシュウチが玄室から鉄底の半裁樽を転がしてきて、レンガでしつらえた炉の上に置き、樽に水を入れて薪に火を点けた。われらは恭しくも、下から熱せられた釜にかかるよう招請され、先ずは私に白羽の矢が立った。

日本では誰が必要に迫られて裸体に慣れ、脱衣行為にも鷹揚であるとはいえ衝立もなかったから、私は好奇の視線から多少なりとも逃れるべく、普段はネガ・フィルムの現像時に使用する黒テントを拡げた。しかしながら、叔母かシヨトウナシがひっきりなしにやってきては釜の下の方を掻き起こしてゆくので、私が独りになれる時間は長くなかった。この火起こしのお蔭で釜の湯は短時間に過熱されたから、私はいたたまれずに湯船から飛び出し、入浴が終わるのを待ち構えていたアイヌたちを大いに驚かせ、かつ喜ばせることになった。次にプロニスワフの番となるが、彼はアイヌ語が達者だったから、適時に火を落とすようシヨトウナシへ告げることができた。

プロニスワフからのちに聞かされたことであるが、シヨトウナシは父親の申し出をわれらが断つたのを一夜だけのことで解した傍らで、「われらはここに長逗留する予定とも承知していて、われらとはいつも仲良くすることを願っていた！」と語ったそうだ。

われらはそれぞれに野帳を整え、撮影器具や人類学的計測機器を点検し、心機一転して仕事に着手した。

ノムラ宅で過ごす日々

雨天の日と夕刻はフオークロア、つまり伝説・信仰・昔話を採録し、昼間は住宅や聖地、原野や聖なる森を歴訪し、博

博物館標本を探して入手する。私はまた子供たちの助けを借りて、蝶と甲虫こうちゅうの標本採集にも従事し、10点ごとに1銭（2ポランド・グロシヤ）を与えていた。この提案は村の若者世代の全体に暫時の採集熱を掻き立てることになった。当初は中々信用されなかったものの、向こう見ずな挑戦者数名が数銭ずつせしめるや、少年のみならず少女らでさえも「魔法の」小瓶を求めて続々とやってきた。昆虫は必ず「砂糖のような粉末」がコルク栓で密封された、この不思議な小瓶に収めよとの指導に接して、私の秘匿するものが様々に取沙汰された。粉末は「青酸カリ」だったから、この小瓶を子供らへ渡す気にはなれなかった。彼らがひよつとして「舶来の砂糖」に幻惑され、それを味見せぬとも限らないからだ。青酸カリをベインジンに代えてみたところ、私の最大の関心事である甲虫目の昆虫は湿気を吸って形状を崩してしまったから、悲惨な結果に終わる。

われらの物品購入は父親や母親たちの間に、なくもがなの大騒動を招来した。何人かの果報者が、古いがらくたの対価として途方もない大金を手にとると、それを知った人々は我も我もとまっさらな即製品を持ち込み、未使用であることを楯に倍額で引き取るよう求めだして、数々の悲喜劇さえ出来したからだ。その存在を知りつつも入手が最も難しかったのは、信仰にかかわる品々である。その実見をこの上なく熱望した数点のイナウは、われらの視線の埒外にあった。撮影すら許されない。われらに向けられた不信は一向に減少せず、却って増大するかに見えた。

ショトウナシはブロニシへの当てつけとして、一人のアイヌ青年を連れて来た。この男は主室には全く足を踏み入れず、

誰とも挨拶を交わさず、われらにも名乗らなかったが、玄室の蔭の娘の寢床に腰を下ろして、キラキラ輝く両の眼でわれらをじつと見守りつづけた。

——彼には目を向けないでくれ、後生だからシパンラムには彼のことを何も聞かないでくれ、娘の求婚者なのだから……。両親は、彼の姿が全く見えない素振りをせねばならんのだ……。

その青年は夕食にすら呼ばれず、娘が密かに運んで来たものを食べたが、夜更けに姿を消し、彼とともにシトウナシも消えて、彼女が帰宅したのは夜明け寸前だった。父親は彼女に一言も話しかけなかったが、シパンラム夫人の方は、あの青年は一体何者だねという、私の不用意な問いに対してこう答えた。

——どんな青年だつて？…青年なんて一人もいなかったわ、私は見てないよ。

シトウナシは、われらが在宅する間はいつも外出して、野菜畑で一心不乱に除草したり馬鈴薯を掘りつづけ、女主人はずっと不機嫌で、当たり散らしていた。

——彼女は一体どうしたのかな——と、タロンチに水を向けると、日本製バンドに吊るした時計の銀鎖を弄びながら外交的沈黙を守ったが、彼は遂に口を開いた。

——彼女はあなた方へ売却した品の値段が余りにも安すぎたのが不満で、悩んだのです……。もし彼女の娘と寝ておられたら彼女の親戚だったでしょうから、それはそれで話はまた別でしたが、今はそう……とても悩ましいわ

けです！

われらは土地の人たちと良好な関係を維持すべく極力腐心してきたから、タロンチの説明は途方もなく滑稽に思えた。

——それはどうか——とブロニスワフは反駁する——このような手厚いもてなしは、アイヌの間で今一つ尋常ではないものだ。こんなこと、サハリンでは皆無だ。ここの戒律は正直のところ、はるかに緩やかだから、シバンラム夫妻はわれらの拒絶をさほど深刻ではないにせよ、自分らに対するある種の軽蔑の印と受け取ったやも知れぬ……。だが、ほかに何かわけがある筈だ。一走りして、ショトウナシから直に話を聞くのが一番だ！

ブロニスワフは娘への贈物として小鋏を手取るや、姿を消した。ほどなくして野菜畑からは朗らかな笑声と会話が聞こえたが、この会話にはタロンチも女主人も均しく興味津々で耳を澄ましていた。

——当たり前だが、そんなことじゃなかったよ——と、ブロニスワフは笑いながら説明する——ショトウナシとはもはや仲直り、小鋏も御の字で受け取ってくれたよ……。だが事態は些かより深刻の様子だ。漁獲がパタリと途絶えたのだ。ここ数日来、村では誰も魚一尾獲れていないとのこと……。われらのために歓迎の宴を催したいのに肝心の魚がないのだ……。魚が消えた理由はひよつとすると……、われらの当地滞在に対する神々の不満かも知れぬ……。和人らはその種の噂を流している……。今夕、もし空舟で戻るようならば海辺で大祈禱を挙行し、新しい「ヌサ」を立てる計画だ……。エカシ・テパ (Ekaš-tepa, [tepa] は「禱」の意、シバンラムの年長親族の綽名) はすでに隣

村の敷生（*Shi-Kiu*）へ使者を送って、祈禱会を催すべき日取りと、その際にどのようなイナウを立てるべきか？をめぐって、サムクス（*Samukus*）長老へ助言を求めさせたそうだ。サムクスの言辞は常に有効適切で、彼は「タマツトコト（*amatoko*）」（賢者）と見做されている。返事はまだない……。皆は興奮しているそうだ。

われらとても、その一件の解決はある程度までわが調査団の命運にもかかわるだけに、やはり興奮し、また関心も抱いた。タロンチでさえも不安を隠さず、外で耳にしたニュースを刻々と伝えてくれる。

—— 彼らは、いつ「ヌサ」を立てるべきかをめぐって口論を重ねてますが、それは酒の資金がないためでして、酒がなければ「ヌサ」は立てられません！

—— ノムラは今日中にでも「トルコーツア（*tolkooca*）」（送別料理）をわれらに出すべきだと主張する者もいますが、ネンタシクは不同意でして、あなた方からは困ったときに余りにもたくさん助けてもらったから……。と言っています。

—— サムクスからは久しく返事がありません……。拙いことにならねばよいが……。皆は口角に泡を飛ばしています……。

ノムラが再度の不首尾に関する知らせを嘆きつつ漁から戻ると、私はプロニシへ、以下のことをノムラに伝えるよう頼んだ。即ち、われらはやはり友人として、是非とも儀式に参加したいが、魚を捕まえられるわけでも、またイナウが削れ

るわけでもないから、祈祷会に必要な量の酒を提供させては貰えぬかと。ノムラの気は直ちに晴れたものの、作法は彼に長考熟慮を命じた。しかるのちに、この件を長老たちと相談することをわれらに約束する。彼は姿を消して、夜更けに泥酔して帰宅した。

ネンタシクは肚を括って待ちつづけ、娘にも就寝を禁じていた。夫婦喧嘩が出来る。ノムラは細君に対して雄弁の長広舌を振るつた。自分の莫藎の上で顔を伏せて横たわる彼女は返答拒否を貫き、度重なる哀願にも一切耳を貸さず、夕食も出さず、自分の寢所へは向かわずに、娘と寢床をともにするべく玄室へ直行した。独り残されたノムラは、寢所を蔽う垂幕の中から頭を覗かせて、われらに嘆きのエールを送った。しかしながら、翌日には平和が回復された。

祭り前夜

ノムラは、われらの酒が受け入れられ、われらも儀式へ招待されたことを厳かに告げた。だが、それがいつ举行されるかは、サムクスの一声次第。しかし村では供饗の前に神々の機嫌を損ねるのを恐れて誰も出漁せず、加えて、直ちに執行せよとの命令はいつ下されとも限らぬからだ。儀式の執行は、舟が海上にある限り厳禁とされていた。

かくて祝祭の気運が漲る。「巧みと知識の人たち」は、「イナウ」の材料として用意された木片の炙りに着手する。われらはシヨトウナシの弟妹——居合わせたのは五人ほどだった——から、われらの隣人が「ウトウカニ (utukani)」と称する木『木』で「イナウ」を作るよう命ぜられたことを教わる。われらは今日中に各村戸長を訪ねるよう、主人から頼まれる

より前に、「イナウ製作の現場」諸作業の観察に赴くことを決めていたのだった。

——旦那方はまだ彼の許を訪ねておられぬが、彼はもう旦那方の所に来ましたね…。今日はここに大勢の人が集まります…。彼が誰にも腹を立てることのないよう取り計らう方がよろしいのではないですか……—と、主人はわれらに意味深長に告げた。

そこでわれらは燕尾服を着用して、和人の村へ向けて出発した。途中で暫時、あるイナウ作りの家に立ち寄る。彼は窓辺の板製寢床に腰を下ろして、火で炙って柔らかくした柳の棒から頗る薄い皮膜をナイフで削りあげていた。削掛けの束の先端には、ある種の卷毛の房のようなものが作り上げられる。

——これらの削掛けは、見るからにアイヌ自身を彷彿させるね！——と、私は己の印象をプロニスワフに披瀝する。

——まさにそうだな！。幾つかのサハリンの削掛けには顎鬚が見出されて、口や目や鼻まで彫り込んであるよ……と、ピウスツキは私の見立てに同調する。

——そしてまた、地上で暮らすアイヌと神々の仲を取りもつ仲介者でもある。

——皆がそう言うね！……。

——アイヌに人身供犠の伝説はないのかな？……。

—— 知らんな。聞いたことも訊ねたこともないぞ……。ひよっとして優しすぎるかもね！

—— とはいえ、この方面でも追究してみよう。ここでも蒙古の事例に類するものがないとも限らんかな……。蒙古では、かつて生きながら供犠に付された馬が、紙に描かれたその画像で代替されていたぞ……。

こんなお喋りを重ねるうちに、われらはいつの間にか各村戸長宅の前に来ていた。彼は、事務所に併設された小さくて頗る清潔な官舎で暮らしている。彼はわれらを事務所へ案内し、火鉢ヒバチ近くの畳に座らせて、強いて礼儀正しく、かつまた多弁であろうとも努める。しかし、彼の微笑みの裏には不安と苛立ちが透けて見える。十分に魅力的で若い細君は直ちに、かわいい茶碗に入れた苦いお茶を運んできて、漆塗りの脚付き小盆に載せたケーキも勧めた。「カク」「『各村戸長』は、突然、高圧的な声音でいきなり「書類」を要求した。われらは通常の外交旅券〔国外用旅券（パスポート）を指すのであろう〕以外、書類は一切所持せぬが、旅券一つあればどこでも十分だったと答え、加えて、あなたは札幌の総督〔北海道長官〕から、われらにかかわる訓令を受けておられる筈だと逆襲するや、自分は如何なる文書も受理しておらず、われらはそれゆえ即刻、警察署へ出頭せねばならぬと居丈高に捲し立てた。つまり、要するに逮捕されるというわけだ。

私は、彼の言うことに従うつもりは毛頭なく、しかも幾つかの日本の学術機関の庇護下にあるのだから、東京から明示的な命令が届かぬ限り、警察署には出頭しないと声明する。

すると彼は急に態度を軟化させて、今日は函館から札幌へ移動する軍部隊が村を行軍通過するが、外国人がそれを見る

ことは罷りならんのだ……と言いわけを述べだした。

われらはまさか警察署行きは望んでおらんだろうから、今日一日は外出を控え、路上には姿を一切見せぬよう……、さもないと面倒なことになるぞ……と彼は忠告する。軍隊にはまったく関心がない旨われらは明言した上で、総督「北海道長官」からの文書が届くまでの暫時、白老における學術目的の滞在を認める許可証を発行するよう要請した。彼は表情を和らげ、一枚の和紙 (wibuka) に筆を走らせて「これこれのポランド (Porando) 人は、白老村とその近辺でアイヌの生活に親しく接するべく滞在中である」と書いてくれた。かくて気に染まぬ訪問は、別れに際しての偽りの微笑みと、深々としたお辞儀という甘味料添加をもつて、遂に大団円を迎えた。

——貴殿らはその鼻で、なかんずく夜間には屋外を嗅ぎ廻ったりせぬよう……、これは貴殿らの安寧を慮る忠告である——と、これは敷居口に立つてわれらを見送る各村戸長の餞の辞だった。

路上で洋装の和人二人と出喰わすが、われらへ向けて鋭い威嚇の視線を投げかけた……。村でも異常な動きは察知できる。われらは、シパンラムが付添いとして派遣した「中の息子」にせつつかれて帰宅を急ぐ。少年に事の真相について訊ねるも語ってはもらえない。全般的興奮はわれらにも伝わってくるが、格別に憂慮したのはシパンラムである。われらがシパンラム宅に入るや否や、かなり立派な顔立ちで色黒の見知らぬ紳士が訪ねてきた。彼は黒っぽい質素な洋装で、腕には赤い腕章を巻いて札幌の新聞の通信員を名乗り、われらのことはバチェラー氏から聞いて訪ねて来たと告げる。立派な英語

を操る。われらの仕事の進展と、この先いかほど白老に留まり、その後どちらへ赴く意向であるかと訊ねた。彼は退出に際して「カク」「各村戸長」と同様に、街頭には出ぬように助言する。軍隊の遍在と人心の全般的動揺は、開戦の噂が流れるだけでも暴動を起しかねないからだという。

—— あなた方は、失礼ながら研究のために拙い時機を選ばれましたな——と薄笑いを浮かべて彼は論評する。

—— 誰にも予見できぬのではないか？…。

—— それはそうですが今日も明朝も！…、外出は避けた方が賢明でしょう。部隊では病人が続出し、兵士が4名も死にましたから！

会話が続く間、身なりから見て軍人と思しき別の和人が、敷居に座って聞き耳を立てていたが、促しても入室しないばかりか、返事すら返さない。和人たちの訪問はわれら全員に憂鬱な印象を与えた。シパンラムは、これら和人が去ったあとも長いこと陰鬱な面持ちで坐しつづけ、子供や女らは物蔭に身を隠していた。そこへ前触れもなく入室してきたのが、われらにとつては未知の、人品卑しからざるアイヌの二人連れである。彼らが貴賓席へ通されて、荘厳な挨拶の儀式が終わったあとで、二人はサムクスの使者であると、われらにも告げられる。返事の遅れはやはり部隊の行軍が原因で、軍部隊が通過するまでは道路の通行が誰にも許可されなかったそうだ。サムクスは、明日執り行われる儀式に向けて到着し、それには異国の方々も参加してよろしいとのことだった。

この決定は全員に陽気な気分を取り戻させた。シバンラムは私から1円を借りると、神々と客人らへ敬意を表し、朗報を祝うべく、直ちに息子を走らせ酒を求めさせた。そして北の壁際に置かれた大型の宝箱から取り出されて、炉の東隅に据えられた黒漆塗りの見事な古式椀にはヴォトカが並々と注がれて、その前には5個の内壁に朱と金の模様が施された黒漆塗りの酒盃「一坏（トウキ）」が並べられた。そこにはまた、内底に金の熊が描出された周知の酒盃もしつかりと鎮座するが、これは主人専用の盃である。それぞれの酒盃の上には、美しく彫刻され着色された木製短剣の「髭の守護者」[捧酒匏、いわゆる髭匏] (ku-pasin [正しくはku-pasui]) が載せてある。豪華に装飾された榆樹皮繊維製長衣 (katun) 「厚司」を纏ってヴォトカのすぐ脇に坐す主人は、まず「神々の」酒盃にヴォトカを満々と注いで、自分の年長親族で当代村長でもあるエカシ・テパにそれを奉呈する。盃を受け取った村長は顎鬚を厳かに撫でつつ、当家専属の「イナウ」が林立する「東の窓」近くのコーナーへ顔を向けて、酒盃を山へ向けて持ち上げ、地下に向けて下ろしながら、ぶつぶつと祭文を唱えつづける…。

ノムラはその間、次の酒盃へ酒を注いで自分の兄へ渡すと、兄もまた同様に顎鬚を撫で祭文を呟きだして、「捧酒匏」の先を酒に浸し、その匏で炉の火と炉の枠や、灰の中に突き刺した様々な小「イナウ」へ酒を振り撒いたのち、恍惚状態で目を瞑って跪いた。主人は三番目の客人のためとして第3の酒盃に、そして第4のそれは自分用にそれぞれ注いだ…。今やすでに全員が祭文を唱え、視線を起こして山を崇め、ヴォトカを火の上に振りそいで、長くて見事な顎鬚を撫でたわけだ…。エカシ・テパはその後もずっと跪いたまま、両の眼で「イナウ」を凝視しつつ、片手では己の顎鬚を撫でつづけた…。

炉の火だけが光源である家を支配する荘厳な静寂しじまのなかでは、断続的に発せられる敬虔な呟きのみが耳を打ちつづけた…。暖かい夜空の星たちは、広く放たれた「東の窓」を覗き込み、遠くに響く上げ潮のざわめきは、敬虔な囁きや後悔の溜息と溶け合う…。われらは鉛筆と野帳で武装する外来者であるから、この興味深い舞台からは、たとえどんなに瑣末な事柄であろうとも決して見落とすことはなかった…。

何の前触れもなく突然、壁の外で足音がして、日本兵3名が「聖なる窓」「白老では「東の窓」に同じ、後出のように「神窓」ともいうに影を投じた。彼らは一斉にライフル銃を肩から降ろし、「戦闘準備」の構えで銃身を家に向けた…。敬虔なる呟きは止み、人々の動きも停止する。アイヌたちは魔法にかかったかのように凝り固まる。白状するが、私もやはり不愉快な連想が頭をよぎり、各村戸長の脅しと通信員の助言も想起された。兵士らはギラギラ輝く細い目を、誰よりもまずはわれらに向けた…。日本兵らが一斉に弾薬囊へ手を伸ばしたときは不快感がいや増した…。われらは引き続きノートに記帳する振りを続けたが、恐怖の色を寸毫も見せなかったアイヌらの剛毅には、やはり私も驚きを禁じえなかった。突如として愉快そうな笑声が窓辺に拡がり、弾薬囊から取り出された紙巻きタバコが、馬鹿笑いで開いた兵士たちの大口へ運ばれるまでには、長い時間を要した。

—— どうだ、怖かったかね！—— 兵士の一人が日本語で訊ねる—— 俺たちはお前らが何をしておるか、見に来たのだ！…。

—— 御覧の通り、祈っておりますだ—— エカシ・テパは答える。

—— そうだ、そうだろうて！…。 お前らは神々へ供犠すると称してヴォトカを飲んでおるのだな…。

—— ひよっとして旦那方もうです、ちよっと嗜まれませんか！？…。

—— いや、俺たちは禁止されておる…。 服務中だ…。

兵士らは紙巻きタバコを吸い終えると、やって来たときと同様に忽然と姿を消した。そして再び、煌々と輝く星々は天空の高みから、広く開け放たれた「聖なる窓」を通してわれらを覗き込みつづけ、暖かいそよ風は海の方から、高まる潮騒を運びながら吹き寄せていた。今に至るまで、あの「聖なる窓」における日本兵らの意表を突くような象徴的顕現…が私に与えた不思議な印象は、依然として記憶に新しく、それに思いを馳せることもしばしばの昨今である。

この一件はアイヌたちの間にも負けず劣らず強烈な印象を残した。

威儀を正した髭面の男らは黒と白の正装に身に固めたまま、酒で満たされた供犠用酒盃を目前にしながらも長いこと不動の姿勢で坐しつづけた。そして、シパンラムの息子が入口に懸る蓆の下から頭を出して「もういないよ」と囁くや否や、威風堂々たる男たちは無言で一斉に飲物へ手を伸ばし、だらりと垂れ下がるアザラシのような口髭を木彫の「捧酒篋」で慎重に持ち上げつつ、酒盃を一気におおった。

空になった酒盃に、シパンラムは再び酒を注いだ。

——それ見たことか、奴らはただ嚇したかっただけさ！——と、最初に声を上げたのはエカシ・テパである。

——それならしくじったな！……と、若い客の一人が笑い出す。

——虐める相手はどうしていつもわしらアイヌなんだ。通りすがりの者が余所様の家を覗くとは、しかも親族ですらそこを通して覗くことは禁じられている「東の窓」から覗くなんてもつての外だ！……と、シパンラムの兄は憤慨する。

——今や罪を購うのに、どれほどの酒を呑み干せばよいのやら！……と、主人は溜息を吐いた。

酒盃に注ぎ、それを呑み干すことの反復は、ますます円滑に進行する。祭文はますます短くなり、人の動きはますます激しさを増してゆく。主人は自分の宝箱を開けて、削掛けで編み上げた礼冠「サバウンペ」ではあるが、経年と煙のため漆黒に染まった代物をそこから取り出す。彼がそれを己の頭に仰々しく被せるや、他の人たちも着衣の中から自分の礼冠を引っ張り出すか、あるいはシパンラムから予備の礼冠を拝借する。冠の先に鎮座するのはギンギラに輝くお守り——熊の爪、鷲の嘴、木・骨・角を彫り上げた狐や狼の頭、魚や亀の像——である。会話はさらに声高となる。シパンラムが囁れ声で歌いだした。プロニスワフはすべてをアイヌ語のまま速記する。タロンチは私のためにロシア語へ翻訳する。ノムラはその歌の中で大阪から戻るときの悲惨な旅や、われらとの出会いを最大限の情熱を傾けて叙述する。その場の全員がわれらの周りに蟬集して口々に感謝を述べ、かの忌わしい酒をわれらの盃にも注いでくれるから、われらはその都度飲み干さね

ばならなかった。われらには一つだけ、どうしても実行不可能なものがあつた。それは木彫の「捧酒篋」で威厳を保って口髭を持ち上げることだったが、結局は、寛大にも免除してもらえた。

—— わしに1円くださいな。見ての通り、和人たちはべらぼうなことをしてくれましたよ…。神々はひどくお怒りです!!…… ノムラは私の脇までいざり寄つて囁いた。

暫く経つと、シパンラムの息子が空瓶を小脇に抱えて和人村へ駆けつけた。一方、屋内では喧騒が昂じて、アイヌたちは歌いかつ叫び、競いあつて和人らを罵倒する…。

—— わしらが奴隷身分に落とされてから、どのぐらい経つかな?…。

—— わしらが生業なりわいの場を召し上げといて、アイヌは週に三日、「ダイミヨサ (dajinjosa)」「大名様」のため労役に服すか、賠償金を支払わねばならなかった!…。

—— 海や森からの授かり物の半分は、和人の領主 (ban) へ差し出すべし!…。

—— わしらが理由わけもなく鞭打たれ、二本の柱の間に磔はりつけられ、絞首台に髪の毛で吊下げられて以来、どれほどの時が流れたか!…。

—— あるいは今のことだが、わしらの土地はすべて略奪されて、度重なる請願・陳情の末に、破廉恥にもちつぽけな地所が分与されたが、それはもう住居と幾条かの馬鈴薯畑でほぼ満杯だ。

——その地所に課される税金の高いこと！海岸の借地料もまた然り！…。「アヨ（Ajo）！」。

——奴らは無毛豚のように体毛がないことを、威張り散らしているのだ！…。

——「フット、フット（Hut! Hut）！」（恥を知れ）——と、女たちが叫ぶ。

——「アイ・オイナ（Ai-oina）」（至高の精霊）がわしらに、人が必要とする所にはすべて毛を与えたのが、奴らには妬ましいのよ…。とどのつまり奴らは毛深い女が好きなのだ、だからこそ、わしらの娘っ子を追い回すのさ…。

——「イセンラムテ（Isenante）！」（まさか）——女たちは笑う。

——奴らの顔に毛が3本生えると、それをととても大事に育てるそう。海の彼方から来られた紳士方（^{バン}）のようになりたいのだ！「アイヌ・ボタ（Ainu bota）！」（そうだ、わしらはアイヌだ。わしらがそのことに思い悩むことはない、旦那方同様すでに幾世紀もそうなのだから…）——矛先がわれらの方へ向いてきた。

再びわれらの盃が満たされて、再度、顎鬚を莊嚴に撫ぜ、忌わしい酒を飲まねばならなかった。

祝宴が果たしてどのように終わるのかは、頂点に達した興奮が女や子供たちにまでも拡がりだしたから、私にはまったく見当もつかなかった。主催者たちは彼女らにも、飲み残された酒盃が背後からそと渡される「パチエス（pacies）」（^{正しくは pacies}——本書所収の「樺太アイヌの熊祭祀にて」524, 533頁を参照されたい）と称する飲物を気前よく振舞っていたからだ。主人が跪いたまま私の方へ密かににじり寄ってくるのを見て、私は3度目の1円の貸付をほとんど覚悟したそのとき、戸口の枠

を叩く音が聞こえた。席を上げて身を乗り出したネンタシクは、不安に駆られて夫を呼ぶ。慌てて庭へ飛び出した夫は、間もなく当惑の態で、脱いだ礼冠を手に戻ってきて、小声で囁いた。

——警察だ……。散会を命じてる……。

「威風堂々たる」男たちは暫く押し黙る。

——気晴らしをすることさえ許されんのか——と、サムクスの使者は呟く。

彼らは命令を受け入れて、飲み残したヴォトカとの別れにあからさまな未練を残しつつも退出する。敷生からの客人たちは、エカシ・テバが自宅に招待した。

競技会

翌日は早朝より、われらが家の前面で地元小学校の生徒らが愛国的示威集会を催した。彼らは木銃を肩に担いで整然と行進し、幾種もの軍事演習や武器操作実習も繰り広げる。のべつ幕なしに大声を張り上げて、日本の国歌を歌い続ける。生徒の半分はアイヌで、もう半分が和人だったが、集会の指揮を執ったのは——「賢人気取りで大の和風かぶれ」サレット (Sarette) の十四才の息子——サコチ (Sakochi) である。彼らの演習をわれらが頗る静粛に見学したことを確かめると、少年たちは散会して、一部は帰宅したが一部は海岸へ赴いた。そこでは「ヌサ」の建立に先立って、スポーツ競技会が開かれることになっているからだ。われらは後者のあとを追った。

競技の種目は徒競走・跳躍・槍投げだ。参加者は専ら若者たちだから、まさに絵に描いたように見事な光景が繰り広げられる。競技場は、真珠色の波が常に打ち寄せる黄色の砂地に延びるよく踏み固められた平坦地、背景では晴れた瑠璃色の空が、太平洋の青い鏡面に寄り添っている。このように静かで暖かな晴天の日々が、この地の初秋には極めてしばしば訪れる。とりわけての見物^{みもの}は槍投げだ。そこで使用される長槍(ō)は、アイヌがイルカ・一角鯨・鮫・「太刀魚」といった大型魚を捕獲する際に使用するもの。標的は、投擲場所から30メートル離れた地点に置かれた老朽木の断片である。投擲場には禪一丁の全裸に近い青年たちが槍を抱えて順繰りに立ち、優美に体を後ろに反らせた弾みで抛り投げる。圧倒的に若い女や子供らからなる観衆は、「イシリ・クラウツチェ (Isziri-kurautcie) ー」「ホタラ (Chotara) ー」「イセン・ラマテ (Isen-rante) ー」「イラム・シット・ネル (Iram-sziten) ー」といった掛け声を発して、自らの称賛ないしは不満を表明する。近くの丘の上に腰を下ろす髭面の年長者らは、競技の成り行きを冷静かつ熱心に見守る。私の頭を古代ギリシャの浅浮雕の記憶がよぎった。

和人らの発する銃声で中断を余儀なくされた村では語られる昨日の祝宴が、われらに対するアイヌたちの友情を頗る高めたお蔭で、私は彼らの競技の様子をカメラに収めるだけでなく、映画撮影機による記録さえも可能になった。私の撮影機は旧式で本体もトネリコ材の大箱だったから、三脚に取り付けるだけでもかなりの時間を要したにもかかわらず、われらの新しい友人たちは辛抱強く待ってくれて、自らの競技のすべてをわざわざやり直すことにも応じてくれた。

賢人サレツテ

村はすでにお祭り気分一色で、必要な「イナウ」作りに携わる人たち以外は誰も働かない。われらはこの機会を捉えて、白老川「原文では「ベツ川」」の川向こうにある数軒の家をシパンラムの案内で訪ねた。われらはなканずく、先述の和風文化にかぶれた「賢人」サレツテの家を訪ねる。住宅には和風の床が張られ、部屋も襖や障子や窓で仕切られていて、彼は確かに半和風生活を享受している。まさに窓辺に坐して日本語の書物を読んでいるのだ。屋内の一隅に据えられた仏壇がわれらの目を惹いた。だがそれは、部屋の四隅や天井の梁に、はたまた「仏壇」の中ですら新旧の「イナウ」が賑やかに懸けられるのを決して妨げないのだ。「賢人」はまた、その日に予定される「ヌサ」建立式への出席も明言する。われらが入室するや、彼は素通しガラス入りの眼鏡を鼻にかけた。彼は視力抜群で、しかも——群来ぐきの到来を逸早く伝える——「物見」の役さえ務めるほどだから、この際的眼鏡着用は学識（uczonosé）のひけらかしにほかならぬ。しかるに「学識」は別にして、彼は神々や人々の不興を買うことは望まず、細君は和人である。家では子供たちと日本語で会話する。彼の長男はわれらを胡散臭そうに眺めて、何も受け取るうとせず、話そうとしなかった。

ヌサの建立

夕刻前に「ヌサ」の建立式が間もなく始まるとの知らせが届いた。われらは海岸へ赴いたが、そこへはすべての村人が三々五々集結中だった。海側は地肌を曝さんざしすも、山査子さんざし「浜茄子であろう」・薊あざみ・野草の密生する陸側の砂丘では、数人の「イ

ナウの匠^{たくみ}」が、丘の天辺に列状に立てられた幾本もの長い小柱に「イナウ」を結縛する作業を進めている。競技の方は、素っ裸ないしほとんど全裸の子供たちが幾つかのグループに分かれて、小弓による弓射や投げ矢競技に熱中し、また波打ち際の一线に丸太を敷いて並べた舟の列の周りでは、鬼ごっこにも打ち興じていた。

夜の帳が降りてゆく。暮れなずむ山々の上に懸る黒雲の大群は、アイヌの豊かな蓬髪を髣髴させる。幾つかの火山の火山口の上だけは、あたかも大地の熱い息吹がそこから雲を逐い払ったかのように、かすかな光を放つ星々で空がしらずむ。西方の高い岬の彼方では夕焼けが乱舞する金粉のように薄れていくが、山々の尾根や黒い森の輪郭、そしてアイヌ家屋の葦葺屋根の切妻の上には、かすかな銅^{あかがね}色の光線を注ぎかける。

村から延びる小径では、黒と白の図柄で装飾された長衣を纏う長老たちが白い「イナウ」の束や——腕・酒盃・桶といった——儀礼用漆器を抱えて悠然と歩いているが、各自が運ぶのは己の所蔵品から精選された逸品である。

海は長い波を転がしながら単調な潮騒を奏でる。沖を走る見知らぬ孤舟は波間に消え、かつ波頭に現れては、岸へ向けて舟足を速め、陸^{おか}では汽車が、谷間の奥に虚ろな音を単調に響かせて通り過ぎる。

遂に各家の主人が全員顔を揃えるや、丘の近くに円座を組んで、「イナウ」を配置する順序をめぐって相談が始まる。誰しも言い出しつぱにはなりたがるから、神々や人々の誰一人として怒らせたり、傷つけたりせぬためには、よくよく相談を尽くすことが重要だ。議論で仲裁役を買って出たのは、背中に赤と白の図柄を切り伏せた黒っぽいキモノを纏う、まだ

若くて元気潑刺のアイヌである。われらとは初対面だったから、彼は近づいてきて、名前は名乗らずに「撫鬚と掌のすり合わせ」でわれらと挨拶を交わした。彼はやや勿体ぶった態度で、魚が不足したから神々に支援を求めるべく人々は決議したのだ、アイヌの間ではこれが太古から受け継がれた習わしであって、このあとは酒を飲むであろうとわれらに説明し、さらに、われらが儀式に参加してくれるのは非常に嬉しいとも付言した。若者らはその間、丘の海側に半円状に立てられた「イナウ」の列に沿って莫塵を並べてゆく。このように波の届かぬ高みにあつて、部分的には草も繁茂する丘は、ありとあらゆる儀式の場として頗る重用されるため、特別に「マサラ (masara)」と呼ばれている。

—— まずは年長者らが祭文を唱え、若い連中はその次だ！……と、われらに説明がある。

顎鬚を蓄えた男3名が「ヌサ」の脇に坐して、酒で満杯の大きな「シントコ (shintoko)」(漆塗りの桶「行器」)に対面している。その一人が朗々と神々や魚や人間たちをめぐって、延々と続く荘嚴な祭文を唱える。一人の若い「酌役 (podczasy)」が、3長老の前に据えられた4個の酒盃——第四の酒盃は神々へ捧げられる——にヴォトカを注いで、各盃の上に美麗な「捧酒籠」を一つずつ載せてゆく。酒盃の前に跪く4人の長老が天や海を仰ぎつつ祈り始める。怒り猛る熊が発する唸りと思わせる祈りには、折に触れて大絶叫が挟まれる。さまざまな声は混じり合つて、嵐のような「レチタティーボ」(叙唱)となる……。あちこちの家々からは今なお酒が大量に運び出されている。われらが奉納した酒なぞ、ほんの僅かな部分を占めるに過ぎない。運び込まれた酒は、「酌役」がすべてを共通の「シントコ」に空けると、「汲み役 (zerpac)」が「そこから

柄杓で掬っては」敬虔に飲み干された空の「酒盃」へ注ぎ分けてゆく。「イナウ」にも折に触れてヴオトカが振り撒かれる。最初の3長老の脇には新しい4人の長老が坐して、顎鬚を撫で、片腕を突き出しながら…、再び長いこと祈りつづける。彼らは立ち上がるや酒盃を天に向けて高く掲げる…。腰を下ろす。そして再び飲み、祈りを唱えながら、渦巻く削掛けが冠部を形づくる「イナウ」の天辺、しばしば口が描かれるその中央部、そして「脚」の始まる下部にも酒を振り掛ける。彼らはほんのお印に振り撒くだけで、その大部分は己が飲み干す。若者らは自分の番が回ってくるのをじりじりと待ちつづけ、違反行為のないように一部始終をじつと凝視する。わが主人は「重い神々」の分として、われらの奉納した酒を入れた桶はわざと別置している。これらの神々には、彼がエカシ・テパとともに祈りを捧げることになっているからだ。

儀式は深夜に、女や子供たちも含めた全員にヴオトカが大盤振舞いされたあと、無礼講の乱痴気騒ぎをもって幕を閉じた。海上に天高くかかる月はアナクレオン「紀元前六世紀ギリシャの抒情詩人の時代と同じ銀の光で地表を照らしていたが、そこには、家路に就く酩酊した長老たち、大声を上げて彼らを先導するしどけない姿の女たち、陽気な裸の若者たちが華やかに繰り広げる行列があった。

効験あらたか

翌日、われらはある種の不安とともに、祈祷の効験や如何にと待ちつづけた。われらと不安を共にする女主人は、太陽が西に傾くにつれてますます頻繁に家の前に出ては、小手をかざして、青味の募る遠い海を見守ることを繰り返す。する

と突然、一人の少年が注進に駆けつけた。

——舟たちが戻ってくるよ……。

シヨトウナシが先導する子供らの全集団と、その後を追うシパンラム夫人が海へ向かって駆けだした。われらもそこへ向けてひた走る。前日の「ヌサ」がしらずむ砂丘には村人の半数が佇んで、夕焼けの深紅に染まってきらきらと波立つ太平洋の海原に見入っている。われらの目では何も見えなかったが、地元の人たちは漁師の御帰還だ、「高潮」が始まったからもう間もなくだと断言する。逆巻く寄せ波は、実際にも巨大な渦をますます高く押し上げる。海上では水平線の彼方から不気味な紫色の線がこちらへ流れてくるが、われらは突如として、この線上に一つの黒点を、次いで第二、第三の黒点も認め、ついには全速で接近中の漁船編隊の全容も確認する。ほどなく、舟端で拍子を合わせて水を打つ櫂もすでに識別できる。逆巻く大波は同編隊を時に呑みこみ、時に天高く押し上げる。すでに指呼の間となるや、人の姿やその顔までも判別可能となるが、海鳴りがあらゆる音をかき消してしまう。高潮は山なす水塊を数十メートルの高みにまで持ち上げ、落下させる段になると、滝のような破壊力でそれを海岸に叩きつける。彼らは果たして無事に接岸できるのだろうか、と私は危惧を表明した。

——接岸できますとも！……と、タロンチは一笑する。

漁船編隊は斜めに縦隊列を組んだ。先頭の舟とわれらの間は僅かに波一つ。岸に集まった人たちは幾つかの小グループ

に分かれ、岸边に沿って散開する。山のような大水塊が先頭の舟を捉えると、天辺の渦をがぶり巻き込んで、舟をわれらの方へ押しやる。漁師たちは蜻蛉が翅でそうするように軽々と櫂を操って、舟を後退させながら泡立つ大波の背後に押し止めたが、巨大な渦は舟の僅か数メートル先にまで迫る。私は漁師らの技量と沈着さに驚きを禁じえなかった。

大波がずしんと岸に落下して、己の膨らんだ舳から、ほとんどわれらの足元へ舟を投げ出し、砂の上にさつと拡がる。漁師たちは直ちに舟から飛び降り、舳と舳を抱えて陸の方へ曳いてゆく。われらのグループから少年たちが応援に駆けつけ、舟の舳に打ちこんである環頭釘を長いロープで近くの巻上げ機にしつかり結縛する。巻上げ機には即刻、長老や若者たちが飛びつき、手分けしてそのシャフトを押し始める。「ギリシャ神話の」サテュロス「ディオニュソス神の従者、半人半獣の森の神」さながらに毛むくじやらかな長老の脇で押すのは、だらりと垂れ下がる乳房が常にシャフトの上で揺れつづける、背に子を負った半裸の女であるが、その後ろでは、青年の青銅像のように素っ裸の若者が踏ん張る。さらには——口の周りに髭の刺青、また両の腕にも青い絵の刺青を施した——腰の回りに布の帯を巻いただけの女、そして再び——口元・唇・両腕に同様な刺青を入れるも、しなびた顔に何本もの頭髮の房が垂れ下がる——仕事で日焼けした年配の女……が、懸命にシャフトを押しつづける。

皆はその筋骨逞しい脚を砂中深くまでめりこませながら、全身を託して押しつづけた……。まさに石器時代の勤労を偲ばせる情景だ……。その間、小さな坊主たちが舟底の下へ丸太を並べてゆくと、漁師らは両側から舟を引き上げる。次の大

波が押し寄せる前に舟はすでに薪材の上に鎮座し、安全に格納される。シパンラムは重々しい表情を崩さず、舟から獲物を下ろしながら幾つかの籠へ詰めていった。

大漁だ！ 小魚もさることながら、彼らは「太刀魚」2尾の捕獲にも成功したが頗る大きかったから、2艘の舟に収めるには洋上で解体分割せねばならなかった。子供らが獲物を家に運ぶ傍らで、シパンラムは幸せそうなネンタシクとともに、一年前に殺した狐の乾いた頭部を収める熊皮の袋を抱えて家路に就く。狐の頭は、漁へ赴く舟の艫に豊漁を祈念して必ず懸けられるのだ。

獲物は庭先から「神窓」を介して室内の主人へ手渡されるが、主人は窓近くにしました釣に一尾ずつ懸けてゆく。鍋に水を満たして、豪華な夕食の調理が始まる。その間には、漁に参加しなかったか、漁運に恵まれなかった隣人たちが次から次へと訪ねてきては、家族の規模や主人との関係の遠近に応じて魚肉の断片を入手してゆく。

—— これらすべてがあるのは、わしが「重い神々」に祈ることができたお蔭だ。

—— 旦那方を神々は愛しておられますぞ！——と、シパンラムは莊重に告げる。

最近の数日間に生起した出来事はわれらを土地の人たちに頗る近づけてくれた。われらの豪気、アイヌに対する友情や気前の良さ……をめぐる物語を、彼らは日毎に尾鰭をつけて語るわけだ。われらは至る所で、好意に溢れた微笑みで挨拶され、冗談半分のわれらの返答が熱狂的に復唱され、漆塗り酒盃、角製・骨製・木製の古式刀、年代物の高価なお守りなど

の家宝も進んで見せてくれる。それらに付された値段すらも割引いてくれた。

われらの名声は一元に広まってゆく。われらはそれに便乗する形で敷生 (Si-ki-in)、社台 (Sagai)、「ミチビキ (Michiki)」
 スン (Ksun)「オトウ・カンベト (Otu Kambei [オトカンベツ])」といった…隣村を訪ねる。案内してくれたのは、いつもノム
 ラ・シパンラムか彼の指名する身内の誰かだったが、「信頼措くあたわざる人」として彼の親戚などに紹介されたこともある…。したがって、われらの滞在は常に友情と信頼に取巻かれていた。とはいえ、このような状況でも各村戸長かその助
 手はわれらにべったり付きまとったのも事実で、それはそれでわれらの気分を害したものの、アイヌたちはたとえ一兩刻
 であれ、われらが監視を外れて仕事が進められるよう、何らかの方便で彼を回避する策をいつも見つけてくれた。彼らの
 口と心はかくて開かれてゆく。われらの野帳でも記載が、醗酵した麴のように増殖しつづける。プロニスワフ・ピウスツ
 キが謎々・歌・昔話・伝説を熱心に採録する傍らで、私はスケッチを試み、写真を撮影し、映画撮影機を回し、氏族・経
 済関係の研究にも携わって「親族名称」表を作成した…。

計測ならず……

頗る重要でありながら適切な条件が整わず実現しなかったのは、人類学的身体計測と被毛の研究だけである。それには
 独立した部屋が必須だった。裸身の開示に何らの羞恥も覚えぬようなアイヌらでさえ、他人の家で脱衣するのは野蛮な行
 為であり、また家長にとって甚だ不名誉なことだとも見做したからだ。そこで私はこれらの機器を抱えて、何らの成算も

なく家々を廻ることを余儀なくされた。すでにその気になっていた人が些細なことで気分を損ねて、どんなに金を積まれようとも、はたまたヴォトカを提案されても、頑として脱衣を拒むのだ。私が何度か試みたあとで、一件の拒否が電撃のように周囲へ波及して「拒否ブーム」に火を点けたから、計測は遂に諦めざるをえなくなる。わざわざ計測してくれと申し出ておきながら、その期に及んでドタキャンする者が続出したからだ。

結局、私も深追いはしなかった。この地方は習慣・信仰・言語もさることながら「人類学的」形質タイプという観点からも、強度に和人化されているからだ。和人の血が混入していないような家族は皆無で、和人の出自が誇りを以て公言される事例も少なくない。混交婚の夫婦も頗る多い。まださほど昔でもない幕藩体制の頃のアイヌの村々では、シベリアのどこかで行われていたのと全く同様に、来訪する和人の役人らに娘たちを一夜妻として提供する義務を負っていた、と伝説は語っている。

送別の宴

すべての与件は人種研究のよりよい成果を期して、海岸線からも古来の交易路からも外れた奥地の集落へ赴くよう命じていた。われらはまず沙流川^{サル}の河谷、アイヌの大集住地の一つであるピラトリ村^{ピラトリ}「現平取町」から着手することにした。

——そこからは、わしらの先祖の「森の領分」が始まる。だが沙流の衆はならず者ばかり、大抵は札幌で監獄に入っているぞ……と、エカシ・テパ村長は私に説諭する。

ネンタシク、イシュウチ、またその他多くの女たちまでが、われらには失望した…、きっと彼女らの娘の誰かと夫婦になつて末永く留まつてくれると思つていたのに、とあからさまに思ひの丈をぶちまけた。シパンラムは頭を掻きむしつて、もしどうしても言うのであれば、彼を引き止めることはできぬが、「はあそうですか」で済むわけがない、必ずや別れの宴を催さねばならぬと語る。そこでわれらにはたとえ僅かでも手作りの酒を用意したいから出立は数日延期するように、との申入れがあつた。このような大祭に供されるのが、和人から買い入れたアルコール飲料だけというのは、何としても様にならぬわけだ！

—— 神々はアイヌのこさえた酒の方が好きなのだ——と、シパンラムの兄はきつぱり断言する。

したがつて、出発の日を待つ間、われらは近在の村々を訪問しつづけた。漁場を訪ねて、魚網・倉庫・塩蔵加工場・乾燥小屋、そして高い柱の上に特設された見張り小屋も視察する。小屋に常時詰める見張りの当番は、鯨や鰯（iwas）の群来に目を光らせるが、これら漁獲の大半は農業用の優れた肥料を製造する原料となる。

避けることの叶わぬ出立の日が遂に到来した。その前夜、正午以降はもはや誰も出漁せず、全員がエカシ・テパの村一番の大家屋に参集する。

何ともはや凄まじい酒宴だつた！…。蝦夷島の南東岸「マニ」（イェツ）（実際は南西岸）一帯の住民の間では、これをめぐる伝説が今なお

語り継がれていることを請け合ってもよい。われらもヴォトカに大枚 25 円（50 ズウォティ）を投じたが、アイヌたちは海にも匹敵する量を持ち込んだ。絶え間なく到来しつづける女主人や主人たちはそれぞれに——凄まじい味ながら中に含まれるフーゼル油が飲む者を忽ち酩酊させる——白濁した米の「目醸酒（samogonka）」を満たした桶を抱えてやってくる。顎鬚を蓄えた男や主人たちは炬を囲む形で着座する。われらはむろん第一の環へ招じ入れられたが、すぐ外の環に屯す女や若者らの背後では、裸の餓鬼どもが嬉々として忙しく右往左往する。彼らへ向けて叱責の聲が飛ぶごとに、暫くは莊重と静肅が回復された。われわれは挙つて重々しく顎鬚を撫で、「近い神々と遠い神々」「軽い神々と重い神々」へ祈りを捧げ、家付きのすべてのイナウ、また炬内に立てた新しいイナウ列にも満遍なく酒を振り撒いた。第一の環の「長老たち」が削掛け製の礼冠を頭にかぶると、シパンラムは咳払いを 3 回繰返したあとで、われらに捧げる賛歌を再び莊重なバスの低音で歌い上げた。函館でのわれらとの出会いを語る段になると、遂に感極まつて、小鹿の目を思わせる彼の漆黒の目からは涙が迸る…。われらが「重い神々」へ献じた犠牲と、その結果として恵まれた「海上での恒常的豊漁」に話が及ぶと称賛の咳払いが満場に広がり、われらの出立が束の間であるよう、そして再び戻ってきた晩には彼らの許に永久に留まるよう懇請して、彼が賛歌を締め括るや、女たちはこれに手拍子で応え、男らは一斉に「アヨ・ロ・ロペ（ajo-ro-rope）！」と叫びだした。

さらにエカシ・テパも、またシパンラムの兄も、そしてまた何人かの長老も立ち上がって熱舌を振るつた…。それぞれ

の弁士が語り終わると、われわれは挙つて「パレセコロ (Paresetoro)！」とか「ホタラ (Chotara)！」(「どうかお元気で」、「万歳」と叫び、口髭を「捧酒篋」で厳かに持ち上げて盃を干した。この所作は、われらもすでにマスターしていた。演説はますます華麗に、ますます長大に、そしてますます熱を帯びてくる…。その際に好まれた話題は友情、同胞愛、賢者の優しさ、愚者の憎悪だった…。

ブロニスワフが答辞を述べる番が遂にやつてきた。彼もまた、やはり慣習に倣つて咳払いを3度繰返したのち、己の演説をアイヌ語で朗々と吟じだした。若者らの間でさえも笑声や悲鳴は聞かれなくなる。ブロニスワフはアイヌの善良さと客人歓待の習わし、彼らの剛毅と今日の惨状、また、南北の島々も含めたすべての島嶼にアイヌの民 (Gard) が遍在し、天の星に擬えられるほどの大人口を擁した頃の、彼らの往時の威勢と栄華…についても語った。

—— 君たちは数が少ないけれど、互いに助け合い愛し合うこと、そうすれば数の多い民に伍して、強力で幸福な民になれるだろう…。ホタラ・アイヌ (Chotara Ainu)！—— と、答辞は締め括られた。

深い沈黙がしばらく続いたあと、人々は思い思いに酒盃を空ける。立ち上がったエカシ・テパは、己の頭から外した礼冠をブロニシの頭にかぶせた。同じことをシパンラムは私に対して行つた。その後、エカシ・テパはわれらに向かつて、われらは彼らの兄弟であり、部族の一員に迎え入れられた…と告げた。

—— ブロニ・クル (Broni-kuru [アイヌ語で「ブロニシ君」ほどの意味か]) よ、わしらの承知するところ君はわしらのクラ

フトウ(Kratu「カラフト」)の同胞を、オロス(Oras「ロシア人」)たちから守ってくれとるそうだな!……エカシ・テパはプロニシへ顔を向ける——厚く御礼^{ごめい}仕る!……。

歓声と拍手と歌が一斉に沸き起こる。女たちはわれらの肩越しに大きな輪を作つて、しゃがんだり蹲ったりしながら「聖なる舞」を披露する。われわれは延々と飲みつづけ、折に触れては「呑み残された酒盃」(paczies「正しくは pakejs」)を、すぐ後ろや背後にいる女や若者らへも渡しつづけた。

隣り合わせの人たちが顎鬚を撫でながら互いに不朽不滅の友情を誓いあう中で、輪舞に加わった人々は一丸となつて、われらに同じ友情を誓約する……。感涙が止めどなく流下する傍らで、口髭を支える「捧酒篋(ochraniacz)」を伝つて酒が奔流のように迸る。談笑や歓声や悲鳴や歌は、踊りの回が改まることにますます盛大になつてゆく。遂には輪舞の列すら解体されて、各自は気の赴くままに、行き当たりばつたりの人を相手に飲みつづけた……。

遂にはエカシ・テパまでが飛び出して、女たちの輪の中で「熊踊り」を披露しだす始末。ほかの人たちも同じように踊りだしたから、部屋は気儘な跳躍の跋扈で大混乱をきたし、熊の唸りや咆哮が充満する中で……、踊り手はそのパートナーへ襲いかかり、唸り声で嚇し、爪を剥いて引掻く仕草を続ける……。私をパートナーに選んだのはエカシ・テパ、そしてプロニシのパートナーはシパンラムだった……。われわれは踊り疲れると中座して酒で喉^{のど}を潤す。だが興奮した女や娘っ子や若者らは寸刻たりとも休息しない。長老たちもまた、踊り狂う細君の姿に挑発されて、重い腰を上げつづけた。われわれ

は「鴉の舞」、今一つの「熊踊り」、そして淫猥な「鹿踊り」も舞った。何人かの長老はすでに困憊して床に倒れこみ、女らが介抱している。シパンラムは酒盃に鼻を突っ込んで啜り泣く…。独りエカシ・テパだけは矍鑠として、ありとあらゆるコーナーや神々を相手に踊りつづける…。若者たちは住居の裏手のどこかで遊んでいるらしく、野菜畑の方から彼らの歌声や笑い声、また藪の枝や野草を折る音も聞こえてくる…。

その場は極度の興奮状態にあつたから、私が写真撮影に焚くマグネシウム粉末の閃光も、格別な印象を与えることはなかった。

—— 伐らせてやれ！、焚かせてやれ！…。旦那方は何をしても構わんぞ…。わしらの身内だ…——と、家へ連れ帰ろうと努める細君や息子に抗いながら、長老らは吠える。

—— 罰として、もう一桶の「シントコ (shintoko)」を気張つて下さらなくちゃいけませんぞ…——と、シパンラムは私の手を掴んで口ごもる。

—— 明日よ、明日だってば！——細君は彼を宥めつづける——家に帰ろう、ほれ、皆の衆も家路に就いとられますよ！

—— 黙れ！…。お前は何様だ、碌でなしめ…。お前はヒラメ (samanbe) 四だ！精々のところ、男にまとわりつ

四 「働く能力もまたその意欲もなく、多情なだけの女」に向けられた蔑称「アイヌ語辞典によると、samanbe/samampe は「ヒラメ、カレイ類の

く分際に過ぎんぞ……！ わしはここを動かん……。酒サケを持ってこい——そのアイヌは、女の手を振り払いながら怒鳴り散らした。

とはいえ、嫁御らは己の旦那さまを、アルコール臭ふんぷんの小屋から優しく引きずり出してゆく。そこにとり残されたのは、人力による限りどうにも動かすことの叶わぬ者たちだけだった。

平取

鶴川から平取へ

翌日の正午、われらは「白老の駅頭で」コタン住民の半分の拍手に送られて、列車で早来はやきた（Hidari）駅へ向けて旅立った。もう半分の住民は払暁に、太平洋へ向けてすでに出漁していた。

早来はやきたでは小さな旅籠はたごに一泊する。われらはその日のうちに乗馬数頭と一人の道案内を雇い入れて、翌朝には森林を掻き分けつつ平取ヒラトリへ向かった。ポレーシエ地方かヴォルイニ「ヴォルヒニア」地方の山道を髣髴させる小径は原生の落葉樹林を縦走する。樫・楓ぶな・楓・榆・ハンノキの巨木、そしてやや湿潤な所では榛はしばみやトウヒの樹林が、ゴチック式大寺院におけるアーチ天井ながらに高所でそれぞれの梢を寄せ合っている。薦つたやその他の蔓性植物が随所で巨大な樹幹に巻きついては

いるものの、通行不可の藪を形成することは頗る稀だ。却って樹間距離はかなりあつて、もしわが国の梨や林檎の木の高
さまで成長する大羊歯・山査子・榛・水木・漆の木などが下生えの藪を造成しなければ、そこはかなり開けた空間である。
これらの美しい樹種の葉はすでに深紅の色調を帯びているから、さながら火焰のごとく、森の暗みのなかで燦然と輝く。
アイヌらは漆を有毒樹と見做すので、同樹の木陰に留まることは強いて避け、その近くでは決して就寝しない。道は空虚
そのものである。たった一度だけエゾシカの群れが、われらの馬どもの蹄の音に驚いて木立の間をさっと駆け抜けた。鉄
道線路からおよそ40キロ離れた所でわれらは村落に初めて遭遇するが、鵠川河畔のその小村は鬱蒼たる森で蔽われた幾つ
もの丘の真つ直中、とある谷間に立地するらしかった。

その村で暮らすのはプロテスタント派のキリスト教に帰依したアイヌたちである。宗徒を代表する若い女は日本語の読
書きができて、僅かながら英語さえも解する。彼女はわれらをあたかも旧知のように迎えてくれた。何でもミステル・バ
チエラーがわれらの到着を手紙で予告して、アイヌとの出会いに手を貸すように命じたとのこと。暫くは、この村で幾許
かの時を過ごすべきかどうか迷った。われらの研究にとつて、ここはすべてが余りにもキリスト教的であり過ぎるからだ。
だが平取まではまだ30キロほどの道程が残っていた。われらはこの村で一夜を過ごしたのち、翌日の昼下がりにはすでに
沙流川(saru)というアイヌ語は「草が繁茂する」という意味であるの岸辺に立った。実際、河岸には大牧草地が延々と連なり、
われらはここで初めて馬群や赤牛の群れを目にした。和人到来以前のことであるが、往時のアイヌは馬飼育に従事して、

馬の放牧者として著名でもあった。彼らはのちに零落し、在来の馬群は消滅していったが、日本政府は繁殖用の牝馬と種馬をオーストラリア「マ」正しくはハンガリーを含むオーストリア・ハンガリー帝国」と蒙古から導入している。

ペンリ村長

村は河谷を見下ろす丘の斜面に広がっている。当地の葦小屋は、海辺に立地する村々より大型で、より上質の木材が骨組に使用されるとはいえ、そのスタイルにはやはり和風様式の影響が明瞭に認められる。われらが投宿した村で唯一の旅籠は板張りの和風建築ながら、アイヌ式の葦葺き屋根で蔽われている。

到着直後、われらの前にまず姿を見せたのは村長を務めるペンリ「平村ペンリウク」長老である。この人物については、われらもいまだ函館にいる頃から聞き及んでいた。私がこの世に生を受けて以来、これほどまでに毛深い個人に出逢ったことはなく、コーカサスのアルメニア人の間で実見した名高い「毛むくじやら（wiochaz）」たちと雖も、彼の足元に遠く及ばない。その顎鬚たるや、まさに目の直下から始まる。額には襤褸布で結んだ頭髮の束が幾筋も垂れ下がり、耳からもまた鼻腔からも剛毛が叢生し、巨大な鼻の先には数本の孤毛も生えている。睫毛はほとんど眉毛と分かちがたく、眉毛は大型の擦り切れた口髭といった観を呈する。腕部と脚部は獣毛で蔽われ、前開きの榆樹皮製長衣の下からは、赤と灰色の入り混じる熊の縋れ毛が顔を覗かせている。私は大いに満足したが、ペンリの方は、なかならずわれらがアイヌ語を解することを知って、余り幸せそうではなかった。

——かように値の張る通訳を、なしてお使いなさるか！……と、彼は渦巻く縛れ毛の中に隠れた両の眼をぎらつかせて詰問する——御足の浪費ですぞ…。わしならば何であれ、完璧な話をして差し上げたに！…。わしはあらゆることを知つとるし、ここでは最年長じゃからな…。徳川の將軍(shoguna)のことも、函館の榎本(Inamoto)「武揚」の叛乱も、そして榎本より年上だつてこともよく覚えとるぞ…。わしの爺さまは義経(Yocine)（十二世紀のヨシツネ）公五とも昵懇で、公から頂いた形見の品、とても高価なお宝を持つてござした！ミステル・バチエラクラフトも旧知だし、ミステル・ランドールも知つておるぞ…。東京にも樺太クラフトにも行つたことがある…。ここを訪ねる客は誰しも、わしの所に泊まられるから、旦那方どうぞお泊りなさいな！…。

それについては、改めて訪ねたときに話し合うことを約束する。われらの受入れを然るべく整えるとして、1円の前借が申し入れられた。老人の機嫌を損ねることは望まなかつたものの、われらは直ちに、人類学作業室と写真現像用暗室を確保するべく一戸建て住宅の借用を決断する。これまでは暗室に黒と赤の布地を二重に張つた小テントを使用してきたものの、何とも使い勝手が悪かつたのだ。われらの道案内は白老の一族に属していたのでペンリの怒りを意に介さなかつた。したがつて彼の協力で、一夏を通して空き家状態の一軒屋が造作なく見付けられた。家主は和人漁業者に雇われて海辺で

五
ピラトリ（平取）には、和人たちが彼らの民族的英雄・源義経の荣誉を讃えて建造した「義経」神社がある。ペンリは自らを神社の番人、はたまたその神官とすら見做している。

鯨漁に従事していたからだ。われらは家主の親族へ、彼の言い値で家賃を支払い、数枚の敷物と僅かな必須食器を購入して、頗る順調に入居を果たした。魚や獣肉はアイヌたちから十二分に得られたし、米・小麦粉・乾パン・砂糖・茶葉は持参してきたので、われらの支出は大幅に削減された。旅籠では、白老と同様に頗る高額な食費が請求された。ペンリ宅に止宿したら、われらは皮まで剥ぎ取られるのではないかと危惧したわけだ。ペンリからは僅かな小物を買いつけるとともに、もし身体計測と写真撮影に同意するならば「重い神々に対する充分な祈り」を約束すると告げて、彼を宥めることに努めた。彼は翌朝、一張羅の黒・赤・白の文様入り榆樹皮製キモノを羽織って現われた。われらが脱衣を求めだすと仰天する。彼は長いこと躊躇するも、「重い神々に対する祈り」を今一度行うとの条件で遂に譲歩する。さらなる交渉では、身体計測への同意もこれに含まれることを認めさせた。「計測」作業の終了後、彼は重い溜息を吐いて、われらがこれを行う所以を問うた。彼には、アイヌは果たして「シシヤム (Sisiam)」(和人)か、それとも「フレスシヤム (Furesisiam)」(赤い和人、即ちヨーロッパ人)なのかを知りたいからだと説明した。

——「アイヌ・ボタ (Ainu bota) ！」(そうなのか……)。なるほど、もしわしらがあんたら「の側」だったら、旦那方はこの土地を召し上げるつもりじゃな……と叫んだ。

その考えを彼の頭から叩き出そうと試みるも徒労だった。彼はわれらを信用しておらず、次のように約束して口を噤んだ。即ち、彼は和人が嫌いだから、和人には何も喋らぬが、樺太^{クラフト}に行ったときはロシア人がとても好きになった……。だが

沈黙を守るのはとても辛いもの！。それは人の腸はわたを止めどなくかき回すから、「重い神々」に対する祈りはしばしば唱えねばならぬわけだ…と。

身体計測と写真撮影に同意する人たちを、われらの許へ差し向けるという条件で、われらは彼の祈祷への支援を断らなかつた。

—— それに対して、いくらいただけるか？…。

—— 計測された者に銀貨1円、そしてあなたには10銭（20グロシヤ）を進呈しよう。

—— 女どももやはり求めておられるか。

—— 勿論、女たちも必要だ！…。

—— 早速にわしの女房を遣わそう！ 齢よわいを重ね過ぎておるかのう？…。女房は老けて見えるが、わしより3倍も若いのだぞ！…。

そしてわれらに対し、自分にもかつては細君が一度に3人も4人もいたが、今は一人で用が足りていることなど、彼は長々と話し込んだ。この日は、ペンリの細君のほかに彼の姪っ子ヨンカ（Jonka）の夫も計測し、翌日には妙齡の美女であるヨンカ本人もやってきた。

ペンリの精力的な宣伝のお蔭で計測の志願者には事欠かなかったが、女たちは脱衣を潔しとせぬから、結果的にやや遜

色があった。とはいえ、彼女らは在宅時や作業中ならば、また川岸で榆や春榆の繊維を機織り用に洗淨・漂白する際でも、われらがその下帯一つの姿を目撃しても、まったく意に介さなかった。

研究の成果と限界

しかしながら、われらが最も難渋したのは毛髪の手入である。たとえ微量であれ毛髪の切断には、男たちですらどんなに金品を積まれても同意せぬのに、毛髪試料は頭髪もさることながら、全身からのサンプルが求められるからだ。それはわれらにとつても格別に重要な課題だった。近年のアイヌ研究ではその多毛性にかかわる事象が、ほかのあらゆる記載を凌駕するからだ。アイヌの間では、古代ギリシャや古代ローマの絵画から抜け出したセイレーン「ギリシャ神話に登場する半人半鳥の海の魔女（サイレン）、美声で舟人を魅惑して死に至らしめる」やフアウヌス「ローマ神話に登場する半人半獣の林野の神（フオーン）、ギリシャ神話のサテュロスに対応」と見紛うばかりに、頗る密生した頭髪が腰に達するほど長大な個人が散見された。小さな尻尾状の振れた長毛の束を腰のくびれに幾つか有する者もいる。毛髪は腕部・脚部・腹部の随所に雑然と点在する房をなして叢生する。胸部の被毛は背部に比してかなり僅少であるが、女の胸には毛髪が皆無である。強度の多毛は両性とも三十才頃から始まる。たとえ僅かな和人の血の混入でさえも、多毛性の緩和に強い影響を及ぼした。

しばらくするとわれらは、混血者を直ちに判別するコツを会得したが、被計測者の親族関係の研究によっても、それは常に追認された。われらに然るべき指標を提供したのは、頭蓋骨や骨の形態、黄色一色の和人对するアイヌの白と赤と

いった皮膚の色調、眼形や歯の上顎前突というより、むしろ筋肉組織の特徴である。和人では筋肉とその着生部がやや扁平な形状を呈するのに対し、アイヌのそれは紐状で、ヨーロッパ人と同様に結節として隆起する。筋肉質の和人とアイヌの裸体写真は直ちに両者の相違点を見せつけるが、その一方でアイヌとヨーロッパ人の同様な比較は、両者の人種的親縁性を否応もなく得心させる。

私はこれらの問題に絶大な興味を覚えたから、能う限り多くの計測を実施するべく努力を惜しまなかった。毛髪試料は、身体計測機器の中に缺を忍ばせて窃盗により入手した。結局、被計測者の数が増えるにつれて、身体計測は当座の流行にさえなつてゆく。それまでは姿を見ることが稀で、やつて来る時は決まつて夫の同伴者だった若い女たちですら、独りで来訪するようになる。そしてわれらは、あるアイヌの若い衆と激突するところまで追い込まれた。彼の禁止にもかかわらず、その許婚がわれらの許へやつてきて計測させたからだ。彼がこの件をペンリに直訴するや、ペンリはわれらへ「重い神々」に対する「熱い」祈りを科すとの裁定を下した。

ブロニスワフ・ピウスツキもその間、豊かな收穫とぎの秋を迎えていた。頗る多くの信仰・伝説・古謡をここで発見したからだ。ペンリは当初、すべての語りを己の利益のために独占しようとしたが、われらはほどなく、彼がすでにミステル・バチェラーへ語ったことを繰り返すか、あるいは日本の学校の副読本所載の物語を恣意的に改竄した上で、われらにはそれを紛う方なきアイヌの昔話……と言いくるめたか、のいずれかであることを看破する。そこでわれらは昔話の語り手や英

雄叙事詩 (bylina) の伝承者…を探しつづけた。

だがペンリは、森の中では誠実だった。アイヌらが獣用に設置した罾や仕掛け弓までわれらを案内してくれて、猟師らの太古からの遺習についても意欲的に語り、狼・犬・熊の「ヌサ (nusa)」の意味も逐一解説したからだ。私は博物館のために、柱の上に刺して削掛けで飾り立てた動物の乾いた頭部を幾つか入手することを切望していた。敬虔な白老の衆は、そのように罰当りなことに聞く耳を持たなかったが、海千山千のペンリはこの件を頗る明快に解決した。

——「ヌサ」のある所を御存知じゃな？ あそこは夜な夜な精霊たちが徘徊するから誰も寄り付かぬわけよ…。

旦那があそこにおられるとき、もしわしがそこで「重い神様」に祈りを捧げるならば、そこで何が起きようと、わしもまた神様も一切関知せんじやろ。何しろわしらは——神様は静聴に、わしはお喋りに——専念しておるからな！…。

このような熱い祈りに、大量の酒が必須だったことは言うを俟たない。

すべてが上首尾に推移したあとで、われらが近在の村々を訪ねようと計画していたとき、突如として事態が急変する。人々がわれらを避けたとして、村人らの来訪は頗る稀で、しかも短時間となる。ペンリだけは相変わらぬ訪ねてくるものの、彼とても口数がめっきり少なくなる。何ごとかと探りを入れるも甲斐なくて、情報収集にタロンチを派遣しつづけた。狡賢い混血児は舌を滑らかにするべく酒を買うと称して金を持ち出しても、戻ってきたあとはただ笑うだけで、ルペシテ

(Rupešte「沙流川上流のルベシベ(累標)の女呪術師(czarownica)をめぐって、ありそうもない戯言^{たしご}を伝えた。彼女が異国人との会話を禁じたからだというのだ。われらは強いられた失業状態に陥る。

「義経」の刀

ある日の夕刻、前触れもなくペンリが姿を見せて、己の有する義経^{イチチネ}の「イコロ(Ikoro)」(刀)を買ってくれるならば、われらに対する恐怖全般の原因を明かしてもよいと告げた。

——この「イコロ」だけはまことに至高の聖物、家宝なのじゃ……。これはまだ誰にも見せたことがないからに、高値は覚悟なされよ……。

値切りに値切って「牡馬半頭(pot-konia)」(25円)で手を打ち、10円は前金として直ちに渡し、残金は翌日、見分した上で支払うことにする。加えて、普段のもてなしや家付きのイナウへ祈るときに使用する「シントコ」にも、一瓶の酒^{サケ}を注いだ。ペンリの舌は数杯の酒盃を空けると滑らかになって、小さな声で囁きだした。

——御承知でがしよう、二人の和人が来村され、わざわざ函館から来られたとのこと。お一人は高位の紳士、黒い蝙蝠傘^{バラツル}をつけて歩いていなさる……。御兩人とも、旦那方がここで何をしておいでか頗る執心の御様子、根掘り葉掘り訊ねて回られ、夜毎には窓越しに見張つてござるよ……。もし誰かが旦那方を訪ねると、その者をひどく叱責なさる由……。人々は震え上がつておるのじゃ……。わしは違うぞ、東京、函館、札幌、樺太^{マフトラ}にも行ったことが

あるからな…。わしの所にはありとあらゆる「ニシパ」が北からも南からも馳せ参じるゆえ、わしは恐れぬが、気の毒な小者のアイヌどもは慄いておるのじゃ…。何となれば、かの蝙蝠傘の紳士は各村戸長とも沿岸警備官とも森林監視官とも、はたまた知事 (gubernator) 『北海道長官』その人とも昵懇の仲…。だからこの紳士は仰山の害をなすことも出来だ！…。わしも旦那方にこう申したい。あの名高い女呪術師のいるルペシテへ行かれるがよろしい…。彼女は興味深いことを仰山語ってくれるじやろうし、旦那方はまた、どこにもないような新しいイナウも目にされることじやろうて…。ここでもし、わしの「イコロ」を買い上げていただけたら、入手に値する物はもはや何もありません！…。

……彼は意味ありげに目配せをし、頭を振って頷いた。われらの仕事を完璧に麻痺させるような何事かが出来たわけだから吉報ではない。私は「東京のロシ」大使館へ手紙を書き、不可解な障碍の除去を要請する肚を決めるとともに、好ましくない庇護者らの手が届かぬどこか遠方へ、実際に出立することも決断して、許婚の件で立腹させた若者を相手に乗馬の手配をめぐる交渉を開始する。彼は突如として怒りの矛を収め、自分から乗馬賃貸契約の提案を携えてやってきた。

戦争……

出発の日さえずでに決定して、「賃貸料の」前金も支払った日の正午頃、突然、シパンラムが何の前触れもなく現われた。われらは即刻、疲労困憊して空腹を持て余すシパンラムを食卓に座らせる。しかしながら、再会の喜びは、われらの友人

とともに現われ、寸時も彼から離れようとせぬペンリの存在によって水を差されつづけた。知人らや彼の親族たち、また白老や敷生(ふきせい)などの様子に関して連発するわれらの問いに対し、シパンラムは上の空でぼそぼそ口ごもりつづけるから、村長のいる所では語れない何か、内緒話のあることをわれらは了解する。そこで、長い道程の徒歩での走破と、頗る早朝の起床に鑑みて、彼には直ちに就寝するよう命じ、われらはペンリが自ら立ち去るまで辛抱強く待ちつづけた。

ペンリは「イコロ」の見分にわれらを招待したが、「ペンリ宅で見分した結果それは擦り切れた並製の鞆に納まる、何の変哲もない日本刀と判明した。刀身は鍛鉄ですらなく鑄鉄製で、手に持つとブリキのように折れ曲がる。古式の日本刀はまさにこのようなものと言って、ペンリはわれらを騙そうとした。われらは話の信憑性を度外視して残金を支払い、老人宅を辞した。だが、頗る貴重な家宝である「イコロ」は収納場所まで自分で運ばねばならぬと食い下がって、ペンリはわれらに同行を申し出た。しかし、その申し出はきつぱり断り、彼には「4分の1」円「25錢」の「手切れ金」を渡した。タロンチは道案内の許へ遣わし、明後日に向けて乗馬を手配するよう伝えさせるとともに、われら自身は可及的速やかに帰宅する。ブロニスワフは住宅のまわりを一周して、外で立ち聞きする者がいないことを確かめ、私はノムラを起こした。

—— さあ、今やわれらだけだ。わが友よ、話しておくれ！

—— わしが参ったのも、まさにそのためです！……敷物の上に座って囁くように語る——よく聞いてくださいい！、戦争が始まるそうです！…。旦那方は軍事密偵だ！と、専らの噂です。あなたは——彼は私に顔を向ける

——自分の黄色い機械で至る所の地形を写しているのだ…と、またロシア人（Orus）らが船で乗り付けてきて、これらの土地を奪い、人々を殺すだろう…と、さらに旦那方はこれらのロシア人を案内して来るだろう…と、芳しくない噂が飛び交ってます。ですから旦那は殺^やらねばならぬ…と、しかも、旦那方がここで見たことの一切合財が「ロシア側の」人々に筒抜けとならぬよう…、御両名の書きものや写真、あの丸めたりボンの束「映写フィルムであろう」はすべて押収すべきだということです…。だからルペシテへは行かないでください。あそこは山奥の僻地ですから、和人らはきつとあそこで旦那方を襲うに違いない。そしたらどうなるでしょうか！。強盗団の仕業と語れるのが関の山、それでお仕舞ですよ…。わしらの白老へ是非とも戻って来てくださいな。皆は旦那方を愛します、恋しがつてもおりますからに…。わしがこちらへ参ったのも、ルペシテへ行かれぬようお願いするため、どうか行かないでください…。

シパンラムはひどく動揺していたが、われら自身もやはりそうだった。だがわれらは、俄かには信じがたい和人らの企てへの警告よりも、危機と称される事態からわれらを救うべく善意に発して走破された60キロの道程に、むしろ心を動かされたのだ。和人たちの企てそのものに疑義を呈するや、ノムラは、自分の言うことに耳を貸すよう哀願しだした…。

六 宿命的な話であるが、「ロシアの」巡洋艦「ノヴィコフ」は一年後、白老とその近在の村々を実際に砲撃している「該当する巡洋艦名は「ノヴィク」である。但し、「ノヴィク」が白老を砲撃した事実はない——訳者注」。

—— 旦那方の調査で派遣されておるのは並の巡査でなくて、もつと恐ろしい奴だ……。ここに滞在するのは憲兵だ
そうですよ……。

—— そもそもどんな権限で？。なぜ？。われらは法に触れるような事でもしでかしたかね？……。

—— わしには判りかねます。戦争だ……と世間では大騒ぎ。新聞が煽り立てるのですよ……。

世界からは頗る長く、そして完璧に隔絶されてきたから、われらにはこの情報がまさに晴天の霹靂だった。

—— えい、ままよ……。戦争はたとえ始まるにしても直ぐではなからうし、われらを追尾する警察官はもつと分別を有するだろうから、よりましではないか……。われらは、秘匿を要するようなことは何一つしておらぬ……。直ちに札幌へ手紙を書き、現像を求める依頼状を添えて生フィルムを送付してやろう。そうすれば、それらのフィルムには踊り、遊戯や競技、日常の「挨拶 (karaky)」、機織り、漁舟編隊の帰還、「ヌサ」の建立のほかには、何一つ見出されぬことが納得されよう……。—— と、私は自論を開陳する。

シパンラムは、いまだ納得しがたい風情であつた。

エピソード

翌朝、朝食をもてなされたノムラは、われらに僻遠の地へは赴かないでくれと、最後の最後まで懇願を繰り返しつつ、われらからのプレゼントを抱えて立ち去った。

しかしながら、われらの取組むべき仕事^{ビラトリ}が平取にはもはや何もなかった。ブロニスワフと相談の上で、われらは十分な根拠を欠くような恐怖を理由に仕事を中断せぬこと、今回はルペシテへ赴かぬこと、そして、さらに東方の今一つのアイヌ人口の顕著な集住地である釧路地方か根室地方への移動を決定する。したがって、われらが賃借した乗馬は沙流川の上流「つまり、ルペシベ（累標）」ではなく、下流へ向けてわれらを運ぶべく、契約は維持した。

われらが今後の計画を練り、旅の準備を進めていたまさにそのとき、ペンリが大声を上げて駆けこんできた。

—— 政府伝書使の御到来……。ほれ、手紙じゃ！

彼は政府公印の捺された大型封筒をわれらに手渡した。やや驚き、かつ動揺もしたわれらは、早速その場で開封する。函館の「ロシア」領事は、「東京のロシア」大使館からの訓令により、調査は直ちに中止し、東京へ戻るべきことを通達する」と記していた。

そのとき眉を曇らせたブロニスワフへ、私は静かに語りかけた。

—— そうだ!…。ロシアと日本の戦争だ。それは果たして、ポーランドへ何をもたらすのだろうか?!

訳者記

訳者がシェロシェフスキ著「毛深い人たちの間で」の日本語訳を初めて手掛けたのは、北大スラブ研究センターに勤めていた一九九六年頃だったと記憶する。縁があつて研究生として受け入れたマイエヴィチ教授の二人の教え子——M・ティムチョさんとM・ザヨンツさん——の協力を得て翻訳作業は進められた。ティムチョさんは北大文学研究科、ザヨンツさんは千葉大文学研究科へそれぞれ進学されたが、それまでの共同作業の成果が本訳稿の基礎をなしている。マジエナ・ティムチョさんとマウゴジヤタ・ザヨンツさんには、この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

訳者はまた、英訳者のA・F・マイエヴィチ教授と露訳者のI・J・シラク氏にも衷心からの敬意と謝意を表したい。邦訳稿の作成に当たって参照した英語版⁽¹⁾と露語版⁽²⁾には大いに啓発され、また裨益することも多々あつた。

二〇一七年四月十二日、札幌

注

- (1) Wacław Sieroszewski, "Among hairy people," in: A. F. Majewicz (ed), *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore 2* (*The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 3), pp. 659-699, 791-801, Berlin – New York: Mouton de Gruyter (2004)
- (2) В. Серошевский, "Среди косматых людей (перевод с польского языка) И. Ю. Сирак)," *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* № 8: 46-88 (2004)

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事(1903～1939)

井上絃一
編

解説

プロニスワフ・ピウスツキ (1866~1918) はリトワニア生まれの優れた文化人類学者である。ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して樺太島へ流刑となり、少壮期の十九年をロシア領極東で過ごすことを強いられた。その間、北東アジア原住民研究に従事して、この分野では先駆的な研究成果を残したが、ヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死した。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が照射される契機は、一九七九年春の札幌における「B・ピウスツキ業績復元評価委員会」⁽¹⁾の発足であった。同委員会は、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本に借り出し、最先端の科学技術を駆使して収録音声を再生する事業を進める⁽²⁾とともに、散逸した研究業績を博搜して然るべく評価し、併せてピウスツキの伝記資料も収集した。その成果は一九八五年に札幌で開かれた第一回ピウスツキ国際シンポジウム⁽³⁾で報告された。その後一九九一年には第二回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク⁽⁴⁾、第三回は一九九九年にポーランドのクラクフおよびザコパネ⁽⁵⁾と、いずれもピウスツキ所縁の町で開催されている。

ピウスツキが残した既刊・未刊の研究業績は、研究の場が国際化する過程で形成されたネットワークのお蔭で全貌がほぼ究明されて、『プロニスワフ・ピウスツキ著作集』としてムトン・デ・グロイター社から刊行中である⁽⁶⁾。ピウスツキが収集した民族資料の図録もすでに上梓され⁽⁷⁾、さらにはピウスツキ研究に特化した逐次刊行物までも発行されている⁽⁸⁾。かくて「委員会」が掲げた諸課題は概ね達成されたといえよう。

残された課題は評伝の執筆であった。ピウスツキは数奇な運命に弄ばれて、世界各地を転々と遍歴し、地球一周を「ぼぼ」⁽⁹⁾果たした旅人であった。彼の生涯は、幼少年時代の「リトワニア期」(1866~85)、逮捕・流刑で中断された短期遊学の「ペテルブルグ期」(1885~87)、徒刑囚として過した「サハリン期(1)」(1887~99)、博物館勤務の「ウラヂヴォストク期」(1899~1902)、研究者として滞在した「サハリン期(2)」(1902~06)、欧州帰還を果たして以降の「ヨーロッパ期」(1906~18)の6期に区分される。当然至極ながら、彼の全生涯を対象とする評伝を攔筆しえた者はまだいない⁽¹⁰⁾。そこで澤田和彦埼玉大学教授と私は二〇〇七年、日本学術振興会から科学研究費補助金を得て、かかる評伝を執筆する国際共同研究プロジェクト⁽¹¹⁾に各時期の専門家15名からなる国際的執筆陣を結集、二〇一〇年三月に『プロニスワフ・ピウスツキ評伝』を上梓した⁽¹²⁾。

ピウスツキは「サハリン期(2)」に当たる一九〇二年から一九〇六年にかけて日本を四度訪れたことが判明している⁽¹³⁾。初来日は一九〇二年、サハリンのマウカ(真岡、現ホルムスク)からデンビー商会の漁船に便乗して函館に來航し、八月六日から三十日(露暦⁽¹⁴⁾)まで滞在した⁽¹⁵⁾。一九〇三年の第二回来日では六月二十四日から九月二十四日(露暦)にかけて北海道に滞在し、ロシア帝室地理協会がヴァツワフ・シェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に、アイヌ語・アイヌ文化の専門家として参加した。この折は、彼がロシア語を手解きしたエンチウ(樺太アイヌ)——なかなかずく対雁アイヌ——の千徳太郎治が日本語通訳として同伴している⁽¹⁶⁾。第三回は日露戦争直後の一九〇五年九月から十一月にかけて、ウラヂヴォストクから日本軍占領下の南樺太と神戸を往復する駆け足の旅であった。サハリンでは東海岸相浜を訪ねて妻のチュフサンマや長男助造と会い、妻子を連れての帰国を試みるも、妻の叔父バフンケアイヌ(木村愛吉)の峻拒に遭って

断念する。神戸ではニコライ・ラッセルの事務所を手伝った。第四回の来日は一九〇五年十二月後半から翌年八月三日まで7ヶ月半の長逗留となる。ピウスツキは当初、一九〇六年三月にはヨーロッパへ向け離日してリトワニアへ戻る計画だったようだが⁽¹⁷⁾、東京では6ヶ月、長崎にも1ヶ月弱滞在した。七月三十日、ピウスツキの搭乗する大北汽船の「ダコタ号」は長崎港を出航し、神戸を経由して横浜に寄港（八月二日）、翌三日に同港を発つてシアトルへ向かった。

本稿に収録される新聞記事は20件中10件が「サハリン期（2）」の来日にかかわるが、日本におけるピウスツキの動静が日付を伴って提示されている。具体的には最初の4記事が第二回来日、後続の6記事は第四回の来日に関係する報道である。当初の4記事中3記事までが何の変哲もない乗船者名簿に過ぎぬとはいえ、ピウスツキが「所与の時に所与の場所」にいたことを立証する、伝記情報としては珠玉の歴史資料である。加えて第二記事では、シェロシェフスキが平取で撮影した映写フィルムの内容⁽¹⁸⁾にまで言及している。最後の来日ではピウスツキがすでに北東アジア原住民研究者として遇され、また真摯なジャパノロジストとしても報道されていた。

ピウスツキがパリで客死して半年後の一九一八年十一月十一日、亡国ポーランドは悲願の国家再興を果たし、独立運動の立役者だった実弟のユゼフ・ピウスツキが、共和国初代元帥として国家首席に就任する。一九三四年一月十日付「樺太日日新聞」記事とその種本である能仲文夫著『北蝦夷秘聞』（16^頁）によると、ピウスツキ元帥は「十年前」——実際は一九二五年——、樺太島に在住する「兄の遺族」の探索をパテク初代駐日ポーランド特命全権公使に命じたが不首尾に終わったとある。その後十年の空白が何を意味するかは不詳ながら、ヤンタ¹⁹ポウチンスキは一九三四年一月、南樺太東海岸の白浜と白浦においてプロニスワフ・ピウスツキの遺族を「発見」したのである。

一九三九年の小樽新聞報道は、頗る興味深い内容ながら辻褄の合わぬ事柄も散見され、当初は捏造記事ではないかとも疑って収録を躊躇した。しかし、ピスコルという人物を調べていくと、筋金入りの愛国者で辣腕のジャーナリスト、しかも日本で下獄した最初のポーランド人である事実さえ判明した。事実関係に関する管見は、本文の脚注に記したからこゝでは繰り返さぬが、一九三九年五月以降相次いで出来したノモンハン事件、独ソ不可侵条約、第二次世界大戦の渦中に身を投じたピスコルには、ブロニスワフの遺族を訪ねて南樺太へ赴く余裕はないように思われた。しかし、彼は一九三九年の夏に訪樺していた⁽¹⁹⁾。

評伝執筆に際しての新聞報道の重要性は改めて力説しておきたい。日本におけるジャーナリズムの草創期に端なくも際会したピウスツキの訪日は、10件⁽²⁰⁾の報道記事を産出した。しかしながら、記事の内容を鵜呑みにすることは差し控えねばならない。まず取材者の——とりわけ外国の固有名詞をめぐる——聴違え、誤解、不勉強などが指摘されるが、本稿では必要不可欠の案件に限って脚注を施した。次にピウスツキ本人の個人情報をめぐって、既知の事実とは背馳する記載も散見される。これは一九三四、三九兩年の記事において顕著であるが、ほとんどは種本に想定される『北蝦夷秘聞』にまで遡及する情報であるから、原則として不問に付した。なお、新聞記事の転載に際しては極力「原文のまま」を心がけた。

最後に、20件の新聞記事のすべてについて、私が第一発見者ではないことを明記しておきたい。本稿を草するに当たり、故河野本道、澤田和彦、田村将人、山岸嵩の4氏からは記事に関する情報を——一部についてはそのプリントコピーまでも——賜った。特に御名前を記して深謝申し上げる次第である。また、編集集中・編集済みの記事稿に目を通して、貴重なコメントを寄せてくださった井上久仁子、澤田和彦、柚木かおりの各氏にもお礼を申し上げたい。とはいえ、あらゆる瑕疵への責任は偏に編者が個人として負うべきものである。

本稿は、二〇一〇年に公開された拙稿「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903-1939）」⁽²¹⁾の「増補改訂版」である。

（二〇一七年三月十一日記）

注

- (1) Committee for Restoration and Assessment of V. Pituski's Life and Work. 但し、同委員会の正式名称は、頭文字を連ねた略称の——英語で「サイコロ博打」も意味する——C R A Pであった。一九七九年のある春の宵、北大文学部附属北方文化研究施設の黒田信一郎助教授と井上紘一助手の間で交わされた酒席での「密談」がその濫觴だったからである。C R A Pはやがて文理融合型の国際的学際研究組織へと発展し、一九八一年以降は頭に International を冠して I C R A P を名乗った。
- (2) 一九八三年七月に札幌に到着したピウスツキ蠟管の音声再生作業は、北大応用電気研究所（現電子科学研究所）の朝倉利光教授を中心とする工学チームが推進した（朝倉利光、伊福部達編『ピウスツキ録音蠟管研究の歩み 昭和58年—昭和61年』札幌：北大応用電気研究所、1986）。
- (3) 「ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」と銘打つ札幌シンポジウムは九月十六～二十日、北海道大学国際交流会館で開催された（*Proceedings of the International Symposium on V. Pituski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, 1985）。
- (4) サハリン州郷土誌博物館は十月三十一日～十一月二日、「B・O・ピルスツキー——サハリン諸民族の研究者」と題する国際会議を開催した。報告書は以下の通り。Сахалинский областной краеведческий музей, Б. О. Пилсудский — исследователь народов Сахалина [Материалы международной конференции. 31 октября ~ 2 ноября 1991 г., Южно-Сахалинск, тт. 1-2, Южно-Сахалинск (1992). ピウスツキ生誕125周年に当たる最終日には、ピウスツキにとって「初の」記念碑（顔面石像）の除幕式が博物館の前庭で挙行された。なお、ピウスツキの「第2」記念碑（ブロンズ胸像）は二〇一三年十月十九日に白老のアイヌ民族博物館で除幕され、翌二十日には「記念セミナー」が北大国際交流会館で開催され、併せて関連冊子『ポーランドの研究者 ピウスツキの仕事と白老における記念碑の除幕に寄せて』も上梓されている。
- (5) ポーランドで開かれた第三回会議のテーマは「プロニスワフ・ピウスツキと『葉亭四迷』であった（A. F. Majewicz & T. Wicherkiewicz (eds.),

Bronisław Piłsudski and Futabatei Shimei —An Excellent Charter in the History of Polish-Japanese Relations: Materials of the Third International Conference on Bronisław Piłsudski and His Scholarly Heritage [Linguistic and Oriental Studies from Poznań. Monograph Supplement 7], Wydawnictwo Naukowe Uniwersytetu im. Adama Mickiewicza w Poznaniu (2001)。古都クラクフから保養地ザコパネへ会場を移し、その後タトラ山地へのポストコングレス・エクスカージョンも含めて、八月二十九日から九月七日までの長丁場であった。

- (6) Alfred F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vols. 1-2 (1998), vol. 3 (2004), vol. 4 (2011) [Trends in Linguistics Documentation 15-1, 2, 3, 4], Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 四巻までが既刊、全五巻を予定している。

- (7) SPBライヌプロジェクト調査団編『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』（日露英3言語併記版）東京・草風館（1998）、ヴラヂスラフ・M・ラティシエフ、井上紘一編『樺太アイヌの民具』（日露英3言語併記版）札幌・北海道出版企画センター（2002）。そのほかにロシア語版『目録』—初版（1988）、増補改訂版（2006）—もユジノ・サハリンスクで公刊されている。

- (8) 代表的2誌を掲げる。（一）サハリン州郷土誌博物館附置ブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所の発行する『研究所通報』（Известия Института наследия Бронислава Пилсудского, Южно-Сахалинск）——一九九八年に創刊号が上梓され20号（2016）で終刊——、（二）井上紘一が一九九九年に創刊した欧文逐次刊行物 *Piłsudskiana de Sapporo*——北大スラブ研究センター（1999~2004）・埼玉大学教養学部（2008~2009）・関西外国語大学（2010）——6号までが既刊（但し、3、6号は澤田和彦教授との共編、4号は澤田教授編）。

- (9) ピウスツキの地球一周を阻んだのは、三国分割下のポーランドを走るオーストリアとロシアの国境線であった。一九〇六年にヨーロッパ帰還を果たしたものの、ロシア帝国に併合されていたリトワニアへの帰郷は遂に叶わなかった（拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」45~46頁）。

- (10) とはいえ、七年前に上梓されたラティシエフ氏のピウスツキ伝『サハリンにおけるブロニスワフ・ピウスツキの生活 伝記試論』は、「サハリン期（二）」までを叙述する作品であるが、最初の本格的な評伝である（Владислав М. Латышев, *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Прологомены к биографии, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство*, 2008）。

- (11) 二〇〇七~二〇〇九年度基盤研究（B）「ブロニスワフ・ピウスツキの評伝執筆のための実証的研究」（研究代表者・澤田和彦 埼玉大学教授）。

- (12) K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vols. 1-2, Saitama: Faculty of Liberal Arts, Saitama University (2010).

- (13) 沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」145頁。「日本暦」は、澤田教授がピウスツキの日本滞在を精査された結果を取りまとめ

- た年譜であるが、記載事項の各々に出典が提示され、参考文献も完備している点が高く評価される。なお「日本暦」は増補改訂版が、ロシア語版・英語版とともに澤田教授の科研報告書に再録され（澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシアの文化交流に関する実証的研究』さいたま・埼玉大学教養学部 2007）、また邦語版と英語版はウェブサイト [hokudai.ac.jp/inoue/TOPE.htm](http://www.hokudai.ac.jp/inoue/TOPE.htm) でも公開されている。以下の記載は概ね「日本暦」に拠っている。
- (14) ロシア帝国で採用されていたユリウス暦、ロシア革命後の一九一八年まで行われた。西暦による日付は十九世紀中が12日、二十世紀では13日を露暦に加算すれば得られる。
- (15) ピウスツキはこの函館行を、マウカからコルサコフへ赴くための緊急避難として選択した。友人のシュテルンベルグへ宛てた手紙に、「この旅では『薩摩守』忠徳を決め込みました（я только зайдем мор проехать）」（Пилсудский, «Дорогой Лео Яковлевич...», стр. 201）とあるから、密航に近いものであったろう。したがって、新聞種になるようなことは周到に避けたのではなかろうか。
- (16) 拙稿「B・ピウスツキと北海道——一九〇三年のアイヌ調査を追跡する」15、16頁、K. Inoue, “The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903,” p. 7。
- (17) ピウスツキは一九〇六年二月初旬、東京朝日新聞記者に「本月中を日本の研究に費し、一度故郷の波蘭に歸り、夫より再び樺太に渡りて引續き人種學上の研究に従ふ筈」と語っている（一九〇六年二月八日付東京朝日新聞記事、本稿832頁）。
- (18) シェロシエフスキの旅行記によると、彼らは映画撮影機を携えており、彼自身が撮影を担当したと記すものの、撮影対象については記載がない（シェロシエフスキ「毛深い人たちの間で」、本書782、796頁、Inoue, “The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903,” p. 25）。この時の記録フィルムは目下消息不明であるから、「土人の熊送り、舞踊の類を活動寫眞に撮影し」という記載（一九〇三年九月十七日付小樽新聞記事、本稿826頁）は頗る貴重である。
- (19) この事実はその後に、B・シユチェシニャクのメモによって確認された（本書714頁、脚注五六を見られたい）。
- (20) 当該期間に報道されたピウスツキ関係記事は、収録した20件以外にもありうるであろう。関連情報をお持ちの方がおられたら、是非とも御一報いただきたい。
- (21) 井上絃一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903 - 1939）」（上・下）『関西外国語大学研究論集』91: 267~280、92: 185~201（2010）。二年後にはロシア語訳が上梓されている（Копия Иноуэ, “Статьи о Б. О. Пилсудском в японских газетах (1903 - 1939 гг.)” *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* №16: 145-151; “Газетные статьи о Брониславе Пилсудском,” *там же*, стр. 152-172, Южно-

(Сахалинск, 2012)。

参考文献

邦文

- 井上絃一「プロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』、『国立民族学博物館研究報告』別冊5〕45～65頁(1987)
- 井上絃一「B・ピウスツキと北海道——1903年のアイヌ調査を追跡する」井上絃一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11～31頁、札幌…北海道大学スラブ研究センター(2003)
- 井上絃一編『プロニスワフ・ピウスツキ年譜』ポーランドの研究者・ピウスツキの仕事と白老における記念碑の除幕に寄せて、札幌…北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター(2013)【増補改訂電子版】北海道大学ウェブサイトで公開されているHUSCAP所収(URL: <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php?jname=381>)
- 沢田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」井上絃一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』145～172頁(2003)
- シェロシエフスキ、ヴァツワフ(井上絃一訳)「毛深い人たちの間で」『ポーランドの研究者・ピウスツキの仕事と白老における記念碑の除幕に寄せて』77～108頁(2013)
- 千徳太郎治(元アイヌ酋長)『樺太アイヌ叢話』東京：市光堂(1929)【復刻版】河野本道選『アイヌ史資料集』第六巻『樺太編』札幌…北海道出版企画センター(1980)
- 能仲文夫「盲目の老メノコは泣く」能仲文夫『北蝦夷秘聞—樺太アイヌの足跡』1～18頁所収、大泊…北進堂(1933)【復刻版】『樺太アイヌの足跡』東京：第一書房(1983)
- 函館市史編纂室編『函館市史 年表編』函館：函館市(2008)
- バチラー「珍客來たる」ジョン・バチラー「ジョン・バチラー自叙傳—我が記憶をたどりて」『第二十章三』288～290頁、東京：文録社(1927)【改版】村崎恭子校訂『ジョン・バチラー自叙傳—我が記憶をたどりて』札幌…北海道出版企画センター(2008)
- パウシェールトコフスカ、エヴァ、アンジェイ・ロメル(柴理子訳)『日本・ポーランド関係史』東京：彩流社(2009)【原著】Ewa Palasz-Rutkowska i Andrzej T. Romer, *Historia stosunków Polsko-japońskich 1904-1945*, Warszawa: Wydawnictwo Bellona (1996)
- ピウスツキ(露国ビルドスキー氏寄稿)「樺太アイヌの状態」『世界』26：57～66、27：42～49、東京：京華日報社(1906)

ヤンタールボウチンスキ、アレクサンデル（佐光伸一訳）「樺太のポーランド人たち」『ポーランドの研究者 ピウスツキの仕事と白老における記念碑の除幕に寄せて』109～142頁（2013）

欧文

Anonym, "Wyjazd Al. Piskora do Japonii [Al. Piskora 日本へ出立]," *Prosto z mostu* nr. 1: 12 (January 1, 1939)

Inoue, K., "The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903," in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 3-37,

Saitama (2010)

Janta-Potczyński, A., "U Polaków na Sachalinie [サハリンへポーランド人を訪ねる]," in: Aleksander Janta-Potczyński, *Ziemia jest okrągła* [地球は丸い], ss. 241-98, Warszawa: Róh (1936). 【ピウスツキのポーランド人による部分訳】A. Janta-Potczyński, "Shirahama and Shiraura," in: A.F. Majewicz (ed.),

The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 3, Appendix 3, pp. 731-744, Berlin & New York: Mouton de Gruyter (2004)

Paszlewicz, M., "Piskor Aleksander (1910-1972)," *Polski Słownik Biograficzny* [ポーランド人辞典], tom XXVI/3, zeszyt 110, ss. 554-555. Wrocław-

Warszawa-Kraków-Gdańsk-Łódź: Polska Akademia Nauk (1981)

Пилсудский, Бронислав, «Дорогой Лев Яковлевич...» (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893-1917 гг.) [親愛なるリエフ・ヤコヴレヴィチ... シュテルンベ
グ宛書簡 1893-1917年], Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей (1996)

Piskor, A., "Pierwsze wrażenia [初印象記]" *Prosto z mostu* nr. 27: 2-3, Warszawa (July 2, 1939)

Piskor, A., "Wenus w kimono [和服のウーイナベ]," *Prosto z mostu* nr. 33: 4-5, Warszawa (August 13, 1939)

Piskor, A., "Dai Nippon banzai! [大日本万歳]," *Prosto z mostu* nr. 35: 4-5, Warszawa (August 27, 1939)

Piskor, A., "Kolonja polska w Japonii [日本におけるポーランド人コロニー]," *Dziennik Polski* nr. 907: 2, Londyn (1943)

Sieroszewski, W., *Wśród kosmatych ludzi* [毛深い人たちの間で], Warszawa: Róh (1927); "Wśród kosmatych ludzi," in: Wacław Sieroszewski, *Szkice podróżnicze. Wspomnienia* [Dzieła tom XVIII Varia], ss. 219-274, Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961); 【ピウスツキのポーランド人による英訳】W. Sieroszewski, "Among hairy people," in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*, vol. 3, Appendix 1, pp.

661-699, Berlin & New York: Mouton de Gruyter (2004)

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事 (1903～1939)

一九〇三(明治三十六)年

『北海タイムス』第4811号 (一九〇三年八月八日付)

●室蘭船客

(四日出帆 玄海丸) 函館行 札幌 ピーエ、旭川 木下直次郎、函館 □田廣三、青薫、渡 □陸 □少尉 ▼青、森行 八角
 陸軍中尉、早坂陸軍監督、札幌森田最中(五日入) 港 肥後丸 ▼函館より 道廳田村信吉、濠洲ミツタコール、江差堀
 内祥治、露國セラセフスキー、ピルフスキー ▼青森より 道廳伊吹槍治、仲陸軍少尉、札幌城戸熊次郎(全日出) 帆 肥

一 記事の閲読には北大附属図書館蔵マイクロフィルム、ならびに北海道新聞社のデータベース(マイクロフィルムにもとづく電子化情報)を利用したが、作業は困難を極めた。本記事で強調箇所以外は未定稿である。「ロ」は「空字」か「解読不能文字」を意味し、「太字・傍線」を用いての強調は井上による。なお、以下すべての記事を通して、本文中では編者の注記を角括弧「」に収め、改行は「」で表示する。

二 「セラセフスキー」はポーランドの民族誌家・作家であるシエロシエフスキ (Wladaw Steroszewski 1858-1945)、また「ピルフスキー」はブロニスワフ・ピウスツキ (Bronislaw Piusudski 1866-1918) である。記事中に「露國」とあるのは、彼らがロシア帝国旅券を携えて来道し、北海道アイヌの調査に従事していたことによる。両名は日本語通訳の樺太アイヌ千徳太郎治とともに「肥後丸」にて函館を発ち、記事にあ

後丸) ▼ 函館行 小樽田中武右エ門、函館新津林太郎、大串平八郎 ▼ 青森行 東京山本条四郎、福原榮太郎、札幌□ □
 縦太郎、中川半三郎、小樽斎藤誠□ 郎 (全日直行 東海丸) ▼ 青森より 東京佐藤謙三、小樽柿木實□ 郎、兵庫小田菊助、
 吉見定一郎 ▼ 青森行 札幌北山一太郎、厚田佐藤嘉七(六日) 入港 薩摩丸) ▼ 函館より 飯尾海軍少佐、太田海軍大主計、
 高瀬根室支廳長、小寺御料局技師、東京市崎謙吉、桑田豊 ▼ 蔵 ▼ 青森より 谷村陸軍監督、小倉全監督、札幌松丸一郎、
 手塚□ 三郎、東京田中原太郎、榊原佐吉 (全日直行 陸奥丸) ▼ 青森より 道廳淺羽堅三 ▼ 青森行 小樽牧口考明、荒井
 幸造、札幌桂宗佐、中川庄□ 郎、旭川桂恕恵、東京石黒五十二

『小樽新聞』第2900号 (一九〇三年九月十七日付)

●波蘭人の土人研究 三

波蘭クワルフ^{ポーランド}四街^{がい}に住むウキスキー氏^すは、一本道^{ほんだう}に於ける土人^{どじん}の、状態研究^{じやうたいけんきう}として來道^{らいだう}、一昨日^{さくじつ}札幌豊平館^{さくはうへいぐわん}

るように一九〇三年八月五日、室蘭港に到着した。恐らくは口頭で聞いたポーランド人の姓を、このようにかなり正確に書き留めてある
 事実には敬意を表したい。

三 記事はプロニスワフ・ピウスツキに直接言及していないが、アイヌ調査団の一員である「ウキスキー氏」が一九〇三年九月十五日には札幌
 に滞在していたことが、端なくも確認できる。調査団一行三名は、平取から札幌までも行動を共にしたと考えるのが自然である。

に投^{とう}宿^{しゆく}、二道^{だうどう}廳^{しゆつどう}に出頭^{しゆつどう}して農園^{のうえん}博物館^{はくぶつぐわん}一覽^{らん}の儀^ぎを願^{ねが}ひ出^いてしが、二氏^しは日高國沙流^{ひだかこくさりう}地方^{ちほう}に於^{おい}て土人^{どじん}の熊送^{くまおく}り、
「二舞踊^{まいおどり}の類^{るゐ}を活動寫眞^{くわつどうしやしん}に撮影^{さつえい}」し、「二携帶^{けいたい}し來^{きた}りたる由^{よし}

『函館公論』第1079号（一九〇三年九月十七日付）

●人

▼本田康虎氏（二十銀行監査役）は一昨日青森へ赴く／▼竹村利三郎氏（法學博士）は一昨日室蘭より來函／▼

四 この地名は恐らくポーランドの古都クラクフ（Kraków/Cracow/Krakau）を指すものであらう。「クワルフ」とは、とりわけ母音の平仄がよく合うからである。その当時、シエロシエフスキはクラクフにも在住し、ピウスツキはサハリンに滞在中であつた。

五 「ウキスキー氏」なる人物には、調査団長のシエロシエフスキ以外を指定することができない。彼はピウスツキ、千徳太郎治とともに函館・白老・平取と行脚を続けるも、日露関係がとみに険悪化して、いずれもロシア国籍だった三名は調査の中断を余儀なくされ、札幌を経由して函館に戻り、それぞれの地元へ向けて出国した（シエロシエフスキ「毛深い人たちの間で」77-108頁、拙稿「B・ピウスツキと北海道」2003年のアイヌ調査を追跡する」も見られたい）。なお、ピウスツキとシエロシエフスキの札幌滞在については、ジョン・バチエラ^{ジョン・バチエラ}も日附抜きながら記録を残している（『ジョン・バチエラ自叙傳』二〇章三「珍客來たる」）。バチエラは両名が「二三日此處に居て函館へ参りました」、ピウスツキは自宅に「少時泊りました」と記し、「此の二人」を札幌駅頭まで見送っている（同書238頁）。

ところで、ピウスツキは九月十五日に函館へ帰着する（後続記事参照）から、両名は遅くとも同日早朝には、——本記事がシエロシエフスキの豊平館投宿を「二昨日」、つまり九月十五日と報じているにもかかわらず——離札幌せねばならなかつたであらう。したがって、調査団一行の札幌入りも九月十二日頃と想定される。

山田敬哉氏（憲兵曹長）同上／▼林忠夫氏（憲兵大佐）同上／▼薬師川常義（憲兵大尉）同上／▼池中弼徳（憲兵大尉）同上／▼ピシストシキイ氏（露國人）同上^六

『函館公論』第1080号（一九〇三年九月十八日付）

●人

▼林忠夫氏（憲兵大佐）來函中の處昨日青森／へ向け出發せり／▼薬師川常義（憲兵大尉）同上／▼山田敬哉氏（憲兵曹長）同上／▼ハールス氏（米国人）は昨日青森へ行く／▼森信夫氏（北海道廳技手）は昨日釧路へ赴く／▼松永工氏（同技手）同上／▼デレツク氏（米国人）昨日室蘭より來函／▼セロシユフンギ氏（露國人）は昨日室蘭より來函^七／▲櫻井常太郎（仁壽生命保險株式会社員）／同上

^六 プロニスワフ・ピウスツキの筈である。「太字・傍線」での強調は井上による。彼は室蘭から函館へ「一昨日」、即ち一九〇三年九月十五日到着と記載されている点が注目される。なお、『函館市史 年表編』（2008）には同年「九月十五日」の項に、「民族学者ピウスツキが來函する」（279^頁）と記載されている。

^七 間違いないヴアツワフ・シェロシエフスキである。彼はピウスツキに二日遅れて「一九〇三年九月十七日」、やはり室蘭から函館着と報じられている。遅延の経緯は不詳。「太字・傍線」での強調は井上による。往路同様、千徳太郎治に対する言及はないが、恐らくはピウスツキに同行したものと推測される。『函館市史 年表編』は同項に「十七日、同じく民俗^{マニヤ}学者セロシエフスキが來函する」（279^頁）と併記している。

一九〇六（明治三十九）年

『報知新聞』第10384号（一九〇六年一月七日付）

うらじほ

●浦鹽よりの二珍客^{ちんきやく}

さいきん

最近の便船^{びんせん}九^{うらじほ}にて浦鹽^{うらじほ}斯德^{すて}より來朝^{らいてう}したる二^{にん}人の珍客^{ちんきやく}あり。一^{その}其^{その}一^{その}はビルドスキー^{しやう}と稱^{しやう}し、一^{ぼー}波^{ぼー}／蘭人^{らんじん}にして

八 本記事を、一月十日付『北海タイムス』『馬關毎日新聞』所収の後続両記事と照合するならば、極めて酷似するタイトルもさることながら、

いずれも同一情報源に遡るものであることは一目瞭然である。そこで「三日の長」を示す本記事は、かかる「原情報」ではなかったろうか。さらに想像を逞しうするならば、遅くとも「一月七日頃」には在京したプロニスワフ・ピウスツキが情報提供者で、しかも原情報は、ひよ

つとすると二葉亭四迷という達意の通訳を介して東京で行われた、報知新聞記者によるインタヴューの所産だったかも知れない。在京中のピウスツキは一九〇六年「一月七日頃」、二葉亭宅を訪問している（沢田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」¹⁵¹頁）からである。

九 この「便船」がいつ、日本のどこに入港したのかは今なお不詳である。ピウスツキは友人のニコライ・マトヴェイエフ、その十一才の娘ゾーヤとともに、日露戦争終結後に日本へ向かう便船で浦塩をあとにした。ロシア資料によると、彼らの出国をめぐっては一九〇五年十一月末（露暦）と、十二月四日（露暦）グレゴリウス暦では同十七日）の両説がある（沢田前掲論文¹⁵¹頁）。

ゾーヤの来日は重篤な脚部疾患の治療が目的であり、事実、福岡医科大学病院に入院して手術を受けている（前掲論文¹⁵¹頁）。してみると、彼らは何を描いてもまず福岡へ直行したのではなからうか。その観点から上陸港を絞ってゆくと、浦塩から至近という意味では敦賀、そして福岡に至近の門司の2港のいずれかに落ち着くであらう。

一〇 プロニスワフ・ピウスツキ。

- 十九才の時國事犯罪の爲め西へ比利亜に放流され、「今茲三十九歳の春を迎へ」多くの月日を西比利亜、「勘察加」、「サガレン等」に送くる内、「豫て文學の素養ある人なりければ」、「ア」イヌ語の研究を試み頗る造詣する所あり、「今」其著述「二」を懷にして來朝したるは、「日本に於て」之を印刷に付し、「日本の學者と共に之を研究」せんと欲するものより、「言語學、古物學者に有」益のものとるは深く自信する所なりと、「又た」其一人はマトエフ「三」と稱し、「浦鹽及びニコリ」スクにて久しき以前より新聞紙を發行したるが、「戦争中は中止し」、「今回再刊を試むるに付」き、「日本の寫眞其他の材料を蒐集し」、「併て印刷」の設備をも日本に於て整る爲め來朝したる「なり」と、「因みにマトエフは函館にて生まれたる」ものにて數次來朝し、「非常の日本崇拜者にて」、「開戦前露國の極東政策に反對し」、「之が爲め發」行停止の厄を蒙りたることも一度ならず、「今回」は足痛の令嬢をも伴ひ來り、「福岡病院に入院」せしめ、「日本醫士の手術を受けつゝありと」、「前」者はセントラルホテル「四」に投宿し、「後者は長崎」に在り、「令嬢の全治を
- 一 ピウスツキがシベリアやカムチャツカに滞在した事實はない。取材者の聴違えであらう。
- 二 この「露文」著述の縮約稿は上田将によつて日本語に翻訳され、京華日報社の月刊誌に發表された（ビルドスキー「樺太アイヌの状態」一九〇六年刊）。この論文は、ピウスツキによるアイヌ研究の処女作である。「著述」の露文元稿は一九〇七年に浦塩で公刊された。
- 三 ニコライ・ペトロヴィチ・マトヴェイエフ（Николай Петрович Матвеев 1865-1941）。ニコライ・アムールスキー等と号する詩人でもあった。日本で生まれた最初のロシア人といわれ、ロシア革命後の一九一九年には日本へ亡命、神戸で生涯を終えた。
- 四 ピウスツキは一九〇五年十二月末か翌六年一月初旬、「東京築地」の「セントラルホテル」に止宿したことが判明している（沢田「プロニスワフ・ピウスツキ日本曆」151-152頁）。

待つとも
待て共に上京す可しと

『北海タイムス』第5533号（一九〇六年一月十日付）

●浦汐より二人の珍客

最近の便船にて浦汐斯德よへり來朝したる二人の珍客あり。其一はビマールドスキー、と言ひ、波蘭人にして十九歳の時國事犯の爲め、西比利亞に放流され、多くの日月を西比利亞、一勘、察加、ニサガレン等に送くる内、文學の素養ありしを以て、アイヌ語の研究を試み、頗る造詣する所あり。其の著述を懷にして來朝し、日本に於て之れを印刷に付して、日本の學者と共に之れを研究せん、と欲する由。又た其の一人はマトエフと稱し、浦汐、及びニコリスクにて久しき以前より新聞紙を發行したるが、戦争中は中止し、今回再刊を試むるに付、き、日本の寫眞其の他の材料を蒐集し、併せて印刷の設備をも日本に於て整ふる爲め來朝したる由にて、同氏は函館にて生まれ、二非常の日本崇拜者にて、開戦前露國の極東政策に反對し、之れが爲め發行停止の厄を蒙りたることも一再ならずと云ふ

『馬關毎日新聞』第4439号（一九〇六年一月十日付）

●浦鹽よりの珍客

最近さいきんの便船びんせんにて浦鹽うしん斯德らいてうより來朝したる二、人の珍客ちんかくあり。其一はビルドスキーしやうと稱し、二波なみ、蘭人らんじんにして十九歳さいのとき國事犯罪こくじはんざいの爲め西にし、比利亞はりあに放流はうりうされ、今茲いまこゝに三十九歳の春を迎むかへ、二多くの日月にちげつを西比利亞にしりあ、二勘奈かな、二察加さか、二サガレンさ、等に送おくる中、二豫よて文學ぶんがくの素養そやうある者なりけれ、ばアイヌ語あゐぬごの研究けんぎゆうを試み頗る造詣さうけいする所あり。二今いま其著述ちやくしゆつを懷いだにして來朝らいてうし、は、二日本にっぽんに、於て印刷いんさつに付し、二日本の學者がくしやと共に之これを研究けんきゆう、二せんと欲ほつするもの、由よし、二言語學げんごがく、古物學こぶつがく者に、二有益いうえきのものたるは深く自信じしんする所なりと。二又また、其一人はマイエまいえ、二エフと稱し、二浦鹽うしん及びニコリニコリ、二スクにて久ひさしき以前いぜんより新聞紙はつかうを發行はつかうしたるが、二戦争せんそう中は中止ちゅうしし、二今回こんかい再刊さいかんを試むるに就き、二日本にっぽんの寫眞しやしん其他その材料ざいりうを蒐集しゆしふし、二併あはせて印せつび、刷はの設備せつびをも日本にっぽんに於て整とこなふる爲め來朝らいてうせしなりと。二因よなにマイエまいえ、二エフは函館はこだてに生うまれたる、二にて、二數次しばしば到來たうらいし、二非常ひじょうの日本崇拜者にっぽんさいはいしやにして、二開ひらく、戰前露國せんぜんろうこくの極東政策きくとうせいさくに反對はんたいし、二之これが爲め發行はつかう、停止ていしの厄やくを蒙ありたること一再さいならず。二今回は令さい、嬢むすめをも伴ともなひ來たり、二福岡病院ふくおかびやういんに入院にふあんせしめ、二日本にっぽん、博士はくしの手術しゆじゆつを受けしめ、二ありと。二前者ぜんしやはセン、二ト랄ホテルとらるほてるに投宿とうしゆくし、二後者こうしやは長崎ながさきに在り、二令れい、嬢むすめの全治ぜんちを待て共に上京とうきやうすべしと。

『東京朝日新聞』第7000号（一九〇六年二月八日付）

●露国人類學者

人類學上比較研究の爲め今回來朝したる露人ピルドウスキー氏一五に對し、理科大學人類學教室にても種々に研究の便宜を與へられ、再昨日は同教室の鳥居龍藏氏をして北豊島郡西ヶ原の貝塚へ案内せしめ、種々なる土器の破片、石器等の表面採集を試みられたり。氏はまた熱心なるアイヌ研究者の一人にして、毎日に府下の骨董店を廻り研究材料を募集中なるが、同氏は日本の石器時代種族とアムール附近の石器時代種族とは近似の點少く、からず、又日本にても石斧を雷の斧といふが、如くアムール下流のギリヤーク種族にも同様の稱呼ありといへり。尚同氏は本月中を以て本の研究に費し、一度故郷の波蘭に歸り、夫より再び樺太に渡りて引續き人類學上の研究に従ふ筈なりと。因に氏は十八歳の時に國事犯人として幽囚せられ、九年の後樺太に逐はれてより、自由ある囚人として十二年間を同一地に送り、其間は看守附にて樺太内地及び黒龍江畔を遍歴してアイヌ、ギリヤーク、オロツコ等の研究に従事し居たる人なり。

一五 プロニスワフ・ピウスツキ。

『報知新聞』第10384号（一九〇六年三月九日付）

●日本婦人の研究

（波蘭人ピルストスキー氏）

目下來遊中なる波蘭人ピルストスキー氏一六は、二戰勝の光榮を永く青史にとゞめて我邦へ名將勇卒の母なる日本婦人の研究をなさへんとて、一昨今重なる婦人教育家其他に就き種々質問する所あり。一今某女史と氏との問答を得たれば、一左に之を摘記せんに、一問「欧州各國の男女比較割合は、一大約男百人に對し女百一一人を示して、一近來男子中、一學術研究の爲め若く一は他の理由の爲め、一獨身生活を爲す者非常に増加せり、随つて女子が配偶者を得難くなれる模様なり。一貴國にては左様の傾向はなき一か」二答「我邦は未だ左程の事は無き様なるも、一一年々男女結婚年齢の遅くなれるは統計の示す所なり」三問「然らば此等若き未婚の婦人は、一何等の事業にか従事するや」四答「然り、一生活問題に關すると否とに係らず、一若き婦人が専ら一獨立自活の途に就かんとするは一般の趨勢一なるが如し」二問「貴國に於て嘗て甚賤しまゝれたる穢多非人等の階級に向つて、一如何に取一扱はれつゝありや」三答「我國

に愛国婦人会なる団体あり。二嘗つて藝者といふ醜業婦等。何等かの縁にて此の団体に仲間入りせし事。二後に、至りて會員等の知る所となり。一爰に、問題の、起りたる事ありしも、一穢多新平民の斯る問題の起りしを耳にせず。一問「看護婦となる」婦人の多くは、一何の目的に基くか。二答「多くは、生活問題よりなるべし。三問「上流下流何れの、社會の婦人に未婚者多きか。二答「上流中流は、生活難に遠き為め、二下流よりも結婚難多から、一「随つて未婚者も少きが如し。三、云々。二如此氏、は諸種の質問を放つて、一日本の婦人を多方面より觀察研究しつゝあり。二尚本日も某々等二、三の女史と會見の約ありと

『北海タイムス』第5592号（一九〇六年三月二十日付）

●外人の日本婦人研究

京橋區銀座通り二丁目洋酒店函館屋方にポーランド人ビルスドスキーと云へるあり。一滯京中の目的は日本婦人の研究にありとて、一朝野の才媛貴女を訪問して次の如く質問を試みつゝあり

一七 プロニスワフ・ピウスツキ。

▼日本婦人が政府に向つて參政權を要求するに至りし眞意▼世界各國の婦人に比して日一日本婦人の優美なる理由

▼日本婦人の結婚感一想▼日本婦人の職業問題に於ける意見▼一一般婦人の穢多又は非人に對する感情及び所一

爲▼非人及び穢多社會の婦人の現状▼現一今日本婦人の教育程度に關しての意見

その他
そのた
かうせんちう

にほん
にほん
ふじんくわつどう

じつきやう
じつきやう

ふじんかい
ふじんかい

ばん
ばん
りうかう

ぞくやうとう
ぞくやうとう

てうさ
てうさ

うへ
うへ

かくふじん
かくふじん

きくと
きくと

其他交戦中の日本婦人活動の實況、婦人界一一般に流行する俗謠等にて、一調査の上は、各婦人より一聞取りたるもの

そうがふ
そうがふ

こ
こ
あやし

ちつ
ちつ

せかい
せかい
はつべう

はす
はす

を綜合して、一個の著書と「な」し、一以て一世界に發表する筈なりと

一九二一（明治四十四）年

『樺太日日新聞』1289号（一九二一年十月十三日付朝刊）

●外人のアイヌ研究

波蘭人ペルスードスキー^{ポーランドじん}と稱する博物^{せうぶつ}學者は日露戦争以前樺太にありて南樺^{みなみから}太のアイヌに就き普く研究する所あり^{ところ}。其後、戦端の開くると同時に本國に引揚^{ひきあ}げたりしが、今回、奥國のクラコフス^{クラコフじん}の學士^{がくし}會にて右研究の結果を著述して出版に附する事となりたれば二〇二参考として現在、アイヌ人の生活狀態其他に付き通信ありたりしとして、ペルスードスキー氏は知人より秋元通譯官^{あきもとつうやくかん}の友人某氏^{ゆうじんぼうし}へ申越し、某氏より更に秋元氏へ依頼

一八 プロニスワフ・ピウスツキ。

一九 「クラコフス」はポーランドの古都クラクフ（Kraków）であろう。この町は当時、オーストリア・ハンガリー帝国の統治下にあつた。

二〇 「研究の結果」の「著述」とは、一九二二年にクラクフの人文・科学アカデミー（Akademia Umiejętności w Krakowie）が上梓したピウスツキの名著『アイヌの言語・フォークローア研究資料（Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore）』のことである。

二一 秋元義親。千徳太郎治著『樺太アイヌ叢話』（1929）は一九〇六年の出来事として、「余は樺太廳高等通譯官秋元義親氏や北海道農大校「札幌農学校」の茅部氏及南氏の両先生^し、和田、栃内、柳川の諸官と榮濱港より御用船に乗じて、夏季のシシカ「敷香」方面に航海し、……」（92頁）と記している。秋元義親については『東京外国語学校史』（不二出版、2008）にも数ヶ所言及があり、同校卒業（1900）後の消息を、陸軍通訳官（1902-5）、樺太民政庁通訳官（1908）、露領水産組合幹事（1917）、日露協会勤務（1919）と伝えている（422、446、459、

し來たれりと

『樺太日日新聞』1289号(一九一一年十月十三日付朝刊)

時事片々

○波蘭の博物學者ベルスト^{マスキ}三氏^シが、埃國學士會に於て、「我がアイヌ研究の、結果を公表せる由^{よし}」アイヌ研究の外人と^いして名高き者、一目下來邦來遊中の米國博^シ士スター氏^三あり。「かのバチエラー氏^二四の如^{ごと}き、一亦重なる一人者に數ふ可し。アイヌ人^シ種が唯學術上より珍重せらるゝ事は、生^{せい}存競争の敗者たる彼等としては寧ろ自^{みづか}ら慰むるに足るものあらん。吾人は同胞^{ごじん}として多數のアイヌを有す。彼等が單に^{たん}學術研究の一資料と目せらるゝ程に憐^れなる状態にある事は、吾人の哀憐に耐^たへざる所。之れをし^も其所を得せしめ生^{せい}安^{あん}を得せしむに努むるは、吾人が同胞に^{たい}對する道德上の責任也。従^{したが}つて記者は政^{せい}廳の土人保護政策の行^ゆ亘るを賛し、且此^{かつこの}を

た^らる。したがつて一九一一年には樺太庁通訳官であつたろう。なお、千徳の伝える「稲川(通訳官)」は、ピウスツキとも交流のあつた稲川猛(竹治)であらう。「秋元通譯官の友人某氏」は、ひよつとすると稲川であつたかも知れない。

二三 本記事では第5音節が清音化されており、こちらの方がより「正しい」。

二四 米国の人類學者フレデリック・スター(Fredric Star)、当時の日本では「御札博士」として有名であつた。

二四 英国長老派教会の宣教師ジョン・バチエラー(John Batchelor)。バチエラー本人の著述を含め、日本語文献では「バチラー」とも表記されている。

上^うへ
と^ちも
注^ち意^う
あ^いり
度^たく
希^き望^ぼ
す^うる
者^も

一九三四（昭和九）年

『樺太日日新聞』7936号（一九三四年一月七日付朝刊）

樺太の旅（一）

◇……………菱沼右一二五

正月樺太へ旅するの^{たび}は、「私の年中／行事になりさうだ、昨年も正月二／日に東京を出發して樺太へ來た、／今年^{にち}は元旦^{たん}に家族と共^{ぞく}に明治神宮／に赴^{おもむ}いた

◇

皇太子様の御誕生^{たん}日の正月である／丈^{だけ}に、「數十万人といふ初詣^{まい}りの人／で、「流石^{ひろ}の廣い明治神宮も動き^{うご}が取／れぬやうな賑^{にぎ}はひだつた

◇

二五 菱沼右一（1883～1944）。『報知新聞』『国民新聞』の記者・社会部長・理事を経て、『樺太日日新聞』の主筆となる。一九三一年、東京で「中央情報社」を創立して社長を務めた。なお、文筆活動としては、葛西猛千代・西鶴定嘉との共著書『樺太の地名』（一九三〇）などがある。

今年の東京も温かだつたが、「樺太」は又尚温かい、雪綿のやうな雪だ。「内地で見るやうな雪が亜庭湾に煙つて降つて居た、船は静かだつた。」唯雪煙の為にスローで、滑るやうに走るのである



函館の車中で話伴れになつたポーランドの青年新聞記者アレキサンダー、ヤンタ君と同船した二七、傍に恐ろしい大きな聲で船長や驛長と話をして居る男が居る、馬占山とは元友人だつたことや、満洲建國當時の話などやつて居る



黒鐵ぶちの眼鏡の中から強い眼、光が光つて見える、彼は馬賊の頭、目ではないかと思つた、けれど、何處かに見たことのあるやうな感じ、がした、さうだ、「寫真で見たことの、ある顔であることを起想した

正しくはアレクサンデル・ヤンタ『ポウチンスキ (Aleksander Janina-Polczyński 1908-1974)。ポーランド人のジャーナリスト・作家。彼は『地球は丸い』と題する旅行記(1936)に、南樺太でプロニスワフの遺族を尋ねる旅の記録を収めている(ヤンタ『ポウチンスキ「樺太のポーランド人たち」井上編』ポーランドの研究者ピウスツキの仕事』109-142頁所収)。

『樺太日日新聞』同日付の「人物往来」欄は、「四日宗谷丸入港」アレキサンダ、ヤンタ、石塚通良、大橋忠一、菱沼右一、一木武彦、武田新太郎、徳永賢久、外二等船客五七名」と記載している。旅客64名を乗せて一月四日に稚内を出港した「宗谷丸」は、同日、大泊に入港した。



さうだ大橋忠一、満洲國外交部、次長、事實上の満洲國の外務大臣である、さうだ、話を聞いて居ると、確實であることを認めた。『間違つたら御免なさい、貴下は大橋サンではないですか』



『さうです、大橋です』

『寫眞と話の具合で知りました』

ヤンタ君にその話をすると、

『満洲に在る時に三度程訪問したことがあるが、會うことが出来なかつたんです、紹介して呉れ』との話だつた



ヤンタ君は年が若い、實に好く、東洋の諸問題や各地の事情に精通して居た。三人の話はそれからそれと半日もたい、續いた

『北海タイムス』第15358号（一九三四年一月八日付朝刊）

国際悲戀、酋長の娘に／廻る卅年目、喜びの春

今を時めくポーランドの陸相／探ねる義妹は樺太に

【豊原發】樺太が未だ領有にならぬ以前、西暦一千八百九十六年（明治二十九年）のころ、當時のサガレ／ンに追放されて來てゐた囚人の教／化訓育の為に政府から派遣された、／當時モスコ／大學教授で人類學者／である

ポーランド人ブリード／スキー氏（當時三〇）が、サガレン土／着のアイヌ研究の爲現在の東海岸／アイハマ部落に滞在中、酋長二九の娘シンキンチョウ三〇（當時一八）と戀に落ち、遂に酋長の許を得て結婚同棲、二

二八 プロニスワフ・ピウスツキ。「ブリードスキー」は Piusdzki が不正確に表記された形と推察されるが、能仲文夫の『北蝦夷秘聞——樺太アイヌの足跡』に見える「ブリードスキー」が初出のようである。能仲はその直後に括弧書きで「アイヌはプズスキーと呼んでゐる」と注記している（同書 2頁）。因みにヤンタ／ポウチンスキ（注 二六参照）は、日本人がピウスツキを「Pronisraw Pridski」と呼んでいた、と記録している（Janta-Poleczyński, Ziemia jest okryta, s. 281）。

二九 東海岸アイ・コタンの村長（日本語文献では「酋長」「東海岸の酋長総代」とも記された）バフンケ（アイヌ）。日本名は木村愛吉。

三〇 シンキンチョウ、正しくはチュフサンマ（1879-1937）。バフンケ「酋長」の「娘」とあるが、『樺太日日新聞』一月十日付詳報では「姪」に訂正されている。なお、ヤンタ／ポウチンスキはこの女性を、「バフンケ酋長の娘（corka naczelnika Bafunke）」の「シンキンチョ（Sinkincio）」と記録する（Janta-Poleczyński, s. 282）。傍らで「名前はキムラ、シラカワ、ジュサウンマ（Kimura, i Strakawa i Dziusanna）」と言った。それが一番正確な名前で、それが現在の名前なのか決定するのは難しかった」とも記している（ヤンタ／ポウチンスキ「樺太のポーランド人たち」135頁、Janta-Poleczyński, s. 286）。

人の仲にな^り男女二人の子供まで上^りげたのであつたが、「其後日露戦争が起^り、二ブリードスキー氏は實兄でゝあるピルツ・「マゴスキー氏三」の指揮する祖國ポーランドの

▼独立運動に参加の爲^め、必ず歸るとの言葉を残して單身歸國したのであるが、「其後更に歐洲戰亂」が勃發^{はつ}、ポーランドは完全に獨立する事が出来^き、一兄ピルツ・スキー氏は大統領^{だいとうりやう}に當選^{たうせん}、茲^{ここ}に始めて兄弟積年^{けうだいせきねん}の目的を達^{たつ}する事を得たが、「二ブリード・スキー氏は妻子との約束を果^{はた}す事が出来ず、遂に巴里で客死してしまつた。」世相移り變つて三

▼十年になるが、「夫の死亡」も知らず、「今も歸らぬ人を待ち倦^うみ、眼を泣きつぶしたシンキンチョウ」は、「夫に堅く口止めされてゐたので、人に語らず、此の事實を知るものがなかつたが、「一人之を知つてゐた兄」のピルツ・スキー氏は先年「東京在」任^{にん}ポーランド公使館員に命^{めい}じ、「密に」その遺族を探ねさせた事があるが、「彼等親子の行方は杳として知れなかつた處」最近同じく東海岸シラハマ部落に細々乍ら

ユゼフ・ピウスツキ (Józef Klemens Piłsudski 1867-1935)。プロニスワフ・ピウスツキの年子の「実弟」。一九一八年に國家の再建を果たしたポーランドの政治家。その際、ユゼフは新生ポーランド共和国の初代「元帥 (marszałek)」として國家首席に就任した。しかし、その後大統領になることはなかつた。

▼暮してゐることが判明したので、「ポーランド公使館に寄」寓してゐる同國新聞記者アレキ・サンダー・ヤンタ氏は、「公使館の依」頼を受け、「去る四日」「連絡船で調査の」為來島。「目下豊原に滞在」「事實取調中」であるが「八日シラハマへ彼等親子」を訪問することになった。「ポーランドの元大統領」「現陸軍大臣を

▼義兄にもつ名士のメノ・コ、シンキンチヨウの家族にも、「重」ねて春が訪れたものではあるまいか。「人情に國境のないと云ふ初春らし」い嬉しい話である（寫眞「省略」は義妹を「探ねる」ピ陸相）

『樺太日日新聞』第7937号（一九三四年一月九日付夕刊）

波蘭陸相の「義妹（アイヌ）」を尋ねて「波蘭新聞記者來島

陸相の内命により白濱に實情を探る「アレキサンダー・ヤンタ氏

我が樺太が露領「當」時「露國はこ」の島の開拓を囚人に依つて爲さん」と企て、「今の大泊町楠溪町（コルサ）に監獄を置き」「本國より重罪」犯人をこの島に護送したのであつた。その頃露國政府の命を受けて「囚人の教化訓育と云ふ大任を帯び」て本島に渡つたポーランド人の理「學士があつた。その名はプリード」スキー氏三三であ

三三
プロニスワフ・ピウスツキ。以下では、「ボ氏」と記された一例を除き「ブ氏」と略記されている。

- る。プ氏は其他囚徒^{たしうと}の訓育^{いく}と共に土人アイヌの教育^{けついく}にも努め、一八八六年（明治廿七年）三三、春頃から一九〇四年頃迄居たが、一日、露戦争^{ろせんそう}の眞唯中^{ただただ}に祖國獨立^{そこくどく}のため、歸國^{きこく}した。一在島當時ボ^{マゴ}氏は白濱^{はま}正しくは相濱^{さへま}土人部^ぶ落^{らく}の酋長^{しう}の娘シンキンチョウトと、結婚^{けつこん}同棲^{どうせい}して二児^{にこ}を儲^{まう}けていたが、一、祖國復興^{そこくこう}の大任^{だいじん}を重んじ、一妻^{つま}と二児^{にこ}を樺太^{のこ}に残^{のこ}して専心^{せんしん}努力^{どく}した甲斐^ひあつて、一其後「ボーランド」獨立^{どく}した三四、プ氏の兄は、（ピルスキー氏三五）大統領^{とうりやう}に當選^{せん}したが一、プ氏はパリで客死^{きやくし}した。ピ氏は現在^{げん}同國^{りく}の陸軍大臣^{りくぐん}の要職^{ようしやく}に在る。謎^{なぞ}を残^{のこ}して他界^{たかい}した實弟^{じつてい}の「妻子^{さいし}を探^{さぐ}すべく手を盡^{つく}した」ピ氏は、一其後、一本社^{みん}社員^{のなか}たりし能仲文夫^{のなか}氏の著作^{さく}に成る北蝦夷秘聞^{へいしひ}三六に依^よつて、一實^{じつ}弟^{てい}プ氏の愛妻^{あいさい}とその子等^{こら}が樺太^へに生^{せい}在^{ざい}してゐる事を知り、一直ちにボ^{マゴ}ーランド電報通信社^{でんぱうつうしん}東洋特派員^{とうやくはいん}アレキサンダー、ヤンタ氏に依頼^{いらい}、「一切^{いっけつ}の事情^{じやうけ}を知らんとしたのである。一その命^{いのち}を受けたヤンタ氏は去る四、日、一突然^{とつぜん}來島^{らいじま}して豊原町花屋本店^{はなや}三七に、滞在^{たいざい}、一殘留^{ざんりゅう}ボ^{マゴ}ーランド人等^{にんらう}に依^よつて、一その眞相^{しんさう}を突き止^とむべく努^{つと}めてゐるが、一愈^{いよく}確證^{かくしやう}を得たものの如く、一八、一日午前八時十分豊原發新聞^{とよはらはつしんぶん}行きの、一列車^{れつせん}の人となり、一中央情報社長^{ちゆうやうじやうほう}である菱沼^{ひしぬま}右二氏
- 三三 ピウスツキは一八八六年七月八月、コルサコフスク管区（日本統治下では「南樺太」に短期滞在した。この年は明治二十九年に当たる。
- 三四 ボーランド共和国の獨立は一九一八年十一月十一日、プロニスワフの死から半年後に成就する。
- 三五 ユゼフ・ピウスツキ。以下では「ピ氏」と略記。
- 三六 書名は『北蝦夷秘聞——樺太アイヌの足跡』。能仲文夫（1907-1986）は樺太日日新聞記者、外地評論社社長兼主筆を経て、拓殖省・南洋庁・朝鮮台灣總督府・滿鉄・南洋開發で嘱託を務めた。戦後は星光化学工業社長。このほかに『血に彩られた北樺太…現状と資源』（中央情報社、1965）、『赤道を背にして——南洋紀行』（復刻版 東京：南洋群島協会、1990）などの著書がある。
- 三七 豊原市大通北一丁目に所在した伊藤かつ経営の「花屋旅館」の本店。

と共に目的地白濱に、向つた、ヤンタ氏は同地に二泊の後、二十日には一先ず豊原に引返す豫、定であるが、「一生在マ
ミするシンキがプ氏」の妻であつた事が確實となれば、「ピ」氏の下へ連れて行くとまで話は進んでゐるので、「この
エキゾチックな」物語りは、「昨春紙上を賑やかした伊」太利大使の娘松島事件と共に、「今後」如何に展開して行く
か？ その成行、きは興味を以て注目されてゐる（「寫眞は白濱に向ふア氏と菱沼氏」、「豊」原驛頭にて「写真は品質劣悪
のため省略」）

『樺太日日新聞』第7938号（一九三四年一月十日付朝刊）

愛し夫よ何處？、三十年の戀を秘め、老メノコは泣く

濱茄子の丘に結ばれた若き日の戀、戀て恵まるゝ歡び

風凍るオホツクの海邊に咲いたピリカメノコ三八と異國人三九との戀は相濱ウタリの憧れの花だつた。内淵川の水嵩が増
へて、單調な砂濱の丘にも戀て濱茄子が眞紅に咲いた。其頃の二人は一番幸福だつた。……明治三十七年四〇、東亜の

三八 バフンケの姪、チュフサンマ。当時の新聞は能仲文夫に倣つてシンキンチョウと記した。能仲の記すところによると、当時の彼女は「ま
だ十八になつたばかりの小娘」（『北蝦夷秘聞』7頁）であつた。「ピリカ・メノコ」はアイヌ語で「美女」を意味する。樺太の日本人
社会では当時、このアイヌ語が格別の説明なしに通用していたことが窺われる。

三九 ブロニスワフ・ピウスツキ。前日の夕刊に載つた速報は「ブリードスキー」、本記事では「ブブスキー」と表記されるが、いずれも不正
確である。以下では「プ氏」と略記される。

風雲は急を告げて日露の國交は斷絶した。平和だつた白濱ウタリの生活にも何かしら慌しいものと、重苦しい、空氣が流れて行く……それは、オホツクの海も悲しげに吠ゆる大雪の夜だつた。祖國の爲め、兄のため愛し妻と、二人の子を遺して此の地を去らねばならない男の苦しい胸を、充分知りながらもシンキは何故かしら腹が立つた。呪はしい戦争よ、――それから二十何年かゞ経過した。シンキは今盲目となつて佻しい生活を送つて居るが、其見えない瞳の奥には今尚、冬の日に別れた、夫の悲しい顔があり――と見えるのだ。奇しき縁に結ばれた若い日の懐かしい思ひ出が、涙と共に湧き出て来る。シンキは未だに別れた夫――が歸つて来るものと信じてゐる。然しその夫は祖國の獨立運動に狂奔の途、夢寢にも忘れることの出来ない遠いサガレンに遺して來た――妻子の身を想ひながら祖國の土と化した。盲目の老メノコは泣けど、内淵の砂丘に咲く濱茄子の實は熟れても、この涙に綴られた悲しい物語りは盡きようもしない……だが然し、シンキの涙が涸れて、纏て樺太にも新春の歡びが訪れる頃、シンキと其二人の子にも輝――かしい光が映えようとして居る

ピリカメノコに寄せる――若き教授の戀情――「情けの酋長」の微笑

物語りは今から三十數年前の明治――二十九年四月頃――遡らねばならない。――其頃の樺太は流刑徒の島だつた……北國の春は遅い。四月だと言ふの――に亜庭灣の一帶には未だ厚氷が浮――游して、肌寒い風が吹いて居る。――「西能――登呂

四〇 一九〇四年。日露國交斷絶は、この年の二月四日のことである。

四一 一八九六年。プロニスワフはこの年の七月八月、北サハリンのルイコフスコエ(ルイコヴォ)から徒刑囚身分のまま南サハリンへ派遣され、アイヌの人たちと初めて接触する。但し、その使命は「出獄囚徒の訓育」でなく、測候所の設営であつた。

岬を迂回した一隻の軍艦は、一多數の囚徒を乗せて今コルサコフ（楠溪町）を指して進路をとつてゐる。艦内では頭髮を半剃りにした一物凄しい形相の囚人が、何か判らぬ一ことをわめいて居た。其都度看守一の鞭がピュー／＼鳴つた。凄惨な一光景である。かうした荒くれ看守一連の中に交つて先生と呼ばれて居ゐる若い紳士があつた。一体この若い紳士は何者であらう。當時露國一政府が出獄囚徒訓育の爲め樺太へ一派遣したモスコ大學教授ボーラ一インド人プ／＼マ／＼スキー氏四二であつた。一コルサコフに上陸したプ／＼スキー一教授は之等の囚徒教化の爲め更に一九月下旬コルサコフを發して、殖一民部落訪問の旅に上つた。斯くて一プ氏が全島を跋涉して相濱の土人一部落に入つたのは五月初旬であつた。當時相濱には樺太東海岸アイヌの總元締とまで言はれた木村バ／＼フンケ四三が住んでゐた。プ氏はバフ／＼ンケ會長の好意に依り、こゝに暫一らく逗留することになつた。會長一には一人の美しい姪があつた。名一をシンキンチヨウと呼んだ。まだ一十八になつたばかりの乙女であつたが目の涼しい可愛い娘だつた。一ピリカメノコとして相濱の若者達一から騒がれたものである。聽てプ／＼スキー教授とシンキの間に越え一てはならない異國人同志の戀の花一が咲いた。教授はシンキの爲めな一ら一生この相濱に止まつてもいゝ一と思つた。そして自分の使命で一あ

四二 能仲の伝える「プズスキー」の誤記であらう。なお、ピウスツキはここで「モスコ大學教授」と紹介され、前日の速報でも「理學士」と謳われているものの、ペテルブルグ大学法学部一年在学中に逮捕・流刑となつたから、高等教育を修了して学士号を取得した事實はない。

四三 相濱の「會長」バフンケ（アイヌ）。日本名は木村愛吉。

る囚人の訓育と、「この哀れな亡び／＼行く民族の教化に努力しよう」と決心した。シンキもプブスキー／＼氏の眞摯な態度、物に動じぬ男ら／＼しい魂にどん／＼引き付けられ／＼て行つた。狭い部落には二人の仲／＼が知れ渡つた。美しいメノコを異／＼國人に取られた……さう思ふとプ／＼氏を怨んだ。然し「親切なロスカ／＼イ」で通つてゐる彼に對して怨み／＼を口にするような者は一人もな／＼かつた。叔父のバフンケも濱茄子／＼の丘で戀を語る二人の姿を何遍も／＼見受けた。「そんな時はバフンケ酋長／＼は見て見ぬ振をして居た。寧ろ頼母／＼しい青年に相倚る愛し我が姪の幸／＼福を祈るのだつた。二人は何もか／＼も知つてゐる情の酋長……バフン／＼ケの取計らひで、「秋も漸く深くなつ／＼た九月下旬、全部落民が集まつて／＼盛大な結婚式を擧げた四四。花婿は三／＼十才、シンキは十八才であつた四五

哀れ、愛を捨て／＼祖國の獨立運動へ／＼悲劇の第一頁はこゝに……

プブスキー氏とシンキの間は其／＼處に異人種を超越した力強い愛に／＼結ばれて、「朗らかな家庭が營まれた。二人の間には間もなく一男一女が／＼儲けられた。プ氏の土人教化事業／＼もシンキの内助の功に依つて一段／＼と業績が擧がつ

四四 もしピウスツキがこのとき「三十才」だったとすると、結婚式は一八九六年九月に行われたことになり、シンキはまさに十八才だった。

彼は確かに同年七／＼八月、測候所設営のため南樺太に滞在するも、九月にはすでに立ち去つていたので、結婚式はおろか早春の恋語らしいもありえなかつた。ピウスツキが次に同地を訪れるのは一九〇二年の秋、アイ・コタンに居を定めたのは十二月半ばだから（拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」本書87頁）、結婚式は「一九〇三年」の九月下旬以外には想定不可である。彼は同年九月二十四日（露曆）、北海道アイヌ調査を終えてコルサコフ（大泊）に戻つてゐた（本書875頁）。

四五 一九〇三年九月当時の年齢は、花婿が三十七才、花嫁は二十五才であつた。

た。このまゝ平和な生活が續いて行つたら今日のよゝうな悲劇は生まれなかつたかも知れぬ。……明治三十七年、日露の國交が斷絶した。平和なプルスキー一家も何か不吉な空氣に襲はれるよゝうな豫感がしつてならなかつた。果してプ氏の兄から毎日に亘つて秘密電報が齎されて、プ氏の兄ピルースキー氏四六は祖國愛に燃ゆる勇敢な闘士であり、革命家であつた。日露開戦四七を機會に多年虐げられた帝政の羈絆を脱して往年のポーランド國を獨立せんと企てたのであゝる。秘密電報とは、この獨立運動に參加せしむべく弟のプルスキー氏の蹶起を促さんとしたものであゝる。プ氏は今や躊躇すべき秋四八でなゝいと考へた。然し最愛なる妻、そして愛しい二人の子を思ふとプ氏の決心も鈍り勝ちだつた。……秘密電報はひつきりなしに配達される。プ氏は最後の決斷をせねばなゝらぬ時が來た。それは「旅順陥落」の報を手にしたからである。――さうだ俺は露國の爲め死んではゝならぬ。俺は祖國ポーランドの再興に努力せねばならぬ。それは責任だ。……プ氏の心には俄然祖國愛が燃えさかつた。破壊された愛、悲しき別れの發端はかうした「呪」はしい戦争の爲めだつた。櫓は吹雪を衝いて遠ざかつた。

四六 ユゼフ・ピウスツキ。前日夕刊所載の速報では「ピルスキー」とあるが、本記事では初出で「ピルスツキ」とかなり正確な形に近づくものの、それ以降は「ピルスツキ」という表現が繰返されている。ユゼフは「兄」ではなく、プロニスワフの年子の「実弟」。

四七 日露戦争は一九〇四年二月十日（露曆一月二十九日）に勃發した。

四八 本記事の著者は「秋」と読ませるつもりと付度される。因みに、これは能仲文夫の『北蝦夷秘聞』に散見される用語法である。ここからも、同書は記者の依拠した種本であつた事実が端なくも窺える。例えば該箇所は、「プ氏は今は躊躇すべき秋ではないと考へた」（同書13頁）と記されている。

て行つた。―放心したシンキが兩児を抱いて夫―の心を追ふた。涙の第一日、悲劇―の第一頁、可憐なシンキの胸は裂けようとした

夫の死も知らず―歸宅を信ず―獨立の犠牲になつたプ氏

歸國したプ|スキー氏は兄ピルツ―ス―マ―キー氏と共に祖國の獨立運動に―狂奔した、然し帝政露國の看視は―日露戦争後更に嚴重を極め―容易に―実績が擧がらなかつた。或時は國―外に逃れ、或る時はひそかに入國―して同志の糾合に努め、血みどろ―の苦闘が十年近くも續けられた。―生死の境を彷徨する危険な身であ―れば、サガレンに遺して來たシン―キや愛児のことは忘れるともなく―忘れられるのであつた。聽て歐洲―大戰後ピルツ|スキー一派の策謀―が効を奏し、亡國ポーランドは輝―かしい前途を約束して、―再び獨立國―として世界地圖に新たに描き出さ―れた。國都ワルソーには破れんば―かりの歡聲が嵐の如く擧がつた。―第一次の大統領マ―四九として輝かしい新―興國を荷なつて起つたのは、―云うま―でもない革命運動の第一人者ピルツ|スキー氏であつた。ピ氏はこの―大命を荷ない始めて祖國の新たな―る姿を凝視した時、其所に貴い犠―牲者の一人である愛弟プ|スキー―氏の面影を追想するのだつた。プ―氏は國事に奔走の渦中、獨立の成―果も見ず、サガレンに遺して來た―妻と愛児の名を呼びながら巴里で―客死して居た。然し哀れな盲目―のシンキ（其後夫の身を想ふて泣き―暮らした爲か盲目となつて居た）―はそんなこと

四九

一九二二年十二月九日に就任した初代大統領は、前外相のナルトヴィチ (Gabriel Narutowicz) である。

は知る由もなかつた。」「今に歸つて来る。」「別れる時から、言ひ遺した言葉を未だに忘れず、之を固く信じて三十餘年待ち侘てゝ居るのだ

義妹等を發見して、ピ陸相の歡喜、隠れたる菱沼氏の努力

巴里で客死したプスキー氏は隠れたる植物學者であつた。獨立後、プ氏の遺書中から世界植物學界稀に見る貴重な研究が遺されて居るのを發見された大統領ピルツスキ氏は、「薄倖な弟の爲めこの書五〇を公にした。この遺書を整理中、弟が樺太アイヌと結婚し而も二人の子まで儲けたことを知つた、弟の爲め、この遺された妻甥姪の幸福を祈つてやることは兄の責任である」と痛感した。今から十年前、日本駐在、ポーランド公使五二に命じて其後の調査をなさしめたが（一等書記官某氏が樺太廳の案内で調査した）發見するに至らなかつた、其後本社記者能仲文夫氏が『北蝦夷秘聞』五二を公にするに當り、「端なくもシンキが生存してゐる事實が判明した。」「氏は現在では大統領を退き陸軍大臣の要職にあるが、日本公使館の報告に依つてその後の狀況を知り、今改めて調査方を命じたのである、かくて昨日の夕刊所報の如く、ヤンタ氏の來島となり、事情調査の結果、

五〇 植物學書の公刊については未詳。

五二 能仲は、その人物を「五年前駐日公使であり、現にモスコに駐在しているパテック氏」（『北蝦夷秘聞』16頁）と記している。パテック（Stanislaw Patck 1866-1945）は再建ポーランド共和国の初代駐日特命全權公使（在任一九二一—一九二六年）。一九二五年八月には在住ポーランド人を訪ねて樺太へ赴いた（ヤンタ＝ポウチンスキ「樺太のポーランド人たち」109頁、脚注2）。

五二 能仲文夫『北蝦夷秘聞』樺太アイヌの足跡』大泊・豊原：北進堂（1933）。

シンキが今尚^{なほ}プ^はスキー氏^{しや}の寫眞^{しや}を肌身^{はだ}離さず所^{はな}持して居る、ことや、其當時から存命^{そんめい}してゐる、アイヌ等の話^わを綜合^{そうごう}して確實^{じつじつ}だと、言ふことが判明^{はんめい}したので、ヤンタ氏^{しや}は雀躍^{じゃくやく}して詳細^{せうじゆ}をポーランドに向^{むか}へけ打電^{でん}した、かくてシンキ親子^{めいこ}に、も恵^{めぐ}まれる春^{はる}が訪^{おもつ}れよう、尚^{なほ}この、發見^{はつけん}に就^つては中央情報社^{おうちやうほう}社長菱沼右^{ひしめま}、一氏^{えん}の後援^{あつた}が與^あつて力がある五三

(寫^かゝ眞^まは當時^{たうじ}のプ^はスキー氏^{しや}「写真1」^{しや}と、「孫^{まご}を抱^{かか}ゝくシンキ「写真2」

『北海タイムス』第15360号(一九三四年一月十日付朝刊)

曾^{むすめ}長の娘^{むすめ}をめぐる、國際悲戀^{こくさい}の辭書^し／思出^{おもひで}こもるこの一卷

既報^{きはう}ポーランド陸相^{りくしやう}ピルツ・スキ^し一氏^しが、今^{いま}はなき愛弟^{あい}が卅^{さん}年前^{ねん}異境^いに殘^{のこ}した戀女房^{こひ}、樺太^{から}アイヌ曾長^{むすめ}の娘^{むすめ}おやこ、あんひ親子^{おやこ}の安否^{あんひ}をたづねて、「ポーランド公使館^{こうしきわん}から態々^{わざ／＼}人をたてゝ豐原^{とよはら}、附近^{ふきん}を調査^{ちやうさう}中^{ちゆう}であるといふ。」美^{うつく}しき國際^{こくさい}悲戀^{ひれん}の主人公^{しやうじん}はブリード・ス、キーと呼^よび、「當時^{たうじ}モスコ^もー大學教授^{だいがくけうじゆ}「ママ」で人類學者^{じんるいがくしや}「マゴ」であつた

五三

ヤンタ^{ポウ}ウチンスキの旅行記『地球は丸い』(1936)によると、菱沼右一とは大泊^{おほ}へ向かう船中^{ふねちゆう}で遭遇^{そごう}したとあるが、菱沼は最初^{しうしゆ}の出会いを、函館^{はこだて}駅の車中^{くるまちゆう}だと記している(『樺太日日新聞』一九三四年一月七日付朝刊所載^{しやうざい}の菱沼記事「樺太の旅(一)」本稿^{ほんこう}839頁)。旅^{りょ}の目的^{もく}を聞いた菱沼はその後、著者^{しやくしや}を白浜^{しらかみ}へ案内^{あんい}して、未亡人^{みわうじん}や遺児^{いじ}(娘^{むすめ}キヨ)とも引き合^あわせている(ヤンタ^{ポウ}ウチンスキ「樺太^{はこだて}のポーランド人^{にん}たち」115, 134-135頁)。

彼は日清戦争直後サガレンに追放された四人の教化のため來島、一間もなく前記メノコと戀に落ちたのであつたが、彼の戀人に對する熱愛はアイヌとアイヌ語に對する熱愛と深い理解まで進み、英語に對アイヌ語の一卷の辭書

Materials for the study of the Ainu Language

まで残すに至つた、同辭書が最近、圖らずも北大圖書館の手に入つたが之はまた普通の辭書の體裁を全然破つて、アイヌの面白い傳説を集めて注釋を施し、興味の裡に同語をマスターする仕組になつて居り、アイヌ研究者の高倉「新一郎」司書官なども極力推賞してゐる（寫眞「省略」はアイヌ辭書五四）

五四 この「辭書」は「ブリードスキー」ことブロニスワフ・ピウスツキが英文で著した主著で、書誌情報は以下の通り。Bronisław Piusudski, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Cracow: Imperial Academy of Sciences (1912)（注二〇参照）。同「辭書」は一九三三年五月二十四日に北海道帝国大学附属圖書館に受け入れられており、現在は同館北方資料室が所蔵している。

『北海タイムス』第15361号（一九三四年一月十一日付朝刊）

長男は父の國へ―母娘は相濱マニで―シンキさん一家に春

【豊原發】朔風吹きまくるオホツク^{さくふう}の海邊^{うみべ}、樺太相濱^{からふとあひはま}正しくは「白濱」の土人部落に、夫のプブスキー氏^{どじんぶらく}の死も知らずに只管^{ひたすら}にその歸り^{かへ}を待ち侘^{まち}びる盲目^{まうもく}の老アイヌ婦人^{らう}シンキ^{ふじん}（五三）さんの一族に、やがて輝^{かがやく}かしい喜^{よろこ}びのおとづれて來ること、は既報^{きほう}の通りであるが、今回來島した、ポーランドの新聞記者ヤンタ氏^{しんぶんきしゃ}が、つぶさに事情^{じじやう}調査^{てうさ}の結果、シンキさん^{けつぐわ}は夫の寫眞^{けつぐわ}を今も、尚肌身離さず所持^{しよち}してゐる事や、その當時^{たうじ}から存命^{ぞんめい}してゐる古老^{こらう}アイヌ^{はなし}の話^{はなし}などを綜合^{そうがふ}して一切確實^{さいかくじつ}なことが判明^{はんめい}した、ヤンタ氏は雀躍^しして直に此の旨^{むね}をポーランドに向^むけ打電^{だでん}したが、「ヤンタ氏の語^しるところによれば、木村愛藏^{きむらいざう}（五三）（プブスキー氏の長男^{しちやうなん}）さんは、叔父^{おぢ}さんで、あるポーランド國陸相^{こくりくさう}ビルスズキー將軍^{しやうぐん}に照會^{せうかい}の上、多分^{たぶん}向ふに行く、やうになるだらう、次女^{じちよ}のヨシ子^こ（五六）

正しくは木村助造（1904-1971）。ヤンタ「ポウチンスキはこの人物を“Kimura Skeizo”とかなり正確に記録し、一九三四年一月時点での年齢をやはり「三十二才」と記している（Janta-Polczyński, Ziemia jest okrągła, ss. 286, 295）。御子息の木村和保氏によると、父上の戸籍には生年月日が「一九〇三年一月十二日」と明記されている由。やはり助造氏の当時の年齢は数えて三十二才、満三十一才十一月となる。にもかかわらず、私は状況判断にもとづいて、右記のようにそれを一年遅らせ、生年は一九〇四年と断ずることを余儀なくされた（拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」、本書87頁）。

五五 「ヨシ子」も誤報、実際は「長女」の木村（大谷）キヨ（1905-1984）。

(二八) さんは、「母親のシンキさんと一」緒に相濱^マ「實際は白濱」部落で暮す事になるだらうが、「ピルスズギ」將軍からは相當^{さうたう}の扶助料^{ふじょりょう}が送られて来る模様で、「い」よく「今こそシンキ親子に恵まれ」春^{はる}「た」マゴが訪れた

『樺太日日新聞』第7939号（一九三四年一月十一日付夕刊）

ヤンタ氏は「プ氏の愛兒の」今後に就ても援助

白浦部落の同國人方で助造と會見し「身の振方の相談をも受く

現^{げん}ボーラン「ド陸相^{りく}五七の義」妹を探るべくはる「來島した波蘭電報通信」社東洋特派員アレキサンダー、ヤン

タ氏は既報の如く「中央情報菱沼」社長五八と共に白濱^{はま}五九に向ひ、同地の有志^し「白川仁太郎氏（現同部落消防組頭）」

の斡旋^{あつせん}に依つて「故プ氏六〇の愛妻シ」ンキさんに面會したが「長男は他村」に出かけた後にて「同夜は白浦^{はく}六二に引

五七 ユゼフ・ピウスツキ。プロニスワフ・ピウスツキの年子の弟。

五八 菱沼右一は中央情報社々長に就任する前、「樺太日日新聞」主筆を務めた（注二五参照）。

五九 東海岸に立地するアイヌ・コタン、現キルビチナヤ（ドリンスク地区）。日本統治下では、アイヌの集住村が同地に設営されていた。

六〇 プロニスワフ・ピウスツキ。『樺太日日新聞』は彼の名を「プブスキー」と報じており、したがって「プ氏」と略記される。

六一 東海岸に所在するアイヌ・コタン（ロシア名セラロコ、アイヌ名がシララオロ、シララカ）、現ヴズモリエ（ドリンスク地区）。

返し、「同國人某^{ぼう}六二の家に泊つた、翌朝^{よく}には白川氏が長男木村助造（三二）君と長女ヨシ子「正しくはキヨ」（二八）さんの兩名を伴^{ともな}ひ、「ヤンタ氏を訪^{おたう}れたので、「三名は過^{くわ}去の思出話や、將來に對^{たい}する希望^{きぼう}」を語り合つた、其後ヤンタ氏は同地を發して、「九日午後八時二十二分」豊原着列車で引上げ、「花屋本店に投^{しめく}宿したが、「氏は調査の結果につき次の如く語つた

「未^ま地^ち「この土地へ一人旅^{たび}、謎^{なぞ}の様な話を辿つて來たが、「菱沼氏に偶然^{ひしぬま}に出會ひ、「多大の援助を受けて非常^ひに嬉しく思ひます、故^{おも}フ氏の愛^{あい}、兒等には、「白川氏の努力^どで面會する事が出來て本懐^{くわい}とする處です。」
 木村助造はこの部落から離^{はな}れて生活^{くわつ}したいと云つて居るから、「その旨^{わねりく}陸相^{つた}へ傳へて見ます、閣下も出來る限りの事はすると思^{おも}ひます、幸ひに大任^{にん}を果たし得て何よりも嬉^{うれ}しい、今日（十日）は、新場^ば六三の同國人^{たう}六四を尋^{たづ}ねて同家に泊^とり、「十二日の連絡^{れんらく}船^{ふね}で退島します」云々
 尚ヤンタ氏は十二日に退島、「札幌^{さっぽろ}に寄^よつて、「内地は日光の絶景^{ぜつけい}を探^{さぐ}り、「東^{あづま}京に向ふ筈^{はず}である

六二 北樺太から亡命したポーランド人アダム・ムロチコフスキ（Adam Mroczkowski）。当時は白浦でパン屋を営んでいた（ヤンタ「ボウチンスキ」樺太のポーランド人たち」135-136頁）。日本人引揚時の一九四六〜四八年、堪能な日本語を買われて豊原でソ連側の「窓口」を務めた。

六三 大泊の北部に立地する集落、現ダーチノエ（コルサコフ地区）。

六四 ルボヴィエツキ（Lubowiecki）家、当主の息子ミハウとユゼフがパン屋と酪農に従事していた。

一九三九（昭和十四）年

『小樽新聞』第15517号（一九三九年六月十五日付朝刊）

国際愛卅年ぶり／アイヌの老婆に「春」／ピルスツスキー將軍／實弟の遺族を引取る

六五

【眞岡發】國際紛糾の渦中にある歐洲ポ——ランド國獨立最初の大統領ピルスツスキー將軍六六の實弟、「故ブ——リートスキーマコ氏六七の遺——族が、「今帝國北端の版——圖樺太に現存してを——るといふので、故實——弟の遺族を本國ポ——ランドに呼び寄せ、「こそ——の血統を立てよう」としたピルスツスキー——氏が、「今回來朝在京中——のポルスカ・ズ

六五 ピウスツキ「元帥」は昭和十（一九三五）年五月十二日に没し、チュフサンマも同十一（一九三七）年一月十八日に亡くなっていたから、

当該記事の「見出し」が記すような事態は、昭和十四（一九三九）年には起こりえなかつた筈である。とはいえ、ポーランド政府中枢の誰かがピウスツキ元帥の没後、その意を体して——あるいはそれに反して——プロニスワフの遺族をポーランドへ呼び寄せることを発案、遺族との折衝役としてピスコル特派員（注七一参照）に白羽の矢を立てた可能性は排除されない。樺太の眞岡（現ホルムスク）で「ピスコル情報を知る人物」（あるいはピスコル本人）を取材した『小樽新聞』の記者は、能仲文夫著『北蝦夷秘聞』を「不正確に」参照しつつ、この頗る興味深い記事を執筆したものと推察される。なお、ピスコルは一九三九年の夏に訪權していた（本書「エピソード」を見られたい）。
六六 ユゼフ・ピウスツキ。プロニスワフの年子の「実弟」。ユゼフは、厳密を期すならば「將軍」ではなくて「元帥」である（注三一参照）。
六七 元帥の「実兄」であるプロニスワフ・ピウスツキ。

ブロヘイナ^{六八}・クリエル・ポズナンスキ^{六九}「プロスト」・ズ・モスワ^{七〇}・ポーラ^{七一}ンド放送協會「正しくは電信電話公社」特派員「アレクサンダー・ピス」ユール^{七二}氏に遺族引取「方を依頼、ピスユール氏が近々樺太へ遺族をた

六八 ワルシャワの日刊紙 *Polska Zbrojnia* (武装ポーランド) 発行期間一九二一—一九三九年。但し、第二次大戦後の一九四五—一九五〇年に復刊、その後40年に及ぶ *Żołnierz Wolności* (自由の戦士) を名乗った改称期を経て、一九九一年には旧名に復した。現在は週刊誌として継続)。

六九 ポズナンの日刊紙 *Kurier Poznański* (ポズナン急報) 発行期間は「一八七二—一九三九年」。

七〇 正しくは『プロスト・ズ・モストウ』(*Prosto z mostu*) 名称自体は「橋の上から真つすぐに」と直訳される慣用副詞句だが、「直言」と意識しておきたい)。ワルシャワの日刊紙 *ABC* 日曜版の付録として発行された *ABC Literacko-Artystyczne* (1931-1934) を前身とする文芸週刊誌、一九三五年に独立して『直言』を名乗る。同誌も上記2紙と同様、第二次世界大戦が勃発した一九三九年に廃刊。

七一 正しくはアレクサンデル・ピスコル (*Aleksander Piskor* 1910-1971)。パシユキエヴィチが執筆した『ポーランド伝記事典』所載記事によると、ピスコルは一九三八年十二月、『直言』誌——と *Kurier Warszawski* [ワルシャワ急報]——の特派員として米国へ旅立ち、ワシントンとニューヨークでの取材を終えて、一九三九年八月に来日したとされている (*M. Paszkiewicz, "Piskor Aleksander (1910-1972)", s. 554*)。

しかるに、六月十五日付の本記事冒頭でピスコルは「今回来朝在京中」と紹介されるだけでなく、彼が『直言』誌27号(七月二日付)に寄せた最初の日本レポートは冒頭で「東京、五月」と執筆の月名を明示し、また「ある春の夕べに」サンフランシスコから横浜に入港した「鎌倉丸」で来日とも記している (*Piskor, "Piewsze wrazenia [初印象記], "Prosto z mostu* nr. 27: 2-3)。しかも付載写真には満開の桜も見えるから、来日時期は四月上旬にまで遡りえよう。なお、ピスコルのワルシャワ出版を報じた『直言』誌一九三九年1号は、彼が前年の「クリスマス直前」に8ヶ月の予定で出国、ソ連が通過ヴィザの発給を拒否したため、米国経由で日本へ向かったと記している (*anonim, "Wyzjazd Al. Piskora do Japonii [Al. ピスコル日本へ出發], "Prosto z mostu* nr. 1: 12)。しかしながら、ピスコルが『直言』誌に寄稿した日本記事(七月二日付27号、八月十三日付33号、八月二十七日付35号所収)にはプロニスワフ・ピウスツキの遺族に関する情報が全く見出せない。

本記事が『小樽新聞』に掲載されてから2ヶ月半が過ぎた一九三九年九月一日、ドイツ軍がポーランドへ電撃侵攻して第二次世界大戦が勃発する。駐日ポーランド大使館——一九三七年十月に公使館から昇格——は翌二日、ロメル (*Tadeusz Romek*) 大使のイニシアティブで「大使館通信班」(別称「極東ポーランド通信班」)を創設、通信班長には「ポーランド電信電話公社」特派員のアレクサンデル・ピス

づねて來島するといふ報が傳へられ一般の興味を呼んでゐる。ブリートスキー氏の遺族と目されるアイヌ婦人は本名木村シンキセニ（六十歳を越えた年配）と其遺へ兒木村某セニで、「樺太に現存することは早くから傳へられ、しかも東海岸榮濱村白濱部落に居住してゐること」も判明してゐるので^{七四}、「この報が現實となつて現はれ、樺太アイヌ部落の一隅に

コルが就任する。彼は翌四〇年一月発刊のポーランド語週刊『広報 (Biuletyn)』、また四一年一月に創刊された月刊広報誌（英語版 *Poland Today* と日本語版『今日のポーランド』）の編集長も兼ねて、大使館報道官として手広い広報活動を展開した。「大使館通信班」は、大使館が閉鎖された四一年十月二十三日に活動を停止する（エヴァ・パワシユルトコフスカ、アンジェイ・ロメル『日本・ポーランド関係史』193-211^{七五}）。一九四一年十月十九日付の『広報』の最終号にはピスコル編集長が自ら執筆した「訣別の辞」が掲載された（前掲書 212^{七六}）。

その後も日本に残留したピスコルは、四一年十二月——日米開戦の直後——に「反日・反独宣伝」の容疑で予防検束され、半年ほど収監されたのち、四二年七月三十日に日英交換船「龍田丸」で離日した（前掲書 213^{七六}、Piskor, "Kolonja polska w Japonji" [日本におけるポーランド人ロニー]、*Dziennik Polski* nr. 907: 2）。

^{七二} チュフサンマ。その名はシンキンチョウとも伝えられ、「シンキ」は後者の愛称形であろう（注三〇参照）。
^{七三} 木村助造（注五五参照）。

^{七四} ヤンタ『ポウチンスキ』は一九三四年一月八日、菱沼右一の案内で樺太東海岸の白浜を訪ねて未亡人や娘キヨと、翌九日には白浦へ駆けつけた遺児の助造とも会うことができた（ヤンタ『ポウチンスキ』「樺太のポーランド人たち」135, 140^{七五}）。前掲記事『樺太日日新聞』一九三四年一月十一日付夕刊所収）も参照されたい。

ところでヤンタ『ポウチンスキ』は白浜を去るとき、アイヌからピウスツキ元帥のために一振りのアイヌ刀を託されているから、これをポーランドへ持ち帰ったであろう（ヤンタ『ポウチンスキ』「樺太のポーランド人たち」141^{七六}、本書172^{七六}）、もし元帥が同刀を受け取っているならば、受領の際には樺太の遺族に関する報告もあったと推察される。なお、当時の『樺太日日新聞』『北海タイムス』両紙は、ヤンタ『ポウチンスキ』が一九三四年一月十日、遺族発見のニュースを「ポーランドへ向け打電」したと報じている。

これに先立つ一九三三年二月、菱沼の義弟に当たる能仲文夫は『北蝦夷秘聞——樺太アイヌの足跡』を上梓、その第一章「盲目の老メノコは泣く」ではシンキンチョウとプロニスワフの悲恋譚が虚実交々綴られている（同書 1-18^{七六}）。因みに、ヤンタ『ポウチンスキ』はこの

三十余年間埋もれてゐたアゝイヌ婦人とその子が、「今を時めくポーランドの老將軍のもとに引きとられ、一躍名もなき老婆とアイヌゝ青年が世界ニユース界に躍り出る様になるかどうか、この話題は一層の興味を呼んで來た(寫眞は令ゝ弟を捜す老將軍【写真3】)

巷間傳へられた處によると、「ブリーゝトスキゝと樺太アイヌ婦人との間ゝには次の様な國境を越えたロマンゝストと哀別のエピソードがある

ブリートスキゝは人類學を研究ゝする理學士^{マコ}で、「明治二十九年までゝモスコゝのソ聯^{マコ}大學に教授^{マコ}としゝて奉職して居たが、「多數の人類^{マコ}がゝ居住する樺太において自己の希ゝ求する學術研究のため渡樺を決ゝ意し、「當時の露國義勇艦隊に便乗ゝし樺太に渡つた(一説には政治ゝ犯として露官憲に捕はれシベリゝアに流刑されたが、「後脱走して樺ゝ太へ漂着したと云はれる)。「こそゝし「最初の上陸地大泊から相濱ゝ附近にあつて露國監獄の教誨師^{マコ}ゝとして勤める傍ら人類學の研究ゝに没頭してゐたが、「當時同地にあゝつた同族の酋長たる日本名木村ゝバフンケ^{七五}と親交をつづけて居るゝうち、「その娘である美しきシンキと^{マコ}(當時十八歳)と國境を越えてゝの戀愛に陥り、「卅歳の學者ブリーゝトスキゝは遂に結婚を許された、「そ

章の内容を、菱沼の翻訳で聴き取り、日本人の間で膾炙するラブストーリーとして、自らの旅行記に収録している(「樺太のポーランド人たち」13^頁、本書708^頁)。
相浜のバフンケ(アイヌ)「酋長」は日本名が木村愛吉。「シンキ」(チュフサンマ)の叔父である。

の後十年間は平和な同棲生活へを営み二人の男子マコを儲けたが、かくする内祖國ポーランドには一大革命運動が起こり、二兄マコであるビルへスツスキー將軍マコは革命の第一線へに躍り立つた、そしてブリートへスキーの歸國をしきりに促したので、二兄の運動に参加することへなつたブリートスキーは二樺太に求めた妻子を引き連れて歸國せんとしたが、二父マコのバフンケがこれへを許さず、二遂に再會を約して涙の哀別をした、ブリートスキーへは祖國愛に燃えつゝ直ちに歸國、二時の英雄たる兄の下に大活躍へをなし、二遂に革命に成功してポーラへンドの獨立が成つた、その後も、ブリートスキーは兄を助け東奔へ西走すること十年に及んだが七六、二遂へに異國にある妻子との再會の機へ會がなくバリで客死した七七

といふのである、時を経、年を過へぎた昭和三年春頃、二故弟の遺族が遠へき異國樺太の地に在ることを忘れへなかつた實兄のピルスツスキー將へ軍は、二その血統を求めて、二時の東京ポへーランド公使館書記生をして木村へ一家を探すべく樺太に渡り、二樺太廳へとも協力して遺族を求め、二時は遂に判明しなかつた、越えて、昭和十年に至り、二遂にピルスツスキー將へ軍が求めつゝあつた木村母子が樺へ太に實在することが判明、その遺へ児は東京に赴きポーランド公使館へまで訪れたのであつたが、二眞偽不明へでそのまゝとなつた、この忘れかへけられた物語りが今再び世に現れへたのである

七六 プロニスワフ・ピウスツキは祖國復興の半年前、一九一八年五月十七日、第一次大戦下のバリで客死していた。
七七 ポイントを落として別記されたこの一段落は概ね、能仲著『北蝦夷秘聞』第一章の不正確な要約である。

註¹¹ 遺児たる木村某は毎年白濱¹²から西海岸多蘭泊の漁場へ出稼¹³ぎに來てをり、その母たるシン¹⁴キは現在盲目の老婆となつてゐ¹⁵るといふ

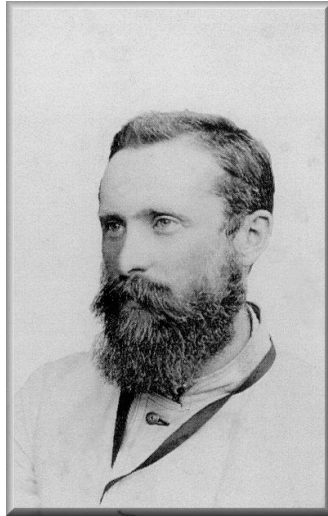


写真1：当時のプブスキー氏
1903年、函館・井田写真館にて撮影



写真2：孫を抱くシンキ
1930~1933年、白濱にて能仲文夫撮影



写真3：令弟を捜す老将軍

プロニスワフ・ピウスツキ年譜

井上紘一 作成

波蘭の志士プロニラウ、ビルスドスキー氏なる人あり、郷里ウキルナ市の中學校を卒へて聖彼得堡の法科大學に入り修學中、露國革命派と意氣相投じ、資を擲て其舉を助け、遂に露國警察の探知する所と爲りて捕はれたるは十九歳の時なりしが、樺太北部の寒村に流謫せられて、居ること十二年、土人ギリヤク及びアイヌと交わりて能く其言語風俗に精通し、ギリヤク考を草して露國地學協會記事に掲載されたり、後西伯利大陸に轉任するを許され、浦鹽斯德に移り地學協會博物館管理の任に當り、傍ら新聞事業に従事中、露國大學院設置の亜細亜研究會より樺太南部在任「アイヌ」の實地調査を託され、樺太南部に渡りてアイヌの事情を調査研究すること三年有半、其間我が北海道アイヌの事情をも調査せんとして、同道に渡航したること二回、日露開戦の危機に迫りて去りたりしが、戦後より本邦に渡來し、東京に滞在すること五箇月、普く知名の人類學士に就きて研究を遂げ、去月二十四日を以て歸國の途に就きたり……」。

「露國ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」(上)——『世界』二十六號所収、東京…京華日報社、明治三十九(一九〇六)年六月十日發行——所載の「編者序」(57頁)より抜粋引用した。「プロニラウ、ビルスドスキー」はプロニスワフ・ピウスツキを指しており、同記事は彼のアイヌ関係処女作である。原文はロシア語。邦訳者は上田將であることが判明している。「編者序」はあるいは訳者による「著者紹介」か。いずれにせよ、ピウスツキ本人が記したメモか口頭で述べた略歴を、上田が邦訳した文章であろう。一九〇六年六月には頗る正確なピウスツキの略歴が邦文で公表されていたわけである。但し、末尾の「去月二十四日を以て歸國の途に就きたり」との記載だけは正確でない。ピウスツキが帰國の途に就いたのは、後述のように一九〇六年八月三日である。

一八六六

グレゴリウス暦十一月二日（ユリウス旧露暦では十月二十一日）、ロシア帝国ヴィルノ県にある母の相続領地ズーウフ（現ザラヴァス）にて出生。ユゼフ・ピョートル・ピウスツキ（1833-1902）と、ビレーヴィチ家出身のマリア・ピウスツカ（1842-1884）の第三子で長男、ピウスツキ家の嫡嗣。両家ともリトワニアでは由緒正しい貴族の家柄であった。

一八七五

七月四日、「ズーウフ」の大火で屋敷がほぼ全焼。県都ヴィルノ（現リトワニア共和国首都ヴィルニウス）へ一家を挙げて移住する。

一八七七

九月、年子の弟ユゼフ（のちの再興ポーランド共和国初代元帥）とともに、ヴィルノ第一ギムナジヤに入学。

一八八二

春、次々弟のアダムを入れたピウスツキ三兄弟は、同世代の若者らと語らって自主教育サークル「スプイニヤ」を組織した。最初の非合法活動に従事する。

一八八三

六月十四日、六年次の学年末試験に失敗し、落第が宣告される。

七月十日、新設されたヴィルノ第二ギムナジヤへの転校を強いられる。

十一月四日、母マリアの手術が執行されて、深く落ち込む。

この頃、バニエヴィチ家の娘ゾフィアに恋をする。初恋であった。

一八八四

三月三日、ゾフィア・バニエヴィチの許でピアノのレッスンを受ける。恋語らいの間、就寝中の母親を騙すべく、妹のマリアがピアノを弾きつづけた。

春、双子の幼い末子（第十一、十二子）が風邪をこじらせて亡くなる。

九月一日（露暦八月二十日）、母マリア・ピウスツカが永眠する。享年四十二才。

一八八五

四月末、ゾフィア・バニエヴィチは、母親の差し金でペテルブルグへ遣られ、鉄道関係事務所に就職。

八月三日、追試を経て七年次を無事修了するも、ヴィルノ第二ギムナジヤを退学。

八月十九日、ゾフィアを追って帝都サンクト・ペテルブルグに到着。翌二十日には彼女と再会するも、二人の仲は母親によつて引き裂かれた。その後、傷心のプロニスワフを慰めたのが、母親とともに上京した年子の妹マリア・バニエヴィチであるが、その詳細は詳らかでない。

八月二十七日、ペテルブルグ第五ギムナジヤの八年次編入学。

一八八六

六月、同ギムナジヤ卒業。七月二十九日、サンクト・ペテルブルグ帝国大学法学部入学手続きを済ませる。

十二月末、クリスマス休暇をヴィルノで過ごすため帰省する。プロニスワフにとっては「最後の帰郷」だった。

一八八七

二月一日、休暇を終えてペテルブルグに戻る。

三月三日、ペテルブルグ市内で三月一日に起きたロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の容疑者として拘束され、ペトロパヴォフスク要塞の独房に収容される。

四月十五、十九日、元老院に特設された法廷で審理が実施されて、プロニスワフを含む全被告15名に死刑宣告。

四月二十三日、皇帝の特赦により、プロニスワフは懲役十五年とサハリン流刑に減刑された。

五月八日、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフら5名の死刑囚に対し、シュリッセルブルグ要塞で絞首刑が執行された。

五月二十七日、父ユゼフが遠くから見守る中で、プロニスワフを乗せた護送列車はペテルブルグを出発、これが父子の「今生の別れ」となる。護送列車は、モスクワを経由して六月六日、オデッサに到着した。

六月九日、ロシア義勇艦隊社の「ニージニー・ノヴゴロド」号は、525名の既決囚を載せてオデッサ出港。

八月三日、同号はスエズ運河、コロンボ、シンガポール、長崎を経由して、この日に北サハリン西海岸のアレクサンド

ロフスク哨所（現アレクサンドロフスク・サハリンスキー）に入港。

八月九日、十二日、ティモフスク管区ルイコフスコエ村（現キーロフスコエ）の監獄まで徒歩で護送される。

八月、十二月、懲役囚に科される通常作業に従事する。加えて、役人や流刑入植囚の子弟の家庭教師も務めだし、近所のギリヤーク（現ニザ）たちとの交流が始まる。

一八八九

ティモフスク管区警察署事務部で勤務開始。

一八九一

一月、ルイコフスコエ村を訪ねたリエフ・シユテルンベルグと出会い、友情は終生維持された。これを機にシユテルンベルグと協力してニヴフ研究を推進する。

一八九三

七月、ルイコフスコエ測候所での勤務開始。

一八九六

五月十七日、父ユゼフの嘆願書が功を奏し、五月十四日付皇帝戴冠特赦令が適用されて、刑期の「3分の1」が削減される。父親は九二年四月、九四年十一月にも同様な嘆願書を提出したが徒労に終わっていた。

七月、八月、コルサコフスク管区（日本統治下の「南樺太」にほぼ該当）へ派遣されて測候所の設営に従事する。コルサコフスク哨所、シヤンツイなどでアイヌの人たちと初めて出会う。

一八九七

二月二十七日、軽減された刑期の十年が満了し、強制労働から解放されて、ティモフスク管区ルイコフスコエ村に流刑入植囚として登録された。

五月二十三日、ロシア帝室地理協会ブリアムール支部傘下のアムール地方研究会（以下ではOIAKと略記）は、同研究会附設博物館にプロニスワフを採用するべく、居住地のウラデヴォストク移転を求める請願書提出。しかし事態が紛糾して、中々結着しなかった。

九月、十二月、アレクサンドロフスク哨所にて、サハリン島医務局主任L・V・ポドゥプスキー医師の下で文書係を務める。勤務は翌九八年四月まで継続された。

一八九八

四月二十日、民族学関係処女作「樺太ギリヤークの困窮と欲求」攔筆、論文は『ロシア帝室地理協会プリアムール支部紀要』（4巻4分冊、一八九八年、ハバロフスク刊）に掲載された。

五月、八月、レイコフスコエ村の測候所に勤務。夏には父ユゼフが再び嘆願書を提出して、息子のウラヂヴォストク移転への高配を求めた。

十一月二十八日、プリアムール総督はプロニスワフのウラヂヴォストク居住を許可する。

十一月、十二月、OIAK運営委員会はニヴフ民族資料の収集をプロニスワフに託し、200（十一月半ばに140、十二月末に60）ルーブリを送金した。

一八九九

二月、ウラヂヴォストクにおける一年間の在住許可証が発給された（但し、警察の監視下に置かれる）。

三月初旬（十二日頃）、ウラヂヴォストク到着、OIAK博物館の物品管理人（年俸600ルーブリ）として館内に住みこむ。

十月二十八日、パリ万博への極東地方関連出品が、ロシア義勇艦隊社の「ヘルソン」号で搬出された。これはP・P・セミョノフ・ロシア帝室地理協会副総裁がOIAK博物館に託した事業。出展コレクションの構築はプロニスワフが担当、自らが収集したサハリン・ニヴフ資料158点も含まれていた。一九〇〇年のパリ万博ではこの極東コレクション展示が高く評価されて、国際審査員賞の銀牌がプロニスワフに授与される。

一九〇〇

この年、プロニスワフはOIAK博物館主事を務める。

三月十七日、自らの年俸を半減して、減額分では館に必須の標本製作者を雇用するよう申し出る。

一九〇一

この年、プロニスワフはOIAK博物館の司書を務め、沿海州統計委員会とも雇用契約を結ぶ。委員会書記のN・V・キ

リロフ医師に協力して、同委員会の活動にも積極的にかかわる。

二月二十三日、N・A・パリチエフスキーOIAK運営委員会副議長と連署で作家チエーホフへ、「サハリン島と極東の旅」に関する著作の寄贈を求める書簡を送る。作家からは当該著作が寄贈された。

三月十五日、OIAK準会員に選出される。

五月十七日、OIAK博物館退職が承認される。プロニスワフは衰弱した健康を養生すべく、より乾燥したブラゴヴェシチエンスクへの転地を願い出て、博物館での有給勤務も辞退することを申し出ていた。その背景には、パリチエフスキー副議長との確執があった。

夏、ニヴフ少年のインディンがサハリンからウラヂヴォストクに到着。プロニスワフは、サハリンの教え子で最も聡明だったインディンを、学業継続のため州都に呼び寄せることに成功する。

八月二十七日、OIAK博物館は月俸50ルーブリでプロニスワフを臨時雇用する。

十月十八日、プリアムール総督からブラゴヴェシチエンスク居住が許可されたが、転地療養の着手は急がなかった。この頃からサハリン出張をめぐって、ロシア帝室科学アカデミーから打診があったからであろう。

一九〇二

二月十七日、科学アカデミー副総裁がプロニスワフへ電報を送り、民族資料収集を目的とする南サハリン出張を要請。四月二日、父ユゼフ・ピウスツキがペテルブルグで永眠。享年六十九才。

五月五日、沿海州知事はサハリン島知事へ、「ピウスツキの行動に瑕疵はなく、州政府に勤務している」と報告。

五月三十一日、プリアムール総督は、アカデミーの委嘱によるプロニスワフの南サハリン出張を許可する。

七月八日、東清（中東）鉄道会社の汽船「ゼーヤ」号でウラヂヴォストク港を出発、樺太島へ向かった。

プロニスワフに託された任務は、アイヌとオロツコ（現ウイルト）の民族標本とフォークロア資料の収集。彼はこのとき旅行許可証、1000ルーブリの出張費、OIAK運営委員会から託された民族標本購入の前金50ルーブリ、そしてカメラと（恐らく）エディソン式蓄音器も携えていた。また肺結核を発病したインディン少年も、故郷の島で養生させるべく帯同していたであろう。

七月十一日、コルサコフ（大泊）に到着。十三日、シヤンツイ村（落合、現ドリシスク）を訪ねる。

七月十六日～八月六日、西海岸のマウカ（眞岡、現ホルムスク）地区に滞在して、アイヌ資料の収集や人口調査に従事し、蓄音器でアイヌの歌も収録する。

八月六日、セミヨノフリデンビー商会の漁船に便乗して函館へ向かう。マウカ・コルサコフ間の便船が得られぬため、函館を経由してコルサコフへ戻ったもので、函館には3週間滞在した。その間はG・P・デンビーの屋敷に逗留して、子息や森高夫妻（メリ夫人の弟伊助とその配偶者）の案内で市内や近郊を見物する。但し、これは日露両国にとって非合法の「初来日」だった。

八月三十日、函館よりコルサコフに帰着。

九月十日から十二日までの一日、コルサコフでM・N・リヤプウノフ・サハリン島武官知事と懇談。知事はアイヌの人口調査を委嘱し、アイヌ子弟の識字学校へ支援金（150ルーブリ）を約束する。十三日以降はオタサン（小田寒、現フィルソヴォ）、セラロコ（白浦、現ウズモリエ）の両村を訪ね、熊祭りに参加した（本書所収論文「樺太アイヌの熊祭りにて」参照）。

十月八日、コルサコフに戻る。同日、リヤプウノフ知事の裁定でディモフスク管区在住農民身分に編入される。シヤンツイ、マウカなどで発注してあった民族標本を梱包して、月末にオデッサへ向かうロシア義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号へ引き渡し、ペテルブルグへ向けて送出。

十一月半ばから2週間、タコエ村に滞在。その後二十三日までシヤンツイ、オタサンを歴訪し、それぞれの村でアイヌ子弟のための識字学校開設に尽力する。両校はいずれも冬場に開設、前者では十八才のインディン、後者では二十七才のタロンヂ（千徳太郎治）が教師を務めた。

十一月二十四日～十二月十日、東海岸のルレ村（魯札）を訪ねて聴取り調査に従事、「ハウキ（英雄詞曲）」を初めて採録する。

十二月十日、シヤンツイ村に戻る。

十二月十四日、アイ（相濱）村に移動、アイ・コタンのバフンケ曾長（木村愛吉）のロシア式丸太小屋に止宿して越冬。バフンケ宅はプロニスワフの定宿となる。

一九〇三

年初、ペテルブルグのシュテルンベルグから電報受領。プロニスワフの希望通り、南サハリン調査の継続を認めるとの内容で、前年に創設された「中央・東アジア研究国際協議会ロシア委員会」が以降の調査資金を提供することになった。

彼は同委員会の調査助成第一号として、一九〇三年度に700ルーブリ、一九〇四年度は750ルーブリを受領する。一九〇五年度は1000ルーブリと算定されたが、調査は六月に中断されたから半額を受け取る——但し主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』(1912)では総額で「225英ポンド」を受領した(VIII頁)と記している。

二月一日〜十五日、アイ村にてアイヌ語学習。採録したアイヌ語テキストの逐語訳も試みる。「バフンケ酋長の愛姪」チユフサンマ(シンキンチョウ)との恋語らしいは、この頃に始まったであろう。

二月十五日〜三月一日、ルレ村にて昔話や「ハウキ」の翻訳に従事。

二月二十八日、インディンの肺結核が重篤化して入院、シヤンツイでの授業は中断を余儀なくされた。彼は四月初めにコルサコフの病院で息を引き取る。

三月一日〜四月二十三日、アイ村に腰を据えてアイヌ語学習などに励んだ。その際、チユフサンマはプロニスワフの最良のアイヌ語教師であったと推測される。

四月二十四日、一九〇二／三年の冬にシヤンツイ、オタサンの両村で実施した識字学校の活動報告を摺筆。この頃、前年十一月〜十二月のルレ村滞在までを記載する「ロシア委員会」宛「復命報告1」(一九〇二〜一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報)も執筆したと想定される。

四月三十日〜五月十六日、アイヌの丸木舟で東海岸伝いに南下し、オブサキ(負咲)、オチヨホボカ(落帆、現レスノエ)、トゥナイチャ(富内、現オホーツコエ)、アイルポ(愛郎、現スボヴォドナヤ)を歴訪。トゥナイチャでは山邊安之助らから「ハウキ」や「オイナ(神謡)」を採録した。

六月六日、北サハリン踏査のため多来加湾へ向かう便船を確保するべくコルサコフへ赴き、そこでW・シエロシエフスキの手紙に接する。五月五日(グレゴリウス暦で同十八日)付の手紙は「交通丸が来函したら、あなたと一緒に、たとえあなた抜きでも直ちにピラトリ(平取)へ出立する」と追記していた。四月半ば(グレゴリウス暦で五月初旬)に函館入りを果たし

ていたシエロシエフスキは、遂に痺れを切らして、この最後通牒に及んだわけである。ロシア地理協会が派遣した北海道アイヌ調査の顛末は、シエロシエフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」（本書収録）を見られたい。ところでプロニスワフの方は、直ちに北サハリン行きを中止、便船の契約を解除してナイブチ（内淵、現ウスチ・ドリシカ）へ赴き、日本語通訳（千徳太郎治）を雇い入れたが、サハリン島知事が出国を許可せず、2週間余り足止めを食らった。

六月二十四日（二十日？）、エディソン式蓄音器一式を携えたプロニスワフは、千徳太郎治を伴ってコルサコフを出港し、海路函館へ向かった。

七月八・十日頃（グレゴリウス暦三）、ピウスツキ一行は函館港に到着したと推定される。かくて発足したロシア地理協会調査団——シエロシエフスキ団長、ピウスツキ団員、千徳通訳——は、直ちに調査計画を策定する。

七月三十日、函館にはすでに「数週間」滞在しており、千徳の協力でアイヌ語テキストの露訳を完成させて、今は弟妹との面会に北サハリンへ赴いたシエロシエフスキの帰函を待機中、とシュテルンベルグへ報告している。シエロシエフスキは七月三十一日か八月一日に帰函したと推定される。

八月二日頃、ピウスツキは函館で路頭に迷うアイヌたちと遭遇する。和人に騙されて、大阪から辛うじて函館までたどり着いた、白老のノムラ・シパンラム（野村芝蘭）ら一行であった。調査費から5円を捻出して野村らの帰郷を支援した。これが機縁で、調査団はまず白老村を訪ねることとなる。

八月四日夜半、シエロシエフスキ、ピウスツキ、千徳の3名は「肥後丸」に乗船して室蘭港へ向かう。

八月五日早朝、「肥後丸」が室蘭に入港。一行は、室蘭から鉄道で白老駅に至るも出迎えはなく、線路北側の和人集落の小旅館に荷物を預けて、南側のアイヌ・コタンへ赴く。散策中の3名はシパンラムの姉妹イシユウチ、妻ネンタシク、兄らと遭遇し、シパンラムの広大な「チセ」に案内される。シパンラムは、賓客に鮮魚を振る舞うべく出漁して不在だった。シパンラムの兄（名前不詳）はその後、彼らを海辺へ案内する。3名は夕刻に旅館へ戻って就寝。

ニピウスツキの「復命報告5」はコルサコフ出発を「六月二十日」と明記するも、在コルサコフ日本領事館が発行した「蓄音機等搬出許可書」の日付は「七月七日」（露暦「六月二十四日」）であった。本「年譜」では後者を採用する。

三 露暦では六月二十五・二十七日頃。以降、北海道滞在中はグレゴリウス暦を採用する。

八月六日朝、就寝中の彼らの部屋をシバンラムが訪ねて、アイヌ式挨拶「カラプテ」を交わし合う。その後、アイヌ・コタンでの宿泊をめぐる交渉が展開されて、(白老郡各村戸長役場の)「各村戸長」から了解を取り付けることを条件に、シバンラムが自宅への受入れを同意するや否や、当の各村戸長(佐伯茂治)が登場して「許可」を与えた。同日夕刻、調査団の3名はシバンラム宅に転がり込んで食客となる。

八月七日朝、シバンラムは即席の五右衛門風呂をしつらえさせて、客人に朝風呂を提供する。旅の疲れと汚れを洗い落としした3名は、心機一転して、白老での調査研究に着手した。

八月十二日正午前、白老コタンの野村芝蘭宅にさしかかった「青森の人」飯島桂と友人の生田は、ピウスツキに呼び止められて、そのままチセ内へ連れ込まれる。飯島は、シエロシエフスキもピウスツキも「上着をぬぎ、日本の単衣を纏ひ、ボンチ絵の如き姿にて研究し居たり」(飯島「北海道紀行其二」36頁)と記している。早くも午後一時には、調査団の3名と日本人2名が連れだつて社台へ赴き、顕著に和風化された田村弥吉宅で休息する。彼らは夕刻に野村宅へ戻り、風呂をつかい、アイヌ料理に舌鼓を打つたのち、ピウスツキの蓄音機から流れる「樺太アイヌの諺歌」に耳を傾けた(前掲記事36、37頁)。この夜は、彼ら5名とシバンラム夫妻が大きなチセで雑魚寝する。

以降八月末前後まで、調査団一行は白老に滞在する。シエロシエフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」は、白老とその周辺の風物やアイヌの生活をつぶさに記録するが、正確な日付を欠くため「年譜」への収録は不可である。詳細は、本書に収録されている同旅行記の記載に譲りたい。

八月末前後のある日の正午、平取を目指す調査団一行は、白老駅頭でアイヌらが見送る中、列車で白老を発つて早来駅へ向かった。早来では乗馬数頭と道案内を雇い、小さな旅籠に一泊する。

翌日、日高地方の原生林を騎乗踏破し、鵲川で一泊。平取までの行程は白老から鵲川までが30^キ、鵲川から平取まではさらに30^キ、併せて60^キである。鵲川では、ジョン・バチエラーの布教で長老派教会に帰依した「プロテスタントのアイヌたち」が、バチエラー師の札幌からの指示で調査団を出迎えた。

翌々日、調査団一行は日高山麓の山道を走破して沙流川の河岸に達し、同日午後には平取(ピラトリ)コタンに到着した。村で唯一の旅籠に止宿する。九月初旬のことと推定される。シエロシエフスキの「毛深い人たちの間で」における平取の

件は白老に比して精彩を欠くが、一週間余りの滞在と想定されるからやむを得まい。シエロシエフスキが記す波乱万丈は、とみに陰悪化してゆく日露関係をもろに反映していた。調査団は、函館のロシア領事を介して伝えられた、在京ロシア大使館の調査中止命令には抗えなかった。しかし、ピウスツキが平取で遂行した調査は、短期間とはいえ頗る実り多いものだったようだ。のちに執筆する學術論文では、平取で聴取した情報にかなり言及していたからである。

九月十日頃、調査団一行は騎乗で平取を後にして最寄りの鉄道駅——やはり早来であつたと想定される——に至り、一両日中には札幌に到着したであろう。

九月十二日前後、シエロシエフスキ、ピウスツキ、千徳の3名は札幌入りを果たしたと推定される。バチエラーの「珍客来る」(『ジョン・バチエラー自叙傳』289頁)によると、彼らは「二三日」札幌に滞在し、ピウスツキはバチエラー宅に「少時く」宿泊したとある。一方、シエロシエフスキは「一日」——即ち九月十五日(?!)——、「豊平館に投宿し、道廳に出頭」した(小樽新聞九月十七日付記事「波蘭人の土人研究」本書291頁)。札幌での彼らの動静は概して不明であるが、唯一知られるのは、シエロシエフスキが「博物館」を訪ねたという事実である。恐らく札幌農学校の博物館であろう。千徳が通訳としてこれに同行したのは確実ながら、ピウスツキの参加は不詳である。

九月十五日早朝(?)、調査団一行は、札幌駅のホームでバチエラーに見送られて札幌を後にした(バチエラー「珍客来る」289頁)。室蘭到着後、ピウスツキ(と千徳?)は、そのまま連絡船に搭乗して同日中に函館に至るが、シエロシエフスキの函館帰着は九月十七日だった。別行動の経緯は不明である。

九月十九日、ロシア地理協会調査団が函館で解散し、ピウスツキと千徳は「半月ほど」(?!)日本に滞在したあとサハリンのコルサコフへ向かった。

九月二十四日^四、ピウスツキと千徳がコルサコフに帰着。

九月二十九日、アイ・コタンの定宿に戻る。

九月下旬、プロニスワフとチュフサンマは、バフンケ酋長の「取計らひで」……全部落民が集まつて盛大な結婚式を挙げ

四 グレゴリウス暦では十月七日。これ以降、露暦に復帰する。

た」(樺太日日新聞一九三四年一月十日付記事「愛し夫有何處?」、本書848頁)五。

アレクサンドロフスクのリヤブウノフ知事から、九月二十八日付の私信が届く。知事はコルサコフスク管区のアイヌ実態調査と、「異族人統治法」改正にかかわるサハリン案の起草を懇願していた。ピウスツキは南サハリンでの民族資料収集に加えて、これらの2課題も請け負うことになる。

十月十四日と十一月二十九日、コルサコフに長期滞在して、ナイブチに開設する識字学校のために資金や現物(学用品・図書)の寄付を募る。フォン・ブンゲ知事代行からは支援金(200ルーブリ)の約束を取りつけた。なおこの頃、一九〇二年十二月までの調査報告として「ロシア委員会」宛「復命報告1」(一九〇二〜一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報)が擱筆されたと推定される。十月末、ロシア義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号にて、東海岸で買い付けた標本類を収めた貨物と梱包荷物一箱(これにはアイヌ語テキストとその逐語訳を収めた帳面3冊、アイヌ・フォークローアを収録する蠟管、そして右記の「復命報告1」が収められたと推定される)が、サンクト・ペテルブルグへ向けて送り出された。コルサコフ滞在中は日本人(とりわけ東北方言の話者)らの協力を得て、北海道で蠟管に収録した日本語テキストの解読も試みた(本書46頁)。

十一月二十九日、この年最後の日本船がコルサコフ港を出航したあと、コルサコフを発ってナイブチ(内淵)村に到着。

十二月二日、内淵に開設された寄宿制学校では、千徳太郎治が教師を務める傍らで、ピウスツキも教鞭を執った。特に瞠目されるのは、アイヌ語をキリル文字で表記する形で作文指導である。自然発生的に「アイヌ文語」が成立してゆく。

千徳らは一九〇六年、滞日中のピウスツキとの間で、まさにこの「文語」を用いてアイヌ語で手紙を交換しあった。

十二月十八〜二十日、生徒たちを引率してアイ・コタンへ赴き、バフンケと共催の「狐送り」の儀式に参加する。

一九〇四

一月二十一日、ロシア帝室地理協会は、学術研究への顕著な寄与に対してピウスツキに銀牌を授与。特に評価されたのは、ペテルブルグの人類学民族学博物館(クンストカメラ)のために収集した樺太アイヌ資料とその整理分析、地理協会が派遣した北海道アイヌ調査への参加協力、OIAKの博物館主事および書記としての業績などである。

五但し、記事に「年」の記載はなく、編者の状況判断で同項を「一九〇三年」に編入した。

一月二十九日（グレゴリウス暦二月十日）、日露戦争勃発。ナイブチの寄宿制学校では、開戦の報に怯えた親たちが先を争ってわが子を引き取りだして、予定の三月末を待たずに開校を迎えた。

二月十二日、チュフサンマがピウスツキの長男木村助造を出産^六。

三月三十一日（十一月十三日）、戦時下にもかかわらず、前年六月に急遽中止した北サハリン踏査を敢行する。アイ村を大櫓で出発したピウスツキは東海岸を北上して、四月五日に最北端の村ナイエロ（内路、現ガステロ）、翌六日にはタライカ（多来加）地区のチフメネスク哨所（敷香、現ポロナイスク）に至る。

四月六日（六月十二日）、多来加地区に滞在してアイヌ、ウイルタ調査に従事（北サハリン踏査の詳細は、本書に収めた「復命報告3」「復命報告5」を見られたい）。

六月二十五日（七月十七日）（グレゴリウス暦七月八日（三十日））、弟のユゼフ・ピウスツキが来日して東京に滞在する。ユゼフは、日露戦争で捕虜となったロシア軍将兵からポーランド人を選抜して戦闘部隊を組織し、満洲戦線へ投入する案を以て外務省や参謀本部と掛け合うが、成就しなかった。

六月十三日（十月七日）、プロニスワフの方は、チフメネスク哨所からポロナイ川を舟で遡上したのち、陸路でティミ川上流部へ至り、近在する河谷に立地するニヴフ集落（ウスコヴォ、ハジリヴォ、スラヴォ、コムルヴォ、チルヴォ、プロヴォ、ウルンクルヴォ）を舟で巡回して、ニヴフ調査に従事した（七月十三日（八月九日））。その前後にはティモフスク管区のロシア人村落オノール（六月二十四日（七月八日）、九月二（二十五日））や、刑期を勤めたルイコフスコエ村（八月十日（九月一日））にも滞在する。当初はオノール村で越冬する心積りだったが、予定を変更し、九月二十五日には同村を去って帰途に就く。

八月、一九〇三／四年の冬に内淵で実施した識字学校の活動報告をルイコフスコエ村にて攔筆。

九月二十六（二十八）日、ポロナイ川を下り始めるや猛烈な台風と遭遇、アブラモフカ村に避難する。

九月二十九日、増水したポロナイ川に漕ぎ出したところで「水面に突き出た倒木の切り株に」舟が激突して、あわや沈没という修羅場も体験する。

^六 子息木村和保氏の御教示によると、昭和三十八年九月十四日付で作製された戸籍原簿では、父上の生年月日が「明治三十六年二月十二日」と記載されているとのこと、生年は一九〇三年である。しかし、編者はそれを一年遅らせることを余儀なくされた。

十月七日、チフメネスク哨所を経て内路村に到着。当初の計画では同村で熊祭りに参加し、また内淵から千徳も呼び寄せて、内路のアイヌやチフメネスクのウイルタ子弟のために識字学校を開設する予定だったが、戦時下の混乱でいずれも実現せず、内路にて4名の少年に識字教育を試みた。同村には十一月一日まで留まる。

十一月二三日、古丹岸（現ゴリヤンカ）泊、四日にヤンケナイ川付近の海岸で野宿、五々十日はフヌツプ（斑伸）、フレチシ（婦禮）、アカラ（赤浦）、モトマリ（元泊）泊。十一日にセラロコ（白浦）、十二日はオタサン（小田寒）泊。

十一月十日付で「復命報告3」を（恐らく元泊で）攔筆。

十一月十三日、妻子の待つアイ村に帰着。

十一月十六日、コルサコフに赴く。これ以降は一九〇五年二月十日まで活動拠点を同地に移した。戦時下での人心の動揺、飢餓、物価高騰を目の当たりにしたピウスツキは、予定していた西海岸調査を断念し、離島して大陸に戻ることを真剣に考え始める。

十一月末、小田寒、白浦を訪ねて熊祭りに参加する。

十二月頃（翌年二月頃、戦時下で識字学校の開設が叶わぬため、希望者を対象に「訪問授業」を実施。訪問教師を務めたのは千徳太郎治と、インディンの教え子である十八才のトウイチボ。前者はルレ、ナイブチ、アイ、オタサン、セラロコの5村、後者は自分のシヤンツイ村をそれぞれ担当した。

十二月二十日（グレゴリウス暦では一九〇五年一月一日）、旅順要塞が陥落。この事件がピウスツキに樺太島脱出の決意を固めさせたようである。

一九〇五

一月二十七日（二月九日）、シヤンツイ、ナイブチ、アイ、オタサンを歴訪。

二月十々二十三日、最後のコルサコフ滞在。離島を控えての残務整理——収集した民族標本の発送と保全措置、採録したテキストの翻訳、統計データの収集、標本を製作したアイヌらとの決済など——に奔走する。

二月二十三（二十六）日、ウラデーミロフカ（豊原、現ユジノ・サハリンスク）に滞在。旅の携帯食料を辛うじて確保することができた。

三月一〜五日、アイ村にて身辺整理。五日にアイを發ち、妻のチュフサンマ、息子の助造と離別する。

三月六日、オタサン村にて友人のシャマンが「別れの巫儀」を執行してくれた。

三月十日、ピウスツキは七日にマグンコタン（馬群潭、現ブガチョヴォ）に至り、犬橿の到来を待機していたが、この日に北へ向けて出立。内路（十一里）を経由してチフメネスク哨所へと向かう。

三月十二〜二十三日、チフメネスク哨所に滞在。折しも感冒（インフルエンツア）が猖獗を極めて、ピウスツキも罹患したため、出発に大幅な遅延が生じた。

三月二十八日〜四月十三日、オノール村に滞在。

三月、リヤプウノフ知事に委嘱された「アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿（トムスク手稿）」をオノール村にて擱筆。

四月十三日〜五月十二日、ルイコフスコエ村に逗留。同村滞在中には「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」、「アイヌ統治に関する規程草案」——即ち、リヤプウノフ知事に提出された改訂稿（ウラヂヴォストク手稿）——を、この順序で擱筆したとピウスツキは記している。

四月二十八日、一九〇四／五年の冬に実施した識字学校の活動報告をルイコフスコエ村にて擱筆。

四月三十日、一九〇四年八月十一日付特赦令にもとづき、首都を除く帝国全域の希望する場所に居住も可なり、とのリヤプウノフ知事の裁定がピウスツキに到達された。念願のヴィルノ県（現リトワニア共和国）への帰郷が可能となる。

五月十二〜三十日、デルビンスコエ村（現デイモフスク）に滞在。

六月十一日、小型舟艇「ウラヂヴォストク」号でアレクサンドロフスク港を發ち、樺太島を脱出した。

六月十二日、アムール河口のニコライエフスク（尼港）に到着し、十日間滞在する。ハバロフスクへ赴く途上ではマリインスクにも数日間立ち寄り、アムール地方に在住するアイヌたちの消息を訊ねた。

七月初旬、ハバロフスクに到着。

七月十四日、中央・東アジア研究ロシア委員会のW・ラドロフ議長宛近況報告を擱筆（復命報告4）。ハバロフスクで接した同委員会シュテルンベルグ書記からの手紙で、約束された「欧州部」ロシアまでの無料乗車券」は送付できぬと通告さ

れて「悲嘆に暮れています」と訴えている。

八月初め、3年ぶりにウラヂヴォストクに戻る。

八月五日と十二日、「ピウスツキOIAK準会員によるサハリン調査の成果討論会」と銘打つOIAK主催の連続講演会が実施される。プログラムは(1)異族人の許への旅、(2)サハリン異族人の歴史的過去、(3)異族人をめぐる学術協会の課題、を謳っていたものの、十八日に予定されていた第三回討論会は、開会の1時間前に日露講和の知らせが届いて流会となる。

八月二十三日(グレゴリウス暦九月五日)、日露間のポーツマス講和条約が締結される。

九月中旬(?)、日本占領下の南サハリンを訪ねて、アイ村で家族(チユフサンマ、助造)と会う。家族の引取り交渉は、バフンケ酋長の峻拒に遭って不首尾に終わる。家族との永久の「訣別」。

十月初旬、神戸を訪ねてニコライ・ラッセル(スヂロフスキー)の事務所を手伝う。

十一月五日、ハバロフスクの全市民集会で演説、「市民ビューロー」設立を提案して1000ルーブリを寄付。

十一月の十日間、OIAKの委嘱により、アムール中流域のトロイツコエ村でナリーナイの民族資料収集に従事する。

十二月五日(グレゴリウス暦十二月十八日)、友人のN・P・マトヴェイエフ(詩人としてニコライ・アムールスキーとも号した)、彼の十一歳の娘ゾーヤとともに、ウラヂヴォストクを出港して日本へ向かう。この日以降、ピウスツキがロシアの地を踏むことはなかった。

十二月七日(グレゴリウス暦十二月二十日)前後、ピウスツキら一行の乗船は、恐らく敦賀港か門司港に入航して、脚部疾患治療のため入院するゾーヤを、ピウスツキも福岡医科大学病院まで送り届けたと推測される。

十二月八日、ピウスツキの長女木村(結婚後の姓は大谷)キヨ、アイ村で誕生。

一九〇六

一月初め前後七、ピウスツキ上京。

七 露暦では十二月中旬に当たる。これ以降はグレゴリウス暦を採用し、必要の際は露暦も括弧内に併記する。

一月六日頃、報知新聞記者の取材を受ける（報知新聞一月七日付記事「浦鹽よりの二珍客」、本書 226-227 ページ）。記事にはピウスツキが築地の「セントラルホテルに投宿」とある。同記事は一月十日付の北海タイムスと馬關毎日新聞にも、ほぼ同じタイトルで転載された。

なお、7ヶ月半に及んだ日本滞在中の彼の動静は、澤田和彦作成の「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」が詳述しているので参照されたい。本「年譜」では重要事項を摘記するに留める。

一月下旬より七月初旬、京橋区尾張町の箱館屋裏二階に居を定める。ピウスツキが在京中に親しく付き合ったのは二葉亭四迷（長谷川辰之助）、横山源之助、上田將、宮崎民蔵・寅蔵（滔天）兄弟、福田秀子、橘糸重らである。坪井正五郎、鳥居龍蔵、關場不二彦（理堂）、小谷部全一郎、神保小虎、村尾元長などアイヌ研究者、また黄興、宋教仁など民報社系の中国人革命家、そして亡命ロシア人たちとも交流があった。新聞に掲載された関連記事は「露國人類学者」（東京朝日新聞、二月八日付）、「日本婦人の研究」（報知新聞、三月九日付）、「外人の日本婦人研究」（北海タイムス、三月二十日付）など（本書に収録）。

三月十六日（露曆三月三日）、ロシア交通省事務局がウラヂヴォストクのピウスツキ宛に、サンクト・ペテルブルグまでの無料鉄道乗車券（一等車2席分）を送付する。2席目はチュフサンマ用だったかも知れぬが、余りにも遅すぎた。

六月十八日頃、本郷の中黒写真館で二葉亭と記念撮影を行う。

六月、肉親がパリ経由の電信為替で、長崎の「ヴォーリヤ」社気付として送金した500〜600ルーブリ（帰国旅費が到着する。しかし長崎では受け取れず、結局、発信地のクラクフで受領することとなる）。

七月、東京を後にして長崎へ赴く。長崎では稲佐の志賀親朋宅に居を定めた。

七月十日、アイヌ関係処女作の「樺太アイヌの状態」（上）が、上田將の翻訳で京華日報社の月刊誌『世界』26号で公開される。これは、ピウスツキがリュコフスコエ村で擱筆した「樺太アイヌの経済生活の概況」の縮約稿邦訳である。

七月三十日、米国の大北汽船会社の「ダコタ」号に搭乗して長崎を離れる。

七月三十一日に神戸に寄港した「ダコタ」号が八月一日、横浜に入港する。

八月三日、「ダコタ」号が横浜港を出航し、太平洋上を一路シアトルへ向かった。

八月十日、ピウスツキの「樺太アイヌの状態」（下）が『世界』27号に掲載された。

八月十六日頃、「ダコタ」号がシアトルに入港。以降は大陸横断鉄道で米国を東進、シカゴを経由してニューヨークに到着。さらに大西洋を横断して欧州に至り、ロンドン、パリを経て、オーストリア統治下のポーランド（ガリツィア）に到着する。

十月二十一日頃、ポーランドの古都クラクフに着き、弟ユゼフの滞在する保養地ザコパネへと向かう。十九年半ぶりの兄弟再会。

十一月七日頃、クラクフに戻り、翌年の五月末までこの町に居を据える。

十一月二十日（露暦十一月七日）、サハリン島知事は、一九〇五年十月二十一日付特赦令にもとづき、ピウスツキに対する警察の監視と、首都での居住制限を解除し、また裁判で喪った諸権利も復活させる、との裁定を通達する。遅まきながらピウスツキ家の領地・資産の相続権が回復され、首都にも住めるようになった。

十一月二十一日、二葉亭四迷宛書簡に「すでにこちらで私に許嫁が用意されていて、たぶん結局は結婚することになるでしょう……。私は彼女と二十年も会っていませんけれど」と記した。これは、マリア・ジャルノフスカに関して確認できる最も早い言及である。彼女は旧姓バニエヴィチ、プロニスワフの初恋の相手（ゾフィア・バニエヴィチ）の年子の妹で、彼にとつては単なる幼馴染に過ぎなかった。一八八六年の秋、姉のゾフィアとの仲を引き裂かれて落ち込むプロニスワフに同情するうちに、二人は相愛の仲になった模様である。マリアは一八八九年にペテルブルグで、かなり年上の資産家ヤン・ジャルノフスキ（イヴァン・ジャルノフスキー）と結婚したが、この当時は、一人息子のヤンを夫の許に残して別居中であった。

クリスマス週間、ヴィルノに在住する末妹ルドヴィカや叔母のステファニア・リブマンが、相次いでプロニスワフを訪ねる。ルドヴィカは一九〇三年の秋、サハリンを訪ねることを計画するも、日露関係の紛糾で断念していた。積もる話に花が咲いたであろう。

年末、ペテルブルグ在住の弟カジミエシュがマリア・ジャルノフスカの住所を、兄の求めに応じて手紙で伝える。

一九〇七

一月二十一日頃、ペテルブルグのジャルノフスカ宛に「懐旧」の文を記すも発送しなかったが、四月十六日には第二信

を執筆する。いずれでも、彼女が一九〇三／四年のクリスマス週間に、サハリンのプロニスワフへ電報を送った事実に言及しており、それへの返信との心算が窺える。第二信では「夏にザコパネへ行きます。『そこで』会うのはどうでしょうか。いずれにせよ蒸し暑いピーテルを、数週間は後にされるでしょうから」と記していた。

五月十七日、マリア・ジャルノフスカがクラクフに到来する。二十年ぶりの再会であった。

六月初め〜七月後半、ジャルノフスカとともに現チエコの保養地カールスバード（カルロヴィ・ヴァリ）で静養する。

八月、カールスバードからクラクフへ戻り、ほどなくガリツィアの保養地ザコパネへ居を移す。その後8ヶ月間、同地が拠点となる。プロニスワフとマリアは当初、学生用ホステルに投宿するが、十一月以降はクルプフキの食餌療養ペンション「ヴィラ・ヒュゲア」で愛の巣を営む。

夏、ピウスツキ家の4兄弟がタトラ山中——ユゼフの山荘であろう——で家族会議を催す。出席したのは、ヴィルノから訪れていたヤンとその妻マリア、ユゼフとその妻マリア、ペテルブルグからのカジミエシュ、そしてプロニスワフとその同棲者マリア。奇しくも女性たちはすべて母親と同名だった。

九月九日、二葉亭四迷宛書簡に「あなたにまずお伝えしたいニュースは、私の結婚です。妻の写真を送ります。妻は私の幼馴染です」と記した。

十月二十二日、マリア・ジャルノフスカは5ヶ月の同棲生活を切り上げて、ザコパネを後にする。彼女はクラクフ、ワルシャワ、ヴィルノを経てペテルブルグに戻った。プロニスワフは、その直後から十二月にかけて、心情を吐露する情熱的な手紙三十余通をマリア宛に執筆する。そのうちの17通はヤン・スタシエルが二〇〇三年に公刊しているが、十一月二十三／四日付の手紙では、フィンランドを希望するマリアの意向にもかかわらず、ルヴフで共同生活を開始する提案を伝えていた。

この年、「樺太アイヌの経済生活の概況」と「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」がウラヂヴォストクで公刊された（ともに『アムール地方研究会紀要』10号所収）。前者は一九〇六年の夏に東京で上梓された「樺太アイヌの状態」のロシア語原典に当たる。

一九〇八

一月後半、マリア・ジャルノフスカがザコパネに再来。彼らは「ヴィラ・ヒュゲア」に逗留する。

三月頃、プロニスワフとマリアは、ガリツィアの都市ルヴフ（現リヴィウ）へ転居する。一年余りに及んだルヴフ期のプロニスワフは、マリアという伴侶を得て充実した至福の時を過ごしたであろう。それは、以降の数年間にポーランド、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、スイス、アメリカの学術雑誌に発表された夥しい数の論文からも覗える。マリアは声楽のレッスンに通って、生計を支えるべくプロの歌手を目指した。しかし、彼女は発病して乳癌と診断される。

一九〇九

春、マリア・ジャルノフスカは乳癌手術を受けるべく、ペテルブルグの「法律上の夫（ヤン・ジャルノフスキ）」の許に戻る。

五月、マリアの手術が執刀された結果、乳癌はかなり重症で転移もあることが判明する。しかるに、小康を得たマリアは、翌年の初めに再びプロニスワフの許へ走ることになる。

八月〜一九一一年一月、プロニスワフは18ヶ月間、ルヴフの有力紙「クリエル・ルヴォフスキ」の通信員も兼ねて西欧諸国を遍歴した。その際は売却用にアイヌの工芸品や、フォークロア・テキストを収録した蠟管も携えていた。

十一月〜翌年五月、パリに7ヶ月滞在する。大学区の周辺で転々と居を移しながら図書館通いを続け、ソルボンヌ大学の聴講生でもあったらしい。マリー・キュリーなど、フランス在住のポーランド知識人たちとも交際する。

一九一〇

二月、とんぼ返りでクラクフへ赴き、マリア・ジャルノフスカをパリに連れてくる。キュリー夫人が発見したラジウム線を用いての放射線治療も試みられた。

四月、病状が悪化して再手術が必至となるや、マリアは自らの意思でパリを離れた。パリに到来した「法律上の夫」が、彼女をペテルブルグに連れ戻したという情報もある。

六月初め〜翌年一月、ロンドンに滞在する。日英博覧会で「アイヌ村」を上演する沙流アイヌ（男女各4名と子供たち）と会って、聴取り調査を試みるのが目的だった。博覧会の通行証を入手するまでに7週間を要したものの初志は貫徹して、

50 篇以上の物語を採録する。若干のアイヌ工芸品や蠟管の売却にも成功したらしい。

この年、「アイヌ」と題する辞典項目が、F・A・ブロックハウス、I・A・イエフロン共編『新百科辞典』（第一巻、サント・ペテルブルグ刊）に収録される。

一九二一

一月末、パリを経由してクラクフに戻る。

五月十二日、マリア・ジャルノフスカがサント・ペテルブルグにて永眠。

夏、翌年四月、ポトハレ地方の大地主ザモイスキ伯爵に招かれて、クウジニツエの屋敷に滞在する。同伯爵と語らつて、郷土誌研究会の設置計画をぶち上げることで元氣を取り戻してゆく。

七月十八、二十一日の一日、クラクフで開催された第十一回「ポーランド医師・博物学者大会」で「ギリヤークにおけるハンセン病について」と題する報告を行う。

十一月二十五日、プロニスワフの發議で、郷土誌研究会はタトラ協会の民族学部門として発足する。彼はその議長に就任し、地元ポトハレ地方の郷土誌研究を組織する。剩え、収集品を収蔵・展示する施設として、タトラ博物館新館の建設までも構想する。

一九二二

五月、十二月、ブイストレにあるコルニウオヴィチ医師の持ち家に居を定める。それはクウジニツエとザコパネの間に位置しており、三十年後にはまさにこの家の屋根裏部屋で、ピウスツキの残した蠟管が発見されることになる。

十月、博物館事情視察のためブラハへ向けて旅立ち、（恐らく）現スロヴァキアのマルティン、そして現チェコのヴィノフラディを訪ねた。

十二月、プロニスワフはクラクフとザコパネを駆け抜けて、スイスのヌシャテルへ向かった。その前に、民族学部門の議長職辞任を唐突に申し出るも受け入れられず、彼は国外から送付する手紙によってその職責を全うし続けることになる。この年、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（英文）がクラクフのポーランド人文・科学アカデミーから上梓される。

一九一三

一月三日～五月、ヌシヤテル大学の聴講生。その間に論文「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」（本書に収録）を
 擱筆する。

五月初め～七月十日、パリに滞在。

六月二十五日、タトラ協会宛に書簡を執筆するが、そこには「ギネット＝ピウスツキ（Gineta-Piusudzki）」という署名が初めて見出される。ギネット家はリトワニア大公家に連なる由緒ある家柄で、ピウスツキ家の本家筋に当たる。プロニスワフはこの頃、己をリトワニアとポーランドの狭間に立つ者、ないしは両者を統合する者と見做す境地に達したものと付度される。遂には Gineta-Piusudzki と古風に綴るに至る。

七月十日～十月、ベルギーのブリュッセルに滞在、ソルヴェー研究所で仕事をする。

八月三日、ザコパネではタトラ博物館新館の起工式典が挙行されるも、ブリュッセルに滞在中のプロニスワフは欠席した。

十月、ザコパネ郊外のブイストレに戻り、民族学部門議長として、郷土誌研究の組織化と推進に本腰を入れる。守備範囲は地元のポトハレからオラヴァ、スピシュ地方へと広がっていった。加えて、彼はタトラ協会の幹部でもあり、また創刊が決定された『ポトハレ年報』の編集主幹も務めた。

十一月末、論文「樺太島のオロツコへの一九〇四年の旅より」（本書に収録）を擱筆。

一九一四

三月、クラクフのポーランド人文・科学アカデミーが民族学委員会を新設し、プロニスワフはその書記に任命される。このポストは同委員会での唯一の有給職員（年俸600クローネ）だったとはいえ、彼が7年間の欧州生活で手にした初めての定職・定収入だった。彼はザコパネもしばしば訪れて、『ポトハレ年報』創刊号の編集作業を完了させている。グラブリマでは目を通したものの、印刷された本冊を目にする機会はなかった。『年報』創刊号は一九二二年によく刊行されて、巻頭にはシェロシェフスキの手になるプロニスワフの追悼文が掲げられている。

六月末頃、ブリュッセルに滞在する。石川三四郎が「十年前に日本にて懇親を結んだ」「ピルスズスキ」と、同地で遭

遇したと伝えるからである。プロニスワフは一九〇六年二月二十五日、神田小川町の「牛屋」で催された新紀元社の晩餐会に招かれたとき、石川と会っていたようである。

八月五日、オーストリアがロシアに宣戦布告、第一次世界大戦が勃発する。

十二月初め、ロシア軍のザコパネ進駐が現実味を帯びてきてウィーンへ逃れる。同地には翌年の四月まで4ヶ月余り滞在した。

プロニスワフはロシア国籍者であるが、米国横断中にロシア旅券を紛失しており、再発給の手続きを進めるも捗々しい結果は得られなかった。加えて、ロシアに入国するとシベリア送りにされかねぬ、という牢平たる信念を堅持していたとも伝えられる。したがって、ポーランド内を走る奥露国境の越境は執拗に逡巡し、故郷のヴィルノはおろか、ワルシャワですら訪ねることがなかった。

開戦後の欧州では概してポーランド人三会派（①ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、②ローザンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、③ユゼフ・ピウスツキをリーダーとするポーランド社会党系の親奥派）が、それぞれの思惑で国家や社会の再建を果たすべく鎬を削っていた。戦時下のプロニスワフ・ピウスツキは、弟のユゼフと政治信条を共にするとはいえ、まったく不得手な政治に手を染めて、独自の政治的役割を果たすことになる。それはいわば敵対する二者を仲介し、和解を模索し、統合を志向するという役回りであるが、彼が生涯を通して追求した役割でもあった。

その嚆矢が、亡国ポーランドの実情を世に知らしむべく編集・公刊された『ポーランド百科事典』にまつわる一件である。当時は同趣旨の百科事典編纂がウィーンのみならず、ワルシャワやローザンヌでも別途に進行していたが、いずれも在米ポーランド人から寄せられる募金を当てにしていたため、3件の統合が焦眉の急となる。その纏め役としてプロニスワフに白羽の矢が立てられた。

一九一五

三月三十一日、ウィーンでオーストリア旅券が発給される。

四月、バンドウルスキ派（バンドウルスキ・ウィーン司教の率いる親奥派）はプロニスワフを、同派の百科編纂グループの正

式代表としてローザンヌへ派遣した。彼は激烈な論戦が交わされる中で公正な仲介役に徹して、数ヶ月後には統合を成し遂げる。『ポーランド百科事典』（仏文）は一九一九〜一九二〇年にスイスのフリブールとローザンヌで上梓された。

この年、ロシア帝室地理協会の『ジヴァヤ・スタリナ』誌が、彼の白鳥の歌「樺太アイヌの熊祭りにて」を遂に公刊する（同誌発刊23年度Ⅰ／Ⅱ分冊、ペトログラード刊、邦語訳が本書に収録されている）。

一九一六

この年の初頭、ローザンヌに設置された「ポーランド・リトワニア委員会」の議長に就任する。ポーランド国家再興におけるリトワニアの処遇が主要な議題だった。プロニスワフは、自分と志を共にする旧リトワニア大公国復興主義者と、リトワニアの分離独立を主張する民族主義者との和解を求めて奔走するも折合いをつけられず、結局、リトワニア民族主義者らは委員会から退席した。彼はその後もポーランド・リトワニア合同に拘りつづけて、死の直前まで、三国分割以前の両国の緊密な関係を証する歴史文献集の編纂に携わっていた。

その後の数ヶ月は中立国スイスで戦火を逃れて、己の担当する『百科事典』項目の執筆に専念する。かなり長期に及ぶラペルスヴィルのほかに、ローザンヌ、ヴヴェイ、チューリヒ、ジュネーヴ、フリブールにも滞在したことが知られている。フリブールには『ポーランド百科事典』編集局があった。

一九一七

二月、ローザンヌとジュネーヴで「シベリアにおけるポーランド人」と題する一連の講演を行う。この講演稿は翌年、フランスのルビュイで印刷されて、販売益は全額が慈善事業に寄付された。

六月、チューリヒのポーランド協会の協力を取りつけて、戦場となったガリツィアの子供たちをスイスへ避難させる救援事業を立ち上げる。プロニスワフはブラテル・ツィベルク伯爵（欧州の貴族では最高ランクに属する高名な慈善事業家）と連名で在米の著名な音楽家パデレフスキへ電報を送って、米国での基金構築を要請した。ところがパデレフスキは、全米から寄せられた募金5万スイス・フランを、ポーランド協会に断りなく、ピウスツキとツィベルクの連名銀行口座に振り込んでしまった。この醜聞は「チューリヒ事件」と喧伝されて、協会幹部らはプロニスワフを強く非難し、剩え彼の高潔さや愛国心を疑い、学術業績までも嘲笑の的にした。「チューリヒ事件」は彼の心を深く傷つけることになる。

八月十五日、「ポーランド国民委員会」がローザンヌに創設される。連合国側は直ちに同委員会を、ポーランド人の政治的願望に応える唯一の代表機関として承認する。議長に就任にしたのは親露派の保守政治家ロマン・ドモフスキで、ユゼフ・ピウスツキの政敵であった。当時のユゼフはドイツ軍に身柄を拘束されて、マグデブルグの監獄に収監されており、政治生命の危機に瀕していた。それを奇貨とみた国民委員会は、パリに設立した委員会代表部における常勤ポストをプロニスワフに提示する。後者はそれを受け入れた。

十一月半ば、プロニスワフはパリに到着し、同代表部の有給職員となつて、公館内の一隅に居を構えた。彼が国民委員会から託された仕事は広報関係で、とりわけ編集者として多忙であつた。また誰とでも話ができる才能が買われて、委員会外の重要人物との応対もしばしば任された。

一九一八

春、ポーランド人将兵捕虜の多くが抑留されているルピュイを短期訪問する。同地ではポーランド語隔週刊誌『イエニエツ・ポラク（虜囚のポーランド人）』が発行されており、同誌別冊として、彼の『シベリアにおけるポーランド人』の印刷が進められていた。ルピュイから戻ると、プロニスワフは同誌の読者たちを対象とする新聞の発刊を具申する。

四月二十七日、パデレフスキ宛に長い手紙を書き、「チューリヒ事件」における自らの関与を改めて釈明している。

五月三日、敵対する諸会派の和解を訴える覚書を攔筆し、多くの知友の間に自ら届けて回つた。これは、いわば彼の遺書であつたろう。プロニスワフの病状は目に見えて悪化し、寢室の空気が蒸し暑くて重過ぎると訴えだす。友人らが田舎での静養を勧めると、同意したかのようにも見えた。さらには、委員会における自分の政治的役割に対する疑念や、誰かが己に毒を盛るか、謀殺するのではないか、という恐怖を周囲に洩らすこともあつた。

五月十六日、友人らが手配してあつた診察時間に医師を訪ねたプロニスワフは、放心状態で戻つてきた。

五月十七日、早朝に起床して友人を訪ねるも不在だったため、「この世とおさらばするべく注射してもらいにやつて来た。私にかけられた二つの嫌疑は、そのいずれでも私は潔白だ……」との書き置きを残した。芸術橋（ボン・デザール）の守衛は午前十一時四十五分、橋の上で上着を脱いでセーヌ川へ抛るや、己の身もそこへ投じた男を目撃する。プロニスワフはこのとき満五十一才五ヶ月半であつた。

五月二十一日、午前八時十五分、プロニスワフの遺体がミラボー橋（ボン・ミラボー）の袂で発見される。五月二十九日、ノートルダム寺院で計画されていたプロニスワフ・ピウスツキの葬儀は急遽中止されて、遺骸はバリ郊外モンモランシーのポーランド人墓地へ運ばれた。埋葬儀式を執行したのは地元の教区司祭である。

後記

本稿は、二〇一三年に上梓された拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」（井上絃一編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事〜白本における記念碑の除幕に寄せて〜』63〜76頁所収）の増補改訂版である。ピウスツキのヨーロッパ期をめぐる情報の主たる典拠は、ヴァイトルト・コヴァルスキ論文“The European Calendrium”（1992, 1993, 1995, 2010）である。ここに明記して、コヴァルスキ氏に謝意を表したい。

参考文献

〔邦文〕

- 飯島生「北海道紀行」『博物學雜誌』40: 15〜17（1903）、飯島桂「北海道紀行其二」同誌42: 35〜38（1907）
 石川三四郎「ピルスツスキの想ひ出」『石川三四郎著作集』第6巻 279〜284頁、青土社（1978）
 井上絃一「プロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』（『国立民族学博物館 研究報告』別冊5号）、45〜65（1987）
 井上絃一「B・ピウスツキと北海道——一九〇三年のアイヌ調査を追跡する」井上絃一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11〜31頁、札幌：北海道大学スラブ研究センター（2003）
 井上絃一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903-1939）」（上・下）『関西外国語大学研究論集』91: 267〜280、92: 185〜201（2010）
 [改訂稿を本書に収録]

コヴァルスキ、ヴィトルト、井上紘一訳「プロニスワフ・ピウスツキの遍歴——日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4:38~53 (1993)——Витольд Ковальский, "Европейский Календарь (Бронислав Гинет-Писудский в Европе 1906-1918)", в: Б. О. Писудский — исследователь народов Сахалина, Т. 1, стр. 16-27, Южно-Сахалинск (1992) の邦訳

澤田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシアの文化交流に関する実証的研究』25~64^{ジベ}、さいたま：埼玉大学教養学部 (2007)

沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』(埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書5)、さいたま：埼玉大学教養学部・文化科学研究科 (2013)

シエロシエフスキ、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」井上紘一編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事——白老における記念碑の除幕に寄せて』77~108^{ジベ}、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター (2013) 【本書再録】

バチエラー、ジョン、「珍客来る」『ジョン、バチラー自叙傳 我が記憶をたどりて』288~290^{ジベ}、東京：文録社 (1928)

ピウスツキ (露國ビルスドスキー氏寄稿「上田將譯」)「樺太アイヌの状態」(上・下)『世界』26:57~66、27:42~49、東京：京華日報社 (1906)

ピウスツキ、「葉亭四迷宛書簡十五通 (安井亮平翻刻・邦訳)」『「葉亭四迷全集」別巻』114~164^{ジベ}、筑摩書房 (1993)

ピウスツキ、井上紘一訳「サハリン・ギリヤークの困窮と欲求」(原典一八九八年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「復命報告 (1~5)」(原典一九〇三年十月~一九〇五年十一月に攔筆)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」(原典二〇〇〇年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」(原典一九〇七年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「樺太アイヌの経済生活の概況」(原典一九〇七年刊)【本書収録】

ピウスツキ、鳥居龍藏譯「樺太に於ける先住民」(原典一九〇九年刊)【本書収録】

ピウスツキ、和田完 訳「樺太アイヌのシャーマニズム」(原典一九〇九年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産」(原典一九一〇年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「アイヌ」(原典一九一〇年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」(原典一九一三年刊)【本書収録】

ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島アイヌの熊祭りにて」(原典一九一五年刊)【本書収録】
 ピウスツキ、井上紘一訳「樺太島のオロコへの一九〇四年の旅より」(原典一九八九年刊)【本書収録】

(欧文)

- “Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 1: 1866–1905,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 445–490, Saltama (2010)
- “Bronisław Piłsudski Chronicle. Part 2: 1905–1984,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 379–423, Saltama (2010)
- Inoue, K. (ed.), *B. Piłsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok (Piłsudskiana de Sapporo no. 2)*, Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University (2002)
- Inoue, K., “Bronisław Piłsudski’s Endeavours on Ainu Education and Self-government,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 337–366, Saltama (2010)
- Inoue, K., “The Ainu Expedition to Nokkaido in 1903,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 3–37, Saltama (2010)
- Jędrzejewicz, W., *Kronika życia Józefa Piłsudskiego 1967-1935* (Tom drugi 1921-1935), Londyn: Polska Fundacja Kulturowa (1977)
- Kowalski, W., “The European Calendarium (Bronisław Ginec-Piłsudski in Europe 1906–1918),” *Linguistic and Oriental Studies from Poznań*, 2: 7-19, Poznań (1995); also in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 129–150, Saltama (2010)
- Латышев, В. М., “Хроника командировки Бронислава Пилсудского на о. Сахалин в 1902-1905 гг.,” *Вестник Сахалинского музея* № 3: 403-406, Южно-Сахалинск (1996)
- Латышев, В. М., *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Прологомены к биографии*. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2008)
- Staszel, Jan, “Z niezapnuch listów Bronisława Piłsudskiego do Marii Żamowskiej z 1907 roku,” *Rocznik Biblioteki Naukowej PAN i PAN w Krakowie*, Rok XLVIII: 343-410, Kraków (2003)

跋

高倉 浩樹

プロニスワフ・ピウツスキは、日本のシベリア研究・北方研究において特別な意味をもっていると思う。本書の冒頭で紹介されるように、彼は19世紀後半から20世紀初頭に生きたリトワニア出身の流刑知識人であるが、帝政ロシア期のサハリン先住民（アイヌ、ニヴフ、ウイльтаなど）に関する民族誌を残した。その成果の一部は、エディソン式蓄音機による録音蠟管としてポーランドに保存されていたが、一九八〇年代後半に展開された日本とポーランドの国際共同研究によって、アイヌ語の最古の肉声（アイヌ語テキストや歌謡など）が再生・復元された。

これは文化人類学、言語学、音楽学、民俗学、さらに蠟管収録音声の復元という意味では工学も加わった、学際的プロジェクトであつた。その経緯については、国立民族学博物館研究報告別冊5号『ピウツスキ資料と北方諸民族文化の研究』（加藤九祚・小谷凱宣編、一九八七年刊）が詳しい。同プロジェクトは単にピウツスキの人と学問の解明だけでなく、人類学・言語学・口承文学などが共同する形で北海道やサハリンの先住民研究を推進し、ロシアやポーランドでもシンポジウムが開催されるなど、国際的な広がりも見せていた。折しも当時のソ連ではペレストロイカが着手されて、外国人による人文学的調査が徐々に可能となつていった。その後、ソ連崩壊後も含めて、このプロジェクトのメンバーの多くはシベリアへ赴き、人類学・言語学・音楽学の分野で現地調査を繰り広げてゆく。

本書の編訳者の井上紘一さんはその一人であり、筆者は大学院生時代に出会った。当時シベリア人類学を学び始めた筆者にとつて、日本語で読める数少ない研究書の一つが上記の報告書であった。アイヌ文化とシベリア先住民文化を学際的に理解する視座や、西欧人類学とは異なる歴史をもつロシア人類学（民族学）を意識したのは、このプロジェクトの成果に接したからだった。

上記の民博研究報告別冊のなかで井上さんはピウツスキの業績目録を整理したが、そこには未刊行のまま残された草稿類も含まれていた。そうした資料に加え、新たに発見された労作からもサハリン民族誌に関わるピウツスキの論考を選び出し、解説を付しながら日本語に翻訳したのが本書である。それは四百字詰原稿用紙にして概ね二千枚に及ぶ膨大な量となった。私を知る限り、井上さんはベレストロイカ期以降、ロシアのサハリン島、イルクーツク州やサハ共和国で人類学調査を積極的に進めており、彼自身の調査にもとづく多くの成果が公刊されている。その合間を縫いながら、おそらくはピウツスキについての研究と翻訳もこつこつと続けられたのだと思う。それがこのように浩瀚な学術書となった。

目次を見ていただければ解るように、それは「20世紀初め前後」に遂行された人類学調査にもとづく、極めて具体的な文化事象を記述した民族誌情報である。収録論考には未刊行手稿のほかに、ロシアの学術雑誌に掲載された既刊論文も含まれるが、たとえ公刊されたとしても20世紀初頭のロシアの雑誌の原物入手は難しい。わが国におけるピウツスキ業績の紹介は、日本人類学の黎明期を担った鳥居龍蔵による同時代的翻訳を嚆矢とするも、近年では心理人類学者の和田完氏がある本書は、学術上も大きな意義を有している。本書を踏まえつつ、新たなアイヌ研究、サハリン研究、シベリア研究が展開されることを期待したい。

最後に、本書の刊行経緯について簡単に触れておこう。井上さんとは、既述のように筆者が大学院時代に出会ったが、その後、同じ科研プロジェクトに参加して共に人類学調査を行う機会にも恵まれた。彼が北海道大学スラブ研究センター研究員となつてからは、センターでのシンポジウムや研究会に呼ばれて、筆者自身の研究を発表する機会も提供してもらった。二〇一五年には、少しずつ増えてきた研究者仲間が集つて日本シベリア学会という學術団体を設立したが、その折にも、井上さんからはいろいろと助言を頂戴した。そんな中で、ピウツスキのサハリン民族誌に関する出版計画を拝聴する機会があつた。筆者が現在勤務する東北大学東北アジア研究センターは、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島を対象に学際的な地域研究を行う組織である。東北大唯一の文系中心の研究所として多くの學術図書も刊行し、国内外で東北アジア研究の拠点として活動している。そうした経緯もあつて、この本の出版をお引き受けすることになったわけである。非売品という形での刊行であり、自由に購入することができないという点では難があるかもしれないが、国内外の主要な大学図書館には寄贈することになっている。監修者としては、本書が日本はいうまでもなく、世界のアイヌ研究とシベリア研究においても、基礎的資料となることを希望する次第である。

二〇一七年八月九日、仙台

東北アジア研究センター叢書 第 63 号

プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌
～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヅフ、ウイльта～

発 行 2018 年 1 月 10 日

監 修 高倉 浩樹

訳編・解説 井上 紘一

発行者 東北大学東北アジア研究センター
〒 980-8576 仙台市青葉区川内 41

印 刷 小宮山印刷工業株式会社
〒 162-0808 東京都新宿区天神町 78 番地

ISBN978-4-908203-14-5